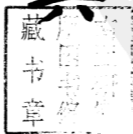


# 佛書解說大辭典

大東出版社藏版



ISBN4-500-00288-X

昭和8年8月20日 初版発行  
昭和39年5月1日 改訂発行  
昭和56年6月20日 重版発行

仏書解説大辞典 第五巻  
¥8000

版權  
所有

編纂者 小野玄妙  
発行者 岩野真雄  
印刷者 村雲二郎

発行所 株式会社 大東出版社

東京都文京区白山1丁目37番10号  
電話 (816) 7607

印刷所 株式会社 平文社

4384

ISBN4-500-00293-6 C3515 ¥8000E



## 本書編纂要解

一、本書は佛教に關する刊行物を東西兩洋に亘り、その大は一切經に收むる數千の經論より、その小は市井に埋もるゝ一論一文の小冊子に至るまで、これを擧ぐるは勿論、遠く散逸してその影を止めざるもの、或は貴重なる寫本の類に至るまで一切の典籍を收め盡し、これに現代最新の配列法（書名の首字を所謂五十音順音引假名遣に配列）により一々に内容解説を施し、且つその所在を明示したものである。

一、本書は邦語漢語佛教典籍（昭和七年十月卅一日刊行の分迄）の全部六萬五千五百餘を收む。即ち各種藏經より約八千、佛教全書、佛教大系等一般佛教叢書並に各宗關係の全書全集類約七千、各大學圖書館（京大、龍大、谷大、京專、高野山、正大、駒大、立正、東洋等）並に宮内省圖書寮、内閣文庫、帝國圖書館其他一般圖書館所藏のもの約十萬、東域傳燈目錄、諸宗章疏錄、八家請來目錄、眞宗教典志、扶桑禪林書目、其他諸目錄より約二萬の古逸註疏書目、出三藏記、歷代三寶紀等より僞經、抄經、闕本、失譯經の書目約一萬五千を涉獵し、以上全部の書目カード中の同一書を整理して六萬五千五百餘部の佛教典籍を採録した。

一、本書は以上六萬五千五百餘部の典籍を便宜上五類に分類した。即ち「第一類、藏經」「第二類、全書」「第三類、單行本の古寫本、古刊本」「第四類、現在の單行本」「第五類、古逸書類」の五類であつて、其内容解説にあつては、六萬有餘全部に亘り詳細なる解説をなすことは到底紙數上よりも許されぬ事であり、且つ其の必要を認めぬ點もあるので、大體詳細解説するものとせざるものとに分ち、前記五類中の第一、二類即ち藏經、全書類を主とし、これに他の類本にして重要と認むるものに限り出来る丈内容そのものについて詳細な

る解説を施した。

- 一、本書の内容解説の形體はその要點を次の十項目とした。即ち、①題名、書名、具名略名異名併記。②巻數。③存、缺。④著者又は譯者、生存年代を併記。⑤著作年代又は譯出年代。⑥内容解説。⑦末書（注釋書參考書）。⑧寫刊の年月。⑨現所藏者、圖書館書庫名。⑩發行所名。の十項目である。この十項中前記第一、二類は⑧⑨を省略し、第三類は特に⑨の圖書館の函號を詳記し、披覽者に備へ、第四類は⑩の發行所名を記して入手に便益あらしめ、第五類は⑦の注釋書參考書に力を入れて研究に有利ならしめた。この方針に依れるを以て藏經の經律論、各宗の宗典類は悉く詳細なる解説が⑥に於いて執筆され、且つその解説に責任をもつべく夫々執筆者の署名を附記した。

一、本書の解説に於ける十項目の内容について一定の方針を示せば左の通りである。

- ①、題名にはすべて具名、略名、異名をつけた。且つ日本語、支那音の讀方、梵語名、西藏語名、巴利語名を附記した。日・支・梵・藏・巴とあるがそれである。而して日本語の讀方はすべて羅馬字法を採用し、一字一字の間に接尾符（—）を附し、全體としては音便慣讀法を用ひ、促音其他の用法は便宜上大藏經南條目錄補正索引（昭和五年刊）に従つた。支那音はすべて現在の北京官話の正しい發音に依り、支那音を羅馬字に移す場合學者によつて相異なる點ありと雖も、本書は最も普通に廣く行はれてゐるトーマス・ウキード氏の式に従つた。大正一切經刊行會版の昭和法寶總目錄では佛蘭西語法を用ひたが、本書は右により英語法に依つて羅馬字化した。梵藏兩語名の記入は主として西藏甘殊爾勘同目錄（大谷大學圖書館昭和六年刊）により、巴利語名の記入は漢巴四部四阿含互照錄（赤沼日錄—昭和四年刊）に従ふことにした。
- ②、巻數は其典籍の巻數を記したが、丁卷の異なる場合あるものは一々これを附記した。
- ③、存缺に就ては、存は現在行はれてゐる藏經の種類別所收卷數、全書類は其所載卷數を記した。而して各種藏經及び目錄

には左の如く略符號を使用した。茲に出てくる數字番號は本書の「佛教典籍總論」並に「昭和法寶總目錄」と連絡をとり研究に資することにした。

大正——大正新修大藏經。縮——縮刷大藏經。卍——卍字藏經。卍續——續藏經。北——北宋版。南——南宋版。元——元版。明北——明北藏。清——清藏。麗——高麗版。天——天海版。指——指要錄。法——法寶標目。至——至元法寶勘同總錄。明南——明南藏。三——南條目錄。出三藏記——出三藏記集。三寶紀——歷代三寶紀。法經錄——衆經目錄(法經等撰)。仁壽錄——衆經目錄(彥悛撰)。靜泰錄——衆經目錄(靜泰撰)。內典錄——大唐內典錄。譯經圖紀——古今譯經圖紀。武周錄——大周刊定衆經目錄。開元錄——開元釋教錄。貞元錄——貞元新定釋教目錄。佛全——大日本佛教全書。真全——真宗全書。真大——真宗大系。日藏——日本大藏經。

④、著者又は譯者は其人の生存年代を出來る丈精査して各種の史傳、目錄、年鑑、年表、系譜等により現存せるあらゆる參考資料を涉獵して正確を期した。但し傳記は人名辭書に讓るべき性質のものであるから特にこれを省略した。年代はすべて西曆を用ひ、年號は其の人物の生死國により、其國の年號をとり、一國に生れ他國に死したものは何れかの一國の年號を用ひた。年代中一線を用ひ、「年代—年代」なるは生死年を、「年代—」は生年、「—年代」は寂年のみ明らかなるもの、又兩者不明にて生存中の或る時期明白なるものは「—年代—」として記入した。年時帝世等すべて明らかならざるも、略々其時代を推定し得らるゝものは其推定年代に「？」の符號を用ひた。僧傳並に資料中生年を明記せざるも寂年享壽の判明してゐるものはその逆算により概ねこれを記入した。生死年代に諸説あるものは其中の一を採用若しくは一説として別出したものがある。

⑤、著作年代は著作若しくは譯出の年號を記入した。

⑥、内容解説は前述の如く主として第一・二類につき冗長繁文を避けて、名義・大綱・分科・判釋・傳通の範圍に於て詳記した。原典翻譯に關する歴史的説明譯出者の傳記等はこれを省略した。略名、異名を有するものは大藏經、全書類に標題とされ

た題名の箇所にて説明した。例へばクの部「俱舍論」ではその題下に具名「阿毗達磨俱舍論」と記し、詳細なる解説はアの部「阿毗達磨俱舍論」に於てなしたるが如し。

⑦、注釋書參考書は典據を出来る丈詳細に調査して列記し、大體製作の年代順に従つて列擧した。

⑧、寫刊の年月、寫とあるは寫本、刊とあるは刊本のことにして、その出來の年代である。

⑨、現所藏者、圖書館書庫名は個人所藏のものは何某藏とし、圖書館所藏のものは其館名並に其館に於ける書目の兩號を記入した。館名の略符は左の通りである。

谷大——京都大谷大學圖書館。龍大——京都龍谷大學圖書館。京大——京都帝國大學圖書館。正大——東京大正大學圖書館。駒大——東京駒澤大學圖書館。立大——東京立正大學圖書館。高大——紀州高野山大學圖書館。京專——京都（東寺）専門學校圖書館。哲——哲學堂圖書館。帝國——東京上野圖書館。內閣——內閣文庫。帝室——宮內省圖書寮。寶龜院——高野山寶龜院所藏。金剛三昧院——高野山金剛三昧院所藏。寶壽院——高野山寶壽院所藏。寶菩提院——京都寶菩提院所藏。

而して略符の下の數字等は何れも其所藏圖書館に於ける書架番號である。而して藏經、全書、叢書類は一般に現行されてゐるから所藏者（書庫）、發行所名は概ねこれを記入しないことにした。

シ

斥異辨

①(日)Shaku-Tsuea. ②三卷  
③存 ④教乘 ⑤寫本(龍大、一七六・九)

斥邪二筆

①(日)Shaku-Yan-hisun.  
②一卷 ③存 ④超然 ⑤慶應二刊 ⑥  
(龍大、一六五・七八・一九)

斥邪篇

①(日)Shaku-Ja-hen. ②一卷  
③存 ④性敬、吐月共著 ⑤寫本(龍大、一  
六九・九)

斥邪漫筆

①(日)Shaku-Ja-man-pi=  
tsu. ②一卷 ③存 ④超然 ⑤慶應元刊

斥釋教正謬

①(日)Shaku-shaku=  
kyo-shu-myū. ②一卷 ③存 ④三眼居士

斥謬

①(日)Shaku-myū. (支)Chih=  
myū. ②一卷 ③存、記續二・八五 ④宋  
代善熹撰

①この書は、華嚴宗學内に於ける若干の、  
著者の當時、一般に論議されたと思はる、  
問題に關する、誤謬の見解に對し、修正を  
試みる小冊子。其の中特に、圓覺經の學  
說、その華嚴學の體系内に於ける地位等に  
關する問題が主要の地位を占め、其の他之  
を關係的に、諸問題が取扱はれてはゐる  
が、其の研究は、學者には、單に常識的な  
程度に止まり、又、著者の立場は五師祖述  
の埒外に出でず、何等新奇を衒ふなく、從  
てこれは、華嚴學發達史の上には必ずしも

重要な存在ではないかと思はれる。

①(京大、藏・一〇ケ・三)

斥耶蘇

①(日)Shaku-Yesu. ②一卷  
③存 ④阿滿得聞 ⑤元治元、文久二刊

斥耶略說

①(日)Shaku-Ya-ryo-  
setsu. ②一卷 ③存 ④水原宏遠 ⑤寫  
本(龍大、一六五・一三)

石記

①(日)Shaku-Iki. ②淳祐記  
〔參考〕本朝台祖撰述密部書目

折疑論

①(日)Shaku-  
Shet-tan. ②五卷 ③存、大正五・二・七九  
四No.218、縮露一 ④子成撰、師子比  
述註 ⑤元至正一(Ad.1351)

⑥本論は子成が兵火の亂を終南山の石室に  
匿れて嘗て來客と三教の優劣に就いて問難  
詰折した事柄を録した上に更に隨文解釋し  
たもので五卷二十篇から成つてゐる。第一  
叙問篇は周孔黃老と佛教との經典を比較し  
て佛經を其の極致となし、第二聖生篇は釋  
尊の傳記と其の教理とを略説し、第三問佛  
篇は佛の十號と三身とを説き、第四喻舉篇  
は儒典は五十萬言に盡きも佛經の卷は萬  
を以つて計へ言は億を以つて數へ繁にして  
要ならざるは前は億劫の事を説き後は萬世  
の要を言へるが爲めであるとし、第五宗師  
篇は古今の帝王賢哲が皆佛教を宗師とした  
ことを述べ、第六通相篇は佛が三十二相八  
十種好を具するは三皇五帝孔老等が異常の  
相狀を有したるに同じとし、第七論孝篇は  
孝教に四事を以て毀たずと言ひ、論語に三  
事を以て違ふ事なしと言ふに、沙門が剃髮

出家するは不孝に非やといふも、これ超世  
の大孝を全ふする所以であるとし、第八拒  
毀篇は福は繼嗣に過ぎたるなく、不幸は後  
嗣無きに過ぎたるなし、と言ふに今沙門が  
妻子貨財を棄つるは福幸の行に違ふに非ず  
やといふも、これ妻子貨財は愛念情慾を幸  
いて益なく、澄鑑清淨に至道の妙なれば、其  
の無益を捨つるなりとし、第九評議篇は備  
には服飾を貴ぶに今の沙門が鬚髮を剃り緇  
袍を著、外に跪起の儀無く内に温恭の禮を  
絶つは、先王の制に違ふに非ずやといふも、  
これ道德禮樂は人の所爲にありて章甫冠冕  
の致すところに非ず、故に無爲の道を用ひ  
て天下を利し禮節に拘らずとし、第十舉問  
篇は孔子は鬼神生死を語らざるに今傳教が  
生死往來の事鬼神報應の徴を説くは人心を  
亂すものにあらずやといふも、これ孔子は  
其の鬚髮を言ひ佛教は其の鬚髮を割るもの  
なりとし、第十一解域篇は孔子は夷狄の君  
あるは諸夏の亡きに如かずと言ひ、孟子は  
吾れ夏を以つて夷を變ずるを聞くも未だ夷  
に變ずるを聞かずと言ふに、今西域の神た  
る佛の言を學ぶは聖言に反するにあらずや  
といふも、これ禮樂の華を知りて道德の實  
に聞く、燔火の照を窺ふて日月の明を視ざ  
るものなりとし、第十二釋誘篇は今沙門が  
酒樂を耽嗜し貨殖を營易するは犯戒にあら  
ずやといふも、これ聖人は人に戒律を授く  
るも人を驅してこれを履行せしむること能  
ずとし、第十三辯施篇は布施を説いて因果  
を明かし、第十四殊見篇は佛教は其旨趣幽  
深にして用ひ難く信じ難きを以つて誘毀す

るものありといふも、これ至味は衆口に調  
ひ難く、大音は群耳に合はず、俗の知ると  
ころにあらずとし、第十五隨宜篇は問者が  
儒教に通ずるを以つて、佛教を説くに六經  
諸子を引いてゐることを述べ、第十六優劣  
篇は王喬蕭史の二仙と摩騰法蘭の二僧との  
道の優劣を論じて二仙を下凡とし二僧を小  
聖とし、第十七先知篇は漢夢以前西域に佛  
陀の生存せし事を知るべき五箇條を擧げ、  
第十八尊釋篇は老子も印度に釋尊の存せし  
ことを知りし證據として老子西昇經、古道  
元皇歷、道士法輪經、靈寶消魂安誌經、金  
闕朝元經等の偽經を擧げ、第十九言符篇は  
三教聖人は時代國土不同なるも其の被化機  
縁は一理にして而も孔老二子は戰國縱横の  
時大器無きを以つて世外玄妙の典を言はず  
とし、第二十會名篇は三教聖人の靈迹説を  
述べてゐる。

斯様に本論は三教の優劣を論じたもので  
あるが、併しながら本論の組織内容が全く  
後漢牟子作の理惑論に契同してゐるところ  
から察して、恐らくは子成と來客との問答  
に非ずして、實は理惑論に對する質疑を折  
伏して而もこれを註釋したものと觀ねばな  
らぬ。殊に第十五隨宜篇と第二十會名篇と  
に牟子の名を出してゐるところから觀て尙  
ほ其の感を深くするものがある。今其の兩  
者を對比すれば、第二聖生篇は牟子の第一  
條、第三問佛篇は牟子の第二條、第四喻舉  
篇は第五條、第五宗師篇は第七條、第六通  
相篇は第八條、第七論孝篇は第九條、第八  
拒毀篇は第十條、第九評議篇は第十一條、

折、朽、赤、昔、祈、折、迹、披、裨、積、鑄

第十二條、第十學問篇は第十三條、第十四條、第十一解域篇は第十五條、第十二釋論篇は第十七條、第十三辯施篇は第十六條、第十八條、第十四殊見篇は第二十四條、第十五隨宜篇は第二十六條、第十六優劣篇は本子の第二十九條を説明してゐるものである。而も今第十七先知篇から第二十會名篇までの三教聖人に關する部分を増益してゐるのは西晋以後問題となつた論題を取り入れてゐるもので茲に本論の特色がある。

①寫本(京大、一・二四七・大別、藏二四七・七)(内期) (久保田量遠)

折解惑

①(日)Shaku-go-waku. ②二卷 ③存 ④瀧谷塔師講、岩部茂蘭記

④城照山藏版(立大、A〇五・一四四)刊本(谷大、餘大・二〇四五)(立大、A〇五・一四三)

折邪顯正

①(日)Shaku-ja-ken-sho. ②一卷 ③存 ④日相撰 ⑤寫本(京大、日大未・五七一・一五七二)大正一五寫(立大、D〇・一三二)

折中記

①(日)Shaku-chu-ki. ②一卷 ③存 ④通玄 ⑤寫本(龍大)

折刀經

①(日)Shaku-to-kyo. (支)Shu-to-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④參考] 武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

折佛經

①(日)Shaku-buk-kyo. (支)Shu-to-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯

⑦(參考) 出三藏記第三、法經錄第三、仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第一、第一五、貞元錄第二、第二五

折辨無得道論

①(日)Shaku-ben-mu-toku-do-ron. ②一卷 ③存 ④日散述 ⑤無得道論を破したるもの ⑥寫本(立大、A一五・一五)

杓木編

①(日)Shaku-hoku-hen. ②千丈殿和尚語錄 ③三卷 ④存 ⑤實嚴千丈語、素謙良校共編 ⑥刊本(駒大)

赤嘆鳥經

①(日)Shaku-shu-kyo. (支)Chih-tsu-wu-ching. ②一卷 ③失譯 ④(參考) 出三藏記第四

赤嘆鳥喩經

①(日)Shaku-shu-kyo. (支)Chih-tsu-wu-ying. ②一卷 ③失譯 ④(參考) 出三藏記第四

赤肉團大道和尚語錄

①(日)Shaku-niku-dan-dai-do-sho-go-roku. ②大道和尚語錄 ③二卷 ④存 ⑤一以大道了蒙等編 ⑥(參考) 禪籍目錄

昔爲鹿王經

①(日)Shaku-i-roku-kyo. (支)Hsi-wei-lu-wang-ching. ②一卷 ③出曜經第九卷の抄出 ④(參考) 法經錄第五、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

昔有二人相愛教經

①(日)Shaku-ni-ni-ai-kyo. (支)Hsi-yu-erh-jen-hsiang-ai-chiao-ching. ②一卷 ③失譯 ④出曜經第六卷の抄出 ⑤(參考) 出三藏記第四、法經錄第五、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

昔圓開否記

①(日)Shaku-en-kai-iki. ②一卷 ③存 ④日從撰 ⑤寫本

祈毒樹復生經

①(日)Shaku-doku-ju-boku-sho-kyo. (支)Chie-tu-shu-fu-sheng-ching. ②一卷 ③失譯 ④出曜經第三卷の抄出 ⑤(參考) 出三藏記第四、法經錄第五、仁壽錄第三、靜泰錄第三、歷代三寶記第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

祈婆塞集

①(日)Shaku-da-soku-sita. ②一卷 ③存 ④寫本(立大、D〇・三二四)

迹門義悟記

①(日)Shaku-mon-gi. ②一卷 ③圓仁(延暦一三一—貞觀六A.D. 791—864)撰 ④(參考) 本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上

迹門絕待觀心決

①(日)Shaku-mon-zet-tai-kwan-shin-ketsu. ②法華迹門觀心絕待妙釋 ③一卷 ④存、大日本佛教全書第二四 ④圓仁(延暦一三一—貞觀六A.D. 791—864)述 ⑤(參考) 山家祖德撰述篇目集卷上

撫華鈔

①(日)Shaku-ke-sho. (支)Chih-hua-chiao. ②孟蘭盆經撰華鈔 ③二卷 ④缺 ⑤宋智圓(太平興國元—乾興元A.D. 976—1022)述

綽如上人讓狀寫

①(日)Shaku-nyo-sho-nin-yuzuri-jo-utsushi. ②存 ③康應元鈔 ④(龍大、別置)

積骨經

①(日)Shaku-kotsu-kyo. (支)Chi-ku-ting. ②一卷 ③失譯 ④難阿舍經七處三觀經の抄出 ⑤(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、三寶記第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、內典錄第一、開元錄第一六、貞元錄第二六

積動四念處經

①(日)Shaku-gon-shi-nen-jo-kyo. (支)Chi-tsin-sat-nien-chu-ting. ②一卷 ③(參考) 靜泰錄第三

積柴燈笈渡護法之表白並祝章

①(日)Shaku-sai-to-kyo-to-go-ho-no-hyo. ②日本大藏經修驗道章疏第一 ③存、日本大藏經修驗道章疏第一

積慶編

①(日)Shaku-ka-hen. ②一冊 ③存 ④寫本(哲、あ、二、左、九)

積翠軒語錄

①(日)Shaku-sui-ken-go-roku. ②一卷 ③存 ④龍水口、松久再門編 ⑤明治二八刊 ⑥帝國、一・一六八)

積善寺本堂建立奉加帳

①(日)Shaku-zen-hon-do-ko-n-rya-ho-ga-chho. ②存、土佐國群書類第一一五九

積木燒燃經

①(日)Shaku-moku-zho-nen-kyo. (支)Chi-mu-shao-jiao-ching. ②一卷 ③失譯 ④(參考) 出三藏記第四

錫杖聞書抄

①(日)Shaku-jo-ki-ki-baki-sho. ②一卷 ③存 ④鑛增記 ⑤康正元(A.D. 1445) ⑥(正教藏)

錫杖經

①(日)Shaku-jo-kyo. (支)Hsi-chang-ying. ②一卷 ③失譯 ④(參考) 法經錄第三、武周錄第一一

錫杖經出型鈔

①(日)Shaku-jo-kyo ②(參考) 法經錄第三、武周錄第一一

名所行登⑩ (名庫書)書藏所現⑨ 月年の刊寫⑧ (書考參書譯註)書末⑦ 説解存内⑥ 代年作撰⑤ 著書④ 缺存③ 數卷② (名書)名題① 略略字數

shuk-kei-sho. ②二卷 ③存 ④大雲(文  
化一四一明治九 A. D. 1817—1876)述  
〔參考〕大日本佛教全書續刊豫定書目

錫杖鈔 ①(日)Shaku-jo-sho. 九條錫  
杖鈔 ②一卷 ③存、日本大藏經方等部章  
疏第六 ④亮汰(元和八—延寶八 A. D. 1622  
—1680)述 ⑤九條錫杖鈔の下の見よ

錫杖大事 ①(日)Shaku-jo-dai-ji.  
②一帖 ③存 ④天文一五寫 ⑤(寶善提  
院)

錫杖博士付 ①(日)Shaku-jo-haku-  
shi-tsuke. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫

寶龜院) ⑤(高木、寄・一・六四)

錫杖鉢等口決 ①(日)Shaku-jo-ha=  
su-to-ku-ketsu. ②一軸 ③存 ④寶徳四  
寫 ⑤(高木、寄・一・六四)

錫類法檀 ①(日)Shaku-ri-ho-dan.  
(支)Hsi-tei-la-tan. ②十卷 ③存 ④清  
代道公輯 ⑤寫本(京大、藏・二四・二七)

明版(内閣)

獐狗齋王經 ①(日)Shak-ku gechi-  
o-gyo. (支)Shu-kou-nieh-wang-ching.  
5. Gyo. ②一卷 ③缺 ④後漢代大譯  
〔參考〕出三藏記第四、三寶紀第四、内典  
錄第一、開元錄第一、第一五、貞元錄第二、  
第二五

釋一廬行法拔萃 ①(日)Shaku-i=  
chi-za-gyo-jo-bus-sui. ②一卷 ③存  
自性上人記 ④(文政九寫) ⑤(寶善提院)

釋一廬法 ①(日)Shaku-ichi-za-ho.  
②七卷 ③存 ④百性上人記(觀流歟) ⑤

徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

釋一切經玄義 ①(日)Shaku-issai-  
kyo-gen-gi. (支)Shi-ichieh-ching-tsu=  
su-i. ②一卷 ③隋智顛(中大通三—開皇  
一七 A. D. 531—597)説 ④(參考)傳教大  
師將來台州録、諸宗章疏録第一

釋憂婆提舍清立標目 ①(日)Shu=  
ku-u-ya-dai-sha-sho-ryu-kyo-moku. ②  
一卷 ③存 ④寫本(京專)

釋雲照 ①(日)Shaku-un-sho. ②三  
卷 ③存 ④草堂全宜著 ⑤大正三刊  
(高木、一・五五)(京專)(谷大)

釋雲照 ①(日)Shaku-un-sho. ②一  
卷 ③存 ④吉田敏雄著 ⑤明治三五刊  
(帝國、八五・一六四)

釋王寺事蹟 ①(日)Shaku-ou-ji-  
saki. (支)Shi-wang-shi-shi-chi. ②一  
卷 ③存 ④(參考)朝鮮佛教總書刊行豫  
定書目

釋王寺本末寺法 ①(日)Shaku-  
ji-hon-matsu-ji-ho. (支)Shi-wang-ssai-  
pen-mo-ssai-fa. ②一卷 ③存 ④金嵩河  
記 ⑤大正元刊 ⑥(谷大、餘大・三六五二)

釋王宗録 ①(日)Shaku-ou-shu-  
roku. (支)Shi-wang-tsung-lu. 前齊沙門釋王  
宗録、王宗録 ②二卷 ③缺 ④釋王宗編  
⑤南齊武帝世(A. D. 483—493)

⑥具きには前齊沙門釋王宗録と云ひ、又略  
して單に王宗録とも云はれて、南齊武帝の  
時、沙門釋王宗の撰述に係るものである。  
出三藏記集卷第五に「佛所制名數經五卷、  
右一部齊武帝時、比丘釋王宗所撰、抄集衆

經有似數林、俱題稱佛制、權亂名實、故注  
于録」とあるから、彼には佛所制名數經五  
卷なる著述があつたことを知り得ると同時  
に、其の下註の最後に「注于録」と云ふの  
は正しく本録を指して云つてをるものであ  
る。故に歴代三寶紀卷第十一に「佛所制名  
數經五卷、衆經目錄二卷、右二部合七卷、  
武帝世、釋王宗抄集衆經中略又撰大小乘目  
録、並見三藏記」と云ひ、大唐内典録、開元録  
乃至貞元録等、爾後の諸經録は何れも皆、  
これと殆ど同一の説明をなしてをる。  
〔參考〕出三藏記第五、三寶紀第一、  
第一五、内典録第一〇、開元録第一〇、貞  
元録第一八。(林屋友次郎)

釋迦 ①(日)Shaka. ②二卷 ③  
存、大日本佛教全書第四五覺禪鈔之内  
覺禪(康治二—建曆二後 A. D. 1143—1212  
—撰)

釋迦 ①(日)Shaka. ②一卷 ③  
存、大日本佛教全書第三六阿婆縛抄之内  
承澄(元久二—弘安五 A. D. 1305—1382)

釋迦 ①(日)Shaka. ②一卷 ③  
存 ④高山林次郎(明治三五 A. D. 1902)  
著 ⑤刊本(谷大、外洋・一四〇)

釋迦 ①(日)Shaka. ②一卷 ③  
存 ④大屋徳城著 ⑤明治四二刊 ⑥(高  
大、一・二二)(龍大、二九六一・一)(谷大、餘  
洋・三〇九)

釋迦一代記 ①(日)Shaka-ichidai-  
ki. 實説釋迦一代記 ②一卷 ③存 ④  
江部鴨村著 ⑤大正二刊 ⑥(谷大、餘洋・

三三一)

釋迦一代記 ①(日)Shaka-ichidai-  
ki. 平易に説いた釋迦一代記 ②一卷 ③  
存 ④河口慧海著 ⑤昭和四刊 (正大一  
〇三四・五四)

釋迦一代記鼓吹 ①(日)Shaka-  
ichidai-ki-ko-sui. 三國因縁釋迦一代記鼓  
吹 ②十卷 ③存 ④雲外編 ⑤元祿五刊  
⑥(帝國、二一〇・一九九)

釋迦一代實録 ①(日)Shaka-ichi-  
dai-jitsu-roku. ②二册 ③存 ④寫本  
(哲、五・五・右三二)

釋迦一代傳記 ①(日)Shaka-ichi-  
dai-den-ki. ②一册 ③存 ④了意著  
刊本(高木、一・二二)

釋迦會不同 ①(日)Shaka-e-tendo.  
大祕台藏悲生萬荼羅第三重釋迦眷屬及諸天  
印明種子梵號名位不同卷上 ②一卷或二卷  
④安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901  
—撰) ⑤(參考)第二、本朝台祖撰述密部  
書目、山家祖徳撰述篇目集卷上、密乘撰述  
目録諸宗章疏録

釋迦應化略詮解 ①(日)Shi-ka-  
o-ge-ryaku-ken-gi. ②一卷 ③存 ④大冥  
述 ⑤文化二刊 ⑥(谷大、餘大・一七〇  
四)(龍大、二九六一・三)(哲心・四・中・一  
四)(京大、一・二一・レ・五)

釋迦儀軌 ①(日)Shi-ka-i-ki. (支)  
Shi-cha-i-kuai. 釋迦文尼佛金剛一乘修  
行義軌法品、釋迦佛法 ②一卷 ③存、大  
正一九・八六 No. 938、縮余一、正續一・三・一  
⑥釋迦文尼佛金剛一乘修行儀軌法品の下の

見よ。⑥承曆二、康和五寫 ⑨(寶壽院)

釋迦華押

①(日)Sha-ka-kwa-o. 論  
鍵考詳釋迦華押 ②一帖 ③存 ④享和元  
寫(寶龜院)

釋迦御一代記

①(日)Sha-ka-go-i=  
ni-dai-ki. 繪入釋迦御一代記 ②三卷 ③  
存 ④(龍大、研史)

釋迦御一代記圖會

①(日)Sha-ka-  
go-i-chi-dai-ki-e. ②六卷 ③存、日  
本歷史圖會第八 ④山田意齋記 ⑤刊本  
(谷大、外洋二二七二)

釋迦講式

①(日)Sha-ka-ko-shiki.  
②一卷 ③存 ④行尊(天喜三一保延元 A.  
D. 1055—1135)撰 ⑤(參考) 大日本佛教  
全書續刊豫定書目

釋迦降生釋種成佛緣譜第四

①(日)Sha-ka-go-shu-shaku-shu-jō-butsu-  
en-pu-dai-shi. (支) Shih-chia-chiang-  
sheng-shih-chung-ch'eng-to-yuan-pu-ti-  
ssai. ②一卷 ③存 雜傳論經之内 ④寫  
本(京大、藏一サ、一)

釋迦降生禮讚文

①(日)Sha-ka-go-  
shū-ri-sam-mon. (支) Shih-chia-chiang-  
sheng-ji-tan-wen. 釋迦如來降生禮讚文  
②一卷 ③存、已續二二・三・一 ④宋仁岳  
(淳化三—治平元 A. D. 992—1064)撰 ⑤  
釋迦如來降生禮讚文の下を見よ。 ⑥刊本  
(京大、藏一八・四)(谷大、余大・二三三)

釋迦三身印

①(日)Sha-ka-san-jin-  
in. ②二卷 ③(參考) 本朝台祖撰述密  
部書目

釋迦氏譜

①(日)Sha-ka-shi-in. (支)

釋迦氏譜

Shih-chia-shih-pi. 釋氏略譜、釋迦氏略譜  
②卷或三卷 ③存、大正五〇・八四 No. 2041.  
縮致一、已二七・三、北1050仙、南1066仙、元  
1062仙、明北1452壁、麗1056綵、天1050仙、指  
1010綵、法1037綵、至1327綺、明南1459相  
No. 1469 ④道宣(開皇一六—乾封二 A. D.  
596—667)撰 ⑤唐麟德二(A. D. 655)

釋迦氏譜

⑥大小乗の三藏に依て、釋迦牟尼佛に關  
する事蹟を記述したもの。大意は齊代僧祐  
の撰に係る釋迦譜と同じであるが、彼れが  
あまり繁縟に過ぎるので、此れは結構を整  
へ、文を簡略にして、後進に要領を得させ  
ようとしたものである、卷首に自序を載せ、  
本文には五科を挙げ、科によつては、更に  
細目を分つてゐる。經典の外、間、僧祐の  
評語をも引用してゐる。

釋迦氏譜

五科とは一に所依賢劫を序し、二に氏族  
根源を序し、三に所託方土を序し、四に法  
王化相を序し、五に聖凡後胤を序するもの  
これである。所依賢劫の科には、現在の劫  
を賢劫と名け、最初の拘留孫佛から、最後  
の樓至佛に至るまで、千佛が出世し、我等  
の師なる釋迦牟尼佛はその第四佛なること  
を述べてゐる。氏族根源の科には、佛の姓  
氏、族源を明し、先づ劫初の大人王から、  
第三十三代の善思王までを列擧し、更に善  
思王の後を相續する十族の轉輪聖王、及び  
佛七世の祖を列記してある。所託方土の科  
には、徵名、約量、辯時、從勢、齋勝、考  
文の六義を以て、佛出生の方處が中上なる  
ことを定めてゐる。法王化相の科は正しく  
佛傳と稱すべき一段であつて、處兜率天迹、

降闍浮洲迹、現生靈誕迹、集曇舉能迹、出  
家津敘迹、乘時成佛迹、轉法悟物迹、遷神  
化掩迹の八相を以て、佛一代の化迹を示し、  
殊に降闍浮洲迹以下には更に諸種の相目を  
掲げて、一一經典を引用してある。聖凡後  
胤の科には、釋迦一族の俗俗につき、その  
生死、出家、涅槃等を傳へ、次に釋迦族の  
流滅、釋迦の遺跡、塔像、遺法の終限等を  
記してゐる。引文の體例は前科に等しい。

この書は僅僅一卷の短篇を以て、整齊さ  
れた結構の下に、手際よく釋迦一代始終の  
概要を記述したものであるが、今日から  
見れば、さほど力點を置かなくてもよいと  
思はれる前の三科に於いては、撰者自身の  
見解を以て、多少の論究を試みてあるにも  
係らず、重要な後の二科に在つては、大率  
經文の引用に止り、そこに撰者の自説の見  
るべきものが鮮い。これは時代の關心が相  
違してゐるから、已むを得ぬもの、現今  
の學徒に取つては遺憾の點である。又引用  
の經文にその題名を闕くものが多いのは、  
簡略を本位とした爲でもあらうが、出典の  
檢索に不便を免れぬ。

釋迦氏略譜

①(日)Sha-ka-shi-ryō-  
ku-fu. (支) Shih-chia-shih-ryō-p'u. 釋迦  
氏譜、釋氏略譜 ②一卷 ③存、大正五〇・  
八四 No. 2041. 縮致一、已二七・三、北1050  
仙、南1066仙、元1062仙、明北1452壁、麗1056  
綵、天1050仙、指1010綵、法1037綵、至1327  
綺、明南1459相 No. 1469 ④道宣(開皇一  
六—乾封二 A. D. 596—667)撰 ⑤唐麟德  
二(A. D. 655) ⑥(參考) 奈良朝現在一切

釋迦氏略譜

⑦譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)  
⑧譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)  
⑨譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)

釋迦種族論

①(日)Sha-ka-shu-zō-  
ron. ②一卷 ③存 ④井上哲次郎著  
⑤明治三〇刊 ⑥(正大、一〇三四・一六)  
(谷大、外洋・三九一)(京大、一・二一・六)  
(京大、印哲R・二二)(帝國一九・五七一)

釋迦十二禮

①(日)Sha-ka-jū-ni-  
rai. ②一卷 ③存、日本大藏經戒律宗章  
疏第二 ④覺盛(建久五一—建長元 A. D. 1194  
—1249)撰

釋迦種族系統

①(日)Sha-ka-shū-  
zoku-kei-tō. ②一卷 ③存、慈雲尊者全集  
第一六 ④皓月尼(寶曆六一—天保四 A. D.  
1756—1833)譯、飲光(享保三一—文化元 A.  
D. 1718—1804)註

釋迦種族系統

⑤有部破件事第一の文を和譯したるを四分  
律、起世經等によりて註したものである。  
四王子が逐はれて國を出て後の事が譯せら  
れてないので釋迦種族の説明が未完である  
から、慈雲尊者全集の編者は有部破件事第  
二の文を以て補つてある。

釋迦種族論

⑥譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)  
⑦譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)  
⑧譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)

釋迦種族論

⑨譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)  
⑩譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)  
⑪譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)

釋迦種族論

⑫譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)  
⑬譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)  
⑭譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)

釋迦種族論

⑮譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)  
⑯譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)  
⑰譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)

釋迦種族論

⑱譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)  
⑲譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)  
⑳譯者註者自筆本(京都長福寺)(吉祥真雄)

釋迦種族論

經疏目錄2800

釋迦史傳

①(日)Sha-ka-shi-den.  
②一卷 ③存 ④常盤大定、吉田賢龍、近  
角常觀共著 ⑤明治三七、同四一再刊 ⑥龍  
大、二九六一・六(谷大、餘洋二二三)(帝  
國、七九・四一六)(京大、一・二一・三四)

釋迦實傳記

①(日)Sha-ka-jitsu-  
den-ki. ②二卷 ③存 ④伊藤俊道著  
明治三五刊(龍大、二九六一・四)(帝國三一  
八・五三)(大正四刊(立大、B一六・九) ⑩東  
京森江書店



⑥釋迦佛を禮讃する十五偈、及び三禮文より成る。十五偈は佛の相好說法度生を讃するものであるが、後部の十二偈の各末句に「故我禮讚牟尼尊」とあるにより、十二禮と名づけた。偈中、注意さるべき句は、「五百大願度衆生」、「常在巖山而不滅」、「甚深最勝一乘教」、「往來娑婆八千遍」などであらう。此禮文は龍樹の作と傳ふる十二禮、及び善導の往生禮讃の中夜禮に文言の通ずるものがある。

**釋迦出家發心事** ①(日) Shu-ka-shuk-ke-ho-shi-shi-no-koto. ② 一卷 ③ 存 ④古寫本(龍大、別置)

**釋迦正宗** ①(日) Shu-ka-shō shū ② 一卷 ③ 存 ④清水梁山(一昭和三A.D. 1928)著 ⑤明治一八刊 ⑥帝國、二五・一九三三

**釋迦成道記** ①(日) Shu-ka-jō-do-ki. ② 三卷 ③ 存 ④正保四刊 ⑤(龍大、二四一七・一〇四)

**釋迦成道降魔譜** ①(日) Shu-ka-jō-do-go-ma-sen. (支) Shi-chia-cheng-tiao-tsiang-mo-tsan. 釋迦牟尼佛成道在菩提樹降魔譜、釋迦牟尼佛成道在菩提樹下降魔譜 ② 一卷 ③ 存、大正一九・九七No. 941、縮刷一五、己編一・二・五 ④(參考) 惠運 釋迦將來教法目錄

**釋迦成道詩** ①(日) Shu-ka-jō-do-ji. ② 一卷 ③ 最澄(神護景雲元一弘仁一三A. D. 767—822)撰 ④(參考) 本朝台祖撰述 密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上

**釋迦千輻輪講** ①(日) Shu-ka-sen-

puku-rin-san. (支) Shih-chia-chien-jan-tim-tsan. ② 一卷 ③(參考) 惠運釋師將來教法目錄

**釋迦像の藝術史的研究** ①(日) Shu-ka-zō-no-gei-jutsu-shi-ten-ken-kyū. ② 一卷 ③ 存 ④今泉雄作、津田敬武共著 ⑤大正一一刊 ⑥(龍大、二〇六一・九)(正大、一〇五・二一、一〇五・八七) ⑦東京言談社

**釋迦像の研究** ①(日) Shu-ka-zō-no-ken-kyū. ② 一卷 ③ 存 ④今泉雄作、津田敬武共著 ⑤明治四四、同四五再刊 ⑥(正大、一〇五・二〇、一〇五・三六、B一八・三六)(龍大、二〇六一・一〇)(京大、印哲R・一) ⑦東京聚精堂

**釋迦如來一代記** ①(日) Shu-ka-nyō-rai-ichi-dai-ki. ② 十卷 ③ 存 ④天保四刊 ⑤(帝國、二四四・三二七)

**釋迦如來應化事蹟** ①(日) Shu-ka-nyō-rai-o-ke-ji-saiki. ② 四卷 ③ 存 ④(龍大、別置)

**釋迦如來應化錄** ①(日) Shu-ka-nyō-rai-o-ke-ji-ryoku. (支) Shi-chia-chieh-ai-ai-ying-tsu-ku. ② 六卷 ③ 存、己編二・三・二 ④明賢成(一康熙三六A. D. 1697)編 ⑤著者實成名は虞仲、號は興庵、江蘇常熟の人、明末清初の頃の人、康熙三十六年丁丑(A. D. 1697)の進士、官大僕少卿に至る。本書六卷序跋なくその成立の年時を知ることが出来な。其の内容は釋尊八十年の生涯中、殊に一化五十年の教化傳道録を諸經論に基いて編集したるもの。釋尊傳研究の一資料である。左に便宜の爲め項目を列舉する。

〔卷上之一〕釋迦垂迹。最初因地。買華供佛。上記一兜率。置曇貴姓。淨飯聖王。摩耶託夢。樹下誕生。從園還城。仙人占相。大教修福。姨母養育。往謁天祠。園林嬉戲。習學書數。講演武藝。太子灌頂。遊觀農務。諸王竭力。悉達納妃。五欲娛樂。空聲發策。飯王應夢。路逢老人。道見病臥。路親死屍。得遇沙門。耶輸應夢。初啓出家。夜半踰城。金刀落髮。車匿辭還。車匿還宮。詰問林德。勸請迴宮。調伏二僮。六年苦行。遠餉資糧。牧女乳糜。禪河澡浴。帝釋獻衣。詣菩提場。天人獻草。龍王讚歎。坐菩提座。魔王得夢。魔子諫父。魔女妓媚。魔軍拒戰。魔衆坤餅。地神作證。魔子懺悔。菩薩降魔。成等正覺。

〔卷上之二〕諸天讚賀。華嚴大法。觀菩提樹。龍宮入定。林間宴坐。四王獻鉢。二商奉食。梵天勸請。轉妙法輪。度富樓那。仙人求度。船師悔責。耶舍得度。降伏火龍。急流分斷。棄除惡器。竹園精舍。領持投佛。迦葉求度。假孕誘佛。諸佛還國。認子釋疑。度弟難陀。羅睺出家。須達見佛。

〔卷上之三〕布金買地。玉耶受訓。漁人求度。月光諫父。申日毒飯。佛化無懼。降伏六師。持劍害佛。佛教尼健。初建戒壇。敷宣戒法。姨母求度。度跋陀女。再還本國。爲王說法。佛留影像。度諸釋種。降伏赤龍。化諸姪女。阿難索乳。調伏醉象。張弓害物。佛化盧志。貧公見佛。老人出家。醜女改容。

〔卷下之一〕夫人滿願。鸚鵡請佛。惡牛蒙度。白狗吠佛。火中取子。見佛生信。因婦得度。育兒見佛。老婢得度。勸親請佛。囑兒飯佛。貸錢辦食。老乞遇佛。說苦佛來。談樂佛至。祀天遇佛。佛度居兒。度網漁人。度捕獵人。佛化醜兒。救度賊人。度除糞人。施食緣起。目連救母。佛教嬰兒。金剛請食。鬼母尋子。小兒施土。楊枝淨水。採華獻佛。燃燈不滅。上幡供佛。施衣得記。衣救龍難。說呪消災。證明說呪。龍宮說法。天龍雲集。佛讚地藏。勝光問法。維摩示疾。文殊問疾。金鼓懺悔。楞伽說經。圓覺三觀。楞嚴大定。般若真空。付囑國王。法華妙典。飯王得病。

〔卷下之二〕佛還觀父。殞送父王。佛救釋種。爲母說法。最初造像。浴佛形像。姨母涅槃。請佛入滅。佛指移石。囑分舍利。付囑諸天。付囑龍王。請佛住世。天龍悲泣。魔王說呪。純陀後供。度須跋陀。佛現金剛。如來應記。最後垂訓。臨終遺教。荼毗法則。造塔法式。應盡還源。雙林入滅。

〔卷下之三〕金剛哀戀。佛母得夢。昇天報母。佛母散華。佛母散華。佛從棺起。金棺不動。金棺自舉。佛現雙足。凡火不燃。聖火自焚。均分舍利。結集法藏。育王起塔。育王得珠。迦葉付法。迦葉入定。商那受法。復多譯算。密多持幡。馬鳴辭屈。龍樹造論。提婆鑿昨。天親造論。神

僧應供。十大明王。變法諸天。師子傳法。達磨西來。

①正保五刊 ②(龍大・二九六一・八、研佛)(京大・藏・一九三・三)(谷大・餘大・一八九)

釋迦如來行蹟

①(日)Shaka-nyo-rai-gyō-seki-ju(支)Shih-chia-ju-lai-hsing-chi-sung. ②二卷 ③存 己續二二・三・二 ④無寄撰 ⑤元天曆元(A.D.1328)

本書は元の文宗(A.D.1328-1331)の世天曆元年、始興山・天台の學僧たる雲默浮庵の無寄に依つて、釋尊八十年の生涯一誕生、成婚、出家、成道、說法、涅槃の行蹟を輯録したるもの。其の資料として一は高麗諸觀撰天台四教儀の文に依り、他は諸經論中の傳記に關する部分を拾ひ集めて頌文を作り、總じて七百七十六句となし、文中解し難い所、説明を要する所には、それぞれ註釋を施して、讀者の便宜に供してゐる。釋尊傳研究の一材料となるべきものである。本書の首めに、大元至順元年(A.D.1330)、正順大夫密直司左司副代言判繕工寺進賢提學知製 教李叔琪述の序文を載せてゐる。(成田昌信)

釋迦如來賢劫記

①(日)Shaka-nyo-rai-ken-gō-ki(支)Shih-chia-ju-lai-hsien-chieh-ki. ②一帖 ③【參考】慈覺大師在唐進錄

釋迦如來御一生記

①(日)Shaka-nyo-rai-gō-is-shō-ki. ②三卷 ③存 ④刊本(京大・國文)

釋迦如來降生禮讚文

①(日)Shaka-nyo-rai-gō-shō-ki. ②三卷 ③存 ④刊本(京大・國文)

ka-nyo-rai-gō-shō-rai-sam-mon. (支)Shih-chia-ju-lai-chiang-sheng-ji-san-wen. 釋迦降生禮讚文 ②一卷 ③存、己續二二・三・一 ④宋仁岳(淨化三治平元 A.D.992-1064)撰

釋迦如來涅槃禮讚文と姉妹の作で其の序文にある様に「此頃吾が宗(天台宗)の事を好む者が四月八日に佛を浴して後其の讚頌を陳べる偈文を請はれ、それを偈紙之式の始終に之を行ふといふので、釋迦の本生譚や因果經を研究し十讚、五悔法を著はした。」といふ。蓋し灌佛會の式典は宋以前から行はれてゐたであらうが降生禮讚となつてまとまつたのは仁岳を以て最初と見てよ

いと思ふ。十讚とは一心頂禮然燈佛所受能仁記初時身釋迦文佛。一心頂禮兜率天示一生、補處時身(前同以下略)一心頂禮迦維衛國託摩那懷妊時身。一心頂禮無愛樹下誕生妃右脇時身。一心頂禮東宮受職現納妃厭欲時身。一心頂禮四門遊觀觀無常樂道時身。一心頂禮奉宮手夜踰國城出俗時身。一心頂禮伽耶山內修六年苦行時身。一心頂禮照連河畔受難陀施食時身。一心頂禮金剛座上降天魔成道時身。で各讚の次に七言八句の偈文を連ねて其終りに故我一心歸命頂禮と結んでゐる。五悔は懺悔、勸請、隨喜、回向、發願、で各悔の最後に至心歸命三寶で終つてゐる。

①刊本(京大・藏・一八シ・四)(谷大・餘大・二三三) ②釋迦如來成道記 ①(日)Shaka-nyo-rai-gō-dō-ki. (支)Shih-chia-ju-lai-

ch'ang-tao-ki. ②一卷 ③存、己續二二・三・二 釋迦如來成道記註之内、五部合刻之内 ④唐代王勃撰 ⑤釋尊の八相成道に就いて簡明に叙述し、入滅後の遺法と弘通に及び最後に「物幼生季世獲奉眞譚雖錄續而以叙金言一在飄零而不逢玉相」と述べて像末に生れた自分が金口に直接しなかつた悲哀をひそませてゐる。明の萬曆六年明徳の加へた序に「勃は六歳にして文を善くし、未だ冠せざるに職を受く、學は内外に通じ、才は古今を貫く、後世聖を詆るの愚なく、大士佛を感ずるの念あり、著す所の成道記は二千餘言なりと雖も要にして略せず、該にして漏さず、誠に玉潤金精、星明かにして日輝けるものなり。」といつてゐる。又我寶曆五年に妙瑞の序に「今王勃弱冠にして時の人駘寶王等と與に並せて四傑と稱す。高閑の記有つてより以來千有餘齡、和漢の才人其の文學を知りて未だ彼の大雄を信ずることは如くなるを聞かず。唐書の傳に勝王閣の記、釋迦畫像の記、維摩畫像の碑、並に盛んに世に行はるといふ。此の成道記の如きは釋迦譜(僧祐著)を略せるに近し、然るに斯れ物が才にして何ぞ斯の遺唾を噉はんや。曾て一大藏教を周覽せるの餘蘊此記を出せるものなり。勃にして此記あるは庖犧高陽に龍書科斗あるが如し、人何んぞ之を知らざるや、恨の甚しい哉」といふやうに勃の文才と共に其流通は日本に及んでゐる。

①寶曆五刊(正大、一〇三四・一〇) (龍大、二九六一・九)(折、な・六・右・三二) (京大・藏・

二四シ・一四一・一五)安永三刊(高大、寄・一・二一)明治二刊(駒大)(帝國、一五・五五)寫本(京大・藏・一九シ・五)唐本(帝國、一六・三・二八) (鎌田良賢)

釋迦如來成道記註 ①(日)Shaka-nyo-rai-gō-dō-ki-ju. (支)Shih-chia-ju-lai-ch'ang-tao-ki-ju. ②二卷 ③存、己續二二・三・二 ④唐代王勃撰、宋代道誠註

王勃の釋迦如來成道記に註を加へて上下二卷として著はしたもので、本行經、婆沙論、涅槃經、因果經、華嚴經、俱舍論、等の三藏を引いて逐字的に極めて明瞭に解註したものである。この成道記註は王勃の記と一緒に印行されてゐる。

①寛文六刊(京大・藏・一九シ・六)寶曆五刊(正大藏、一〇三四・一〇)安永四刊(谷大、餘大・三〇二一) (鎌田良賢)

釋迦如來栴檀瑞像記

①(日)Shaka-nyo-rai-sen-dan-zui-zō-ki. ②一卷 ③存 ④刊本(谷大、餘大・二六七) (龍大、二九九二・五)(正大、一〇五・八一七)

釋迦如來栴檀瑞像三國傳來記

①(日)Shaka-nyo-rai-sen-dan-zui-zō-san-goku-den-rai-ki. ②一卷 ③存 ④刊本(正大、一〇五・二六)

釋迦如來誕生會

①(日)Shaka-nyo-rai-tan-jō-e. ②一卷 ③存 ④近松門左衛門(承應二)享保九 A.D.1653-1724)著 ⑤明治二四刊 ⑥(正大、一〇三四・一五)

釋迦如來誕生曼荼羅略解

①(日)Shaka-nyo-rai-tan-jō-e-ryak-gai. ②一卷 ③存 ④近松門左衛門(承應二)享保九 A.D.1653-1724)著 ⑤明治二四刊 ⑥(正大、一〇三四・一五)

①(日)Shaka-nyo-rai-tan-jō-e-ryak-gai. ②一卷 ③存 ④近松門左衛門(承應二)享保九 A.D.1653-1724)著 ⑤明治二四刊 ⑥(正大、一〇三四・一五)

①(日)Shaka-nyo-rai-tan-jō-e-ryak-gai. ②一卷 ③存 ④近松門左衛門(承應二)享保九 A.D.1653-1724)著 ⑤明治二四刊 ⑥(正大、一〇三四・一五)

①(日) Sha ka nyo-rai-tan-jo-man-da-ra-ryaku-ge. ②一卷 ③存 ④功譽述 ⑤刊本(正大、一五八・五七)

釋迦如來傳

①(日) Sha-ka-nyo-rai-tan. ②一卷 ③存、佛教文庫第一七

釋迦如來涅槃禮讚文

①(日) Sha-ka-nyo-rai-ne-han-rai-sam-mon. (支) Shih-chia-jia-ni-nih-p'an-ti-tsuu-wen.

②一卷 ③存、大正四六・九六三No. 1947、縮調一〇三三〇・八、正續二〇・三・一、明北1313輔、清1532馳、明南1498實、Nj. 1520

④宋仁岳(淳化三—治平元 A. D. 992—1064)撰

⑤初めに自序あり、述作の由來を述ぶ。曰く釋尊涅槃日に際し、佛徒たるもの法要をひとめ、佛徳を禮讃すべきである。このことは既に古く僧祇律等にもすゝめる所である。支那では昔孤山中庸子に涅槃八德讚があるが、吳と蜀との音韻の相違あり、江浙地方ではあまり行はれてゐぬ。されば今總式の天台智者大師齋忌禮讚の式に准じてこの禮讚文を作つたと云ふのである。禮讚の偶頌は十四章あり各章八句よりなる。初十章は讚佛、次の一章は讚法、後の五章は讚僧である。

⑥康熙六刊 ⑦(京大、藏・一八三・四)(谷大、餘大・二三三)(龍大、別置)(塚本善隆)

釋迦如來法

①(日) Sha-ka-nyo-rai-ho. ③存 ④足利時代寫(寶善提院)寫本(寶龜院)

釋迦年代考

①(日) Sha-ka-nen-dai

②一卷 ③存 ④桑原隲造述 ⑤(京專)

釋迦の研究

①(日) Sha-ka-no-ken-kyu. ②一卷 ③存 ④羽溪了諦著 ⑤明治四三刊(龍大、研佛)

釋迦の生涯及其教理

①(日) Sha-ka-no-shu-gai-ogyo-sono-kyori. ②一卷 ③存 ④英リヌネキス著、赤沼智善譯 ⑤明治四四刊 ⑥(龍大、二九六一・一八)

釋迦八相

①(日) Sha-ka-has-ta. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、研史)

釋迦八相鈔

①(日) Sha-ka-has-ta-sho. ②一卷 ③(參考) 淨土眞宗教典志第二

釋迦八相二十四輩勸考

①(日) Sha-ka-has-ta-ji-ni-shi-hai-kwan-ka-ko. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一〇五五・二九)

釋迦八相物語

①(日) Sha-ka-has-ta-mono-gatari. ②八卷 ③存 ④寫本(龍大、二九一)

釋迦八相略鈔

①(日) Sha-ka-has-ta-ryaku-sho. ②三卷 ③存 ④寫本(龍大、二九六一・一〇)

釋迦畢罪經

①(日) Sha-ka-his-sen-zai-kyo. (支) Shih-chia-ni-tsu-ching. 釋家畢罪經 ②一卷 ③失譯 ④六度集經第五卷の抄出 ⑤(參考) 出三藏記第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

①(日) Sha-ka-ta (支) Shih-chia-p'u. ②五卷或十卷 ③存、大正五〇・一 No. 2040、縮致一、正三七・三、北1049、南1065、元1061、明北1461、書、清1464、慶1054、天1088、指1009、法1026、至1526、明南1458、將、Nj. 1463 ④梁僧祐(元嘉三—天監一七 A. D. 445—518)撰

釋迦譜

①大小乘の經律の中から釋迦牟尼佛に關する事蹟を探索し、これを各種條目の下に次第を逐うて記述したものである。一、その出典を示し、本文を抄録してある。卷首に自序を掲げ、次に十四句の偈を載せ、條目を三十四に分ち、各條の末尾には大率簡單な撰者の所見を加へてゐる。條目及びその下に抄出された主要の經典を列示すれば左の如くである。

【卷一】(一)釋迦始祖劫初刹利相承姓譜(長阿含經)。(二)釋迦始祖劫初姓曇緣譜(十二遊經)。(三)釋迦六世祖始姓釋氏緣譜(長阿含經)。(四)釋迦降生釋種成佛緣譜(般若經)。(五)釋迦在七佛末種姓衆數同異譜(長阿含經)。(六)釋迦同三千佛緣譜(藥上觀經)。(七)釋迦内外族姓名譜(長阿含經)。(八)釋迦弟子姓釋緣譜(增一阿含經)。(九)釋迦四部名開弟子譜(增一阿含經)。

【卷二】(一)釋迦從弟調達出家緣記(中本起經)。(二)釋迦從弟阿那律跋提出家記(曇無德律)。(三)釋迦從弟孫陀羅難陀出家緣記(出曜經)。(四)釋迦子難雲出家緣記(未曾有經)。(五)釋迦姨母大愛道出家記(中本起經)。(六)釋迦父淨飯王泥洹記(淨飯王泥洹經)。(七)釋迦母摩耶夫人記(佛昇母泥洹經)。(八)釋種波旬業緣記(長阿含經)。

【卷三】(一)釋迦竹林精舍緣記(曇無德律)。(二)釋迦祇園精舍緣記(賢愚經)。(三)釋迦麥瓜塔緣記(十誦律)。(四)釋迦天上四塔記(集經抄)。(五)優填王造釋迦梅檀像記(增一阿含經)。(六)波斯匿王造釋迦金像記(增一阿含經)。(七)阿育王弟出家造釋迦石像記(求離半獄經)。(八)釋迦留影在石室記(觀佛三昧經)。

【卷四】(一)釋迦雙樹般涅槃記(大涅槃經)。(二)釋迦八國分舍利記(雙卷泥洹經)。(三)釋迦天上龍宮舍利寶塔記(善薩處胎經)。(四)釋迦龍宮佛毘塔記(阿育王經)。

【卷五】(一)阿育王造八萬四千塔記(雜阿含經)。(二)釋迦獲八千四塔宿緣記(賢愚經)。(三)釋迦法滅盡緣記(雜阿含經)。(四)釋迦法滅盡相記(法滅盡經)。

この書は現存する支那撰述の佛傳として是最古のものであり、而かも序にいふ如く經典に散説せられた釋尊一代の始終に亘る千條萬變の化儀に就いて、錯綜した諸説の首尾を一貫せしめ、撞着した事實の同異を會通しようとする撰者の努力が拂はれてをり、又傳訊し難い經文を總集して、通覽し易くしてあるので、學者を裨益するものが尠くない。されと聊か冗長繁雜の嫌がある。これやがて唐の道宣に省略された釋迦氏譜の撰ある所以である。

高麗本はこの書を五卷とし、宋、元、明

名所行發⑩(名庫書)者翻所現⑨ 月年の刊篇⑧(書考卷書釋註)書末⑦ 説解容内⑥ 代年作者⑤ 者著④ 缺存③ 數卷② (名書)名題① 號略字數

の三本は十卷としてゐる。出三藏記集卷十  
二に收むる序及び目錄に照せば、五卷本が  
その原形であつたことは疑はない。但し歴  
代三寶記卷十一及び大唐内典錄卷四には四  
卷となつてゐる。道宣の釋迦氏譜の序には  
釋迦譜一帙十卷とあり、内典錄卷四にも、  
更に十卷本あり、余親しく之れを讀むと注  
してゐるから、當時既に十卷本が存在して  
ゐたことは明かである。開元錄卷六にもこ  
の書を録して十卷とし、而もその下に注し  
て齊代の撰に別に五卷本があり、此れと廣  
略異ると述べてゐる。高麗本と他の三本と  
を對照すれば、高麗本では第四の釋迦降生  
釋種成佛緣譜が簡略であるが、三本ではこ  
の條を著しく増益し、その記述は卷一から  
卷五に亘つてをり、従つて所引の經典にも  
彼此廣略異同がある。各々開元錄に注する  
異本を傳へたものといへよう。謂ふに一部  
三十四條の中、専ら釋尊自身を記するもの  
は、獨りこの條であつて、一部の中心とも  
いふべき重要な一條であるから、五卷の原  
本撰述後幾許もなく、後人の手につて増益  
されたものであらう。尙麗本には第十の釋  
迦從弟調達出家緣記以下の四條が闕けてゐ  
るが、三本にはこれが具つてゐて、補ふこ  
とが出来ぬ。

寛文二二刊 ①(正大、一〇三・三三七)  
(京大、一・二一・七)(帝國、一八九・一五  
八)(京專)(駒大)(内閣) (名知應順)  
釋迦譜要略 ①(日) Sha-ka-tu-yo-  
ryaku. ②三卷 ③存 ④土屋正道著  
明治一三刊 ①(高大、奇・一・二一)(哲、ら

二・左・二一)(龍大、研佛)(谷大、餘大・二二  
二)(正大、一〇三・四・二二)(帝國、七・二三  
八)

釋迦佛儀軌 ①(日) Sha-ka-butsu-  
gi-ki. (支) Shih-chia-to-tsun. 釋迦文尼  
佛金剛一乘修行儀軌法品、金剛一乘修業儀  
軌、釋迦儀軌 ②一卷 ③存、大正一九  
八六No.938、縮餘一、正續一・三・一 ④  
釋迦文尼佛金剛一乘修行儀軌法品の下を見  
よ ⑤寫本(寶善提院)

釋迦佛讚 ①(日) Sha-ka-bus-an.  
(支) Shih-chia-to-tsun. ②一卷 ③存、  
大正一九九七No.942 ④清代達喇嘛薩穆  
丹達爾吉譯  
⑤釋尊の智光赫として、法界涯を照すこ  
とや、千輻輪の妙相殊に降魔成道の事など  
を讃歎したもので、五字一句若しくは七字  
一句の偈文から成るものであるが、五字一  
句の四句の偈は四偈であつて、その他は悉  
く七字一句の偈文である。(神林隆淨)

釋迦佛像圖記 ①(日) Sha-ka-butsu  
-to-zu-ki. ②一卷 ③存、佛門衣服正儀  
編附錄 ④風潭僧澄承應三一元文三A.D.  
1551-1735)記 ⑤刊本(谷大、餘大、一六四  
〇)享保一七刊(龍大、二〇七・四・五)

釋迦方志 ①(日) Sha-ka-ho-shi.  
(支) Shih-chia-fang-chih. ②二卷或三卷  
③存、大正五一・九四八No.2088、縮致一、  
正二七・三、北1061綵、南1067仙、元1063  
仙、明北1463綵、麗1055綵、天1049仙、指  
1011綵、法1038綵、至1528綵、明南1460  
想、Ni. 1470 ④道宣(開皇一六・乾封二

A. 12. 596-697) ⑤唐永徽元(A. D. 650)

①佛教弘傳の西域印度の方土を記述したも  
の。通常は二卷であるが明本は三卷となつ  
てゐる。巻頭に序ありて「昔隨代東都上林園  
翻經館沙門彥琮著西域傳一部十篇廣布風俗  
略於佛事得在洽聞失於信本余以爲八相顯道  
三乘陶化四儀所設莫不逗機二教攸被皆宗慧  
解今聖迹靈相雜沓於華胥神光瑞影氤氳於宇  
內義須昌明形景動發心靈泉貞觀譯經骨參位  
席傍出西記具如別詳但紙墨曩易繁閱鏡難盡  
佛之遺緒釋門共歸故撮綱畝略爲一卷胎諸後  
學」と本書述の目的を述べ、本文は八篇に  
分たれて、封疆篇第一、では佛土について  
説く。此の娑婆世界は鐵輪山を以て周らさ  
れ、山の外は無限の空、山の下は金水風の順  
に重つて、その以外は無限の虚空であると  
て「智度論」を引いて一佛所王土の廣大なる  
を説明し、統攝篇第二、では鐵輪山内所攝  
の國土萬億にして國土毎に須彌山あるを説  
き、次いで小千世界、大千世界、三千大千世  
界について述ぶ。中邊篇第三、では西域印  
度の地理を説く。各國間の里程など極めて  
詳しく述べてゐる。遺跡篇第四、では漢よ  
り唐にかけて印度へ往くものは種々の道に  
よつたが概して東、中、北の三道であるとして  
その沿道の國々の有様を玄奘の「西域記」に  
よつて要を抜録してゐる。吐蕃道に關して  
特に詳しいのは李儀表、王玄策等がこの道  
により入竺したので此れ等の使臣が歸りて  
の報告によつたものと思はれる。本篇は八  
篇中最も長く詳細を極めて上巻の後半と下  
巻の前半を占めてゐる。遊履篇第五には

前漢の博望侯張騫より唐の玄奘に至る前後  
十六回の西域遊歴を記録して居り、通局篇  
第六、には古來佛教の瑞蹟を述べ、時住篇  
第七、では成住壞空の四劫及び正像末に就  
いて説いて居る。本書は正千像千末萬説に  
従ふ。最後に教相篇第八、に於て支那歷代  
帝王の三寶興隆に關する事歴を記録してゐ  
る。卷末に「往參譯經旁觀別傳文廣難尋故  
略舉其要并潤其色同成其類」とあり述作當  
時の様子を知らることが出来る。(三好鹿雄)

釋迦法 ①(日) Sha-ka-ho. ②一卷  
③存、平安、鎌倉、足利時代、徳治二、文  
明二寫(寶善提院)延寶七寫(京大、藏・二四  
三・一六)

釋迦法等諸次第 ①(日) Sha-ka-ho  
-to-sho-shi-dai. ②七帖 ③存 ④應安七  
寫(寶善提院)

釋迦牟尼小傳 ①(日) Sha-ka-muni  
-seido-den. ②一卷 ③存 ④井上哲次郎  
堀謙徳共著 ⑤大正五刊 ⑥(正大、一〇三  
四・二五)

釋迦牟尼傳 ①(日) Sha-ka-muni-  
den. ②一卷 ③存 ④井上哲次郎著 ⑤  
明治三五刊 ⑥(京大、一・二一・八)(帝  
國、八六・二五九)(正大、一〇三四・五)(谷  
大、餘洋・九〇)(高大、一・二一)(立大、B  
一六・五)

釋迦牟尼傳 ①(日) Sha-ka-muni-  
den. ②一卷 ③存 ④常盤大定著 ⑤明  
治四一刊 ⑥(立大、B一六・七、B一六・一  
〇、B一六・一三)(高大、奇・一・二一)(龍  
大、二九六・一二)(正大、一〇三四・二七、

名所行發 (名庫書) 著編所現 ① 月年の刊寫 (書考參書釋注) 書本 ⑦ 説解存内 ⑧ 代年作者 ⑨ 著書 ⑩ 缺存 ⑪ 數卷 ⑫ (名書) 名題 ⑬ 號略字數

二八(谷大、餘洋・四五〇)(京大、佛教D・二・六)(京大、一・二二シ・三五・一・二二シ・四六)

釋迦牟尼傳

①(日)Sha-ka-mu-ni-den. ②一卷 ③存、曹洞禪講義第一〇卷之内 ④松田湛堂著 ⑤大正六刊 ⑥(駒大)

釋迦牟尼傳研究

①(日)Sha-ka-mu-ni-den-ken-kyu. ②一卷 ③存 ④宗教哲學研究會編 ⑤大正元刊 ⑥(龍大、二九六一・一五)

釋迦牟尼と其の教義

①(日)Sha-ka-mu-ni-to-so-no-kyo-gi. ②一卷 ③存 ④長井眞琴著 ⑤大正九刊 ⑥(谷大、餘洋・五〇三)(龍大、二九六一・一四)(立大、B 二二・二八)(高大、寄・一一二)

釋迦牟尼と女性

①(日)Sha-ka-mu-ni-to-jo-sei. ②一卷 ③存 ④宮崎眞著 ⑤明治三九刊 ⑥(立大、B 二二・九二)

釋迦牟尼如來持念次第

①(日)Sha-ka-mu-ni-nyo-rai-ji-nen-shi-dai. 釋迦牟尼持念次第 ②一帖 ③存 ④文和二寫 (寶壽院)

釋迦牟尼如來像法滅盡之記

①(日)Sha-ka-mu-ni-nyo-rai-zō-bō-mo-tsujin-no-ki. (支)Shih-shia-mou-ni-ji-tai-hsiang-fa-mieh-chin-chih-chi. 釋迦牟尼如來像法滅盡因緣 ②一卷 ③存、大正五一・九九六No. 2090、燬遺遺書第一

唐法成(一大中一〇A.D. 856)譯 ④本書はフランスのペリオ氏によりて燬遺石室より將來せられし寫本中に存せしもの

にして、西藏の丹珠爾の中に存する于闐國懸記(Li-p'u lang-tsun-pi)を西藏の譯經家として著名なる法成が漢譯せしものである。卷首には釋迦牟尼如來像法滅盡之記と題し、卷尾には釋迦牟尼如來像法滅盡因緣一卷と記してある。内容は于闐國第七代の毘左耶訖多王の時代、一羅漢が豫言せし形式にて、于闐國佛教の興廢を述べしものである。于闐並びにその國の佛教、更に古代西域地方の研究の上にも貴重な資料たるは云ふまでもない。殊に困難な西藏原本の研究の上にも重要な参考書である。寺本婉雅氏に西藏原文の邦譯あり、于闐國史所收)ロックヒル氏(Rockhill, The Life of the Buddha)の英譯も存す。

釋迦牟尼如來拔除苦惱現大神變飛空大鉢法

①(日)Sha-ka-mu-ni-nyo-rai-butsu-jo-ku-nō-gen-dai-jin-pen-hi-ka-dai-hastu-hō. (支)Shih-shia-mou-ni-ji-tai-pa-eh-u-k'u-nao-lsien-ta-shien-pien-fai-k'ung-ta-po-fa. 飛空大鉢法、大威德祕密飛空鉢法印 ②一卷 ③存、正續二・九四、祕密儀軌第一〇 ④唐般若傳 ⑤建中二一元和五(A.D. 781-815)

釋迦牟尼如來拔除苦惱現大神變飛空大鉢法

①釋尊が靈山頂に居られた時に、五百の比丘と八萬の菩薩・天龍・八部の無量の大眾も俱に此の處に集つて居つた。その時に食ふに食物なく、大眾は飢渴に苦しみ、疲勞を感じ始めた。その時に世尊は大慈三昧に入り、光明の中から大鉢を湧出せられた。その大鉢は空に乘じて去り、行方知れずと成

釋迦牟尼佛成道在菩提樹降魔

①(日)Sha-ka-mu-ni-butsu-jo-do-zai-bo-dai-ju-go-ma-san. (支)Shih-shia-mou-ni-fo-chen-gao-tao-pu-ti-shu-tai-hsiang-mo-tsun. 釋迦成道降魔讚、釋迦牟尼佛成道菩提樹下降魔讚 ②一卷 ③存、大正一九・九七No. 941、縮閣一五、正續一・二・五 ④寬喜元寫 ⑤(寶壽院)

り、大眾は一同喫驚して居つたが、間もなく大鉢が還り來り飯食が大鉢に満盛されてあり、大眾は此の食を得て、飢渴の苦を免れた。而して、その飯食の餘殘を地獄・餓鬼・畜生の三惡趣の衆生が食して、皆飽滿を得たと言はれてある。又曾て釋尊が宿世に大仙で在られた時、雪山の巖中に住し、久しく衣食を斷つて居られた。その時に迦樓羅(Garuda)王が、大仙の鉢を持して天上並に人間界に行いて、衣食を満盛して歸り來り、巖中の大仙並びに一萬人の弟子に供養した事が有つたと記してある。尙鉢の印と眞言とが明してある。

④享保二二寫(谷大、餘大・三七六九)寫本(京大藏・二四・一七、藏・一六・二二) (神林隆淨)

釋迦牟尼佛成道菩提樹下降魔讚

①(日)Sha-ka-mu-ni-butsu-jo-do-zai-bo-dai-ju-go-ma-san. (支)Shih-shia-mou-ni-fo-chen-gao-tao-pu-ti-shu-tai-hsiang-mo-tsun. 釋迦牟尼佛成道在菩提樹降魔讚、釋迦成道降魔讚 ②一卷 ③存、大正一九・五七No. 941、縮閣一五、正續一・二・五 ④延原五寫 ⑤(寶壽院)

釋迦文實錄

①(日)Sha-ka-mon-ji-tsū-toku. ②一冊 ③存 ④寫本(哲、五・右・三〇、三四)

釋迦文尼佛金剛一乘修行儀軌

①(日)Sha-ka-mon-ji-kon-gō-ichū-ji-shū-gyō-gi-ka-hō. (支)Shih-shia-wen-ni-fon-chin-kang-ti-eh'eng-hsia-hsing-i-kuet-ia-p'in. 釋迦文佛法、釋迦儀軌金剛一乘修行儀軌 ②一卷 ③存、大正一九・八六No. 938、縮餘一、正續一・三・一 ④唐善無畏(貞觀一一一開元二三A.D. 637-735)撰

⑤この法品は善無畏三藏が、胎藏法の教旨に依り、釋迦法を記述されたものである。(一)先づ修行者は發菩提心す可きを諭し、(二)師資の相傳の必要を述べ、(三)報佛の相を現して、金剛祕密教を説示す。(四)如來は因位に於て三密門を修して、執金剛を證す。(五)色界頂第四靜慮に於て、等正覺を成じ。(六)金剛大因陀羅壇に於て法輪を轉ず(七)法輪の中に三十七の聖者あり。(八)釋迦曼荼羅。(九)塗香等の六種供養。(一〇)禮に音・心・身の三種あり。(一一)懺悔罪障。(一二)如來鉢の印言。(一三)如來甘露の印言。

釋迦牟尼佛成道在菩提樹降魔

①(日)Sha-ka-mu-ni-butsu-jo-do-zai-bo-dai-ju-go-ma-san. (支)Shih-shia-mou-ni-fo-chen-gao-tao-pu-ti-shu-tai-hsiang-mo-tsun. 釋迦成道降魔讚、釋迦牟尼佛成道菩提樹下降魔讚 ②一卷 ③存、大正一九・九七No. 941、縮閣一五、正續一・二・五 ④寬喜元寫 ⑤(寶壽院)

釋迦牟尼佛成道在菩提樹降魔

①(日)Sha-ka-mu-ni-butsu-jo-do-zai-bo-dai-ju-go-ma-san. (支)Shih-shia-mou-ni-fo-chen-gao-tao-pu-ti-shu-tai-hsiang-mo-tsun. 釋迦成道降魔讚、釋迦牟尼佛成道菩提樹下降魔讚 ②一卷 ③存、大正一九・九七No. 941、縮閣一五、正續一・二・五 ④寬喜元寫 ⑤(寶壽院)

釋迦牟尼佛成道在菩提樹降魔

①(日)Sha-ka-mu-ni-butsu-jo-do-zai-bo-dai-ju-go-ma-san. (支)Shih-shia-mou-ni-fo-chen-gao-tao-pu-ti-shu-tai-hsiang-mo-tsun. 釋迦成道降魔讚、釋迦牟尼佛成道菩提樹下降魔讚 ②一卷 ③存、大正一九・九七No. 941、縮閣一五、正續一・二・五 ④寬喜元寫 ⑤(寶壽院)

釋迦牟尼佛成道在菩提樹降魔

①(日)Sha-ka-mu-ni-butsu-jo-do-zai-bo-dai-ju-go-ma-san. (支)Shih-shia-mou-ni-fo-chen-gao-tao-pu-ti-shu-tai-hsiang-mo-tsun. 釋迦成道降魔讚、釋迦牟尼佛成道菩提樹下降魔讚 ②一卷 ③存、大正一九・九七No. 941、縮閣一五、正續一・二・五 ④寬喜元寫 ⑤(寶壽院)

(四)如來錫杖の印言。(五)大法螺の印言。  
 (六)根本毘盧遮那化身の印言。(七)梵讚等  
 が明されてある。この中で曼荼羅に關して  
 は、胎藏の説の如しと言ひ、供養儀式に關  
 しては、蘇悉地等の如しと記して、詳説を  
 略してある所に依り、本法が實修實行を目  
 的として作られたことが解る。(神林隆淨)

釋迦文佛

①(日)Shaka-mom hu  
 zu. 華嚴學上より見たる釋迦文佛 ②一卷  
 ③存 ④龜谷理藤著 ⑤明治四三刊 ⑥  
 (京大、一・二六・九七)

釋迦文佛舍利攷

①(日)Shaka-  
 mom-hutsu-sha-ri-ka (支)Shih-chia-wen  
 fo-sha-ri-ka. ②一冊 ③存 ④首王寺  
 編 ⑤支那刊本(谷大、餘大、四四三六)

釋迦文佛二千九百五十年聖誕  
記念大會々務概略

①(日)Shaka-  
 mom-hutsu-ni-sen-kai-hyaku-go-jū-nen  
 shū-tan-ki-nen-dai-kwai-kwai-mu-gai-  
 ryaku. (支)Shih-chia-wen-fo-erh-eh-ien-  
 chiu-pai-wa-shih-nien-sheng-tau-chi-ni-  
 en-ta-hui-hui-wu-kai-tiao. ②一卷 ③  
 存 ④民國年間刊

釋迦文佛法

①(日)Shaka-mom-  
 hutsu-hō. (支)Shih-chia-wen-fo-fa. 釋迦  
 文尼佛金剛一乘修行儀軌法品、金剛一乘修  
 業儀軌、釋迦儀軌 ②一卷 ③存、大正一  
 九・八・No. 938. 縮録一「記續一・三・一」  
 唐善無畏(貞觀一一一開元)三 A. D. 637-  
 735. 撰

釋迦文放鉢經

①(日)Shaka-mom  
 ho-hatsu-kyō. (支)Shih-chia-wen-fang-  
 ho-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤(參  
 考)出三藏記第四、武周錄第一二、開元  
 錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

釋迦論

①(日)Shaka-ron. ②一卷  
 ③存 ④高橋五郎著 ⑤明治三九刊 ⑥(龍  
 大、二九六一・一七)(正大、一〇三四・二〇)  
 (谷大、外洋、九八〇)(京大、一・二〇・一  
 二)(帝國、三一・九・一五九)

釋學經

①(日)Shaka-gak-kyō. (支)  
 Shih Hsiao-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯  
 ⑤(參考)出三藏記第四、武周錄第一二、  
 開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

釋學鈔

①(日)Shaka-gaku-shō. ①  
 蓮生作 ②(參考)淨土真宗教典志第三  
 釋鑑稽古略續集 ①(日)Shak-ku  
 kai-to-ryaku-zoku-shū. (支)Shih-chia-  
 wen-fo-hō-hō-hsi-chi. 續稽古略 ②三卷  
 ③存、大正四九・九〇三 No. 2038. 記續二  
 二・六・二 ④幻輪編 ⑤明崇禎一一(A. D.  
 1638)

釋鑑稽古略續集

①(日)Shak-ku  
 kai-to-ryaku-zoku-shū. (支)Shih-chia-  
 wen-fo-hō-hō-hsi-chi. 續稽古略 ②三卷  
 ③存、大正四九・九〇三 No. 2038. 記續二  
 二・六・二 ④幻輪編 ⑤明崇禎一一(A. D.  
 1638)

⑥本書は略名を續稽古略と云ふが如く、覺  
 岸の釋氏稽古略を繼承して元世祖至元々々年  
 より筆を起し明嘉宗天啓七年に至る三百六  
 十四年間の法苑事績を輯編し、僧四百三十  
 餘人を列傳して、佛祖源流法門の軌則並に  
 道脈を編年叙述したものである。即ち明崇  
 禎十一年大開幻輪之を彙編し、蓮菴居士較  
 梓して以て世に行るに至りし所である。  
 其の内容項目を明せば下の如し。〔卷第一〕  
 (一)元(一)世祖。(二)成宗。(三)武宗。(四)  
 仁宗。(五)英宗。(六)泰宗。(七)明宗。(八)  
 文宗。(九)寧宗。(十)順宗。〔卷第二〕(十一)

明。(一)太祖。(卷第三)(二)建文帝。  
 (三)成祖。(四)仁宗。(五)宣宗。(六)英宗。  
 (七)景泰帝。(八)憲帝。(九)孝宗。(十)武  
 宗。(十一)世宗。(十二)穆宗。(十三)神宗。(十四)  
 光宗。(十五)熹宗。

釋義大綱

①(日)Shaka-gi-tai-kō.  
 真宗教典釋義大綱 ②一卷 ③存 ④高松  
 悟降述 ⑤大正三刊 ⑥(龍大、一二二・  
 六)

釋疑

①(日)Shaka-gi. ②一卷 ③存  
 ④(龍大、藏・二四・一八)

釋疑篇

①(日)Shaku-gi-hen. ②一  
 卷 ③存 ④(龍大、一五〇二・五六)

釋教彙門標目

①(日)Shaku-kyō-i-  
 mon-hyō-moku. ②一冊 ③存 ④哲  
 々・三・中・九)

釋教玉林和歌集

①(日)Shak-kyō  
 -Eryoku-rin-wa-ka-shū. ②四卷 ③存  
 ④辨惠集 ⑤明治一五刊 ⑥(谷大、宗小・  
 二六)(帝國、一五六・五八)

釋教御詠

①(日)Shak-kyō-go-erh.  
 ②一卷 ③存 ④廣如撰 ⑤(龍大、二  
 〇五四・七)

釋教孝鑑

①(日)Shak-kyō-to-kan.  
 ②六卷 ③存 ④順崇作 ⑤安永八(A. D.  
 1779) ⑥(參考)淨土真宗教典志第二  
 ⑦安永九刊 ⑧(谷大、宗大・一七二二)

釋教三字經

①(日)Shak-kyō-san  
 ji-kyō. (支)Shih-chia-san-tzu-ching.  
 註釋教三字經 ②一卷 ③存 ④清代敏修  
 註 ⑤(龍大、藏・二四・一八)

釋教三十六人歌仙

①(日)Shak-  
 kyō-san-jū-rokka-ni-ka-shū. ③存、國文  
 東方佛教叢書第八 ④榮海(弘安元一正平  
 二)(北朝貞和三)(A. D. 1278-1247)撰 ⑤貞  
 和三(A. D. 1347)。

⑥本書は藤原公任の三十六家選、刑部卿範  
 兼の後六々撰や、新三十六歌仙、女房三十  
 六歌仙の類に倣いて、歴代の勅選和歌集中  
 より禪家三十六人の和歌各一首を選して左  
 右に番ひたるものである。三十六人とは達  
 磨和尚、聖德太子、僧正善提婆羅門、大僧  
 正行基、傳教大師、弘法大師、慈覺大師、  
 智證大師、沙彌滿善、玄奘僧都、僧正遍照、  
 喜撰法師、僧正聖賢、素性法師、空世上人、  
 日藏上人、蟬丸、性空上人、少僧都源信、  
 惠慶法師。能因法師、良運法師、律師永親、  
 登蓮法師、大僧正行尊、僧正永祿、俊惠法  
 師、道因法師、西行法師、僧正慈圓、二品  
 法親王守覺、法橋顯昭、寂蓮法師、寂然法  
 師、僧正行、明惠上人である。撰者榮海は  
 藤原俊業の子、慈覺院の僧正といふ、北朝  
 の貞和元年正月東寺長者となり、同三年八  
 月十六日寂す、壽七十、本書には見えない  
 が、一本の自序には貞和三年三月の記筆が  
 あり、また一本には律師永親がなくて、隆  
 西上人が入つたのもあると圖書解題には記  
 してある。(中谷在禪)

釋教諸師製作目錄

①(日)Shak-  
 kyō-shū-shi-sei-saku-moku-roku. ②三卷  
 ③存、大日本佛教全書佛教書籍目錄第二

⑥本目錄は諸宗諸師の述作書の目錄にして三卷より成り、第一第二の兩卷には六波羅密寺惠範撰集の眞言宗諸師製作目錄を收め、第三卷には圓超の五宗錄に多少の筆を加へて之を收む。第一第二の兩卷に收めらるる眞言宗諸師製作目錄中には、龍猛、龍智、金剛智、不空、善無畏、一行、慧果、弘法等の付法の八祖を始めとして、弘法大師の上足眞雅、實慧等より理實、益信、覺鑊等、小野、高野、東寺、廣澤、根嶺等諸流の祖師等五十四人の著述を人別に列擧せしものにして、就中、弘法大師に關しては、大日經釋二帖、法華十密號一卷、乃至鈞章夷進四卷等の章疏、論述、儀軌等二百一十部の書名を掲ぐ。而して、本錄の内容は謙順の諸宗章疏錄の序文中に「然則惠範錄章宣跋語、範師一時見聞之草藁、未下繩削、多其批謬亦宜矣」と指摘して居る如く、一時の見聞の草藁に過ぎないもので、可成りの杜撰の點を含んで居る。例へば、古來問題視せらるる釋摩訶衍論十卷を龍猛の著として何等の疑ひを挿まず、又弘法大師の著中に於ても玉造小町子形表記一卷、或は薩氣記十卷の如き、當然疑似部として取扱ふべきもの迄これを一樣に輯録せる如きその一例である。第三卷は前述の如く、圓超の五宗錄に少しく加筆を施せるものにして、即ち華嚴宗に於ては圓超の勅進錄中に重要な地位を占むる法藏、元曉の二人に就て個人目錄を作り、天台章疏に於ては玄日の勅進錄中の南岳、天台等の述作を整理して個人著作目錄を製して附加して居る。

釋

然し、本錄に依て附加せられた個人著作目錄は頗る杜撰のものであつて、勅進錄中に既に存せるものを脱し、或は自意を以て新に挿入し、或は書名に通せざるが爲に過去に陥れる如き誤りが隨處に犯されて居る。例へば、圓超錄中の賢首大師法藏の名著、華嚴五教章三卷が華嚴教分記の名稱を用ひ存するが爲に、賢首個人目錄中より逸脱せしめしが如き、又淨影寺慧遠の著述中、華嚴又は因明の部に編入すべきものを、三論宗章疏に編入して氣付かざるが如きがそれである。尤も、圓超錄そのものにも誤記があつて、教分記三卷を杜順の著なりと斷定し（夾註）華嚴宗章疏を百八十二部七百八十四卷と記し居れども、實数は百八十七部七百九十二卷（卷数を記せざる數部の卷数を控除せり）となつて居る點に徴すると、原本となりし圓超錄の寫誤脱逸に災ひされた間違ひも尠くないであらう。要するに本錄は諸宗章疏錄の著書謙順が「世有稱釋教錄一者兩卷上、洞雜圓超五宗錄、暨惠範祖師製作錄、以爲一部、重出繁多、牀上架、牀、寫誤非一」と云へる如く、五宗錄と六波羅密寺惠範の製作錄とを合して作つたものであつて、未だ推敲を経ない未定稿のものたるを免れない。

以後に求むべく、又本書は寛文七年（A.D. 1667）に出版されて居る事實に依てその成立最下限年時を爰に定むることが出来る。

①寛文七刊 ②高天、一・二四、寄、一・二〇〇〇龍大、一〇三・四二〇（帝國、一九八・二一四）（京大、一・二〇〇・小）（林屋友次郎）

釋教諸宗錄 ①（日）Shak-kyō-shō-shū-riku. ②一卷 ③存 ④大村西屋（明治元一昭和二A.D. 1860—1922）鹽澤觀山著 ⑤明治二九刊 ⑥帝國、一八・七〇九

釋教正謬 ①（日）Shak-kyō-shō-myū. ②二卷 ③存 ④艾約瑟題、三眼居士譯 ⑤同治五刊（谷大、外大、一・二六）哲、外、一・右、一・一〇龍大、二八・四・二〇同治七刊（帝國、六五、一三〇）（京大、一・二〇〇・二一六）

釋教正謬斥 ①（日）Shak-kyō-shō-myū-gaku-shaku. ②二卷 ③存 ④南溪（天明三—明治六A.D. 1783—1873）寫本（龍大、二八・四・四）

釋教正謬再破 ①（日）Shak-kyō-shō-myū-shū-ka. ②二卷 ③存 ④養鶴徹定（文化一一—明治二四A.D. 1814—1891）述

明治六刊 ①（京大、一・二〇〇・一五）

釋教正謬再破批 ①（日）Shak-kyō-shō-myū-shū-ka-hi. ③存、行誠上人全集之内 ④福田行誠（文化三—明治二一A.D. 1806—1883）述

釋教正謬初破 ①（日）Shak-kyō-shō-myū-shū-ka. ②二卷 ③存、日本思想圖

評史料第一〇 ①養鶴徹定（文化一一—明治二四A.D. 1814—1891）述 ②明治元刊 ③龍大、二八・四・一五、研史（正大、一〇九・四一、八七）

釋教正謬辨駁 ①（日）Shak-kyō-shō-myū-shū-ka-hen-baku. ③存 ④南條神興（文化一一—明治二〇A.D. 1814—1887）述 ⑤寫本（谷大）

釋教題林 ①（日）Shak-kyō-dai-rin. ②八卷（卷一・六缺）③存 ④淨慧集 ⑤元祿八（A.D. 1693）⑥寶曆九刊 ⑦高天、寄、一・二四〇（京大、佛敎、C四・二八）（正大、一〇九・一一一）

釋教題林和歌集 ①（日）Shak-kyō-dai-rin-waka-kaishū. 說教必要釋教題林和歌集 ②八卷 ③存 明治一四刊 ④龍大）

釋教百偈集 ①（日）Shak-kyō-hyakku-ge-shū. ②一卷 ③存 ④鹽澤觀山集

明治三〇刊 ①（正大、一〇七・一七〇）

釋教百首 ①（日）Shak-kyō-hyakku-shū. ②一卷 ③存、國文東方佛敎叢書第八、行誠上人全集之内 ④福田行誠（文化三—明治二一A.D. 1806—1883）撰

⑤本書は、福田行誠の釋教の題詠一百首であり、その遺稿である。著作年代は不明なるも「戌のとし三嶽山を辭職して深川の本誓寺にうつりける時」の詞書、及び「あのを秋傳法復古かきけるおくに、うらみなき秋を昔にふきかへせ眞寫がはらわたる秋風」等より見て、行誠の本誓寺に隠棲したのが明治十九年三月であり、京都知恩院に住したのが明治二十年四月であるから、

その頃までの釋教歌一百首を集めたものである事は推知せられる。本書の初版本と見るべきものは、行誡の門弟伊佐岑満が師の遺命を奉じて書寫したるものを板下として明治二十二年十一月に刊行されてゐる。

本書の釋教歌は「法華經壽量品」「仁王般若經」「無量壽經」等々の如く經釋の義理を詠したるもの、或は「花」「更衣」「秋のはじめに」「人の扇に書る」「歲暮」等々の如く、四季の風物に寄せて詠したるものありて、其の様式は一様でない。然しながら單純なる感情の表現と異つた宗教的體驗より得た深い心が、象徴的に表現せられ愛唱すべき作が多い。行誡の和歌には師傳はなく、餘技自ら一家を成したものである。和歌の著作としては「釋教百首」「於知葉集」「後落葉集」などがあり、佛教思想に實感味を添へようとするのが、その特徴である。その意味で「釋教百首」は代表的のものである。

●明治二二同三二、大正一四再刊、●(龍大)二〇四二・五、研佛 (林真彦)

**釋教部彙考** ①(日)Shak-kyō-hu-i-ko.(支)Shih-chiao-pu-hu-i-ko. 古今圖書集成釋教部彙考 ②七卷 ③存、記續二〇六・二 ④蔣延錫等輯 ⑤清雍正三(A. D. 1725) ⑥古今圖書集成釋教部彙考の下を見よ。 ⑦寫本(京大、藏・一九七)

**釋教目錄** ①(日)Shak-kyō-moku-roku.(支)Shih-chiao-mu-lu. 貞元新定釋教目錄、貞元錄 ②三十卷續一卷 ③存、大正五五・七七一 No. 2157、縮結六一七、麗157、說至丁 ④圓照撰 ⑤唐貞元一六

(A. D. 800) ⑥貞元新定釋教目錄の下を見よ ⑦享保一六刊(京大、印香・レ・六、藏・二二・八)(龍大、二〇一・九)(京專)永久二寫(谷大、餘甲・一三)永久三寫(谷大、餘甲・三五)影寫(龍大、別置)

**釋教文粹** ①(日)Shak-kyō-bun-sui. ②二卷 ③存 ④石村貞一編 ⑤明治一九〇一 ⑥龍大、二〇五・九(哲、乙・三・右・一)

**釋教文範** ①(日)Shak-kyō-bun-pan. ②一卷 ③存 ④龜谷行編 ⑤明治三四刊 ⑥(正大、一〇九・二九〇)(龍大、一〇五・一〇・一、研史)(帝國、一六・一三) ⑦東京鴻盟社

**釋教論** ①(日)Shak-kyō-ron. ②一卷 ③存 ④大我(寶永六一天明二 A. D. 1709-1782)述 ⑤安永七刊 ⑥(正大、一五五・四・一八〇)(哲、え・八・右・一七)

**釋經** ①(日)Shak-kyō.(支)Shih-chi-ning. 大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋、大樂金剛不空理趣釋、理趣釋、理趣釋經、般若理趣釋 ②二卷 ③存、大正一九六・〇七 No. 1003、縮開八、二一・二七・一、北1392武、南1396衡、元1385衡、明北1400藝、清4403藝、麗1339宅、天1335尹、法1163封、至825流、明南1160無、天1407 ④唐不空(神龍元一六曆九 A. D. 705-774)譯

**釋教曼荼羅** ①(日)Shak-kyō-man-dara. 理趣釋曼荼羅 ②一帖 ③存 ④德川時代刊 ⑤(寶龜院)

**釋弘充錄** ①(日)Shaku-en-ji-roku.

(支)Shih-hung-chung-lu. ②一卷 ③缺 ④弘充撰 ⑤南齊代(A. D. 479-502) ⑥本錄は南齊楊都の人、釋弘充の著者に係るものであつて、その製作年代は未だ明らかでない。歴代三寶紀卷第十五に「釋弘充錄一卷」とあり、又大唐内典錄卷第十には「釋弘充錄(南齊楊都人)」と記載するもの即ち本錄である。開元錄亦同じ。然るに、貞元錄はその卷第十八に「釋彌充錄一卷(南齊楊都人或云弘充未詳孰是)」と云つてをる。これ蓋し、彌と充とは可成りに類似してをるから、恐らくは筆寫の際に間違はれたものであらう。

〔参考〕三寶紀第一五、内典錄第一〇、開元錄第一〇、貞元錄第一八(林屋友次郎) ⑦卷蒙求 ①(日)Shak-kwan-mo-yō. ②三卷 ③存 ④祖寬著 ⑤延寶四刊 ⑥(高木、寄・一・二二)

**釋觀無量壽佛經記** ①(日)Shaku-kwan-mu-ryō-ju-butsu-kyō-ki.(支)Shih-kuan-wu-liang-shou-fo-ching-ki. 觀無量壽佛經記 ②一卷 ③存、記續一・三二・四、淨土宗全書第五 ④唐代法聰述 ⑤天台智者大師(智顛)撰述にかゝる佛說觀無量壽佛經疏を註解したもので、同種のものに知禮の觀無量壽佛經疏妙宗鈔六卷が存する。本書は専ら天台の思想を以て淨土を剖判解釋したもの、始めに淨土と娑婆との不同を説くに、淨土は三惡趣の苦しみなき樂土ではあるが、淨土宗の立つるとき報身報土と立つることなく、凡夫聖者同居の國土なりとし、娑婆は五濁八苦日夜交々競

ひ生ずる土なりと法喻並べ擧げて説明し、次いで本經成立の因縁を説き、且つ本經所説の十六觀を略釋してゐる。本書が我が國に傳へられたのは智證大師入唐の時、大中十二年三月二十三日台州開元寺で寫し將來せらるるところにかゝる。

⑥享保一二刊 ⑦(正大、一一五三・一四)(龍大、二四一五・一四四)(谷大、宗大・二六〇五)(哲、う・一・左・九) (高瀬承敏)

**釋群疑論撮要** ①(日)Shaku-gun-ji-ron-satsū-yō. ②四卷 ③存 ④慧然(元祿六一明和元 A. D. 1693-1764)作 ⑦〔参考〕淨土眞宗教典志第二

**釋家官班記** ①(日)Shak-ke-kwan-pan-ki. ②二卷 ③存、群書類從第一五、新校群書類從第一八、朝事片玉第四 ④尊圓親王者 ⑤文和四(A. D. 1335) ⑥本書は奥書に依る文和四年青蓮院尊圓法親王が勅定によりて撰進する所々、上下二卷に分ち釋家官班叙任の法苑記録史である。今其の項目を示せば

〔卷上〕(一)濫觴事。(二)一品親王。(三)三品親王。(四)三品親王。(五)無品親王。(六)入道親王。(七)先加元服入道例。(八)孫王親王例。(九)准三后。(十)大僧正。(十一)僧正。(十二)權僧正。(十三)大僧都。(十四)少僧都。(十五)權大僧都。(十六)權少僧都。(十七)律師。(十八)大律師。(十九)中律師。(二十)權律師。(二十一)法印。(二十二)法眼。(二十三)法橋。(二十四)法務。(二十五)正法務。(二十六)權法務。(二十七)法頭。(二十八)大威儀師。(二十九)一身阿闍梨。(三十)僧官相當事。(三十一)僧中



禮事。(四)僧官員數事。

- 〔卷下〕(五)顯宗名僧昇進次第。(1)南京。(2)山門。(3)寺門。(4)名僧昇進採用故實。(1)最勝會。(2)法勝寺御八講。
- (3)仙洞最勝講。(4)賜講師請事。(5)勅會探題事。(6)假探題事。(7)山徒昇進事。
- (8)貴種昇進次第。(9)臨時受戒事。(10)一身阿闍梨事。(11)僧綱事。(1)皇子。(2)皇孫。(3)攝錄息。(4)大臣息。(5)大臣孫子。(三)僧官探擇故實事。(1)大僧正。
- (2)僧正。(3)權僧正。(4)法務。(5)正官。(6)大僧都。(7)少僧都。(8)律師。
- (9)權大僧都。(10)權少僧都。(11)散位僧綱。(12)直叙法眼。(13)法橋。(三)勸賞事。(1)神社。(2)佛寺。(3)顯宗。(4)密宗。(四)辭退啓事。(五)僧事連書次第。
- (六)學頭等勞被聽昇進事。(七)功人事。

尙本書は舊本眞書體で弘文院藏本等二三本を以て校訂せられて刊行されたもので、明應乙卯。文和五年。至徳四年。明德二年。應永二十六年。文明五年。永祿九年の眞書がある。

④慶長三寫(龍大、二九八一・五一六、寛永一八寫(寶菩提院)寛政四寫(金剛三昧院) (紀氏隆眞)

釋家觀化還愚經

①(日)Shak-ke-i-kwan-te-gen-gu-kyō(支)Shih-hia-kuan-hua-huan-yü-ching. ②一卷 ③存、大正八五・一四六二 No. 2918

④本經はスタイン氏蒐集の燧煌出土本で、大英博物館の所蔵にかゝる。經題は新に附加せられたが、今その内容よりすれば、釋

化觀家還愚經と名くべきものであらう。其の大要は、昔時、舍衛國在住の慳貪愚惡で道理を知らず、道徳を信じない一夫婦のものがあつたが、釋尊がその夫婦をして哀愍を垂れて、自ら沙門に化し、或は琉璃城を化作するなどをして、順次に法を説き、道理を話して法に入らしめ、怨を改めて心を洗ひ、數多くの惡を止めて、遂に須陀洹道を得させしめた、教化物語の一小篇である。

④燧煌出土本(大英博物館藏S. 1638)

釋家人名錄

①(日)Shak-ke-jin-meiroku. ②三册 ③存 ④寫本(帝室)

④清原經賢(一元祿頃 A. D. 1638—1703—)撰

⑤本書は有職家の清原經賢が長谷寺卓支僧正の請により撰する所で、貞觀六年僧徒位階制定の宣旨より筆を起し、僧正・僧都・律師等の官。法印・大和尚・法眼和尚・法橋・上人・傳燈大法師・傳燈法師・傳燈滿・傳燈住・傳燈入等の位に就いて、衣服等の服飾の別を明したるものである。奥に云く「此本由來元大内近衛家有御文庫大内宮人高橋若校正」と。

釋家法服記

①(日)Shak-ke-ho-hu-ku-ki. ③存、大日本佛教全書第七四

④本書は尊雅房常覺の撰する所で、三論法相天台眞言等の諸宗僧侶の官位服飾の模様を記載したものである。今其の内容を略述

せば、衣服之事の項下では法親王・出世寺僧・坊官に就て其の服飾を詳に明し、其の外童體裝束・持幡童裝束等の事を略記してゐる。因に一本眞書に「右尊雅房常覺阿闍梨(俗名舟橋式部少輔清原經賢)撰集之祕書也」とある如く、清原經賢撰の釋家裝束式と大同小異であり、併せ讀むべきものである。(紀氏隆眞)

釋華嚴教分記圓通鈔

①(日)Shan-ho-gon-gyō-juan-kien-zū-shō. (支)Shih-lua-yen-chiao-fen-chi-yuan-tung-tō. 華嚴經教分記圓通鈔、華嚴五教章圓通鈔 ②十卷 ③存 ④高麗代均如撰 ⑤(大正一切經刊行會)

釋華嚴十明論

①(日)Shak-ke-gon-jū-myō-rōn. (支)Shih-lua-yen-shū-ning-tun. 解迷顯智成悲十明論、華嚴十明論、十明論、釋華嚴十明論、釋華嚴經十二緣生解迷顯智成悲十明論 ②一卷 ③存、大正四五・七六、七〇、1898、已續二・八・四

釋元恭

①(日)Shak-ke-gen-gyō. ②一卷 ③存 ④山本孝則、菅川文之共著 ⑤明治二八刊 ⑥(正大、一七一・一〇) ⑦東京鴻盟社

釋元恭

①(日)Shak-ke-gen-gyō. ②一卷 ③存 ④上島長久著 ⑤明治二九刊 ⑥(駒大) ⑦(谷大、外洋、一一一)

釋玄琬衆經目錄

①(日)Shak-ge-mō-shū-shū-kyō-moku-roku. (支)Shih-hsi-mi-wan-chung-ching-mu-lu. ②五卷 ③(天嘉三)貞觀一〇 A. D. 562—636)撰 ④唐貞觀初(A. D. 637—649)

⑤本錄は唐貞觀の初め、普光寺の沙門釋玄琬の撰集に係るものであつて、道宣は大唐内典錄卷第七に於て「衆經目錄五卷九十紙、唐貞觀初普光寺玄琬撰」と記載して居るもの即ちこれである。智昇は開元錄卷第十に「唐衆經目錄五卷、貞觀初普光寺沙門玄琬撰、出内典錄、右内典錄中、引用云、唐舊錄未見其本、似取隋五卷衆經錄編新經入、餘者大同」と云つて居るから、その本を直接に見ては居らなかつたやうであるが、大體に於てその内容と組織とを想像することが出来たものであらう。貞元錄は開元錄と全く同一の記載をなして居る。續高僧傳卷第二十二に「逮貞觀初年(中略)尋有別勅、於苑内德業寺、爲皇后寫現在藏經、當即下令、於延興寺更造藏經、並委其監護、琬以二宮所寄惟各其誠、祇奉不難義須弘選、自周季滅法陪朝再興、傳度法本但存卷秩、至於尋檢文理、取會多乖、乃結義學沙門麟助正則、其有詞旨不通者並諸取決、故得法寶無溢於疑偽、迷悟有分於本末、綱領卓明自琬始也」之れに依て見るに、本錄は德業寺、延興寺所安の藏經目錄であつて、加も皇后の力に依て官寫された藏經を基準として撰集されたものであるから、現定入藏錄としては最も權威あるものであつた筈である。琬は太宗の貞觀十年(A. D. 636)

十二月七日、七十有五歳を以て示寂した。  
⑦(参考) 内典録第七、開元録第一〇、貞觀録第一八、續高僧傳第二  
(林屋友次郎)

釋劫章疏

①(日)Shaku-gō-shō-shō.  
(支)Shih-chieh-chang-su. ②一卷 ③(參考) 智證大師請來目錄

釋金剛經要疏分科

①(日)Shu=ku-kon-gō-kyō-san-yō-shō-han-kwa.  
(支)Shih-chin-kang-ching-tsuun-yao-su-fen-ko. ②一卷 ③存 ④宋子晴(一寶元元 A. D. 1038)撰 ⑤刊本(正大、一一二六三)(駒大)

釋金剛彌勒論

①(日)Shaku-kon-gō-mi-toke-ton. (支)Shih-chin-kang-mi-to-kan. ②宋北峰宗印(一嘉定六 A. D. 1213)述 ③(參考) 諸宗章疏錄第二

釋三自大乘

①(日)Shaku-san-ji-da-ji. 論議手鏡 ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

釋氏會要

①(日)Shaku-shi-e-yō.  
(支)Shih-shih-hui-yao. ②四十卷 ③仁贊述 ④(參考) 新編諸宗教藏總錄卷第三

釋氏往來

①(日)Shaku-shi-wei-lai.  
②一卷 ③存、群書類從第六輯消息部第五 ④守覺法親王(久安六一建仁二 A. D. 1130-1202)

⑤觀應元年(A. D. 1380)八月二十二日、某法印は、御室守覺法親王が僧家の往來消息文數十通をあつめたる草本を編輯したるもの。

⑥刊本(帝室)

釋氏外記

①(日)Shaku-shi-ge-ki.  
②一冊 ③存、佛典講義録之内 ④根倉著 ⑤明治二五—二八、三〇刊 ⑥(帝國)二一四・九七、六二・二五八、宗大(京大、一一一・シ・九)

釋氏系錄

①(日)Shaku-shi-kei-ro.  
(支)Shih-shih-hsi-lyu. ②一卷 ③唐一行(弘道元—開元一五 A. D. 683—727)撰 ④(參考) 諸宗章疏錄第三

釋氏稽古略

①(日)Shaku-shi-kei-ko-ryaku. (支)Shih-shih-ki-ku-lyo. 稽古略 ②四卷 ③存、大正四九・七三七 No. 2037、已續二七・五・六一・一 ④覺岸輯 ⑤元至正一四(A. D. 1354)

⑥本書は吳興の禪僧覺岸の輯せる記傳史で、覺岸は博學古今に通じ、支那歷朝の綱紀を經とし、法苑の事績を緯として、廣く三教内外の史實を綴輯し、殊に達磨東來の本意、佛祖相承の道脈を明したるもので、佛祖通載と同軌の倍史と云ふことが出来る。覺岸が本書を製作するや初め稽古手鏡と呼びしが、後至正十四年更に再治して釋氏稽古略四卷にまとめたものである。後明嘉靖二十三年に至り昌胤序を附して上梓世に公にし更に清光緒十二年(明治十九年)清道再び序を附して重刊以て世に廣く頌つたのである。今本書の内容項目を示せば左の通りである。

〔卷第一〕(一)三皇。(一)太昊庖犧氏。(二)炎帝神農氏。(三)黃帝有熊氏。(四)五帝。(一)少昊金天氏。(二)顓頊東陽氏。(三)帝嚳高辛氏。(四)帝堯陶唐氏。(五)帝舜有虞氏。(六)夏。(一)帝禹。(二)王啓康。(三)太康。(四)仲康。(五)王相。(六)少康。(七)王杼。(八)王槐。(九)王芒。(十)王泄。(十一)不降。(十二)王局。(十三)王暉。(十四)王孔甲。(十五)王皐。(十六)王發。(十七)履癸。(十八)商。(一)帝湯。(二)外丙。(三)仲壬。(四)太甲。(五)沃丁。(六)太庚。(七)小甲。(八)雍巳。(九)太戊。(十)仲丁。(十一)外壬。(十二)何實甲。(十三)祖乙。(十四)祖辛。(十五)沃甲。(十六)祖丁。(十七)南庚。(十八)陽甲。(十九)盤庚。(二十)小辛。(二十一)小乙。(二十二)武丁。(二十三)祖庚。(二十四)祖甲。(二十五)廩辛。(二十六)庚丁。(二十七)武乙。(二十八)太丁。(二十九)帝乙。(三十)受辛。(三十一)周。(一)文王。(二)武王。(三)成王。(四)康王。(五)昭王。(六)穆王。(七)共王。(八)懿王。(九)孝王。(十)夷王。(十一)厲王。(十二)共和。(十三)宣王。(十四)幽王。(十五)平王。(十六)桓王。(十七)莊王。(十八)僖王。(十九)惠王。(二十)襄王。(二十一)頃王。(二十二)匡王。(二十三)定王。(二十四)簡王。(二十五)靈王。(二十六)景王。(二十七)悼王。(二十八)敬王。(二十九)元王。(三十)貞定王。(三十一)哀王。(三十二)思王。(三十三)考王。(三十四)威烈王。(三十五)安王。(三十六)烈王。(三十七)顯王。(三十八)慎靚王。(三十九)赧王。(四十)秦。(一)昭襄王。(二)孝文王。(三)莊襄王。(四)始皇帝。(五)二世。(六)子嬰。(七)西漢。(一)高祖。(二)惠帝。(三)呂后。(四)文帝。(五)景帝。(六)武帝。(七)昭帝。(八)昌邑王。(九)宣帝。(十)元帝。(十一)成帝。(十二)哀帝。(十三)平帝。(十四)孺子嬰。(十五)東漢。(一)光武。(二)明帝。(三)章帝。(四)和帝。(五)殤

帝。(六)安帝。(七)北鄉侯。(八)順帝。(九)沖帝。(十)質帝。(十一)桓帝。(十二)靈帝。(十三)少帝。(十四)獻帝。(十五)三國。(A)魏。(一)文帝。(二)明帝。(三)邵陵厲公。(四)高貴鄉公。(五)元帝。(B)蜀。(C)吳。(一)西晉。(一)武帝。(二)惠帝。(三)懷帝。(四)愍帝。  
〔卷第二〕(一)東晉。(一)元帝。(二)明帝。(三)成帝。(四)康帝。(五)穆帝。(六)哀帝。(七)海西公。(八)簡文帝。(九)武帝。(十)安帝。(十一)恭帝。(十二)南北朝。(A)宋。(一)高祖武帝。(二)少帝。(三)太祖文帝。(四)武帝。(五)廢帝。(六)太宗明帝。(七)晉穆帝。(八)順帝。(九)齊明帝。(一)太祖高皇帝。(二)武帝。(三)穆王。(四)海陵王。(五)明帝。(六)東昏侯。(七)和帝。(C)梁。(一)高祖武帝。(二)太宗簡文帝。(三)世祖元帝。(四)敬帝。(D)陳。(一)高祖武帝。(二)世祖文帝。(三)廢帝。(四)高宗宣帝。(五)後主。(三)隋。(一)高祖文皇帝。(二)煬帝。(三)恭帝。(四)越王侗。  
〔卷第三〕(四)唐。(一)高祖。(二)太宗。(三)高宗。(四)則天。(五)中宗。(六)睿宗。(七)玄宗。(八)肅宗。(九)代宗。(十)德宗。(十一)順宗。(十二)憲宗。(十三)穆宗。(十四)敬宗。(十五)文宗。(十六)武宗。(十七)宣宗。(十八)懿宗。(十九)僖宗。(二十)昭宗。(二十一)哀帝。(二十二)漢王。(二十五)五代。(A)梁。(一)太祖。(二)末帝。(B)唐。(一)莊王。(二)明宗。(三)閔帝。(四)瀛王。(C)晉。(一)高祖。(二)齊王。(D)漢。(一)高祖。

(c)隱帝。(E)周。(1)太祖。(2)世宗。(3)恭宗。

〔卷第四〕(三)宋。(1)太祖。(2)太宗。(3)眞宗。(4)仁宗。(5)英宗。(6)神宗。(7)哲宗。(8)徽宗。(9)欽宗。(10)高宗。(11)孝宗。(12)光宗。(13)寧宗。(14)理宗。(15)度宗。(16)少帝。(紀氏隆眞)

**釋氏稽古略歌** ①(日)Shaku-shi-kei-ko ②一卷 ③存 ④(龍大、二九三・二一)

**釋氏憲法** ①(日)Shaku-shi-ken-pō ②一卷 ③存 ④延寶三刊(正大、一〇八・一四二)天明四刊(正大、一〇八・一四三)

**釋氏哭儀** ①(日)Shaku-shi-koku-gi ②一卷 ③存 ④(參考)惠運禪師將來教法目錄

**釋氏哭儀義記** ①(日)Shaku-shi-koku-gi-gi ②一卷 ③存 ④(參考)惠運禪師將來教法目錄

**釋氏根元錄** ①(日)Shaku-shi-kon-gen-roku ②一卷 ③存 ④(參考)安永五一(天保一四 A. D. 1776-183)記

**釋氏齋儀** ①(日)Shaku-shi-sai-gi ②一卷 ③存 ④(參考)傳教大師將來台州錄

**釋氏齋儀記** ①(日)Shaku-shi-sai-gi-gi ②一卷 ③存 ④(參考)傳教大師將來台州錄

**釋氏資鑑** ①(日)Shaku-shi-sai-kan ②一卷 ③存 ④(參考)傳教大師將來台州錄

釋

〔支〕Shih-shih-tzu-chien. 歷朝釋氏資鑑 ②十二卷 ③存、己續二乙・五・一 ④元熙仲集 ⑤至元二丙子(A. D. 1336) ⑥本書は元代の學僧闍黎家沙門照仲の撰集に係る編年體の佛教通史で、年代は周の昭王から元の順宗に至る約二千年間に亘つてゐる。具には歷朝釋氏資鑑と呼ばれてゐる。その目次は左の如くである。

〔卷第一〕序・周・秦・前漢・後漢。〔卷第二〕三國・魏・蜀・吳・西晉・東晉。〔卷第三〕南北朝・宋・魏。〔卷第四〕南北朝・梁。〔卷第五〕南北朝・南陳・後梁・北齊・周・隋。〔卷第六〕唐上。〔卷第七〕唐中。〔卷第八〕唐下。五代。〔卷第九〕宋上。〔卷第十〕宋中。〔卷第十一〕宋下。〔卷第十二〕元附國朝帝朝行實自跋。

外に薛天祐安道の題がある。わが國では古來之を用ひる者は稀で『僧傳排韻』(大日本佛教全書)にも之を漏らしつゝゐる。(前田聰瑞)

**釋氏書啓** ①(日)Shaku-shi-sho-kei ②一卷 ③存 ④(支)Shih-shih-shu-kei ⑤同治一〇刊 ⑥刊本(京大、藏、二四・二〇)(京大、日大末・八三二)

**釋氏聲類** ①(日)Shaku-shi-sō-rui ②一卷 ③存、況齊叢書第五〇册之内 ④(參考)寛政九一(明治一 A. D. 1797-1878)著

**釋氏新聞** ①(日)Shaku-shi-shin-bun ②一卷 ③存 ④(支)Shih-shih-shin-wen ⑤(帝國、一八九・四三)

**元代報恩行秀** (一)永安頌 A. D. 1106-

1200-) ⑦(參考)禪籍目錄

**釋氏洗淨法** ①(日)Shaku-shi-sen-jō-hō ②一册 ③存 ④(哲、ふ・二・左・一一)

**釋氏洗淨略作法** ①(日)Shaku-shi-sen-jō-ryaku-sa-hō ②一卷 ③存 ④(支)Shih-shih-tung-chien. 歷代編年通鑑 ⑤十二卷 ⑥存、己續二乙・四・四一五 ⑦宋代本覺編集

**釋氏擇日法** ①(日)Shaku-shi-cha-hō ②一卷 ③存 ④(支)Shih-shih-tsun-ku. 歷代編年通鑑 ⑤十二卷 ⑥存、己續二乙・四・四一五 ⑦宋代本覺編集

**釋氏通鑑** ①(日)Shaku-shi-tō-kan ②一卷 ③存 ④(支)Shih-shih-tung-chien. 歷代編年通鑑 ⑤十二卷 ⑥存、己續二乙・四・四一五 ⑦宋代本覺編集

本書は宋代の學僧本覺の編集に係る編年體の佛教通史で、具には歷代編年釋氏通鑑と呼ばれてゐる。恐らく司馬光の『資治通鑑』に據つたのであらう。内容は周の昭王二十六年(甲寅)から北宋の太祖建隆元年(庚申)に至る千八百有餘年間に亘る佛教史實に關してゐる。咸淳六年(A. D. 1270)藤福用錫の序、天啓六年(A. D. 1626)畢照志・畢抵康の序がある。即ち明代に畢照志以下の數名で校訂を分擔して上梓したものである。わが國では古來之を重要視しなかつたと見えて『僧傳排韻』(大日本佛教全書)にも之を落してゐる。

**釋氏二十四考** ①(日)Shaku-shi-ni-jū-shi-kō ②一卷 ③存 ④(支)Shih-shih-ka. ⑤(谷大、餘大・二九五〇)(高大、文十刊) ⑥(谷大、餘大・二九五〇)(高大、

寄・一・二四)(京大、一・二二・一〇〇)

**釋氏法衣訓** ①(日)Shaku-shi-hō-e-kun. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第七三册 ④(支)Shih-shih-hō-e-kun. ⑤(瑞方面山(天和三・一明和六 A. D. 1683-1763)語、慈方編 ⑥(明和五(A. D. 1768)

袈裟の功德を讃歎し、以てこれを尊重すべきことを誨めるのが一卷の要旨である。十章に分つて、袈裟の名義・色彩・裁縫等についても書いてゐる。

⑦(明和五刊(高大、一・一一)(哲、こ・八・右・二二) 嘉永元刊(谷大、餘大・二〇二五)大正二刊(龍大、二〇三・四二)(駒大) (山田靈林)

**釋氏蒙求** ①(日)Shaku-shi-mō-sō ②二卷 ③存、己續二乙・二・三 ④(支)Shih-shih-mō-sō. ⑤(李翰の蒙求に倣ふて編纂し、幼童に誦せしめんが爲に、四字句の韻語を以て、漢魏以降佛教高僧の奇逸なる事蹟を記述せるものである。卷上には「摩騰入漢、僧會來吳」以下の百十八句、卷下には「琳祜會郊、可育而壁」以下の九十六句總て二百十四、韻を用ひること三十二、卷末の跋に其の趣意を述べて曰く「今東土高僧傳中に於て、略して靈異の事を探り撰して蒙求と爲す、志後進の童孺を勉誘し、聖賢の蹤を繼がしめんと欲するなり」と。大僧都義空四律、文字を校訂して各條の終に註し、韻の檢尋に便ならしむる爲め格上に註し句下に反切を記入された。殊に又、元本には標題の缺けたりしを、餘の蒙求の例に準じて、卷頭に

標せられた、其後我國に傳來流布され、寛保元年に刊行された。撰者靈操は彼の跋文に「採日教法東興 後漢以來 迄今幾二于千載」と云へる所より察するに、清の初期の人ならん歟。

⑤寛保元年刊 ⑥佛華一、二、八八 ⑦貝葉書院

**釋氏要義問答**

①(日)Shaku-shi-yo-gi-shi-an-ka. 律施行事釋要義問答 ②十卷 ③存 ④諺忍(寶永二)天明六 A.D. 1705—1786)述 ⑤安永五刊 ⑥龍大(二六一—三〇〇)

**釋氏要覽**

①(日)Shaku-shi-yo-tan. (支)Shih-shih-yo-tan. ②三卷 ③存、大正五〇・二五子No. 2127 ④道誠集 ⑤宋天禧三(A.D. 1019) ⑥道誠集

①初學の爲めに佛典中に散見する名目、故實等を註釋したものである。最初に天禧四年に書いた百林の序があり、次いで本文は上巻には姓氏、稱謂、居處、出家、師資、剃髮、法衣、戒法、中食。中巻には禮數、道具、制聽、畏懼、勤懈、三寶、恩孝、界趣、習學。下巻には説聽、躁靜、諍忍、入衆、擇摩、住持、雜紀、瞻病、送終の各卷九篇宛てを納め、各篇の下に於ては故事、名目等を集め、内外の典籍を披きて一々註釋して居る。而して巻末には紫魚金の天聖二年に於ける刊行序がある。(三好鹿雄)

**釋四分戒本序**

①(日)Shaku-shi-bun-kai-hon-jo. (支)Shih-ssü-fen-fen-chieh-jen-tsu. 釋戒本序 ②一卷 ③存、記載一・六三・一 ④宋道言述

①道宣の四分律比丘合注戒本の序文を註釋したるもの。各節に先づ科段を切り後に序文を詳解する。尾題に「四分戒本序釋」とある。撰者は「鄞江道言述」となつてゐる。

**釋四分律含註戒本疏科**

(大野法道) Shaku-shi-bun-risai-gan-cha-kai-hon-sho-kwa. (支)Shih-ssü-fen-ti-tan-eh-chieh-jen-su-ko. 四分律合註戒本疏科 ②二卷 ③存、記載一・六二・二 ④宋元照(慶曆八)政和六 A.D. 1048—1116) ⑤(正大、一一八一・二)

**釋四分律刪補羯磨疏科**

①(日)Shaku-shi-bun-risai-san-po-ki-kom-ma-sho-kwa. (支)Shih-ssü-fen-ti-shan-pu-chi-chieh-mo-su-ko. 四分律刪補疏科 ②二卷 ③存、記載一・六四・三 ④宋元照(慶曆八)政和六 A.D. 1048—1116) ⑤(正大、一一八一・三)

**釋七十五法**

①(日)Shaku-shichi-ju-go-ho. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、二六二・二二)

**釋種間優婆塞經**

①(日)Shaku-shu-mon-u-ba-soku-kyō. (支)Shih-chung-wen-yu-to-sai-chung. ②一卷 ③矢譯 ④雜阿含經第三十三卷の抄出 ⑤(參考)出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

**釋種子經**

①(日)Shaku-shu-ji-kyō. (支)Shih-chung-tzu-ching. 釋種子經 ②一卷 ③缺 ④矢譯 ⑤(參考)出三藏

記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

**釋十如是義**

①(日)Shaku-ju-ni-yo-ze-gi. (支)Shih-shi-ju-shih-i. ②一卷 ③隋智顛(中大通三)開皇一七 A.D. 531—579)述 ④(參考)傳教大師將來台州錄、諸宗章疏錄第一

**釋書寫傳文但缺頭陀集**

①(日)Shaku-sho-sha-wa-tem-mon-tan-kesta-zu-da-shu. ②最澄(神護景雲元)弘仁一三 A.D. 767—822)

①本朝台祖撰述密部書目に曰く「近來本朝僧傳撰釋書、但加三部、如左。顯法華義八卷。新集聖教序三卷。灌頂儀式二卷。高泉所撰傳不出著述」云々。

**釋正度錄**

①(日)Shaku-sho-tei-roku. (支)Shih-cheng-ti-lu. ②一卷 ③缺 ④正度撰

①本錄は釋正度の撰者に係るものであつて、歴代三寶紀卷第十五に「釋正度錄一卷」と記載し、爾後の大唐内典錄、開元錄乃至貞元錄等の諸經錄も皆これと同一の記載をなして居る。けれども其撰述者の年代に就ては諸錄一として之を記述して居るものはない。唯、南北朝期より隋代に至る間に作られたものであることだけは疑ひのないことである。

(參考)三寶紀第一五、内典錄第一〇、開元第一〇、貞元錄第一八 (林屋友次郎)

**釋聖天祕要義**

①(日)Shaku-shō-tai-yō-gi. ②一卷 ③定深(一)天仁元

A.D. 1108)述 (參考)本朝台祖撰述密部書目、諸宗章疏錄第三

**釋淨土群疑論**

①(日)Shaku-ju-do-gun-gi-ron. 群疑論、決疑論 ②七卷 ③存、大正四七・三〇No. 1966(記載二・二二・三、淨土古佚十書第一〇—一一淨土宗全書第六) ④懷感撰 ⑤懷感大成せずして没し、同門の懷憚之を完成せる事序文にあり、然るに憚は唐高宗總章元年(A.D. 668)二十九歳にて出家し、後善導の門に入り師事すること十有餘年、師の妙旨秘傳を傳承すと(常盤大定支那佛教史蹟)あり、之より察すれば善導の入寂永隆二年後即西紀六八〇より憚の入寂西紀七〇一迄の間の大成ならん。

①宋高僧傳には決疑論と稱す。懷感は素法相宗の學者にして後善導に就て念佛を實修し念佛三昧を證得せるを以て、本書は唯識の眼より淨土教義の疑點を解決せしものである。本書は問答體にして壹百二十拾壹個の疑問を解答す、元徳二年四月眞惠の分科によれば十二科百十六章とせり。第一明凡夫所生身土、此下八章。一、總標佛身土。二、別明極樂身土。三、漏無漏。四、三界攝不。五、有漏亦淨。六、淨土有穢。七、安師三句。八、體穢相淨。第二明凡夫能生有相六章。一、有相趣求。二、事理俱生(以上第一卷)。三、世諦往生。四、色觀非邪。五、佛來不來。六、佛名有詮。第三會論相違成凡夫往生二章。一、會通三地。二、會別時意。第四就凡夫往生明其本住處二章。一、五趣往生。二、極樂中有有無。第五就

凡夫往生明增長信心七章。一、諸佛證誠。二、佛具諸願。三、兼知定生。四、不願色界。五、戒感長壽。六、中悔往生。七、不勸此淨土(以上二卷)。第六會經與異說破他謬解亦十二章。一、逆誘除取。二、像末念佛。三、反難三階。四、開遮不同。五、止住百歲。六、十輪減罪。七、念佛五勝(以上三卷)。八、誘法往生。九、當根佛法。十、專難二修。十一、念佛昇沈。十二、念佛除魔。第七兜率西方相對列優劣亦二章。一、二處校量。二、二處同異。第八明得生者業惑起不起亦七章。一、淨土潤生。二、緣生有無。三、諸惑不起。四、俱生惑起。五、生者不退。六、淨穢樂異。七、超障無苦(以上四卷)。第九雜明往生行業種々義亦三十三章。一、空有隨機。二、唯勸西方。三、喜捨受命終。四、念佛長短。五、退位欣淨。六、化女有無。七、不雜結使。八、對治待終。九、淨土速證。十、多勸念佛。十一、諸要不起。十二、五逆不定業。十三、四業攝不。十四、三業攝不。十五、三十勝益。十六、行門非一。十七、淺位求淨。十八、二乘不生。十九、永絕惡趣(以上五卷)。二十、一切衆生不生。二十一、清泰國土。二十二、五通超勝。二十三、分段變易。二十四、極樂無苦。二十五、極樂度苦。二十六、八識三受。二十七、身無戶蟲。二十八、去此不遠。二十九、是心作佛。三十、佛頂見不。三十一、得見諸佛。三十二、生諸佛前。三十三、即見佛心。第十料簡九品位行亦二十三。一、九品生位。二、六信不退。三、中下來不。四、減罪多少。五、開經稱

佛。六、具足十念。七、念佛七勝。八、無上功德。九、一念即生(以上六卷)。十、偏勸彌陀。十一、念佛多善。十二、事理念佛。十三、業成不生。十四、臨終念佛。十五、火運不同。十六、下々念蓮。十七、極樂時劫。十八、華合所因。十九、淨土減罪。二十一、念十念。二十一、損力益能。二十二、舊業更生。二十三、善惡互滅。第十一料簡念佛三昧行相亦十三。一、念佛經證。二、修造次第。三、凡聖皆學。四、通念三身。五、定處見異。六、下愚得定。七、定見難思。八、定境真實。九、知實三昧。十、三昧得益。十一、定覺淺深。十二、信誘損益。十三、開室念佛。第十二料簡投地自撲懺悔最後に心眼見佛を明せり。

⑦〔注釋〕探要記十四卷、道忠、玄譚(寫)。大玄、入流九品考一卷、三階畧記一卷(寫)。九難義(寫)。序解一卷、題綱、貫空。口箋四卷、宣明、撮要義四卷、惠然、考六卷、流慧。序說、立通、懸叙、經歷。

**釋淨土群疑論口義** ①(日)Shaku Jō-do gun-gi ron-kūgi. ②四卷 ③存

④宣明(寬延二)文政四(A.D. 1799-1821)述 ⑤寫本(正大、一五三・二八六)(谷大、宗大、五四八)

**釋淨土群疑論勸說** ①(日)Shaku Jō-do gun-gi ron-kwan-zetsu. ②二冊 (第一、二、三) ③存 ④義龍(元文元)天明二(A.D. 1736-1739) ⑤白筆本(谷大、宗大、一八八四)

**釋淨土群疑論熏聞** ①(日)Shaku

⑥道忠(一弘安四 A.D. 1783)述 ⑦著者乘圓房道忠は、淨土宗總系譜によれば(淨全一九)記主良忠を師として、深く宗源に通じ、又聰慧に従つて俱舍天台を習ひ、蓮乘に就て法相を練り、探要記十四卷を造り、群疑論を釋すとありて、唯識の教理に明るき上、淨土の宗源に通ぜしを以て、群疑論の末註としては白眉である。十四卷中第一二三卷は論の第一卷を、第四五は論第二を、第六七は論第三を、第八九は論第四を、第十十一は論第五を、第十二十三は論第六を、第十四卷は論第七卷を註釋せるもの。

⑦〔注釋〕考六卷(寫)。抄畧。立道。〔參考〕淨土眞宗教典志第三 ⑧寬永一刊(谷大、宗大・二九)寬永二刊(正大・一五三・二七三・二七四)(龍大、二〇三・二七三) ⑨寫本(谷大、宗大、一〇三) ⑩十四卷 ⑪存 ⑫寫本(谷大、宗大、一〇三)

**釋淨土群疑論探要記考** ①(日)Shaku Jō-do gun-gi ron-tann-yō-ki-ka. ②十四卷 ③存 ④寫本(谷大、宗大、一〇三)

**釋淨土群疑論補闕錄** ①(日)Shaku Jō-do gun-gi ron-ho-keisu-roku. ②一卷 ③存 ④延享三寫 ⑤谷大、宗大、二六二〇

**釋淨土二藏義** ①(日)Shaku Jō-do ni-in-gō gi. 釋淨土二藏頌義、頌義 ②三十卷 ③存、淨土宗全書第一二 ④聖阿(曆應四)應永二七(A.D. 1341-1350)撰 ⑤至德三(A.D. 1386)

⑥淨土宗第三祖記主滅後約百年間は淨土一宗の學風諸宗の間に振はず。特に禪門の學風盛んなるに影響せられ且つまた當時の社會風潮に感化されて淨教を蔑視する傾向が

存 ③沖默(寶曆五 A.D. 1735)口説、圓隨誌 ④寫本(正大、一五三・二八〇)

**釋淨土群疑論玄譚** ①(日)Shaku Jō-do gun-gi ron-gen-dan. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一五三・三三三)

**釋淨土群疑論考** ①(日)Shaku Jō-do gun-gi ron-ko. ②六卷 ③存 ④流慧(延寶五)寬延元 A.D. 1677-1748 ⑤寶曆一〇寫 ⑥龍大、二六八・七四

**釋淨土群疑論撮要義** ①(日)Shaku Jō-do gun-gi ron-takusa-yō-gi. ②四卷 ③存 ④惠然(元祿六一)明和元 A.D. 1693-1764 述 ⑤參考 ⑥淨土眞宗教典志第二 ⑦日筆本(谷大、宗大、二〇)

**釋淨土群疑論序解** ①(日)Shaku Jō-do gun-gi ron-jo-gi. ②一卷 ③存 ④龍大、二六八・七五

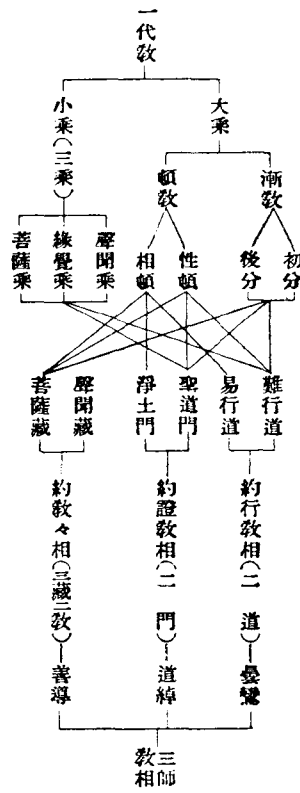
**釋淨土群疑論鈔** ①(日)Shaku Jō-do gun-gi ron-shō. ②二十五卷 ③缺 ④悟阿(一弘安六 A.D. 1783)作 ⑤參考 ⑥淨土眞宗教典志第三

**釋淨土群疑論題綱** ①(日)Shaku Jō-do gun-gi ron-dai-kō. ③存、遊學題綱雜林之内 ④貫空 ⑤享和元刊 ⑥龍大、二〇三・六二)

**釋淨土群疑論探要記** ①(日)Shaku Jō-do gun-gi ron-tann-yō-ki. 群疑論探要記 ②十四卷 ③存、淨土宗全書第六 ④道忠(一弘安四 A.D. 1783)述 ⑤著者乘圓房道忠は、淨土宗總系譜によれば(淨全一九)記主良忠を師として、深く宗

あつた。此に於て阿師は此等の鋭鋒論難を破折し以て淨土の宗幢を振興し宗徒を覺醒する爲め數多の著作を公にして淨土一宗の地位を闡明にした。而してその代表的著作が本書にして、自著の淨土二藏二教略頌一卷を詳釋し、弟子聖聰に授與せるものであ

る。先づ本頌の題號に淨土二藏二教略頌とあるに對して本書に釋淨土二藏義と命題する由來を會通し、更に本書所立の教相(二藏二教)は菩提流支の麒麟聖財立宗論に基調せる旨を明し、宗祖の建解法語を借來して



今本書一部の分科大綱を見るに第一卷より第十卷に亘つて聖道門を説明してある。〔別表参照〕即ち一代聖教を小乘大乘の二に分科し小乘種に聲聞、緣覺、菩薩の行位因果、斷惑證理の次第を説き、大乘種の中に漸教、頓教の二教を分科して大乘の斷惑證理入聖得果を明してある。大體阿師は本書中に小乘種を三乘義として標示し、頌に「聲聞藏中有三乘」聲聞緣覺及菩薩。如是因業離差。三人同入一解脫」と云ふ旨を述べ一括して聲聞藏と名付け第一卷より第六卷

相傳の義に背違せざる旨を立證してある。即ち本宗の教相は宗祖以來専ら聖淨二門、難易二道を採用したるに本書には三師教相と標題し偏依善導の立脚地にあるを以て、善導の釋義の教相たるべきことを提唱し、二藏の義を擧示して二道二門に對配せしめてある。即ち頌に「難行易行是二道、聖道淨土是二門」聲聞菩薩是二藏、一代教門此攝盡」と云ふのがそれで、本書には此の釋下に依教分宗、依宗教別の義を擧釋し以て三師教相の一代を攝盡する消息を詳にしてゐる。今圖示すれば

に亘つて詳細に施釋してゐる。次に大乘中の漸教に初分と後分を分別し、前者を大乘通教に配し、後者を大乘別教に當てゐる。中に於て初分教義は頌に「初分教中有三十地、開則亦爲三十地」獨覺菩薩及佛地是名三乘共十地」と云々と第七卷に問答料簡して、初分教の名義、行相の解釋を出してゐる。又聲聞藏の菩薩と利他の行に於て先の別ある旨を論述し機根并に利他行に勝劣のあることを明してゐる。後分教義は本書第七卷に亘つて説述され頌の「後分大

乘純菩薩、六位六十有一地、信相發趣及長養、金剛十聖並妙覺」がこれにして漸教中の甚深、地上の菩薩の觀見する佛身を報身と判じ、斷惑證理に關しては俗諦恒沙の法門を談ずる故に機類萬行、斷證萬別なれば天台の別教に配當する旨を問答料簡してゐる。次に頓教中に性頓、相頓を分別し性頓は實大乘たる華嚴、天台、眞言、禪を指擧し相頓は所謂淨土門にして正しく本書の主眼とする所であると述べてゐる。中に於て性頓教義は第八卷より第十卷に亘つて論述し、頌に「頓教之中亦有二、性相再頓理事別」性頓立位借後分、三賢十地假名立據實而論不立位、不修不行證眞如、眞如有二空色是、三世一念無差別、教主即是受用身、具足多身無邊身、極微塵中華藏界、具足多身無邊身」云々と云ひ、初めの一頌は性頓立位の相を示し、次の一頌は性頓不立位を示し、後の一頌は教主の相を示し麒麟聖財論を引用して性相兩頓を細釋し五法、三性、八識、二無我等の法相を排斥して善導の釋義文を引證し以て性頓教も末機には難行難證にして有教無人なる旨を指摘し前の聲聞藏、初分後分の大乗と共に一括して此土入聖自力難行道と開捨し、唯淨土一門のみ諸宗超過、最上至極の一乘法なるを高調してゐる。更に問答を設けて天台、眞言、禪等の妄計を難破し淨土の宗義を顯彰してゐる。次に相頓教とは性頓教の一乘を機情の一乘と云ふに對し相頓の一乘を佛意の一乘なりとし、正しく淨土門に該當し、本書第一卷より終り第三十卷に亘

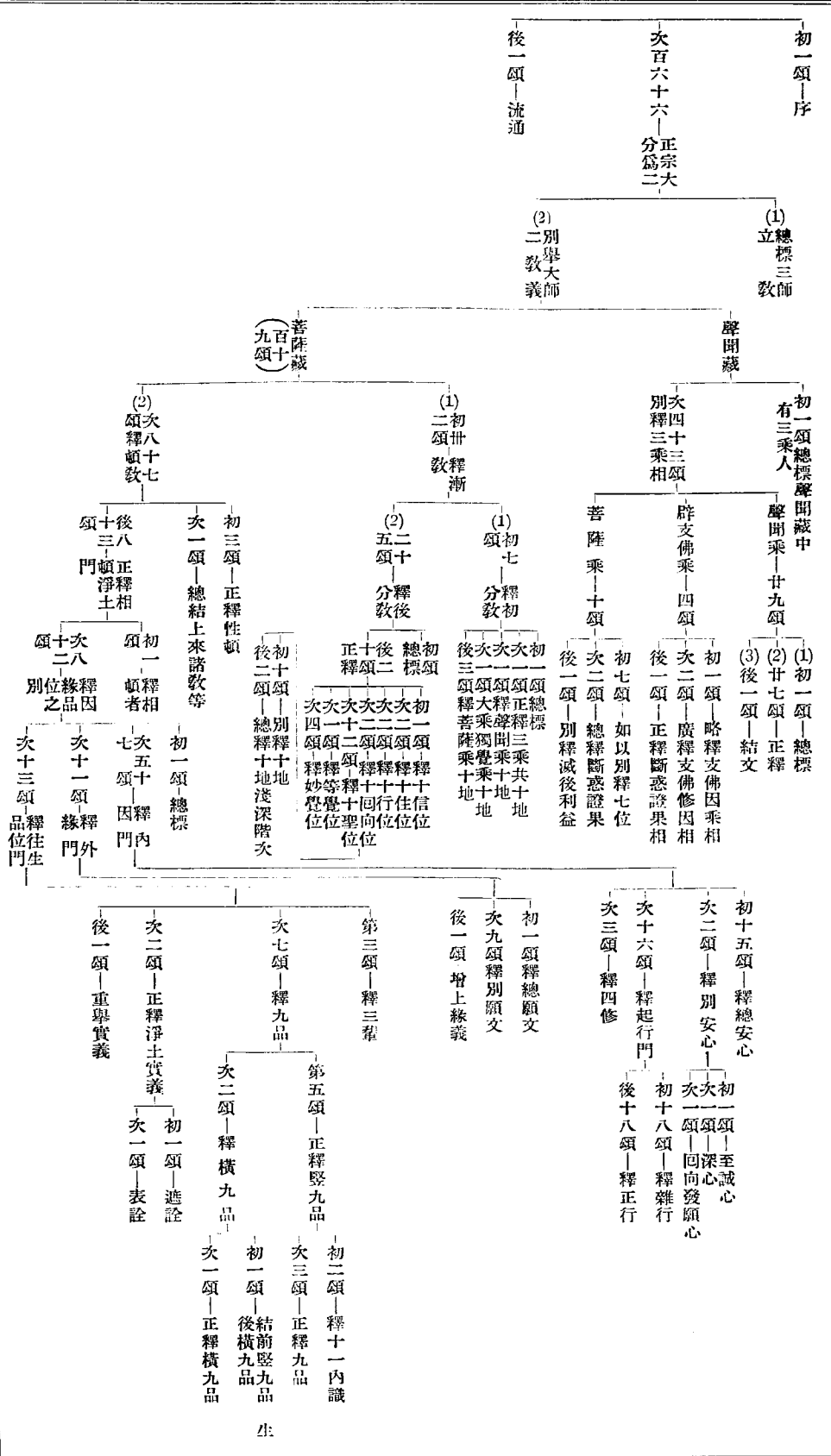
つて釋明してゐる。先づ頌に「相頓即易行道。往生無生淨土門。他力祕術佛意教即相不退頓中頓」の文を引舉し此の四句に相關連して九義を轉成してゐる。即ち(1)相頓教なるが故に易行道なり、(2)易行道なる故に往生を得るなり、(3)往生を得れば速に無生を得る、(4)無生は即ち淨土門なり、(5)淨土門は即ち是他力の祕術なり、(6)所謂他力なり佛意の教なり、(7)佛意の教なるが故に即相不退なり、(8)即相不退なるを頓中頓と名付く、(9)頓中頓の故に即是相頓なり、云々と相頓の義意を釋盡してゐる。阿師は本書に總じて八十三頌を作て相頓の義理を釋す而して相頓義に説く科目すこぶる多きも總括して三門を出でないと云ふ、即ち内因、外緣、品位の三である。而して此の三門の中に數多の義理を明し本書第十一より終卷に渡つて釋明してある。(1)内因は頌義第十一より第二十一に亘つて行者の修すべき安心、起行、作業の法門を擧げてゐる。安心に總別の二を分判し起行に正雜二行を分別し、雜行に世戒福の三福、正行に五正行と五念門と一行三昧を配釋して慧縛導空の義を引釋してゐる。作業に恭敬修等の四修を擧げて大小乘論部祖釋等の文を釋解してゐる。(2)外緣とは頌義第二十一より第二十七に渡るもので總別二種の佛願力を擧げ、總願は四弘誓願、三念願力を出し、別願は四十八願にして攝法身、攝淨土、攝衆生の三に分別し五種増上緣の義を釋述してゐる。(3)品位とは頌義第二十七より第三十に渡るもので三聖九品を指し内因、外緣の因緣和

合して得る所の往生の結果を云ふ。三輩は大經により九品は觀經によりて詳に横縦を分別し、最後に淨土實義を示して三輩九品は往生の場合に従て上中下の差別あるも

畢竟して所詮の教説なれば因順餘方、娑婆教説に過ぎずして淨土實義の邊よりは全分彌陀智願海より出る故に全く無量品なる旨を示す、更に無生而生の修行を説き往生を

得ると雖も不往生に違せず、理を以て融すべからず、事を融して事を得ず事理俱頓は唯淨土眞宗のみと結んでゐる。而して此の相頓の義は四個の概念に總攝せられる旨を

出す、即ち實體、化用、教門、實義がそれである。實體とは眞實の法體の義にして彌陀の實智を云ふ。化用とは教化力用の義にして彌陀の權智を指し、教門とは釋迦の教



名所行發 (名庫書) 者藏所現 (1) 月年の刊 (2) (書考參書釋註) 書末 (3) 説解容内 (4) 代年作者 (5) 著者 (6) 缺存 (7) 数卷 (8) (名書) 名題 (9) 略略字數

説を云ひ、實義とは眞實の道理の義にして一如の理をいふ。此の四義の證據は大原談義に明示してある所より推察すると阿師の相頓致義は財論に依ると云ふよりむしろ大原談義によると云ふべきである。斯く考察するに阿師の相頓一乘を高調する所由の思想は草提の往生を樂求したに對して無生を示したるを見て生に即して無生、所謂即相不退、理事縱横、頓中頓の佛智の一事に在る事を見出し得るのである。是阿師當時の教界を風靡したる聖道の頓に對して、淨土の頓を高唱するに相頓を以てし、且つその相も單なる性相對判による相にあらざりて、全く他力難思による即相無相、格外別風の相なる所由を明示して當時の教外別傳を誇りし禪風を一蹴して佛智一乘の深旨を高明し以て本宗の真義を闡明發揮したものである。

要之本書は宗祖以來の高判の上に二藏二教の教相を主として組織的に一代聖教を判釋して一宗の要義を概括分明ならしめ、以て宗義の完璧を期したものと云ふべきである。徳川時代において各檀林に於て宗乘の科として課し盛んに研究講説せられたものである。以て本書の價值を知ることが出来る。略頌と本書との内容關係を圖示すれば前圖(一九頁)の如し。

●二藏頌義見聞(八卷、淨全十二)聖阿、頌義本末不審請決(一卷、淨全十二)聖聰、頌義探玄鈔(三卷、淨全十二)大玄、淨土略名目圖見聞(二卷、淨全十二)聖阿、淨土二藏綱維義(一卷、淨全十二)聖聰、心具決定往生義

(一卷、淨全十二)聖阿、教相十八通(二卷、淨全十二)聖阿、頌義見聞(十卷)祐崇、淨土略名目圖見聞講話(三卷)壽隆、淨土略名目圖集注(六卷)南信、二藏義引文私考(三卷)知聞、頌義拔(二十卷或百卷)雲臥、頌義照應底本(四十八卷)雲臥、頌義頌文大書拔(缺八卷)二藏頌義見聞(三十八卷)雲臥、二藏義綱要(十卷)玄信、二藏義批判(四卷)、二藏義序(一卷)虎角、奪退鈔(五卷、淨全十)妙瑞、二藏義引文簡釋考、雲臥

④寛永七刊(立大、A三〇・四五)(正大、一五五・八一)寛永九刊(正大、一五五・八一・八二・八四)(京大、一・二六・七二)慶安四刊(龍大、二六八四・四一)安政四刊(正大、一五五一・九七)京大、一・二六・七二・一〇四 (森本眞順)

釋淨土二藏義引文私考 ①(日)Shaku Jo-do ni zo gi-in mon-shi-ko

二卷 ④存 ④潮音 ④元祿一一刊 ④(龍大、二六八四・四九)

釋淨土二藏義卷首拔抽 ①(日)Shaku Jo-do ni zo gi-kan-shu-bac-chi

②五卷 ④存 ④寛文一二刊 ④龍大、二六八四・四五

釋淨土二藏義見聞 ①(日)Shaku Jo-do ni zo gi-kan mon

②八卷 ④存、淨土宗全書第二二 ④聖阿(麻應四一應永二七 A.D. 1341-1420)述 ⑤二藏義見聞の下を見よ。④寛永七刊 ④(龍大、二六八四・四一四七)(谷大、宗大、一七三)

釋淨土二藏義講要 ①(日)Shaku Jo-do ni zo gi-kan mon

③文久元寫 ④(正大、一五五一・二四一) ⑤元祿一〇刊(龍大、二六八四・五〇)天和二刊(龍大、二六八四・五一)

釋淨土二藏頌義 ①(日)Shaku Jo-do ni zo gi-kan mon

十卷 ④存、淨土宗全書第二二 ④聖阿(麻應四一應永二七 A.D. 1341-1420)述 ④釋淨土二藏義の下を見よ。④寛永七刊(正大、一五五一・七八一七九)(立大、A三〇・四八)(帝國、二一〇・一七三)寛永九刊(正大、一五五・八八)慶安四刊(正大、一五五・八五・九八)(谷大、宗大・一七二)安政四刊(正大、一五五一・九二、九六)

釋淨土二藏頌義見聞 ①(日)Shaku Jo-do ni zo gi-kan mon

④存 ④聖阿(麻應四一應永二七 A.D. 1341-1420)撰 ④寛永七刊(正大、一五五一・一一・一一一五)安政四刊(高、寄、一・一八)(正大、一五五一・一〇九、一一七)

釋淨土二藏頌義所引經律論章錄 ①(日)Shaku Jo-do ni zo gi-kan mon

④存 ④潮音錄 ④元祿一一刊 ④正大、一五五一・二四八

釋淨土二藏頌義序註 ①(日)Shaku Jo-do ni zo gi-kan mon

④存 ④科解釋淨土二藏頌義序註 ②一卷 ④存 ④安譽述 ④貞享元刊 ④龍大、二六八四・五二

釋肇序 ①(日)Shaku Jo-do ni zo gi-kan mon

①Chao-Ishu. ②一卷 ③存、大正八五・四三八 No. 2776 ④唐體清(一太曆頃 A.D. 756-779)記

④本書はスタイン氏蒐集の燉煌出土古寫本で、大英博物館の所蔵にかゝる。此の書は鳩摩羅什(A.D. 344-413)門下四折の隨一、僧肇(A.D. 384-414)が、師羅什の譯した維摩詰所說經三卷に關する註釋書、註維摩詰經十卷の序文で、出三藏記集第八(大正五五・五八頁上)に別出されてゐるものだが、これを中唐代宗の太曆二年(寫本に大曆二年とあるは誤寫乎)A.D. 767春正月に、崇福寺沙門體清が註解したものである。

本書殘卷一部分の内容は釋肇序略分四以下第二段、別して教興分を辯ずる内、本迹不思議の部分、序文でいへば半分より少し以下で「然則闢難ノ啓理應不同。非本無以垂迹。非迹無以顯本。本迹雖殊而不思議一也」の所より初まつて「庶將來君子異世同聞」の終末まで釋してゐる。尙跋記に全體の註分科表が出てゐるので、缺佚せる部分が如何様に釋せられたかを推知することが出来る上、のみならず、羅什、僧肇研究の一資料をなすものである。

釋籤 ①(日)Shaku sen

法華玄義釋籤、玄義釋籤 ②十卷或二十卷 ④存、大正三三・八一五 No. 1717、縮出107E三・一八一〇、明本1538多士、明南1520更翻、Nj. 1335 ④湛然(景雲



二一建中三A. D. 711—782)述 ⑤唐廣德二 (A. D. 764)

釋籤緣起序

①(日) Shuku-sen-en-  
gi-jo. (支) Shih-chien-yuan-chi-hsi. ②

一卷 ③存、法華玄義釋籤(大正三三・八一  
五No. 1717)之内 ④普門子(景龍三一貞元  
八A. D. 709—792)詞 ⑤〔參考〕傳教大師  
將來越州錄

釋籤緣起序勸文

①(日) Shuku-sen-  
en-gi-jo-kam-mon. ②一册 ③存 ④

釋籤弘決序句分

①(日) Shuku-sen-  
gi-keisu-jo-ku-jun. ②一卷 ③存 ④

快倫撰

⑤寬永一三寫 ⑥(真如藏)

釋禪次第法門

①(日) Shuku-zen-  
shi-dai-jo-mon. (支) Shih-ch'uan-tz'u-ti-fa-  
men. ②一卷 ③法寶述 ④〔參考〕東

域傳燈目錄卷一

釋禪波羅蜜次第法門

①(日) Sha-  
ku-zen-ha-ra-mitsu-shi-dai-jo-mon. (支) Shih-  
ch'uan-tz'u-ti-fa-men. ②十

次第禪門、禪波羅蜜法門、釋禪波羅蜜 ③十  
卷或十二卷 ④存、大正四六・四六二No.  
1916、縮陽八、己三三・六、明北1564煩、  
明南1552刑、己1571 ⑤隋智顛(中大通  
三一開皇一七A. D. 531—597)說、法慎記  
(灌頂再治)

⑥本書に就いて摩訶止觀及輔行には下の如  
き説を述べてゐる。「天台大師智顛が南岳  
大師慧思の下に居つた時に南岳大師から三  
種止觀を傳へた。三種止觀とは漸次止觀・  
不定止觀・圓頓止觀である。(摩訶止觀會本

一之ノ一ノ三六以下)この三種止觀の文は次  
第禪門・六妙門・摩訶止觀である(摩訶止觀  
會本一之ノ一ノ三一)。次第禪門は漸次止觀を  
述べたものであると。(同上二之ノ一ノ三一。  
一之ノ一ノ三四)この説は「天台傳・南岳三止  
觀云云」とある止觀の本文の意によつた  
もの。然るに六祖荆溪湛然が輔行(一之ノ  
一ノ三四)に止觀相承所謂九師相承説を叙す  
る下で、第八師の慧思は隨自意・安樂行の  
中に述べた義を多く用ひ、第九師の智顛は  
次第止觀(漸次止觀)を用ゆる際には次第禪門  
に説いてゐるような説を用ひ、不定止觀を用  
ゆる際は六妙門に説いてゐるような説を用  
ひ、圓頓止觀を用ゆる際は六止觀(摩訶止觀)  
に説いてゐるような説を用ひ。これによつ  
て考ふるに從來九師相承といはれてゐるけ  
れども、法門が師々互に改轉し、一々前後  
一貫したものがあつたとは思へない。慧文・  
慧思・天台は皆大論に依つてゐるから相承  
といへるが、其他の諸師は相承ではない」と  
と、荆溪の説によつて考へるならば南岳・  
天台は龍樹の大論によるから思想上相承と  
云はれるが、法門は改轉してゐるのである  
といふ説であると認められる。六祖の輔行  
の文を一般に寫瓶相承の如く師師互傳、  
先師も弟子も其説全同なりと認めてゐる。  
然し六祖の文は法門改轉を重視したものと  
思ふ。若しこの予の推考の如しとすれば、  
南岳の法門と天台の法門とは無關係でも反  
對でもないが全同ではない。法門が改轉し  
たものであるといふべきである。六祖の考  
へでは天台の法門は南岳の法門以上に位す

釋

ると云ひたい位だと思はれる。其の所以は  
摩訶止觀一之ノ一ノ三一の輔行の文で知られ  
る。「次第禪門等は目錄に云く。大師は金  
陵(江蘇省江寧縣南)瓦官寺で陳の大建三  
年(A. D. 571)説つたもの。金陵大莊嚴寺  
の法慎(傳は佛祖統紀九)が私に初分を記  
した。法慎は未だ治定しなかつた。彼は草  
本三十卷が初めて成るやこれを天台山の灌  
頂に傳與した(統紀の法慎傳には尙未・修  
治・不幸入滅とある)。灌頂はこの三十卷本  
を治定して十卷にした。陳主も亦會つて南  
岳大師を請じて、大品般若經を誦せよと申  
された。南岳大師の口はるには夏内を通  
して誦しても畢らぬであらうと。それなら  
ば六度を説き給へと。六度でもまだ廣いと  
申して、且らく禪度だけを説かれた。然し  
この南岳の説は筆録が傳つてゐない。今の  
天台大師の釋禪波羅蜜次第法門は開いて十  
章とする。大意、釋名、明門、詮次、心法、  
方便、修證、果報、起教、歸趣がそれ、但  
し第七修證までは記したが、餘の三は略し  
て記してない。修證の中を四分し、第三の  
出世間禪の下の對治無漏で終つて仕舞ひ、  
其後は略して記さない。若し灌頂が續けて  
記すならば今の十卷の三倍、三十卷となる  
であらう。天台大師別傳に曰く、大師が嘗  
つて高座に居られながら云はるるようは、  
若し次第禪門を説くこと、年別一編(毎年  
通じて?)し、若しこの講演を章疏に著作  
すれば五十卷にはなるであらうと。別傳は  
章安大師灌頂が撰述したもので、目錄はこれ  
山衆が共に記したものであると。卷の或は

大或は小、不同であつても何の妨げとはな  
らない(止觀會本一之ノ一ノ三一)と。この  
六祖の説によれば本書は天台大師の禪觀を  
記したもので南岳大師の説を祖述したとは  
見られない。つまり法門が改轉したと見る  
べきである。明の萬曆十八年(A. D. 1590)  
に印刷するに際し道梅沙彌が卷初に大科を  
附し、學者の通覽に便宜を與へてゐる。今  
この科を掲げ、略して本書の内容を示すこ  
ととする。

○第一卷—十六章。初修禪波羅蜜大意。二、  
釋禪波羅蜜名。三、明禪波羅蜜門。四、辨  
禪波羅蜜詮次。五、簡禪波羅蜜法心。

○第二卷—六、分別禪波羅蜜前方便二。初  
外方便。

○第三卷—二内方便二。初正明因止發内外  
善根。

○第四卷—二明驗慧根性。

○第五卷—七、釋禪波羅蜜修證四。初修證  
世間禪相三。初四禪。

○第六卷—二四無量心。三四無色定。

○第七卷—二修證亦世間亦出世間禪相三。  
初六妙門。二十六特勝。

○第八卷—三通明。

○第九卷—三修證出世間禪相二。初對治無  
漏九。觀(壞法)：初九想。二八念。三十想。

○第十卷—觀(不壞法)：四八背捨。五八勝  
處。六十一切處。…鍊…七九次第定。…薰…  
八師子奮迅三昧。…修…九超越三昧、  
○(不説)一緣理無漏。

四修證非世間非出世間禪相。

八、顯示禪波羅蜜果報。九、從禪波

羅蜜起教。十、結會禪波羅蜜歸趣。要するに本書は天台大師前半生教學を知らんとする者の必讀書の一。本書には小止觀の文と同一なる文がある。然らば小止觀は大師の親撰なりや否や。章安が修治したものではなからうか等の問題が起る。更に可考。

⑦〔参考〕天台大師別傳。摩訶止觀輔行一之一。一之三。內典錄第一〇(大正五ノ三三二)。佛祖統紀第六(大正四九ノ一八五)。同上第二五。⑧萬曆一八刊。⑨(龍大、二六五・二〇六)(駒大)(高大、寄・一・一五、寄・一・二四)(立大、A一・二九四)(田島德音)

釋宗演全集 ①(日)Shaku-zen-zen-shu. ②一卷 ③存 ④宗演(大正八A.1.1919) ⑤昭和四刊

釋宗演禪師講話 ①(日)Shaku-sen-zen-shu. ②一卷 ③存 ④宗演(大正八A.1.1919)述、桐和會編 ⑤〔参考〕禪籍目錄

釋僧叡二秦錄 ①(日)Shaku-sō-ō-ni-shin-tohō. (文)Shin-sōng-jū-eh-ān-ju. 後秦沙門釋僧叡二秦錄、二秦錄、僧叡錄 ②一卷 ③缺 ④僧叡撰 ⑤姚秦弘始年間(A.1.400—415)

⑥具さには後秦沙門釋僧叡二秦錄と云ひ、略して單に二秦錄又は僧叡錄とも云ふ。前者は撰輯の年時に依る、後者はその撰述者の名前に依つて命名したものに外ならぬ。本録は姚秦の弘始年中の撰述に依り、歷代三寶紀卷第八に「二秦衆經錄目一卷、

釋門釋僧叡撰」と云ひ、同錄卷第十五に「釋僧叡二秦錄一卷後秦」と出してをるものが即ちこれである。爾後の諸經錄も皆これと同一の説明をなしてをる。これ等の現存諸經錄に徴して本録の内容を想像して見るに、符秦の曇摩闍、僧伽提婆、曇摩難提、姚秦の竺佛念、鳩摩羅什、佛陀耶舍、乃至北涼の曇無讖等諸譯經三藏の所譯に係る諸經論等を記載してをつたもの、如く且つ、此等の諸三藏の所譯に關する限り、極めて權威あつたものらしい。蓋し、このことは本録撰著者の僧叡の人となりと同じたものであらう。

⑦〔参考〕三寶紀第八、第一五、內典錄第一〇、開元錄第一〇、貞元錄第一八 (林屋友次郎)

釋尊 ①(日)Shaku-son. ②一卷 ③存 ④向上會編 ⑤明治三九刊 ⑥(帝國、三三・四七九)

釋尊應世編年略譜 ①(日)Shaku-son-o-sei-hen-nen-rakki-hu. ②一卷 ③存 ④忍淨編 ⑤文化一四刊 ⑥(龍大、研史)(哲・四・右・一七)(正大、一〇三四・八)

釋尊及び其救濟 ①(日)Shaku-son-oyobi-sono-kyū-sai. ②一卷 ③存 ④山邊習學者 ⑤大正一一刊 ⑥(谷大、餘洋・五三〇)(龍大、二〇九九・一六七)

釋尊御舍利義記 ①(日)Shaku-son-on-shū-ri-gi. ②一卷 ③存、弘法大師全集第一四 ④(利記) ⑤存、弘法大師全集第一四 ⑥(偽作部)

⑦舍利の功德、壞不壞の事、名號不同、眞偽知り難き事、志求驗ある事、眞實佛舍利に四種ある事、三國相承等を説く。空海作と稱すれども文辭拙劣にしてその偽作たること明かである。弘法大師年譜第九參照。

⑧足利時代寫(寶龜院)寫本(正大、一〇五・三八)(谷大、余大・二〇六七、一三三〇・三七一〇) (吉祥眞雄)

釋尊から親鸞へ ①(日)Shaku-son-keru-shin-ran-e. ②一卷 ③存 ④大谷尊由著 ⑤大正一一刊 ⑥大阪毎日新聞社

釋尊教團の叛逆者 ①(日)Shaku-son-kyō-dan-no-han-gyaku-sha. ②一卷 ③存 ④山邊習學者 ⑤昭和三刊 ⑥(谷大)(龍大)

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-son-go-tō-gyō-den-rinshi. ②一卷 ③存 ④小室重弘編 ⑤明治三六刊 ⑥(正大、一〇三四・一七)(谷大、餘洋・三九八)(龍大、九九二・六)(京大、一一〇〇・六)

釋尊御遺形奉迎紀要 ①(日)Shaku-son-go-tō-gyō-ho-sei-ki-yō. ②一卷 ③存 ④葦名信光記 ⑤明治三五刊 ⑥(龍大、二九九六・二)(帝國、一〇〇・四九)

釋尊寺舊記 ①(日)Shaku-son-ji-ki. ②一卷 ③存、綴群書類從第一 ④伊勢二所皇太后宮領國釋尊寺の舊記にして建久、正安、延慶、應長、延元年間の事を輯む。

釋尊出世本懷記 ①(日)Shaku-son-shū-shō-hon-gwaiki. ②〔参考〕淨土眞宗聖教目錄

釋尊說法圖 ①(日)Shaku-son-seppō-zu. (支)Shin-tsun-shūo-fa-tu. ②一卷 ③存 ④光緒一二刊 ⑤(龍大、別置)

釋尊傳 ①(日)Shaku-son-den. ②一卷 ③存 ④同教邊著 ⑤昭和四刊 ⑥(立大、B一六・一一三)

釋尊及其宗教 ①(日)Shaku-son-to-sono-shū-kyō. ②一卷 ③存 ④常盤大定著 ⑤大正一四刊 ⑥(高大、一一二)

釋尊と其弟子達 ①(日)Shaku-son-to-sono-de-shi-tachi. ②二卷 ③存 ④山邊習學者 ⑤昭和四刊 ⑥東京春秋社

釋尊の教 ①(日)Shaku-son-no-oshie. ②一卷 ③存 ④富士川游著 ⑤昭和七刊 ⑥東京中山文化研究所

釋尊の研究 ①(日)Shaku-son-no-ken-kyū. ②一卷 ③存 ④羽淡了著 ⑤明治四三刊 ⑥東京丙午出版社

釋尊の新研究 ①(日)Shaku-son-no-shin-ken-kyū. ②一卷 ③存 ④飯塚哲英著 ⑤大正一〇刊 ⑥(高大、寄・一・二一)

釋尊の八相成道 ①(日)Shaku-son-no-hachō-jō-dō. ②一卷 ③存 ④本多

名所行發⑩(名庫書)書處所現⑪月年の刊載⑫(書考參書釋註)書末⑬説解容内⑭代年作者⑮著者⑯缺存⑰數卷⑱(名書)名題⑲號略字數

日生(昭和六A.D.1931)著 ③大正八刊  
④立大、B〇八・四三) ⑤京都村上書店

釋尊八相記 ①(日)Shakuron-his.  
so-ku. ②(参考) 淨土真宗學教目錄

釋尊物語 ①(日)Shakuron mono-  
gatai. ②一卷 ③存 ④ク・アルベース著、  
本田無外譯 ⑤明治四二刊 ⑥(谷大餘

洋・二五六)(京大、一・二二・四七)  
釋尊より西山國師へ ①(日)Shaku-  
ku-son-yo-ri-kei-zan-koku-shi-e. ②一  
卷 ③存 ④原田玄祐著 ⑤昭和二刊 ⑥

(龍大)  
釋尊影響仁王經祕法 ①(日)Shaku-  
ku-son-yo-to-nin-no-na-yo-hiko. 釋尊影  
響仁王祕法 ②八卷 ③存、大日本佛教全  
書第六 ④良助親王(文永五—文保二、  
1268-1318)

⑤本書は釋尊影響告勅祕録七二卷によつて  
仁王經を大意、講題名、入文判釋の三重に分  
けて釋し、入文判釋では各品毎に來意、釋  
品名、入文判釋の三段に分けて解釋したも  
の。釋尊影響告勅祕録なるものは「日本不  
知祕法也」と良助座主が記してゐる。何故  
に日本では知られてゐない祕法書であるか  
といふに本書卷末に「この釋尊影響仁王經  
祕法のこととは、日本では予の外には上古の  
大師先徳でも知ることのなかつたものであ  
る。其故は予の養父西園寺太政大臣實兼  
(正安元年A.D.1299 出家、五十一歳)が三  
千五兩の金を投じ、鹿島の淨行千葉道源を  
遣唐使として異朝に遣した。異朝の天子大  
元王萬臣將軍を勅使として國清寺の大藏を

打ち開き、隋の煬帝勅封の釋尊影響告勅祕  
録七二卷の御書を切り解き、本朝に送つた。  
乃至、龜山院第二跡前天台座主無品親王良  
助筆下。」と良助親王が自記してゐる。年代  
は明かではないが後宇多天皇、伏見天皇の  
御宇に遣使が元へ往復したらしい。此時に  
新に輸入した祕法書であるから日本不知と  
いふのである。そして釋尊影響告勅とは本  
書四卷二品目に「天台山上花頂峯で陳の  
大建七年秋九月二十五日の夜、天台智顛禪  
師は第六天の魔王を降した。明星漸く出づ  
るころ、長げ丈六、頂には金光を戴いてゐ  
る神僧が虚空に影響した。漢と見れば教主  
釋尊であつた。大梵が被音を以て告げて云  
く、汝今第六天魔王を降伏した。昔我れ釋  
迦牟尼佛が成道の時魔王を降伏した外に  
は、未だ天魔波旬を降伏した者はない。汝  
今や勇者たるべきものとなつたと、歎じ已  
つて、仁王の眞俗二諦を説いた。其の影響  
釋尊が説いて言はるゝようは、過去七佛出  
世の大事は眞俗二諦である。乃至、汝今眞  
諦の法性を悟り、天魔を降伏したから讚歎  
せんと欲し、常在樂山不毀の宮から遙かに  
影響したと云云」又五卷の護國品には「天  
台は窟の巖に座してゐたときに釋尊が影響  
し」仁王護國の義を問答した。これが良  
助の所謂大唐新輸入の祕録といふものであ  
る。良助の傳は明かでないが、龜山天皇の  
第二王子で叡山に登り、尊助の門下となり、  
入室受法灌頂し、永仁七年(A.D.1296)天  
台座主に任じ治山三ヶ年。後大和國多武峯  
に退居し、還俗して優婆塞となり、三大部

五大章疏等に註書を撰述された。本書等は  
皆俗人となつてからの抄記である。良助の  
作は皆神祕的口傳祕訣である。本書も其  
の一。釋尊影響告勅も恐らく假託書であつ  
て支那撰述ではない。思ふに本書は良助若  
しくは良助門下が禪宗の影響を受け、顯密  
禪一致の立場から記したものであらう。故  
に告勅も假託書で支那から輸入した書籍で  
はあるまい。本書の序正流通の一經三分法  
は良貴疏・法藏の疏等に依り、天台の仁王  
經疏には依つてゐない。これで見ても知ら  
る如く本書は良助の手にあつた書によつ  
て記し、其他は良助の見識で適宜に解釋し  
たものであることが知られる。良助は日蓮  
上人時代の人。其の説も日蓮風な點がある  
ように思はれる。本書によつて鎌倉時代の  
天台學風特に多武峯の學風が推知し得られ  
るから天台教學史研究上の好資料の一。

釋尊影響仁王祕法 ①(日)Shaku-  
son-yo-to-nin-no-hiko. 釋尊影響仁王經  
祕法 ②八卷 ③存、大日本佛教全書第  
六 ④良助(文永五—文保二A.D.1268—  
1318)記 ⑤寫本(龍大、研佛)

釋大樂金剛薩埵五祕密口訣 ①(日)Shaku-dai-  
rai-kyō-gō-kōng-gō-kyō-gō. 釋大樂金剛薩埵五  
祕密口訣 ②一卷 ③存、大日本佛教全書第  
一〇卷 ④金剛三藏釋 ⑤(参考) 書寫請來法  
門等目錄

釋提桓因詣目連放光經 ①(日)  
Shaku-dai-kan-in-kei-moku-ren-to-ko-  
gyō. 釋提桓因詣目連放光經 ②一卷 ③失譯 ④雜阿  
含經第十九卷 ⑤(參考) 出三藏記第四、  
法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第  
四、開元錄第一六、貞元錄第二六

釋提桓因所問經 ①(日)Shaku-dai-  
kan-in-sho-mon-gyō. 釋提桓因所問經 ②一卷 ③失譯 ④雜阿  
含經第十九卷 ⑤(參考) 出三藏記第四、  
法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第  
四、開元錄第一六、貞元錄第二六

釋中禪室尊經 ①(日)Shaku-chū-  
zen-shitsu-son-gyō. 釋中禪室尊經 ②一卷 ③失譯 ④雜阿  
含經第十九卷 ⑤(參考) 出三藏記第四、  
法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第  
四、開元錄第一六、貞元錄第二六

釋中禪室尊經 ①(日)Shaku-chū-  
zen-shitsu-son-gyō. 釋中禪室尊經 ②一卷 ③失譯 ④雜阿  
含經第十九卷 ⑤(參考) 出三藏記第四、  
法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第  
四、開元錄第一六、貞元錄第二六

釋道安答沙公書 ①(日)Shaku-dō-  
an-to-sha-ko-shō. 釋道安答沙公書 ②一卷 ③失譯 ④雜阿  
含經第十九卷 ⑤(參考) 出三藏記第四、  
法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第  
四、開元錄第一六、貞元錄第二六

釋道慧宋齊錄 ①(日)Shaku-dō-  
e-so-sei-ryōku. 釋道慧宋齊錄 ②一卷 ③失譯 ④雜阿  
含經第十九卷 ⑤(參考) 出三藏記第四、  
法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第  
四、開元錄第一六、貞元錄第二六

釋道慧宋齊錄 ①(日)Shaku-dō-  
e-so-sei-ryōku. 釋道慧宋齊錄 ②一卷 ③失譯 ④雜阿  
含經第十九卷 ⑤(參考) 出三藏記第四、  
法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第  
四、開元錄第一六、貞元錄第二六

①宋齊錄、道慧錄 ②一卷 ③缺 ④道  
慧撰 ⑤齊代(A. D. 479-502)

⑥略して單に宋齊錄又は道慧錄とも云はれ  
て居る。道慧は北齊の人であつて、それ以上  
今の所知り得ない。歴代三寶紀卷第十五  
には「釋道慧宋齊錄一卷」と云ひ、大唐内  
典錄、開元錄乃至貞元錄等、爾後の諸經錄  
は何れも皆これと全く同一の記載をなして  
居る。此等現存諸經錄の記載に徴して本錄  
の内容を憶測するに、齊西域三藏僧伽跋陀  
羅等、齊代翻譯三藏所出の諸經論等の目錄  
のやうである。

⑦〔参考〕三寶紀卷第一〇、内典錄第一〇、  
開元錄卷第一、貞元錄第一八  
(林屋友次郎)

釋道憑錄

①(日)Shaku-do kyō-to=ku(支)Shih-tao ping-tu. 後齊沙門釋道憑  
錄 ②一卷 ③缺 ④道憑(永明六一天保  
一〇 A. D. 438-539)撰 ⑤東魏代(A. D.  
534-539)

⑥具さには後齊沙門釋道憑錄と云ひ、齊郡  
西寶山寺釋道憑の撰述したものである。歴  
代三寶紀卷第十五に「釋道憑錄一卷」と云  
へるもの即ち本錄であつて、爾後の大唐内  
典錄、開元錄乃至貞元錄等の諸錄にも、皆  
同じくこの録名を擧げて居るけれども、そ  
の詳細に涉つては今の所全く不明である。  
道憑姓は韓、平恩の人であつて、維摩、涅  
槃、地論乃至華嚴等に通じ、戒律を善くし  
又常に禪定を業となしたと傳へられて居  
る。齊文宣王の天保十年(A. D. 539)三月、  
七十有二歳を以て卒した。

⑦〔参考〕三寶紀卷第一五、内典錄第一〇、  
開元錄第一〇、貞元錄第一八  
(林屋友次郎)

釋難眞宗僧儀

①(日)Shaku-nan-  
shin-shū-ō-gi. ②一卷 ③存、眞宗全書  
第五九 ④慧琳(正徳五—寛政元 A. D. 1715  
—1739)撰 ⑤寶曆一三(A. D. 1763)十月  
⑥本書は眞宗大谷派の第五世講師、理綱院  
慧琳が、眞宗の肉食妻帯の宗風に對する他  
宗よりの問難についで、これが會通辯釋を  
試みんが爲に、一人の來客との問答に託し  
て辯述せられたものであつて、その跋に自  
書するところに依れば、曾て黃檗山の鐵眼  
が「楞嚴經」を江戸に講じた時、大いに  
眞宗の僧儀を難じたるに對して、本願寺派  
の學匠空誓がものせし『楞嚴講辯破釋』及  
び『葛藤別紙』の二書、並に大谷派の講師  
圓澄の『帶妻肉食義』について、著者慧琳  
師が之に研鑽を加つて撰するところなりと  
いふ。今本書の内容を摘要すれば、まづ肉  
食の宗風については『楞嚴經釋要鈔』涅槃  
會疏』等に三種の淨肉と十種の不淨肉とを  
説いてゐる。宗祖親鸞聖人の意に在りて  
は、肉を食すといふてもその意は三淨肉に  
在るのである。また妻帯の宗風について  
は、既に『大集經』賢愚經』大悲經』心地  
觀經』涅槃經』華嚴經』智度論』等に末世  
の比丘の畜妻挾子のことを説いてゐる。殊  
に日本に於ても、東大寺明一、元興寺慈實、  
澄意、聖覺が妻帶せし事實があり、現今に  
於ても八幡善法寺僧正、清水六坊執行、祇  
園、丸山、六角、池坊、總州正中寺の僧衆

等皆妻室を置いてゐる。蓋しこれ「叔世時  
運の然らしむるところ」であるといひ、「眞  
宗に於て妻肉を許して居るも、自妻にて足  
り、口に三淨肉を喫するも、嗜欲口腹にて  
足る。又何ぞ邪徑に走らうか。されば穢惡  
の群生が僧尼の威儀を毀るのは、末代の旨  
際を知らぬに基くものであつて、眞宗の旨  
風を謗らんとせば、宜しく三時の旨際を研  
核せよ」と結んでゐる。

⑧寫本(哲、え・五・右・一二) (岡崎正謙)  
⑨寫本(龍大、二六五・六)  
⑩寫本(龍大、二六五・六)  
⑪寫本(龍大、二六五・六)

⑫寫本(龍大、二六五・六)  
⑬寫本(龍大、二六五・六)  
⑭寫本(龍大、二六五・六)

⑮寫本(龍大、二六五・六)  
⑯寫本(龍大、二六五・六)  
⑰寫本(龍大、二六五・六)

⑱寫本(龍大、二六五・六)  
⑲寫本(龍大、二六五・六)  
⑳寫本(龍大、二六五・六)

㉑寫本(龍大、二六五・六)  
㉒寫本(龍大、二六五・六)  
㉓寫本(龍大、二六五・六)

㉔寫本(龍大、二六五・六)  
㉕寫本(龍大、二六五・六)  
㉖寫本(龍大、二六五・六)

㉗寫本(龍大、二六五・六)  
㉘寫本(龍大、二六五・六)  
㉙寫本(龍大、二六五・六)

㉚寫本(龍大、二六五・六)  
㉛寫本(龍大、二六五・六)  
㉜寫本(龍大、二六五・六)

㉝寫本(龍大、二六五・六)  
㉞寫本(龍大、二六五・六)  
㉟寫本(龍大、二六五・六)

㊱寫本(龍大、二六五・六)  
㊲寫本(龍大、二六五・六)  
㊳寫本(龍大、二六五・六)

㊴寫本(龍大、二六五・六)  
㊵寫本(龍大、二六五・六)  
㊶寫本(龍大、二六五・六)

572-727)譯 ⑦〔参考〕開元錄第一四、  
貞元錄第二四

釋普門品重頌

①(日)Shaku-fu-  
mom-bon-jū-jū. (支)Shih-pu-men-jin-  
ch'ung-sung. 觀音經普門品重頌 ②一卷  
③存、正續一・五五・二 ④宋遵式(乾徳元  
—明道元 A. D. 963-1032)撰 ⑤元錄一四  
刊(龍大、二四一・三・三六)明治三四寫(正大、  
一一四・五三)

⑥寫本(龍大、二四一・三・三六)  
⑦寫本(龍大、二四一・三・三六)

⑧寫本(龍大、二四一・三・三六)  
⑨寫本(龍大、二四一・三・三六)

⑩寫本(龍大、二四一・三・三六)  
⑪寫本(龍大、二四一・三・三六)

⑫寫本(龍大、二四一・三・三六)  
⑬寫本(龍大、二四一・三・三六)

⑭寫本(龍大、二四一・三・三六)  
⑮寫本(龍大、二四一・三・三六)

⑯寫本(龍大、二四一・三・三六)  
⑰寫本(龍大、二四一・三・三六)

⑱寫本(龍大、二四一・三・三六)  
⑲寫本(龍大、二四一・三・三六)

⑳寫本(龍大、二四一・三・三六)  
㉑寫本(龍大、二四一・三・三六)

㉒寫本(龍大、二四一・三・三六)  
㉓寫本(龍大、二四一・三・三六)

㉔寫本(龍大、二四一・三・三六)  
㉕寫本(龍大、二四一・三・三六)

㉖寫本(龍大、二四一・三・三六)  
㉗寫本(龍大、二四一・三・三六)

①(日)Shaku-nan-  
shin-shū-ō-gi. ②一卷 ③存、眞宗全書  
第五九 ④慧琳(正徳五—寛政元 A. D. 1715  
—1739)撰 ⑤寶曆一三(A. D. 1763)十月  
⑥本書は眞宗大谷派の第五世講師、理綱院  
慧琳が、眞宗の肉食妻帯の宗風に對する他  
宗よりの問難についで、これが會通辯釋を  
試みんが爲に、一人の來客との問答に託し  
て辯述せられたものであつて、その跋に自  
書するところに依れば、曾て黃檗山の鐵眼  
が「楞嚴經」を江戸に講じた時、大いに  
眞宗の僧儀を難じたるに對して、本願寺派  
の學匠空誓がものせし『楞嚴講辯破釋』及  
び『葛藤別紙』の二書、並に大谷派の講師  
圓澄の『帶妻肉食義』について、著者慧琳  
師が之に研鑽を加つて撰するところなりと  
いふ。今本書の内容を摘要すれば、まづ肉  
食の宗風については『楞嚴經釋要鈔』涅槃  
會疏』等に三種の淨肉と十種の不淨肉とを  
説いてゐる。宗祖親鸞聖人の意に在りて  
は、肉を食すといふてもその意は三淨肉に  
在るのである。また妻帯の宗風について  
は、既に『大集經』賢愚經』大悲經』心地  
觀經』涅槃經』華嚴經』智度論』等に末世  
の比丘の畜妻挾子のことを説いてゐる。殊  
に日本に於ても、東大寺明一、元興寺慈實、  
澄意、聖覺が妻帶せし事實があり、現今に  
於ても八幡善法寺僧正、清水六坊執行、祇  
園、丸山、六角、池坊、總州正中寺の僧衆

縮餘九、已續一・二、麗正・漢 龍樹造、姚秦代筏提摩多譯

⑥高麗の義天録に、大乘起信論の末釋をおよそ三十部ほどある最初に當論があるといふ、こはいふまでもなく起信論の註釋である。但し起信論の立義分に對して三十三種の法門を開立し、これを修行種因海と性徳圓滿海とに大別してその淺深を對辨するが如き、一見せば華嚴の因果二分論と同巧異曲視されぬではないが、全體を熟讀するならばその然らざるゆゑんがわかる。なぜならば、第十卷に華嚴の教主たる盧遮那佛をば、性徳圓滿海たる不二摩訶衍の佛果にのぞめてはるかに及ばざる旨を決判してゐるからである。また絶待果分の境地には、もとよりそれに相應しうる言説も名字も心識もあるのであるから、これを常に不可説といひ不可念といふは、それは未だ第一義の説でない論ずるなどこの論出色の點にして、眞言密教の思想と一致する。これその弘法大師がその浩瀚なる全著作中、いたるところこの論によつて眞言教義を發揮するゆゑんである。

もしそれ作者の問題に至つては、そも光仁天皇の寶龜十年に、大安寺の戒明により始めて請來されし最初から批判區々である。その大體は東寺賢實の寶冊鈔第八にある「釋論眞偽事」によつて知りえらるゝも、もとより問題がこれだけつきたのではなく、かの起信論眞偽の問題と相待つてはなほ深刻に進めなければならぬ性質に屬し、今こゝでこれを論ずる餘白を有しない。しか

し大觀するに作者如何の如きは第二義的問題にして、むしろ義味内容の如何を究むることがはるかに大切でなければならぬ。しかるに近頃のある學者は往々にいはく、この論は偽作たるのみならず義味内容もまた龜淺なりと。しかし肝心の義味内容がかく龜淺なものならば、何で不世出の哲人たる弘法大師の理想を満足せしめやうか、こは思はざるの甚だしきものといふべきである。

⑦〔參考〕 淨土依憑經論章疏目錄、淨土眞宗教典志第一、東城傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第三 ⑧古寫本(谷大、餘甲・六六)建長八刊(正大、一一九三・一〇四一—一〇五)哲、ま・七・中・三六、ま・七・左・一(京大、藏・一六シ・六) (森田龍僊)

釋摩訶衍論 ①(日)Shakamuni-ton. 國譯釋摩訶衍論 ②十卷 ③存、國譯密教論釋第二 ④林田光禪譯 釋摩訶衍論應教鈔 ①(日)Shakamuni-ton-ho-kyo-sho. 釋論應教抄 ②一卷 ③存、大正六九・五八四 No. 2288 ④道範(元曆元)建長四 A. D. 1184—1252 一説建長四、年七五寂述

⑤本書は嘉祿二年正月の比、禪定二品大王道助の教命により、釋摩訶衍論一部の要義を問答通釋す。その立場は師高山華王院覺海の口説と、京都東山禪林寺靜遍の指授とを得て抄したるものにして、釋論一部に互る顯密の二意を述べ。本書現在は一の本末合本一冊を傳ふるのみにして、已下を傳えず。或は上中下三卷本であつたものと傳

へらる。若し然らば中下を佚して、上卷存するのみ。

一論大綱の事。(論に五分あり、これ五部の法門なりとなす。第一は因緣分にして密教に於いては五部の中の佛部、第二の立義分は蓮花部、第三解釋分は金剛部、第四の修行分は寶部、第五勸修分は羯磨であるとして、當然の密論なるを表はさうとしてゐる。題額の事。初二頌之事。今造此の論等之事。論別事(中略)三大義之事、何故不二摩訶衍法無因緣耶之事。菩薩二乘一切異生亦如是事。今論不二與花嚴圓々性海同異之事。配當外門法之事等。三十條の問題を設けて論述す。

①文永二寫(寶壽院)嘉永二、三寫、明治二二刊(高大、寄・一・三九) (大山公淳) 釋摩訶衍論開解鈔 ①(日)Shakamuni-ton-kai-gesho. 釋論開解鈔 ②三十六卷 ③存、日本大藏經眞言密教論章疏卷上 ④頼瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304)述

⑤馬鳴菩薩の大乗起信論を解釋した釋摩訶衍論十卷は東密教學上に於ては極めて重要な論疏である。而しこ是に就ては撰者等に於て古來種々の議論があるが今は之を略す。本書釋摩訶衍論開解鈔は頼瑜僧正が、曾て根來寺鎮守講師たりしとき本論の要義を講述したもので、則ち本論の文を擧げ之に對して詳細なる解釋を試みられてゐる。

釋摩訶衍論勸注 ②二十四卷 ③存、大正六九・六〇三 No. 2320

④頼實述 ⑤元應二(A. D. 1320) 釋摩訶衍論一部を通釋した書である。頼瑜の開解鈔と宥快の鈔とに對比すべき名著である。論の序文の釋一卷、本文の釋二十三卷あつて、本文釋の卷一には初に眞言所學事、大意事、眞論偽論事、今論顯密分別事、本論顯密分別事、法門建立事、三十三與三十七尊配屬事、兩部配屬事、題額事、造主事、序正流通事等の要目を掲げて説明を作り、次に正しく本文を牒して一々を解説を施してゐる。本文釋中にもしばしば要目を標して閱讀に便ならしめてゐる。

本書は正和五年から元應二年八月まで首尾四ヶ年を費して、東寺西院又は高野山一心院谷金光院で撰述したもので、東寺傳法會二季談義にこれを講じたことが奥書に記してある。

⑦〔參考〕 釋教諸師製作目錄第二、諸宗章疏錄第三 ⑧明曆四刊(龍大、二四三五・一四)曆應二果實寫(觀智院藏) 南北朝時代寫(寶善提院藏) 釋摩訶衍論記 ①(日)Shakamuni-ton-ki. (支)Shih-mo-ho-yeh-tun-shi. 釋論聖法記、釋論記 ②一卷 ③存、已續一・七二・四 ④唐代聖法鈔 ⑤聖法は法敏と同じく傳記不明であり、從つて二師の前後も知りたがいが、但し弘法大師の平城天皇灌頂文によれば、大師はたしかにこれによつて釋を設けられし跡が見られるから、或ひは法敏よりやゝ前にし

て、けだし釋論最古の註釋ならむかとも思はれる。しかるに註釋といつても實は音義體の短篇であり、そして通常とはよほど異なる論所用の梵語に適當の譯を付し、漢譯經典中に未かつて發見し能はざる異經論を多く證し、かつ馬鳴の起信論製時を佛滅後一百年と定むるが如き珍説といひ、兎に角も、大いなる疑問に値する書なりといふべきであるが、しかるにかの釋論三師たる法悟・志福・普觀はこの書によるところ極めて多い。宥快の釋論決擇六に云く、

凡於此論末師中則以聖法爲本、故鈔師(志福なり)一釋上下釋文多依聖法……如聖法師、則僧傳等中無載之、又非譯場證義等人、何宗人師事述不明。

⑦〔參考〕東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第三④刊本(京專)(京大・藏・二四三・二二) 德川時代寫(寶龜院) (森田龍倦)

**釋摩訶衍論記**

①(日) Shaku-ma-ka-en-ron-ki (支) Shih-ano ho yen-tun-chi. 釋論記、普觀記 ②六卷 ③存、已續 一・七三・一 ④宋代普觀述

⑤無際大師普觀もまた法悟・志福と同じく華嚴宗に屬せし人と見えて、同宗義に基づいて一部を通釋せしものである。師は分科が巧妙で文の段落を分つことは、釋論末註のなかで恐らく師の右にいつるものこれなかるべしと思はれる。のみならず、釋論の理想法門たる不二摩訶衍を考察することが、やゝもすれば弘法大師の深秘なる所見と往々に一致する點がある。頼慶の立義分私記によれば、この書は葉上僧正の弟子般若房

了心の請來なりと。私に聞了心は入宋し普觀に面謁してこれを授かつたと。

⑦〔參考〕諸宗章疏錄第三 ⑧正保三刊(龍大、二四三五・九)刊本(龍大、二四・三五・六)(正大、一一九三・一一一一・一一二)(谷大、餘大、四七)(京專) (森田龍倦)

**釋摩訶衍論聞書**

①(日) Shaku-ma-ka-en-ron-kiiki. ②一卷 ③存 ④大道(嘉永三 A. D. 1850)述 ⑤萬延二 ⑥(正大、一一九二・一七二)

**釋摩訶衍論愚案鈔**

①(日) Shaku-ma-ka-en-ron-ron-ku-an-sho. 愚案鈔、釋論愚案鈔 ②一卷 ③存、日本大藏經眞言密教論章疏卷上、興教大師全集密嚴諸秘訣第五 ④愚案(嘉保二・康治二 A. D. 1095-1143)述 ⑤愚案鈔の下を見よ。

**釋摩訶衍論愚案鈔**

①(日) Shaku-ma-ka-en-ron-ron-ku-an-sho. 國譯釋摩訶衍論愚案鈔 ②一卷 ③存、國譯密教論第釋 ④塚本賢曉譯

**釋摩訶衍論愚案鈔**

①(日) Shaku-ma-ka-en-ron-ron-ku-an-sho. 釋論愚案抄 ②七卷或十卷 ③存 ④印融(永享七・永正一六 A. D. 1435-1519)述

⑤釋論に關する東密古義派の論集で、論義條目は第一卷、門大乘。聲聞藏外立二獨覺二歟等九十七條であるが、釋論第十勸劣向勝不退門の論義は釋論安養鈔と題して別出して居る。宥快、長覺の決擇を比較考量し、寶壽二門の異るところを釋した故に極めて重寶とする所である。

⑥承應三刊(龍大、二四三五・一五)承應三

及延寶三刊(高大、寄・一・三九)刊本(京專)

**釋摩訶衍論愚艸**

①(日) Shaku-ma-ka-en-ron-ron-ku-an-sho. 釋論愚艸 ②二十二卷 ③存 ④頼瑜(嘉祿二・嘉元二 A. D. 1296-1304)述

**釋摩訶衍論科**

①(日) Shaku-ma-ka-en-ron-kuwa (支) Shih-ano ho yen-tun-ko. ②二卷(缺上卷) ③存、已續一・九五・四 ④宋代普觀治定

⑤論の第一より第三の終りにいたる三卷の分科、即ち上巻はすでに逸本となり、論第四最初の不覺義段以下、乃至第十の終りにいたる七卷の分科がこの下巻であり、今この科同を同師の記第四以下と對校するに、一々符合する。この書は本朝請來後、第九十四代後二條天皇の乾元元年(正安五年)なり、鎌倉時代、A. D. 1302)に慶賢が開板せしものである。

**釋摩訶衍論科註**

①(日) Shaku-ma-ka-en-ron-kuwa-ju. 釋論科註 ②二十卷 ③存 ④覺眼(寛永二〇―享保一〇 A. D. 1643-1733)述 ⑤釋摩訶衍論の註釋書にして上欄に分科を加ふ。

**釋摩訶衍論啓蒙**

①(日) Shaku-ma-ka-en-ron-kei-mo. 釋論啓蒙 ②四十一卷或三十五卷 ③存 ④運做(慶長一九一 元祿六 A. D. 1651-1693)述

⑤本書は條數名目等聖惠の釋摩訶衍論百條第三重に同じい。(同項参照)たゞ難答相反する條項と初學者のため及び章疏を外に持たない者のために具文をも併記して居

る。

**釋摩訶衍論決疑鈔**

①(日) Shaku-ma-ka-en-ron-kechi-tai-sho. 釋摩訶衍論決疑破難會釋抄、釋論決疑鈔、釋論破難決疑會釋 ②一卷 ③存、大正六九・五七〇 No. 2886 ④濟進(萬壽二・永久三 A. D. 1025-1115)述

**釋摩訶衍論決疑破難會釋抄**

①(日) Shaku-ma-ka-en-ron-kechi-tai-sho. 釋摩訶衍論決疑鈔、釋論決疑鈔、釋論破難決疑會釋 ②一卷 ③存、大正六九・五七〇 No. 2886 ④濟進(萬壽二・永久三 A. D. 1025-1115)述

⑤釋摩訶衍論の作者を龍猛とすることに、最澄の守護國界章、安然の悉曇藏、三船真人の文等に僞作説を唱道するに對して、此れ等諸説を破釋し、弘法大師空海の意に則つて龍猛の眞作たることを論定せる書である。

**釋摩訶衍論決擇集**

①(日) Shaku-ma-ka-en-ron-kechakushu. 釋論決擇集 ②二十卷新版十七卷 ③存、日本大藏經眞言密教論章疏卷下 ④宥快(貞和元一 應永二三 A. D. 1345-1416)・快全(應永三二 A. D. 1424)等述

⑤眞言宗學研鑽上、論部を代表する重典釋摩訶衍論十卷の中より、重要な問題百餘ヶ條を撰し、各々の條に皆問答を設けて、釋

名所行註⑩(名庫書)看顯所現⑨ 月年の刊寫⑧(書考參書釋註)書末⑦ 說解容内⑥ 代年作者⑤ 香著④ 缺存③ 數卷②(名書)名題① 號略字數

論の眞精神を闡顯した書である。然してその論述は主として、應永頃高野山寶門派の大學匠宥快法印の口説にかゝり、間々快全師の説を加ふ。何れにしても、高野山正統學派の釋論研究上古來特に珍重する所である。

中には一般佛教學上特に起信論に稱道する「眞如」は、釋論に於ては顯教のものとなるか、密教のものとなるかといふ、問題を決定する爲めに「眞如顯密の問題」を掲げ、根本無明は佛果に到達せずんば斷滅することが出来ないか否かといふことの爲めに、「根本無明佛果斷」の問題を出し、又根本無明の體は斷滅し得べきものなりや否やに就いて「根本無明自體斷」を論じ、又佛敎の修行法としての止と觀は學密の徒も雙修すべきや否やに就いて「止觀雙修」を提稱するなど、甚だ興味多き問題が多い。

⑤慶安元刊(龍大、研佛)安永六刊(谷大、餘大・二五〇) (大山公淳)  
⑥十八卷 ⑦存 ⑧濟邊(萬壽二)永久三 A.D. 1025—1115) ⑨釋摩訶衍論の註書。釋論末註中最古のものに屬す。(参考)眞言宗全書刊行豫定目錄

釋摩訶衍論顯秘鈔 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ken-pi-sho. 釋論顯秘鈔  
②十八卷 ③存 ④濟邊(萬壽二)永久三 A.D. 1025—1115) ⑤釋摩訶衍論の註書。釋論末註中最古のものに屬す。(参考)眞言宗全書刊行豫定目錄

釋摩訶衍論懸談 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ken-dan. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一一九三・一七五)慶安元刊(高奇・一三九)哲・ま・七・右・一(京專)嘉永二刊(正大、一一九三・一一四)

釋摩訶衍論玄談 ①(日)Shaku-ma

ka-en-ron-gen-dan. ②一卷 ③存 ④融道述 ⑤文化一三寫 ⑥(谷大、長保・二二)

釋摩訶衍論玄譚 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-gen-dan. ②一卷 ③存 ④大道良正(一嘉永三 A.D. 1850—)述 ⑤寫本(正大、一一九三・一七一)

釋摩訶衍論廣短冊 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ku-tan-zaku. 釋摩訶衍論第十廣短冊、勸劣向勝不退門廣短冊、釋論廣短冊、釋論短冊 ②一卷 ③存、大正七九・五九一 No. 2337、日本大藏經眞言密敎論章疏卷下 ④順繼(文應元—延慶元後 A.D. 1260—1308—)記 ⑤釋摩訶衍論第十廣短冊の下を見よ。⑥刊本(龍大、二四三五・七)(正大、一四四・四〇)(哲・ま・六・左・九)(京專)

釋摩訶衍論三師科指掌圖 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-san-shi-ko-shi-ka-wa. 釋論三師指掌圖 ②三卷 ③存 ④長典(一延寶頃、A.D. 1673—1680—)述 ⑤寛文九刊 ⑥(龍大・二四三五・一七)

釋摩訶衍論梵玄疏 ①(日)Shaku-

ma-ka-en-ron-san-gen-sho. (支)Shi-mo-jo-yen-jun-isan-istam-jo. 釋論梵玄疏、釋論通法疏、釋論疏 ②五卷 ③存、記載一・七二・五 ④宋代法悟述 ⑤大遼の末に屬する延禧帝の大臣耶律大石が西域地方を征服し、土耳其斯坦の起兒漫にいたり、即位して自から天佑皇帝と稱し、國を西遼と號した。天佑は釋論の愛讀者であり、その難解の四ヶ所に對して特に自義を發明せしほどの造詣を有してゐた。そして一方において釋論の註釋をつくらしむべく當時一流の學匠たる法悟(通法大師)、および志福(慈行大師)の二人に勅したのであり、これに應じて撰述せるが當疏および志福の鈔である。この二書が本朝に傳はつたのは、仁和寺禪定二品親王覺行が、長治二年(A.D. 1105)五月中旬に、太宰帥藤原朝臣季中を專使として高麗國に遣はし、求請されたるによる。この二師は華嚴宗に屬する人と見えて、同宗の見地よりして釋せしものである。このなか、當疏は第一卷の最初において達意的に論の全體法門を大觀しをばり、しかるのち別釋に入るものであるが、この點は特に學者を裨益すること尠からぬ。

⑦(参考)新編諸宗教藏總錄第三、諸宗章疏錄第三 ⑧正保三刊 ⑨(龍大、二四二五・九一〇)(谷大、餘大・四七)(正大、一一九三・一〇六一・一〇七、一六九)(京專)(森田龍徳)

釋摩訶衍論私記 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-shi-ki. ②一卷或二卷 ③存、大正六九・五九三 No. 1289、日本大藏經眞言密敎論章疏下 ④信堅(正元元—元亨二 A.D. 1350—1382)述 ⑤著者は龜山法皇の歸依を得た高野山大樂院の學匠にして、徳治三年九月、著者親しく龍顔に對し奉り、謹しみて釋論一部を講じ、更に勅命を蒙つて本私記を撰した。釋論一部の大綱を簡略によく纏めてある。初めに總じて大意を述べ、次に一論の題目を出し、後に判文料簡す。その各々に淺略深秘の二意ありとして、二様の見方あるを記してゐる。釋摩訶衍論一部の内容に亘りて、高野山學徒の立場を知る爲めには甚だ簡便な好書である。

釋摩訶衍論指事 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-shi-ji. 釋摩訶衍論立義分略釋、釋論立義分釋 ②一卷 ③存、大正六九・五七七 No. 2387 ④濟邊(萬壽二)永久三 A.D. 1025—1115)述 ⑤釋摩訶衍論立義分略釋の下を見よ。⑥古寫本(高山寺)

釋摩訶衍論私記 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-shi-ki. ②一卷或二卷 ③存、大正六九・五九三 No. 1289、日本大藏經眞言密敎論章疏上 ④空海(寶龜五—承和二 A.D. 774—835)述 ⑤釋摩訶衍論の要目を簡單に記し、まゝ問答を設けて略説してある。著者は同論を以て龍猛の眞撰と定め、眞言宗所依の論と定めたほどで、弘法大師空海の著述には至る

大正六九・五九三 No. 1289、日本大藏經眞言密敎論章疏下 ④信堅(正元元—元亨二 A.D. 1350—1382)述

大正六九・五九三 No. 1289、日本大藏經眞言密敎論章疏下 ④信堅(正元元—元亨二 A.D. 1350—1382)述

所に論文を引用してゐる。大師は釋論を熟讀するに際し、その要義を摘記して本書を作り、備忘の用としたものである。上巻には論一部十巻に通じ下巻には論第二第三の兩巻につきて執筆してゐる。

- ⑦【参考】諸宗章疏錄第三、釋教諸師製作目錄一、諸師製作目錄
- ⑧元祿七刊(智山覺眼開板) ⑨正大、一四三・二六三(高大、寄・一・三九)(京專)

釋摩訶衍論指事

- ①(日)Shaku-ma-ka-en-ton-shi-ji ②二卷 ③存、大正六九・五六一No. 2384、日本大藏經真言密教論章疏上 ④覺鑒(嘉保二)康治二A.D. 1093—1143撰

①具題には眞言所學釋摩訶衍論指事と云ひ、略しては釋論指事と稱す、釋論を最も深秘に解釋したるものである、其の一例を擧ぐれば、不二眞如生滅の三門は佛部蓮華部金剛部で、三十三種の法門は是れ金剛界曼荼羅の三十七尊の三昧とするが如きものである、即ち、不二は大日如來、一心三大は四佛、十六門の法は十六大菩薩、後重の四法の中、總は四波羅蜜菩薩、眞如所入は内の四供養菩薩、能入は四供養菩薩、生滅門の法は四攝菩薩とするのである、此の書を姉妹書に釋論愚案鈔がある。

釋摩訶衍論指事

- ①(日)Shaku-ma-ka-en-ton-shi-ji 國譯釋摩訶衍論指事 ②一卷 ③存、國譯密教論釋第二冊之内

釋摩訶衍論指事

- ①(日)Shaku-ma-ka-en-ton-shi-ji 國譯釋摩訶衍論指事 ②一卷 ③存、國譯密教論釋第二冊之内

塚本賢曉譯

釋摩訶衍論指南鈔釣物

- ①(日)Shaku-ma-ka-en-ton-shi-man-sho-kuri-mono 釋論指南鈔、釋論指南鈔釣物 ②五卷或十卷 ③存 ④印融(永享七)永正一六A.D. 1435—1519)記

①各卷十二條、總計百二十條に互る釋論に關する東密古義派壽門の論別集である。④萬治元刊(龍大、二四三五・一八)(高大、寄・一・三九)(智積院)足利時代寫卷八(寶壽院)

釋摩訶衍論目鈔

- ①(日)Shaku-ma-ka-en-ton-shi-sho 釋論目鈔 ②五卷 ③存 ④妙瑞撰 ⑤寶曆三—四(A.D. 1733—1754)

①釋論十卷並に序文を隨文略釋したもので妙瑞が寶曆年間に南谷堯壽院及び和州久米寺に於ての記述である。④寫本(持明院)

釋摩訶衍論疏

- ①(日)Shaku-ma-ka-en-ton-sho (支)Shi-mo-ho-yei-lun-sho 次第屬當釋本論文刪補三卷別行疏、釋論疏 ②六卷(缺中卷本末) ③存、己藏一・七二四 ④唐代法敏集 ⑤續高僧傳一五(大正五〇・五三八)「唐越州靜林寺法敏……貞觀十九年(A.D. 645)八月二十三日……因爾遷化、春秋六十有七」とありて、今疏の作者を古來この法敏ならむとする説もあるも、すでに今疏に貞觀十九年より六七十年後に譯せられたと見らるべき大圓覺經なり、また釋論の闕釋にかゝる三種發心中の解行發心および證發心下に、

明らかに賢首の起信義記によつて、補釋せし跡が分明であるから、けだし非峯宗密の時代を去ること遠くない人たることは確かであり、よつてその傳記今のところなほ不明である。今疏が本朝に傳來せるは、承和六年(A.D. 839)八月、小栗栖常曉和尚によつてである。

およそ一部の内容は、まづ起信論の本文をあげ、釋論の釋文を略抄してこれに配屬せしめてあり、著者の主觀として見るべきものは、前にいふが如く二種發心および釋論の關釋分たる對治邪執の五種人見・二種法執のみの極少部分にすぎない、題下「次第屬當釋本論文刪補」の意味またこれによつて推知しえられる。

- ⑦【参考】東威傳燈目錄卷下、常曉和尚請來目錄、諸宗章疏錄第三 (森田龍徳) 釋摩訶衍論序鈔 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ton-sho 釋論序鈔 ②一卷 ③存、日本大藏經真言密教論章疏卷上 ④賴瑜(嘉祿二)嘉元二A.D. 1226—1304)述 ⑤龍樹菩薩造にして、姚秦三藏徒提摩多弘始三年九月上旬に大莊嚴寺に於て、詔を奉けて譯したと傳へられる。釋摩訶衍論に於ては釋摩訶衍論序と題し、天册威威姚興皇帝製とする「蓋聞月、鏡日珠、居安山、王禪宮、履於雙道、遊于百國、乘於等觀」等の序文が巻頭に出る。

此の序に就ては賴瑜僧正が「抑斯序は千理を句句に統へ、多義を文文に含む、天地の表に彌るとも其高下を測るべからず、江海の量を極むとも其淵源を罄すべからず云々」と述べた如く、極めて難解のものである。故に賴瑜僧正が弘長二年之秋、斯の序文を抄出して註釋を施したものが本書である。

- 釋摩訶衍論序註 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ton-sho 釋論序註 ②二卷 ③存 ④亮汰(元和八)延寶八A.D. 1622—1680) ⑤姚興皇帝の釋摩訶衍論序の註釋書で上欄に文の分科がある。⑥寛文一〇刊 ⑦(京專)(高大、寄・一・三九)

- 釋摩訶衍論助解 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ton-sho 釋論助解 ②一卷 ③存 ④亮貞述 ⑤寶永三(A.D. 1705) ⑥刊本(龍大、二四三五・一一)(哲・ま・六・左・二一)

- 釋摩訶衍論抄 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ton-sho 釋論抄 ②五卷 ③存 ④林常快道(寶曆元)文化七A.D. 1751—1810)述 ⑤寫本(正智院)

- 釋摩訶衍論抄 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ton-sho 釋論有快鈔、釋論快鈔 ②百四十卷 ③存 ④有快(貞和元—應永二)A.D. 1343—1416)述 ⑤高野山勸學會には論の第一・二・三・四を各々上半十日と下半十日とに分つて講讀するを例となし、當書この例によるが故に以上にて計八十卷となり、第五以下は單に十日と分つが故に計六十卷となり、かくて通計百四十卷となるゆゑである。當書はすべて開書と題するも、第五卷の釋のみは愚見鈔と題し最も詳密にしてかつ研究的にできてゐる。およそ當書は法悟・志福・無際な



る宋初三師の釋は勿論のこと、日輪寺良和の十二鈔、大樂院開書、および頼瑠の開解鈔が重なる素材となり、このうへ起信論に對する賢首の、義記、元曉の疏、慧遠の疏、乃至子璿の筆削記などを縦横に對照し、そしてこれらすべてが師一流の圓熟の釋義に消化されて渾然たる趣きを呈し、平明暢達なる點は他に比類がなく、眞言密教の立場から釋論を見むとするには、けだし何といつても當書の右にいづるものはな

①明曆三刊(龍大、七五・研佛)(京專)初二三册(哲、ま・六・中・一)終八册(哲、ま・六・左・一)足利時代寫(寶龜院)大永四寫(寶壽院)(森田龍僊)

釋摩訶衍論定俊鈔

①(日)Shaku-nan-ka-en-ron-jo-shun-shio. 釋論定俊抄、開書 ②十卷 ③存 ④定俊快深述 ⑤永和五(A.D. 1379) ⑥明曆三刊 ⑦(龍大、二四三・五・一九)

釋摩訶衍論打集開書

①(日)Shaku-nan-ka-en-ron-da-shu-kiiki-gaki. 釋論打集開書 ②一卷 ③存 ④省快(貞和元一應永二三 A.D. 1345—1416)口 ⑤寫本(京專)

釋摩訶衍論第一鈔

①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-dai-is-sho. ②一卷 ③存 ④寶徳元寫 ⑤(寶善提院)

釋摩訶衍論第七口筆第一

①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-dai-shichi-ku-hitsu-dai-ichi. ②一卷 ③存 ④寛政六寫 ⑤(寶善提院)

釋摩訶衍論第十廣短冊

①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-tai-ju-ten-nan-zai. 勸劣向勝不退門廣短冊、釋摩訶衍論廣短冊、釋論廣短冊、釋論短冊 ②一卷 ③存、大正七九・五九一 No. 237. 日本大藏經眞言密教論章疏卷下 ④順繼(文應元一延慶元後 A.D. 1260—1308—)記

①本書は其の奥書に明す如く、金剛佛子順繼(四十五歳)が嘉元二年九月十九日再治して出す所にして、夫は嘉元元年癸卯之冬中性院頼瑠僧正病床に寝ねられたるにより、順繼に、我化滅の後は毎年忌辰に堅義決擇を勤むべきことを命じた。而して頃日釋論勸劣向勝不退門に就て短冊を記せんと欲して未だ其功を遂げずして命終するを以て、汝須らく此の短冊を書して堅問を勤むべしと言ひ、遂に其の翌年嘉元正月朔旦に示寂された。仍て順繼は其の遺訓を奉じて草せられたのが本書である。從て本書は四信理觀・報身報土・他方佛土・華開見佛・惡趣往生・無明所發・永離惡道・教法無常・身體明白・稱名念佛等と表題を出して本論の文を

あけて問答決擇をしてゐる。 ①刊本(正大、一四四・四〇)(哲、ま・六・左・九)(京專)(龍大、二四三五・七)(岡田契昌)

釋摩訶衍論第八鈔

①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-dai-has-sho. ②一卷 ③存 ④文正二寫 ⑤(寶善提院)

釋摩訶衍論通玄鈔

①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-tsu-gen-sho. (支)Shih-mo-ho-yen-tsu-tung-tsun-ai-shan-ch'iao. ②四卷 ③存、己綴一・七三・二 ④宋代志福述

①よろしく前の釋摩訶衍論贊玄疏と對看されたい。當鈔の卷頭に天佑帝御製の序があり、その勅撰たること一目明瞭である。釋義は透徹にして深刻であり、賢首の義記によつて一部を釋するところが多い。特に當鈔は鎌倉時代の密宗學者に愛讀されしものと見えて、この時代に通玄鈔開書四卷(常に大樂院開書といふ)ある一事によつても察せられる。

②(参考)新編諸宗教藏總錄第三 ③正保三刊 ④(正大、一一九三・一〇九一一・一〇)(谷大、餘大・四〇) (森田龍僊)

釋摩訶衍論通贊疏

①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-tsu-kan-sho. (支)Shih-mo-ho-yen-tsu-tung-tsun-an. ②十卷 ③守録述 ④(参考)新編諸宗教藏總錄卷第三、東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第三

釋摩訶衍論百條三重

①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-hyaku-jo-dai-san. ②十卷 ③存 ④聖憲(徳治二—明德三 A.D. 1307—1332)記 ⑤至徳四(A.D. 1387)

①釋論に關する東密新義派の論則集で、大疏百條第三重と姉妹篇たるもの后代同派正統學の權威として尊重されて居る。その條日は左の如し。 [卷一]大乘通局。顯論密論。不二顯密。不二機根。三分機根。前門後法。得不問答。五心中品。三大法體。約顯約密。立義法數。所入別機。[卷二]法義勝劣。二門時立。爲善不善。自門心念。如義通局。無爲第八。眞門漸修。[卷三]第二傳言。此中有

二重。別立第九。攝主別體。因言遺言。七識體一。始本說段。法身理智。覺義通局。清染體用。[卷四]五位閉合。重離俱相。三賢斷惑。入位斷惑。獨力業相。第八法執。望別決異體可斷。相續六七。尅體無別。[卷五]無明住地。無明緣起。無明所迷。動則有苦。六相意識。第七緣境。五識緣境。三細七八。隨文散說。潤業潤生。[卷六]唯心廻轉。種子熏習。即心不覺。障得寬狹。非情成佛。與心相應。舉一後者。無明淨用。不捨無明。生死之海。[卷七]三執俱起。三賢分段。法身應化。三身本有。無明厚薄。用熏習者。別緣所化。三大通局。清涼不變。應化常住。[卷八]賢位見佛。智身色相。應化心法。發起廣答。體相二大。入門得益。門亦所入。邪執所化。發趣通局。十信新業。[卷九]始覺情有。學劣顯勝。十信劫內。二聲證如。最高大身。十信理觀。止輪通局。定主觀伴。止觀俱起。廣釋理觀。[卷十]虛科實科。三身成道。而攝不攝。形於彼佛。報身報土。四心理觀。他方佛土。華開見佛。無明所發。惡趣往生

②寛永一〇刊 ③(龍大、二四三五・二〇〇)(正大、一四四・三三、一一七—一一九)(高大、寄・一・三九)

釋摩訶衍論百條談義

①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-hyaku-jo-dan-gi. 釋論第三重談義、釋論談義 ②二卷 ③存 ④運做(慶長一九一元祿六 A.D. 1614—1693)作 ⑤延寶九(A.D. 1681)

①聖憲の釋摩訶衍論百條第三重の大意を要約せるもの。

④延寶九刊(龍大、二四三五・二一)(谷大、餘大・一〇七五)(寫本)(長谷寺)

釋摩訶衍論名目私鈔

①(日)Shin=ku-ma-ka-en-ton-myō moku-shi-shō. 釋論名目、釋論名目私鈔、釋論名目鈔 ②二卷 ③存 ④印刷(永亨七—永正一六 A. D. 1435—1519)述 ⑤延徳四(A. D. 1492)

⑥釋論造者。釋論譯者。本論造者。本論譯者。釋論眞言所學等四十四條の釋論の要目を取つて論文を索き、大綱を圖示して、更に問答釋述して居る。説くところ、極めて簡明、初學者の好參考書である。

⑦寛永二刊 ⑧(龍大、二四三五・二一—二二)(谷大、餘大・三三四五)

釋摩訶衍論名目私鈔

①(日)Shin=ku-ma-ka-en-ton-myō moku-shi-shō. 國譯釋摩訶衍論名目私鈔 ②一卷 ③存、國譯密教論釋第二 ④塚本賢曉譯

釋摩訶衍論問題

①(日)Shaku-ma-ka-en-ton-mon-dai. 釋論問題 ②二十七卷 ③存 ④成雄(永徳元—寶徳三A. D. 1381—1451)等口

⑤略して釋論問題と云ふ。釋摩訶衍論中文句につき主要なる論點を問答す。卷數一定せず。一本によれば、論一・三・四・八の問題十二卷は成雄口。論二・七の問題五卷は快全口。論五の問題四卷は明範口。論六の問題一卷は宥快口。論十の問題三卷は龍算口となつてゐる。

釋摩訶衍論由來

①(日)Shaku-ma-ka-en-ton-yū-rui. ②存 ③(京專)

釋摩訶衍論立義分略釋

①(日)Shaku-ma-ka-en-ton-ryō-bun-ryaku-shaku. 釋論立義分略釋、釋摩訶衍論私記 ②一卷 ③存、大正六九・五七七No. 2387 ④濟進(萬壽二—永久三A. D. 1025—1115)述

⑤大乘起信論の立義分を釋摩訶衍論に略釋してゐるが、本書はその立義分に明せる三十三法門について釋論の意を得て釋したものである。初に付釋論立義分本數文、作指事、付本論立義分文、作指事、の兩項を設け、次に三十三法門の淺深等について數番の問答を作し、後に付三十三法辨一如幻義と題して釋してゐる。短篇ではあるが釋論に對する濟進の見解を知るに足る名著である。

釋摩訶衍論立義分略釋

①(日)Shaku-ma-ka-en-ton-ryō-bun-ryaku-shaku. 釋論立義分略釋、釋摩訶衍論私記 ②一卷 ③存、大正六九・五七七No. 2387 ④濟進(萬壽二—永久三A. D. 1025—1115)述

⑤大乘起信論の立義分を釋摩訶衍論に略釋してゐるが、本書はその立義分に明せる三十三法門について釋論の意を得て釋したものである。初に付釋論立義分本數文、作指事、付本論立義分文、作指事、の兩項を設け、次に三十三法門の淺深等について數番の問答を作し、後に付三十三法辨一如幻義と題して釋してゐる。短篇ではあるが釋論に對する濟進の見解を知るに足る名著である。

釋摩訶衍論論義書

①(日)Shaku-ma-ka-en-ton-ron-gi-shō. 高野山寺釋摩訶衍論論義書 ②一卷 ③存 ④明治三寫 ⑤(谷大、餘大・二〇六二)

釋摩訶般若波羅蜜經覺意三昧

①(日)Shaku-ma-ka-lan-ya-ha-ra-mi-tsu-kyō-kaku-i-sam-mai. (支)Shih-mo-ho-pan-jo-po-to-mi-chang-chieh-i-sam-mai. 覺意三昧 ②一卷 ③存、大正四六・六二一No. 1923. 縮陽九、卅三三・四、明北1957法、大日本佛教全集第二四天台小部集釋、天台小部集釋第一三、頁1564 ④隋智顛(中大通三—開皇一七A. D. 531—597)說、灌頂(天嘉二—貞觀六A. D. 561—632)

釋摩訶般若波羅蜜經覺意三昧

①(日)Shaku-ma-ka-lan-ya-ha-ra-mi-tsu-kyō-kaku-i-sam-mai. (支)Shih-mo-ho-pan-jo-po-to-mi-chang-chieh-i-sam-mai. 覺意三昧 ②一卷 ③存、大正四六・六二一No. 1923. 縮陽九、卅三三・四、明北1957法、大日本佛教全集第二四天台小部集釋、天台小部集釋第一三、頁1564 ④隋智顛(中大通三—開皇一七A. D. 531—597)說、灌頂(天嘉二—貞觀六A. D. 561—632)

釋摩訶般若波羅蜜經覺意三昧

①(日)Shaku-ma-ka-lan-ya-ha-ra-mi-tsu-kyō-kaku-i-sam-mai. (支)Shih-mo-ho-pan-jo-po-to-mi-chang-chieh-i-sam-mai. 覺意三昧 ②一卷 ③存、大正四六・六二一No. 1923. 縮陽九、卅三三・四、明北1957法、大日本佛教全集第二四天台小部集釋、天台小部集釋第一三、頁1564 ④隋智顛(中大通三—開皇一七A. D. 531—597)說、灌頂(天嘉二—貞觀六A. D. 561—632)

釋摩訶般若波羅蜜經覺意三昧

①(日)Shaku-ma-ka-lan-ya-ha-ra-mi-tsu-kyō-kaku-i-sam-mai. (支)Shih-mo-ho-pan-jo-po-to-mi-chang-chieh-i-sam-mai. 覺意三昧 ②一卷 ③存、大正四六・六二一No. 1923. 縮陽九、卅三三・四、明北1957法、大日本佛教全集第二四天台小部集釋、天台小部集釋第一三、頁1564 ④隋智顛(中大通三—開皇一七A. D. 531—597)說、灌頂(天嘉二—貞觀六A. D. 561—632)

記 ⑤覺意三昧を見よ。

釋摩訶本經

①(日)Shaku-ma-nan-hon-kyō. (支)Shih-mo-nan-pen-ching. ②一卷 ③失譯 ④(參考) 出三藏記第四

釋摩訶本四子經

①(日)Shaku-ma-nan-hon-shi-shi-kyō. (支)Shih-mo-nan-pen-shi-shi-ching. 釋摩訶本經、釋摩訶經、五陰因事經、釋摩訶男本經 ②一卷 ③存、大正一・八四八No. 54. 縮長八、卅一四・一、北888止、南702止、元694止、明北576條、清566條、慶693容、天688止、指649容、法678容、至924容、明南571編、頁580 ④支謙譯 ⑤吳黃武二—建興二(A. D. 223—253)

⑥本經は一に釋摩訶男本經、釋摩訶男經、釋摩訶男本經、五陰因事經ともいひ、中阿含第四百經苦陰經の單譯にして、巴利中部第十四經小苦蘊經(Cāradukkhakhandasutta, M. 1, p. 91.)に該當するものである。中阿含並に巴利文はその内容によりて經名を附し、本經は釋摩訶男を對告衆としての説法なるより、その名を附せしもの。本經は釋摩訶男佛に淫・怒・癡に因れることを訴ふるや、佛世間の樂は少く、苦多きことを説き、更に五欲の禍ひを説き給ひ、未だ正覺を成ぜざる菩薩時代にこの惱みありしことを宣ひ、嘗て王舍城に於て尼健子の苦によつて樂に達すと邪執を破つたことを宣ふものである。本經によりて、尼健子の宿世の惡業は苦行によつてこれを滅し、新業を作らねば一切の苦を脱するといふ、耆那教の思想を知ることが出来る。

釋摩訶本四子經

①(日)Shaku-ma-nan-hon-shi-shi-kyō. (支)Shih-mo-nan-pen-shi-shi-ching. 釋摩訶本經、釋摩訶經、五陰因事經、釋摩訶男本經 ②一卷 ③存、大正一・八四八No. 54. 縮長八、卅一四・一、北888止、南702止、元694止、明北576條、清566條、慶693容、天688止、指649容、法678容、至924容、明南571編、頁580 ④支謙譯 ⑤吳黃武二—建興二(A. D. 223—253)

釋摩訶本四子經

①(日)Shaku-ma-nan-hon-shi-shi-kyō. (支)Shih-mo-nan-pen-shi-shi-ching. 釋摩訶本經、釋摩訶經、五陰因事經、釋摩訶男本經 ②一卷 ③存、大正一・八四八No. 54. 縮長八、卅一四・一、北888止、南702止、元694止、明北576條、清566條、慶693容、天688止、指649容、法678容、至924容、明南571編、頁580 ④支謙譯 ⑤吳黃武二—建興二(A. D. 223—253)

釋摩訶本四子經

①(日)Shaku-ma-nan-hon-shi-shi-kyō. (支)Shih-mo-nan-pen-shi-shi-ching. 釋摩訶本經、釋摩訶經、五陰因事經、釋摩訶男本經 ②一卷 ③存、大正一・八四八No. 54. 縮長八、卅一四・一、北888止、南702止、元694止、明北576條、清566條、慶693容、天688止、指649容、法678容、至924容、明南571編、頁580 ④支謙譯 ⑤吳黃武二—建興二(A. D. 223—253)

釋摩訶本四子經

①(日)Shaku-ma-nan-hon-shi-shi-kyō. (支)Shih-mo-nan-pen-shi-shi-ching. 釋摩訶本經、釋摩訶經、五陰因事經、釋摩訶男本經 ②一卷 ③存、大正一・八四八No. 54. 縮長八、卅一四・一、北888止、南702止、元694止、明北576條、清566條、慶693容、天688止、指649容、法678容、至924容、明南571編、頁580 ④支謙譯 ⑤吳黃武二—建興二(A. D. 223—253)

別譯があり、増一の四一・一の後半又これを参照すべきもの、本經と巴利文並に中阿含苦陰經、法炬譯の苦陰因事經を對照する時は、中阿含のもの巴利文に最も近く、これらの諸譯の間に多少の出入存するも、大體に於てその内容合するものであり、本經には最後に尼健子歸佛して五戒を受くることを附加す。増一には他に存せざる論説を更に附加す。(林五邦)

釋名

①(日)Shaku-myō. ②八卷 ③存 ④明曆二刊 ⑤(正大、二五・三)

釋名格

①(日)Shaku-myō-kaku. 六合釋五例 ②一卷 ③存 ④流水靈教撰 ⑤寛政七刊 ⑥(正大、一〇六・二一四)(京大、日大未・一八二)(龍大、二七三・一一)

釋文記

①(日)Shaku-mon-ki. (支)Shih-wen-ki. ②四十五卷目錄一卷 ③存 ④梅鼎祚纂輯 ⑤寫本(京大、藏・二一・二)

釋門應用

①(日)Shaku-mon-ō-yō. (支)Shih-mén-yang-yung. ②三卷 ③孝述 ④(參考) 新編諸宗教藏總錄第二

釋門歸敬儀

①(日)Shaku-mon-ki-kyō-ji. (支)Shih-mén-kuai-ching-ji. ②二卷 ③存、大正四五・八五四No. 1896. 卅二・一〇・二 ④道宣(開皇一六一—乾封二A. D. 566—667) ⑤唐龍朔元(A. D. 661)

⑥本書は佛教家の尊位塔廟の恭敬禮拜の方法を明したもので、彦起の著した歸敬儀護法記に依るに、道宣が、緇侶の歸敬儀の下衰して敬を修せず聖容を目昧して輕慢を生じ爲に佛門の衰ふるを憂へて彼の著作

別譯があり、増一の四一・一の後半又これを参照すべきもの、本經と巴利文並に中阿含苦陰經、法炬譯の苦陰因事經を對照する時は、中阿含のもの巴利文に最も近く、これらの諸譯の間に多少の出入存するも、大體に於てその内容合するものであり、本經には最後に尼健子歸佛して五戒を受くることを附加す。増一には他に存せざる論説を更に附加す。(林五邦)

別譯があり、増一の四一・一の後半又これを参照すべきもの、本經と巴利文並に中阿含苦陰經、法炬譯の苦陰因事經を對照する時は、中阿含のもの巴利文に最も近く、これらの諸譯の間に多少の出入存するも、大體に於てその内容合するものであり、本經には最後に尼健子歸佛して五戒を受くることを附加す。増一には他に存せざる論説を更に附加す。(林五邦)

なる四分律行事鈔第二十二篇僧像致敬を別出してこれを更に詳述註記して一巻の儀文とせるものであるとして居る。更に了然の歸敬儀通眞記には巻首の述號について「元本に據るに別に序題有り。次に述號を安ず。序文以後は方に是れ本題なり。今茲損の爲めに序分を缺く」と言つて居る。故に本書は元來著者の序文を付せる一巻のものであつたと想像される。護法記に依れば宋宣和(A. D. 1119—1125)中梵瑠師に依り科節を加へられたりとするも今傳はらず。現在大正大藏經に收むるものは日本に於いて永仁三年二月京都東山泉涌寺の觀照が開印板せるもので上下二卷に分たれ著者の序分はない。すべて十篇より成つて居り卷頭に大綱を上げて(一)敬本教興。(二)濟時護法。(三)因機立儀。(四)乘心行事。(五)寄緣貞俗。六引教徵迹。(七)約時科節。(八)威儀有序。(九)功用威通。(十)程器陳迹の十項を列擧して是れに細註をなし全篇の説述の内容を明にして、此れに従つて次いで

の如く、上卷には敬本教興篇第一。濟時護篇第二。隨機立教篇第三。乘心行事篇第四。寄緣貞俗篇第五。引教徵事篇第六。約事科節篇第七。下卷。威容有儀篇第八。功用顯述篇第九。程器陳迹篇第十の十篇を收めて居る。本書は大小二乘經律論三藏に出ずるもので、いやしくも供養歸敬の理論威儀軌禮則に關するものは、總て此れを博搜收載せるものなれば、古來此の種の事に關する最も重要且つ便利なものとして珍重さるゝものである。

⑦〔注釋〕釋門歸敬儀護法記一巻、彦起。釋門歸敬儀通眞記三巻、了然。⑧〔谷大、餘大、四五一〕(高、大、寄、一・二、四)(京、大、藏、四・シ・一)(哲、む、左、一〇)(京、專)

釋門歸敬儀護法記

(佐藤密雄)

①(日)Shaku-mon-ki-kyō-gō-go-hō-ki (支)Shih-mien-kuai-ching-t'ung-chen-chi. ②一巻(卷上現存) ③存、已續二・一〇・一 ④宋彦起撰 ⑤紹興二〇(A. D. 1150)

⑥釋歸敬儀の註釋書であつて、永嘉常寧寺の彦起の作る所であつた註通眞記會合者慧光は「永嘉起律師護法記二巻を著はす。以つて其の幽隱を闡く。惜むべし學者其の完書を見んと欲するも未だ之を得ず。寔に缺典と爲す」と言つて居るが彦起の序には「三巻となす」と言つて居る點より又、現存の上卷の内容より見て元來は三巻あつたものと考へられ、同時に早くより缺本して居つたことが知られる。

現在大日本續藏經中に收むるものは上卷のみにて歸敬儀十篇の中最初の二篇の開科註釋がなされて居る。日本寛文九年九月十四日心王院にて宗覺が寫本せるものと、又享保二年八月二十四日に金峰沙門慈元高淳が泉涌寺の雲林院の藏本を寫し之を大島山傳錄本と校讎訂正せるものとに依つて所收せるもの、様である。本書は歸敬儀に對して「淵源究め難し。未だ仲釋するを聞かず宣和中梵瑠師創めて科節を開くも大義周からず」と言つて、初めて仲釋科註することを記して居る。上

卷のみ現存すと雖も大乘的立場からする理論高深で歸敬儀一部二卷の玄義を知るには必須のものである。

釋門歸敬儀通眞記

(佐藤密雄)

①(日)Shaku-mon-ki-kyō-gō-go-hō-ki (支)Shih-mien-kuai-ching-t'ung-chen-chi. 夾註釋門歸敬儀通眞記、歸敬儀通眞記 ②三巻 ③存、已續二・一〇・二 ④宋了然述、慧光(元祿二 A. D. 1689—)合 ⑤宋開禧三(A. D. 1207)

⑥本書は不空了然律師の著はす所であつた釋門歸敬儀に對して分科註釋せるものである。著者は釋門歸敬儀は「事理該明、文義俱備す。了然是慈潤に泰霑し遺言を奉ずるを獲て慮ひを弁にし愚を竭し軌軌科釋を申し文を三卷に成ず題して通眞と曰ふ」と言つて居る。歸敬儀本文十篇の中、前二篇を上卷に於いて第三篇より第七篇迄を中卷に第八篇より第十篇迄を下卷に於いて釋文して居る。本書の製作發刊については跋文に昭慶戒壇院住持傳南山教觀木菴の識す所に依れば「不空然律師記を撰し以て之を開く。文義煥然理味深遠なり。今門人板に鈔して以て其の傳を廣めんとして予に命じて校讎せしむ。因りて其の歲月を記して之を叙して云ふ」として宋開禧三年(A. D. 1207)五月と記して居る。

現在大日本續藏經中に收めらるゝは日本に於いて元祿二年慧光が會合し排科を繋けたる新刻夾註釋門歸敬儀通眞記三巻であつて、出版に際して「不空然律師(了然)撰す

る所の通眞記三巻並に科文は舊く業行さると雖も文句參差寫誤絡繹にして諸者病こと諸なり。予嘗つて數本を搜索し、同異を讎校し、其脱ける者は之を補ひ餘れるは之を芟き、訛なるは之を正し、疑はしきものは之を詳にして后に至當して歸して而して后數し過きで卷を掩ひ一觀誦の暇に自ら驢めて本文の上に繋科し厥の下に會記し章を逐ふて排布し萃して一書を作り折りて三巻となし顔して夾註釋門歸敬儀と曰ふ」と記されて居る。

元來釋門歸敬儀には護法記と本書の二つの註釋書があるが護法記は古くより缺本して上卷のみしか傳はらぬ爲に本書は歸敬儀の唯一の完全な註疏である。

⑦明曆元刊(谷大、餘大、六九三)寫文八刊(京大、藏、四・シ・三)(龍大、二六一・一・三二)刊本(正大、一〇八・八・七)(哲、む、八・右・二九)元祿二刊(谷大、餘大、三五六二)(龍大、二六一・一・三三) (佐藤密雄)

釋門教誡

(佐藤密雄)

①(日)Shaku-mon-kyō-ji. ②一巻 ③存 ④慧琳(正徳五—寛政元 A. D. 1715—1793)述 ⑤天保一三刊

釋門孝傳

(佐藤密雄)

①(日)Shaku-mon-kyō-ten. ②一巻 ③存 ④高泉性燦(寛永一〇—元祿八 A. D. 1633—1695)撰 ⑤參考、禪籍志卷下 ⑥寛文六刊 ⑦(谷大、餘大、二七三八)(龍大)(京大、一・二・一・二四)(哲、ら、五・右・一九)

釋門作持領會集

(佐藤密雄)

①(日)Shaku-mon-sō-shū. ②五巻 ③存

慈舟纂 ①元祿七刊(谷大、餘大・二六四〇)  
 (京大、日大未・二二六) 寶永七刊(龍大、二  
 六一・二・八一〇)(正大、一〇八六七) 刊本  
 (哲、む・五・右・一)(京專)

**釋門作持領會集考文**

①(日)Shin-  
 ku-mon-sei-ji-kyo-e-shu-ka-mon. ②一卷

③存 ④元祿九寫 ⑤(正大、一〇八六八)

**釋門作持錄要**

①(日)Shaku-mon-  
 sei-ji-roku-ya. ②二卷 ③存 ④慈舟

寶永七刊 ⑤(龍大、二六二二・二二一)(京專)

(正大、一〇八六六)(哲、二・四・左・三三)

**釋門自鏡錄**

①(日)Shaku-mon-ji-  
 kyō-roku. (支)Shi-men-tai-ching-ju. 自  
 鏡錄 ②二卷 ③存 ④大正五一・八〇二No.

2083. ⑤(續)二・二・二 ⑥唐代懷信述

⑦初に懷信(宋高僧傳十九、六學僧傳二十參  
 照)の自序あり、「余九歳に出家し、今に六  
 十を過ぎたり」と云へば本書が著者の晩年  
 の作なるを知る。諸書を抄録し、因果應報  
 等に關する說話を集め、佛教徒の教訓とな  
 し、また懲勸に資すべき所以となさんが爲  
 に十類に分つて篇したものである。即ち

業繁長遠錄一。勅道闡提錄二。輕毀教法  
 錄三。始賢嫉化錄四。忿恚貪鄙錄五。俗  
 學無裨錄六。懈慢不動錄七。(以上卷上)  
 害物傷慈錄八。飲噉非法錄九。慳損僧物  
 錄十(以上卷下)。

以上十科所收七十三條、雅語二章、事蹟  
 七十一人附見十四人である。南北朝時代よ  
 り唐代の事蹟が尤も多く、各條下には多く  
 その出典を出してゐる。中には本書に傳り  
 て他書に傳らざるものもある。例へば三階

教徒に關する二三の事蹟の如きその一例で  
 ある。南北朝より唐代の佛教徒にその信仰  
 的一面を見る上に重要な資料である。わ  
 が慶應寺玄智は自鏡錄の續補を作り卷下の  
 末に附してゐる。且又卷の末尾に玄智は續  
 補述作の由來と自鏡錄に對して本書刊行廣  
 行せしむる所以を述べた安永元年の識語を  
 出してゐる。目次左の如し。

(卷上)

①業繁長遠錄  
 1 西域聖者遠磨蜜多五百世作狗身事。2 西  
 域聖者闍夜多遇見鬼及鳥獸生死久遠事。3  
 西域聖者離越辟支佛會誇人偷牛得報事。4  
 晋沙門慧達死入地獄并宿世犯戒事。5 唐沙  
 門道光多生求度不得官名事。

②勅道闡提錄

1 宋北多寶寺道志偷相珠受苦事。2 北齊晏  
 通盜錢取像現身著地陷事。3 唐思禮作像  
 盜絹神壓打事。

③輕毀教法錄

1 西域無垢友論師謗大乘五舌重出事。2 宋  
 京師東安寺釋慧嚴神誡事。3 齊鄆下大覺寺  
 僧範布薩見神責嚴義事。4 齊鄆下寶明寺僧  
 雲慶布薩被神害事。5 唐襄州神足寺慧旆謗  
 三論拔舌三尺事。

④始賢嫉化錄

1 齊相州道秀變作蛇身事。2 隋揚州自塔寺  
 道契神打殺事。3 唐并州石壁寺僧吐蛇改悔  
 事。4 唐衡州衡岳寺慧期患目苦死事。5 西  
 域須陀洹人得惡病身蟲口臭事。

⑤忿恚貪鄙錄

1 西域沙彌貪味懷恨現身變作龍事。2 漢洛

陽安世高同學法行受蟒蛇身事。3 宋西鎮寺  
 曇遂死作廟神事。4 齊青州道携慳財頻得重  
 病事。5 齊宋州晏亮慳惜變作蛇身事。6 齊  
 齊州道慧錢夜移走事。7 隋相州大慈寺僧綱  
 不好供養神被責事。8 唐濟州靈光寺僧惜鉢  
 暴亡變作蛇身事。9 唐京師勝光寺僧智保死  
 作塔神事。10 唐新羅國興輪寺僧變作蛇身  
 事。

⑥俗學無裨錄

1 西域波爾尼仙造辟論後身無業事。2 宋彭  
 城寺慧琳毀法被流日官事。3 梁偽沙門智枝  
 罷道毀法失音舌卷事。4 唐京師普光寺明解  
 罷道身死託夢求福事。

⑦懈慢不動錄

1 晋沙門支法衡見鐵輪受苦事。2 宋沙門僧  
 規見稱量罪福事。3 宋龍華寺法宗不勤修造  
 得病事。4 宋沙門知達被神責及受罪事。5  
 後魏崇真寺僧慧疑王前見判五僧事。6 唐玄  
 法寺僧玄真破齋受罪事。7 新羅國禪師割肉  
 酬施主事。8 唐相州辯珪弘亮求福事。9 唐  
 西京勝業寺僧慧約見諸僧受苦事。10 南齊竟  
 陵文宣王淨住子略。

(卷下)

⑧害物傷慈錄

1 晋襄陽竺法慧被害井門人折足事。2 晋雀  
 山僧群折鴨翅見受報事。3 宋江陵四厨寺竺  
 慧胤食肉生餓狗地獄事。4 齊合才咬肉入喉  
 苦死事。5 陳揚州智慎爲王誠勸事。6 唐神  
 都太平寺僧威整害蜘蛛事。

⑨飲噉非法錄

1 晋天台山竺曇猷在胎經涉辛地被聖驅事。  
 2 宋新寺沙門難公飲酒被譴事。3 齊鄆下大

莊嚴寺圓通飲酒被聖驅責事。4 齊梁州薛寺  
 僧道遠飲宴眉毛墮落事。5 隋也西隋興寺法  
 四飲酒醉被國王勸誡事。6 唐澤州清化寺玄  
 鑑破酒器及異僧被鬼誡事。7 梁高祖斷酒肉  
 文。

⑩慳損僧物錄

1 西域聖者僧伽耶舍巡海見僧受苦事。2 宋  
 法豐減僧食死作餓鬼事。3 宋京師瓦官寺惠  
 果如廁見鬼求救事。4 齊永興柏林寺弘明見  
 小兒乞救事。5 周益州索寺慧曼盜僧財作牛  
 事。6 禪師輒取僧少菜死作衆奴事。7 隋相  
 州道明侵柴然足事。8 隋冀州僧道相見靈巖  
 寺諸僧受罪苦事。9 唐國清寺僧智壞死作衆  
 奴事。10 唐揚州白塔寺道起冥宮誡勸事。11  
 唐印州割刺約滅弱現敬業穢事。12 唐興州道  
 勝寺慧仙神英受苦事。13 唐京師慈恩寺僧玄  
 昇被冥官追捉事。14 唐汾州啓福寺慧證互用  
 受苦事。15 唐并州義興寺智翰伎僧物徵卒來  
 現事。16 唐汾州界內寺伯達死作寺中事。17  
 唐益州空慧寺僧覺用寺錢鑿額苦死事。18 唐  
 西京勝光寺孝贊取菜噉親得報事

(一)出據

①(續)續補 (塚本善隆)  
 ①(日)Shaku-  
 mon-ji-kyō-roku-in-roku. ②一卷 ③玄  
 智(享保一九一寬政六A.D. 1731—1794)補  
 ④淨土真宗教典志第二に曰く「自鏡錄三卷。  
 唐藍谷沙門懷信作。安永元年壬辰八月。玄  
 智景耀授鐫。且續補新所得者十有七條于  
 卷尾」云々。

**釋門自鏡錄附錄**

①(日)Shaku-  
 mon-ji-kyō-roku-in-roku. ②一卷 ③玄  
 智(享保一九一寬政六A.D. 1731—1794)補  
 ④淨土真宗教典志第二に曰く「自鏡錄三卷。  
 唐藍谷沙門懷信作。安永元年壬辰八月。玄  
 智景耀授鐫。且續補新所得者十有七條于  
 卷尾」云々。

**釋門始事考**

①(日)Shaku-mon-ji-  
 sei-ji-roku. ②一卷 ③存、續史籍集覽第四七

①本書の緒言に「池底叢書要目に云ふ釋門始考は釋家の傳法より始めて、東化西遊の濫觴或は度者出家の根本、或は火葬封塔の起原など總て六十四箇條の標目を立て三國の諸典を證せり。附録に僧官稱謂等をも載せたれど、大方の體裁はや、濫觴抄に似て、毎條に記者の今案を附したり、但近世浮屠氏の撰述と見ゆれど、奥書なく名字も載せれば年紀記者とも考へがたしとあり」と記してある通り、佛門の事物の起原を記したもので、震旦傳教(附三國傳教)。日本傳教。沙門東化。沙門西遊。佛世度人。女人出家。震旦度人。日本度人。世尊說教。翻譯梵文。解釋三藏。僧尼開講。設置都講。西乾像設。東方像設。西乾佛刹。東方佛刹(附尼寺)。法寶輪藏。佛制塔樓。寺院三門。門表刹竿。寶爲方丈。別立禪居(有附錄)。堂安聖僧。門狀金剛。食厨黑神。城樓天王。佛制戒律。西方受戒。震旦傳戒。日本傳戒。傳善薩戒。竺國立境。震旦立境。日本立境。方等戒壇。法眼色章。田相緣起。賜何紫衣。資身道具。毘維法器。諸宗立教。試經度僧。僧尼給牒(度牒、戒牒)。造籍具名。度僧賜臘。公給秩俸。管轄教事。法門軌則。行香唱導。梵唄傳承。置内道場。聖節道場(三教談論)。上元放燈。日本三會。施食二緣。孟蘭盆供。累七齋供(附法華八講)。東土火葬。賜證封塔(附教華)。淨人爲使。の六十一項(緒言には六十四箇條とあるが)について記し、別立禪居の項には五山十刹。禪苑三塔。巡察。普請等が附してある。資身道具の項には偏衫。絡

子。緞衣。裙。直裰。坐具。納播。鈎紐。打包。如意。數珠。錫杖。鉢。淨瓶。水羅。深鑊。排子。柱杖が擧げてある。毘維法器には鐘。鑿。鐃。鼓。版。稚。木魚。螺貝を出し、諸宗立教には三論宗。法相宗。華嚴宗。俱舍宗。成實宗。律宗。天台宗。瑜伽密宗(付咒法及灌頂壇法)。禪宗。本國新立五教として良忍教。源空教。日蓮教。一遍教。親鸞教が擧げてある。聖節道場の項に誕辰談論と誕辰内齋を出し、日本三會には大内御齋會。興福寺維摩會。藥師寺最勝會。圓宗寺法華會。法勝寺大乘會。圓宗寺最勝會が擧げてある。賜證封塔の項に立塔。額塔。教華が出てゐる。

附録として眞丹僧官の項に東晋の僧正、悅樂、僧錄。南朝宗の都邑僧正、都維那、法主、天下僧正、尼正、尼都維那、梁の大僧正、北朝後魏の沙門統、沙門都統。西魏の沙門大統、北齊の昭玄上統、昭玄十統、斷事沙門。後周の三藏、各寺三綱。隋の平等沙門、衆至。唐の十大德、大德、修功德使、檢校、引駕、宗主、臺山僧長、左右街僧錄、勾當、三教首座、兩街鑿義、兩街首座、副僧錄。宋の講經論首座、兩街都僧錄、附金。元の釋教總統。都綱司、釋源宗主、僧錄司、僧綱司、僧正司、僧會司の外僧加僧官と譯經品位とを付してある。日本僧官の下に僧正、大僧正、權僧正、僧都、大僧都、少僧都、權少僧都、權大僧都、律師、中律師、大律師、權律師、威儀師、大成儀師、從儀師、法務、權法務、阿闍梨、一身阿闍梨、十師、十禪師、内供

奉、諸州護師、讀師、諸寺三綱、別當、檢校、無福寺主務、教王寺長者、園城寺長吏、五山僧錄、傳燈五位僧階、四位十三階、貞觀增置僧位三階、法親王、准三宮、賜階階級、僧加僧官を記し、釋氏稱謂の項には國師、大師、禪師、律師、法師、導師、和尙、菩薩、開士、大士、三藏、尊者、上人を擧げ、僧賜別號、僧稱釋氏、朝廷稱臣の三項に就て記載してある。

①明治二八刊(谷大、外小・六三)(帝國、六九・五〇)明治三六刊(正大、一〇八・八六)(中谷在禪)

**釋門事物紀原** ①(日)Shaku-mon-ji. motsu-ten-gen. ②二卷 ③存 ④大内青替(弘化二—大正七A.D. 1843—1918)編

⑤明治一六刊 ①龍大、二九九・九五(京專)(京大、一・二六・九五)(帝國、七・二六)

**釋門集僧軌度圖經** ①(日)Shaku-mon-shū-ji. kō-kyō-kyō. (支)Shih-men-i-chi-kyō. kuai-tu-tu-ching. ②一卷 ③存、日本大藏經小乘律章疏一 ④唐道宣(開皇一六—乾封二A.D. 596—667)

①本書は寺門の鐘磬螺鼓の打法を圖示詳説せるもので、三下法、長打法を明し、十二時毘維法を記して居る。周武帝の所鑄の興善寺銅鐘が維那の節度なき打法に依りて破毀せるを慨して、打鐘の本義、三寶の振起、道念の鳴覺の所以を論じて一打一傷苟くもすべからざるを記して、如法の執杵、發聲の漸稀漸大の仕方を図示明解する。鳴鼓打鐘の一撃各々所念の法あり、又十二時の打鐘に各々儀軌あり、毘維の正軌を知ら

んとする最良の書である。本書の跋記に「四明永寧院比丘行融、大智律師の詳校本を將つて匠に命じて板に鏤す」とある。大日本大藏經の編者は大正六年正月本書を得て小乘律疏の初めに之を収めて流布現在す。

⑦(參考) 智證大師請來目錄、諸宗章疏錄第二 ⑧享保一六刊(正大、一一八・二〇)享保一八刊(谷大、餘大・二二六)(哲、む・八・左・一七)(佐藤密雄)

**釋門疏式** ①(日)Shaku-mon-to-shiki. (支)Shih-men-shu-shih. 雅俗通用釋門疏式 ②十卷 ③存 ④清代如德軒 ⑤光緒四刊(龍大、二〇七・一六)(京大、藏・二四・二五)

**釋門小字典** ①(日)Shaku-mon-shō-jiten. ②一卷 ③存 ④岸上恢嶺(天保一〇—明治一八A.D. 1839—1895)撰 ⑤(正大、一〇一・九八—九九)

**釋門正行懺悔義** ①(日)Shaku-mon-shō-gyō-zan-gō-gi. (支)Shih-men-cheng-hsing-chen-hui-i. ②三卷 ③唐道宣(開皇一六—乾封二A.D. 596—667)述 ⑦(參考) 諸宗章疏錄第二

**釋門正時曆** ①(日)Shaku-mon-shō-jichik. ②二卷 ③存 ④龜海撰 ⑤享保一七刊 ①(正大、一一八・九四・六)

**釋門正統** ①(日)Shaku-mon-shō-tō. (支)Shih-men-cheng-tung. ②八卷 ③存、已續二乙・三・五 ④宗鑑集 ⑤宋嘉熙元(A.D. 1237)

①本書は宋嘉熙元年、良渚の沙門宗鑑が彙集したる、天台宗の記傳史である。これは

もと吳の鎧庵居士之を草したるも、未だ其の業を卒へずして歿したので、宗鑑舊史を増補し、遷の史法に準じて之を完成し、以て釋門の正統は天台宗に在る事を證述したるもので、即ち景德傳燈錄等禪家の所謂傳燈相承の誣罔に對辯したるものと云ふべきである。全八卷其の内容項目を羅列せば左の通りである。

【卷一】

- (一) 娑婆教主釋迦牟尼世尊本紀、附十三人。
- (2) 大伽葉。(3) 阿難。(4) 商那和修。
- (5) 摩田地。(6) 毘多。(7) 提多伽。
- (8) 佛陀難提。(9) 佛陀密多。
- (10) 脇比丘。(11) 富那奢。(12) 馬鳴。(13) 毘羅。
- (14) 天台高祖龍樹菩薩本紀、附十人。
- (1) 提婆。(2) 羅睺羅。(3) 僧伽難提。
- (4) 僧住耶舍。(5) 鳩摩羅駄。(6) 闍夜那。
- (7) 槃駄。(8) 摩奴羅。(9) 鶴勒夜那。
- (10) 師子。(11) 天台祖父北齊南嶽二尊者世家、附五人。
- (1) 大善。(2) 玄光。
- (3) 慧成。(4) 慧超。(5) 慧旻。(6) 天台教主智者靈慧大師世家、附階觀法師。

- (卷二) (一) 山門結集祖師章安尊者世家、附九弟。
- (1) 普明。(2) 智越。(3) 波若。
- (4) 法彦。(5) 大志。(6) 智瓌。(7) 智暍。
- (8) 等觀。(9) 道悅。(10) 山門傳持
- 教觀法華天宮左溪三尊者世家、附三人。
- (1) 神邑。(2) 道遠。(3) 大義。(4) 山門記主荆溪尊者世家、附四人。
- (1) 普門。
- (2) 元皓。(3) 梁肅。(4) 無姓。(5) 山門授受慈修外珣疎宗通七祖師世家、內附二人。
- (1) 最澄。(2) 修雅。(3) 中興教觀法

智大師世家。

- 【卷三】 (一) 身志志。(2) 弟子志。
- (3) 塔廟志。(4) 護法志。
- 【卷四】 (一) 利生志。(2) 順俗志。
- (3) 興衰志。(4) 斥偽志。
- 【卷五】 (一) 荷負扶持傳。(2) 志遠。
- (2) 皓端。(3) 晤恩。(4) 孤山。附四人。
- (1) 文備。(2) 慶昭。(3) 繼齊。(4) 咸潤。
- (三) 本支輝映傳。(1) 懷主。附五人。
- (1) 思悟。(2) 慧辨。(3) 元淨。(4) 從雅。
- (5) 若愚。(四) 扣擊宗途傳。(1) 淨覺。
- (2) 神智。附二人。
- (1) 靈照。(2) 可久。

- 【卷六】 (一) 中興第一世八傳。(1) 則全。(2) 崇矩。(3) 慧才。(4) 本如。(5) 有臻。(6) 慧舟。(7) 瑩光。(8) 文瓌。
- (9) 道因。(一六) 中興第二世十傳。(1) 從諫。(2) 覃異。(3) 溫其。(4) 若水。(5) 希最。(6) 繼忠。(7) 惟湛。(8) 處謙。
- (9) 處成。(10) 有敬。(一七) 中興第三世十三傳。(1) 中立。(2) 梵光。(3) 思恭。(4) 淨果。(5) 擇瑛。(6) 淨梵。(7) 繼慈。
- (8) 宗敏。(9) 擇卿。(10) 齊璧。(11) 應如。(12) 蓮齊。(13) 仲閔。
- 【卷七】 (一) 中興第四世十五傳。(1) 法隣。(2) 覺先。(3) 宗榮。(4) 道琛。(5) 智仙。(6) 了然。(7) 如湛。(8) 法久。
- (9) 神煥。(10) 思梵。(11) 中皎。(12) 有明。(13) 可觀。(14) 晁說之。(15) 陳瓊。
- (一六) 中興第五世五傳。(1) 圓智。(2) 智連。(3) 與成。(4) 慧調。(5) 善榮。(6) 景春。(7) 宗印。(一七) 中興第六世二傳。
- (1) 若訥。(2) 端信。(三) 七世。(1) 慧

- 明。(三) 護法內傳。(1) 法誠。(2) 法嚮。
- (3) 恒景。(4) 飛錫。(5) 梵金。(6) 智瑛。(7) 行滿。(8) 王安石。(9) 子昉。
- (10) 楊傑。(11) 能公。(12) 思洋。(13) 元穎。(14) 鐘離松。(15) 江公望。(16) 吳克己。
- 【卷八】 (一) 護法外傳。(1) 曇鸞。(2) 劉虬。(3) 傅大士。(4) 僧稠。(5) 抱玉。
- (6) 皎然。(7) 延壽。(8) 贊寧。(9) 戒珠。(10) 法端。(11) 義天。(12) 永道。(13) 子光。(14) 葉適。(一四) 禪宗相涉載記。(1) 菩提達磨。(2) 慧可。(3) 慧能。(4) 懷海。(5) 玄覺。(一五) 賢首相涉載記。(1) 法順。(2) 法藏。(3) 澄觀。(4) 宗密。(5) 子璿。(6) 淨源。(7) 義和。(一六) 慈恩相涉載記。(1) 玄奘。(2) 基。(一七) 律定相關載記。(1) 道宣。(2) 元照。(一八) 密宗思復載記。(1) 金剛智。(2) 不空。(3) 無畏。(4) 一行。(一九) 補遺。(1) 後序。(2) 慧命。(3) 慧耀。(4) 法素。

釋門正統圖

一〇三・二一七 日本寫本(內閣) (紀氏隆眞) 一〇三・二一七 日本寫本(內閣) (紀氏隆眞) 一〇三・二一七 日本寫本(內閣) (紀氏隆眞) 一〇三・二一七 日本寫本(內閣) (紀氏隆眞)

釋門章服儀 (日) Shaku mon shu bukai-gi. (支) Shih-mun-chang-ki. 一〇三・二一七 日本寫本(內閣) (紀氏隆眞) 一〇三・二一七 日本寫本(內閣) (紀氏隆眞) 一〇三・二一七 日本寫本(內閣) (紀氏隆眞) 一〇三・二一七 日本寫本(內閣) (紀氏隆眞)

唐顯慶四年(A.D. 659) 唐顯慶四年(A.D. 659) 唐顯慶四年(A.D. 659) 唐顯慶四年(A.D. 659) 唐顯慶四年(A.D. 659) 唐顯慶四年(A.D. 659) 唐顯慶四年(A.D. 659) 唐顯慶四年(A.D. 659) 唐顯慶四年(A.D. 659) 唐顯慶四年(A.D. 659)

(659) 本書は南山道宣が僧侶服装の亂れて一ならざるを憂へとくに絹絲の服を用ふるを慨して作れるものであるが、彼れの大者四分律行事鈔衣篇を別出して是れに増廣省略按配してなせるもので、大小經律論に於ける章服に關するものは總て博搜廣收して章服製作着用の仕方と原理を説くものである。一部十篇より成つて居り、制意釋名篇第一、立體拔俗篇第二、勝德經遠篇第三、法色光俗篇第四、裁製應法篇第五、方量幢相篇第六、單複有據篇第七、縫製裁成篇第八、補洗誠教篇第九、加法行護篇第十が次いで如くに述べられて居る。此の中第一篇に於いて、臥具とは三衣の名なりとするは誤りと論難ざる、點であり、第二篇に「五分は縦ひ衣財を得るも經緯俱に布にして中に一絲を穿つも通じて制斷す」とて絹衣を排して居るもかゝる文句は五分律中にはなく絹衣は其の方法完ければ必ずしも着用を禁ぜられて居る譯でもない。又第八篇中に、安陀衣を作るに「財少不足なれば揀葉屈構す」と四分律にゆるすとして居るが此れに四分には不割截とあつて標葉を許して居らぬい。是の様に本書は其の博索引證の故に論點多く、推斷明解なだけに異論を呼び、絹門の絹衣隨喜を排せんとして嚴に過ぎて論難を受くるある等論せらるべき幾多の問題を藏して居るが、然し乍ら舊律の章服儀軌を明す最良の書なるは言を俟たない。本書は顯慶二年漢陰沙門の賓問を設けて述べられたるもので同四年修治重記して刊

行かれたものである。

〔参考〕 諸宗章疏錄第二 ④寛文七刊  
(龍大、二〇七四・八)(正大、一一八九・四〇)  
刊本(折、心、右・一九)(高木、寄・一・一)

釋門章服儀應法記

①(日)Shaku-mon-shō-fuku-gi-jō-jō-ki (支)Shih-men-chang-fu-i-yōng-fu-chi ②一卷  
③存、已續三・一〇三 ④宋元照(慶曆八  
一政和六A.D. 1048—1116)述、良信(一正  
德三A.D. 1713)合 ⑤宋紹聖元(A.D.  
1091)

⑥道宣の釋門章服儀を科段して詳註せるも  
のである。章服儀の引用該羅文理高遠なる  
をば明解に詳細伸釋せるものである。南山  
律は道宣によりて大成されたるも唐末以後  
甚だ振はなかつたが宋に入りて本書の著者  
元照出で、南山道宣の主義による律を振興  
して、多くの律疏と共に本書を著して南山  
章服律制を主張したのである。本書は現に  
大日本續藏經に收められてあるが此れは日  
本正徳三年(A.D. 1713)に南嶺の良信が會  
合せるもので南都の悦眞の序題が付いて居  
る。悦眞はこの會合について「芝祖嘗て之  
の記の爲に其の蘊を發す。其の本の別行は  
見者に不便あり。良信公は大いに法を荷ふ  
の志あり。此夏兩本を會して梓を錢して行  
ず」と説明して居る。

⑦(参考) 諸宗章疏錄第二 ④寛文七刊  
④(正大、一一八九・四一)(龍大、二〇七四・  
一一)(帝國、二〇九・七二四) (佐藤密雄)  
釋門章服儀應法記會本 ①(日)

Shaku-mon-shō-fuku-gi-jō-jō-ki (支)Shih-men-chang-fu-i-yōng-fu-chi ②一卷  
③存 ④宋元照(慶曆八  
一政和六A.D. 1048—1116)述、良信(一正  
德三A.D. 1713)會 ⑤正徳三刊 ⑥(谷  
大、餘大、四四〇)(京大、藏・四・四)

釋門章服儀翼聖紀

①(日)Shaku-mon-shō-fuku-gi-yōku-shō-ki (支)Shih-men-chang-fu-i-yōku-shō-ki ②一卷  
③存 ④法明述 ⑤(參考)  
法明述 ⑥(參考) 新編諸宗教藏總錄第二  
釋門章服儀科 ①(日)Shaku-mon-shō-fuku-gi-kyō (支)Shih-men-chang-fu-i-kyō ②一卷  
③法明述 ④(參考) 新編諸宗教藏總錄第二

釋門眞孝錄

①(日)Shaku-mon-shin-kō-rokū (支)Shih-men-shen-chen-ki-shiao-lu ②五卷  
③存 ④明張黃活輯 ⑤刊本(京  
大、藏・二四〇・二四)

釋門徒然草

①(日)Shaku-mon-tsuzure-gusa ②四卷  
③存 ④安永三刊

釋門度人略法式

①(日)Shaku-mon-do-nin-ryaku-hō-shiki ②一卷  
③存 ④靈海撰 ⑤寫本(正大、一〇八・七二)  
釋門排韻 ①(日)Shaku-mon-hai-in ②存  
③(参考) 釋籍目錄、日本釋林撰述書目

釋門文章軌範

①(日)Shaku-mon-bun-shō-han ②四卷  
③存 ④佐々木  
狂介編 ⑤明治二九刊(龍大、二〇五二・二  
〇)明治三二刊(龍大、研究)

釋門野史

①(日)Shaku-mon-yashi ②一卷  
③存 ④寫本(京大、藏・二四  
〇・二六)

⑤釋門遺弟手鏡 ①(日)Shaku-mon-yū-tei-te-kagami ②一卷  
③存 ④上田  
照通(文政一一明治四〇A.D. 1828—  
1907)述 ⑤明治三二刊 ⑥(高木、寄・一・  
二四)

釋門要心

①(日)Shaku-mon-yō-jin ②一卷  
③存 ④堀江慶了(一明治二九A.  
D. 1896)述 ⑤寫本(谷大)

釋問經

①(日)Shaku-mon-gyō (支)Shih-wen-chang (日)D. 21 Sakkapittha S.  
②存、中阿含經第三(大正一・六三二No.  
26. 134)

釋聞教義

①(日)Shaku-mon-kyō-ji ②一卷  
③存 ④慧琳(正徳五寛政  
元A.D. 1715—1789)述 ⑤寫本(谷大)

釋瑜伽記

①(日)Shaku-yū-gi-ki ②十三卷  
③(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2309  
釋要鈔 ①(日)Shaku-yō-shō ②雙  
丘洞空(貞享四A.D. 1687)作 ③(參  
考) 淨土真宗教典志第三

釋楞嚴經

①(日)Shaku-rōng-kin ②一卷  
③存、已續一・三・五、紫柏尊者全集卷一  
之内 ④明代眞可撰

⑤本書は、慈山德清禪師が首楞嚴經を讀み  
七處微心に至つて省悟する處あり、始めて如  
來の心が吾が心、吾が疑は阿難の疑、吾が  
疑の消滅するとき阿難の疑有る無しと爲  
し、七處微心の辯を爲す學者の初微難から

ず後の六者難しと爲すは、實に苦心を經ざ  
るが故であるとして、多聞第一の尊者阿難が  
道力を具せざるが故に、姪女摩登伽に苦し  
められ、佛所に飯來悲泣して佛の説法を啓  
請せし時、一切衆生の無始より以來、生死  
三九(卷二、一帖寛文七刊(高木、寄・一・三  
九)(京大))

釋論

①(日)Shaku-ron (支)Shih-lun ②一卷  
③缺 ④失譯 ⑤(參考)  
出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第五、  
靜泰錄第五、開元錄第五、第一五、貞元錄  
第八、第二五。

釋論安養鈔

①(日)Shaku-ron-an-yō ②一卷  
③存、皆な常住の眞心、性淨明  
の體を知らずして、諸の妄想を用ゆるに由  
れりとして、明心に就て本經玄妙の深義を釋  
したものである。即ち第一に七處微心に就  
て所見を語り、次で明心とは何の心を明む  
るや、眞心を明むと爲すや、妄心を明むと  
爲すやと論述し、卷四の「彼の覺明に由つ  
て、有明の明覺彼の精了を失つて妄を黏じ  
て光を發す、是を以て汝今、暗を離れ明を  
離れては見の體あること無し」云々の一項  
を引用して、明暗心眼を説き、終りに眞心  
は一多、偏不偏を離るとき能く一多偏不  
偏たるの妙義を説いたものである。首楞嚴  
經の註疏數十家を下らず、諸説殆んど依文  
解義、諸註の組合せを異にするのみとの觀  
ある中に、本書が簡短に其の要點を論釋し  
た事は可とすべきであらう。

釋六十二見經

①(日)Shaku-juuni-jin-kin ②一卷  
③存、大久保堅瑞

釋六十二見經 ①(日)Shaku-juuni-jin-kin ②一卷  
③存、大久保堅瑞

ji-ni-ken-gyō. (支) Shih-hu-shih-erh-chen-ching. ②四卷或は一巻 ③缺 ④宋求那跋陀羅大元一九一泰始四 A.D. 394—403) 譯 ⑤(參考) 仁壽錄第五、靜泰錄第五、武周錄第一、開元錄第一、貞元錄第二、五。

**釋論** ①(日) Shaku-ron. (支) Shih-jun. 釋摩訶衍論 ②十卷 ③存、大正三二・五九一 No. 1668 縮餘・九 ④龍樹造、姚秦後提摩多譯 ⑤釋摩訶衍論の下を見よ。

⑥平安朝時代寫高、寄・一・三九 建治元寫(高、寄・一・三九)卷五建文九寫(高、寄・一・三九)二冊應永一三快全口(高、寄・一・三九) 安養抄、釋論勸劣向勝不退門論義 ⑦三卷 ⑧存 ⑨印融(永享七—永正一六 A.D. 1435—1519) 述 ⑩安養抄の下を見よ。 ⑪(參考) 諸宗章疏錄第三 ⑫(京專) 寫本(明王院)

**釋論謂立** ①(日) Shaku-ron-i-ryō. ②一巻 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

**釋論緣起流轉記** ①(日) Shaku-ron-en-gi-ru-den-ki. ②二巻 ③存 ④印融(永享七—永正一六 A.D. 1435—1519) 述 ⑤打集聽書を布衍せる書にして釋論の流轉、一論の大綱等につき記したる。

⑥明應五寫 ⑦(寶壽院)

**釋論應教抄** ①(日) Shaku-ron-ō-shō. 釋摩訶衍論應教抄 ②三巻 ③存、大正六九・五八四 No. 2388 ④道範(元

暦元—建長五 A.D. 1184—1252) 說建長四、年七五寂) 述 ①釋摩訶衍論應教抄の下を見よ。 ②(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄 ③文永二寫(寶壽院) 嘉永二、三寫、明治二、二刊(高、寄・一・三九)

**釋論開解鈔** ①(日) Shaku-ron-kai-ge-shō. 釋摩訶衍論開解鈔 ②三十六巻 ③存、日本大藏經真言密教論章疏卷上 ④頼瑜(嘉祿二—嘉元二 A.D. 1226—1304) 述 ⑤釋摩訶衍論開解鈔の下を見よ。 ⑥(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄 ⑦南北朝—足利時代寫(寶龜院)、寶德三寫(寶壽院) 承應二刊(正大、一一九三・一一七・一七〇)(高、寄・一・三九)(京專)

**釋論勸注** ①(日) Shaku-ron-kan-ku. 釋摩訶衍論勸注 ②二十四巻 ③存、大正六九・六〇三 No. 2290 ④頼實述 ⑤元應二(A.D. 1320) ⑥釋摩訶衍論勸注の下を見よ。 ⑦(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄 ⑧元應二刊 ⑨二四冊(高、寄・一・三九)(哲、七・七右二二)

**釋論記** ①(日) Shaku-ron-ki. (支) Shih-jun-ki. 釋摩訶衍論記、釋論聖法記 ②一巻 ③存、已續一・七二、四 ④唐代聖法述 ⑤釋摩訶衍論記(下)を見よ。 ⑥(京專)

**釋論記** ①(日) Shaku-ron-ki. (支) Shih-jun-ki. 釋摩訶衍論記、普觀記 ②六巻 ③存、已續一・七三、一 ④宋代普觀述 ⑤釋摩訶衍論記の下を見よ。 ⑥弘安一〇刊(寶壽院) 刊本(高、寄・一・三九)(哲、ま・七・中・六)

**釋論義** ①(日) Shaku-ron-gi. 釋論義 若觀被佛事末那六相事 ②一巻 ③存 ④寫本(寶壽院)

**釋論開書** ①(日) Shaku-ron-kai-shō. ②一冊 ③存 ④寫本(高、寄・一・三九)

**釋論開書** ①(日) Shaku-ron-kai-shō. ②七巻 ③存 ④聖德(德治二—明德三 A.D. 1307—1392) 述(定俊(文中元 A.D. 1372)一記) ⑤刊本(高、寄・一・三九)

**釋論聽書** ①(日) Shaku-ron-ki-ki. ②八帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

**釋論口筆** ①(日) Shaku-ron-ku-hi. ②二巻 ③存 ④果實(德治元—貞治元 A.D. 1306—1362) ⑤釋論卷十を釋したる。 ⑥(參考) 章疏錄

**釋論愚案鈔** ①(日) Shaku-ron-gu-an-shō. 釋摩訶衍論愚案鈔 ②七巻或十巻 ③存 ④印融(永享七—永正一六 A.D. 1435—1519) 記 ⑤釋摩訶衍論愚案鈔の下を見よ ⑥(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄 ⑦承應三及延寶三刊(高、寄・一・三九) 刊本(京專)

**釋論愚案鈔** ①(日) Shaku-ron-gu-an-shō. 愚案鈔、釋摩訶衍論愚案鈔 ②一巻 ③存、日本大藏經真言密教論章疏卷上 ④覺鑒(嘉保二—康治二 A.D. 1095—1143) ⑤愚案鈔の下を見よ。 ⑥(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄

**釋論愚艸** ①(日) Shaku-ron-gu-ō. 釋摩訶衍論愚艸 ②二十二巻 ③存 ④頼瑜(嘉祿二—嘉元二 A.D. 1226—1304) 述 ⑤釋摩訶衍論に關する論草七十三條を集めたもの。 諸宗章疏錄第三に曰く「按、一本録云。此内終四卷迎接院作」云々。

⑥(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄 ⑦明應四寫(寶壽院) 寫本(寶龜院)(寶壽院)

**釋論空記** ①(日) Shaku-ron-ka-ki. ②八巻 ③(參考) 章疏錄

**釋論科註** ①(日) Shaku-ron-ka-ku. 釋摩訶衍論科註 ②二十巻 ③存 ④覺眼(寶永二〇—享保一〇 A.D. 1643—1725) ⑤(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄

**釋論科名目** ①(日) Shaku-ron-ka-myō-moku. ②一冊 ③存 ④刊本(高、寄・一・三九)

**釋論科文** ①(日) Shaku-ron-ka-mon. ②一巻 ③存 ④印融(永享七—永正一六 A.D. 1435—1519) ⑤(參考) 眞言宗全書刊行豫定目錄

**釋論快抄** ①(日) Shaku-ron-kwai-shō. 釋摩訶衍論快抄、釋論鈔 ②四十五冊、百四十巻 ③存 ④有快(貞和元—應永二三 A.D. 1345—1416) 述 ⑤釋摩訶衍論鈔の下を見よ。 ⑥(京專)

**釋論卷第一聞書打集** ①(日) Shaku-ron-kwan-dai-ichi-ki-ki-gaki-da-shū. 釋論卷第一聞書打集緣起題額寶口 ②一帖 ③存 ④寫本(寶壽院)

**釋論卷第五聞書後** ①(日) Shaku-ron-kwan-dai-go-ki-ki-gaki-go. 釋論卷第



五開書後第五日至十日 ②三帖 ③存 ④長譽(一應永三〇 A. D. 1423)記 ⑤明應二寫 ⑥(寶壽院)

**釋論卷八決擇抄** ①(日)Shaku-ron-kwan-hachi-ke-chaku-shō. ②二卷 ③存 ④永享九寫 ⑤(寶壽院)

**釋論勸劣向勝** ①(日)Shaku-ron-kwan-retsu-ko-shō. ②一卷 ③運做(慶長一九一元祿六 A. D. 1614—1693) ④(參考) 章疏錄

**釋論勸劣向勝不退門論義** ①(日)Shaku-ron-tai-mon-ron-gi. 釋論安養鈔、安養鈔三卷 ②存 ③印融(永享七—永正一六 A. D. 1433—1519)述 ④安養抄の下の見よ。

**釋論啓蒙** ①(日)Shaku-ron-keimon. 釋摩訶衍論啓蒙 ②四十一卷 ③存 ④運做(慶長一九一元祿六 A. D. 1614—1693)述 ⑤釋摩訶衍論啓蒙のを見よ。

⑥(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄 ⑦延寶七刊(龍大、二四三五・一六)(五智院)貞享元刊(正大、一四四・二六七—二六八)貞享二刊(正大、一四四・三九)寫本(金剛三昧院)

**釋論決疑鈔** ①(日)Shaku-ron-ke-tsui-gi-shō. 釋摩訶衍論決疑破難會釋抄、釋摩訶衍論決疑鈔、釋論破難決疑會釋 ②一卷 ③存、大正六九・五七〇 No. 2285 ④濟涅(萬壽二—永久三 A. D. 1025—1115)述 ⑤釋摩訶衍論決疑破難會釋抄の下の見よ。 ⑥(參考) 章疏錄 ⑦寫本(寶壽院)

**釋論決擇集** ①(日)Shaku-ron-ke-chaku-shū. 釋摩訶衍論決擇集、釋論決擇

鈔 ②十七卷或二十卷 ③存、日本大藏經真言密教論疏卷下 ④有快(貞和元—應永三三 A. D. 1345—1416)快全等集 ⑤釋摩訶衍論決擇集の下の見よ。 ⑥(參考) 諸宗章疏錄第三 ⑦慶安元及安永六刊(高大、寄・一・三九)嘉永二刊(正大、一一九三・一一四)刊本(哲、ま・七・右、一)(京專)(正大、一九三・一一三)徳川時代寫(寶龜院)

**釋論決擇集調立會釋** ①(日)Shaku-ron-ke-chaku-shū-tō-ryū-e-shaku. ①寫本(龍大、研佛)

**釋論決擇鈔** ①(日)Shaku-ron-ke-chaku-shō. 釋摩訶衍論決擇集、釋論決擇集 ②十七卷或二十卷 ③存、日本大藏經真言密教論疏卷下 ④有快(貞和元—應永三三 A. D. 1345—1416)集 ⑤釋摩訶衍論決擇集の下の見よ。 ⑥(參考) 章疏錄

**釋論顯秘鈔** ①(日)Shaku-ron-kem-pi-shō. 釋摩訶衍論顯秘鈔 ②十八卷 ③存 ④濟涅(萬壽二—永久三 A. D. 1025—1115) ⑤(參考) 章疏錄

**釋論玄** ①(日)Shaku-ron-gen. (支)Shih-jun-istan. ②一卷 ③陳慧思(延昌四—大建九 A. D. 515—577)述 ④(參考) 諸宗章疏錄第二

**釋論古草** ①(日)Shaku-ron-ko-so. ②二册 ③存 ④寫本(高大、一・三九)足利時代寫(寶善提院)

**釋論綱目** ①(日)Shaku-ron-ko-mo=ku. ②一卷 ③義綱述。 ④(參考) 章疏錄

**釋論廣短冊** ①(日)Shaku-ron-kō-tan-zaku. 釋摩訶衍論第十廣短冊、勸劣向

勝不退門廣短冊、釋摩訶衍論廣短冊、釋論短冊 ②一卷 ③存、大正七九・五九一 No. 2357、日本大藏經真言密教論疏卷下 ④賴瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304)順繼(文應元—延慶元後 A. D. 1260—1305)記 ⑤釋摩訶衍論第十廣短冊の下の見よ。 ⑥(參考) 章疏錄 ⑦刊本(正大、一四四・四〇)(哲、ま・六・左・九)(京專)(龍大、二四三五・七)

**釋論廣名目** ①(日)Shaku-ron-kō-myō-moku. ②一卷 ③印融(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519)記 ④(參考) 章疏錄

**釋論敲推錄** ①(日)Shaku-ron-ko-sai-toku. ②三十四卷 ③存 ④良恭記 ⑤天明五寫 ⑥(高大、寄・一・三九)

**釋論講筵** ①(日)Shaku-ron-kō-en. ②七卷 ③存 ④亮海述 ⑤(參考) 真言宗全書刊行豫定目録

**釋論講義筆記** ①(日)Shaku-ron-kō-gi-hiki-ki. ②二軸 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶善提院)

**釋論講草** ①(日)Shaku-ron-kō-sō. ②五册 ③存 ④寫本(高大、寄・一・三九)

**釋論講要** ①(日)Shaku-ron-kō-yō. ②十一册 ③存 ④寫本(高大、寄・一・三九)

**釋論講要條目** ①(日)Shaku-ron-kō-yō-jō-moku. ②一册 ③存 ④寫本(高大、寄・一・三九)

**釋論講要補闕第三** ①(日)Shaku-ron-kō-yō-ho-keisu-dai-san. ②一册 ③存 ④寫本(高大、寄・一・三九)

**釋論講義** ①(日)Shaku-ron-kō-gi. ②七册 ③存 ④亮海述 ⑤(參考) 真言宗全書刊行豫定目録

**釋論三師指掌圖** ①(日)Shaku-ron-san-shi-shi-shō-zu. 釋摩訶衍論三師科指掌圖 ②三卷 ③存 ④長典述 ⑤(參考) 章疏錄 ⑥寛文九刊 ⑦(龍大、二四三五・一七)

**釋論贊玄疏** ①(日)Shaku-ron-san-gen-shō. (支)Shih-jun-tsan-istan-sa. 釋摩訶衍論贊玄疏、釋論通法疏、釋論疏 ②五册 ③存、己續一・七二・五 ④宋代法悟述 ⑤釋摩訶衍論贊玄疏の下の見よ。 ⑥正應元刊(寶壽院) 刊本(高大、寄・一・三九)(哲、ま・七・中、一)三帖平安朝時代寫(高大、寄・一・三九)

**釋論私記** ①(日)Shaku-ron-shi-ki. 釋摩訶衍論私記 ②一卷或二卷 ③存、大正六九・五九三 No. 2289、日本大藏經真言密教論疏卷下 ④信堅(正元元—元亨二 A. D. 1259—1322)述 ⑤釋摩訶衍論私記の下の見よ。 ⑥(參考) 章疏錄 ⑦寛文九刊 ⑧(高大、寄・一・三九)(京專)(哲、ま・六・左二〇)

**釋論私記** ①(日)Shaku-ron-shi-ki. ①果實(徳治元—貞治元 A. D. 1306—1362)述 ⑦(參考) 章疏錄

**釋論私鈔** ①(日)Shaku-ron-shi-shō. ②二帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

**釋論指事** ①(日)Shaku-ron-shi-ji. 真言所學釋摩訶衍論指事、釋摩訶衍論指事

勝不退門廣短冊、釋摩訶衍論廣短冊、釋論短冊 ②一卷 ③存、大正七九・五九一 No. 2357、日本大藏經真言密教論疏卷下 ④賴瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304)順繼(文應元—延慶元後 A. D. 1260—1305)記 ⑤釋摩訶衍論第十廣短冊の下の見よ。 ⑥(參考) 章疏錄 ⑦刊本(正大、一四四・四〇)(哲、ま・六・左・九)(京專)(龍大、二四三五・七)

**釋論廣名目** ①(日)Shaku-ron-kō-myō-moku. ②一卷 ③印融(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519)記 ④(參考) 章疏錄

**釋論敲推錄** ①(日)Shaku-ron-ko-sai-toku. ②三十四卷 ③存 ④良恭記 ⑤天明五寫 ⑥(高大、寄・一・三九)

**釋論講筵** ①(日)Shaku-ron-kō-en. ②七卷 ③存 ④亮海述 ⑤(參考) 真言宗全書刊行豫定目録

**釋論講義筆記** ①(日)Shaku-ron-kō-gi-hiki-ki. ②二軸 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶善提院)

**釋論講草** ①(日)Shaku-ron-kō-sō. ②五册 ③存 ④寫本(高大、寄・一・三九)

**釋論講要** ①(日)Shaku-ron-kō-yō. ②十一册 ③存 ④寫本(高大、寄・一・三九)

**釋論講要條目** ①(日)Shaku-ron-kō-yō-jō-moku. ②一册 ③存 ④寫本(高大、寄・一・三九)

**釋論講要補闕第三** ①(日)Shaku-ron-kō-yō-ho-keisu-dai-san. ②一册 ③存 ④寫本(高大、寄・一・三九)

勝不退門廣短冊、釋摩訶衍論廣短冊、釋論短冊 ②一卷 ③存、大正七九・五九一 No. 2357、日本大藏經真言密教論疏卷下 ④賴瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304)順繼(文應元—延慶元後 A. D. 1260—1305)記 ⑤釋摩訶衍論第十廣短冊の下の見よ。 ⑥(參考) 章疏錄 ⑦刊本(正大、一四四・四〇)(哲、ま・六・左・九)(京專)(龍大、二四三五・七)

**釋論廣名目** ①(日)Shaku-ron-kō-myō-moku. ②一卷 ③印融(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519)記 ④(參考) 章疏錄

**釋論敲推錄** ①(日)Shaku-ron-ko-sai-toku. ②三十四卷 ③存 ④良恭記 ⑤天明五寫 ⑥(高大、寄・一・三九)

**釋論講筵** ①(日)Shaku-ron-kō-en. ②七卷 ③存 ④亮海述 ⑤(參考) 真言宗全書刊行豫定目録

**釋論講義筆記** ①(日)Shaku-ron-kō-gi-hiki-ki. ②二軸 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶善提院)

**釋論講草** ①(日)Shaku-ron-kō-sō. ②五册 ③存 ④寫本(高大、寄・一・三九)

**釋論講要** ①(日)Shaku-ron-kō-yō. ②十一册 ③存 ④寫本(高大、寄・一・三九)

**釋論講要條目** ①(日)Shaku-ron-kō-yō-jō-moku. ②一册 ③存 ④寫本(高大、寄・一・三九)

**釋論講要補闕第三** ①(日)Shaku-ron-kō-yō-ho-keisu-dai-san. ②一册 ③存 ④寫本(高大、寄・一・三九)

②二卷 ③存、大正六九・五六一 No. 2384、弘法大師全集第三、日本大藏經真言密教論章疏上 ④空海(實龜五一承和二 A. D. 774—835)述 ⑤釋摩訶衍論指事の下を見よ。  
 ⑦(參考) 章疏錄 ⑧元祿七刊(智山覺眼開板) ⑨(正大、一四三二・二六三)(高大、寄・一・三九)(高專)

**釋論指事** ①(日) Shaku-ron-shi-ji. 釋摩訶衍論指事 ②一卷 ③存、大正六九・五六四 No. 2385 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤釋摩訶衍論指事 ⑥下を見よ。⑦(參考) 諸宗章疏錄第三章疏錄

**釋論指事** ①(日) Shaku-ron-shi-ji. 國譯釋論指事 ②一卷 ③存、國譯密教論釋部第二 ④國譯密教刊行會編

**釋論指事抄** ①(日) Shaku-ron-shi-ji-shō. ②三卷 ③妙瑞(—實曆頃 A. D. 1751—1763—)述 ④(參考) 章疏錄

**釋論指南鈔** ①(日) Shaku-ron-shi-nan-shō. 釋摩訶衍論指南鈔鈔物、釋論指南鈔鈔物 ②十卷 ③存 ④印融(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519)述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄 ⑥刊本(高大、一三九)(京專)萬治元刊(高大、寄・一・三九)(龍大、二四三五・一八)刊本(哲、ま・七・中二六)(京專)

**釋論指南鈔鈔物** ①(日) Shaku-ron-shi-nan-shō-tsuri-mono. 釋摩訶衍論指南鈔鈔物、釋論指南鈔 ②十卷 ③存 ④印融(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519)述 ⑤萬治元刊(高大、寄・一・三九)(龍大、二四三五・一八)刊本(哲、ま・七・中二六)(京專)

**釋論疏** ①(日) Shaku-ron-shō. (支) Shih-tun-su. 次第屬當釋本論文刪補三卷別行疏、釋摩訶衍論疏 ②六卷 ③存 ④唐代法敏述 ⑤釋摩訶衍論疏の下を見よ。⑥寬政一一寫 ⑦(高大、寄・一・三九)

**釋論自鈔** ①(日) Shaku-ron-ji-shō. 釋摩訶衍論自鈔 ②五卷 ③存 ④妙瑞述 ⑤實曆三一四(A. D. 1753—1754) ⑥釋摩訶衍論自鈔の下を見よ。⑦(參考) 章疏錄 ⑧寫本(持明院)

**釋論十二鈔** ①(日) Shaku-ron-ji-shō. ②三冊 ③存 ④日輪寺良和口 ⑤刊本(高大、寄・一・三九)足利時代寫(寶龜院)

**釋論十二鈔私記** ①(日) Shaku-ron-ji-shō-shi-ki. ②十卷 ③存 ④長覺(曆應三一應永二三 A. D. 1340—1416)記 ⑤良和の釋論十二鈔に據りて記述された釋論に關する、東密古義派諸門の百五ヶ條に互る論則集である。

⑦(參考) 章疏錄 ⑧寶永四刊 ⑨(京專)(正大、一一九三・一二〇)(高大、寄・一・三九)(哲、ま・六・左・一〇)寫本(寶龜院)

**釋論重校抄** ①(日) Shaku-ron-ji-shō-shō. ②二冊 ③存 ④嘉永元寫(高大、寄・一・三九)應永一六寫(寶壽院)

**釋論初心問答鈔** ①(日) Shaku-ron-shō-shim-mon-do-shō. ②二十卷 ③存 ④印融(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519)述 ⑦(參考) 章疏錄 ⑧寫本(無量光院)

**釋論疏** ①(日) Shaku-ron-shō. (支) Shih-tun-su. 次第屬當釋本論文刪補三卷別行疏、釋摩訶衍論疏 ②六卷 ③存 ④唐代法敏述 ⑤釋摩訶衍論疏の下を見よ。⑥寬政一一寫 ⑦(高大、寄・一・三九)

**釋論疏** ①(日) Shaku-ron-shō. (支) Shih-tun-su. 次第屬當釋本論文刪補三卷別行疏、釋摩訶衍論疏 ②六卷 ③存 ④唐代法敏述 ⑤釋摩訶衍論疏の下を見よ。⑥寬政一一寫 ⑦(高大、寄・一・三九)

Shih-tun-su. 釋摩訶衍論贊玄疏、釋論贊玄疏、釋論通法疏 ②五卷 ③存、已續一・七二・五 ④宋代法悟述 ⑤釋摩訶衍論贊玄疏の下を見よ。

**釋論疏** ①(日) Shaku-ron-shō. (支) Shih-tun-su. ②二十卷 ⑦(參考) 傳教大師將來台州錄

**釋論諸鈔類聚** ①(日) Shaku-ron-shō-shū-rui-jū. ②二冊 ③存 ④釋論打集開書、釋論序開書等を聚めたもの。

⑤刊本(高大、一・三九) ⑥刊本(高大、一・三九) ⑦(參考) 章疏錄 ⑧寶永二(A. D. 1705) ⑨(參考) 章疏錄 ⑩刊本(哲、ま・六・左・二)(龍大、二四三五・一一)

**釋論序抄** ①(日) Shaku-ron-jo-shō. ②省快(貞和元—應永二三 A. D. 1345—1416) ③(京專)

**釋論序抄** ①(日) Shaku-ron-jo-shō. 釋摩訶衍論序抄 ②一卷 ③存、日本大藏經真言密教論章疏錄卷上 ④賴瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1296—1304)述 ⑤釋摩訶衍論序抄の下を見よ。⑦(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄 ⑧明曆四刊 ⑨(高大、寄・一・三九)(谷大、餘大・三三五九)

**釋論序抄** ①(日) Shaku-ron-jo-shō. ②一卷 ③賢實(正慶二—應永五 A. D. 1333—1398) ④(參考) 章疏錄

**釋論序註** ①(日) Shaku-ron-jo-chū. 釋摩訶衍論序註 ②二卷 ③存 ④亮汰(元和八—延寶八 A. D. 1622—1680)述 ⑤足利時代寫(寶龜院)寬文一〇刊(高大、寄・一・三九)(京專)

利時代寫(寶龜院)寬文一〇刊(高大、寄・一・三九)(京專)

**釋論抄** ①(日) Shaku-ron-shō. 釋摩訶衍論抄 ②五卷 ③存 ④快道(寶曆元—文化七 A. D. 1751—1810)述 ⑤寫本(正智院)

**釋論抄** ①(日) Shaku-ron-shō. ②一卷 ③存 ④康曆二寫 ⑤(寶壽院)

**釋論抄** ①(日) Shaku-ron-shō. 釋摩訶衍論抄 ②四十五卷 ③存 ④省快貞和元—應永二三 A. D. 1345—1416)述 ⑤釋摩訶衍論抄の下を見よ。⑦(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄 ⑧鎌倉時代寫(高大、寄・一・三九)十六卷(京專)十九卷(高大、一・三九)明曆三刊(高大、寄・一・三九)足利時代寫、永德二寫(寶龜院)

**釋論抄** ①(日) Shaku-ron-shō. ②七卷 ⑦(參考) 章疏錄

**釋論鈔聞書** ①(日) Shaku-ron-shō-iki-gaki. ②十卷 ③存 ④果實(德治元—貞治元 A. D. 1306—1362)述 ⑦(參考) 章疏錄 ⑧寫本(正智院)

**釋論鈔出** ①(日) Shaku-ron-shō-shutsu. ②二十五卷 ③存 ④賴瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1296—1304)述 ⑦(參考) 諸宗章疏錄第三 ⑧延文三寫(寶壽院)寫本四帖(高大、寄・一・三九)

**釋論鈔書** ①(日) Shaku-ron-shō-shō. ④賴瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1296—1304)述 ⑦(參考) 章疏錄

名所行發⑩(名庫書)著錄所現⑨ 月年の刊寫⑧(書考參書釋註)書末⑦ 説録存内⑥ 代年作著⑤ 著書④ 缺存③ 數卷②(名書)名題① 號略字數

訶衍論記、釋論記 ②一卷 ③存 ④正續一・

七二・四 ④唐代律法鈔 ⑤釋摩訶衍論記  
の下を見よ。⑥平安朝末期寫(寶壽院)文化  
八寫(高大、寄・一・三九)刊本(高大・寄・一・  
三九)(正大、一四〇・一)(京專)

釋論定俊抄 ①(日) Shaku-ron-jo-  
shun-shō. 釋摩訶衍論定俊鈔、聞書 ②十  
卷 ③存 ④定俊快深述 ⑤永和五(A. D.  
1379) ⑦【參考】 諸宗章疏錄第三、章錄  
疏

⑧刊本(哲、ま・七・中・一六)(京專)明曆三刊  
(龍六、二四三五・一九)

釋論眞偽之事 ①(日) Shaku ron-  
shin-gi-no-koto. ②二卷 ⑦【參考】 章  
疏錄

釋論專釋鈔 ①(日) Shaku-ron-sen-  
shaku shō. ②六卷 ③存 ④亮典(慶長  
一一一)承應元 A. D. 1607—1652)述 ⑦【參  
考】 章疏錄

釋論專釋鈔蒙引 ①(日) Shaku-ron-  
sen-shaku shō-mō-in. ②十卷 ③存  
④章祐(正保二—享保二 A. D. 1645—1717)  
述 ⑦【釋論專釋鈔を講じたもの。】⑦【參考】  
章疏錄

釋論禪門決鈔 ①(日) Shaku-ron-  
zen-mon-ke-sshi. ②一卷 ④頼瑜(嘉祿  
二—嘉元二 A. D. 1226—1304) ⑤諸宗章  
疏錄第三に曰く「按、一作問答鈔三十卷、  
未知、何正、云々。】⑦【參考】 章疏錄

釋論續疑問鈔 ①(日) Shaku-ron-  
zoku-gi-mon-shō. ②一卷 ⑤章疏錄に曰  
く「祥道師云、遍明院にあり。但破信賢私

記云々。

釋論續決擇集 ①(日) Shaku-ron-  
zoku-kec-chaku-shū. ②十卷 ③存  
宥快(貞和元—應永二三 A. D. 1345—1416)  
口 ④刊本(高大、寄・一・三九)

釋論續々決擇集 ①(日) Shaku-ron-  
zoku-zoku-kec-chaku-shū. ②三卷 ③  
存 ④宥快(貞和元—應永二三 A. D. 1345  
—1416)口 ⑤寫本(高大、寄・一・三九)

釋論打集聞書 ①(日) Shaku-ron-  
da-shū-ki-ki-gaki. 釋摩訶衍論打集聞書  
②一卷 ③存 ④宥快(貞和元—應永二三  
A. D. 1345—1416)口 ⑤徳川時代寫(寶龜  
院)明治一三寫(高大、寄・一・三九)

釋論大事 ①(日) Shaku-ron-dai-ji.  
②三紙一裏 ③存 ④釋摩訶衍論に就て、  
秘印明を傳ふる大事を記す。⑤徳川時代寫  
⑥【寶龜院】

釋論第一卷下卷補闕鈔 ①(日)  
Shaku-ron-dai-ichi-kwan-ge-kwan-to-  
kes-shō. ②一卷 ③存 ④足利時代寫  
⑥【寶龜院】

釋論第一相集聞書 ①(日) Shaku-  
ron-dai-iss-shū-ki-ki-gaki. ⑦【參考】  
章疏錄

釋論第一問題 ①(日) Shaku-ron-  
dai-ichi-mon-dai. ③存 ④快雅(—永享  
五 A. D. 1433) ⑥【京專】  
釋論第九十聞書 ①(日) Shaku-ron-  
dai-ku-ju-ki-ki-gaki. ②一帖 ③存 ④  
延徳二寫 ⑥【寶壽院】  
釋論第五愚見鈔 ①(日) Shaku-ron-

dai-go-gu-ken-shū. ②四帖 ③存 ④足  
利時代寫 ⑥【寶龜院】

釋論第五科文 ①(日) Shaku-ron-  
dai-go-kwa-mon. ③存 ④快雄 ⑤【京  
專】

釋論第五卷分科 ①(日) Shaku ron  
dai-go-kwan-bun-kwa. ②五册 ③存  
④寫本(高大、寄・一・三九)

釋論第五私鈔 ①(日) Shaku-ron-  
dai-go-shi-shō. ②六帖 ③存 ④足利時  
代寫 ⑥【寶龜院】  
釋論第五鈔 ①(日) Shaku-ron-dai-  
go-shō. 釋論第五聞書 ②三卷(卷下缺)  
③存 ④任之口 ⑤安政三寫 ⑥【高大、寄  
一・三九】

釋論第五問題 ①(日) Shaku-ron-  
dai-go-mon-dai. ②四帖 ③存 ④明範  
口 ⑤釋摩訶衍論問題の下を見よ。⑥大永  
四寫 ⑥【寶壽院】

釋論第三聞書略說段初後  
①(日) Shaku-ron-dai-san-ki-ki-gaki-ryō-  
ka-setsu-dan-shō-go. ②一卷 ③存 ④  
寫本(寶壽院)

釋論第三卷講案 ①(日) Shaku-ron-  
dai-san-gwan-kyō-an. ②一卷 ③存 ④  
寫本(高大、寄・一・三九)

釋論第三重 ①(日) Shaku-ron-dai-  
san-ju. 釋論百條第三重 ②十卷 ③存  
④理徳(徳治二—明徳三 A. D. 1307—1392)  
述 ⑤釋摩訶衍論百條第三重の下を見よ。  
⑥足利時代及徳川時代寫(寶龜院)嘉吉二寫  
(寶壽院)寛永一〇刊(正大、一四四・三五・二

六六)刊本(京專)(哲、ま・六・左・二四)

釋論第三重談義 ①(日) Shaku-ron-  
dai-san-ju-dan-gi. 釋摩訶衍論百條談義、  
釋論談義 ②二卷 ③存 ④運徹(慶長一  
九一元祿六 A. D. 1614—1693)述 ⑤延寶  
九(A. D. 1681)

釋論第三重讀曲 ①(日) Shaku-ron-  
dai-san-ju-yomi-kase. ②一卷 ③存  
④釋摩訶衍論百條第三重の主要なる讀曲を  
記せるもの。⑤萬治三刊 ⑥【正大、一四  
四・三八】(京專)

釋論第三上半新會領解 ①(日)  
Shaku-ron-dai-san-ju-han-shinn-e-ryō-  
ge. ②一紙 ③存 ④徳川時代寫 ⑥【寶  
龜院】

釋論第七三師記 ①(日) Shaku-ron-  
dai-shichi-san-shi-ki. ②一帖 ③存 ④  
貞和五寫 ⑥【寶壽院】  
釋論第七聽書 ①(日) Shaku-ron-  
dai-shichi-ki-ki-gaki. ②三卷 ③存 ④應  
永六及應永一三寫 ⑥【寶壽院】

釋論第七鈔 ①(日) Shaku-ron-dai-  
shichi-shō. 釋論第七鈔初日賣口 ②一卷  
③存 ④文正元寫 ⑥【寶壽院】

釋論第十卷聽鈔 ①(日) Shaku-ron-  
dai-ju-kwan-ō-shō. ②一帖 ③存  
④文安二及文明二寫 ⑥【寶壽院】

釋論第二勸注抄 ①(日) Shaku-ron-  
dai-ni-kan-chū-shō. ②一卷 ③存 ④  
足利時代寫 ⑥【寶善提院】  
釋論第二卷問題 ①(日) Shaku-ron-  
dai-ni-kwan-mon-dai. ②一册 ③存

①快雅(一永享五 A. D. 1433)口 ②享保一八寫 ③(高大、寄・一・三九)

**釋論第二重** ①(日)Shaku-ron-dai-ni-jū-ko. 釋論百條第二重 ②十卷 ③存 ④運做(慶長一九一元祿六 A. D. 1614—1693) ⑤(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄

⑥足利時代寫(寶龜院)寬永一〇刊(正大、一四四・二六六)刊本(智積院)一卷寫本(正大、一四四・三四一三五)

**釋論第二重校** ①(日)Shaku-ron-dai-ni-jū-ko. 釋論第二重校生滅門下第一 ②足利時代寫 ③(寶龜院)

**釋論第二題額打集第三開書** ①(日)Shaku-ron-dai-ni-jū-ko. ②二卷 ③存 ④寫本(寶龜院)

**釋論第八開書** ①(日)Shaku-ron-dai-hachi-kiki-gaki. 釋論第八開書本末別文 ②二卷 ③存 ④寫本(寶龜院)

**釋論第八上初日私記** ①(日)Shaku-ron-dai-hachi-jō-shū-nichi-shi-ki. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

**釋論第六卷私記** ①(日)Shaku-ron-dai-rok-kwan-shi-ki. ②一卷 ③存 ④仁治二寫 ⑤(寶龜院)

**釋論短冊** ①(日)Shaku-ron-tan-zakun. 釋摩訶衍論第十廣短冊、勸劣向勝不退門廣短冊、釋摩訶衍論廣短冊、釋論廣短冊 ②一卷 ③存、大正七九・五九一 No. 2537

日本大藏經真言密教論章疏卷下 ④順繼(文應元—延慶元後 A. D. 1260—1308)記 ⑤釋摩訶衍論第十廣短冊の下を見よ。⑥(日)

本(正大、一四四・四〇〇)(哲、ま、六、左、九)(京專)(龍大、二四三五、七)(明王院)

**釋論談義** ①(日)Shaku-ron-dan-gi. 釋摩訶衍論百條談義、釋論第三重談義 ②二卷 ③存 ④運做(慶長一九一元祿六 A. D. 1614—1693)述 ⑤延寶九(A. D. 1681) ⑥(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄 ⑦延寶九寫 ⑧(正大、一四四・四二二)

**釋論談義追加** ①(日)Shaku-ron-dan-gi-usui-ka. ②一卷 ③存 ④運做(慶長一九一元祿六 A. D. 1614—1693)述 ⑤(參考) 真言宗全書刊行豫定目錄

**釋論聽鈔** ①(日)Shaku-ron-chō-shō. 聽許鈔 ②十二卷 ③存 ④定俊(一應安五 A. D. 1372)述 ⑤(參考) 章疏錄 ⑥永享一一寫 ⑦(寶龜院)

**釋論聽鈔** ①(日)Shaku-ron-chō-shō. ②一卷 ③存 ④快雅(一永享五 A. D. 1433) ⑤(參考) 章疏錄 ⑥足利時代寫 ⑦(寶龜院)

**釋論聽鈔** ①(日)Shaku-ron-chō-shō. ②十二帖 ③存 ④足利時代寫 (寶龜院)

**釋論鎮守講談鈔** ①(日)Shaku-ron-chūn-ju-kō-dan-shō. ②數十卷 ③(參考) 章疏錄

**釋論註** ①(日)Shaku-ron-chū. ②一卷 ③護命(天平勝寶二—承和元 A. D. 750—834)記 ④(參考) 東城傳燈目錄卷下

**釋論通玄鈔** ①(日)Shaku-ron-tsū-gen-shō. (支)Shih-jun-t'ung-istun-ct'ao. 釋摩訶衍論通玄鈔 ②四卷 ③存、(京)

一・七三・二 ④宋代志福述 ⑤釋摩訶衍論通玄鈔の下を見よ。⑥承元二寫(高大、寄・一・三九)弘安五刊(寶龜院)正保三刊(哲、ま、七、中、二) ⑦(高大、寄・一・三九)

**釋論通玄鈔引文** ①(日)Shaku-ron-tsū-gen-shō-in-mon. ②十五卷 ③存 ④(京專)

**釋論通玄鈔聞書** ①(日)Shaku-ron-tsū-gen-shō-kiki-gaki. ④四卷 ⑤經舜(一弘安頃 A. D. 1278—1287) ⑥(參考) 章疏錄

**釋論通法疏** ①(日)Shaku-ron-tsū-hō-shō. (支)Shih-jun-t'ung-fa-su. 釋摩訶衍論贊玄疏、釋論贊玄疏、釋論疏 ②五卷 ③存、(正)一・七二・五 ④宋代法悟述 ⑤釋摩訶衍論贊玄疏の下を見よ。

**釋論破難決疑會釋** ①(日)Shaku-ron-ha-nai-ketsu-gie-shaku. 釋摩訶衍論決疑破難會釋抄、釋摩訶衍論決疑破難會釋抄、釋論決疑鈔 ②一卷 ③存、大正六九・五七〇 No. 2286 ④濟運(萬壽二—永久三 A. D. 1025—1115)述 ⑤釋摩訶衍論決疑破難會釋抄の下を見よ。⑥萬治三寫(高大、寄・一・三九)南北朝時代寫(觀智院)古寫本(高山寺)

**釋論秘決** ①(日)Shaku-ron-hi-ke-tsu. ②一卷 ③賴瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304) ④(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄

**釋論百條** ①(日)Shaku-ron-hyaku-jō. ②二十餘帖 ③存 ④文明一五寫 ⑤(寶龜院)(寶龜院)

**釋論百條第一重** ①(日)Shaku-ron-hyaku-jō-dai-ichi-jū. ②一卷 ③存 ④(京專)

**釋論百條第三重** ①(日)Shaku-ron-hyaku-jō-dai-san-jū. 釋論第三重、釋摩訶衍論百條第三重 ②十卷 ③存 ④聖憲(德治二—明德三 A. D. 1307—1392)述 ⑤釋摩訶衍論百條第三重の下を見よ。⑥(參考) 章疏錄 ⑦寬永一〇刊 ⑧(正大、一四四・三三三、一一七—一一九)七册刊本(高大、寄・一・三九)

**釋論百條第三重讀曲** ①(日)Shaku-ron-hyaku-jō-dai-san-jū-yomi-kuse. ②一卷 ③存 ④萬治三刊 ⑤(正大、一四四・三六)

**釋論百條第二重** ①(日)Shaku-ron-hyaku-jō-dai-ni-jū. 釋論第二重 ②十卷 ③存 ④運做(慶長一九一元祿六 A. D. 1614—1693)述 ⑤釋論談義百條の第二重の問答要旨を述べたもの。⑥足利時代寫(寶龜院)刊本(智積院)一卷寫本(正大、一四四・三四一三五)

**釋論分科** ①(日)Shaku-ron-bun-ka. ②二册 ③存 ④寫本(高大、寄・一・三九)

**釋論法敏疏** ①(日)Shaku-ron-hō-min-shō. (支)Shih-jun-fa-min-shū. ④四卷 ③存 ④唐代法敏述 ⑤(京專) ⑥藏經書院

**釋論實性院ノ義** ①(日)Shaku-ron-hō-shō-in-no-gi. ②八帖 ③存 ④明範 ⑤足利時代寫 ⑥(寶龜院)

釋論實性院ノ義 ①(日)Shaku-ron

to-shu-in-no-gi ②一帖 ③存 ④有禪

口 ⑤足利時代寫 ⑥(寶龜院)

釋論本母古草類聚 ①(日)Shaku-

ron-hon-mo-ko-so-rui-jū ②五卷 ③

〔參考〕章疏錄

釋論曼荼羅 ①(日)Shaku-rom-man-

da-ra ②一卷 ③道範(元曆元—建長四

A. D. 1184—1232)一說建長四(年七五歲)

④〔參考〕諸宗章疏錄卷三、章疏錄

釋論名目 ①(日)Shaku-rom-myō-

moku 釋摩訶衍論名目私鈔、釋論名目私

抄、釋論名目鈔 ②二卷 ③存 ④印融(永

享七—永正一六 A. D. 1435—1519)記 ⑤

釋摩訶衍論名目私鈔の下を見よ。⑥〔參考〕

諸宗章疏錄第三 ⑦寛永二二刊 ⑧(高大、

一・三九)(正大、一四二・九二)(哲、ま・六

左・二二)(京專)

釋論名目講師 ①(日)Shaku-ron-

myō-moku-ko-sō 釋論名目鈔講草 ②二

卷 ③印融(永享七—永正一六 A. D. 1435

—1519)述 ④〔參考〕章疏錄

釋論名目私鈔 ①(日)Shaku-rom-

myō-moku-shi-shō 釋摩訶衍論名目私鈔、

釋論名目鈔、釋論名目 ②二卷 ③存 ④

印融(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519)

記 ⑤釋摩訶衍論名目私鈔の下を見よ。⑥

寛永二二刊(高大、寄・一・三九)(立大、A二

O・七三)(正大、一一九三・一一五)延徳四刊

(高大、寄・一・三九)

釋論名目私抄 ①(日)Shaku-rom-

myō-moku-shi-shō 國譯釋論名目私抄 ②

一卷 ③存、國譯密教論釋部第二册 ④國

譯密教刊行會編

釋論名目鈔 ①(日)Shaku-rom-myō-

moku-shō 釋摩訶衍論名目私鈔、釋論名

目私抄、釋論名目 ②一卷 ③存 ④釋摩

訶衍論名目私鈔の下を見よ。⑤(京專)

釋論名目鈔講草 ①(日)Shaku-

rom-myō-moku-shō-ko-sō 釋論名目講草

②二卷 ③存 ④明治一九刊 ⑤(高大、寄

一・三九)(正大、一四四・四三)

釋論名目要解 ①(日)Shaku-rom-

myō-moku-yō-ge ②二卷 ③〔參考〕章

疏錄

釋論問題 ①(日)Shaku-rom-mon-

dai 釋摩訶衍論問題 ②二十七卷 ③存

④釋摩訶衍論問題の下を見よ。⑤〔參考〕

章疏錄 ⑥寶徳三寫(寶壽院)足利時代寫

(寶龜院)成雄口・一七册及快全口二册寫本

(高大、寄・一・三九)寫本(京專)

釋論聞幸 ①(日)Shaku-rom-mon-

kō ②定俊快深(一應安五 A. D. 1372—)

③〔參考〕章疏錄

釋論宥快鈔 ①(日)Shaku-rom-yū-

kwai-shō 釋摩訶衍論鈔、釋論快鈔、釋論鈔

②百四十卷 ③存 ④宥快(貞和元—應永

二三 A. D. 1345—1416)述 ⑤釋摩訶衍論

鈔の下を見よ。

釋論立義分私記 ①(日)Shaku-ron

-ryū-gi-bun-shi-shō 名立義鈔出性海記

②二卷 ③賴慶(永祿五—慶長一五 A. D.

1562—1610)述 ④〔參考〕章疏錄

釋論立義分私抄 ①(日)Shaku-ron

-ryū-gi-bun-shi-shō ②〔參考〕章疏錄

釋論立義分私目鈔 ①(日)Shaku-

ron-ryū-gi-bun-shi-moku-shō ②一卷

③賴慶(永祿五—慶長一五 A. D. 1562—

1610)述 ④〔參考〕章疏錄

釋論立義分釋 ①(日)Shaku-ron-

ryū-gi-bun-shaku 釋摩訶衍論立義分略

釋、釋摩訶衍論私記 ②一卷 ③存、大正

六九・五七二No. 2287 ④濟通(萬壽二—永

久三 A. D. 1025—1115)述 ⑤釋摩訶衍論

立義分略釋の下を見よ。⑥永久五及平治元

寫 ⑦(高山寺)

嚼梅吟 ①(日)Shaku-hai-gin. (支)

Chino-mei-yin. ②二卷 ③存 ④清代寄

禪撰 ⑤寫本(京大、藏二四・二一)

若虛集 ①(日)Jak-kyō-shū. ②二卷

③缺 ④空谷明應(嘉曆三—應永一四 A.

D. 123—1307)撰 ⑤〔參考〕禪籍目録、扶

桑禪林書目

若州永福和尚說戒 ①(日)Jaku-

shū-ryū-ō-shō-sei-kai 說戒 ②二卷

③存、禪學大系戒法部之内 ④瑞方面山

(天和三—明和六 A. D. 1683—1769)語、慧

恩編 ⑤寶曆二(A. D. 1752)

⑥若州永福庵にその晩年を長養せる面山和

尙が、七十歳の時、請せられて但馬銀山大

用禪寺に夏安居をなし、一七日の授戒法會

を修し、信男信女六百有餘名のために、佛

祖正傳の金剛寶戒の講述を爲せるを、戒弟

慧恩等の筆受せるものである。三歸・三衆

淨戒・十重禁戒を説いて懇切丁寧を極む。

⑦寶曆九刊 ⑧(谷大、餘大・三四三三)(駒

大) (山田繁林)

若存和尚語錄 ①(日)Jaku-son-o-

shō-go-roku. ②一卷 ③存 ④〔參考〕

禪籍目録

若存和尚小傳 ①(日)Jaku-son-o-

shō-shō-den. ②一卷 ③存 ④〔參考〕

禪籍目録

若存和尚譜略 ①(日)Jaku-son-o-

shō-ku-ryaku. ②一卷 ③存 ④〔參考〕

禪籍目録

若木詩鈔 ①(日)Jaku-boku-shi-shō

②一册 ③存 ④哲(二・二・中・二三)

若木集 ①(日)Jaku-boku-shū ②

存、五山文學全集第二 ③妙在(此山)(永

仁四—永和三 A. D. 1296—1377)

④圓覺寺派高峯顯日禪師の法嗣で天龍寺七

世、建仁寺三十八世、南禪寺二十九世、圓

覺寺四十二世に歷住した此山妙在禪師の詩

文集である。此山は、伏見天皇永仁四年

(A. D. 1296)信州に生れ、下野國那須の雲

岩寺に投じ、佛國國師高峯顯日禪師に薙髮

し、入元して諸山を歴訪した。其の入元年代

は明かでないが、本書の卷首に收められた

「和雪寶明覺大師三寶讚」に「餘天曆己巳夏。

寓湘霜華」。云々とあるから、元天曆二年

夏、此山三十四歳の時既に入元中なりしこ

とは明かであり。元至正五年五月即ち我が

光明天皇貞和元年、此山五十歳の時、士俣

共に歸朝せしを以て、(望月佛教大年表參

照)在元十七年又は其れ以上に涉るもので

あらう。従つて、本書に收められたものは、

大約在元中の作と云ふ事が出来る。然

し、本書の雑賦の中に、後光嚴天皇延文四年中秋、天龍に在りて居る。此山は、天龍を辭してより建仁、南禪、圓覺に歴住し、晩年圓覺寺の定正菴に退隱し、後圓融天皇永和二年冬、病みて遺誡し、法眷の正統菴可翁妙悅和尚に喪を託し、翌永和三年正月十二日(A.D. 1377)壽八十二歳にて示寂したもので、天龍以降の作は本書の拾遺に收められて居る。

五山文學全集詩文部第二輯に收められた本書に依て其の内容を見るに、(一)元天曆二年夏、湖南長沙の石霜山(霜華山)に於て雪寶の三寶讚に和したるもの、至元二年同じく石霜山に於ける結夏禪誦等を始めとして三十八篇を收め、(二)送行には、徑山の傳維那が安徽省九華山に回るを送る詩を始めとして四十九篇を收め、(三)簡寄には、徑山の淨藏主に寄する詩を始めとして七首、(四)讚には、觀音の讚など十二首、(五)節序には、佛誕生、次成道珍侍者讚四首、達磨忌の六首、(六)道號には、竺芳より松岩に至る百一人に與へた道號の賦傷、(七)雜賦には、梵語心經より前人山門下轉骨に至る七十七篇で、その中に延文四年の作を含んで居る。

**若木集拾遺並附錄** ①(日) Tani Bokushu-shū-i-narubini-fu-yoku. ②存、五山文學全集第二 ③妙在(此山)(永仁四年)永和三年A.D. 1296-1377撰、東峻(高榮)編

④捨遺は、此山妙在禪師の若木集に漏れた

作を輯録したもので、編者は建仁寺三百三十五世高峰東峻和尚である。即ち此山和尚の建仁寺南禪寺住山中の延文、貞治、應安、永和年間に涉る作で南禪寺大道一以和尚の瑞雲讚に和韻せるものを始めとして、遺傷を含む十四篇、並に鎌倉瑞鹿山圓覺寺住山語、重刊景德傳燈錄疏、和等持南明禪師偈并序を收めたものである。若木集附録は、同じく高峰東峻和尚の編に成るもので、佛國錄、明極語錄、別源の南遊集、夢窓國師語錄、雪村和尚語錄、鐵舟の關浮集、古劍の幻集、中岩の東海一滴集、天境の無規矩等より抜き書きした此山和尚關係の詩文を輯めたものである。(大久保堅瑞)

**若木集錄附** ①(日) Jaku-tokke-shū-i-fu-yoku. ②存、五山文學全集第二輯 ③明治三九年刊 ④胸大)

**寂意菩薩願經** ①(日) Jaku-i-do-satsu-gwan-kyō. (支) Chin-t'p'u-sa-yuan-ching. ②一卷 ③缺 ④西晉代譯道真譯

**寂意菩薩問五濁經** ①(日) Jaku-i-do-satsu-non-go-jok-kyō. (支) Chin-t'p'u-sa-wen-wu-cho-ching. ②一卷 ④失譯

⑤悲華經第二卷の抄出 ⑦(參考) 出三藏記第四、法華經第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

**寂音尊者智澄傳** ①(日) Jaku-on-sōn-jū-chi-chō-den. (支) Chi-yin-tsan-che-chih-ch'eng-ch'uan. ②存 ③宋覺範

慧洪、覺慈編 ⑦(參考) 禪籍目錄

**寂光和尚圓澄殘馨集** ①(日) Jaku-kōwa-shō-in chō-zan-kyō-shū. ②一

卷 ③存、日本大藏經天台宗顯教章疏第二卷 ④達摩編 ⑤本書は日本大藏經を編輯する時、座主記。三代實錄。寂岳要記等の内に圓澄に關する文書、緣起等が記してあるのを集めて名づけたもの。延曆寺建立緣起。懇請受學眞言教書。圓澄和尚手書。傳法師官牒。次に附記として相承血脈。寶幢院八僧。西塔院燈油僧供料官制。施入莊於西塔院狀。貞觀元年請始置延曆寺年分度者二人表。叡山西塔院鐘銘。此の中、貞觀元年の表と西塔鐘銘とは大樂大師惠亮關係の文書である。(田島德音)

**寂光禪師語錄** ①(日) Jaku-kōwa-shō-in kyō-shū. (支) Chi-kuang-lho-shan-shih-yü-lu. ②一卷 ③存 ④清發育等編 ⑦(參考) 禪籍目錄

**寂光土記** ①(日) Jaku-kōwa-shō-in-ki. ②一卷 ③存、日本大藏經天台宗顯教章疏第二、天台小部集釋第四、大日本佛教全書第二四 ④圓仁(延曆一三一貞觀六A.D. 794-864)撰

⑤本書は慈覺大師圓仁が昔、王績の醉鄉記を見て感ずる所あり、この記に模して天台の常寂光土の巡遊記を叙し、法華圓頓の義を譬喩に托して明した小品文。王績は字は無功。性質極めて簡素放膽。隋の大業年中祕書省正字の職を授けられたが、嗜酒政務に任じない。隋末、世亂るゝや故郷に還り、黍を種え酒を醸し、藥草を誦いて自ら供し、書東臯を著して東臯子と號してゐ

た。唐の武徳の初めに門下省に出仕。貞觀の初め病のために官を罷めた。績の著書には醉鄉記、五斗先生傳、無心子傳等があるが此等の他のものと共に東臯子集に收めてある。本書に述べてある。寂光土は天台教義の説く所を出でゝゐないが、但し最後に至つて「我れ聞く。西方淨土極樂は同居の寂光である」といふ文は四土不二の立場から見れば異説ではないが、常寂光土を一念三千の妙土なり、本門久遠の淨土なりといふ通説を、最後に至つて同居寂光説を出したことは如何なる理由によるか。可考。(參考) 日本國天台宗章疏目錄。山家祖德撰達磨目集卷上 (田島德音)

**寂志果經** ①(日) Jaku-shi-ka-kyō. (支) Chi-chih-ka-ching. (巴) D. 2 Samānāphala-s. ②一卷 ③存、大正一・二七〇No. 22、縮長一〇、正一四・二、北663澄、南677澄、元699澄、明北889善、清889善、麗665淵、天663澄、指620淵、法651淵、至629克、明南477福、Zi. 593 ④東晉竺曇無蘭譯 ⑤太元六一〇(A. D. 381-395)

⑥本經は巴利文長部第二經沙門果經(Samānāphalasutta. D. I. f. 47b.)に該當し、長阿含第二十七經沙門果經の單譯であつて、沙門現在の果報について説かれたものであるからこの名が存するのである。摩竭陀阿闍世が満月の夜を如何に過すべきやを大臣等に協るや、大臣等は六師外道を訪れることを勧め、獨り耆域(耆婆)の勧めによつて奈園に世尊を訪ね、世俗の業に従ふものは、それ〴〵の報酬を得て幸福に生活してゐる

が、沙門にこのことがあるかと問ひ奉つたので、種々に例證して、詳細に沙門の日常生活と、その勝れた現在の果報を説かれ、ために阿闍世王父王弑殺の罪を懺悔し、歸佛することを説いたものである。本經は以て佛陀時代の古代印度人の思想生活、當時の印度教學の代表者として六師外道の思想を知ることが出来るのである。本經を巴利文並に長阿含沙門果經と對照する時は、長阿含は巴利文に比して稍略述し、本經は詳述するも、多少の出入が存する。因に増一阿含四三・七經はこれらの諸經に前半に該當するものである。(林五邦)

**寂志果經** ①(日) Jaku-shi-ka-kyō. (支) Chi-chi-kuo-chang. ②一卷 ③失譯 ④(參考) 出三藏記第四、三寶紀第四、武周錄第一

**寂室和尚行狀** ①(日) Jaku-shitsu-o-shō-gyō-jō. 近江州瑞石山永源禪寺開山勅諭圓應禪師寂室和尚行狀、江州永源寺開山圓應禪師行狀、圓應禪師行狀、寂室行狀 ②一卷 ③存、大正八一・一三四永源寂室和尚語錄卷下所收、續群書類從第九 ④一絲文守(慶長一三一正保三 A. D. 1698—1646)撰 ⑤寛永二二(A. D. 1644) ⑥圓應禪師行狀の下を見よ。

**寂室和尚語錄** ①(日) Jaku-shitsu-o-shō-gō-tōku. 永源寂室和尚語錄、寂室語錄、寂室錄 ②二卷或四卷 ③存、大正八一・一〇一 No. 3564. 禪學大系祖錄部第四、國譯禪宗叢書第五 ④寂室元光(正應三一貞治六 A. D. 1290—1367)語 ⑤貞治六(A. D. 1367) ⑥永源寂室和尚語錄の下を見よ。 ⑦(參考) 扶桑禪林書目 ⑧享保元刊(駒大)明治四五刊(駒大)

**寂室和尚御傳記** ①(日) Jaku-shitsu-o-shō-gō-ōden-ki. ②一卷 ③存 ④永源寺編 ⑤昭和三刊 ⑥(京大、一・二一七—四) ⑦(參考) 禪籍目錄

**寂室堅光和尚歌集** ①(日) Jaku-shitsu-ken-kō-ōka-shū. ②一卷 ③存 ④堅光(寶曆三—天保元 A. D. 1753—1803)作 ⑦(參考) 禪籍目錄

**寂室堅光禪師語要隨筆** ①(日) Jaku-shitsu-ken-kō-zen-jō-gō-yō-zui-hi=tsu. 天寧開山寂室堅光禪師語要隨筆 ②三卷 ③存 ④堅光(寶曆三—天保元 A. D. 1753—1803)記、岸澤惟安校 ⑦(參考) 禪籍目錄

**寂室堅光禪師語錄** ①(日) Jaku-shitsu-ken-kō-zen-jō-gō-tōku. 冰壺錄 ②三卷 ③存 ④堅光(寶曆三—天保元 A. D. 1753—1803)語 ⑤嘉永五刊 ⑥(駒大) ⑦(參考) 禪籍目錄

**寂室法語** ①(日) Jaku-shitsu-hō-gō. 永源寂室法語 ②一卷 ③存 ④寂室元光(正應三一貞治六 A. D. 1290—1367)語 ⑦(參考) 禪籍目錄

**寂室錄古鈔** ①(日) Jaku-shitsu-ko=ka-to-shō. ②二卷 ③存 ⑦(參考) 禪籍目錄

**寂照神變三摩地經** ①(日) Jaku-shō-jin-pen-san-ma-ji-kyō. (支) Chi-chao-shên-pien-san-mo-i-ching. (梵) Prastānavinīcāya-prāthāya-sūtra. (引用)(藏) I'phags-pa rab-tu-shi-pa nam-par-nes-pohi cho-iphruḥ gyi tin-ñe-hdin sñes-bya-ba theg-pa chen-pohi mdo. 寂照三摩地經、寂照神變經 ②一卷 ③存、大正一五・七二二 No. 648. 縮宙二、卅二・六、北 187 號、南 501 號、元 193 號、明北 718 號、清 518 號、麗 489 號、天 196 號、至 123 號、明南 494 號、No. 522 支 契(仁壽二—麟德元 A. D. 692—654)譯 ⑤唐龍朔三(A. D. 663) ⑥(一)西藏譯は三部より成るに本經はその初部に相當するに過かな。恐らく玄奘

の死期近づきその全出の努力を見なかつたものであらう。(二)内容の三分の二近くが序分をなし、正宗分に於ては賢護菩薩開者となりて菩薩の依處、大慧智、方便化度の法等に就て佛に請問し、佛之に答へて寂照神變と名くる三摩地ありて菩薩所行の佛地を攝し、菩薩の中に安住すとて、以下この三昧の意義徳性等に就て詳説し給ふ。中に瑜伽師地菩薩所行等の語ありて瑜伽思想發生後の制作なることを暗示してゐる。思想又華嚴瑜伽の系統に存すると見てよい。(美濃晃順)

**寂照堂谷響集抄書** ①(日) Jaku-shō-ō-kōkyō-on-shū. 谷響集 ②十卷 ③存 ④大日本佛教全書第一四九 ⑤運做(慶長一九一元祿六 A. D. 1614—1693)記 ⑥谷響集下を見よ。⑦元祿二刊(正大、一〇九・四三・四七)(高大、寄一・二四)元祿五刊(正大、一〇九・四五・四八)

**寂照堂谷響集續集** ①(日) Jaku-shō-ō-kyō-on-zoku-shū. 谷響續集 ②十卷 ③存、大日本佛教全書第一四九 ④運做(慶長一九一元祿六 A. D. 1614—1693)述 ⑥著者は序文に於て次の如くいふ、「養余谷響集之成也。僭備易闕。杼軸其空。洞乎楞腹何有復可言哉。然俯仰三年、通谷不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>聲。有<sub>レ</sub>聲<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>響。林下偶有<sub>レ</sub>蹇然音者。非<sub>レ</sub>飲食之客。遂<sub>レ</sub>叩披瀝羅哆玉石相揉。積有<sub>レ</sub>數百事。諸徒請<sub>レ</sub>編輯。中

の死期近づきその全出の努力を見なかつたものであらう。(二)内容の三分の二近くが序分をなし、正宗分に於ては賢護菩薩開者となりて菩薩の依處、大慧智、方便化度の法等に就て佛に請問し、佛之に答へて寂照神變と名くる三摩地ありて菩薩所行の佛地を攝し、菩薩の中に安住すとて、以下この三昧の意義徳性等に就て詳説し給ふ。中に瑜伽師地菩薩所行等の語ありて瑜伽思想發生後の制作なることを暗示してゐる。思想又華嚴瑜伽の系統に存すると見てよい。(美濃晃順)

名所行發⑩(名庫書)著處所現⑪月年の刊寫⑫(書考全書釋註)書去⑬説解谷内⑭代年作者⑮著者⑯缺存⑰數卷⑱(名書)名題⑲號略字數

寂、雀、着、手

略) 遍觀誦之暇。時々染翰又成三引一命  
曰(谷響續集) 即ち本書は谷響集(その項  
を見よ) 刊行の後、元祿五年再び門人の求  
めによりて公刊したもので、佛典並に世俗  
の典籍に現はれた諸種の事項六二三項目に  
就て、一々これが考證解説を試みたるもの  
である。

①元祿二、五刊 ②(高大、寄・一・二四)  
(龍大、二〇一・一五一—一七) (高神覺昇)

寂潭俊龍禪師語錄

①(日) Jaku-tan-shun-ryū-zen-jī-go-roku. ②一卷 ③  
存 ④後龍語 ⑤寫本(駒大)

寂調音所問經

①(日) Jaku-chū-on-shio-mon-kyō. (支) Chi-tiao-yin-so-wên-chung. (藏) Hihags-pa kun-rdsob dan-dan-dan-pahi bien-pa dstan-pa shes-bya-ba thags-pa chen-pohi mdo. 寂調音經、如來所說清淨調伏經 ②一卷 ③存、大正二四・一〇八一 No. 1497、縮列二、一七・二、北543作、南556作、元559作、明北1084定、清1084定、麗547念、天549作、指53大念、法531念、至1196儀、明南1240統、元1089 ④宋代法海譯

⑤寂調音天子に對する文珠の説法で、大乘戒の要義を説き、菩薩と聲聞との毘尼の相異を説く。内容は殆ど全く異本の清淨毘尼方廣經と同一で、唯文言が少しく伸びてゐるのみである。又西晋竺法護譯の文珠師利淨律經も異本の一つである。譯者を法海とするは諸録の一致する所であるが、歴代三寶紀第十が始興錄、法上録によりて斯く定めたのを開元録第五已下が承用したのであ

る。武周録には達磨偈多羅録に出るといふ。但し出三藏記集第四の新集續撰失譯雜經録に之を編入して失譯とする。歴代三寶紀、法經録に大乘毘尼録に入れてより、古來大乘律として取扱はれてゐる。

寂調音所問經

①(日) Jaku-chū-on-shio-mon-kyō. (支) Chi-tiao-yin-so-wên-chung. 如來所說清淨調伏經 ②一卷 ③失譯 ④(參考) 出三藏記第四、三寶紀第四、內典録第一、武周録第一

寂然法師集

①(日) Jaku-nen-hos-shi-shū. ②一卷 ③存、群書類從第一〇

寂然(藤原賴業)詠

④寂然(藤原賴業)詠 ⑤本書は寂然の歌、春十九首、夏十四首、秋二十首、冬十五首、戀十首、雜六十一首を収めたもので、その雜のうちには無常、十戒、經意等を詠んだものが多い。寂然は丹後守爲忠の子で、性最も和歌を好み、夙く剃髮して寂然と號し、爲業の寂念と俱に大原山に隱遁して居た。(中谷在禪)

寂門禪師行實

①(日) Jaku-mon-zen-jī-gyō-jissu. ②一卷 ③存 ④(參考) 禪籍目錄

寂蓮華雜冊初編

①(日) Jaku-ren-se-zus-satsu-shō-hen. ②一卷 ③存 ④(正大、一〇九・一八六)

寂蓮法師集

①(日) Jaku-ren-hos-shi-shū. ②一卷 ③存、群書類從第一〇

寂蓮(藤原定長)(一建仁二A. D. 1202)詠 ④寂蓮法師の和歌(二百九十五首と群書類從には記すが、實は二百八十五首である)

を集めたもので、集中釋教に屬するものは割に少い。寂蓮は俊海の子定長、叔父俊成に養はれて居たが、定家の生るゝに及び出家して寂蓮といふた。顯昭と友であつた、顯昭は文學に秀で、居たが、和歌は寂蓮が勝れて居た、顯昭或時いふ、和歌はやさしいものだ、寂蓮のやうな無學者でもあの通り作れると、寂蓮これをきいて、和歌はむづかしいものだ、顯昭ほどの學者でもうまく作れないと、顯昭これを聞いて黙したといふ逸事が傳へられてゐる。(中谷在禪)

雀王經

①(日) Jaku-ō-kyō. (支) Chi-ho-wang-king. ②一卷 ③失譯 ④六度集經第五卷の抄出 ⑤(參考) 出三藏記第四仁壽録第三、靜泰録第三、開元録第一六、貞元録第二六

着語典刑

①(日) Jaku-go-ten-kei. ②一卷 ③存 ④高木謙應 ⑤(參考) 禪籍目錄

手印圖

①(日) Shū-in-zu. ②一卷 ③存 ④足利時代寫(寶龜院)徳川時代寫(寶善提院)刊本(京大、藏・二四シ・二九)(龍大、二六六五・六八一六九)貞享元刊(龍大、研佛)

手鏡鈔

①(日) Shū-kyō-shō. ②三冊 ③存 ④靜通(永萬元一貞應二 A. D. 1165 1223)記 ⑤貞應二(A. D. 1223) ⑥刊本(高大、一・四八)

手鏡鈔

①(日) Shū-kyō-shō. ②三卷 ③存 ④道範(元暦元一建長四 A. D. 1184—1232)一説建長四、年七五寂記 ⑤享保八刊 ⑥(高大、寄・一・四八)(谷大、餘大・七

○一) ①手水作法 ①(日) Shū-shi-e-tō. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶善提院) ⑥手簡集 ①(日) Shū-kanshin. ②一卷 ③存、慈雲尊者全集第一五輯 ④佐川武凡集

①慈雲尊者飲光に寄せられたる手簡を集めたもので、集者佐川武凡は飲光の妹伊與女の子である。その目次、一、御母君の御手簡。二、開明門院の御手簡。三、恭禮門院の御手簡。四、刑部卿の手簡。五、郡山城主柳澤甲斐守保光侯の手簡。六、片桐主膳正貞顯侯の手簡。已上。

手杖論

①(日) Shū-jōron. (支) Shou-chang-lun. ②一卷 ③存、大正三二・五〇五No. 1657、縮著、卍三三・三・646臨、南600臨、元653臨、明北1219臨、清1219臨、慶長5命、天695臨、指608命、法631命、至1364甲、明南1393華、元1216 ④釋迦稱造、唐義淨(貞觀九一先天二 A. D. 635—713)譯

①本書の著者釋迦稱(Satyakata)は義淨三藏の南海寄歸傳卷四(三十四、西方學法の章)によれば、義淨當時に南海の佛誓國(Bhoja-pura-Samatra)に現存した人で、彼は全印度を遍歴して因明・瑜伽唯識・中觀・有部説の蘊奥を極め、當時屈指の學匠であつた。従つて彼は吾々の知り得る限りでの印度に於ける佛教學者中の最後の一人であり、その學説も印度佛教での最も新しい部分に屬すると見られる。この意味で本



書手杖論は最後の印度佛教を知るに必要のものである。従来本書は殆んど手が付けられておな思はれる。大正藏經で僅か二頁程の短いものであるが極めて難解である。

本書の體裁は三つの偏頗を骨子として、各偏頗の後に論に曰くとして長行説がある。最初の偏は序文とも言ふべく、本書を製作する因縁理由を述べてゐる。以下の長行では諸佛が出世して無数の有情を救滅せしむるが、有情は靈空の如くに終際なく無邊である。然らば有情はいかなる状態にあるか。一説者(異論者)は新生有情ありとし、他説者(命業軍)は舊有情及び新有情ありとしてゐる。有情が若し新生すとなればそれは或る因によるべく、然らば最初の有情はいかなる因によるか、無因生の過失になるであらうとして新生論を破してゐる。

次に第二頌があり、佛の出世は遭ひ難く、佛教を信ずることも亦難く、従つて輪廻への生因は得易く、解脱は達し難きを述べ、長行でも同様の説明をなしてゐる。これは若し新生有情を許せば有情は上説の如く輪廻者が多く解脱者が少い故に無限に増大する理であるが、これは不可能であるとの次の頌に至る伏線である。

第三頌に於ては、器世間は一定して破壊することはあるも増すことはないに、有情が新生して無限に増加すとなれば遂には世間を逼迫して窮屈となるであらうとの意味を述べ、有情新生論者を攻撃してゐる。以下の長行でも同様のことを説き、更に進ん

手、主

で新生論の破斥をなしてゐる。即ち有情が新生すとなれば、それは餘の業力を藉りて生ずるのであり、それは重生か不重生かの何れかでなければならぬ。若し重習によつて生ずるとせば、淨染の二法が生因となるべきであり、一有情の生因となる爲にはこの二法は同生同滅でなければならぬ。然るに實際に於ては淨染二法の同生同滅はあり得ない。又生因としての重習は無数刹那に起るべく、従つて無数の生因となり、一有情の因から多有情の果が生ずることとなり、甲の努力によつて乙が努力なしにその報を受くるといふ不都合を來すであらう。次に若し重習に依らずして生ずるとすれば多種の功能は自ら起るといふことになる。聖道を修せずして涅槃を得るであらう。従つて施戒修の三福業事、思業思作業の二業、善不善無記の三業等は不用となるであらう。

新生論の主張の結果として以上の諸の過失があるとすれば、正しい説は如何。これは有情の本有説である。有情は無始以來本有して、その自己の相續に於て、貪等を熏じて種々の界趣への輪廻を取り、又聞重習によつて出世間の無漏種子を顯現し、煩惱・所知の二障を斷じて解脱の涅槃境に至るのである。即ち有情の新生といふことはなく、自相續中に古來の種子を藏し、その熏習によつて有情の増進や退失が起るのである。而して有情及び諸法は過去の諸法から來つた異熟であり異熟識に外ならぬとして、阿毘達磨や瑜伽論を授引してゐる。要するに本論の立場は瑜伽唯識系統であり、

而も種子の新生本有説に於て、本有説に據り新生説を破してゐるのである。

手跡講式

①(日)Shirakawa, H. (水野弘元) 凝然(仁治元)元亨元、A. D. 1197-1207撰集 ②(参考) 諸宗章疏錄第二

手草

①(日)Shirakawa, H. 取草釋 ②二卷 ③存、日本大藏經天台宗密教章疏第三、④安然(承和八)延喜年間、A. D. 841-901)述

手抄

①(日)Shirakawa, H. 田島徳音) 密乘略目録。山家祖徳撰述密部書目。延曆寺安政六寫上卷(谷大、餘大三五五八)

手中和讃

①(日)Shirakawa, H. 田島徳音) 密乘略目録。山家祖徳撰述密部書目。延曆寺安政六寫上卷(谷大、餘大三五五八)

手長者經

①(日)Shirakawa, H. 田島徳音) 密乘略目録。山家祖徳撰述密部書目。延曆寺安政六寫上卷(谷大、餘大三五五八)

主觀的信念の客觀的妥當性

①(日)Shirakawa, H. 田島徳音) 密乘略目録。山家祖徳撰述密部書目。延曆寺安政六寫上卷(谷大、餘大三五五八)

主君耳入此法門免與同罪事

①(日)Shirakawa, H. 田島徳音) 密乘略目録。山家祖徳撰述密部書目。延曆寺安政六寫上卷(谷大、餘大三五五八)

日蓮聖人全集第一三

①(日)Shirakawa, H. 田島徳音) 密乘略目録。山家祖徳撰述密部書目。延曆寺安政六寫上卷(谷大、餘大三五五八)

日蓮聖人全集第一三

①(日)Shirakawa, H. 田島徳音) 密乘略目録。山家祖徳撰述密部書目。延曆寺安政六寫上卷(谷大、餘大三五五八)

日蓮聖人全集第一三

①(日)Shirakawa, H. 田島徳音) 密乘略目録。山家祖徳撰述密部書目。延曆寺安政六寫上卷(谷大、餘大三五五八)

し、法華經に怨をなす者を供養するときは謗法墮獄の罪を犯すことになる」と諫めたのを賞し、この法門を主君の耳に入れただけで與同罪を免れたと論じ、更に今後萬事油斷なく用心せよと諷めたものである。

⑦録内啓蒙第二七、御書鈔第一七、録内扶老第一〇等 (馬田行啓)

主師親御書 ①(日)Shu-shin-shin-ego-sho. 釋尊三德 ②一卷 ③存、日蓮聖人御遺文之内、日蓮聖人全集第七 ④日蓮(貞應元—弘安五A.D.1223—1282) ⑤建長子(A.D.1235)

⑥日蓮が建宗直後の建長七年鎌倉より其父母に送った書と傳ふ。娑婆世界の我等には釋尊こそ主師親の三徳を具へた有縁の佛で、阿彌陀佛には此の三法が具はつて居らないとて、釋尊の三徳を詳述し、斯かる三徳具足有縁の釋尊を輕んじ、釋尊出世の本懐たる法華經を信じない者は罪報が重、然るに法華經の提婆品には法華經獨特の惡人女人畜生等の成佛が許されてゐるから、法華經を信する女人は成佛ができる」と勸信した書である。

録外微考卷下、録外考文第四(馬田行啓) 主峰昆禪師語錄 ①(日)Shu-hon-kon-zen-ji-go-roku. (支)Chu-fan-pi-chan-shih-yu-lu. 歸元寺主峰昆禪師語錄 ②二卷 ③存 ④清代行里等編 ⑤光緒三〇刊 ⑥(駒大)

主夜神感應記 ①(日)Shu-yasha-kami-ki. ②一卷 ③存 ④慧宿(一寛延三A.D.150)記 ⑤寫本(谷大・宗大・一

三六六) 守供養事 ①(日)Shu-kei-ji-no-ka. ②六帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院) 守護經 ①(日)Shu-go-kyo. (支)Shu-hu-ching. 守護國界主陀羅尼經、守護國界經、守護國界守經 ②十卷 ③存、大正一九・五二五No.997. 縮開七、E115・10. 明北973蘭、清797蘭、慶1410公、天175韓、法1078漆、至797之、明南1045此、三十帖策子第八、大藏經要義第二、N1978. 唐般若(建中二—元和五後A.D.781—810)、牟尼室利(—貞元九—天和元A.D.793—806)共譯 ⑥南北朝時代寫 ⑦(寶菩提院) 守護經釋 ①(日)Shu-go-kyo-shaku. 守護國界經釋、守護國界主陀羅尼經釋 ②二卷 ③存、弘法大師全集第一二教相部 ④空海(寶龜五—承和二A.D.774—835) ⑤(參考) 諸宗章疏錄第三 守護經釋愚草 ①(日)Shu-go-kyo-shakudanso. 守護國界主陀羅尼經釋愚草 ②三卷 ③存 ④頼瑜(嘉祿二—嘉元二A.D.1236—1304)述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第三 ⑥寫本(正大、一一六二・一〇六) 守護經鈔 ①(日)Shu-go-kyo-sho. ②一帖 ③存 ④平安末期寫 ⑤(高六寄・一・三二二) 守護經法 ①(日)Shu-go-kyo-ho. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第四六覺禪鈔之内 ④覺禪(康治二—建曆二後A.D.1142—1212)撰 ⑤延慶三寫(寶龜院)足利時代寫(寶菩提院)

守護國家論 ①(日)Shu-go-kokoron. 國家論、守護論 ②一卷 ③存、高祖遺文錄第五卷、日蓮聖人御遺文(二二〇—二七二)日蓮聖人全集第七、淨土宗全書第八之内 ④日蓮(貞應元—弘安五A.D.1222—1282)記 ⑤正元元(A.D.1339)異説あり ⑥題號の意は法華の正法を以て國家を守護するの義である。大科七段あり、一に如來の經教に於て權實二教を定むるを明し、二に正像末に就いて佛法の興廢あるを明し、三に選擇集の謗法の緣起を明し、四に謗法の者を對治すべき論文を出すを明し、五に善智識並に眞實の法には値ひ難きを明し、六に法華涅槃に依る者の用心を明し、七に問に隨つて答ふるを明す。第一は序分、第二より第四に至るは正宗分、後は流通分とも見るべきものである。一章の大綱は、權實二教を別ち、特に法然の選擇集を以て正法法華を謗る邪法と定め、邪法、謗法の者を對治せざれば、國家に三災七難起りて國家安穩ならざるを論じ、兼ねて華嚴、三論、法相をも斥つてゐる。故に或は、この書を以て文應元年北條時頼へ建白せる立正安國論の草案とするものもある。

録内啓蒙第二一、同扶老第七、同拾遺第七、御書註第一一、御書鈔第一〇 ④日蓮聖人眞蹟身延山寶藏にありしも明治一二年焼失す 守護國家論 ①(日)Shu-go-kokoron. 訓譯讀本守護國家論 ②一卷 ③存 ④日蓮(貞應元—弘安五A.D.1222—1282)述、森敬次郎譯 ⑤明治三刊 ⑥(帝國、

八二・二二二) 守護國家論見聞 ①(日)Shu-go-kokoron-kanon. ②一卷 ③存 ④日辰撰 ⑤寫本(立大、D・〇・二四六) 守護國界經 ①(日)Shu-go-kokukai-kyo. (支)Shu-hu-kuo-hieh-ting. 守護國界主陀羅尼經、守護國界主經、守護經 ②十卷 ③存、大正一九・五二五No.997. 縮開七、E115・10. 明北973蘭、清797蘭、慶1410公、天175韓、法1078漆、至797之、明南1045此、三十帖策子第八、大藏經要義第二、N1978. 唐般若(—建中二—元和五A.D.781—810)牟尼室利(貞元九—元和元A.D.793—806)共譯 ⑤寛文元刊 ⑥(高六寄・一・二三二)

守護國界經釋 ①(日)Shu-go-kokai-kyo-shaku. 守護經釋、守護國界主陀羅尼經釋 ②三卷 ③存、弘法大師全集第一二教相部 ④空海(寶龜五—承和二A.D.774—835)述 ①守護國界主陀羅尼經の註釋書である。初に大意を述べ、次に所被の機、能詮の教體、所詮の宗趣、經の題目、處會、隨文解釋の六門に分つて釋してゐる。但し隨文解釋は僅に經卷一の末尾まで、卷二以下の九卷に及んでゐない。作者につき眞偽兩説がある、覺鏡の御作目録、心覺の大師御作目録、正覺房の大通照金剛御作書目録等に弘法大師空海の作として名を列ね。頼瑜は愚草三卷を撰して本書の要義を釋し、何れも大師の眞撰と見てゐるが、大疏指南鈔一、續決十等には偽作

名所行發⑩(名庫書)古藏所現⑨ 月年の刊寫⑧(書考書書釋註)書末⑦ 説解容内⑥ 代年作者⑤ 著者④ 缺存③ 數卷②(名書)名題① 裝略字數

説を採用し、智山の運能化は開巻編を作つて本書並に難問答の瑕疵を指摘し、大師の眞撰に非ざることを力説してゐる。弘法大師全集に眞偽未決部に採録せるも此等先徳の異説あるがためである。

⑦〔注釋〕愚草三卷(頼菴)〔參考〕高山寺法鼓臺聖教目錄 大師御作目錄(政祝) 貞享五(義剛開版)刊 ⑧(京專)(高大、奇一・二三)

### 守護國界經胎心抄

①(日)Shu-ko-kai-kyo-tai-shin-sho. ②一軸 ③存 弘安九寫 ④(寶善提院)

### 守護國界經念誦次第

①(日)Shu-go-kok-kai-kyo-nen-j-shi-dai. 守護經念誦次第、守護國界經法 ②一卷 ③存、弘法大師全集第一三事相部 ④空海(寶龜五)承和(二A.D.774-833)撰

⑤守護經法の修法次第である。次第は大體別行立に準じてゐる。作者につき、弘法大師空海説と石山内供淳祐説とあり弘法大師全集等も眞偽未決部に収めてゐる。

⑥足利時代寫(寶龜院)古寫本(石山寺)寫本(高大、奇一・六六) (小田慈舟)

### 守護國界經法

①(日)Shu-go-tok-kai-kyo-ho. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、餘洋・八二)

### 守護國界主經

①(日)Shu-go-tok-kai-shu-kyo. (支)Shu-jui-kuo-chieh-chu-ching. 守護國界主陀羅尼經、守護國界經、守護經 ②十卷 ③存、大正一九・五二五 No. 997. 縮開七、己一五・一〇、明北973 蘭、清973 蘭、麗1410公、天1412韓、法1078

漆、至797之、明南1045此、三十帖策子第八、大藏經要義第二、No. 978 唐般若(一)建中二一和五A.D. 781-810)牟尼室利(一貞元九一和元A.D. 793-806)共譯

### 守護國界主陀羅尼經

①(日)Shu-go-tok-kai-shu-jui-kuo-chieh-chu-to-lo-ni-kyo. (支)Shu-jui-kuo-chieh-chu-to-lo-ni-ching. 守護國界主經、守護經、守護國界經 ②十卷 ③存、大正一九・五二五 No. 997. 縮開七、己一五・一〇、明北973 蘭、清973 蘭、麗1410公、天1412韓、法1078 漆、至797之、明南1045止、三十帖策子第八、No. 978 唐般若(一)建中二一和五A.D. 781-810)牟尼室利(一貞元九一和元A.D. 793-806)共譯

④本經は一般に雜部密教に屬するものと見られて居るがその思想内容から考ふるに、寧ろ、兩部大經の先驅を爲して居るものとも見做し得ると思はれる點がある程である。

〔第一卷〕序品第一、陀羅尼品第二の一。

〔第二卷〕陀羅尼品第二の二。

〔第三卷〕陀羅尼品第二の三、大悲胎藏出生品第三。

〔第四卷〕入如來大悲不思議品第四。

〔第五卷〕入如來品不思議甚深事業品第五の一。

〔第六卷〕入如來不思議甚深事業品第五の二。

〔第七卷〕入如來不思議甚深事業品第五の三、菩薩瓔珞莊嚴品第六の一。

〔第八卷〕菩薩瓔珞莊嚴品第六の二。大

光普照莊嚴品第七、般若根本事業莊嚴品第八。

〔第九卷〕陀羅尼功德軌儀品第九。

〔第十卷〕阿闍世王受記品第十、如來囑累品第十一。

序品第一には、伽耶(Gaya)城を去る遠くない菩提樹下に大比丘衆七千人、普賢・文殊・觀音・彌勒等の諸菩薩、四天王・釋提桓因等の諸天の中で、世尊が金剛座に坐して居られた時に、文殊菩薩が、妙伽他で先づ世尊の徳を讃したことが記しある。陀羅尼品第二の一に示してあるものは、(1)世尊が普隨順衆生心行三昧に入りて、種々の身相を現ぜらる、而も無信の者は、それ等の神變の相を見ない。(2)世尊は頂上肉髻の中から大光明を放つ、上は阿迦尼吒(Cakrasmita)天から、下は阿鼻(Avahi)地獄に至るまでの諸世界を照し玉ふ。(3)世尊がその後或る無名の三昧に入られた時に、會中から一切法自在王菩薩が、起立して大光明を放つに至る因縁を質問した。この時に世尊は四つの理由を擧げて居られる。その中の第四の理由に摩伽陀國王阿闍世(Asoka)王に、此の三昧を示すが爲めであると言つてある。今の無名の三昧は第九卷の陀羅尼功德軌儀品第九に説かれてある平等三昧であることは勿論である。且つ阿闍世王の事は同王の受記品第十と思ひ合せて見る時に、その意味が明かとなる。(4)次に一切法自在王菩薩が一切智を得る方法に就ての問を發した時に、世尊は菩提心を因と爲し、大慈悲を根本となし、方便を究

竟と爲す意を述べられた。此の因・根・究竟の三は、大日經住心品の三句と全同である。(5)又心と菩提と虚空との三が一體である旨を明してある所も、住心品と同じである。(6)又心は内にあらず、外にあらず中間にもあらずと云つてあるがこれも住心品の説と同じである。陀羅尼品第二の二に於いて、(1)迦樓羅(Garuda)觀が明してある。自身が迦樓羅となり、次で五大觀を作し、その次に行者が毘盧遮那如來の三昧に入ることが明されてある。(2)唵・吽・惹・護・娑の陀羅尼を觀察し、月輪の中に唵字ありとし、字は變じて毘盧遮那となると觀ず、乃至北方の月輪の中に娑字あり、字は變じて不空成就如來となると觀ず、(3)五種の三昧、(4)八陀羅尼門の中の第三の無邊漩渦陀羅尼門までがこの品に於て説かれてある。陀羅尼品第二の三に於て、第四の海印陀羅尼門から、第八の諸佛護持莊嚴陀羅尼門まで明し、大悲胎藏出生品第三に於て、大悲爲根の説明があるから、陀羅尼品全部は主として、菩提爲因の一句の細説と見做す可きである。この品に於て、菩薩は大悲心に住して、三十二種不共の事業を建立す可きことが説かれてある。菩薩には無量の事業がある。衆生は無邊であり、生衆の煩惱も亦無量であるから、無邊の解脱門があると云つてある。入如來大悲不思議品第四に於て、菩提の血相不可得なること、並に空・無相・無願の三解脱門を明し、又過去久遠の昔に、梅檀舍多如來が、大悲行を修したことを記してある。入如來不思議甚

深事業品第五の一に於て、如來は文殊菩薩に對して、三十二種の正覺事業のあることを明して居られるが、此の品に於ては、如來第十正覺事業までが明してある。同品第五の二には、如來第十正覺事業から、第二十八正覺事業までが示され、同品第五の三に於いて、第三十二正覺事業まで明してある。又彌勒佛下生の時にも此の守護國界主陀羅尼經が説かれると言つてある。菩薩瓔珞莊嚴品第六の一に於て、戒・定・慧・陀羅尼門の四種の瓔珞莊嚴が明してある。戒に十種、定即ち三昧に十種、智慧に十種、陀羅尼に十種の別あることが、詳説されてある。菩薩瓔珞莊嚴品第六の二に於て、四種の德に對する讚頌を出し、且つ長行に於いて、二乘に對して、菩薩の優れたことが説かれてある。大光普照莊嚴品第七には、光普照の八種を説き、傷を以て其の德を讀してある。般若根本事業莊嚴品第八には、般若母と般若業とが廣く説かれ、且つ偈頌でも説かれ、又次に般若若菩提と念意菩薩との關係が明されてある。陀羅尼功德軌儀品第九には、祕密主金剛手の間に對して、一切陀羅尼の母として、守護國界主陀羅尼を説かれることに成つてある。陀羅尼母とは即ち唵字である。三世の諸佛は皆此の字を觀じて菩提を得られたのである。

(2)次に金剛城曼荼羅に就て説かれてあるが、これは即ち金剛界曼荼羅である。(3)又次に唵字月輪觀が明してある。阿闍世受記品第十には、(1)古昔の迦葉佛の時に、訖哩枳(Nirijit?)王が二種の夢を見られ、

同佛の説明を得られたこと、(2)阿闍世王の入佛道の因縁が明かされてある。如來囑累品第十一には、諸國王・大臣・長者・釋提桓因、大梵天王等の諸天が、此の經を讚歎し、此の經を誦持するものを擁護することを誓はれた偈文が擧げられてある。此の經に西藏譯が存在して無い所から、本經が果して印度で出來たものであるや否やを疑つて居るものも有るが、吾人には此の經が印度で作成されたものであると思はれる。但し兩部の大經と相前後して作られたもので、或は兩部の經よりも以前の作では無いかとも想像し得られる點がある。

**守護國界主陀羅尼經**

(神林隆澄) ①(日)Shin-go-koku-kai-shu-ta-ro-ni-kyō. 國譯守護國界主陀羅尼經 ②十卷 ③存、國譯一切經密教部第四 ④岡田契昌譯

**守護國界主陀羅尼經釋**

①(日)Shin-go-koku-kai-shu-ta-ro-ni-kyō-shaku. 守護國界經釋、守護經釋 ②二卷 ③存、弘法大師全集第一二教相部 ④空海(實龜五)承和二年(771)述 ⑤貞享五年(1728)述 ⑥谷大、餘大(二八三四)

**守護國界主陀羅尼經釋愚草**

①(日)Shin-go-koku-kai-shu-ta-ro-ni-kyō-shaku-gu. 守護經釋愚草 ②三卷 ③存 ④空海(實龜五)承和二年(771)述 ⑤貞享三年刊 ⑥京大、日大未(1935)述

**守護國界章**

①(日)Shin-go-koku-kai-shu-ta-ro-ni-kyō-shaku. 守護國界章 ②九卷 ③存、大正七四・一三五No. 1711

①縮箱六、日本大藏經天台宗顯教章疏第一、傳教大師全集第一 ④最澄(神護景雲元一弘仁一三A.D. 767-822) ⑤弘仁九(A.D. 818)大師年五十二 ⑥一部三卷を上中下に分卷して九卷と爲す。龍堂錄、可透錄、傳燈錄には本三卷後分九卷とあり、羅漢錄等には單に九卷とあり、修禪錄には守護章一卷二十二紙とあり、寂山大師傳には守護國界十章と記せり。序云乃有興州會津縣(德一)和尚、執法相鏡……忽造中邊義鏡三卷、盛破天台法華義……且爲洗除執垢集諸家文、敬代喜根領、遙馳加持字云爾。跋云庶而今而後國無謗法弊、萬民不滅、數、家有讀經頌、七難令退散、守護國界蓋謂其斯二歟。以て本書の題名及撰述の由來を知るを得べし。一部上中下三卷を更に上中下に分卷す、上卷は十三章、中卷は二十六章、下卷は十二章より成る。

十一、十二、十三の四章は摩訶止觀に顯はれたる天台の止觀立行に對する德一の説を破し且つ德一の法相唯識の止觀立行を破斥し山家の止觀立行と直往思想を主張す。中卷第一章より八章に至る八章は法華玄義の五重玄義の名玄義を中心とせる山家德一の論評なり。第九章より卷末二十六章に至る十八章は法華經の分科及經文の解尺に付天台の文句、慈恩の玄讀との異同を考へ、山家德一各に自説を主張す、内第九章より十八章に至る十章は法華序品の經文解釋の問題、十九章より二十二章に至る四章は方便品の解釋、二十三章より卷末二十六章に至る四章は譬喩品の解釋なり。序品の内九、十二章は一經三段、兩重三段の法華分科に對する玄贊に依れる德一の批評に答へ且つ之を破斥す。十一、十二の兩章は經首の如是の解釋に付文句玄贊意見を異にするを再び山家德一の間に論評さる。十三、十四の兩章は法華同開衆、菩薩の歎德日の文に對する玄贊文句の見解の異同より山家の菩薩の行位論に至る。十五、十六の兩章は序品玄文殊問成就の法華論の主張には正邪を文句玄贊の説明に考へ、十九、二十の兩章は方便品の分科には文句玄贊に依りて正邪を考へ、二十一、二十二の兩章は方便品の一大事因縁の解釋に就き論評し、二十三より二十六に至る四章は譬喩品の白牛車と牛車との同異即三車四車に付論及す。下卷十二章は定性二乗の成佛不成佛を問題の中心としたる天台法相華嚴の教理上の論評で、内一、二、八、九、十の五章は定

上卷第一章より第九章に至る九章は八教大意四教義、玄義等の天台の五時八教判に對する德一法師の否難を彈破せるものにして其の中第一章は法相三時教判を評し尙法華深密二種の比較を爲し、三種法華、一念信解等の主張を爲す。第二、三、四、八、九の五章は八教大意四教義玄義等の五時教判に對する德一法師の謬見を正し且つ山家の教義を開陳せり、第五章は四教義の天台の四諦説に對する德一の批難を破し、第六、七章は八教大意四教義の天台の四教行人の行位に對する德一の批評を破し山家の直道思想に對する教學的基礎を主張す。第十、

論評で、内一、二、八、九、十の五章は定

性二乗の成佛不成佛の問題に就き論議し、第三、四、五の三章は定性二乗成佛の根柢を爲す根本的思想即ち眞如種子の關係に就き論議し其の當然の歸結として佛智の常不常に論及す。第六、七の兩章は定性二乗の成不成を中心としての法相三時教判に對する山家の批評なり。第十一章は華嚴五教章分相門の四車成立の文を破せる徳一の主張を破し華嚴宗の主張を救ふ。十二章は定性二乗問題を中心とせる法華權實論の山家徳一の論評なり。

(備考) (一)要之守護章一部は法華經を中心とせる天台の五時八教判、行位斷惑、止觀立行、定性二乗、經文解釋及分科等に就き天台大師の説明に對し、徳一法師が法相唯識特に玄奘の思想を以て批評否難を加へたるに對し山家之を反駁し、天台の正義を主張し其間斷片的に山家の特徴ある思想教義を發表暗示したるものにして、山家の撰述の中、其の量より考ふるも質より見るも極めて重要な代表的著述なり。(二)山家の著述に別に法華去惑四卷あり守護章中巻と大同なり、其の相異點を記せば、(一)守護章中巻は二十六章に分章せるに關らず去惑は分章せず且つ去惑は守護章の分章せる各章の序文數行を欠けり。(2)又守護章は上中下三巻に分卷せるも、去惑は四巻に分卷せり。(3)守護章第十章の内去惑は本文十行を欠けり。又第十四、第十五の兩章去惑と稍相違す。去惑四卷は恐らくは守護章中巻の草本なるべし。(三)再版傳教大師全集第二卷蒐録の守護章は、初版全集と稍

相違せり。特に上下三十六頁に本文脱字九十六字を加へたるが如きは顯著なるものなり。

相違せり。特に上下三十六頁に本文脱字九十六字を加へたるが如きは顯著なるものなり。

⑦〔注釋〕 守護國界章未書一卷六十紙(寫守護國界章御引經論示處一卷二十九紙(寫)〔參考〕 山家祖德撰述篇目集卷上

⑧正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

⑨正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

⑩正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

⑪正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

⑫正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

⑬正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

⑭正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

⑮正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

⑯正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

⑰正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

⑱正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

⑲正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

⑳正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

㉑正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

㉒正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

㉓正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

㉔正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

㉕正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

㉖正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

㉗正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

㉘正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

㉙正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

㉚正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

㉛正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

㉜正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

㉝正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

㉞正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

㉟正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

㊱正保四刊(龍大、研佛)(正大、一三六・五四)寛文九刊(正大、一三六・五三)(高六、寄・一・一五)享保一八刊(谷大、餘大・二〇一三)(正大、一三六・二、五二)(京大、藏・二四三・三四)(哲、や・八・左・二四)(鹽入亮忠)

矩畔拏衆・諸鬼神等も、佛の神呪を聞き、皆悉く降伏すること猶ほ大風の火焰を吹散して、遺餘なからしむるが如くであるとして、四天王の神呪よりも、守護大千大明王神呪の威徳の廣大なることが、上巻に於て明してある。中巻に於ては、(1)藥叉衆(Yakṣas)、(2)羅刹婆(Rakṣasas)、(3)矩畔拏(Kumbhānda)以上三類に屬する種々の形相を擧げ、其等が日夜に人間世界を遊行して、人類を惱害して居るが、守護大千大陀羅尼の加持に依つて、悉く降伏し得ることを明し、(4)妙高山王等の諸山の名を擧げ、此等の諸山には諸天來つて遊戯し、五通仙の依止し、苦行を行ずる所であると爲し、(5)阿修羅(Aśura)王等、無熱惱池龍王等・迦樓羅(Garuda)王・十六大藥叉將・藥叉女・大羅刹女等は各々に異形を現じ、戰具を持して、十方に馳走し、人畜の生命を害し、彼等の至る處は、地皆搖動し、園林枯死し、草木乾焦し、一切の山岳悉く皆摧毀するも、此の守護大千の神呪の威徳力に依て、諸鬼神は自ら縛せられ、災害は止息するに至る。(6)毘沙門天王の阿拏迦嚩底(Aṅgārā)城の模様を明し、且つ其の眷屬である六萬四千の藥叉衆が、惡行を爲して毘沙門天王に誦罰せらるること。(7)持國天王は、その眷屬である六萬四千の彦達嚩・羅刹婆衆が、東方にあつて、世間の一切衆生を惱亂して居るが、我今此等を誦罰せんと言つて、天王自らの神呪を説く。(8)增長天王は南方六萬四千の矩畔拏衆や、尾那夜迦(Vidyakā)等が常に世間

に於て、毒害の心を起し、衆生を惱亂して居ると爲して、之を禁止せんが爲めに、同天王自らの神呪を説き。(9)廣目天王は、その眷屬である六萬四千の大龍王衆が西方に於て大雲を興し、大勇猛を現じて、大亂闘を爲し、世間に於て衆生を惱亂すと爲して、之を禁止する爲に、自己の神呪を説き。(10)大梵天王等も同様の意味で神呪を説いたことが明してある。(11)最後に佛陀は四天王並に大梵天王等を隨へて、毘耶離大城に至り、守護大千陀羅尼を誦じて有ゆる危難を救ふたことが記されてある。卷下に於ては、守護大千陀羅尼を誦するに當り、先づ曼拏羅を建立し、結界を行じて、月の一日から十五日に至るまでに、此の法を修す可きこと、並に護摩法までも明してあるから、明に密教的の修法となつて居る。殊に注意す可きは、大日如來・阿闍・寶生・無量壽佛などど列記し、又修法に當ては五辛を食することを深く禁じてある。

本經は佛母大孔雀明王經・尸多林經・大隨求陀羅尼經・大威徳神呪經などと同類にして、眞言密教の側からは、謂ゆる雜部密教に屬するものと見做されて居る。然るに孔雀明王經や、隨求陀羅尼經などよりも、遂に純密教の色彩が濃厚に成つて居ることは、見過し難い事實である。この經には梵本も、藏譯も現存してある。

**守護妙法論** ①(日)Shū-go-myō-ho-ron. ②一卷 ③存 ④日現述 ⑤安政六刊 ⑥(谷大、餘六・三二五七)

**守根經** ①(日)Shū-ken-kyō. 現代意

譯守根經 ③存、現代意譯佛敎聖典叢書第四增一阿含經抄 ④赤沼智善譯

**守正護國章** ①(日)Shū-shū-go-kyō = F. 1. 1. ②一卷 ③存、日蓮宗宗學全書第五不受不施護門派部並に萬代龜鏡錄第一附錄 ④日講(寛永三一元祿一)A. D. 1625—1698)述 ⑤寛文六(A. D. 1666)

⑥文祿の頃、日良によつて提唱せられたる不受不施義は、寛文五年の寺領朱印は敬田供養なれば、手形誓書を提出せざる諸寺の寺領を沒收すべしとの幕命によつて日蓮門下に大動搖を生じた。この書は野呂檀林の化主日講が、敢然手形提出を拒み、寺領朱印は敬田供養の義を成さず、但これ一般政道の仁恩なるを論じ、進んで佛道の第一義門より幕命の非法を論述したるものである。

日講は、この書の提出により遂に同年日向佐土原に流謫せられた。この書先づ總じて訪法の施を受くべからざる五理由を擧げ、次に理論の證文を出し、別して寺領について、これ能施の人の心によつて三寶恭敬の敬田ともなり、また一般の仁恩ともなる、幕府信仰なきが故に敬田の義を成さずと雖も、幕府強ひて敬田といはゞ、訪者の施なるが故に受くべからず、況んや悲田供養の新那義を成して、これを受くるの徒の如きは、宗義の正法に契はずと論じて悲田新受の義を破し、進んで、飲水行路盡く國王の布施なりと強ふるに到つては、出家には全く國王の仁恩なきの義となりて甚だその當を得ざるものなり。佛法によれば、國王はこれ共業の所感にして必しも國王の左右す

るところにあらず、出家は戒行を持ち善惡を教へ衆生を教化す。これ國恩に報ゆる所以なり。何ぞ仁恩に浴するの義無らんや等と論じて、幕命の非道、出家の制法を論じ、不受不施の正義を守るものこれ國恩報謝の所以なると主張せるものである。

⑦寛文六寫 ⑧(正大一八四・六五) (望月歡厚)

**守仁定禪師語錄** ①(日)Shū-in-jūzen-ji-go-roku. (支)Shou-jen-ting-chen-shih-yü-lu. ②二卷 ③存 ④清元、了貫等編 ⑤寫本(京大、藏・一七・七)

**守倫科註普門品圓通記** ①(日)Shū-rin-kwa-chū-fu-mōm-dōn-on-zū-ki. ②五卷 ③存 ④眞賢(一正徳二)A. D. 1712)記 ⑤刊本(龍大、二四一三・三八)

**朱切紙** ①(日)Shū-kiri-kami. ②十二通 ③存、傳燈輯要卷上 ④問仰記

**朱子行漢錄** ①(日)Shū-shū-to-kan-roku. (支)Chü-tai-hsing-han-lu. ②一卷 ③缺 ④魏朱士行(一甘露五)A. D. 260)撰

⑤本錄は詳しくは魏時沙門朱士行漢錄と云ひ、又略して單に朱士行漢錄とも云ふ。隋の費長房の歴代三寶記に始めて引用せられたものであつて、従つて道安錄にも僧祐錄にも未だその引用は無かつた。道宣の大唐内典錄卷第十には「魏時沙門朱士行漢錄一卷、右依檢、元是穎川沙門、於洛陽講道行經、因著其錄」と説明され、智昇、圓照又殆ど同一の説明をなして居る。即ち、彼が洛陽

に於て道行經を講じつゝあつた際、既譯の聖典を知る爲に作つて置いた經錄であると云はれて居る。その撰述の年代は明かでないが、彼が般若經の原本を探る爲に西域に赴いたのは曹魏の甘露五年(A. D. 260)であつたから、その前數年の間に製作されたものと考へなければならぬ。本錄は前述の如く、三寶紀以前の僧祐錄に引用されて居らない爲にその存在を否定せんとする學者も存するが、歴代三寶紀は本錄其ものに關してはその卷第十五に「朱士行漢錄一卷(魏時)」と記載せる外、本文中に朱士行漢錄又は朱士行錄として隨處にこれを引用して居る。

その内容は今日現存して居らないものである爲に、勿論正確なことは云ひ得ないが、歴代三寶紀に引用されて居るものに基づいてそれを推すに「四十二章經一卷、十地斷結經四卷、五十校計經二卷、七處三觀經二卷、安般守意經二卷、陰持入經一卷、人本欲生經一卷、普法義經一卷、漏分布經一卷、八正道經一卷、五陰論經一卷、流攝經一卷、是法非法經一卷、本相倚致經一卷、內藏經一卷」右十三部凡十六卷安息國太子清字世高譯、首楞嚴經二卷、他眞陀羅經二卷、阿闍佛國經二卷、寶積經一卷、梵瓶泥洹經一卷、右五分凡八卷月氏國沙門支婁迦讖譯、道行經一卷、右一部凡一卷天竺沙門佛朔譯、成具光明經一卷、右一部凡一卷西域沙門支暹譯、問地獄事經一卷、右一部凡一卷外國沙門康巨譯、古維摩經二卷、右一部凡二卷臨淮清信士嚴佛調譯、合

計二十四部三十四卷の如きものであつたやうである。猶、法琳の破邪論に従へば、秦代に於ける釋利房等の傳經説の如きも、本錄中に記載されて居つたと云はれて居る。

⑦(參考) 三寶紀第二五、內典錄第一〇、開元錄第一〇、貞元錄第一八、破邪論 (林屋友次郎)  
**朱子辨釋子記** ①(日) Shu-shi-ben-shaku-shi-ki (支) Chu-tz-pien-shih-tz-chi. ②一卷 ③存、揚齊筆錄第一一 ④(帝國、一九五、一〇七)  
**朱子辨釋氏説** ①(日) Shu-shi-ben-shaku-shi-satsu (支) Chu-tz-pien-shih-shi-shi-sato. ②一卷 ③存、揚齊筆錄第一一 ④(帝國、一九五、一〇七)  
**朱紫辨正** ①(日) Shu-shi-ben-shi-shi. ②一卷 ③存、揚齊筆錄第一一 ④(帝國、一九五、一〇七)  
**朱利鑿特經** ①(日) Shu-ri-tan-do-k-kyō. 現代意譯朱利鑿特經 ③存、現代意譯根本佛敎第五增一阿含抄 ④泉芳瑞譯

**取意鈔** ①(日) Shu-i-shō. ②一卷 ③存、異義集眞宗大系本第一 ④存、覺正應三一應安六 A. D. 1290-1273 作 ⑤取意抄出の一部攝取捨の釋が抄したるもの。(參考) 淨土眞宗聖敎目錄  
**取意鈔出** ①(日) Shu-i-shō-shutsu. ③存、假名聖敎(惠空等寫八十八部)之内 ④惠空(正保元一享保六 A. D. 1644-1721) 編

①本書の初に「淨土文類集に曰、取意鈔出」とあるより、誰人か、斯く題せるものゝ如く、取意鈔出の四字は、取意鈔に出づといふ意か、或は鈔は抄の誤で取意抄出といふ意か、しかし、取意鈔といふ書名怪しく、そいふ書があるかどうかも明らかでなく、又、本書は坊間流布の淨土文類集そのもので取意抄出でもなく、この四字解しがたし、或は別に淨土文類集なるものがあつて、それを取意抄出したといふ意か、疑はしい。因に、存覺の淨土眞要鈔は淨土文類集(其項参照)を改作したものであるが、果して其の書であるかどうか猶研究を要すべく、又、之れに三四の異本あり。(安井廣度)

**取因假設論** ①(日) Shu-in-ke-satsu-ton (支) Chu-yin-cha-she-tan. ②一卷 ③存、大正三一・八八五 No. 1632、縮著二、卅二二・三、北653臨、南657臨、元649臨、明北1221臨、清1221臨、慶643命、天643臨、指607命、法632命、至1361甲、明南1300華、天1228 ④陳那菩薩造、唐義淨(貞觀九一先天二 A. D. 635-713) 譯 ⑤義淨が南海寄歸傳の中に陳那の八支を擧げ、其の中に取事施設論を數へて居るが恐らくこの取因假設論と同一であらう。取因假設は因を取つて假設するといふ意味、假設は施設と同じで、方便假立の意味、因とは總衆と相續と分位差別とを指し、之れを事ともいふたのであらう。世間一般の事柄は此の三を基として假説して居るに過ぎないから、その假説の上の一性と異性と非有とを執すべきでないことを總論の趣意とし、以下全體を十三頌と其の釋とによつて

論述したるもの、其の間に攝大乘論の一頌と恐らく法句經の一頌とを引用して居る。假説の意味を根本的に考ふる時は識の似現といふに歸するものであるから、此の論の根本は著者の唯識説に存するのである。(宇井伯壽)

**取灌頂闍伽水作法** ①(日) Shu-kwan-jō-a-ka-sui-sa-hō. ②七帖 ③存 ④足利一徳川時代寫 ⑤(寶龜院)  
**取血氣神呪** ①(日) Shu-kek-ki-jin-shu (支) Chu-hsieh-ki-shen-chou. 取血氣神呪經 ②一卷 ③缺 ④後漢代失譯 ⑤(參考) 三寶紀第四、內典錄第一、開元錄第一四、貞元錄第二、第二四  
**取水作法** ①(日) Shu-sui-sa-hō. ②一卷 ③存、大日本佛敎全書第三五阿婆縛抄之内 ④承澄(元久二一弘安五 A. D. 1205-1282) 撰

**取草釋** ①(日) Shu-so-shaku. 手草 ②二卷 ③存、日本大藏經天台宗密敎章疏第三 ④安然(承和八一延喜年間 A. D. 841-901) 述 ⑤(參考) 本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上  
**首山省念禪師語錄** ①(日) Shu-zan-shō-nen-zen-ji-go-toku. (支) Shou-shan-hsing-nien-chen-yan-shih-yü-lu. ③存、記續二・三・二古尊宿語錄第八 ④宋首山省念(天成元一淳化四 A. D. 925-993) 語 ⑤風穴延昭禪師の法嗣にして南岳下八世汝州首山の省念禪師三會の語錄を蒐めたものである。省念は唐天成元年萊州の狄氏に生れ、南禪寺に得度し、常に法華經を誦し、

念法華と世稱せられた。風穴に嗣ぎ、汝州首山に初住し、次で同州葉縣廣教院第一世となり、後に同州寶應南院三世となり、宋淳化四年(A.D. 993)十二月六十八歳で示寂した。本書に收むる語録は、第一に初住首山の上堂示衆の語要、第二に次住廣教院上堂示衆の語要、第三に寶應南院の上堂語、小參示衆の語要を收め、次に鏡清十二問答代語、勘辨、示衆の偈頌、四賓主頌等十數首を收めたものである。(大久保堅瑞)

**首至問佛十四事經**

①(日) Shu-shi-mont-hutsu-jū-shi-ji-kyō (支) Shou-chih-wen-fō-shih-sai-shih-ching. ②一卷 ③失譯 ④【参考】仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

**首書純祕抄聞書**

①(日) Shu-sho-jūn-pi-shō-hi-gaki. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

**首題要義**

①(日) Shu-dai-yō-igi. ②一卷 ③存 ④日輝(寛政一一)安政六A.D. 1800-1839)述 ⑤明治一二刊 ⑥(立大、A.O.三、一一六)

**首達經**

①(日) Shu-dak-kyō (支) Shou-ta-ching. (日)A.K. 20. Velmā. ②一卷 ③失譯 ④生經第五卷の抄出。

【参考】出三藏記第三、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

**首羅比丘經**

①(日) Shu-ra-bi-ku-kyō (支) Shou-lo-pi-chih-ching. ②一卷 ③存、大正八五・一三五六、No. 2873 ④本經はスタイン氏の蒐集せる燉煌出土古

寫本中、疑偽經の一で、大英博物館蔵にかゝる。首部は破損せる爲に題名を缺くも、尾題に「首羅比丘經」とあり、依つて大正藏は表題を出して收載したのである。本經は隋の開皇十四年(A.D. 564)七月、法經等の撰述に成る「衆經目錄卷第四」の中疑偽目錄(大正五五・一七三・中)に出づる「首羅比丘見月光童子經一卷」と相似するもの、如く、歷代三寶紀以下諸經錄悉く之を踏襲して疑偽經中に編入してゐる。本經は其の斷篇の初に於いて、首羅比丘と大仙との問に妖邪に關する問答あり、即ち首羅曰はく「復たいかなる方計を作して、妖邪の災を免るゝ事を得んや」と。大仙は告げて曰はく「妖邪に多種あり、我が勳を受くる者は之を信ずること莫れ、月光世に出づ、唯だ善者のみありて盡く之を見るを得ん。然れども」五逆大惡の衆生は終に見ざるなり」と。それより首羅が大仙に兜率城の城池巷陌等に關することを尋ねしに、大仙答へて曰はく「(上略)中に兜率城あり、高き千尺、下基千尺、激城亦五百尺、七十二門を開く。紫磨金色明を作せり。(中略)巷々相當門々相望出で、法王を見る」とあり。首羅比丘之を聞いて歡喜せしを記し、其れより琴樂の樂を問訊し、三十三天の快樂の極なきを叙し、次に大小の邪災大魔降伏の勇士赫天の名を擧げ、月光出づるに臨んで颯に災あるを説き、七日闇黒の時あるに當つては、夜叉、羅刹、毘舍闍鬼、鳩槃荼鬼、飛行羅刹食人の數無量なりといひ、そして唯三歸五戒を受持し、齋法を奉行する者のみ

が解脱し得るといつてゐる。これより以下の叙述と用語とに至つては全く、道佛二教の混淆、神仙妖術に關する多くの言葉を用ゐてゐるし、其の間に、六朝時代に流行した觀音信仰や、維摩居士の信仰などを入り混せてゐるからして、直ちに支那特有の社會的諸事情から製作されたものであると知られる。即ち陽州、漢境、太寧寺、蓬萊山、太寧山、黄河、洛陽等の地名寺山名河名を誌し、又、石賢、德嚴賢、明孫賢、奇花賢、德吳賢、使鄭賢、當觀賢、寶趙賢等の道家名を有する賢者の名を列ねては次に大仙は首羅比丘に「汝は今往いて之に就くべし。眞に汝の導師にして能く生死を運らさん」といつてゐる。

經の後の部分に「優丘尼優丘尼、但薄但薄、懽懽懽懽、烏呼(尼)烏呼尼、薩呼薩呼、但又但又(下略)」の奇妙なる呪文を出し、呪を讀む時は淨らかに手を洗ひ、口を漱ぎて此の呪を讀まば人をして晨夜安隱ならしめて菩薩を見る。此の呪百遍を讀まば菩薩大光明を放ちてその人の面前に現在するを説いてゐるなど、唱佛思想に名を藉りて、道佛二教の思想の混淆を示してゐる。之を要するに本經は其の内容思想共に頗る混雜を呈し、其の用語構想等總べて普通の佛語に似ず、恐らく本經の製作者は、月光童子を假り、六朝當時流行の道家神仙の思想に擬して之を偽作せしものと見らるゝ。

**首羅比丘見月光童子經**

①(日) Shu-ra-bi-ku-ken-gak-ku-jō-ji-kyō (支) Shou-lo-pi-chih-chien-yūch-kung-tzu-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④【参考】法經錄第二、仁壽錄第四、內典錄第一〇、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

**首楞嚴圓通疏**

①(日) Shu-ryō-gon-en-zū-shō (支) Shou-ryō-gon-yūan-tō-hō-shū. ②十卷 ③存、已續一・一九・三一

④元代惟則解、明傳燈疏 ⑤本書は、中興明本禪師の法嗣である天如惟則禪師の首楞嚴經會解と共に、諸疏を會通したる無盡傳燈和尚の圓通疏を併述したものである。會解は、姑蘇城師子林の天如惟則が、諸家の要解を會して修治刪訂し、補註を加へ、殊流同じく海に歸するが如く、學人をして、諸佛の慧命、衆生の達道、教綱の宏綱、禪門の要關たる首楞嚴經了義の説を理會せしめんとしたもので、惟慈、弘沈、崇節、洪敏、子璿、智圓、仁岳、曉月、戒環等諸師の疏を引用して凡そ三年を費して述作成り、元至正二年佛成道日師子林に於て自序し、臨川の克立、本書を募縁上梓する緣由を題語し、元至正四年(A.D. 1352)宛災と爲して刊行したものであるが、學人帯同の便を思ひ、吳郡の張子明等同志と共に方冊として刊行せんと企圖し、書字は、羅元、施叔は王文勇、點校參詳勸募營辨する宜春等の助縁を得て、同十二年(A.D. 1352)三月より十一月に至つて完成し流通せしめたもので、惟則の勸持叙、克立の

寫本中、疑偽經の一で、大英博物館蔵にかゝる。首部は破損せる爲に題名を缺くも、尾題に「首羅比丘經」とあり、依つて大正藏は表題を出して收載したのである。本經は隋の開皇十四年(A.D. 564)七月、法經等の撰述に成る「衆經目錄卷第四」の中疑偽目錄(大正五五・一七三・中)に出づる「首羅比丘見月光童子經一卷」と相似するもの、如く、歷代三寶紀以下諸經錄悉く之を踏襲して疑偽經中に編入してゐる。本經は其の斷篇の初に於いて、首羅比丘と大仙との問に妖邪に關する問答あり、即ち首羅曰はく「復たいかなる方計を作して、妖邪の災を免るゝ事を得んや」と。大仙は告げて曰はく「妖邪に多種あり、我が勳を受くる者は之を信ずること莫れ、月光世に出づ、唯だ善者のみありて盡く之を見るを得ん。然れども」五逆大惡の衆生は終に見ざるなり」と。それより首羅が大仙に兜率城の城池巷陌等に關することを尋ねしに、大仙答へて曰はく「(上略)中に兜率城あり、高き千尺、下基千尺、激城亦五百尺、七十二門を開く。紫磨金色明を作せり。(中略)巷々相當門々相望出で、法王を見る」とあり。首羅比丘之を聞いて歡喜せしを記し、其れより琴樂の樂を問訊し、三十三天の快樂の極なきを叙し、次に大小の邪災大魔降伏の勇士赫天の名を擧げ、月光出づるに臨んで颯に災あるを説き、七日闇黒の時あるに當つては、夜叉、羅刹、毘舍闍鬼、鳩槃荼鬼、飛行羅刹食人の數無量なりといひ、そして唯三歸五戒を受持し、齋法を奉行する者のみ

が解脱し得るといつてゐる。これより以下の叙述と用語とに至つては全く、道佛二教の混淆、神仙妖術に關する多くの言葉を用ゐてゐるし、其の間に、六朝時代に流行した觀音信仰や、維摩居士の信仰などを入り混せてゐるからして、直ちに支那特有の社會的諸事情から製作されたものであると知られる。即ち陽州、漢境、太寧寺、蓬萊山、太寧山、黄河、洛陽等の地名寺山名河名を誌し、又、石賢、德嚴賢、明孫賢、奇花賢、德吳賢、使鄭賢、當觀賢、寶趙賢等の道家名を有する賢者の名を列ねては次に大仙は首羅比丘に「汝は今往いて之に就くべし。眞に汝の導師にして能く生死を運らさん」といつてゐる。

經の後の部分に「優丘尼優丘尼、但薄但薄、懽懽懽懽、烏呼(尼)烏呼尼、薩呼薩呼、但又但又(下略)」の奇妙なる呪文を出し、呪を讀む時は淨らかに手を洗ひ、口を漱ぎて此の呪を讀まば人をして晨夜安隱ならしめて菩薩を見る。此の呪百遍を讀まば菩薩大光明を放ちてその人の面前に現在するを説いてゐるなど、唱佛思想に名を藉りて、道佛二教の思想の混淆を示してゐる。之を要するに本經は其の内容思想共に頗る混雜を呈し、其の用語構想等總べて普通の佛語に似ず、恐らく本經の製作者は、月光童子を假り、六朝當時流行の道家神仙の思想に擬して之を偽作せしものと見らるゝ。



再題を附して居る。圓通疏は首楞嚴經に諸師の疏解の中に就て、天如惟則の會解最も其の玄妙の旨趣を顯揚すと爲し、亦、諸師の疏解にも採る可きものありとして會通し、圓通疏を成したもので、其の引用經目の書疏は、智圓の疏並に谷響鈔。仁岳の説題、集解並に重開記。可觀に補註。雲間法師の補遺。子璿の義疏並に註。善月の玄覽。思坦の集註。弘沈の疏、洪敏の證真鈔。崇節の刪補疏。道欽の手鑑。王安石の解、補遺、纂註並に釋要。德洪の合論。惟則の會解。成輝の義海。等の古人の述作、並に普泰の管見。眞覺の百問。眞界の纂註。鎮澄の別眼並に正觀疏。曾鳳儀の宗通。德清の懸鏡並に通議。界澄の疏。眞鑑の正脉。株宏の模象記等、當代諸師の述作を擧げて居る。採録するに際しては、主として古人の疏解を掲げ、今人の述作を畧すと云ふ。即ち本經の文言を高書し、科段を旁註し、先づ會解を出し、圓通疏を次第せしめたものである。明萬曆四十七年中安居日(A. D. 1619)天台山幽溪高明寺楞嚴壇の東方不降堂に於て天如惟則自序し、明泰昌元年(A. D. 1620)庚申七月宣灑の滄橋居士蘄州の袁世振の序、明天啓元年(A. D. 1621)三月宣灑の虞淳熙また圓通疏序を撰して流通せしめたものである。(大久保堅瑞)

**首楞嚴義疏注經**

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-gon-gi-sho-chū-kyō (支) Shou-teng-yen-tsu-chu-ching. 首楞嚴經義疏注經、首楞嚴經義疏、首楞嚴經疏、首楞嚴經疏注經、楞嚴今釋 ②十卷或二十卷 ③存、大正三

九・八二三 No. 1799 七續一・一六三三四  
 ④宋子璿(一寶元元 A. D. 1038)述 ⑤延寶八刊(正大、一一七五・一五・二一)天和三刊(正大、一一七五・二二、二四)正保五刊(龍大、二四一七・一〇)曆應二刊(内閣)  
**首楞嚴義疏注經** ①(日) Shu-ryō-gon-gi-sho-chū-kyō. 滄頭首楞嚴義疏注經 ②十卷 ③存 ④刊本(谷大、餘大・一三六八)  
**首楞嚴義疏註經鈔** ①(日) Shu-ryō-gon-gi-sho-chū-kyō-shō. ②十卷 ③存 ④(正大、一一七五・四九)  
**首楞嚴經** ①(日) Shu-ryō-gon-gyō. (支) Shou-teng-yen-ching. ②八卷 ③缺  
 ④(參考) 武周錄第一二  
**首楞嚴經** ①(日) Shu-ryō-gon-gyō. (支) Shou-teng-yen-ching. ②二卷 ③缺  
 ④(參考) 武周錄第一二  
**首楞嚴經** ①(日) Shu-ryō-gon-gyō. (支) Shou-teng-yen-ching. ②三卷 ③缺  
 ④後漢支婁迦讖(一建和元—中平三 A. D. 147—186)譯 ⑤第一譯 ⑥(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四  
**首楞嚴經** ①(日) Shu-ryō-gon-gyō. (支) Shou-teng-yen-ching. ②二卷 ③缺  
 ④曹魏白延(一甘露三 A. D. 258)譯 ⑤第五譯 ⑥(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四  
**首楞嚴經** ①(日) Shu-ryō-gon-gyō. (支) Shou-teng-yen-ching. ②二卷 ③缺  
 ④西晋代竺叔蘭譯 ⑤第七譯 ⑥(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

**首楞嚴經** ①(日) Shu-ryō-gon-gyō. (支) Shou-teng-yen-ching. ②三卷 ③缺  
 ④前原支施倫(一咸安三 A. D. 373)譯 ⑤第八譯 ⑥(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四  
**首楞嚴經** ①(日) Shu-ryō-gon-gyō. (支) Shou-teng-yen-ching. 首楞嚴三昧經、舊首楞嚴經 ②二卷 ③存、大正一五・六二九 No. 629. 縮黃七、二二・四、北380得、南391得、元388得、明北395麟、清395麟、麗379改、天388得、指349改、法372必、至388忘、明南391麟、Np. 399 姚秦鳩摩羅什(建元二—義熙九 A. D. 344—413)一說弘始一一或義熙中寂)譯 ④首楞嚴三昧經の下を見よ。  
**首楞嚴經** ①(日) Shu-ryō-gon-gyō. (支) Shou-teng-yen-ching. 大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經、萬行首楞嚴經、大佛頂首楞嚴經、大佛頂經、中印度那蘭陀大道場經、楞嚴經 ②十卷 ③存、大正一九・一〇五 No. 945. 縮成一、二二・四、北495染、南438染、元432染、明北422羔、清422羔、麗427絲、天422染、指396絲、法419量、至321陰、明南299羔、Np. 456. 禪學大系經論部第一、御鏡經海一滴第一 ④唐般刺密帝(一神龍元 A. D. 705)譯  
 ①(等譯  
 ④首楞嚴經と呼ばれるものに本經の外羅什譯の首楞嚴三昧經二卷あり、彼の支那日本に於ける流行微々たるに反し本經は多方面に讀誦されその末註甚だ多し。解説は大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經の下を見よ。

**首楞嚴經會解** ①(日) Shu-ryō-gon-gyō-e-gē (支) Shou-teng-yen-ching-hui-chieh. ②十卷 ③存 ④元代惟則述 ⑤首楞嚴經圓通疏の下を見よ ⑥寛永二〇刊 ⑦(龍大、二四一七・一)(谷大、餘大・二一八)(京大、藏・一四・九)  
**首楞嚴經圓通疏前茅** ①(日) Shu-ryō-gon-gyō-en-tō-shō-shō-zen-bō. (支) Shou-teng-yen-ching-yuan-tung-sa-chi-en-mao. 楞嚴經圓通疏前茅 ②二卷 ③存、己續一・八九・三 ④明傳燈(一萬曆頃 A. D. 1573—1619)述  
 ⑤黃檗の無念深禪師、博山の無異大禪師と共に三無と稱せられて時人の尊崇を受けた、天台山幽溪高明寺の無盡傳燈和尚が、明萬曆十年百松和尚が聖水に於て首楞嚴經を講ずるに參じ、一日入室參問の次で百松真禪師の寂黙に省悟する所あり、同十五年この幽溪の道場に住して首楞嚴經玄義四卷を撰したが、後、合論及び正脉を得て此れを閱するに、合論は約にして周からず、正脉は繁にして據を失ふ所あるを以て、本經の淵義を宣揚せんが爲に所見の一斑を述作したものが本書である。即ち明萬曆廿九年虎林の虞司勳德園居士の勝果寺に於ける法華三昧の請に赴き、諸方來會の法侶に請はれて、先づ一序を撰し圓通疏と題して置

下を見よ。  
**首楞嚴經** ①(日) Shu-ryō-gon-gyō. 國譯首楞嚴經 ②存、國譯大藏經々部第四 ③(山田孝道(文久三—昭和三 A. D. 1863—1928)譯  
**首楞嚴經會解** ①(日) Shu-ryō-gon-gyō-e-gē (支) Shou-teng-yen-ching-hui-chieh. ②十卷 ③存 ④元代惟則述 ⑤首楞嚴經圓通疏の下を見よ ⑥寛永二〇刊 ⑦(龍大、二四一七・一)(谷大、餘大・二一八)(京大、藏・一四・九)  
**首楞嚴經圓通疏前茅** ①(日) Shu-ryō-gon-gyō-en-tō-shō-shō-zen-bō. (支) Shou-teng-yen-ching-yuan-tung-sa-chi-en-mao. 楞嚴經圓通疏前茅 ②二卷 ③存、己續一・八九・三 ④明傳燈(一萬曆頃 A. D. 1573—1619)述  
 ⑤黃檗の無念深禪師、博山の無異大禪師と共に三無と稱せられて時人の尊崇を受けた、天台山幽溪高明寺の無盡傳燈和尚が、明萬曆十年百松和尚が聖水に於て首楞嚴經を講ずるに參じ、一日入室參問の次で百松真禪師の寂黙に省悟する所あり、同十五年この幽溪の道場に住して首楞嚴經玄義四卷を撰したが、後、合論及び正脉を得て此れを閱するに、合論は約にして周からず、正脉は繁にして據を失ふ所あるを以て、本經の淵義を宣揚せんが爲に所見の一斑を述作したものが本書である。即ち明萬曆廿九年虎林の虞司勳德園居士の勝果寺に於ける法華三昧の請に赴き、諸方來會の法侶に請はれて、先づ一序を撰し圓通疏と題して置

下を見よ。  
**首楞嚴經** ①(日) Shu-ryō-gon-gyō. 國譯首楞嚴經 ②存、國譯大藏經々部第四 ③(山田孝道(文久三—昭和三 A. D. 1863—1928)譯  
**首楞嚴經會解** ①(日) Shu-ryō-gon-gyō-e-gē (支) Shou-teng-yen-ching-hui-chieh. ②十卷 ③存 ④元代惟則述 ⑤首楞嚴經圓通疏の下を見よ ⑥寛永二〇刊 ⑦(龍大、二四一七・一)(谷大、餘大・二一八)(京大、藏・一四・九)  
**首楞嚴經圓通疏前茅** ①(日) Shu-ryō-gon-gyō-en-tō-shō-shō-zen-bō. (支) Shou-teng-yen-ching-yuan-tung-sa-chi-en-mao. 楞嚴經圓通疏前茅 ②二卷 ③存、己續一・八九・三 ④明傳燈(一萬曆頃 A. D. 1573—1619)述  
 ⑤黃檗の無念深禪師、博山の無異大禪師と共に三無と稱せられて時人の尊崇を受けた、天台山幽溪高明寺の無盡傳燈和尚が、明萬曆十年百松和尚が聖水に於て首楞嚴經を講ずるに參じ、一日入室參問の次で百松真禪師の寂黙に省悟する所あり、同十五年この幽溪の道場に住して首楞嚴經玄義四卷を撰したが、後、合論及び正脉を得て此れを閱するに、合論は約にして周からず、正脉は繁にして據を失ふ所あるを以て、本經の淵義を宣揚せんが爲に所見の一斑を述作したものが本書である。即ち明萬曆廿九年虎林の虞司勳德園居士の勝果寺に於ける法華三昧の請に赴き、諸方來會の法侶に請はれて、先づ一序を撰し圓通疏と題して置

いたが、著作の約を果さず、後これを海印三昧疏と改題せしめんとしたるも、已に十年前、序を撰して圓通疏と題したる理由もあり、本經の宗とする所も圓通にあるを以て楞嚴の行法に題するに適すとて遂に圓通疏と題し、前述の如く合論正脈等の缺けたるを顯さんが爲め本書を撰したものである。其の列次を見るに、先づ本書の緣起を叙し、承寔を叙し、本經と首楞嚴三昧經、圓覺經、法華經、涅槃經、莊子等との異同を述べ、本經の科列を明にし、本經に對する諸種の問難疑訪を雪ぐため此れに應答釋明したもので、卷末にも百八問を設け、本經の深義に會入せしめんとしたものである。

**首楞嚴經總說** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-oku-satsun(支)Shou-leng-yen-ching-i-shuo. ②一卷 ③存、已續一・一九三

④明圓澄(永祿四—天啓六 A. D. 1561—1590)註

⑤本書は北京大覺寺の方念禪師の法嗣にして青原下三十世である紹興府雲門顯聖寺の湛然圓澄禪師が、首楞嚴經を讀むに際して、默契する所あれば記し留め、義理通ぜざる所は補記し、文字に訛訛あらば是れを正し、隨解隨錄して本書を成したもので、門下の諸師、本書の上梓を發願せしにより、明神宗帝萬曆四十四年(A. D. 1616)八月本書に序して行はしめたものである。湛然は會稽の人、隱峯に投じ、妙峯に謁して薙髮し、大覺寺方念に參じて其の法嗣となり、明熹宗帝天啓六年(A. D. 1626)十二月壽六十六歳

にして示寂せしを以て、本書の撰述は洪然五十六歳の述作である。其の總說と題したのは、深奥玄妙の大乘の淵旨を、自己の管見を以て釋したる所謂胸臆の談にして、通方の論に非ざるが故に總說と名づけたと云ふのである。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經記** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-ki(支)Shou-leng-yen-ching-ki. ②一卷 ③(参考)東域傳燈目錄卷上

**首楞嚴經義海** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gi-kai(支)Shou-leng-yen-ching-i-hai. ②三十卷 ③存、縮呂四一五、已三三・八一九 ④宋咸輝(—乾道元 A. D. 1165—)撰經入註

⑤本書は、閩僧福唐の咸輝が、楞嚴大師長水子璿の義疏注經并科、泐潭曉月の標指要義、並に吳興の淨覺仁岳の集解との三書を集成し、排經入注したもので、南宋孝宗帝乾道元年自ら義海緣起序を撰し、同三年夏至前一日自跋し、同三年十月既望、平江府松江華嚴教院前住神照大師智彬の後序、毗陵の華嚴智先の偈を得、南宋孝宗帝乾道八年(A. D. 1172)十一月十五日姑蘇定慧の顯長老の請ひ得たる左太中大夫會懷の序を附して鏤板せしめたものである。即ち楞嚴を學ぶ者をして觀覽に便せしめ、理會し易からしめ、百川同じく大海に會入する義にとり、諸解を統べて楞嚴經義海と題したもので、學人をして心に住せず、文言に著せず、理契を以て會同融通せしめ、無見の頂法不傳の妙を得せしめんとしたものである。其の排經入注は、上段に科圖を線によ

つて經文に排立し、經文の下に義疏標指要義を入注したものである。續藏本に據つて、本書の列次を見るに、卷首に會懷の義海總序、義疏序として宋仁宗帝天聖八年十月二十一日王隨の撰述せる序文、宋神宗帝熙寧六年二月十五日范杻の撰述せる序文、宋仁宗帝嘉祐四年七月十一日胡宿の撰述せる集解序、咸輝の自序たる義海を集成せし義海緣起序を收め、次で義海三十卷を收め、卷末に譯者般刺蜜諦は唐に譯して極量と云ふ所の極量傳、義疏跋、標指要義跋、義海總筆偈、咸輝の自跋、智彬の後序並に智先の題偈を收め、各卷末に音釋を附したものである。我が國の刊本に明曆本、延寶本等がある。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經義疏** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gi-shō(支)Shou-leng-yen-ching-i-shi. 首楞嚴經義疏注經、首楞嚴義疏注經、楞嚴今釋、首楞嚴經疏、首楞嚴經疏注經 ②十卷或二十卷 ③存、大正三九・八二三 No. 1790、已續一・一六・三一四 ④宋子璿(—寶元元 A. D. 1038)述 ⑤延寶八刊 ⑥(高天、奇、一・二三)

**首楞嚴經義疏** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gi-shō(支)Shou-leng-yen-ching-i-shi. 首楞嚴經義疏 ②十一卷 ③存 ④天和三刊 ⑤(龍大、二四一七・五)

**首楞嚴經義疏決通** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gi-shō-kei-tsu. ②十卷 ③存 ④道忠(承應二—延享元 A. D. 1653—1714)述 ⑤享保一〇寫 ⑥(龍大、研佛)

**首楞嚴經義疏攷異** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gi-shō-ko-i. ②十卷 ③存

⑦享保四刊(龍大、二四一七・六)寫本(龍大、研佛)

**首楞嚴經義疏私考** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gi-shō-shi-ko. ②三冊 ③存 ④寫本(哲、う・七・左・一三)

**首楞嚴經義疏釋要鈔** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gi-shō-shaku-yō-shū. (支)Shou-leng-yen-ching-i-shi-shih-yao-chō. 楞嚴經義疏釋要鈔、首楞嚴經釋要鈔 ②六卷 ③存、已續一・一六・五 ④宋懷遠(—嘉祐六 A. D. 1061—)錄

⑤長水子璿の法嗣である秀州長水の懷遠が、子璿の首楞嚴經義疏の流通久しけれども、鈔を闕くを以て、鈔を作りて義疏を輔せんことを弟子に請はれ、義疏の要義を釋し、義疏釋要鈔六卷を成し、宋仁宗帝嘉祐六年(A. D. 1061)十月望日自序して流通せしめたものである。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經義疏集註** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gi-shō-shū-chū. ②十卷 ③存 ④天龍註 ⑤寶永三刊 ⑥(正大、一七五・三一)

**首楞嚴經義疏大全抜粹** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gi-shō-dai-zen-bas-sui. (支)Shou-leng-yen-ching-i-sa-ta-chūan-pa-sui. ②十卷 ③存 ④明代錢謙益

**首楞嚴經義疏注經** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gi-shō-chū-kyō. (支)Shou-leng-yen-ching-i-sa-chū-king. 首楞嚴義疏注經、楞嚴今釋、首楞嚴經義疏、首楞嚴經疏、首楞嚴經疏注經 ②十卷或二十卷

つて經文に排立し、經文の下に義疏標指要義を入注したものである。續藏本に據つて、本書の列次を見るに、卷首に會懷の義海總序、義疏序として宋仁宗帝天聖八年十月二十一日王隨の撰述せる序文、宋神宗帝熙寧六年二月十五日范杻の撰述せる序文、宋仁宗帝嘉祐四年七月十一日胡宿の撰述せる集解序、咸輝の自序たる義海を集成せし義海緣起序を收め、次で義海三十卷を收め、卷末に譯者般刺蜜諦は唐に譯して極量と云ふ所の極量傳、義疏跋、標指要義跋、義海總筆偈、咸輝の自跋、智彬の後序並に智先の題偈を收め、各卷末に音釋を附したものである。我が國の刊本に明曆本、延寶本等がある。(大久保堅瑞)

⑦享保四刊(龍大、二四一七・六)寫本(龍大、研佛)

**首楞嚴經義疏私考** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gi-shō-shi-ko. ②三冊 ③存 ④寫本(哲、う・七・左・一三)

**首楞嚴經義疏釋要鈔** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gi-shō-shaku-yō-shū. (支)Shou-leng-yen-ching-i-shi-shih-yao-chō. 楞嚴經義疏釋要鈔、首楞嚴經釋要鈔 ②六卷 ③存、已續一・一六・五 ④宋懷遠(—嘉祐六 A. D. 1061—)錄

⑤長水子璿の法嗣である秀州長水の懷遠が、子璿の首楞嚴經義疏の流通久しけれども、鈔を闕くを以て、鈔を作りて義疏を輔せんことを弟子に請はれ、義疏の要義を釋し、義疏釋要鈔六卷を成し、宋仁宗帝嘉祐六年(A. D. 1061)十月望日自序して流通せしめたものである。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經義疏集註** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gi-shō-shū-chū. ②十卷 ③存 ④天龍註 ⑤寶永三刊 ⑥(正大、一七五・三一)

**首楞嚴經義疏大全抜粹** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gi-shō-dai-zen-bas-sui. (支)Shou-leng-yen-ching-i-sa-ta-chūan-pa-sui. ②十卷 ③存 ④明代錢謙益

**首楞嚴經義疏注經** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gi-shō-chū-kyō. (支)Shou-leng-yen-ching-i-sa-chū-king. 首楞嚴義疏注經、楞嚴今釋、首楞嚴經義疏、首楞嚴經疏、首楞嚴經疏注經 ②十卷或二十卷

つて經文に排立し、經文の下に義疏標指要義を入注したものである。續藏本に據つて、本書の列次を見るに、卷首に會懷の義海總序、義疏序として宋仁宗帝天聖八年十月二十一日王隨の撰述せる序文、宋神宗帝熙寧六年二月十五日范杻の撰述せる序文、宋仁宗帝嘉祐四年七月十一日胡宿の撰述せる集解序、咸輝の自序たる義海を集成せし義海緣起序を收め、次で義海三十卷を收め、卷末に譯者般刺蜜諦は唐に譯して極量と云ふ所の極量傳、義疏跋、標指要義跋、義海總筆偈、咸輝の自跋、智彬の後序並に智先の題偈を收め、各卷末に音釋を附したものである。我が國の刊本に明曆本、延寶本等がある。(大久保堅瑞)

つて經文に排立し、經文の下に義疏標指要義を入注したものである。續藏本に據つて、本書の列次を見るに、卷首に會懷の義海總序、義疏序として宋仁宗帝天聖八年十月二十一日王隨の撰述せる序文、宋神宗帝熙寧六年二月十五日范杻の撰述せる序文、宋仁宗帝嘉祐四年七月十一日胡宿の撰述せる集解序、咸輝の自序たる義海を集成せし義海緣起序を收め、次で義海三十卷を收め、卷末に譯者般刺蜜諦は唐に譯して極量と云ふ所の極量傳、義疏跋、標指要義跋、義海總筆偈、咸輝の自跋、智彬の後序並に智先の題偈を收め、各卷末に音釋を附したものである。我が國の刊本に明曆本、延寶本等がある。(大久保堅瑞)

③存、大正三九・八二三No. 1799、己續一・一六・三十四 ④子璿(一寶元元A. D. 1038)述 ⑤大宋天聖八(A. D. 1030)

⑥本書は宋朝の長水子璿が華嚴の宗旨に依つて、唐の穀刺蜜帝の譯出と傳へられた大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經十卷を注釋した者で、釋氏稽古略に依るに初は十卷であつた様であるが、今は二十卷になつてゐる。本書は著作後久しく湮没して行はれなかつたのを、凡そ二百年の後、居士沈元成之を搜し求めて刊行し、現行本には開卷に御史中丞王隨の序文と、光覺大師惟淨の王中丞に上つた書とを並べ出し、卷末には沈元成及び德雲の跋文を載せてある。

本書の内容は初に歸教序を述べ、次に十門の懸談ありて、最後に絶筆頌を以て結んである。十門の懸談は賢首の義記等の組織に倣つて、一、教起因縁、二、藏乘分攝、三、教義分齊、四、所被機宜、五、能詮體性、六、所詮宗題、七、教迹前後、八、傳譯時年、九、通釋名題、十、別解文義の十段とす。第一の教起因縁の中に總別の因縁を擧げ、別の因縁の中に、眞定を示し妄執を破し、妙心を顯はし、疑網を斷じ、修行を辯じ、邪正を別ち、呪功を顯はし、行位を明かし、魔境を示し、妄源を折らんが爲の故にこの十種の因縁を述べ、第二段に入つて、本經は三藏中の修多羅藏であり、二藏の中には菩薩藏であり、諸乘の中には一乘であり、十二分教中には契經と方廣の二分の所攝なりとなし、第三段には賢首の五教の中

にては此の經は正しくは唯終教、兼ねては頓教に通ずとなし、又法の生起の本末に於ては一心源を以て此の經の宗本となし、一心二門の本末の五重を具さに詮はすものとなし、次いで第四段の所被の機としては正定聚の爲に妙行を増進せしめ、不定聚の爲に信心を修せしめ、邪定聚の爲には遠き結縁となし、第五段に義を顯はす功能に就いて四門を擧げ、第六段には本經所詮の宗趣を述べて、如來藏性圓滿して凡聖不二體なるを根本趣旨とし、修行者をして妄情を忘じて觀行を速成せしむることを宗要となすことを明かし、第七段には本經の説法は一會の説にあらざることを論じ、而も説時は法華の後、涅槃の前なりと推定してゐる、次いで第八段には翻譯の年代及び開元錄に二譯を載せたることに就いて論じ、第九段には經題を通釋し、第十段に入つて此の經の一一の文を擧げ、科段を分つて、解釋してある。科段の大綱は初に通途の三分科は配し、正説分を更に三分となし、初

の二段は正説分開演の因縁を説くとし、第三段は如來機に乗じて廣く開演すとす、更に之れを七段に分つて本經の中心教理を釋してゐる。之れを要するに本書は首楞嚴經を隨文解釋し、其の根本思想たる如來藏縁起を明かにして華嚴の玄旨に誘導せんとしたものである。尙本書は首楞嚴經の解釋として一時は廣く流行したので、支那、日本は本書を釋するもの少くない。別項に擧ぐるものは其の主要と思はるゝもののみである。

⑦〔注釋〕義疏集註十卷、天龍祐實。義疏釋要鈔、六卷、長水懷遠。義疏注經鈔、十卷。菴頭今釋首楞嚴經疏十卷。  
〔參考〕新編諸宗教總錄卷第一 ⑧延寶八刊(谷大、餘大・一五八二)貞享五刊(谷大、餘大・六五七)  
⑨衛藤即應

首楞嚴經義疏注經科 ①(日) Shim-yō-gon-gyō-gi-shō-chū-kyō-ka. (支) Shou-leng-yen-ching-ti-sa-chu-ching-ko. 大佛頂首楞嚴經科 ②一卷 ③存、己續一・一六・三 ④宋子璿(一寶元元A. D. 1038)述 ⑤内題には大佛頂首楞嚴經科とあるが、楞嚴經科と楞嚴經義疏注經科との二篇有つて、前者は唐代に般刺蜜帝 Pāṇṭhaṅ 譯出せりと云ふ大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經に就いて、宋の長水子璿の注釋せる義疏注經の十門懸談の中、第十別解文義の中の科段を抽出し、初め題目より本論の終りに至るまで一一精細に分科圖示せる者にして、楞嚴經の組織及び綱領を一見明了ならしむ。

後者は前述、子璿の義疏注經十卷の科段を圖示せる者にして、義疏注經の内容を一覽するに便利である。  
〔衛藤即應〕

首楞嚴經義疏注經鈔 ①(日) Shim-yō-gon-gyō-gi-shō-chū-kyō-shō. ②十卷 ③存 ④刊本(谷大、餘大・七二三)

首楞嚴經義燈分輝 ①(日) Shim-yō-gon-gyō-gi-shō-bun-kō. ②二卷 ③存 ④寫本(龍大、二四一七・一六)

首楞嚴經科 ①(日) Shu-ryō-gon-gyō-ka. (支) Shou-leng-yen-ching-ko. ②六卷 ③宋智圓(太平興國元一乾興元A. D. 976—1022)述 ④〔參考〕新編諸宗教總錄卷第一

首楞嚴經科 ①(日) Shu-ryō-gon-gyō-ka. (支) Shou-leng-yen-ching-ko. 首楞嚴經義疏注經科、大佛頂首楞嚴經科 ②二卷單科一卷 ③存、己續一・一六・三 ④宋子璿(一寶元元A. D. 1038)撰 ⑤首楞嚴經義疏注經科の下を見よ。⑥〔參考〕新編諸宗教總錄卷第一 ⑦寫本(京大、藏一四三・一〇)折、六・中・二二

首楞嚴經科會 ①(日) Shu-ryō-gon-gyō-kwa-e. (支) Shou-leng-yen-ching-ko-hui. ②一卷 ③存、佛學研究叢書第二 ④李榮祥編 ⑤民國一四刊 ⑥龍大、二四一七・二〇

首楞嚴經貫攝 ①(日) Shu-ryō-gon-gyō-kwan-shū. (支) Shou-leng-yen-ching-kuan shū. ②十卷 ③存、己續一・二三・一一三 ④劉道開述 ⑤明崇禎一三—清康熙六(A. D. 1610—1667)

本書は、巴郡の劉道開(非眼)が、明崇禎十三年(A. D. 1610)京師に在つて天如惟則の首楞嚴經會解を閲して本經の大意を窺ひ、後、一雨通潤の合轍、交光眞鑑の正脉疏、伯敬鐘惺の如說等を覽て、簡に就て繁を刪り、直截貫串して微奥を剖抉し、纂述して本書の篇帙を成し、成都の離指方示和尙の驗訂を得、清康熙六年(A. D. 1667)に至り前後二十七星霜を費して始めて本書を完成したものである。即ち清康熙六年十一

名所行發⑩ (名庫書)者藏所現⑨ 月年の刊寫⑧ (書考參書釋註)書末⑦ 說解存内⑥ 代年作者⑤ 著者④ 歿存③ 數卷② (名書)名題① 號略字數

月冬至日高珩の序、同七年八月朔且劉道開の編輯始末、同八年五月徐元文の序、同十年(A. D. 1671)八月雲南道御史熊焯の序を付して流通せしめたものである。内題に説通と題するのは、會解等の諸疏を通貫して講述するの義に依つたものである。

**首楞嚴經觀心定解**

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-kwan-shin-jō-ge. (支) Shou-t'eng-yen-ching-kuan-hsin-t'ing-chieh. 十卷 ②存、③續一・二・三・四・一

④清靈耀(一康熙二〇A. D. 1681)述

⑤本書は、天台の全彰靈耀が、天台大師の止觀に準據して、總別に約して觀心を論じ、交光眞鑑の正脉は僻謬の説に滿ち佛意を毀損するものであると爲し、經營十年にして本書並に觀心定解大綱、觀心定解科各一卷、合十二卷を完成したものである。即ち百十餘家の註疏の中、特に眞鑑の正脉に於ける謬論を天台止觀の立場より剖判し、千秋不決の案を定めたこと云ふのである。論述の組織大綱及び科に示されて居る。清康熙十九年春日丹霞山今釋の序、同年五月長水杜疎の序、並びに同二十年(A. D. 1681)九月自序を撰して流通せしめたものである。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經觀心定解科**

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-kwan-shin-jō-ge-kwa. (支) Shou-t'eng-yen-ching-kuan-hsin-t'ing-chieh-k'o. ②一巻 ③存、④續一・二・三・四

④清靈耀(一康熙二〇A. D. 1681)撰

⑤本書は觀心定解の科段を定めて圖示した

ものである。其の大綱は、本經を先づ序正宗流通の三分に別ち、序分を通別二門として以下を詳細に圖示し、第二の正宗分を(一)正觀總無明心以明修證。(二)約別能招報心以明修證の二門に別ち、(一)を正明修證、結顯經名の二項目として以下を細釋し、(二)を正現行能招報、詳發得能招報の二項目として以下を細釋し、第三流通分を結勸流通、結益流通の二に別けて以下を細別して其の大綱を窺はしめて居る。

**首楞嚴經觀心定解大綱**

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-kwan-shin-jō-ge-tai-ke. (支) Shou-t'eng-yen-ching-kuan-hsin-t'ing-chieh-tai-ke. ②一巻 ③存、④續一・二・三・四 ④清靈耀(一康熙二〇A. D. 1681)述

⑤本書は、觀心定解の大綱を説いたもので、大綱を略して四章と爲し、一に總別を判じ、二に境觀を定め、三に題目を釋し、四に凡例十條を掲げたものである。即ち第一は「蓋指前七卷正觀總無明心以明修證後三卷約別能招報心以明修證爲總則耳」と説明し、第二は「此經的依現前一念識陰心王爲所觀境。以即空假中爲能觀觀」と云ひ、第三は「釋題目爲二。初釋經題。二釋譯人。」とし、第四は凡例十條にして本書大綱の要點、科註の説明等を記したものである。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經集解重開記**

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-kwan-shin-jō-ge-shū-kyō-jū-kaishū-ki. (支) Shou-t'eng-yen-ching-hsin-jū-kaishū-ki. ②五卷 ③存、④續一・一七

④宋仁岳(淳化三—治平元A. D. 992—1064)述

破し不空如來藏を顯はせるものとす。第二大段楞嚴の行法また二節に分つ。即ち經の四卷の阿難及大眾疑惑銷除以下佛に對して行門を乞へ、佛之を示すに生滅心を以て修因となし佛乘不生滅を求むべからずと説きて初心を開覺し、次で第五卷に阿難の我等未だ圓通の本根に達せずとの求めに應じ、二十五圓通を説きてその修證を顯示し、第六卷に登伽果を進め衆生發心する迄(三〇四—三一八)を正行となし。次で同卷末に阿難が滅後の弟子諸魔を遠ざげ道心を失はざる方法を問ふより以下を助行とし、更に之を二分して初分は魔業を離るゝ爲に淨戒を持つべきを教へ、(三一八—三二〇)第七卷の初めよりは宿習を除くが爲に神咒を誦せしむるものとす。(三二〇—三二二)第三大段楞嚴行の次位を明す一段を略明廣示釋疑の三節に分ち。經七卷佛告阿難より二轉依號までは、理は名相を絶するも事に眞妄を分つこと略述せるものとす。(三二二—三二四)次に廣示の章を二分し、阿難汝今以下は名衆生十二種類までは、眞に迷へ二顛倒を起すに約し十二類生を成ずることを説き、(三二四—三二五)經八卷初め阿難如是衆生以下汝等奉持までは、妄を斷じ三漸次を修するに約し五十七位に入ること明すとす。(三二五—三二八)次の經文説是語已より九卷の即魔王説までは阿難の問に對する釋疑なりとなす。(三二八—三三六)經九卷の即時如來已下を總て流通分となし。其の中初より十卷末の不戀三界までは、禪を修して現する所の魔事を辨じて

①首楞嚴經の釋を集め聞者に資益し熏習する記述。同經の經文註釋である。一經を三分して首めより經の提獎阿難及摩登伽歸來佛所までを序分となし(一七—一七・四・二七四—二七九、以下頁數のみを擧ぐ)次ぎ下經九卷の若他說者即魔王說に至るまでを正宗分とし(二七九—三三六)其の下を流通分となすこと他の諸釋と同じ。更に序分を分つて、首より同聞衆を列ねる迄を通序、(二七四—二七六)次に屬諸比丘休夏自恣より、阿難魔女の咒術に罹り、文殊往て惡咒を消し阿難及び婢女を將いて佛所に歸るまでを別序(二七七—二七九)となすこと亦他と大同である。第二の正宗分を分つて一楞嚴の解心を開き、二楞嚴の行法を顯はし、三楞嚴の地位を示すの三大段に分つ。其の第一段を更に二分し、經の一巻序分に次で阿難悲泣して如來得道の方便を問へ、佛之に應じて廣略兩説を設け、心緣二執を破すべきを説き、阿難領して佛を讚する迄(二七九—二九七)は慶喜に對して人法二執を破し空如來藏を示せるものとす、次に經の四卷に富樓那彌多羅尼子佛に對して疑を述べ、佛之に應じて衆生は眞に迷ふが故に妄を起し、佛は眞を證するが故妄なきことを説き、更に大性は一切に徧することを説きて滿慈の疑を除き、解行を勸誡する迄(二九七—三〇四)を滿慈に對して性相兩疑を

行門を流通し。(三三六—三四〇)其の下終りまでは、持經所得の福業を示して教門を流通せるものとす。

著者は前に集解を撰んで本經を釋したが、所說簡に過ぎて意に充たざる所より、更に加筆増補せしもの本著なること自筆の序跋に依つて明白である。従つて集解所錄を基本として註を加へし爲記述混雜聊か讀み惡き點もあるが、所謂趙宋天台山外派の驍將として豊富の學殖を傾けて居り、且つ釋中孤山の谷響鈔、眞際の刪補疏、長水の義疏、惟慈の支贊等自他諸宗の學者の説を引援して、是れを取捨して居り、其の間には既に亡逸不傳の説も引用され居る點より見て可なり必要の文献であると思ふ。

(中里貞隆)

首楞嚴經要節

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-gekki-setsu(支)Shou-leng-yen-ching-ich-chieh. ②存、正續一・二・五。③明代大詔述

④本書は明の大詔が、首楞嚴經に就て最要の妙處を擧げて其の淵義を顯揚したもので、首楞嚴經十卷の中の第一卷第二卷のみにて終つて居る。即ち第一卷に於ては「於時世尊頂放寶無畏光明」より「阿難雖復得聞是言與諸大眾」に至る間の十五條を採録し。第二卷に於ては「阿難即從座起禮佛合掌長跪白佛」より「阿難汝猶未明一切浮塵諸幻化相當處出生隨處滅盡幻妄稱相」に至る間の十六條を擧げて、其の奧義を釋したものである。

(大久保堅瑞)

首楞嚴經顯贊鈔記

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-gon-gyō-ken-san-shū-ki. (支)Shou-leng-yen-ching-hsien-tsan-ch'ao-chi. ②十四卷。③宋智圓(太平興國元—乾興元 A. D. 976—1022)述。④(參考)新編諸宗教藏總錄第一

首楞嚴經懸鏡

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-ken-kyō. (支)Shou-leng-yen-ching-hsuan-king. ②一卷。③存、正續一・一九・一。④明德清嘉靖二五—天啓三 A. D. 1546—1623)述

⑤北臺慈山の徳清禪師が、龍門に於て諸三昧中の王三昧たる首楞嚴三昧定を説く本經に依つて印證し、後、東海牟山に枯坐三星霜、一夕本經を閲して忽然大悟し、懸鏡一卷を著したものである。徳清禪師は紫柏大師達觀真可禪師と共に明末に化を擧げ、時人に敬信せられ、神宗帝、太后の歸依を受け、天啓三年(A. D. 1623)十月壽七十八歳にて中興せし曹溪に寂した。密淨教禪を兼ね修め、念佛公案を力説した宗匠である。即ち明萬曆十四年冬、四十一歳の時、東海邪羅延窟(宥山)即ち山東省青州登萊の觀音庵の古跡に於て自序し、同十九年元且(A. D. 1591)獅子林居士虞淳熙、本書に序して行はしめたものである。續藏本に依つて其の大様を見るに、一經の大本は大開修證之門、二曲示歸家之路を出でずと爲し、鏡によつて形を照すが如く、學人をして一心三觀の旨を以て、事に即して安心し、頓に如來藏性を融會せしめんとしたものである。即ち序正宗流通の三分の大義は通義に掲ぐるを

以て、此處に略し、正宗分に二門を分つ中、第一大開修證之門に四意あり、三觀の體相用名これなりとして明し、第二曲示迷悟差別を明して居る。其の所説は、明末に於ける屈指の宗匠に房はしく、本經に於ける造詣の深きをも見る事が出来る。

首楞嚴經懸談

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-ken-tan. (支)Shou-leng-yen-ching-hsuan-tan. ②一卷。③存、正續一・二・五。④明觀衡(一萬曆二八 A. D. 1600—)述

⑤本書は、明の觀衡が、首楞嚴經の詳名たる「大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經」の字義を詳釋し、首楞嚴經十卷の文義は、多聞第一の阿難尊者が姪女摩登伽の爲に幻術を以て變弄せられ將に戒體を破毀せんとせし時、佛威神力に依つて佛所に歸來し、佛を頂禮悲泣して、三昧定の教を啓請せし「恨無始來。一向多聞。未了全道力。殷勤啓請。十方如來。得成三菩提。妙奢摩他。三摩禪那。最初方便」とある九句三十六字に盡くと力説したものである。

(大久保堅瑞)

首楞嚴經玄義

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-gen-gi. (支)Shou-leng-yen-ching-hsuan-i. ②二卷。③存、正續一・二・三。④明智旭(萬曆二七—永曆九 A. D. 1599—1655)撰、道昉參訂

⑤首楞嚴經の幽玄なる意義といふこと。同經の經文解釋に先ち、經の内容を名と體と宗を用と教相との五方面より概括的に

説明せる總論である。著者は開卷楞頭、大佛頂とは自性の理の不變隨緣隨緣不變の妙趣を顯はす。一心に理具事造兩種の三千を具し、三諦圓融不可思議なり、此に依て自行の因果を成ずるを如來密因修證了義といひ、此に即して化他の因果となすを諸菩薩萬行首楞嚴と名くとなし、性具を全不妙因妙果を修する圓頓の法味を一經の旨歸とすと斷じて五重玄釋に入る。第一釋名、其の正釋を通別合釋、分句各釋の二段とし、前釋に於ては、大佛頂は性徳、密因修證了義萬行首楞嚴は修徳、如來は果人諸菩薩は因人なれば、一經の題號は修性の法と因果の人とを具し、同時に佛頂は衆生の性徳を表はす譬の意味を帶ぶるが故に、人法譬具足の立題なりと定む。第二の分句釋は經題を區分して頗る煩雜の釋を施す。先づ大佛頂三字を釋するに是を心佛衆生三法に約し、其の心法釋に於ては、吾人一念の心性三世十方に遍じて絶待なるは大、了々常知昏昧ならざるは佛、總ての過非を離れて貴極なるは頂、所詮心性本具三諦の理性を大佛頂となすと説く。次に佛法釋に於ては、是に事理法喻の四釋を設け、その中約事釋は經中所説の頂光化佛を事に托して十界同具の心源を表現せるものとし、約理釋は大佛頂を果佛の三徳にして同時に衆生本具如來藏心の三義なりとし、約法釋は諸佛自住的三昧にして衆生本具の心性に依る教行理を大佛頂となすと説き、約喻釋は大佛頂を以て四誘を離れて四門に應ずる如來藏性を顯すとす。次に衆生法釋に於ては、大

佛頂性は一切衆生本具にして體用平等なる故に、現前の三障に即して三徳を點示すべしと説き、以上心佛衆生三法無差別の性が大佛頂性に於て、此の理性迷悟に増減せず一性一切性なりと結ぶ。次に如來密因修證了義の八字を釋するに又分釋と合釋とを分つ。其の中分釋に於ては、修徳の究竟稱性の極果を如來、性具三諦の理に達して自ら妙修を行ずるは密因、圓修圓證は修證、圓融の教行理は了義なりとなし。合釋に於ては更に顯説と密咒との兩釋を下し、妙覺の果徳にして吾人の性具たる大佛頂の理を以て妙密眞因となし、一切の修證了義に非るなきことを示すは顯説釋、大佛頂咒を密因となすが故に一切の修證了義に非るなしと見るを密咒釋となす。次に諸菩薩萬行首楞嚴の八字を釋するに又分釋合釋あり。分釋中菩薩とは十方三世權實の諸菩薩、萬行とは一切の正助二行、首楞嚴は健相分別正定と譯し、此の三昧を得れば諸三昧の行相淺深を知て能く此れを摧伏するものなきを意味すと説き、十種の畢竟堅固を詳説す。次で合釋には此の八字は圓の一切の菩薩大佛頂の理に依て一心に萬行を具し事々畢竟堅固を得るを意味すと説く。以上分句廣釋を終り、次で經題の大途を辨ずるに、先づ體(上の三字)用(中の八字)用(後の八字)の三に約し、次に性修人法因果に約して、要する所性徳に達する因行修證を表示せしもの十九字の別題なりとし、最後に經の一字に就て字訓釋をなし、更に六塵經體を明し、一々法中能く大佛頂理を見れば總て此の經

ならざるなしと説きて釋名の章を終る。第二顯體の章は。一、體を顯すべきを示し、二、體の義を釋し。三、正しく體を出し。四、證を引き。五、異名を會し。六、偽濫を簡び。七、入體の門を明し。八、徧く衆經の體となし。九、徧く諸行の體となし。十、徧く一切法の體となすの十門に依て、此の經は如來藏性妙眞如性を體となすことを説く。第三明宗の章は。一、宗體を簡び。二、正しく宗を明し。三、諸教同異。四、因果を結成すの四門を開き、不生不滅の因果を宗要となし、任運に楞嚴妙定を攝得するを説く。第四論用の章は。一、宗用を簡び。二、舊釋を出し。三、正しく用を明すの三門に依て、顯密兩説俱に衆生をして諸愛を離れ、諸脫を得しむるを經の力用となすと説き。第五教相の章は。初に天台の通別の五時並に化儀化法の八教を略述し、次に此の經は別の五時中方等の時に屬し、鈍にして仍利なる機に對して妄を破し眞を顯せる頓教なりとなし、尙亦放光說咒の邊よりは祕密部に收まるべきもの、古來中印度那爛陀大道場經と題し、灌頂部に録出別行せるは此の謂なりと結んだ。

著者藕益智旭は明末清初に於ける教界の偉人で、本宗を天台に置いたが學は廣く華天淨禪に互り、盛に諸宗の教義の融合詞和を試みた特色ある佛教學者である。本書の序文によれば今著も亦性相融和を企圖したもの、如く思はるゝが、大體に於て支那天台教學に立脚して經の妙旨を發揮したものである。

趙宋天台には智圓仁岳等多くの學者競ふて此の經を研究し、其の支疏を遺したから智旭は恐らく此を参照したものと思ふが此等古説に追從せず自家の識見に終始せし所にその偉大さが偲ばれる。多少冗漫の斥はあるが台學系の楞嚴觀を見るに相當重要なものと思ふ。(中里貞隆)

**首楞嚴經玄義**

①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gen-gi. (支)Shou-leng-yen-ching-ian-tan. ②四卷 ③存、正續一・二〇・一

④明傳燈(一萬曆頃 A. D. 1573-1619)述

⑤天台の妙峯法師百松眞和尚の法嗣である無盡傳燈が、首楞嚴經の玄義を述べた註釋である。即ち本經を釋した大綱は、玄義五重あり。一、釋名。二、辨體。三、明宗。四、論用。五、教相の五重の玄義を明すと爲し、此の五章を大分して總釋別釋とし、總釋を分つて生起と簡別とす等と詳述して居る。明萬曆二十五年(A. D. 1597)三月西溪の九沙懺室に於て、首楞嚴經疏の著者である法眷の戒山傳如が楞嚴玄義叙を撰して流通せしめたもので、本書卷四には、彼等の本師たる妙峯法師百松眞和尚の撰述せし楞嚴百問を収めて居る。(大久保聖瑞)

**首楞嚴經玄贊** ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gen-san. (支)Shou-leng-yen-ching-ian-tan. ②六卷 ③惟愨述 ④(參考)新編諸宗教藏總錄第一

**首楞嚴經玄贊**

①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gen-san. (支)Shou-leng-yen-ching-ian-tan. ②二十卷 ③惟愨述

④新編諸宗教藏總錄第一に云く「全寫經

文、隨科贊釋。與二卷本大同小異云。

**首楞嚴經玄贊科**

①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gen-san-ka. (支)Shou-leng-yen-ching-ian-tan-ka. ②三卷 ③非濁述 ④(參考)新編諸宗教藏總錄第一

**首楞嚴經綱要**

①(日)Shu-ryō-gon-kyō-kyō-yō. ③存、日本宗教大講座之内

**首楞嚴經講義**

①(日)Shu-ryō-gon-kyō-kyō-gi. (支)Shou-leng-yen-ching-ian-tan-gi. ②十卷 ③存、正續一・八九・五・九〇・一 ④明乘肯(一天啓二 A. D. 1622)述 ⑤寫本(京大、藏・一四・二七)

**首楞嚴經講義**

①(日)Shu-ryō-gon-kyō-kyō-gi. ③存、通俗佛教百科全書第一、三 ④原坦山(文政二一明治二五 A. D. 1819-1892)述

**首楞嚴經講義**

①(日)Shu-ryō-gon-kyō-kyō-gi. ③存、正續一・八九・五・九〇・一 ④明乘肯(一天啓二 A. D. 1622)述

**首楞嚴經講義**

①湖北當陽縣度門寺跡公の法嗣紫雲山乘時が、明熹宗帝天啓元年虞山大小石山房に閉坐し、孫芝房、張鴻所、程空如、沈襄陽等の爲に講經したが、新安の原一居士汪益源は、首楞嚴經は諸經を貫串し、此の講義は諸家の疏釋を貫串するものとして、先に壽梓せし楞伽講義と同様、上梓すべと言ひ、自ら校訂し、天啓二年十二月佛成道日(A. D.

1622)述

1622)述

1032) 乗時の自序、並に同年冬注益源の序を附して梓行したものである。乗時は、自序に述ぶるが如く「銷磨寒暑、煅煉昕夕、瀝血嘔心」して精進し、楞伽楞嚴に於て得る處深く、遂に講録を著したものである。

### 首楞嚴經合輯

(大久保堅瑞)

①(日)Shu-ryō-gon (Gō-gū-tetsu) (支)Shou-leng-yan-ching-ho-chū. ②十卷 ③存、已綴一・二・三・四

④南通潤(一)天啓元(A. D. 1621)述 ⑤江南太湖縣西山に在つて天如惟則の楞嚴會解に私淑して楞嚴經を參究して居た通潤が、江南常州府無錫縣華藏寺雪浪法師の楞嚴講經の法筵に侍してより頗る得る所あり、諸家の註疏を撮要し、自得の所見を合せ註して遺志に備へて居たが、交光眞鑑の楞嚴正脈を見るに及び、自己の所見と合せざるもの十の三四にして大半は相合するを知り、諸檀越と相謀り、平生の私記にして諸佛の性相と一轍に合するものを集め十卷一帙を成し、明天啓元年(A. D. 1621)自序を撰し、同年十月浮渡居士吳用先の撰に成る序文、楞伽楞嚴合輯小引を附して欲嗣流通せしめたものである。通潤は江南蘇州の人、字は一雨、二楞庵と號した。即ち楞伽楞嚴二經の研鑽に努め二經の合輯を著した人である。

⑥寛文六刊 ⑦(各)大・餘大・五七一(龍)大・二四一七・三(京)大・藏・一四・一四(哲)・八・右・一七 (大久保堅瑞)

### 首楞嚴經合論

①(日)Shu-ryō-gon (Gō-gū-ton) (支)Shou-leng-yan-ching-

ho-tun. ②十卷 ③存、已綴一・一八・一

④宋德洪(熙寧四)建炎二(A. D. 1071-1125)造論、正受會合 ⑤本書は、寂音尊者覺範德洪の首楞嚴經論に依つて、雷庵正受が其の所論の闕遺を補糾したもので、所謂齋論入經並に刪補して合論十卷と成したものである。德洪は世に石門の洪覺範を以て知られて居る。其の造論の主旨は、釋經に際して先づ其の宗趣を明すべしとし、總じて如來藏性聖凡平等を宗とし、首楞嚴定離念進修を趣と爲し、又、首楞嚴定を以て諸の妄見を破し、永く輪廻を絶するを宗とし、本妙覺明如來藏性を顯すを趣と爲すこと即ち諸妄見を破して、一真心を顯すにありと述べて居る。宋政和八年(重和元年)五月一日(A. D. 1125)四十一歳の時、造論の所以を序し、宋建炎二年(A. D. 1128)五十八歳にして福建泉州府同安縣に寂したるを以て、寂後伯氏並に佛果禪師等南昌に鏤板したものである。後、兵火に失はれ、高弟智俱が發願再刊した。南宋紹興十七年元日(A. D. 1147)雙溪の彭以明が重開章頂法論跋語を撰し、其の重刊の緣由を叙して居る。正受は字は虛中、雷庵と號し、本書の外に楞伽經合論、嘉泰普燈錄等を著して居る。其の補註には、先づ經を掲げ次に德洪の論を述べて刪補合論し、各卷末に音切を付したものである。

⑧明曆四刊(京)大・藏・一四・一五(哲)・八・右・七(萬)曆一七刊(龍)大・二四一七・一 (大久保堅瑞)

### 首楞嚴經谷響鈔

①(日)Shu-ryō-

gon-gyō-tok-kyō-shū (支)Shou-leng-yan-ching-ku-fsiang-gei-shū. ②五卷 ③缺 ④宋智圓(太平興國元)乾興元(A. D. 976-1022)述 ⑤(參考)新編諸宗教藏總錄第一

### 首楞嚴經載流

①(日)Shu-ryō-gon (Gō-sai-ryū) (支)Shou-leng-yan-ching-chū-hi. ②二卷 ③存、已綴一・八九・三

④明代傳如述 ⑤妙峯法師百松眞禪師に得法せし戒山傳如が首楞嚴經十卷大綱を釋したもので、「行人當於三現量一、中體形教、二、乃及三文言一可也又悟、象忘言、今截流意也」とある如く諸家註釋の群流を截ち、學人をして本經の淵義を了得せしめんとしたものである。明萬曆二十六年正月二十四日瓦官寺に於て一卷を校し始めてより二月五日齊名理軒に於て校完了したもので、汪仲嘉、吳翎、周彦雲の助力を得たる旨、夢禎の題語に示されて居る。明萬曆二十六年(A. D. 1598)六月虎林社の鄭之惠小序を撰して流通せしめ、萬曆四十二年(A. D. 1614)八月江西玉溪善提菴の聖行、再刻の序を撰して流通せしめた。

(大久保堅瑞)

### 首楞嚴經纂註

①(日)Shu-ryō-gon (Gō-sai-chū) (支)Shou-leng-yan-ching-tsu-an-chū. ②十卷 ③存、已綴一・九〇・二

④明眞界(一)萬曆三二(A. D. 1594)註 ⑤本書は、徑山傳衣庵の悅堂眞界和尚の撰述である。眞界は千松和尚の高足として、首楞嚴經を參究すること二十餘年、明萬曆六年翟汝棖が經中の「如是世界因動有聲因聲

有色義」に就て當代の諸名僧に訊ねたるも、僅に眞界に依る外は明答を得られなかつたと、翟汝棖が序文に述べて居る如く熱心な參究者があつたが、爾來諸疏を讀み、特に會解に於て最も佛意遺する無しと信じて居た然し會解にも尙ほ盡さざる所あるを知り、潛神默究すること十七年、稿を易ふること四度、明萬曆二十二年に至つて稍々端倪を獲、諸家の章疏を搜り、衆解の精微を纂註して、宗趣を明にし、異同を辯析し、以て圓通了義の教を理會し、常に眞心に住して首楞嚴三昧定に證入せしめんが爲、本書十卷を撰したものである。尙ほ卷首には學人本經を閱するに際し、奢摩他三摩禪那の處に至つて惑迷する者あるに鑑み、「楞嚴釋疑」を撰して、一經の大本、三分の綱宗たる此の奢摩他三摩禪那の義を明し、首楞嚴經の大意を説き、卷末には「首楞嚴經頌」を撰して首楞嚴經の奧義を彰にして居る。續藏本によれば、卷首に明萬曆二十三年(A. D. 1595)三月十日馮夢禎の序。同二十二年十月晦日翟汝棖の序。徑山に於ける眞界の自序。楞嚴釋疑。卷末に明萬曆二十三年二月望日徑山喝石山房の如奇の後序。首楞嚴經頌、並に五陰辨魔説を附して居る。

### 首楞嚴經指掌疏

①(日)Shu-ryō-gon (Gō-shi-shū) (支)Shou-leng-yan-ching-shi-shū-chang-su. ②十卷 ③存、已綴一・二四・二一五 ④清通理(一)乾隆四一(A. D. 1776)述

⑤本書は、京師拈華寺の達天通理が、雍正

年所行發(名庫書)著認所現(月刊) (書考參書釋註)書末(説解存) 代年(作者) 著者(缺) 存(數卷) (名書)名題(號) 略字(名)



二年より乾隆十一年に至つて註釋せし法華指掌を刊行せんとして果せず、同十六年和碩莊親王の命によつて香界寺に住し、同十七年岫雲より來問せし空元等のために交光眞鑑の楞嚴正脈を講じたが宗意に合せざるものあるを以て、始めて新疏の撰述を志し、三歳にして草稿成り、同二十八年山庵(三山庵)に在りて門人興宗、懷仁の爲に講經重訂し、興宗、祖旺、際清、懷仁、祖毓等の校字と諸衆の助縁とにより、清乾隆四十一年(A. D. 1776)刻工竣成し、同年僧自麥日に自序し、凡例を附して流通せしめたもので、前後二十餘年を費したものである。編次の次第は彌陀疏鈔の科式に違じたもので、指掌と題したのは繁を捨てて要に従ひ、掌を指す如く其の幽玄の深義を了知せしめんとしたものである。

後、清光緒二十八年(A. D. 1902)四月八日通明寺了凡眞超、儒釋の善男信女の助縁を得捐資銀梓の跋を撰して流通せしめた。

**首楞嚴經指掌疏題示**

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-shi-shō-ken-jī. (支)Shou-leng-ye-n-ching-chih-chang-such-shi-an-shih. ②一卷 ③存、己續一・二四・二

④清通理(一)乾隆四一 A. D. 1776—)述  
 ⑤本書は、自著の指掌疏によつて義門を顯示したもので、本經を第一開示奢摩成信分、第二開示三摩成信分、第三開示禪那成信分、第四開示楞嚴成證分の四分と爲し、信解修證の此の四分を釋し、次に本經を釋するに就て、一教起因緣、三藏乘分攝、三能

被教義、四所被機宜、五體性淺深、六宗趣通別、七說時前後、八傳譯註釋、九總釋名題、十別解文義の十門を啓いて通釋すべしと爲し、第八門の傳譯註釋までを説明して居る。注釋家は唐宋元明清に渉る總括六十八家を掲げ、小見寡聞なるを以て單に其の闡見に係るものを示すと述べて居る。教者釋經の趣がよく現れて居る。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經指掌疏事義**

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-shi-shō-shi-gi. (支)Shou-leng-ye-n-ching-chih-chang-shih-i. ②一卷 ③存、己續一・二四・五

④清代空元述  
 ⑤本書は、達天通理に參じた空元が明萬曆十六年和碩莊親王の命により香界寺住持となつた通理に、翌十七年岫雲より來謁參問し、同二十三年正月通理の命によつて繼席し、通理の撰述せし指掌疏を刪補し、其の事義を釋するため群籍を搜り、再び草編を易し、數歳を費して本書を成したもので、指掌疏に見ゆる主要なる語句の事義を釋したものである。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經指文科節**

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-shi-mon-kwa-sestu. (支)Shou-leng-ye-n-ching-chih-wen-ko-chieh. ②一卷 ③存 ④寫本(京大、藏・一四・二)

**首楞嚴經資中疏證真鈔**

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-shi-chū-shō-shō-shin-shū. (支)Shou-leng-ye-n-ching-tzū-chung-shū. (文)Shou-leng-ye-n-ching-tzū-chung-shū-cheng-chen-chū. ②六卷 ③宋代洪敏述 ④(參考)新編諸宗教藏總錄第一

**首楞嚴經直解**

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-jiki-ge. (支)Shou-leng-ye-n-ching-chih-chieh. ②十卷 ③存、己續一・八九・四一五 ④廣莫述 ⑤明萬曆四一—四五(A. D. 1613—1617)

⑥吳興雲棲寺の蓮池大師佛慧株宏禪師の弟子として雲棲寺に住した仁安廣莫和尚が、明神宗帝萬曆四十一年十一月既望より同四十五年三月下泔(A. D. 1613—1617)に至つて撰述した首楞嚴經の註釋で、一經の綱要は理行證の三にありと力説して居る。直解と題したのは、直に大綱を示して文心に入らざるに先づ宗要を明めしめ、諸疏釋の蘊蔓に牽引せられず其の文を直解せしめんとしたもので、張江陵大師の四書直解に倣ひ、編中みな四書直解に則り題して直解としたものである。門下の優婆塞、雲間の陳繼備、桐溪の顏學易、錢塘の吳之鯨、練川の李流芳、仁和の開辟祥、繡水の朱大猷、語溪の馬正初、蕪兒の李太沖、武塘の袁徽、潑水の李雲龍等が順次本書十卷を校訂せるもので、明萬曆四十七年四月佛誕生日に馬正初の序、同日李雲龍の贊並に序を撰し、同年解夏日(A. D. 1619)香光居士李太沖の序を附して募緣捐梓したものである。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經直指**

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-jiki-shi. (支)Shou-leng-ye-n-ching-chih-chih. ②十卷 ③存、己續一・二二・四一五 ④明商呈疏  
 ⑤本書は、洞宗三十四世丹霞の天然商呈が三月にして釋した首楞嚴經の疏で、直指圓月の義に採りて題名したもので、一經の

大綱を了會せしむる爲に總論を撰した、續藏所收本には、商呈の嗣法門人澄歸今釋が本書を閲し、樂說今辯が校訂し、今釋は序、今辯は刻首楞嚴直指緣起を撰し、奥西の令たる大中丞傅弘烈(字仲謀、號竹君)が捐資流通する旨を述べて居る。卷首に首楞嚴直指總論、各卷末に音釋を附して居る。本書の疏釋に就ては、別項の直指科文に於て其の大綱を科圖されて居る。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經直指科文**

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-jiki-shi-kwa-mon. (支)Shou-leng-ye-n-ching-chih-chih-ko-wen. ②一卷 ③存、己續一・二・三・四

④本書は丹霞天然商呈の撰述せし首楞嚴經直指を科圖したものである。全經の大科を序正宗流通の三分として序分の下を諸經通例、本經緣起に分けて以下詳釋し、正宗分の下を直示圓悟(初卷至四卷末)、依悟圓修(五卷至六卷後)、廣垂修範(六卷後起至八卷中)、細別業果精別魔外(八卷中起至十卷後)の四分に別けて以下細釋し、流通分(十卷末)は本經流通、諸經流通に別けて居る。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經釋題**

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-shaku-dai. (支)Shou-leng-ye-n-chih-shih-ti. ②一卷 ③存、己續一・一・二

④宋代宗印述  
 ⑤首楞嚴經の題號解釋。天台智顛の垂範に準じ、名體宗用教相の五重支義を以て經の綱領を釋顯せしものである。第一釋名の章は此の經の具題二十字を取り、先づ大佛頂の三字を以て、釋迦佛頂光中に説かれたる



神呪の畧稱、祕呪の名なりとし。其の下は

總て顯了の名なれども、その中如來密因修證了義の八字は果人の修證に約して所契の法を示し。次の諸菩薩萬行首楞嚴の八字は因人の萬行に約して能契の法を示せるもの、因人果人の人と、祕呪顯了能契所契の法と入法合稱の立題なりと定む。第二の顯體の章は此の經の經體を諸佛所證の妙體たる常住真心なりと定め。第三明宗の章は、諸法の元寂に達して唯心性を觀する圓通妙定、即ち首楞嚴定を以て經の宗要と斷ず。此の二章は全く孤山智圓の説を承用す。第四論用、是亦孤山の説を承け、入法二執の妄を去り、二空の眞に歸る反妄歸眞を以て經の力用とすと説き。第五判教相の章は、孤山仁岳長水真際等の諸義を徵して、結局法華の後涅槃の前に説かれたる一乘圓頓の教、即ち上妙の醍醐を教相とすと判じ。長水孤山吳興に依て其の義を證し。以て經の説時に關する二三の疑を釋し。更に此の經の説時を方等の時となす神智の説、般若の時となす環海の説を批評して五重玄釋を終り。最後に相庭の玄覽の方等部攝屬説に對し、是れ畢竟通の五時の文通義通の中の文通なりとの私議を附記して筆を結ぶ。著者宗印は北峯教義の著者として、日本俊仍の師範として記憶すべき南宋中期の天台學者であるが、本書は諸先輩特に孤山智圓の説を繼紹して簡短に經の五章を略述したのみで、別に特異の點も見えない。只斷片的ながら現時亡逸不傳の諸先輩の説を引投して居る所から、此の經研究の參考となり得る

ことは云ふ迄もない。(中里貞隆)

首楞嚴經集註

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-shū-chū (支) Shou-leng-yen-ching-chi-chū. ②十卷 ③存、己續一・一七・一

元代思坦註

④本書は桐州法師思坦(一作懷坦)が、惟慈の支贊、弘沈の疏、洪敏の證眞鈔、崇節の刪補疏、智圓の谷釋鈔、仁岳の熏聞記、子璿の義疏註、道歡の手鑑釋要、王安石の解、雲門竹庵の補遺、眞界の纂註等の諸家の註疏を集註して本經の妙旨を宣揚したものである。四明の王元明居士捐貲鏤刻を志し、元至元二年秋寶雲子文の後叙、伏龍山千巖元長の叙、至元三年九月九日鎮江路金山禪寺契了の序、並に至元三年(A. D. 1337)冬至日北峰の我庵本無の集註序を附して流通したもので、續藏所收本は、明の慧基重校し、巡視漕河監察御史長安霍達の參閱鈔梓したものである。

卷首に集註科を示し、科段の下に本經を掲げて集註を附したものである。慧行法師北峰宗印は釋題と題して一經の大義を釋し、北峰四世の孫本無これを略録し、本無は別に此の集註に依て重ねて修治制定して私議を附して居る。(大久保堅瑞)

首楞嚴經述旨

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-jiss-shi (支) Shou-leng-yen-ching-shu-chi. ②十卷 ③存、己續一・八九・三

明陸西星

④(正徳一五—萬曆二九後 A. D. 1530—1601)述 ⑤淮海府の蘊空居士陸西星が、本經に説かれたる佛の本旨を述べて其の義を宣説し、

自用に備ふると共に學者をして簡約平易なる叙述の中に、本經の旨趣を了知せしめんとしたもので、師子林惟謙の撰に成る勸持叙、萬曆二十九年二月朔日李戴仁の刻楞嚴述旨楞伽句義通説二經題辭、並に同二十九年(A. D. 1601)五月自序を付して上梓したものである。時に八十二歳。尙ほ本書上梓に際しては、太子太保尙書の李戴の印可、淮安の知府劉大文、揚州の知府揚河の校閱、淮南の陳南金の校定を得たものである。

首楞嚴經釋要鈔

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-shū-shū-yō-shū (支) Shou-leng-yen-ching-shū-yō-shū-chāo. ②六卷 ③存、己續一・一六・五 ④宋代懷遠述 ⑤〔參考〕新編諸宗教藏總錄第一

首楞嚴經宗通

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-shū-tsū (支) Shou-leng-yen-ching-shū-tsū. ②十卷 ③存、己續一・二五・一一二 ④明曾鳳儀(一萬曆一一 A. D. 1583)述 ⑤明萬曆十一年進士を以て祠部郎となつた曾鳳儀(號金簡、字舜徵)が、首楞嚴經の數十家の註釋書を撮要して其の言句を採録し、經文の科段に配して、自ら了得する處に依て、前人未發の論理を宣揚し、宗說兼通の要典を成したもので、宗通と題し自ら楞嚴宗通縁起を撰して流通せしめたものである。後、原板湮滅し傳本寥々たるを惜み、盤水の陳熙、清道光十年五月七日(A. D. 1830)本書に序し兼ねて曾鳳儀の行履を

識し、同志の助縁を得て湖中に重刻したものである。(大久保堅瑞)

首楞嚴經集解

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-shū-ge (支) Shou-leng-yen-ching-chi-chieh. ②十卷 ③宋仁岳(淳化三—治平元 A. D. 992—1064)述 ④首楞嚴經熏聞記の下參照。 ⑤〔參考〕新編諸宗教藏總錄第一

首楞嚴經集解熏聞記

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-shū-ge-kun-mon-ki (支) Shou-leng-yen-ching-chi-chieh-istun-wen-chi. ⑤五卷 ③存、己續一・一七・四 ④宋仁岳(淳化三—治平元 A. D. 992—1064)述 ⑤首楞嚴經熏聞記の下を見よ。 ⑥延寶八刊 ⑦(龍大、二四一七・二五)

首楞嚴經集要鈔

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-shū-yō-shū (支) Shou-leng-yen-ching-chi-yō-shū-chāo. ②三卷 ⑤〔參考〕新編諸宗教藏總錄第一

首楞嚴經疏

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-shū (支) Shou-leng-yen-ching-su. ②十卷 ③宋智圓(太平興國元—乾興元 A. D. 976—1022)述 ④〔參考〕新編諸宗教藏總錄第一、諸宗章疏錄第二

首楞嚴經疏

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-shū (支) Shou-leng-yen-ching-su. ③首楞嚴經義疏注經、首楞嚴經義疏、楞嚴今釋、首楞嚴義疏注經 ④二十卷或十卷 ⑤存、大正三九・八二三 No. 1799、己續一・一六・三四 ⑥宋子璿(一寶元元 A. D. 1038)述 ⑦〔參考〕花嚴宗經論章疏目錄、諸宗章疏

名所行發⑩(名庫書)著處所現⑪ 月年の刊寫⑫ (書考參書釋註)書示⑬ 説解存内⑭ 代年作者⑮ 著者⑯ 缺存⑰ 數卷⑱ (名書)名題⑲ 號略字數

録第二

首楞嚴經疏

①(日) Shu-ryō-gon-ryō-gon-gyō-shū 梳頭首楞嚴經疏 ②十一卷 ③存 ④天和三刊 ⑤(龍大、二四一七・二八)

首楞嚴經疏

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-shū 梳頭今釋首楞嚴經疏 ②二卷 ③存 ④(帝國、一〇九・一八四)

首楞嚴經疏解蒙鈔

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-shū-ge-mō-shū. (支) Shou-leng-yen-ching-su-chih-meng-mō-shū. ②十卷或三十卷 ③存、已續一・二・一・一五 ④明錢謙益(萬曆一〇—康熙三 A. D. 1583—1664)述

⑤明萬曆の進士として當代に鳴った錢謙益(字受之、號牧齋、別號蒙叟)が、明永曆五年正月より同十一年(A. D. 1651—1657)八月に涉りて、諸家註疏の精髓を採録し、自説を加へて本書を成したものである。即ち錢謙益は清康熙三年八十三歳にて逝去せしを以て、本書の完成は彼の七十六歳の圓熟せる時代の著作である。卷首に目錄を掲げ、明永曆十一年八月十一日並に長至日に後記を付して本書を撰述するに至るまでの緣由を叙し、次で同十四年(A. D. 1650)三月三日歳月を重記し、是の刻經は蕭伯玉の猶子孟昉の首先唱導に依る旨を付記して居る。

其の大様を示せば、卷首に一古今疏解品目を時代別として掲げ、次で二諸決疑義十科として、疑義を諸決する十科を示し。第一卷より第十卷に至るまでに、二十六の卷を分ちて本經の疏釋を終り、卷末に一佛頂

圖録、二佛頂序錄、三佛頂枝錄、四佛頂通錄、五佛頂宗錄の佛頂五錄八卷、以上總計三十六卷を収めたものである。佛頂五錄は首楞嚴經に關する圖録、序分類乃至經旨を叙説せる諸種並に諸家の言句を採録したものである。綴藏所收本は、靈元天皇天和三年十二月朔日より翌貞享元年(A. D. 1683—1684)十月廿五日に涉りて、京都大谷の光隆沙彌知空が翻刻せしものに依つたものと、知空の跋語を収めて居る。(大久保堅瑞)

首楞嚴經疏序科註

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-shū-kyō-shū. (支) Shou-leng-yen-ching-kyō-shū. ②十卷 ③(參考) 新編諸宗教藏總錄第一

首楞嚴經疏注經

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-shō-chū-kyō. (支) Shou-leng-yen-ching-su-chū-kyō. 首楞嚴義疏注經、楞嚴今釋、首楞嚴義疏注經、首楞嚴經疏、首楞嚴經義疏 ②二十卷 ③存、大正三九・八二二No. 1799、已續一・一六・三一四 ④明子璠(一寶元元 A. D. 1038)述 ⑤宋天聖八(A. D. 1030) ⑥首楞嚴義疏注經の下の見よ。 ⑦正保五刊 ⑧(京大、一・二三リ、一)

首楞嚴經序指味疏

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-jo-shi-mi-shō. (支) Shou-leng-yen-ching-hsu-chih-mei-shū. ②一卷 ③存、已續一・九〇・三 ④清諸閑(一光緒一九A. D. 1893)述

⑤本書は、天如惟則禪師の首楞嚴經會解の序は經旨を窺ふに便なりとて移して經序と爲し、台宗の卓三諦開が、清光緒十九年夏(A. D. 1893)滬上の龍華寺の請を受け、會解の序を講述せし次で、科目を編して章句を分別し、字義を訓じて文脈を貫穿し、宏綱を掲げて其の旨趣を標し、名相を掲げて本經の玄微に剖入せしめんとしたものである。

首楞嚴經正脈疏

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-shū-myaku-shū. (支) Shou-leng-yen-ching-cheng-mo-shū. ②十卷 ③存、已續一・一八・二一五 ④眞鑑述 ⑤明萬曆二四(A. D. 1596)

⑥本書は西湖の交光眞鑑が、明萬曆二十四年(A. D. 1596)冬報恩堂に於て、述作したもので、正脈と題するは、諸家の註疏の弊を救ひ、前後を照應し、本經本來の脈脈を盡に至つて正脈疏科を成したものである。即ち正脈疏の大綱を科段にて示すもので、一題目、二譯人、三經文の三分に大別し、第一の題目は經名を釋し、第二の譯人は主譯人、譯音人、潤文人として説明し、第三の經文は序正宗流通の三分に別け、序文を三項に、正宗分を一經中具示妙定始終、二經後別詳初心緊要に分けて以下細釋し、流通分は一極顯經功、二結末法喜に分けて説明したものである。(大久保堅瑞)

首楞嚴經正見

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-shō-ken. (支) Shou-leng-yen-ching-cheng-ken. ②十卷 ③存、已續一・九一・一 ④濟時述 ⑤清康熙三十七(A. D. 1698)

⑥江南蘇州府崑山縣婁東興福禪寺の濟時が、清康熙卅七年(A. D. 1698)春首楞嚴經の註疏を撰して正見と題した者で、楞嚴正見とは定慧の別名で、本經に力説する首楞嚴三昧定の定慧均等ならざれば、陰魔の境に墮すとの立場より本書を撰述し、本經の深義に會入せしめんとしたものである。翌

首楞嚴經正脈疏懸示

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-shū-myaku-shō-ken-ji. (支) Shou-leng-yen-ching-cheng-mo-shū-hsian-shih. ②一卷 ③存、已續一・一八・二 ④明眞鑑(一萬曆一四 A. D. 1586)述 ⑤本書は、交光眞鑑が自著の正脈疏の義門

康熙三十八年冬、八十五翁の崑山盛時序文を撰し、濟時門下の九峰道人道一、康熙三十四年濟時に參じて本書を見、篋中に藏すること二十餘年、同志の助縁を求めて剞劂に付したもので、太原の王隨菴老人本書上梓の募疏を撰し、道一刻書の緣起、後序を付して鑄梓したものである。(大久保堅瑞)

貫通せしめ、正しく本經の深義を通釋したものであるから正脈疏と名付けたものである。本註疏の大綱は引項懸示に於て示し、其の細釋の科段は正脈科に於て説いて居る。即ち諸註疏に於けるが如く、諸註の組合せたるに止まらず、諸註疏を組織的に一貫統合せんとしたものである。

**首楞嚴經正脈疏科**

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-shō-myaku-shō-kwa (支)Shou-teng-yen-ching-cheng-mo-su-ko. ②一卷 ③存、己續一・一八・二 ④明眞鑑(一萬曆一四A.D. 1586)述

⑤本書は、李通府荊山公に請せられて法住寺華藏閣に住した交光眞鑑が、病中に觀音の示現を得、明萬曆十四年(A.D. 1586)歳を懸示したもので、一に制疏始終と題して本註疏の撰述緣起を叙し、二に略述疑慢と題して三疑存念、七慢存心に就て述べ、三に較釋功過と題して製疏創始は難く、就疏修治は易き事に就て述べ、四に略剖是非と題して註疏に述ぶる所の義門の大綱を論述したものである。附する所の明萬曆四十一年(A.D. 1613)四月無一人道廣豊の正脈科判翻刻緣起に依れば、舊刻本の正脈疏懸示には代藩製序一首があり、每卷、蒲州萬固沙門妙峯福登の校訂せしものにて、雲棲株宏大師、玄甫等の捐資助縁を得、廣豊緣起を序して、秀州漏澤寺に於て合梓翻刻したものである。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經精解評林**

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-shō-ge-hyō-rin (支)Shou-teng-

②三卷 ③存、己續一・九〇・三 ④明焦竑編

⑤本書は太史焦竑が、戒環、智圓、子璿等の従上の諸註釋家の説を編纂して經文に配し、其の要義を了得せしめんとしたものである。太史陳懿典これを校訂し、上卷に本經卷三まで、中卷に卷七まで、下卷に卷十までを収めたもので、卷首に、王畿の撰に成る釋教總論を收め、次に梵音譯解の譯經便覽を載せ、卷末に行簡の楞嚴經後序を收めたものである。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經證疏廣解**

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-shō-shō-kō-ge (支)Shou-teng-yen-ching-cheng-su-kuang-chieh ②十卷 ③存、己續一・三三・一一 ④凌弘憲述

⑤明天啓元(A.D. 1621) ⑥本書は、吳興の天池居士凌弘憲が首楞嚴經註釋に數十家ある中より、界澄の新疏を中心として墨書を以て表し、弘沈、崇節、洪敏、子璿、智圓、仁岳、曉月、戒環、惟則、鎮澄、眞鑑、廣英、王應乾、俞王言、德清等諸家の諸疏釋を朱書を以て表し、界澄の新疏に於て缺略あるものを補釋し、雲棲株宏の模象記を黛書にて表し、詞章の繁蔓を訂解し、總論として天台傳如の所説を引き、凌弘憲自ら以上諸疏に就て參攷點釋せるものが本書である。即ち諸註釋書の集大成とも稱す可きもので、諸疏の編纂に就ては凡例に詳説して句點線畫を用ひて指標し、一見して何人の註疏に依り何の科段を釋せるかを明示し、各卷末に音釋を付して居る。本書の闡正に當つた者は、徐武、凌

元煥等十名の居士で、明天啓元年(A.D. 1621)春より夏に至つて本書を大成し、同年七月上弦日本書録刻の緣起を自序し、九月重陽日刻成したものである。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經新解**

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-shin-ge (支)Shou-teng-yen-ching-hsin-ge ②十卷 ③王氏述 ④(參考)新編諸宗教藏總錄第一

**首楞嚴經進退合明章**

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-shin-tai-go-myō-shū (支)Shou-teng-yen-ching-chi-tai-go-ming-chang ②一卷 ③道璣述 ④(參考)新編諸宗教藏總錄第一

**首楞嚴經勢至圓通章**

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-sei-shi-en-zū-shō ②一卷 ③存、大谷眞宗法樂之内

④大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經卷第五の最終の一文を抜き書したものであつて、親鸞聖人の勢至和讃はこの文によつて作頌せられたものである。親鸞聖人は尊號眞像銘文のうちにもこの一文を引抄して詳釋せられてある。これらは共に大勢至菩薩の念佛圓通を讚歎せられたものである。

**首楞嚴經勢至圓通章科解**

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-sei-shi-en-zū-shō-kwa-ge (支)Shou-teng-yen-ching-shi-chi-yuan-tung-chang-ko-chieh ②一卷 ③存、己續一・二四・五 ④明正相(崇禎八A.D. 1631)述

**首楞嚴經大勢至菩薩念佛圓通章は、淨**

土門の教旨を味得する上に最も親切なる聖章なりとして、天台の正相體如が、明崇禎八年越の白馬山房に於て科解を草し、門下二三子の請に任せて同年(A.D. 1633)八月自序して梓行せしめたものである。一章の科を釋名、釋經文、叙諸法三敬儀などの十三項に分けて解釋を加へたものである。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經勢至圓通章解**

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-sei-shi-en-zū-shō-ge (支)Shou-teng-yen-ching-shi-chi-yuan-tung-chang-chieh ②一卷 ③存、己續一・二四・五 ④清行策(康熙二一A.D. 1682)述

⑤首楞嚴の一經は法華の後に在るもので佛法の堂奥に位するものであるが、古今の註釋家は眞鑑の正脈疏を除く以外、殆んど惑亂煩雜にして、經旨に違ひ佛意に背反せる疏鈔を著して居ると爲し、淨土門の人々に圓通章の正しき淵義を了解せしめんが爲に、清の行策が本書を著したものである。初に勢至圓通の法門を辨じ、次で經の密意を顯し、懇切に詳解したものである。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經勢至圓通章疏鈔**

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-sei-shi-en-zū-shō-shō-shū (支)Shou-teng-yen-ching-shi-chi-yuan-tung-chang-sū-chō ②二卷 ③存、己續一・二四・五 ④續法述 ⑤清康熙一七一一八(A.D. 1678-1679)

⑥念佛の法門は、見性成佛の妙法であつて、衆生佛を念すれば、佛は衆生の心内に

在り。佛衆生を念ずれば、衆生は佛心の中に在り。即ち即佛是心、即心是佛であり、是心作佛、即佛顯心である。故に念佛を諸修行中の最第一と爲すのであるが、此の念佛の法門の妙旨を承當するには、首楞嚴經大勢至菩薩念佛圓通章に依つて會入するを要すとて、河南浙水の百亭法師續法が、清康熙十七年十二月八日より翌十八年(A. D. 1678—1679)元且に涉つて、慈雲觀堂に於て是の圓通章疏章を草し、同十九年冬至日(A. D. 1680)錢塘の戴京會、圓通章疏鈔引を撰し、同年十月十一日續法も刻勢至疏鈔縁起を付して募縁鏤刻したものである。巻首に圓通章並に日誦式を掲げ、上下兩卷の卷末に音釋を付して居る。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經說題** ①(日)Shu-ryō-gon-gyō-setsu-dai.(支)Shou-leng-yen-ching-shuo-ti. ②一卷 ③宋仁岳(淨化三)治平元A. D. 992—1064)述 ④【参考】新編諸宗教藏總錄第一

**首楞嚴經說題科** ①(日)Shu-ryō-gon-gyō-setsu-dai-ka.(支)Shou-leng-yen-ching-shuo-ti-ka. ②一卷 ③宋仁岳(一治平元A. D. 1064)述 ④【参考】新編諸宗教藏總錄第一

**首楞嚴經說題通要** ①(日)Shu-ryō-gon-gyō-setsu-dai-tsu-yō.(支)Shou-leng-yen-ching-shuo-ti-tung-yao. ②二卷 ③慈梵述 ④【参考】新編諸宗教藏總錄第一

**首楞嚴經說約** ①(日)Shu-ryō-gon-gyō-setsu-yaku.(支)Shou-leng-yen-chi-

ng-shuo-yueh. ②一卷 ③存、己續一・八九三 ④明陞西星(正德一五—萬曆二九後A. D. 1520—1601)述

⑤江蘇省淮海府の長庚陞西星が、儒門の宗旨も西來の宗旨に異らずと爲し、首楞嚴經に諸家の詳説あるも肯綮に當らざるもの多きを慨し、枝葉の説を剪去し直に本根を露し、最も簡明に本經の旨趣を了得せしめんとしたものである。廣陵の貞吉黃養正校字し、明萬曆二十四年(A. D. 1596)元日陞西星自序して公刊したものである。

**首楞嚴經千百年眼髓** ①(日)Shu-ryō-gon-gyō-sen-jyakū-nen-gen-zui. ②五卷 ③存 ④鳳潭(承應三元文三A. D. 1651—1738) ⑤(龍大)二四一七・三三

**首楞嚴經箋** ①(日)Shu-ryō-gon-gyō-sen.(支)Shou-leng-yen-ching-chien. ②二十卷 ③存、己續一・八八・五—八九・二 ④宋代惟慈釋、可度箋

⑤本書は、西京大興福寺惟慈が、首楞嚴經に科段したるものに依つて、首楞大師可度が、經文字句に一一箋註を加へたもので、本經の要旨よりも、字句の解釋に努力したものである。従つて字句の一一に就て其の意義を知らんとする者に便利ではあるが、字句の解釋のみを求め過ぎると、反つて經の主旨を見失ふ弊が生ずる。本書を閲讀する際に留意しなければならぬ點である。

**首楞嚴經授玄鈔** ①(日)Shu-ryō-gon-gyō-sō-gen-shū.(支)Shou-leng-yen-

ching-son-tsu-an-chiao. ②十二卷 ③元約述 ④【参考】新編諸宗教藏總錄第一章 ①(日)Shu-ryō-gon-gyō-dai-sei-shū-satsur-nen-butsu-en-zū-shū.(支)Shou-leng-yen-ching-ta-shih-chih-pi-sa-nion-jo-yūan-tung-chang. ②一卷 ③存、大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經第五(大正一九・二八No. 945)之内 ④唐般刺密帝(一神龍元A. D. 705)譯 ⑤寫本(京大藏・一四三・二二)

**首楞嚴經單科** ①(日)Shu-ryō-gon-gyō-tan-ka.(支)Shou-leng-yen-ching-tan-ko. ②一卷 ③曇永述 ④【参考】新編諸宗教藏總錄第一

**首楞嚴經註** ①(日)Shu-ryō-gon-gyō-cha.(支)Shou-leng-yen-ching-chu. ②十卷 ③法朗述 ④【参考】新編諸宗教藏總錄第一

**首楞嚴經註解** ①(日)Shu-ryō-gon-gyō-chū-ge.(支)Shou-leng-yen-ching-chu-tieh. ②一卷 ③昂遠述 ④【参考】東域傳燈日錄卷上

**首楞嚴經通義** ①(日)Shu-ryō-gon-gyō-tsu-ge.(支)Shou-leng-yen-ching-tung-i. ②十卷補遺一卷 ③存、己續一・一九・一一二 ④明德清(嘉靖二五—天啓三A. D. 1546—1623)述 ⑤明萬曆四二(A. D. 1614)

⑥本書は、慈山德清禪師が、自著の首楞嚴經應鏡に於て力説せし本經の大本たる一心三觀の旨により、其の條貫を議して其の大

綱を通じ、學人をして海水一滴を以て百川の味を吞ましむるが如く、一分を擧げて全分に通ぜしめんとして撰述したものである。即ち、德清禪師曹溪の大巖を修せんとして、淨財を私せりと疑はれ、萬曆四十二年六十九歳にして南嶽に入り、靈湖の萬壑蘭若に寓して結夏したる時、侍者超逸が甘苦疾病患難の間に在つて終始誠を盡して常待したる誠意に感じ、入室諸益せし因に懸鏡の旨に依りて本書を撰述したもので、此の萬曆四十二年には太後の崩御により、先に罰せられたるを許され、再び披髮して僧服に還るを得た。德清禪師にとつて感慨深

5年の述作である。即ち明萬曆四十五年(A. D. 1617)五月五日七十二歳の時、吳門の貝葉齋に於て本書の緣由大槪を自序して流通せしめたものである。續藏本には、後、清光緒二十年(A. D. 1894)十月雲水山人卓三諱閑が申江龍華寺藏經閣に於て本書重刻の序を撰したる重刻首楞嚴經通議序を載せて居る。

其の内容を見るに、卷一に懸判十門と爲すこと、經名、譯者、譯語者、筆授者等を議し、別項通議略科に圖示せし科段に依つて逐條通議したもので、通議略科の附録として示されたる標記號を使用して科段を整理して居る。

**首楞嚴經通義提綱略科** ①(日)Shu-ryō-gon-gyō-tsu-ge-tai-ko-ryak-ka.(支)Shou-leng-yen-ching-tung-i-ti-kang-hiao-ko. ②一卷 ③存、己續一・一九・一 ④明德清(嘉靖二五—天啓三A.

D. 1546—1633)

①本書は通議四卷の提綱略科である。首楞嚴經十卷の組織を序、正宗、流通の三分に大別し、序分に通序、別序を分ち經中の初句を掲げて其れを示し。次に正宗分に於ては大開修證之門、曲示迷悟差別の二門に分ち初門を三觀の體相用名の四門に分ち、其の下を數重の科段に圖示して大綱を明にし、第二門の曲示迷悟差別を精研七趣示迷中差別之相と詳辨陰魔示悟中差別之相とに分ち、其の下を數重の科段に圖示したものである。最後の流通分は、校量功德、獲福殊勝、總顯勝益、都結法會に分けて本經の結構を示したものである。首楞嚴經の内容を研鑽するに際して、其の大意を得るに便益があるものである。(大久保堅瑞)

首楞嚴經通義補遺

①(日)Shu-ryō-gon-gon-gyō-shū-gi-ho-1. ②1卷 ③存 ④

刊本(京大、藏・一四・二三)

首楞嚴經手鑑

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-te-kagami. (支)Shou-leng-yen-ching-shou-chen. ②五卷 ③道觀述 ④(參考)

新編諸宗教藏總錄第一

首楞嚴經道場修證儀

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-da-jō-shū-shū-gi. (支)Shou-leng-yen-ching-tao-chi-ang-jō-shū-cheng

①首楞嚴道場修證儀 ②1卷 ③存、已

續一・九五・五 ④宋淨源(大中祥符四一元年三A.D. 1011—1088)述 ⑦(參考)新編

諸宗教藏總錄第一

首楞嚴經如說

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-nyō-seisu. (支)Shou-leng-yen-ching

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-shū. ②十卷 ③存、已續一・二〇・五

④明鐘惺(一天啓四 A.D. 1624—1713)撰

①本書は、明萬曆の進士である、湖北竟陵の居士、鐘惺(字伯敬)が、天如惟則の會解を始め、諸家の註疏に就て研討五年、江西永新縣(廬陵道)の賀居士中男(字可上)の研鑽をも糾し、稿を易ふること數度にして、始めて本書を成したもので、經中の如所如説の語に依つて、此の註疏に如説と題し、明天啓四年(A.D. 1624)自序して流通せしめたものである。後、清康熙十八年(A.D. 1679)周貞德重刻を志し、東塔の淨範と共に増刪校訂し、同年菊月重陽後十日王庭の序を附して重刻された。其の所説は諸疏の要を採り本經の妙旨を説の如く會得せしめんとしたものである。(大久保堅瑞)

首楞嚴經秘錄

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-hi-tekku. (支)Shou-leng-yen-ching-pi-ku. ②十卷 ③存、已續一・二〇・一

④明代一松説、靈述記

①本書は天台の一松大師が、首楞嚴經の秘奥の妙旨を説述し、語録門人靈述が是れを記録したものである。其の釋經の大綱は、大綱を釋題目、釋經文に二分し、釋題目は入法の二題目に別け、釋經文は序正宗流通に三分し、序分を如是我聞至歸來佛所とし、阿難見佛より十卷の不慧三界に至るものを正宗分とし、阿難若復より經の終りまでを流通分として、各分の下を科別細釋したものである。(大久保堅瑞)

首楞嚴經別考

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-bek-ko. ②十卷 ③存、已續一・二〇・六

④谷大、餘大・三六六〇)

首楞嚴經寶鏡疏

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-hō-kyō-shū. (支)Shou-leng-yen-chi-pao-ching-shū. ②十卷 ③存、已續一・九〇・四—五

④清代溥曉述

①本書は、雲南法界寺の溥曉が、首楞嚴經の經旨に契合して心性を明らかに、佛意を體して首楞嚴三昧定を顯示せんが爲に、研鑽二十年晝夜を分たずして諸家註疏の精英を撮要し、以て本書十卷を撰述したものである。其の述作の大綱は、別項の寶鏡疏科に於て科圖されて居る。(大久保堅瑞)

首楞嚴經寶鏡疏科文

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-hō-kyō-shū-kwa-mon. (支)Shou-leng-yen-ching-pao-ching-ko-wen. ②1卷 ③存、已續一・九〇・四

④清代溥曉撰

①本書は、首楞嚴經の本文を註釋した寶鏡疏十卷の大綱を科圖したものである。即ち懸談に掲げられたる第十門別解文義であつて、例によつて序正宗流通の三分に別ち、第一序分を一證信、二發起とし、第二正宗分を一正請正説として阿難の正請、如來の正説、阿難の獲益を配して細釋し、二重請重説として破顯談定體以明信解之理並に修證談定用以明行證之事とに約して以て細釋を加へ、第三流通分を一世尊較福嘆述、二大衆獲益歡喜として註釋したものである。(大久保堅瑞)

首楞嚴經寶鏡疏懸談

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-hō-kyō-shū-ken-dan. (支)

Shou-leng-yen-ching-pao-ching-su-shian-tan. ②1卷 ③存、已續一・九〇・四

④清代溥曉述

首楞嚴經摸象記

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-mo-zō-ki. (支)Shou-leng-yen-ching-mo-jō-ki. ③存、已續一・九一・一、雲棲法苑第二三 ④明珠宏(嘉靖一

一萬曆四〇 A.D. 1532—1612)説萬曆四三、年八一寂述

①杭州雲棲寺の蓮池大師佛慧株宏禪師が首楞嚴經十卷に就て、群盲象を摸索し、各自の所摸に執して眞象なりと誤認せし如く、情識の手を以て想像の摸を爲し、彼此角立し、盲を以て盲を諷るの狀を慨し、其の弊を救ふに忿なるが爲に、自ら盲侶に互して其の疑義を鮮明せんが爲に、百四十三項目を掲げて剖析し、以て其の全帙を窺知せしめんとしたものである。明萬曆三十年歲次壬寅千佛滌浴日(A.D. 1602)雲棲寺翠竹山房に於て楞嚴摸象記を書して流通せしめたもので、株宏六十八歳の述作である。其の内容を見るに、第一卷の始めに譯經

名所行發⑩(名庫書)著部所現⑨ 月年の刊寫⑧(書考參書釋註)書未⑦ 説解容内⑥ 代年作著⑤ 著者④ 缺存③ 數卷②(名書)名題① 覽略字數

と題して唐の神龍元年五月、廣州の制止道場に於て譯出せし中天竺沙門般刺密帝、譯語せし烏長國沙門彌伽釋迦、筆授せし丞相房融の名を掲げ、古本に證譯として羅浮沙門懷迪の名を掲ぐるも、今本に掲げざるは不當であるから、後人本經を上刻する際には、參詳校正の功ある此の證譯者の名を掲ぐ可きであると述べ、次に科經と題して本經の組織たる序、正宗、流通の三分は温陵の長水子璿の定むる所と略ぼ同じく、而して正宗分の中を五科と爲すなど、本經科段の事に言及し、各卷の要目十數項づつを掲げて釋義したものである。

附するに、般若心經、圓覺經、法華經、佛遺教經、金剛般若經、維摩經、觀無量壽佛經、大阿彌陀經、孟蘭盆經、摩訶般若波羅蜜經、大寶積經、般舟三昧經、楞伽經、阿彌陀經、華嚴經、永嘉集等の諸經中の數項を掲げて釋義したものである。(大久保堅瑞)

**首楞嚴經文句** ①(日)Shu-ryō-gon-gyō-mon-gū. (支)Shou-leng-yan-ching-wan-chih. ②十卷 ③存、己續一・二〇・三一・四 ④明智旭(萬曆二七一永曆九A.D. 1599—1655)述、道昉參訂

⑤大佛頂首楞嚴經の經文句逗といふ意味。標題の經の隨文解釋である。初に一經十卷を三分して、經首より一卷歸來佛所(己續一・二〇・三・二九—二六)までを序分とし、其の下十卷の未不懋三界(三・二六一—四・三七八)までを正宗分とし、其の下經終るまでを流通分となす。初の序分中如是我聞より、而爲上首(三・二二四)までを通序と

し、其の下波斯匿王齊會の日阿難行乞して魔女摩登伽の咒術に陥る、文殊佛勅により往て惡咒を銷し、阿難魔女を將へて佛所に歸來す(三・二二六)までを別序となす。第二の正宗分を更に六段に分つ。一阿難佛を見て得道最初の方便を問ふより下經第四卷の前半尙留觀聽(三・二二七—二八七)までは、博地の凡夫をして圓頓の解を開かしむる爲に、如來藏妙真如性即ち圓の三諦を顯示せるものにして、其の中三卷の終り迄は(三・二七七)正しく三諦の理性を説き、第四の半卷(四・二七八—二八七)は廣く餘疑を斷ぜしものとす。二第四卷阿難華屋に入るを請ふより第七卷の諸菩薩護咒を誓ふ(二八八—三三四)迄は、前の圓解に次で圓行を起さしむる爲に、不生滅の理性は本修因妙の三觀を門となすことを説き、正助兩行中正行妙觀を主説すとなし、其の中六卷の時衆得益を叙する(二八八—三二二)迄は當機の爲に圓通の本根を示し、其の下は末世の爲に道場の方法を示せるものとす。三七卷の阿難次位を問ふより八卷の名爲邪觀に至る(三三四—三四六)迄は前の圓行に依て惑を伏斷し、成ぜらるゝ圓教三徳の位を明し。四八卷の文殊經名を問へ、佛五名を以て答ふる八行の經文は、經名を結んで圓の體宗用を顯はし。五、八卷説是語已以下九卷の即魔王説(三四七—三六〇)迄は、破戒の惡法を併りて問端となし、廣く七趣の差別を説き、出世の妙戒なければ出世の妙慧なきことを顯し。六九卷の即時如來以下十卷の不懋三界に至る(三六〇—三七八)迄

は、無間比丘を借り來りて佛に五陰魔境を明し、中道の妙慧なくんば中道の妙戒を失ふこと顯はすとす。第三流通分は經十卷末十七行程の文にして、此の中に佛は誦經持咒者の生善滅惡の功力を述べて是が流通を勧め、會座の人得益歡喜して座を退く。著者は此經に對し自作の跋文に、全大藏經中會歸する所は梵網佛頂二經に出でずと斷ぜし程の信仰を持ち、且つ釋經の態度も、敢て古人を矯めて異を立てず、亦敢て古人に殉じて強て同じうせずと宣せし如く全く独自の識見に依り、一經の所説、阿難は圓頓止觀を問へ、如來は圓頓止觀を答ふ、終始更に異趣なしとの見地に立ち、一境三諦の解、一心三觀の行、圓の三徳の階位等全然天台の教綱を以て巧に是を開説し、所謂文字を離れずして解脫を説き、教外別傳以上、教内に佛祖の眞傳あることを高潮せしものが本書である。宋元明清の四朝を通じて幾多の釋家中、天台學系に屬する最も犀利明徹氣魄に富めるもの、隨一と思ふ。

**首楞嚴經文句講錄** ①(日)Shu-ryō-gon-gyō-mon-gū-ko-ryōku. ②六卷 ③存 ④光謙靈聖(承應元—元文四A.D. 1653—1730)述 ⑤享保一八刊 ⑥(龍大、二四一七・三九)谷大、餘大(四八二)

**首楞嚴經要義** ①(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ②存、大藏經要義第二 ③本多日生(—昭和六A.D. 1931)著 ④大正六刊 ⑤(龍大、研佛)

**首楞嚴經要義** ①(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ②存、大藏經要義第二 ③本多日生(—昭和六A.D. 1931)著 ④大正六刊 ⑤(龍大、研佛)

①刊本(龍大) ②一卷 ③存 ④山上曹源著 ⑤(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. (支)Shou-leng-yan-ching-yao-chih. ⑥二十卷 ⑦存、己續一・一七・四一五 ⑧宋戒環(—宣和二A.D. 1130?)述

⑨本書は大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經を科判し經文を疏釋したものである。本經の註釋書は古來多種あるが、いづれも我が意を得ないとの見識で、戒環は新に科判を立て疏釋を施したものである。舊疏に満足しない點の第一は舊疏は本經を法華涅槃の後に説いたとするからである。戒環は本經を般若法華の中で説いた實大乘終極の教であると主張する。元來本經は吾國では寶龜十年(A.D. 779)大安寺で「大佛頂經は偽經なり」との説起り、焚燒廢除せんとした。時にこの議に戒明が連署しなかつた。爲めに奈良朝時代に焚經の災ひから免れた(延暦僧錄・日本高僧傳要文抄三)といふ因縁のある經。平安朝に至つて密教流布の時代となつては本經と系統を一にする經軌が傳り、五佛頂、大佛頂等の祕法となつて盛行した。又禪宗でも本經に如來藏の説があるので、支那の宋代では廣く用ひた。要するに本經の説時論は理典成立史論である。戒環は天台の五時列によつて本經を般若法華中説と認定し、五時列に矛盾する他師の説に反對したのである。次は要解と題した爲めに自説を簡直に述べ、引證及び他破等の論陣を略し、ただ科判を經文の先きに附

⑩(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑪(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑫(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑬(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑭(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑮(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑯(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑰(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑱(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑲(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑳(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉑(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉒(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉓(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉔(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉕(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉖(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉗(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉘(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉙(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉚(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉛(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉜(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉝(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉞(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉟(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊱(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊲(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊳(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊴(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊵(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊶(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊷(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊸(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊹(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊺(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊻(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊼(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊽(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊾(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊿(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi.

①(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ②(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ③(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ④(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑤(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑥(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑦(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑧(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑨(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑩(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑪(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑫(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑬(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑭(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑮(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑯(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑰(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑱(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑲(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ⑳(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉑(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉒(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉓(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉔(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉕(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉖(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉗(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉘(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉙(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉚(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉛(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉜(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉝(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉞(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㉟(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊱(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊲(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊳(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊴(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊵(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊶(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊷(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊸(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊹(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊺(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊻(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊼(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊽(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊾(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi. ㊿(日)Shu-ryō-gon-gyō-ryōgi.

し、次に經文を漏さず各科段毎に掲げ、次に經文を註釋してゐる。戒環の傳は新續高僧傳四集卷三に出づ。出生及び入寂の年月も壽も欠く。本書の序文に「南宋建炎元年」とあり。跋文に「南宋建炎己酉(三年。A. D. 1129)」とあり。この序跋は戒環滅後本書を印刷するに就いての記であるから、戒環の寂年を宣和頃と推定したのである。可考。

⑤康熙一一刊 ⑥(谷大、餘大九二五)

首楞嚴經禮誦儀

①(日) Shu-ryō-gon-gon-gyō-rai-jū-gi. (支) Shou-leng-yen-ching-i-sung-i. ②一卷 ③宋仁岳(淳化三—治平元 A. D. 992—1004)述 ④(參考)新編諸宗教藏總錄第一

首楞嚴經略疏 ①(日) Shu-ryō-gon-gyō-ryaku-sho. (支) Shou-leng-yen-ching-hao-su. ②十卷 ③存、正續一・二三・一 ④明元賢(萬曆六一—順治一四 A. D. 1578—1657)述

⑤建昌府壽昌の無明慧經禪師の法制である青原下三十五世福州鼓山眞寂元賢禪師が教學に得る所なく閩山に大藏經を閲し、楞嚴經を得て、諸疏の未だ逮ばざる所を發明し、關鍵を得たりと爲して、明天啓四年(A. D. 1623)翼解二卷を著したが、明崇禎九年泉州開元寺に演法し、二雲會公分靈泉南公等の政務の餘暇參問せるに對し、請に應じて、先に撰述せし翼解を廣解し、衆説を撮要し、以て一家言を立て、略疏三卷を撰し、福州鼓山に歸りて三卷を繼ぎ、苔溪の

眞寂に居して更に四卷を加へ、本書十卷を完成したるものである。明崇禎十一年正月燈節の後に侍御李曾愚、本書を一覽して嘆賞し、遂に上梓し、明崇禎十一年(A. D. 1638)八月中秋眞寂繼燈堂に於て略疏縁起を自序して流通せしめたもので、元賢六十一歳の著作である。(大久保堅瑞)

首楞嚴經略疏折衷

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-ryaku-sho-sec-chu. (支) Shou-leng-yen-ching-hao-su-sec-chung. ②十卷 ③存、日本大藏經方等部章疏第四

④明元賢(萬曆六一—順治一四 A. D. 1578—1657)述

⑤本書は、福州鼓山湧泉寺元賢禪師撰述の首楞嚴經略疏を以て諸家の註疏中に傑出せるものと爲し、略疏に依つて本經の句脈貫通し、義理簡易直捷にして諸疏の葛藤を斷ち日月を掲ぐるが如き趣あり賞讃し、今この折衷に於ては、大綱を此の略疏に採り、衆目を張る爲に諸家の衆説を採り、經及び疏に於て細註を附し、經を上に冠し疏を下に註し、折字を以て折衷を表し、疏文と檢別せしめ、略疏を補足して折衷十卷を成したものである。即ち元祿九年四月八日常陸國多賀郡日立の天童山大雄院に於て序文を撰し、同十年(A. D. 1697)十月穀旦大雄院に於て閏筆劔を撰し、本書を完成したものである。明崇禎十一年(A. D. 1638)八月中秋日元賢の撰文せる略疏縁起を載せ、凡例三則に於て折衷の用例を示し、統綱に於て本書の大綱を叙して居る。即ち統綱に於ては、序分の通別は文の如く解し、阿難見

佛以下を正宗分とし、要解に正宗分を五分して一見道分、二修道分、三證果分、四結經分、五助道分とし、次に流通分に終ると説明し、本書に於ての取扱ひを述べて居る。要するに略疏を本とし、此れを補足するに諸疏を折衷して本書を成したものである。德嚴は大雄院の常恒會地開闢で、連山交易、海門元曠、德嚴養存と住持次第して居る。

⑥刊本(正大、一一七五・一三)(大久保堅瑞)

首楞嚴經蠡測

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-ri-shoku. ②十卷 ③存、日本大藏經方等部章疏第四 ④連山交易寛永一一元祿七 A. D. 1635—1694)述

⑤下野國下都賀郡富山村太平山大中寺の連山交易禪師が、元祿七年十一月廿二日六十歳示寂の二年前の元祿五年七月中元日に、大中寺に於て自序し、同八月望日(A. D. 1692)跋文を撰し、本書を撰述する功德を以て父母同極の洪恩の一分に報ひんと念じたもので、撰述に際して敬虔の念を以て事に従つたものである。また序文に於て自序する如く、杜預(字元凱)が左傳の癖ありて春秋左氏傳集解を出せるは、交易が楞嚴の癖あり本證疏を著すに類するも、實に於て遠く及ばず、ただ本經を尊信するの一念を筆にして其の妙旨を測らんとしたものである。然し此れは蠡を以て海を測らんとするの類であるから蠡測と題したと序して居るが、圓熟せる時の著作であり、水戸光圀公に崇信せられて、常陸多賀郡日立の天童山大雄院に住し、元祿二年五十五歳にして大

中寺に轉じて僧祿に任ぜられた洞門の宗匠であるだけに、其の註疏の内容は他の諸家の作に比して優れたものがある。

⑥元祿七刊 ⑦(龍大、二四一七・三四)

首楞嚴合轍

①(日) Shu-ryō-gon-gat-tetsu. (支) Shou-leng-yen-ho-chie. ②十卷 ③存、正續一・二・三・一四 ④明代通潤(一天啓元 A. D. 1621—)述 ⑤首楞嚴經合轍の下を見よ。

⑥帝國(二三七・二四八)

⑦帝國(二三七・二四八)

首楞嚴三昧經

①(日) Shu-ryō-gon-zan-mai-kyō. (支) Shou-leng-yen-san-mei-ching. (梵) Śrāvṅgama or Śrāvṅgama-samādhi-niḥśeṣa(引用)(藏) Dīplang-pa dphuk-bar-figyo-baḥi-ūn-de-ḥiṣm-ces-bya-ḥa-ḥeg-pa-chen-poi-mu. 首楞嚴經、舊首楞嚴經 ②二卷或三卷 ③存、大正一五・六二九 No. 642、縮黃七、卅一・四、北880得、南391得、元388得、明北395得、清395得、麗379改、天388得、指349改、法372必、至388忘、明南391得、Nj. 399 ④婁秦鳩摩羅什譯 ⑤弘始四—弘始一四(A. D. 402—412)

⑥首楞嚴三昧は梵語にて、亦是首楞伽摩三昧ともいふ。此に勇健定、或は健行定、健相定と譯す。菩薩此の三昧を得れば、諸の煩惱及び惡魔も之を破壞することを得ざるのみならず、恰も大將が諸兵を率あるが如く、一切の三昧皆悉く之に隨従すといふのである。此經は専ら此三昧の大用を説きたるものにして、佛、堅意菩薩の請に應じて此



三昧の名を唱ふるや、諸の衆會忽然として現はれ、諸佛各々寶座に坐し給へり。次に佛還た神力を攝めて一切衆會た一佛を見るや、此三昧は初地二地三地四地五地六地七地八地九地の菩薩の能く得る所に非ず。たゞ第十地の菩薩能く此三昧を得ると説き、百句の義を以て此三昧を解説してある。又堅意菩薩が云何にして此三昧を學び得るやといふ問に對し、佛は尤も興味ある射を學ぶ喻を擧て其の次第を説き、次に其の三昧を得たるもの、實例として、遠く三千大千世界の最も邊外に在る持須彌山といふ帝釋天や、近く此會中に在る現意天子が其の神力を示現し。又この會中に魔界行不汚菩薩ありて魔女を濟度するや、魔女も爲に「魔界佛界不二不別(佛魔一如)の悟りを得、惡魔も亦五縛を解きて、佛に其の宮殿を施し、佛其の中に在て此三昧を説きたまひ。次に又堅意菩薩や名意菩薩の佛に問ふあり、彌勒菩薩の神通、文殊菩薩の古佛なるを説く等、首尾悉く首楞嚴三昧の神變不思議なる趣きを説き示してある。然るに之を十卷の首楞嚴經に比するに、彼の經は支那日本に亘りて盛んに流行し、隨つて多々の末註あれども、此經は古來之を讀む人の至つて稀なるやうである。

(松原恭護) 首楞嚴壇場修證儀 ①(日) Shu-ryō-gon-dan-jō-shū-shō-ri. (支) Shou-ien-ryō-yen-tan-chang-hsin-cheng-ri. ②一巻 ③存、記載一・九五、五 ④宋淨源(大中祥符四—元祐三A. D. 1011—1088)編纂 ⑤照寧四(A. D. 1071)

⑥本書は首楞嚴壇場を建立して懺悔する儀式を叙述したるもの。淨源の傳は未詳。先づ緣起を叙す。長水子游、孤山智圓、金衡仁岳(吳興仁岳)等の註疏を參酌して懺罪の法を綴り、宗禮の校閱を得たと記してある。猶、緣起の終りに勸修利益を説く。次に懺法十門の名を列ね、次第に一一の門を擧げて懺儀の儀式を詳説してある。(陀羅尼、呪を用ひてある點は密教風であるが三觀を修し七境を明し、聖位を歷ることを説くが如きは顯教の懺儀である)。淨源は傳華嚴教觀を以て自己の本務なりと信じて華嚴普賢行願修證儀を記した者であるから、本書の記の足らない所は行願儀等を見よと記してある。宋代の教禪一致信仰が宗教的行事を示す時に本書の如きものが製作されて爾るべきことを示したものと考へられる。唐代の尊勝陀羅尼信仰と比較する場合に時代宗教の行事が變化するよき例の一である。

⑦(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四開元錄第一六、貞元錄第二六 ⑧(參考) 禪籍目錄 ⑨(參考) 華嚴經決疑論の下の見よ。 ⑩(參考) 新編諸宗教藏總錄第一 ⑪(參考) 修行慈經 ⑫(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. ⑬一巻 ⑭失譯 ⑮修行道地經第一卷の抄出。(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六 ⑯(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. ⑰一巻 ⑱失譯 ⑲(參考) 日蓮宗宗學全書第四日蓮正宗部 ⑳(日) 寬(寬文六一享保一一 A. D. 1666—1726)述 ㉑(參考) 宗祖日蓮の如說修行鈔を釋せるもの。日寬の人(本因妙の行者日蓮)法(本因妙の題目)一體の本尊義が散説されてある。寬記撮要下卷に收められてある。(望月歡厚) 修行道地經 ⑳(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. 順道行經 ㉑七卷 ㉒缺 ㉓後漢安世高(建和二—建寧三A. D. 149—170)譯 ㉔第一譯

①(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. ②一巻 ③存、記載一・九五、五 ④宋淨源(大中祥符四—元祐三A. D. 1011—1088)編纂 ⑤照寧四(A. D. 1071)

⑥(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四開元錄第一六、貞元錄第二六 ⑦(參考) 禪籍目錄 ⑧(參考) 華嚴經決疑論の下の見よ。 ⑨(參考) 新編諸宗教藏總錄第一 ⑩(參考) 修行慈經 ⑪(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. ⑫一巻 ⑬失譯 ⑭修行道地經第一卷の抄出。(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六 ⑮(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. ⑯一巻 ⑰失譯 ⑱(參考) 日蓮宗宗學全書第四日蓮正宗部 ⑲(日) 寬(寬文六一享保一一 A. D. 1666—1726)述 ⑳(參考) 宗祖日蓮の如說修行鈔を釋せるもの。日寬の人(本因妙の行者日蓮)法(本因妙の題目)一體の本尊義が散説されてある。寬記撮要下卷に收められてある。(望月歡厚) 修行道地經 ㉑(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. 順道行經 ㉒七卷 ㉓缺 ㉔後漢安世高(建和二—建寧三A. D. 149—170)譯 ㉕第一譯

①(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. ②一巻 ③存、記載一・九五、五 ④宋淨源(大中祥符四—元祐三A. D. 1011—1088)編纂 ⑤照寧四(A. D. 1071)

⑥(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四開元錄第一六、貞元錄第二六 ⑦(參考) 禪籍目錄 ⑧(參考) 華嚴經決疑論の下の見よ。 ⑨(參考) 新編諸宗教藏總錄第一 ⑩(參考) 修行慈經 ⑪(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. ⑫一巻 ⑬失譯 ⑭修行道地經第一卷の抄出。(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六 ⑮(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. ⑯一巻 ⑰失譯 ⑱(參考) 日蓮宗宗學全書第四日蓮正宗部 ⑲(日) 寬(寬文六一享保一一 A. D. 1666—1726)述 ⑳(參考) 宗祖日蓮の如說修行鈔を釋せるもの。日寬の人(本因妙の行者日蓮)法(本因妙の題目)一體の本尊義が散説されてある。寬記撮要下卷に收められてある。(望月歡厚) 修行道地經 ㉑(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. 順道行經 ㉒七卷 ㉓缺 ㉔後漢安世高(建和二—建寧三A. D. 149—170)譯 ㉕第一譯

①(參考) 開元錄第一五、貞元錄第二五 ②(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. 修行經、倫迦達復彌經 ③七卷或八卷 ④存、大正一五・一八一No. 606、縮著六、正二六・五、北987樓、南1003樓、元999樓、明北1318明、清3318明、麗991樓、天992樓、指948樓、法975樓、至1437奄、明南1081終、正1225 ⑤西晉竺法護譯 ⑥泰始二—建興元(A. D. 265—313)

⑦(參考) 開元錄第一五、貞元錄第二五 ⑧(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. 修行經、倫迦達復彌經 ⑨七卷或八卷 ⑩存、大正一五・一八一No. 606、縮著六、正二六・五、北987樓、南1003樓、元999樓、明北1318明、清3318明、麗991樓、天992樓、指948樓、法975樓、至1437奄、明南1081終、正1225 ⑪西晉竺法護譯 ⑫泰始二—建興元(A. D. 265—313)

⑬(參考) 開元錄第一五、貞元錄第二五 ⑭(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. 修行經、倫迦達復彌經 ⑮七卷或八卷 ⑯存、大正一五・一八一No. 606、縮著六、正二六・五、北987樓、南1003樓、元999樓、明北1318明、清3318明、麗991樓、天992樓、指948樓、法975樓、至1437奄、明南1081終、正1225 ⑰西晉竺法護譯 ⑱泰始二—建興元(A. D. 265—313)

⑲(參考) 開元錄第一五、貞元錄第二五 ⑳(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. 修行經、倫迦達復彌經 ㉑七卷或八卷 ㉒存、大正一五・一八一No. 606、縮著六、正二六・五、北987樓、南1003樓、元999樓、明北1318明、清3318明、麗991樓、天992樓、指948樓、法975樓、至1437奄、明南1081終、正1225 ㉔西晉竺法護譯 ㉕泰始二—建興元(A. D. 265—313)

㉖(參考) 開元錄第一五、貞元錄第二五 ㉗(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. 修行經、倫迦達復彌經 ㉘七卷或八卷 ㉙存、大正一五・一八一No. 606、縮著六、正二六・五、北987樓、南1003樓、元999樓、明北1318明、清3318明、麗991樓、天992樓、指948樓、法975樓、至1437奄、明南1081終、正1225 ㉛西晉竺法護譯 ㉜泰始二—建興元(A. D. 265—313)

①(參考) 開元錄第一五、貞元錄第二五 ②(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. 修行經、倫迦達復彌經 ③七卷或八卷 ④存、大正一五・一八一No. 606、縮著六、正二六・五、北987樓、南1003樓、元999樓、明北1318明、清3318明、麗991樓、天992樓、指948樓、法975樓、至1437奄、明南1081終、正1225 ⑤西晉竺法護譯 ⑥泰始二—建興元(A. D. 265—313)

⑦(參考) 開元錄第一五、貞元錄第二五 ⑧(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. 修行經、倫迦達復彌經 ⑨七卷或八卷 ⑩存、大正一五・一八一No. 606、縮著六、正二六・五、北987樓、南1003樓、元999樓、明北1318明、清3318明、麗991樓、天992樓、指948樓、法975樓、至1437奄、明南1081終、正1225 ⑪西晉竺法護譯 ⑫泰始二—建興元(A. D. 265—313)

⑬(參考) 開元錄第一五、貞元錄第二五 ⑭(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. 修行經、倫迦達復彌經 ⑮七卷或八卷 ⑯存、大正一五・一八一No. 606、縮著六、正二六・五、北987樓、南1003樓、元999樓、明北1318明、清3318明、麗991樓、天992樓、指948樓、法975樓、至1437奄、明南1081終、正1225 ⑰西晉竺法護譯 ⑱泰始二—建興元(A. D. 265—313)

⑲(參考) 開元錄第一五、貞元錄第二五 ⑳(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. 修行經、倫迦達復彌經 ㉑七卷或八卷 ㉒存、大正一五・一八一No. 606、縮著六、正二六・五、北987樓、南1003樓、元999樓、明北1318明、清3318明、麗991樓、天992樓、指948樓、法975樓、至1437奄、明南1081終、正1225 ㉔西晉竺法護譯 ㉕泰始二—建興元(A. D. 265—313)

㉖(參考) 開元錄第一五、貞元錄第二五 ㉗(日) Shu-ryō-jō-kyō. (支) Hsin-ying-tz-ching. 修行經、倫迦達復彌經 ㉘七卷或八卷 ㉙存、大正一五・一八一No. 606、縮著六、正二六・五、北987樓、南1003樓、元999樓、明北1318明、清3318明、麗991樓、天992樓、指948樓、法975樓、至1437奄、明南1081終、正1225 ㉛西晉竺法護譯 ㉜泰始二—建興元(A. D. 265—313)



學問道、無所學である。

五陰本品第二 修行道には五陰の本を觀ずべきである。五陰は東西南北の若干の家居合して城を爲す如く、一色一識を以て陰となすに非ず、八百色・八百痛・八百想・八百行・八百識有つて夫々五陰をなすと云ふ風に五陰の本を解さねばならない。

五陰相品第三 修行には五陰の相を解すべきである。光明あるも、色像相あるも、獲得する所も、他人に示すもこれは色である。習樂・不樂不痛これ痛である。識相は想である。造作する所は行である。曉想は識である。斯くの如く各々五陰の相を了すべきである。

分別五陰品第四 修行には五陰の本を分別せねばならない。五陰の本を曉了するとは、譬へば人が貫珠を見て意中に欣然として往いて取らうとする場合、最初に見るのは色陰であり、愛樂は痛陰であり、是を貫珠と知るは想陰であり、取らうとするは行陰であり、貫珠を分別するは識陰である。是の如く五陰は一時に俱行する。眼に限らず他の一切諸入も同様である。

五陰成敗品第五 修行道には五陰成敗の變を知らねばならない。五陰成敗とは譬へば人あつて命が終らうとしてゐる時の如しとて以下遂に死して更に宿業の善惡に隨つて入胎出生して再び四百四病の發する順序を事細かに述べ、五陰所從の成敗を觀ずべきを説いてゐる。

(第二卷) 慈品第六 修行道には願志を棄て常に慈心を奉ぜよと云ひ、口慈・念慈・

等慈等について述べ、

恐怖品第七 では行道者が閑居又は屏處に在つて恐怖を懷く時には如來功德の善形像觀及及び法樂僧を念ぜよ、而して慈哀を奉行する時恐怖の心は無くなると云ふ。

分別相品第八 精進・智慧を説き、修行は樹園を修治するが如し、地を耕し雜草を除きて以て樹木大となり華實生ずる様に、修行も亦法師の教を受けて、姪怒癡欲諸穢を除きて遂に道を得るに至るのであると説く。

(第三卷) 勸意品第九 では修行道地には何の方便を以てその心を正しくするかと云ふ問題を説いてゐる。昔ある國王が聰明にして博達、志弘雅にして威あつて暴ならず、名徳具足の士を募つて輔臣にせんとし、その採用法として油を滿した鉢を以て城の北門より南門に至り城を去ること二十里の調戲園まで到り一滴も零さないことを求めた。零せば死罪に行ふのであるが、一人の男は大勢の見物中に居る美人にも目をくれず、大醉象が現れても畏れず、城中に失火し、澤山の蜂が出て毒を放つても驚かず、又聖電霹靂にも怖れずして目的地に至つた。これは心堅固なる爲めであつて修行道も心を御すること是の如く諸患及び姪怒癡が諸根を亂しても心を護つて隨はず、意を攝すること第一とせねばならない。

離顛倒品第十 修行道は心を勧め、四顛倒を捨て、行地を専らとすべきを説く。曉了食品第十一 食物は美味不味に拘らず消化して大小便となり涕唾となり、藏中

要味は體を養つて姪怒癡を起すのである。併し、多くの小鳥が捕へられその中からよく肥つたものが幾羽かづゝ食膳に供す爲め殺されるので、ある一羽の鳥は食を減じて肥らないことにして助かつたと云ふ譬喩の如く、修行も是の如く食を輕減し睡眠を少くして坐行經行喘息安隱ならしめ姪怒癡は薄くすべきだと説く。

伏勝諸根品第十二 牛が澤に出て禾穀を食したる爲め飼主に打たれる。その翌日は又他の苗を食して打たれる。斯くて終には恐れてそう云ふ罪を犯さない様になる。是の如く行者は五根を誠め情欲に隨はせぬ様にせねばならない。

忍辱品第十三 行者が罵詈された時には音聲のみあつて空と考へる。盲人は何も見ない如く、夷狄の言語は通じない如く、空吹く風と考へて居れと云ふ。

棄加惡品第十四 人が刀杖瓦石を加ふる時は捶たるゝも捶つゝも無所有である。瞋るとしても一體誰が誰に瞋るのか。毒蛇百足等の如く考へて加報するな。又外患は除いても心中の四百四病八十種蟲は何とも出来ないのでないか。内心を伏し諸の垢穢を除きその志を寂定にする。これが修行である。

天眼見終始品第十五 自ら心を御し懈怠を棄捐し臥寢を思はず、若し睡が止らなければ起つて經行する、不定の時は其の坐を移すと云ふ風に修行を勵むと道眼を成じ三千界を見、人の生死善惡所趣を見ることが出来る。これが所達神通である。

ことを得、

念往世品第十七 識本宿命神通を得ると、知人心念品第十八 江邊人及び買客の譬喩等を説いて行者の専心勵むをすゝむ。

地獄品第十九 黑繩地獄・合會地獄・鐵葉地獄・沸灰地獄・阿鼻地獄等の有様を述べ、修行者は心に吾が身未だ此の患より脱せずと思ひ自ら制して輕戲しない。そうすれば夙夜其の法に違はないのである。

(第四卷) 勸悅品第二十 修行進むに従ひ益々自ら勸み進奉精勵するをとく。行空品第二十一 國王俳優の譬喩を以て道心誘進の要を説き、吾我の觀念に關しては特に筆を費し、國王琴瑟の譬喩を説き、ついで小兒が沙城を作りて遊ぶ中一人の小兒が過つて他人の沙城を壊した、すると大勢でこれを罰したがが方になると自らこれを壊して家路に急いだと云ふ話を出して是の如くであるから修行は吾我の觀念をなくせねばならない。三界は空と見なければならぬと説く。

(第五卷) 神足品第二十二 或は先づ寂を得て後に觀に入る人があり、或は先づ觀に入りて後に寂を得る人がある。何れも解脱を得るのであるとて、寂を説き、觀については惡露觀と數息あるを説く。

數息品第二十三 修行は足を繋がれたる雀が飛去つて果樹清涼池水に至るも引き戻さるゝ如く、梵天に至るも又欲界へ還るものであるから勤苦しなければならぬと云ひ、此處には數息の法を解説するとて出息

は安、入息は般、息の出入に随つて他念無しと説いてゐる。

〔第六卷〕観品第二十四 観に關する解説である。ある富者が火を犯して取り出した寶篋の中は蛇虺で一杯であつた。是の如く一切の形を見ては毒蛇の如しと考へるを以て觀に至るを得るのである。

學地品第二十五 修行者が已に道跡を得たと思つても、諸の五樂を見ると婬意が動く。譬へば梵志の子が、指が不淨だから火を以て淨めんとするが火が指に近づくと熱いので驚いて穢いと云つた指をなめる様なものである。これはまだ不還道を得ないからである。一心に無學地を求めねばならぬ。

無學地品第二十六 學地に在つて無所著を得て五品を斷じ人中上となる。これが阿羅漢である。

無學品第二十七 斯くて有餘泥洹に住し漸々に無餘泥洹に至る。是を以て本經を修行と云ふであると説く。

〔第七卷〕修行品第二十八 賈人遠行・長者三子・鼈狐等の譬喩を説いて五陰を制すれば魔も畏るゝ無きをとく。

緣覺品第二十九 三乘は宛も天帝を見んと欲する人が邊王を見て天帝と思ひ誤る如きものであるとて長者火宅の譬喩を以て一乘を宣揚す。

菩薩品第三十 かくて菩薩は積功累徳して、人卒かに立つて國王となる如く、菩薩大士も深慧を曉し無極に至つて佛道を成ずるを得るに至るのである。

以上の所説を見るに文は簡潔であるが義は豊富で、譬喩を遠近にとり好心を防制する。三昧禪を以て數々務とし、解空して無に歸し衆想爲めに定まるのである。玄を鉤き妙を致し能く深奥を體し、眞に離患の至寂無爲の道と謂ふべきで、迷へるを勧め、惑へるを勵まし大慈悲を以て衆生を弘益する心がよく表れてゐる。本經は印度僧伽羅刹の造と傳へられて居り、竺法護の傳譯後は六朝時代即ち羅什の入關前に於ては盛に講究せられた様である。後漢安世高譯『道地經』一卷並に支暹譯の『小道地經』一卷は共に本經と同本別譯である。註疏に道安の『道地經註』一卷がある。(三好鹿雄)

修行道地經 ①(日) Shu-gyo-to-ji-kyo. 國譯修行道地經 ②存、國譯一切經々集部第四 ③佐藤泰森譯

修行道地經見受 ①(日) Shu-gyo-to-ji-kyo-ken-jie (支) Hsiu-hsing-tao-ti-ching-chien-shou. ②三卷 ③缺 ④(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄3508

修行道地經和譯 ①(日) Shu-gyo-to-ji-kyo-wa-yaku. ②一卷 ③存、慈雲尊者全集第一六輯 ④飲光(享保三)文化元(A. D. 1718—1804)譯 ⑤延享三(A. D. 1746)

僧伽羅叉の撰せる修行道地經七卷三十品中の初二品を和譯したものである。

譯者自筆本(河内長榮寺) (吉祥真雄)

修行念佛七日道場懺悔方法 ①(日) Shu-gyo-nen-jitsu-shichi-nichi-do-ji-san-ge-ido-ho. ②一卷 ③圓仁(延

曆一三一頁觀六 A. D. 791—864) 〔參考〕淨土依邊經論章疏目錄

修行の念願 ①(日) Shu-gyo-nen-jwan. ②一卷 ③存 ④刊本(正大、一〇九・二五八)

修行方便經 ①(日) Shu-gyo-ho-ben-kyo. (支) Hsiu-hsing-fang-pien-ching. ②二卷 ③缺 ④吳代支謙譯 ⑤(參考) 開元錄第一五、貞元錄第二五

修行方便經 ①(日) Shu-gyo-ho-ben-kyo. (支) Hsiu-hsing-fang-pien-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④(參考)法經錄第四、仁壽錄第四、靜泰錄第四、內典錄第一〇、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

修行本起經 ①(日) Shu-gyo-jon-ki-kyo. (支) Hsiu-hsing-pen-chi-king. ②二卷 ③失譯 ④(參考) 出三藏記第三

修行本起經 ①(日) Shu-gyo-jon-ki-kyo. (支) Hsiu-hsing-pen-chi-king. 宿行本起經 ②二卷 ③存、大正三、四六一 No. 194、縮辰一〇、二一四・三、北777言、南799言、元783言、明北660尺、清663尺、麗772尺、天776言、指(339)尺、法766卷、至1013職、明南646善、N. 664 ④竺大力、康孟詳共譯 ⑤後漢建安二(A. D. 197)

〔他經との關係〕本經は本緣部に屬する二卷七品の佛傳である。譯者竺大力、康孟詳には外にこの譯出に後ること十年、(後漢建安十二年)に譯出せる中本起經二卷がある。此經は明かに本經と合して一部の佛傳を形成してゐる。而して歴代三寶紀第

四等に依て、兩經共にその原本は曇果が迦毘羅衛國から將來せることが知られること、又その内容は本經が釋尊の本生より説き起して、その成道後の二賈客入信に終るに對し、中本起經は二賈客入信を前者末段と似寄りの文を以て説くに始めて、成道後の初轉法輪乃至佛在世中の傳道の事實を述べてゐること、更に又道安は本經を「中本起」の對稱と思はるる「小本起」の名を以て呼べるることなどから、兩者は本來姉妹經として存せるものなることが知られる。尙ほ推測すれば、原梵本は一部の佛傳であつたものが譯出の都合上前後二篇に分たれ、何らかの理由に依て兩者異名を冠せられるに至つたものかも知れぬ。尙ほ本經の異譯と思はるるものに「太子瑞應本起經」二卷、「異出菩薩本起經」一卷がある。殊に瑞應經はその所説の内容殆んど本經と同一であり、兩者相一致する偈頌なども添へられて、同本異譯たることを充分に示してゐるが、本經が二賈客入信に終つてゐるに對し、瑞應經は下卷の初分(三分の一弱)を以て本經所説の内容を終り、下卷の殘部は、龍王歸佛、五比丘得度、三迦葉濟度までに説き及んでゐる點を異にするだけである。異出經は、内容は略々瑞應經に同じけれども、偈頌は全然なく、その所説極略なれば、若し同本異譯としても、これは取意酌譯であらう。因みに瑞應經が全く本經の異譯と言ひ得るに拘らず、三迦葉濟度までを説いてゐる一事は、本經と中本起經との原本一經説に助證を提供せるものであらう。

〔内容〕 上巻は三品、下巻は四品に分れる。第一現變品、釋尊の本生譚で、彼は錠光佛の時に無垢光といふ婆羅門童子となり、賢劫の世に成佛するとの授記をうけ、三阿僧祇九十一劫の間、生死を重ね六波羅蜜、十地行を爲し、遂に一生補處の菩薩として兜術天上に生ずる。第二菩薩降神品、菩薩は兜術天より降臨し、白淨王の摩耶夫人の胎に入り、四月八日誕生、長ずるや種々の學問を習ふ。第三試藝品、太子十七歳にして、諸釋子と藝藝を競うて優勝し裘夷(Gandhā)と名づくる夫人を娶つたが、太子は樂まなかつたので、更に衆稱味(Yasodhāri)常樂意の二夫人を與へられたが、太子は依然として樂しまなかつた。第四遊觀品、太子出家の直接原因とさるる四門出遊の物語である。第五出家品、太子年十九にして城を脱して出家せられたる物語である。途中摩竭國の瓶沙王より王とならんこととの勸告をうけたれども、辭して山に入り修行を始む。第六勸苦品、菩薩は修行者の教に満足せず、六年間の苦行を始めたが、之が無益なることを悟り、二女より乳糜の供養をうけて、菩提樹下に坐し觀念を凝した。第七降魔品、恩愛、常樂、大樂の三魔女を始め諸魔の誘惑脅迫を降伏し、遂に菩薩が成道せられた。是れ即ち七品の大要である。

修行要記 ①(日)Shū-gyō-kyō-hi. ②一冊 ③存 ④寫本(高大、1.711)

修行要鈔 ①(日)Shū-gyō-kyō-shō. ③存、日本大藏經解脫上人小章集 ④貞慶(久壽三)建保元A.D.1153-1213)述

⑤本書は其奥書によれば「建曆二年正月十二日以御口筆記之」とあるから解脫上人(貞慶)其の入滅の前年に誰かに御話をせられたのを記せられたものである今「修行要鈔」と云ふも、もとの書名ありたるにあらず、法隆寺佐伯定胤大僧正が日本大藏經刊行の際、其の編輯者の依頼に依り上人の短文を集めて解脫上人小章集と名づけ、此の書も此の中に輯録の際、其の内容より假りに「修行要鈔」と記されたのである。されば修行要鈔の下に割註を附して依無別題號私名之とせられて居るので明かである。本書は問答體になつて居る、最初の問は出離の要は何事やとある。之れに答へて自宗の意は唯識觀に在りとある。次には心靜かならず、智及ばず、如何にして此の觀をなすやと問へば、自己の分に隨うて一道理を思惟せば次第に心が靜かになつて行くものであると答へて居る。其れから彌勒菩薩の教授頌の影響唯是心觀を引用して萬法唯心の奧義を陳べ、圓成真實を悟るべきであることを簡決に陳べてあるのである。(土宜覺了)

修華嚴奧旨安盡還源觀 ①(日)Shū-ke-gon-ō-shi-an-jin-gen-gen-kan. huan-yuan-kan. 華嚴奧旨安盡還源觀、安盡還源觀、華嚴還源觀、還源觀 ②一卷

③存、大正四五・六三七No. 1876(縮陽三、三三四・一〇、明北1886跡、明南1511背、N. 1593) ④唐法藏(貞觀一七一先天元A.D. 643-712)述

⑤本朝傳來の選號に依るに「京大薦福寺翻經沙門法藏述」とあり、此師六十三歳以後七十歳までの間に製作せられたものと見ゆる。(A.D. 705-712)。其の故は、この師六十三歳即ち神龍元年十二月、則天武后崩御、中宗復位、母后追福の爲に新たに造りたるが大薦福寺にて、師之に住し、七十歳にして此寺に於て遷化されたからである。且つ書中華嚴經を引用するに、多くは新譯の八十經に據られてあれば、晩年の選述なることは明かである。

⑥本書は杜順の法界觀門を祖述し題號も亦彼れの發端に修大方廣佛華嚴法界觀門といふに同じて、修華嚴奧旨安盡還源觀とあるが、晋水の釋には「修一字總貫二名題、下九字別申三綱要」といひ、有前に「初の五字は所修の經宗、後の五字は能觀の題辭、能所且く殊なれども互に通ずるのみ」といへり。蓋し修は修習の義、華嚴は所依の經、奧旨は深奥の旨趣と云ふことにて、緣起甚深頓現互融は法界家の實徳なり、此の當相に於て開解立行するを華嚴奧旨と云ふときは、緣起門の趣入となりて、重々無盡の徳用を顯し、其の自體に就て單刀直入するを華嚴奧旨と云ふときは、性起門の趣入となりて、衆生心中に本來具有する性徳を顯すのである。安盡還源とは安盡き心澄みて自性清淨圓明の本源に還ること、即ち觀成の

利益に約して名を立てたものである。されば此觀け圓教絕對の觀門である、故に卷末の頌文にも「備尋諸教本、集慈華嚴觀」とあり。然るに古來讀者を誤りて、或は之を杜順の作とし、或は眞偽を疑ひ、或は寄顯門の説と云ふものありしは、何れも杜撰である。此の書の大綱を云へば、起信論の所明に准じ増數に約して六門を立て、又た其の六門中に於て其の數の如く別開するが故に、總じて二十一門を分けてある。よりに凝然の法界義鏡に觀行の狀貌を明すに十類を擧ぐる中、「三、安盡還源觀一卷賢首師作、彼有六門、總明觀行、即是增數重開之相、一體、二用、三徧、四徳、五止、六觀、總合有二十一門、其四徳相是事妙用、餘即圓滿普觀門」と讚してある。先づ一體とは自性清淨圓明體にて、これより二用を起す、其の中、海印森羅常住用は、一切萬象を印現する海印三昧であり、法界圓明自在用は、廣く萬行を修起する華嚴三昧である。而して其の一々の用が法界に普周することを示すが三徧であり、其の境に依て四種の行を修するが四徳である。次に止觀兩門を修するは正しく觀行成就の相を示したものである。然れば此の六重は一貫の觀門にして、解行の方軌なれども、其の一々の觀皆悉く悟入法界の要路を成じて、何れかの一門に入れば、隨て餘門を具して法界に入ることを得るのである。故に六重の觀門を述べたるや、圓珠の六孔の喩を擧げて其の義を示してある。

⑦〔注釋〕 晋水淨源の安盡還源觀疏鈔補解

修行用心 ①(日)Shū-gyō-jo-jin. (寺時修一)

②一卷 ③存 ④存海記 ⑤寫本

一卷、同じく安盡還源觀科一卷。洪容の華嚴安盡還源觀集釋五卷(寫本三、四缺)。實英の安盡還源觀不審一卷。經歷の安盡還源觀筆記一卷。宜然明道の安盡還源觀玄談及び科文一卷。南紀芳英の安盡還源觀癸亥錄三卷。伏明の安盡還源觀講前日錄一卷。持淨の安盡還源觀講錄一卷。法泉大安の安盡還源觀幽賞二卷。龍天の安盡還源觀私記一卷。照遍の安盡還源觀精義一卷。其の他失名の玄談等あり。

⑥慶安三刊 ①(正大、一二四・四一)

**修驗安心義抄**

(松原恭讓)

①(日) *Shu-gen-an-jin-gi-sho*. ②一卷 ③存 ④海浦義觀述 ⑤明治三二刊 ⑥龍大(二六九・二)(京大、日大未・七四二)(帝國、八一・一三八)

**修驗一派引導作法**

①(日) *Shu-gen-pai-pan-in-do-sa-ho*. ②一卷 ③存

日本大藏經修驗道章疏第二法則類。

①修驗道に於ける引導の諸作法を集めたもの。入棺、行列次第、墓所作法、位牌、靈供作法、茶湯次第より成つてゐる。

**修驗引導文軌**

(服部如實)

①(日) *Shu-gen-in-do-mon-ki*. ②存。修驗聖典第五諸儀供養法。

**修驗慧印三昧耶引導法**

①(日) *Shu-gen-e-in-san-ma-ya-in-do-ho*. ②一卷 ③存。日本大藏經修驗道章疏第一法則類 ④元永(延喜一四一長徳元 A. D. 914—995)撰

⑥修驗道惠印法流による亡者引導の次第法

則。大悲喜捨三昧耶會、普禮、平等觀、自護身、灑淨、佛性三昧耶、淨土變、觀佛、金剛起、普禮、表白、神分、登覺台、佛性三昧耶、勸請、五大願、法界圓滿、佛果輪緣、大金剛輪、地結、地天、四方結、金合、入門、合門生、招罪中、摧罪、業障除、成菩提心、道場觀、授與三皈依、大虛空藏、大智慧、小金剛輪、金剛摩尼轉成福智、送車輪、請車輪、招請、四明、結界、度缺思議、金剛網、火院、大三昧耶、閻伽、華座、讚、振鈴、五供養(理事)、普供養、三力、祈願、禮佛、佛眼、亡者成佛印、大五秘密印明、發願、破地獄成淨土、六地藏、八大金剛童子、正念誦、本尊加持、字輪觀、本尊加持、散念誦、五供養(理事)、閻伽、普供養、三力、祈願、禮佛、廻向、解異、撥遣、護身法、普禮等の諸印明より成り、終に初七日不動以下十五佛の印明を擧ぐ。更に心得之事、道順逆事、梵天之事、修驗得度之事、得度書様之事、聲聞形落髮之事を附載してゐる。醍醐三寶院門主寬濟大僧正の傳領本で、承應より寛政に至る先達の奥書である。

(服部如實)

**修驗慧印總漫拵撰**

(服部如實)

①(日) *Shu-gen-e-in-do-man-da-ra*. ②一舖 ③存。日本大藏經修驗道章疏第一法則類、修驗聖典第三惠印法流

日本大藏經修驗道章疏第一法則類、修驗聖典第三惠印法流

①修驗道に於ける慧印灌頂の種子曼荼羅。四重の組織にして第一重に内院に九の月輪があつて、中央大日、其の周圍の第二院には四波羅蜜等の八尊四方四隅の月輪は第三院と呼ばれ、四佛十六大菩薩が配せられ、

東方院乃至北方院と稱せられてゐるが、十六大菩薩の配置は眞言の曼荼羅と異つてゐる。東南の月輪不動院に五尊、西南の愛染院に九尊、西北の藏王院に五尊、東北龍樹院は三尊である。第二重が第四院で四隅に嬉鬘歌舞の四菩薩、南方深砂大王院には七尊、北方字賀神王院には五尊、東方は十二宮院、西方は七星院である。第三重は第五院で、四隅に外四供養、四方に四攝、その隣に四天王、空白の處に廿八宿を配してゐる。第四重は第六院で、廿天が布列されてゐる。然し大藏經及び修驗聖典所載のものは寫誤と認められる點が多い。(服部如實)

**修驗慧印六壇漫拵撰**

(服部如實)

①(日) *Shu-gen-e-in-do-raku-tan-man-da-ra*. ②一舖 ③存。日本大藏經修驗道章疏第一法則類、修驗聖典第三惠印法流

①修驗道慧印法流に於ける龍樹、不動、愛染、金剛童子、深砂、辨財天女の六壇法の本尊曼荼羅。六曼荼羅各別に仕立てるのが本義であるが、合幅の時は右方上より龍樹、不動、愛染、左方上より金剛童子、深砂、辨財天と次第する習ひである。その中、龍樹、不動、深砂、辨財の三曼は二重、他は、三重の組織である。(服部如實)

①修驗行者の遵守すべき學則若干を撰定し、寛政十一年二月廿八日積善教院僧牛が

聖護院門跡の教を奉じて撰定したものである。修驗の宗意、神山の灌頂、眞言陀羅尼讀誦の用心、禪定、妻帶、帶刀等について本義を明かしてゐる。(服部如實)

⑥修驗行者易筮該用 ①(日) *Shu-gen-e-in-do-jaku-kei-kei-gai-yo*. ①一卷 ③存 ④西藏院不莫記 ⑤寫本(京大、日大未・七二〇・七二一)

①修驗行者の遵守すべき學則若干を撰定し、寛政十一年二月廿八日積善教院僧牛が

①修驗行者易筮該用 ①(日) *Shu-gen-e-in-do-jaku-kei-kei-gai-yo*. ①一卷 ③存 ④西藏院不莫記 ⑤寫本(京大、日大未・七二〇・七二一)

①修驗行者傳記 ①(日) *Shu-gen-kyo-ta-den-ki*. ②二册 ③存 ④刊本(哲、四・右二四)

①修驗行滿雜記 ①(日) *Shu-gen-kyo-tan-ri-ki*. ②一卷 ③存。日本大藏經修驗章疏第三記録類 ④良運記 ⑤寛永一七(A. D. 1640)

①台嶺行門修驗書の一。山門正塔院北谷正教房第十一代新達阿闍梨良運が參籠の始末、行滿仕出、祝賀饗應の次第を記した記録。元祿十二年書寫の奥書がある。

①修驗切紙集 ①(日) *Shu-gen-ki-ri-kami-shu*. ②一卷 ③存 ④寫本(京大、日大未・七三四)

①修驗故事便覽 ①(日) *Shu-gen-ko-jihen-ban*. ②五卷 ③存。日本大藏經修驗道章疏第三法華行者修驗書 ④日榮著

①修驗道關係の故寫四十九項目を解説したもので、各項目を更に小分して數項目とし、和漢古今の事例を擧げて典據及びその

①修驗行者傳記 ①(日) *Shu-gen-kyo-ta-den-ki*. ②二册 ③存 ④刊本(哲、四・右二四)

①修驗行滿雜記 ①(日) *Shu-gen-kyo-tan-ri-ki*. ②一卷 ③存。日本大藏經修驗章疏第三記録類 ④良運記 ⑤寛永一七(A. D. 1640)

①台嶺行門修驗書の一。山門正塔院北谷正教房第十一代新達阿闍梨良運が參籠の始末、行滿仕出、祝賀饗應の次第を記した記録。元祿十二年書寫の奥書がある。

①修驗切紙集 ①(日) *Shu-gen-ki-ri-kami-shu*. ②一卷 ③存 ④寫本(京大、日大未・七三四)

①修驗故事便覽 ①(日) *Shu-gen-ko-jihen-ban*. ②五卷 ③存。日本大藏經修驗道章疏第三法華行者修驗書 ④日榮著

①修驗道關係の故寫四十九項目を解説したもので、各項目を更に小分して數項目とし、和漢古今の事例を擧げて典據及びその

可能なることを立證せんとした書である。

其の引用書目の如き、大日經・大集經・仁王經・金光明經・涅槃經・楞嚴經・七佛所說神咒經・不思議境界經・鬼子母經・雜譬喻經・提謂經の諸經、十住毗婆娑論・摩訶止觀・文句・筆削記等の論疏・佛祖統記・法苑珠林・梁宗高僧傳・南海寄歸傳・釋氏要覽・僧史略・經律異相・祖庭事苑・拾心記・明心寶鑑・塔婆銘書の類、事文類聚・那珂代傳・本紳綱目・西陽雜俎・軍林寶鑑・雍州府志・事物起源・沈括夢溪華談・黃帝內經靈樞・古今韻會徵韻史記・評林等の俗書、神佛冥應經・神國決疑篇・醫學入門・諫迷論・王子一覽・續博物誌・艸山集・夷子記・扶桑故事要略・温故要略・舊事本記・太平御覽・太平記抄・源氏物語・谷響集等を引用し、且つ元亨釋書に見える故事を擧げ、其他心經秘鍵等あらゆる諸書を参照してゐるから、和漢古今の興趣ある物語を見るこ

とが出来ると共に些細な行事の因縁來由を知ることさへ出來て而も驗門の意圖を知らず識らずの間に味得することを得ることは類書中最第一の貴重書と云ふべきである。今左に四十九の大項目のみを擧げることゝする。魅女・幣・注連・敷符・加持杖・加持名義・境鏡・諸符・筒封・病鬼・疫病・蘇民將來・痲痘・野狐・鬼病・鬼嬖唾・守並口字・札・求子・石榴・鬘・繪馬・九字・雷・祈禱・正五九月祈禱・七難九厄・金神・鬼門・星祭・月待・日待・牛・玉寶印・寺門置・獅子像一事・社壇双方二神・大黑天神之辨・甲子祭・大黒天・之許・三寶荒神・妙見菩薩・地祭・庚神・忌火辨・忌經水・臣供養五祈禱・所願成不・修驗者用心・

病人教化・平形念珠・祈禱相承書がその項目である。本書は洛陽西陣光明山忍辱鎧日榮がその該博な知識を傾けて著したもので、終の文によれば享保十五年六月廿日火災に遭つた時、此の原稿のみを出したと云ふことが記されてゐるから、縱令「引文の相違、料簡の差誤・文字魚魯の誤等云ふに及ばず」と云つてゐても、それは彼の謙遜であつて、如何に彼が多年書集めた原稿を大切に

にしたかゞ判ると共に、本書あつて始めてその由來因縁を知り得る故事の多いことは確に後世を益するものと云はねばならぬ。修驗の二字を冠すると雖も必ずしも修驗に限つたもののみでないと思はれるものが多いが、これは又他面、修驗道が如何に廣く深く民間信仰に食ひ入つてゐたかを證據だてるものであらう。修驗道研究者は勿論、一般人士と雖も必讀すべき名著である。因に本書全部の書記は中村平五三近子である。(服部如實)

**修驗極印灌頂印明** ①(日)Shin-  
gen-kyō-in-kwan-jō-in-myō. 修驗極秘  
灌頂印明 ②一卷 ③存、日本大藏經修驗  
道章疏第一、法則類修驗聖典第三惠印法流  
④勝覺(天喜五—大治四 A. D. 1057—1129)撰

⑥修驗道惠印法流に於ける秘密大事を集めたもので、三身灌頂大事、光明眞言灌頂大事、法華經灌頂大事、修驗灌頂作法、印可加行表白を収めてゐる。三身灌頂大事は法報應三身の秘印秘明を記したもので。光明眞言灌頂大事は光菩薩の印明を擧げたもの。

法華經灌頂大事は一に作禮而去大事とも稱し、先づ虚空を道場、草木を供物と觀じ、次に「智」の智火を以て三毒を燒盡し、「智」の智水を以て三業を洗淨し、又「智」の三字を誦して自身即大日、大日即自身と成り、如法華印明を結誦して五智如來の三昧を契證することを明し、終に方便・安樂行・壽量・普門の四要品の秘密印明と偈とを擧げたもの。修驗灌頂作法は佛性三昧耶戒・虚空藏・聲拳印・外五古・普賢三昧耶の五印明と護身法とより成つてゐる。印可加行表白は許可灌頂の印明を受けんとするに當り、不動の密軌を修して本尊の哀愍を乞ふ趣旨を述べたものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝慧印三昧耶六境法儀軌に加ふべきものである。(服部如實)

法

① (日) Shu-gen-sai-sho-e-in-sam-ma-ya-sai-to-go-ma-ha. ② 一卷 ③ 存、日本大藏經修驗道章疏第一法則類 ④ 聖寶 (天長九—延喜九 A. D. 832—909) 撰

① 修驗道慧印法流に於ける柴燈護摩供の次第。火天段・部主尊段・諸尊世天段の三段に分れてゐる。神變社刊行(昭和四)の柴燈護摩次第は之より遙に簡潔である。

修驗最勝慧印三昧耶聲明集

(服部如實) ① (日) Shu-gen-sai-sho-e-in-sam-ma-ya-sho-an-to-sha. ② 一卷 ③ 存、日本大藏經修驗道章疏第一 ④ 成覺撰

① 修驗道慧印法流に於ける聲明集で、法螺・禮讚・散華・登覺台・前讚・唱讚・勸請・五大願・摩尼供・三力偈・小祇願・禮佛・後讚・後法螺の文と音譜とを出し、終に慧印法要配役の一項が加へられてゐる。(服部如實)

修驗最勝慧印三昧耶得度作法

① (日) Shu-gen-sai-sho-e-in-sam-ma-ya-to-ku-do-sha-to. 修驗得度作法 ② 一卷 ③ 存、日本大藏經修驗道章疏第一法則類

① 成覺撰 ② 修驗道當山派の得度作法である。吾祖俊君大行者懸心勃陀・忘肉身・夢行難苦・何如有願・鬚髮之有無僧俗之形姿・眼上哉」と云ひ、長髮は法身形、鬚髮は報身形、剃髮は應身形と斷じ、受者の意樂に任せて摘み或は剃り又は剃らざる所は修驗の面目躍如たるものがある。又五戒を授け、更に知らずして犯した罪を減除すべき眞言を授けるなど注意すべき點である。終に道場の

莊嚴法と度牒の書方とを擧げてゐる。當山派は此の次第によつて得度式を行つてゐる。(服部如實)

修驗最勝慧印三昧耶普通次第

① (日) Shu-gen-sai-sho-e-in-sam-ma-ya-tsu-shi-tai. ② 一卷 ③ 存、日本大藏經修驗道章疏第一法則類 ④ 聖寶(天長九—延喜九 A. D. 832—909) 撰

① 修驗道慧印法流に於ける供養法の次第。諸尊法の根底をなすもので、大都十八道立である。辟除魔民・登覺臺・法界圓滿・佛果輪縁・入門・合門生・大智慧・金剛摩尼轉成福智・法螺・環輪圓成等修驗独自の印明を加へてゐるところが普通の十八道立の次第と異つてゐる。(服部如實)

修驗最勝慧印三昧耶法

① (日) Shu-gen-sai-sho-e-in-sam-ma-ya-to. ② 一卷 ③ 存、日本大藏經修驗道章疏第一法則類 ④ 義範(治安三—寛治二 A. D. 1023—1088) 撰

① 修驗道當山派に用ふる兩祖師供と十二天供とを収めたもの。前者は中興の祖理源大師と道祖役行者との供養法次第で、十八道立に似て然らず。理源大師の印明を八葉印と聖觀音小咒(修驗聖典中の兩祖師供には如意輪觀音咒になつてゐる)、役行者の印明を法界定印と彌勒の咒とせること、及び理趣・不二禮讚・尊勝陀羅尼を讀誦することは注意すべきである。十二天供は梵天乃至月天の供養法次第で、結界・道場觀等なきを異とする。(服部如實)

修驗最勝慧印三昧耶法口決

(服部如實) ① (日) Shu-gen-sai-sho-e-in-sam-ma-ya-to-ku-ka-ketsu. 修驗最勝慧印三昧耶七壇法開書 ② 一卷 ③ 存、日本大藏經修驗道章疏第一法則類

① 修驗道の七壇法即ち慧印三昧耶加行次第中、獨自の印明を解説したもので、登覺臺・法界圓滿・佛果輪縁・入門・合門生・法界塔の六印明及び十三地瑜伽眞言とを擧げてゐる。(服部如實)

① (日) Shu-gen-sai-sho-e-in-sam-ma-ya-to-ku-ka-ketsu. 修驗最勝慧印三昧耶七壇法開書 ② 一卷 ③ 存、日本大藏經修驗道章疏第一法則類

修驗最勝慧印三昧耶法玄深口決

① (日) Shu-gen-sai-sho-e-in-sam-ma-ya-to-ku-ka-ketsu. ② 一卷 ③ 存、日本大藏經修驗道章疏第一法則類 ④ 仁海(天曆九—永承元 A. D. 935—1046) 纂 ⑤ 長久三(A. D. 1042)

① 修驗道慧印法流の一重書。一宗之大意・七壇大綱・總會印信・小次第名義・壇場莊嚴之事・祇師憶持・印信口訣の七段より成つてゐる。一宗之大意は修驗道は龍樹大士形現相承の軌則・凡身頓覺成佛の妙法であること及び慧印相承顯密・大華嚴城兩山の意義・最勝慧印三昧耶の名目等を説いてゐる。七壇の大綱は觀賢大僧正の書で、辨天・深砂・金剛童子・愛染・不動・龍樹・金界大日・胎藏大日・慧印大日・護摩供を解説し、慧印曼荼羅總會印信は傳法灌頂の護摩供に必修すべき本尊加持の印明を擧げたもので、聖寶尊師の制である。小次第略名義は次第中の印明觀念の意義を略解したもので、修驗道入門の初心者よき手引書たるを失はぬ。壇場莊嚴之事は壇上法具その他の意義約束を明かし、祇師憶持之事は弟子に對する師の心得を説き、深奥玄極秘密傳燈印信口訣は大中小の三祇印・金胎・祕密印信等を出せるものである。終に仁海自身の「長久三壬午年二月廿五日、山伏正宗僧正、仁海謹疏」と記した跋があり、又永享二年より文久十一年に至る迄の諸國先達傳受の奥書がある。更に裏書には本道研究上多大の參考となるものが記されてゐる。(服部如實)

修驗最勝慧印三昧耶六壇法儀軌

① (日) Shu-gen-sai-sho-e-in-sam-ma-ya-to-ku-ka-ketsu. ② 一卷 ③ 存、日本大藏經修驗道章疏第一法則類 ④ 聖寶(天長九—延喜九 A. D. 832—909) 撰

① 修驗慧印法流の七壇法より不動法を除外した他の六壇即ち大日・龍樹・愛染・金剛童子・深砂・辨天の六尊法を集めたものである。何れも前後供を略し、勸請・道場觀・結界・本尊加持・字輪觀等肝要のもののみを出してゐる。(服部如實)

修驗三國峰系

① (日) Shu-gen-sai-sho-e-in-sam-ma-ya-to-ku-ka-ketsu. ③ 存、修驗聖典第六史傳

修驗三時動行式

① (日) Shu-gen-sai-sho-e-in-sam-ma-ya-to-ku-ka-ketsu. ③ 存、修驗聖典第一諸經要集

修驗三十三通記

① (日) Shu-gen-sai-sho-e-in-sam-ma-ya-to-ku-ka-ketsu. ② 二卷 ③ 存、日本大藏經修驗道章疏第二教義類之内、修驗聖典第六教義 ④ 連覺撰

① 修驗十卷書の一。承保(A. D. 1734—1737)年間、彦山靈山寺の連覺及び同山の先達智光等が面授口傳の切紙を筆録集成したものを

で、上巻に衣體分十二通、下巻は淺略・深  
秘・極秘の三分に分れ各七通宛あり、合し  
て三十三通となるから三十三通記と名づけ  
たものである。叙述頗る整正して居り、修  
驗道研究上見逃し難い良著である。四分の  
内容は左の如くである。斑蓋口決、頭襟祕  
決、鈴繫・結袈裟祕決・法螺口決、最多角念  
珠・錫杖・肩箱祕決・笈祕決・金剛杖・引敷・脚  
半(以上衣體分)。修驗宗旨・邪正分別・體相  
用三大・三種問答・修驗用心・三種名義・依經  
用否(以上淺畧分)、寶冠論・螺緒之大事・無  
作三身之大事・三身山伏・山伏二字・臥伏二  
字・無相六度(以上深祕分)、本有灌頂・十界  
本具・閻伽水之大事・十界修行・柴燈之大事・  
三種成佛・捨身求菩提(以上極祕分)。

(服部如實)

修驗三正流儀軌

①(日)Shūgen-san-shū-ryū-gi-ki. ②1巻 ③存、日本

大藏經修驗道章疏第三教義類 ④覺瑠撰

⑤文政六(A. D. 1833)

⑥神道教義を主として引き、佛教との調和  
を目的として驗門の教義及び故事を記述し  
た書。正流・正儀・正教の三段に分れ、正教  
の中に天地人三才辨・斧之祕傳・袈裟之祕  
傳・山伏二字事・修驗二字事・兩界大勸請  
事八大金剛童子七大胎藏權現勸請事不動  
出現實地事・羅亂三寶大荒神事・其面山大辨  
財天女事・自身引導事・梵天帝釋四大天王事・  
修驗三道一致兼備事の十三項あり、更に修  
驗佛法兼學權輿之事・高尊兼徒教誡之事・高  
尊至孝之示大道事の三項を追加してゐる。

(服部如實)

修驗懺悔文

①(日)Shūgen-saigyō-mon. ③存、修驗聖典第四深祕修法集之内

修驗指要辭

①(日)Shūgen-shūyō-jihen. ②1巻 ③存、日本大藏經修驗道章疏第三教義類 ④空述

⑤聖門末大善院阿闍梨法印等空大僧都の述  
にかゝり、修驗山伏の弊風を指摘し嚴誡を  
垂示した書。顯密修驗三道鼎立の古風を慕  
ひ、周易小筮・方位家相を取扱ふことを本  
義に非ずとし、且つ俗服帶劍が修驗の本意  
に非ざることを説いてゐる。終に明治十六  
年三月鳥田藩根の跋がある。(服部如實)

修驗宗旨

①(日)Shūgen-shūjō. ②1冊 ③存 ④八宮山祐秀撰 ⑤寫本(京大、日大末・七・一六)

修驗宗神道神社印信

①(日)Shūgen-shūjō-shin-in. ②五十六種 ③存、日本大藏經修驗道章疏第一法則類、修驗聖典第四深祕修法集之内

⑥修驗神道に於ける諸大事五十六を集めた  
もの。即ち社參・御戸・宮渡・御幣・御器・御  
酒・神樂・護身法・九字・日待・月待・除穢・忘  
違大事・觸穢・脇刀・太刀・矢造・誦訪・兵甲  
胄・刀・弓・馬・鎌・鉢手水・河渡・垢離・念佛・  
臨終・月水鏡・針・摩利支天・鎧甲・齒黒・惠  
美須・小簪・兵法・茶湯・淨衣・烏帽子・夢違・  
出行・庚申・湯・火・輓・鏡・散供・番匠・趙・行  
水・矢造符・袖・墨・筆の諸大事が集録さ  
れてゐる。終に遷宮之略法・御祭會典論作  
法開書・捧幣次第・神拜獻膳作法・秋切大事・  
神道拍手歌・小秋祝言の七項が附加されて

ゐる。

修驗宗法具祕決精註

①(日)Shūgen-shūjō-hō-gū-hisetsu-sei-chū. ②2巻 ③存、日本大藏經修驗道章疏第一教義類之内 ④常圓(一延寶11 A. D. 1674)

⑤修驗道所用の法具その他について、會津  
若松の常圓が延寶二年註釋したもので、海  
浦義親師が更に補註を加へてゐる。上巻  
には二字大事・三身即一事・三諦一念事・山  
伏二字事・結袈裟祕決・小頭巾祕訣・斑蓋祕  
決・鈴繫祕決・法螺口決・法螺緒大事・螺緒大  
事・最多角念珠口決・錫杖口決・金剛杖口決・  
形管大事・笈祕決・引敷大事・脚半大事・三界  
事・金剛界九會胎藏界八葉九尊・胎十三大  
院・三密事・八正道・不動十界事の二十五項、  
下巻には頭襟・斑蓋・鈴繫・結袈裟・法螺・三  
十七尊名經・最多角念珠・錫杖・緣笈・肩箱・  
金剛杖・引敷・脚半の十三項について祕訣注  
釋を施してゐる。修驗道研究上重要な資料  
である。(服部如實)

修驗修要集

①(日)Shūgen-shūyō-shū. ②1巻 ③存 ④寫本(京大、日大末

七・一七・一八)

修驗修要集聞書

①(日)Shūgen-shūyō-shū-ki. ③存 ④寫文轉寫

本一冊(京大、日大末・七・二七)享和轉寫本四  
冊(京大、日大末・七・二六)

修驗修要祕決集

①(日)Shūgen-shūyō-shū-hisetsu. ③存、日本大藏經修驗

道章疏第二教義類 ④即傳撰 ⑤大永頃

修驗修要祕決集

①(日)Shūgen-shūyō-shū-hisetsu. ③存、日本大藏經修驗

道章疏第二教義類 ④即傳撰 ⑤大永頃

修驗修要祕決集

①(日)Shūgen-shūyō-shū-hisetsu. ③存、日本大藏經修驗

(A. D. 1521—1523)

⑥大永年間、阿吸房即傳が五十通の大事口  
決を集めたもので、一に修驗道切紙とも  
呼ばれてゐる。一部を衣體分・淺畧分・深祕  
分・極祕分・私用分・添書分の六に分ち、  
左記の各項より成つてゐる。

頭襟・斑蓋・鈴繫・結袈裟・法螺・念珠・錫  
杖・緣笈・肩箱・金剛杖・引敷・脚半以上十二  
通衣體分・依經用否・修驗大意・三種即身・三  
種問答・修驗用心・邪正分別・世界建立以上  
七通淺畧分、山伏二字・臥伏二字・四種名義・  
三身山伏・寶冠問答・不動十界・法螺兩緒以  
上七通深祕分、十界修行・半中床堅・半中床  
精・半中閻伽・半中柱源・半中小木・半中碑傳  
以上七通極祕分、灌頂啓白・正灌頂大事・半  
中床定・入峯印證狀・半中血脈・半中小柴・螺  
緒印信以上七通私用分、行者略緣起・役行  
者尊形・阿字門廻向・靈供作法・五箇問答・入  
峯三祇・修驗類字以上七通添書分、これに  
四重阿字大事・五箇證文・阿字八箇證義の最  
極分三通を加へて五十通としてゐる。本書  
に傳授本と版本との二種があつて、版本に  
は最極分三通を欠いてゐる。尙本書は三十  
三通記・遠證集・指南抄・形生記と共に修驗  
の五重と稱せられ又は修驗十卷書の一とし  
て重視されて居り、驗門の本義を發揚する  
處多く、從つて注釋書にも十數部を數へる  
ことが出来る。

修驗十一箇條

①(日)Shūgen-shūjō-jūichū. ②1巻 ③存、日本大藏經修驗

道章疏第二教義類 ④即傳撰 ⑤大永頃

修驗十二箇條

①(日)Shūgen-shūjō-jūnichū. ②1巻 ③存、日本大藏經修驗

道章疏第二教義類 ④即傳撰 ⑤大永頃

修驗十二箇條

①(日)Shūgen-shūjō-jūnichū. ②1巻 ③存、日本大藏經修驗

道章疏第二教義類 ④即傳撰 ⑤大永頃

修驗十二箇條

①(日)Shūgen-shūjō-jūnichū. ②1巻 ③存、日本大藏經修驗



道章疏第三教義類之内 ⑤天保一三(A.D. 1811)

⑥同名の書二部あり、一は本山方、他は當山方である。これは天保十二年十月二日、寺社奉行阿部伊勢守より觸頭へ十二條の問を發したの對し、當山、本山より各々答へた回答書である。十二ヶ條とは宗旨名義、一已専門勤行・門徒教化・加持祈禱修行方・本尊・專誦經文・法服・佛具並僧具・僧侶官位次第・諸寺院轉任次第・寺務並兼僧職掌名目・一宗別派である。本山方の書には終りに本山修驗階級衣體式を附してある。

當山方の答書起草者は諸國總學頭江戸深川寺住職日賢であり、書中に挿圖がある。何れも近代の修驗を知る上に役立つ記録である。

⑦修驗道十八箇條警策の下を見よ。

修驗十八箇條警策

①(日) 三三三-ten-jū-hachū-jū-jū-kyō-saku. 修驗道十八箇條警策 ②一卷 ③存、日本大藏經修驗道章疏第一教義類、修驗聖典第六教義之内

④清濟(天授四一永享七A.D. 1378-1435)撰

修驗常用集

①(日) Shū-gei-jū-jū-ichi-shū. ②二卷 ③存、日本大藏經修驗道章疏第一法則類 ④觀弘纂

⑤本山派修驗常用の經典を編集したものであるが、又修驗各派の行者も用ゐる經典集である。上巻は朝・日中・暮の三時勤行式で、下巻には懺悔文・精進眞言・剃髮文・行文文・着衣文・着袈裟文・開經偈・巡次禮讚・行法諸眞言・佛部諸眞言・諸菩薩眞言・諸天諸神眞言・法具諸眞言・諸讚・熾盛光陀羅尼。

廻向輪陀羅尼・施餓鬼作法・戒行作法・普門品・神祇講式・行者講式・理趣經・秘鍵を収めてゐる。沙門觀弘が年來編集し行智の訂正を乞ひ、彌勒四禮文を加へて文政八年刊行したものであることが行智の跋によつて窺はれる。

文政八刊

修驗常用秘法集

①(日) Shū-gei-jū-jū-ichi-shū. ②三卷 ③存、日本大藏經修驗道章疏第一法則類 ④尊海(文政九一明治二五A.D. 1836-1893)集

⑤修驗道行者須知の大事・秘法・守・札等を類集したもので、摩利支天神鞭法・吽迦陀使者法・五大力尊神・舊井戸水直傳・交珠日禮・地鎮祭法・千日法・御符認様大事・寅八毗沙門天王虎卷・不動明王金縛秘法供・不淨除守・井水濁時・鬼門之札・通用之符・金神造札・埋井札・除雷札・痘疔守・易産符・易産守・同帶加持・産生湯加持・乘馬守護・社頭棟札・五大尊守・同守符・愛染守・却疫病札・兵法九字之大事より成つてゐる。本書と同名一卷の秘法集がある、同じく尊海の類集にかゝるもので、西吹風守・火生三昧大事・囀嚙拳天水生消火大事・瀾火大事・鎮火大事・消除火災法・走者足留祕事・牛頭天王六印法・古佛修補撥遣大事・開眼供養遷座大事・除罰祕事・忌服免脫大事・糞土大事・柴手大事・虫商咒・積加持神灸祕事・驚動風虫加持大事・虫加持祕事の十八法を集めてゐる。

修驗心鑑書

①(日) Shū-gei-shin-shū. ②一卷 ③存、日本大藏經修驗

道章疏第一教義類 ④聖寶(天長九一延喜九A.D. 832-909)撰

⑤修驗道中興の祖聖寶理源大師が本道の奥義・驗乘の秘趣を説いて眞俗不二の觀照をすゝめ、道祖役行者の功績を稱えたものである。本書に注釋を加へたものが常圓の修驗心鑑鈔である。

修驗心鑑鈔

①(日) Shū-gei-shin-shū. ②二卷 ③存、日本大藏經修驗道章疏第一教義類 ④聖寶(天長九一延喜九A.D. 832-909)述・常圓(延寶二A.D. 1671)註

⑤聖寶理源大師の撰述にかゝる修驗心鑑書に註釋を施したものである。常圓は序に「雖波役之流内無實、外虚而壞亂中畧晦盲役徒否ニ塞修驗正法以邪道惑人類顯然多世。故予雖不敏及久而愛於法失亡以錄之」と本書著作の意趣を記してゐる。

修驗聖典

①(日) Shū-gei-shū-ten. ②一卷 ③存 ④修驗聖典編纂會編

⑤(第一諸經要集) 佛說三身壽量無邊經(一名、文殊師利菩薩一時梵字經)。大日經住心品。優婆塞戒經受戒品第十四。佛說大報父母恩重經。理智不二界會禮讚。聖無動尊大威怒王祕密陀羅尼經。聖不動經。南無八大童子。法華經普門品。般若心經。般若心經。秘鍵並序。佛說俱利伽羅大龍無動陀羅尼經。烏檀瑟摩明王神通陀羅尼經。北辰菩薩陀羅尼經。佛說大荒神施與福德圓滿陀羅尼經。佛說摩利支天經。佛說地神經。禮文。五大願。普賢十大願。唯識三十頌。立

義分、舍利禮、佛母大孔雀明王經偈。華嚴經、普賢行願品偈、金剛般若經偈。佛母大孔雀明王陀羅尼。大金刚輪陀羅尼。諸部眞言。至心迴向、祈願文。修驗三時勤行式。〔第二峰中法流〕 柱源神法護摩次第。柱源神法護摩供具。柱源神法法具。柴燈護摩次第(當山方)。柴燈護摩次第。庭壇大護摩供次第。柱源神法。自供養法大事。大峰界會萬行自在法。大峰道場莊嚴自在儀並序。峰中正灌頂外道場作法。峰中正灌頂附法印證狀。柱源正灌頂儀則。柱源極祕印信(切紙)。結緣血脈大事。峰中正灌頂許可印信。峰中正灌頂支度之事。正灌頂調方法。〔第三惠印法流〕 惠印三昧耶加行次第。惠印灌頂。惠印灌頂三尊法。惠印結緣灌頂。惠印傳法灌頂印信。惠印三昧耶傳燈印信。作壇破壞作法。惠印三昧耶師資相承血脈。惠印灌頂祇師懺悔手控。惠印灌頂伴子手控。極印灌頂三祇師補闕分軌。灌頂道場手鏡。惠印灌頂受者加持作法。惠印灌頂受者心得。惠印三灌頂之事。灌頂支度之事。惠印灌頂曼荼羅圖。修驗極印灌頂印明。最勝惠印三昧耶流深旨。修驗極印灌頂法祕口決。靈異相承惠印儀軌。修驗最勝惠印三昧耶法玄深口決抄。惠印灌頂調方法并圖。

〔第四深祕修法集〕 修驗前行作法。修驗懺悔文。床堅之事。最勝惠印柴燈護摩供次第。柴燈護摩供式私。柴燈護摩經導師心得作法。柴燈護摩支度抄書。大火生三昧耶法。囀嚙拳天水生消火之大事。鐵火三昧。伊垣八劍法。開峰深祕之大事。大聖不動明王深祕修法集。庚申待作法。法流傳授切紙



類集。修驗道諸神勸請通用。修驗宗神道神  
社印信。遷宮之略法。神祇講式。

〔第五諸尊供養法〕 峰授最勝惠印三昧耶  
法。理趣法。孔雀明王經讀誦作法。孔雀經  
結願作法。孔雀經法。烏樞沙摩明王祕法。  
荒神供次第。摩怛利神法。吒枳尼天祕法  
〔附、辰狐王菩薩法〕。十二天供次第。當年  
星供。神變大菩薩供養法。理源大師供養  
法。兩祖師供。修驗引導之軌。役行者講  
式。役行者和讃。理源大師講式。

〔第六教義〕 修驗心鑑書。修驗心鑑鈔。  
修驗道十八箇條警策。修練祕要義。修驗祕  
奧鈔。修驗三十三通記。

〔第七史傳〕 修驗三國峰系。當山修驗傳  
燈血脈。役行者本記。當山圓源起。醍醐根  
本僧正略傳。當山諸國三十六正大先達。當  
山十二箇院大先達。

◎昭和二年 ◎〔京大、一・二六・一・三三〕  
◎〔谷大、餘洋・九三三〕◎〔龍大、二〇三・四〕◎〔京  
專〕◎京都醍醐寺修驗聖典編纂會

**修驗深祕行法符呪集** ◎〔日〕Shin-  
gen-jin-pli-gyu-bu-tu-jin-shu. 當山修驗  
深祕行法符呪集 ◎十卷 ◎存、日本大藏  
經修驗道章疏第二 ◎當山修驗深祕行法符  
呪集の下を見よ。

**修驗深祕行法符呪續集** ◎〔日〕  
Shin-gen-jin-pli-gyu-bu-tu-jin-zoku-shu.  
◎二卷 ◎存、日本大藏經修驗道章疏第二  
法則類 ◎中野達慧編

◎羽黑派修驗の中、天台行者の依用する切  
紙大事四十七通を集めたもので、同じく中  
野達慧編の當山修驗深祕行法符呪集十卷の

續篇をなすものである。上巻には阿闍梨行  
位印・許可八字文殊印・一字金輪成就略法・  
修法時誦餘言・兵法九字・普賢延命根本印  
咒・除穢死難祕印・藥師大咒療病・摩利支天  
日所作・天蓋印明・火焰制止印明・智證・大師  
示火印明・不動尊祕印・愛染明王祕印・毘沙  
門天根本印・刀八毘沙門根本印・千手觀音根  
本印・十一面根本陀羅尼・吒枳尼天一寶來所  
作・辨財天三印・大明・大黑天祕印・法華大事・  
仁王經祕事・火伏大事・悉地成就大事・大聖  
乙護法祕法・行住坐臥四威儀法・不動尊根本  
印・二印・三印・不動尊祕印・不動斷末魔法、下  
卷には明惠上人七重印・摩里支鞭法大事・不  
動立印加持・荒神教化・鬼靈教化・生靈教化・  
死靈教化・疫神教化・五臟加持・准提法・ロウ  
シャウ虫取法・吒枳尼天・三鏡方並三玉女・  
三十六童子並八童子・八大童子各別眞言印・  
合密法曼流手圖・宇津室神法切紙を収めて  
ゐる。

**修驗前行作法** ◎〔日〕Shin-gen-  
jū-yō-gō-shū. ◎存、修驗聖典第四

◎修驗行者前行の作法次第。念誦すべき經  
典及び諸眞言とその反數とを出してゐる。  
三條錫杖一通・觀音經一卷・心經七卷・金胎  
大日・釋迦・日天・月天・愛染・不動明王・寶  
號・一字金輪咒等各百反念誦すべきやう記  
されゐる。 (服部如實)

**修驗葬儀** ◎〔日〕Shin-gen-sō-shi. ◎  
一冊 ◎存 ◎寫本(京大、日大末・七三九)

**修驗速證集** ◎〔日〕Shin-gen-soku-  
shū. ◎二冊 ◎存 ◎刊本(哲、け  
・四・右・一八)

**修驗大綱** ◎〔日〕Shin-gen-tai-  
kō. ◎一巻 ◎存 ◎山田廣圓、高井善證共編

◎昭和八年 ◎神祇社  
**修驗摘要記** ◎〔日〕Shin-gen-  
yōji. ◎一巻 ◎存 ◎細川孝源著 ◎  
大正五、同一一再刊 ◎〔龍大、二六六・九  
四〕◎〔京大、日大末・七四四〕

**修驗道** ◎〔日〕Shin-gen-dō. ◎一巻  
◎存 ◎三井豐興著 ◎大正七刊 ◎〔正  
大、一四八三・二〕◎〔谷大、餘大・三五〇〕◎〔京  
專〕◎東京森江書店

**修驗道** ◎〔日〕Shin-gen-dō. ◎存、  
日本宗教大講座第三 ◎宇野圓空著 ◎昭  
和二年 ◎〔龍大、二六六・九・五〕◎東京東  
方書院

**修驗道意略問答** ◎〔日〕Shin-gen-  
dō-i-yaku-wan-nda. 本山修驗道意略問答  
◎一巻 ◎存、日本大藏經修驗道章疏第三  
◎教義類 ◎立賢記 ◎文久四(A. D. 1864)  
◎簡單な十番の問答を設けて修驗道の意趣  
を叙述した本山修驗書。即ち驗門の宗旨・  
宗教・學風・顯密・法義・修驗神道・依經・蓮華  
三昧經文・同經作者等についで記し、終りに  
本山修驗十卷書の名目及び山伏字義の事を  
出してゐる。 (服部如實)

**修驗道引導之規** ◎〔日〕Shin-gen-  
dō-ido-no-ki. ◎一巻 ◎存、日本大藏  
經修驗道章疏第一法則類 ◎元泉(延喜一  
四一長徳元 A. D. 914—935)撰

◎修驗道慧印法流に於ける亡者引導の次  
第。修驗慧印三昧耶引導法より簡潔であ  
る。終りに引導祕法、引導之大事・臨終大事・

碑傳別傳、杖の諸項を附録してゐる。  
(服部如實)

**修驗道記** ◎〔日〕Shin-gen-dō-ki. ◎  
一巻 ◎存 ◎刊本(龍大、二六六・九・六)

**修驗道義記** ◎〔日〕Shin-gen-dō-  
gi. ◎一巻 ◎存 ◎〔立大、D・111〕

**修驗道切紙** ◎〔日〕Shin-gen-dō-  
kiri-kami. 修驗修要祕決集、修要祕決集 ◎  
三巻 ◎存、日本大藏經修驗道章疏第二教  
義類 ◎即傳撰 ◎大永頃(A. D. 1521—  
1528) ◎修驗修要祕決集の下を見よ。

◎寛文一〇刊 ◎〔哲、け・四・左・三七〕◎〔正  
大、一四八・三二〕

**修驗道最極三通** ◎〔日〕Shin-gen-  
dō-sōgoku-san-tsu. ◎一冊 ◎存 ◎  
彦山即傳(大永頃 A. D. 1521—1528—)  
◎寫本(京大、日大末・七一五)

**修驗道修要祕決集** ◎〔日〕Shin-  
gen-dō-shū-yō-hi-ketsu-shū. 修驗修要祕決  
集、修驗道切紙 ◎三巻 ◎存、日本大藏  
經修驗道章疏第二教義類 ◎即傳撰 ◎大  
永頃(A. D. 1521—1528) ◎修驗修要祕決  
集の下を見よ。

**修驗道十八箇條警策** ◎〔日〕Shin-  
gen-dō-jūhachijū-kō-jō. ◎一巻  
◎存、日本大藏經修驗道章疏第一教義類、  
修驗聖典第六教義之内 ◎滿濟(天授四—  
永享七 A. D. 1378—1435)撰

◎先達の庭訓を拵つて初心未行の行者の守  
るべき要目十八箇條を擧げて警策せられた  
ものである。行學の二字に於て退轉なかる  
べきこと、入峯昇進、興法利生の外の諸の

希望を絶つべきこと、朝暮勤行懈怠すべからざること、四威儀怠るべからざること、入降修行の道具及び案中の祕書を大切にすべきこと、三十三通祕訣等を守るべきこと等、客道の用心・出世の指南を指摘強調されてゐる。

**修驗道初學辨談**

①(日)Shūgen-  
toshō-kaiki-ben-tan. ②二卷 ③存、日  
本大藏經修驗道章疏第三教義類之内 ④卓  
盈撰 ⑤元文三(A. D. 1737)

⑥元文二年冬、下總國葛飾郡恒端卓盈が駿  
門初學者の爲めに草記したもので、傳の正  
誤を辨じ、考證あり、論議があつて是れ亦  
修驗研究上には注意すべき一書であらう。

上巻には修驗三因融通辨・俊優婆塞副法・修  
驗道名義稱道辨・帶劍刀辨・坊令稱寺辨・修  
驗道大要・祈禱主意並下案用否辨・三國祈禱  
辨・捧幣帛傘執神一辨・奉幣辨・注連・阿尼  
捨・神符・九字祝辨・唵念如律令・火生三昧・  
不動明王・愛染明王・不動本誓二頌之辨・金  
剛藏王・飯繩之辨・金毗羅神・檀神・三寶荒神  
同社家説・宇賀神・草神・夷大黒の二十七項  
あり、下巻には五辛食肉・高祖異類化度眞  
偽・傳記云三山天台山伏・謬說辨・中世大峯  
衰頹辨・當山方眞言云三山伏・地帶巫女・  
可否・年忌法・羅什三藏傳・神分用・心經一辨・  
三長月・厭魅・僧位階・經論新舊譯辨・佛教  
用・鬼音・辨・俱利迦羅本據・登三山嶺・稱云二  
禪定一辨の十六項をあげて、一々正誤を辨  
じ考證論議した點、看過し難い良書であ  
る。

**修驗道諸神勸請通用**

(服部如實)  
①(日)Shūgen-  
jūshin-kōkan-tōyō

ten-do-shūgen-jū-kwan-tōyō. 諸神勸  
請 ②一卷 ③存、日本大藏經修驗道章疏  
第一、修驗聖典第四深祕修法集 ④行存集  
⑤修驗道に於ける諸神勸請の次第。

**修驗道傳記**

①(日)Shūgen-do-  
den-ki. ②二册 ③存 ④元祿四刊 ⑤(京  
大、一・二二八・一)

**修驗道入峯心得**

①(日)Shūgen-  
do-nyū-bu-kokoro-e. ②一册 ③存 ④  
寫本(哲・け・三・左・二九)

**修驗道峯中火堂書**

①(日)Shū-  
gen-do-han-chū-hwa-dō-shū. 鳥海山柴燈  
護摩記 ②二卷 ③存、日本大藏經修驗道  
章疏第一法則類之内 ④秋月纂

⑤鳥海山光明寺秋月が修驗道の柴燈護摩に  
用ふる事物に教理的解釋を施し、口傳談義  
等を集めたものが本書で、上巻尾題は火堂  
書と云ひ、下巻内題は大峯火堂下口傳談義  
となつてゐる。上巻には小木・小木先達の禮  
儀次第・番渡次第・宿立時床莊・圓伽水・護摩  
作法・隨比・金剛供養・案中帶不解事・番渡之  
次第等を解説し、下巻には發・法螺貝吹事・  
圓伽土器・鋸・散杖・乳木・如意・香呂・須彌・  
番帳・逆峯・案中祕密深祕言・禪衣・庄松・大  
峰・山伏之裝束・柿ノ摺衣・峰中祕事・案中説  
法・順峯・出峯札について口傳を記してゐ  
る。文政三年及び慶應元年書寫の奥書があ  
る。

**修驗道法具要解**

(服部如實)  
①(日)Shūgen-  
hō-gū-yō-kai. ②一卷 ③存 ④海浦  
義親著 ⑤明治三四刊 ⑥(龍大、二六六

九・七)(京大、日大末・七四一)(高次、一・二  
六)

**修驗道無常用集**

①(日)Shūgen-  
do-mōjō-yūshū. ②二卷 ③存、日本大  
藏經修驗道章疏第二法則類 ④鏡清輯 ⑤  
延享二(A. D. 1745)

⑥修驗所傳にかゝる無常の法則を集めたも  
ので、上巻に房中軌則・葬送行列・火葬作  
法・土葬作法・靈前通用軌則・靈供次第・茶湯  
次第・葬送所用道具・葬場圖・位牌規範・墓所  
碑傳・五輪種子・通用諸忌日塔婆・塔婆通用  
意趣・塔婆奠書・六角塔婆用否・無常用撰日  
方取私記、下巻に阿字門回向之部・無常用  
啓白並神分・施餓鬼作法・略施餓鬼等葬送に  
關する必要事項を集輯してゐる。

**修驗道目錄**

①(日)Shūgen-do-  
moku-roku. ②一帖 ③存 ④足利中期寫  
⑤(高次、寄・一・七二)

**修驗道問答**

①(日)Shūgen-do-  
mon-dō. ②一册 ③存 ④刊本(哲・け・  
五中・一〇)

**修驗道山彦**

①(日)Shūgen-do-  
yamiko. ②一册 ③存 ④大覺院秀長書  
⑤寫本(京大、日大末・七二五)

**修驗道理護摩次第**

①(日)Shū-  
gen-do-ri-goma-shū-ji. ②一册 ③存  
④德川時代寫 ⑤(寶善提院)

**修驗得度作法**

①(日)Shūgen-to-  
hudo-sa-hō. 修驗最勝慧印三昧耶得度作  
法 ②一卷 ③存、日本大藏經修驗道章疏  
第一法則類 ④成覺撰 ⑤修驗最勝慧印三

昧耶得度作法の下を見よ。

**修驗頓覺速證集**

①(日)Shūgen-  
ton-kan-goku-shū-shū. ②二卷 ③存、日  
本大藏經修驗道章疏第二教義類 ④即傳撰  
⑤修驗十卷書の一。上巻に二十六項、下巻  
に十六項、合して四十二項を擧げて驗門の  
教義・觀想・讚嘆・因縁等を論じ修驗の眞精  
神を高調したもので、叙述極めて簡潔、而  
も要を得て居り修驗十卷書の一として忘れ  
難い書である。乃ち上巻の二十六項は無作  
三學・本有戒體・受善提・三案淨戒・五人先  
達・胎内五位・十二因縁・九識配立・煩惱即善  
薩・教起由來・本有修生・生死即涅槃・四乘觀  
門・五種邪命・五緣具足・三身・五眼・三部・無  
相三觀・五智・有相無相・因業・開示悟入・小  
木・案中碑傳・衣體を云ひ、下巻の十六項は  
山林抖擻・十六道具・佛法修行・遮情表徳・以  
息風爲念・自然智無師摩・草木非情成佛・南  
天鏡塔・佛法流布・弘法大師略頌・八祖忌日  
略頌・五迷・五問四答・修驗雜要・胎藏界四重  
圓壇・修驗附法印證狀で、修驗研究者の必  
讀書たるを失はぬ名著である。

**修驗之道具之事**

①(日)Shūgen-  
no-do-gu-no-koto. ②一册 ③存 ④寫  
本(京大、日大末・七三三)

**修驗柱源神法**

①(日)Shūgen-tsu-  
shū-moto-jin-pō. ②一卷 ③存、日本大  
藏經修驗道章疏第二法則類 ④本山相傳  
⑤修驗道に慧印法流と案中法流との二大法  
流があつて、後者を指して柱源神法と總稱

してゐる。本書は此の柱源神法の理護摩次第である。六大観・八句頌を中心とし、極めて簡潔である。即ち登壇盤箇打木・酒水・床堅・六大観・圓伽・手一合・床住・八句頌・啓白・祈禱・舍利根源塔・混沌供・不動一字明・柴燈之時文・小木文・舍利禮・不動即我法・外獅子印・行者祕文等より組織されてゐる。(服部如實)

修驗祕奥鈔

①(日)Shu-ten-ho-sho. 峰中灌頂本軌 ②二卷 ③存、日本大藏經修驗道章疏第一教義類、修驗聖典第六教義 ④旭蓮(一建長六A.D.1215)記

⑤修驗道章中法流の祕傳三十三通を編纂したもので、峰中灌頂本記といふのが原名である。内山旭蓮が建長六年記録したものを、明治二十三年海浦義觀師訂正して祕奥鈔と名づけて世に出したものである。上巻には峰中床堅大事・同床定大事・長日自供養法大事・舍利塔供養大事・柱源供養法名義事・峰中灌頂無相三密事・山伏道一心三觀事・峰中十界形儀事・佛法解行事・神仙灌頂極祕口説・依正二報五大事・四器前具作法事・檀板事・柱源事・柱源誦文事・正灌頂乳木事の十六通を収め、下巻には十界形儀事・五輪推大事・如意寶珠事・此息風爲念事・鼻端唵字觀事・無作三摩事・本有戒誓事・柱源大事異説・床堅三重三重印信口決・柱源二重極祕口説・山林科擲事・修驗四重阿字大事・修驗中道大事・修驗之有六大事・修驗數息觀事・六大理觀柴燈事・五箇證文事の十七通を集めてゐる。修驗道に於ける凡即是佛の祕觀・驗門の極果を盡して餘なく、類書

中の脈巻と云つてよからう。(服部如實)

修驗祕記略解

①(日)Shu-ten-ho-shi. 修驗道章第一教義類 ②一巻 ③存、日本大藏經修驗道章第一教義類 ④房演(寛文七)元文元A.D.1667-1736撰 ⑤元祿一五(A.1702)

⑥醍醐寺三寶院門跡第三十五世房演大僧正が通俗的に山伏元起・山伏字義・三身山伏・四種名義・修驗道大意學問・依經用否・邪正分別・十二六道具・官位・世務の十一項について記述したものである。(服部如實)

修驗祕要

①(日)Shu-ten-ho-shi. 三卷 ③存 ④大正五寫 ⑤(谷大、餘大、三〇八六)

修驗祕要記

①(日)Shu-ten-ho-shi. 二一冊 ③存 ④寫本(京大、日大未、七二四)

修驗峯中祕傳

①(日)Shu-ten-ho-shi. 日本大藏經修驗道章疏第一 ④雲外撰 ⑤修驗行者の心得ふべき峰中の祕傳を集録したもので、撰者雲外は周防國鯖山新豊峰の驗者である。吉野河・柳ノ宿・吉野山・鳥居・宿房正道門・勝手ノ明神・愛染・大天上・小天上・穴之藏王・金懸・等覺門・山上宿房・後入堂・懺悔之所・五大尊之事・涌出獄・天門・蓋・天橋立・西之除・笈渡・鍵向門・五穀兩壇・兩部之祕祕・行者即身即佛ヲ見奉ル事・地藏・玉木・峯中記・乳木柴燈・大峯柴之護摩次第・百八ノシナキ・護摩壇ニ積ム次第・金剛・行事・出立大先達・小柴儀・番渡・小佛・御散杖山伏の護摩事護摩・六大四曼・阿彌陀

尊等について祕傳を記してゐる。終に版行年月と弘化三年書寫の奥書がある。(服部如實)

修驗名稱原儀

①(日)Shu-ten-ho-shi. 修驗道章疏第一教義類 ②一巻 ③存、日本大藏經修驗道章疏第一教義類 ④淨諦述 ⑤長徳二(A.D.996)

⑥雲居寺淨諦が長徳二年七月、一條帝の勅命を奉じて修驗道の名稱意義・流轉異派等を記述し天覽に備へたものである。淨藏貴所及び其の弟子の傳を述べつゝ、記してあり、終に承明三年より明治四十五年に至る代々書寫の奥書を出してゐる。(服部如實)

修驗問答儀

①(日)Shu-ten-ho-shi. 二一冊 ③存 ④天文一九寫 ⑤(京大、日大未・七三六)

修驗用心記

①(日)Shu-ten-ho-shi. 二一冊 ③存 ④寫本(京大、日大未、七二四)

修驗要法集

①(日)Shu-ten-ho-shi. 二二巻 ③存 ④正徳三刊 ⑤(京大、日大未・七三一)

修業要訣

①(日)Shu-ten-ho-shi. 自行鈔 ②一巻 ③存、大正八三・三七一 No. 3021、大日本佛敎全書第六三、西山全書第二 ④證空(治承元—寶治元A.D.1177-1247)述

⑤具疏五巻中の難關なる義を定散、念佛、來迎、慈悲、智慧に當て拵め簡単に解決したものに於て秘決集二十巻は四帖疏に對する事相の注釋、本書は具疏に對する事相の注釋なり。其順位を法事讚、觀念法門、往生

禮讚、般舟讚としたるは、五種正行の讀觀禮讚の次第に依る。第一の法事讚は彌陀經を講讚する一日一夜の行法、内題の轉經は、彌陀經を轉讚す。行道は、出離の道を行ず、願は、三業無間の行體、往生は、西方淨土、法事は、佛事、法事、僧事の三ある中今は講經なれば法事と云ふ。讚は伽陀を以て佛法僧を讚歎す。上下二巻は慈悲智慧とす。第二觀念法門は觀經と般舟經に依て題目を觀佛と念佛の二に分ち觀察正行とす。第三往生禮讚、往生は安心、禮は起行讚は作業にて心行業の三を題とする。第四般舟讚は、觀經の觀門を所依として諸經の意を収めて見佛三昧の常行道を修し、往生極樂の爲に五百六十四行の偈を以て佛を讚歎稱揚す。三上具疏の法門は三心發得の行者正定業の上の助業の讚歎なれば、四帖疏は安心、具疏は起行とし、今事相の意を以て難問を斷疑するを要決の旨趣とす。著述の年代を失するも秘決集已前の前述と推定す。

修西輯要

①(日)Shu-ten-ho-shi. 續二・一五・三 ④清代信庵撰 ⑤本書は清末の高僧武林比丘信庵がその淨課の餘暇に古徳の淨土法語を輯めたるもの。寔に好箇の警策集である。その輯むる所は左の如くである。(一)十念眞因(三)淨業常課(三)記數執持一節錄滿益大師語錄(四)依願起修一節引微悟禪師語錄(五)專修

修業要訣

①(日)Shu-ten-ho-shi. 貞享三寫 ⑤(谷大、餘大・二五五五) (石黑觀道)

修西輯要

①(日)Shu-ten-ho-shi. 續二・一五・三 ④清代信庵撰 ⑤本書は清末の高僧武林比丘信庵がその淨課の餘暇に古徳の淨土法語を輯めたるもの。寔に好箇の警策集である。その輯むる所は左の如くである。(一)十念眞因(三)淨業常課(三)記數執持一節錄滿益大師語錄(四)依願起修一節引微悟禪師語錄(五)專修

利益(節録徹悟師語録(六)信願深切一參用  
 萬益大師徹悟師語録(七)斷愛實行一錄慈  
 山大師語録(八)戒行清淨一參用妙叶禪師語  
 錄(九)剋期取證(一〇)睡醒警覺(一一)回向  
 往生一節録二林居士(一二)臨終大事(一三)  
 念佛常課儀式(一四)睡時入觀儀式(一五)禮  
 拜四十八願儀式。卷頭には光緒十年(A.D.  
 1884)本書の叙があり、卷尾には「修西子  
 集」を刻し、普願四恩三有法界衆生、同  
 修淨業、正念分明、決定往生、常依安  
 養。光緒十年仲冬。江北刻經處識。」とあ  
 る。

③光緒一〇刊 ④(京大・藏・二四・四七)  
 (前田聰瑞)

**修西定課**

①(日)Shu-sai-jū-kwa(支)  
 Istin-hsi-ting-ko. ②一卷 ③存 ④鄭澄  
 德、鄭澄源共註 ⑤光緒二四刊 ⑥(龍大、  
 研眞)(谷大、宗大、一〇九五)(京大、藏・二四  
 ・四六)

**修西日課**

①(日)Shu-sai-nik-kwa.  
 (支)Istin-hsi-jih-ko. ②一卷 ③存 ④  
 鄭學川撰 ⑤(龍大、研眞)

**修西聞見録**

①(日)Shu-sai-mon-  
 ken-roku. (支)Istin-hsi-wen-chen-lu.  
 ②七卷 ③存、己續二乙・八・三 ④咫觀撰  
 ⑤清同治三—光緒三(A.D. 1864—1877)  
 ⑥本書は著者が近代の西方淨土願求者の實  
 踐實驗等を集め淨土信仰を勧むるの一助た  
 らしめんとせしものである。

類を分つこと七、即ち卷一比丘、卷二比  
 丘尼、卷三居士、卷四善女人、卷五童女、  
 卷六雜流、卷七異類にして、卷一の初に自序

を出す。自序に讀經の暇、友人の寄せ来る  
 各傳を刪し、長篇は史例に仿ひて短縮した  
 が、文辭を改變せざることにつとめたこと云  
 つてある。即ち多くの他の著述より抄出類  
 纂せしものにして、各項下にその著者の名  
 を記してある。近世支那の淨土信仰の情況  
 を研究するに上に、殊に著者の多くが南支  
 那の人であるから、南支那方面の淨土信仰  
 普及状態研究の上によき資料である。編者  
 は同治三年より著手し、光緒三年まで十數  
 年にわたりて類集したものである。

③光緒三刊 ④(龍大、研眞)(京大、藏・一二  
 ・三)

**修三昧常行法**

①(日)Shu-san-mai-  
 jū-jyō-hō. (支)Istin-san-mei-chang-  
 hsiang-fa. ②一卷 ③隋智顛(中大通三—  
 開皇一七 A.D. 531—597)述 ④(参考)諸  
 宗章疏録第一

**修刪阿彌陀經**

①(日)Shu-san-a-  
 mi-da-kyō. ②一卷 ③存、眞宗全書第  
 六、甘雨亭叢書第三二 ④太宰純(延寶六  
 —延享四 A.D. 1678—1747)編

⑤羅什譯阿彌陀經一千八百五十七字を一千  
 四百七十三字に修刪せしもの。經はもとこ  
 れ佛陀一場の説話が後人の手に依つて筆録  
 せられたるものにして俗間一部の冗長なる  
 小説の如きものに過ぎず、譯者また古文に  
 昏く徒らに鄙俗の語を以て譯し文と稱する  
 に足らずとの主張のもとに全卷文辭の修正  
 を企てたるものである。まづ、如是我聞・一  
 時・爾時・復次・所以者何・無有是處等々の語  
 を全て俗語として取捨して、智慧・愚癡・貪欲・

瞋恚・恭敬・供養・莊嚴・成就・功德・壽命・解  
 脫等の所謂複語をこれも俗體に過ぎずとし  
 て古書體に從つてすべて單辭に改修  
 し、誓願を志に、煩惱を累に、方便を術に  
 改め、更に小比丘・小阿羅漢等無しの理由  
 によつて大比丘・大阿羅漢等の語の大字  
 を取捨して、題字の佛説の二字をも古書の例  
 にあらずとして刪去したるものである。著  
 者は通稱彌左衛門と稱し、信州飯田の人、  
 徂徠に從つて古學を唱ふ。この阿彌陀經修  
 刪の企はち眞宗の履善によつて論難せら  
 る。

①寫本(正大、一一五〇・一三)(京大、一・二  
 三・三)

**修刪阿彌陀經論**

①(日)Shu san-  
 a-mi-da-kyō-ron. ②一卷 ③存、眞宗全  
 書第六 ④履善(寶曆四—文政二 A.D. 1754  
 —1819)述

⑤信州の儒者太宰純なるもの修刪阿彌陀經  
 を著して羅什譯本の文體を鄙俗なりとして  
 縦に改刪したるに對し、一句一句義理を明  
 かにしてその愚妄を指摘したものである。

**修刪釋典序評**

①(日)Shu-san-sha-  
 ku ten-jō-jyō. ②一卷 ③道粹(正徳三—  
 明和元 A.D. 1713—1764)説(本愚録 ④寶  
 曆三(A.D. 1753)十月 ⑤(参考)淨土眞  
 宗教典志第二

**修史局(古文書舊記等貸渡一  
 件書類)**

①(日)Shū-shi-kyōka-e-ka-  
 mon-jō-ka-ki-tō-kashi-watashi-ik-ken-  
 sho-rui. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大別

**修習金剛三昧行法**

①(日)Shū-jyō-  
 kongō-san-mai-jyō-hō. ②一卷 ③存  
 金剛三昧經通宗記之内 ④青寫眞(京大、藏  
 一四・一)

**修習止觀坐禪法要**

①(日)Shū-jyō-  
 shi-kan-za-zen-hō-yō. (支)Istin-jyō-  
 chih-kan-za-zen-hō-yō. 坐禪法要、  
 小止觀、童蒙止觀 ②一卷或二卷 ③存、大  
 正四六・四六二No. 1915、縮陽九、卅三・  
 八、明北1533途、明南1535踐、No. 1540

④隋智顛(中大通三—開皇一七 A.D. 531—  
 597)述 ⑤小止觀の下を見よ。⑥光緒二九

刊(京大、藏・八・三)刊支本(正大、一三三・  
 八四—八五)刊本(谷大、餘大・八四九)(正  
 大、一三三・三一—三二)(京大、餘大・二六  
 五四・八)(立大、A・一一・二〇〇)(二〇二—  
 〇三)(三四三)

⑦(参考)諸宗章疏録第一

**修習止觀坐禪法要鈔**

①(日)Shū-  
 jyō-kan-za-zen-hō-yō-shō. 小止觀抄  
 ②三卷 ③存 ④明曆三刊(龍大、二六五  
 四・一〇)(正大、一三三・六二)明曆九刊(谷  
 大、餘大・二七四)

**修習止觀坐禪法要帳中記**

①(日)Shū-jyō-shi-kan-za-zen-hō-yō-  
 chō-chū-ki. ②四卷 ③存 ④宜順記 ⑤  
 寫本(谷大、餘大・三三二四)

**修習禪觀經**

①(日)Shū-jyō-zen-kan-  
 an-jyō. (支)Istin-hsi-chen-kan-ching.  
 ②一卷 ③(參考)仁壽録第三、靜泰録第  
 三

**修習般若軌**

①(日)Shū-jyō-han-gyā

波羅蜜菩薩觀行念誦儀軌 ②一卷 ③存、大正二〇・六〇一 No. 1151、縮刷九 ④唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)譯

修習般若波羅蜜菩薩觀行念誦儀軌 ①(日)Shu-jia-han nya-ha-ra-mitsu-bo-satsu-kwan-gyo-nen-jū-ki. (支)I-shi-lsi-pau-jo-po-to-mi-pu-sa-k=nan-ling-nien-sung-t-kuei. 修習般若軌

①本法は題號に於て既に示されてある如く、般若波羅蜜菩薩の觀行念誦を修習する次第法則を示したもので、(1)歸敬諸尊、(2)遍禮諸佛、(3)三昧耶の印言、(4)金剛縛の印言、(5)開心發智、(6)金剛拳、(7)金剛藥叉、(8)金剛眼、(9)入三摩地、(10)金剛護、(11)五佛寶冠、(12)金剛登灌頂、(13)金剛歡喜、(14)般若波羅蜜通入、(15)般若波羅蜜觀念心、(16)四攝、(17)百字明、(18)內四供養、(19)外四供養、(20)本尊三昧耶、(21)念珠、(22)入般若波羅蜜三摩地、(23)金剛解脫、(24)般若波羅蜜多根本真言、(25)同上真言の功德、以上の内容を有してあるが、本法は行者自ら般若佛母菩薩と瑜伽し相應する觀行を示したもので、此の妙行を修する者は、百千萬億劫の間に、作り爲せし有ゆる重罪業障を、悉く消除し、現生に於て初地の位に入り、後の十六大生に於て、普賢菩薩と成ることを得と説てある。(神林隆淨)

修習瑜伽集要施食壇儀 ①(日)Shu-jia-yu-fa-shu-yu-se-jiki-dan-ji. (支)I-shi-hsi-yu-hieh-chi-yau-shih-shih-tan-yu. 瑜伽施食集要 ②三卷 ③存、正續二、九・五 ④清法藏撰

①本書は瑜伽集要施食儀(大正二一・四七三)を、支那の民族信仰に合致する様に改めたもので肝要な點に於ては殆んど變りはないが、その表現方法に於て、著しく民族性が露はれて居る。本法が密教に屬して居る施餓鬼法であることは勿論であるが、而も眞言密教の方法ではなく、禪宗風の密教である所に、本書の特色が表はれてある。卷上に於て、(1)熏香、(2)洗淨、(3)淨法界、(4)點淨、(5)加持花米、(6)加持鈴杵、(7)十二因緣咒、(8)諸佛諸菩薩迎請、(9)自性偈、(10)淨地偈、(11)音樂咒、(12)緣起文、(13)曼荼羅に對しての諸作法、(14)音樂咒、(15)寶醋、(16)撒花米、(17)遺塵、(18)眞空印咒、(19)曼荼羅偈、(20)三歸依讚、次に卷下に於ては(21)發廣大心、(22)大輪明王呪、(23)奉請三寶、(24)印現壇義、(25)啓告、(26)五供養、(27)運心供養、(28)遺塵、(29)變空、(30)奉食、(31)振鈴、(32)入觀音禪定、(33)破地獄印、(34)奉請地藏王菩薩、(35)香花請、(36)祈請、(37)召請餓鬼、(38)召罪、(39)摧罪、(40)破定業、(41)懺悔滅罪、(42)開咽喉、(43)稱讚五如來等、(44)歸依三寶、(45)發菩提心、(46)三昧那戒、(47)無量威德自在光明如來印言、(48)乳海、(49)障施鬼真言、(50)普供養、(51)尊勝咒、

(52)法樂六趣偈、(53)發願回向偈、(54)圓滿奉送、(55)金剛薩埵百字咒、(56)薩荔多文、(57)回向偈。以上 本書は施餓鬼法としては、最も丁寧親切を極めたもので、眞言密教に於て行ふ所よりも遙に綿密なものである。而して此の書は其まゝ直に實際に修し得るやうに仕込まれて居り、各部分に註釋が加へられてあるから、斯法研究者に執り必讀の書である。印相の圖が出てあるが、此の圖には信賴し難いものがあるから、本書の原本である瑜伽集要施食儀に出てある圖に照して見る必要がある。(神林隆淨)

修習用心集便覽 ①(日)Shu-jia-yu-jin-shū-ōen-ran. 施餓鬼法修習用心集便覽 ②一冊 ③存 ④元文二寫 ⑤(金剛三昧院)

修正會法則 ①(日)Shu-shō-e-hō-sō. ②五卷 ③存 ④(京專)

修正作法 ①(日)Shu-shō-sa-hō. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶善提院)

修正式 ①(日)Shu-shō-shiki. ②一卷 ③高辨(承安三一貞永元 A. D. 1173—1232 一説貞永元、年六一寂)撰 ④(參考) 諸宗草疏錄第二

修正中 ①(日)Shu-shō-chū. ②一卷 ③存 ④延應二寫 ⑤(正大一〇八・一八)

修正之義 ①(日)Shu-shō-no-gi. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶善提院)

修證引導法語 ①(日)Shu-shō-in. ②一卷 ③(曹洞教會修證引導法語) ④(曹洞教會修證引導法語) ⑤(曹洞教會修證引導法語) ⑥(曹洞教會修證引導法語) ⑦(曹洞教會修證引導法語) ⑧(曹洞教會修證引導法語) ⑨(曹洞教會修證引導法語) ⑩(曹洞教會修證引導法語) ⑪(曹洞教會修證引導法語) ⑫(曹洞教會修證引導法語) ⑬(曹洞教會修證引導法語) ⑭(曹洞教會修證引導法語) ⑮(曹洞教會修證引導法語) ⑯(曹洞教會修證引導法語) ⑰(曹洞教會修證引導法語) ⑱(曹洞教會修證引導法語) ⑲(曹洞教會修證引導法語) ⑳(曹洞教會修證引導法語) ㉑(曹洞教會修證引導法語) ㉒(曹洞教會修證引導法語) ㉓(曹洞教會修證引導法語) ㉔(曹洞教會修證引導法語) ㉕(曹洞教會修證引導法語) ㉖(曹洞教會修證引導法語) ㉗(曹洞教會修證引導法語) ㉘(曹洞教會修證引導法語) ㉙(曹洞教會修證引導法語) ㉚(曹洞教會修證引導法語) ㉛(曹洞教會修證引導法語) ㉜(曹洞教會修證引導法語) ㉝(曹洞教會修證引導法語) ㉞(曹洞教會修證引導法語) ㉟(曹洞教會修證引導法語) ㊱(曹洞教會修證引導法語) ㊲(曹洞教會修證引導法語) ㊳(曹洞教會修證引導法語) ㊴(曹洞教會修證引導法語) ㊵(曹洞教會修證引導法語) ㊶(曹洞教會修證引導法語) ㊷(曹洞教會修證引導法語) ㊸(曹洞教會修證引導法語) ㊹(曹洞教會修證引導法語) ㊺(曹洞教會修證引導法語) ㊻(曹洞教會修證引導法語) ㊼(曹洞教會修證引導法語) ㊽(曹洞教會修證引導法語) ㊾(曹洞教會修證引導法語) ㊿(曹洞教會修證引導法語)

修證圓備錄 ①(日)Shu-shō-en-bi-roku. ②一冊 ③存 ④刊本(哲、小・三左・一二)

修證義 ①(日)Shu-shō-gi. 曹洞教會修證義 ②存、承陽大師理教全集第三 ③曹洞教會修證義は、明治三十三年(A. D. 1900)十二月一日宗規に據つて、曹洞一宗の僧侶並に檀信徒即ち曹洞教會會衆の宗意安心正依の標準として、永平寺六十三世眞見斷際禪師魯山琢宗(澁谷氏)並に總持寺獨住二世法雲普益禪師大岡栞仙(昨上氏)即ち當時の兩大本山貫首の撰述として宣布されたもので、高祖道元禪師の正法眼藏九十五卷中より一定の主旨を構成するための章句を採録し、三千七百〇四字、五章三十一節を成したものである。即ち曹洞扶宗會に於て布教統一の必要上より會衆の安心正依の標準として編纂し、明治二十一年刊行した洞上在家修證義を、曹洞一宗の在家化導の標準として採用せよとの建議に依つて、全篇の語句を正法眼藏に對照刪定したものである。明治二十三年十二月一日宗規に據る兩山貫首の告諭文に「曹洞宗ノ依止シテ以テ今古ニ貫通セルハ唯佛祖單傳ノ正法眼藏ノミ納等欽シテ高祖承陽大師正法眼藏ノ中ニ就テ宗教ノ大意安心正依ノ標準ヲ選出シテコレヲ曹洞教會修證義ト名ツケタリ夫レ生ヲ明ラメ死ヲ明ラメ即心是佛ヲ承當スルヲ宗教ノ大意トス本文首尾ニ於テ之ヲ標示ス中間ニ其準則ヲ開演セリ(中略)自今以後

④笠山默禪述 ⑤明治四三刊(駒大)

名所行發⑩(名庫書)否藏所現⑩ 月年の刊頁⑩ (書考參書釋註)書末⑩ 説解卷内⑩ 代年作者⑩ 著書⑩ 缺存⑩ 數卷⑩ (名書)名題⑩ 讀略字數

一般ニ此修證義ヲ用テ布教ノ標準トナシ自カラ信シ人ヲシテ信セシメテ吾宗教ヲ顯揚セヨトある如ク、一宗の安心は生を明らかにし、本書の中間の章句は是を布説するものとして、正法眼藏中より是の主旨に該當する語句を採録編纂したもので、正法眼藏中の語句の原意と本書に編纂された語句との間には、原意と異なるものが生じて居るのは、編纂の性質上止むを得ないことで、片言隻句を正法眼藏の露現と觀る可きであらう。

其の内容の構成は、第一章總序に於て生を明らかに死を明らかに佛家一大事因縁なる所以を説き、次に第二章懺悔滅罪、第三章受戒入位、第四章發願利生、第五章行持報恩の四章を正法眼藏即心是佛の卷その他に於て説示された如ク「即心是佛トハ發心修行菩提涅槃ノ諸佛ナリ未ダ發心修行菩提涅槃セザルハ即心是佛ニアラズ」云々とある發心、修行、菩提、涅槃を此れに配したもので、涅槃に該當する第五章行持報恩に於て、一宗安心の究極地たる即心是佛を説示して本書を結んで居る。當時に於ては、この第三章に説かれた受戒入位を重視した様であるが、即心是佛を承當する高祖の只管打坐の坐禪を、坐禪章として掲げなかつたのは、或は禪戒一如の見地に據つたのかとも思はれる。兎に角、一宗安心の標目を指示したものとて意義深いものである。

修證義に關する講義說教本に、修證義茶

蹄(瀧谷琢宗)。修證義典義(福山默堂)。修證義開解(大内青樾)。修證義講話(古知知常)。修證義說教例題(今川勇禪)。修證義說教大全(曹洞宗務局文書課編)。修證義說教軌範(新井石禪)。修證義說教講話(水野靈牛)。修證義講話(新井石禪)。修證義講話(孤峯智珠)。修證義說教(古村雄風)。冠註修證義(峰玄光)。修證義講話(大内青樾)。修證義大綱講話(岸澤惟安)。修證義講話(原田祖岳)。漢譯として漢譯修證義(陸鏡巖)。修證義茶蹄布鼓がある。(禪籍日録參照)

**修證義** ①(日)Shu-sho-tai. 漢譯修證義 ②一卷 ③存 ④陸鏡巖譯 ⑤大正五刊 ⑥(駒大) ⑦名古屋圓通寺僧堂

**修證義** ①(日)Shu-sho-tai. 冠註修證義 ②一卷 ③存 ④峰玄光註 ⑤大正一一同一二再刊 ⑥東京鴻盟社

**修證義講話** ①(日)Shu-sho-tai-ko. ②存、曹洞禪講義第六 ③孤峯智珠述

**修證義講話** ①(日)Shu-sho-tai-ko. ②大正六刊 ③東京光融館

**修證義講話** ①(日)Shu-sho-tai-ko. ②一卷 ③存 ④新井石禪(元治元一昭和二A.D.1864—1927)述 ⑤大正六刊 ⑥(駒大) ⑦東京一喝社

**修證義講話** ①(日)Shu-sho-tai-ko. ②一卷 ③存、布教文庫第三 ④大内青樾(弘化二—大正七A.D.1845—1918)述 大内俊編 ⑤大正一一刊

**東京鴻盟社**

**修證義講話** ①(日)Shu-sho-tai-ko. ②一卷 ③存

⑧古知知常述、寺島得一編 ⑨明治二四刊

**東京森江書店**

**修證義說教** ①(日)Shu-sho-tai-kyo. ②存、曹洞禪講義第六 ③吉村雄鳳述 ④大正六刊 ⑤東京光融館

**修證義說教軌範** ①(日)Shu-sho-tai-kyo-kan. ②一卷 ③存 ④新井石禪(元治元—昭和二A.D.1864—1927)述 ⑤明治四二刊 ⑥東京鴻盟社

**修證義說教講話** ①(日)Shu-sho-tai-kyo-ka. ②一卷 ③存 ④水野靈牛述 ⑤(參考) 禪籍日録

**修證義說教大全** ①(日)Shu-sho-tai-kyo-dai. ②一卷 ③存 ④曹洞宗務局文書課編 ⑤明治三五、昭和二刊 ⑥東京光融館

**修證義茶蹄** ①(日)Shu-sho-tai-cha. ②存、曹洞教會修證義茶蹄 ③存

**修證義茶蹄布鼓** ①(日)Shu-sho-tai-cha-bu. ②存、曹洞教會修證義茶蹄布鼓 ③存

**瀧谷琢宗述** ⑤明治三四刊 ⑥東京鴻盟社

**修證義典義** ①(日)Shu-sho-tai-ken. ②一卷 ③存

**福山默堂述** ⑦(參考) 禪籍日録

**修證義評釋** ①(日)Shu-sho-tai-hyo. ②一卷 ③存 ④(參考) 禪籍日録

**修證義開解** ①(日)Shu-sho-tai-kai. ②一卷 ③存

①大内青樾(弘化二—大正七A.D.1845—1918)述 ②明治四〇刊 ③東京鴻盟社

**修證心印** ①(日)Shu-sho-shin-in. ②一卷 ③存 ④寂靜撰 ⑤刊本(正大、一八四、四七)

**修心訣** ①(日)Shu-shin-kyaku. (支)Hsu-shin-kyueh. 高麗國普照禪師修心訣、普照禪師修心訣 ②存、大正四八・一〇〇五No.203、縮騰一〇、二編二・一八・五、明北1542號、清1655號、Nj.1618、禪門坡要卷下、國譯禪宗叢書第三 ③朝鮮知訥(善照)(正隆三—大安二A.D.1158—1210) ④高麗國普照禪師修心訣(下)を見よ。

**修設瑜伽集要施食壇儀** ①(日)Shu-setsu-yu-shu-shu-yo-se-jiki-dan-gi. (支)I-siu-shu-yu-chieh-chi-yao-shih-shih-tan-ti. 瑜伽施食儀軌 ②存、二編二・九・八、雲棲法苑第三〇 ③明棟宏(嘉靖一一—萬曆四〇A.D.1532—1612)說萬曆四三、年八一版)重訂

⑥本書は、古杭雲棲寺の蓮池大師佛慧株宏禪師が、舊板磨滅して辨じ難きを以て、心弦居士、鏤刻を發願し、師に其の參定を請ひたるにより、清雍正十三年に刻行せられたる所謂龍藏の集要に依つて考訂し、明萬曆三十四年五月望日(A.D.1606)自序して本書を成したものである。後、菩薩戒の弟子劉慧開が、清光緒二十五年十一月(A.D.1900)損貨して、金陵刻經處に上梓したもので、瑜伽施食法の儀軌を詳述して居る。

光緒二三刊 ④龍大(二〇四二・四)(京大、藏・一六シ・一〇一一)(大久保堅瑞)

①大内青樾(弘化二—大正七A.D.1845—1918)述 ②明治四〇刊 ③東京鴻盟社

**修證心印** ①(日)Shu-sho-shin-in. ②一卷 ③存 ④寂靜撰 ⑤刊本(正大、一八四、四七)

**修心訣** ①(日)Shu-shin-kyaku. (支)Hsu-shin-kyueh. 高麗國普照禪師修心訣、普照禪師修心訣 ②存、大正四八・一〇〇五No.203、縮騰一〇、二編二・一八・五、明北1542號、清1655號、Nj.1618、禪門坡要卷下、國譯禪宗叢書第三 ③朝鮮知訥(善照)(正隆三—大安二A.D.1158—1210) ④高麗國普照禪師修心訣(下)を見よ。

**修設瑜伽集要施食壇儀** ①(日)Shu-setsu-yu-shu-shu-yo-se-jiki-dan-gi. (支)I-siu-shu-yu-chieh-chi-yao-shih-shih-tan-ti. 瑜伽施食儀軌 ②存、二編二・九・八、雲棲法苑第三〇 ③明棟宏(嘉靖一一—萬曆四〇A.D.1532—1612)說萬曆四三、年八一版)重訂

⑥本書は、古杭雲棲寺の蓮池大師佛慧株宏禪師が、舊板磨滅して辨じ難きを以て、心弦居士、鏤刻を發願し、師に其の參定を請ひたるにより、清雍正十三年に刻行せられたる所謂龍藏の集要に依つて考訂し、明萬曆三十四年五月望日(A.D.1606)自序して本書を成したものである。後、菩薩戒の弟子劉慧開が、清光緒二十五年十一月(A.D.1900)損貨して、金陵刻經處に上梓したもので、瑜伽施食法の儀軌を詳述して居る。

光緒二三刊 ④龍大(二〇四二・四)(京大、藏・一六シ・一〇一一)(大久保堅瑞)

名所行發⑩(名取書)者經所現⑨ 月年の刊寫⑧(考考參書釋註)書末⑦ 説解容内⑥ 代年作者⑤ 著書④ 缺存③ 數卷②(名書)名題① 略略字數

修設瑜伽集要施食壇儀補註

①(日) Shu-sei-yu-ga-shu-yo-se-jiki-dan-gi-ho-cha. (支) Hsu-shé-yü-chi-chi-chi-yao-shih-shih-tan-i-pu-chu. ②存 雲棲法苑第二 ③明株宏(嘉靖一一一萬曆四〇A.D. 1532-1012) 說萬曆四三、年八一(寂)

④本書は、明萬曆三十四年五月望日、自序して重訂した修設瑜伽集要施食壇儀を補註したもので、劉慧開が、清光緒二十五年七月(A.D. 1900) 金刻經處に於て損費鏤刻したものである。即ち行人をして瑜伽施食法の儀軌を正修せしめんが爲めに、行法の次第、諸眞言、印相等に就て懇切に説明したもので、卷末には、竹窓隨筆中の物語を引用し、施食の易からざることを説いて居る。(大久保堅瑞)

修仙靈要錄

①(日) Shu-sei-ryō-yō-roku. ②一冊 ③存 ④刊本(哲、て・八・中・五)

修儀要旨

①(日) Hsu-ch'an-yao-chih. ②一卷 ③存、縮調一〇、己四三・七 ④知禮(建隆元一天聖六 A.D. 960-1028)撰 ⑤天禧五 A.D. 1021

⑥法智大師知禮は天禧五年六十二歳。この年眞宗は知禮の盛名を知り、賜命を宣し、中貴人(内侍、又は内殿頭)愈源清を院に遣し、法華三昧を三晝夜修し國の爲めに祈福せしめた。この時源清は知禮に對して機法の旨趣を知りたいと申し込んだ。この希望を受けて本書を撰述して彼に贈つた。これ

修

が本書撰述の由來。本書は獨り法華機法のみに限つた修儀の要旨ではなく、大乘經典に説かれてゐる修儀の要旨を述べんとしたものであるが其の述ぶる所は摩訶止觀及び法華三昧儀に依て機摩用心の要領を述べたもの。従つて機法を修する時に用ひる誦文等は記してゐない。本書は三章より成る。

第一は大乗經典に説く所の行法を身儀に約して判ずれば四種常坐・常行・半行坐坐・非行非坐)を出でないといひ、次に今修した所の法華三昧に就いて述べしと云つて、一には功德を示し、第二には正しく法華三昧を解説し、止觀並に法華三昧儀の文によつて懺悔の意義を詳述し、第三には懺悔行を修することは圓頓止觀を究竟せんと欲するがためであると結ぶ。附記に香華蓮想偈を掲げてある。本書には冠頭に科文を附してあるが、科文作者は不明。要するに本書は摩訶止觀と法華三昧儀とによつて法華三昧の要領を記述したもの。僅かに三紙の内止觀實修の大要が述べられてゐるので宋代には廣く一般に流行した。

⑦(参考) 四明尊者教行錄第一、第二、第七、諸宗章疏錄第二、佛祖統紀第八、第二五、慶安元刊 ⑧龍大、二六五・一・七二、研佛(正大、一三五・二一)(谷大、餘大・二〇六一)(高六、一・一五) (田島德音)

修儀要旨

①(日) Hsu-ch'an-yao-chih. 科本修儀要旨 ②一卷 ③存 ④宋知禮(建隆元一天聖六 A.D. 960-1028)撰 ⑤慶安元刊 ⑥谷大、餘大、二〇六一)(高六、一・一五)

修儀要旨略疏

①(日) Shu-sei-yo-shū. ②一卷 ③存 ④智海記 ⑤寫本

修善行經

①(日) Shu-zen-gyō-kyō. (支) Hsu-shan-hsing-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④(参考) 武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

修善要法集

①(日) Shu-zen-yō-hō-shū. ②三卷 ③存 ④圓忍編 ⑤寶延二刊 ⑥(谷大、餘大・二二八八)(京大、藏・二四三・三七)

修禪和尚義眞留芳集

①(日) Shū-jō-kōshō. ②一卷 ③存、日本大藏經天台宗顯教章疏第二 ④達慧編

⑤本書は顯戒論緣起、僧官補任、一心戒文、續日本後記等の内に記されてゐる修禪大師義眞に關する戒牒、公驗等を輯録したもの。目次を記せば、大唐台州國清寺戒牒(これは小乘具足戒戒牒である)。得戒清輪和尚戒牒。台州刺史陸淳が給した台州公驗。明州刺史鄭審則が給した明州公驗(公驗のこと)治部省公驗(これは日本、支那に於ける受法を證明したものである)。天長元年任一宗僧首・官符。以三叔山虛空尼本願堂爲御願寺・官符。請三國講讀師處分表。天台大師畫像贊。

⑥(立大、A 11・三二一 A.D. 767-823)記 ⑦(立大、A 11・三二一 A.D. 767-823)記

修禪寺決

①(日) Shū-zen-ji-ketsu. ②四卷 ③存、修禪寺相傳口決、修禪決 ④最澄(神護景雲元一弘仁一三 A.D. 767-823)記 ⑤(立大、A 11・三二一 A.D. 767-823)記

修禪寺相傳口決

①(日) Shū-zen-ji-ketsu. ②四卷 ③存、日本大藏經天台宗顯教章疏第一、傳教大師全集第三 ④最澄(神護景雲元一弘仁一三 A.D. 767-823)記 ⑤唐貞元二四(A.D. 808)相傳 ⑥修禪寺決の異稱なり、別項修禪寺相傳私注を見よ。(鹽入亮忠)

修禪寺相傳私注

①(日) Shū-zen-ji-ketsu-shichū. ②二卷 ③存、日本大藏經天台宗顯教章疏第一、傳教大師全集第三 ④最澄(神護景雲元一弘仁一三 A.D. 767-823)記 ⑤唐貞元二四(A.D. 808)相傳 ⑥修禪寺相傳私註二帖と修禪寺相傳日記二帖との四帖を修禪寺相傳口決修禪寺決又は修禪決と略稱す。卷末には大教緣起口傳と記し第四帖の卷尾には修禪寺選和尚傳法四箇決如此と記せり、蓋し傳教大師在唐中貞元二十四年三月より六月に至る間、天台山修禪寺に於いて道遂和尚より相傳したりといふ一心三觀、心境義、止觀大旨、法華深義の四個大事の口傳法門を詳細に記したるものにして、内一心三觀、心境義を記したるを修禪寺相傳私注と内題せり。第二帖心境義は慈覺大師記と傳ふる小部集釋所蒐の一念三千覆註一卷と全同なり。

本書の眞偽に就ては眞超は禁斷日蓮義に偽書となす。然るに忠尋の漢光類聚鈔、等海口傳、目在房等は眞撰と爲す。日蓮上人は十八圓滿鈔に修禪寺相傳日記の書目を擧げ傳教大師の眞撰と爲すが如し。今考ふる

に本書は勿論傳教大師の眞撰には非ず、唐の貞元二十四年は平城天皇大同三年に當る大師歸朝後の年代なり、且つ大師に本書に誌すが如き組織體系を有する本覺明的口傳法門の存したる事は考ふること能はず、恐らくは傳教滅後三百餘年忠志が漢光類聚を著したるより稍前に叡山惠心流の哲匠に依つて偽作せられたるものなるべし。

⑤明治四〇寫 ⑥(谷大、餘大・一八七四) (鹽入亮忠)

**修禪寺相傳日記** ①(日) Shu-zen ji-so-dan-nik-ki. ②二卷 ③存、日本大藏經天台宗顯教章疏第一、傳教大師全集第三 ④最澄(神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—822)記 ⑤唐貞元二四(A. D. 808)相傳

⑥傳教大師在唐中に道邃和尚より相傳を詳記せる修禪寺決の四個大事の内前二帖即ち一心三觀、心境義の内題を修禪寺相傳私注と云ひ、後二帖即ち止觀大旨、法華深義の内題を修禪寺相傳日記と云ふ。別項修禪寺相傳私注を往て見よ。(鹽入亮忠)

**修禪定法** ①(日) Shu-zen-ji-ho. (支) Hsin-ch'an-ting-fa. ②一卷 ③缺 ④陳眞諦(永元元—太建元 A. D. 499—569)譯 ⑦(參考) 開元錄第一五、貞元錄第二五

**修禪要決** ①(日) Shu-zen-yo-keitsu. (支) Hsin-ch'an-yao-chueh. ②一卷 ③存、己續二・一五・五 ④覺愛說、唐代明尚問 ⑤本書は北天竺の婆羅門禪師佛陀波利(唐玄、覺愛)が問に隨つて禪要を略説したる

ので、問録者は、唐の西京禪林寺明尚であり、唐の儀鳳二年(A. D. 677)に同寺の梵僧慧智が傳譯したものである。續藏所收本は、卷末に「承保三年六月二十二日於光明書寫畢」の識語、天明四年冬播磨の沙門智暉の刻修禪要訣序のあるもので、本書の傳承を窺ふことが出来る。智暉は字大幻、空庵と號し、播磨の春日寺、小山寺を創め、法樂寺に住し、天明四年(A. D. 1782)十二月十五日六十八歳で示寂した密教の僧で、序は朱盈居士の刻行するに序したものである。其の略説せられた内容は、修禪の諸障難のこと、禪と諸行との關係、結跏坐の坐法、經行、禪と戒、出定の用心、魔事、坐處のこと等、修禪の際に心得べき種々の要訣を示したものである。

①刊本(京專)(高大寄、一・二四)(谷大、餘大・一四八)寫本(京大、藏、一七・六) (大久保堅瑞)

**修禪六妙門** ①(日) Shu-zen-rokuan-yo-mon. (支) Hsin-ch'an-lu-miao-men. ②一卷 ③隋智顛(中大通三—開皇一七 A. D. 531—597)書 ⑦(參考) 東城傳燈目錄卷下、傳教大師將來台州錄、諸宗章疏錄第一

**修道講話** ①(日) Shu-do-ko-wa. ②一卷 ③存 ④多田鼎述 ⑤明治四二刊

**修道生活** ①(日) Shu-do-sei-kwa-tsu. ②一卷 ③存 ④竹田豐三郎著 ⑤昭和七刊 ⑥京都顯真學苑

**修道禪話** ①(日) Shu-do-zen-wa.

②一卷 ③存、禪學文庫第四 ④新井石禪(元治元—昭和二 A. D. 1864—1927)述 ⑤大正三刊 ⑥東京丙午出版社

**修道の知津** ①(日) Shu-do-no-chi-shi. ②一卷 ③存 ④板原國教著 ⑤昭和七刊 ⑥和歌山經典研究會

**修道用心偈六百首布鼓** ①(日) Shu-do-yo-jin-ge-rop-pyaku-shu-fu-ko. ②一卷 ③存 ④陸鏡巖著 ⑤大正一四刊 ⑥(駒大) ⑦名古屋圓通寺僧堂

**修法** ①(日) Shu-ho. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第三五阿婆縛抄之内 ④承澄(元久二—弘安五 A. D. 1295—1322)撰

**修法儀式見修抄** ①(日) Shu-ho-shiki-ken-shu-sho. ②一卷 ③存 ④慈胤 ⑤寫本(曼殊院)

**修法聲明** ①(日) Shu-ho-sho-myō. ②一帖 ③存 ⑤足利時代寫 ⑥(寶菩提院)

**修法叢談** ①(日) Shu-ho-so-dan. ②一卷 ③存 ④磯村靜著 ⑤明治四〇刊 ⑥(立大、B〇八・七四六)(帝國、三三四・三六)

**修法雜用心** ①(日) Shu-ho-zo-yō-jin. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第三五阿婆縛抄之内 ④承澄(元久二—弘安五 A. D. 1295—1322)撰

**修法打聞抄** ①(日) Shu-hi-da-mon-shō. ②一帖 ③存 ⑤南北朝時代寫 ⑥(寶菩提院)

**修法壇** ①(日) Shu-ho-dan. ②一葉 ③存 ⑤徳川時代寫 ⑥(寶菩提院)

**修法之記** ①(日) Shu-ho-no-ki. ②二册 ③存 ⑤延享三寫 ⑥(寶菩提院)

**修法用心條** ①(日) Shu-ho-yō-jin-jō. ②一卷 ③存 ④龜怨(寛永一七一—元祿八 A. D. 1640—1695)記 ⑤天利元寫 ⑥(妙法院)

**修法要集** ①(日) Shu-ho-yō-shū. ②二卷 ③存 ④行然作 ⑤建長八(A. D. 1256) ⑥(無動寺)

**修密問辨** ①(日) Shu-mitsu-mon-ben. ②一册 ③存 ④通玄(一享保一六 A. D. 1731)註 ⑤徳川時代寫 ⑥(金剛三昧院)

**修藥師儀軌布壇法** ①(日) Shu-yaku-shi-gi-ki-fu-tan-hō. (支) Hsin-yao-shih-t-kwei-pu-tan-fa. ②一卷 ③存、大正一九・六四 No. 928 ④阿旺扎什補譯 ⑤清道光四(A. D. 1824)

⑥初め西藏王頌藏剛布(喀贊合喃 ston-tsh-shan-sgam-po)は梵本藥師七佛本願功德經を藏譯した。達賴喇嘛普智持金剛(kun-ka-ut-dor-jie-can?)は供養儀軌(藥師七佛供養儀軌如意王經)を造つた。後此の儀軌の漢土未暗なるを見たる傳儀工布查布はその漢譯(正藏、一九・181)を出した。阿旺扎什は此の儀軌に布壇法なきを知りて、此れが補譯を完成し尙二大壇越の共濟によりて、壇儀、各方位佛相、三十五佛相、救度佛母二十一相の添繪、並びに梵天文字等を寫出した。此れが修藥師儀軌布壇法等である。布壇法とは即ち曼茶羅であるが、普通の曼茶羅とは異つて、謂ゆる羯磨曼茶羅に當

⑦(寶菩提院)

⑧(寶菩提院)



る。尙此の布壇法の外に修習法が明されてある。

1. (註) 工布扎布とは西藏流の名前で、Kung-pu-cha-pu である。此れは恐らく mkhan-po-chen-po (大規範師) 即ち傳儀と云ふ義を西藏流に呼んだものではなからうか。蒙古流に綴れば Gombocch=とて蒙古人なることは勿論、烏朱穆秦 (Ujan-chen) 旗の出生で、蒙古人中唯一の漢譯經家である。

2. 阿旺扎什 (A-Wang-tsa-shih) は清の道光年間北京淨住寺に住したるも何許の人なるや不詳と傳ふ。恐らくこの人は青海か蒙古の人にて A-wang-jashi と綴るべき名前の人であらう。

3. 梵天文字とは古き時代の梵語文字のことであらう。此處には初めに梵字 (梵天文字) を挙げ、次に西藏字にて音寫し、次に西藏譯し、更に藏音寫字に隨つて漢音寫し、それを漢譯してある。大正藏經中にはかくの如き體裁の印刷は殆んど此處のみであらう。一例を挙げれば次の如し。

- 梵字
- (āścara-byuhasya-sapta-bhāsa)
  - 藏音寫 (āścara-byuhasya-sapta-bhāsa)
  - 藏譯 (āścara-byuhasya-sapta-bhāsa)
  - (no-mi-shar-bkod-pahi-sin-khams-bdun-dan)
  - 漢音寫
  - 阿沙喇 拔哈魯 薩薩答阿

修

修瑜伽者用心 (神林隆淨)

修瑜伽者要法 (日) Shu-yu-ka-shu-yō-jin. ①一册 ②存 ③文化六寫

修瑜伽用心條々 (日) Shu-yu-ka-shu-yō-jin. ①一帖 ②存 ③瑜伽行者の行住坐臥に關する肝要なる作法を輯む。

修要秘決 (日) Shu-yō-hi-ketsu. ①(久安六一建仁二 A. D. 1150—1202) ②(考) 眞言宗全書刊行豫定目錄

修要秘決集 (日) Shu-yō-hi-ketsu-shū. 修驗道修要秘決集、修驗道切紙

修要秘訣傳講筆記 (日) Shu-yō-hi-ketsu-den-kō-hik-ki. ①六卷 ②存

修養講話 (日) Shū-yō-kōwa. ①(日) Shū-yō-kōwa. ②一卷 ③存 ④佛教學會編 ⑤刊本(龍大、二〇九九・一七四)(谷大)

修養座右之銘 (日) Shū-yō-zai-yū-no-me-i. ①一卷 ②存 ③宗演(一大

正八 A. D. 1919) ④(參考) 禪籍目錄

修養詩話 (日) Shū-yō-shi-wa. ①一卷 ②存 ③安藤洲一著 ④大正二刊

修養時感 (日) Shū-yō-jikan. ①一卷 ②存 ③清澤滿之(文久三—明治三六 A. D. 1863—1933) 著 ④明治三六刊

修養清談 (日) Shū-yō-sei-dan. ①一卷 ②存 ③井上盡興著 ④大正三刊

修養清話 (日) Shū-yō-sei-wa. ①一卷 ②存 ③加藤熊一郎著 ④明治三四刊

修養禪話 (日) Shū-yō-zen-wa. ①一卷 ②存 ③山田孝道(文久三—昭和三 A. D. 1863—1938) 著 ④明治四四刊

修養禪話 (日) Shū-yō-zen-wa. ①一卷 ②存 ③後藤北溟著 ④明治三七刊

修養と研究 (日) Shū-yō-to-kenkyū. ①一卷 ②存 ③前田慧雲(安政四—昭和五 A. D. 1867—1930) 著 ④明治三八刊

修養と信仰 (日) Shū-yō-to-shin. ①(龍大、一〇五三・八)(谷大、餘洋、一七九)

修養と日蓮主義 (日) Shū-yō-to-nichiren-shiugi. ①一卷 ②存 ③本多日生(一昭和六 A. D. 1931) 著 ④大正六刊

修養の極致 (日) Shū-yō-no-kyōchi. ①一卷 ②存 ③前田慧雲(安政四—昭和五 A. D. 1867—1930) 著 ④大正四刊

修養の極致處世の秘訣洗心錄 (日) Shū-yō-no-kyōchi-chū-shō-sei-no-hi-ketsu-sen-shin-roku. ①一卷 ②存

修養の菜 (日) Shū-yō-no-shōji. ①一卷 ②存 ③宗演(一大正八 A. D. 1919) 著 ④大正二刊

修養漫話 (日) Shū-yō-man-wa. ①一卷 ②存 ③前田慧雲(安政四—昭和五 A. D. 1867—1930) 著 ④明治四二刊

修養錄 (日) Shū-yō-roku. ①一卷 ②存 ③南條文雄(嘉永二—昭和二 A. D. 1849—1927) 著 ④明治三九刊

修練秘要義 (日) Shū-ten-hi-yō-i. ①七卷 ②存 ③日本大藏經修驗道章疏第一教義類、修驗聖典第六教義

修練秘要義 (日) Shū-ten-hi-yō-i. ①七卷 ②存 ③日本大藏經修驗道章疏第一教義類、修驗聖典第六教義

享保五 (A. D. 1730)

降中十種の形儀によつて十界一如の説を明にし、大日不動の正灌頂・當相即道の規則・即事而眞の教旨・如實知自心の内證・凡聖不二・即身成佛の秘趣を説き、修驗道の奥藏を究明した書。第一卷には富山階級昇進圖・掌中十種形儀階・十種形儀淺深・十種形儀・第一業量形儀・同穀斷形儀・同水斷形儀・同相模形儀、第二卷には第二懺悔形儀・懺悔文・六親・福田敬田悲田・當山初入新谷並度衆・新發意裝姿・坊號・第三延年形儀・院號・第四應身形儀・錦地・抖擻・五停心觀、第三卷には第五頭懺形儀・二種獨覺・緣覺乘菩薩乘所持錫杖・法花廿八品事・十二因緣・四生百却・權律師並三僧祇・三妄執之再釋、第四卷には第六乳木柴燈形儀・柴頭護摩・當山護摩五段・神供・護摩文具表示・彌勒菩薩・轉法輪形象・權大小僧都、第五卷には第七床定形儀並螺緒・金剛界三十七尊・一百廿八尊・十佛刹微塵數・文殊菩薩・第八自供養法形儀・觀音阿闍梨・一切供養・阿闍梨位・觀自在菩薩・雜問答、第六卷には第九本有明形儀之事並菴摩羅詰密、普賢大越家・五轉・種子並眞言・大越家職・降三世教令輪普賢菩薩・青黃鈴繫・北大乘・俗稱苦行・大降略緣起・安居精求・掛錫・寺・不動使者・五大虚空藏・爰餅・牛王・孔雀明王咒・降童・贖物・撫物・心印本尊・探菓歌・梵篋・八宗九宗等・青龍・三摩耶・齊料・精進・鐘座・大般若轉讀、第七卷に第十床堅形儀・日用床堅・出世法印職・摩茶金・八輻輪寶並威儀線・蘇總之袈裟白色・兩部大日・不二事並毗盧遮那を説述してゐる。記

述顯密に亘り、神道にも關聯し、所論的確、驗門群書中の白眉と稱せられてゐる。

(服部如實)

修六通觀行次第

①(日) Shu-roku-tsu-han-kyō-shū-dai (支) Hsin-lin-tu-han-kyō-shū-dai ②一巻 ③(參考) 書寫請來法門等目錄

酒茶論

①(日) Su-tearon ②存、群書類從第九輯三六八巻 ③蘭叔撰 ④漢文禮の一種の戲文で、酒を忘愛君、茶を滌煩子とし、互にその徳を述ぶること六番、初め酒の火を擧げて、天下を失ふもの酒なりと貶すに對し、酒の徳を擧げ、茶の徳を聞かず、茶は六經になしと難するに對し、古來佛に獻するに茶を以てし、酒を以てせず、禪門に茶の例を引き讃すれば、同じく禪門に酒徳を擧げ、天下を失ふものは酒なりといふ例ありと詰り、桀紂これなりと答ふるを駁して、堯舜、孔子の飲用せるを引き、中庸の道酒より起る、百藥の長なりといひ、或は字を解して論難し、或は茶具の貴に對して、酒盃の尊を擧げ煎茶の水味と細詳するに對して酒星・醴泉・酒仙を擧げ、下戸の不遇を論じ、茶の愛好者の普遍なるを揚げ、最後に傍聽の一閑人を出して、兩者の議論の盡くるなきをいひ、自分よく酒を飲み、また茶を喫す、孰か勝ち、孰か負けんとて、一篇の詩を賦して、此の論の無勝負なることを詠じて結んでゐる。

珠玉抄

①(日) Shū-gyoku-shō ②一巻 ③存 ④實後集 ⑤寫本(眞如藏)

珠香院樓御筆禮記

①(日) Shū-ko-ji ②一巻 ③存 ④寫本(龍大、別置)

須河警經

①(日) Su-ka-ji-kyō ②一巻 ③失譯 (支) Hsu-ho-pi-ching ④三藏記第四、武周錄第一

須河警諭經

①(日) Su-ka-ji-ya-kyō (支) Hsu-ho-pi-yi-ching ②一巻 ③失譯 ④雜警諭經の抄出。⑦(參考) 出三藏記第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

須眞天子經

①(日) Su-shin-ten-shū-kyō (支) Hsu-chen-tien-tai-ching (梵) Ārya-sūtrāntarānta-deva-putra-paripocchā (藏傳) Hhags-pa hhai-lu rub-tsal-xams-kyi shu-pa zhes-bya ba thug pa chen-pu mdro. 問四事經、文殊師利所報法言稱經、斷諸法狐疑法經、諸佛法普入方便慧分別昭明持經、須眞天子所問經 ②四巻、二巻或三巻 ③存、大正一五・九六 No. 538、縮宙二、卅一・四、北324改、南325改、元326改、明北329短、清329短、麗330必、天330改、指上必、法336必、至337英、明南337岡、Z. 393 ④西普竺法護譯 ⑤泰始二一建興元 (A. D. 266—333)

⑥本經は卷末に於いて佛自ら阿難の問に答へて「須眞天子所問」「文殊師利童子所報」と名づくると云つてゐる。前二者は人に依つたもので、後二者は内容よりするもので

ある。通常は單に「須眞天子經」又は佛説を冠して「佛説須眞天子經」と云はれる。須眞天子と文殊師利の問答によつて聲聞乘辟支佛乘を彈呵して菩薩乘を宣揚するものである。

四巻十八品に分れたる内容を略述すると、(第一巻) 問四事品第一 須眞天子は菩薩の不安信を得て大乘を志す所以以下三十二の質問をなし、佛はこれに應じて一々偈を以て答へ給ふ。

(第二巻) 答法議品第二 懇るなる三十二事章句法の説法を聽きたる須眞天子は文殊師利に、重ねて廣説せんことを願ひ、文殊師利は簡單なる句を以てこれに答へ、佛は善哉々々と讃嘆する。

法純淑品第三 我所問の法は純淑と爲すや否やとの須眞天子の問に對し文殊師利は答へて「所有無ければ則ち純淑の法議」であると言ひ、次いで非時は時の心に關して論じてゐる。

聲聞品第四 是に於いて須眞天子は諸大弟子に疑問の點があれば文殊師利にきけと云ふ。そこで摩訶迦葉・舍利弗・目犍連等の佛十大弟子は夫々質問を試みては文殊師利の答に歡喜默然する。而して文殊師利は「其れ大乘は皆一切乘を生ず」と述べて本品を結んでゐる。

(第三巻) 無畏品第五 更に文殊師利は須眞天子の菩薩の畏に關する質疑に對し、菩薩の畏懼は有爲無爲の兩因縁に従ふと述べ、無所畏を得るの所以を併せ説く。

住道品第六 云何んが菩薩は道に住することを得るかとの須眞天子の間に對して文殊師利は、菩薩は六波羅密を持たずして而も六波羅密を具す、故に道に住することを得と説き、次いで

菩薩行品第七 その六波羅密について、心意平等なるは施與行、心意已調なるは戒行、心意已寂なるは忍辱行、意懈怠せざるは轉進行、身意靜默なるは禪思行、所有に著せざるは慧智行であると述べて、

分別品第八 では文殊師利は須眞天子に向つて菩薩の徳を讃嘆し、結局菩薩は一切法を知り、當來未然の法を知るにとする。

(第四卷) 頌偈品第九 更に文殊師利は偈を以て須眞天子の間に答へて菩薩の徳を讚し、最後に

道類品第十 に於ては、「我所處是道類」と説く。道處は寂靜であると云ひ、道相は虚空であると述べる。佛はこれを讚し、彌勒菩薩及び阿難に對し、本經の受持を勧めらる。

以上の所説を見るに本經に主として活躍せるは須眞天子と文殊師利童子である。文殊師利の所説を以て大乘佛教を強調するものである。

**須眞天子經記** ①(日)Shu-shin-ten-shih-kyō-ki.(支)Hsu-shen-tien-tai-ching-ki-chi. ②一卷 ③(参考) 東域傳燈目錄 卷上

**須多羅入胎經** ①(日)Shu-ta-rya-nyū-tai-kyō.(支)Hsu-to-lo-ja-tai-ching.

須

須多羅經 ②一卷 ③缺 ④魏吳代失譯 ⑤(參考) 出三藏記第四、法經錄第三、三寶紀第五、仁壽錄第三、靜泰錄第三、內典錄第二、武周錄第一、開元錄第二、第一、五、貞元錄第三、第二、五

**須陀利經** ①(日)Shu-da-ri-kyō.(支)Hsu-to-li-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤義足經上卷の抄出。⑥(參考) 出三藏記第六、武周錄第一、開元錄第一、六、貞元錄第二、六

**須大拏太子經** ①(日)Shu-dai-na-tai-shih-kyō.(支)Hsu-ta-na-tai-tai-ching. ②一卷 ③(參考) 智證大師請來目錄

**須達經** ①(日)Shu-dak-kyō.(支)Hsu-ta-ching.(支)A. K. 20. Velama. 須達長者經 ②一卷 ③存、大正一・八七九、No. 73. 縮尺八、卅一四・二、北704若、南798若、元710若、明北602善、清602善、歷23止、天704若、指63止、法93容、至910止、明南393緣、No. 606 蕭齊求那毘地

譯 ⑤永明一〇一建武三(A. D. +92—195) ⑥この經典は中阿含一五五經須達多經(大正一・六七七)、長者施報經(法天譯、大正一・八八〇)、三歸五戒慈心厭離功德經(失譯、大正一・八七八)、增一阿含二七品の三經(大正二・六四四)及びA. K. 20 Velamaの五

同本があり、佛が給獨長者に對し、布施はその施物の好處に依らず、信樂施、隨時施、自手施、往而施與、知行果報而行施與の施でなければならぬことを説き、轉藍(Velama)といふ長者が莫大の金銀等の施をなしたといふ本生譚を説いてかくの如

き施も福田を擇んで施すに如かず、又三寶に歸依し戒を持ち、慈心を行じて施すは猶勝れ、一切の諸法の無常苦空無我を觀するは最も勝ると教へたものである。この中、三歸五戒慈心厭離功德經は最も簡單であり、他は概ね大同小異である。(赤沼智善)

**須達多經** ①(日)Shu-dak-kyō.(支)Hsu-ta-ching.(支)A. K. 20 Velama. ②存、中阿含經第三九(大正二・六七七No. 26, 155)

**須達長者因緣** ①(日)Shu-datsū-chū-jin-enn. ②(參考) 淨土真宗聖教目錄

**須達長者經** ①(日)Shu-datsū-chū-jin-enn. ②(參考) 淨土真宗聖教目錄

**須達多經** ①(日)Shu-dak-kyō. 現代意譯須達多經 ③存、現代意譯根本佛教聖典叢書第六雜阿含經抄 ④高島崑寛我譯

**須跋陀羅因緣論** ①(日)Shu-batsu-darā-in-enn-ron. (支)Hsu-po-to-lo-yin-yuan-lun. ②二卷 ③缺 ④字文周耶舍闍多等譯 ⑤(參考) 開元錄第一、五、貞元錄第二、五

**須佛得度經** ①(日)Shu-butsu-toku-do-kyō.(支)Hsu-to-toku-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤(參考) 出三藏記第三、法經錄第三、仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第四、第一、五、貞元錄第六、第二、五

**須菩提品經** ①(日)Shu-butoku-hon-kyō.(支)Hsu-butoku-pin-ching. ②七卷

④火譯 ⑤(參考) 出三藏記第三

**須摩提經** ①(日)Shu-ma-dai-kyō.(支)Hsu-mo-ti-ching.(梵)Sumati-dhrika-paripiccha(藏)Hphags-pa bu-mo blo-gros bzun-mos Shus-pa shes-bya-ba theg-pa chen-pohi md. ②一卷 ③存、大正二・八一 No. 336. 縮地一、卅續一・一一、廢37服、No. 39 ④菩提流志譯 ⑤唐長壽二一先天二(A. D. 693—713)

⑥本經は菩提流志によつて前後三回譯されたといはれる。即ち一は長壽二年(A. D. 693)に大周の東寺及佛授記寺に於て譯された妙慧童女(所問)經、他は景龍二年から開元元年(A. D. 708—713)に譯編された大寶積經中の妙慧童女經(會)である。しかし、現存の高麗藏所載のものと大寶積經所收のものとは譯文全く同じである。其の他、竺法護、羅什の異譯も存する。經の大意、王舍城の長者の女で容色優れた八歳の妙慧(須摩提Sumati)が佛に菩薩の有する屬性十項(一端正の身、二富貴の身、三眷屬壞れず、四佛前に於て化生を受け蓮華の座に處る、五一佛土より一佛土に至る、六世に處して怨無し、七言ふ所を人信ず、八能く法の障を離れて速かに清淨を得、九能く諸の魔を離る、十命終に臨める時に諸佛が現前す)は如何にして得らるべきものなるかを問ひたてまつりし時、佛が其の一に就て菩薩の成就すべき四つの條件を擧げて四五行を教へられる。妙慧は此の四五行を凡て奉行せんと誓ひ、大日提連は之を疑ふ。乃て妙慧は三千世界を六種に震動し、天華を雨

し、天鼓を鳴らして自らの言の眞實なるべきを證し、更に大衆の身を金色に化して未來に成佛すべきことを證する。次で文殊師利が妙慧に何の法に住して斯かる誠願を發したかと問ふと、八歳の童女妙慧は空理に立つて法界の中に所住なきを答へ、更に法を分別せざるが菩提であり、一切法を虚空相に見る者が菩提であり、菩提と凡夫とは異つたものではなく、是等は皆同一なる法界の相なることを説く。其の時佛は文殊に此の童女こそは過去世に於て汝を無生忍に住せしめた師なることを教へ、文殊は希有の思ひをなし、妙慧に今猶女身を轉ぜざる理由を問ふ。妙慧は女人の相を求めても畢竟不可得で轉すべきものなきを答へる。更に妙慧は當來世に成佛すれば、其の中の衆生は身金色となり、其處には魔事と惡越と女人とが無からんと願ひ、其の言の虛妄ならざるは之にて知られるであらうと、自ら三十歳ほどの比丘に變じて見せる。佛は妙慧が當來世に、殊勝功德寶藏如來と號して出現すべき記を授けられる。之を聞いた多くの衆生も或は不退轉に住し、或は法眼淨を得たので、佛は彼等が一樣に辯才莊嚴如來として成佛すべきことを授記せられる。斯くて最後に佛は文殊に是の如き微妙の法門は菩薩契經の本であるが、今之を汝に付嘱するから、之を書寫、受持、讀誦、解説すべしと命じ、文殊及び大衆は歡喜し信受奉行する。一篇の主眼は菩薩の修すべき四十事の道德的箇條の列擧よりも一少女妙慧によりて體達せられた般若解空の境地

の證明にあるやうに思はれ、其處には維摩經に於ける維摩居士と照應するものが感ぜられる。

⑦(參考) 出三藏記第二、三寶紀第五、第一三、內典錄第二、開元錄第二(江田俊雄)

譯語あり)が死して、佛はその死後彼は一來果に入つたと記述し給うたといふのと脉絡があるやうに思はれる。(赤沼智善)

須摩提長者經

須摩提女經

①(日)Shu-ma-dai-chū-ja-kyō. (支)Hsu-mo-ti-chang-chie-ching. 會諸佛前經、如來所說示現衆生經  
②一卷 ③存、大正一四・八〇五No.539、縮刷七、卅一四・一〇、北322無、南332無、元386無、明北689敬、清689敬、麗823甚、天319無、指784甚、法310甚、至1057卑、明南702敬、Nj.693 ④支謙譯 ⑤吳黃武二—建興二(A.D.223—253)

①(日)Shu-ma-dai-nyō-kyō. (支)Hsu-mo-ti-nū-ching. (梵)Sunnagadhāvādāna(刊本) ②一卷 ③存、大正二・八三五No.128、縮刷四、卅一四・二、北725若、南739若、元731若、明北689敬、清689敬、麗823甚、天819無、指784甚、法810甚、至1057卑、明南702敬、Nj.615 ④支謙譯 ⑤吳黃武二—建興二(A.D.223—253)

⑥この經典は、舍衛城に於て須摩提(Sunamāradhā)と名ぐる長者が死し、その遺族が悲泣するを以て、阿難これを哀れみ、佛に請ひ、佛その家に行き、遺族に對し、無常の人生に於て死の避くべからざるを説き、苦惱を離れんとせば三寶に歸依せよと教へ、死は獨り身命の死に非ずして、十惡を行ずるは死、三寶を敬はざるは死なるを示し、四顛倒想が心の繫縛なること等を説き、進んで佛甚深の法なる緣起説を説き、遺族の苦惱を除き給ふ經典である。須摩提女が原音 Sunamāradhā であつて、これに相當する巴利の名が Subhaddā であるとする

⑦この經典は給孤獨長者女得度因緣經に於て述べたる如く、須摩提女經(大正二・八三七)・三摩竭經(大正二・八四三)、給孤獨長者女得度因緣經(大正二・八四五)、增一阿含二二・三(大正二・六六〇)、梵本 Sunamāradhāvādāna の諸同本があり、Divyāvadāna a p.402にもこのことを少しく説き、Koc-khil 佛傳 p.203 にも出づ。巴利傳では Thera G.15 偈註 Dh.p.A. I. p.151 III. pp.455 J. I. p.931. Mano. pp.517, 162 etc. に出づ。巴利系ではすくなくこの女の名を Cula-subhaddā 又は Mahasubhaddā として梵語系では Sunamāradhā 又は Sunamāradhāyānā. としつゝある。この女は即ち給孤獨長者の女にて、異教の信徒である滿富城の滿財長者の家に嫁し、その信仰を護ること

と、この須摩提も梵音 Sunamāradhā であり、巴利の名は Subhaddā であらうか。

若しさうだとすれば、D.16 Mahāparinibbāna S. 及び p.55.10 及びその譯經に出てゐる。Nadika 村の Subhaddā (須跋等の

須摩提長者經

須摩提女經

須摩提菩薩經

須摩提女經

須摩提菩薩經

須摩提女經

須摩提菩薩經

須摩提女經

須摩提菩薩經

須摩提女經

須摩提菩薩經

須摩提女經

須摩提菩薩經

須摩提女經

須摩提菩薩經

須摩提女經

須摩提菩薩經

須摩提女經

からして、異教の師の怒を買ひ、佛を信ずるよりして、誠心にて佛を請し、佛、衆弟子を率ひ神通を以て到り給ひ、衆を化し給ふことを説いたものである。恐らく、給孤獨長者の女がその信仰から嫁いだ先の家族を歸佛せしめた事が、次へ次へと増廣されて行つたものであらう。巴利傳は大抵簡單であるが梵語系のもの皆長く、この須摩提女經、三摩竭經よりも次項の須摩提女經は増廣され、増一阿含二二・三經と給孤獨長者女得度因緣經は更に増廣され、大乘經典に入つては大寶積經九八妙慧童女會(大正五・六七以下)須摩提菩薩經(大正二・八七以下)須摩提經(大正二・八一以下)に影射してゐる。(赤沼智善)

①(日)Shu-ma-dai-nyō-kyō. (支)Hsu-mo-ti-nū-ching. ②一卷 ③失譯 ④(參考) 出三藏記第三

須摩提女經 ①(日)Shu-ma-dai-nyō-kyō. ②一卷 ③存、大正一・七六No.334、縮地一一、卅一四、北39衣、南38衣、元36衣、明北36衣、清36衣、麗古服、天35衣、指33服、法38服、至106讓、明南36衣、Nj.39 ④竺法護譯 ⑤西晉泰始元—永嘉三(A.D.265—308)

⑥本經は菩提流支譯の須摩提經、羅什譯の同名經の最も古い異譯である。内容も流支

譯根本佛教聖典叢書第四增一阿含經抄

譯根本佛教聖典叢書第四增一阿含經抄

譯根本佛教聖典叢書第四增一阿含經抄

譯根本佛教聖典叢書第四增一阿含經抄

譯根本佛教聖典叢書第四增一阿含經抄

譯根本佛教聖典叢書第四增一阿含經抄

譯根本佛教聖典叢書第四增一阿含經抄

譯根本佛教聖典叢書第四增一阿含經抄

譯根本佛教聖典叢書第四增一阿含經抄

譯根本佛教聖典叢書第四增一阿含經抄

譯根本佛教聖典叢書第四增一阿含經抄

譯根本佛教聖典叢書第四增一阿含經抄

譯根本佛教聖典叢書第四增一阿含經抄

譯と何等異なる點はない。ついでに見よ。唯須摩提に妙慧の譯語を附せず、又父の名郁迦(Ura)〔羅什譯は優迦に作る〕を出してゐる如き譯語上多少相違があるのみである。

⑦〔參考〕三寶紀第六、法經錄第一、內典錄第二、大周刊定目錄第三、(江田俊雄)

須摩提菩薩經

①(日)Shu-ma-dai-bo-satsu-kyō(支)I-tai-mo-ti-pu-sa-ti-hing(梵藏名、善提流志譯須摩提を見よ)

②一卷 ③存、大正二・七八No.335、縮地一・二六、四、北〇衣・南〇衣・元37衣、明北37衣、清〇衣、天36衣、法39服、至107護、明南37衣、No.49 鳩摩羅什譯

⑤姚秦弘始四—一四(A.1.402—412)

⑥本經の異譯には先に竺法護譯があり、後に善提流支譯があつて何れも大同小異の内容を示してゐるが、本譯には是等の兩譯に缺けてゐる約八百字より成る一段が存することが注意せられる。即ち佛が空理に體達した須摩提に記別を授けた後に、文殊に質問を試みて、法に所住なしとすれば、豈名を立てられやうかと問ふと、文殊は天中天よ名は立てられなと答へる。更に佛が名くべきなき幻化者に過去とか未來とか、起るとか滅するとか所有とか形像とかいふものが有り得やうかと問はるに對し、斯かるものは無いと答へる。そこへ須摩提が入つて、「私は佛の言を聞きたてまつた、實に所有となすべきものはない」と述べ、佛は「是の如し」と肯定され、無明も亦縁によつて起ることを話される。須摩提(此の段には首意女となつてゐる)は未曾有奇特

の思ひをなして、世尊の轉ずる所の法輪は不可思議、不可稱、無量、無生のものと讚歎し、歡喜踊躍して、佛に香華を供養する。佛は欣笑されて口より五色の光明を放ち世界を照される。すると七法(知誦・解法・曉時・了節・明業・練己・深識人本)を曉了した阿難が世尊の欣笑された意味を質ね、佛は須摩提が誓願を發し、法輪を轉せんとするからで、是の女はこの徳本を以て、壽終の後は女身を轉じ、惡趣に歸せず、出家して沙門と爲り、經法を受け、佛滅の後に舍利を供養し、衆生を勸化し、無上正眞道を立て、天中天と號するであらうと言はれる。(江田俊雄)

須彌界異四時論

①(日)Shu-mi-kai-ishi-ron ②一卷 ③存 ④大道撰

須彌界義

①(日)Shu-mi-kai-gi ②一卷 ③存 ④靈遊述 ⑤安政三刊 ⑥龍大、二七三・七、九(谷大・餘大・五六七)

須彌界四時異同辨

①(日)Shu-mi-kai-shi-ji-tō-ben ②一卷 ③存

④環中(一享保元A.D.1716)述 ⑤天保一四刊 ⑥龍大、二七三・一〇、二六二九

須彌界四時異同辨斥

①(日)Shu-mi-kai-shi-ji-tō-ben-jaku ②一卷 ③存

④龍大、二七三・三八(谷大、外大、九一)

須彌界實驗曆書

①(日)Shu-mi-kai-ken-jiki-sho ②五卷 ③存

④靈遊記 ⑤慶應四刊 ⑥龍大、二七三・一

三二四(谷大、餘大、一六二四)(哲、え、七、左・一)(帝國・二四一・七四)

須彌界圖說

①(日)Shu-mi-kai-zu-shō ②一卷 ③存 ④靈遊述 ⑤安政七刊 ⑥(谷大、餘小・一七三)

須彌界本天曆推步術

①(日)Shu-mi-kai-hon-ten-ten-yaku-shū-ho-jūsu ②一卷 ③存 ④大道撰 ⑤寫本(谷大、長保・二九一)

須彌界約法曆規

①(日)Shu-mi-kai-yaku-ho-rek-ki ②二卷 ③存 ④圓通(寶曆四—天保五A.D.1734—1834)述

⑤嘉永三刊 ⑥龍大、二七三・一五(谷大、長保・二九〇)(帝國・二四一・六七八)

須彌界曆書

①(日)Shu-mi-kai-re-ki-sho ②十八卷 ③存 ④寫本(正大、一〇六、九八)(京大、藏・二四三・三八)

須彌界曆書

①(日)Shu-mi-kai-re-ki-sho ②再訂須彌界曆書 ③十二卷 ④存

⑤寫本(谷大、外大・七七〇、餘大・一六二二)刊本(龍大、二七三・一六)

須彌四域經

①(日)Shu-mi-shi-iki-kyō(支)I-tai-mi-sai-yū-chang ②一卷 ③存

④疑偽經 ⑤〔參考〕法經錄第二、仁壽錄第四、內典錄第一〇、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

須彌視實等象儀記

①(日)Shu-mi-shi-jitsu-to-shū-ki ②一卷 ③存

④佐田介石(文政元—明治一五A.D.1818—1882)述 ⑤寫本(龍大、二七三・一七)

須彌須知論

①(日)Shu-mi-shū-chi-ron ②十四枚 ③存 ④帝國・二四四・

三八一)

須彌山一目鏡

①(日)Shu-mi-san-ito-me-kanran ②天眼水釋 ③存 ④慶應三刊 ⑤(龍大、二〇七・三二)

須彌山儀銘並序

①(日)Shu-mi-san-gi-kei-naidō-jō ②一卷 ③存

須彌山儀銘並序和解

①(日)Shu-mi-san-gi-kei-naidō-jō-waka ②二卷 ③存 ④圓通(寶曆四—天保五A.D.1734—1834)述 ⑤文化一〇刊 ⑥(龍大、二七三、一八一—二〇〇、研佛)(高、寄、一、二四)(谷大、餘大、一六四七)(帝國・一八九、一〇、二四一・七二)(京大、一・二六・七八)

須彌山經

①(日)Shu-mi-san-kyō(支)I-tai-mi-san-ching ②一卷 ③存 ④失譯 ⑤〔參考〕出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

須彌山圖

①(日)Shu-mi-san-zu ②一幅 ③存 ④存統撰 ⑤〔參考〕大日本佛教全書續刊豫定書目

須彌山圖

①(日)Shu-mi-san-zu ②一幅 ③存 ④廣陵法水筆 ⑤(谷大、特・二〇〇)

須彌山圖解

①(日)Shu-mi-san-zu-kai ②一冊 ③存 ④文化六刊 ⑤(哲、え・八、右・三)(京大、日大未・一六五、一、二六・九九)

須彌山圖譜

①(日)Shu-mi-san-zu-tsu ②一卷 ③存 ④禿氏祐祥編 ⑤大正一四刊 ⑥(高、寄、一・二六)(龍大、研

史(谷大、別・二六八) ①京都龍谷大學出版部

須彌山の解説 ①(日)Shu-mi-san-no-kei-sestu. ②一卷 ③存 ④舟橋水哉著 ⑤大正九刊 ⑥(龍大、二六二・三六)

須彌山管經 ①(日)Shu-mi-san-pi-ching. ②一卷 ③(支)Hsu-mi-shan-pi-ching. ④一卷 ⑤缺 ⑥失譯 ⑦(參考) 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

須彌山略説 ①(日)Shu-mi-san-ryaku-sestu. ②一卷 ③存 ④福田行誠(文化三一明治二一 A. D. 1806—1888)述 ⑤明治一一刊 ⑥(正大、一〇六・九〇)哲、え・八・中・三

須彌像圖出經 ①(日)Shu-mi-zo-zu-shutsu-kyō. (支)Hsu-mi-hsiang-tu-chu-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④(參考)武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

須彌藏分 ①(日)Shu-mi-zō-fun. (支)Hsu-mi-tsang-fen. 大乘大集經大集須彌藏經、大集須彌藏經、須彌藏經 ②二卷 ③存、大方等大集經第五七—五八(大正一三・三八一 No. 397) Ni. 66 ④高齊代那連提耶舍譯 ⑤天保八一開皇五(A. D. 577—583)

⑥本經『大方等大集經』卷五七・五八の兩卷に亘る部分の經名である。『宋』、『元』、『明』三藏本では、『大集須彌藏經』として、上下兩卷に分たれてゐる。この經は、元來かくの如き名稱で別行されてゐたのを、隋代の招提寺沙門僧就が、曇無讖譯に歸せらるゝ、

『大集經』に、更に『日藏分』以下の諸經を加へた際、恐らく同時に附加せるところであらうと思はれる。本經は四品より成り、まづ聲聞品第一では、佛が功德天に對して、小乘の禪觀とその利益とを教へ、菩薩本業品第二に至つて、聲聞と共せざる菩薩特有の神觀を説く。非時風雨品第三では、地藏菩薩が佛の徳を讃ふるに始まつて、功德天の本生があり、次いで佛・地藏及び功德天の間に、陀羅尼に關する諸種の教受が行はれる。陀羅尼品第四では、佛の本生發願を述べて後、四天下の諸惡毒龍の害を除かむために、頻中三昧の力と陀羅尼力とに因るべきことが須彌藏龍仙菩薩によつて説かれる。更に善住龍王以下、彌勒・文殊の諸菩薩が、龍の災害、天地の災厄、身心の諸疾を除くべき呪を説き、諸大龍が無上の大乘心を起し、佛を供養する。最後に無垢威徳と名づくる帝釋の間に、佛が諸龍の世間衆生の資財を壞する因縁が説かれ、觀世音菩薩を發すべきを勧め、以て付囑に及ぶ。要するに本經は、大小乗の禪觀と陀羅尼の徳とを高調したものと云ふべきである。(深浦正文)

須彌壇説明圖 ①(日)Shu-mi-tan-sestu-mei-zu. ②一紙 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

須彌地球雙用編 ①(日)Shu-mi-ti-kyō-ji-yō-hen. ②一卷 ③存 ④中西爲政編 ⑤寫本(谷大、餘大・三五三五)

須彌之圖 ①(日)Shu-mi-no-zu. ②一卷 ③存 ④(龍大、別置)

須耶越國貧人經 ①(日)Shu-ya-ōsu-kyō. (支)Hsi-ya-yieh-kuo-pin-jen-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑦(參考) 出三藏記第三、法經錄第三、仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第四、第一五、貞元錄第六、第二五

須臾成就刀自女經 ①(日)Shu-yu-ji-ju-to-ji-nyo-kyō. (支)Hsi-sou-cheng-chin-to-zy-ni-ching. ②二葉 ③存 ④法智譯 ⑤寫本(正大、一一六〇・二八)

須賴經 ①(日)Shu-rai-kyō. (支)Hsi-lai-ching. 須賴菩薩經 ②一卷 ③缺 ④吳支謙(黃武二一建興二 A. D. 223—253)譯 ⑤第二譯 ⑥(參考) 仁壽錄第五、靜泰錄第五、武周錄第一二、開元錄第一四、貞元錄第二四

須賴經 ①(日)Shu-rai-kyō. (支)Hsi-lai-ching. (梵)Śrāta-pariprocā(藏傳) bya-ba theg-pa chen-pohi mdo. ②一卷 ③存、大正一一・五二 No. 328 縮地一一、正六・四、北 272 必、南 374 過、元 385 必、明北 40 衣、清 10 衣、天 328 必、明南 363 必、正 43 ④白延譯 ⑤魏甘露四(A. D. 250) 一説甘露三(A. D. 258)或正丑(A. D. 257) ⑥(異譯) (一)須賴經吳黃武(A. D. 222—229)年支謙譯(失)。 (二)本譯。 (三)須賴經前涼(A. D. 302—376)支施崑譯。 (四)貧子須賴經宋求那跋陀羅(A. D. 435—488)譯(失)。 (五)大寶積經第二十七善願菩薩會唐善勝提流支(A. D. 700前後)譯。

〔要旨〕 本經は須賴菩薩經ともいひ、須賴といふ貧しい併し德行優れた菩薩が主人公で、其の偉大さを示すために天帝釋の誘惑を描き、本筋に入るや慳貪なる波斯匿王を出し、須賴との間に貧富論を問はし、遂に其の決着を佛に仰いで、佛より心淨きものは貧しくとも富み、慾深きものは富めども貧しき理を聞き、遂に王が佛及び須賴に歸依するといふのである。其の間、多くの天・菩薩・大衆がでて、阿難も登場して佛の須賴を保證する教説を導き出す役割を演ずる。

〔大意〕 第一段、舍衛城中の極貧者須賴(Śrāta)は志堅く、戒を守り、十善を修し、貧に安んじ、慈悲深く、佛法僧を信じてゐたので上下に敬愛せられてゐた。之を見た天帝釋は須賴が戒行を守り、道を求めるのは我が地位を奪ふためであらうと危惧し、須賴の誘惑を試みる。先づ數人の男に化して須賴の前に現はれて、罵詈雑言し須賴の怒らなうのを見て、更に別人に化して須賴の爲に彼等を殺してやらうと言ふ。須賴は罪福の二果を説いて之を斥けるので失敗して退く。次に天帝釋は彼の前に金銀を置き、化人をして取るよう勸説せしめるが失敗し、次に利を以て人との諍訟に偽證せしめんとして失敗し、最後に天帝釋は其の妻及び妓女をして淫欲に誘はしめんとして又失敗する。斯くて天帝釋は大いに恐れ、須賴の眞意を確め、其の目的が不生不滅の道を求め、三界の衆生を救ふにあると知つて大いに安心する。第二段、須賴は一日舍衛城中で價貴き寶珠を拾ひ、之を城中で最も貧しき者に與へんと呼はる。人々集まり來

九〇

り乞へども、諸賢より貧しき者に與へんといふ。人々は誰なるかと問へば、須頼は王波斯匿こそは國中の最貧者なれと答へる。人々は王宮には珍寶が山積してゐると怪めば、須頼は財寶如何に多くとも欲深厭くなければ極貧者であると、王に寶珠を與へんとして人々と王宮に向ふ。第三段、適々波斯匿王の財利を得んとして五百の長者を罪せんとせる處へ須頼入り來りて、大王は國中で最も貧しければ、之を與へんとて、寶珠を差出す。王は朕の貧しきを何人が證し得るかと問へば、須頼は大王は佛を知らないか、佛こそ之を證するであらうと、地に膝づきて佛を祈る。忽ち大地動き、佛は諸大衆を從へて地より宮殿上に現はれ給ふ。乃で佛は須頼の言の誠なるを證し、因縁によれば、金銀財寶を有する王は富み、有せざる須頼は貧しいが、道德即ち六度や三寶敬仰、學の深き、意の淨きに於ては王は須頼に及ばず、國中の人民の財を合しても彼の道德の富に比すべくもないと諭される。王は佛勅を聞き、傲慢食欲を去り、須頼を尊敬し佛に歸依する。そして五百の長者を救免する。佛は須頼の乞によつて大衆集會に説法され、佛を見るには信仰と樂と悦と敬との四法を以てすべきこと等を説き已るや、神を現じて風神王の如くに祇園に飛び去られる。第四段、波斯匿王は須頼が佛所に詣る時は隨ひ往かんと言へば、須頼は王のみでなく、後宮・太子・官屬・國民皆佛に詣らしむべきを説く。王は須頼に菩薩は何故に常に大衆によつて從はれるかと問

ひ、六度三十七道品を具足すればと知る。そこで王は着ぐる所の價貴き綵衣を須頼に施さんとし、須頼はそれを貧者に與へる。第五段、王は後宮・百官・人民を從へ佛所に詣る。時に天帝釋祇園に來て、美しき大殿を化作し、七寶樹の下に蓮子座を設け、妓女を侍せしめ、音樂を奏して佛に供養する。佛は光明を放ち、天より散華する。その時、須頼大衆と佛所に詣る。王、須頼に座をすゝめる。須頼を知らない天帝怪めば、佛の光明、須頼を飾り、其の狀天帝にも幾倍して美しい。佛は阿難の問に應じて、須頼の徳を讃歎し、成佛して可樂國に生れ、世尊王と稱すべき記を與へる。波斯匿王は國を太子に譲り、財を三分して一を佛及び弟子に、一を國中の人民に、一を官廳の政費となし、受戒して比丘にならうとする。之を聞いた五百の長者、五百の梵志、五百の小臣も捨家棄欲して沙門となる。佛の教を聞いた須頼・諸比丘・波斯匿王・天人等皆歡喜する。

⑦〔参考〕 出三藏記集第二、衆經目錄第一、古今譯經圖紀第一、開元錄第二、第十四 (江田俊雄)

が著しく長くなつてゐるが、内容は出入してゐない。

⑧〔参考〕 開元錄第十二 (江田俊雄)

衆經撰雜譬喻 ①(B) Shu-kyo-sen-zo-hi-ya. (支) Chung-ching-shuan-tsa-ye. 雜譬喻經 ②二卷 ③存、大正四・五三一 No. 208. 縮卷七、卅二・九、北 1016寫、南1034寫、元1028寫、明北1399 群、清1399群、天1366 道略集、姚秦鳩摩羅什譯

⑨この經典は雜譬喻經等と共に種々の說話物語を集めたる經典にして、中に左の四十四話を收めてゐる。(一)失火家話。(二)尸毘王話。(三)二鬼爭屍話。(四)德瓶話。(五)老婆施話。(六)伏藏話。(七)持戒人不瀆話。(八)古井話。(九)慳貪長者話。(十)龍宮話。(十一)天人下生活話。(十二)牧羊人話。(十三)長者子死話。(十四)阿難前生活話。(十五)日連前生罪話。(十六)蛇話。(十七)慳人施寶話。(十八)省離寺話。(十九)出家爲象話。(二十)鬼與比丘話。(二十一)日連見鬼話。(二十二)六師外道話。(二十三)呪龍師話。(二十四)捕鳥師話。(二十五)念佛得脫話。(二十六)屠兒話。(二十七)積功果劫話。(二十八)入海探寶話。(二十九)禽歌善心話。(三十)河中鬼話。(三十一)大龍神話。(三十二)五百盲人話。(三十三)親友善知

識話。(三十四)優婆塞話。(三十五)優婆夷話。(三十六)老母亡兒話。(三十七)嫉妬話。(三十八)雨血話。(三十九)烏聞誦經話。(四十)不飲酒話。(四十一)畫師鬻女話。(四十二)泉水見黃金話。(四十三)無上生者話。(四十四)王女信佛話 (亦沼智善)

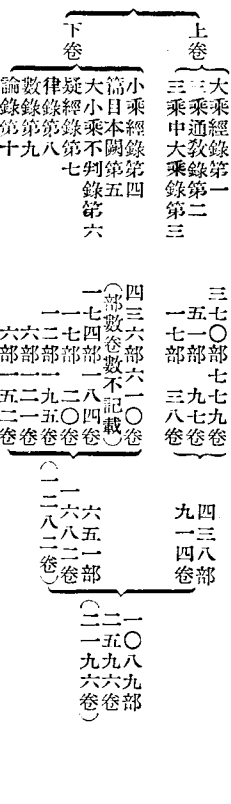
衆經都錄 ①(B) Shu-kyo-to-roku. (支) Chung-ching-ta-ta. ②八卷 ③缺

⑩歷代三寶紀卷第十五に「衆經都錄八卷(似是總合諸家未詳作者)」とあるもの即ち本錄であつて、爾後の諸經錄の説明も皆これを繼承してゐる。其の撰者、製作の年代等に至つては全然今日不明であつて知ること出来ぬが、南北朝より隋代迄のものであつたことは疑ひない。本錄は諸錄を總合したもので、その卷数が八卷あつたことは歴代三寶紀の指摘してゐる如くである。

⑪〔参考〕 歷代三寶紀第一五、內典錄第一〇、開元錄第一〇、貞元錄一八(林屋友次郎)

衆經別錄 ①(B) Shu-kyo-betsu-roku. (支) Chung-ching-betsu-ta. ②二卷 ③缺

⑫撰者不詳 ⑬南宋代(三寶紀說) ⑭歷代三寶紀卷第十五に「衆經別錄二卷(未詳作者似宋時述)」と云へるもの即ちこれであつて、同時に其の内容を記載してゐるから、今これを左に圖示して見ると



である。大唐内典録も卷第十に同じくこのことを記し、唯、三寶紀のやうに上巻下巻の各録にその部数卷数を記入せずして録名だけを記し、最後に「都一千八十九部二千五百九十三卷」と云つて、三寶紀に三巻の相違を示してをる外(實数には三百九十七卷相違す)、三寶紀が「篇目本闕」としてをる所を、内典録が「篇目本闕」と云つてをる所を除けば、後は全同である。開元、貞元の二録の記載せる部数卷数は三寶紀に全同である。而して、本録が三寶紀の云ふ如く、宋代の撰著に係るものであらうか、否かは速断の限りではないけれども、尠くとも、本録に依つて、當代藏經の分類一斑とその内容を知り得ることは至便である。

⑦(参考)三寶紀第一五、内典録第一〇、開元録第一〇、貞元録第一八(林屋次次郎) 衆經目錄 ①(日)Shin-kyō-mokuroku=ku(支)Chung-king-mu-lu. 隋衆經目錄、法經錄、隋七卷錄 ②七卷 ③存、大正五五・二一五No.2146. 縮結一、已三五・三一四、北1056延、南1072延、元1068延、明北1601隸、清1512尹、麗1061肆、天10535延、指1015肆、至1533密勿、明南1590百、No.1699 ④法經等撰 ⑤隋開皇一四(A. D. 594)

⑥この衆經目錄七卷は、その上啓文に「大興善寺翻經沙門法經等、敬白皇帝大檀越、去五月十日、大常卿牛弘奉勅須撰衆經目錄、經等諸郡修撰、總計衆經合有二千二百五十七部、百(三寶紀作五可也)千三百一十卷、凡爲七卷、別錄七卷、總錄一卷、籍

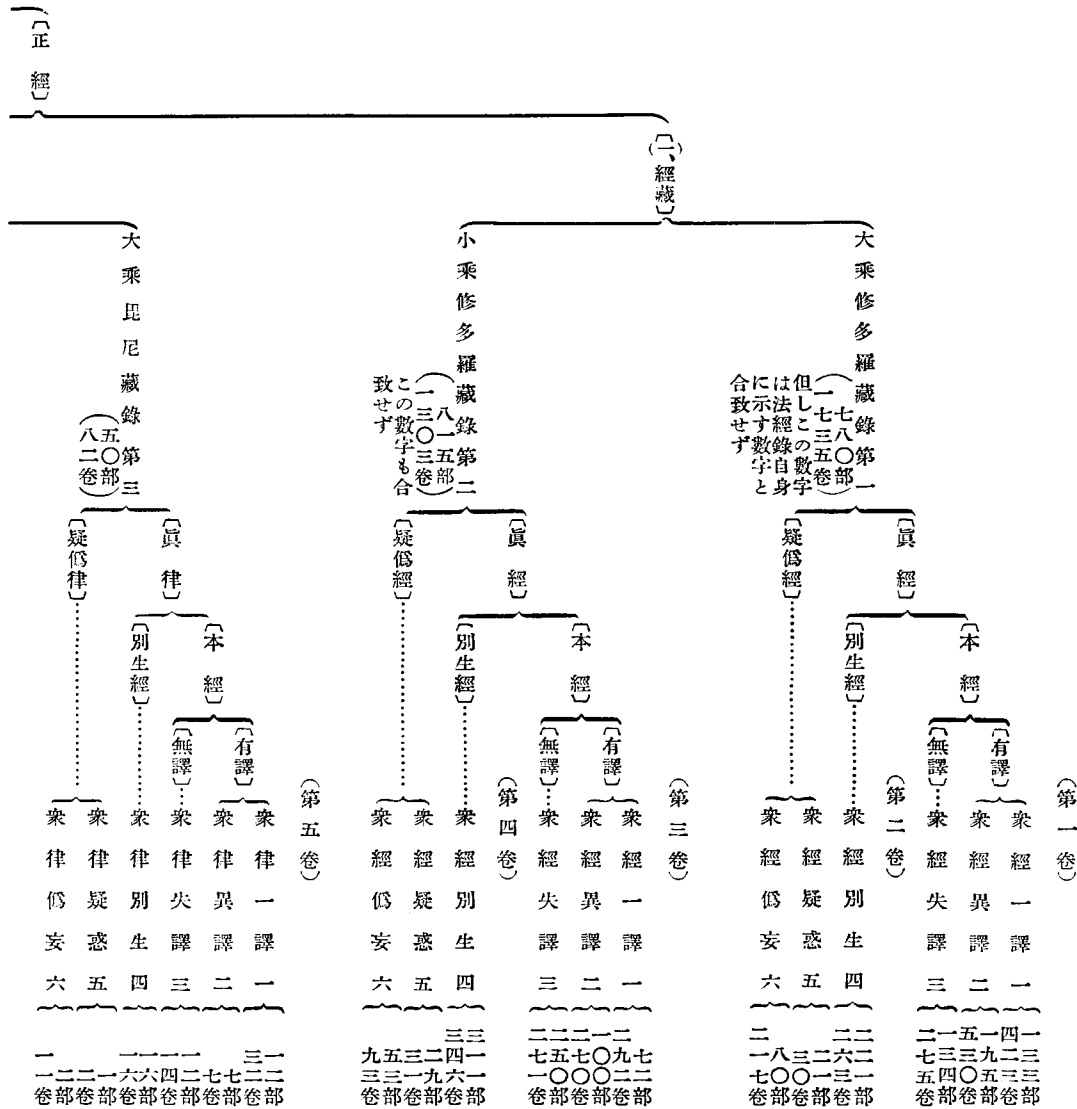
寫始竟、謹用進呈」とある如く、隋の開皇十四年五月十日に大常卿牛弘を以て大興善寺翻經沙門法經を主幹とする二十六徳等に對して經錄撰集の勅命を傳達せられたが爲に、即時にその編纂にかゝり、二千二百五十七部五千三百十卷の衆經を七卷に經め、この上啓文の日附である七月十四日に献納した勅撰經錄である。本録は、前述の如く、法經等の編纂になるが故に、普通には之を法經錄と云ひ、又本録の卷数が七卷である爲に、之をこの後に撰集された彦琮等撰の衆經目錄が五卷であるに對して、隋の七卷録とも呼ばれて居る。現在經錄中僧祐の出三藏記集に次ぐ古録である。本録の内容組織の一般に就て述ぶるに先立ち、本録撰述の動機を簡単に述べて置かなければならない。元來、隋朝は梁朝と共に佛教を保護することの最も厚かつた朝廷であつて、隋書第三十五隋籍志に依るも、文帝はその即位の當時より佛教を以て國教となし、僧を度し、寺院の建立を獎勵せられたのみならず、京師及び諸大都邑の大寺に一切經を官寫して安置せしめ、又宮廷の文庫内にも一切經を書寫して藏せしめられた。斯の如く京師及び各地の大寺に一切經の官寫を勅命されたことが、この法經錄の撰集に對する直接の動機をなして居るものである。蓋し、轉法輪藏を建設して一切藏經を收藏するの習は、既に宋代魏代梁代等に於て行れたところであるけれども、之等の時代に於ける一切經の蒐集は、戰國割據の餘弊を受け、全國的の流行經を統一的に蒐集

する迄に至らず、それぞれの地方の流行經を僅に蒐集して居るに過ぎないものであつた。加之も其等の經藏も隋代に入る頃には、引續く戰亂の爲に散逸せしめられたものが尠くなかつた。従て、隋朝が國家統一の機運に乗じて、一切經の基準を定め、それを各大寺に官寫せしめんとした場合に於ても、各地方の經藏に分散收藏せられ居る聖典名を明かにし、それを基礎に如何なる聖典を官寫すべきかの標準を定むる必要があつたのである。これ大興善寺の沙門に經錄編纂の勅命が下つた理由である。大興善寺の諸沙門がこの勅命を受けて一切經の基準をなす經錄の作成をなすに當り、最も貴重な資料になつたものは、出三藏記集、宋時衆經別錄、李廓錄、寶唱錄、法上錄等の前代諸經錄を始めとして、各地經藏の收藏目錄である。而して彼等が、其等の經錄を資料にして統一的に一切經目錄を作成せんとした場合には、其等の經錄は何れも宋代とか魏代とか梁代とか齊代とかの流行經に偏したものであるのみならず、その流行地に依つて同一經典も異名を以て呼ばれ、それが別個の經典なるかの如く見えて居る場合も尠くなかつたのである。従つて模範的な一切經目錄を編纂せんとするには、是非其等の經錄に記載せるものを一々現物に當つて比較研究することが絶対に必要とされたのである。乍併、この經錄は既に一切經の官寫の勅命が發せられた後に於て、その勅命を履行する上に基準となる經錄の存在せざ

ることに氣付き、早急に編纂を命ぜられたもので、本録の上啓文にもある如く、その勅命を受けてから僅に二ヶ月と四日の短日月にそれを上呈せざるを得なかつたやうな次第であつたから、前代の各種の經錄に記載せるところのものを、一々具體的に調査してその異同を校檢する如き暇を全然有しなかつた。其結果止むを得ざる手段として前代諸經錄の記載を机上に於て之れを整理し、兎も角も官寫すべき聖典の標準だけを示し、それに従つて實際の官寫がなされた後にその誤りを修正せんとする方法に出たのである。この意味に於て、本録を後に修正したものが彦琮等撰の五卷録である。従つて、本録は或意味から云へば未定稿經錄であつて、五卷録に至つて始めて定稿の經錄が生れたものと云はなければならぬのである。斯の如く本録は僅々二ヶ月の短日月の間に經錄のみを材料として編纂されたものである爲に、譯經史上から諸經を具體的に詮衡することの上に甚だ遺憾の點を持つたことは止むを得ない所であるけれども、この缺點を補はんが爲にそこに収録せられた諸經を如何に整理分類するかといふことに就て非常な研究が拂はれて居る。この意味に於て、本録の組織はこの後の一切經目錄の組織の基本となつて居る感がある。

本録の組織は先づ一切の佛教典籍をば、(一)理典と賢理集傳とに分ち、(二)その聖典を經律論の三藏に分ち、(三)經律論の三藏をば各々大小二藏に分ち、(四)その各部

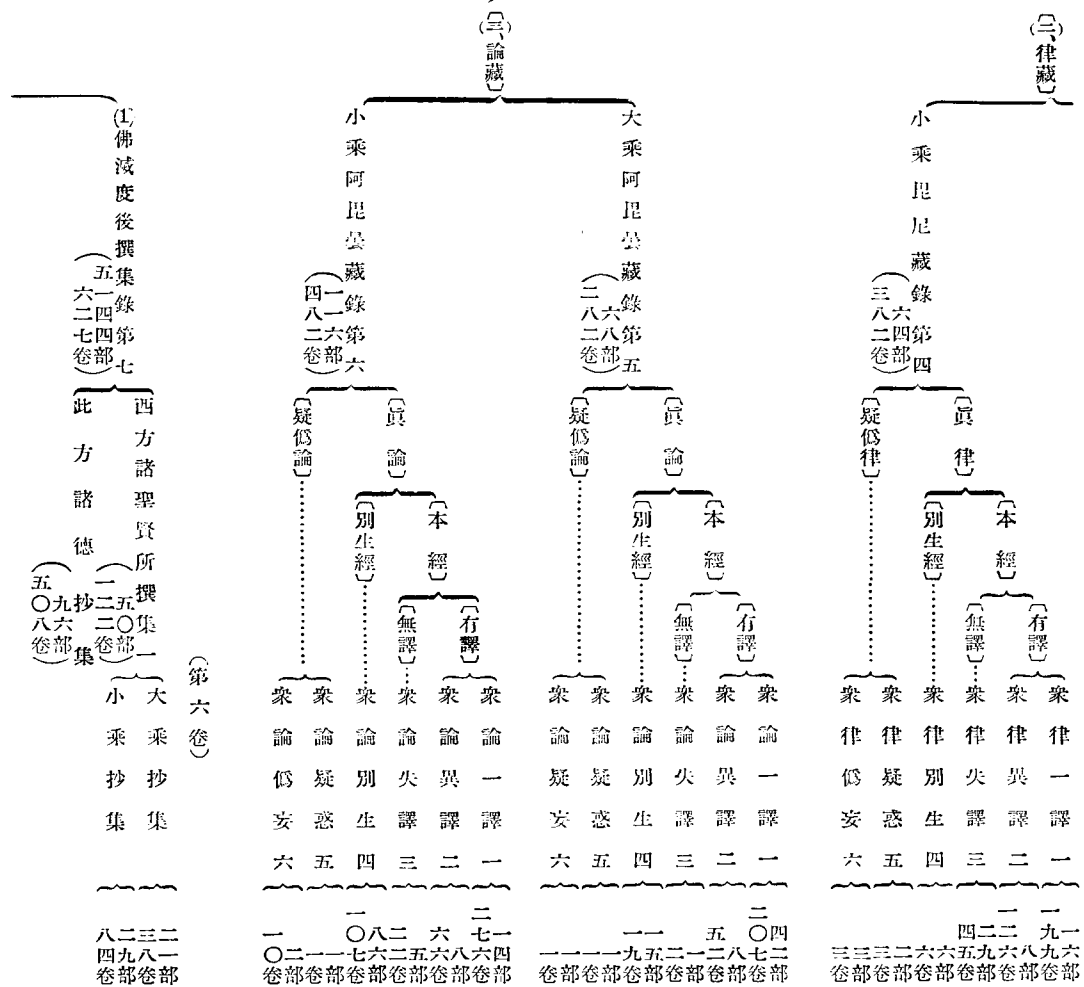




の聖典を眞經と疑偽經に分ち、疑偽經は之を衆經疑惑と衆經偽妄に分ち、(五)眞經は之を本經と別生經に分ち、(六)本經は之を有譯と無譯に分ち、(七)有譯は之を衆經一譯と異譯に分ちといふ風に、先づ經錄の編纂前に於て之を整理する爲の組織を定め、その組織分類に應じて前代の諸經錄にある聖典名を収録したものである。この組織を見易き爲に圖示すれば上圖の如くである。

この表を一見したところから見ると、その組織は甚だ整然たるものであるが、然し、この組織は曩にも指摘した如く、現實の經を手にしないで理論的に机上で作られた組織である爲に、その組織に従て實際の經藏を整理すると、そこに甚だ不自然なものがあることを免れなかつたのである。例へば、或部門に於ては、一部か一卷しか存しない疑經や偽經の爲にそれが數十部あるものと同一に一目目が設けられて居る如きがそれであつて、露骨に云へば些か組織倒れに陥つて居るといふ傾きがある。されば、此後に編纂された彦琮錄は流石に現藏を基礎としただけに、同一系統の人に依て撰集されたものであるに拘らず、この組織に非常な修正を加へて居るのである。唯この法經錄の上に敬服しなければならぬことは、兎も角も總ての經典を大小の二乗と經律論の三藏に配當してしまつたことである。勿論此等の配當は、前述の如く現經の上に研究されたものではなく、その大部分が宋時衆經別錄、李廓錄、寶唱錄等の指示に

法經錄內容



從つたものであるから、その間に多少の無理があつたり、時に又想像もしないやうな間違ひに陥つて居る點も尠くない。然し、それにしてもこれだけの配當が出来たといふことは、流石に二十大徳の合議編纂の賜物であつたと云はなければならぬのである。猶、以上の組織の中で特に注意して置かねければならないことは、經律論の各部に存する疑惑分なる項目である。この疑惑分なる部分の内容をなすものは本録に特有のものであつて、從前の經錄には全然偽經と考ふるものか、或は偽經の疑を持つものを、非眞經とか、或は疑偽經とかして區別した例があるけれども、其れ等は本録に云ふ疑惑分と全然性質を異にして居る。本録に云ふ偽妄分なるものは明かな非眞經であつて、この點は問題にならないことであるが、本録に疑惑分と云つて居るものには二種類のものがあつて、一つはそれが偽經ならざるやに就て疑ひを挿んで居るものであり、他はその翻譯者が何人たるかに就て議論のある經に關して暫く「その翻譯者に關して」疑問を附して居るものである。例へば、大乘經の疑惑分中にある龍種尊國變化經一卷が安公の偽錄中にある四事解脫經とその内容が同じき爲に偽經の疑ひを挿んで居る如きは、その内容中に疑ひを存して居るものの例であり、大乘經の疑惑分にある仁王經であるとか、或は衆論疑惑部の中にある起信論の如きは、仁王經の下註に「別錄稱此經是竺法護譯經首又題云是羅什撰集佛語今案此經始末義理文詞似非二賢所撰」

【賢聖集傳】

(2)佛涅槃後傳記第七

(一八六卷)

西域聖賢傳

(一三三卷)

(3)佛滅度後著述錄第九

(一九九部)

西域諸賢著述

(一〇九卷)

(この表の中に於て「」の中の文字は本録の組織が作られた経路を示す爲に特に挿入したものであつて、本録其ものには現れて來ない文字である。)

譯放入疑」とあり、又起信論の下註には「人云眞諦譯勘眞諦錄無此論故入疑」とある如く、その内容の點に疑ひを存して居るものではなくして、その翻譯者に就て疑問を附して居るものである。斯の如き例は他にも多く存して、佛說應供法行經一卷、佛說居士請僧福田經一卷、梵網經二卷、遺教經一卷等の如きも皆これである。斯る種類のものをもどうして疑惑分に入れたかと云へば、本録の撰集は前に述べた如く、二ヶ月間の極めて短時日の間になされたものである爲に、一々の經典に就て嚴密なる研究をなす隙を有しなかつた。然し、されば云つて便宜上その譯者を何れかに定めることも出来なかつたから、止むを得ず暫くその譯者に就て疑つて置くといふ意味で疑惑分に入れたものである。それであるからその後

は失譯の中に入れて居るのである。一體法經録が斯の如き疑惑分なるものを設けるに當つて、その疑惑の意味をば内容に對する疑惑のものと、翻譯者に對する疑惑に關するものとを確然と區別して居つたならば、何等問題の起る餘地がなかつたのであるが、斯る種類の違つた疑惑を同時に取扱つたが爲に、斯る同録撰集の經過に就て餘り研究することのなかつた學者の中には、法經録が起信論の如きを疑惑分に入れて居つたといふことから、その眞諦譯たることを否定せんとする計りか、その支那撰述を主張せんとする根據に迄求めんとするに至つたのである。然し斯の如き考へ方の非常な誤りであることは爰に論ずる迄もないことである。

要するに、この法經錄なるものは、後漢代から隋代迄に何の統一もなく雜然と翻譯された佛教聖典に、整然たる組織を與へ、特に其等を大小二乘と經律論の三藏に分類した功績は實に偉大なものであるけれど

も、兎に角その撰集が二ヶ月といふ極めて短い期間になされたものである爲に、其等の聖典を一々具體的に查考する時間が存しなかつた爲に、その内容の點に至ると可成り杜撰なものが存して居るといふ憾みがある。故に、本録を見るものは常に本録を修正した彦琮録と之を對照して見ることを忘れてはならないのである。

猶本録の撰者は法經等の二十大徳であるといふ事だけは明かになつて居るが、二十大徳の人名は明かになつて居らない。歴代三寶紀の如き、もその卷第十二に揚化寺沙門明穆、條分を區域して絃絡を指蹤し日嚴寺の沙門彦琮維摩觀縷し同異を考校すると云へるもの以外に、一々の詳細が傳へられない。恐らく大興善寺翻經沙門中の優秀なるものを網羅したものであらう。この大興善寺は隋朝に於ける翻譯の中心道場であつて、全國の碩徳が此處に集つて居つて、元魏世婆羅門優婆塞羅曼般若流支、北天竺烏場國三藏毘尼多流支、同じく明玄統那連

提耶舍北天竺毘陀羅國三藏那那多等の如きも、皆當寺に於て譯經に従事し、當時の大興善寺には成都の沙門智鏡、昭玄都靈藏陳留沙門僧榮、成都沙門釋僧現等を始め長安洪度の如き諸徳が居つたから、此等の僧榮、僧現、洪度の如きもその中に居つたかも知れない。又、開皇十二年、毘陀羅國三藏那那多の大興善寺に入るや、僧休、法榮、法經、慧藏、洪遠、慧遠、法纂、僧暉、明穆、曇遷等の二十大徳に勅して大興善寺に住せしめ、始末を監掌し、指歸を詮定せしめられたと傳へられて居る。この十大徳中の明穆は揚化寺の明穆である。法經録は、前述の如く、開皇十四年五月十日の勅命に基き、七月十四日に淨寫を終り上獻したのであるから、勿論此等の諸徳がその二十大徳の中に含まれて居つたであらうことは、蓋し推測に難くない。唯この中の慧遠は淨影寺の慧遠であつて、前記の十大徳の員に備つて居つたけれども、開皇十二年の六月に示寂して居るから、法經録の撰集には加つて居らなかつたものと見なければならぬ。又歴代三寶紀の撰集者費長房も、後に説く如く本録撰集の二十大徳の一員であつたものやうである。

●【參考】 內典錄第一〇、開元錄第二〇、貞元錄第三〇 (林屋友次郎)

●【衆經目錄】 ①(日)Shin-kyo-mokuroku Ku. (支)Chung-ching-mu-tu. 仁壽內典錄、隋五卷錄、仁壽錄、彥暲錄 ②五卷 ③存、大正五五・一五〇 No. 2147、縮結二、卅三五・三、北1088席、南1077席、元1069

席、明北1602宗、清1513尹、至1558多士、  
明南1591郡 ④隋彦球撰 ⑤仁壽二(A.  
D. 602)

⑥本録は法經錄撰集後十年、又歴代三寶紀より述ること六年、隋文帝の仁壽二年(A. D. 602)、大興善寺翻經學士釋彦球を主班とする同寺の翻經沙門が、勅命を受けて撰集したものであつて、五卷より成る一切經目錄である。本録は或意味からは法經錄の延長とも見られるものであつて、現に大普寧寺大藏目錄の如きはこの兩者を總稱して、衆經目錄十二卷となして居る位である。その題名は具には、隋仁壽內典録と云ひ、略して單に仁壽録、又首班者の名に依て彦球録、或は五卷より成立して居るから五卷録とも云はれて居る。曩の法經録はその項に於て説明せる如く、その内容聖典をば一々具體的に當つて之を作製したものではなく、従前の諸經錄の記載を資料として忽々の間に作られたものである。その結果として異名同經が別經の如く記載せられて重複し、或は大小二乘、經律論の三藏の配當を誤れる如き、實際と合致しないものを甚だ多く藏して居つたのである。斯の如き缺陷も法經錄の編纂の當時に於ては全く止むを得なかつたところであるけれども、この法經錄が基本となつて實際に各地の流行經を集めて見ると、法經錄の上に存した缺點が自ら暴露されざるを得なかつたのである。元來、法經錄が勅撰せしめられた理由は一切經の内容を確定し、各地の經藏に一切經を官寫する基準を與へると云ふこと

がその主たる目的であつたのに、その基準となるべき目錄に斯る缺陷が暴露されて來ては、この法經錄を再治修正するか、或は新たに法經錄以外にもつと完全な經錄を編纂するか、何れかその一を撰ばなければならぬ、氣運に向つて來たのである。この實際的要求に應じて新たに勅撰せしめられたものが即ちこの經錄である。つまり、本録は法經錄の記載を本にして實際に官寫された經藏の内容經を具體的に對照して作られたものである爲に、その内容は法經錄に比して非常に確實性を帯びて來た譯であつて、本録の出現に依て初めて一切經の内容が確定されたと云つてよいのである。如

斯、本録は法經錄の記載を現實の經藏と對照して作つたものである爲に、その組織の如きも法經錄の組織の如く、單なる理論の上から考へられた組織を採らないで、經藏整理の實際に甚だ即したもになつて來て居るその結果として、一方に於ては法經錄に存しなかつた闕本部の如き部門も新たに作つて居るけれども、大體に於て、法經錄の組織を非常に簡單化せしめて居るのである。例へば、大小二乘の經律論の各部に存した別生經や、疑偽經を一箇所に纏めて居る如きがその一例である。今本録の内容組織を表に示すならば次の如くである。

(一) 單	大乘之部	一六一部	五七四卷
	小乘之部	一四二部	三〇〇卷
(二) 重	大乘之部	一四二部	二一九卷
	小乘之部	二九部	二六九卷
(三) 賢聖集傳	大乘之部	一七四部	四一四卷
	小乘之部	九四部	一四七卷
(四) 別	大乘之部	一一一部	一三三卷
	小乘之部	一七部	三五七卷
(五) 疑	大乘之部	二七部	三三六卷
	小乘之部	七部	三三四卷
(六) 闕	大乘之部	二〇九部	四九一卷
	小乘之部	四〇二部	七五二卷

この表に依て見るに、本録記載に係る諸經論等の總数は實に二一三三三〇七二二卷である。この數は本録の序に於て都合二一〇九部五〇五八卷と云ふものに多少の相來して居るが、これ位の相違は何れの經藏

本第一。重翻第二。別生第三。賢聖集傳第四。疑偽第五。別生疑偽不須抄寫。已外三分入藏見録。至如法寶集之流淨住子之類。還同略抄例入別生。自餘高僧傳等。詞參文史。體非淳正。事雖可尋。義無在錄。又勘古目猶有闕本。昔海內未平諸處遺落。今天下既寧。請皆請取。」と云つて居ることに依ても明かである。つまり、(一)(二)(三)の三者は現定入藏録の主體をなすものであり。闕本録は未見聖典を採求する手懸りとなるべきものであるからである。唯、本録が別生疑偽の部に屬するものを現定入藏録から除外したことは、現藏の整理上決して批難されるべきことではないのであるが、譯經史の研究に於ては、斯る別生經と雖も、大經に劣らない資料價值を持つて居るものである。然るに、本録が疑偽經は兎も角も、別生經まで書寫に及ばずとなしたが爲に、その後の經藏には別生經を除外する傾向を生じ、之が譯經史の研究に非常な不自由を與へて居る場合が尠くないのである。

⑦〔參考〕法經錄、內典録第八、靜泰録第二、開元録第二〇、貞元録第三〇 (林屋友次郎)

衆經目錄

①(日) Shu-kyo-maki Tokai (支) Chung-ching-mu-lu 靜泰録 五卷 ②存、大正五五・一八〇 No. 211a、縮精二、記三五・三、麗1083説、天1051席、指108説、N. 1008 ③靜泰撰 ④隋龍朔三—麟德二(A. D. 663—665) ⑤本録は具には大唐東京大敬愛寺一切經論目と稱せられ、又その撰集者の名に依て

靜泰錄とも云はれる。即ち、東京の大敬愛寺の一切經目錄である。この大敬愛寺の藏經は唐高宗の龍朔三年(A. D. 663)に寫經に着手し、首末三年を要した、とその序にも記載して居るから、麟德二年(A. D. 665)には完成されたものである。従て、その完成の時には本錄の撰集も終つて居る筈である。本錄の内容は、本錄自身が巻頭に「入藏見録六百八十九部二千五百三十二卷、仁壽二年、勘定三十一部二百五十八卷、貞觀九年、奉行二十部二十一卷、貞觀九年、於岡本内訪得入藏、翻得六十部六百七十卷、貞觀已來玄奘所翻、顯慶四年西明寺奉勅寫經、具錄入目錄、一十五部六百六十四卷、顯慶已來玄奘法師後所譯得龍朔三年敬愛寺奉勅寫經具錄入藏」と記載して居る如く、仁壽錄の内容をなしたる六八九部二五三三卷(これは仁壽錄に記載して居る實數とは異なる。衆經目錄五卷彦琮等撰の項參照)の聖典に、その岡本録中に存したるものにして新に訪得し得たる二〇部二一卷の聖典と仁壽錄以後貞觀九年迄に翻譯せられたる三一部一五八卷の聖典とを合したる都合七四〇部二七一一卷の聖典を収録せる玄腕錄(釋玄腕錄の項參照)に、更に、この玄腕錄以後の翻譯に係る玄奘の所翻經七五部一三三四卷を加へたるものである(この記載と目錄序中のそれとはその部數に於て一部、卷數に於て二〇卷の相違があるが、孰れかが轉寫の際に誤られたものであらう)。如斯、本錄の内容は仁壽錄に比して、(一)仁壽錄の岡本中、新たに訪得せるもの二〇部

二一卷、(二)玄腕錄に依て追加された新譯經三〇部一五八卷、(三)玄奘の翻譯經七五部一三三四卷、合計一二五部一五一三卷を追加したるに過ぎないものである爲に、本錄としては新たに組織を作ることにならず、仁壽錄の記載の上に新訪得經と新譯經とを記載して本錄を作つて居る。猶岡本錄は前記の二〇部二一卷を削除しない儘のものに記載し、それに訪得るものはその旨を下註して居る。故に、本錄の卷第一から卷第三までの記載中から前記の一三五部一五三三卷を取除けば仁壽錄の原型がそこに出て来る筈である。仁壽錄の組織は同錄の項に既に説明して置いたから、今革めてそれと同一の組織を持つ本錄に就て述べる必要はなからう。

猶、本錄を通觀する上に一寸異様の感を生ずるものは、本錄の序の直後に於て、隋の開皇十四年勅翻經沙門法經等撰の衆經目錄卷第一なるものが挿入されて居ることである。乍併、これはその卷末の後に「此二卷入藏目、貞觀九年四月、奉勅苑内寫一切經、大德持寺僧智通、共使人祕書郎褚遂良等、附新譯經校定申奏、奉勅施行」と記載して居る如く、大德持寺の僧智通が勅命に依て法經錄を修正して、藏經官寫の標準を示したものである。つまり、法經錄卷第一から岡本に屬するもの、重翻のものを除き、玄腕錄に依て追加されたものを加へ、又大集經の内容に入るべきものを従來別行として居つた如きものを整理したものである。この錄は直接に靜泰錄に關係のないものであるけれども、その時代の一切經の官寫の基準となつて居つたものである爲に、之を巻頭に掲げて置いたに過ぎないものである。(林屋友次郎)

本經は釋迦佛の俗系より説き起して、その迦毘羅衛城歸國までの佛傳を含んで居るが、その佛傳序説に相當する部分に、過去七佛乃至千佛の法系をも擧げず、釋迦佛の本生譚をも擧げずして、その肉身的血統の高貴をのみ述べたことも亦、本經の特色であらう。本經に相當する梵本はなく、西藏經典中にも同名の經典はない。漢譯中にこの異譯と稱せられるものもない。此經の譯出は宋代法賢三藏の手に成る。その譯出年は不明なれども、吾人の推定する所に依れば、宋の太宗の代で雍熙二年(A. D. 985)十月より淳化五年(A. D. 994)四月に至る九ヶ年半の間なることだけは間違ひがなからう。

二一巻、(二)玄腕錄に依て追加された新譯經三〇部一五八卷、(三)玄奘の翻譯經七五部一三三四卷、合計一二五部一五一三卷を追加したるに過ぎないものである爲に、本錄としては新たに組織を作ることにならず、仁壽錄の記載の上に新訪得經と新譯經とを記載して本錄を作つて居る。猶岡本錄は前記の二〇部二一卷を削除しない儘のものに記載し、それに訪得るものはその旨を下註して居る。故に、本錄の卷第一から卷第三までの記載中から前記の一三五部一五三三卷を取除けば仁壽錄の原型がそこに出て来る筈である。仁壽錄の組織は同錄の項に既に説明して置いたから、今革めてそれと同一の組織を持つ本錄に就て述べる必要はなからう。

猶、本錄を通觀する上に一寸異様の感を生ずるものは、本錄の序の直後に於て、隋の開皇十四年勅翻經沙門法經等撰の衆經目錄卷第一なるものが挿入されて居ることである。乍併、これはその卷末の後に「此二卷入藏目、貞觀九年四月、奉勅苑内寫一切經、大德持寺僧智通、共使人祕書郎褚遂良等、附新譯經校定申奏、奉勅施行」と記載して居る如く、大德持寺の僧智通が勅命に依て法經錄を修正して、藏經官寫の標準を示したものである。つまり、法經錄卷第一から岡本に屬するもの、重翻のものを除き、玄腕錄に依て追加されたものを加へ、又大集經の内容に入るべきものを従來別行として居つた如きものを整理したものである。この錄は直接に靜泰錄に關係のないものであるけれども、その時代の一切經の官寫の基準となつて居つたものである爲に、之を巻頭に掲げて置いたに過ぎないものである。(林屋友次郎)

存 ①寫本(京大藏・二四・四四) ②衆經要攬法偈 ①(日)Shu-kyo-yo-i fan-hi-ge. (支)Chung-ching-yao-lan-fa-chieh. ②一卷 ③疑偽經 ④[參考]内典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八 shu-idsan-kan-pan-ki. ⑤七册 ⑥存 ⑦徳川時代寫 ⑧(寶龜院) ⑨衆許摩訶帝經 ①(日)Shu-ko-ma-kai-ai-kyo. (支)Chung-fo-shu-mo-ho-i-ching. 衆許摩訶帝釋經 ②十三卷 ③存、大正三・九三三No. 191、縮辰一〇、七二五・四北1175給、南1191給、元1185給、明北854命、清55命、麗1186卿、元、859 ④宋法賢譯 ⑤雅熙二一淳化五(A. D. 985-99)推定。 ⑥(特色) 本經は本緣部に屬する佛傳である。漢譯佛傳中西藏系に屬する唯一のものであることは、本經の一特色であるが、本經が地名人名等の固有名詞を殆んど皆梵語の音そのままに譯し、而もその際用いたる漢字は悉く從來の譯經者の用いたるものと全く異なることも亦特色の一であらう。尙ほ

〔内容〕 全卷十三卷あれども品名を附せず、内容又各卷の終始と共に新たな事項を取扱つておないので一目瞭然と之を表示することが出来ぬ。従つて煩はしけれども、大綱に依つて、之を略述すれば、初巻より第二卷前半に至るまでは釋迦族の衆許王以來の王統の談で、これは大弟子目連が佛前に依り説示せるものである。以下は佛自らの説き給ふ所託胎より始まつて第三、第四、第五卷の初めまでに、父王の四門防護までを説き、以下出家苦行を述べ、第六卷にて降魔成道を説き終つてゐる。第七卷は鹿野苑初轉法輪を、第八卷は、耶舍出家より六十弟子分遣を、第九卷より第十卷の初めにかけて、三迦葉の化度説く。以下十一卷前半までに頻婆沙羅王入信を、その後半より十二卷前半に給孤獨長者の祇園精舍奉獻の事

を、その後半より經の終りまでに、迦毘羅衛城歸還、五百釋種及び烏波利の出家を述べ、以て一經十三卷の全部を終つてゐる。

本經が之を以て終り爾後の佛傳は之を載せぬが、こは本經が釋尊の歸還中尼俱陀林中に於て諸釋迦族の爲に説かれたる經典なるが爲の當然の歸結であらう。尙ほ衆許王の原語は、本經に存する音譯「三摩達多」よりすれば、南條目錄に於て推定されたる如く Sammadatta maharaja を思はせるが、吾人が諸傳を綜合して推定する所に依れば、Mahasammata でなければならぬ。國譯一切經本緣部四、本經解題參照。(寺崎修一)

衆許摩訶帝經 ①(日)Shu-ko-ma-ha-tai-kyō. 國譯衆許摩訶帝經 ②存、國譯一切經本緣部第四 ③寺崎修一譯

衆事分阿毘曇 ①(日)Shu-ji-bun-a-bi-ton. (支)Chung-shih-fen-a-pi-tan.

②十二卷 ③失譯 ④【參考】法經錄第五

衆事分阿毘曇論 ①(日)Shu-ji-bun-a-bi-ton-ron. (支)Chung-shih-fen-a-pi-tan-lun. (梵)Abhiharma-prakarana-pāda-kāstra. 衆事毘曇、衆事分阿毘曇

十二卷 ③存、大正二六・六二七No. 1541、縮冬一一、二五・六一七、北935友、南908友、元964友、明北1235陸、清1285陸、N. 1292 ④世友造、劉宋求那跋陀羅(太元一九一泰始四 A. D. 39—468)菩提耶舍(—元嘉二二 A. D. 435—)共譯 ⑤俱舍論光覽二記等によれば、佛、涅槃の後、三百年の初に至りて筏蘇密多作る。六千頌なり」云云。

⑥唐の玄奘の譯せる阿毘達磨品類足論十八

卷の舊譯で、劉宋の文帝、元嘉十二年(A. D. 435)竺僧求那跋陀羅(Gaṇadhara)が菩提耶舍 Bodhisattas と共力して揚都に譯する所であつたといふ(衆經目錄一〇—大正藏經55, 535その他)。詳細は右阿毘達磨品類足論の下參照。但し一般に新舊二本等のある場合、何れの佛典にても然る如く、今衆事分阿毘曇論と玄奘譯品類足論とを比較するときは、その間の差或は變化の迹も指摘し得る所少くはなく、詳細はまた拙譯國譯一切經毘曇部五中の註中に譲りたいが、その比較的、最も顯著なものを列出して見れば左の如し。

一、玄奘譯の辯諸處品第三中の十二處の諸門分別に於ては三十三門を列記せらるゝも、衆事分阿毘曇論分別諸入品第三中には三十二門しか出されず、墮界不墮界[= ariyānānāpariyāna]の一門を脱してゐる。但し斯論も分別攝品第六中の同準下には同じ門を入・不入として出してゐるから、此には或は單なる逸脱なりしや計られぬ。

二、玄奘譯の辯七事品第四には、大地法、大善地法、大煩惱地法、小煩惱地法等四地法を記してゐるが、衆事分阿毘曇論の分別七事品第四相應下には、中の大善地法一だけ除き、他の三地法を列るにすぎず、かくて先行の阿毘達磨界身足論に同じてゐる。

三、玄奘譯の辯攝等品第六中、六百六十九法を掲げるに對し、衆事分阿毘曇論は二法にだけ少なく、計六百六十七法を記す

るのみ。但し、これも玄奘譯の方では同二法下に有異熟・非有異熟を二度も出し

てゐるから、この相違は玄奘譯の誤に負うを保し難い。

四、また同上中、玄奘譯は四瀑流、四取二者の中の見[saṅkhāra]に關し、三界の見所斷の有漏縁及び見相應の無漏縁の無明隨眠を隨増す」とするに對し、衆事分阿毘曇の方は、見斷の有漏縁の使を、見相應の無漏縁の無明を除く」としてゐる。

五、玄奘譯の辯千問品第七には所謂千問の一に關し、(一)問、(二)釋答として論別してゐるけれども、衆事分阿毘曇論相應の千問論品第七中では、問はまづ摩特勒伽又は目錄分的に單獨に枚擧し、次で釋答は同目錄分に對する解説分的に釋答のみ列述せられてゐる。

參考(兩譯の品別對照表)

品類足論 衆事分阿毘曇論

一、辯五事品 一、五 法 品

二、辯諸智品 二、分別智品

三、辯諸處品 三、分別諸入品

四、辯七事品 四、分別七事品

五、辯隨眠品 五、分別諸使品

六、辯攝等品(一、二) 六、分別攝品

七、辯千問品(同上) 七、千問論品

八、辯擇攝品 八、擇 品

衆集經 ①(日)Shu-shū-kyō. (支)Chung-shū-king. (巴)D. 33 Saṃvāsi S.

②存、長阿含經第八(大正一・四九No. 19)

衆集經 ①(日)Shu-shū-kyō. 現代意

譯衆集經 ②存、現代意譯根本佛教第一〇論部聖典 ③羽溪了諦、甲斐實行共譯

衆生成佛長短義 ①(日)Shu-jo-to-butsu-cho-to-tan-ge. ②存 ③日成者

衆生身穢經 ①(日)Shu-jo-shū-ō-kyō. (支)Chung-sheng-shen-hai-king.

②一卷 ③失譯 ④【參考】出三藏記第四

衆生頂有鐵燄盛火熾然經 ①(日)Shu-jo-chō-u-tei-su-ma-ō-ka-wa-shen-kyō. (支)Chung-sheng-ting-yu-tieh-mo-sheng-hua-eh-hi-jan-king. ②一卷 ③失譯 ④雜阿含經第十九卷の抄出。 ⑤【參考】出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一、貞元錄第二、六

衆生未然三界經 ①(日)Shu-jo-ni-nen-san-tai-kyō. (支)Chung-sheng-mo-jan-san-tai-king. ②一卷 ③缺本

④西晉法炬(—惠帝代 A. D. 290—306—)譯 ⑤【參考】法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第一、開元錄第一、貞元錄第二、五

衆本題集 ①(日)Shu-hon-tai-shū. ②一卷 ③定慶撰 ④【參考】東域傳燈目錄卷上

衆祐經 ①(日)Shu-yū-kyō. (支)Chung-yu-king. ②一卷 ③缺 ④西晉竺法護(—泰始二—建興元 A. D. 266—313—)譯 ⑤【參考】仁壽錄第五、靜泰錄第五、武周錄第一、開元錄第一、貞元錄第二、四

譯衆集經 ②存、現代意譯根本佛教第一〇論部聖典 ③羽溪了諦、甲斐實行共譯

衆生成佛長短義 ①(日)Shu-jo-to-butsu-cho-to-tan-ge. ②存 ③日成者

衆生身穢經 ①(日)Shu-jo-shū-ō-kyō. (支)Chung-sheng-shen-hai-king.

②一卷 ③失譯 ④【參考】出三藏記第四

衆生頂有鐵燄盛火熾然經 ①(日)Shu-jo-chō-u-tei-su-ma-ō-ka-wa-shen-kyō. (支)Chung-sheng-ting-yu-tieh-mo-sheng-hua-eh-hi-jan-king. ②一卷 ③失譯 ④雜阿含經第十九卷の抄出。 ⑤【參考】出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一、貞元錄第二、六

衆生未然三界經 ①(日)Shu-jo-ni-nen-san-tai-kyō. (支)Chung-sheng-mo-jan-san-tai-king. ②一卷 ③缺本

④西晉法炬(—惠帝代 A. D. 290—306—)譯 ⑤【參考】法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第一、開元錄第一、貞元錄第二、五

衆本題集 ①(日)Shu-hon-tai-shū. ②一卷 ③定慶撰 ④【參考】東域傳燈目錄卷上

衆祐經 ①(日)Shu-yū-kyō. (支)Chung-yu-king. ②一卷 ③缺 ④西晉竺法護(—泰始二—建興元 A. D. 266—313—)譯 ⑤【參考】仁壽錄第五、靜泰錄第五、武周錄第一、開元錄第一、貞元錄第二、四

譯衆集經 ②存、現代意譯根本佛教第一〇論部聖典 ③羽溪了諦、甲斐實行共譯

衆生成佛長短義 ①(日)Shu-jo-to-butsu-cho-to-tan-ge. ②存 ③日成者

衆生身穢經 ①(日)Shu-jo-shū-ō-kyō. (支)Chung-sheng-shen-hai-king.

②一卷 ③失譯 ④【參考】出三藏記第四

衆生頂有鐵燄盛火熾然經 ①(日)Shu-jo-chō-u-tei-su-ma-ō-ka-wa-shen-kyō. (支)Chung-sheng-ting-yu-tieh-mo-sheng-hua-eh-hi-jan-king. ②一卷 ③失譯 ④雜阿含經第十九卷の抄出。 ⑤【參考】出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一、貞元錄第二、六

衆生未然三界經 ①(日)Shu-jo-ni-nen-san-tai-kyō. (支)Chung-sheng-mo-jan-san-tai-king. ②一卷 ③缺本

④西晉法炬(—惠帝代 A. D. 290—306—)譯 ⑤【參考】法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第一、開元錄第一、貞元錄第二、五

衆本題集 ①(日)Shu-hon-tai-shū. ②一卷 ③定慶撰 ④【參考】東域傳燈目錄卷上

衆祐經 ①(日)Shu-yū-kyō. (支)Chung-yu-king. ②一卷 ③缺 ④西晉竺法護(—泰始二—建興元 A. D. 266—313—)譯 ⑤【參考】仁壽錄第五、靜泰錄第五、武周錄第一、開元錄第一、貞元錄第二、四

譯衆集經 ②存、現代意譯根本佛教第一〇論部聖典 ③羽溪了諦、甲斐實行共譯

衆生成佛長短義 ①(日)Shu-jo-to-butsu-cho-to-tan-ge. ②存 ③日成者

衆生身穢經 ①(日)Shu-jo-shū-ō-kyō. (支)Chung-sheng-shen-hai-king.

②一卷 ③失譯 ④【參考】出三藏記第四

衆生頂有鐵燄盛火熾然經 ①(日)Shu-jo-chō-u-tei-su-ma-ō-ka-wa-shen-kyō. (支)Chung-sheng-ting-yu-tieh-mo-sheng-hua-eh-hi-jan-king. ②一卷 ③失譯 ④雜阿含經第十九卷の抄出。 ⑤【參考】出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一、貞元錄第二、六

衆生未然三界經 ①(日)Shu-jo-ni-nen-san-tai-kyō. (支)Chung-sheng-mo-jan-san-tai-king. ②一卷 ③缺本

④西晉法炬(—惠帝代 A. D. 290—306—)譯 ⑤【參考】法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第一、開元錄第一、貞元錄第二、五

衆本題集 ①(日)Shu-hon-tai-shū. ②一卷 ③定慶撰 ④【參考】東域傳燈目錄卷上

衆祐經 ①(日)Shu-yū-kyō. (支)Chung-yu-king. ②一卷 ③缺 ④西晉竺法護(—泰始二—建興元 A. D. 266—313—)譯 ⑤【參考】仁壽錄第五、靜泰錄第五、武周錄第一、開元錄第一、貞元錄第二、四

**衆寮清規** ①(日) Sha-ryō-shū-in-gi. ②一卷 ③存 ④道元(正治二)建長五A. D. 1200—1253)撰 ⑤辯道話、赴粥飯法、坐禪儀、坐禪箴を收む。⑥〔參考〕 禪籍日録

**衆寮箴規求寂參** ①(日) Sha-ryō-shū-in-gi-gu-jaku-san. ②一卷 ③存 ④本光陸道(安永二A. D. 1773)撰 ⑤明和六刊 ⑥(駒大)

**衆寮箴規然犀** ①(日) Sha-ryō-shū-in-gi-nen-sai. ②一卷 ③存 ④德藏齋存述 ⑤〔參考〕 禪籍日録

**衆寮箴規開解** ①(日) Sha-ryō-shū-in-gi-mon-ge. ②一卷 ③存 ④而山瑞方(天和三)明和六A. D. 1683—1769)述 ⑤寛延二刊 ⑥(駒大)

**洩勃** ①(日) Sha-botsu. ②存、護法集之内 ③玄光獨卷(寛永七)元祿一一A. D. 1630—1698) ④蒙山對客、睡庵雜記の合輯改題。⑤元祿五刊 ⑥(駒大)

**種三尊塔圖印信** ①(日) Sha-san-zon-tō-zu-in-jin. ②一杖 ③存 ④鎌倉時代寫 ⑤(寶善提院)

**種三尊六輪圖口決** ①(日) Sha-san-zon-yoku-rin-zu-kai-ketsu. ②一軸 ③存 ④足利中期寫 ⑤(金剛三昧院)

**種子界性決** ①(日) Sha-ji-kai-shū-ketsu. ②一卷 ③最澄(神護景雲元一弘仁一)A. D. 767—822)撰 ④〔參考〕 本朝台祖撰海部書目

**種子義** ①(日) Sha-ji-gi. ②一卷 ③最澄(神護景雲元一弘仁一)A. D. 767—

822)撰 ④〔參考〕 本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上

**種子義私記** ①(日) Sha-ji-gi-shi-ki. ②二卷 ③義聖述 ④〔參考〕 花嚴宗經論章疏目錄、諸宗章疏錄第二

**種子集** ①(日) Sha-ji-shū. ②二卷 ③存 ④澄禪(延寶八A. D. 1680)撰 ⑤寛文一〇刊 ⑥(龍大、研佛)(谷大、餘大一八三三)(京大、藏一六〇七)(京專)(正大、一〇六・三七、一四七)一三(高犬、奇一、五一)

**種子眞言集** ①(日) Sha-ji-shin-gon-shū. ②一冊 ③存 ④刊本(折、け、五・中・一一)

**種々御振舞御書** ①(日) Shū-zū-on furu-mai-go-shū. 御振舞書、星下書、法印祈雨鈔 ②一卷 ③存、高祖遺文錄第二十卷日蓮聖人造文ノ内大正八四・二九一No. 2698・日蓮聖人全集第一 ④日蓮(貞應元一弘安五A. D. 1222—1282) ⑤建治二(A. D. 1276)

⑥聖人自らその事蹟について記述されれば、後人この題號を置きたるなるべし。現に御振舞書と呼ばれるは、古來御振舞書、星下書、法印祈雨鈔の三書に分割して稱呼せられたるを次第の如く一書に編輯したるものなり。

敘述された事項は、文應元年より建治二年迄の聖人の事蹟である。即ち文應元年の安國論の上申より、諸宗の怨嫉となり、遂に文永八年の龍口佐渡の御難を招き、佐渡流罪の状態、閉目鈔の選述上行開顯等を述

べ、阿彌堂法印の祈雨が暴風雨を起したるを敘して眞言を破し、流罪救免の相、身延山に隠棲する所以等を述べられてゐる。一鈔の骨目は、聖人一代の值難弘通、經文符合を述べて「日蓮は日本第一の法華經の行者なり」の旨を知らしむるにある。

⑦録内啓蒙第二卷、第三十卷、御書鈔第十四卷、第十八卷、拾遺第三卷、第五卷、録内扶老第九卷、第十一卷 ⑧眞蹟身延山に在りしも焼失今無し。⑨東京靈良閣

**種種雜咒經** ①(日) Shū-zū-zō-kyō. (支) Chang-chung-tsa-chō-kyō. ②一卷 ③存、大正二一六三七No. 1337縮餘五、正一一一 ④北周闍那崛多(普通四)開皇二〇A. D. 523—600)譯

⑤本經は北周武帝の時、龍淵寺に於て譯する所其の名の示す如く、種々の小説を集めたものである。先づ最初、妙法蓮華經陀羅尼品第二十六中の六呪を出してゐる。即ち第一藥王菩薩說、第二勇施菩薩說、第三毘沙門天王說、第四持國天王說、第五十羅刹女共說、第六普賢菩薩說等と頭書して、其の呪と其の初呪の效驗を説き、次で旋塔滅罪陀羅尼、禮拜滅罪命終諸佛來迎呪、供養三寶呪、觀世音懺悔呪、金剛呪、蛇呪、坐禪安穩呪、呪願呪、金剛呪治惡鬼病、千轉陀羅尼觀世音隨心呪(四首)、第一滅罪清淨呪第二呪第三呪第四呪(七俱胝佛神呪隨一切如來意神呪、六字陀羅尼呪歸依三寶呪と頭書して、それらの呪を出し其の靈驗として一切の罪障を滅して一切の所願を得る

こと、蛇毒の散滅すること、安樂に坐禪し得ること、惡風風腫の治癒すること、惡鬼の病を除くこと、一切業障を淨除すること、瞋恚の害を除いて歡喜を得ること、四親近に敬愛せられること等を説いてゐる。(岡田契昌)

**種性義私記** ①(日) Sha-ji-gi-shi-ki. ②一卷 ③〔參考〕 花嚴宗經論章疏目錄

**種性差別集** ①(日) Sha-ji-ga-beisan-shū. (支) Chung-shing-cha-tich-chi. ②三卷 ③神助撰 ④〔參考〕 東城傳燈目錄卷下、注進法相宗章疏、諸宗章疏錄第一

**種善類聚** ①(日) Shū-zen-rui-jū. ②七卷 ③存 ④日感編 ⑤寫本(正大、一八四・二九)

**種田經** ①(日) Shū-den-kyō. (支) Chung-tien-king. ②一卷 ③雜譬喻經 ④〔參考〕 仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

**種德經** ①(日) Shū-toku-kyō. (支) Chunh-te-king. (日) D. 4 Soudaigya. S. ③存、中阿含經第一四(大正一・九四No. 26・22)

**種類集** ①(日) Shū-rui-shū. ②一卷 ③存 ④寛文七刊 ⑤(哲、な、一、左、四〇) (正大、一〇六・二一三、一四九・二一四)(京專)

**種蓮集** ①(日) Shū-ren-shū. (支) Chung-tien-chi. ②一卷 ③存、淨土聖賢錄續篇附錄 ④清代陳本仁撰 ⑤刊寫本(谷大、宗大・五〇七)(京大、藏・一、二、二)

名所行發 (名庫書) 書藏所現 ① 月年の刊寫 (書考參書釋註) 書末 ② 説解卷内 ③ 代年作者 ④ 香著 ⑤ 缺存 ⑥ 數卷 ⑦ (名書) 名題 ⑧ 號略字數

【シ】

○) 趣度世道經 ①(日) Shu-do-se-do-kyō. (支) Ch'u-tu-shih-tao-ching. ②一卷

③缺 ④失譯 ⑤【參考】出三藏記第三、法經錄第三、仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第二、第一五、貞元錄第四、第二五。

趣味と研究とに於ける名僧の戸籍調べ ①(日) Shu-mi-to-ken-kyō-to-ni-to-ke-ru-mei-si-no-ko-seki-shira-be-

②一卷 ③存 ④大橋戒後編 ⑤大正一〇刊 ⑥(立大B一六・七一) ⑦東京二松堂

趣味と修養偉人の信仰 ①(日) Shu-mi-to-shū-yō-i-jin-no-shin-ko. ②一卷 ③存 ④長沼賢海著 ⑤大正一〇刊

⑥龍大(二〇九九・二一九) 趣味の佛像 ①(日) Shu-mi-no-bu=tsu-ryō. ②一卷 ③存 ④木村小舟著

大正一四刊 ⑤正大(一〇五・七二) ⑥東京廣陵社

趣要讚經音義 ①(日) Shu-yō-san-kyō-on-gi. (支) Ch'i-yao-tsan-ching-yin-i. ②一卷 ③唐道宣(開皇一六一乾封

二A.D. 596—667) ④法花。維摩。金剛。藥師造教。五部の要經を載す。 ⑤【參考】東域傳燈目錄卷上

輸陀衛經 ①(日) Shu-ta-wei-kyō. (支) Shu-to-wei-ching. ②一卷 ③疑偽經

④【參考】出三藏記第五、法經錄第二、仁壽錄第四、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八。

鬚閑提經 ①(日) Shu-kan-dai-kyō. (支) Hsu-t'ien-ti-ching. (E) M. 57 M=

randiya S. ②存、中阿含經第三八(大正一・六七〇No. 26, 153)

受衣鉢六念法 ①(日) Ju-i-hatsu-poku-nem-pō. ②一冊 ③存 ④享保七刊

⑤(高六、一・一一) 受戒と禪血脈傳等 ①(日) Ju-kai-ryōhi-zen-kechi-mryaku-den-tō. (支) Shon-chieh & ch'an-hsieh-mo-chuan-teng.

②一卷 ③【參考】智證大師請來目錄 受戒作法 ①(日) Ju-kai-sa-hō. ②善薩戒儀 ③一卷 ④存 ⑤惠鏡 ⑥寫本 (真如藏)

受戒作法 ①(日) Ju-kai-sa-hō. ②一卷 ③存 ④惠澄擬空(安永九一文久二A.D. 1780—1862) ⑤文久三刊 ⑥(正大

一一八五・五五) 受戒作法私 ①(日) Ju-kai-sa-hō-shi. ②一卷 ③存 ④義諦記 ⑤安永

四(A.D. 1775) ⑥(來迎寺) 受戒懺悔文 ①(日) Ju-kai-san-i-te-mon. (支) Shon-chieh-ch'an-jui-wen. ②一卷 ③【參考】惠運禪師將來教法目錄

受戒成佛證 ①(日) Ju-kai-i-hō-shū. ②存、叢書本第一一 ③(帝國、一〇四・三三)

受戒前行口訣 ①(日) Ju-kai-zen-gō-kan-ketsu. ②存 ③寫本(龍大、二四二四・八二)

受戒前行夢想評釋 ①(日) Ju-kai-zen-gyō-mu-sō-hyō-shaku. ②一冊 ③存

受戒法儀 ①(日) Ju-kai-hō-gi. ②

一卷 ③存 ④興淳記 ⑤寶曆七寫(谷大、餘大・二四一八)寫本(高六、寄・一・三八)

受戒法要 ①(日) Ju-kai-hō-yō. ②一卷 ③存 ④惠澄擬空(安永九一文久二A.D. 1780—1862)述 ⑤寫本(谷大、餘大・三五〇四)哲(こ八・左・三五)(正大、一一八五・五六)

受行比丘經 ①(日) Ju-gyō-bi-ku-kyō. (支) Shon-ising-pi-ch'i-ching. ②一卷 ③失譯 ④【參考】貞元錄第八

受灌頂訖讚歎伽陀偈 ①(日) Ju-kwan-jō-katsu-san-dan-ka-da-gō. ②存、三十帖策子第二九

受五戒八戒文 ①(日) Ju-go-tai-hak-kai-mon. (支) Shou-wu-chieh-pa-chieh-wen. ②一卷 ③存、大正一八・九四一No. 916、縮刷

④受戒の場合に朗讀する文であつて、第一に八戒の文、第二に五戒の文が示されてある。八戒の文は、第一稽首請證明品、第二洗儀往業品、第三得戒三歸品、第四門持說品、第五廻向發願品に於て示され、八戒の名は、此の中で、第四問持說品に擧げられてある。次に五戒の文は、第一發誠啓誓章、第二悔過先罪章、第三轉邪歸敬章、第四說相令修章、第五廻向願海章の五章に於て明され、五戒の名は第四說相合修章に於て列記してある。(神林隆淨)

受歲經 ①(日) Ju-sai-kyō. (支) Shou-sai-ching. ②一卷 ③失譯 ④【參考】出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四

受歲經 ①(日) Ju-sai-kyō. (支) Shou-sai-ching. (E) Anumina-S. (M. 15) ②一卷 ③存、大正一・八四二No. 58、縮刷

八、四一四・一 ④竺法護譯 ⑤西晉泰始二—建興元(A.D. 266—313) ⑥この經典はM. 15. Anumina S. 中阿含八九經比丘請經大正一・五七一中の異譯單行經であつて、受歲即ち安居の後の自恣(じやじつら、自らを省み、他に自分の過誤を正されんことを請ふこと)に就て、目連が比丘等にその用意を物語るものである。比丘が反戻にして難教であり、惡法と俱なれば、他はその人に擧罪せず歎へず願みない。然らざれば他は喜んで擧罪し教誡するものであることを説いたのである。三本を比較すると、この受歲經と中阿含八九經とは場所を王舍城の竹林精舎としてゐるが、M. のみ Pāṇṣa の Samsamāna sīti となし、且つ自恣の求め方も受歲經と中阿含は委しく、M. は簡單であり、又自恣を求めて、求めた比丘の態度に依つて擧罪するかせぬかに就ても、受歲經と中阿含は慚愧と無自讚毀他を入れてゐるのに、M. のみないと云ふ風に入、受歲經と中阿含と相通じ、M. のみ異なつてゐる。故に受歲經は中阿含八九經の同じい原本の譯であるか、又は最も近い原本をもととした翻譯である。(赤沼智善)

受地作法 ①(日) Ju-ji-sa-hō. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第三九一四〇阿婆縛抄之内 ④承澄(元久二—弘安五A.D. 1205—1282)撰

受持阿彌陀經行願儀 ①(日) Ju

持阿彌陀經行願儀 ①(日) Ju



ji-ta-mi-da-kyō-kyō-gwan-san. (支) Shou-chih-é-mi-to-ching-ling-yuan-i. 受持佛說阿彌陀經行願儀 ②一卷 ③存、淨土十要第二 ④明成時(一康熙一七A. D. 1678)撰 ⑤寶曆十二刊(龍大、二四一五・一〇一)安永三刊(龍大、二〇三・二九)光緒二〇刊(谷大宗大・四五三)

受持經

①(日) Ju-ti-kyō. (支) Shou-chih-é-mi-to-ching. ②一卷 ③失譯 ④中阿含經第三十卷及雜阿含經第三十五卷の抄出。

⑦【參考】出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

受持七佛名號所生功德經

①(日) Ju-ti-shich-butsu-myō-gō-shō-shō-ku-dok-kyō. (支) Shou-chih-é-mi-to-ching-ling-yuan-i. 受持七佛名號經、稱讚七佛名號功德經、七佛名號功德經、七佛名經 ②一卷 ③存、大正一四・一〇七No. 426、縮黃四、正二・六、北493景、南507景、元501景、明北534維、清554維、麗491經、天502景、指467羊、法477羊、至440經、明南590維、N. 538 ④唐玄奘(仁壽二—麟德元A. D. 602—664)譯

①佛、誓多林孤獨園に住し舍利子に對し七佛の名號受持者の功德を説き給ふ所のものである。その七佛は夫々現に東方南方の佛土にて大衆の爲めに純一圓滿微妙の法を説いてゐる。

受

常に宿命を識り、佛名を受持する者は所生處に隨つて心愚癡を離れ天人中に於いて諸の妙樂を受け、佛形像を建立して供養恭敬尊重讃嘆する者は在所生に隨つて常に佛に値ふを得て速かに無上正等菩提を證す。

同様に東方妙覺衆德莊嚴佛土の妙功德住吉祥如來の名號によつては一切の八難を越え、心常に聰慧にして恒に善趣に居し諸の妙樂を受け、常に佛を值うを得て一切波羅蜜多を修行して大導師と成つて無量の衆を度し、東方衆生主土の一寶蓋王如來の名號によつては一切の愛苦を遠離するを得て

除き、大威徳を具して神通自在にして身に光明を帯び形貌端嚴にして衆の樂見する所と成り、常に無佛世界に生ぜざること無く菩薩行を修して無上覺を成じ一切を饒益し、東方自在力士の善逝定迹如來の名號によつては心便ち寂靜にして諸の諛雜を離れ、身の四威儀は若しは語り若しは默するも心常に定に在り、常に佛に値ふを得て速かに能く諸の等持門を究竟し兩足尊と成つて無量の衆を度し、東方最勝寶土の寶華光吉祥如來の名號によつては勝念慧行を具足するを得て四衆中に處して説法無畏言詞咸肅にして聞くもの皆敬受し、念慧行を具して猛利智を成じ勝聞持を得、常に如來に値ふて辯才無礙にして廣く妙法を宣へ漸次福慧資糧を習修して天人尊と成て無量の衆を度し、南方寂靜珠土の超無邊迹如來の名號によつては其の心泰然として擾亂さることなく、速かに月光勝定を證し慧いで死伽

沙等三摩地門を證し、常に佛に值うを得て速かに無上菩提を證し、南方最上香土の妙香王如來の名號によつては身心調暢にして諸の塵重を離れ惡業消滅して煩惱輕微となり、三十二大丈夫相を具し一切有情の同じく瞻仰する所となり、速かに阿耨多羅三藐三菩提を證すと説く。

斯く説き終つて最後に佛は舍利子に向つて、名號を開き受持し供養する者必ず上述の如き功德を得るの所以は、七佛の名號色像は皆本願大悲所成に由る故であると結んでゐる。

受持佛名不墮惡趣經

①(日) Ju-ti-butsu-myō-ju-da-aku-shū-kyō. (支) Shou-chih-é-mi-to-ching-ling-yuan-i. 受持佛名不墮惡趣經

②一卷 ③失譯 ④後漢安世高(一建和二—建寧三A. D. 148—170)譯 ⑦【參考】出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、三寶紀第四、內典錄第一、武周錄第一一、開元錄第一、第一四、貞元錄第二、第二四

受食五觀訓蒙

①(日) Ju-ji-é-go-ku-an-kun-mō. ②一卷 ③存、面山瑞方(天和三—明和六A. D. 1683—1769)述

④享保二〇刊 ⑤(谷大餘大・二七〇六)(駒大)

受食作法

①(日) Ju-ji-é-sō-hō ②一覺錢(嘉保二—康治二A. D. 1095—1143)

⑦【參考】諸宗章疏錄第三

受食思惟經

①(日) Ju-ji-é-shi-yui-kyō. (支) Shou-shih-é-shi-wei-ching. ②一

卷 ③失譯 ⑦【參考】法經錄第四、仁壽

錄第三、靜泰錄第三、第四、武周錄第一一 ③存 ④寫本(高大、寄・一・六五)(金剛三昧院)(寶菩提院)

受者加持並高座

①(日) Ju-sha-ka-ji-narabini-ko-za. ②一紙 ③存、南

受者加持並三昧耶戒作法

①(日) Ju-sha-ka-ji-narabini-san-mai-ya-kai-sa-ji. ②一紙 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

受者作法

①(日) Ju-sha-sō-hō. ②一帖 ③存 ④德川時代寫

受者作法並頌文

①(日) Ju-sha-sō-hō-narabini-ju-mon. ③寶院受者作法

受者頌文

①(日) Ju-sha-ju-mon. ②一紙 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

受者年記之事

①(日) Ju-sha-nen-ki-to-koto. ②一紙 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

受者表白並頌文

①(日) Ju-sha-ryo-byaku-narabini-ju-mon. ②一帖 ③存

受者用意

①(日) Ju-sha-yō-i. ②一帖 ③存 ④鎌倉、足利時代寫 ⑤(寶龜院)(金剛三昧院)

受者用意印明

①(日) Ju-sha-yō-i-mō. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶菩提院)(寶龜院)

受十善戒經

①(日) Ju-jū-shan-kai-kyō (支) Shou-shih-shan-chieh-ching. ②一卷 ③存、大正二四・一〇三三No. 1486. 縮列一、二一七・二 ④失譯

①十善戒を説けるもの。十惡業品第一と十施報法品第二に分る。十惡業品は、十惡を除いて十善戒を守るべきを説き、十善戒及び八齋戒を受くる作法を掲げ、十施報品は、十惡たる殺生、偷盜、邪淫、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪欲、瞋恚、愚痴について、委しく惡報の相を説き、それを除いて十善を守る功德を説く。

大藏經の題下には「後漢失譯人名」とあるが、これは開元錄第十二に記すところ、その本は歴代三寶記第四の後漢失譯に列名するにあるが、さほど古いものではない。出三藏記集第四には新集失譯録に入れてゐる。これを大乘律の部に編入したのも開元錄が始めである。この經は十惡の罪過を主として説き十善に向はしむるものであるが、十善の功德を専ら説くものに十善業道經(唐實叉難陀譯)がある。

⑦(參考) 出三藏記集第四、三寶記第四、法經錄第二、彥暉錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一二、貞元錄第二二 (大野法道)

受十善戒經 ①(日) Ju-jū-shan-kai-kyō (支) Shou-shih-shan-chieh-ching. ②一卷 ③失譯 ④(參考) 出三藏記集第四、法經錄第三、三寶記第四、第七、仁壽錄第三、靜泰錄第三、內典錄第一、武周錄第一、開元錄第一、貞元錄第二

受職功德鈔

①(日) Ju-shoku-ku-ten (支) Shou-shih-shan-chieh-fa. ②一卷 ③失譯 ④(參考) 內典錄第三

存、高祖遺文錄十三卷十七、日蓮聖人遺文之内(八四二—八四九)縮箱一〇、祖書要津之内 ①日蓮(貞應元—弘安五 A. D. 1232—1292) ②文永九(A. D. 1272) ③弟子最速房に與へて受職灌頂を得る人の功德の法門を説ける書である。法華實教に、聖者よりも凡夫に、善人よりも惡人に、上位よりも下位に、持戒よりも毀戒に、正見よりも邪見に、利根よりも鈍根に、高貴よりも下賤に、男よりも女に、人天よりも畜生に授職する數であつて、これ等皆當位に即妙覺の極位たるべきを論じ、次に功德に約して、道俗の二を分ち、その各々に修學解了の授職、信行の授職を分ちて自利利他を兼ね行するを最勝とするを明した書である。

⑦(參考) 東域傳燈目錄卷下

受大尼戒法則 ①(日) Ju-dai-ni-hō (支) Shou-shih-shan-chieh-fa. ②一卷 ③失譯 ④(參考) 東域傳燈目錄卷下

受難の親鸞

①(日) Ju-nan-no-shin (支) Shou-shih-shan-chieh-fa. ②一卷 ③存、慈雲尊者全集第六輯之内 ④慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804) ⑤寶曆五(A. D. 1755)

①正學女法與が具足戒を受けたいと乞ひしとき、二部の衆未だ滿たざるため通受に依つてこの法則を草したと尊者自ら與書せられてゐる。

⑦(參考) 東域傳燈目錄卷下

受菩薩戒儀 ①(日) Ju-ho-sak-kai-ki (支) Shou-shih-shan-chieh-fa. ②一卷 ③存、慈雲尊者全集第六輯之内 ④慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804) ⑤寶曆五(A. D. 1755)

受不施法理之事

①(日) Ju-ku-shi-ri-jō (支) Shou-shih-shan-chieh-fa. ②一卷 ③存、日蓮撰

①本書は天台大師の師である南岳大師惠思の眞撰であれば、支那撰述に係る大乘受戒儀として最古のものに屬するが、恐らく梁陳時代の「惠思」ではなく、寧ろ五代以後の「南岳沙門釋惠思(本書撰者の名)ではなからうか。本書の正受戒の次に記してある啓文によれば大元時代の惠思なるが如くに考へられる。但し元時代の惠思は僧傳に記されてゐない。南岳大師に戒儀の撰述があつたことは傳教大師將來目錄(台州錄)に「受菩薩戒文一卷。南岳大師說。七紙」とあるから事實疑ふべからず。然るに同目錄に「受菩薩戒文一卷。荆溪和尚撰。一十紙」とある。此で南岳と荆溪との戒儀の紙數を(七紙・一〇一)に就いて比較すると荆溪の戒儀は僅かに三紙に收まるが、惠思の戒儀は五紙に及んでゐる。かくの如く兩書の紙數が將來錄とは反對になつてゐることは寫本であるとしても分量の相違上から疑はしくなる。單に分量問題のみで梁陳の惠思撰に非ずと決すべきではなからうと思はれるが、本書と宋代の元照及び蓮式の戒儀とを比較する時、頗る類似點が認められる。又梁陳の惠思傳を見ても戒儀撰述のことを記してゐない。故に本書は梁陳時代の惠思撰述ではなく宋元時代の惠思の撰述であらうと思ふ。乍然、智證大師朱書の授菩薩戒儀を見ると南岳大師の戒儀の文であるとして本書の正受戒の一段を朱書してゐる。若し

⑦(參考) 東域傳燈目錄卷下

名所行發 (名庫書) 者屬所現 ① 月年の刊寫 (書考家書釋註) 書末 ② 説解容内 ③ 代年作者 ④ 著者 ⑤ 缺存 ⑥ 數卷 ⑦ (名書) 名題 ⑧ 號略字數

この朱書の説によれば本書は確實に梁陳時代の南岳大師の撰述である。更に可考。本書は大乗戒法を受くるには先づ傳授戒師一人を請ずべしといひ、請戒師法を述べ、次に戒師の説戒開導。次に菩薩戒の八種殊勝を出し。次に五法を觀じ、次に三願を興ししめ、次に四弘誓願を發せしめ、次に佛菩薩の戒師を奉請し、次に戒和尚等を敬禮し、次に三歸を授け、次に遮難を問ひ、次に正受戒。「先づ三相(三聚淨戒)を示し、次に十重戒を授く。次に佛菩薩等を禮謝して終る。

【参考】傳授大師將來目錄(台州錄)。東域傳燈目錄卷下。授菩薩戒儀智證大師朱書(傳授大師全集四・二三) (田島德音)

**受菩薩戒口訣** ①(日) Ju-to-sak-kai-ku-kuetsu. ②存 ③寫本(龍大、二四二四・八一)

**受菩薩戒羯磨儀軌** ①(日) Ju-to-sak-kai-kam-mu-gi-ki. ②一卷 ③存 ④敬首(天和三—寬延元 A. D. 1683—1748)集 ⑤寫本(正大、一一八五・四〇)

**受菩薩戒次第第十法** ①(日) Ju-to-sak-kai-shi-dai-jip-pa. (支) Shou-p'i-u-sa-ichih-tzu-u-shih-fa. ②一卷 ③缺 ④後漢代失譯 ⑤【参考】出三藏記第四、三寶紀第四、內典錄第一、武周錄第一、開元錄第一、第一四、貞元錄第二、第二四

**受菩薩戒心要略說** ①(日) Ju-to-sak-kai-shin-yo-yaku-setsu. ②一冊

**受菩薩戒法** ①(日) Ju-to-sak-kai ②存 ③刊本(哲、む・七・右・二)

④存、勸發菩提心集卷下(正續二・三・二) ⑤唐慧沼(一開元二 A. D. 714)撰

**受菩薩戒法** ①(日) Ju-to-sak-kai-ho. (支) Shou-p'u-sa-chieh-fa. 受菩薩戒法並序 ②一卷 ③存、正續二・一〇・一 ④宋延壽(唐天祐元—宋開寶八 A. D. 904—975)撰

⑤本書は菩薩戒授受の功德を敬禪淨三門一致の態度で述べ、菩薩戒を以て一切行の根本となすべしと主張したもの。本書は大吳越國惠日永明寺智覺禪師延壽(傳は宋高僧傳二八。傳燈錄二六等)が「受菩薩戒法」を集録し併せてこれが「序」を記したものの如くに考へられる。故に本書は序と受戒法との二部から成るべきである。然るに本書は「序」だけが寫傳され、「受戒法」は散逸したようである。思ふに本書の最終に「梵網菩薩戒儀」とあるのは、序が終つて次に受戒法に移る。其の第一行が残つたものであらう。要するに受戒法は寫されずに終つた結果、序だけが現存するに至つたのであらう。若し然らずとすれば本書は題號と内容とが一致しないから。本書は先づ菩薩戒の名稱を解説してあるが、この説は教禪一致の戒學を説示したものであつて、宋代の戒學研究上の好資料の一。次に八番の問答を重ね、菩薩戒は凡夫の往生業なることを力説してある。この思想は明かに戒稱一致の思想である。我國の戒淨不二の戒學と時代も共通してあることは注目をする。惟ふに日支戒學交渉史上研究すべき好題目であ

らる。

**受菩薩戒文** ①(日) Ju-to-sak-kai-mon. (支) Shou-p'u-sa-chieh-wen. ②一卷 ③陳慧思(天監一四—太建九 A. D. 515—577)述 ④【参考】傳授大師將來台州錄、東域傳燈目錄卷下

**受菩薩戒文** ①(日) Ju-to-sak-kai-mon. (支) Shou-p'u-sa-chieh-wen. ②一卷 ③湛然(皇朝二—建中三 A. D. 711—752)撰 ④【参考】傳授大師將來台州錄、東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第一、日本國承和五年入唐求法目錄

**受菩提心戒儀** ①(日) Ju-to-dai-shin-kai-ri. (支) Shou-p'i-ti-hsin-chi-shin-kai-ri. 授灌頂金剛最上乘菩提心戒義、授發菩提心戒 ②一卷 ③存、大正一八・九四〇No. 915、縮刷一、正二七・二、三十帖策子第三〇 ④唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)撰

⑤本書は眞言密教の受法の弟子が、菩提心戒を授かる時の戒儀の文で、五家一句の偈文から成つてある。(1)稽首禮佛、(2)普供養、(3)懺悔、(4)懺悔滅罪、(5)三歸依、(6)五大願、(7)受菩提心戒、(8)懺悔の文、以上がその重なるものであるが、通佛教の重要な戒法を悉く網羅し、その上に發菩提心戒をして、密教特異の戒を出し、最上乘教受發菩提心戒懺悔文に五逆罪等を懺悔することに成つてある。衆生無邊誓願度の五大願は、密教獨特の誓願であるが、此の戒儀に於て示されてあることは、

特に注意して讀く可きである。(神林隆淨)

**受菩提心戒儀** ①(日) Ju-to-dai-shin-kai-ri. 國譯受菩提心戒儀 ②一卷 ③存、國譯密教經軌部第一 ④塚本賢曉譯

**受菩提心戒儀** ①(日) Ju-to-dai-shin-kai-ri. 國譯受菩提心戒儀 ③存、國譯密教部第三 ④神林隆淨譯 一切經密教部第三

**受菩提心戒儀** ①(日) Ju-to-dai-shin-kai-ri. (支) Shou-p'i-ti-hsin-chieh-i. ②一卷 ③唐澄觀(開元二五—開成三 A. D. 737—838)述 ④【参考】花嚴宗經論章疏目錄

**受菩提心戒儀** ①(日) Ju-to-dai-shin-kai-ri. 科註受菩提心戒儀 ②一卷 ③存 ④龍雲空性(貞享頃。A. D. 1684—1687)述 ⑤元祿一〇刊 ⑥(龍大、二四一八・八八)(正大、二一八四、一五六)

**受法經** ①(日) Ju-to-kyo. (支) Shou-fa-ching. (日) M. 45 Cūḷa-Dhammasūṭṭa-dāna S. M. 46 Mahā-Dhammasūṭṭa-dāna S. ②存、中阿含經第四五(大正一・七一—一七二)No. 26, 174—175)

**受法經** ①(日) Ju-to-kyo. 意譯受法經 ②存、現代意譯根本佛敎經典叢書第三中阿含經抄 ③鳥越道眼譯

**受法最要** ①(日) Ju-to-sai-yo. 授法最要 ②二卷 ③存 ④淨嚴(寬永一六—元祿一五 A. D. 1639—1702)述 ⑤寬永四刊(谷大、餘大・二九三)(京大、一・二六・五二)元祿一一寫(正大、一一八五・四七)寫本(帝國、二一四・八七)徳川時代寫(寶龜院)

**受法次第** ①(日) Ju-to-shi-dai. ②存

③存

④存

⑤存

⑥存

⑦存



一卷 ④存 ①澄尋記 ②弘安一〇寫 ③(南溪藏)

受法指南鈔 ①(日) Ju-hō-shi-nan-shō. ②一卷 ④存 ①寫本(龍大、二六一三・一二)享保一一寫(寶善提院)

受法用心集 ①(日) Ju-hō-yō-jin-shū. 破邪歸正鈔 ②二卷 ④存 ①正定(建保三—文永五後 A. D. 1215—1268—)撰

受明灌頂作法次第 ①(日) Ju-myō-kwan-jō-sa-hō-shi-dai. ②二卷 ④存

受明灌頂作法私記 ①(日) Ju-myō-kwan-jō-sa-hō-shi-ki. ②二册 ④存

受明灌頂再三阿闍梨位一度事 ①(日) Ju-myō-kwan-jō-sai-san-ichū-ri-ichi-do-no-koto. ①一帖 ④存 ②寶永二寫 ③(寶龜院)

受明灌頂私記 ①(日) Ju-myō-kwan-jō-shi-ki-kuan-mon. ②一册 ④存

受明灌頂初後夜作法 ①(日) Ju-myō-kwan-jō-sho-go-ya-sa-hō. ②二帖

受明灌頂花包紙 ①(日) Ju-myō-kwan-jō-to-ke-tsutsumi-gami. ②二包

受明灌頂用意私記 ①(日) Ju-myō-kwan-jō-yō-i-shi-ki. ②一帖 ④存

方常記 ⑤寛政一二寫 ④(寶龜院)

受用三水要行法 ①(日) Ju-yō-san-zai-yō-hō. (支) Shou-yung-san-shui-yao-hsing-fa. 受用三水要法 ②一卷 ④存、大正四五・九〇(No. 1902) 縮卷六、

③三〇・八 ④義淨(貞觀九—先天二 A. D. 635—713)撰 ⑤唐嗣聖一四—開元元 (A. D. 697—713)

⑥本書は佛敎家に於ける僧俗の飲用及び洗條に關する三種用水の性質使用法を明せるも、著者義淨は聖敎を博く索めて依憑とす、彼れが印度通歴に依つて實見して來た所謂西方僧伽衆生所用法を基として、書けるものである。義淨の所謂聖敎と言ふのは有部の新舊律のことで即ち十誦律及び彼れの將來の有部毘奈耶のことである。大約千五百字の下部のもので前半は三水について説明する。三水は(一)には非時水で沙彌俗人が自手を以つて澆洗して手前のみ用ふるに足るもの、(二)には時水で手や汚染のものが直接水に觸れなく極淨の水で、比丘の用ふるもの、時非時に情に任せて飲み得るもので煎茶煮茶等に用ふるもの、(三)に觸用水で大小便向處手足洗處に用ふる等の洗滌用水を言ふので、三者の中時水について最も詳細に取扱ひ方を論じて居る。後半は専ら三水受用の過誤又は準備及び貯藏方より生ずる過失について律制に従つて六罪より一萬五千四百八十罪に至る罪の生ずることを明して居る。本書は十誦律等に虫水の使用に關して四種の禁律のあるより生じた水の使用法に關する方法で、水中の生

虫を殺さざること、比丘の飲用水は絶對なるべきことを全卷に亘つて強調して居る。

受用三水要法 ①(日) Ju-yō-san-zai-yō-hō. (支) Shou-yung-san-shui-yao-fa. 受用三水要行法 ②一卷 ④存、大正四五・九〇(No. 1902) 縮卷六、

③三〇・八 ④唐義淨(貞觀九—先天二 A. D. 635—713)撰 ⑤東城傳燈目録卷下

受欲聲經 ①(日) Ju-yoku-shō-kyō. (支) Shou-yū-sheng-ching. ②一卷 ④失譯 ⑦(參考) 貞元錄第二

呪温疫氣經 ①(日) Ju-on-yuk-ki-kyō. (支) Chou-wen-i-chi-ching. ②一卷 ④疑疑經 ⑦(參考) 武周錄第一五

呪鱗齒經 ①(日) Ju-ku-shi-kyō. (支) Chou-kin-chih-ching. 呪齒經、呪鱗齒 ②一卷 ④缺本 ①東晉竺曇無蘭(太元六一—二〇 A. D. 381—395)譯 ⑦(參考) 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第一、開元錄第一四、貞元錄第二四

呪鱗齒呪 ①(日) Ju-ku-shi-ju. (支) Chou-kin-chih-chou. ②一卷 ④失譯 ⑦(參考) 三寶紀第四、內典錄第一

呪願 ①(日) Ju-gwan. ④存、惠心僧都全集第五

①葬送の呪願文。三界無常を述ぶ、亡者に知識の敎へを信じて心佛衆生三無差別を悟り、永離生死、頓證菩提せよと勸め文を擧げて心外無別法心淨土淨云云といふ。恐く禪宗風の葬儀が流行した頃の作。故に惠心

僧都に假托して後人の偽作したものであらう。

①寫本(寶龜院)(寶善提院) (田島德普) 呪願經 ①(日) Ju-gwan-kyō. (支) Chou-yuan-ching. ②一卷 ④疑偽經 ⑦(參考) 法經錄第四、仁壽錄第四、靜泰錄第四

呪願大事 ①(日) Ju-gwan-dai-ji. ②一帖 ④存 ③德川時代寫 ④(寶龜院)

呪牙齒經 ①(日) Ju-ge-shi-kyō. (支) Chou-ya-chih-ching. ②一卷 ④缺 ①東晉竺曇無蘭(太元六一—二〇 A. D. 381—395)譯 ⑦(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

呪牙痛呪 ①(日) Ju-ge-shū-ju. (支) Chou-ya-tung-chou. 呪牙痛、呪牙痛經 ②一卷 ④失譯 ⑦(參考) 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、歷代三寶紀第四、內典錄第一

呪眼痛經 ①(日) Ju-gen-tsū-kyō. (支) Chou-yan-tung-ching. ②一卷 ④缺 ①東晉竺曇無蘭(太元六一—二〇 A. D. 381—395)譯 ⑦(參考) 法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第一、開元錄第一四、貞元錄第二四

呪眼痛呪 ①(日) Ju-gen-tsū-ju. (支) Chou-yan-tung-chou. 呪眼痛呪 ②一卷 ④失譯 ⑦(參考) 出三藏記第四、三寶紀第四、內典錄第一

呪五首 ①(日) Ju-go-shū. (支) Chou-wu-shou. 呪五首經、能滅衆罪千轉陀羅尼經 ②一卷 ④存、大正二〇・一七 No. 1034-

縮開一〇、卅一一・一、北314良、南335良、

元321良、明北326能、清326能、麗333才、

天333良、法307男、明南317改、Nj. 330

①唐玄奘(仁壽二)麟德元A. D. 602—664)

譯 ⑤麟德元(A. D. 664)

①こは單に以下の五首の眞言が列記されて  
あるだけで、序文も流通文も無いから、斷片  
的に呪文だけを集めて有るのに過ぎない。  
能滅衆罪千轉陀羅尼咒・六字(文殊)咒・七俱  
胝・佛咒一切如來隨心咒・觀自在菩薩隨心  
咒の五首が漢字音譯で出てある。尙千轉陀  
羅尼咒は更に梵字眞言が添加されてある。  
千轉陀羅尼は陀羅尼集經第五卷に出てある  
が(大正、一八、八二六)音譯が略々一致して  
居る、同經では此の陀羅尼を誦すれば、四  
重禁並に五逆罪が悉く皆な消滅すと説いて  
ある。

⑦〔參考〕 內典錄第五、譯經圖紀第四、開元  
錄第八 (神林隆淨)

⑧三首經 ①(日) Ju san shu kyō,  
(支) Chou san-shou-ching. ②一卷 ③存、  
大正二一・六四〇 No. 1338、縮成一二、卅  
一一・一、元333良、明北333能、清333能、  
天336良、明南119改、Nj. 333 ④唐地婆訶  
羅譯 ⑤儀鳳元—垂拱四年(A. D. 676—688)

①咒三首とは大輪金剛陀羅尼と日光菩薩咒  
と摩利支(Marīcī)陽燄(天咒)とである。大輪  
金剛陀羅尼を誦すること二十一遍して、一  
切の境場に入る時は、その法悉く成就すと  
あり、第二に日光菩薩の呪を一遍誦すれ  
ば、一切の障を滅し、惡魔と天災とを辟除  
すとあり、第三の摩利支天の咒を誦すれ

は、護身となると説いてある。摩利支天の  
眞言は兵法虎の巻にも出てある。

⑧齒經 ①(日) Ju shi-kyō, (支) Chou  
-chi-ching. 呪齒痛經、齒齩經 ②一卷

③存、大正二一・四九一 No. 1397、縮成一  
二、卅一一・五、北315善、南355善、元350  
善、明北38行、清38行、慶38善、天333  
善、明南33行、天382 ④東晉竺曇無蘭譯  
⑤太元六—同二〇(A. D. 381—395)

①齒痛の時、誦する所の經。佛、法、僧は三  
寶と舍利弗とに歸命し、且彼蟲王として差  
吼無の名が擧げてある。總て二百二字にし  
て、密教諸經中、最小に屬する經である。  
又此の經は陀羅尼雜集第五卷(大正藏二一、  
六〇九)咒齒痛陀羅尼と題して收められ之  
れには「淨水唵咒一遍、吐水器中咒七遍止」  
の十四字が終に加へられてある。尙ほ同集  
第八卷(大正藏二一・六二六)に大神仙赤眼  
咒牙齒齩經と題する經は、是れ亦同類の經  
と思はるゝものである。出三藏記集第四失  
譯雜經錄に「咒齒齩一卷、或云咒虫齩、或云  
咒齒。咒齒齩異本」とあるもの恐らく前の  
二經と思はるゝも詳かにし難し。

⑧呪時氣經 ①(日) Ju ji-ke-kyō, (支)  
Chou shih-ehi-ching. 呪時氣、呪時氣病經

②一卷 ③缺 ④東晉竺曇無蘭(太元六  
—二〇 A. D. 381—395)譯 ⑤〔參考〕 出  
三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜  
泰錄第三、開元錄第一四、貞元錄第二四

⑧呪時氣病經 ①(日) Ju ji-kei-kyō,  
(支) Chou shih-ehi-ching. 呪時氣、呪時氣病經

②一卷 ③缺 ④東晉竺曇無蘭(太元六  
—二〇 A. D. 381—395)譯 ⑤〔參考〕 出  
三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜  
泰錄第三、開元錄第一四、貞元錄第二四

kyō, (支) Chou shih-ehi-ching. ②一卷

③存、大正二一・四九一 No. 1396、

縮成一二、卅一一・五 ④失譯

①本經は雜部密經に屬するものにして、時  
氣(時候)病を除く法を説く。法を説く。即  
ち最初に佛と法と比丘僧と過去七佛と現在  
諸佛と未來諸佛と諸佛弟子等に歸命すと述  
べて、「阿佉尼佉尼阿佉耶尼佉尼阿昆羅慢  
多利婆池尼波提梨」等の呪を出し、更に前  
の如く三寶や七佛や未來諸師の弟子に歸命  
すと述べ、若し人時氣病を得た時は結縛繫  
身して此の呪を誦く或は又鬼神の名字等を  
書きて、是の呪を唱へば速疾に病を除くこ  
とを得と説くのである。(岡田契昌)

⑧呪腫驚發地神放鳥等 ①(日) Ju  
shu-kyō, hoju-ji-shin-ho-cho-kyō. ②一帖

③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

⑧呪小兒經 ①(日) Ju shō-ri-kyō, (支)  
Chou-ssiao-ehi-ching. ②一卷 ③存、大  
正二一・四九一 No. 1399、縮成一二、卅一  
二・五、北315善、南355善、元352善、明北  
380行、清380行、慶38善、天38善、明南  
355行、天384 ④失譯

①本經は眞言と佛法僧の三寶、と過去七佛  
に歸依することを記した、極めて簡短な  
もので、五行足らずのものである。

小兒の頭痛或は腹痛の時に誦する所の經  
である。蓋し眞言密教にては小兒を祈るに  
は本經を用ひず、訶梨帝母經に據る。但し  
仁海は咒賊經に依つて小兒を祈つたから、  
小野流にては之に據る。

⑧呪小兒經 ①(日) Ju shō-ri-kyō,  
(支) Chou-ssiao-ehi-ching. ②一卷 ③缺

④東晉竺曇無蘭(太元六—二〇 A. D. 381  
—395)譯 ⑤〔參考〕 出三藏記第四、法  
經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元  
錄第一四、貞元錄第二四。

⑧呪請雨呪止雨取血氣神呪  
①(日) Ju shō-u-ju-shū-u-shū-kei-ki-jin  
-ju. (支) Chou-ching-yū-chou-chū-ki-jin  
-chū-hsieh-ehi-shen-chou. ②一卷 ③失  
譯 ④〔參考〕 出三藏記第四。

⑧呪水經 ①(日) Ju sui-kyō, (支) Chou  
-shui-ching. ②一卷 ③缺 ④東晉竺曇  
無蘭(太元六—二〇 A. D. 381—395)譯  
⑤〔參考〕 出三藏記第四、法經錄第二、仁  
壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一四、貞  
元錄第二四。

⑧呪呪調法記大全 ①(日) Ju-so-chō  
-hō-ki-tai-zen. ②一卷 ③存 ④安永一  
〇刊 ⑤(龍大、二〇九九—一七五)

⑧呪賊 ①(日) Ju-zoku, (支) Chou-tsoi.  
辟除賊害呪、呪賊經 ②一卷 ③缺 ④後  
漢安世高(建和—建寧三 A. D. 148—  
170)譯 ⑤〔參考〕 出三藏記第四、法經  
錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄  
第一四、貞元錄第二四。

⑧呪賊經考異 ①(日) Ju-zoku-kyō-ko  
-i. ②一卷 ③存 ④如幻道空(寛文六—  
寶曆元 A. D. 1666—1751) ⑤〔參考〕 大日  
本佛教全書續刊豫定書目

⑧呪賊經法 ①(日) Ju-zoku-kyō-hō,  
(支) Chou-tsoi-kyō-hō. ②一卷 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

呪賊呪法

①(日) Ju-zoku-ju-ho. (支) Chan-tsei-choi-fa. 呪賊呪法經 ②一  
卷 ③缺 ④後漢代火譯 ⑤(參考) 三寶  
紀第四、內典錄第一、武周錄第一、開元  
錄第一、第四、貞元錄第二、第二四。

呪調法記

①(日) Ju-chu-ho-ki. 新  
撰呪調法記 ②一卷 ③存 ④岡大觀編  
⑤昭和七刊 ⑥京都藤井佐兵衛

呪土經

①(日) Ju-do-kyo. (支) Chou-  
tu-ching. ②一卷 ③失譯 ④(參考) 法  
經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周  
錄第一。

呪等傳宮大事

①(日) Ju-tu-kan-  
gi-dai-ji. ②三紙 ③存 ④徳川時代寫

呪毒

①(日) Ju-doku. (支) Chou-ai.  
呪毒經 ②一卷 ③缺 ④東晉竺曇無蘭  
〔太元六一二〇A. D. 381—393〕譯 ⑤  
〔參考〕 出三藏記第四、開元錄第一四、貞  
元錄第二四。

呪符類

①(日) Ju-fu-ru. ②一括  
③存 ④徳川時代寫 ⑤(實善提院)

呪媚經

①(日) Ju-bi-kyo. (支) Chou-  
mei-ching. 呪媚經 ②一卷 ③存、大正八  
五・一三八三No. 2082 ④疑偽經 ⑤(參  
考) 法經錄第四、仁壽錄第四、靜泰錄第  
四、開元錄第一八、貞元錄第二八。

呪魅經

①(日) Ju-mi-kyo. (支) Chou-  
mei-ching. 呪魅經 ②一卷 ③存、大正  
八五・一三八三No. 2882  
④本經はスタンイン氏蒐集の燐煌出土本にし  
て同本數部あり、各所に散在してゐる。梁

代以後隋頃までに生ぜし疑偽經の一。本經  
は僧祐の出三藏記集に見當らず、隋の開皇  
十四年(A. D. 594)七月、法經等の撰述に成  
る「衆經目錄卷第四」の疑偽目錄中(大正五  
五・一七四頁・中)に初めて出てゐるもので、  
武周刊定錄偽目(大正五五・四七三頁・中)  
にも呪魅經一卷としてゐる。但し宋・元・明  
の三本は魅を媚に作る)一經の内容は其の  
題名の示す如く、呪魅の生成より其の限  
りなき多くの殃害を書き列ね、大力菩薩の  
請問に依つて此等の魅毒を退散せしめしこ  
と、更に四天王、南無佛陀、四大龍  
王、中頭阿傍等の諸菩薩を請し、更に東  
方青帝、南方赤帝、西方白帝、北方黑帝、  
日月五星二十八宿等を集めて、呪魅人の頭  
を七分に裂き、恰も阿梨樹の枝の如くな  
して、呪魅を退散消滅せしめ、一切衆苦皆  
悉く除かれて解脱を得たることを以て終つ  
てゐる。(鳴沙餘韻解説第二部二〇一一二  
〇二頁参照)

呪目經

①(日) Ju-mok-kyo. (支) Chi-  
on-mu-ching. (梵) Caksur-vishudhana-vi-  
dya. (藏傳) ②一卷 ③存、大正二・四  
九一No. 1338、縮成一二二五、北七  
九、南六〇蓋元、七五蓋、明北七五、清七九、行  
麗七五、天七五、明南五〇行、N. 483。  
④四十二字の呪文が記され、後に若し目痛  
の時に、此の呪を誦すること七遍すれば即

ち瘡ゆとあり、極て短少なる經である。  
(神林隆淨)

呪文輯釋

①(日) Ju-mon-shu-shaku.  
②一卷 ③存 ④刊本(京大、藏・二四シ・三  
九)

授衣鉢作法

①(日) Ju-i-hatsu-  
sa-ho. 佛伽正傳授衣鉢作法 ②一卷 ③存  
④希曇 ⑤嘉永五寫 ⑥(正大、一一八五・  
四四)

授一乘菩薩比丘戒灌受法私記

①(日) Ju-ichijyo-do-sutsu-hi-ku-kai-ki=  
an-ju-to-shi-ki. ②一卷 ③存 ④慈忍  
記 ⑤寫本(叡山文庫)

授印可

①(日) Ju-in-ka. ②一帖 ③  
存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

授印信略作法

①(日) Ju-in-jin-  
ryaku-sa-ho. ②一帖 ③存 ④榮海弘  
安元一貞和三A. D. 1278—1348)記 ⑤建武  
四(A. D. 1337)

授圓頓菩薩戒儀

①(日) Ju-en-ton  
-ho-soku-kai-ji. ②一卷 ③存 ④天保  
二寫 ⑤(正大、一一八五・五四、五七)

授戒機緣

①(日) Ju-kai-ki-en. ③存  
④寫本(龍大、研眞)

授戒加行中說戒大略

①(日) Ju-  
kai-kyo-chu-soku-kai-tai-ryaku. ②1  
卷 ③存 ④寫本(駒大)

授戒家範

①(日) Ju-kai-ke-han. ②  
一卷 ③存 ④義諦記 ⑤天和三刊  
(龍大、二六一三・一)

授戒講話

①(日) Ju-kai-ko-wa. ②  
一卷 ③存 ④椎尾辨匠述 ⑤昭和六刊

①東京弘導閣  
授戒作法 ①(日) Ju-kai-sa-ho. ②1  
卷 ③存、大日本佛教全書第四〇阿婆縛鈔  
之内 ④承慶(元久二一弘安五A. D. 1205—  
1382)撰

授戒作法

①(日) Ju-kai-sa-ho. ②1  
卷 ③存 ④大准令傳述 ⑤寛政元寫  
(駒大)

授戒次第

①(日) Ju-kai-shi-dai. ②  
一卷 ③存 ④寫本(駒大)

授戒次第

①(日) Ju-kai-shi-dai. ②  
一卷 ③存 ④惠鑣記 ⑤正本(來迎寺)

授戒諸作法

①(日) Ju-kai-sho-sa-  
ho. ②一卷 ③存 ④寫本(駒大)

授戒說教

①(日) Ju-kai-sek-kyo.  
②一卷 ③存 ④松浦百英述 ⑤昭和二刊  
⑥東京鴻盟社

授戒說教附受戒の功德

①(日) Ju-  
kai-sek-kyo-tsuketari-ju-kai-no-ku-do=  
ku. ②一卷 ③存 ④雲樞泰禪(寶曆二一  
文化一三A. D. 1752—1816)述・高田道見  
〔大正一一A. D. 1923〕校 ⑤明治四二刊  
⑥(駒大)

授戒の栞

①(日) Ju-kai-no-shiori.  
②二卷 ③存 ④井上俊果編 ⑤昭和四刊  
⑥高野山眞別處開通寺

授戒布薩和讃

①(日) Ju-kai-fu-  
satsu-wa-san. ②一冊 ③存 ④(龍大、研  
眞)

授戒法

①(日) Ju-kai-ho. (支) Shou-  
chih-fa. ②1卷 ③存 ④明株宏(嘉靖  
一一一萬曆四〇A. D. 1523—1612)一說萬曆

名所行註⑩(名譯者)若藏所現⑪月年の刊寫⑫(書考卷書釋註)書末⑬説解存内⑭代年作者⑮著者⑯缺存⑰數卷⑱(名書)名題⑲號略字數

四三、年八一(一)撰 (参考) 禪籍目錄

授戒法則 (日) Ju-kai-to-soku. 二卷 存、慈雲尊者全集第六輯之内

慈雲欣光(享保三)文化元 A. D. 1718—1804) 延享五 (A. D. 1748) 集、寶曆八 (A. D. 1738) 再治

上卷には三歸、五戒、八齋戒、同自誓受、十善戒、菩薩戒の六授戒法則を收め、

下卷には出家作法、同結緣剃刀式、形同沙彌受戒作法、法同沙彌受戒式、授大戒儀の五則を收む。

寂然所持本(高貴寺) (高見寛應)

授戒濫觴 (日) Ju-kai-ran-sho. 一卷 存 京極寂明述 (参考) 禪籍目錄

授戒略儀規 (日) Ju-kai-ryaku-ri-ki. 一卷 存 寫本(谷大、餘大、三〇八五)

授記 (日) Ju-ki. 三卷 安永六刊 (立大、A. D. 1819)

授灌頂金剛最上乘菩提心戒義 (日) Ju-kwan-ju-kon-go-sai-ji-ju-to-dai-shin-kai-gi-hon. (支) Shou-kuan-tung-

授灌頂金剛最上乘菩提心戒本 (日) Ju-kwan-ju-kon-go-sai-ji-ju-to-dai-shin-kai-hon. (支) Shou-kuan-tung-

授灌頂金剛最上乘菩提心戒本 (日) Ju-kwan-ju-kon-go-sai-ji-ju-to-dai-shin-kai-hon. (支) Shou-kuan-tung-

授灌頂金剛最上乘菩提心戒本 (日) Ju-kwan-ju-kon-go-sai-ji-ju-to-dai-shin-kai-hon. (支) Shou-kuan-tung-

授灌頂金剛最上乘菩提心戒本 (日) Ju-kwan-ju-kon-go-sai-ji-ju-to-dai-shin-kai-hon. (支) Shou-kuan-tung-

授灌頂金剛最上乘菩提心戒本 (日) Ju-kwan-ju-kon-go-sai-ji-ju-to-dai-shin-kai-hon. (支) Shou-kuan-tung-

授灌頂金剛最上乘菩提心戒本 (日) Ju-kwan-ju-kon-go-sai-ji-ju-to-dai-shin-kai-hon. (支) Shou-kuan-tung-

授灌頂金剛最上乘菩提心戒本 (日) Ju-kwan-ju-kon-go-sai-ji-ju-to-dai-shin-kai-hon. (支) Shou-kuan-tung-

授灌頂金剛最上乘菩提心戒本 (日) Ju-kwan-ju-kon-go-sai-ji-ju-to-dai-shin-kai-hon. (支) Shou-kuan-tung-

授灌頂金剛最上乘菩提心戒本 (日) Ju-kwan-ju-kon-go-sai-ji-ju-to-dai-shin-kai-hon. (支) Shou-kuan-tung-

授灌頂金剛最上乘菩提心戒本 (日) Ju-kwan-ju-kon-go-sai-ji-ju-to-dai-shin-kai-hon. (支) Shou-kuan-tung-

chin-kang-tsu-shang-p'u-ti-tsun-chih-pen. 一帖 存 唐義操(一元和頃 A. D. 806—830) 集 寶治二寫 (寶壽院)

授灌頂金剛最上乘菩提心戒文 (日) Ju-kwan-ju-kon-go-sai-ji-ju-to-dai-shin-kai-mon. (支) Shou-kuan-tung-chin-kang-tsu-shang-p'u-ti-tsun-chih-pen. 受菩提心戒儀、授灌頂金剛最上乘菩提心戒義、授發菩提心戒 一卷 存、大正一八・九四〇No. 915、縮開一・二七・二

唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774) 譯 寫本(高大、一・三一)

授加行四度作法 (日) Ju-ka-ryu-ji-jin-do-gi-hon. 一帖 存 貞享四寫 (京大、一・二六・小別)

授決圓多羅義集 (日) Ju-ke-tsu-entaru-tsu-tsu-tsu-tsu. 圓多羅義集唐決、圓多羅義集、授決圓多羅義集唐決 二卷或三卷 存、日本大藏經天台宗密教章疏第一、大日本佛教全書第二八智證大師全集第四 圓多羅義集唐決の下を見よ。寛元三寫 (寶壽院)

授決集 (日) Ju-ke-sui. 祕卷(かくれたるまき) 二卷 存、大正七四・二八一No. 2367、大日本佛教全書第二六智證大師全集第二 圓珍(弘仁五—寛平三 A. D. 814—891) 撰 元慶八 (A. D. 884)

本書は智證大師圓珍が弟子良勇のために在唐の時に天台山禪林寺良諍座主から面授口決を得た覺書及び平常書留めて置いたものを集記して五十四件を獲た。これを上下

二卷に分つて授決集と名づけ良勇に授與したものである。この故に三井寺一門では本書をば祖師が全生命を投じて得た結晶であり、宗旨の秘奥を盡く集めた秘記であると尊重し、師から許可を得なければ輒く閱讀することすら出来ないものとなし、これが許可状及び授決集最秘師資相承血脈譜きへ作つて三井一流法燈相續の信としてゐる。此等によつて本書が天台宗門派教學の根本權威をなす書なることを知るべきである。又三井寺派(圓城寺派)の論議の席では本書を引證する場合には祕卷(カクレタルマキ)と稱し、直ちに本書名を呼ぶことを憚る習ひがある。尊通(應永三—永正一 A. D. 1427—1516)の扶老鈔の説によれば「本書には三本ある。第一は最初の草本で一卷。これは智證大師の親筆。この本には大綱決と六即位佛決との二決がない。第二は清書本。これは上下二卷。これも大師の親筆。第三は悟忍阿闍梨(天台宗延曆寺座主圓珍傳與批に其名が出づ。圓珍の弟子)が書寫した二卷本。この本に大師は裏書并に表(本文)の所々に加筆された云云」と。上記の如く本書は「圓珍が在唐中の面授口決の中、主要なるものを七十一歳の老齡にも係らず弟子良勇のために、元慶八年二月二十三日遺訓として録したものである。良勇(齊衡元—延長元 A. D. 824—923)は智證大師圓珍に童幼の時から隨從し研究怠らず殆んど學成るの域にまで近づいた。願れば圓珍も既に老いた。良勇も亦不惑の齡に及ばんとするに至つた。故に若し訓を

胎きないならば恐くは他功を損するであらう。この故に老を扶けて在唐の記を抽出し兼ねて附見の文を鳩めた。これが五十四件となつたから、上下に分ち授決集と名づけた。南山(道宣)の論議や祖大師(傳教大師)の戒論(顯戒論)等に準じて、先づ條目を列ね。後に次に隨つて釋した。乍然本書は敢へて一般に公表せんとして著作したものではない、只秘かに良勇に與へたものである。故に唐草及び己他の文を尋ねて之れを整理すべきものである云云」と。かく圓珍は卷首に本書製作の由來を叙述してゐる。但し茲に問題となるものは「良勇の年齡」である。天台座主記並に長史高僧略傳(寺門傳記補錄所收)によれば「良勇は延長元年寂、壽六十九」とある。これによつて逆算すれば本書撰述の元慶八年は良勇は未だ三十一歳であつて「不惑」の四十歳ではない。若し本書が正しければ傳は十歳の誤りがあるといふべく、又若し本書の文が誤りだとすれば「而立」と改むべきである。これが疑問の一。又下卷の過去七佛決五十一の裏書に「長元六年(A. D. 1033)九月日依要又記之」なる記事がある。長元六年は圓珍入滅から百四十三年後である。但し一本にはこの文はないといふ。この記年から推考する時は本書裏書は全部悉く圓珍であるか否か。これが疑問の二。猶尊通の説によれば裏書本は悟忍の寫本であつたといふから、こゝに何等の事情が潛んでゐるらしい。次は圓珍時代の論議は天台對三論法相が主眼であると思はれるのに本書は華嚴との議論が多く、

三論との評論は車數決の一あるのみ。又法相との評論は五性各別論を論未者不也決で述べたのみであること。次に新説だと思はるゝ二三を挙げれば圓頓漸三教を天台判教であるとする三種判教論。四教判教は漸教を説明するための判釋であるといふこと。四教は四乘(聲聞・緣覺・菩薩・佛)の異名なりといふこと。六七八九議を四教に配し圓教は九議を説くといふこと。「余年來思へらく菩薩の位は信位をもつて最要となす」といひ又は「圓信を源となす」といひ、信の一をもつて圓の義を成立せしめんと企てたこと。慈覺大師の説なりとして教證二道説を挙げたこと。次に唐の俗諺俚語が三四引用されてゐる。その一を挙げれば、一乘成佛を説き法相宗を五性宗といひ法相の説を破した後に「唐の兩京十道一切の兒女は皆唱へていふ和上人有南北。佛性無南北」と。次に譬喩の一を示せば、十如是決の下で一心に十界を具し、法界は如を具し、如は三世間を具すといひ、若し然らずといへば「性は出羽にあり、相は對馬にあり、體は渤海に居す」といふが如しといふ。これは政治地理の意味も含んでゐるらしい。次に引用書中に珍らしいものがある。例せば阿若疏。西明(圓測)無量義經疏。氣疏。釋批。大空論。侃智度論疏。蜀地智度疏。發正義記。惟疎大佛頂經疏。妙勝定經等。最後に五十四件を列記すれば、上巻は十八件。天台大綱決一。四教名證指掌決二。五味決三。法華不攝八教中圓教決四。車數決五。圓人斷惑不斷決六。便決隱顯義

七。須彌內芥子決八。六七八九議決九。便明七議計我々所決十。四種涅槃決十一。華嚴圓教策一。歷別決十二。便決寶塔證經義一十三。便示次品成佛決十四。又便示次品八千文決十五。便決次品遠三乘義上十六。便示次品父子老義十七。經首如是決十八。更集如是義。真緣二修文。下巻は三十六件を載す。阿難在萬二千人内決十九。無色界色決二十。却後三月決二十一。無有餘乘若二若決二十二。佛不斷性惡決二十三。叙附傍五時決二十四。この所で石鼓寺智雲の傳を記してゐる。十七地論決二十五。天親七種佛性決二十六。五十心位決二十七。便決六住退義二十八。教證二道決二十九。總想念處四句決三十。四善根位決三十一。減緣減行之決三十二。三周互具二周決三十三。八相法身二記傍正決三十四。悟有淺深決三十五。支佛不說法決三十六。論未者不也決三十八。別接通決三十九。五道六道決四十。七階成佛決四十一。乘車決四十二。常精進位決四十三。便決六千功德義四十四。十如是決四十五。天台引證不同常流決四十六。四悉檀決四十七。唯識唯心決四十八。三身佛決四十九。無情成佛決五十。過去七佛決五十一。徵他學決五十二。教中觀唯識學及諸興論者決五十三。六即位佛決五十四。方等已前般若決。以上畢。智證大師全集の本書には終りに「請傳授決集狀。授決集許可狀。授決集最秘師資相承血脈譜。授決集末鈔」を附記してある。

抄、勸勇。授決鈔、幸尊。授決集私記、曉幸。扶老鈔、尊通。談義日記二、經暹記。授決集序鈔一。授決集講述、守脫。授決集抄二、實性房。授決集私抄一。授決集表裏日記一。授決集裏書。

〔參考〕撰目類聚智證大師全集第四(田島德音)

**授決集** ①(日) Jit-kes-shu ②尊通(文明頃 A. D. 1450-1480)撰 ③(參考) 山家祖德撰述篇目集卷下

**授決集私抄** ①(日) Jit-kes-shu-shi ②一卷 ③存 ④後算記 ⑤正中三寫

**授決集草** ①(日) Jit-kes-shu-shi ②二卷 ③圓珍(弘仁五)寛平三 A. D. 814-891)說寛平四、年七八寂)撰 ④(參考) 山家祖德撰述篇目集卷上

**授決集談義日記** ①(日) Jit-kes-shu-shi-dan-gi-nik-ki ②二卷 ③存 ④經暹註 ⑤寛元元(A. D. 1243) ⑥寫本(眞如藏)

**授決鈔** ①(日) Jit-kes-shu ②十八卷 ③性眞(一正應頃 A. D. 1388-1292)撰 ④(參考) 淨土眞宗教典志第三

**授幻師跋陀羅記會** ①(日) Ju-gen-shi-da-da-ra-ki-e(支)Shou-nuan-shih-po-to-lo-chi-hui(梵) Bhadradyākara-vyākaraṇa(藏傳)(藏)Hhags-pa sgyu-ma-mkhan-bstan-po luh-bstan-pa shos-lya-ba-the-s-pa chen-pei-mdo ②一卷 ③存 ④大寶積經第八五(大正一一)四八六 No. 310 ⑤著提流志譯 ⑥唐弘道一開元一五

(A. D. 683-727)

①本經の異譯は竺法護譯(A. D. 266-313)の幻士仁賢經(同項參照)の外に歷代三寶紀第七によれば、東晉孝武帝(A. D. 373-396)の世、西域僧竺法正が幻師跋陀羅呪經として譯したものがあつたようである。

本經の内容は幻師跋陀羅の歸佛譯のうち諸法皆空の理や菩提・佛・諸法・菩薩の修行の方法乃至心の持ち方證悟の状態・結果等を説明し、かなりに大乘思想が濃厚に表はれてゐる。大體の筋は佛が王舍城に在せし時、幻化呪術を以て城中の信仰を得てゐた幻師の跋陀羅が佛の名聲を奪はんとした幻化の道場を作つて佛を供養し、却つて佛の威神力に敬服して、自分が佛を僞らんとした愚を悔いる。そして佛より世の凡てのものは幻化でないものはないといふことを教へられ、諸弟子、諸菩薩からも幻化の説明をききつゝ發明する所があつた跋陀羅は進んで質問し、佛より、諸佛には色相なければ、無見の見を以て之を見るべく、諸法は因縁生にして體性なければ、空なること、此の空に了達すれば離染清淨となることを教へられる。又佛は幻師の供養せる飲食を受けて、施者と施物と受者との三相を超えた眞の施について説かれ、質問に應じて菩提に至るべき菩薩の修行法として、一、菩提の心に於て永く退失せぬこと。二、諸の衆生に於て常に棄捨せぬこと。三、一切の善根を求めて飽かぬこと。四、正法を護持せんと大精進を起すことを説かれ、更に菩薩の四法門を四拾二種に互つて纏説せられ



る。乃て幻師は無生忍を得て昇空する。佛はそれを見て微笑せられる。阿難がその意を買れると、佛は、跋陀羅が未來に大莊嚴土に於て成佛して神變王如來と號し、其處の人民は皆大乘を信することになつてゐるからである旨を明かされる。跋陀羅は佛の記を聞いて空中より下り、佛足を頂禮して繰返し三寶に歸命すべきことを述べ、遂に比丘となつて彌勒によつて具足戒を授けられる。斯くて阿難は此の始終を記す經を何と名くべきかを訊ねるや、佛は「幻師跋陀羅に記を授くる法門」と爲すべきを答へ、如來を見、衆生のために佛事を爲さんと欲する者は之を受持・誦誦・宣説すべきことを勸奨したまひ、阿難及び跋陀羅・天・人の大衆等は歡喜して信受奉行する。(江田俊雄)

**授五戒八戒文**

①(日) Jū-ka-i-kai-huk-kai-mon. (支) Shou-wa-eh-huk-kai-chih-wen. 授五戒八戒文 ②一卷 ③存、大正一八・九四一No. 915 ④受五戒八戒文の下を見よ。⑤【参考】御請來目錄 ⑥久壽二寫(寶壽院)

**授金剛界大灌頂作法次第**

①(日) Jū-ku-ni-to-kai-ikwan-i-te-sha-ho-shi-dai. ②一卷 ③存 ④玄辭(一延喜元 A. D. 901)撰 ⑤寫本(京大、日大未・二九六)

**授三歸五戒八戒正範**

①(日) Jū-san-ki-go-kai-huk-kai-sho-han. ②一卷 ③存 ④寫本(京大・藏・二四シ・三五)

**授三昧耶及第七日夜行事**

①(日) Jū-san-ma-ya-oyū-bi-dai-shichi-nichi-ya

①貞觀六A. D. 831述 ②【参考】山家祖德撰述篇目集卷上、密乘撰述目錄 ③(日) Jū-san-ma-ya-kai-shi-dai-ya-shiki. ④一卷 ⑤存 ⑥惠頂撰 ⑦寫本(南溪藏)

**授三摩耶戒文**

①(日) Jū-san-ma-ya-kai-mon. ②一卷 ③空海(實龜五)承和(二A. D. 774-835) ④【参考】諸宗章疏錄第三

**授慈覺大師付法文**

①(日) Jū-i-kuai-dai-shi-fu-te-mon. ②存、傳教大師全集第四

③本書は弘仁十三年四月十九日前入唐大乘沙門最澄が圓仁法師に止觀の心要を付した文であるが、恐く後代の人の偽作。

**授手印決答聞書**

①(日) Jū-shū-in-ke-tō-ke-tō-ten. ②存、續淨土宗全書第一四 ③聖觀良天(一應安二A. D. 1369)述 ④此の書二卷四十八葉に過ぎない短篇であるが、淨土宗名越派聖觀良天の作である。良天は派祖尊觀より四代の法孫で、妙觀良山の門人である。此の書は良忠(淨土宗第三祖、尊觀の師)の授手印決答疑問鈔について、自派の相傳に基いて解釋を施したものである。問題に依ては他派との異説に對し批判を加ふる所が多い、例へば大結の本願文乃至十念につき白旗寂滅、三條道光は臨終に局ると爲し、名越尊觀、西谷然空、八坂慈心の三人は臨終平生に通ずと云ふ異説を擧げ、自派の平生一念業成の義を辨

じ、又た至誠心の虚實については禮阿、寂慧、尊觀の異説を擧げ、而して諸處に師良山又は先師の口傳と云つて自派の相傳を記してゐる、斯様に此の書は名越派の相傳釋義を宣明せる第二重傳書の末註である。(林彦明)

**授手印決答見聞**

①(日) Jū-shū-in-ke-tō-ke-tō-mon. ②二卷 ③存、淨土宗全書第一〇 ④唱阿性心(一正應頃 A. D. 1288-1292)述

⑤此の書二卷は淨土宗藤田派の派祖唱阿性心(又は眞に作る)の作で、その師良忠の作である授手印決答疑問鈔上下二卷に註釋を施したる末書であるが、僅に十一葉に過ぎない簡単なものである。藤田派は水沼義とも呼ぶところから水沼見聞とも云ふ。此の書製作年次は上卷尾題の奥に「本云元徳二年十一月二十八日、本云十月廿九日始之」と記され、下卷の奥書には「本云元徳四年六月十一日爲末代龜鏡書寫之沙門雖」其性愚鈍而如形波末流而拜上人草本思宿因感涙甚難抑矣」とある。此の下卷奥書は弟子傳寫の年月であることは疑なきところ、その製作は上卷奥書の如く元徳二年十月の頃であると云ふべきであらう。(林彦明)

**授手印決答受決抄**

①(日) Jū-shū-in-ke-tō-ke-tō-ke-shō. ②二卷 ③存、淨土宗全書第一〇 ④持阿良心(一元亨三A. D. 1332)記

⑤此の書は淨土宗藤田派の持阿良心が派祖性心よりの授手印に就ての口授を記したもので、文中往々私云とあるは持阿が自説を述べて師傳を訓飾したものと謂ふべきである。持阿良心は弱冠で性心に投じて刺染し、後に名越派の尊觀にもつき、又たその尊觀及び性心の師に當る淨土宗第三祖良忠にも隨侍して宗義を習ふたと云はるゝから、良心は宗義相傳には造詣あつたのである。尤も手印脈譜は性心より察けて藤田派第二世と云はれてゐる。

⑥享保九寫(正大、一五五二・七八一八〇)享保一二刊(高天寄・一一八) (林彦明)

**授手印請決**

①(日) Jū-shū-in-ke-tō-ke-tō-ke-sen. ②存、傳燈輯要卷下 ③了曉慶善(一文明一五A. D. 1483)

④此の書は増上寺開山西譽の弟子了曉慶善が、文明十四年四月八日雲翁(一蓮社峯譽と稱す)の問に答へたのを、同年六月十一日筆録して傳燈社撰纂に授けた口訣である。その雲翁の質疑と云ふは三ヶ條であつて、第一は授手印の作法に於て信法と傳法との別ある中で信法は半印とするが、その半印は左手が規定であるとして、能化の左手か所化の左手か何れであるか、當時横會根方面の傳では能化の左手を半印とするが如何と尋ねたのである。之に對し曉は能化左手にあらざる所化の左手を云ふので即ち能右所左である、其の證據には聖阿の傳心鈔に「左手印右手印是所授印非能授印ことあるに依て知るべし」と答へる。第二の質疑は初重に題號無くして何故に撰號あるやの問で、之に答へて秘藏の書であるから題號無く、文中に至て撰號置くは外題を秘するに

由ると辨ず。第三には初重巻物は善導の作と云ふ説の眞偽不審、之に十一箇條の理由を擧げてそれを否定して居るのである。

⑦【参考】 總浄土依憑章疏 ⑧寫本(大正、一五五二・二一九) (林彦明)

授手印請決清濁

①(日) Jū-shū-in-shū-kōsan-gō-dōku ②存、傳燈輯要巻下 136の撰

③此の書は延徳二年九月七日勢譽愚底(了曉の弟子)が其の師の口訣授手印請決に對する非難を辯駁した書物である。文明十六年五月英譽了月が顯授手印請決邪正義一卷を著して、了曉の信法半印は所化の左手印であると云ふを異端とし、傳心鈔に左手印右手印は所授印と云ふてゐるのは、信法半印を沙汰するので無い、授手印に斯く記されあるは所授印を示したと云ふ迄で手印作法を云ふのでない、自分の相承は信法は能化の左手印であると主張した。此了月の主張を勢譽が誤謬として攻撃したのが此の書である。信法半印の左手と云ふには異論は無いが、其左手が能化か所化かと云ふ譯であつて、互に師傳を主張した曉は西譽より其の相傳の證として血脈ありと云ひ、了月も明譽より能化左手の證たる血脈ありと云つて兩々相譲らず諍ふたものである。此は頗る奇怪な事である。西譽も明譽も共に聖阿の弟子であつて、明譽は師跡蓮常福寺を襲ひ、西譽は増上寺の開山となつたのであるのに、その師傳に此の様な差異があるとは奇怪なことであるが、各々主張を譲らな

いところから、其門下の論争となつて、勢譽に此の著作が有り、之に對して了月は又た破清濁一卷を著して居る。(林彦明)

授手印傳心鈔

①(日) Jū-shū-in-den-shū-in-shū ②存、浄土宗全書第一〇、傳燈輯要巻中 ③了譽聖阿(曆應四一應永二一七 A. D. 1341-1420)

④浄土宗五重相傳の傳書なる第二重授手印の末書である、著者聖阿は謂ゆる五重傳法の創始者であるから、その傳書の各々に末釋を造つて居るその中の隨一である。此書に於ては授手印に就て大綱と義趣との二段に分ち、大綱の中で述作の由來と深奥の旨趣とに就て辨じて居る、その述作の由來は鎮西辨阿の門下修阿と敬蓮社と至誠心の體に於て説を異にし、修阿の弟子滿願社が師に背て敬蓮社に與みしたと云ふ不信の紛紜に、辨阿が憂ひて末代の爲に宗義行相を記され口訣とされたのが授手印であることを述べ。次に奥旨は此の書を禮讚前序の傳と心得、五正行、助正、三心、五念等は結歸一行三昧と相傳さるゝのであると爲す。次に義趣とは入文解釋であつて初に序分を解説し、次に本文に就て口傳を用ゐて解釋されてある。而して其本文に於て明される法數即ち内容は六重(五正行、助正、三心、五念、四修、三種行儀)二十二件、五十五種と分たれ、それが終に一行三昧の具徳と爲すのである。その五十五の法數は圖示すれば左の如し。

(六重)(二十二件)

(五十五法數)

第一重。五種正行 讀經、禮佛、觀經、持名、讚歎、讚歎、供養、讚歎 六種

第二重。正助二行 助正、正行 二種

第三重。三心 至誠心、四句分別、深心、四句分別、同發心、四句分別、願三心、八句分別、橫三心、三句 三十種

第四重。五念門 讚歎、讚歎、讚歎、讚歎、讚歎、回觀、回觀、回觀、回觀、回觀、向察、向察、向察、向察、向察、五種

第五重。四修 無餘、無餘、無餘、無餘、無餘、長時、長時、長時、長時、長時、終時、終時、終時、終時、終時、九種

第六重。三種行儀 臨別、臨別、臨別、臨別、臨別、臨別、臨別、臨別、臨別、三種

授十善戒儀作法 ①(日) Jū-shū-kon-ten-shū ②存、前門上人全集第二 1889の述

授十八契印作法 ①(日) Jū-shū-in-shū-chi-ge-in-hō-hō ②皇慶(貞元二一永承四 A. D. 977-1049) ③【参考】 本朝台祖撰述密部書目

授灌頂口傳鈔 ①(日) Jū-shū-kan-jū-kōden-shū ②存、日蓮聖人御遺文之内 ③日蓮(貞應元一弘安五 A. D. 1222-1282) 述 ④文永一( A. D. 1274) ⑤三卷 ⑥存 ⑦宗典述 ⑧正元二寫 ⑨(寶善提院)

授禪戒作法 ①(日) Jū-zan-kai-ke-sai-hō ②一卷 ③存 ④榮西(永治元一建保三 A. D. 1141-1215) ⑤寫本(駒大) ⑥存 ⑦玄靜(一延喜元 A. D. 901)撰 ⑧寫本(京大、日大、二九六)(高天、寄一・六八)(寶善提院)

授大乘菩薩戒儀 ①(日) Jū-dai-ō-do-sak-kai-ri ②一卷 ③存、芝苑遺編卷中 ④宋元照(慶曆八一政和六 A. D. 1048-1116) 述 ⑤政和元( A. D. 1116) ⑥本書は元照が政和元年安居中衆僧のために南山律宗の本義に立脚し、受戒法は天台等古今の諸文を參詳去取し、大乘梵網戒儀を録したもの。本書は先づ大小乘戒の意義を論じ、戒に五種あり。五戒・八戒・十戒・具戒・菩薩戒これなりといひ、五八は在家士女の戒。十具は出家の五衆を攝す。この四種戒は心に隨つて大小乘に通ずるが皆これ菩薩戒のための方便である。第五の菩薩戒は純一大乘成佛の法である。この菩薩戒に兩宗がある。一は華嚴部。二は法華部。華嚴部は漸頓の受に通ずるが、法華部は漸受である。華嚴部は梵網經により、法華部は善戒經による。今は梵網經に依つて受戒法を明すといひ、四種の受法を立つ。戒法。

戒體・戒相がそれである。順次に戒法戒體等を解説し、大體に於いて天台の説を採用し、南山道宣の戒學と天台大師の戒學とを調和し、十科を列ねて戒儀を組織してゐる。この組織法は天台大師の戒疏にある六家の儀式（梵網本。地持本。高昌本。瓔珞本。新撰本。制旨本）及び古今の諸文に準據し參詳去取したものである。十科とは第一求師授法。第二請聖證明。第三歸佛求加。第四策導勸信。第五露過求悔。第六請師乞戒。第七立誓問遮。第八加法納體（兼法授戒）。第九說相示誡。第十數德發願。元照（傳は釋門正統八。佛祖統紀三〇等）の戒學は天台華嚴南山律等の融會說であるが其思想の根本を南山律に置き大乘戒學を奉じたもの。故に大局から云へば本書も亦南山律の戒學を論述したものと云ふべきである。（田島徳彦）

**授日課法則** ①(日) Jū-ritsu-hō-hō-shō. ②一卷 ③存、傳燈輯要卷中之内撰  
 ④大玄(延寶八—寶曆六 A. D. 1680—1756)

①日課念佛誓約の儀式を示したるもの。入道場、塗香觸香の後、初香偈三寶禮、二三歸三寶、三懺悔、四發心、五請師、六正授法、七回向、八證明の八項に分ち各項の下に授者と被授者との唱ふる文句が擧げてある。（原田靈道）

**授八戒文** ①(日) Jū-hachū-jai-mon. (支) Shō-hachū-jai-mon. ②一卷 ③(參考) 書寫請來法門等目錄

**授菩薩戒儀** ①(日) Jū-bō-sa-kei-ki

授

①庭儀戒儀、廣戒儀 ②一卷 ③存、大日本佛教全書第七二、續淨土宗全書第九  
 ④天台宗系の菩薩戒を授くる庭上儀式を記したるもの。先づ教授師及び僧衆等、戒和尚の房の前庭に到りて整列し、戒和尚は大衣を著して正面に坐し、侍者二人は香爐等を執つて左右に侍立し、衆僧は華鬘を執る。次に持幡童子二人、左右衆僧の間より前歩し、與を相從し、侍者は坐具を與に展べ、戒和尚は與に乗り、讚歎、教授師は香爐を執つて與の前に立ち、持幡者は與の左右に立ち、次に與を擧げて戒道場に向ふ等の行儀を記す。堂上に於ける儀式は古戒儀を用ひるといふ。本書は聖阿の顯淨土傳戒論に、「長意和尚は正しく傳戒嫡なり。故に即ち廣(庭儀)中(堂上)略(机)の三種戒儀を以て、時に隨ひ人に依りて普く之を行ひたまふ」といふ中の、廣戒儀なるもので、三種戒儀はそれより慈念乃至寂空、源空と相承し、淨土宗に相傳すといふ。（大野法道）

**授菩薩戒儀** ①(日) Jū-bō-sa-kei-ki. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第七二、續淨土宗全書第九  
 ④圓頓菩薩戒を授くる儀式を記したるもの。

荆溪の授菩薩戒儀と同一の十二門より成り、大體に於て彼書に則つた内容であるが、異なる點を擧ぐれば、隨所に執塵尾、燒香三拜、長跪合掌、戒師登座、打磬、執香爐、執如意、などの行儀を入れたこと。第四懺悔、第五發心の文を縮少し、第六問遮の後部を第七門の初部に移し、第十說相に

具さに十重禁戒を擧げ、第十二勸持門から妙觀門事具足、十乘十境といふ天台の觀心法を除いたこと等である。又續淨土宗全書本には、書後に「次念誦(或百或千)、次授與日課(二千遍)、次後供養并後讚解界奉送下座、次受者敬禮請尊及和尚出堂、次和尚敬禮諸尊出堂、右圓頓戒作法竟」といひ、淨土宗義に依る作法を附加してある。

**授菩薩戒儀** ①(日) Jū-bō-sa-kei-ki. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第一五、湛然(景雲二—建中三 A. D. 711—783)

④菩薩戒たる三聚淨戒、梵網の十重禁戒を授くる儀式を記したるもの。十二門に分たる。(一)開導は大乗戒の信仰、授戒の形式内容の完備のための六條件。(二)三歸。(三)請師は傳教師としての大徳と、授戒師としての五聖を請ふ。(四)懺悔は懺意と運心と三品の方法。(五)發心は四弘誓。(六)問遮は梵網の七遮を問ふ。(七)正授戒は三聚淨戒を授く。(八)證明。(九)現相。(一〇)說相は十重波羅夷。(一一)廣願は所生の功徳を衆生に回向し、離苦し成佛し、共に極樂界彌陀佛前に生れんことを願ふ。(一二)勸持は服藥の禁忌補養の如く、自行化他に戒徳を成就すべく、四弘六度、妙觀正助、十乘十境の天台宗の實踐を修すべしと説く。

本書は天台系の菩薩戒、即ち圓頓戒家に於て最も重視する、戒儀である。この後に作られたものは皆本書の改造に過ぎないのに依つて知らるゝ。然るに本書は劈頭に、「古徳及び梵網、瓔珞、地持、并に高昌等の文に依つて、菩薩戒を授くる行事の儀、略して十二門と爲す。専ら一家に依らずと雖も並に聖教に違せず」と言ふによりて、由來する所あるを知る。その中、梵網、瓔珞、地持、高昌の戒儀は、六朝時代に行はれたもので、天台戒疏にはこの外に新撰本、制旨本の二種を加へ、六種の戒儀の要項を擧げてある。然るに所授の一として擧ぐる「古徳」とは、誰であるか明かでないが、蓋し南岳の作と傳ふる受菩薩戒儀と、慧沼の大唐三藏法師傳西域正法藏受菩薩戒法であらう。南岳の戒儀は、唐譯八十華嚴の偈を引くこと、饒益有情戒といふ玄奘譯以後に用ひられる名稱を擧げることによつて、到底南岳の作とは認められぬが、荆溪の此の戒儀は多く南岳より採られ、殊に七遮を問ふは諸種戒儀中、南岳のみに出るもの、受戒後の說相に十重禁を説くも亦南岳を受けた。慧沼の戒儀は勸發菩提心集卷下に載せられてゐるものであるが、本書は十二門の組織に於て彼を學び、且つ文言も多く取られてゐる。荆溪が専ら一家に依らぬを告ぐるは、この玄奘系の典據あるを暗示すると見て差支へなからう。されば本書は組織を慧沼に學び、しかも内容を梵網及び瓔珞戒とし、天台宗の實踐をも加味したものである。本書を淨土教の眼で見れば、發心に觀

具さに十重禁戒を擧げ、第十二勸持門から妙觀門事具足、十乘十境といふ天台の觀心法を除いたこと等である。又續淨土宗全書本には、書後に「次念誦(或百或千)、次授與日課(二千遍)、次後供養并後讚解界奉送下座、次受者敬禮請尊及和尚出堂、次和尚敬禮諸尊出堂、右圓頓戒作法竟」といひ、淨土宗義に依る作法を附加してある。

④菩薩戒たる三聚淨戒、梵網の十重禁戒を授くる儀式を記したるもの。十二門に分たる。(一)開導は大乗戒の信仰、授戒の形式内容の完備のための六條件。(二)三歸。(三)請師は傳教師としての大徳と、授戒師としての五聖を請ふ。(四)懺悔は懺意と運心と三品の方法。(五)發心は四弘誓。(六)問遮は梵網の七遮を問ふ。(七)正授戒は三聚淨戒を授く。(八)證明。(九)現相。(一〇)說相は十重波羅夷。(一一)廣願は所生の功徳を衆生に回向し、離苦し成佛し、共に極樂界彌陀佛前に生れんことを願ふ。(一二)勸持は服藥の禁忌補養の如く、自行化他に戒徳を成就すべく、四弘六度、妙觀正助、十乘十境の天台宗の實踐を修すべしと説く。

④菩薩戒たる三聚淨戒、梵網の十重禁戒を授くる儀式を記したるもの。十二門に分たる。(一)開導は大乗戒の信仰、授戒の形式内容の完備のための六條件。(二)三歸。(三)請師は傳教師としての大徳と、授戒師としての五聖を請ふ。(四)懺悔は懺意と運心と三品の方法。(五)發心は四弘誓。(六)問遮は梵網の七遮を問ふ。(七)正授戒は三聚淨戒を授く。(八)證明。(九)現相。(一〇)說相は十重波羅夷。(一一)廣願は所生の功徳を衆生に回向し、離苦し成佛し、共に極樂界彌陀佛前に生れんことを願ふ。(一二)勸持は服藥の禁忌補養の如く、自行化他に戒徳を成就すべく、四弘六度、妙觀正助、十乘十境の天台宗の實踐を修すべしと説く。

④菩薩戒たる三聚淨戒、梵網の十重禁戒を授くる儀式を記したるもの。十二門に分たる。(一)開導は大乗戒の信仰、授戒の形式内容の完備のための六條件。(二)三歸。(三)請師は傳教師としての大徳と、授戒師としての五聖を請ふ。(四)懺悔は懺意と運心と三品の方法。(五)發心は四弘誓。(六)問遮は梵網の七遮を問ふ。(七)正授戒は三聚淨戒を授く。(八)證明。(九)現相。(一〇)說相は十重波羅夷。(一一)廣願は所生の功徳を衆生に回向し、離苦し成佛し、共に極樂界彌陀佛前に生れんことを願ふ。(一二)勸持は服藥の禁忌補養の如く、自行化他に戒徳を成就すべく、四弘六度、妙觀正助、十乘十境の天台宗の實踐を修すべしと説く。

④菩薩戒たる三聚淨戒、梵網の十重禁戒を授くる儀式を記したるもの。十二門に分たる。(一)開導は大乗戒の信仰、授戒の形式内容の完備のための六條件。(二)三歸。(三)請師は傳教師としての大徳と、授戒師としての五聖を請ふ。(四)懺悔は懺意と運心と三品の方法。(五)發心は四弘誓。(六)問遮は梵網の七遮を問ふ。(七)正授戒は三聚淨戒を授く。(八)證明。(九)現相。(一〇)說相は十重波羅夷。(一一)廣願は所生の功徳を衆生に回向し、離苦し成佛し、共に極樂界彌陀佛前に生れんことを願ふ。(一二)勸持は服藥の禁忌補養の如く、自行化他に戒徳を成就すべく、四弘六度、妙觀正助、十乘十境の天台宗の實踐を修すべしと説く。

④菩薩戒たる三聚淨戒、梵網の十重禁戒を授くる儀式を記したるもの。十二門に分たる。(一)開導は大乗戒の信仰、授戒の形式内容の完備のための六條件。(二)三歸。(三)請師は傳教師としての大徳と、授戒師としての五聖を請ふ。(四)懺悔は懺意と運心と三品の方法。(五)發心は四弘誓。(六)問遮は梵網の七遮を問ふ。(七)正授戒は三聚淨戒を授く。(八)證明。(九)現相。(一〇)說相は十重波羅夷。(一一)廣願は所生の功徳を衆生に回向し、離苦し成佛し、共に極樂界彌陀佛前に生れんことを願ふ。(一二)勸持は服藥の禁忌補養の如く、自行化他に戒徳を成就すべく、四弘六度、妙觀正助、十乘十境の天台宗の實踐を修すべしと説く。

經の念佛見佛、佛心慈悲を引き、廣願に共生極樂を言ふことが注意されるべきである。

⑦(注釋書) 要解一卷(義山)、佛祖統記第七、傳教大師台州録、東城傳燈目錄卷下、諸宗章疏録第一、蓮門經籍録卷下(大野法道)

授菩薩戒儀

①(日) Jū-hō-shū-kai  
②(日) 机受戒略戒儀 ③一卷 ④存、大日本佛教全書第七二、續淨土宗全書第九  
⑤慧亮(弘仁三)貞觀二(A. D. 812-860)  
⑥一乘菩薩戒を授くる略式を記したるもの。

次第は灑水。三禮。如來唄。表白、法界身心の摩訶毘盧舍那佛等、乃至南岳天台の列祖等を勸請し、影向を請ひ、一禮。受者は持戒功德を讃じ受戒の意を陳べ、三禮踞跪す。三歸を授け。三聚淨戒を授け。十重禁戒を授く。各三説す。更に持戒の功德を説き、滅罪生善、往生淨土、現當の悉地成就すとし、諸佛の證明を乞ふ。次に神分祈願同向にて訖る。

本書は、聖阿の顯淨土傳戒論に廣中略の三種戒儀を擧ぐる中、略戒儀といふもので、慧亮の作とし長意、慈念乃至寂空、源空相承し、それより山門神藏寺傳信、三井常寂院隆禪之を傳ふといふ。併し全長は享保二年に之を上梓するに當つて、「學者深く秘して世に行はれず。之れに依つて脈譜相承の人と雖も、未だ曾て見ざる者も間々多し。故に余、流通の廣遠ならんことを欲して、衣鉢の資を捨て、傳戒論補註と共に同じく梓に銘めて、新受戒者書寫の勞を助くと云」と言つてゐる。

⑦(参考) 蓮門經籍録卷下 (大野法道)

授菩薩戒儀

①(日) Jū-hō-shū-kai  
②(支) Shon-p'u-sa-chieh-i. ③一卷  
④存、正續二・六・一金園集卷上 ⑤宋蓮式(乾德二)明道元(A. D. 964-1032)撰

⑥本書は菩薩戒儀を十科に分け、受戒の次第を述べたもの。本書は梵網戒の受戒作法であるが、天台の戒學に基いて製作したのか、はた南山律の戒學によつたものか、其記述明確を欠く。元來支那天台宗では戒學の獨自性が明瞭に發表されてゐない。これを日本天台宗の圓戒思想に對照する場合に愈々その感を深くする。南山律が大乗律を標榜し、教禪一致の態度を四分律から主張する大膽さに比較し、天台戒が法華思想に立脚して戒學を説く力が弱く迫力が足りないのは如何なる事情によつたのか。惟ふに支那天台は止觀は禪宗に、戒は南山律に融合し、更に教宗として華嚴法相と對立的關係を結んだためであらうが、支那天台としての戒學が何故に發展性が乏しかつたのか。支那天台學が我邦に興起するや、徳川

時代に安樂律なるものとなつて特殊なる戒學を高調して支那天台戒學のために光輝を放つてゐる。本戒儀の十科とは第一開導信心。第二諸三寶諸天加護。第三歸依三寶。第四請五聖師。第五下座佛前乞戒。第六發四弘誓願。第七開遮問難。第八三番羯磨。第九諸佛證明。第十示持犯戒相である。

授菩薩戒儀

①(日) Jū-hō-shū-kai  
②一卷 ③觀尊(建仁元)正應三

⑦(参考) 諸宗章疏 A. D. 1201-1290)

授菩薩戒儀裏書

①(日) Jū-hō-shū-kai  
②(支) Shon-p'u-sa-chieh-i. ③六祖智證大師授菩薩戒儀裏書 ④存、大日本佛教全書第二六智證大師全集第二、傳教大師全集第四

⑥本書は傳教大師最澄が山城國乙訓郡山本僧伽藍千手觀自在菩薩像前で授戒した時に用ひた授菩薩戒儀に智證大師圓珍が朱書添註したもの。元來本書は傳教大師の戒儀の背面に朱書してあつたものであつたが、誰人かがこの朱書を別行して「裏書」と名けたもの。故に本書には「授菩薩戒儀」に背書した形で傳つたものと、「裏書」となつて別行したものとの二通ある。傳教大師全集四所収の戒儀と本書とがその實證である。法然上人源空が初學抄に「授菩薩戒儀。本は妙樂。註は智證」とあり、曉示鈔に「智證大師の註」を引用してあるのは戒本儀であらう。尊通の帙外新定智證大師書録に「良俊之目錄抄載「戒儀裏書」とあるのは本書のことか。本書の原型をなす授菩薩戒儀の裏書でみると承和十四年(873)五月十一日、

近江三津寺で圓敏上人が書して圓珍に與へたものである。(敬光師の膚談では圓敏與珍と讀む。圓敏の名は圓城寺傳記五六(佛全一七〇七)三井寺四至事に出づ)。圓珍が戒儀を用ゆるに至つた事情は同じく裏書に「圓珍は保則朝臣の東六條の宅で彼の一家の人々の願ひに依つて授戒するに際して本寺(延曆寺)の本を書寫した」とあるから、或は承和十四年の寫本で授戒

したことはなからうか。戒儀を圓珍が用ひた明確な年號は同じく裏書に「貞觀十一年(A. D. 865)から仁和元年(A. D. 885)まで登壇授戒を行ふ毎に件の文を用ひた」と記してある。本裏書は何年から記し初め何年まで續いたらうか。裏書には年號の記してある所とない所とがあるため正確な年號は知れない。今年號を早い年から順に記せば「貞觀十二年。同十六年。元慶五年。仁和元年。同二年。同三年。同五年(寛平元年)と七ヶ年が記されてある。貞觀十二年(A. D. 870-880)までは二十年間に涉るのである。この年間の圓珍の傳を智證大師年譜によつてみると、「貞觀十年四月三日座主安惠寂。同年六月三日圓珍は延曆寺座主に勅任。同十五年良勇登壇受戒。仁和二年尊意受大戒。寛平二年延曆寺圓衆から朝廷への上表文には「座主圓珍は座主たること二十年。木叉をもつて衆を化すること千萬人」と記す。此等の記事によれば授戒は座主職となつてから以後行ひ、その度毎に本裏書を記したものではなからうか。

若しこの推考の如しとすれば上古の叡山の授戒は座主一人のみに限つて與へられた特權であり、他の者は決して授戒會を行はなかつたものと云へる。本書は二十八箇の裏書から成る。その主要なるものを記せば、第一開導の所では、璽珞經を見るべしといひ、戒數の廣略(五八十具無量)に就いて大論の文を引き、如來一戒、金剛寶戒の文は本朝の祖師(傳教大師)が增補したものでありと記し、圓教所詮の佛即ち戒本尊は丈六

即遮那法身の如來、大日法身なりといひ、三千威儀が即ち菩薩戒なりといひ、今は純圓門に寄せて戒儀を釋すといふ。又登壇受戒は多く出家の菩薩に約すといひ、祇園圖には在家出家の菩薩戒壇があると記してゐるといふ。この説では南都戒壇と接近した主張と考へられる點が認められる。第三請師の所では「大唐和上叔の受菩薩戒」の文を引き高座兼法に就いて述ぶ。「大唐和上叔」とは誰を指すのか未詳。第四懺悔の所では佛滅を「周穆王十申」と定め授戒が佛滅何年に當るかを明示し、次に比丘戒の傳授は出家でも滿二十年以上ならざるべからずと制し、第六問遮の所では年滿二十以上の者にして菩薩三衆を受ければ比丘比丘尼と名づけるといふ。又唐の菩薩戒壇は多くは通受。別受は少ない。故に羯磨にしても年滿二十、三衣鉢具等の言を載せない。我國の菩薩戒壇は多くは別受。通受は少ない。この別受には著衣等が行れるのであるから、教に據つて年衣鉢具を記載すべし。若し然らざれば別受とならなむ。この事は當時可成重大事であつたらしいが詳細のことは知れない。第七受戒の所では瑜伽論の菩薩地品、瑜伽處戒品の授菩薩戒法、唐三藏(玄奘)譯菩薩戒羯磨文等の文を引用して善男子と在家、法弟とは出家のことであらう。論の説は通授法であると述ぶ。此の説は瑜伽戒と天台の菩薩戒との區別を明示したものである。第十説相の所では南岳大師の戒儀の文を引用してゐる。この引文と現行の南岳の戒儀の文とは一致するか

ら、南岳の戒儀は確かに梁陳の南岳惠思撰であるといへる。乍然現存南岳戒儀全部が果して南岳撰であらうか、多少の疑點がある。本書の文によつて南岳戒儀が眞撰たることを證明する根據が明らかにされた。又本書に記されてゐないが授菩薩戒儀の朱書には(第七受戒)三衆淨戒を「虚空不動戒(攝律儀戒)。定(攝善法戒)。惠(饒益有情戒)」と記す。これ三學俱學の戒學説である。本書は断片的記述ではあるが、日本天台戒學研究上熟讀すべきものの一。

⑦(参考) 初學抄、曉示鈔、圓戒膚談、帙外新定智證大師書錄(尊通撰) (田島德音)

**授菩薩戒儀式**

①(日) Ju-do-gaku Kai-i-shiki (支) Shou-pi-u-sa-chi-chi-i-shi. 妙樂十二門戒儀 ①一卷 ③存 ④唐湛然(景雲二)建中三A.D. 711-722) 寫本(正大、一一八五・二・一〇—一二二〇)刊本(京大、藏・四・九)

**授菩薩戒儀式**

①(日) Ju-do-gaku Kai-i-shiki. 十二門授大乘圓教出家菩薩別解脫戒、十二門儀式、觀岳戒儀、和倭國本、十二門授一乘比丘戒儀 ①一卷 ③存、大正七四・六二五 No. 378c. 日本大藏經天台宗顯教章疏第一、大日本佛教全集書第二六、傳教大師全集第四 ④最澄(神護景雲元一弘仁一三A.D. 767-823)撰、圓珍(弘仁五一寬平三A.D. 814-891)註

⑤本書は妙樂大師荆溪湛然(唐景雲二—建中三A.D. 711-722)の授菩薩戒儀(十二門戒儀ともいふ)を傳教大師最澄(日本神護景

雲元一弘仁一三A.D. 767-823)が刪補し、圓頓戒授戒の式文としたもの。本書には智證大師圓珍(日本弘仁五—寬平三A.D. 814-891)が仁和元一仁和五年(A.D. 883-889)の五ヶ年間に朱書を以つて添註してある。この朱書は日本天台宗の圓戒研究上益する所が尠なからず存する。三井寺法明院敬光律師(寛保元—寛政七A.D. 1711-1795)は圓戒膚談(二授儀結法篇六)に本書を得てこれを寫傳し珍重したことを記し、又圓耳眞流律師(正徳元—安永二A.D. 1711-1773)は圓頓大戒綱要に「山家の所立は唯大の七衆が受くる所の戒法である。この戒法には通受法と別受法とがある。其の通受法は山家大師(最澄)が荆溪の十二門儀によつて其の文を添削し、自ら戒儀を製した。大師は方土の風習に順つて初めに神分敬白等を加へた。蓋し三衆得の法である。古來比丘と沙彌との受戒には並びに通じて此の戒儀を用ひた云云」と。眞流は神分敬白を初めに添へたと云ふが、智證大師圓珍の朱註本には神分敬白が添加してない。故に眞流の見た山家大師の戒儀とは觀山戒壇院で用ゆる受戒作法のことか。未詳。本書を眞流も敬光も六祖荆溪の十二門戒儀を改訂したものと簡単に取扱つてゐるが、余の考ふる所によれば山家大師が修訂した所以は、日本天台宗圓頓戒壇に於ける授戒作法の制定にあるのであるから、極めて重要な意義を含んだ改訂だと思ふ。例せば荆溪の戒儀には單に「菩薩戒」といつてゐる所を「菩薩金剛寶戒」と改め、又菩薩戒の意義を擡げて「如

來戒」當住佛性一切衆生本源自性清淨虚空不動戒」等と新たに増補した如き等は大師の意の存する所が推し計られると思ふ。六祖荆溪は此等の點を明瞭に記してゐない。山家大師がこの點を明確にし圓頓戒の根本を提示したことは極めて重要事である。ここに於て圓珍は虚空不動戒は三衆淨戒であり三衆淨戒は圓の三學俱傳であることを朱註してゐるのである。本書は殆んど六祖の十二門戒儀の文のままであるが懺悔の段は摩訶止觀(四之一)の文を引用してゐる。本書は山家大師が「山城州乙訓郡山本僧伽藍千手觀音像前」に於いて授戒した時の戒儀である。又本書は六祖の戒儀と同じく十二門に科を分け、最後に(第十一廣願)極樂に往生し、無生忍を悟り、自他二利成滿を期する旨を述べてゐる。これは六祖の戒儀の文を其のまま引用したものであるが、これ將來戒淨一致運動が興る根底をなす一である。十二門とは第一開導。第二三歸。第三請師。ここに戒本尊を「靈山淨土本來常住釋迦如來」といふ。六祖の戒儀に單に「釋迦如來」といふのは相違してゐる。第四懺悔。第五發心。ここでは圓の四弘の文を増補してゐる。本書も六祖の戒儀も四心(一には一切衆生を佛の如しと觀じ、二には國王の如しと觀じ、三には父母の如しと觀じ、四には大家(親方若しくは主人)の如しと觀ず)を加へて、弘誓を成ぜよといふが、惠思の戒儀では五法を觀ぜよとなつてゐる。五法とは一は聖人の如く、二は父母の如く、三は師長の如く、四は國王の如く、五は大

家に奉ずるが如く觀想せよといふのである。この四心又は五法は心地觀經の四恩と類似してゐる。この一段の主意は社會は圓融した共同生活なることを勸説したものである。第六は問進。第七受戒。この一段では化法四教に各三聚戒の名があるが今は圓の三聚戒を授くるのであると述べてゐる。これは本書の六祖の戒儀と相違してゐる點。又この段で血脈相承次第を示すべしといつてゐる。第八は證明。第九は現相。この段の文に「有衆多弟子。於最澄佛子所。三說求受菩薩戒。竟」の文があり、又最澄の傍に朱書して圓珍とある。この文によつて本書は山家大師最澄の記であることが知られるのである。第十說相。第十一廣願。第十二勸持。この段で「事理具足し、正助合修し、圓頓の十乘をもつて十境を超越せよ」といひ持戒は三學俱傳なることを説いて受戒を勸持して終る。

〔參考〕本朝台祖撰述密部書目、傳教大師撰集錄、山家祖德撰述篇目集卷上、圓頓大戒綱要、圓戒膚談二(授儀結法篇第六)、普通廣釋 (田島德晉)

**授菩薩戒儀則** ①(日) Jū-bō-sak-i-kai-tei-ku 黒谷古本戒儀 ②一卷 ③存、大日本佛教全書第七二、續淨土宗全書第九

④圓頓菩薩戒を授くる作法儀則を記したるもの。

荆溪の戒儀と同一の十二門を主部とし、内容も大體後書に則つたものであるが、文句は著しく相違するばかりでなく、劈頭

に、灑水、無言行道、大衆列拜、總設、散華、對揚等、供養の式を規定し、次に戒香定香解脫香等の二偈を出し、末尾に讚戒文、回向文、宋音に依る入正覺壇の梵讚偈、回向を掲げる。十二門中、他書に見えぬ點は、第七正受戒門に相傳戒と發得戒を分ち、相傳戒は圓頓戒の相傳脈譜を擧げ、釋尊より二十四代の淨土宗了譽より新受者に授くといひ、發得戒は三聚淨戒とする。第十說相門に掲ぐる十重禁戒の名は多く太賢の古述記に出るもので、天台の所用では無い。第十二勸持門は唯禁忌補養のみで、天台宗所説の觀心等を除いてゐる。

本書は了譽聖問の顯淨土傳戒論に長意已來行つたといふ三種の戒儀の中、第二の中戒儀に當るもので、全長の机受戒界戒儀の後批には、堂上の軌則で、淨土の門人傳燈師位の許可に、菱華と爲して傳授する黒谷の古本といふものである。蓮門經籍錄の著者文雄は吉水大師の作とするが、しかし内容から見て、決して源空の作では無い。後に「右授菩薩戒儀則、以血脈、授弟子傳戒師聖題畢。早以此旨、可被弘通狀如作。明德元年極月十三日佛祖二十四代傳燈了譽花押」とある。

〔參考〕新本戒儀、机受戒略戒儀、蓮門經籍錄卷下、決疑鈔直牒第一〇、圓戒啓蒙、淨土戒學總路 (大野法道)

**授菩薩戒儀添文並裏書** ①(日) Jū-bo-sak-i-kai-tei-ku-non-narabiki-ura-gaki. ②一卷 ③存 ④圓珍(弘仁五)寛平三 A. D. 81-891 一説寛平四、年七八

寂) ⑤天明六寫 ⑥(谷大餘大・三一二七)

**授菩薩戒儀要解** ①(日) Jū-bo-sak-i-kai-tei-ku-yōkai. ②一卷 ③存、淨土宗全書第一五 ④義山(廣安元)享保二 A. D. 1689-1717)撰

⑤荆溪の授菩薩戒儀を註解したるもの。文前に三門分別がある。に釋名は菩薩戒儀の名を解し、二に出體は天台の性無作の假色説を出し、三に料簡は興廢因本と入法二縁に分たれ、前者は四弘誓と退失の二縁を後者は戒師と戒儀について説く。いづれも天台戒疏に依つてゐる。本文の註釋も、多く天台の意に依り、往々小律關係のものを引いて對比する。但だ請師の項の法解には、元照の説の阿彌陀佛を和尙、觀音を羯磨、勢至を教授とするを引くのは、著者が淨土宗なる爲めと見られる。

〔參考〕蓮門經籍錄卷下 (大野法道)

**授菩薩戒勸誘記** ①(日) Jū-bo-sak-i-kai-tei-ku-kan-yū-ki. ②一卷 ③存 ④辨才 ⑤明治一九刊 ⑥龍大、研眞)

**授菩薩戒近大作法** ①(日) Jū-bo-sak-i-kai-tei-ku-nai-da-sōshō. ②一帖 ③存

**授菩薩戒作法** ①(日) Jū-bo-sak-i-kai-tei-ku-sōshō. ②一卷 ③存 ④嘉永五寫

①(正大、一八五、四四)

**授菩薩戒正義** ①(日) Jū-bo-sak-i-kai-tei-ku-gi. ②一卷 ③存 ④享和元寫

①(谷大餘大・三一一九)

**授菩薩戒法則** ①(日) Jū-bo-sak-i-kai-tei-ku-hō. ②一帖 ③存 ④明治三一寫 ⑤(寶善提院)

**授菩薩界略式** ①(日) Jū-bo-sak-i-kai-gyaku-ryōshiki. ②一卷 ③存 ④享保五寫(駒大)正徳三寫(龍大、研眞)

**授菩薩儀則** ①(日) Jū-bo-sak-i-kai-tei-ku-gi. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、別置)

**授菩薩勸策戒** ①(日) Jū-bo-sak-i-kai-tei-ku-kan-saku-ai. ②一卷 ③存 ④寛文一〇寫 ⑤(谷大、餘小・一〇四)

**授菩提心戒文** ①(日) Jū-bo-sak-i-kai-tei-ku-hin-jin-ai. ②一卷 ④空海(寶龜五)承和二 A. D. 741-833)

⑥諸宗章疏錄第三に天地麗氣記、形文深釋、丹生太神儀軌と本書を併舉して云く、「按、已上四部古本惠範錄不見。現流釋教錄増加也。然此四部上諸錄不見。故且除之」云云。

**授法最要** ①(日) Jū-bo-sak-i-kai-tei-ku-hō-sōyō. ②二卷 ③存 ④淨嚴(寛永一六一元祿一五 No. 1639-1702)述 ⑤刊本(金剛三昧院)

**授法日記** ①(日) Jū-bo-sak-i-kai-tei-ku-hō-nikki. ④四度授法日記 ②四卷 ③存、大正七七・九五 No. 2413 ④源家記 ⑤安永七寫 ⑥(龍大、研史)

**授法目錄** ①(日) Jū-bo-sak-i-kai-tei-ku-hō-moku-roku. ④圓珍(弘仁五)寛平三 A. D. 814-891)

說寬平四、年七八歳)撰 (参考) 山家祖  
德撰述篇目集卷上

**授賢性院宥快記** ①(日) Ju-he-shō  
-in-ya-k-wai-ki. ②1卷 ③存、大正七八・  
八九二No. 3503 ④興雅記 ⑤永和三(A.  
D. 1377)

⑥本書眞言密教野澤十二流の中、安祥寺流  
に傳ふる最極の口傳を記す。その出ず所は  
初めに大日如來より、金剛薩埵、龍猛、龍  
智、金剛智、不空、惠果、弘法大師といふ  
八代相承説を重んじながら、不空三藏は、  
金剛智三藏寂後、再び遺旨をもち、印度  
へ渡り、龍智阿闍梨に謁して密教の眞旨を  
傳へたから、當然金剛智の一代を除いて、  
七代となさねばならぬといふにあり、猶印  
信に關する口説を記し、後に頓證菩提法、  
請雨經法龍供の事、小野流の灌頂印信等に  
關する説を述べてある。

此の一卷の書は京都安祥寺の興雅僧正よ  
り、高野山實性院宥快師へ、病中を押して  
書き與えられたものにして、誠に貴重な文  
獻である。(大山公淳)

**授發菩提心戒** ①(日) Ju-toitsu-bo-  
dai-shin-kei. (支) Shou-ta-p'u-ti-tsin-  
chieh. 受菩提心戒儀。授灌頂金剛最上乘菩  
提心戒文、授灌頂金剛最上乘菩提心戒義

②1卷 ③存、大正一九・九四〇No. 915、  
縮刷一、二七・二、三十帖策子第二〇  
④唐不空(神龍元—大曆九A.D. 705—774)  
譯 ⑤受菩提心戒儀の下を見よ。

**授與記** ①(日) Ju-yo-ki. ②1帖 ③  
存 ④興雅(—永和頃A.D. 1375—1378—)

授、就、頌

記 ①寫本(高大、寄・一・六四)  
**就養獨語** ②(日) Ju-an-doku-go. ③  
1卷 ④存 ⑤性易獨立(慶長元—寛文一  
二A.D. 1596—1672) ⑥(参考) 禪籍日  
録

**就三業宗意安心問答** ①(日) Ju-  
san-go-shu-ti-tan-jin-mon-do. ②1卷 ③  
存 ④(龍大、研眞)

**就注法華經御義口傳** ①(日) Ju-  
chu-hok-ke-kyō-go-gi-ku-den. 御義口傳  
鈔 ②2卷 ③存 ④日蓮貞應元—弘安  
五A.D. 1222—1282)譯、日興(寛文三—  
正慶元A.D. 1245—1332)記 ⑤享保六刊  
⑥(谷大、餘大、二九〇)

**就佛法内明一切佛法一切六師  
外道法** ①(日) Ju-bup-pō-nai-myō-si-  
-sai-bup-pō-si-sai-toku-shi-ge-dō-hō.  
(支) Chia-to-la-wei-ming-ti-chieh-to-la-  
-i-chieh-tu-shih-wai-tao-fa. ②2卷  
③疑偽經 ④(参考) 武周錄第一五、開元  
錄第一八

**頌義** ①(日) Ju-ge. 釋淨土三藏義、釋  
淨土三藏頌義 ②30卷 ③存、淨土宗全  
書第一二 ④聖因(曆應四—應永二P.A.D.  
1341—1420)述 ⑤釋淨土三藏義の下を見  
よ。

**頌義願文** ①(日) Ju-ge-gwan-mon.  
②8卷 ③存 ④南溪(天明三—明治六A.  
D. 1783—1873)撰 ⑤貞享三刊 ⑥(立大、  
A三〇・一三〇)(谷大、宗大・五五〇)(正大、  
一五五・一九四—一九六、二五五—二五  
六)

**頌義所引經律論章疏** ①(日) Ju-  
sho-in-kyō-rishu-ron-sho-sho. ②1卷  
③存 ④刊本(龍大、二六八四・五八)

**頌義序私聞書抄** ①(日) Ju-he-to-  
shiki-gaki-sho. ②1卷 ③存 ④源譽  
⑤明曆四刊 ⑥(龍大、二六八四・五九)(正  
大、一五五・二四四)

**頌義照應底本** ①(日) Ju-he-kyō-  
teihon. ②30卷 ③存 ④寫本(正大、  
一五五・一三七)

**頌義探玄章** ①(日) Ju-ge-tan-gen-  
shō. 淨土頌義探玄鈔 ②2卷(卷下缺) ③  
存、淨土宗全書第二二 ④大玄(延寶八—  
寶曆六A.D. 1680—1756)述 ⑤寫本(正  
大、一五五・一三六)

**頌義底本** ①(日) Ju-ge-teihon. ②  
四十八卷 ③存 ④寫本(正大、一五五六・  
一三八)

**頌義批判** ①(日) Ju-ge-hihan.  
②4卷 ③存 ④天和二刊(正大、一五五  
一、二〇三—二〇四)元祿一〇刊(正大、  
一五五・二〇七—二〇九)(龍大、研眞)(哲  
々、四・中・二二)

**頌解拔萃** ①(日) Ju-ge-basui. ②  
2卷 ③存 ④寫文九刊 ⑤(龍大、研眞)  
**頌古** ①(日) Ju-ko. ②1卷 ③存  
④敬崇宗恭 ⑤寫本(駒大)

**頌古一則** ①(日) Ju-ko-is-goku. ②  
2卷 ③存、佛教通信譯義之内 ④大内青  
巒(弘化二—大正七A.D. 1845—1918)述  
⑤刊本(帝國、六二・二六二)

**頌古鈞鉅** ①(日) Ju-ko-kyō-kyō. (支)

Sung-ku-kou-chie. ②1卷 ③存 ④清代  
蘊上達夫頌、蘊宏寬夫語 ⑤清康熙年間刊  
⑥(駒大)

**頌古合響集** ①(日) Ju-ko-go-kyō-  
shū. (支) Sung-ku-ko-kyō-shū. ②1卷  
③存 ④清代妙湛、靈瑞共著 ⑤清康熙年  
間刊 ⑥(駒大)

**頌古稱提** ①(日) Ju-ko-shō-dai. 臨  
州古佛頌古稱提、雪竈禪師頌古稱提 ②二  
卷 ③存 ④面山瑞方(天和三—明和六A.  
D. 1683—1769)語、慧觀編 ⑤天明八、天  
保三、寶曆八、安政六刊(駒大、寶曆一〇刊  
(谷大、餘大、二七五八)

**頌古摘珠** ①(日) Ju-ko-tei-shū.  
(支) Sung-ku-chū-shū. ②1卷 ③存  
④清代淨符白巖 ⑤(参考) 禪籍目錄

**頌極禪師語錄** ①(日) Ju-gokai-zen-  
-i-go-to-ku. ②2卷 ③存 ④超禪等編  
⑤安永九刊 ⑥(谷大、餘大、三三—三四)

**頌疏** ①(日) Ju-sho. (支) Sung-shū. 阿  
毘達磨俱舍論頌疏論本、俱舍論頌疏、俱  
舍論頌釋 ②二十九卷或三十卷 ③存、大  
正四一・八一三No. 1833、記續一・八五・五  
一—八六・一、佛教大系第六—七 ④唐代  
圓暉(—玄宗朝A.D. 712—756)撰 ⑤  
俱舍論頌疏の下を見よ ⑥足利時代寫  
(寶龜院)

**頌疏記** ①(日) Ju-sho-ki. (支) Sung-  
shū-ki. 阿毘達磨俱舍論頌疏記、俱舍論頌  
疏記、俱舍頌疏記、俱舍論通麟記、俱舍通  
麟記、道麟記 ②二十九卷 ③存、記續一・  
八六・二—三、佛教大系第二—三 ④唐代

名所行發 ①(名庫書)著譯所現 ②月年の刊寫 ③(書考參書釋註)書五 ④說解存内 ⑤代年作者 ⑥看著 ⑦缺存 ⑧數卷 ⑨(名書)名題 ⑩號略字數

道麟述 ① 俱舍頌疏記の下を見よ。② 〔參考〕 注進法相宗章疏、諸宗章疏錄第二

頌疏疑問 ① (日) Ju-sho-ki-mon. 俱舍疑問 ② 一卷 ③ 存、惠心僧都全集第五

源信(天慶五—寛仁元 A. D. 942—1017) 述 ① 俱舍疑問の下を見よ。② 〔參考〕 淨土真宗教典志第一

頌疏聞書 ① (日) Ju-sho-ki-ki-shiki. ② 一帖 ③ 存 ④ 足利時代寫 ⑤ (寶龜院)

頌疏賢聖品第四抄 ① (日) Ju-sho-ken-jin-cho. ② 一帖 ③ 存 ④ 足利時代寫 ⑤ (寶龜院)

頌疏序記 ① (日) Ju-sho-jo-ki. (支) Sung-shu-jo-ki. 俱舍論頌疏序記、俱舍論疏序記、頌疏法盈序記 ② 一卷 ③ 存、已續一・八三・五 ④ 唐代法盈撰 ⑤ 〔參考〕 諸宗章疏錄第二

頌疏正文 ① (日) Ju-sho-ke-mon. 阿毘達磨俱舍論頌疏正文、俱舍論頌疏正文、俱舍頌疏正文、俱舍正文 ② 一卷 ③ 存、大正六四・四六七・五〇三、大日本佛教全書第三三、惠心僧都全集第五 ④ 源信(天慶五—寛仁元 A. D. 942—1017) 述 ⑤ 長和二(A. D. 1013)

頌疏正文は詳しくは俱舍論頌疏正文と言ひ、略しては俱舍正文とも言ふ。本者は顯名の示す通り、圓暉の俱舍論頌疏の寫誤錯誤等を正す文である。

頌疏は俱舍論稽古の卷首に言ふが如く、法幢時代に至る數世紀間より、極く最近迄、少くとも一部の學者間に於ては、唯一の權門有部哲學の教科書として使用されたものである。これには種々の理由があるであらうけれども、頌疏の文は、俱舍本論の長行釋の煩鎖なるに對して、頌文の、いはゞ極めて達意的、簡潔なる解釋であり、又、光記寶疏の二註釋が、俱舍本論を離れては獨立の讀物たるを得ないのに對して、此れは兎も角も、此れのみにも俱舍論の大意を了解するに足る便利のあることが、其の流行の主なる原因であらうと思ふ。然し一方稽古の卷首の言の如く、頌疏を以て、俱舍論研究の準繩と爲すに足らざるものと評する學者も無いではない。勿論、是の如きは稍々酷評に過ぎるきらひはあるが、但し、此れを法相上より見る時は、可なりの誤解等が無いではないからである。勿論、此のことは、已に遁麟の頌疏記にも多少は、其の個所個所に指摘してゐる所である。

本正文の著者源信は、頌疏を實教の豫備學としての權門の手頃の教科書として之れを認め「暉師の俱舍頌疏は、後生の龜鏡たるものにして、廣に非ず、略に非ず、文明に義備はる」と言つてゐる。隨つて此の正文の作意も、いはゞ好意的に頌疏の是非すべき點を叮嚀に拾ひ收め、後學を諍解ならしめたいとの意圖に基づくものと見ることが出来る。

隨つて、此の正文は、頌疏二十九卷に亘り、其の寫誤・脱字・刺字を正し、理論上又は法相上の不完備、經證に於ける相違を矯め、文相上の不安を注意し、略を補ひ、廣を省き、不明の點を明瞭ならしめ、異本と對照して其の正しきを取るべしとする等、綿密親切を極めてゐる。と言ふことが出来る。

今、卷別に其の錯誤等の數を示せば、頌疏の第一卷と第二卷とに各々七ヶ條、第三卷に六ヶ條、第四卷に十三ヶ條、第五卷に六ヶ條、第七卷と第八卷とに各々三ヶ條、第九卷に一ヶ條、第十卷に六ヶ條、第十一卷に五ヶ條、第十二卷に四ヶ條、第十三卷に一ヶ條、第十四卷に四ヶ條、第十五卷に六ヶ條、第十六卷に七ヶ條、第十七卷に十ヶ條、第十八卷に六ヶ條、第十九卷に七ヶ條、第二十卷に九ヶ條、第二十一卷に八ヶ條、第二十二卷に四ヶ條、第二十三卷に五ヶ條、第二十四卷に六ヶ條、第二十六卷と、第二十七卷とに各々四ヶ條、第二十八卷に九ヶ條、第二十九卷に二ヶ條あり。更に、有宗學者符舜の奥書に據れば、或る本には、此の外に、第四卷と第二十三卷と第二十九卷との各々に一ヶ條づゝありとせらるゝから凡てを併せて百五十九ヶ條の誤謬等を列示して居り、僅かに第二十五卷のみは無難ならしめてゐる。

蓋し源信が、其の不審を正し、決判をなせる標準とせしものは、俱舍本論と光・寶二記と遁麟の頌疏記とであるが、就中、最後の決判は之れを俱舍本論に置いてゐることとは、彼の研究態度を示すものとして注意すべき所であらう。何れも一々其の理由根據を明かにせんとしてゐる點は、後學の爲めに甚だ有益である。

尙、更に廻りて研究すべき點もあるけれども、苟くも頌疏に據りて有部教學を學ばんとするもの、必ず參考すべきものである。

〔參考〕 諸宗章疏錄第二、山家祖德撰述篇目集 (西義雄)

頌疏鈔 ① (日) Ju-sho-kyo. (支) Sung-sho-kyo. 阿毘達磨俱舍論頌疏鈔、俱舍論釋頌疏義鈔、俱舍論頌疏慧暉鈔、俱舍論慧暉鈔、俱舍論慧暉、俱舍論義抄、俱舍論鈔、慧暉鈔 ② 三卷或六卷 ③ 存、已續一・八三・五、佛教大系第六一七 ④ 唐代惠暉述 ⑤ 俱舍論釋頌疏義鈔の下を見よ。⑥ 〔參考〕 諸宗章疏錄第二

頌疏法盈序記 ① (日) Ju-sho-ho-jo-ki. (支) Sung-shu-ho-jo-ki. 俱舍論頌疏序記、俱舍論疏序記、頌疏法盈序記、頌疏序記 ② 一卷 ③ 存、已續一・八三・五 ④ 唐代法盈撰 ⑤ 〔參考〕 諸宗章疏錄第二

頌疏料簡鈔 ① (日) Ju-sho-ryo-ken-cho. ② 十四卷 ③ 賴瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1236—1304) 述 ④ 〔參考〕 諸宗章疏錄第三

頌文 ① (日) Ju-mon. ② 一帙 ③ 存 ④ 德川時代寫 ⑤ 寶善提院(寶龜院)

頌文雜句 ① (日) Ju-mon-zak-ku. ② 十五卷 ③ 存 ④ 承應二刊 ⑤ (駒大)

頌文用意 ① (日) Ju-mon-yo-i. ② 存 ③ 足利時代寫 ④ (金剛三昧院)

頌文用意印明 ① (日) Ju-mon-yo-i-jin-myō. ② 一包 ③ 存 ④ 德川時代寫 ⑤ 寶善提院)

ども、苟くも頌疏に據りて有部教學を學ばんとするもの、必ず參考すべきものである。

〔參考〕 諸宗章疏錄第二、山家祖德撰述篇目集 (西義雄)

頌疏鈔 ① (日) Ju-sho-kyo. (支) Sung-sho-kyo. 阿毘達磨俱舍論頌疏鈔、俱舍論釋頌疏義鈔、俱舍論頌疏慧暉鈔、俱舍論慧暉鈔、俱舍論慧暉、俱舍論義抄、俱舍論鈔、慧暉鈔 ② 三卷或六卷 ③ 存、已續一・八三・五、佛教大系第六一七 ④ 唐代惠暉述 ⑤ 俱舍論釋頌疏義鈔の下を見よ。⑥ 〔參考〕 諸宗章疏錄第二

頌疏法盈序記 ① (日) Ju-sho-ho-jo-ki. (支) Sung-shu-ho-jo-ki. 俱舍論頌疏序記、俱舍論疏序記、頌疏法盈序記、頌疏序記 ② 一卷 ③ 存、已續一・八三・五 ④ 唐代法盈撰 ⑤ 〔參考〕 諸宗章疏錄第二

頌疏料簡鈔 ① (日) Ju-sho-ryo-ken-cho. ② 十四卷 ③ 賴瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1236—1304) 述 ④ 〔參考〕 諸宗章疏錄第三

頌文 ① (日) Ju-mon. ② 一帙 ③ 存 ④ 德川時代寫 ⑤ 寶善提院(寶龜院)

頌文雜句 ① (日) Ju-mon-zak-ku. ② 十五卷 ③ 存 ④ 承應二刊 ⑤ (駒大)

頌文用意 ① (日) Ju-mon-yo-i. ② 存 ③ 足利時代寫 ④ (金剛三昧院)

頌文用意印明 ① (日) Ju-mon-yo-i-jin-myō. ② 一包 ③ 存 ④ 德川時代寫 ⑤ 寶善提院)



聚雲抄 ①(日) Ju-se-sho. ②二卷

③存 ④盛一記 ⑤寛文五刊 ⑥(谷大、餘大・二四五八)折、ま・一・左・四〇)

聚分韻略 ①(日) Ju-bun-in-ryaku. ③存

④虎關師鍊(弘安元—貞和二 A. D. 1278—1346) ⑤(參考) 日本禪林撰述書目、扶桑禪林書目、禪籍目錄

聚木管經 ①(日) Ju-moku-hi-kyo. (支) Chu-mu-pi-ching. ②一卷 ③缺

④(參考) 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

誦經 ①(日) Ju-kyo. ②一帖 ③存

④足利時代寫 ⑤(寶善提院)

誦經草案 ①(日) Ju-kyo-sō-an. ②三十三帖 ③存

④足利—徳川時代寫 ⑤(寶龜院)(金剛三昧院)

誦經導師 ①(日) Ju-kyo-dō-shi. ②一帖 ③存

④貞治三、慶長一八寫 ⑤(寶善提院)

誦經導師作法 ①(日) Ju-kyo-dō-shi-sa-hō. ②一卷 ③存

④性善(延寶四—寶曆一三 A. D. 1676—1763)作 ⑤寛延三寫 ⑥(高大、奇・一・四九)

誦經導師作法 ①(日) Ju-kyo-dō-shi-sa-hō. 憲深方誦經導師作法 ②一卷

③存 ④文政三寫 ⑤(高大、奇・一・六五)

誦經導師表白 ①(日) Ju-kyo-dō-shi-hyō-byaku. ②一帖 ③存

誦經表白 ①(日) Ju-kyo-hyō-byaku. ②四帖 ③存

④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)(寶善提院)

誦經法 ①(日) Ju-kyō-hō. (支) Sung-ching-fa. ②一巻 ③存

④(参考) 觀心誦經法記 ⑤(参考) 已註二・四・一 ⑥隋智顛(中大通三—開皇一) A. D. 531—597)說 ⑦(龍大、研佛)

誦經法則 ①(日) Ju-kyō-hō-soku. ②一巻 ③存

④(参考) 徳川時代寫 ⑤(寶龜院) ⑥(参考) 徳川時代寫 (支) Sung-chou. ⑦一巻 ⑧存

誦呪 ①(日) Ju-ju. (支) Sung-chou. ②一巻 ③存

④(参考) 朝鮮佛教總書刊行豫定書目

誦呪事 ①(日) Ju-ju-no-koto. ②一紙 ③存

④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

壽延經 ①(日) Ju-en-kyō. ②一卷 ③存

④(参考) 祕密儀軌集第一四 ⑤(偽經) ⑥寫本(谷大、餘大三七六九) 徳川時代寫(寶壽院)

壽軌 ①(日) Ju-ki. (支) Shou-kuai. ②無量壽如來修觀行供養儀軌、無量壽如來念誦儀軌、修觀行供養儀軌、無量壽儀軌 ③一卷 ④存

⑤(大正一九・六七 No. 930、縮開五、己二七・一、北1390武、南1394、元1394、衡、明北1405、清1405、慶1338、天1386、法1194八、至826不、明南1162、寛、Nj. 1412 ⑥唐(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)不空譯 ⑦無量壽如來修觀行供養儀軌の下の見よ。

壽龜山兩脈傳法 ①(日) Ju-ki-san-ryō-myaku-den-hō. ②一卷 ③存

④(参考) 本(正大一・一五二・一五五)

壽山清規 ①(日) Ju-san-shin-ki. ③存

④(参考) 寂室堅光(寶曆三—天保元 A. D. 1733—1830) ⑤(參考) 禪籍目錄

壽昌和尚語錄 ①(日) Ju-shō-ō-shō-gō-rōku. (日) Shou-chōang-ho-shang-yū

①(日) Ju-shō-ō-shō-gō-rōku. ②四巻 ③存、己續二・三〇・一 ④明慧經無明(嘉靖二七—萬曆四六 A. D. 1548—1618)元賢(萬曆六一—順治一四 A. D. 1578—1657)重編 ⑤無明慧經禪師語錄の下の見よ。

壽昌見如禪師語錄 ①(日) Ju-shō-ken-nyō-zen-ji-gō-rōku. (支) Shou-chōang-chien-ju-eh-an-shih-yü-ju. ②見如元證禪師語錄 ③一卷 ④存、己續二・三〇・一

⑤清元證見如(萬曆七一—永曆三 A. D. 1579—1649)語、道瑛集 ⑥見如元證禪師語錄の下の見よ。

壽昌正統錄 ①(日) Ju-shō-shō-tō-rōku. ②五巻 ③存

④(參考) 禪籍目錄

壽昌略清規 ①(日) Ju-shō-ryaku-shin-ki. ③存

④(参考) 東阜全集之内 ⑤興壽(心越東阜)(寛永一七—元祿九 A. D. 1640—1696)編 ⑥明治四四刊 ⑦(駒大) ⑧東京一喝社

壽藏吟 ①(日) Ju-zō-gin. ②一卷 ③存

④(參考) 禪籍目錄

與壽福寺書 ①(日) Ju-fuku-ji-ni-atōru-shō. ②一篇 ③存

④(参考) 日蓮聖人御遺文之内、日蓮聖人全集第七卷之内 ⑤日蓮(貞應元—弘安五 A. D. 1222—1282) ⑥文永五(A. D. 1268)

⑦日蓮が鎌倉に於て朝鮮僧俗十一人に與へた所謂「十一通御書」の内、蒙古の國書が到來して立正安國論の豫言が符合した機會に於て、教法の正邪を明知して速に捨邪歸正せよと勸告し、公場對決を期待した書で、

十一通御書は「昨日御書」と共に龍口法難の近因となつたものである。(馬田行啓)

壽福寺塔頭記 ①(日) Ju-fuku-ji-tō-chō-ki. ②一卷 ③存

④(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

壽命經 ①(日) Ju-myō-kyō. (支) Shou-ming-ching. ②一切如來金剛壽命陀羅尼經、金剛壽命陀羅尼經、壽命陀羅尼經 ③一卷 ④存

⑤(大正二〇・五七八1135、縮開九、己一五・八、北1364、南1367、元1366、明北955、清955、慶1319、天1345、法1129、卿、至661事、明南1001、流、Nj. 960) ⑥不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)譯 ⑦唐天寶五—大曆九(A. D. 746—774) ⑧一切如來金剛壽命陀羅尼經の下の見よ。 ⑨南北時代 ⑩(寶善提院)

壽命經略讚 ①(日) Ju-myō-kyō-ryaku-san. ②一切如來金剛壽命陀羅尼經略讚、壽命經略讚 ③一卷 ④存

⑤(参考) 榮性(明和五一—天保八 A. D. 1768—1837)撰 ⑥文化四刊 ⑦(哲・お・八・中・一〇)(京專)(龍大、二四一八・九九)

壽命促經 ①(日) Ju-myō-sok-kyō. (支) Shou-ming-tsū-ching. ②一卷 ③存

④(参考) 雜阿含經第三十九卷の抄出、(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

壽命陀羅尼經 ①(日) Ju-myō-dō-ro-ni-ki. (支) Shou-ming-tō-ro-ni-chi=

陀羅尼經、壽命陀羅尼經 ②一卷 ③存

名所行發 ⑩(名庫書)著録所現 ⑨ 月年の刊寫 ⑧(書考參書釋註)書末 ⑦ 説解卷内 ⑥ 代年作者 ⑤ 著者 ④ 缺存 ③ 數卷 ②(名書)名題 ① 號略字數



大正二〇・五七八ノ.1133、縮開五、卅一  
 五・八、北1365惠、南1365佐、元1365佐、  
 明北935興、清935興、麗1318佐、天1345佐、  
 法1129卿、至561事、明南7001流、Nf. 960  
 ③不空(神龍元—大曆九 A. D. 703—774)譯  
 ④唐天寶五—大曆九 (A. D. 746—774) ⑤  
 一切如來金剛壽命陀羅尼經の下を見よ。

壽量義說

①(日) Ju-ryō-gi-seishū.  
 ②一卷 ③存 ④靈空光謙(承應元—元文  
 四 A. D. 1653—1739) ⑤享保三刊 ⑥(龍  
 大二四一三・三七)(谷大、餘大・三三二六)  
 (京大・日大未四一)(正大・一四二・一)

壽量顯本義

①(日) Ju-ryō-kenn-pōn  
 ②一卷 ③存 ④日透述 ⑤明治三  
 七寫 ⑥(立大、B〇四・一四)(京大、日大  
 未・五六七)

壽量品經疏

①(日) Ju-ryō-hon-kyō-  
 sho. ②一卷 ③存 ④大正四刊(青寫真  
 本) ⑤(立大・D〇〇・一六九)

壽量品科文

①(日) Ju-ryō-hon-kwa-  
 non. ②一卷 ③圓珍(弘仁五—寛平三  
 A. D. 814—891) ④説寛平四、年七八寂撰  
 【参考】山家祖徳撰述篇目集卷上

壽量品講記

①(日) Ju-ryō-hon-ko-  
 ji. ②一卷 ③存 ④大正四刊(青寫真本)  
 ⑤(立大、D〇〇・一六〇)

壽量品私見聞

①(日) Ju-ryō-hon-  
 shi-kem-mon. ②一卷 ③存 ④日重 ⑤  
 寫本(立大、D〇〇・一七七)

壽量品得意鈔

①(日) Ju-ryō-hon-  
 toku-i-shō. ②一卷 ③存、日蓮聖人御  
 遺文之内 ④日蓮(貞應元—弘安五 A. D.

1292—1282) ⑤文永八(A. D. 1271)

⑥日蓮が鎌倉に於て司天博士安部晴長に與  
 へた書と傳ふ。法華經の壽量品は釋尊の久  
 遠寶成を開顯した經であり、若し一切經  
 中此經が無かつたらば「天に無日月、國  
 に大王なく、山海に王なく、人にたましむ  
 無らんがごとし」、「一切經は「いたづらごと  
 なるべし」所詮壽量品の肝心南無妙法蓮華  
 經こそ十方三世の諸佛の母にて御坐し候  
 へ」と説いたものである。

壽量品文底大事

①(日) Ju-ryō-hon-kyō-  
 hon-mon-tekai-daiji. ②一篇 ③存、日蓮  
 宗々學全書與尊全集之内 ④日興(寛元四—  
 正慶元 A. D. 1246—1332)

壽量品文底大事

⑥日蓮の上足六老僧の一人富士門流の祖日  
 興が日蓮の所談を筆受したものとして傳ふ  
 る短文の書、「開目鈔」上にある、「念三千  
 ノ法門ノ壽量品ノ文底ニ秘沈メ玉(リ)」と  
 ある所謂日蓮の文底秘沈の法門につき「仰  
 云」として獨特の解釋を下し、其は久遠下種  
 の名字の妙法であると説き、更に唱題の一  
 行を専らとし餘行を交へるから義を説  
 いたものである。(馬田行啓)

壽量妙義

①(日) Ju-ryō-myō-gi. 壽  
 量妙義 ②一卷 ③圓珍(弘仁五—寛平  
 三 A. D. 814—891) ④説寛平四、年七八寂

數珠經辨譯

①(日) Ju-zu-kyō-han-  
 yaku. ②一卷 ③存 ④(京專)

數珠功德經

①(日) Ju-zu-ku-dok-  
 kyō. (支) Shu-chu-kuang-te-ching. 校量數  
 珠功德經 ②一卷 ③存、大正一七・七二  
 七 No. 788、縮成一三、卅一〇・七、北2285  
 女、南297女、元293女、明北291知、清291  
 知、應295傷、天195女、指295傷、法380傷、  
 至362得、明南285才、Nf. 295 ④寶思惟譯  
 ⑤唐神龍元(A. D. 702) ⑥校量數珠功德經  
 ⑦下を見よ。⑧寫本(龍大、二四一三)

數珠功德經

①(日) Ju-zu-ku-dok-  
 kyō. (支) Shu-chu-kuang-te-ching. 曼珠室  
 利呪藏中校量數珠功德經、校量數珠功德經、  
 曼珠數珠功德經 ②一卷 ③存、大正一七  
 七二六 No. 787、縮成一三、卅一〇・七、北  
 236女、南298女、元291女、明北292知、清  
 292知、麗295傷、天295傷、指295傷、法  
 295傷、至362得、明南289才、Nf. 296 ④  
 唐義淨(貞觀九—先天二 A. D. 635—713)譯  
 ⑤曼珠室利呪藏中校量數珠功德經の下を見  
 よ。

⑦(參考) 山家祖徳撰述篇目集卷上

⑧數珠功德經一卷と大唐義淨三藏譯の數珠功  
 徳經(詳しくは曼珠室利呪藏中校量數珠功  
 徳經)一卷とありて二經は同本異譯なりと  
 し此の外、唐不空三藏の譯に金剛頂瑜伽念  
 誦經一卷あるが、先の功德經が雜部に屬す  
 るものなるに對して是は純部に屬するもの  
 なるに對して是は純部に屬するものである  
 と解説し、次に義淨譯本によつて一經を三  
 段に分け、經の題目と譯號と本文を詳解し  
 てゐる。(岡田契昌)

數珠功德經

①(日) Ju-zu-ku-dok-  
 kyō. (支) Shu-chu-kuang-te-ching. 曼珠室  
 利呪藏中校量數珠功德經、校量數珠功德經、  
 曼珠數珠功德經 ②一卷 ③存、大正一七  
 七二六 No. 787、縮成一三、卅一〇・七、北  
 236女、南298女、元291女、明北292知、清  
 292知、麗295傷、天295傷、指295傷、法  
 295傷、至362得、明南289才、Nf. 296 ④  
 唐義淨(貞觀九—先天二 A. D. 635—713)譯  
 ⑤曼珠室利呪藏中校量數珠功德經の下を見  
 よ。

數珠功德經偶語鈔

①(日) Ju-zu-  
 ku-dok kyō-ten-go-shō. ②一卷 ③存  
 ④原田了澄述 ⑤明治二七刊 ⑥正大、一  
 一七九・九四)

數珠功德經鈔

①(日) Ju-zu-ku-  
 doku kyō-shō. ②一卷 ③存、日本大藏  
 經方等部章疏第六 ④亮次(元和八—延寶  
 八 A. D. 1692—1680)述

樹下御法

①(日) Ju-ge-ō-hō.  
 ②一卷 ③家寛(元祿頃 A. D. 1688—1703—)  
 撰 ⑦(參考) 山家祖徳撰述篇目集卷下

樹下雜錄

①(日) Ju-ge-zō-roku.  
 ②十卷 ③存 ④漢與祖芳記 ⑦(參考) 大  
 日本佛教全書續刊豫定書目

樹下堂漫記

①(日) Ju-ge-dō-man-  
 ni. ②十七卷 ③存 ④漢與祖芳記 ⑦  
 【參考】大日本佛教全書續刊豫定書目

⑧樹下堂漫記(日) Ju-ge-dō-man-  
 ni. ②十七卷 ③存 ④漢與祖芳記 ⑦  
 【參考】大日本佛教全書續刊豫定書目

⑨樹生婆羅門憍慢經 ①(日) Ju-shō-  
 ba-ro-mon-kyō-man-ryō. (支) Shu-sheng-  
 p'o-lo-men-chiao-man-ching. ②一卷  
 ③根本説一切有部毘奈耶雜事第三十四卷末  
 乃至第三十五卷初の抄出。  
 ⑦【參考】開元錄第一六、第一七、貞元錄  
 第二六

樹泉集

①(日) Ju-sen-shū. (支) Shu-  
 chuan-shi. ②十卷 ③存 ④清代退翁弘  
 儲 ⑦【參考】 禪籍目錄

樹提伽經

①(日) Ju-tai-ka-kyō.  
 (支) Shu-ti-chieh-ching. ②一卷 ③存、

大正一四・八二五No. 539、縮印七、二二・四、北33行、南33行、元53行、明北19羊、南19羊、悪33景、天53行、指5景、法59景、至53景、明南33景、No. 453

③宋求那跋陀羅譯 ④元嘉二二二〇(A. D. 435—443)

⑤樹提伽は印度瞻波城に住せし長者の名である『南本涅槃經』によれば、城の長者に繼嗣がなかつたので六師外道に歸依して子息を求め間もなく、其の婦は懷妊した。所が六師のこれを相して女兒と云ふのをきいて再び煩悶した。會々ある知識より佛の尊き事並に附近にて化導せることをきき、佛所に至りて胎兒のことを請問し、男子なること疑なしと云ふのをきいて歡喜し、家に歸つて出生を待った。然るに六師の爲めに偽られて菴羅果に毒を混じたるを呑んだ婦は遂に命終したので火葬に附した。佛は直ちに大醫者婆を遣して火中に入りて婦の腹中より兒を取り出さしめ、猛火中より生じたからとて樹提伽(Jyestika)と名けしめたと云ふ。後頻婆沙羅王に養はれて富裕を極めた。『西域記』は王舍城の側に長者の故里のあることを云つてゐる。この樹提伽長者の往昔の因事を叙して布施の功德を説くのが本經の内容であつて、その人によつて經題としたものである。

富貴なること國王を凌ぐ樹提伽長者が、一日池邊に掛けた拭體の巾が風の爲めに吹き上げられ、王殿の前に落ちた。王は群臣を集めて卜問したが、諸臣は皆王の國が大いに興らんとする前兆で、天が白氈を賜つたのであると云ふのに、一人樹提伽だけは黙つて答へない。王は長者にそのわけをきくと、敢て王を欺かずとて事實を述べた。數日後長者の後園の金華が萎落して、それが風に吹かれて又王殿の前に落ちた。今回も諸臣は皆瑞兆としたが、樹提伽は敢て王を欺すとて事實を述べた。そこで王は長者の家を訪ねて見度いと考へ、行つて見るとその立派なること、事毎に驚き、歸るを忘れて二ヶ月を費してしまつた。遂にその富裕なること甚だしく王に過ぎたるより、これを伐たんとして、四十萬衆を差し向けた。然し一力士の爲め打ち倒されてしまつた。今は國王、樹提伽を伴つて佛所に詣り、長者の前身に何の功德あつて然るかをきいた。佛はこれ布施の功德であるとして、往昔商主が諸商人を將いて重寶を齎す途一病人に逢つた。この道人に草履を給したものがあつたが、それがこの長者夫婦であり、道人とは佛自身、商主とは今の國王であると説いてゐる。(三好鹿雄)

樹、儒、濤

たのであると云ふのに、一人樹提伽だけは黙つて答へない。王は長者にそのわけをきくと、敢て王を欺かずとて事實を述べた。數日後長者の後園の金華が萎落して、それが風に吹かれて又王殿の前に落ちた。今回も諸臣は皆瑞兆としたが、樹提伽は敢て王を欺すとて事實を述べた。そこで王は長者の家を訪ねて見度いと考へ、行つて見るとその立派なること、事毎に驚き、歸るを忘れて二ヶ月を費してしまつた。遂にその富裕なること甚だしく王に過ぎたるより、これを伐たんとして、四十萬衆を差し向けた。然し一力士の爲め打ち倒されてしまつた。今は國王、樹提伽を伴つて佛所に詣り、長者の前身に何の功德あつて然るかをきいた。佛はこれ布施の功德であるとして、往昔商主が諸商人を將いて重寶を齎す途一病人に逢つた。この道人に草履を給したものがあつたが、それがこの長者夫婦であり、道人とは佛自身、商主とは今の國王であると説いてゐる。(三好鹿雄)

樹提伽經

①(日) Ju-tai-ka-kyō. ②一卷(別本) (支) Shu-ti-chih-ching. ③存、大正一四・八二六No. 540

④本經は大正大藏經が別本として載せてあるものであるが、「樹提伽經」には「大富長者」が大長者となつて居り、「掛著池邊」が「掛著池邊」となつて居り、「無言」が「不言」となつてゐる等の如き僅かの字句の相違あるのみで内容は全然同じである。(三好鹿雄)

樹提伽經

①(日) Ju-tai-ka-kyō. (三好鹿雄)

(支) Shu-ti-chih-ching. ②一卷 ④失譯

⑦(參考) 出三藏記第四、法經錄第三

樹提摩納發菩提心誓願經

①(日) Ju-tai-mo-na-ho-tsu-bo-dai-shin-sai-jwan-kyō. (支) Shu-ti-mo-na-fa-p'u-ti-hsin-shih-pian-ching. ①一卷 ④失譯

⑥悲華經第五卷の抄出。⑦(參考) 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六、

儒家龜鑑

①(日) Ju-ke-kan. (支) Ju-chia-kuan-chien. ①一卷 ④清

虛著 ⑦(參考) 朝鮮佛教總書刊行豫定書目

儒釋質疑論

①(日) Ju-shaku-shitsun-giron. ②二卷 ③存 ④寫本(京大、藏二四・三六)

儒釋宗傳竊議

①(日) Ju-shaku-shu-den-setsu-ji. (支) Ju-shih-tsun-t'eh-uan-chieh-i. ②五卷 ③存 ④明智旭(萬曆二七・永曆九 A. D. 1599—1655)述 ⑤享保二刊 ⑥龍大、二九六四・二四(谷大、餘大・二二九六)

儒釋筆陣

①(日) Ju-shaku-hisshin. ②一卷 ③存 ④玄光獨庵(寛永七・元祿一一 A. D. 1630—1698)記 ⑤天和二刊 ⑥(駒大)(谷大、餘大・二二九七)(哲・え・七・左・八)

儒釋問答

①(日) Ju-shaku-mon-da. ③三教辯論 ④五卷 ③存 ④月海述 ⑤寛文七刊 ⑥龍大、二八一三・三四(谷大、餘大・二二八五)(京大、日大末・八〇七)(駒大) non-da-batsu-gi. ②四卷 ③存 ⑦(參考)

儒釋問答拔儀

①(日) Ju-shaku-mon-da-batsu-gi. ②四卷 ③存 ⑦(參考)

考) 釋目録

儒童經 ①(日) Ju-tō-kyō. (支) Ju-tung-ching. 儒童菩薩經 ②一卷 ④失譯

⑥六度集經第八卷の抄出。⑦(參考) 出三藏記第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

儒佛議論

①(日) Ju-butsumonron. ②一卷 ③存 ④石井光致著 ⑤天保一二刊 ⑥(帝國、一九二四)

儒佛合論

①(日) Ju-butsumonron. ②九卷 ③存 ④智脱述 ⑤寛文八刊 ⑥(龍大、二八一三・三三)(哲・え・七・中・一五)

儒佛花見問答

①(日) Ju-butsumo-hana-mi-mon-da. ②一冊 ③存 ④刊本(哲・え・七・左・三三)

儒佛問答

①(日) Ju-butsumon-da. ③三卷 ③存 ④林信勝問、頌祐答 ⑤刊本(龍大、二八一三・三五)(哲・え・七・左・一)

儒佛論肝要鈔

①(日) Ju-butsumon-kann-yō-shō. ②二冊 ③存 ④刊本(哲・え・七・右・一六)

儒佛或問

①(日) Ju-butsumu-waku-mon. ③三冊 ③存 ④刊本(哲・え・七・左・三五)

儒首童眞經

①(日) Ju-shū-tō-shin-kyō. (支) Ju-shou-tung-chen-ching. ②一卷 ④失譯 ⑦(參考) 出三藏記第四

儒首菩薩經

①(日) Ju-shū-bō-sak-kyō. (支) Ju-shou-p'u-sa-ching. ②二卷 ④失譯 ⑦(參考) 出三藏記第四、三寶紀第五、內典錄第二

濡首菩薩無上清淨分衛經

①(日) Ju-shu-bo-satsu-mu-jō-shō-jō-bu-n-e-kyō (支) Ju-shou-p'u-sa-wu-shang-ching-ching-tên-wei-ching. 決了諸法如幻化三昧經 ②三卷 ③缺 ④後漢嚴佛調(一)中平五 A. D. 188—)譯 ⑤第一譯 ⑥(參考) 出三藏記第四、開元錄第一四、貞元錄第二四

濡首菩薩無上清淨分衛經

①(日) Ju-shu-bo-satsu-mu-jō-shō-jō-bu-n-e-kyō (支) Ju-shou-p'u-sa-wu-shang-ching-ching-tên-wei-ching (梵) Padma-sūtra-prajāpāramitā (藏傳) ②二卷 ③存、大正八・七四〇 No. 234、縮月九、二五・六 ④宋代翔公譯

⑤本書は、一名『決了諸法如幻化三昧經』ともいひ、劉宋の代翔公の所譯にかゝる。こは既に、その別名の示すが如く、濡首の法身清淨分衛諸法如幻化三昧を説けるものであつて、前には龍首に對して説き、後には須菩提や舍利弗や、長者・優婆夷等を借りて徵達せしめ、更に濡首の久修無著三三昧成就の讃嘆を交へてゐる。本經は、『出三藏記集』、卷四には火譯とし、『法經錄』卷一には「翔公南海に於て譯す」とし、以下諸經録何れもこれに倣してゐる。惟ふに、翔公の所譯とするが正しき歟。『歷代三寶紀』卷四及び卷十には、別に同名の二本を出して、一を翔公、他を嚴佛調の所譯としてをり、『三寶紀』以後の諸録またこれに倣つてゐるが、更にまた以上二經の外に、『濡首菩薩經』なる名を出し、『出三藏記集』は

これを以て、恐らく前者と同名ならむとするも、『法經錄』以下は、獨立せる別個の異譯として取扱ひ、『歷代三寶紀』等は、これを魏吳若くは漢代に擬してゐる。さりながら、この『濡首菩薩經』なるものは、『出三藏記集』のいへるが如く、獨立せる異譯ではなくして、本經と異名同本たるものではなからうか。また嚴佛調譯とあるものも、果して別存してゐたかどうかは疑はしい。惟ふに、宋代戰亂相次ぎ、加ふるに排佛の難に遭ひ、譯業多く邊土において行はれしため、譯者の如きも或は知られず、爲に後に及んで、かく異なる譯者の名を以て傳へらるゝに至つたのであると思はれる。譯出年代詳かならず、玄奘譯『大般若經』第八會那伽室利分は、まさしく本經に相當するものである。(深浦正文)

濡首菩薩夢經

①(日) Ju-shu-bo-satsu-mu-kyō (支) Ju-shou-p'u-sa-mê-n-ching. ②二卷 ③失譯 ④(參考) 法經錄第一

鷲山專略

①(日) Ju-san-jyaku. ②一卷 ③存 ④(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

鷲山のしをり

①(日) Ju-san-no-shi-o-ri. ②一卷 ③存 ④武内享運述、淨住省吾編 ⑤無門關の注釋 ⑥明治三三刊 ⑦(駒大)

鷲峯一枝

①(日) Ju-tō-iss-shi. ②一卷 ③存 ④三江紹益(一慶安三 A. D. 1650)撰 ⑤(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

鷲峯開山三江紹益禪師履歷記

①(日) Ju-hō-kai-san-hō-jō-shō-ich-i-zen-jin-ri-tek-ki. ②一卷 ③存 ④(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

鷲峯開山法燈圓明國師行實年譜

①(日) Ju-hō-kai-san-hō-jō-ō-min-gō-jō-kyō-shū-jitsu-nen-pu. ②一卷 ③存 ④自南翠蕙撰 ⑤(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

鷲峯開山法燈國師緣起

①(日) Ju-hō-kai-san-hō-jō-kyō-shū-en-ki. ②二卷 ③存 ④(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

鷲林拾葉鈔

①(日) Ju-in-shū-ō. ②二十四卷 ③存、日本大藏經法華部章疏第三 ④尊舜(寶徳三 A. D. 1511—)談 ⑤永正九(A. D. 1512)

⑥本書は妙法蓮華經の談義本である。故に經題に就いて五重玄義の談義を詳述してゐない。經文の談義であるが先づ開講要義として簡略な法花の大意。直談の由來即ち談義の變遷。傳譯。山家大師の三種法花。調卷の不同。七佛藥師。一乘守護明神等の解説を試み、次に天台大師の説により一部廿八品の各品毎に來意、釋名、入文判釋の三段に大別して一々鄭重に其の意義を記述し、更に入文判釋の下では經文を一々章節に分科し、各科の下で一々文意、字義、訓釋、因縁物語を説き進んでは和歌を添へて經文の意を知らしめてゐる。是の如き著作は殆んど他には見當らない。本書とやや類似したものに榮心の法花直談抄廿卷(この

書は檀那流の法花經訓讀を用ゆ)があるが記述が本書のように詳密ではない。恐らく本書は我國の法華經講義として特異性を顯した唯一のものであらう。次に著者の傳。尊舜は常陸中郡月山寺の學僧。傳は止觀見開添註一之乾に出づ。詳細の點は明記しない。例せば尊舜の轉住寺のこと、寂年等の如きを缺いてゐる。本書第九、廿卷奥書に「永正九年生年六十二歳」とあるから逆算して生年が知られるが寂年は未詳。次に本書述作の由來。本書第六、九卷の奥書に尊舜は著作の目的等を記してゐる。第六卷奥書には「永正八年辛未仲秋初二日常州黒子千妙寺別當房に於いて老眼の涙を涕しつゝ、寗毫を染め、殘暑の汗を拭ひながら鳥跡を刺ぎ、愚昧ながら幽螢を集め、後昆の朦朧に示さんとして記したものである。すゝのよのたれとはなしにのこしをく、こころのあともなみたならずや『四明賤士蕊菟尊舜』とあり、第九卷奥書には「永正九年壬申季夏十八日常州黒子千妙寺に於いて且つは牧童勸誘のため、且つは法命相續のために、老眼の涙を拭ひながら拙翰を染めて記した。野叟老比丘尊舜生年六十二歳」とある。これに依ると尊舜は月山寺から千妙寺へ轉住し、千妙寺で本書を記したことになる。然るに武藏川越仙波北院住持實海の誌した本書の序文を見ると「余は來業に示さんと思ひ少しく草案を作つたが、友人亮尊も舊聞を鳩め、新書として名づけて鷲林拾葉鈔と曰ひ、余に示された。熟々これを聞みするに美を盡し善を盡したものである。故に余

が更に加ふべきものはない。時に永正龍集上章(唐)敦牂(十)仲冬甲子日。仙波星野山北院住持法印實海」と記してある。尊舜は月山寺から常陸墨子千妙寺と轉住して法系の亮の字を繼ぎ亮尊と改めたのであらう。一説に亮憲と改めたといふ。而し亮憲では本書の序文の亮尊と矛盾する。奥書に尊舜としてゐるのは舊名を用ひたので、千妙寺住持としての本名は亮尊であつたのであらう。上章敦牂即ち庚午なる干支は永正七年に當る。こゝで本書奥書と序文との間に記年が一致しなくなる。序では永正七年には本書が出来て實海に示したといひ、六、九卷奥書では永正八年同九年にこれを記したといふからである。恐らくこの矛盾は尊舜即ち亮尊が草稿本を實海に示し實海が草稿本に序を興へたものであり、六、九卷の奥書は再治した時に記した年月ではなからうか。若し亮尊と尊舜とが別人であれば是の推定は無用となる。別人説が成立すれば尊舜は著者ではなく、寫本したものと云はなければならなくなる。今は亮尊は尊舜であるとして認むべきであらう。次に本書の内容。本書は文句、文句等に基いて記したことは勿論、廣く支那日本撰述を参照引用し、口傳、記録等も適宜に案配して用ひ、又因縁物語と和歌連歌を頗る豊富に援引して直談たる本旨を十分に發揮し、各地の談義所即ち檀林今日の學校に於ける初學者の參考書たる役割を完全に果してゐる。猶日本天台の惠禮兩流の口傳及び一實神道等の説も盛んに引用してゐるから室町時代

末期の佛教。特に天台宗寺院と對社會との關係等が反面から觀察され、又十宗を認め新興佛教たる淨土宗と禪宗との獨立を述べてゐる。然るに日蓮宗の問題には全く觸れてゐないのは如何なる事由によるのか。是の如く諸の宗教事象の説明を通俗的に記述してゐるから興趣湧いて盡きずといへる。本書は學の半面と通俗趣味に投ずる半面と口決傳授尊の半面とから組織されてゐる。學的方面は上代天台學の研究。通俗的記述は天台宗史及び支那史日本史の研究。口決傳授は相承傳授の尊重と出家學僧の在俗とは相違した修行を傳へてゐることを明かにし、そして在俗の檀徒信徒から施物を獻げしめ、又は師が弟子から布施を捧げしめるのであるから、經濟的意義が多分に含蓄されてゐるものである。これと觀察して足利期の寺院の資財は布施中心となりつゝあり莊園收入の維持は漸く不可能となりつゝあつたことが了解し得るであらう。この故に本書の特色は口傳法門と因縁物語と和歌連歌とにあると云ふべきである。物語は印度支那日本の物語を各方面から引き來つてゐる其數頗る多く恐らく五百種位に及ぶであらう。和歌連歌は引用した數二百三首。上は萬葉集から室町中期に至るまで僧俗各方面の詠歌を擧げてゐる。この點は室町時代文學の一である談義文學書の代表的なものの一であり又説話文學書として觀察しても優に其價值は大なるものがあると思ふ。

- ▲一・二・三五九(高大)寄・一・二(四) (田島德音)
- 秀句十勝鈔** ①(日)Shū-ku-jū-shō-shō. ②存、日蓮聖人御遺文之内 ③日蓮(貞應元一弘安五 A.D. 1222-1282) ④文永八(A.D. 1271)
- 秀聖記** ①(日)Shū-kei-ki. ②七卷 ③存 ④聲譽記 ⑤寫本(龍大、研眞)
- 秀馨祕記** ①(日)Shū-kei-hi-ki. ②八卷 ③存 ④秀馨(一享保七 A.D. 1722- ) ⑤寛政二寫 ⑥(谷大、宗大、二九五八)
- 秀山遺芳** ①(日)Shū-zan-i-hō. 寫眞帖秀山遺芳 ②一葉 ③存 ④昭和七刊
- 秀山御開調** ①(日)Shū-zan-o-kaiki-shirube. ②存、尾州五僧安心紀理卷八
- ①寫本(谷大、宗大、六一)
- 秀存語錄** ①(日)Shū-zon-go-roku. ②一卷 ③存 ④佐々木月樵(明治八一昭和元 A.D. 1875-1926)編 ⑤明治四〇刊和元 A.D. 1875-1926)編
- ①(谷大、宗洋、一七一)
- 秀存法話** ①(日)Shū-zon-hōwa. ②一卷 ③存 ④秀存(天明八—萬延元 A.D. 1788-1860)語、佐々木月樵(明治八一昭和元 A.D. 1875-1926)編 ⑤大正三、昭和五刊 ⑥(谷大、宗洋、三二八)
- 秀如上人法語** ①(日)Shū-nyō-shō-in-hō-go. ②一冊 ③存 ④寫本(京大、日大末、六七七)
- 秀野林禪師語錄** ①(日)Shū-ya-in-zen-jō-go-roku. (支)Hsu-yeh-lin-chen-shih-yü-lu. ②一卷 ③存 ④清代

- 秀野明林語、最正等編 ⑤康熙二三刊 (駒大)
- 宗意安心** ①(日)Shū-ian-jin. ②一卷 ③存 ④岸澤惟安著 ⑤昭和七刊 ⑥東京甲子社書房
- 宗意安心問題講述** ①(日)Shū-ian-jin-an-i-ron-dai-kō-jutsu. ②一卷 ③存 ④雲山龍珠著 ⑤大正六刊 ⑥(龍大、一五〇一・一四)
- 宗意綱要** ①(日)Shū-i-kō-yō. ③存、教導講演集之内 ④丘宗讓著 ⑤大正一〇刊 ⑥東京曹洞宗務院
- 宗意言上書** ①(日)Shū-i-gon-jō-shō. ②一卷 ③存 ④知空(寬永一一—享保三 A.D. 1631-1718)記 ⑤寫本(龍大、一九七一・一六、研史)
- 宗意三業願生記** ①(日)Shū-i-san-gō-gwan-shō-ki. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、研眞)
- 宗意問答改悔篇** ①(日)Shū-imon-do-gai-ke-hen. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一五〇二・九二)
- 宗意惑亂一件吟味伺書** ①(日)Shū-i-waku-tan-ik-en-kin-mi-ukagai-shō. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一九七一・四八)
- 宗一大師廣錄** ①(日)Shū-ichū-dai-shū-kō-roku. (支)Tsung-tai-shih-kuang-lu. 玄沙師備禪師廣錄 ②三卷 ③存、一、二、三、一、二、唐師備玄沙(一開平二 A.D. 908)智嚴編 ④玄沙師備禪師廣錄の下を見よ ⑤元祿三刊 ⑥(駒大)(谷大、餘大。

二七六一

宗依宗體祕事

①(日)Shin-e-shin-  
3333 ②一卷 ③存 ④永秀記 ⑤享  
保五寫 ⑥(谷大、餘大・二三一七)

宗惠禪師行狀

①(日)Shin-zen-ji-  
5555 宗惠大照禪師行狀、特賜宗惠大照  
禪師行狀 ③存、續群書類從第九

宗惠大照禪師行狀

①(日)Shin-  
1111 特賜宗惠大照禪師  
行狀、宗惠禪師行狀 ③存、續群書類從第  
九

⑥本書は、具に特賜宗惠大照禪師行狀と云  
ひ、臨濟宗京都大徳寺二十七代宗頤(A.D.  
1376-1452)の傳記を略述せるものである。  
今其の内容を一瞥するに、諱は宗頤、字は  
養叟、俗姓藤原氏、洛東靈山麓に生れ、八  
歳出家し東福寺正覺庵九峰に師事、後建仁  
寺天潤庵、土佐吸江庵、播磨書寫山等に掛  
錫歴遊し、再び建仁に還り、次で近江禪興  
庵に華叟を訪ひ、朝參暮扣十六年、遂に印  
證を承け、其の法嗣となる。後語によりて  
大徳寺を董し、紫衣を賜はり、後花園法皇  
特に宗惠大照禪師の號を賜ふと云ふ。長祿  
二年六月二十七日寂、年八十三、臘六十一  
と。禪師の死後門人の集記したものであ  
る。(紀氏隆眞)

宗叡僧正於唐國師所口受

①(日)Shin-  
no-ku-jin-sunshokoro, ②一卷 ③存、大  
正二〇・六五〇No.1136B ④宗叡(大同四  
一元慶八 A.D. 809-884)  
⑥大隨求根本印第一、五股金剛杵、一切

如來心眞言第二、斧、心印眞言第三、索、  
金剛被甲眞言印第四、劍、灌頂眞言印第  
五、輪、結界眞言印第六、三股叉、心中心  
眞言印第七、寶、隨心眞言印第八、大明總  
持。以上隨求八印に次で慈覺大師大隨求  
印、尊勝佛頂印、文殊根本印、滿足句印を  
明す最後の滿足句印の他は俱に印を明すの  
みにて眞言は無し。是れ宗叡僧正入唐(A.  
789-869)して傳ふる所、十二印一明あ  
り。大隨求即得大陀羅尼明王懺悔法(正、二  
〇・六四九)を參照。此處に師とは玄慶、法  
全、造玄、智慧輪の何れなるや不詳。

⑦覺禪鈔六十九(大正圖像、五・九五)。錄外  
經等目錄(大正五五・一一三)。入唐五家  
傳(日本佛教全書遊方傳叢書第二)

宗叡問答

①(日)Shin-en-  
1111 坪井徳光  
②一卷 ③存、大日本佛教全書第  
二八智證大師全集第四 ④圓珍(弘仁五  
寛平三 A.D. 814-891)説寛平四、年七  
八寂) ⑤(參考) 山家祖徳撰述篇目集卷  
上、諸宗章疏錄第二、密乘撰述目錄

宗圓記

①(日)Shin-en-ki, (支)Tan-  
1138-1) ②(參考) 諸宗章疏錄第二  
③存 ④良源、延喜一一一永觀三 A.D. 912  
—985)撰 ⑤(參考) 大日本佛教全書續刊  
豫定書目

宗可禪師傳

①(日)Shin-  
1111 洞谷山宗可禪師傳 ③存、大日本佛教  
全書第一一五遊方傳叢書第三

宗戒口決

①(日)Shin-kai-  
2111 ②二卷 ③存 ④寫本(正大、一一八四・一  
六一)

宗覺禪師語錄

①(日)Shin-  
1111 ②一卷 ③存 ④田邊善知著 ⑤大正八刊  
⑥(立大、B〇・七)

宗學要論

①(日)Shin-  
1111 ②一卷 ③存 ④大須賀秀道著 ⑤刊本  
(龍大)

宗鑑法林

①(日)Shin-  
1111 ②七十二卷 ③  
存、已綴二・二一・一一五 ④清迦陵性音  
(一雍正四 A.D. 1726)撰

宗鑑法林

①本書は、夢庵格禪師の法嗣である南岳下  
三十七世、集雲堂迦陵性音禪師が、清康熙  
五十一年の春、塞北の法林寺に於て始め、  
同五十三年の夏(A.D. 1717)京師伯林院の  
宗鑑堂に於て鐫版の工を訖つたので宗鑑法  
林と題したものである。集書に際しては宗  
門統要に依て南岳青原の分派を訂し、天皇  
道悟天王の誤りを正し、世尊、諸經、應  
化賢聖、西天祖師、東土祖師、旁出諸祖、  
未詳法嗣に及び、南岳、青原下を大鑑下一  
世より三十七世に次第せしめ、終りに嗣法  
未詳の尊宿を収めたもので、京師に於ける

宗鑑法林

初刻に公案二千五百二則を増入共に二千五  
百六十四則とし、理安に於ける再刻に増入  
百五十餘則を加へて總じて二千七百二十則  
の古則公案拈頌等を蒐録したものである。  
從つて、本書を利用するには、公案拈頌  
を公案の題目に依らずして、其の公案を取  
扱ひたる諸師に就て、收められた公案を搜  
出すべきである。卷首に本書の凡例並に所  
收の目錄を収めて居る。(大久保堅瑞)

宗規綱領

①(日)Shin-  
1111 ②一卷 ③存 ④木邊賢慈編 ⑤明治九年眞  
宗四派改定宗規 ⑥明治九刊 ⑦(龍大、一  
〇七・二一三)(谷大、宗大・三二四三)(京大、  
一・二九・八)

宗規綱領並大學寮條規

①(日)  
1111 ②二卷 ③存 ④寫本(谷大)  
⑤(支)Tan-  
1111 ⑦七十二卷 ③  
存、已綴二・二一・一一五 ④清迦陵性音  
(一雍正四 A.D. 1726)撰

宗規策信

①(日)Shin-  
1111 ②一卷 ③存 ④增暉 ⑤寫本(正大、一〇  
八・一三〇)

宗機根事

①(日)Shin-  
1111 ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、研史)

宗儀

①(日)Shin-  
1111 ②一卷 ③存 ④寫本(高大、一・四八)(京專)

宗義謂立會釋

①(日)Shin-  
1111 ②一册 ③存 ④寫本(高大、寄・一・四八)

宗義謂立會釋集

①(日)Shin-  
1111 ②一卷 ③存 ④寫本(京專)

宗義謂立會通

①(日)Shin-  
1111 宗義謂立會通集、宗義謂立集、宗

義優婆提會通集 ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、研佛)

宗義謂立會通集 ①(日) Shimada, T. (1907) 宗義謂立會通、宗義謂立集、宗義優婆提會通集 ②一冊 ③存 ④寫本(高大、一・四八)

宗義謂立集 ①(日) Shimada, T. (1907) 宗義謂立會通、宗義謂立會通集、宗義優婆提會通集 ②一卷 ③存 ④(京大、一・二六シ・五六)(京專)

宗義優婆提會集標題 ①(日) Shimada, T. (1907) 宗義優婆提會通、宗義謂立會通集、宗義優婆提會通集 ②一卷 ③存 ④(京大、一・二六シ・五六)(京專)

宗義開出 ①(日) Shiraishi, K. (1911) 存、的門上人全集第一 ④的門撰

宗義肝要抄 ①(日) Shiraishi, K. (1911) ②一帖 ③存 ④文明一六寫 ④(寶龜院)

宗義決擇謂立會釋 ①(日) Shiraishi, K. (1911) ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一四四・一七五)

宗義決擇集 ①(日) Shiraishi, K. (1911) 宗決 ②二十二卷(舊版)二十卷(新版) ③存 ④有快(貞和元—應永三A.D. 1343—1416)

眞言の宗義に關する論議決擇の草紙を類聚した書。眞言宗にては教相の論議を大別して釋摩訶衍論關係のもの、大日經住心品疏及び十卷章關係のものとの二種とする。本書はその中の後者に屬し、専ら高野山寶院院相傳(寶門)の論議決擇を集めたもので、彼の東寺頼寶の本母集、高野山壽門

の相保護遺鈔、根來山聖憲の大疏第三と對比せらるゝ名著である。編者は明了でないが、寶院院門首有快門下の手になつたものである。版本數種ありて、古版は二十二卷であつたが、明和八年に金剛峯寺快辯が舊本の誤謬を校訂し、文章を修飾して二十卷とし、八十八條の論題を類聚した。條目は新古兩版共同の編次は餘程異つてゐる。今明和版によつて條目を示せば次の如くである。卷一に自性會因人、自性身隨緣

化他、經畫形像、理法身說法。卷二に凡聖六大、同題(勝義)、六大佛形、六大四曼五爲能生、同題(快爰)、空大色形。卷三に五佛心王、四佛會座、八葉四隅、一門普門(快全)。卷四に自證極位、心法色形、成佛二利、無盡莊嚴藏、十輪佛果。卷五に大日經教主、同題(快爰)、住心品三句悉說。卷六に瑞相三身、意密本尊、三品悉地即身成佛、信解因果(快全)、三種即身成佛。卷七に初地即極、同題(快全)、初地互生、十地佛果、拳善薩正覺、同題私鈔(定本房)、草木成佛。卷八に八識密心、發心即到(快全)。卷九に三密双修、上根上智、同題。卷十に三妄同時、三劫地前地上、界趣輪迴、金剛寶藏。卷十一に由有無明、事六度兼行、宿善有無、生死開合(明鏡)。卷十二に遍計所執捨不捨、同題(快爰)。卷十三に自心尋求菩提、大悲即根、順世八心、心續生答說、六十心見修二惑。卷十四に住心教藥、種子心教誘、五常引業、寂然攝在、法執當心、誘人誘法。卷十五に二乘斷惑、二乘住心廻心、諸部小乘、緣覺言說、散善定地。卷十六に唯

識遮境、諸根互用、不定性入無餘、一業感多生、輪王七寶、輪王增劫、輪王權實。卷十七に心經教主、秘鍵兩部、色不異空、三諦惣句、心王第八。卷十八に一乘經劫、一道極無地前地上、第九驚覺。卷十九に華嚴教主、同題(快全追記)、華嚴說時、八九淺深。卷二十に法華教主、三車四草(龍尊)、開提得度、度生願滿。題下に勝義、快爰、快全等と名を標してあるは作者を示すもので、前記條目下に人名の記入なきは殆ど皆宥快と署名してある。然るに快辨の開版例言には宥快とあるは寶院院相傳の義を示したまで、必しも宥快自作の論草の意味ではないと云ひ、快全等の新草も相傳の説を祖述せるに過ぎないと云つてゐる。

高野山に於ける二大學派たる寶門と壽門との論議決擇には成立の答說や、論議の義路を異にせるものがある。今本書に收められたるものについて云はゞ、六大四曼互爲能生、自證極位、信解因果、三種即身成佛、二乘住心廻心、不定性入無餘等がこれである。

本書の續編に續宗義決擇集十五卷、續々宗義決擇集十四卷がある。

④慶安四刊(帝國、一二四・二〇四)(高大、一・四八) 明和八刊(谷大、餘大・三〇〇八)(龍大、二六六四・一七) (哲、け、三、右、一)(京大、日大未・四三九)(高大、寄・一・四八、一・四八)(京專) 元和刊訓點入活字本 (小田慈舟)

宗義古草 ①(日) Shimada, T. (1907) ②一冊 ③存 ④寫本(高大、寄・一・四八)

宗義雜套 ①(日) Shimada, T. (1907) ②一卷 ③存 ④了欽記 ⑤文政五(A.D. 1803) ⑥安政五寫 ⑦(谷大、宗大・三三〇三)

宗義集 ①(日) Shimada, T. (1907) ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ④(寶龜院)

宗義初心引聲義立類集 ①(日) Shimada, T. (1907) ②一卷 ③存 ④體音記 ④寫本(京大、一・二六シ・五七)

宗義初心鈔 ①(日) Shimada, T. (1907) ②四卷或十三卷 ③存 ④堯智 ④明曆三刊 ④(龍大、二六六四・一八、研佛)(高大、寄・一・四八)(京專)

宗義圖記等 ①(日) Shimada, T. (1907) ②一卷 ③存 ④寫本(高大、寄・一・五七)

宗義制法論 ①(日) Shimada, T. (1907) ②三卷 ③存、萬代龜鏡錄第六 ④日實(元和元A.D. 1615)記 ④刊本(谷大、餘大・五八四) 元和二寫(正大、一八四・七〇)

宗義大要鈔 ①(日) Shimada, T. (1907) ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一七五・四〇)

宗義第三重 ①(日) Shimada, T. (1907) ②一冊 ③存 ④頼瑜(嘉祿二—嘉元二A.D. 1226—1304) ④應永二五寫 ④(寶壽院)

宗義内談義了解 ①(日) Shimada, T. (1907) ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ④(寶龜院)

識遮境、諸根互用、不定性入無餘、一業感多生、輪王七寶、輪王增劫、輪王權實。卷十七に心經教主、秘鍵兩部、色不異空、三諦惣句、心王第八。卷十八に一乘經劫、一道極無地前地上、第九驚覺。卷十九に華嚴教主、同題(快全追記)、華嚴說時、八九淺深。卷二十に法華教主、三車四草(龍尊)、開提得度、度生願滿。題下に勝義、快爰、快全等と名を標してあるは作者を示すもので、前記條目下に人名の記入なきは殆ど皆宥快と署名してある。然るに快辨の開版例言には宥快とあるは寶院院相傳の義を示したまで、必しも宥快自作の論草の意味ではないと云ひ、快全等の新草も相傳の説を祖述せるに過ぎないと云つてゐる。

高野山に於ける二大學派たる寶門と壽門との論議決擇には成立の答說や、論議の義路を異にせるものがある。今本書に收められたるものについて云はゞ、六大四曼互爲能生、自證極位、信解因果、三種即身成佛、二乘住心廻心、不定性入無餘等がこれである。

本書の續編に續宗義決擇集十五卷、續々宗義決擇集十四卷がある。

**宗義難答一重集** ①(日) Shū-gi-nan-to-ichū-jū-shū. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

**宗義難答一重類集** ①(日) Shū-gi-nan-to-ichū-jū-ri-shū. ②一帖 ③存 ④安永七寫 ⑤(寶龜院)

**宗義非情成佛** ①(日) Shū-gi-hi-jō-jō-butsu. ②一卷 ③存 ④(京專)

**宗義非情成佛統蒙** ①(日) Shū-gi-hi-jō-jō-butsu-tō-kei-mō. ②一卷 ③存 ④慶宣述 ⑤元祿九刊 ⑥(龍大、二六六四・一九)

**宗義秘傳私鈔** ①(日) Shū-gi-hiden-shi-shū. ②二卷 ③存 ④印融(永享七・永享七・永正一六 A. D. 1435-1519)述 ⑤明曆二刊 ⑥(龍大、二六六四・二〇〇)研佛(哲、け・五・中・七)(高六、寄・一・四八)(京專)

**宗義秘傳抄** ①(日) Shū-gi-hiden-shū. ②二卷 ③存 ④印融(永享七・永正一六 A. D. 1435-1519) ⑤明曆二刊(高六、寄・一・四八)(京專)明和四寫(高六、寄・一・四八)寫本(高六、一・四八)

**宗義警說集** ①(日) Shū-gi-hi-seo-shū. ②二册 ③存 ④印融(永享七・永正一六 A. D. 1435-1519) ⑤(高六、一・四八)

**宗義別論八題** ①(日) Shū-gi-betsu-ron-hachū-dai. ②一卷 ③存 ④得隣(文政五—明治三 A. D. 1822—1898)述 ⑤寫本(龍大)(谷大、宗大・六〇四)

**宗義別論八題講究** ①(日) Shū-gi-betsu-ron-hachū-dai-kyū. ②一卷 ③存 ④福田義導(文化二—明治一四 A. D. 1805—1881)述 ⑤明治八刊 ⑥(龍大)

**宗義辨論十三題** ①(日) Shū-gi-ben-ron-jū-san-dai. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一七五・四一)

**宗義漫錄** ①(日) Shū-gi-man-roku. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大)

**宗義問題一大斷案後生タスケ** ①(日) Shū-gi-mon-dai-ichi-dan-dan-an-go-shō-ta-shū-ke-ta-ma-o-shi-ko. ②一卷 ③存 ④石川馨著 ⑤明治三刊 ⑥(谷大、宗洋・三二)

**宗義要領傳** ①(日) Shū-gi-yōryō-den. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一五五四・一九五)

**宗義要論** ①(日) Shū-gi-yōron. ②一卷 ③存 ④武田龍栖述 ⑤大正一五刊 ⑥(龍大、二二一〇・六)

**宗義錄** ①(日) Shū-gi-roku. ②一卷 ③存 ④弘經要義附錄 ⑤日輝(寛政二—安政六 A. D. 1800—1859)述 ⑥明治三刊 ⑦(京大、日大末・五八五)(龍大、二六九二・六)

**宗義論議集** ①(日) Shū-gi-ron-gi-shū. ②一册 ③存 ④寫本(哲、え・六・中・七)

**宗義論倉** ①(日) Shū-gi-ron-sō. ②一帖 ③存 ④元祿十一寫 ⑤(寶善提院)

**宗義論藏** ①(日) Shū-gi-ron-zō. ③存 ④玄廣、宥快、仔過、長算、快全、覺融、明範、成雄、快實等諸師の口訣を輯めしもの。

**宗義論草** ①(日) Shū-gi-ron-zō. ③存 ④宥快、仔過、快長、宥勢等諸師の口訣を輯めしもの。 ⑤足利時代寫 ⑥(寶龜院)

**宗義論要** ①(日) Shū-gi-ron-dai. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一五〇・一五)

**宗義論要** ①(日) Shū-gi-ron-yō. ②一卷 ③存 ④宮地義天(文化一四—明治一 A. D. 1817—1879) ⑤占部觀順(文政七—明治四三 A. D. 1824—1910) ⑥雲英晃耀(天保二—明治四三 A. D. 1831—1910) ⑦寫本(谷大、宗大・二二二)

**宗義或問** ①(日) Shū-gi-waku-mon. ②一卷 ③存 ④説林乾冊之内 ⑤智運(元祿三—明和五 A. D. 1693—1768)述 ⑥寫本(谷大、宗大・二六二〇)

**宗教意識** ①(日) Shū-kyō-i-shiki. ②一卷 ③存 ④岡道固著 ⑤昭和七刊

**宗教一隻眼** ①(日) Shū-kyō-ichūgan. ②一卷 ③存 ④南溪(天明三—明治六 A. D. 1783—1873)述 ⑤明治二五刊 ⑥(龍大、一〇三・五)

**宗教緣起略** ①(日) Shū-kyō-en-gi-ryaku. ②大東宗教緣起略 ③一卷 ④存 ⑤秦義應著 ⑥明治一九刊 ⑦(帝國、二五・一三五)

**宗教家大革命論** ①(日) Shū-kyō-ka-daikaku-ron. ②一卷 ③存 ④堂屋敷竹次郎編 ⑤明治三八刊 ⑥帝國、九七・二五四)

**宗教學紀要** ①(日) Shū-kyō-gaku-ki-yō. ②一卷 ③存 ④東京帝國大學宗教學講座創設二十五年記念會編 ⑤昭和六刊 ⑥東京同文館

**宗教學上より見たる釋迦牟尼佛** ①(日) Shū-kyō-gaku-jō-yō-ri-mi-taru-shū-ka-mu-ni-butsu. ②一卷 ③存 ④加藤玄智著 ⑤明治四三刊 ⑥(龍大、二〇九九・一四)(谷大、餘大・三三三)(立大、B二・二二二) ⑦東京弘道館

**宗教學上より見たる眞言宗の特質** ①(日) Shū-kyō-gaku-jō-yō-ri-mi-taru-shin-gon-shū-no-toku-shitsu. ②一卷 ③存 ④赤松密城著 ⑤(京專)

**宗教管見** ①(日) Shū-kyō-kwan-ken. ②一卷 ③存 ④楠龍造著 ⑤明治三四刊 ⑥(谷大、餘洋・六二)

**宗教經驗に就きて** ①(日) Shū-kyō-kei-ken-ni-tsui-hi-te. ②一卷 ③存 ④鈴木大拙、金子大榮述 ⑤昭和七刊 ⑥福井白道社

**宗教玄述** ①(日) Shū-kyō-gen-jutsu. ②(支) Tsung-chiao-tshun-shū. ③宋柏庭著 ④(紹興一九—淳祐元 A. D. 1149—1241)述 ⑤【參考】 諸宗章疏錄第二

**宗教原論** ①(日) Shū-kyō-gen-ron. ②一卷 ③存 ④小野藤太著 ⑤明治三四刊 ⑥(正大、一〇九・一〇一)(京專)

**宗教ことに眞宗と社會主義と**

名所行發①(名庫書)著編所現② 月年の刊載③ (書考叢書釋註)書末④ 説解存内⑤ 代年作者⑥ 著者⑦ 缺存⑧ 數卷⑨ (名書)名題⑩ 號略字數



資本主義

- ①(日)Sha-kyō-ko-to-ni-shin-shū-to-sha-kwai-shū-gi-to-shi-hon-shū-ri. ②一卷 ③存 ④野依秀一著
- ⑤大正一一刊 ⑥(谷大、宗洋・三三三)
- ⑦宗教講話 ①(日)Sha-kyō-ko-wa. ②一卷 ③存 ④加藤玄智著 ⑤明治三八刊 ⑥(帝國、九九・四九)

宗教史上に於ける眞言密教

- ①(日)Sha-kyō-shi-jō-ni-o-ke-ru-shin-gon-mik-kyō. ②一卷 ③存 ④佐伯恵眼著 ⑤刊本(京專)

宗教時機察辨

- ①(日)Sha-kyō-jiki-satsū-ben. ②一卷 ③存 ④時田性庸編 ⑤明治三三刊 ⑥(立大、A〇四・三七九)

宗教邪正辨

- ①(日)Sha-kyō-jō-ji-shū-ben. ②一卷 ③存 ④雲照(文政一〇—明治四二 A. D. 1827—1909)述 ⑤(京專)

宗教進化論

- ①(日)Sha-kyō-shin-kwa-ron. ②一卷 ③存 ④磯道玄 ⑤(京專)

宗教生活とその純化

- ①(日)Sha-kyō-sei-kawata-to-so-no-jūn-kwa. ②一卷 ③存 ④金子大榮著 ⑤大正一二刊

宗教講話

- ①(日)Sha-kyō-gi-wa. ②一卷 ③存 ④嶋島敏著 ⑤明治三六刊
- ⑥(正大、一〇九・一一四)

宗教體験實話

- ①(日)Sha-kyō-tai-kei-jitsu-wa. ②一卷 ③存 ④昭和七刊

宗教大學記念展覽會出陳目錄

- ①(日)Sha-kyō-dai-gaku-ki-nen-ten-ran-kwai-shū-chim-moku-roku. ②一卷 ③存 ④宗教大學編 ⑤(正大)

宗教大學社會事業研究室開設記念展覽會目錄

- ①(日)Sha-kyō-dai-gaku-sha-kwai-ji-kyō-ken-kyūshū-ki-nen-ten-ran-kwai-moku-roku. ②二葉 ③存 ④宗教大學編 ⑤大正七(A. D. 1918) ⑥(正大)

宗教大學創立卅年記念展覽會出陳目錄

- ①(日)Sha-kyō-dai-gaku-sō-ritsu-san-jū-nen-ki-nen-ten-ran-kwai-shū-chim-moku-roku. ③存 ④宗教大學編 ⑤大正五(A. D. 1916) ⑥(正大)

宗教大學圖書館落成記念展覽會列品目錄

- ①(日)Sha-kyō-dai-gaku-to-shō-kwan-rak-kei-ki-nen-ten-ran-kwai-rok-pim-moku-roku. ②一卷 ③存 ④宗教大學圖書館編 ⑤大正一一(A. D. 1922) ⑥(正大)

宗教的自覺と教育

- ①(日)Sha-kyō-teki-ji-kyō-kyō-iku. ②一卷 ③存 ④福島政雄著 ⑤昭和四刊 ⑥東京同文館

宗教的生活

- ①(日)Sha-kyō-kei-sei-kawata. ②一卷 ③存 ④細川本瑞著 ⑤昭和七刊 ⑥和歌山 本玉院

宗教的理性

- ①(日)Sha-kyō-teki-ri-sei. ②一卷 ③存 ④金子大榮著 ⑤大正一一刊 ⑥京都中外出版株式會社

宗教と教育との關係

- ①(日)Sha-kyō-to-kyō-iku-to-no-kwan-kei. ②一卷 ③存 ④谷本富著 ⑤明治三九刊 ⑥(帝國、二五九・一五四)

宗教と教育に關する學說及實際

- ①(日)Sha-kyō-to-kyō-iku-ni-kwan-ni-kwan-suru-akutetsu-ryōji-jisai. ②一卷 ③存 ④大谷大學尋源會編 ⑤大正二刊 ⑥(京大、一・二九・七)

宗教と社會事業

- ①(日)Sha-kyō-to-sha-kwai-ji-kyō. ②一卷 ③存 ④佐伯祐正著 ⑤昭和七刊 ⑥京都顯真學苑

宗教と哲學

- ①(日)Sha-kyō-to-teshū-gaku. ②一卷 ③存 ④松本文三郎著 ⑤明治三九刊 ⑥(帝國、四〇・七三〇)

宗教と文學

- ①(日)Sha-kyō-to-bun-aku. ②一卷 ③存 ④坪内銳雄著 兒玉花外、中島孤島編 ⑤刊本(帝國、九九・一三四)

宗教と文化

- ①(日)Sha-kyō-to-bun-kwa. ②一卷 ③存、佛教文化講座第二 ④山邊習學著 ⑤大正一〇刊 ⑥(谷大、餘洋・五九八)

宗教の改造

- ①(日)Sha-kyō-no-kai-ryō. ②一卷 ③存 ④エルワード著、歸一協會譯 ⑤大正一四刊 ⑥(立大、B二一・五八) ⑦東京博文館

宗教の史實と理論

- ①(日)Sha-kyō-no-shi-jitsu-to-ri-ron. ②一卷 ③存 ④宇野圓空著 ⑤昭和六刊 ⑥東京同文館

宗教の將來に關する意見

- ①(日)Sha-kyō-no-shō-rai-ni-kiwan-ishi-ron. ③存 ④井上哲次郎述 ⑤明治四〇刊 ⑥(帝國、七四・四〇六)

宗教の眞隨

- ①(日)Sha-kyō-no-shin-zui. ②一卷 ③存 ④梁水居士著 ⑤(京專)

宗教の見方と釋尊傳

- ①(日)Sha-kyō-no-mi-kata-to-shakun-sen-den. ②一卷 ③存 ④神木猶之助著 ⑤昭和四刊 ⑥(正大、一〇九・二八八)

宗教發達史上に於ける眞言密教

- ①(日)Sha-kyō-hat-tatsu-shū-ji-ni-o-ke-ru-shin-gon-mik-kyō. ②一卷 ③存 ④佐伯恵眼著 ⑤刊本(京專)

宗教發達の原理

- ①(日)Sha-kyō-hat-tatsu-no-ri-ni. ②一卷 ③存 ④ヨシガロウエー著、高野正治譯 ⑤昭和六刊 ⑥東京同文館

宗教道志留辨

- ①(日)Sha-kyō-dō-shi-ryū-ben. ②一卷 ③存 ④北沼澤鏡著 ⑤明治一八刊 ⑥(龍大、一〇五・六〇)

宗教問題

- ①(日)Sha-kyō-mon-dai. ②一卷 ③存 ④和田龍造著 ⑤明治四二刊 ⑥(谷大、餘洋・二三七)

宗教要解

- ①(日)Sha-kyō-yō-ge. ②十二卷 ③存 ④日賢著 ⑤明治三〇刊 ⑥(谷大、餘大・八二二)(京大、日大未・五八四)(立大、A〇四・一〇六一—一四、三二七、三九一)(帝國、一〇八・一〇四)

宗教要覽

- ①(日)Sha-kyō-yō-ran. ②一卷 ③存 ④文部省宗教局編 ⑤(京專)

宗教律諸宗演派

- ①(日)Sha-kyō-ritsu-shō-shū-zen-pai. (支) Tsung-chiao-

名所行發⑩(名庫書)者藏所現⑨ 月年の刊頁⑧(書考參書釋註)書未⑦ 説解存内⑥ 代年作者⑤ 著者④ 缺存③ 數卷②(名書)名題① 號略字數

Ha-dai-tsung-yen-pai. 諸家宗派 ① 二卷  
 ② 存、正續二〇・二二・三 ③ 清代守一編  
 ④ 一に諸家宗派と云々。宗(禪)教(天台、華嚴)律等の支那諸宗派の傳統次第を簡単に記し、更にその要を暗誦し易き數句に約して述べしものである。一、臨濟源流訣。二、溈仰源流訣。三、洞山源流訣。四、雲門源流訣。五、法眼源流訣。六、天皇下宗派。七、天台教觀。八、華嚴賢音教。九、南山律派。十、附列不知世數未考何宗各家彙集の十に分つ。(塚本善隆)  
**宗家難問答** ①(日)Sha-ke-nam-mon-do. ② 一冊 ③ 存 ④ 足利時代寫 ⑤(寶龜院)  
**宗決** ①(日)Sha-ketsu. 宗義決擇集 ② 二十卷 ③ 存 ④(京專)  
**宗憲評論** ①(日)Sha-ken-lyō-ron. ② 一卷 ③ 存 ④ 下間空教(昭和大A.D. 1931)著 ⑤(京專)  
**宗元錄** ①(日)Sha-gen-roku. (支) Tsung-yuan-lu. ② 百卷 ③ 宋吳興元撰 (一政和二A.D. 1112-) ④(參考) 諸宗章疏錄第二  
**宗玄義抄** ①(日)Sha-gen-gi-shō. ② 一卷 ③ 存 ④ 辰述 ⑤ 大正四寫 ⑥(立大、D.O. 166)  
**宗源餘滴** ①(日)Sha-gen-yo-teki. ② 六卷 ③ 存 ④ 五家正宗贊の註釋。⑤ 寫本(駒大)鶴見文庫本寫本(帝國、二二九・八一)  
**宗源錄** ①(日)Sha-gen-roku. ② 鏡 ③(參考) 諸宗章疏錄第二  
 菴景遜 ④(參考) 諸宗章疏錄第二

**宗光寺中興盛海僧正傳論** ①(日)Sha-ko-ji-chū-ko-sei-kai-sō-ji-dan-ron. ② 一卷 ③ 存 ④ 覺胤記 ⑤ 寫本(正大)  
**宗綱口授抄** ①(日)Sha-ko-ku-jū-shō. ② 一帖 ③ 存 ④ 足利時代寫 ⑤(寶龜院)  
**宗綱對問** ①(日)Sha-ko-tai-mon. ② 一冊 ③ 存 ④ 刊本(哲、三・中・二三) (立大、A.O. 六・七九、八一—八二)  
**宗綱編縫篇** ①(日)Sha-ko-nem-pō-shen. ② 一冊 ③ 存 ④ 刊本(哲、三・右・三〇)  
**宗號次第便覽** ①(日)Sha-gō-shi-dai-ben-ran. 淨土真宗一向宗宗號次第便覽 ② 二卷 ③ 存 ④ 寫本(龍大、研史)  
**宗號定由錄** ①(日)Sha-gō-ji-yō-roku. 復詔宗號定由錄 ② 一卷 ③ 存 ④ 寫本(龍大、一九七一・五五)  
**宗號錄** ①(日)Sha-gō-roku. ② 二卷 ③ 存 ④ 寫本(正大、一五七・七六)  
**宗號論附除疣** ①(日)Sha-gō-ron-tsukerai-jo-yū. ② 二卷 ③ 存 ④ 玄樓奧龍(享保五—文化一〇A.D. 1720—1813) ⑤(參考) 禪籍目錄  
**宗極抄** ①(日)Sha-goku-shō. ② 一卷 ③ 存 ④ 心海撰 ⑤ 天文三寫 ⑥(眞如藏)  
**宗極道肝** ①(日)Sha-goku-dō-kan. ② 一軸 ③ 存 ④ 寫本(金剛三昧院)  
**宗極論** ①(日)Sha-goku-ron. (支) Tsung-chi-lun. ④ 虛堂本空(紹興三A.D. 1133) ⑤(參考) 諸宗章疏錄第二

**宗骨鈔** ①(日)Sha-kōsu-shō. ② 一帖 ③ 存 ④ 德川時代寫 ⑤(寶龜院)  
**宗四分比丘隨門要行儀** ①(日)Sha-shi-bun-bi-ku-zui-mon-yō-gyō-gi. (支) Tsung-si-tan-pi-chū-sui-mon-yō-1-shing-i. 宗四分比丘隨門要略行儀、四分比丘尼隨要行儀 ② 一卷或二卷 ③ 存、大正八五・六五四No. 2791 ④(參考) 入唐新求聖教目錄、東域傳燈目錄卷下  
**宗四分比丘隨門要略行儀** ①(日)Sha-shi-bun-bi-ku-zui-mon-yō-traku-gyō-gi. (支) Tsung-si-tan-pi-chū-sui-mon-yō-jūo-hsing-i. 宗四分比丘隨門要行儀、四分比丘尼隨要行儀 ② 一卷或二卷 ③ 存、大正八五・六五四No. 2791  
 ④ 本書はスタイン氏蒐集の燼煌出土古寫本、大英博物館藏同種二本の中の一、首尾は缺佚してをるけれども、末尾に「宗四分比丘隨門要略行儀」とありて題名を知ることが出来る。佛滅後百年頃出世と傳ふる曇無德の四分律に基いて比丘の行儀の要略を示したもので、殘卷の初に戒場に關する圖相あり、それより順次、結戒場法、解界法、說戒法、對首安居法、對首受七日法、僧中自恣法、分亡比丘輕物法、賞勞法、三人分亡比丘物法、展轉淨施法、受非時藥法、捨墮懺悔法。正明懺悔法、明還財物法、讖罪發露法、疑罪發露法、我作餘食法、作六念法、受畜錢寶作淨等法、淨菜菜等法、八衆五法の二十一法に就いて説明し、謂ゆる比丘の日常生活其他の規定を舉

げてゐる。永超(A.D. 1014—1095)の東域傳燈錄下(大正五五・一五六頁)上に「宗四分比丘隨門要行儀」一卷智證大師證來目錄(大正五五・一一〇六頁上)に「四分比丘尼隨要行儀二卷」とあるから昔では本邦に傳來したこと柄である。(鳴沙餘韻解説第一部一三二—一三三頁参照)  
 ④ 燼煌出土本(大英博物館藏S. 304)  
 (矢吹麗輝—成田昌信)  
**宗旨御改五人組帖** ①(日)Sha-shi-o-arutame-go-nin-gumi-ji. 部原村控 宗旨御改五人組帖 ② 一卷 ③ 存 ④ 明和五寫 ⑤(立大、D. 1・131)  
**宗旨閑話解** ①(日)Sha-shi-kan-wa-ge. ② 一卷 ③ 存 ④ 高臥述 ⑤(參考) 禪籍目錄  
**宗旨疑問指歸略答** ①(日)Sha-shi-gi-mon-shi-ki-ryaku-to. ② 一卷 ③ 存、眞宗全書第五四 ④ 圓智(寛文頃A.D. 1661—1672)述  
 ⑤ 圓智は寛文年間(於ける眞宗の學匠である。本書は弟子慧空の提出せる十七條の疑問を解明せんとして、未だ成らざるに慨然長逝す、後に慧空はこれを淨寫し、自家の篋底に秘せしものなること卷末の慧空の跋に依て推知せられる。内容は十七條の中、彌陀眞化、諸佛能化、滅罪盡不、他作回向、宿善厚薄、果遂宿善、微善成佛、釋迦形像、彌陀三尊の九條に就て解説せるものである。  
 ⑥ 寛文一〇寫 ⑦(谷大、宗大・二五八三) (荻生隆三)

名所行發⑩ (名庫書)考藏所現⑨ 月年の刊寫⑧ (書考參書釋註)書末⑦ 說解存内⑥ 代年作者⑤ 者著④ 缺存③ 數卷② (名書)名題① 號略字數

宗廟言上記

①(日) Sha-shi-gon-ji-ki. ②一卷 ③存 ④知空(寛永一一一享保三A. D. 1631-1718)記 ⑤寫本(龍大、一七七一・一七)

宗廟撮要記

①(日) Sha-shi-satsu-yo-ki. ②一冊 ③存 ④日賢(享保二〇一文化一三A. D. 1735-1816)記 ⑤寫本(京大、日大、五八三)

宗廟雜記

①(日) Sha-shi-zaki. ②二卷 ③存 ④日乾記 ⑤天保二刊 ⑥(龍大、六九二・一三)(谷大、餘大、二〇三〇)(折、え・四・中・一五)(立大、A〇四二〇一三二)(帝國、二四一・一九)(京大、國史) ⑦十卷 ⑧存 ⑨日賢(享保二〇一文化一三A. D. 1735-1816)述 ⑩寫本(立大、D〇・七六(三一九))

宗釋相傳條々

①(日) Sha-shaku-soden-jijyo. ②一卷 ③存 ④(京大) ⑤宗釋莊句類聚 ①(日) Sha-shaku-so-ku-rui-ju. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

宗宗淺淺隨聞記

①(日) Sha-sha-shen-zen-zui-mon-ki. ②一卷 ③存 ④禪那集 ⑤寫本(曼殊院)

宗乘講義錄

①(日) Sha-jo-ko-ri-roku. ②存 ③清水梁山、加藤文雅編 ④明治三七一三九刊 ⑤(立大、B〇九・一八六四)

宗乘講本

①(日) Sha-jo-ko-hon. ②一卷 ③存 ④山上曹源編 ⑤示庫院文、歸依三寶、安居、坐禪儀、四攝法、行持、

赴粥飯法、乘寮清(箴)規、對大已法、學道用心集、普勸坐禪儀、坐禪用心記を收む。

⑥大正一二刊 ⑦(駒大) ⑧東京和融社 ⑨宗乘論題 ①(日) Sha-jo-ton-tai. ②一卷 ③存 ④内田寬寧(天明七一明治二二A. D. 1787-1879)述 ⑤寫本(龍大) ⑥宗乘論題名目集 ①(日) Sha-jo-ton-tai-myō-moku-shū. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、研眞)

宗圖

①(日) Sha-zu. ②一冊 ③存 ④享保三刊 ⑤(高大、寄・一・二二) ⑥宗圖目錄 ①(日) Sha-zu-moku-ro-ku. ②三冊 ③存 ④刊本(高大、寄・一・二〇)

宗制改革論

①(日) Sha-sei-kaikai-ron. ②一卷 ③存 ④土屋詮教編 ⑤大正三刊 ⑥(立大、B一七・二二)

宗制寺法並宗記

①(日) Sha-sei-ji-to-nurabini-shū-ki. ②三冊 ③存 ④刊本(高大、一・五七)

宗制寺法並補則

①(日) Sha-sei-ji-hi-nurabini-ho-soku. 眞宗大谷派宗制寺法並補則 ②一卷 ③存 ④昭和五刊 ⑤京大、大谷派本願寺

宗制要論

①(日) Sha-sei-yō-ron. ②一卷 ③存 ④石井了玄著 ⑤明治三四刊 ⑥(正大、一〇八・四〇) ⑦東京淨土教報社

宗政革新論

①(日) Sha-sei-kaikin-shin-ron. ②一卷 ③存 ④山田英源著 ⑤大正八刊 ⑥(立大、B〇七・三)

宗祖遺跡記

①(日) Sha-so-i-seki-ki. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、宗大・二四五三) ⑤宗祖遺文集 ①(日) Sha-so-i-mon-shū. ②一卷 ③存 ④古寫本(京大、印哲R・一八)

宗祖圓光大師御法語

①(日) Sha-so-en-kō-daishi-go-hō-go. ②一卷 ③存 ④源空(長承二一建曆二A. D. 1133-1212)語 ⑤刊本(龍大、二六八二・一一一、研眞)

宗祖紀

①(日) Sha-so-ki. ②一卷 ③法雷作 ④(參考) 淨土眞宗教典志第二 ⑤宗祖觀 ①(日) Sha-so-kan. ②一卷 ③存 ④大谷學士會編 ⑤明治四四刊 ⑥(谷大、宗洋・三八三)(龍大、研眞)

宗祖五百回忌大會見聞集

①(日) Sha-so-go-hyak-kwai-ki-dai-ken-mon-shū. ②一卷 ③存 ④白嶺(寶曆元A. D. 1751)記 ⑤寫本(谷大、宗大・一八九四)

宗祖御遷化記錄

①(日) Sha-so-ō-sen-ka-ki-roku. ②一篇 ③存、日蓮宗々學全書與會全集之内 ④日興(寛元四一正慶二A. D. 1246-1332) ⑤弘安五(A. D. 1382)

日蓮の上足六老僧の日興が、宗祖日蓮の入滅に關して記録した書。弘長元年の伊豆配流、文永八年の佐渡流罪、同十一年の身延隠棲、弘安五年十月八日日本弟子六人の定め同十三日の入滅、同十四日の葬送次第等に亘つて記録し、同年十月十六日の日附がある、參考とすべき資料である。(馬田行啓)

宗祖三百年忌法會記

①(日) Sha-so-san-byaku-nen-ki-hō-e-ki. ②一卷 ③明春記 ④元和八(A. D. 1622)四月 ⑤(參考) 淨土眞宗教典志第二

宗祖七十三輩考

①(日) Sha-so-shichijū-san-pai-ko. ②一卷 ③存、親鸞傳叢書之内 ④惠旭(一安永五A. D. 1776)記 ⑤親鸞聖人の門弟中、性善、西佛、性信、蓮位、教信、親性、行圓、法善、法興、祐元、本誓、教順、定相、念名、寂念、宗雲、明慶、西念、了智、明光、源誓、證性、善性、教名、興說、眞佛、善性、信海、順信、乘念、信樂、成然、是信、無爲信、善念、教念、定信、道圓、入信、唯圓、入信、明法、慈善、唯佛、唯信、唯信、眞佛、唯圓、眞證、善性、明性、玄海、教養、明空、念信、安了、眞佛、顯智、專空、了海、覺信、空誓、誓海、了源、閉善、覺念、教圓、念信、圓善、善性、佛性、西圓、道法等七十三人の生國、俗姓、行化等を略述したものであつて、惠旭の著、宗祖世録の附録とも言ふべきものである。(藤枝昌道)

宗祖聖人四百年忌日誌

①(日) Sha-so-shū-nin-shi-byaku-nen-ki-nissai-ji. ②一卷 ③存 ④祐俊(慶長六一天和二A. D. 1601-1682)記 ⑤寛文元寫 ⑥(龍大、別置)

宗祖聖人略傳十六門記 ①(日)

Shū-so-shū-nin-ryaku-den-jū-jū-roku-mon-ki. ①一卷 ②了風(一寶曆頃 A. D. 1751-1763)撰 ③昭和二刊 ④(正大一六一・六)

宗祖眞蹟 ①(日) Shū-so-shin-sōki.

①一卷 ②存 ③善導、法然、聖覺、良忠了樂外四名の眞蹟。④墨本(谷大、別置)

宗祖親鸞聖人御舊蹟圖 ①(日)

Shū-so-shin-rai-shū-nin-go-kyū-sōki-zū. ②二卷 ③存 ④明治二三刊 ⑤(龍大)

宗祖世錄 ①(日) Shū-so-se-roku.

②五卷 ③存、眞宗全書第六七 ④慧旭記 ⑤安永六(A. D. 1777)

⑥眞宗開祖親鸞の在世九十年間に於ける社會の狀勢を諸記録によりて忠實に蒐録せるものにして、著者三十六年間苦心の述作である。東都の深諦これを校して刊行し、現にその住寺たる東京赤坂成満寺に、その版木を藏すといふ。内容は始め入滅、吉水入室、出家、四十五歳、四十六歳の三要二樞を中心として記述し、更に誕生の年より次第に編年體に録し、祖師遊履の事蹟、門侶等のことをも附記してゐる。(高千穂徹乘)

宗祖茶毘所延仁寺聚説 ①(日)

Shū-so-da-bi-shō-on-nin-ji-shū-seisu. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、別置)

宗祖大師御作書目錄 ①(日) Shū-so-dai-shi-go-soku-shō-moku-roku.

高祖御製作目錄 ③存、弘法大師全集第一五附録 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1093)

一二三)集 ⑥高祖御製作目錄の下を見よ。

宗祖大師小消息講話 ①(日) Shū-so-dai-ko-shū-shi-sekwa-kōwa.

②一卷 ③存 ④吉岡阿成(元治元—明治三八 A. D. 1864—1905)述 ⑤明治三九刊 ⑥(龍大、研)

宗祖大師小消息和辨 ①(日) Shū-so-dai-shi-ko-shū-soku-wa-bun.

②一卷 ③存 ④寫本(龍大、二六八・二一一)

宗祖歎徳文 ①(日) Shū-so-tan-do-ku-mon.

②一卷 ③存 ④浄土眞宗教典志第一に曰く「應善如上人需、帥之、以續報恩講式後」云々。

宗祖の皮隨 ①(日) Shū-so-no-hi-zū.

②一卷 ③存 ④山崎辨榮(安政六—大正九 A. D. 1859—1920)著 ⑤大正一四刊 ⑥(正大、一五五八・一一一) ⑦京都一番社

宗祖本地辨 ①(日) Shū-so-hon-ji-ben.

②二卷 ③存 ④日恒述 ⑤寫本(立大、D. O. 一九九)

宗祖本傳 ①(日) Shū-so-hon-den.

御傳抄、善信聖人繪、善信聖人親鸞傳繪、本願寺聖人親鸞傳繪、親鸞傳繪 ②二卷或四卷 ③存、大正八三、七五〇 No. 2604、眞宗聖典宗祖讚仰編 ④覺如(文永七—觀應二 A. D. 1270—1351)詞、淨賀(建治元—延文元 A. D. 1275—1336)繪 ⑤(參考) ⑥浄土眞宗教典志第一

宗祖門弟總系譜 ①(日) Shū-so-mon-tai-sū-kei-jū.

親鸞聖人教御門弟等交名 ②一卷 ③存 ④(參考) ⑤浄土眞宗教典志第二、眞宗全書刊行豫定書目

宗祖門侶交名牒 ①(日) Shū-so-mon-ryo-ki-myō-dō.

②一卷 ③存 ④大正五刊 ⑤(谷大、宗大・三二六九)

宗祖六百五十回忌大師號字撰草 ①(日) Shū-so-rop-pyakū-go-jū-ki-kwai-ki-dai-shū-go-ji-sen-sō.

②一卷 ③存 ④寫本(正大、一五一六・一〇〇)

宗祖六百五十回忌法要錄事 ①(日) Shū-so-rop-pyakū-go-jū-ki-kwai-ki-hō-yō-roku-ji.

②一卷 ③存 ④脇谷摺謙、鷲尾敦導共編 ⑤明治四五刊 ⑥(龍大、一〇六・三五)

宗體決疑鈔 ①(日) Shū-tai-keisū-jō.

②一卷 ③存、日蓮宗々學全書上聖部之内 ④日祐(永仁六—應安七 A. D. 1293—1374)述

⑤日蓮宗初期の學僧日祐の著。「午前得道有無事。親佛三昧經、摩耶經事。涅槃經說、四教一事。諸教所讚多在彌陀一事。餘深法中樂教利喜事。於一佛乘分別說之事。於此命終即往安樂世界事。一稱南無佛皆已成佛道事。法既本妙、血由物情、並但除其執不除其法事。諸論各異端修行理無二、偏執有二是非、達者無異誣一事。三重教相次第委細可注給之候。屬累品以後被說、隨他意法門云事。三大部觀事。爾前法華同異事。相待絕待並約教約部違日事。禪宗念佛者中有不思議奇特一事。大論云、自法愛染故毀許他人法、雖持戒行人不脫地獄苦一事。壽量品五百鹿點劫數安示事。安樂行品於諸如來起慈父想事。涅槃不說一

字云事。本門戒壇事」の二十二條を挙げ本化獨特の宗義を宣揚した書。(馬田行啓)

宗體辨 ①(日) Shū-tai-hen.

②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一〇五一・五一)

宗體門隨聞記 ①(日) Shū-tai-mon-kui-mon-ki.

②一卷 ③存 ④寫本(谷大、宗大・三〇六五)

宗大事口傳抄 ①(日) Shū-dai-ji-ku-den-shō.

②二帖抄見聞 ③十七卷 ④存 ⑤等海(一貞和五 A. D. 1349—)述 ⑥康永二—貞和五(A. D. 1343—1349)

⑦本書は心賀の説を尊海が筆録したと云はれる。七箇口傳二帖抄を武藏仙波の等海が東陽忠尋・俊簡・靜明・心賀・一海等の口訣を参照して註解を施したもの。本書著作の緣由は等海が自ら記して云ふ。「稽古の用意のためと法門の失錯を顧慮したためとの二つの動機に依つて、平常披見した所持の聖教と從來傳受した法門の深義の口訣とを資料として本書を草案した。本書は康永二年八月十日に起稿し、貞和五年六月二日に脱稿した。前後七ヶ年の星霜を重ねて漸く功を竟つた。見聞共に少しも私案を立てて改變することをせず、皆相承のままこれを記したものである。本書は嫡弟一人の外には授與しない。甚深々々の書である(第十七卷の跋語)。この跋語にあるように等海は引證の文を擧げて書名を附す。今念のためには余は手元にある各種の書と對照したが悉く現存本の本文と一致してゐる。これを他の口傳書例せば漢光類聚に比較すれば本書は文献尊重の方針を取つてゐることが知

られる。そして漢光類聚ほど有名な書を一ヶ所も引用してゐない。乍然當時既に口傳書は相當多く作られてゐたらしい。兎に角本書は宗大事口傳書ではあるが頗る真面目に文献に基いた口傳を記述したものといへる。従つて口傳書撰述年代を本書に依つて區別付けることが可能であると思ふ。等海の傳は四明餘段三百九十九號所收の「日本天台口傳法門の由来及其發達」(岡教達氏記)参照。莫は武藏川越仙波喜多院にある。本書は宗大事口傳を抄記したもの。宗大事とは傳法要偈の四箇大事と弘仁略傳三箇大事とのこと。これを惠心流七箇大事といふ。

この七箇大事は天台の三大部の重要事項を掲げたものであつてこの七箇大事を擧げれば論義の宗要、義科、問要となり、三百條乃至千七百條の算題と分れる。故に七箇大事は三部研究に歸するといへる。此等を總括して宗大事といふのである。次に調卷。岡氏の説では本書は「十七卷並に一代教相肝心一卷とを合して十八卷」から成るといふ。又島地大等氏著「天台教學史」も本書を十八卷なりと記してゐる。現存本は慶安四年刊本は十七卷で「一代教相肝心」一卷は附いてゐない。正保二年刊本があるようだが未見。十八卷説は何書に出る説か未詳。次に本書の散逸複寫。仙波新賢法印の代、享德三年(A.D. 1516)十二月二十七日關東兩上杉騷亂の際、仙波の原本は散逸したが、其翌康正元年(A.D. 1565)嘉興和尚が諸方から寫本を集めて再録した。この再録本が現存書である。故に多少の脱落若しくは附

加があるようだと岡氏の説。第九卷に真正發菩提心、及び起慈悲の一心三觀の口傳が脱落。又第二卷の山王三國傳來血脉圖には後人の添加がある等はこの爲めであらう。

本書は惠心流七箇口傳法門即ち四箇大事(一心三觀。心境義。止觀大旨。法花深義)と略傳三箇大事(圓教三身。常寂光土義。蓮華因果)を一念三千本覺法門(前田慧雲氏は本覺法門とは台密一致。台禪一致の法門のことだといふ)に依つて叙述し、先づ四箇三箇の別を説き、四箇大事は山家大師(傳教大師)が道邃和尚から傳法したもの、三箇大事は四箇大事の中の法花深義から開出したものであると兩大事の關係を述べ、略傳三箇大事は日本名僧傳(光定著)に記す「第一回は弘仁三年最澄が圓澄に付屬し、第二回は又圓澄に授けた(授法年未明)この授法が三箇の傳授である」といふ説を認め、更に四箇傳法は「傳法要偈」によるのか、「止觀心要」によるのかと疑ひ、兩書共に用ゆるとしながら、本書は主として傳法要偈をもつて説述を進め心要は必要の起つた時に限つて用ゆるに留まる。本文に入るに當つて本書の大綱を示せば

- 一心三觀——第一、二卷。
- 心境義——第三卷。
- 止觀大旨——第四、五、六、七、八、九、十卷。
- 法華深義——第十一卷。
- 圓教三身——第十二、十三卷。
- 常寂光土義——第十四卷。
- 蓮華因果——第十五、十六卷。

天台與眞言華嚴三論禪同異——第十七卷。となる。第一「一心三觀」の下では境の一心三諦。鏡像圓融の法門、通相三觀(第一卷了)智一心三觀。境智一心三觀。一紙口決。一心三觀傳於一言。常用一心三觀(これは心要の文による)。一心三觀與圓頓戒同異。山王一心三觀。山王三國傳來口決(ここに血脉圖が記してある。これは本書は後人の添加が行れた證據の一。今血脉を示せば

- 山王——慶命——勝範——長蒙——忠尋——皇覺——範源——俊範——靜明——政海——一海——承海——等海——良海——心昌)
- 三種山王(迹門三輪山王。本門三輪山王。觀心三輪山王(第二卷了))
- 第二「心境義」の下では一心三觀一念三千兩重相承。圓頓行者所觀觀法性觀觀無明歟。理造三千事造三千。南岳大師明一念三千歟。心要南岳御釋云事諸流不共許。玄義文句明一念三千。妙法蓮華首題互三千三觀。(第三卷了)。
- 第三「止觀大旨」の下では宗教宗旨相承。山家大師内證相承血脉譜有(四重不同(第一は龍樹相承。第二は博大大士相承。第三は南岳相承。第四天台相承)。口傳血脉三重第一重は付法藏經の金口相承で教學相傳。第二重は南岳心要で今師相承。第三重は印可血脉。この印可血脉の下で近代授血脉事無三體事也。只似物授之也と慨嘆してゐる)。
- 第三重惣付屬。(第四卷了)皇覺口傳頌。三重中道。塔中相承一心三觀中論相承一心三觀不同。本有三諦。終窮究竟一心三觀。三種止觀。即身成佛。三業即身成

佛。三趣即身成佛。六道即身成佛。六即即身成佛。四教即身成佛。爾前迹門本門即身成佛。眞言天台所立即身成佛。(第五卷了)。摩訶止觀第一大章章のことを本書では開章といふ。開章。止觀一部肝心略頌。止觀付機根二設。解行二歟。離機根教說歟。大意五略圖。止觀發菩提心六識歟九識歟。(ここで靜明御義に云くとして傳教大師は道邃から九識發心を傳へ、行滿から六識發心を傳ふ。惠心檀那兩流の義不同であるといふ。六即。元品無明能治智。元品無明體。妙覺智體。跨節二諦。緣起有種(後範御義として眞言教緣起は法界。佛界。衆生の三緣起があると)。斷惑入位入位斷惑。三惑同時斷異時斷。體用三惑。惣體別體無明。六即一位口傳。玄義止觀六即不同。以上で大章章畢(第六卷了)。第二修大行。四種三昧圖。止觀行儀行相。修大行與正觀章正行不同。四種三昧本尊。(心賀御義に云く。附文の時は四三昧各別。元意の時は四行共に本地の阿彌陀を本尊となす)調直定(心賀御義に云く、散亂心の當體即調直定である)。三業相應念佛(心賀義に云く當流では善導家の念佛と往生要集の決定往生の念佛と摩訶止觀の念佛との三重念佛は不同也と習ふ)。天台修行無相行、眞言修行有相行云時眞言勝三天台一歟。六觀音。占察實相觀一家實相觀。山家大師の唯識唯心の唐決。向上一路云事如何、以上で止觀の大章章畢(第七卷了)。第六方便章。天台意戒品開會(南都律を評してゐる)。行五法(心賀御義に云く。二十五法の中では行五法を本

となし、行五法の中では一心を肝要となす。一心とは一心三觀也。行者悉經二十五法二歟。第七正觀章。摩訶止觀觀法起上法門歟。妙解妙行。直行圓人有無。止觀一部迷門習之歟。本門習之歟。解行二門爾前迷門本門通局。名字不退。名字非位。初心行者止觀修行心地如何。天台意無宿習者許發心修行義耶。直入直行迂迴三種機不同。直行漸入超入三種機相如何。正觀章不限。妙行通。妙解耶。萬法不改當體已心中所行云心如何。山門住侶授。佛法次第。四塔の義は當流の義であるが、最初に四教義〔大部の四教義〕を授ける。西塔は末代の學侶なるが故に託事附法觀から初めるが、當流は下根下劣の機。只今入道出家した荒凡夫・十四五の小兒でも皆最初から本不生の止觀を授ける。これは易行中の易行である。十境。第一陰入境。陰入境發不發。陰境所緣境歟能觀智歟。簡境用觀口傳。一念三千所觀境第六識歟。眞言教所明一切一心識。(第八卷了)。十乘觀法。觀不思議境。名字即修十法成乘觀。止觀立行六識九識不同。理造事造變化造。三種十界。淨名疏止觀四種佛土不同。付十如。惣釋頌解。止觀傳授時障障不成。成佛體如何。芥爾一心第八識。隨緣不變兩真如立處口傳。如來斷修惡。有二性惡。者本地無作佛果。九識圓備一心。(眞正發菩提心の條を缺く)善巧安心。安心心地形如何。空無生門入機。天台教意一切機必依教得道歟。離教得道歟。機教不分處入機不可有歟。(これは諸宗を天台宗に攝する口傳であるが、これ

を逆に云へば奈良平安佛教と鎌倉佛教と天台宗との交渉を述べたもの。眞言教三種不可得。不說一字。(第九卷了)。破法通。識通塞。道品調適。助道對治。知位次。次位意如何。判攝五品。能安忍。無法愛(本覺修行)。第二煩惱境。祕教三十七尊習合口傳。(本書に屢「習合」といふ語が用ゐられる。習合神道説の用語と多少の交渉があると考へられる)。第三病患境。第四業相境。第五魔事境。第六禪定境。第七見境。以上で止觀大旨畢る。上記によつて考へるに止觀大旨は傳法要偈。圓澄傳法。止觀心要。法華長講文(下卷)。摩訶止觀の要旨を口傳したものである。(第十卷了)

第四法花深義。(心賀御義に云く。法花玄義は大師の内證から云へば隨自意語であり、機に授ける方から云へば隨他意語である。隨自意語を法花深義といふのである)。每品題。妙法蓮華經何義耶。一心三觀一念三千外如何深義有之別口決之耶。約能化所化。口傳五重玄義(心賀御義に云く。經の首題は三身即一の題目なり)。立名口傳。三種法花共法花深義。三種法花。(日蓮宗義と比較すべき説である)。三種法花合掌印。山門三塔本尊習(根本中堂本尊藥師如來は止觀本尊一心三觀無作三身三世常住の教主である。この教主は無量壽決定王如來である。この如來は阿彌陀佛である。三塔本尊は藥師釋迦觀音三尊各別であると思はれるが同一佛であるといひ、惠心の山王讚を引證してゐる)。山家大師本尊持經(傳教大師誕生の時奇瑞たる本尊持經の相承傳

説を記し、傳教・慈覺・承雲・安原・寒寂―明快の七代付屬相承したが明快はこれを實相院の本尊藥師の腹心に納めたと云云)。無作秘印。經題名號法界摩訶以風爲體。居法界道場(一偈文)。(日蓮宗義と關係が深い説)。天台宗持國利民宗(皇居に此宗を授け奉る時の法門である。この法門を慈眼大師は後陽成院に奉授した。又家康にも之れを傳へて一實神道が徳川時代に盛行するに至つた)。三種法花(曼荼羅との對照)慈覺御傳三種法花。慈覺以一心三觀。付屬惠亮。顯說法花體。五大院釋有三種超八釋。(教道。證道。跨節)法花二處三會。三種法花共有開權顯密義。同體權實。根本法花説法。四種佛土説法花不同。法花教主三身中何耶。玄義文句略頌口傳。文句口傳略頌。四種釋(因緣。約教。本迹。觀心)必互二部始終。三大部觀心正心地形。四要品當流相承。三大部談旨。山家大師教觀共道遂和尙相承。(心賀御義に云く。光大大師の本迹二經には傳一家法門於行滿。受二心三觀於道遂。然し二人から教觀を共に相承したと得意すべきである。但し行滿相承六識修行上教觀。道遂相承九識修行上教觀と口傳する)。(第十一卷了)。

第五圓教三身。四句成道。證道八相。(心賀御義に云く。圓教三身は文句の三身義に就いて習ひ、常寂光土の法門は止觀第五の十種國土で沙汰し。蓮花因果の法門は玄文一部の大旨であると、三箇大事を三大部と習合するのである)。この口傳では無作三身義を詳説し、自受用の問題に及ぶ。

日本天台の圓密禪戒淨の佛身論を論述したものである。(第十一卷了)。

第六常寂光土義。(第十四卷了)。

第七蓮花因果。本迹不同(第十五卷了)。被接法門(第十六卷了)。以上で七箇宗大事口傳は畢る。

次に第十七卷は天台宗と他宗との比較であるから附録と云ふべきもの。乍然、本書著作時代の各宗宗義と天台宗との交渉接觸が知られて面白い口傳である。眞言與天台同異。天台宗立法界體性智耶。眞言天台勝劣同異。弘法大師十住心。天台與法相不同。華嚴與天台同異。天台與三論同異。教外教外。天台與禪不同。天台宗法花宗不同(一海の草案に云くとして天台と法花との不同説を出す。これは日蓮宗の説に對してゐるものではなからうか、又一海は「眞言宗も禪宗も天台宗の部屋住み」であるといふ。これも觀山天台の自負心から云ひ出したものであらう。心賀は安然が教時詳論で記した眞言、佛心、天台、花嚴の次第は淺深の次第であるといふが、本詳論は草案本であつて治定本ではないと辯護してゐる。又本書は屢大憲法語を引用してゐる。本書は卷末に「貞和五年己丑六月二日類聚畢」と記す。本書の名稱は何々類聚とも云はれるのではあるまいか。(第十七卷了)。最後に「一代教相肝心」一卷は未詳であることを附記して置く。

慶安四刊 ①龍大、二六五三・三(正大、一三九一、三、四〇一四一)(立大、A一三、一)(哲、ま・一・左・九) (田島傳音)

宗大祕 ①(日)Sha-dai-hi. ②一帖

③存 ④鎌倉時代寫 ⑤(寶善提院)

宗懔感得記 ①(日)Shi-chen-kan-

toki-ki. ②一卷 ③存 ④寫本(立大、A O

六・四四、D O・三〇)

宗底 ①(日)Shi-tai. ②一帖 ③存

④明應七寫 ⑤(寶龜院)(金剛三昧院)

宗典義略 ①(日)Shi-ten-ji-yaku.

②一卷 ③存 ④曇龍(明和六一天保一二

A. D. 1769—1841)述 ⑤寫本(谷大、宗大、

一一三才)

宗典通義 ①(日)Shi-ten-ka-gi. ②

一卷 ③存 ④寫本(龍大)

宗傳戒文試參請 ①(日)Shi-den-

kai-mon-shi-san-shu. 教授戒文試參請

③存、禪學大系戒法部之内 ④本光陸道

(—安永二A. D. 1773)

宗傳要文 ①(日)Shi-den-ye-mon.

②一卷 ③存 ④寫本(龍大)

宗統復古志 ①(日)Shi-to-ku-ko-

shi. ②二卷 ③存 ④白龍妙玄(寛文九

一寶曆一〇A. D. 1669—1760)述 宗珊已

海編 ⑤寶曆一〇刊 ⑥谷大、餘大、三一

六三(駒大)哲、四・中・三二) (帝國、一

九・四七二)

宗統編年 ①(日)Shi-to-hen-nen.

(支) Tsun-ku-tung-pien-nien. ③存、已續

二乙・二〇・一一三 ④清代紀蔭撰

⑤本書は、南岳下三十七世江南常州府武進

の史傳を編年體に編纂したもので、第三十

卷までに臨濟は二十九世宜興龍池の幻有正

傳禪師に終り、曹洞は二十九世北京宗鏡の

小山宗書禪師に終つてゐるが、第三十一、

三十二卷に於て此れに續き、諸方略紀と題

して見聞のまゝを年次の下に略記して居

る。大道の統は正宗に歸し、正宗の傳は大

道を統ぶるの義に採つて宗統と題したもの

で、編年紀事の中、論議あるものには、夾

註を付して説明して居る。清康熙二十八年

(A. D. 1689)本書成るや、翌二十九年二月

穀旦、江南江寧府句容縣華山の晚香和尚の

序を請ひ、侍御の許青嶼(之漸、法名濟霽)

の刊板序を得て瑪瑙寺仰山西房藏版として

流梓したものである。其の篇次は、法叔た

る玉泉和尚の入院に托して奏進せし康熙三

十二年三月十一日の紀蔭の宗統編年進疏、

七十八翁許之漸の序、晚香の序、目次、佛

祖宗統單傳世系之圖、宗統歷年世代次第之

圖、凡例、總論、別問と次第し、參學門人

乘良、乘岳、乘岱、乘叡等の校録に係るも

のである。後、江南常州府天寧寺覺理上人

(清如)神駿寺(祥符寺)に於て、澆滅せんと

せし本書の殘簡一部を獲、湊集成帙して缺

失なき完本となしたもので、嘉興府嘉善縣

の陳仲泉、杭州府仁和縣の許息庵等の捐資

助縁を得、清光緒十三年六月江南常州府昆

陵の雅浦居士陸鼎翰の刊行縁起後序を得て

重刊したもので、卷末に陸鼎翰の刊記を付

く此れに言及せず、史家の態度を持して編

年記述を爲して居る。

然し記事中には多少の誤記があることに

留意して閲讀するならば、種々利用され得

るであらう。各卷に收められた佛祖の記事

は左の如くである。(敬稱を略す)

(卷一至卷二)釋伽牟尼佛。(卷三)伽葉。

阿難。商那和修。優波鞠多。提多迦。彌遮

迦。(卷四)婆須密。佛陀難提。伏駄密多。

脇。富那夜奢。馬鳴。(卷五)迦毗摩羅。龍樹。

迦那提婆。羅睺羅多。僧伽難提。伽耶舍多。

鳩摩羅多。(卷六)闍夜多。婆修盤頭。摩拏

羅。鶴勒那。師子。(卷七)婆舍斯多。不如

密多。般若多羅。(卷八)西天二十八祖東土

一祖菩提達磨。(卷九)同二世鄒都可。同三

世羅浮摩。同四世新春信。(卷十)同五世東

山忍。同六世曹溪能。(卷十一)同七世南嶽

讓。同七世青原思。同八世江西一。同八世

石頭遷。(卷十二)同九世百丈海。同八世石

頭遷。同十世黃檗運。同九世藥山儼。同十

世黃檗運。同九世藥山儼。同十世雲巖晟。

同九世藥山儼。同十世雲巖晟。

同九世藥山儼。同十世雲巖晟。

同九世藥山儼。同十世雲巖晟。

同九世藥山儼。同十世雲巖晟。

同九世藥山儼。同十世雲巖晟。

同九世藥山儼。同十世雲巖晟。

同九世藥山儼。同十世雲巖晟。

同九世藥山儼。同十世雲巖晟。

(卷十八)臨濟宗第三世南院順。臨濟宗第四

世風穴沼。曹洞宗第三世同安丕。曹洞宗第

四世鳳棲志。曹洞宗第五世梁山觀。雲門宗

第一世雲門偃。法眼宗第一世清涼益。(卷

十九)臨濟宗第五世首山念。臨濟宗第六世

汾州昭。曹洞宗第五世梁山觀。曹洞宗第六

世太陽支。(卷二十)臨濟宗第七世石霜圓。

臨濟宗第八世楊岐會。臨濟宗第九世白雲

端。曹洞宗第六世太陽支。曹洞宗第七世投

子青。(卷二十一)臨濟宗第十世五祖演。曹

洞宗第七世投子青。曹洞宗第八世芙蓉楷。

(卷二十二)臨濟宗第十世五祖演。曹洞宗第

八世芙蓉楷。(卷二十三)臨濟宗第十一世昭

覺勤。臨濟宗第十二世虎丘隆。曹洞宗第八

世芙蓉楷。曹洞宗第九世丹霞淳。曹洞宗第

十世長蘆了。(卷二十四)臨濟宗第十三世歸

宗華。臨濟宗第十四世華嚴傑。曹洞宗第十

世長蘆了。曹洞宗第十一世天童珏。曹洞宗

第十二世雪竇鑑。曹洞宗第十三世天童淨。

曹洞宗第十四世鹿門覺。曹洞宗第十五世普

照辨。曹洞宗第十六世大明寶。曹洞宗第十

七世玉山體。曹洞宗第十八世雪巖滿。(卷

二十五)臨濟宗第十五世臥龍先。臨濟宗第

十六世徑山範。曹洞宗第十八世雪巖滿。曹

洞宗第十九世萬松秀。曹洞宗第二十世雪庭

裕。(卷二十六)臨濟宗第十七世仰山欽。臨

濟宗第十八世高峰妙。曹洞宗第二十世雲庭

裕。曹洞宗第二十一世少室泰。曹洞宗第二

十二世寶印遇。(卷二十七)臨濟宗第十九世

八)臨濟宗第二十一世萬峰蔚。臨濟宗第二十二世聖恩持。臨濟宗第二十三世東明白。曹洞宗第二十四世萬安殿。曹洞宗第二十五世少室改。曹洞宗第二十六世嵩山斌。(卷二十九)臨濟宗第二十四世翼善慈。臨濟宗第二十五世高峰瑄。臨濟宗第二十六世金陵瑞。臨濟宗第二十七世龍泉聰。曹洞宗第二十七世定國從。曹洞宗第二十八世萬少載。曹洞宗第二十九世宗鏡書。(卷三十)臨濟宗第二十八世圓通寶。臨濟宗第二十九世馬門傳。曹洞宗第二十九世宗鏡書。(卷三十一)諸方略紀上。(卷三十二)諸方略紀下。

(大久保堅瑞)

宗統錄

①(日)Sha-to-i-oku. 特賜大宗正統禪師宗統錄 ②五卷 ③存 ④龍谿性潛(慶長七一寛文一〇 A.D. 1602—1670)語、性安編 ⑤刊本(高大、寄・一・二五)

宗燈八祖傳

①(日)Sha-to-i-tsu-so-den. ②一卷 ③存 ④雪潭風砥(一寶永八 A.D. 1711)撰 ⑤明治三五刊 ⑥(駒大)(京大、一・二二・一一)

宗内大意

①(日)Sha-na-i-tai. ②一册 ③存 ④日輝(寛政二一—安政六 A.D. 1800—1839)述 ⑤明治三刊 ⑥(京大、日大未・五八五)

宗内通俗問答大意

①(日)Sha-na-i-tsu-mon-dō-tai-i. ②一卷 ③存 ④富士本智境著 ⑤明治三〇刊 ⑥(帝國、一〇八・一一三)

宗派纂要

①(日)Sha-ha-san-ya. ②一册 ③存 ④寫本(哲、元・四・中・一八)

宗派圖

①(日)Sha-ha-zu. 佛祖宗派

②一帖 ③存 ④古家周印 ⑤(參考)扶桑禪林撰述書目 ⑥寛永一一刊 ⑦(駒大)

宗派目子

①(日)Sha-ha-moku-shi. ②一卷 ③存 ④一心一翁 ⑤(參考) ⑥(參考) ⑦(參考) ⑧(參考) ⑨(參考) ⑩(參考) ⑪(參考) ⑫(參考) ⑬(參考) ⑭(參考) ⑮(參考) ⑯(參考) ⑰(參考) ⑱(參考) ⑲(參考) ⑳(參考) ㉑(參考) ㉒(參考) ㉓(參考) ㉔(參考) ㉕(參考) ㉖(參考) ㉗(參考) ㉘(參考) ㉙(參考) ㉚(參考) ㉛(參考) ㉜(參考) ㉝(參考) ㉞(參考) ㉟(參考) ㊱(參考) ㊲(參考) ㊳(參考) ㊴(參考) ㊵(參考) ㊶(參考) ㊷(參考) ㊸(參考) ㊹(參考) ㊺(參考) ㊻(參考) ㊼(參考) ㊽(參考) ㊾(參考) ㊿(參考)

宗派目錄

①(日)Sha-ha-moku-ro. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一五五二・一七三)

宗派流傳

①(日)Sha-ha-ri-den. ②一卷 ③存 ④惠徹撰 ⑤(參考) ⑥(參考) ⑦(參考) ⑧(參考) ⑨(參考) ⑩(參考) ⑪(參考) ⑫(參考) ⑬(參考) ⑭(參考) ⑮(參考) ⑯(參考) ⑰(參考) ⑱(參考) ⑲(參考) ⑳(參考) ㉑(參考) ㉒(參考) ㉓(參考) ㉔(參考) ㉕(參考) ㉖(參考) ㉗(參考) ㉘(參考) ㉙(參考) ㉚(參考) ㉛(參考) ㉜(參考) ㉝(參考) ㉞(參考) ㉟(參考) ㊱(參考) ㊲(參考) ㊳(參考) ㊴(參考) ㊵(參考) ㊶(參考) ㊷(參考) ㊸(參考) ㊹(參考) ㊺(參考) ㊻(參考) ㊼(參考) ㊽(參考) ㊾(參考) ㊿(參考)

宗範

①(日)Sha-tan. (支)Tsun-tan. ②存、己續二一九四 ③錢伊庵編 ④清道光一〇—一三(A.D. 1830—1833) ⑤本書は、禪淨雙修を念する錢伊庵が、佛祖の宗教に參すること多年、宗教の規範、修道の正軌たる可きものを禪門に就て十章を分ち、宗範二卷を成したもので、此れによつて現世に人師たらしめ、來世に佛祖たらしめんことを冀願したものである。十章とは、一禪源、二微參、三調習、四入聖、五利人、六顯喻、七機用、八綱宗、九示辯、十貫教であつて、佛法究極、直指人心見性成佛と云ひ、別傳妙心と説くが、其の妙心とは何ぞやを説く禪源を第一とし、妙心を以て微參を第二とし、微悟尙ほ習氣未消の故に調習を第三とし、調習不退にして聖位に入るが故に入聖を第四とする、以上四章は自利の法門であるが、自行穩密にして始めて利他の道行に出づるを以て、第五

に利人を説き、利他行の古徳、言句機用の兩路を示したが、言句を前者として第六顯喻、第七を機用とする。かくして法久しくして法弊を生じ、諸師手眼を出して各々宗旨を建立し、五家七宗等の宗派を生じ、爲に學人岐路に迷ふをいたみ、宗門の綱要を説いて第八綱宗を示し、其の淺深偏圓の説、等しく佛智見を得せしめん」とせしものなるを説いて第九示辯を示し、禪と教と對立するものに非ずして、禪は是れ佛心、教は是れ佛口、禪は教外別傳、教は禪外別傳、等しく佛一乘の宗旨を貫くとて第十貫教を説いたものである。清道光十年十月朔旦に起稿し、同十三年(A.D. 1833)十二月に成つたものである。門人諸庵、同十五年十二月望(A.D. 1835)序を撰し、項晴跋を添へて行つたものである。後、浙江省安吉縣の知縣悟真居士李郡、清光緒十二年(A.D. 1886)重刻宗範序を撰して行つたもので、續藏本に此等の諸序を收めて居る。

(大久保堅瑞)

宗祕日鈔

①(日)Sha-hi-nis-shi. ②十三卷 ③存 ④前田慧雲(安政四—昭和五 A.D. 1857—1930)記 ⑤寫本(龍大、研真)

宗祕論

①(日)Sha-hi-ron. 五部陀羅尼問答偈讚宗祕論、五部宗祕論 ②一卷 ③存、大正七八・九 No. 2476. 弘法大師全集第五事相部 ④空海(寶龜五—承和二 A.D. 774—835)撰 ⑤五部陀羅尼問答偈讚宗祕論の下を見よ。

宗評

①(日)Sha-hi-yō. ②二卷 ③存

④(参考) ⑤(参考) ⑥(参考) ⑦(参考) ⑧(参考) ⑨(参考) ⑩(参考) ⑪(参考) ⑫(参考) ⑬(参考) ⑭(参考) ⑮(参考) ⑯(参考) ⑰(参考) ⑱(参考) ⑲(参考) ⑳(参考) ㉑(参考) ㉒(参考) ㉓(参考) ㉔(参考) ㉕(参考) ㉖(参考) ㉗(参考) ㉘(参考) ㉙(参考) ㉚(参考) ㉛(参考) ㉜(参考) ㉝(参考) ㉞(参考) ㉟(参考) ㊱(参考) ㊲(参考) ㊳(参考) ㊴(参考) ㊵(参考) ㊶(参考) ㊷(参考) ㊸(参考) ㊹(参考) ㊺(参考) ㊻(参考) ㊼(参考) ㊽(参考) ㊾(参考) ㊿(参考)

宗法一遺記

①(日)Sha-hi-ichidō-ki. ②二册 ③存 ④刊本(哲、え・二・左八)

宗法師

①(日)Sha-hō-shi. (支)Tsun-ri-shi. 宗法章、宗法師章 ②四卷 ③缺 ④(參考) ⑤(參考) ⑥(參考) ⑦(參考) ⑧(參考) ⑨(參考) ⑩(參考) ⑪(參考) ⑫(參考) ⑬(參考) ⑭(參考) ⑮(參考) ⑯(參考) ⑰(參考) ⑱(參考) ⑲(參考) ⑳(參考) ㉑(參考) ㉒(參考) ㉓(參考) ㉔(參考) ㉕(參考) ㉖(參考) ㉗(參考) ㉘(參考) ㉙(參考) ㉚(參考) ㉛(參考) ㉜(參考) ㉝(參考) ㉞(參考) ㉟(參考) ㊱(參考) ㊲(參考) ㊳(參考) ㊴(參考) ㊵(參考) ㊶(參考) ㊷(參考) ㊸(參考) ㊹(參考) ㊺(參考) ㊻(參考) ㊼(參考) ㊽(參考) ㊾(參考) ㊿(參考)

宗法師章

①(日)Sha-hō-shi-chō. (支)Tsun-ri-shi-chō. 宗法師章 ②四卷 ③缺 ④(參考) ⑤(參考) ⑥(參考) ⑦(參考) ⑧(參考) ⑨(參考) ⑩(參考) ⑪(參考) ⑫(參考) ⑬(參考) ⑭(參考) ⑮(參考) ⑯(參考) ⑰(參考) ⑱(參考) ⑲(參考) ⑳(參考) ㉑(參考) ㉒(參考) ㉓(參考) ㉔(參考) ㉕(參考) ㉖(參考) ㉗(參考) ㉘(參考) ㉙(參考) ㉚(參考) ㉛(參考) ㉜(參考) ㉝(參考) ㉞(參考) ㉟(參考) ㊱(參考) ㊲(參考) ㊳(參考) ㊴(參考) ㊵(參考) ㊶(參考) ㊷(參考) ㊸(參考) ㊹(參考) ㊺(參考) ㊻(參考) ㊼(參考) ㊽(參考) ㊾(參考) ㊿(參考)

宗法師總明四諦

①(日)Sha-hō-shi-sōmei-yō-shi. (支)Tsun-ri-shi-sōmei-yō-shi. 宗法師總明四諦 ②一卷 ③缺 ④(參考) ⑤(參考) ⑥(參考) ⑦(參考) ⑧(參考) ⑨(參考) ⑩(參考) ⑪(參考) ⑫(參考) ⑬(參考) ⑭(參考) ⑮(參考) ⑯(參考) ⑰(參考) ⑱(參考) ⑲(參考) ⑳(參考) ㉑(參考) ㉒(參考) ㉓(參考) ㉔(參考) ㉕(參考) ㉖(參考) ㉗(參考) ㉘(參考) ㉙(參考) ㉚(參考) ㉛(參考) ㉜(參考) ㉝(參考) ㉞(參考) ㉟(參考) ㊱(參考) ㊲(參考) ㊳(參考) ㊴(參考) ㊵(參考) ㊶(參考) ㊷(參考) ㊸(參考) ㊹(參考) ㊺(參考) ㊻(參考) ㊼(參考) ㊽(參考) ㊾(參考) ㊿(參考)

宗法章

①(日)Sha-hō-shō. (支)Tsun-ri-shō. 宗法章 ②四卷 ③缺 ④(參考) ⑤(參考) ⑥(參考) ⑦(參考) ⑧(參考) ⑨(參考) ⑩(參考) ⑪(參考) ⑫(參考) ⑬(參考) ⑭(參考) ⑮(參考) ⑯(參考) ⑰(參考) ⑱(參考) ⑲(參考) ⑳(參考) ㉑(參考) ㉒(參考) ㉓(參考) ㉔(參考) ㉕(參考) ㉖(參考) ㉗(參考) ㉘(參考) ㉙(參考) ㉚(參考) ㉛(參考) ㉜(參考) ㉝(參考) ㉞(參考) ㉟(參考) ㊱(參考) ㊲(參考) ㊳(參考) ㊴(參考) ㊵(參考) ㊶(參考) ㊷(參考) ㊸(參考) ㊹(參考) ㊺(參考) ㊻(參考) ㊼(參考) ㊽(參考) ㊾(參考) ㊿(參考)

宗法問答

①(日)Sha-hō-mon-dō. ②一卷 ③存、史籍雜纂第一 ④頼慶(一慶長六 A.D. 1601—) ⑤頼慶と貞安との問答を記した。

宗峰妙超和尚行狀

①(日)Sha-hō-myō-chō-ō-shō-gō-kō-jō. 大燈國師行狀 ②存、續群書類從第九 ③禪輿編 ④大燈國師行狀の下を見よ。

宗峰妙超禪師語錄

①(日)Sha-hō-myō-chō-zen-ji-go-gō-roku. 大燈國師語錄 ②二卷 ③存、國譯禪宗叢書第一二 ④妙



超宗峰(弘安五—建武四 A. D. 1283—1337) 語、性智等編 ④大燈國師語錄の下を見よ

⑤元和七刊 ⑥(駒大)

宗寶禪師語錄

①(日)Shū-hō-zen ji-go-roku. (支)Tsungr-pao-ch'an-shih-yū-tu. 宗寶道獨禪師語錄、長慶宗寶禪師語錄

②六卷 ③存、已續二・三・一 ④明宗寶道獨(萬曆二八—永曆一五 A. D. 1600—1661)語、今釋重編

宗寶道獨禪師語錄

①(日)Shū-hō-ab-doku-zen ji-go-roku. (支)Tsungr-pao-tao-tu-ch'an-shih-yū-tu. ③存、已續二・三・一 ④明宗寶道獨(萬曆二八—永曆一五 A. D. 1600—1661)語

博山無異元來禪師の法嗣である青原下三十六世宗寶道獨禪師の語録を、門人が編録し、法嗣天然商是和尚が序文を撰し、宗寶の自序を附して流通せしめたものである。

後、法孫である清の丹霞今釋和尚は、商是の長慶老和尚行狀と、錢謙益の長慶空隱獨和尚塔銘とを附して重編し、龍藏に收めて梓行したものである。宗寶は空隱と號し、廣東南海陳氏の子、明萬曆二十八年に生れ、二十九歳にして博山に入つて無異元來に參じ、羅浮、西禪、長慶寺等に住し、明永曆十五年七月二十二日(A. D. 1661)壽六十二、臘三十三にして示寂した。本書には、卷首に商是の序、自序を收め、卷一に上堂、示衆。卷二に示衆、卷三に示衆、茶話、問答、著語を收め、卷四に臨濟三玄、曹洞三隨、五位君臣其の他の頌古、並に博山和尚像贊、自贊等の贊を收め、卷五に諸學人に答へたる書問。卷六に書問並に序、引、總説等の雜著を收めたもので、附するに商是の撰に成る行狀、錢謙益の撰に成る塔銘を以てし、各卷末に音釋を添へたものである。(大久保堅瑞)

宗本要論 ①(日)Shū-hon-yō-ron. ②一卷 ③存 ④慧琳(正徳五—寛政元 A. D. 1715—1789)述 ⑤天明五寫 ⑥(谷大、宗大・二七六九)宗本要論並自註 ①(日)Shū-hon-yō-ron-narabini-ji-chū. ②一卷 ③存 ④慧琳(正徳五—寛政元 A. D. 1715—1789)述 ⑤天明五寫 ⑥(谷大、宗大・二七六九)宗本要論並自註 ①(日)Shū-hon-yō-ron-narabini-ji-chū. ②一卷 ③存 ④良源(延喜一一—寛和元 A. D. 912—983)撰 ⑤(参考)大日本佛教全書續刊豫定書目

宗満集筆題 ①(日)Shū-man-shū-hisshu-dai. ②一卷 ③存 ④定珍記 ⑤寫本(叡山文庫)

宗脈口訣 ①(日)Shū-myaku-ketsu. ②一卷 ③存 ④靈玄(元和五—元祿一一 A. D. 1619—1698)記 ⑤宗脈五箇條、添口傳四箇條、戒脈三箇一箇を收む ⑥寫本(正大、一五五二・一六六・一六九)

宗脈相傳口訣 ①(日)Shū-myaku-si-den-ku-ketsu. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一五五二・三六九)

宗脈傳法口訣 ①(日)Shū-myaku-dem-bō-ku-ketsu. ②一冊 ③存 ④寫本(哲、二・三・中・三一)

宗脈傳法五箇條或名宗戒口決 ①(日)Shū-myaku-dem-bō-go-tai-ikwan

ku myō-shū-kai-tai-ku-ketsu. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一一五二・一〇四)

宗脈傳法條數相違釋疑 ①(日)Shū-myaku-dem-bō-jō-shū-sō-i-shaku-gi. ②一卷 ③存 ④文久元寫 ⑤(龍大、二六八四・七)(正大、一五五二・一七二)

宗名一件 ①(日)Shū-myō-ik-ken. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一五七・八〇)

宗名一件細書 ①(日)Shū-myō-ik-ken-sai-sho. ③存、教行信證破疑論附録 ④天頂記 ⑤大正一三刊 ⑥(龍大、研眞)(京大、一・二六キ・一七)

宗名一件書類 ①(日)Shū-myō-ik-ken-sho-rui. ③存、浄土眞宗宗名一件書類 ④(京大、一・二六キ・一七)

宗名一件大衆上書 ①(日)Shū-myō-ik-ken-dai-shū-jō-sho. ②一卷 ③存 ④増上寺大衆より該寺貫主大僧正に上申したるもの。⑤寫本(谷大、宗大・九二一)

宗名一件呈文 ①(日)Shū-myō-ik-ken-tai-mon. ②一卷 ③存 ④安永六寫 ⑤(正大、一五七・七八)

宗名一件之寫 ①(日)Shū-myō-ik-ken-no-utsushi. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一五七・七九)

宗名記 ①(日)Shū-myō-ki. ②一卷 ③存 ④原本(攝津慈明寺)寫本(龍大、研史)

宗名御文章聽記 ①(日)Shū-myō-go-bun-shō-cho-ki. ②一卷 ③存 ④道超記 ⑤寫本(龍大)

宗名考 ①(日)Shū-myō-ka. ②一卷 ③慧琳(正徳五—寛政元 A. D. 1715—1789)作 ④明和七(A. D. 1770) ⑤(参考)浄土眞宗教典志第二

宗名再答書 ①(日)Shū-myō-sai-to-sho. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大)

宗名事件 ①(日)Shū-myō-ji-ken. ②二卷 ③存 ④頓期編 ⑤寫本(谷大、宗大・一一一〇)

宗名事件築地輪番書上 ①(日)Shū-myō-ji-ken-tsuki-jirin-ban-sho-jō. ②一卷 ③存 ④支智(享保一九—寛政六 A. D. 1734—1794)記 ⑤寫本(谷大、宗大・一一六二)

宗名諱論辨 ①(日)Shū-myō-so-ron-ben. ②一卷 ③存 ④寶景(延享三—文政一 A. D. 1746—1828) ⑤(参考)眞宗大系刊行豫定書目

宗名對辨 ①(日)Shū-myō-tai-ben. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大)

宗名辨 ①(日)Shū-myō-ben. ②一卷 ③存 ④慧山記 ⑤享保一一寫 ⑥(正大、一五七八・一)

宗名辨書余論並寛政御朱印改例書 ①(日)Shū-myō-ben-shū-yō-ron-narabini-kan-sei-go-shu-in-aratame-ri-sho. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一五七七・七五)

宗名辨別書 ①(日)Shū-myō-ben-bets-sho. ②八卷 ③存 ④寫本(正大、一五七七・七四)

宗妙圓通記 ①(日)Shū-myō-en-tō

一、二卷 ③存 ④加藤文雅編 ⑤明治四一刊 ⑥(立大、B〇四・一一〇)

宗目秘録 ①(日)Sha-moku-hi-ro=ku. ②一巻 ③存 ④信鏡(享保八)天明三、A. D. 1733-1783)作 ⑤(参考)浄土眞宗教典志第二 ⑥寫本(龍大、一六一・二〇〇)

宗門往來起原抄 ①(日)Sha-mon-ori-ki-gen-sho. ②一巻 ③存 東里山人(天明六一)安政六、A. D. 1786-1859) ④文政七刊 ⑤(駒大)

宗門葛藤集 ①(日)Sha-mon-ka-to-shu. 再鐫宗門葛藤集 ②一巻 ③存 ④安政五刊(駒大)(内閣)明治三刊(京大、一・二五・一三)

宗門葛藤集 ①(日)Sha-mon-ka-to-shu. 葛藤集 ②一巻 ③存 塗毒鼓之内 ④雲崎智道編、島田春浦校 ⑤大正一二刊 ⑥東京光融館

宗門葛藤集鈔 ①(日)Sha-mon-ka-to-shu-sho. 句雙紙葛藤鈔 ②七巻 ③存 ④不鐵撰 ⑤元祿五刊 ⑥(駒大)

宗門干城慧行 ①(日)Sha-mon-kan-jō-ei-gyō. ②一巻 ③存 ④沼法量、阿部現亮著 ⑤大正九刊 ⑥(谷大、宗洋、四四八)

宗門緊要集註 ①(日)Sha-mon-kin-yō-shū-cha. ②一巻 ③存 ④慧明(寛永一九一)享保二、A. D. 1642-1717)述、日建大珠註 ⑤安永八刊(龍大、二六九・二一六)(谷大、餘大・三二四)哲、え・二・左・七(京大、日大末・五八二)(立大、A〇四・九〇・九六一九七、三三二、三九八)文化七刊

(谷大、餘大・三五七八)(京大、日大末・五八一) 宗門緊要集註法話 ①(日)Sha-mon-kin-yō-shū-cha-hi-wa. ②一巻 ③存 ④久伴田日龜述 ⑤明治三三刊(立大、B〇四・一一九)

宗門玄鑑圖 ①(日)Sha-mon-gen-kan-zu. (支)Tsung-mên-hsuan-chian-tu. ②一巻 ③存、正續二〇一七・五 ④明虛(一萬曆頃A. D. 1573-1619-)

本書は、明萬曆三十五年十一月(A. D. 1607)虛一和尚が自序して、直指單傳の正法は初め委曲無きものを後世五家の分派互に門戸を張り、五位君臣四料揀三關九帶十智同眞等と提唱して、兒孫其の歸趣に迷ふを憾み、古聖機玄の妙を探り、其の綱要を統べて十二門を作り、流派淺から深に及び、俱に異趣なきを知らしめんが爲めに玄鑑圖を著したと云ふのである。十二門、三玄論、四大式論、八棒論、五句論、八大勢論、洞山祖師五位圖、慈明禪師五位頌、大陽三句之圖、王子五位圖、洞山偏正五位圖相並五位之圖、仰山九十六種圖相圖、圓收六門、曹洞宗旨、洞山五位投子青和尚序、洞山五位頌、臥龍山雲庵老人評唱五位王子圖頌、五家、四與麼等の題下に其の趣を示さんとしたものであるが、蛇を畫して足を添ふるの觀がある。(大久保堅瑞)

宗門玄鏡錄 ①(日)Sha-mon-gen-kyō-ri-oku. ③存 ④宗壽棠林撰 ⑤(參考)禪籍目錄

宗門綱格 ①(日)Sha-mon-ko-ka=

ku. ②一巻 ③存 ④日乾(永曆三一)寛永二二、A. D. 1560-1635)撰 ⑤寛政三刊(谷大、餘大・二九四)(立大、A〇四・三七五)寛政四刊(立大、A〇四・三五二)高大、寄一・一七(龍大、研佛)慶長七刊(立大、A〇四・一四一)一〇(哲、え・三・右・六)(京大、日大末・五五〇)

宗門雜錄 ①(日)Sha-mon-zassu-roku. ③存 ④(參考)禪籍目錄

宗門時言 ①(日)Sha-mon-ji-gen. ②一巻 ③存 ④大谷派本願寺文書課編 ⑤明治三三刊(帝國、八七・一〇八)

宗門守成 ①(日)Sha-mon-shū-ji. ②七巻 ③存 ④日感(一寛延頃、A. D. 1749-1750)述 ⑤寫本(正大、一八四・三〇)

宗門十規論 ①(日)Sha-mon-ju-k-ki-ron. (支)Tsung-mên-shih-hui-lun. ②慧法眼禪師宗門十規論、十規論 ③存、正續二・一五・五 ④唐文益(光啓元)顯德五、A. D. 885-953)述

法眼宗始祖、金陵清涼寺淨慧法眼文益禪師が、宗門上の病弊十箇條を掲げて其の謬妄を勸誡し、時弊を矯救し、眞箇の學人を打出せしめんが爲に著されたものである。其の十箇條の病弊は。(一)自己の心地を未だ明めずして妄に人師と爲る。(二)門風を黨護して議論に通せず。(三)舉令提綱に血脈を知らず。(四)對答に時節を觀ぜず兼て宗眼無し。(五)理事相違して觸淨を分たず。(六)淘汰を經ずして古今の言句を應斷す。(七)露布を記持し時に臨んで妙用を解せず。(八)教典に通せず亂に引證あり。(九)聲律に關せず理道に達せずして好んで歌頌を作る。(一〇)己の短を護つて好んで勝負を争ふ、と云ふのである。換言すれば、無眼子の宗師家が大道無方法流同味なるを知らずして宗我を逞うし、提撕亂脈を極め、宗眼無く、理事相融を知らず、己見を以て經典祖錄を窺ひ、活作略を知らずして妄に經錄を引證し、道行を外にして文筆遊戲を事として居る惡弊を戒められたもので、當時の宗弊は直に千歳後の今日に適用されることを自他共に恥じ且つ相警めねばならぬ。

本書の刊行は、朝鮮藏に依つて得たりと云ふ元の浙江杭州府餘杭縣徑山の恕中無愠禪師の跋に依れば、元至正六年(A. D. 1346)同府錢塘縣南屏山の佛慈法喜悅禪師が無愠に命じて書かじめ徑山寂照院に鏤板せしめしもの。後に兵火に燒盡せしを以て、山西五台縣台州の委羽上人捐資して重刊する旨の題重刊十規論後と題する跋に依つて、其の流通を窺ふべく。我が國に於ては、卷末の刊記に依つて康安元年(A. D. 1361)五月十三日明心尼の施財によつて洛北仁和寺北長尾妙光寺三光庵より鏤梓流通せしめたを知ることが出来る。後、上州館林茂林寺の大圓寶鑑和尚は、上州桐生鳳仙寺の乙堂喚正和尚と協力し、茂林寺藏本の本書の重刊を企圖し、寶曆六年(A. D. 1756)二月望乙堂、江戸風篋庵の旅寓に於て序を撰し、同年五月大圓、茂林寺に於て跋文を

撰して茂林寺より上梓し。亦、字句を改め大岡自ら同年五月序文を撰し、無愠の跋を採録して行つたものである。更に、寶曆十一年(A. D. 1761)二月十五日指月慧印禪師は、江戸駒込、吉祥寺旃檀林萬善堂に在つて大衆本書の上梓を企圖し、序を請ひたるに應じ、序文を撰して江戸萬屋太郎兵衛をして行はしめた。註釋本には明治十四年京都出雲寺文次郎より上梓せる、能仁義道和尚の増標傍註本がある。明治四十二年の續藏本は寶曆十一年に據り、明治四十四年の禪學大系本、大正九年の國譯禪宗叢書本は、寶曆六年五月大岡寶鑑序の茂林寺本に據つたものである。明和四年の國譯禪學大成本は言ふまでもなく國譯禪宗叢書の改題である。(大久保堅瑞)

**宗門十規論** ①(日) Shū-mon-jū-kōron. 標註宗門十規論 ②一卷 ③存 ④古田梵仙註 ⑤明治一二刊 ⑥(谷大、餘大・三二四)

**宗門十規論** ①(日) Shū-mon-jū-kōron. 增標傍註宗門十規論 ②一卷 ③存 ④能仁義道註 ⑤明治一四刊 ⑥(駒大)

**宗門十規論** ①(日) Shū-mon-jū-kōron. 增標傍註宗門十規論 ②一卷 ③存 ④能仁義道註 ⑤明治一四刊 ⑥(駒大)

**宗門十規論** ①(日) Shū-mon-jū-kōron. 增標傍註宗門十規論 ②一卷 ③存 ④能仁義道註 ⑤明治一四刊 ⑥(駒大)

**宗門十規論** ①(日) Shū-mon-jū-kōron. 增標傍註宗門十規論 ②一卷 ③存 ④能仁義道註 ⑤明治一四刊 ⑥(駒大)

**宗門十規論** ①(日) Shū-mon-jū-kōron. 增標傍註宗門十規論 ②一卷 ③存 ④能仁義道註 ⑤明治一四刊 ⑥(駒大)

**宗門十勝論** ①(日) Shū-mon-jū-shōron. ②一卷 ③虎關師鍊(弘安元一貞和ニA. D. 1278-1346) ④(参考) 日本禪林撰述書目、禪籍志卷下

**宗門十勝論國字解標註** ①(日)

Shū-mon-jū-shōron-kokuji-gehyō. ②二卷 ③存 ④虎關師鍊(弘安元一貞和ニA. D. 1278-1346)著、安住宗俊編 ⑤明治二三刊 ⑥(帝國・二・三)(駒大)(谷大、餘大・六四六)

**宗門諸本山諸檀林歷代略記** Shū-mon-shōhon-zan-shōdan-ri-reki-dai-yak-ki. ①一卷 ②存 ③寫本(帝國・二・九・七四八)

**宗門正燈錄** ①(日) Shū-mon-shōtoku. ②十卷或十二卷 ③存 ④東陽英朝(正長元一永正元 A. D. 1428-1504)撰 ⑤寬永七刊 ⑥(駒大)哲、な・七・左・八(帝國・八二一・二二九)

**宗門正燈錄字考** ①(日) Shū-mon-shōtoku-jōkyō. ②一卷 ③存 ④(參考) 禪籍目錄

**宗門成範** ①(日) Shū-mon-jōhan. ②存 ③林草本豫 ④(參考) 禪籍目錄

**宗門滲漏集** ①(日) Shū-mon-shinpo-shū. ②一卷 ③存 ④道海潮音(寬永五一元祿八A. D. 1628-1695)撰 ⑤(參考) 禪籍目錄

**宗門說難** ①(日) Shū-mon-gōshūnan. (支) Tsung-mén shuo-nan. 雲門麥浪懷禪師宗門說難 ②一卷 ③存、記續二・三二・五 ④明代許元刻編 ⑤雲門麥浪懷禪師宗門說難の下を見よ。

**宗門千字文** ①(日) Shū-mon-senzijimon. 國譯宗門千字文 ②一卷 ③存、國譯禪宗叢書第二輯 ④竺仙梵僊(正應五一貞和四A. D. 1292-1348) ⑤(參考) 日本

禪林撰述書目

**宗門尊祖議** ①(日) Shū-mon-sōn-sōgi. (支) Tsung-mén tsun-tsu-ji. ②一卷 ③存、佛祖統記卷五〇之内(大正四九・四四九No. 2035) ④志勢述

**宗門大意** ①(日) Shū-mon-tai-i. ②一卷 ③存、弘經要義附錄 ④日輝(寛政一一一安政六A. D. 1800-1859)述 ⑤(龍大・二六九二・一八)

**宗門檀那請合之控** ①(日) Shū-mon-dan-na-shōgō-no-kyō. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、研史)

**宗門統要** ①(日) Shū-mon-tō-yō. (支) Tsung-mén t'ung-yao. ②十册 ③存 ④宋代宗永編 ⑤(參考) 禪籍志卷上、禪籍目錄

**宗門統要續集** ①(日) Shū-mon-tō-yō-zoku-shū. (支) Tsung-mén t'ung-yao-zoku-shū. ②二十二卷 ③存、縮雲九一一〇、記三一・一一二 ④元代清茂古林集

⑤本書は、初めに、法雲法秀禪師の法嗣である宋の金陵天禧の慧嚴宗永禪師が、世尊より以降の應化の聖賢、西天東土の祖師、並に馬祖より南岳に至る十一世二百四十八人中、見録機緣の五百五十三則と、石頭より青原に至る十世二百六十四人中、見録機緣の五百五十四則とを収め、此等の佛祖に依つて商量提撕された宗門の玄旨を統要し、後學をして宗旨に達達せしめんが爲に編纂した宗門統要十卷と題する古則公案の蒐録を、横川如珙禪師の法師である休居叟古林清茂禪師が増補して續集十二卷を成し

たものである。即ち、南岳下十二世より十八世に述ぶ二百八十六人中、見録機緣の二百十二則、並に青原下十一世より十四世に述ぶ二百二十人中、見録機緣の四十七則、總じて四百六十八人二百五十九則を収めたもので、宗門統要和合して、世尊より以降、元に至る總じて八百五十九人中、見録機緣の千三百二十三則を収めて宗門統要續集二十二卷を成したのである。宋紹興三年(A. D. 1133)二月江州の耿延禧の宗門統要序に依れば、宗門要は江西豫章の李氏の鏤板煙滅せしを以て、首陽の天寧寺長老慧澤が刊行を志し、耿氏の序を請ひたる旨、刊記されて居る。次で續集の序として、馮子振の序並に元延祐七年(A. D. 1320)杭州徑山興聖萬壽寺盧希裕禪師の序とを収めて居る。古林清茂禪師は、温州の人、開元福等に歴住し、建康の保寧禪寺に進住した宗師で、本書は禪師が杭州孤山の永福寺に在住せし時の編纂である。其の篇次は左記の如き順序を以て収め、各卷末に音釋を付したものである。

〔卷首〕 序文三篇。  
〔卷一〕 釋迦文佛。  
〔卷二〕 西竺應化聖賢。西土祖師。震旦六祖。  
〔卷三〕 牛頭山法融禪師。宣州玄挺禪師。潤州鶴林素禪師。舒州崇慧禪師。徑山國一欽禪師。杭州鳥窠禪師。袁州道明禪師。嵩山慧安國師。嵩山破籠墮和尚。嵩山峻極禪師。終南山惟政禪師。温州眞覺大師。婺州玄策禪師。洛京神會禪師。西京惠忠國師。

吉州眞應禪師。佛陀波利尊者。秦跋陀禪師。耶舍尊者。波羅提尊者。寶誌公和尚。南嶽慧思和尚。天台智者大師。明州布袋和尚。天台豐干禪師。寒山子。天台拾得。婺州善慧大士。先淨照禪師。無著和尚。公期和尙。蟾首座。錢塘鎮使。洪州太守許式。大宋太宗皇帝。亡名古宿。

〔卷四〕 南嶽懷讓禪師。江西道一禪師。池州南泉禪師。廬山智常禪師。明州法常禪師。杭州齊安國師。京兆懷惲禪師。幽州寶積禪師。婺州靈默禪師。麻谷寶微禪師。虔州智藏禪師。紫玉山道通禪師。百丈大智禪師。

〔卷五〕 越州慧海禪師。信州大義禪師。池州智堅禪師。澧州道行禪師。撫州慧藏禪師。袁州道明禪師。鼎州洪恩禪師。佛光如滿禪師。三角山總印禪師。池州寶雲禪師。伏牛山自在禪師。毘陵太鏡禪師。潭州如會禪師。袁州甄叔禪師。汾州大達國師。五臺山隱峯禪師。磁州神藏禪師。定州明哲禪師。京兆惟寬禪師。潭州龍山和尚。鄂州無等禪師。洪州惟政禪師。京兆草堂和尚。南嶽西園藏禪師。潭州秀谿和尚。鄂州大陽伊禪師。鎮州金牛和尚。江西北蘭讓禪師。韶州乳源和尚。筠州道遙和尚。洪州水滸和尚。洪州西山亮座主。齊峯和尚。古寺和尚。烏白和尚。石白和尚。松山和尚。本溪和尚。石林和尚。浮盃和尚。洞安和尚。百靈和尚。淡谿和尚。則首座。襄州廬蘿居士。

〔卷六〕 趙州從諗禪師。衡州利蹤禪師。鄂州茱萸禪師。荊州曇照禪師。長沙景岑禪師。

師。終南師祖禪師。日子和尚。陸互大夫。池州甘贊行者。福州靈訓禪師。漢南高亭和尚。金州操禪師。鼎州古提和尚。鎮州善化和尚。壽州良遂座主。虔州處微禪師。五臺秘魔巖和尚。湖南祇林和尚。

〔卷七〕 潭州靈祐禪師。洪州希運禪師。廣州和安通禪師。清田和尚。大子和尙。杭州寰中禪師。天台普岸禪師。

〔卷八〕 楊州慧覺禪師。太原孚上座。婺州新建禪師。日容遠禪師。紫桐和尚。石梯和尚。筠州末山尼了然。婺州俱胝和尚。襄州道吾和尚。袁州慧寂禪師。鄧州智閑禪師。杭州洪譚禪師。福州大安禪師。福州雙峯和尚。福州志勤禪師。福州慈慧禪師。晉州佛景通禪師。涇州神英禪師。元康和尚。京兆米和尚。襄州王敬初常侍。

〔卷九〕 陸州龍興陳尊宿。鎮州義玄禪師。福州靈觀禪師。

〔卷十〕 洪州米嶺和尚。益州法眞禪師。韶州知聖敏禪師。鄭十三娘。福州雙峯古禪師。陸州陳揆尙書。鎮州保壽沼禪師。鎮州慧然禪師。魏府大覺和尚。魏府存獎禪師。鄂州灌谿閑禪師。幽州諫空和尚。定州善崖禪師。鎮州萬壽和尚。桐峯庵主。虎谿庵主。襄州歷村和尚。雲山和尚。覆盆菴主。杉洋和尚。定上座。蘆上座。

〔卷十一〕 吉州如寶禪師。鶴湖和尚。鄂州慧情禪師。汝州思明禪師。鎮州第二世保壽和尚。鎮州大悲和尚。處州旻德禪師。處州大覺和尚。汝州寶應顯禪師。太行山克賓禪師。守廓侍者。際上座。鄂州清讓禪師。鄂州歸靜禪師。汝州省沼禪師。汝州廣慧眞

禪師。汝州智罕禪師。汝州仁王評禪師。并州三交嵩禪師。潭州神鼎煙禪師。襄州蘊聰禪師。汝州葉縣省禪師。汾州善昭禪師。楊億侍郎。都尉李文和公。鄆州曉愚禪師。湖州天聖秦禪師。舒州齊舉禪師。舒州瑯琊覺禪師。潭州楚圓禪師。袁州楊岐會禪師。洪州可眞禪師。洪州黃龍南禪師。

〔卷十二〕 吉州行思禪師。南嶽希遷禪師。澧州惟徽禪師。荊州道悟禪師。鄧州天然禪師。潭州長髯曠禪師。潭州大川禪師。潮州大顛和尚。

〔卷十三〕 汾州石樓和尚。澧州大同濟禪師。丁行者。潭州道吾智禪師。潭州曇茂禪師。秀州德誠禪師。宣州慧省禪師。藥山高沙彌。郎州刺史李翽。澧州崇信禪師。京兆無學禪師。吉州性空禪師。米倉和尚。潭州善道禪師。偃天和尙。漳州義忠禪師。馬頰山本空和尚。本生和尚。韓愈文公。

〔卷十四〕 潭州普會禪師。潭州仲興禪師。祿青和尚。筠州良价禪師。潭州僧密禪師。幽谿和尚。澧州善會禪師。鼎州宣鑿禪師。洪州寶峯和尚。舒州大同禪師。湖州如訥禪師。棗山光仁禪師。

〔卷十五〕 筠州道虔禪師。河中僧一禪師。台州景欣禪師。潭州志安禪師。福州覆船山若禪師。鳳翔府石柱禪師。撫州耽章禪師。洪州道膺禪師。潭州居道禪師。襄州洞山三世師虔禪師。撫州疎山仁禪師。澧州文遠禪師。京兆休屠禪師。台州道幽禪師。高安木仁禪師。益州北院通禪師。越州乾峯和尚。洛京道備禪師。明州成啓禪師。

〔卷十六〕 澧州元安禪師。撫州月輪禪師。

師。洛京寶善禪師。福州義存禪師。鄂洲全叢禪師。泉州瓦棺。襄州高亭簡禪師。

〔卷十七〕 洪州常察禪師。吉州澄源股禪師。撫州從志禪師。處州廣利容禪師。襄州處眞禪師。杭州佛日和尙。洪州同安不禪師。洪州懷慧禪師。歙州朱谿謙禪師。池州筓山章禪師。潭州報慈藏顯禪師。襄州善哲禪師。襄州獻藏禪師。筠州黃檗慧禪師。隨州守澄禪師。鳳翔傳楚禪師。鄂州桐峯和尚。袁州善道禪師。福州師備禪師。福州慧稜禪師。

〔卷十八〕 福州孤沼大師。漳州從展禪師。韶州文偃禪師。福州玄通禪師。杭州道忞禪師。福州皎然禪師。福州神晏禪師。明州今參禪師。越州可休禪師。福州道閑禪師。台州師彥禪師。

〔卷十九〕 漳州桂琛禪師。福州慧球禪師。泉州法因禪師。福州光雲禪師。婺州寶資禪師。新羅龜山和尚。泉州王延彬太尉。福州彥端禪師。泉州省儉禪師。漳州道照禪師。韶州子祥禪師。岳州顯鑑禪師。隨州師寬禪師。襄州守初禪師。韶州竟欽禪師。新州悟空寂禪師。深明二上座。益州澄遠禪師。漳州清密禪師。婺州德謙禪師。西川慧禪師。鄂州海機禪師。

〔卷二十〕 鼎州緣觀禪師。金陵法眼益禪師。襄州洪進山主。撫州紹修山主。金陵休復禪師。連州寶華和尚。韶州月華和尚。靈徹散聖。斷王五祖戒禪師。蓮華峯祥菴主。菜樹第二世和尚。嘉州黑水和尙。鄂州贊玄禪師。天台德韶國師。金陵法燈欽禪師。金陵玄則禪師。金陵玄覺遂導師。相州從滿禪師。

師。潭州智賢禪師。筠州曉聰禪師。明州明覺禪師。惠州如禪師。杭州永明壽禪師。温州德嚴安禪師。洪州雲居齊禪師。

〔卷二十一〕 桂州齊曉禪師。舒州白雲端禪師。金陵仁勇禪師。潭州慕詰禪師。吉州龍慶閣禪師。洪州黃龍心禪師。洪州眞淨文禪師。洪州泐渚來禪師。瑞州黃髮勝禪師。杭州東林總禪師。吉州德普禪師。黃檗菴翠永菴主。新州五祖演禪師。潭州智本禪師。

提刑郭祥正。湖州上方益禪師。鄂州壽勝淵禪師。洪州日餘禪師。洪州景祥禪師。黃龍死心新禪師。泐渚草堂清禪師。澧州夾山純禪師。大史黃庭堅。洪州湛堂準禪師。洪州兜率悅禪師。東州法雲果禪師。蘇州普鑑禪師。瑞州希廣禪師。筠州淨覺禪師。南嶽齊添禪師。泉州慧明雲禪師。江州開光映禪師。東坡居士。泉州有朋講師。南康系南禪師。南嶽有達禪師。彬州念禪師。襄州靜顯禪師。參政蘇轍居士。成都昭覺勤禪師。金陵佛鑑禪師。舒州佛眼遠禪師。彭州南堂靜禪師。潭州道寧禪師。漢州宗泰禪師。新州表自禪師。嘉州九頂素禪師。元禮首座。法閣上座。潭州自賢禪師。俞道婆。建寧慧素禪師。東京繼成禪師。秀州性空菴主。福州慧空禪師。東京天寧卓禪師。洪州天遊禪師。洪州法清禪師。越州慈氏仙禪師。明州天童交禪師。江州圓通受禪師。明州知和菴主。溫州了威禪師。

〔卷二十二〕 杭州大慧果禪師。蘇州虎丘隆禪師。金陵華藏民禪師。台州此菴元禪師。杭州薛堂遠禪師。眉州祖覺禪師。蘇州晏玩禪師。蘇州元淨禪師。侍郎李彌遜。覺菴道人。湖川佛燈珣禪師。鼎州文殊心禪師。潭州龍牙才禪師。福州竹菴珪禪師。杭州智策禪師。成都金繩文禪師。樞密吳居厚。中丞盧抗。揚州石塔禮禪師。福州鼎需禪師。泉州彌光禪師。明州佛照光禪師。江州已菴頌禪師。福州思岳禪師。建寧宗元菴主。蘇州妙總禪師。無垢居士。明州曇華禪師。杭州別峯印禪師。泗州師體禪師。內翰會開。知府葛剡志。杭州師一禪師。澧州仲安禪師。福州慧光禪師。荆門玉泉璉禪師。明州密菴傑禪師。杭州崇岳禪師。東京道楷禪師。眞州惟素禪師。杭州戒弼禪師。金陵法泉禪師。明州淡交禪師。建州崇梵餘禪師。江州慧通禪師。東京圓照本禪師。東京法秀禪師。眞州應天禪師。杭州佛日方禪師。北京重元禪師。台州子鴻禪師。江州智遷禪師。舒州三祖會禪師。越州元善禪師。無爲軍因禪師。侍郎揚傑。東京枯木成禪師。東京善本禪師。舒州修顯禪師。泗州善寧禪師。蘇州蓮式禪師。金陵子英禪師。眞州宗睦禪師。潭州法思禪師。澧州自齡禪師。明州曇振禪師。眞州眞敬了禪師。明州宏智覺禪師 (大久保聖瑞)

〔卷二十三〕 杭州大慧果禪師。蘇州虎丘隆禪師。金陵華藏民禪師。台州此菴元禪師。杭州薛堂遠禪師。眉州祖覺禪師。蘇州晏玩禪師。蘇州元淨禪師。侍郎李彌遜。覺菴道人。湖川佛燈珣禪師。鼎州文殊心禪師。潭州龍牙才禪師。福州竹菴珪禪師。杭州智策禪師。成都金繩文禪師。樞密吳居厚。中丞盧抗。揚州石塔禮禪師。福州鼎需禪師。泉州彌光禪師。明州佛照光禪師。江州已菴頌禪師。福州思岳禪師。建寧宗元菴主。蘇州妙總禪師。無垢居士。明州曇華禪師。杭州別峯印禪師。泗州師體禪師。內翰會開。知府葛剡志。杭州師一禪師。澧州仲安禪師。福州慧光禪師。荆門玉泉璉禪師。明州密菴傑禪師。杭州崇岳禪師。東京道楷禪師。眞州惟素禪師。杭州戒弼禪師。金陵法泉禪師。明州淡交禪師。建州崇梵餘禪師。江州慧通禪師。東京圓照本禪師。東京法秀禪師。眞州應天禪師。杭州佛日方禪師。北京重元禪師。台州子鴻禪師。江州智遷禪師。舒州三祖會禪師。越州元善禪師。無爲軍因禪師。侍郎揚傑。東京枯木成禪師。東京善本禪師。舒州修顯禪師。泗州善寧禪師。蘇州蓮式禪師。金陵子英禪師。眞州宗睦禪師。潭州法思禪師。澧州自齡禪師。明州曇振禪師。眞州眞敬了禪師。明州宏智覺禪師 (大久保聖瑞)

○(四六) 卷一 存 ○寫本(立大、D

### 宗門得意鈔

○(日) Shimon-toku  
n-in-batsu o aratame-cha. 相州高座郡深谷村宗門人別御改帳 卷一 存 ○明治三寫

### 宗門年譜

○(日) Shimon-nen-ki. 立大、D二・三 卷一 存 ○圓性(元和九一實永五)

1. 1623—1708) 元祿七(A. D. 1694) 寫本(龍大、一九三・二三) 支) Tsung-men-nien-ku. 卷一 存 慧弓詞禪師語錄卷二至卷四 清代慧弓詞撰 康熙年間刊 駒大) 宗門拈古彙集 ○(日) Shimon-nen-ko-i-shu. (支) Tsung-men-nien-ku-hui-chi. 卷一 存 已續二・三〇・三 一五 清淨符(康熙三、A. D. 1664—) 本書は、宗門統要續集に收められた宋元以前の諸師の拈提機縁の語要を補正し、是に準じて諸師の一拈一別、一代一微の語を採録し、統要續集に續いで、南岳下三十三世、青原三十六世までに及んだもので、佛祖が、機縁に應じて宗意を拈提し、諸師これに拈別代微の語要を附した古則公案の蒐録である。金陵攝山棲霞寺大成和尚は、虎林報恩院に於て、二十年來の道友自嚴淨符に請はれて宗門拈古彙集序を撰し、淨符は清康熙三年重陽日(A. D. 1664)自序を附して行はしめた。續藏本に依つて其の篇次を示せば、卷首に自序、大成の序、凡例、目次、本文の順位で、其の本文に收められたものは次の如くである。

天台拾得。明州布袋。杜法順。(西天祖師)迦葉。阿難。伏跋密多。脇。師子。婆舍斯多。般若多羅。(卷五) (東土祖師) 菩提達磨。慧可。僧肇。慧能。(旁出祖師)(一)四祖旁出。牛頭法融。安國玄挺。鶴林玄素。徑山道欽。鳥窠道林。(二)五祖旁出。嵩山峻極。(三)六祖旁出。荷澤神會。(卷六) (六祖旁出) 南陽慧忠。永嘉玄覺。耽源眞。(卷七) (未詳法嗣) 先淨照。因禪。僧肇。實性。圓通。壽聖。天台智者。公期。宋太宗。老子聘。茶陵郁。凌行婆。(亡名古宿) 老宿古德。行者。住菴僧。守衣鉢僧。燒庵婆。賣餅婆。跨驢人。施主。廣南僧。長者。韓居士。(曹溪出並二支) 青原行思。南嶽懷讓。(青原一世) 石頭希遷。(卷八) (南岳一世) 馬祖道一。(南岳二世) 百丈懷海。(卷九) 卷一二) (南岳二世) 南泉普願。歸宗智常。鹽官齊安。大海法常。魯祖寶雲。盤山寶積。麻谷寶微。東寺如會。西堂智藏。章敬懷惲。五洩雲默。百丈惟政。若溪道行。三角總印。中邑洪恩。杉山智堅。石峯慧藏。紫玉道通。芙蓉太毓。鴛湖大義。臺山隱峰。無業大達。西園曇藏。金牛。利山。乳源。逍遙。水潦。烏白。石臼。百靈。龍山。則川。龐蘊。(卷一三) 卷一四) (青原二世) 藥山惟儼。丹霞天然。天皇道悟。長髯曠。大川。大顛通。大同濟。(南岳三世) 滄山靈祐。(卷一五) 卷一八) (南岳三世) 黃檗希運。長慶大安。大慈寰中。平田普岸。安和寺通。百丈涅槃。趙州從諗。趙州從諗。長沙景岑。茱萸。子湖利蹤。白馬曇照。香

名所行發 (名庫書) 著題所現 ④ 月年の刊載 ⑤ 説解存内 ⑥ 代年作者 ⑦ 著書 ⑧ 缺存 ⑨ 數卷 ⑩ (名書) 名題 ⑪ 號略字數

嚴義端。日子。雲際師祖。陸巨夫。甘贊。善化。良遂。金州操。秘巖巖。上林戒。靈。〔青原三世〕道吾宗智。雲巖成。船子德誠。裨樹慧省。拍巖明哲。高沙彌。〔卷一九〕〔青原三世〕龍潭崇信。翠微無學。孝義性空。偃天。三平義忠。本生。石室善道。〔南岳四世〕陸州道明。〔卷二。卷三〕〔南岳四世〕臨濟義支。烏石靈觀。大隨法真。靈樹如敏。靈雲志勤。仰山慧寂。香嚴智閑。徑山洪譚。定山神英。延慶法端。米胡。九峯慧慈。晉州霍山。元康。三角法遇。王敬初。光孝慧覺。新興嚴陽。石梯。日容。末山了然。關南道吾。金華俱低。

〔青原四世〕石霜慶諸。〔卷二一—卷二五〕〔青原四世〕漸源仲興。涿清。德山宣鑑。投子大同。清平令遠。夾山善會。洞山良价。僧密。幽溪。〔卷二六—卷二七〕〔南岳五世〕南塔光浦。霍山景通。無著文喜。興化存獎。寶壽沼。三聖慧然。覆盆。魏府大覺。善桂。譚空。漣溪志閑。萬壽。桐峰。雲山。定上座。陳操。〔青原五世〕九峰道虔。湧泉景欣。覆船洪薦。洛浦永安。

〔卷二八—卷三一〕〔青原五世〕韶山靈普。上藍令超。牛頭微。巖頭全義。雪峰義存。雪峰義存。高亭簡。曹山本寂。雲居道膺。陳山匡仁。青林師虔。白水本仁。龍牙居遁。華嚴休靜。九峰普滿。北院通。洞山道全。乾峰。天童咸啓。欽山文途。〔卷三二〕〔南岳六世〕南院慧願。克賓。守廓。西院思明。養壽二世。資福如寶。芭蕉慧清。〔卷三三—卷三七〕〔青原六世〕同安常察。禾山無殷。羅山道閑。瑞巖師彦。香

籍從範。聖壽嚴。玄沙師備。長慶慧稜。保福從展。鏡清道愆。雲門文偃。鼓山神晏。翠巖令參。長生皎然。安國弘瑫。太原宗。金峰從志。曹山慧霞。同安丕。猿山章。朱溪謙。佛日本空。報慈藏巖。護國守澄。

〔南岳七世〕風元延沼。芭蕉繼微。興陽歸靜。〔卷三八〕〔青原七世〕同安志。石門慧微。廣德周。香林澄遠。白雲子祥。德山緣密。巴陵顯鑒。雙泉師寬。洞山守初。北禪寂。奉先深。黃龍贊。招慶道匡。報慈光雲。王延彬。淨衆歸信。明招德謙。黃龍誨機。鼓山智嶽。大龍智洪。報慈文欽。地藏桂琛。安國慧球。大章契如。〔卷三九〕〔南岳八世〕首山省念。廣慧真。〔青原八世〕梁山緣觀。法眼文益。清溪洪進。龍齊紹脩。東禪玄亮。智門光祚。德山慧遠。五祖師戒。祥菴主。東樹二世。歸宗道詮。〔卷四〇〕〔南岳九世〕汾陽善昭。葉縣歸省。谷隱龜聰。廣慧元璉。三交智高。〔青原九世〕太陽警玄。雪竇重顯。天台德詔。法燈泰欽。報恩慧明。洞山曉聰。北禪智賢。天平從滿。〔卷四一〕〔南岳十世〕石霜楚圓。耶那慧覺。大恩守芝。法華全舉。芭蕉谷泉。天聖皓泰。〔青原十世〕投子義青。興陽清剖。天衣義懷。雲居曉舜。許式。玉泉承皓。法昌倚遇。雲居了元。永明延壽。嚴峰師木。瑞鹿遇安。雲居道齊。〔卷四二〕〔南岳十一世〕黃龍慧南。楊岐會。興教川。雲峰文悅。〔青原十一世〕芙蓉道楷。蔣山法泉。佛日戒禪。法雲法秀。〔南岳十二世〕黃龍祖心。寶峰克文。勸潭洪英。積翠永。白雲守端。保寧仁勇。長慶惠運。〔青

原十二世〕丹霞子淳。寶峰惟照。淨因法成。〔卷四三〕〔南岳十三世〕黃龍悟新。法雲果。九峰希廣。慧力可昌。眉山蘇軾。五祖法演。郭正祥。〔青原十三世〕長蘆清了。天童宏智。智者法鈔。〔卷四四〕〔南岳十四世〕圓通道旻。昭覺克勤。龍門清遠。九頂清素。元禮。法闍。俞道婆。〔青原十四世〕猿籠海。天童宗珏。吉祥元實。〔南岳十五至二十三〕徑山宗杲。何山守珣。吳居厚。莫將。靈隱崇嶽。天寧楚琦。育王如琪。淨慈妙倫。高峯原妙。天寧道濟。笑巖德寶。徑山性沖。龍池正傳。興善慧廣。天童圓悟。普明妙用。〔卷四五〕〔青原十五至三十六〕雪竇智鑑。天童如淨。鹿門覺。普照一辨。天童岫。大明寶。王山體。雪巖滿。報恩行秀。靈隱文泰。實應福遇。香巖文方。少室契斌。壽昌慧經。雪門圓澄。博山元來。東苑元鏡。〔大久保堅瑞〕

**宗門の維新** ①(日)Shūmon-ten-shū. ②一卷 ③存 ④田中智學者 ⑤明治三四、大正五再刊 ⑥(正大、一八九・五) (立大、D〇四・四三—四四) (帝國、四〇・六四五) (京大、一一・六三・一三)

**宗門方語** ①(日)Shūmon-hō-go. ②一卷 ③存 ④寫本(駒大)

**宗門實積錄** ①(日)Shūmon-jū-ki-roku. (支)Tsung-men-pao-chi-lu. shaku-toku. ②存、己續二・三・五 ③清代本折編

本書は、弘覺木陳道忞禪師が、宋元明四五百年間に輩出した諸禪師の語録遺没せんとして、其の全録見難きを慨し、此が蒐録を企圖されたが、業卒へざるに勅命に召さ

れたるを以て、法嗣山曉本哲禪師に囑して其の完成を托された。木哲は此より二十餘年を経たる清康熙十五年の春より事に従ひ、三星霜を費して、五燈會元、古尊宿語錄等に漏れたる八十八人の語要を得、九十三卷を成したものである。其の採録の規式は、古尊宿語録に依り、上堂、示衆、小參、機緣、拈頌、法語等を收め、雜著は浩繁の故に收めず。卷末に塔銘行實等あるものは、直に語要を載録して居る。諸尊宿は、大鑑下第何世を以て次第し、南嶽青原下の諸師の語録にして入藏せざるものを彙集し、清代の諸師語録は繁多の故に採録を後人に囑したものである。康熙十八年元旦に自序を撰し、同年三月翰林院學士江蘇崑山の徐元文(字公肅、號立齋)の序、同二十二年十一月(1708)河北宛平縣の王熙(字子雍、一字晉庭、號齋翁)の序、並に浙江鄞縣甬江の李紱(字某堂)の序など當代名士の序を附して行はしめたもので、續藏本には、此等の諸序と凡例と所收の目錄のみを掲げて居る。語要を採録せざるが故に、其の卷次並に諸禪師名の揭示を略して置く。編者たる本哲は西蜀棋里(四川涪陵縣)の人、歎堂と號し、天童の師跡を繼ぎ次で詔せられて隆安に住した。(大久保堅瑞)

**宗門武庫** ①(日)Shūmon-bu-ko. (支)Tsung-men-wu-ku. 大慧普覺禪師宗門武庫、大慧禪師宗門武庫 ②一卷 ③存、大正四八・九四三ノ。1993B. 己續二・乙・一五・五、國譯禪宗叢書第六 ④宋道謙(淳熙一三A. 1. 1186) ⑤大慧普覺禪師宗門

武庫の下を見よ。⑦〔参考〕 禪籍志卷下  
⑧古版(帝國、特別・一・貴)

宗門無盡燈論 ①(日)Shūmon-mu-jin-ten-ron. ②二卷 ③存、大正八一・五八一No. 3575 ④東嶺圓慈(享保六一寛政四A. D. 1721—1792)述 ⑤寛延四(A. D. 1751)九月

⑥禪門に於ける信心修行の次第を述べたるもの。内容は宗由第一、信修第二、現境第三、實證第四、透關第五、向上第六、力用第七、師承第八、長養第九、流通第十に分ち、附録に行持論がある。撰者は自隱門下に於ける禪文兼備の英俊で曾て京洛河東の邊に苦修を積み、爲めに五臟勞疲して疾患日に重く、三十五年の命に過ぎずと知り、自ら病苦を冒し、華法師の刑に臨んで論を著はすに擬し、日夜蒲團上に打坐して、僅かに三十日を出でずして本書の草稿を結了したといはれて居る。故に後來の學徒の爲めに信心修行の次第を叙ぶること極めて親切鄭重なものがある。

⑦寛政一二刊 ⑧(駒大)(立大) (安藤文英)

宗門無盡燈論講録 ①(日)Shūmon-mu-jin-tō-ton-kyō-ron. ②二卷

③存 ④金森文龍述 ⑤大正一四刊 ⑥(谷大、餘大・四〇一四一四〇一五)(龍大、研佛)

宗門略列祖傳 ①(日)Shūmon-ryū-ri-tei-so-den. 本朝傳來宗門略列祖傳

②四卷 ③存、國文東方佛教叢書第一輯第六傳記部下 ④大冥關撰 ⑤文化六刊 ⑥

(駒大)(折、な・八・右・一) 宗門類要 ①(日)Shūmon-rui-yō. ②八卷 ③存 ④(参考) 禪籍目錄

宗門聯燈會要 ①(日)Shūmon-ten-tō-e-yō. (支) Tsun-gen-tien-teng-hui-yō. 聯燈會要 ②三十卷 ③存、(己續二)・九三一五 ④宋晦翁悟明集

⑤本書は、木庵安永禪師の法嗣である南岳下十八世福建泉州府崇福禪寺の眞懶子晦翁悟明禪師が、宋淳熙十年の夏(A. D. 1183)浙江温州府永嘉の中川に安居中、傳燈廣燈等の諸録を閲して、從上の諸老宿に就て、人天の眼目たる六百餘家を採録しその機縁答問、よく宗旨の要妙を全提せし語句を蒐め、聯燈會要と題して三十卷を成したものである。宋淳熙十年(後五日)江心潛光室に於て自序し、同十六年三月(A. D. 1188)李泳(淡齊)の序を附し、縑素の助縁捐費によつて浙江寧波府鄞縣貿山梅檀林に鏤板して行つたものである。後、元至元年二十八年(A. D. 1293)十二月八日江蘇松江縣澱山の思忠和尚序を撰し、文雅藏王鄭氏等の助縁により浙江寧波府鄞縣阿育王山に於て重刊したものである。我が國に於ては、慶應三年(A. D. 1389)京都嵯峨の臨川寺に於て上梓し、元祿三年(A. D. 1690)四月京都大應寺祖泰印行せしもの等がある。續藏本の篇次は宋淳熙十六年李泳の序、元至元二十八年育王重刊の刊記、康應元年臨川寺刊記、元祿三年大應寺祖泰の刊記、元祿三年大應寺祖泰の刊記の順序に採録されて居る。其の列目は次の如くである。(敬稱を略す)

〔卷一〕(七佛) 毗婆尸佛。尸棄佛。毗舍浮佛。拘留孫佛。拘那含牟尼佛。迦葉佛。釋迦牟尼佛。附、竺乾應化賢聖。(西天祖師) 初祖摩訶大迦葉。二祖阿難陀。三祖商那和修。四祖優婆塞。五祖提多迦。六祖彌遮迦。七祖婆須密。八祖佛陀難提。九祖伏駄密多。十祖脇尊者。

〔卷二〕(西天祖師) 十一祖富那夜奢。十二祖馬鳴。十三祖迦毗摩羅。十四祖龍樹。十五祖迦那提婆。十六祖羅睺羅。十七祖伽迦難提。十八祖迦耶舍多。十九祖鳩摩羅多。二十祖闍夜多。二十一祖婆修盤頭。二十二祖摩拏羅。二十三祖觀勒那。二十四祖師子。二十五祖婆舍斯多。二十六祖不如密多。二十七祖般若多羅。二十八祖菩提達磨。

(東土祖師) 二祖慧可。三祖僧粲。四祖道信。五祖弘忍。六祖慧能。

(四祖旁出) (一)牛頭一世、金陵牛頭法融。(二)牛頭二世、金陵牛頭智嚴。(三)牛頭三世、牛頭無機緣不載。(四)牛頭五世、潤州鶴林玄素。宜州安國玄挺。舒州天桂崇慧。

(五)牛頭六世、天台佛窟巖惟則。杭州徑山道欽。(六)牛頭七世、天台雲居智。杭州鶴巢道林。

〔卷三〕(五祖旁出) 北宗神秀。嵩山慧安。袁州蒙山道明。

(五祖旁出二世) 嵩山普寂。兗州降魔藏。嵩山破籠躡。嵩山元珪。

(五祖旁出三世) 終南山惟政。(五祖旁出四世) 益州保唐無相。(六祖法嗣) 西天崛多三藏。韶州法海。永嘉真覺。司空山本淨。婺州玄策。荷澤神會。信州智常。壽州智通。洪州法達。江西志徹。吉州志誠。廣州志通。西京光宅慧忠。附、耽源應真。

〔卷四〕(天祖法嗣) 南嶽懷讓。

(南岳二世) 江西馬祖道一。(南岳三世) 池州南泉普願。洪州百丈懷海。廬州歸宗智常。明州大梅法常。杭州鹽官齊安。京兆章敬懷懷。幽州盤山寶積。婺州五洩靈默。蒲州麻谷寶徹。

〔卷五〕(南岳下六世) 汾陽大達無業。虔州西堂智藏。越州大珠慧海。信州鵝湖大義。池州杉山智賢。澧州若溪道行。撫州石鞏慧藏。袁州南源道明。鼎州中邑洪恩。洛京佛光如滿。潭州三角山總。伊闕伏牛自在。湖南東寺如會。池州魯祖寶雲。定州栢巖明哲。京兆興善惟寬。洪州百丈惟政。洪州泐潭法會。洪州泐潭常興。毗陵芙蓉大鏡。潭州華林善覺。袁州楊岐寂叔。南嶽西園曇藏。鄂州大陽山伊。江西北蘭山讓。唐州紫玉道通。磁州馬頭神照。五臺山鄧隱峰。潭州龍山。潭州秀溪。鎮州金牛。韶州乳源。洛京黑澗。京兆興平。温州佛峽。齊安。古寺。鳥白。石白。松山。本谿。石林。浮盃。洞安。百靈。淡溪。水洑。打地。利山。亮公。則公。

〔卷六〕(南岳下三世) 襄州龐蘊居士(南岳下四世) 趙州觀音從諗。衡州子湖利蹤。終南山靈隱。荊州白馬曇照。湖南長沙景岑。鄧州香嚴義端。池州靈鷲閑。鄂州茱萸。日子。陸亘大夫。甘贄行者。

〔卷七〕(南岳下四世) 潭州大僞靈祐。



筠州黃慶帝運。廣州和安通。杭州大慈寰中。天台平田普岸。筠州五峯常觀。潭州石霜性空。福州長慶大安。福州古靈神讚。洪州東山慧。江州龍雲臺。京兆府衛國道。清田。福州芙蓉靈訓。漢南高亭。新羅大茅。五臺智通。天龍。關南道常。金州摸。則州古堤。福州龜山智真。鎮州普化。壽州良遂。虔州虔微。吉州苦山慧超。湖南上林戒靈。湖南祇林。秘嚴巖。

〔南岳下五世〕 楊州光孝慧覺。隴州國清奉。婺州新建。洪州嚴陽。杭州多福。益州西穆。日容遠。紫桐。潭州浮石。

〔卷八〕 (南岳下五世) 明州雪竇常通。石梯。袁州仰山惠寂。鄧州香嚴智閑。杭州徑山洪諱。福州雙峯。福州九峰慈慧。徐州定山神英。襄州延慶法端。益州應天。元康。京兆米。王公敬。陸州陳尊宿。福州烏石靈觀。杭州千頃楚南。裴公休。

〔卷九〕 (南岳下五世) 鎮州臨濟義玄。〔卷一〇〕 (南岳下五世) 益州大隨法真。韶州靈樹如敏。福州壽山師解。福州靈雲志勤。台州浮江。南臺鄭十三娘子。筠州末山尼了然。襄州關南道吾。漳州羅漢。福州雙古。

〔南嶽下六世〕 道巖。袁州仰山南塔湧。晉州霍山景通。袁州仰山東塔。鄧州佛巖。陸州陳揆。鎮州保壽沼。鎮州三聖慧然。魏府大覺。魏府興化存獎。鄂州灌溪志閑。幽州談空。定州崔禪。鎮州萬茂。襄州歷村。滄州米倉。克符。桐峯。虎谿。覆盆。杉洋。雲山。定上座。藏上座。

〔卷一一〕 (南岳下七世) 吉州香福如寶。

鶴湖。鄂州芭蕉慧清。越州清化全付。汝州西院思明。鎮州後保壽。鎮州大悲。緇州水陸。廬州澄心曼德。汝州南院。廬州大覺。荊州竹園山。汝州南院願。太行山禪房克賓。守廓。池州魯祖教。際上座。

〔南岳下八世〕 鄂州興陽清讓。汝州芭蕉繼微。天彭詞毅(或本作彭州承天辭確禪師)。鄂州興陽歸靜。汝州風穴延沼。汝州顯橋安。

〔南岳下九世〕 汝州首山省念。汝州廣慧真。〔南岳下十世〕 汾陽善昭。〔卷一二〕 (南岳下十世) 汝州葉縣歸省。襄州石門聰。汝州廣慧元璉。潭州神鼎鴻譚。并州承天嵩。汝州首山志。隨州智門罕。汝州仁王評。襄州鹿門慧昭山主。

〔南岳下十一世〕 潭州興化整圓。筠州大愚守芝。涪州那那慧覺。〔卷一三〕 (南岳下十一世) 舒州法華全舉。新州龍華曉愚。湖州天聖浩泰。南嶽芭蕉谷泉。舒州浮山法遠。汝州寶應法昭。大乘遠。潤州達觀曇顯。襄州石門了同。處州仁壽嗣珍。李遵勗。楊億。

〔南岳下十二世〕 洪州黃龍慧南。袁州楊岐方會。〔卷一四〕 (南岳下十二世) 洪州翠巖可眞。洪州大寧寬。潭州道吾悟眞。潭州雲峯文悅。越州姜山方。蘇州定慧信。〔南岳下十三世〕 洪州黃龍祖心。洪州寶峯克文。潭州雲蓋守智。湖州報本元。洪州寶峯洪英。南岳福嚴慈感。筠州黃檗勝。洪州雲居元祐。

〔卷一五〕 (南岳下十三世) 廬州開元琦。

吉州隆慶閑。金陵保寧瓊。江州東林常總。舒州白雲守端。建康保寧仁勇。潭州大偽慕詰。桂州崇壽齊曉。

〔南岳下十四世〕 洪州黃龍悟新。洪州黃龍惟清淨師。洪州寶峰善清。鄂州黃龍明。洪州寶峯文準。東京法雲佛照杲。洪州兜率從悅。衡州超化靜。南岳上封慧和。

〔卷一六〕 (南岳下十四世) 洪州羅漢系南。泉州南峯永程。鄂州子凌山自瑜。廬州開先廣鑑英。南岳南臺允恭。新州五祖法演。潭州雲蓋智本。〔南岳下十五世〕 吉州禾山方。東京天寧守卓。福州鼓山本才。張商英。成都昭覺克勤。建康蔣山慧勳。舒州龍門清遠。潭州開福道寧。潭州承天自承。東京淨因繼成。〔南岳下十六世〕 湖州道場良範。福州普賢元素。泉州法石祖珍。潭州大偽法泰。

〔卷一七〕 (南岳下十六世) 臨安府徑山宗杲。明州育王端裕。平江府虎丘隆。台州護國景元。韶州南華炳。福州鼓山士珪。鏡州薦福道行。撫州白楊法順。潭州大溈善果。〔南岳下十七世〕 鼎州靈巖仲安。潭州芙蓉清且。福州西禪鼎需。福州龜山彌光。福州東禪思岳。福州西禪守淨。建州開善道謙。

〔卷一八〕 (南岳下十七世) 江州東林道顏。饒州薦福道本。潭州大偽法實。明州阿育王光。福州雪峯藏開。建寧府竹原元。平江資壽妙總。温州淨居尼妙道。張九成。湖州道場法全。臨安府淨慈師一。明州天童曇華。台州國清行機。泉州法石惠光。〔南岳下十八世〕 温州龍翔南雅。福州天王志清。

南嶽州觀門安分。福州鼓山宗遂。福州乾元宗頌。常州華藏有權。明州天童咸傑。

〔卷一九〕 吉州青原行思。〔青原下二世〕 南嶽石頭希遷。〔青原下三世〕 荊州天泉道悟。澧州藥山惟儼。鄧州丹霞天然。潭州長懿。潭州大川和尙。潮州大顛和尙。汾州石樓和尙。鳳翔佛陀院。潭州招提慧朗。丁行者。〔青原下四世〕 澧州龍潭崇信。澧州道吾宗智。潭州雲巖嚴晟。秀州紅子德誠。宣州禪樹慧省。高沙彌。李翱。京兆翠微無學。吉州孝義性空。米倉。潭州石室善導。偃天和尙。

〔卷二〇〕 (青原下四世) 漳州三平義忠。馬頰山本空。本生。韓愈。〔青原下五世〕 鼎州德山宣鑑。洪州寶峯和尙。潭州石霜慶諸。潭州漸源仲興。祿青。潭州。筠州洞山良价。潭州神山僧密。涿州杏山靈洪。幽溪。

〔卷二一〕 (青原下五世) 澧州夾山善會。舒州投子大同。湖州道揚如訥。鄂州清平令遠。東山光仁。建州白雲約。歙州茂源和尙。〔青原下六世〕 鄂州巖頭全谿。福州雪峯義存。

〔卷二二〕 (青原下六世) 泉州瓦棺。襄州高亭簡。洪州感潭資國和尙。筠州九峯道虔。台州湧泉景欣。潭州雲蓋志元。福州覆紅荐。潭州大光居誨。鳳翔府石柱。潭州文殊。公拙。撫州曹山本寂。洪州雲居道膺。潭州龍牙居遁。襄州洞山師虔。撫州疎山亮仁。澧州欽山文邃。京兆華嚴休靜。筠州白水本仁。益州北院通。洛京白馬道儒。明州天童感啓。

〔卷二三〕 (青原下六世) 越州乾峯。筠



州九峯普滿。蜆子。幽棲。澧州洛浦元安。袁州盤龍可文。撫州黃山月輪。洛京韶山寶普。福州牛頭儀。安州九峻山和尙。東京觀音巖後。

〔青原下七世〕 福州羅山道閑。台州瑞巖師彦。懷州玄泉。福州支沙師備。

〔卷二四〕 〔青原下七世〕 韶州雲門文偃。福州長慶慧稜。福州安國明真。漳州保福從展。杭州龍冊德慈。福州長生皎然。福州鼓山神晏。明州翠巖令參。泉州臥龍道溥。越州越山師範。安州白兆志圓。南嶽金輪可觀。漳州報恩懷慕。漳州隆壽紹卿。杭州龍華靈照。洛京南院。大原孚上座。

〔卷二五〕 〔青原下七世〕 洪州同安常察。

吉州不山澄源。新羅清院和尙。新羅臥龍。漳州伏龍。台州六通紹。漳州雲蓋志罕。撫州金峯從志。處州廣利容。襄州鹿門處真。衡州育王弘通。撫州曹山惠設。杭州佛日和尙。蘇州永光真。洪州同安丕。洪州雲居懷岳。歙州朱溪謙。池州菴山章。洪州雲居簡。廬山歸宗懷惲。洪州同安威。漳州報慈岐。襄州合珠審哲。襄州鳳凰山獻龜。襄州萬銅山廣德。筠州黃蘗慧。韶州護國淨果。洛京長水歸仁。撫州大安省。杭州瑞龍幻璋。鳳翔青峰傳楚。歙州烏牙彥賓。袁州木平善道。鄂州桐泉。〔青原下八世〕 歙州明招德謙。吉州清平惟曠。婺州金柱義昭。吉州匡山。西川慧。鄂州黃龍諤瑒。

〔卷二六〕 〔青原下八世〕 漳州羅漢桂琛。福州安國惠球。務州金華國泰。福州螺峯神奧。泉州睡龍。天台雲光光緒。天台國清師淨。韶州白雲祥。岳州巴陵顯鑒。隋州智門

師寬。襄州洞山守初。韶州雙峰敬欽。歙州北禪寂。朗州德山圓明。隋州雙泉郁。鄂州臨溪竟脫。澧州妙勝孫。益州香林澄遠。韶州雲門法球。潭州南台道遵。南岳般若啓柔。信州鵝湖雲震。廬州天王徽。深明二上座。懷州龍福古。泉州招慶道匡。福州慈雲光雲。婺州報恩寶資。襄州鶯嶺明遠。福州石佛靜。福州僊天守玘。杭州傾心法瑠。新羅龜山。王延彬。泉州招慶省登。漳州報恩照。金陵淨德慧悟。福州鼓山智嶽。建州白雲時作。杭州龍冊子興。漳州保福清常。揚州風化合崇。朗州大龍智洪。襄州白馬行謁。晉州興化師晉。洪州同安志。鄂州薦福思。

〔青原下九世〕 處州報恩契從。棗樹。嘉州黑水。金陵清涼文益。襄州青溪洪準。撫州龍濟紹修山主。金陵清涼休復。衡岳南台守安。

〔卷二七〕 〔青原下九世〕 廬山歸宗道詮。連州保峯。韶州日華。勸潭靈澄散聖。江陵福昌惟善。歙州五祖師戒。歙州四祖譚。鄂州廣教懷志。舒州龍門永。唐州天目契滿。鄂州建福智通。嶽州乾明睦。鄂州廣濟通。荆南府開福德賢。南岳南臺勸。鼎州文殊應真。鼎州德山慧晏。鼎州文殊寬。鼎州德山慧遠。天台蓮華峯祥公。西劍州風風智廣。潭州大瀉承。隋州智門光祚。鼎州梁山綠觀。磁州桃園曠朗。

〔青原下十世〕 天台山德韶。金陵清涼泰欽。金陵報恩玄則。金陵報玄覺。杭州報恩慧明。漳州羅漢守仁。金陵鍾山義章。金陵報恩文遂。杭州永明道潛。廬山歸宗慧超。廬山棲賢慧圓。洪州百丈懷。杭州靈隱清慧。相州天平從漪。洪州漣潭懷澄。筠州洞山自實。復州北塔思廣。潭州北禪智賢。筠州洞山曉聰。廬山歸宗善進。明州雪竇重顯。鼎州彰法燈潤。潭州雲蓋繼勳。鄂州太陽慧延。

〔卷二八〕 〔青原下十一世〕 杭州永明延壽。溫州優巖安。杭州五雲志遠。廣州光聖師護。杭州龍華慧居。溫州瑞鹿本先。溫州厲蕩顯齊。杭州興教洪壽。洪州雲居齊。廬山栖賢澄謚。天台般若從進。明州天童新。潭州雲蓋用清。明州育王懷璣。婺州承天惟簡。荆門軍玉泉承清。洪州法昌倚遇。洪州雲居曉舜。洪州雲居了元。越州天衣義懷。泉州承天傳宗。舒州投子宗。越州天衣在。鄂州興陽剖。舒州投子義青。惠州羅浮如。西川雲頂山鵬。〔青原下十二世〕 湖州西余體柔。建康蔣山法泉。處州慈雲居慧。東京法雲法秀。杭州佛日智才。東京慧林宗本。台州瑞巖子鴻。真州長蘆體明。蘇州淨慧可證。東京淨因道楷。西京少林恩。

〔卷二九〕 〔青原下十三世〕 澧州香積用旻。杭州淨慈善本。福州太平恩。秀州本覺法真。西京理善真善。鄧州丹霞淳。東京淨因法成。

〔青原下十四世〕 福州雪峯思慧。明州天童正覺。

〔青原下十五世〕 杭州淨慈道昌。臨安府淨慈慧融。應化賢聖。亡者尊宿。

〔卷三〇〕 傳大士心王銘。誌公和尚十二時歌。詩公和尚十四科。三祖璨大師信心銘。眞覺大師證道歌。石頭和尚參同契。石頭和尚草庵歌。僧亡名息心銘。趙州和尚十

二時歌。羅漢琛和尚明道頌。同安察禪師十玄談。法眼禪師三界惟心頌。澄觀國師答皇太子心要。鄂州普安和尚頌。

〔參考〕 禪籍志卷上 (大久保堅瑞)

宗門聯燈錄

①(日) Shu-mon-ten (Toku) Tsun-g-men-tien-teng-lu

②存 ③宋代井度分燈集 ④〔參考〕 禪籍志卷上、禪籍目錄

宗門惑問

①(日) Shi-mon-waku-mon. (支) Tsun-eh-men-tuo-wen. ②一卷

③存、記續二・三・二・淇然圓澄禪師語錄附錄 ④圓澄述 ⑤明萬曆二二(A. D. 1595)

⑥北京大覺寺慈舟方念禪師的法嗣である青原下三十五世の散木道人湛然圓澄禪師が、廿五歳の明萬曆二十三年(A. D. 1595)四月二十日參禪者の間に答へて、參禪の要契、修道の要旨を示したものである。即ち念佛を以て超世の涉徑と稱するもの、持呪を以て獨脱の法門と唱ふるものなどがある中に、禪師自らは參禪を以て修行の要術なりと示して居られるが、是れに就て開示されたい。參禪の要は何を以て入手の門と爲すや。直指明心と三學萬行との關係如何等と云ふ五十二種の客問に答へたもので、紹興府會稽雲門顯聖禪寺に於て自序し、附するに參禪釋難或問補遺の三問答、答明羅子問の二問答、並に紫柏尊者達觀眞可禪師が、明萬曆三十一年冬、小人の誘致に依つて、西山潭柘寺に於て捕へられた法難に就き、衆議紛々たるを以て、石簀居士の求めに應じ、其の眞實を釋明したる達觀和尚招殃傳とを收めたものである。(大久保堅瑞)

名所行發①(名庫書)書藏所現② 月年の刊寫③ (書考書書釋註)書末④ 說解存内⑤ 代年作者⑥ 者著⑦ 缺存⑧ 數卷⑨ (名書)名題⑩ 記略字數

宗用集傳受口決

①(日)Sha-yo-i-shi den-jin-kechi-ge. ④源信(天慶五—寛仁元 A.D. 942—1017)撰 (一云皇覺作) (参考) 諸宗章疏録第二

宗用集傳受口決偈

①(日)Sha-yo-i-shi den-jin-kechi-ge. ④源信(天慶五—寛仁元 A.D. 942—1017)(一云皇覺作) (参考) 本朝台祖撰述密部書目

宗要

①(日)Sha-yo. ②一册 ③存 ④正保四刊 ⑤(高)大、一、二、四

宗要安心論題

①(日)Sha-yo-an-jin-ron-dai. ②一卷 ③存 ④米村永信編 ⑤明治四〇刊 ⑥(龍)大、一、五〇一—一六〇(京專)

宗要安心論題

①(日)Sha-yo-an-jin-ron-dai. ②一卷 ③存、佛教講義録之内 ④鈴木法琛著 ⑤大正三刊 ⑥(龍)大、一、五〇一—一七〇(京大、一、二六、一、一〇二)

宗要安心論題

①(日)Sha-yo-an-jin-ron-dai. ②一卷 ③存 ④雲山龍珠著 ⑤大正九刊 ⑥(龍)大、一、五〇一—一九〇

宗要案立

①(日)Sha-yo-an-ri. ②六卷 ③存、大要柏原案立、柏原案立 ④貞舜(一應永二正十四、四四〇No. 3374 ⑤貞舜(一應永二九 A.D. 1422—)撰 (参考) 山家祖徳撰述篇目集卷下

宗要伊賀抄

①(日)Sha-yo-i-ga-sho. ②二卷 ③存 ④心榮談 ⑤延文元寫 (貞如藏)

宗要一箇口決

①(日)Sha-yo-ichu-kechi-ge. ②五册 ③存 ④足利末期

宗要永心談

①(日)Sha-yo-etsu-shin-dan. ②三卷 ③存 ④永心談 ⑤屏應三(A.D. 1340) ⑥寫本(貞如藏)

宗要開關

①(日)Sha-yo-kaikai. ②四卷 ③存 ④内田三經七祖宗要開關 ⑤(天)明七—明治一(A.D. 1672—1879)著 ⑥明治一五刊(龍)大、一、五〇一—二〇〇 (正)大、一、六五九—明治二三刊(正)大、一、六五、一〇〇—明治三〇刊(谷)大、宗大、二、二七〇、宗洋、六八)

宗要柏原案立

①(日)Sha-yo-hara-an-ri. ②六卷 ③存、大正七四、四四〇No. 3374 ④貞舜(建武二—應永二 A.D. 1334—1422)撰

本書は天台宗惠心流宗要論草の一。元來日本天台の論義が特異性を發揮し、南都論義から獨立したのは慈惠大師良源時代以降である。良源が禁中では有名な應和宗論を行つて後、直ちに山玉権現の神前で宗要九十算を選び叡山の學僧等と共に毎日論談決擇を行つたことがあつた。これが起元である。宗要の算の數に就いても惠檀兩流の間に或は九十算、九十三算等の異説がある。天台論義には宗要、義科、問要の三種がある(二百題の分類法)。算題の取扱方によつて同一の算題が宗要とも義科ともなる。宗要とは宗旨の所要を論談決擇するのが主眼であり、義科とは經疏の文段義理を明確ならしむることが目的であり、問要とは天台宗の教義歴史等から廣く佛教一般の問題に及ぶ各種の題目を取り來つて論談決擇するのが

その本義とするのである。宗要の列次を五部に分つ、惠心流では佛部、五時部、教相部、菩薩部、雜部とし、檀那流では佛部、菩薩部、二乘部、教相部、五時部、雜部と次第する。義科は十六算としこれに一之算乃至四之算までに分れその總數は二百乃至七百條と分る。問要には分類もなく其の總數も何程あるか定つてゐない。宗要と義科とは業義となし、問要は副義とする場合が多い。同一算題でありながら宗要となり問要となる例は本書と自在房とを比較すれば知られる。同一宗要でも惠檀兩流で取扱ひに相違ある例は本書と「書合」とを比較すれば判然する。本書は惠心流の宗要論草であることは五部の列次で知られる。貞舜の傳は日本佛家人名辭典に出づ。本書製作の緣由は慈惠大師九十餘歳の時に本書を作るといふがこれは誤りである。貞舜は叡山では西塔寶園院の學僧、近江柏原成菩提院を開創し、ここに住して著述並に圓戒弘通をしたから柏原貞舜として有名である、本書の内容目次を記せば(第一卷)佛部、二佛並出。前後自受用。應身八相。自受用智。三身法界。通教教主。二聖發心。三佛出世。自受用所居。葉上釋迦。新成顯本。(第二卷)一五時部—兼俱對帶。爾前分身。爾前身土。後番五味。爾前久遠。說五時教。分身儀式。淨穢涅槃。二經勝劣。提謂經攝。俱知常住。惡人授記。五時證據。(第三卷)教相部—四門實理。住上壽命。住上超次。三教初焰。入住時節。果頭無人。四教八相。三惑同斷。十二品斷。通圓相即。四教證據。三教地位。

一生妙覺。地上空假。名別義通。三種四教。十地虎狼。(第四卷)菩薩部—四依供佛。別教生身。補處住天。三藏不退。通教不退。別教不退。通報劫數。三藏劫數。二土弘經。有教無人。通教出假。三根被攝。三藏隨惡。大悲受苦。大悲闡提。元品能治。(第五卷)一乘部—住果緣業。二乘通力。二乘心心。帶權二乘。法華小益。定性二乘。超前三果。超中二果。羅漢果退。住果聲聞。三周證入。五果廻心。別教二乘。二乘智斷。三周定性。(第六卷)雜部—法花授記。十界眞實。十界五具。不定毒發。六根外境。四土即離。三土三道。三界增減。三因佛性。九識證據。人天小善。初分二十空。補處智力。塵沙證據。四信五品。人天感佛。無性有情。草木成佛。決定業轉。三惑同體。四依對判。以上九十五算。畢。(田島德音)

宗要活套集

①(日)Sha-yo-katsu-ji. ②一卷 ③存、日蓮宗々學全書本妙法華宗部 ④日修集

⑥本妙法華宗(舊稱本隆寺派)の日修(傳未詳)の著。「約教約約時約味分別之事。相持妙絕持妙之事。心佛衆生之三法妙之事。本迹十妙分別之事。次本門十妙之事。六重本迹之事。双用權實但令用實並双用本迹但令用本之事。五重支勝劣之事。蓮華六譬之事。七喻是別蓮華是總釋之事。宗支義分別之事。用支義分別之事。教支義之事。三種教相之事。如是我聞上妙法之事。序正流通三段得意之事。因約約教本迹觀心四種釋事」の十七條につき本宗獨特の立場から重要宗義を釋したもので簡にして要を得た

名所行夢⑩ (名庫書)著處所現⑩ 月年の刊頁⑩ (書考案書釋註)書末⑩ 説解卷内⑩ 代年作者⑩ 著者⑩ 缺存⑩ 數卷⑩ (名書)名題⑩ 號略字數

良書である。(馬田行啓)

宗要肝心集

①(日)Shu-yo-kan-jin  
②三卷 ③存 ④然阿良忠(正治元  
一弘安一〇 A. D. 1199—1287)撰 ⑤(參  
考)大日本佛教全書續刊豫定書目

宗要記

①(日)Shu-yo-ki. ②一卷  
③存 ④寫本(龍大、研眞)

宗要義略

①(日)Shu-yo-gi-ryaku.  
眞宗護鑑 ②四卷 ③存 ④古道正運(寬  
延二—天保元 A. D. 1749—1830)著 ⑤明  
治四一寫(谷大、宗大・一一一四)寫本(龍大・  
一七五・四四—四五)昭和三刊(龍大)

宗要義略或評餘應

①(日)Shu-yo-  
gi-ryaku waku-hyo-yo-o. ②一卷 ③存  
④寫本(龍大)

宗要義林

①(日)Shu-yo-gi-rin. ②  
一卷 ③存 ④知空(寬永一一—享保三 A.  
D. 1631—1718)述 ⑤寫本(龍大、一五〇三・  
一七八)

宗要愚案記

①(日)Shu-yo-gu-an-  
ki. ②一卷 ③存 ④是海徹周(文政元—  
明治二七 A. D. 1818—1894)述 ⑤寫本  
(谷大、宗大・六四六)

宗要愚案記早見

①(日)Shu-yo-gu-  
an-ki-hayami. 是海宗要愚案記早見 ②  
一卷 ③存 ④正受記 ⑤寫本(谷大、宗  
大・六四六)

宗要愚案記評駁

①(日)Shu-yo-gu-  
an-ki-hyo-banaku. 是海宗要愚案記評駁  
②一卷 ③存 ④南條神興(文化一一—明  
治二〇 A. D. 1814—1887)撰 ⑤寫本(谷  
大、宗大・六四六)(龍大)

宗要摺拾集

①(日)Shu-yo-kun-jū-  
shū. ②十二卷 ③定珍撰 ④(參考)山  
家祖德撰述篇目集卷下

宗要堅林抄

①(日)Shu-yo-ken-rin-  
shō. ②十二卷 ③存 ④正觀開書 ⑤觀  
應元寫 ⑥(南溪藏)

宗要玄談

①(日)Shu-yo-gen-dan.  
②一卷 ③存 ④今泉頓教編 ⑤明治三七  
寫 ⑥(正大、一一五三・一二八)

宗要五玄略著

①(日)Shu-yo-go-  
gen-ryaku-cho. ②五卷 ③存 ④小見山  
三學著 ⑤明治四一刊 ⑥(立大、A〇四・  
三六二)

宗要御口筆

①(日)Shu-yo-go-ku-  
hitsu. ②一卷 ③良忠(正治元—弘安一〇  
A. D. 1199—1287) ④(參考)淨土正依  
經論書格目錄

宗要紅葉

①(日)Shu-yo-ko-yō. ②  
一卷 ③存 ④澄家(正元元—觀應元 A. D.  
1259—1330)撰 ⑤元和三寫 ⑥(谷大、餘  
大・一三四二)

宗要國語一斑

①(日)Shu-yo-koku-  
go-pan. ②一卷 ③存 ④赤松圓純  
天保一三—大正九 A. D. 1842—1920)編  
⑤大正八刊 ⑥(龍大、研眞)

宗要三ヶ大事

①(日)Shu-yo-san-  
ka-dai-jū. ②一卷 ③存 ④心聰述 ⑤文  
和三(A. D. 1354) ⑥(眞如藏)

宗要私

①(日)Shu-yo-shi. ②一卷  
③存 ④進賢作 ⑤承保二(A. D. 1075)  
⑥(正教藏)

宗要私記

①(日)Shu-yo-shi-ki. ②  
二卷 ③存 ④勝慧記 ⑤享保一八(A. D.  
1733)十一月  
⑥西方指立章、本願十念義、最初講科解、  
追薦報謝考、嬰兒歸佛編を收む。  
⑦(參考)淨土眞宗教典志第二 ⑧元文五  
刊(谷大、宗大・一四七〇)寶曆九刊(龍大・  
一五〇一・二四)

宗要私記

①(日)Shu-yo-shi-ki. ②  
十五帖 ③存 ④宜舞撰、眞海記 ⑤永正  
七寫

宗要私議

①(日)Shu-yo-shi-gi. ②  
一卷 ③存 ④同議記 ⑤寫本(龍大、一五  
〇二・四三)

宗要私見聞

①(日)Shu-yo-shi-ken-  
mon. 十八帖 ②十八卷 ③存 ④榮源  
⑤文明九(A. D. 1477) ⑥(日光海藏)

宗要私聞書

①(日)Shu-yo-shi-mon-  
sho. 光聚房宗要私聞書 ②十七卷 ③存  
④辨增談 ⑤正慶二寫 ⑥(眞如藏)

宗要邪正辨批評

①(日)Shu-yo-ja-  
shō-ben-hi-hyo. 宗要文 ②三卷 ③存  
④法體異義を破斥せるも。 ⑤寫本(谷  
大、宗大・二四一一)

宗要集

①(日)Shu-yo-shū. 宗要集上  
三川 ②六卷 ③存 ④信俊談 ⑤寫本  
(眞如藏)

宗要集

①(日)Shu-yo-shū. 宗要集寶  
樹坊 ②十八卷 ③存 ④賴増談 ⑤寛文  
五刊 ⑥(眞如藏)

宗要集

①(日)Shu-yo-shū. ②十八  
冊 ③存 ④寶樹坊集 ⑤(京專)

宗要集聞書

①(日)Shu-yo-shū-ki.  
治三寫 ②(叡山文庫)

宗要集聞書

宗要集智見鈔

①(日)Sha-yo-shū-chi-ku-shū. ②十卷 ③存 ④承應二刊 ⑤(龍大・二六五・一三) (谷大・餘大・八〇五) (哲・七・右二) (正大・一三二・一〇) (立大・A二一四四〇—四四二)

宗要序分抄物

①(日)Sha-yo-jo-bun-shū-moishu. ②一卷 ③存 ④寛永一六寫 ⑤(高大・寄・一・二四)

宗要小部集

①(日)Sha-yo-shō-bu-shū. ②十三種 ③存 ④眞宗本願寺派先德の小品十三種を輯む。⑤寫本(谷大・宗大・一七五八)

宗要抄

①(日)Sha-yo-shō. ②二卷 ③存 ④正保四刊 ⑤(正大・一一八二・一〇九) (龍大・二六二・一八) (高大・寄・一・二四)

宗要抄秘藥

①(日)Sha-yo-shō-hi-yaku. ②一卷 ③存 ④辨能記

宗要鈔

①(日)Sha-yō-shū. 金鑽宗要、宗要集 ②六卷或十二卷 ③存 ④榮源記 ⑤文明四—五(A.D. 1472—1473) ⑥佛、教相、五時、菩薩、二乘、雜の六部に分ちて、天台の宗要を説述したるもの。

明曆二刊(龍大、二六五・一〇)寛永一九寫(谷大、餘大、二三四八)寫本(龍大、二六五・一・一)

宗要鈔最秘

①(日)Sha-yō-shō-sai-san. ②二卷 ③存 ④存海撰 ⑤寫本(日光)

宗要相承口傳抄

①(日)Sha-yō-ko-ten-shū. 宗要相承口傳抄安鎮 ②七卷 ③存 ④惠心流口筆、海上房秘抄

宗要孫吳

①(日)Sha-yō-son-wo. ②六卷 ③存 ④寫本(龍大)

宗要傳授見聞

①(日)Sha-yō-den-jū-kem-mon. ②二卷或四卷 ③存 ④直海記 ⑤寛文一一寫(谷大、餘大・三二二九) 寫本(正教藏)

宗要二百論題

①(日)Sha-yō-ni-hyaku-ron-dai. ②二卷 ③存 ④利井鮮妙(天保六一—大正三 A.D. 1835—1914)述 ⑤寫本(龍大、研眞)

宗要必持

①(日)Sha-yō-hisshi. ②三卷 ③存 ④寫本(龍大)

宗要百論題

①(日)Sha-yō-hyaku-ron-dai. ②一卷 ③存 ④義山(文政七一—明治四三 A.D. 1824—1910)述 ⑤寫本(龍大、一五〇一・二七)

宗要百論題

①(日)Sha-yō-hyaku-ron-dai. ②三卷 ③存 ④東陽圓月(文政元—明治三五 A.D. 1818—1902)述 ⑤明治二六刊(龍大、一五〇一・二五) (京大、日大末・六九八) (帝國、一五・二三五) 明治三二刊(谷大、宗大・三八七) (龍大、研眞)

宗要白光

①(日)Sha-yō-byōkō. ②十卷 ③存 ④惠鎮上人談 ⑤元亨元(A.D. 1321) ⑥(正教藏)

宗要廟

①(日)Sha-yō-ya. ②二卷 ③存 ④寫本(正大、一三九・二七)

宗要法套集和解

①(日)Sha-yō-hō-tō-shū-wa-gai. ②一卷 ③存 ④日譯述 ⑤寫本(立大、D・三〇〇) 原本(京都本隆寺藏)

宗要本來口傳抄

①(日)Sha-yō-hon-rai-ku-ten-shū. ②二卷 ③存 ④瑠光應保二—曆仁元 A.D. 1162—1238)述 ⑤延寶三刊 ⑥(正大、一五五三・三九)

宗要本來私見聞

①(日)Sha-yō-hon-rai-shi-ken-mon. ②一册 ③存 ④聖聞(曆應四—應永二七 A.D. 1341—1420) 聖聰(貞治五—永享二 A.D. 1366—1440) 了曉(文明一五 A.D. 1483) ⑤延寶三刊 ⑥(京大、日大末・六三六)

宗要文

①(日)Sha-yō-mon. ②二卷 ③存 ④惠宗(正保元—享保六 A.D. 1644—1722)撰 ⑤刊本(谷大・二三八四)

宗要文

①(日)Sha-yō-mon. ②二卷 ③存 ④金森智開撰 ⑤刊本(龍大、一五〇二・一〇九) (京大、一・二六・五九)

宗要略鈔

①(日)Sha-yō-ryaku-shū. ②一卷 ③存 ④頼瑜(嘉祿二—嘉元二 A.D. 1236—1304) ⑤(參考) 諸宗章疏錄第三 ⑥(參考) 山家祖德撰述篇目集卷下

宗要六條義

①(日)Sha-yō-roku-ji. ②一卷 ③存 ④觀家(延享四—文化一〇 A.D. 1747—1813)述 ⑤文化八寫 ⑥(谷大)長保(一一一)

宗要論義

①(日)Sha-yō-ron-gi. ②五卷 ③良忠(正治元—弘安一〇 A.D. 1199—1287) ④(參考) 淨土正依經論書籍目錄

宗要論題

①(日)Sha-yō-ron-dai. ②二卷 ③存 ④道振(安永二—文政七 A.

宗要論題決擇編

D. 1773—1792)述 ⑤寫本(龍大、一五〇一・二八—三三、研眞) ①(日)Sha-yō-ron-dai-ke-tekaku-hen. ②十卷 ③存 ④利井鮮明(天保六一—大正二 A.D. 1835—1914)述 ⑤(參考) 淨土眞宗全書刊行豫定書目 ⑥明治四三刊 ⑦(龍大、一五〇一三四、研眞) (立大、A四〇・二四) (帝國、一二五・一七八)

宗要論題講述

①(日)Sha-yō-ron-dai-ka-jōsu. ②一卷 ③存 ④是山惠覺著 ⑤大正六刊 ⑥(谷大、宗洋・四一八) (龍大、一五〇一・三五)

宗要論題揀持鈔

①(日)Sha-yō-ron-dai-ken-jō-shū. ②一卷 ③存 ④斷鐙(明治二 A.D. 1869)述 ⑤寫本(龍大、一五〇一・三六)

宗略大要義

①(日)Sha-ryaku-tai-yō-gi. 念佛往生宗略大要義 ②一卷 ③存 ④關通(元祿六一—明和七 A.D. 1693—1770)述 ⑤刊本(谷大、長保・六六)

宗論論

①(日)Sha-ron-ron. (支) Tsung-tsun-tan. 異部宗論論 ②一卷 ③存 ④大正四九・一五 No. 2031. 縮藏四、三三五・四、北980消、南990消、元992消、明北1279席、清1279席、麗983消、天987消、指940消、法969消、至1438席、明南1434漆、N. 1286 ⑤玄奘(仁壽二—麟德元 A.D. 602—664)譯 ⑥唐龍朔三(A.D. 662) ⑦異部宗論論の下を見よ。

宗論論疏

①(日)Sha-ron-ron-shū. (支) Tsung-tsun-tan-shū. 異部宗論論疏、異名所行發 ②(名庫書)著藏所現 ③月年の刊載 ④(書考書書釋註)書太 ⑤説解存内 ⑥代年作著 ⑦著者 ⑧缺存 ⑨數卷 ⑩(名書)名題 ⑪號略字數

部宗論記、異部宗論述記 ②一卷 ③

存、己綴一・八三・三 ④唐窺基貞觀六一

永淳元年 A. D. 632—633) 述 ⑤異部宗論論

述記の下を見よ。 ⑥(参考) 注進法相宗

章疏、東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第

一、奈良朝現在一切經疏目錄 2603

宗論論述記 ①(日)Shū-rin-ron-jiki

(支)Tsung-jun-lun-shu-chū、異部宗論

論述記、異部宗論論記、異部宗論論疏 ②

一卷 ③存、己綴一・八三・三 ④唐窺基

(貞觀六一永淳元年 A. D. 632—633) ⑤異

部宗論論述記の下を見よ。 ⑥(哲)ら・六・

中・八)

宗論論述記轉輪鈔 ①(日)Shū-

rin-ron-jiki-ten-rin-shō、異部宗論論述

記轉輪鈔 ②三卷 ③存 ④良俊述 ⑤天

明八寫 ⑥京大、一・二四・一九)

宗論 ①(日)Shū-ron、③存、輪池叢

書第一 ④(帝國、特別)ち・七)

宗論記 ①(日)Shū-ron-ki、②一卷

③存、大日本佛教全書第九七宗論叢書第一

④觀阿記 ⑤明曆二(A. D. 1656)

⑥淨土宗愛染院の觀阿が淨土宗對諸宗の宗

論を淨土宗の立場から記述した書。内容は

「文治聖淨論。文龜貞徳決。天正邪正決。

慶長虛實決」の三項を掲げて、文治二年の

法然と諸山との問答、文龜元年の淨土宗騰

蓮社と日蓮宗本國寺正覺院、淨土宗妙光院

と日蓮宗賢大房との問答、天正七年の安土

淨嚴院に於ける淨土對日蓮の問答、慶長十

三年の江戸城に於ける淨土宗師山と日蓮宗

常樂院日經との問答の次第及決著を記した

もので、就中後の二項を詳記してゐる。

(馬田行啓)

宗論八講記 ①(日)Shū-ron-hakko

ki、②一卷 ③存 ④增命記 ⑤寫本

(無動寺)

周易抄 ①(日)Shū-eki-shō、③桃源

(永享二—延徳元 A. D. 1430—1439) ⑦

(参考) 日本神林撰述書目

周易禪解 ①(日)Shū-eki-zen-ge、

(支)Chou-i-kan-chieh、②三卷 ③存

④明智旭(萬曆二七—永曆九 A. D. 1599—

1655) ⑤(民國六刊) ⑥(駒大)

周旋雜記 ①(日)Shū-sen-zak-ki、

②一卷 ③存 ④松井寧記 ⑤寫本(龍大、

別置)

周那經 ①(日)Shū-na-kyō(支)Chou-

na-king、(E)M. 104 Samagama S.

③存、中阿含經第五二(大正、一・七五二

No. 26, 196)

周那問見經 ①(日)Shū-na-mon-

ken-gyō(支)Chou-na-wen-chien-ching、

(E)M. 8, Sulekha S. ③存、中阿含經第

二六(大正、一・五七二 No. 26, 91)

秋波集 ①(日)Shū-ha-shū(支)Chū-

po-chi、②一卷 ③存 ④朝鮮慣拭編

⑤大正二五寫 ⑥(駒大)

拾異類編 ①(日)Shū-i-ri-ten、説

法事林傳 ②三卷 ③存 ④(龍大、二〇九

九・一七三)

拾遺雲門即道禪師語錄 ①(日)

Shū-i-mon-soku-dōzen-jō-roku、

②一卷 ③存 ④即道語、太樹編 ⑤天明

元刊 ①(龍大、研佛)(京大、日大未・五三

一)

拾遺御文 ①(日)Shū-i-ō-uni、蓮如

上人拾遺御文、御文拾遺 ②一卷 ③存、

蓮如上人全書 ④蓮如(應永二—明應八

A. D. 1415—1490)都路光千代編

⑤愛知縣人郡路光千代の編で、皆な實如上

人御證判の本に依れりといふ。明治十四年

同村の岡本權三郎初篇として二十三通を刊

行した。特に拾遺と題したのは帖外御文の

後を繼がうとしたのである。

⑥明治九寫(谷大、宗大・三〇八八)明治一四

刊(谷大、宗大・一〇〇〇)(龍大、研眞)(帝

國、一三三・一一七) (安井廣度)

拾遺往生傳 ①(日)Shū-i-ō-jō-ten、

②三卷 ③存、大日本佛教全書第一〇七、

續淨土宗全書第六、續詳書類從第八 ④三

善爲康(永承四—保延五 A. D. 1049—1139)

編 ⑤天永二(A. D. 1111)之頃

⑥著者は頗る紀傳學、算數學などに堪能で

あつたが、平素深く觀音を信じ、極樂往

生を慕ひ、日常の行事を回向して以て、悉

く彼の土に生ずる爲の行業となされたとい

ふ。本書編纂の由來に就いては、固より彼

の發願に基く所であらうけれども、彼の序

文に依れば、承徳二年(A. D. 1098)八月四

日の曉に夢を見た。其の夢に、己が將に死

なんとしたが、その時に丈六の阿彌陀如來

の來現に會し、正しく決定往生の疑なきを

證明せられ、そして汝の命根が未だ盡きざ

るにより、今は御迎へすることが出来ない

のだと記し、更に康和元年(A. D. 1090)九

月十三日、四天寺に參詣し、百萬遍の念佛

修行を行ずるに至つて、益々決定の信心を

固めたるを述し、されば今、大江匡房の續

本朝往生傳に接いで、豫て從來の往生人

中、古今遺漏の望を記して往生人の結縁、勸

進の爲に本書を述作したものであることを

記してゐる。従つて本書成立の年代は著者

の五十代已後、傳中に出づる新しい年號天

永二年(A. D. 1111)、即ち六十三歳頃まで

に書き集めて上梓したものであらう。尙其

の後、著者は、後拾遺往生傳三卷(別項解説

参照)をも編著したのである。勿論之は鎌

倉以前に於ける淨土教研究の根本史料の一

である。便宜上目次三卷を次に列舉しや

う。

〔卷一〕 善仲。善算。開成。最澄。安

慧。壹演。定昭。陽生。法壽。仙命。教

懷。維範。清海。覺念。以圓。長慶。源

算。蓮待。安助。清仁。經運。寂禪。利

慶。明實。境妙。仁慶。廣清。廣日。淨

尊。道乘の三十人。

〔卷中〕 淨藏。講仙。平願。賢貳。好

延。尋寂。藥延。乘蓮。寂入。源因。樂

緣。良相。寂源。雅通。經隆。永清。敦

末。爲恒。學入。親元。戒寂。時武。鹿

菅太。重武。尼釋妙。尼妙意。尼妙法。義

實。守輔の二十九人。

〔卷下〕 相應。峰延。護命。永快。順

源。正範。賴暹。經實室家。道昭。眞綱。

眞能。時範。延救。平圓。長明。尊忍。歡

子。定秀。成務。永親。善法。聖命。圓

空。尼安樂の二十五人。

⑦(参考) 浄土眞宗教典志第三 ⑧元祿一  
刊(正大、一〇三六・一九)(龍大、二九六  
五・四三)明治一四刊(龍大、二九六五・二  
五)〇明治一五刊(正大、一〇三六・四)

### 拾遺苦心誨諭章

①(日)Shōtoku-  
shin-kwan-yu-shū. ②一卷 ③存 ④寫本  
(谷大、長保・九五)

### 拾遺黑谷語燈錄

①(日)Shōtoku-  
ro-dani-go-to-rioku. 拾遺黒谷上人語燈錄  
三卷 ③存、大正八三・三九No. 2612、  
浄土宗全書第九 ④源空(長承二—建曆二  
A. D. 1133—1312)述、了惠(寛元元—元徳  
二A. D. 1243—1330) ⑤漢語燈錄、和語燈  
録の下参照。

### 拾遺漢語燈錄

①(日)Shōtoku-  
ro-to-rioku. ②一卷 ③存、黒谷上人語燈  
録(大正八三・三九No. 2611)之内、浄土宗  
全書第九 ④源空(長承二—建曆二 A. D.  
1133—1312)述、了惠(寛元元—元徳二 A.  
D. 1243—1330)集 ⑤漢語燈録の下参照。

### 拾遺古德傳

①(日)Shōtoku-toku-  
den. ②九卷 ③存、眞宗假名聖教第四、  
眞宗法要第二六一—二七、眞宗聖典全書和文  
部 ④覺如(文永七—觀應二 A. D. 1270—  
1351)撰 ⑤正安三(A. D. 1301)十一月十  
九日—十二月五日

⑥源空上人の繪詞傳なり。之より先、聖覺  
の十六門記、信瑞の一巻傳、耽空の本朝祖  
師傳記繪詞等、世に行はれしゆへ、此等の  
書に對して『拾遺』の語を冠せしならん。

凡そ七十二段あり、詞書のみを抄出せるも  
の世に行はれ、元祿五年の刊行本(五册)あ  
り。又眞宗法要卷二十六、二十七に收む。  
眞宗教典志卷一に依るに坊刻本は卷四小經  
釋より、耳四郎縁に至る、三十二紙を脱せ  
しが、眞宗法要校刻の時、明覺寺本を以て  
補ひたりとあり。

### 拾遺古德傳繪詞

①(日)Shōtoku-  
toku-den-e-ishi. ②九卷 ③存、眞宗聖  
教大全卷上、眞宗法要第四 ④覺如(文永  
七—觀應二 A. D. 1270—1351)撰

### 拾遺古德傳遺事

①(日)Shōtoku-  
toku-den-tsuji. ②一卷 ③存 ④大正六寫  
⑤(谷大、宗大・一二五三)

⑥源空上人の繪詞傳なり。遺德法輪集卷六  
に「常陸國那珂郡松原上宮寺寶物、拾遺古  
德傳、この傳は九卷あり、繪は土佐法眼の  
筆にて、文は覺如上人の御筆なり、水戸黃  
門公(光圀)より御所望なされ、上げければ  
褒美として山を拜領せられたり、後に古徳  
傳は、黃門公より菩提所の浄土寺へ寄進し  
給(り)とあり。今尙ほ國內瓜連村常福寺  
(浄土宗)に傳來し、國寶に加へらる。又二  
十四卷記卷六には「常陸國鹿島郡鳥栖村無  
量壽寺、拾遺古德傳巻物、覺如上人御製  
作、畫、土佐將監光業、詞書世尊寺行俊  
卿」とあり。法輪集には之を「法然上人繪  
傳、この繪は土佐將監の筆にて、わき書は

世尊寺行俊の筆なり」とせり。此の繪卷は  
第一、第九兩卷の内の一部を存し、就中第  
九卷の後半部を最も多量に存せり。これ瓜  
連常福寺に藏するもの、一部なりや、又別  
本なりや明かならず。

### 拾遺古德傳繪詞略讀

①(日)Shōtoku-  
toku-den-e-ishi-ryakudoku. ②三卷  
③存、眞宗大系第二六 ④惠證  
⑤本書は拾遺古德傳の講録中の内、最も細  
密に研究されたものであつて、その代表的註  
釋として重んぜられて居る。著者惠證師は  
三河豊橋市眞宗大谷派正琳寺の人と傳へら  
れて居る。然し乍ら本書の文中「湖東釋惠  
證師述、惠聽校」とあるより見れば、近江  
の人であるやうに思はれる。かの大谷派の  
講師理綱惠琳師の門人にして、若狭小濱  
の證明寺に住した慶海師は、その一名を惠  
證と稱して居つた。しかも本書の述作年時  
が、慶海師の時代とほぼ同時に屬するより  
見れば、本書の作者を慶海師となすことに  
於て、容易に首肯されるであらう。

本書述作の年時は之を缺くも、巻尾に  
「于時、天明八戊申應鐘上浣七日功畢」と  
あり、また延享三年奥書ある出口光善寺の  
元祖繪傳の文を引用する邊より、寛延、寶  
曆、明和頃に製作されたものなることが  
想像せられる。

①(名古屋淨通寺藏) 拾遺語燈錄 ①(日)Shōtoku-go-to-ri-  
kyō. ②三卷 ③存、  
三、拾遺黒谷上人語燈錄

大正八三・三九No. 2612、浄土宗全書第九  
④源空(長承二—建曆二 A. D. 1133—1212)  
述、了惠(寛元元—元徳二 A. D. 1243—  
1330)集録 ⑦(参考) 浄土眞宗教典志第  
一  
拾遺雜集 ①(日)Shōtoku-zasshi. ②  
一卷 ③存、弘法大師全集第一〇 ④長谷  
寶秀編 ⑤明治四三(A. D. 1910)

⑥弘法大師全集編纂に方り、弘法大師(空  
海)作の短篇にして、遍照發揮性靈集及び高  
野雜筆等に漏れたるものを、經國集、弘法  
大師年譜、弘法大師弟子譜、元亨釋書等より  
摘出して編次したものである。その目次。

在唐日示、劍南惟上、離合詩、南山中新羅道  
者見過、過三金心寺、留別青龍寺義操閑  
梨、在唐觀、觀紀法和尙小山、現果詩、過因  
詩、秋山望、雲雨、以、瑤比、心、感、物、傷、  
渤海王大使孝廉中途物故、鏡詩、天長七年  
三月於三六甲山、以、櫻木、刻造如意輪尊像  
讚、天長八年十月十八日於三六甲山、慶  
大殿、偈、同如意尼答偈、戒牒文、高雄灌  
頂記、興福寺南圓堂銅燈臺銘、般若讀經呪  
願、濟恩寺願文、講仁王經、願文、建立  
金剛峰寺、最初勸、請鎮守、啓白文、請、東寺  
每年安居講、守護經、表、東寺講堂圖帳、奉  
造、東寺塔、材木曳運勸進表、答、傳教大師、  
書、答、某書、答、止觀座主書、高貴寺塔  
婆銘文、金節子并緣起六相圖藏義後批、東  
寺大札銘、已上 (吉祥眞雄)

拾遺三寶感應傳 ①(日)Shōtoku-san-  
po-kangen-den. ②十卷 ③存 ④玄光  
(寛永七—元祿一一 A. D. 1630—1698)撰

名所行發 ⑩(名庫書)者藏所現 ⑪月年の刊載 ⑫(書考參書釋註)書末 ⑬説解内容 ⑭代年作者 ⑮著者 ⑯缺存 ⑰數卷 ⑱(名書)名題 ⑲號略字數

①元祿一〇刊(龍大、二〇九九・三二)(京大、一・二一・四一)(高大、寄・一・二一)(哲、あ・二・右一九)貞享三刊(谷大、餘大・一七〇七)(龍大、研史)(正大、一〇三五・四七)

**拾遺性靈集** ①(日)Shū-i-shō-ryō-i-shū. ②一帖 ③存 ④元和五寫 ⑤(寶壽院)

**拾遺專念往生傳** ①(日)Shū-i-sen-nen-ō-jō-den. ②二卷 ③存 ④公阿(文政四—明治一)A. D. 1821—1879撰

⑤明治二刊 ⑥(谷大、宗大・一一〇一)(正大、一〇三六・七二)

**拾遺和語燈錄** ①(日)Shū-i-wario-ji-to-ku. ②二卷 ③存、拾遺黒谷語燈錄(大正八三・三九No. 2612)之内、淨土宗全書第九 ④源空(長承二—建曆二)A. D. 1133—1212述、了惠(寛元元—元徳二)A. D. 1143—1330編 ⑤和語燈録S下参照

⑥正徳五刊(正大、一五四・二三三)大正六刊(正大、一五四・二三三—二二三三)

**拾芥抄** ①(日)Shū-kai-shō. ②三册 ③存 ④刊本(高大、寄・一・二四)

**拾玉集** ①(日)Shū-gyoku-shū. ②一巻 ③存 ④慈圓(久壽二—嘉祿元)A. D. 1133—1223詠 ⑤[参考] 大日本佛教全書續刊豫定書目

**拾玉篇** ①(日)Shū-gyoku-hen. ②一巻 ③存 ④寫本(龍大)

**拾言記** ①(日)Shū-gon-ki. ②三巻 或四巻 ③存 ④元祿三刊(正大、一三〇・三四)元祿四刊(谷大、餘大・二四四—一)立大、A・二・四五二)

**拾碎難見記** ①(日)Shū-sai-nan-ken-ki. ②三巻 ③存 ④刊本(谷大、宗大・二六三三)

**拾珠鈔** ①(日)Shū-jū-shō. ②三巻 ③存 ④寫本(龍大、二九九一・四一五)

**拾塵記** ①(日)Shū-jin-ki. ②一巻 ③存、戊午叢書第三、蓮如上人一期記付録

④實悟明應元—天正一一)A. D. 1499—1583) ⑤主に蓮如上人の言行を録す。

**拾塵抄** ①(日)Shū-jin-shō. ②十七册 ③存 ④日詮撰 ⑤寫本(立大、D〇〇・一四)

**拾穗集** ①(日)Shū-sui-shū. ②三巻 ③存 ④明曆二刊(龍大)(哲、こ・四・左・二八)正保三刊(谷大、餘大・二五一八)(京大、一・二六・一〇)

**拾毘尼儀鈔科文** ①(日)Shū-hi-ni-ki-shō-ka-mon. (支)Shū-hi-ni-ki-shō-ka-mon. ②一巻 ③存 ④宋元照(慶曆八—政和六)A. D. 1048—1116撰

⑤寫本(京大、藏・四・一一)

**拾菩薩抄** ①(日)Shū-to-sa-shō. ②六巻 ③存 ④[参考] 眞言宗全書刊行豫定目録

**拾要意** ①(日)Shū-yō-i. ②一巻 ③存 ④理智院僧正述 ⑤寫本(京大、一・二六・四一)

**拾要記** ①(日)Shū-yō-ki. ②七巻 ④凝然(仁治元—元亨元)A. D. 1249—1321)作 ⑤[参考] 淨土眞宗教典志第三

**拾要集** ①(日)Shū-yō-shū. ②一巻 ③存 ④寶曆七寫(谷大、餘大・二四〇九)

(立大、A・二・四三一)

**拾葉抄** ①(日)Shū-yō-shō. ②一巻 ③存 ④高尊作 ⑤正保五刊 ⑥(正大、一四二・一一六—一一八)(京專)(立大、A・二・四三一)京大、日大未・八二六)

**拾葉說法** ①(日)Shū-yō-seppō. ②六册 ③存 ④南溪述 ⑤寛保二刊 ⑥(京大、一・二六・一五)

**袖中鈔** ①(日)Shū-chū-shō. 袖中寶 ②一巻 ③存、異義集了詳稿本(第一五册、蓮如上人小部集、眞宗聖教大全附録

④初めに世の無常を述べて、雨ニ旅ダツ人ハナケレドモ義笠ハモツコトナリ」云々と信心の要を注意し、「コノ文ヲミン人ハ袖中ノモテアソビトオモヒ」云々と題意を示し、それから八番の問答を以て宗義を示してゐる。その中、前の六番は、自力ノ人ハミヅカラ道ヲタツネモトノ法性ニカハラントス、他力ノ人ハ彌陀ノ願行ニミチビカレテモトノ法性ニカヘル」といふ立場から、主として無明の根源に就て問答し、後の二番は正しく信心往生の旨を述べてゐる。然るに、全體の筆格蓮師には似ず、特に口稱慕や意業慕に對して佛體即行から法體を慕らんとするものゝ如く、末尾に「彌陀ヲトナフルハワガ名ヲナフルトコロナリ」といつて古歌を引くなどは明に異門の安心である。奥書に斯書者蓮如上人北越吉時御逗留時御選述云々といふも元より偽である。而して大體蓮師の化風を背景として論成してゐるから、蓮師以後の異義者の作と考へられる。又、袖中寶とも名けらる。

⑦[参考] 淨土眞宗教典志第一、淨土眞宗聖教目録

⑧寫本(谷大宗大・三一二三)(安井廣度)

**袖中寶** ①(日)Shū-chū-hō. 袖中鈔 ②一巻 ③存、異義集了詳稿本(第一五、蓮如上人小部集、眞宗聖教大全附録、眞宗假名寶典卷中 ⑦[参考] 淨土眞宗教典志第二)

**袖珍勸考** ①(日)Shū-chin-kwan-ko. ②一巻 ③存 ④義圭(寛政一一)A. D. 1799)著 ⑤明和九刊 ⑥(京大、一・二六・三九)

**習學護摩抄** ①(日)Shū-gaku-go-ji-shū. ②一巻 ③存 ④陽實記 ⑤[参考] 本朝古祖撰述密部書目 ⑥寫本(南溪藏)

**習合印信拾八帖目錄** ①(日)Shū-gō-in-jin-jū-hachi-jō-moku-roku. ②一帖 ③存 ④徳川初期寫 ⑤(寶善提院)

**習合神道伊勢流印信** ①(日)Shū-gō-shin-dō-i-se-ryū-in-jin. ②一册 ③存 ④元和元寫 ⑤(寶善提院)

**習合神道印信拔書** ①(日)Shū-gō-shin-dō-in-jin-nuki-eruki. ②一册 ③存 ④元和五寫 ⑤(寶善提院)

**習練五十題** ①(日)Shū-ren-go-jū-dai. ②一巻 ③存 ④堀江慶了(一明治二九)A. D. 1896) ⑤寫本(谷大)

**執行代聞書** ①(日)Shū-gyō-dai-ken-shū. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶總院)

**執金剛阿利沙記** ①(日)Shū-kōn-

拾、袖、習、執

Forerunner. ③存 ④道空(寛文六一寶曆元 A. D. 1666—1751)記 ⑤寫本(谷大、餘大・一九五二)

執持鈔

①(日)Shin-shin. ②一卷 ③存、大正八三・七三五 No. 2692、眞宗法要第六、眞宗假名聖教新撰眞宗聖典之内、假名聖教端坊本、假名聖教八八部之内、眞宗聖教大全卷上、眞宗聖典宗義傳統編 ④覺如(文永七—觀應二 A. D. 1270—1351)述

⑤本願寺第三世覺如上人、學内外に通じ、而も一家の安心に精し。其の著書十数部ある中、本鈔は特に眞宗の安心を略釋せり。後醍醐天皇の嘉暦元年九月、上人五十七歳、飛彈國願智房永承の需に應じて著せるものである。その内容五章ある中、前の四章は本願寺聖人仰云と標して、その口傳せる宗

- 執持 第一章 明不期臨終來迎義
- 第二章 明捨自力歸他力相持
- 第三章 解三決善惡二業問題
- 第四章 示光號因緣他力義
- 第五章 開陳自己領解述成宗義

斯く本鈔一部之を要するに、自力を捨て、他力に歸し、名號を執持して疑はざれば、往生の業因成辦すと示すにあり。これ即ち覺如が其一代に高調せる謂ゆる三代傳持の法門にして、この他力安心平生業成の義たるや、第十八願成就の文に淵源し、名號を聞いて信ずる一念に、臨終を待たずして往生の業事全く成辦することを顯すにあり。而して之を執持と題せるは、小經に執持名號と説き、觀經に持是語者即是持無量壽佛名とあつて、名號の謂れを領受して遷り變

祖親鸞の教語を掲げ、後の一章は、私にいはくと標して、前四章の祖師の教化に對し上人自ら領解せられた心境を開陳し宗義の骨目を述成せられてゐる。而して前四章の中第一章は來迎不來迎の義を明かにし、眞宗に於ける平生業成の立場から臨終まつことなく來迎たのむことなしと、以て他流の臨終來迎業成の義を簡び、第二章は宗祖が其師法然上人の教に絕對信願せる態度を示して、これ自力をすて、他力に歸する相なりと斷じ、第三章は善惡の二業ともに往生の助け障りとならず、偏に大願業力に由ることを明かにし、第四章には光明名號の因縁と信心獲得とについて、他力廻向の内容を顯彰せられてゐる。されば内容五章の組織を表示すれば

- 平生業成義
- 祖語一所成
- 他力安心義
- 私釋一能成

ることなく、一度得たれば永く持ちて忘失せず、其人の内面に信仰の純粹に持續せられるをいふ。即ち本鈔第五章に、名號を正定業となづくることは、佛の不思議力をたもてば往生の業まさしくくだまるなり……我すでに本願の名號を持念す、往生の業すでに成辦することをよるこぶべし、かるがゆへに臨終に再び名號を稱へずとも往生をとぐべきこと勿論なりとあるがこの執持といへる語の趣旨である。さればその辭世の歌にも「南無阿彌陀佛力ならぬのりぞなき、

たもつこころもわれとおこらず」とあつて、執持といふ持念とさへるもの、即ち覺如にあつては其の信仰の特質を表明せる標語であつた。されば本鈔は簡短な小冊子ではあるが、覺如の著述中特に純粹の他力安心を表現せるものとして重要視せられる。

⑥參考 淨土眞宗教典志第一、淨土眞宗聖教目錄、眞宗假名聖教目錄 ⑦寫本(龍大別置、研眞) (大須賀秀道)

執持鈔

①(日)Shin-shin. 意譯執持鈔 ②一卷 ③存 ④梅原眞隆譯 ⑤大正一三刊 ⑥(谷大、宗大・六八二)

⑦執持鈔 ①(日)Shin-shin. 新案説教 ②一卷 ③存 ④藤谷還出述 ⑤明治四四刊 ⑥(谷大、宗洋・二二一)

⑧執持鈔記 ①(日)Shin-shin. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一四一・五)

⑨執持鈔癸未錄 ①(日)Shin-shin. I-mi-toku. ②二卷 ③存 ④渡邊法瑞(文政一〇—明治三七 A. D. 1827—1924)述 ⑤寫本(谷大、宗大・一七六六)

⑩執持鈔聞書 ①(日)Shin-shin. Shin-shin. ②執持鈔丙子錄、執持鈔講記 ③二卷 ④存、眞宗大系第二五 ⑤法海(明和五—天保五 A. D. 1768—1834)述 ⑥文化一三(A. D. 1816) ⑦寫本(谷大、宗大・九二二)

⑪執持鈔講記 ①(日)Shin-shin. Shin-shin. ②執持鈔丙子錄、執持鈔聞書 ③三卷 ④存、眞宗大系第二五 ⑤法海(明和五—天保五 A. D. 1768—1834)述 ⑥寫本(龍大、研眞)

⑫執持鈔講義 ①(日)Shin-shin. Shin-shin. ②一卷 ③存 ④宣明(寛延二—文政四 A. D. 1749—1821)述 ⑤文化二二(A. D. 1815) ⑥寫本(谷大、宗大・九二二)

⑬執持鈔講義 ①(日)Shin-shin. Shin-shin. ②一卷 ③存、眞宗大系第二四 ④靈暉(安永四—嘉永四 A. D. 1775—1851)述 ⑤天保七(A. D. 1836) ⑥寫本(谷大、宗大・一八五七)

⑭執持鈔講義 ①(日)Shin-shin. Shin-shin. ②一卷 ③存 ④宜成(安永六—文久元 A. D. 1777—1861)述 ⑤寫本(谷大、宗大・一八二二、一八四六)

⑮執持鈔講義 ①(日)Shin-shin. Shin-shin. ②一卷 ③存 ④環定(—明治二 A. D. 1760)述 ⑤文久元寫 ⑥(谷大、宗大・三八七六)

⑯執持鈔講義 ①(日)Shin-shin. Shin-shin. ②一卷 ③存 ④日暮龍城述 ⑤明治三九(A. D. 1906) ⑥寫本(谷大、宗大・一一七)

⑰執持鈔講義 ①(日)Shin-shin. Shin-shin. ②執持鈔講義 ③二卷 ④存 ⑤池原雅壽(嘉永三—大正一三 A. D. 1850—1924)述 ⑥明治四一(A. D. 1908) ⑦寫本(谷大、宗洋・九四)

⑱執持鈔講說 ①(日)Shin-shin. Shin-shin. ②一卷 ③存 ④義導(文化二—明治一四 A. D. 1805—1881)述 ⑤慶應二(A. D. 1806) ⑥寫本(谷大、宗大・一八二六)

⑲執持鈔講錄 ①(日)Shin-shin. Shin-shin. ②一卷 ③存 ④池原

たもつこころもわれとおこらず」とあつて、執持といふ持念とさへるもの、即ち覺如にあつては其の信仰の特質を表明せる標語であつた。されば本鈔は簡短な小冊子ではあるが、覺如の著述中特に純粹の他力安心を表現せるものとして重要視せられる。

②一卷 ③存 ④宣明(寛延二—文政四 A. D. 1749—1821)述 ⑤文化二二(A. D. 1815) ⑥寫本(谷大、宗大・九二二)

③執持鈔講義 ①(日)Shin-shin. Shin-shin. ②一卷 ③存、眞宗大系第二四 ④靈暉(安永四—嘉永四 A. D. 1775—1851)述 ⑤天保七(A. D. 1836) ⑥寫本(谷大、宗大・一八五七)

④執持鈔講義 ①(日)Shin-shin. Shin-shin. ②一卷 ③存 ④宜成(安永六—文久元 A. D. 1777—1861)述 ⑤寫本(谷大、宗大・一八二二、一八四六)

⑤執持鈔講義 ①(日)Shin-shin. Shin-shin. ②一卷 ③存 ④環定(—明治二 A. D. 1760)述 ⑤文久元寫 ⑥(谷大、宗大・三八七六)

⑥執持鈔講義 ①(日)Shin-shin. Shin-shin. ②一卷 ③存 ④日暮龍城述 ⑤明治三九(A. D. 1906) ⑥寫本(谷大、宗大・一一七)

⑦執持鈔講義 ①(日)Shin-shin. Shin-shin. ②執持鈔講義 ③二卷 ④存 ⑤池原雅壽(嘉永三—大正一三 A. D. 1850—1924)述 ⑥明治四一(A. D. 1908) ⑦寫本(谷大、宗洋・九四)

⑧執持鈔講說 ①(日)Shin-shin. Shin-shin. ②一卷 ③存 ④義導(文化二—明治一四 A. D. 1805—1881)述 ⑤慶應二(A. D. 1806) ⑥寫本(谷大、宗大・一八二六)

⑨執持鈔講錄 ①(日)Shin-shin. Shin-shin. ②一卷 ③存 ④池原



雅書(嘉永三—大正一三 A. D. 1850—1924)  
述 ⑤大正六刊 ④(谷大、宗大・二八八〇)

執持鈔講錄 ①(日) Shu-jisho-ko-roku. ②一卷 ③存 ④永井昇道(一明治二 A. D. 1869)述 ⑤寫本(谷大、宗大・二一六八)

執持鈔講話 ①(日) Shu-jisho-ko-wa. ②一卷 ③存 ④利井興隆著 ⑤大正七刊 ⑥(龍大、研眞)

執持鈔探要記 ①(日) Shu-jisho-tan-yo-ki. ②一卷 ③存 ④龍温(寛政一一—明治一八 A. D. 1800—1885)述 ⑤嘉永五(A. D. 1852) ⑥寫本(谷大、宗大・九七一)

執持鈔通津 ①(日) Shu-jisho-tsushin. ②三卷 ③存 ④崇言(一安政五 A. D. 1833)述 ⑤(参考) 眞宗大系刊行豫定書目

執持鈔丙子錄 ①(日) Shu-jisho-heishi-roku. 執持鈔開書、執持鈔講記 ②三卷 ③存、眞宗大系第二五 ④法海(明和五—天保五 A. D. 1768—1834)述

⑤本書は大派易行院法海講師が、覺如上人の執持鈔を講説せられた開記である。文化十三丙子歲朝日、名古屋御坊に於て開筵し、同十六日に至る間、凡二十六會に講徹せしもの。其講辯に五門を分ち、一に覺師一代の著作十二部を擧げて一々に之を解題し、二に興由に緣起と造意とを別ち、三に一部の大意として、名號を執持する時往生の業を成辨するにありと見て其趣旨を詳述し、四に題號を釋し、五に本文に入りて、

執、終

五章の内容を順次に講解せり。而して其所説の平正にして而も想到あるは、師の講解の特色にして、一代の講述、何れも高倉の正軌を開明せられたるも、本録は殊に覺師一代の教學を懇切に論述せられたるのみならず、宗祖の古より蓮師の後に及びて、覺師の一代に強調せられた平生業成の宗義を詳論せられてあるから、眞宗の要義殊に覺師教學の内容を知らんと欲するもの、先づ本書を繕かば、其便益多大なるものがあらう。

執持鈔丙申記 ①(日) Shu-jisho-heishin-ki. 執持鈔講義 ②一卷 ③存、眞宗大系第二四 ④靈唯(安永四—嘉永四 A. D. 1775—1851)述 ⑤天保七(A. D. 1836)

⑥大派開悟院靈唯講師が、天保七丙申歲十二月、覺如上人の執持鈔を講説せられたその聴記である。講辯に四門を分ち、一來意に通別あり、通には報佛恩の爲に、別には願智房の請に應じて、三代傳持の法脈を顯さんが爲なりとし、二大意には、若し義に約すれば、平生業成の義を明すにありとなし、更に文に約して平生業成の義を詳論し、三題號、平生業成を標すと見、四本文に入つて、順次に五章を釋し其趣旨を詳解せり。此に其本文五章に對する科文を出して其所見の大意を示さば、(一)明「平生業成義」(二)舉「機示歸」他力相。(三)明「凡夫託願力入報土」(四)明「光明名號因緣」(五)私釋。にして、師が願成就に依れる眞宗の安心、平生業成の内容を高調せる一代の宗學は、本書の上に遺憾なく開明せ

られてゐる。(大須賀秀道)

執持鈔開記 ①(日) Shu-jisho-kai-ki. ②二卷 ③存 ④宜成(安永六—文久元 A. D. 1777—1861)述 ⑤寫本(龍大、研眞)

執持鈔開記 ①(日) Shu-jisho-mon-ki. ②一卷 ③存 ④智通寺 ⑤寫本(龍大)

執持鈔略述 ①(日) Shu-jisho-ryakusho. ②一卷 ③存 ④吉谷覺壽(天保一三—大正三 A. D. 1832—1914)述 ⑤明治三八刊(谷大、宗小・一六五)(龍大、一一四・一六)明治四一刊(立大、A. D. 1900)

⑥京都西村護法館

執中學々則註解 ①(日) Shu-chu-kaku-kyaku-soku-juhge. ②一卷 ③存 ④藤田一郎述 ⑤刊本(京大、尊・別)

執中學派葬祭式略解 ①(日) Shu-chu-gaku-ha-sai-shiki-ryaku-ge. ②一卷 ③存 ④刊本(京大、尊・別)

執中學派立教大意 ①(日) Shu-chu-gaku-ha-rikkyo-tai-i. ②一卷 ③存 ④藤田一郎述 ⑤明治二〇刊 ⑥(京大、尊・別)

執筆法使筆法 ①(日) Shu-pen-shi-hitsuho. ②一卷 ③存、弘法大師全集第九 ④空海(實龜五—承和二 A. D. 774—833)

執筆法及び使筆法の圖を挿入して簡單なる説明をしたものである。高野大師眞蹟書訣、續弘法大師年譜第八參照。(吉祥眞雄)

終焉印明 ①(日) Shu-en-in-ryo. ②一卷 ③存、弘法大師全集第九 ④空海(實龜五—承和二 A. D. 774—833)

終焉印明 ①(日) Shu-en-in-ryo. ②一卷 ③存、弘法大師全集第九 ④空海(實龜五—承和二 A. D. 774—833)

終焉印明 ①(日) Shu-en-in-ryo. ②一卷 ③存、弘法大師全集第九 ④空海(實龜五—承和二 A. D. 774—833)

終焉印明 ①(日) Shu-en-in-ryo. ②一卷 ③存、弘法大師全集第九 ④空海(實龜五—承和二 A. D. 774—833)

終焉印明 ①(日) Shu-en-in-ryo. ②一卷 ③存、弘法大師全集第九 ④空海(實龜五—承和二 A. D. 774—833)

終送作法 ①(日) Shu-so-sha-ho. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

終南家業 ①(日) Shu-nan-ke-go. (支) Chung-nan-chia-yeh. ②六卷 ③存、正續二・一〇・四一五 ④守一述、行枝輯 ⑤宋嘉定六—淳祐二(A. D. 1213—1242)

守一の南山律宗に關する短篇を、門人行枝が集録したもの。すへて二十篇あり。

〔上卷〕(一)教觀撮要。(二)三觀塵露。(三)答日本佛法師教觀諸問。(卷中)〔四〕重受戒文。(五)戒體正義直言。(六)四諍要論。(七)衣制格言。(八)論三分部。(九)論僧體。(一〇)科釋雜心論出三有對文。(一一)受緣重開。〔下卷〕(三)論心用雙持結制罪。(二)辯二止并八九名義。(四)重釋三事鈔犯篇通塞文。(五)重答三欽師應問問。(六)折除夢庵持犯四難。(七)徵顯定道二戒。(八)略辨正用相經。(九)略議第七非體。(一〇)辨略教結犯。

この中、十篇は製作年時を篇尾に記す。その上限は南宋嘉定六年(A. D. 1213)、下限は淳祐二年(A. D. 1242)である。著者守一は鐵翁といひ、律宗第十九祖と云はれる石鼓法久と同門の如庵了宏の門人である。本書は、律宗に大乘思想を含有することを主張した元照の傾向を延長し、殊に教觀撮要に於ては、南山の弘律は妙觀を本と爲すとまで極言した。之が爲めに第二十祖と言はれる上翁妙蓮は、寶祐二(A. D. 1251)に蓬折直辯を著して本書を攻撃した。撰號

終焉印明 ①(日) Shu-en-in-ryo. ②一卷 ③存、弘法大師全集第九 ④空海(實龜五—承和二 A. D. 774—833)

終焉印明 ①(日) Shu-en-in-ryo. ②一卷 ③存、弘法大師全集第九 ④空海(實龜五—承和二 A. D. 774—833)

終焉印明 ①(日) Shu-en-in-ryo. ②一卷 ③存、弘法大師全集第九 ④空海(實龜五—承和二 A. D. 774—833)

終焉印明 ①(日) Shu-en-in-ryo. ②一卷 ③存、弘法大師全集第九 ④空海(實龜五—承和二 A. D. 774—833)

は目次の題下に「四明鐵翁宗師述、門人行枝編」とある。律宗綱要卷下、律宗瓊鑑章第六、蓬折直辯、蓬折箴參照。

終南横川論題聽記

①(日)Shi-nan-yo-kawa-ron-dai-cho-ki. ②一卷 (大野法道)

終南六字釋聽記

①(日)Shi-nan-roku-ji-shaku-cho-ki. ②一卷 ③存 ④僧亮(文化六一安政六A. D. 1809—1839)述 ⑤寫本(龍大、一五〇二・一〇八)

十惡經

①(日)Ju-aku-kyo. (支)Shih-e-ching. 大方廣華嚴十惡品經、華嚴十惡經 ②一卷 ③存、大正八五・一三五九No. 2875 ④疑偽經 ⑤(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄794 ⑥燬本(大英博物館藏)

十一異義批判

①(日)Ju-ich-i-gi-hi-han. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一七五四)

十一因緣章經

①(日)Ju-ich-i-in-en-sho-kyo. (支)Shi-i-yu-yuan-chang-ching. ②一卷 ③缺 ④後漢代失譯 ⑤(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、三寶紀第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、內典錄第一、武周錄第一、開元錄第一、第一五、貞元錄第一、第二五

十一箇條問答

①(日)Ju-ik-ka-jomon-do. ①淨土真宗教典卷第一に曰く、「和語燈四出之。但別加一條。名曰十二問答」云云。

十一彙題私考

①(日)Ju-ich-i-ken-dai-shi-ko. ②一卷 ③存 ④倉谷智勇著

⑨刊本(谷大)

十一紙灌頂祕部興雅御記

①(日)Ju-ke-shi-kwan-jit-hi-ho-ko-ji-gyo-ki. ②一巻 ③存 ④徳川時代寫 (寶龜院)

十一說講義

①(日)Ju-ke-seisan-ko-ji. ②一卷 ③存 ④明治六寫 ⑤(谷大)

十一說講述

①(日)Ju-ke-seisan-ko-jutsu. ②一卷 ③存 ④明治七寫 ⑤(谷大)

十一說大綱

①(日)Ju-ke-seisan-ko-ka. ②一卷 ③存 ④明治七寫 ⑤(谷大)

十一相思念如來經

①(日)Ju-ke-shi-nen-nyo-rai-kyo. (支)Shih-i-hsia-ni-ssai-nien-ju-rai-ching. ②一卷 ③失譯 ④(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四

十一相思念如來經

①(日)Ju-ke-shi-nen-nyo-rai-kyo. (支)Shih-i-hsia-ni-ssai-nien-ju-rai-ching. (日)A. N. 16. Metā. (梵)Mairihavanā(藏傳)(藏)Byams-pa bsgom-pahi ndo. 十一思念如來經、十一想經 ②一卷 ③存、大正二・八六一No. 138 ④縮尺四、二一四・二、北738思、南753思、元75十思、明北625善、清625善、唐763若、天737思、指700若、法727容、至974攝、明南621緣、Ni. 629 ⑤求那跋陀羅譯 ⑥宋元嘉三二二〇(A. D. 435—443)

⑦この經典は僅かに二十三行の短經であるけれども、全く異なる二經からなり、前經は戒意清淨、威儀具足、諸根不錯、信意不亂、常有勇健意、若更苦樂不以爲憂、意不

妄失、止觀現在前、三昧意無休息、智慧意無量、觀佛無厭足の十一を以て佛を憶念すべきことを説いたものであり、後經は慈無量心を修し慈心解脱を得れば、臥安、覺安、不見惡夢、天護、人愛、非人所敬、不毒、不兵、水火不喪、亦不加刑、身壞分終

生天の十一果報を受けることを説いたものである。前者には同本が見當らないが、後者は A. XI. 16 Metā 増一阿含四九品第十經(第四十七卷、大正二・八〇六上)の同本がある。

⑧日蓮(具應元一弘安五 A. D. 1222—1282) ⑨文永五(A. D. 1268)

⑩日蓮が鎌倉に於て北條時宗以下幕府要路、建長寺道隆以下鎌倉の代表僧侶等十一人に與へた書に「一日御書」と共に龍口法難の近因となつた書である。内容は各書に就て見るべし。(馬田行啓)

⑪一部雜纂 ①(日)Ju-ich-i-huzas-san. ②一卷 ③存 ④僧榮(大保三—大正一一 A. D. 1341—1922)等編 ⑤信心佛性義。一闡提往生義。觀經考。後出阿彌陀佛偈略解。淨土論興起。選擇本願念佛集講錄。選擇十六章大意。聖淨二門義。隱彰顯密義。化土卷專修雜修問答記。來迎和讃略解の十一部を輯む。

⑫寫本(龍大、一〇三・六)

⑬一面 ①(日)Ju-ich-i-men. ②一卷 ③存、大日本佛教教全書第三八阿婆縛抄之内 ④承澄(元久二—弘安五 A. D. 1205—1282)

撰

十一面

①(日)Ju-ich-i-men. 安祥流十一面 ②一帖 ③存 ④享保二二寫 ⑤(寶善提院)(寶龜院)

十一面義疏

①(日)Ju-ich-i-men-gi-sho. (支)Shih-i-mien-i-su. ②一卷 ③(參考) 東域傳燈目錄卷上

十一面義軌

①(日)Ju-ich-i-men-gi. (支)Shih-i-mien-i-kan. 十一面觀自在菩薩心密言念誦儀軌經 ②三卷 ③存、大正二〇・一三九No. 1069 ④唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)譯 ⑤延保四寫 (寶壽院)

十一面經開題

①(日)Ju-ich-i-men-kyo-kai-dai. ②一卷 ③存 ④(參考) 大正新修大藏經續刊豫定書目

十一面經開題

①(日)Ju-ich-i-men-kyo-kai-dai. ②一卷 ③空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)述 ④(參考) 諸宗章疏錄第三

十一面經義疏

①(日)Ju-ich-i-men-gi-sho. (支)Shih-i-mien-ching-i-su. 十一面神呪心經義疏、十一面神呪經義疏、十一面經疏 ②一卷 ③存、大正三九一〇〇四No. 1302 ④續一・三七・二 ⑤唐慧沼(一開元二 A. D. 714)述 ⑥(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2221

⑦寫本(龍大、一〇三・六)

⑧一面 ①(日)Ju-ich-i-men. ②一卷 ③存、大日本佛教教全書第三八阿婆縛抄之内 ④承澄(元久二—弘安五 A. D. 1205—1282)

⑨呪心經義疏、十一面經義疏、十一面神呪經義疏 ②一卷 ③存、大正三九・一〇〇四No. 1302 ④續一・三七・二 ⑤唐慧沼(一開

元久二—弘安五 A. D. 1205—1282)

⑥承澄(元久二—弘安五 A. D. 1205—1282)

元二 A. D. 714) 述 (参考) 注進法相宗章疏、諸宗章疏錄第一 (康和四寫 (寶善提院))

**十一面經疏** (日) Ja-tchi-men-gyō-sho. (支) Shih-i-mien-ching-su. ①一卷

②唐代時述 (參考) 注進法相宗章疏

**十一面經疏** (日) Ja-tchi-men-gyō-sho. (支) Shih-i-mien-ching-su. 十一面疏 ①一卷 ②唐代時述 (參考)

東域傳燈目錄卷上、注進法相宗章疏

**十一面觀音** (日) Ja-tchi-men-kwann-on. ②三卷 ③存、大日本佛教全書第四七卷神鈔之内 (覺禪(康治二)建曆二後 A. D. 1143-1212) 撰

**十一面觀音儀軌經** (日) Ja-tchi-men-kwann-on-gi-ki-kyō. (支) Shih-i-mien-kuan-yin-i-kuai-ching. 十一面儀軌、十一面觀自在菩薩經、十一面觀自在菩薩心密言念誦儀軌經、十一面念誦儀軌經 ③三卷 ④存、大正三〇・一三九 No. 1069、縮印一〇七六一六・九、北 1354 漢、南 1357 井、元 1346 井、明北 1050 止、清 1050 止、應 1312 井、天 1336 井、法 1126 槐、至 821 流、明南 983 卷、Nj. 1055 (唐不空(神龍元)大曆九 A. D. 705-774) 譯

⑤十一面觀自在菩薩心密言念誦儀軌經の下を見よ。

**十一面觀音供次第** (日) Ja-tchi-men-kwann-on-ku-shi-dai. ①一帖 ②存 (德川時代寫 (寶善提院))

**十一面觀音講式** (日) Ja-tchi-men-kwann-on-ko-shiki. ②一卷 ③存

④菅原道真(承和二)延喜三 A. D. 845-903) 撰 (參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

**十一面觀音私記** (日) Ja-tchi-men-kwann-on-shi-ki. ①一卷 ③存

④刊本(京大、日大未・三二七) 尙雄訂

**十一面觀音式** (日) Ja-tchi-men-kwann-on-shiki. ①一軸 ③存 ④足利中期寫 (金剛三昧院)

**十一面觀音陀羅尼經鈔** (日) Ja-tchi-men-kwann-on-da-ra-ni-kyō-sho. 科十一面陀羅尼經鈔、十一面陀羅尼經鈔 ①一卷 ③存 ④亮汰(元和八)延寶八 A. D. 1622-1680) 述 ⑤延寶七刊 (龍大二四一八・六六一八七)

**十一面觀音陀羅尼經圖繪** (日) Ja-tchi-men-kwann-on-da-ra-ni-kyō-zu-e. ②一卷 ③存 ④安政二刊 (谷大、餘大・二六五二)

**十一面觀音表白並中玉加持作法** (日) Ja-tchi-men-kwann-on-hyō-byaku-narabini-cha-gyoku-ka-ji-sa-ho. ①一帖 ③存 ④寶永六寫 (寶善提院)

**十一面觀音法** (日) Ja-tchi-men-kwann-on-hō. 十一面觀音 ②三卷 ③存、大日本佛教全書第四七卷神鈔第三 (覺禪(康治二)建曆二後 A. D. 1143-1212) 撰

(德川時代寫 (寶善提院(寶龜院))

**十一面觀自在念誦次第** (日) Ja-tchi-men-kwan-ji-zai-nen-ji-shi-dai. ①一卷 ③存 ④觀尊(建仁元)正應三 A. D. 1201-1290) 述 ⑤寫本(谷大、餘甲・八

三)

**十一面觀自在菩薩敬禮儀軌** (日) Ja-tchi-men-kwan-ji-zai-to-sok-kyō-rai-en-gi. ②一卷 ③存 ④宗淵記 ⑤寫本(西教寺)

**十一面觀自在菩薩心密言念誦儀軌經** (日) Ja-tchi-men-kwan-ji-zai-to-sok-shim-mitsu-gon-nen-ji-gi-ki-kyō. (支) Shih-i-mien-kuan-i-zai-tai-pu-sa-shin-mi-yen-nien-sung-i-kuai-ching. 十一面儀軌、十一面念誦儀軌經、十一面觀音儀軌、十一面觀自在菩薩經、十一面觀音心密言念誦儀軌經 ③三卷 ④存、大正三〇・一三九 No. 1069、縮印一〇七六一六・九、北 1354 漢、南 1357 井、元 1346 井、明北 1050 止、清 1050 止、應 1312 井、天 1336 井、法 1126 槐、至 821 流、明南 983 卷、Nj. 1055 (唐不空(神龍元)大曆九 A. D. 705-774) 譯

⑤十一面觀自在菩薩の眞言の功德、修行儀軌、成就處及び護摩儀軌を説いたもの。即ち其の内容は、上卷に於ては十一面觀自在菩薩の眞言の威力並に此の眞言が明されてある。若し善男子、善女人、此の眞言を誦持せば、現世に十種勝利、並に四種功德を受くる因縁を説き、次に供養儀則には、即ち自根本、澡浴灌漑淨衣、獻焚香、獻花、獻飲食、護摩、結方隅界、奉送聖還宮等の密言を列し、序で念誦の福利、造像供養法を説き、次に第二儀則に八種の成就悉地法を順説し。中卷の修行儀軌には、本部三摩耶、加持水澡浴(加持水、蓮華部辨事濕囉囉訶印、甘露軍荼利印)、加持土砂(烏芻沙

摩印、潔淨印)、運想掬水印、閻伽印)、軍荼利印、多羅菩薩印、毘俱低菩薩印、四明王印、蓮花印、馬頭明王印)、地界及び曼荼羅界(方隅界印、曼荼羅界印、淨空界印)道場觀、(軍荼利印)、本尊及び聖衆請召(奉請印)、供養獻閻伽、獻座、驚覺、白衣觀音印、牆界印、大界印、五種供養印、讚歎)、本尊觀念(十一面觀自在根本印、念珠印、阿三昧攝備印、三摩耶印、淨灌澀印)の印言を説いてある。是れ初めに道場を淨灑し、自ら護身、辟除し、本尊と渉入し、次に道場を結界莊嚴し、本尊並聖衆を請召し、之に供養物を獻げ、終に又本尊と瓊伽の觀に入る次第である。下卷は成就處に壇法を説き、次の護摩品に息災、增益、降伏、敬愛の四種の護摩法を説いてある。此の中、上卷は、耶合囉多譯並に玄奘譯の十一面觀世音神呪經と其の内容が同一である。(神林隆淨)

**十一面觀世音神呪經** (日) Ja-tchi-men-kwan-ze-on-jin-ji-kyō. (支) Shih-i-mien-kuan-sih-yin-shên-chou-ching. (梵) Avatokitēvarakāśasamuktā-dhītrāṇī. (藏) Hphags-pa spyan-ras-gzigs-dbat-phyug-shul-bcu-gcān-pa shes-bya-bahi-gzans 十一面觀世音呪井功德經、十一面神呪經 ②一卷 ③存、大正二〇・一四九 No. 1070、縮成一二七二一〇・一〇、北 1111 良、南 322 良、元 318 良、明北 323 能、清 323 能、應 316 才、天 318 良、指 383 才、法 304 男、至 566 積、明南 314 改、Nj. 327 (陳代耶舍崛多等譯

十

①十一面觀世音菩薩の神呪の功德を説ける經にして雜部密經に屬す。即ち其の内容は、往昔觀世音菩薩は百蓮華眼頂無障礙功德光明如來の所に於て大持呪仙人中の王と作つて、十一面心呪を得、此の心呪を誦する者が現身に得る所の十種の果報及び四種の果報を擧げ、又曼陀羅香如來の所に於ては優婆塞身となつて、復此の咒を得、其の咒を説く時は、一切諸佛の大慈大悲・大喜大捨・智慧藏法門を得、此の法門力を以て、一切衆生の種々の難を解脱せしめ、又此の咒を誦する者の功德を説き、次に此の經法の次第を擧げ、根本呪、水呪、衣呪、香呪、華呪、油呪、食呪、火呪、結界呪及び行道の咒、造像法、行法の日願を願説し、若し此の法を悉く満足せば四願を得るを説き、四願とは、一には原坐處を離れずして空に騰りて自在無碍なること、二には一切賢聖の中にあること、三には持呪仙人中の王たらんこと、四には現身に觀世音菩薩に隨逐することである、又次に別種の三種の成就法を説いてある。

一面神呪心經(玄奘)がある。  
 ⑦(參考)法經錄第一、歷代三寶紀第十一、續高僧傳第二、開元錄第七 (神林隆淨)  
 十一面觀世音菩薩略緣起  
 ①(日)Ja-ichi-men-kwan-ze-on-ho-satsu-j-yaku-on-gi. ②一卷 ③存 ④圖榮述  
 ⑤刊本(正大、一〇三三・二二)  
 十一面悔過 ①(日)Ja-ichi-men-ke-kwa. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一五三三・二二七)  
 十一面護摩私記 ①(日)Ja-ichi-men-go-ma-shi-ki. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)  
 十一面護摩法 ①(日)Ja-ichi-men-go-ma-ho. ②一册 ③存 ④寫本(寶善提院)  
 十一面薩埵法 ①(日)Ja-ichi-men-sat-ta-ho. ②一帖 ③存 ④蓮體(寛文三享保一A.D.1663-1726) ⑤德川時代寫 ⑥(寶龜院)  
 十一面疏 ①(日)Ja-ichi-men-sho. (支)Shih-i-mien-su. 十一面經疏 ②一卷 ③(參考) 諸宗章疏錄第二  
 十一面鈔 ①(日)Ja-ichi-men-sho. ②一卷 ③(參考) 諸宗章疏錄第三(一五三)述  
 十一面神呪經 ①(日)Ja-ichi-men-jin-ji-kyō. (支)Shih-i-mien-shen-chou-ching. 十一面觀世音神呪經 ②一卷 ③存、大正二〇・一四九 No.1070. 縮成一二、二一〇・一〇・北311良、南222良、元318良、明北323能

清223能、麗310才、天318良、指288才、法304男、至566積、明南347改、N327 ④北周耶舍崛多 ⑤十一面觀世音神呪經の下を見よ。  
 十一面神呪經 ①(日)Ja-ichi-men-jin-ji-kyō. (支)Shih-i-mien-shen-chou-ching. 十一面神呪心經 ②一卷 ③存、大正二〇・一五二 No.1071. 縮餘五、二一〇・一〇・北312良、南323良、元319良、明北224能、清324能、麗311才、天319良、法305男、至567積、明南315改、Nj.328 ④唐玄奘(仁壽二)麟德元 A.D. Nj.328 ⑤唐玄奘(仁壽二)麟德元 A.D.

602-664)譯  
 ①十一面觀自在菩薩の心呪の威力及び之を受持し、讀誦し、書寫し、流布する者の功德を説けるもので、雜部密教に屬す。即ち其の内容は、觀自在菩薩は過去殑伽沙劫の前に百蓮花眼無障礙頂熾盛功德光王如來の所に於て、此の十一面の神呪を受け、もし此の呪を念誦する者は現身に十種勝利及び四種功德勝利を得るを説き、又美音香如來の所に於ても亦此の呪を得、此の呪を誦持する者は諸佛大悲智慧一切菩薩の解脱法を得て、其の威力に依て種種の苦難より救はれ、或は種種の罪を除滅するを叙し。次に此の供養儀式法を願説し、根本呪、水呪、衣呪、燈呪、華香曇呪、獻佛供呪、薪呪、結界呪、自宮呪、造像法、並に行法の日次を述べ、終に八種の成就法を説いてある。  
 概評。本經は十一面觀世音神呪經(耶舍崛多譯)の異譯にして、其の内容略ぼ同一である。又西藏大藏經には法成 chos-grub-zeを重譯シテルケ版並に北京版に入藏せられらる。  
 ⑦(參考)開元錄第八、十一面神呪心經義疏一卷(慧沼)、靖邁の疏、道倫の疏。  
 十一面神呪心經義疏 ①(日)Ja-ichi-men-jin-ji-shin-gyō-gi-sho. (支)Shih-i-mien-shen-chou-shin-ching-ji-shu. 十一面神呪經義疏 ②一卷 ③存、大正三九・一〇〇四 No.1802. 已録一・三七・二 ④唐慧沼(一開元)A.D.714)述

⑪十一面神呪心經 (Ekadasamukharadhi-mantṛa-hṛidya-sūtra) の解釋である。初に經名に就て、十一面、神呪心、經の各の意義を明し、次に六義を以て此の經を釋して居る。六義とは第一に大意を明し、第二に經宗を明し、第三に功能を明し、第四に階位を明し、第五に感應を明し、第六に文義を明し釋するのである。第一の大意を明すとは、觀世音菩薩の化世の大意と方便出世して娑婆を度するの因縁と幾劫の化を爲すやとを説明せるものである。第二の經宗を明すとは、此の經は觀世音菩薩の行法と神呪と徳力とを以て經宗と爲すことを説き、更に之を廣説せるものである。第三の功德を明すとは、觀世音菩薩神呪の功能の非一類、處々異なることを廣説せるものである。第四の階位を明すとは、菩薩の二種の階位を説き、更に觀世音菩薩のそれについて論ぜしものである。第五の感應を明すとは、觀世音菩薩と有情との感應關係について種々の方面より詳に説けるものである。第六の文義を明すとは、古來より經文を釋するに龍樹菩薩及び羅什師の如く文義を釋するのみのものと、天親菩薩及び釋道安師の如く章に分ち段に開いて釋するものとの二種ありとなして、本義疏は兩者の特色をとり、分章・開段には後者のそれにならひ、文義を釋するには前者にならつて經の文義を明すものであるとなして、初に經を三段を大別し、更にこれを細分して説明し、後に一々の文について其の義を述べて居るのである。

本書は六義を以て經を釋するに當つては、往々問答體をかりて其の説を明確にしつゝ、華嚴經、涅槃經、法華經、方廣經、大無量壽經、無量壽經、彌勒本願經、天地本起經、淨土三昧經、不空絹索經、觀世音經、觀世音三昧經、觀音授記經、弘猛海慧經、龍樹菩薩讀文等の諸經文より廣く經文を引用して其の説を立證し、而も且つ其の中に於て觀世音信仰を高揚せんとして居るのである。

⑨寫本(京大、藏・一六〇八)(龍大、二四八・八五)(谷大、餘大・一〇〇九) (大石秀典)

⑩一面尊供 ①(日)Ja-ich-men-san-gu ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶菩提院)

⑪一面尊法 ①(日)Ja-ich-men-san-gu ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶菩提院)

⑫十一面陀羅尼經鈔 ①(日)Ja-ich-men-da-ra-ni-kyō-shō ②十一面觀音陀羅尼經鈔。科十一面陀羅尼經鈔 ③一卷 ④存 ⑤亮汰(元和八)延寶八(A. D. 1622-1680)述 ⑥延寶七刊 ⑦(京大、日大未・七九)(立大、A. 20・八三-八四)(正大、一一六-一一二)

⑬十一面法 ①(日)Ja-ich-men-hō ②存 ③應永二寫 ④(金剛三昧院)(寶龜院)

⑭十一面法字輪觀口訣 ①(日)Ja-ich-men-hō-jūrin-kwan-ku-keisu ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

⑮十因四緣義 ①(日)Jū-in-shi-en-gi

(支)Shi-yin-ssū-yuan-i. ②一卷 ③唐代文備述 ④(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2668

⑯十因四緣五因章 ①(日)Jū-in-shi-en-go-in-shō (支)Shi-yin-ssū-yuan-wu-in-chang. ②一卷 ③唐代文備述 ④(參考) 諸宗章疏錄第一

⑰十因四緣五果章 ①(日)Jū-in-shi-en-go-ka-shō (支)Shi-yin-ssū-yuan-wu-kuo-chang. ②一卷 ③唐代文備述 ④(參考) 東域傳燈目錄卷下、奈良朝現在一切經疏目錄2667

⑱十因章 ①(日)Jū-in-shō (支)Shi-yin-chang. 十因四緣五果章 ②(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2669

⑲十迴忍經 ①(日)Jū-u-wai-kyō (支)Shi-u-wo-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤(參考) 出三藏記第三、法經錄第一、仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第四、第一四、貞元錄第六、第二四

⑳十王經 ①(日)Jū-ō-kyō (支)Shi-wang-ching. 地藏菩薩發心因緣十王經、地藏十王經 ②一卷 ③存(正續二)・二三・四 ④唐代藏川述 ⑤文祿三刊 ⑥(京大、一・二三)卷別(哲、お・八・中・一)・(高大、寄・一・二三)谷大、餘大・四二六四

㉑十王經聞書 ①(日)Jū-ō-kyō-kiiki-shūki. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、二四一九・一)

㉒十王經勸考 ①(日)Jū-ō-kyō-kwan-ko. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、餘大・四三八九)

㉓十王經直談 ①(日)Jū-ō-kyō-jikidan. 地藏十王經注解 ②十三卷 ③存 ④了意(一元祿四 A. D. 1691)述 ⑤折、お・八・左・一三)

㉔十王經鈔 ①(日)Jū-ō-kyō-shō 地藏十王經選註 ②五卷 ③存 ④禪珍述 ⑤刊本(龍大、二四一九・二)(高大、一・二三)

㉕十王經註 ①(日)Jū-ō-kyō-cha. 十卷 ③存 ④叶阿(一元祿八 A. D. 1695)述 ⑤元祿八刊 ⑥(正大、一一七八・一一)

㉖十王裁斷 ①(日)Jū-ō-sai-dan. 一卷 ③存、假名聖教八八部之内 ④傳、存覺(正應三)應安六 A. D. 1290-1273)作 ⑤(參考) 淨土眞宗聖教目錄 ⑥寫本(龍大、研貞)

㉗十王讚嘆修善鈔 ①(日)Jū-ō-san-dan-shū-zen-shō. 十王本迹讚嘆修善抄 ②二卷 ③存 ④隆興(一寶徳元 A. D. 1149)述 ⑤享保元刊 ⑥(谷大、餘大・一九八八)

㉘十王讚嘆修善鈔圖繪 ①(日)Jū-ō-san-dan-shū-zen-shō-zu-e. ②三卷 ③存 ④隆興(一寶徳元 A. D. 1149)作 ⑤刊本(龍大、二〇九九・三三)

㉙十王讚嘆抄 ①(日)Jū-ō-san-dan-shō. ②一卷 ③存 ④日蓮(眞應元)弘安五 A. D. 1222-1282)述 ⑤寫本(立大、A. 〇一・一一-一二)刊本(谷大、餘大・一・二六六)

㉚十王讚歎 ①(日)Jū-ō-san-dan. ②(參考) 淨土眞宗聖教目錄

㉛十王祕決 ①(日)Jū-ō-hi-keisu. ②

名所行發⑩ (名庫書)著處所現⑪ 月年の刊寫⑫ (書考委書釋註)書末⑬ 説解卷内⑭ 代年作者⑮ 著者⑯ 缺存⑰ 數卷⑱ (名書)名題⑲ 號略字數

一卷 ③存 ④澄慮述 ⑤寫本(正教藏) 十王本述讚嘆修善抄 ①(日)H. Hon-jikusen-dan-shu-zen-sho

修善抄 ②二卷 ③存 ④陸奥(寶徳元 A.D.1149)述 ⑤享保元刊 ⑥(谷大、餘大・一九八八)龍大、二〇九九・三四(高、大、寄・一・二三)

十往生阿彌陀佛國經 ①(日)H. Jō-a-mi-ta-buk-koku-kyō (支) Shih-wang-t'eh-t'eh-é-hai-to lo-kuo-ching

十往生經 ②一卷 ③存、己續一・八七・四 ④本經は一名十往生經と稱し、武周刊定録第一五(大正五十五卷・四七四頁中)に初めて出でたる疑偽經にして、明怪等は本經を評して、『古來相傳して皆偽謬なりと云へり。其の文言を觀るに冗雜にして理義滯浮なり。佛説の名を偷むと雖も、終に人談の狀を露はす云云』といつてゐる。智昇は開元録第一八(大正五十五卷・六七八頁・上)は、爲に本經を偽妄亂眞録に編入して、阿彌陀佛覺諸大觀身經一卷と相並べて、本經と前廣後略の差あるのみで、別に異なしといつてゐる。思ふに其の内容を披見する時、阿難が、佛に、阿彌陀佛の觀身の法を説きたまはんことを願ふてゐるのを見れば、二經正しく同一であつたらう。

本經の説相は、序分・正宗分・流通分共に備はり、阿彌陀佛信仰の盛時に於て考察される所の往生思想を鼓吹し、本經を信する時は、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、同じく眞の我が弟子といひ得べく、現身に阿耨多羅三藐三菩提を得ることを強張してゐる。

既にいへる如く、本經は觀身の法とは何ぞやとの阿難問佛の答辭に、夫れ觀身の法とは外の事ではない。東西をも觀せず、南北をも觀せず、四維上下をも觀せず、虚空をも觀せず、外縁をも觀せず、内縁をも觀せず、身色をも觀せず、色聲をも觀せず、是れを正眞觀身の法と爲すのであるとして、大いに佛觀身法を主張してゐる。即ち是の觀身法を除けば十方諸求在々處々に更に別法として解脱を得られぬことをいつてゐるあたり、後の善導の淨土教の主張と大いに異有るを見るではないか。此の點は本經の成立時代に極めて重要な暗示を與ふるものである。

更に本經は其の題名の示すが如く、得西方往生に十段の方法あることを述べてゐる。其の十段とは次のやうなことである。一には觀身正念にして常に歡喜を懷き、飲食衣服を以て佛及び僧に施して阿彌陀佛國に往生すること。二には正念に甘妙良藥を以て、一病比丘及び一切に施して阿彌陀佛國に往生すること。三には正念に一生命を害せず、一切に慈悲して阿彌陀佛國に往生すること。四には正念に師所に從ひ、受戒淨慧も梵行を修し、常に歡喜を懷きて阿彌陀佛國に往生すること。五には正念に父母に孝順し、師長を敬奉し、憍慢心を起さずして阿彌陀佛國に往生すること。六には正念に僧坊に往詣して塔寺を恭敬して法を聞き、一義を解して阿彌陀佛國に往生すること。七には正念に一日一夜の中に八齋戒

を受持し、一をも破らずして阿彌陀佛國に往生すること。八には正念に若し能く齋月齋日中に房舍を遠離して常に善師に詣りて阿彌陀佛國に往生すること。九には正念に常に能く淨戒を持し、禪定を勤修して法を護り惡口せず、若し能く是の如く行じて阿彌陀佛國に往生すること。十には正念に若くは無上道に於て誹謗心を起さず、精進に淨戒を持し、復た無智者に教へ、是の經法を流布して無量の衆生を教化し、是の如く諸人等悉く皆阿彌陀佛國に往生することを得るといつて、正念の意義は自ら觀身して善力を自然に生ぜしめることを、主張してゐる所より、善導以前の諸師の淨土教を彷彿せしめるものがある。後の善導法然の主張する正念の意義と大なる隔りがあるを知ることが出來、こゝでも本經の成立年時を推測することが出來る。

次に本經は、他方佛國の一切の諸菩薩が來集して、一心に聽法せしを説き、會座中の一菩薩山海慧が、佛に請ふて極樂の阿彌陀佛の生身を觀見せんことを説き、極樂の莊嚴相を見届けて、一切衆生の極樂往生を遂ぐることを要請し、本經の受持を記してゐる。又珍らしいことには二十五菩薩の護持と其の菩薩名とが出てゐる。本經は從つて、觀阿彌陀佛色身正念解脫三昧經、度諸有流生死八難有緣衆生經と命名するを得、本經の讀誦と功德とを述き、若し誹謗する者あらば幾多の不幸福を招き、死して地獄に入りて八萬劫中大苦惱を受けねばならぬことをいつてゐるあたり、因果應報が、

支那六朝時代に横行して幾多の因果經が偽作せられた時代の同一產物と見做すべき一つの資料を提供してゐる。

本經は本邦に於ても封建時代大いに讀まれたるものゝ如く刊本あり、寫本あり、續藏に收載せられてゐる刊本の跋文に元祿十一年、寂譽靈哲が、十往生經眞偽決疑を出してゐる。就て見るべし。

⑦(參考) 武周録第一五、開元録第一八、貞元録第二八 ⑧寫本(京大、藏・一カ・一)元祿一一刊(正大、一一五〇・三八―三九)(龍大、二一八・七、研佛) (成田昌信)

十往生經 ①(日)Jō-a-mi-ta-buk-koku-kyō (支) Shih-wang-t'eh-t'eh-é-hai-to lo-kuo-ching

②一卷 ③存、己續一・八七・四 ④(參考) 淨土眞宗教典志第一、淨土依憑經論章疏目錄 ⑤(折、う・二・左・二八)

十恩辨 ①(日)Jō-en-hen 高祖聖人

十恩辨 ②一卷 ③存 ④僧純(寛政三―明治五 A.D.1791―1822)述 ⑤明治一〇刊 ⑥(谷大、宗大・二二七五)(龍大、一〇六・二四)

十箇疑問 ①(日)Jū-ka-gi-mon

一册 ③存 ④寛算 ⑤寛文一三寫 ⑥(高、寄・一・四八)

十箇條 ①(日)Jū-ka-jō ②一帖

③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

十箇條論題辨釋 ①(日)Jū-ka-jō-ron-tai-hen-shaku

②四卷 ③存 ④松原深明(慶應頃 A.D.1865―1867)述 ⑤慶應四刊 ⑥(谷大、宗大・二二七八)

十戒卑下心集 ①(日)Jū-kai-hi-jin-ge

②一帖

shin-shu. 十善集 ③存、惠心僧都全集第  
五 ④源信(天慶五—寛仁元 A. D. 942—  
1017)作

①本書は惠心御作を稱する「十戒卑下」と  
題するものがあつた。これを誰人かが、一、  
衣食住について五観すべき事。二、娯欲を  
對治せんと観すべき事。三、願志を對治せ  
んと観すべき事。四、愚癡を對治せんと観  
すべき事。五、無常を觀すべき事。六、六  
念(念佛、念法、念僧、念戒、念施、念天)  
すべき事。七、發菩提心には三觀(一、厭  
有爲、二、求菩提、三、念衆生)をなす  
べき事。八、名利等を捨すべき事。と八條に  
事書して集録したもの。原本たる「十戒卑  
下」が如何なる組織のものであつたか不明  
であるから本書の配列が原本を單に事書に  
改めたに過ぎないものか否か全く解らな  
い。従つて「十戒」とは何の事か。「卑下」と  
は何を意味したものか不明。本書だけで見  
れば初心行者の用心を八條列ねて決定往生  
し成佛せよ、勸導したことが知られるの  
み。但し文章は感情に訴へ讀者をして懈怠  
安逸に住せしめぬ力強いものがあり、漢文  
體でありながら和文を読むが如き趣きを帶  
びてゐる。眞偽は未判。乍然惠心僧都らし  
い氣持は能く現されて居る。

⑦〔参考〕 淨土依憑經論章疏目錄  
(田島徳音)

十界圓具鈔

①(日) Jik-kai-en-gu-  
sho. ②一卷 ③存 ④大四連 ⑤寫本(龍  
大、二六二・一六二)

十界義

①(日) Jik-kai-gi. ②三卷

③存 ④圓明述 ⑤元祿七刊 ⑥(龍大、二  
六五二・一六四)(京大、藏・一五・一)

十界眞實

①(日) Jik-kai-shin-jitsu.  
②一卷 ③存 ④寫本(正大、一三九・五〇)

十甘露眞言

①(日) Jik-kan-ro-shin-  
gon. ②一卷 ⑦〔参考〕 惠運禪師將來教  
法目錄

十甘露隨聞錄

①(日) Jik-kan-ro-  
zui-mon-roku. ②一冊 ③存 ④寫本(谷  
大)

十諫書

①(日) Jik-kan-sho. (支) Shih-  
chen-shu. ④宋仁岳(淳化三—治平元  
A. D. 992—1064) ⑦〔参考〕 諸宗章疏錄  
第二

十規論

①(日) Jik-ki-ron. (支) Shih-  
kai-ron. 淨慧法眼禪師宗門十規論、宗門  
十規論 ③存、記續二・一五・五 ④唐文益  
法眼(光啓元—顯德五 A. D. 885—935)述  
⑤宗門十規論の下を見よ。

十義戒法論

①(日) Jū-gi-kai-ho.  
ron. ②一冊 ③存 ④明治二九刊 ⑤(高  
大、一・二六)

十義書

①(日) Jū-gi-sho. (支) Shih-  
sho. ④四明十義書 ⑤二卷 ③存、大正  
四六・八三 No. 1935、記續二六・一 ④宋  
知禮(建隆元—天聖六 A. D. 960—1028)述  
⑥四明十義書の下を見よ。⑦〔参考〕 諸宗  
章疏錄第二 ⑧延寶九刊 ⑨(立大、A-1  
二、一六七—一六九)

十義書科

①(日) Jū-gi-sho-ka.  
②(支) Shih-ji-shu-ka. ④四明十義書科 ⑤一卷  
③存、記續二・六・一 ④宋繼忠(大中祥符四

—元豐五 A. D. 1011—1082)撰

十義量

①(日) Jū-gi-ryō. (支) Shih-  
-liang. ②一卷 ③存 ④清洋 ⑤民國  
一四刊 ⑥(龍大、二六二九・一八)(高大、  
一・二〇)(谷大、餘大・四〇三二)

十疑論鼓吹

①(日) Jū-gi-ron-ku-  
shū. 淨土十疑論鼓吹 ②十卷 ③存 ④眞  
阿述 ⑤元祿九刊 ⑥(正大、一五三二・一  
六)(龍大、二六八一・一〇七)

十疑論至寶鈔

①(日) Jū-gi-ron-  
shū-ho-shū. 淨土十疑論至寶鈔 ②三卷  
③存 ④眞峰(—元祿八 A. D. 1695—)述  
⑤元祿八刊 ⑥(正大、一五三二・一三)(谷  
大、宗大・一四九二)(龍大、二六八一・一〇八)

十疑論升量錄

①(日) Jū-gi-ron-  
shū-ryō-roku. 淨土十疑論升量錄 ②一卷  
③存、眞宗全書第六二 ④僧樸(享保四—  
寶曆一 A. D. 1719—1762)作

⑤天台智者大師の作といはるゝ『淨土十疑  
論』の註疏である。十疑論は天台大師の眞  
撰なりや否やに就て古來異義あり、風潭の  
如きは『念佛往生明導』を著して、こは千  
福の懷感禪師が私に之をつくり、名を天台  
に托したるものなりと論じた。升量錄はこ  
の風潭の説に反對し、あくまで之を天台大  
師の眞撰となし、風潭の妄解を一句一句に  
於て辯駁したものである。

十疑論樞鑑

①(日) Jū-gi-ron-  
shū-kan. 淨土十疑論樞鑑 ②一冊 ③存  
④玄心(—貞享二 A. D. 1685—)述 ⑤刊本(哲  
ふ・五・左・一八)(谷大、宗大・一九七)(正大、

一五三二・一九)(龍大、二六八一・一〇九)

十疑論註

①(日) Jū-gi-ron-shū.  
(支) Shih-ji-ron-shū. 淨土十疑論註解 ②  
一卷 ④宋代廣教澄遠述 ⑦〔参考〕 諸宗  
章疏錄第二

十疑論翼註

①(日) Jū-gi-ron-yoku-  
shū. 淨土十疑論翼註 ②二卷 ③存、續  
淨土宗全書第七 ④不必 ⑤淨土十疑論翼  
註の下を見よ。⑥刊本(哲・六・右・一五)  
(正大、一五三二・二四)(龍大、二六八一・  
一一一)

十吉祥經

①(日) Jū-kai-kyō-kyō.  
(支) Shih-chi-hsiang-ching. ②一卷 ③  
存、大正一四・七七 No. 433、縮黃四、正一  
一・七、北10行、南37行、元53行、明北  
44行、清44行、麗53行、天59行、指  
44行、法500景、至46景、明南57行、  
No. 418 ⑤三秦代(A. D. 350—431)失譯

⑥詳には佛說十吉祥經と言ひ、梵に Bṛhad-  
hauṣṭhīa-dassat-sūtraと言ひ、東方世界  
の十如來の名號受持讀誦の功德を説くが故  
に斯く稱するのである。

佛が羅閱祇者園嶺山中に於て大比丘衆・  
菩薩衆に圍繞されたまひて離垢蓋大士に諸  
佛世尊の名號を聞き之を受持讀誦すれば疾  
に正覺を得成就することを説きたまひしも  
のである。其の諸佛世尊として、方莊嚴世  
界の大光耀如來、諦勝諸勝世界の慧燈明如  
來、金剛世界の大雄如來、淨尊住世界の無  
垢塵如來、金光明世界上像幢十蓋王如來、  
大威神世界の威神自在王如來、香薰世界の  
極受上影王如來、寶嚴世界の內寶如來、海

燈明世界の大海如來、十力燈明世界の十力現如來の十如來をあげ、之を供養し、又は其の名號を附て受持讃誦するの功德をのべたものである。單に諸佛を供養し、之が名號受持讃誦の功德をのべたものに過ぎない。本文五百六十八字の短經であつて、八吉祥經、八佛名號經等と一類をなす大乘經典である。

⑦参考) 法經錄第一、武周錄第一、開元錄第四、貞元錄第六 (大石秀典)

⑧十牛訣 ①(日)Ja-gya-keisu. ②一卷 ③存 ④周及殿中(元亨三)應永一六A.D. 1323—1409)述 ⑦[参考] 禪籍目錄

⑨十牛訣 ①(日)Ja-gya-keisu. ③存 ④疑元大慧(寛喜元—正和元 A. D. 1229—1312)述 ⑦[参考] 禪籍目錄

⑩十牛注脚 ①(日)Ja-gya-cha-kyo = ku. 曹洞大事十牛注脚 ②一卷 ③存 ④嘯岩泉虎述 ⑦[参考] 禪籍目錄

⑪十牛圖 ①(日)Ja-gya-zu. (支)Shi-ni-tu. 十牛圖頌 ②一卷 ③存 ④續二・六・五、四部錄、四部錄抄、禪寶寶典 ⑤宋廓庵師遠 ⑥應安二、寛永一〇刊 ⑦(駒大)

⑫十牛圖 ①(日)Ja-gya-zu. ②一卷 ③大慧撰(寛喜元—正和元 A. D. 1229—1312)元 ⑦[参考] 扶桑禪林書目

⑬十牛圖 ①(日)Ja-gya-zu. 冠註十牛圖 ③存、十部錄之内 ④町元春空註 ⑤大正三刊 ⑥(駒大) ⑦京都貝葉書院

⑭十牛圖講話 ①(日)Ja-gya-zu-ko-wa. ②一卷 ③存 ④宗演(—大正八A. D. 1919)述 ⑤大正九刊 ⑥東京光融館

⑮十牛圖次韻 ①(日)Ja-gya-zu-ji. ②十首 ③存、東卓全集之内 ④東卓心越興傳(寛永一六—元祿八A. D. 1639—1695) ⑤天和二(A. D. 1682)

⑥蓮池大師の禪宗十牛圖に、普明禪師が頌をつけた十牛圖(未收・初調・受制・廻首・想忘・獨照・馴伏・無碍・任運・雙泯)がある。心越禪師これを推讃して止まず、乃ち和韻して人に示したのが、この十牛圖次韻である。世に謂ふ十牛圖並にその頌とは異りて、修行の道程を頌出するに於て、一層詳かなるものがある。(山田靈林)

⑦十牛圖頌 ①(日)Ja-gya-zu-ju. (支)Shi-ni-tu-tu-sung. 十牛圖 ②一卷 ③存、正續二・一八・五、四部錄、四部錄抄、禪學寶典 ④宋廓遠撰

⑧本書は、大隨元靜禪師の法嗣にして南岳下十六世、揚岐下五世である鼎州常德府梁山の廓庵師遠禪師が、其の以前、清居禪師(傳未詳)の作られた牧牛圖に依て、十頌を賦して其の深義を提擲し、同道唱和されたものにして傳承されてゐる。十牛とは(一)尋牛。(二)見跡。(三)見牛。(四)得牛。(五)牧牛。(六)騎牛歸家。(七)忘牛存人。(八)人牛俱忘。(九)返本還源。(一〇)入廄垂手を言ひ、牛は自己本來の面目を意味し、其の牛を尋ねるを以て第一門とし、其の牛を尋得して後、下化衆生の爲めに市廛に入つて慈悲救済の佛手を垂れ、修道の本旨を遂ぐるに至る修身證道、心事修練の順序を十牛に喩へて説明したものである。十牛の各題に次いで、其の本旨を提擲する序

語を述べて此れに頌を賦したもので、附するに慶元府天童山の無用淨全禪師の法嗣である杭州靈隱の石鼓希夷禪師の和頌並に南康軍雲居の蓬菴德會禪師の法嗣である萬松壩納の大璉禪師の和頌とを採録したものである。(大久保堅瑞)

⑨十牛圖頌 ①(日)Ja-gya-zu-ju. (支)Shi-ni-tu-tu-sung. ②一卷 ③存、正續二・一八・五 ④明胡文煥撰

⑩本書は、浙江杭州府錢塘の胡文煥(字德甫、號全菴、別號抱琴居士)が、十牛圖に就て參究すること多年、禪に於けるのみならず、儒に於ても庶民に於ても、修心證道す可きものなりとして、十牛圖に附するに苦樂因縁圖を以てして、世に行はしめた旨、胡文煥の撰に成る新刻禪宗十牛圖序に見へて居る。續藏本に收むるものは、胡文煥の序に次いで、普明禪師の未收、初調、受制、廻首、馴伏、無碍、任運、相忘、獨照、雙泯の十牛に關する牧牛圖頌を收め、其の牧牛頌に雲菴の和頌を附し、終りに僊墳國王に答へて示した寶頭盧尊者説の黑白二鼠の譬喩語を採録して頌を賦し、生死事大、無常迅速を教誡し、一心念佛を勧め、十牛圖頌に就いて工夫精進し、修心證道せしめんが爲めに、總括的なる頌、即ち總題を賦して本書を結んで居る。普明の牧牛圖頌は、廓庵師遠の十牛圖頌と並び行はれたが、普明の傳の未詳なりし事は、明萬曆三十七年(A. D. 1609)四月八日雲棲の蓮池大師佛慧株宏禪師の撰になる重梓牧牛圖序に記されて居る通りである。尙ほ雲菴和頌の雲菴が

何人なりやに就ては胡文煥の編纂の様行せしと云ふ實物は未見の故に、詳にし得ないのを遺憾とするものである。(大久保堅瑞)

⑪十牛圖追頌 ①(日)Ja-gya-zu-tsui-ju. (支)Shi-ni-tu-tu-chui-sung. ②一卷 ③存 ④勝峯清幹撰 ⑤寫本(駒大)

⑫十牛圖提唱 ①(日)Ja-gya-zu-tei-sung. ②一卷 ③存 ④尾關本光述、長岡文海編 ⑤大正一四刊 ⑥京都拈華社

⑬十牛圖和頌 ①(日)Ja-gya-zu-wa-ju. (支)Shi-ni-tu-tu-ho-sung. ③存、正續二・一八・五 ④清代如念空(—康熙元 A. D. 1663—)編

⑭本書は、普明禪師の牧牛圖頌に對する明末清初の諸禪師の和頌を蒐録したものである。卷首に、明萬曆三十七年(A. D. 1609)四月八日蓮池大師佛慧株宏禪師の重梓牧牛圖序を收めて普明の傳の未詳なる事に言及し。次で臨濟正宗三十二世饒線道人嚴大參居士の著明寺牧牛圖頌序を收め。跋道人如念空が、清順治十九年(A. D. 1662)嚴大參の普明緣起、舊寺圖相と、諸禪師の和頌とを見て、如念空が清康熙元年(A. D. 1663)七月自ら和頌し、合成一冊として流通する旨の刊行緣起の序を收めたものである。次に、普明の未收、初調、受制、廻首、馴伏、無碍、任運、相忘、獨照、雙泯と題する牧牛圖頌に和した諸禪師の和頌を收めて居る。即ち眞寂の開谷廣印、報恩の天隱圓修、東塔の破山海明、萬如通微、浮石通賢、報恩の玉林通秀、若庵通問、山茨通際、桐月庵

名所行發(名庫書) 名藏所現 ① 月年の刊載 ② (書考參書釋註) 書末 ③ 説解容内 ④ 代年作者 ⑤ 著書 ⑥ 録存 ⑦ 數卷 ⑧ (名書) 名題 ⑨ 號略字數



玄微妙用、一指庵香嶺明海、轉經道人嚴大參(初和頌、再和、三和)、跛道人如念空(有序)、無依道人徐昌治、牧公道人項真本、並に巨徹寂蓮等の禪師居士の和頌で、最後の巨徹の和頌は白牛圖頌と題し、廓庵の十牛圖頌に準じて、失牛、尋牛、見迹、見牛、護牛、騎歸、忘牛、雙泯、入廬と題したもので、何れも其の主旨とする處は、廓庵師遠の十牛圖頌に準ずるものである。

**十禁紀要**

①(日)Jik-kin-ki-yo. ②一卷 ③存 ④岡地義明編 ⑤明治三十六刊

**十九箇條掟**

①(日)Ji-ku-ka-jō-no-jō-ke. ②覺如(文永七)觀應二A.D.1270-1351)作 ③應長元(A.D.1311) ④(參考)淨土真宗聖教目錄

**十九執金剛秘釋**

①(日)Ji-ku-ka-sū-ken-gō-hi-shaku. ②一卷 ③存、興教大師全集、密嚴諸秘釋第三 ④覺鏡(嘉保二)康治二A.D.1095-1143)述

⑤大日經の對告衆たる十九執金剛を、深祕門より見て解釋したものである。その説に依れば阿字の五轉、顯教の住心、真言宗の三部五智を表現したものとするのである。之れを圖示せば、

- 阿字の五轉
- 一、虚空無垢執金剛 頁
  - 二、虚空遊步執金剛 頁
  - 三、虚空生執金剛 頁
  - 四、被雜色衣執金剛 頁
  - 五、善行步執金剛 頁

六、住一切法平等執金剛 不二鐫體  
 七、哀愍無量衆生界執金剛 三種世間の住心  
 八、那羅延力執金剛 二乘の住心  
 九、大那羅延力執金剛 三乘の住心  
 十、妙執金剛 天台宗の住心  
 十一、勝迅執金剛 華嚴宗の住心  
 十二、無垢執金剛 蓮華部  
 十三、双迅執金剛 金剛部  
 十四、如來甲執金剛 佛部  
 十五、如來句生執金剛 大圓鏡智  
 十六、住無戲論執金剛 平等性智  
 十七、如來十力生執金剛 成所作智  
 十八、無垢眼執金剛 妙觀察智  
 十九、金剛手秘密經 法界體性智

②(日)Ji-ku-ka-jō-ke. ③存、大正五四・一二六二No.2138。縮藏一〇・二二五・八。北1048畫、南1054畫、元1060畫、明北1288納、清1288納、麗1052畫、天1046畫、指1003畫、法1030畫、至1496柄、明南1410吹、N.1295 ④唐玄奘(七譯)麟德元A.D.602-664)譯 ⑤勝宗十句義論の下を見よ。⑥刊本(新、六、右・一七)(高大、一・二七)

**十句義論**

①(日)Ji-ku-gi-ron. ②一卷 ③存、大正五四・一二六二No.2138。縮藏一〇・二二五・八。北1048畫、南1054畫、元1060畫、明北1288納、清1288納、麗1052畫、天1046畫、指1003畫、法1030畫、至1496柄、明南1410吹、N.1295 ④唐玄奘(七譯)麟德元A.D.602-664)譯 ⑤勝宗十句義論の下を見よ。⑥刊本(新、六、右・一七)(高大、一・二七)

⑦(日)Ji-ku-gi-ron. ⑧二卷 ⑨寫本(谷大) ⑩存、日本大藏經勝宗十句義論章疏 ⑪五卷 ⑫存、日本大藏經勝宗十句義論章疏 ⑬基辨(享保三)寛政三A.D.1718-1792)述

①(日)Ji-ku-gi-ron. ②二卷 ③存、日本大藏經勝宗十句義論章疏 ④五卷 ⑤存、日本大藏經勝宗十句義論章疏 ⑥快道(寶曆元—文化七 A.D.1751-1810)述

⑦(日)Ji-ku-gi-ron. ⑧二卷 ⑨寫本(谷大) ⑩存、日本大藏經勝宗十句義論章疏 ⑪五卷 ⑫存、日本大藏經勝宗十句義論章疏 ⑬基辨(享保三)寛政三A.D.1718-1792)述

⑭(日)Ji-ku-gi-ron. ⑮二卷 ⑯存、日本大藏經勝宗十句義論章疏 ⑰基辨(享保三)寛政三A.D.1718-1792)述

⑱(日)Ji-ku-gi-ron. ⑲二卷 ⑳存、日本大藏經勝宗十句義論章疏 ㉑基辨(享保三)寛政三A.D.1718-1792)述

㉒(日)Ji-ku-gi-ron. ㉓二卷 ㉔存、日本大藏經勝宗十句義論章疏 ㉕基辨(享保三)寛政三A.D.1718-1792)述

①(日)Ji-ku-gi-ron. ②二卷 ③存、日本大藏經勝宗十句義論章疏 ④五卷 ⑤存、日本大藏經勝宗十句義論章疏 ⑥快道(寶曆元—文化七 A.D.1751-1810)述

⑦(日)Ji-ku-gi-ron. ⑧二卷 ⑨寫本(谷大) ⑩存、日本大藏經勝宗十句義論章疏 ⑪五卷 ⑫存、日本大藏經勝宗十句義論章疏 ⑬基辨(享保三)寛政三A.D.1718-1792)述

⑭(日)Ji-ku-gi-ron. ⑮二卷 ⑯存、日本大藏經勝宗十句義論章疏 ⑰基辨(享保三)寛政三A.D.1718-1792)述

⑱(日)Ji-ku-gi-ron. ⑲二卷 ⑳存、日本大藏經勝宗十句義論章疏 ㉑基辨(享保三)寛政三A.D.1718-1792)述

㉒(日)Ji-ku-gi-ron. ㉓二卷 ㉔存、日本大藏經勝宗十句義論章疏 ㉕基辨(享保三)寛政三A.D.1718-1792)述

一卷 ③存 ④寫本(龍大、一七五・四二)

十句經靈驗記

①(日) Jik-ku-gyo-rei-ken-ki. 十句觀音經靈驗記、延命十句

經靈驗記 ②二卷 ③存 ④足利惠倫撰刻  
⑤明治二八刊 ⑥(京大、一・二五・四)

十句觀音經假名抄

①(日) Jik-ku-kwan-on-gyo-ka-na-sho. ②一卷 ③存

④果禪述 ⑤(參考) 禪籍目錄

十句觀音經集註

①(日) Jik-ku-kwan-on-gyo-shu-chu. ②一卷 ③存

果禪述 ⑤(參考) 禪籍目錄

十句觀音經靈驗記

①(日) Jik-ku-kwan-on-gyo-rei-ken-ki. 延命十句觀音

經靈驗記 ③存、八重葎之内 ④白隱慧鶴  
(貞享二)明和五 A. D. 1685-1768)述 ⑤  
寶曆九(A. D. 1759)

⑥延命十句觀音經靈驗記は、白隱慧鶴禪師  
が、寶曆九年(A. D. 1759)十月二十五日江  
戸湯島(下谷區池之端七軒町)の潜龍山東淵  
寺の寓居中に認めたもので「九州何某侯の  
殿下近侍の左右に贈りし法語とある假名法  
語である。某侯の數代繁榮するは、積善累  
徳の結果であるから陰徳行を精修し、節儉  
を守り、萬民を憐愍し、賦税を軽くし、國  
家を安撫し、博學文才を打捨て、一文不  
知の尼入道の心となり、朝夕に神佛を信仰  
する事が、千萬世衰減なき武運長久子孫繁  
榮の道であると示し、金毘羅秋葉の寶號二  
幅を書送り、更に延命十句觀音經二十枚を  
添へて進貢せしめ、此の經の靈驗の數々を  
記したもので、この經の縁起は、寛文三年  
(A. D. 1663)S頃、靈元天皇の命により、

觀山の靈空律師が書して進献したものと記  
し、此の法語を認めた寶曆九年冬までの例  
語を引用して其の靈驗を力説して居るが、  
白隱和尚の本意は、如上遂一枚擧する所の  
限もなき十句經の靈驗、正眼に看來れば唯  
是世間住相有爲夢幻空華の談論取るに足ら  
ず、茲に一段、真正最妙最玄最第一なる底  
の大靈驗あり。」と喝破して、黙照枯坐の  
禪、二乘小乘の禪、無事禪等に非ざる佛祖  
的傳秘授の一大事義たる正信正修の坐禪を  
提唱し、此の正修の坐禪を實修する時、始  
めて、真正の一大靈驗を得ると言ふにある。  
また邪法の徒も此の延命十句觀音經に依て  
救ひ得ると力説し、此の經を掲げて結ん  
である。經とは「觀世音。南無佛。與佛有  
因。與佛有緣。佛法僧緣。常樂我淨。朝念  
觀世音。暮念。觀世音。念念從心起。念念  
不離心と言ふのである。(大久保堅瑞)

十卷釋義書等

①(日) Jik-kwan-teshaku-ri-gaki. ②一册 ③存

明和五寫 ④(高大、寄一・三四)

十卷書

①(日) Jik-kwan-jo. 十卷章

②十卷 ③存 ④(哲、け、一・中・二八)

十卷書開書

①(日) Jik-kwan-jo-ki-irigaki. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一  
四三・一五六)

十卷書愚草

①(日) Jik-kwan-jo-bu-cho. 十卷草愚草 ②二十七册 ③存 ④類  
瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304)述

⑤寫本(哲、け、二・右・二〇・け、二・中・一)

十卷書玄談

①(日) Jik-kwan-jo-gen-dan. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、研

佛) ⑤(日) Jik-kwan-jo-gen-dan. 十卷書撮義、十卷書撮義鈔 ②十卷  
③存 ④覺眼(寬永二〇—寛保一〇 A. D. 1723—1725)述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第三  
⑥十二册 ⑦存 ⑧覺眼(寬永二〇—享保一〇 A. D. 1643—1725)述 ⑨(哲、け、一・  
中・一六)

十卷書讀曲

①(日) Jik-kwan-jo-yomi-kuse. 十卷疏讀曲、十卷章讀曲 ②  
一册 ③存 ④寫本(哲、あ・八・左・一九)

⑤十卷疏讀曲 ①(日) Jik-kwan-jo-yomi-kuse. 十卷章讀曲、十卷書讀曲 ②  
一卷 ③存 ④寫本(龍大、研佛)

⑥十卷鈔 ①(日) Jik-kwan-jo-cho. 圖像  
鈔、十卷圖像鈔、尊容鈔、惠什鈔 ②十卷  
③存 ④惠什(一保延元 A. D. 1133)撰

⑤諸尊法に關する書、東密の相傳により、  
諸尊の梵號・密號・種子・三形・尊形・印明等  
を説き尊像と曼荼羅を圖示してゐる。然し  
て本書の特色は主として尊像・曼荼羅の圖  
繪にある。東密には古來圖像集の主要なる  
ものとして珍重し、別尊雜記・覺禪鈔・自寶  
口鈔等の如き名著にも本書を引用してゐ  
る。その内容目次を大正藏經本によつて列  
記すれば次の如くである。卷第一に金剛界  
五佛(圖像五葉)胎藏界五佛(圖像五葉)。卷  
第二に一字金輪・大佛頂・佛眼・尊勝佛頂(以  
上各曼荼羅一葉)藥師・善名稱吉祥王如來・  
定光・釋迦(以上各圖像一葉)阿闍・阿彌陀

(曼荼羅一葉)光明眞言。卷第三に仁王經法  
(曼荼羅一葉)壽命經法・六字經法(曼荼羅・  
尊像各一葉)法華經法(曼荼羅一葉)孔雀經  
法(圖像一葉)請雨經法(曼荼羅二葉)寶樓閣  
經法(曼荼羅一葉)菩提場陀羅尼經法(曼荼  
羅一葉)。卷第四に五大虚空像(圖像一葉)  
金剛薩埵五秘密法(曼荼羅一葉)普賢延命  
(圖像二葉)八字文殊(曼荼羅二葉)愛染王・  
金剛王・大勝金剛・大隨求・轉法輪(以上各圖  
像一葉)。卷第五に彌勒(圖像二葉)普賢・五  
字文殊・一髻文殊・六字文殊・持世・延命・虛  
空藏・般若・藥王(以上各圖像一葉)地藏(圖  
像二葉)龍樹(圖像一葉)馬鳴(曼荼羅一葉)。  
卷第六に聖觀音・千手(以上各圖像一葉)馬  
頭・十一面(以上圖像各二葉)七俱胝佛母(圖  
像一葉)如意輪(圖像五葉)曼荼羅二葉)不空  
羅索(圖像二葉)。卷第七に葉衣・白衣・多  
羅・千臂・大勢至・香王・青頸・阿摩醜(以上各  
圖像一葉)。卷第八に不動(圖像五葉)降三  
世・軍荼利・大威徳・金剛夜叉・無明勝・大輪  
步擲(以上各圖像一葉)烏瑟澁摩(圖像四葉)  
金剛童子・大元(各圖像二葉)。卷第九に歡  
喜天(圖像二葉)金色迦那鉢底法・歡喜及身  
法(各圖像一葉)多聞天・吉祥天・大白在天・  
伎藝天・那羅延天・鳩摩羅天(吉祥天以下各  
圖像一葉)四天王(圖像四葉)十二天(圖像十  
二葉)。卷第十二に辨財天(圖像一葉)摩利  
支(圖像二葉)十五童子(曼荼羅一葉)訶利底  
母水誑羅(各圖像二葉)水天供・妙見(圖像三  
葉)北斗(曼荼羅一葉)焰魔天・寶虞利童子・  
寶藏天女・深沙神・僧慎爾婆叉(以上各圖像  
一葉)金翅鳥王(圖像二葉)大黑天神法(圖像

名所行發 ⑩(名庫書)書藏所現 ⑪ 月年の刊載 ⑫(書考參書釋註)書末 ⑬ 説解存内 ⑭ 代年作著 ⑮ 著者 ⑯ 缺存 ⑰ 數卷 ⑱(名書)名題 ⑲ 號略字數

一葉)以上九十五章法一百四十一回。

普通十卷鈔と名くる書には本書以外に永嚴撰の圖像鈔、覺成の澤鈔、朗澄の諸尊法私記(以上眞言宗)、靜然の十卷抄(天台宗)等がある。然るに此の中の永嚴撰書は惠什撰との間に古來妙な傳説がある。且つて惠什が仁和寺に在つた時永嚴が惠什に命じて十卷の圖像鈔を作らしめた。然るに後日法流上の争より不和を生じ、惠什が醍醐に去つたが、永嚴が前記の書を自著として公表せるによつて、怒つて更に尊容鈔十卷を著した。随つて兩者に少々出沒があると云ふのである。現存のものに相違せる、兩種の十卷鈔が現存してゐることは明であり、古目錄にも兩者を出してゐるから、或は事實かも知れぬ。但し現存寫本には何れも署名を缺ぐが故に判定に苦しむのである。しかし大正藏經本並に佛書刊行會本(常樂院本)は私は信濃阿闍梨勝定房惠什の作で、平等房永嚴の作ではあるまいと思ふ。別章雜記等に引用せる勝定房の説と大正藏經本とはほぼ一致する様に思ふ。たゞ遺憾ながら多忙の身にて原稿縮切までに全部の對校を爲し得なかつたため斷言することが出来ない。

大乘美術第一卷第二號にも二楞學人の論文が出てゐるが。大體に於ては惠什と定めながら一分の疑點を存して居られる。更に後考を俟たねば判定し得られない。大正藏經は高野山圓通寺藏經慶應二年仁和寺印玄法印所寫本を收載したのである。

十卷鈔 ①(日)Jik-kwan-shō. ②(小田慈舟)

十卷鈔 ①(日)Jik-kwan-shō. ②(大正大藏經圖像第三卷)

卷 ③存

⑥自在金剛集第八に云く「靜然鈔出息心鈔中諸尊法七卷稱法曼七卷抄合三自鈔一爲十卷」云云。

十卷鈔 ①(日)Jik-kwan-shō. 澤鈔

十卷 ③存

十卷鈔 ①(日)Jik-kwan-shō. 諸尊法私記 ②十帖 ③存 ④文泉房朗澄大法房責任の所傳を撰集せるもの

十卷章 ①(日)Jik-kwan-jō. 十卷書

十卷 ③存

⑥弘法大師述即身成佛義、摩字實相義、卍字義各一卷、辨顯密二教論二卷、祕藏寶輪三卷、般若心經祕鍵一卷、龍猛菩薩造發菩提心論一卷の七種十卷のことにして、眞言宗の教義を示せる重要典籍である。

⑨刊本(龍大、二六六一・二)(京專)(正大、一四三一・一五一、一五五)(高大、寄、一・五七)

十卷章 ①(日)Jik-kwan-jō. 合刻袖珍

十卷章 ①一卷 ③存 ④大崎行智撰 ⑤明治一刊 ⑥(龍大、研佛)立大、A. D. 一三四一・一三五(正大、一四三一・一五二)(帝國、一三三・一〇八)(高大、一・五七) ⑩東京森江書店

十卷章愚草 ①(日)Jik-kwan-jō-gen

①十卷書愚草 ②二十五卷 ③存 ④頼瑜(嘉祿二)嘉元二(A. D. 1296-1304)述

十卷章撮義鈔 ①(日)Jik-kwan-jō-satsū-gi-shō. 十卷書撮義鈔、十卷書撮義

②二十七卷 ③存 ④覺眼(寛永二〇)享保一〇(A. D. 1643-1725)述 ⑤元祿一〇刊

⑨(龍大、二六六一・二、研佛)

十卷章鈔 ①(日)Jik-kwan-jō-shō.

②二十四卷 ③存 ④頼瑜(嘉祿二)嘉元二(A. D. 1296-1304) ⑤刊本(龍大、二六六一・三三四(研佛))

十卷章鈔 ①(日)Jik-kwan-jō-shō.

②百三十三卷 ③存 ④宥快(貞和元)應永二(A. D. 1345-1416) ⑤刊本(龍大、研佛)

十卷章讀曲 ①(日)Jik-kwan-jō-yomi-kuse. 十卷書讀曲、十卷疏讀曲 ②

③存 ④寫本(正大、一四三一・一五七)

十願發心記 ①(日)Jū-gwan-hos-shin-ki. ②一卷 ③千觀(延喜一八一永觀元 A. D. 918-983)撰 ④應和二(A. D. 965) ⑤(參考) 山家祖德撰述篇日集卷下

⑥(叡山文庫)

十願發心記 ①(日)Jū-gwan-hos-shin-ki. ②一卷 ③覺運(天曆七)寬弘四 A. D. 953-1007)撰 ④(參考) 山家祖德撰述篇日集卷下

十件要類 ①(日)Jik-ken-yō-rui. 永源圓應禪師十件要類 ③存、禪學寶典之内

④元光(正應三)貞治六 A. D. 1290-1367) ⑤明治四三刊 ⑥(駒大)

十玄義廣記 ①(日)Jū-gen-gō-kō-hi. ②一卷 ③(參考) 花嚴宗經論章疏日錄

十玄談 ①(日)Jū-gen-dan. ②一卷 ③存 ④(參考) 禪籍日錄

十玄談 ①(日)Jū-gen-dan. ③存、佛教通俗講義之内 ④高田道見(一大正一二年 A. D. 1923) ⑤明治三八刊 ⑥(駒大)

(帝國、六二・二六二)

十玄談假名註 ①(日)Jū-gen-dan-Kan-jō-shō. ②一卷 ③存 ④指月慧印(一

明和元 A. D. 1764)述、梅友編 ⑤明治年間刊 ⑥(駒大)

十玄談註 ①(日)Jū-gen-dan-chū. ②一卷 ③存 ④(支)Shih-hsuan-tan-chū. ⑤一卷 ⑥存

⑦朝鮮雪岑述 ⑧(參考) 禪籍日錄

十玄談註釋 ①(日)Jū-gen-dan-chū-shaku. ②三卷 ③存 ④實嚴千丈(一享和二 A. D. 1802)述、素謙、良校共編

⑤千丈嚴和尚語錄上蛇足編の下を見よ。 ⑥刊本(駒大)

十五首和讃 ①(日)Jū-go-shū-wa-san. ②一卷 ③存、眞宗遺文纂要之内

④親鸞聖人の作として傳へられてゐるけれども、その眞偽は決し難い。先啓の「淨土眞宗聖教目錄」並びに「淨土眞宗聖教典」には、この十五首和讃を親鸞聖人のとしてゐる。

⑦(參考) 淨土眞宗聖教目錄、淨土眞宗教典志第一 ⑧刊本(龍大、一〇三・一〇)(谷大、宗大・四八四七) (藤枝昌道)

十五受具戒記 ①(日)Jū-go-ji-gei-ki. ②一卷 ③存 ④寫本(京大、日大未・二九)

十五童子繪圖 ①(日)Jū-go-dō-e. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫(寶龜院)

十五童子法 ①(日)Jū-go-dō-hō. ②十五童子法勸流 ③一帖 ④存 ⑤建久二寫(金剛三昧院)寫本(高大、寄、一・六

六)

十五德經 ①(日) Jū-go-toku-kyō. (文) Shi-wa-te-ching. ②一卷 ③缺

失譯 ⑦(參考) 出三藏記第三、仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第四、第一五、貞元錄第六、第二五

十五和讚意 ①(日) Jū-go-wa-san ②(參考) 淨土眞宗聖教目錄

十五和讚文意 ①(日) Jū-go-wa-san-mon-i. ②(參考) 淨土眞宗聖教目錄

十劫義論 ①(日) Jū-kyō-giron. ②一卷 ③存 ④崇廓(天明六 A. D. 1786) 述 ⑤寫本(龍大)

十劫成佛論 ①(日) Jū-kyō-to-butsu-ton. ②一卷 ③存 ④普聞、諦道共著

十號經 ①(日) Jū-gō-kyō. (支) Shi-hao-ching. ②一卷 ③存、大正一七・七一

九 No. 783. 縮古七、正一五・四、北 1193 八、南 1169 八、元 1163 八、明北 83 十盡、清 83 十盡、麗 11 十將、天 1149 八、法 1266 冠、至 601 維、明南 28 命、No. 839 ④宋天息災(一成平 3 A. D. 1000) 譯

⑤詳には佛說十號經と言ふ。其の梵・西藏名は不明である。古くは阿含・尼伽耶經典に於ても既に佛の十號や其の説明は諸所に散見されるも、原典に於て之を十號と總稱したものは無い様である。従て之を十號と稱する事は漢譯經より初まつたものの様に思はれるのである。故に、此の佛說十號經の經名も漢譯特異の名稱であつて、原典經

名の直譯ではないであらう。

既に經題の示すが如く、佛の尊稱である十號を擧げ、阿難をして如何なる理由にて斯くの如き十號を以て佛を尊稱し奉るやを質問せしめ、佛の金口をかりて、其の一々につきて之が理由を説明せしめたものである。従て其の量に於ても本文九百六十字に過ぎない短經である。如來の十號は既に早く阿含聖典に表れ其の個々に就ての説明も散見され、後世大乘佛敎の興るに及びても引續き使用されたものであつて、特に或る派・宗に於て著しく重用されたと言ふ證據はない。又、經の内容其ものが單に十號の説明であつて或る思想内容の發表の爲のものではないのであるから、之を特定の部派や系統に歸することは勿論出来ない。唯其の説明の内容よりすれば大乘的色彩もな

く比較的古きもの様であるが、正覺の説明の條に「復於大乘作意思求歷修諸地」とあるよりすれば、古くとも増一阿含經と同時代か、又は以後のものと思はれるのである。(大石秀典)

十金胎句義鈔 ①(日) Jū-kon-tai-kyō-gi-shō. ②五帖 ③存 ④印融(永享

七—永正一六 A. D. 1435—1519) 述 ⑤十八道、金剛界、胎藏界諸眞言の句義を記したるもの。

十金胎護 ①(日) Jū-kon-tai-go. ②一卷 ③存 ④澄惠記 ⑤三寶院流の十八

道、金剛界、胎藏界、護摩の口決を記したるもの。

十金胎護 ①(日) Jū-kon-tai-go. ②

一卷 ③存 亮想記 ④寫本(正大、一四八・七四)

十金胎護薄初二重三闋記 ①(日) Jū-kon-tai-go-usui-shō-ni-tō-san-mon-i. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫

⑤(寶龜院)

十金胎護鈔 ①(日) Jū-kon-tai-go-shō. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、研佛)

十齋佛菩薩會釋 ①(日) Jū-ji-hutsu-bō-sasur-e-shūan. ②定深(一天仁元 A. D. 1108—) ③(參考) 本朝台祖撰述

密部書目、諸宗章疏錄第二

十三箇條 ①(日) Jū-san-ka-jō. ③存、假名聖敎八部(惠空篇)之内

④「專修念佛の衆中に存知すべき條々十三を擧げ、この張文に違背する者は衆中より擯出すと定めてある。云く、(一)當流の聖敎たとひ門徒たりといふとも坊主の許容なくして左右なく書寫すべからざる事。(二)しきりに文解なき聖敎の披講をくはだて師承にあらざる今案の法文を談論することかたんしかるべからざる事。(三)當御門下において或は祕密と稱し丑の時法門と號して傳授の法則ありと云々(說明あり)、おなじく停廢すべきこと。(四)御流の門徒の中に念佛をもて一切の病者を祈る條當時諸方に通布せしむと云々……もともとしかるべからず(說明あり)。(五)佛法世法につきて談義内談あらんとき衆中におなじからず違背しかるべからざること。(六)醉狂並に詮なき戲言ごときの口論を停止すべきこと。(七)同明等侶のなかに一切の諸人男女

の仲媒かれといひこれといひかたく禁制の事。(八)或は佛物を借用して辨償せず或は負累のことあるに於て不直不義を現する條いましめ沙汰あるべき事。(九)動もすれば世間の賣買をこのみて利潤をさきとせんとする條すこぶる放逸にあらずや停廢にしたがふべき事。(九)博奕におきてはたゞ散亂無慙のあざけりあるのみにあらずにまた盜賊をまねくもひなり専ら停止すべき事。(一〇)女會妻後は忽に命根をたつ因縁惡名をとる專一なり門下の類日來のごとく殊に禁遏にかゝるべき事。(一一)眞俗につけて每事本願守聖人の敎誡をまもりたてまつるべき事。(一二)御門下と號する或一類のなかにこの法をもて旃陀羅を勸化すと云々、剩へこれのために相かたらふて值遇出入すと云々、事實たらば甚だもて不可思議の惡名なり(說明あり)と。末尾に「貞和二年三月日」と記し、一本には「康安二寅歲三月三日、沙彌純如所望之間書與之訖、執筆御判」とあるから、若し之に依るならば、本願寺善如上人時代のもので、大體專修賢善計に屬する者の作と考へられる。(安井廣度)

十三箇條掟 ①(日) Jū-san-ka-jō-okite. ⑤覺如(文永七—觀應 11 A. D. 1270

—125) 作 ⑦(參考) 淨土眞宗聖教目錄

十三箇條不審之事 ①(日) Jū-san-ka-jō-shin-no-koto. ②一册 ③存

④寫本(高大、寄・一四八)

十三大會許可秘印 ①(日) Jū-san-tai-kōka-ka-in. ②一卷 ④安然(承和八一延喜年間 A. D. 844—901—) ⑦參

考) 諸宗章疏錄第二、密乘撰述目錄

十三佛 ①(日) Ja-san-but-su. ③存

③足利、徳川時代寫 ④(寶善提院)

十三佛行要 ①(日) Ja-san-but-su-

kyō-yō. ②二卷 ③存 ④台密所要のもの

にして、不動、釋迦等十三佛の修法次第で

ある。

十三佛講話 ①(日) Ja-san-but-su-

kyō-wa. ②一卷 ③存 ④荒井涙光述

大正六刊 ⑤東京森江書店

十三佛次第 ①(日) Ja-san-but-su-

shi-dai. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤

(寶善提院)

十三佛種子眞言 ①(日) Ja-san-

but-su-shū-ji-shū-gon. ②一卷 ③存 ④

刊本(龍大、二六六二・六八)

十三佛抄 ①(日) Ja-san-but-su-

②一卷 ③存 ④正保三寫(正大、一四六・

一九)寛永一九刊(正大、一四六・二〇)(龍

大、二六六五・四一)(京大、日大未、四三一)

(谷大、餘大、五八〇)(哲、け・三左・五)

十三佛並寶生愛染緣起 ①(日)

Ja-san-but-su-narabini-hō-shū-ai-zen-en

kyō. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、餘大、一

七四七)

十三佛本地垂迹簡別釋 ①(日)

Ja-san-but-su-hon-ji-sui-jaku-kam-betsu

shaku. ②一卷 ③存、大日本佛教全書

第二八智證大師全集第四 ④圓珍(弘仁五

地藏大菩薩、彌勒慈氏尊、藥師尊、觀自在

世尊、得大勢至尊、阿彌陀如來、阿閼佛、

大日通照尊、虚空藏の佛菩薩を次第の如く

秦廣王、初江王、宋帝王、五官王、息諍王

(梵漢對映私鈔閻魔王)、變成王、泰山王、

平王、都市王、五道轉輪王、蓮華王、慈恩

王(梵漢對映私鈔には祇園王)、祇園王等

(梵漢對映私鈔には法界王)に配し天台宗義

に基いて説明を試みんとしたもののようだ

が明らかでない。元來十三佛は經軌にはな

いものである。恐らく日本で有縁の佛菩薩

を初七日乃至七七、百ヶ日、一周忌、三

回忌、七回忌、十三回忌、三十三回忌に配

當して畫像等を作つて供養したことから起

つたものらしい。最初の秦廣王乃至五道轉

輪王までは十王經に出る王であり十佛はそ

の本地なりといふ。十王經は佛教と道教と

を結合せしめたものであつて日本撰述では

ないかといはれる經である。この經説の上

に更に三佛三王を加へたものだから平安初

期の頃に現れたものとは考へられな。故

に本書は偽撰であらう。(田島德音)

十三佛由來 ①(日) Ja-san-but-su-

yū-ai. ②一卷 ③存 ④廣安恭壽著 ⑤

明治四〇刊 ⑥(高大、寄・一・五七)帝國、

三二五三二一)

十三佛要文 ①(日) Ja-san-but-su-

yō-mon. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、餘

大、二〇六六)

疏錄第三

十三問答抄 ①(日) Ja-san-mon-dō

shō. ②二卷 ③存、日蓮宗々學全書本門

法華宗部之内 ④日隆(至徳元一寛正五、A.

D. 1384-1464) ⑤永享八頃(A. D. 1436)

⑥本果日朝の質疑に應じ、十三箇條の問答

を設けて本門法華宗(舊八品派)の宗義を論

議したものである。

【上卷】(一)在三十下種の事。(二)迹門に

妙法五字を顯すの事。(三)四種、三種の法

の事。(四)此經に唯だ二妙を論ずるの事。(五)

不輕品に本迹を兼備するの事。(六)兼得

迹門法の事。(七)文句十に云ふ或用舍利の

釋の事。(八)序品の首題の事。

【下卷】(九)安樂行品の於後末世の文の

事。(一〇)勸發品の後五百歳普賢行の事。

(一一)隨喜品の五十展轉の最後の人の位の

事。(一二)定業も亦能く轉ずるの事。(一三)當

家受戒作法の事。

この中第一條の問答を最要とし、本門八

品所顯の妙法、過去久遠の本因妙を末法に

下種する義を論じた。第十三條の受戒作法

の事は、日蓮門下に於ける戒法論の初期に

於ける注意すべきである。

④正本(尼崎本興寺藏) (望月歡厚)

十三問略答 ①(日) Ja-san-mon-

ryaku-tō. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、二

五九・九)

十三論題 ①(日) Ja-san-ron-dai.

chu-shih-pa-cheng-jen-ching. ②一卷

④失譯 ⑦(參考) 出三藏記第四

十支居士八城人經 ①(日) Ji-shi-

ko-ji-hachi-jō-nin-kyō. (支) Shi-chih-

chū-shih-pa-cheng-jen-ching. (支) Aikha-

kanagara-s. (M. 52) ②一卷 ③存、大正

一・九一六No. 92 縮八、正一四・一 ④安

世高譯 ⑤後漢建和二一建寧三(A. D. 148

—170)

⑥この經典は八城市の人十支居士が阿難に

就いて開法したことを述べたもので、M.

52 Aikhanagara S. 中阿含二一七經八城

經(大正一・八〇二)の異譯單行經である。

釋尊の入滅後、長老達が華氏城の鷄園精舍

に居られた時、八城市(Aikhanagara)の

陀施慶長者(Dassam)第十居士、十支居士

が所用有りて、華氏城に來り、法を聞いて

喜び、阿難が毘舍離城にあるを聞き、阿難

を訪うて、委しくその説法を聞き、大に喜

び、厚く佛僧伽を供養し、五百の精舍を阿

難の爲めに建立したことを述べたものであ

る。三經典を比較すると、中阿含はこの十

支居士は城人經が近く、M. 52. は稍異な

つてゐる。即ち阿難の説法の内容がこの經

典と中阿含では四禪四無量四無色となつ

て居り、又この經と中阿含は十二甘露門を

説いて居るのに、M. 52. は十一甘露門とな

つてゐるのである。(赤沼智善)

十四意經 ①(日) Ji-shi-ki-kyō. (支) Shi-sa-ki-ching. 菩薩十四意經 ②一卷

- D. 148—170)譯 ①〔參考〕仁壽錄第五、靜泰錄第五 開元錄第一四 貞元錄第二四
- 十四王經** ①(日)U-shi-to-gyō, (支)Shih-sst-wang-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤〔參考〕出三藏記第四 武周錄第一二 開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五
- 十四音集** ①(日)U-shi-on-shū. ②一卷 ③最澄(神護景雲元一弘仁一三A. D. 767—822) ④〔參考〕山家祖德撰述篇目集卷上、密乘撰述目錄
- 十四音辨** ①(日)U-shi-on-ben. ②一卷 ③智玄述 ④〔參考〕入唐新求聖教目錄
- 十四行偈開花苑** ①(日)U-shi-gyō-ge-kai-ke-on. 眞宗勸化十四行偈開花苑 ②六卷 ③存 ④大芳述 ⑤安永二刊 ⑥龍大(一〇五五六一)京大(一〇二六・五三)
- 十四行偈開書** ①(日)U-shi-gyō-ge-kiki-gaki. ②一卷 ③存、四部國字抄假名聖教(惠空編)八十八部之内 ④寫本(龍大、一〇三・二五、研眞)(谷大、宗丙・四八)
- 十四行偈開書抄** ①(日)U-shi-gyō-ge-kiki-gaki-shō. ②〔參考〕淨土眞宗聖教目錄
- 十四行偈傳錄** ①(日)U-shi-gyō-ge-kō-roku. ②三卷 ③存 ④北天享保一九一文化元A. D. 1731—1804)述。 ⑤寫本(龍大)
- 十四科義** ①(日)U-shi-kwa-gi. (支)Shih-sst-kō-i. ②一卷 ③竺道生(或生公) ④〔參考〕東域傳燈目錄卷下、智證大師請來目錄
- 十四科義疏** ①(日)U-shi-kwa-gi-shō. (支)Shih-sst-kō-i-su. 十四科疏 ②二卷 ③清幹述 ④〔參考〕傳教大師將來台州錄、諸宗章疏錄第一
- 十四科義疏鈔** ①(日)U-shi-kwa-gi-shō-shō. (支)Shih-sst-kō-i-su-chāo. 十四科義鈔、十四科鈔 ②一卷 ③清幹述 ④〔參考〕諸宗章疏錄第一
- 十四科義抄** ①(日)U-shi-kwa-gi-shō. (支)Shih-sst-kō-i-chāo. 十四科義疏鈔、十四科鈔 ②一卷 ③〔參考〕傳教大師將來台州錄
- 十四科疏** ①(日)U-shi-kwa-shō. (支)Shih-sst-kō-su. 十四科義疏 ②二卷 ③清幹述 ④〔參考〕東域傳燈目錄卷下
- 十四科鈔** ①(日)U-shi-kwa-shō. (支)Shih-sst-kō-chāo. 十四科義疏鈔、十四科義鈔 ②一卷 ③清幹述 ④〔參考〕東域傳燈目錄卷下
- 十四科注** ①(日)U-shi-kwa-chū. (支)Shih-sst-kō-ohu. ②一卷 ③〔參考〕新編諸宗教藏總錄卷第三
- 十四過類記** ①(日)U-shi-kwa-rui-ki. (支)Shih-sst-kwo-lei-chi. ②〔參考〕入唐新求聖教目錄
- 十四根本印** ①(日)U-shi-kom-pon-in. ②一帖 ③存 ④鎌倉時代寫 ⑤(高、奇・一・六四)
- 十四根本印圖** ①(日)U-shi-kom-pon-in-zu. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)
- 十四根本口訣** ①(日)U-shi-kom-pon-ku-ketsu. 十九布字口訣 ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)
- 十四部雜纂** ①(日)U-shi-bu-zas-san. ②一卷 ③存 ④僧梁(天保一二—大正一A. D. 1841—1922)等編
- ⑤行信一念釋耳餐。二種深信釋。兩願大綱。三問答備忘錄。正像末和讚後記。名號成就。歸三寶備忘錄。選擇集節目。名號成就。卷頭讚辨義。本典三一問答。捉御文章。一枚起請文備考。眞實五願略辨。⑥寫本(龍大、一〇三・七)
- 十思經** ①(日)U-shi-kyō. (支)Shih-ssū-ching. ②一卷 ③失譯 ④〔參考〕法經錄第一
- 十思惟經** ①(日)U-shi-yui-gyō. (支)Shih-ssū-wei-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤〔參考〕出三藏記第三、仁壽錄第五、靜泰錄第五 開元錄第四、第一五、貞元錄第六、第二五
- 十指異名** ①(日)U-shi-nyō. ②一帖 ③存 ④(金剛三昧院)
- 十地檀聖教目錄** ①(日)U-shi-ji-shō-gyō-moku-roku. ②一軸 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶善提院)
- 十地義記** ①(日)U-shi-gi-ki. (支)Shih-ji-chi. 十地經論義記、十地論義記、十地論疏 ③十四卷之内八卷現存、正續一・七・一一三 ⑤隋慧遠(普通四—開皇一二A. D. 523—592)述 ⑥寬政六刊(正大、一
- 一三四・二一一三)(谷大、餘大・七五一)(龍大、二四三・二五二・二六)(高、奇・一・一八)(哲、ふ・五・左・二三)慶應二寫(正大、一三四・一一)
- 十地義記卷第一** ①(日)U-shi-gi-ki-kwan-dai-ichi. (支)Shih-ji-chi-chūdan No. 2758
- 一七二。 ②一卷 ③存、大正八五・二三六 ④此れは撰者不明なれば之れを知るに由なし、兎に角六朝時代光統律師に依りて地論宗興り、其の門下盛んに地論を研究し、競ふて章疏を作りしことが六朝時代に行はれたものなり、其れが何の時代に日本に傳はりしか審かならざれども、其の殘缺本と知るべし。内容も法上の殘缺本と大差なしと思ふ。(河野法雲)
- 十地經** ①(日)U-shi-kyō. (支)Shih-ji-ching. ②九卷 ③存、大正一〇・五三 五No. 287、縮開八、正續一・二・四、歷1414合、法1082經 ④唐尸羅達摩譯 ⑤唐貞元中(A. D. 785—804)
- ⑥西晉竺法護譯の漸佛一切智德經、後秦羅什譯の十住經等の異譯經にして華嚴經十地品に相當するもの。内題の下に「大唐國僧法界從中印度持此梵本請于闐三藏沙門尸羅達摩於北庭龍興寺譯」とあり、譯者の傳(宋高僧傳第三)に本經譯出の狀を記して「唐貞元中悟空迴至北庭、其本道節度使楊契古、與龍興寺僧請法爲譯主、翻十地經、法朔讀梵々並譯語、沙門大雲筆受、法超潤文、善信證義悟空證梵文」とある。本經の内容は異譯各本との相異僅少にして、譯語、會衆

の數、説時(本經と十地經論中の經とは他の異譯と異り成道未久第二七日とあり)等の相異にして特に云ふべきものはない。(原田靈道)

十地經

①(日)Ja-i-kyō. (支)Shih-ti-ching. ②一卷 ③缺 ④東晋代祇多蜜譯 ⑤第三譯 ⑥(參考)開元錄第一四貞元錄第二四

十地經述本記

①(日)Ja-i-kyō-jusan-hon-ki. (支)Shih-ti-ching-chi-pên-chi. ②(參考)奈良朝現在一切經疏目錄2303

十地經論

①(日)Ja-i-kyō-ron. (支)Shih-ti-ching-lun. (梵)Dasābhāmī-vyākhyāna(藏傳)Hphags-pa sa bcu-paṭi rnam-par-bcad-pa. 十地論 ②十二卷 ③存、大正二六・二七No. 1522、縮暑九 ④天親造、元魏菩提流支譯 ⑤永平元一天平二(A. D. 508—535)

⑥支那後魏の宣武帝永平元年(日本繼體天皇二年)戊子北天竺の三藏菩提流支來朝す、帝勅して永寧寺に居らしめ厚く之れを遇し、七百梵僧中流支をして譯經の元宗となさしむ、帝流支并に勒那摩提(此に寶意と云ふ)佛陀扇多の三人に勅して十地經論を譯せしむ、其の事具に崔光の記す十地論序に載せたり。初めは菩提流支等の三人が勅命を帯びて合譯せしが、彼三師は師習を殊にし相傳の別なる爲め意見一致すること不能、爰に於て宣武帝三人を別々に之れを譯せしめ、後此れを合して一部となさしむ、故に續高僧傳第一卷留支の傳に云く、

其後三德(流支、勒那、佛陀扇多)乃徇三流言一各傳師傳不相詢訪帝以弘法之盛略叙曲煩勅三處各翻訖乃參校其間隱沒互有二三不同致有文旨時兼異綴一後人合之共成通部と。此の三者の中主に意見の合せざるは流支と勒那の二人と見ゆ。之れを華嚴傳一、十四丁には勒那留支各洛水の南北に於て一本と譯すと云ふ、大唐内典錄亦之れに同じ、而して斯く各々別譯の本を合糅して一部の論本とするものは光統律師なり、光統は勒那の弟子にして(道龍の傳に據る)十地論の譯場に交參し、具に二者の争點を悉知し、其の同異を比較して、能く勒那留支の間に立つて之を調和せしめ、遂に一本となし、後地論宗興るに及んで光

は其の宗の祖師と崇めらる。故に華嚴傳一十四丁に其後僧統慧光請三賢(勒那と留支なり)對詳校同異參成一本となり、華嚴探玄記一五十九丁亦之れに同じ。然るに今十地論を繙くに二者の相違點が果して何れに在るかを知るに由なきも、惟ふに阿黎耶議の解釋眞妄等に就いてならんと思はる。それは予が別に論ずる所ありて此れに盡す所に非ず、此の如く十地論の翻譯がありて已來此の論研究日に盛りにして、遂に光統即慧光は此の論を所依として地論宗を唱ふに至る、他日杜順至相等の人が華嚴宗を開創するに及んで、此の論は華嚴の十地品の註釋なれば華嚴宗所依の論として、賢者の探玄記中には此の論を頻りに引用することとなり、一面より云へば地論宗の興隆は華嚴宗開闢の先驅を爲せるものと爲せるものと云ふべきである。(河野法雲)

十地經論

①(日)Ja-i-kyō-ron. 國譯十地經論 ②存、國譯大藏經論部第一三

十地經論義記

①(日)Ja-i-kyō-ron-gi-ki. (支)Shih-ti-ching-lun-ti-chi. 十地論義記、十地義記、十地論疏 ③十四卷之内八卷現存、已續七一・二一三 ④隋慧遠(普通四一開皇二一A. D. 523—592)述

⑤慧遠法師は隋代の名僧、淨影寺の慧遠と稱し廣く諸宗に通じ又内外の學に精し、殊に地論宗を以て其の本宗と爲すもの、如し、その傳は續高僧傳第八(縮刷藏經致二、百三十六丁)に出て、後魏孝明帝正光四年に生れ隋文帝開皇十二年に歿す、年七十なり、光統十大弟子の隨一なり、此の十地義記は自らの本宗所依の七地經論に自ら釋を作るものにして、元と七卷ありと傳ふ、即ち近くは諸宗章疏錄上卷華嚴宗の下に十地論疏七卷慧遠述とあり、而るに現存するは四卷にしてそれを各卷に本末を分ち今は八卷となす、これ菩薩十地の中初地より第三明地の終りまでの十地論の文を追ふて具に釋せり、第四焰地已下は缺て其の釋なきは惜むべし、昔は我日本にも全部七卷(本末を開けば十四卷)として第十地法雲地釋ありと見ゆ、其の證は法然上人の淨土初學鈔にも十地論疏七卷、淨影寺慧遠の作として其の名出てあり、今坊間に行はるゝ本は寛政二年庚戌春増上寺藏版として刊行したるものである。(河野法雲)

⑥(日)Ja-i-kyō-ron. 十地論義疏卷第一、第二 ①(日)mon-ji-sū-ron. (支)Shih-ti-wu-mên-shih-hsing-lun. ②六卷 ③(參考)諸宗章疏錄第一、奈良朝現在一切經疏目錄2647 ④(日)Ja-i-kyō-ron-shō-kai-go-no-koto. ⑤一帖 ⑥存 ⑦長祿二寫 ⑧(寶壽院) ⑨十地斷結經 ①(日)Ja-i-dan-kek-kyō. (支)Shih-ti-tuan-chieh-ching. ②八卷 ③缺 ④後漢竺法蘭(一永平一〇—一三A. D. 67—70)譯 ⑤(參考)貞元錄第二四 ⑥十地斷結經 ①(日)Ja-i-dan-kek-kyō. (支)Shih-ti-tuan-chieh-ching. ②八卷 ③缺 ④西晋聶道真(一太康元—永嘉六A. D. 280—312)譯 ⑤(參考)開元錄第一四 ⑥十地同位等行利鈍事 ①(日)Ja-i-do-tō-gyō-ri-don-no-koto. ②一帖 ③存 ④文政二寫 ⑤(寶壽院) ⑥十地論 ①(日)Ja-i-ron. (支)Shih-ti-lun. 十地經論 ②十二卷 ③存、大正二六・二七No. 1522、縮暑九 ④天親造、元魏菩提流支(一永平元—天平二A. D. 508—535)譯 ⑤(參考)花嚴宗經論章疏目錄、諸宗章疏錄第一 ⑥十地論義記 ①(日)Ja-i-ron-gi-ki. (支)Shih-ti-lun-ti-chi. 十地經論義記、十地義記 ②四卷 ③存、已續一・七一・二一三 ④隋慧遠(普通四一開皇二一A. D. 523—592)述 ⑤(參考)奈良朝現在一切經疏目錄2509

十地論義疏卷第一、第二 ①(日)mon-ji-sū-ron. (支)Shih-ti-wu-mên-shih-hsing-lun. ②六卷 ③(參考)諸宗章疏錄第一、奈良朝現在一切經疏目錄2647 ④(日)Ja-i-kyō-ron-shō-kai-go-no-koto. ⑤一帖 ⑥存 ⑦長祿二寫 ⑧(寶壽院) ⑨十地斷結經 ①(日)Ja-i-dan-kek-kyō. (支)Shih-ti-tuan-chieh-ching. ②八卷 ③缺 ④後漢竺法蘭(一永平一〇—一三A. D. 67—70)譯 ⑤(參考)貞元錄第二四 ⑥十地斷結經 ①(日)Ja-i-dan-kek-kyō. (支)Shih-ti-tuan-chieh-ching. ②八卷 ③缺 ④西晋聶道真(一太康元—永嘉六A. D. 280—312)譯 ⑤(參考)開元錄第一四 ⑥十地同位等行利鈍事 ①(日)Ja-i-do-tō-gyō-ri-don-no-koto. ②一帖 ③存 ④文政二寫 ⑤(寶壽院) ⑥十地論 ①(日)Ja-i-ron. (支)Shih-ti-lun. 十地經論 ②十二卷 ③存、大正二六・二七No. 1522、縮暑九 ④天親造、元魏菩提流支(一永平元—天平二A. D. 508—535)譯 ⑤(參考)花嚴宗經論章疏目錄、諸宗章疏錄第一 ⑥十地論義記 ①(日)Ja-i-ron-gi-ki. (支)Shih-ti-lun-ti-chi. 十地經論義記、十地義記 ②四卷 ③存、已續一・七一・二一三 ④隋慧遠(普通四一開皇二一A. D. 523—592)述 ⑤(參考)奈良朝現在一切經疏目錄2509

Ju-jiron-gi-sho-kwan-dai-ichi-dai-ni. (支) Shih-ti-tan-i-sa-chuan-ti-ti-ehh.

②二卷 ③存、大正八五・七六一(No. 2799)

④北周法上述

⑤十地論義疏の作者法上は、慧光律師即光統の弟子なり、續高僧傳第八卷(縮藏致軼

二、百三十二丁)に傳あり、齊朝の大統合

水寺法上と云ふ、地論學匠靈裕は其弟子な

りとすれば、此師が十地論の義疏の作あり

しと見ゆ、但し傳文中著述の書目二三を舉

てあれども、十地論義疏のこと見へず、而

し他人の中十地智論等の所傳を問ふに對し

て上谷略云と云ふ語あれば、地論の義疏

あること疑ふべからず、全部幾卷なるを知

らず、今其中の殘缺の卷なり。内容は淨影

の義記と相似て略なり、元と同系光統門下

の人なる故なり、此疏全部存すれば亦珍と

すべし、今はたゞ缺本なれば之を委くする

こと不能は可惜。(河野法雲)

⑥十卷 ⑦行賀(天平元—延暦二) A. D. 720—803)述 ⑧(参考) 諸宗章疏錄第二

十卷 ⑨靈見述 ⑩(参考) 諸宗章疏錄第

十軸抄 ①(日) Ju-jiku-sho. ②十卷

③海岸坊性殊述

④本朝台祖撰述密部書目に「新三百帖」と本

書とを併載し、本書の下に細註して云く、

「潤云。上ノ新三百帖ニ重難答ヲ設ケタル書

也」云々。

⑤(参考) 山家祖德撰述篇目集卷下

⑥七箇條 ①(日) Ju-shichu-ka. ②十

七箇條 ③一卷 ④存、假名聖教(惠空

篇) 八八部之内、異義集卷四

⑤「一向專修の念佛者のなかに停止せしむ

べき條々」十七を擧ぐ。末尾に「弘安八年

八月十三日、愚禿親鸞在判」とあるは年代

が相違してゐるし、又もとより觀鸞聖人の

作ではなく、別項「十三條」と同じく、そ

の頃の專修賢善計の書と考へられる。(安井廣度)

⑦十七箇條 ①(日) Ju-shichu-ka. ②十

七箇條 ③一卷 ④存、假名聖教(惠空

篇) 八八部之内、異義集第四 ⑤親

條法の名がある。推古天皇の即位十三年に

公示されたもので、從來は單なる教訓或は

官公吏に對する訓戒といふ程度で見られ、

解釋されて來たものであるが、種々檢討の

結果、聖德太子の政治的社會的の根本的改

革の意見の發表であることが明瞭になつ

た。其の内容としては、黨争絶滅による平

和政治の原則として、第一條に和の一字を

説かれ、國民の精神的教化の原理として、

第二條には三寶崇敬を教へられ、第三條に

は天皇の絶對權を高調する承紹必謹の公示

となり、第八に於ては、社會組織の改革と

して、氏族制度に對する人才登庸の明示を

爲され、第十二條にては、封建制度の打破

を意味する諸侯收稅權の否定を説き、第十

七條にては、衆議制度による公平の政治を

力説され、其の他の條目も、一々此等と關

連した、太子の理想として、實行を期せら

れた、政治計畫の遺憾なき表現である。

法隆寺寶物集第三五 ④聖德太子(敏達帝

二)推古帝二九 A. D. 573—621 一説推古帝

三〇(敏)述 ⑦(参考) 淨土眞宗教典志第

一 ⑧大正一一刊 ⑨(龍大、別置)

十七憲法講演 ①(日) Ju-shichi-

ken-po-kyo-en. ②存、聖德太子傳講演附

錄 ③佐藤巖英著 ④大正一〇刊 ⑤(龍

大、研眞)

十七憲法講話 ①(日) Ju-shichi-

ken-po-ko-wa. ②一卷 ③存 ④加藤咄

堂著 ⑤東京丙午出版社

十七憲法筆記 ①(日) Ju-shichi-

ken-po-hiki. ②二卷 ③存 ④寫本

(龍大、二〇九三・五)

十七憲法要解 ①(日) Ju-shichi-

ken-po-yo-ge. 聖德太子十七憲法要解

一卷 ③存 ④新井石碑(元治元—昭和二

A. D. 1864—1927)述 ⑤東京鴻源社

十七憲法略解 ①(日) Ju-shichi-



一弘化四 A. D. 1770—1847)述 ⑤明治四

一刊 ①(龍大、研眞)

十七十八兩願隨聞記 ①(日)Ji-

shichi-ji-hachi-ryō-gwan-zui-mon-ki.

②一卷 ③存 ④專稱寺 ⑤寫本(谷大、宗大、三一六)

十七條禁制並裏十七條禁制

①(日)Ji-shichi-jo-kin-sei-narabini-ura-jo-shichi-jo-kin-sei. ②通

①淨土真宗教典志第二に曰く「附三法忍三十二相八十種好十地等覺諸口傳。初制稱宗祖授之覺信。後制稱三連師示之金森道西。蓋以偽造宗祖十七條制爲其基。漸加邪說者也。文義鄙拙。不足評破。安永七年戊戌三月。糾察祕事黨之日得之」云々。

十七條憲法

①(日)Ji-shichi-jo-kem-po. 舊訓十七條憲法 ②一卷 ③存

④春日政治編 ⑤大正一〇刊 ⑥(龍大、二〇九三・九)

十七條憲法師譜

①(日)Ji-shichi-jo-ken-po-shi-fu. ②二册 ③存 ④寫

十七說辨錄

①(日)Ji-shichi-seisan-ben-roku. ②一卷 ③存 ④憲瑞述 ⑤寫

本(谷大)

十七尊義述

①(日)Ji-shichi-son-gi-jutsu. (文)Shi-ohi-tsun-i-shu. 般若波

羅蜜多理趣經大樂不空三昧眞實金剛薩埵菩薩等一十七聖大曼荼羅義述、十七尊釋、大曼荼羅十七尊釋、十七聖大曼荼羅義述 ②一卷 ③存、大正一九・六一七 No. 1004-

縮開八、二二七・二、北1397武、南1401衡、元1389衡、明北144隸、清1444隸、麗1360宅、天378衡、明南171寬、N. 1451 ①

唐不空(神龍元)大曆九 A. D. 705—774)譯 ⑥般若波羅蜜多理趣經大樂不空三昧眞實金剛薩埵菩薩等一十七聖大曼荼羅義述の下を

十七尊釋

①(日)Ji-shichi-son-shu. 般若波羅蜜多

理趣經大樂不空三昧眞實金剛薩埵菩薩等一十七聖大曼荼羅義述、大曼荼羅十七尊釋、十七聖大曼荼羅義述、十七尊義述 ②一卷 ③存、大正一九・六一七 No. 1004-

十七題講義

①(日)Ji-shichi-dai-ge-ri. ②一卷 ③存 ④島地默雷(天保

九一明治四四 A. D. 1838—1911)述 ⑤寫本(龍大)

十七題講義

①(日)Ji-shichi-dai-ge-ri. ②一卷 ③存 ④島地默雷(天保

九一明治四四 A. D. 1838—1911)述 ⑤寫本(龍大)

十邪問辨

①(日)Ji-ja-mon-ben. (谷大)

②一卷 ③存 ④僧錄(享保八)天明三 A. D. 1723—1783)作

⑤淨土真宗教典志第二に曰く「十邪謂十種邪計。邪執一念、邪執多念、十劫邪義、妄依知識、發信等佛、無相安心、行別報謝、捨雜解解、自然報謝、結好情話」云々。

十種惡具足人回心入道法

①(日)Ji-shu-aku-ni-gu-soku-nin-e-shin-nyū-do-hō. (文)Shi-chung-é-chū-tsu-jen-hui-jia-ji-tao-fa. ②一卷 ③疑偽經

十種疑問落草談

①(日)Ji-shu-tenmon-raku-sō-dan. ②一卷 ③存

石川素童(天保一三)大正九 A. D. 1842—1920) ④明治三五刊(帝國、九二・一〇三) 明治三九刊(正大、一七五・六三)(龍大、二六五九・二二)(京大、日大末、五一三)

十種境界義

①(日)Ji-shu-kyō-kai-ji. (文)Shi-chung-é-chū-tsu-jen-hui-jia-ji-tao-fa. ②宋

證悟圓智(一紹興二八 A. D. 1138)述 ③【參考】諸宗章疏錄第二

十種行法記

①(日)Ji-shu-gyō-hō-ki. ②一軸 ③存 ④建長七寫 ⑤(寶善

提院)

十種供養法則

①(日)Ji-shu-kyō-yō-hōsoku. ②一卷 ③存 ④朝宗作 ⑤寫本(如來藏)

十種生死集

①(日)Ji-shu-shū-shū. ②一卷 ④最澄(神護景雲元)弘仁

一三 A. D. 767—822)撰 ⑤【參考】山家祖德撰述篇目集卷上

十種聖教

①(日)Ji-shu-shō-gyō. (谷大)

②二卷 ③存 ④梅村翠山校 ⑤明治一五刊 ⑥帝國、一四一・一八二)

十種神寶

①(日)Ji-shu-jin-pō. ②一軸 ③存 ④(金剛三昧院)

十種神寶聞書

①(日)Ji-shu-jin-pō-kiki-gaki. ②一卷 ③存、慈雲尊者全

集第一〇輯 ④飲光(享保三)文化元 A. D. 1718—1804)說、天如(一文化一〇 A. D. 1813)記 ⑤古寫本 ⑥(高大)(河内長榮寺)

十種神寶口訣

①(日)Ji-shu-jin-pō-ku-ketsu. ②一包 ③存 ④徳川時代

十種神寶圖

①(日)Ji-shu-jin-pō-zu. ②一卷 ③存、弘法大師全集第一四卷

(偽作部)、慈雲尊者全集第一〇(高野山相傳)と二種を載せてある。その圖形は同一であるが彩色は相異して居る。弘法大師全集に載せるものは彩色に代ふるに縦線斜線等を以てせるのみで明白にわからなすが山本と略同じ様である。慈雲尊者全集に載せるものは最初に弘仁十三年東寺に於て眞雅に授けたる旨記せる印信様の文あり、次に八握劍・生玉・蛇比禮など十種の圖を描き、右は天長二年伊勢寶殿に於て寫したる旨記してある。弘法大師全集に載せるものは最初の文句がな。

十種勅問

①(日)Ji-shu-choku. (吉祥眞雄)

mon. ②一卷 ③存 ④曹洞宗務院編 ⑤

【參考】 禪籍目錄

十種勅問講義

①(日) Jis-shu-cho = kin-mon-ko-gi. ②存、曹洞禪講義第八卷之内 ③富谷龍溪述 ④大正六刊 ⑤東京光融館

十種勅問變對集

①(日) Jis-shu-choku-mon-go-tai-shu. ②一卷 ③存、大正八二・四二二No. 2588 ④登山紹瑾(文永五一正中) A. D. 1268—1325) 語、侍者編 ⑤元亨元(A. D. 1321)

⑥人皇九十六代後醍醐天皇の十種の勅問と之に對する登山紹瑾禪師の委曲叮嚀なる奉答文とを併せ記して一卷となせる書なり。即ち元亨元年八月天皇は覺明禪者を能登の總持寺に御遣はしになり、禪學に於て解し難き十種の問題を御提出遊ばされしに禪師は直ちに之れに奏對し奉れり。その理義極めて明白なりしかば天皇歡感斜ならず紫衣を賜ひ、同年九月十四日「總持寺」の勅額を下賜せられ總持寺をして特に一宗の僧綱大官寺に列せしむ。此の十種勅問には古來總持寺傳と永光寺傳との二種あり、大體に於て同一なるも多少の差異あり。

十頌念佛義

②(日) Jū-ni-en-pa = tsu-gi. ③二葉 ④存 ⑤良義(一延享四 A. D. 1747) 述 ⑥寫本(正大、一一五二・一〇九)

十誦戒本

①(日) Jū-ju-kai-hon. (支) Shih-sung-chieh-pen. 十誦比丘波羅

提木又戒本、十誦波羅提木又戒、十誦律比丘戒本 ②一卷 ③存、大正、二三・四七〇 No. 1436、縮張七、卅一九・八、北903外、南917外、元913外、明北1183外、清1174外、麗909隨、天905外、指863隨、法890隨、至1217離、明南1261隨、Nj. 1166 ④姚秦鳩摩羅什(建元二—義熙九 A. D. 344—413 一說弘始一一或義熙中寂譯 ⑤【參考】 諸宗章疏錄第一

十誦羯磨

①(日) Jū-ju-kom-ma. (支) Shih-sung-chieh-mo. ②一卷 ③缺 ④【參考】 法經錄第五、七誦錄第五、靜泰錄第五

十誦羯磨比丘要用

①(日) Jū-ju-kom-na-bi-ku-yō-yō. (支) Shih-sung-chieh-mo-pi-chiu-pao-yang. 十誦僧尼要事羯磨、十誦比丘要用、略要羯磨法 ②一卷 ③存、大正、二三・四九六No. 1439、縮張七、卅一九・八、北907訓、南93訓、元930訓、明北1160受、清1160受、麗927傳、天922訓、指879傳、法910隨、至1233廉、明南1275叔、Nj. 1166 ④宋代僧撰

⑤十誦の廣律の中から、實際上の必要な羯磨作法に關する項目を、抄出して列擧したものである。「宋沙門釋僧球、於三楊郡中興寺、依律撰出」と署して居る。前序には、「羯磨隨筆、乃有衆多、且依三成文、略三出要用、其餘不尼在於大本」と言つて居る。之れによりて其の要旨は察せらるゝのである。撰者僧球は、羅什の弟子僧業の門に學んだものと云ふ。

十誦比丘戒本

①(日) Jū-ju-bi-ku-kai-hon. (支) Shih-sung-pi-chiu-chieh-pen. 十大比丘戒 ②一卷 ③缺 ④符秦曇摩持、竺佛念共譯 ⑤第一譯 ⑥【參考】 開元錄第一五、貞元錄第二五

十誦比丘戒本

①(日) Jū-ju-bi-ku-kai-hon. (支) Shih-sung-pi-chiu-chieh-pen. 十誦比丘尼戒本 ②一卷 ③存、大正、二三・四七九No. 1437、縮張七、卅一九・八、北904外、南918外、元914外、明北1183外、清1155外、麗906隨、天906外、指867隨、法894隨、至1218離、明南1262外、Nj. 1161 ④劉宋法顯(一隆安三—義熙二) A. D. 399

十誦比丘尼戒所出本末

(日) Jū-ju-bi-ku-ni-kai-sho-shutsu-hon-ma = tsu. (支) Shih-sung-pi-chiu-ni-chieh-so-chu-pen-mo. ①一卷 ③缺 ④姚秦代竺佛念譯 ⑤第三譯 ⑥【參考】 開元錄第一五、貞元錄第二五

十誦比丘尼戒本

①(日) Jū-ju-bi-ku-ni-kai-hon. (支) Shih-sung-pi-chiu-chieh-pen. 十誦比丘尼戒本 ②一卷 ③存、大正、二三・四七九No. 1437、縮張七、卅一九・八、北904外、南918外、元914外、明北1183外、清1155外、麗906隨、天906外、指867隨、法894隨、至1218離、明南1262外、Nj. 1161 ④劉宋法顯(一隆安三—義熙二) A. D. 399

④十誦律によりて、集めて之れを作つたもので全然一廣律と一致し居る。こゝに法顯集出とあるのは、姑らく一般の傳に従ふもので、實は法顯の作つたものではない。宋の法顯の中に成つたもので、顯字は顯字の誤りである。高僧傳には、蕭齊の時に、勅により僧主となつた人で、法香の弟子とある。法香の傳統は詳かでない。長干寺に居たとあるが、此の書にも「宋長干寺沙門釋法顯集出」とあるので、其の法顯は、法顯の誤りであることは明かである。法顯は、長干寺に居たと云ふ傳はない。高僧傳の法顯傳には、十誦戒本、羯磨等を撰したとあるが、かゝる戒本とあるのは、尼戒本の誤傳であらう、何となれば、出三藏記集には、法顯撰出の十誦比丘尼戒本の名が明かに掲げられて居るからである。尙ほ出三藏記集には、此の法顯の、十誦律羯磨雜事の名を掲出されて居る所より察するに、高僧傳の所謂戒本、羯磨は此の尼戒本と羯磨雜事なることは疑がないと思ふのである。

十誦比丘尼波羅提木又戒本

①(日) Jū-ju-bi-ku-ni-pa-tai-moku-sha-kai-hon. (支) Shih-sung-pi-chiu-ni-po-to-ti-mu-cha-chieh-pen. 十誦比丘尼大戒、比丘尼大戒、比丘尼波羅提木又戒本、十誦律比丘尼戒本 ②一卷 ③存、大正、二三・四七九No. 1437、縮張七、卅一九・八、北904外、南918外、元914外、明北1183外、清1155外、麗906隨、天906外、指867隨、法894隨、至1218離、明南1262外、Nj. 1161 ④劉宋法顯(一隆安三—義熙二) A. D. 399

十誦比丘尼波羅提木又戒本

①(日) Jū-ju-bi-ku-ni-pa-tai-moku-sha-kai-hon. (支) Shih-sung-pi-chiu-ni-po-to-ti-mu-cha-chieh-pen. 十誦比丘尼大戒、比丘尼大戒、比丘尼波羅提木又戒本、十誦律比丘尼戒本 ②一卷 ③存、大正、二三・四七九No. 1437、縮張七、卅一九・八、北904外、南918外、元914外、明北1183外、清1155外、麗906隨、天906外、指867隨、法894隨、至1218離、明南1262外、Nj. 1161 ④劉宋法顯(一隆安三—義熙二) A. D. 399

十誦比丘尼波羅提木又戒本

①(日) Jū-ju-bi-ku-ni-pa-tai-moku-sha-kai-hon. (支) Shih-sung-pi-chiu-ni-po-to-ti-mu-cha-chieh-pen. 十誦比丘尼大戒、比丘尼大戒、比丘尼波羅提木又戒本、十誦律比丘尼戒本 ②一卷 ③存、大正、二三・四七九No. 1437、縮張七、卅一九・八、北904外、南918外、元914外、明北1183外、清1155外、麗906隨、天906外、指867隨、法894隨、至1218離、明南1262外、Nj. 1161 ④劉宋法顯(一隆安三—義熙二) A. D. 399

十誦比丘尼波羅提木又戒本

①(日) Jū-ju-bi-ku-ni-pa-tai-moku-sha-kai-hon. (支) Shih-sung-pi-chiu-ni-po-to-ti-mu-cha-chieh-pen. 十誦比丘尼大戒、比丘尼大戒、比丘尼波羅提木又戒本、十誦律比丘尼戒本 ②一卷 ③存、大正、二三・四七九No. 1437、縮張七、卅一九・八、北904外、南918外、元914外、明北1183外、清1155外、麗906隨、天906外、指867隨、法894隨、至1218離、明南1262外、Nj. 1161 ④劉宋法顯(一隆安三—義熙二) A. D. 399

十誦比丘尼波羅提木又戒本

①(日) Jū-ju-bi-ku-ni-pa-tai-moku-sha-kai-hon. (支) Shih-sung-pi-chiu-ni-po-to-ti-mu-cha-chieh-pen. 十誦比丘尼大戒、比丘尼大戒、比丘尼波羅提木又戒本、十誦律比丘尼戒本 ②一卷 ③存、大正、二三・四七九No. 1437、縮張七、卅一九・八、北904外、南918外、元914外、明北1183外、清1155外、麗906隨、天906外、指867隨、法894隨、至1218離、明南1262外、Nj. 1161 ④劉宋法顯(一隆安三—義熙二) A. D. 399

十誦比丘尼波羅提木又戒本

①(日) Jū-ju-bi-ku-ni-pa-tai-moku-sha-kai-hon. (支) Shih-sung-pi-chiu-ni-po-to-ti-mu-cha-chieh-pen. 十誦比丘尼大戒、比丘尼大戒、比丘尼波羅提木又戒本、十誦律比丘尼戒本 ②一卷 ③存、大正、二三・四七九No. 1437、縮張七、卅一九・八、北904外、南918外、元914外、明北1183外、清1155外、麗906隨、天906外、指867隨、法894隨、至1218離、明南1262外、Nj. 1161 ④劉宋法顯(一隆安三—義熙二) A. D. 399

名所行發⑩(名庫書)著所現⑪ 月年の刊寫⑫(書考參書釋註)書末⑬ 說解容内⑭ 代年作著⑮ 著者⑯ 缺存⑰ 數卷⑱(名書)名題⑲ 號略字款

十誦波羅提木叉戒、十誦戒本 ②一卷 ③  
 存、大正二・三・四七〇No.1435、縮張七、  
 二一九・八、北903外、南917外、元913外、  
 明北115外、清115外、麗909隨、天905  
 外、指863隨、法890隨、至1217離、明南  
 1261隨、Nj.1161 ④鳩摩羅什譯 ⑤光始  
 二一義照八(A. D. 402—412)

⑥十誦律の戒本であるが、然しこれは十誦  
 律の廣本が非若羅等によつて譯せられ、羅  
 什之れに參加して助譯する其の譯出であつ  
 て、原本は多分羅什の將來であらう。羅什  
 は、元來支那に來る前は、律に就いては十  
 誦を學んだものだと言はれて居る。此の戒  
 本は此れ等の關係から、其の自ら携へて來  
 たもので、早く之れを譯出したのも其の理  
 由によるのであらう。其の内容は、後に譯  
 した廣律に比較して見ると其の間に多少  
 の相違がある。例へば最後の業學に於て、  
 廣律は一百七戒であるが、此の戒本には、  
 一百十三戒を教へて居るが如き是れであ  
 る。(境野黃洋)

**十誦律** ①(日)Tsu-ju-ritsu (支)Shih-  
 sung-tu. ②六十一卷 ③存、大正二・三・  
 一No.1435、縮張、三一七、二一七、四一七  
 北893從至廿、南912職至廿、元902職至廿、  
 明北110職至榮、清110職至榮、麗897攝  
 至以、天894職至以、指853攝至以、法881  
 攝至以、至1207猶至懷、明南1252去至貴、  
 Nj.1115—1144 ④後秦非若多羅、羅什共  
 譯

⑤支那廣律傳譯の四大律中の一で、しかも  
 廣律としては完全なるものでは、最初のも

のである。四分も、僧祇も、五分も、皆多  
 少後の翻譯である。尤も之れより前に、道  
 安等の力で、耶舍の譯出した鼻那耶律があ  
 る、これは十誦の異譯であるが、極めて簡  
 略なもので、此の十誦律ほど完備したもの  
 ではない。此の十誦律は、元來非若多羅  
 (Puyakara)が、全文を暗誦して來たので、  
 之れを本とし、羅什が多分傳語して支那語  
 としたのであらうが、然しこれは未だ譯  
 了に至らない前に、不幸にして非若多羅は  
 病死したので、終に中絶となつて居たもの  
 である。然るに其の後曇摩流支(Dharmas-  
 truci)が來て、此の人は十誦の原本を持つ  
 て來たのである。其の事を傳聞した廬山の  
 惠遠が、十誦の譯の完了して居ないのを最  
 も遺憾とし、遠く羅什に勧め、此の曇摩流  
 支を請うて、前の非若多羅の本を續譯せし  
 め、終に能く之れを成就することを得たも  
 のである。故に實は非若多羅と曇摩流支と  
 の二人を譯主として出來たものである。此  
 の十誦律は、蓋し印度に於ける部派佛教と  
 して知らるゝ二十派中の薩婆多部即ち一切  
 有部によりて採用せられし律であつて、此  
 の有部は、二十派中で最も原始に近いもの  
 であるだけ、此の律も亦、恐らく律中で成  
 立の比較的古いものでないとの想像が出來  
 る。十誦の名稱は、十回に誦出された意味  
 で、此の律の成立した時に、十回に分けて  
 述べたものだといふのである。故に此の律  
 の内容は十段に分けられて居るので、それ  
 は大體左の如きものである。

初誦……四波羅夷法  
 十三僧殘法  
 二不定法  
 二誦……三十尼薩著波逸提法(捨墮法)  
 九十波逸提法(單墮法)  
 三誦……四波羅提提舍尼法(向彼悔法)  
 一百七業學法  
 七滅淨法  
 四誦……七法……安  
 受具足戒法 布薩法 自恣法  
 居法 皮革法 醫藥法 衣法  
 五誦……八法……八  
 迦絺那衣法 俱舍彌法 瞻波法  
 漿茶盧伽法 僧殘悔法 遮法 臥  
 具法 淨事法  
 六誦……雜誦……五  
 調達事 初三法 雜法中二十法(上下)  
 後二十法(上下)  
 七誦……尼律……六  
 八波羅夷法 十七僧殘法 三十捨  
 墮法 百七十八單墮法 八提舍尼  
 法 比丘尼八敬法  
 八誦……增一法……十一  
 十一法まで  
 九誦……優波離問法 九部……二十四  
 九部……二十四  
 十誦……比丘誦  
 二種毘尼及雜誦  
 波羅夷法 姪・姪・姪  
 僧伽婆尸沙法……七

以上十誦を細分すれば、八十部となるので  
 ある。古來第一結集の際、優波離座に登り  
 て、八十回に誦出せるものが所謂八十誦律  
 であつて、是れが原始戒律であると言はれ  
 て居るが、此の八十誦と稱するのは、多分

此の十誦の八十部のことであらうと言ふ説  
 が、松本文三郎博士によつて提唱された、  
 興味ある問題である。  
 ⑦(參考) 諸宗章疏卷第一 ⑧寫本五卷一  
 册(京大、藏・一・一)平安朝時代寫(高大、  
 寄・一・一三)  
 (境野黃洋)

**十誦律戒本私記** ①(日)Tsu-ju-ri-  
 tsu-kai-hon-shi-ki. (支)Shih-sung-tu-  
 chieh-pen-ssai-chi. ②二卷 ③道成述 ④  
 (參考) 新編諸宗教藏總錄第二

**十誦律羯磨雜事** ①(日)Tsu-ju-risu-  
 kom-ma-zō-ji. (支)Shih-sung-tu-chieh-  
 mo-tsa-shih. ②一卷 ③缺 ④(參考)  
 法經錄第五、仁壽錄第五、靜泰錄第五

**十誦律釋雜事問** ①(日)Tsu-ju-ri-  
 tsu-shaku-zō-ji-mon. (支)Shih-sung-tu-  
 shih-tsa-shih-wen. ②二卷 ③(參考)  
 仁壽錄第五、靜泰錄第五

**十誦律比丘戒本** ①(日)Tsu-ju-ri-  
 tsu-bi-ku-kai-hon. (支)Shih-sung-tu-pi-  
 kin-chieh-pen. 十誦比丘波羅提木叉戒  
 本、十誦波羅提木叉戒、十誦戒本 ②一卷  
 ③存、大正二・三・四七〇No.1435、縮張七、  
 二一九・八、北903外、南917外、元913外、  
 明北115外、清115外、麗909隨、天905  
 外、指863隨、法890隨、至1217離、明南  
 1261隨、Nj.1160 ④姚秦鳩摩羅什(建元  
 二一義照九A. D. 341—413)一説弘始一一  
 或義熙中寂)譯

**十誦律比丘尼戒本** ①(日)Tsu-ju-  
 ritsu-bi-ku-ni-kai-hon. (支)Shih-sung-tu-  
 pi-chi-ni-ni-chieh-pen. 十誦比丘尼波羅提

木叉戒本、十誦比丘尼大戒、比丘尼大戒、比丘尼波羅提木叉戒本 ②一卷 ③存、大正二三・四七九No.1437、縮張七、卅一九・八、北904外、南918外、元914外、明北1135外、清1135外、腰906隨、天906外、指867隨、法394隨、至1218離、明南1263外、No.1161 ④劉宋法顯(一隆安三一義熙二二A.D. 399—416)集出

十誦律毘尼序

①(日) Ju-jū-ritsu-bi-ni-jo. (支) Shih-sung-lu-pi-ni-jshu.

③三卷 ④存、卅一九・七 卑摩羅叉譯 ⑤五百結集、七百結集等の事を叙し、次ぎに雜品、因緣品に分ち、總て三卷四品に分ち、略ぼ十誦律の補遺の如きものであらう。高僧傳には、毘摩羅叉を傳して、其の中に「羅什所譯十誦本五十八卷、最後一誦謂明受戒法、及諸成善法事」、遂其義要、名爲「善誦」とある。但しこゝに五十八卷、最後の誦とあるのは、五十八卷より最後の第十誦となることを指すので、これは五十九卷で終つて居る。卑摩羅叉(Vinaya-sūtras)は之れを不完全とし、之れに續いて二卷を譯し、足して六十一卷としたので、之れを善誦と言つて居るのである。即ち第六十卷五百結集を善誦毘尼序卷上とし第六十一卷七百結集と親品とを善誦毘尼序卷中とし、最後の因緣品を毘尼序卷下として居る。毘尼序とあるので、卷初の序の如く思はれるが、實は最後の補遺である。卑摩羅叉は屬實人で、羅什の十誦を學んだ師であつて、羅什より後れて支那に來た人である。(境野黄洋)

十宗故實

①(日) Jis-shū-ko-jishi. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、餘大・二九三〇)

十宗旨

①(日) Jis-shū-shi. ②一卷 ③存 ④毒龍 ⑤參考 ⑥禪籍目錄

十宗要記

①(日) Jis-shū-yō-ki. ②一卷 ③存 ④圓爾辨圓(建仁二一弘安三A.D. 1202—1280)述 ⑤參考 ⑥禪籍目錄

十宗略記

①(日) Jis-shū-ryaku-ki. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第三、國文東方佛教叢書第一 ④眞道(一萬治二A.D. 1659)撰 ⑤承應元(A.D. 1652)

⑥本書は眞道(山門東塔學頭正覺院に轉住して名を豪貴と改む)が檀越某氏の願望により十宗(三論、法相、華嚴、俱舍、成實、律、天台、眞言、禪、淨土)の宗義大綱及び三國傳來の略史を集録して與へたもの。眞道は本書に追加を加へ、天台宗の修行には五派(台、密、禪、戒、念佛)ある事。法華の修行には有相安樂行と無相安樂行の二種の行がある事。有相行の中には但讀誦と義讀誦とがある事。慧心流の念佛と善導流の念佛とは異なる事。日蓮宗は謗法惡人なる事の五條を附記し、跋語には未だ修文が整つてゐないから後賢の刪補を俟つといつてゐる。この檀越是「新たに台門に歸す」といふから日蓮宗信者であつたものが眞道師の教化で改宗したものであらう。眞道師は元は日蓮宗徒であり天台學を習はんと欲して叡山に登り遂に台宗に歸入した人である。故にこの檀越是從來から眞道師の教化を受けてゐた人であり、師が轉宗したから

檀越も師に従つて改宗したのであらう。この故に本書でも天台宗の説明が最も詳細であり他の宗は簡略に述べてある。本書の所説は「集録」したと述べてある通り極めて確健で新説はない。天台宗の概要を知るために他の九宗の歴史及び教義を述べたものと見ればよいと思ふ。

十宗略說

①(日) Jis-shū-ryaku-sei-su. (支) Shih-tung-hao-shuo. ②一卷 ③存、楊仁山居士遺書第四冊之内 ④清揚文會

十宗略談

①(日) Jis-shū-ryaku-tan. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、二一五四・七)

十住經

①(日) Jū-kyō. (支) Shih-chu-king. (梵) Dasahānika-sūtra ②四卷或六卷 ③存、大正一〇・四九七No.286、縮天一〇、卅八・三、北1009、南1009、元286、明北1011、腰99、明南99壹、No.105 ④鳩摩羅什(建元二一義熙九A.D. 344—413 一説弘始一一或義熙中寂)佛陀耶舍共譯 ⑤弘始一〇(A.D. 408)

⑥華嚴經十地品(六十華嚴第二十二品、八十華嚴第二十六品)に相當するものにして、菩薩十地の學行を詳説したもの。十地品の別行經と云はるゝも寧ろ本經は獨立の經典にして、是れが中心となり増廣發達して更に大なる華嚴經を生じたものならんか。本經の翻譯は諸經錄の示す如く羅什、佛陀耶舍と共に出す處なるも、華嚴傳等の傳

ふる如くその功は擧る耶舍に輸すべきもの如し。即ち羅什は龍樹法孫なるに拘らず、華嚴教義に通ぜざる處ありしか、弘始十年本經の譯出に取掛るや、耶舍傳(高僧傳第一)に「羅什出十住經、一月餘日疑難猶豫、尙未操筆、耶舍既至、其相既決、辭理方定、道俗三千餘人皆歎其當要」と云へる如く、疑難躊躇漸く耶舍の來朝して是れを助くるに依つて完成したのである。

本經はその説く所に依れば佛一時(異譯經には成道第二七日)諸大菩薩と俱に他化自在天王宮摩尼寶殿に在せる時、金剛藏菩薩佛の加被力の下に他方世界より來集せる三十七菩薩の中、解脫月菩薩を對告衆として説かれたものである。其結構を見るに、一經の序説として菩薩の徳を歎じ其名を列擧し、入定加持を明し、解脫月の三請に依りて十地を廣説する所以を述べ、次に正宗としては十地各別に其の行相、地果を細説し更に喩に寄せて十地の徳を叙し、終りに十億佛國微塵數諸菩薩の讚歎證誠を明してある。最後に流通分として諸天諸菩薩の歡喜奉行を説いて一經を終る。十地の行相、地果に就ては最も組織ある説明をなし然も細微に亘つて居る。初歡喜地は菩提心を發し、決定的に大智大悲を成就し得ることを確め、心に大歡喜を得る境地として、此中に十大願十心を起し、主として布施波羅蜜を學行すると説き、二離垢地は發心より進んで實行に移り先づ十善道を行ひ三業の淨化せらるゝ境地にして、十種直心を起し、十善道を修して自利利他を満足する。戒波

羅蜜を主とすると説き、三明地は吾々の執着を離れた世界の眞實相を觀察して眞の同情を起し、苦海に沈淪する生類を救はんと求法に努むる境地にして、十種の深心を起し四禪、四空定を修して忍辱波羅蜜を主とすると説き、四空地は一切諸法の實體を明きらめ直智の輝き熾然たる境地にして、十法明門を修し三十七道品を行じ知恩教化に努力し精進波羅蜜を主とすると説き、五難勝地は一切諸法の本質を究め事象の平等觀に徹底する境地にして、十平等心を起し四諦觀に依つて世界の如實相を究め、衆生教化の爲めに世間一切の學藝を修め禪波羅蜜を中心とすると説き、六現前地は一切の束縛を脱した眞の自由境にして、十平等法によりて此の境地に入り、十二因縁を順逆十

種の觀察して三解脱門を現はす、般若波羅蜜が修行の中心であると説き、七遠行地は方便慧を成就した自然の流露として一切の行爲が慈悲行と現はれ完成せらるゝ境地、十種の妙行を擧げて一切の佛行を該攝し、方便波羅蜜を主とすると説き、八不動地は一切の行爲が自然に行はれ、通常の認識の域を脱して無心の如く一切の動亂より免れ、一行一即一切行、一切行即一行にして、萬有即佛身の眞理は徹底する無生法忍を得、願波羅蜜を主とすると説き、九妙善地は萬有一切が互に熔融無礙なる事實を知る完全なる智慧の活動する境地にして、一行即一切行の事實は佛の轉法輪に見らるゝとして四無礙智を擧げ、力波羅蜜が配してある。十法雲地は學道究竟して離れ難き一切

の迷妄を脱却し、萬德萬靈の洋々として宇宙に漲るを覺ゆる境地にして、佛法の第一繼嗣者として授けらるゝ資格と法界の風光等を明にし智波羅蜜が配してある。  
本經の異譯即ち華嚴經十地品の異譯と云はるゝもの諸經錄に多數載せらるゝを見ても、印度に於て本經の流通年久しく龍樹、世親、堅慧、金剛軍等の註釋書ありて其の傳弘の盛なりしより延て支那流傳翻譯も從て各種異本が齎されたるが如く其の盛況を思はしむるものがある。然し經錄の杜撰、中には薄弱なる根據に依りて眞偽を問はず濫載せるものも相當あれば、それ等を吟味し本經の異譯として妥當と認めらるゝものは左の如きものならん。一、漸備一切智德經五卷、西晉竺法護譯。二、十住經十二卷、西晉聶道真譯(缺)。三、六十華嚴中第二十二地品五卷、東晉佛跋跋跋譯。四、十地經論中の經、後魏菩提流支、勒那摩提共譯。五、八十華嚴第二十六地品六卷、唐實叉難陀譯。六、佛說十地經九卷、唐戶羅達摩譯。各異譯を比較するに其の内容殆ど増減なく、同一梵本より譯出せられたるが如くである。各本別人の手になり、然も年月を隔つこと前後五百年に亘れば全く異なきにあらざるも、其差異僅少にして、添加増廣の特に云ふべきものがない。是れ他經と比して著しく異なる處である。

①第二譯 ⑦(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四  
⑧十住經疏 ①(日) Jū-jū-kyō-shū. (支) Shi-ju-ching-su. ②三卷 ⑦(參考) 東城傳燈目錄卷上  
⑨十住遮難抄 ①(日) Jū-jū-shū-nan-shō. ②一卷 ⑤存、大正七七・六八五No. 344  
⑩觀山の五大院安然がその著教時間答に於て、弘法大師の十住心建立の義趣について失を擧げて批難してあるに對して、その難を遮して、却つて安然の説を破釋した書である。教時間答は卷二に五失を擧げ、卷一に別に數失を出してあるので、本書には最初に五失を破し、次に卷一所説の失を救つてゐる。撰者は未詳。

古寫本 ①(梅尾高山寺藏) (小田慈舟) 十住心義林 ①(日) Jū-jū-shin-gi. ②二卷 ⑤存、大正七  
七・八三七No. 345+ ④宥快(貞和元)應永  
二二A.D. 1345-1416)述

眞言宗の重要教義の一たる十住心について、その建立の所依・名義・行相・義趣等を釋述した書で、弘法大師の十住心論十卷、祕藏寶論三卷の要旨を約説したものである。殊に建立の義趣については、相説・旨陳・相説旨陳合論・機根契當・心續生・唯密・顯密合論・唯顯の八種の十住心建立の法相あることを示し、唯密の中に於て更に約漸次眞言行者十住心、約直往行者淺略十住心、約深祕十住心の三を開きて都合十種の建立相を説き、更にこれを要約して、

顯密合論に約する十住心、能寄齊の眞言行者に約する十住心、祕密曼荼羅の功德に約する十住心の三種を明してゐる。此の三種の建立は同じく宥快の撰にかゝる祕藏寶論鈔に説く所の、顯密合論の十住心、眞言行者淨心次第轉昇に約する十住心、五種三昧道に約する十住心、普門大日の萬德を開示せる十住心の四義と並べ稱せられ、古來此の兩者を合様して二門四義と説き、學密の徒の指針としてゐる。

①(注釋) 略解二卷(快辨、寬延三、十一月撰)。科註三卷(窪田(改姓重松)寬勝撰、明治二一刊) ⑤延寶七刊、明治一九刊 ④(正大、一四三一・一六一一六二)龍大、二六六一・三二(高大、寄・一・四〇)(哲、ま・八・中・二九)(京專) (小田慈舟)

十住心義林 ①(日) Jū-jū-shin-gi. ②三卷 ⑤存 ④窪田寬勝(文久三)昭和三A.D. 1863-1928)註 ④明治二一刊(龍大、二六六一・四一) (正大、一四三一・四四、一五八)(高大、寄・一・四〇)(立大、A二〇・二八) 明治二七刊(京專) 明治三五刊(帝國、二二・二四五)

十住心義林聽書 ①(日) Jū-jū-shin-gi-shin-kō. ②一卷 ⑤存 ④瀨川大憲述 ④(京專)

十住心義林教誡律義兩支譯 ①(日) Jū-jū-shin-gi-kyō-ritsu-gō. ②一卷 ⑤存 ④安全靈海述 ④明治三〇刊 ④(龍大、二六六一・三五)(帝國、一〇八・八三)

十住心義林教誡律義兩支譯 ①(日) Jū-jū-shin-gi-kyō-ritsu-gō. ②一卷 ⑤存 ④安全靈海述 ④明治三〇刊 ④(龍大、二六六一・三五)(帝國、一〇八・八三)

十住經 ①(日) Jū-jū-kyō. (支) Shi-ju-ching. ②十二卷 ⑤缺 ④西晉聶道真(太康元)永嘉六A.D. 280-312)譯

十住經 ①(日) Jū-jū-kyō. (支) Shi-ju-ching. ②十二卷 ⑤缺 ④西晉聶道真(太康元)永嘉六A.D. 280-312)譯

十住經 ①(日) Jū-jū-kyō. (支) Shi-ju-ching. ②十二卷 ⑤缺 ④西晉聶道真(太康元)永嘉六A.D. 280-312)譯

十住經 ①(日) Jū-jū-kyō. (支) Shi-ju-ching. ②十二卷 ⑤缺 ④西晉聶道真(太康元)永嘉六A.D. 280-312)譯

十住經 ①(日) Jū-jū-kyō. (支) Shi-ju-ching. ②十二卷 ⑤缺 ④西晉聶道真(太康元)永嘉六A.D. 280-312)譯

十住經 ①(日) Jū-jū-kyō. (支) Shi-ju-ching. ②十二卷 ⑤缺 ④西晉聶道真(太康元)永嘉六A.D. 280-312)譯

十住經 ①(日) Jū-jū-kyō. (支) Shi-ju-ching. ②十二卷 ⑤缺 ④西晉聶道真(太康元)永嘉六A.D. 280-312)譯

名所行發⑩(名庫書)著所現⑩ 月年の刊寫⑩(書考參書釋註)書末⑩ 説解容内⑩ 代年作者⑩ 著者⑩ 缺存⑩ 數卷⑩(名書)名題⑩ 號略字數

**十住心義林分科** ①(日) Jū-jū-shin-gi-rin-bun-kwa. ②一卷 ③存 ④寫本 (京專)(高大・寄・一・四〇)

**十住心義林略解** ①(日) Jū-jū-shin-gi-rin-ryaku-ge. ②二冊 ③存 ④天明二寫 ⑤(高大・寄・一・四〇)

**十住心廣名目** ①(日) Jū-jū-shin-kō-myō-moku. ②十住心論廣名目 ③六卷 ④存 ⑤印融(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519)述 ⑥十住心論廣名目(下を

見よ。⑦(正大・一四三一・一六四)(立大・A 二〇・七四)

**十住心廣名目** ①(日) Jū-jū-shin-kō-myō-moku. 冠註十住心廣名目 ②六卷 ④存 ⑤印融(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519)述 秀翁(寛永三—元祿一 A. D. 1626—1699)註 ⑥永正七刊(高大・寄・一・四〇)(哲・ま・八・中・一七・a・三・中・二)寛文六刊(正大・一四三一・四六一—四七、一六三)(京專)(谷大・餘大・五五)

**十住心講話** ①(日) Jū-jū-shin-kō-wa. ②一卷 ③存 ④小林正盛著 ⑤明治四四刊 ⑥(高大・寄・一・四〇)(正大・一四二・一三四)

**十住心所依經疏文事** ①(日) Jū-jū-shin-sho-e-kyō-sho-mon-no-ko'to. ①一卷 ②存 ③(京專)

**十住心續生抄** ①(日) Jū-jū-shin-zoku-sho-shō. ②十三卷 ③存 ④賢實(正慶二—應永五 A. D. 1333—1398)述 ⑦

【參考】真言宗全書刊行豫定目錄

**十住心第九私鈔** ①(日) Jū-jū-shin-dai-ku-shi-shō. ⑦(參考) 章疏錄

**十住心第九雜勸文** ①(日) Jū-jū-shin-dai-ku-zak-kam-mon. ⑦(參考) 章疏錄

**十住心第五勸文** ①(日) Jū-jū-shin-dai-go-kam-mon. ②二卷 ③賴瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304)述 ⑦(參考) 章疏錄

**十住心第四勸文** ①(日) Jū-jū-shin-dai-shi-kam-mon. ②一卷 ③(參考) 章疏錄

**十住心第八開書** ①(日) Jū-jū-shin-dai-hachi-ki-ki-gaki. ②二卷 ③(參考) 章疏錄

**十住心得名略文事** ①(日) Jū-jū-shin-toku-myō-ryaku-mon-no-koto. ②一冊 ③存 ④文明一〇寫 ⑤(寶壽院)

**十住心之一枝** ①(日) Jū-jū-shin-ito-shi. ②五卷 ③存 ④普學應述 ⑤(京專)

**十住心能攝之事** ①(日) Jū-jū-shin-nō-shō-no-koto. ②一紙 ③存 ④什遍(享德三—永正一三 A. D. 1454—1516)口 ⑤天文一八寫 ⑥(寶龜院)

**十住聞記** ①(日) Jū-jū-mon-ki. ②七卷 ③存 ④賴實述 ⑤(參考) 真言宗全書刊行豫定目錄

**十住心略記** ①(日) Jū-jū-shin-ryak-ki. ②一帖 ③存 ④文明六寫 ⑤(寶壽院)

**十住心論** ①(日) Jū-jū-shin-ron. 祕密曼荼羅十住心論 ②十卷 ③存 ④大正七

七・三〇三 No. 2635 弘法大師全集第二 ①空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)述 ②祕密曼荼羅十住心論(下を)見よ。 ③建長七刊(高大・寄・一・四〇)寛文七刊(立大・A 二〇・二五)(龍大・二六六一・三六一—三七)(京專)(哲・け・一・左・一九)

**十住心論** ①(日) Jū-jū-shin-ron. 祕密曼荼羅十住心論冠註、十住心論冠註、冠註十住心論 ②十卷 ③存 ④亮海如實(元祿一一—寶曆五 A. D. 1698—1755)述 ⑤寶曆三刊 ⑥(龍大・二六六一・三八、研佛)(谷大・餘大・一四八〇)(京專)(高大・寄・一・四〇)(立大・A 二〇・二六)(哲・ま・八・左・二〇)(正大・一四三一・四三三)

**十住心論** ①(日) Jū-jū-shin-ron. 撰冠註十住心論 ②十卷 ③存 ④刊本(龍大・二六六一・三九)(高大・寄・一・四〇)

**十住心論** ①(日) Jū-jū-shin-ron. 國譯十住心論 ②十卷 ③存、國譯密教論釋第一 ④探本賢曉譯 ⑤(龍大、研佛)

**十住心論一卷論義** ①(日) Jū-jū-shin-ron-ik-kwan-ron-gi. ②一冊 ③存 ④南北朝—足利初期寫 ⑤(寶壽院)

**十住心論開題** ①(日) Jū-jū-shin-ron-kai-dai. ②一卷 ③存 ④智海述 ⑤(參考) 真言宗全書刊行豫定目錄

**十住心論各目大意** ①(日) Jū-jū-shin-ron-kaku-moku-tai-i. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

**十住心論各目拔書** ①(日) Jū-jū-shin-ron-kaku-moku-nuki-gaki. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

**十住心論覺心鈔** ①(日) Jū-jū-shin-ron-kaku-shin-shō. ②三卷 ③道範(元曆元—建長四 A. D. 1181—1252)說建長四年七五叙 ④(參考) 章疏錄

**十住心論肝要鈔** ①(日) Jū-jū-shin-ron-kann-yō-shō. 十住心論鈔、十住心論略鈔 ②三卷 ③存、大正七七・六四八 No. 2442 ④重譽述 ⑤保延五(A. D. 1139) ⑥(京專)

**十住心論勸文** ①(日) Jū-jū-shin-ron-kam-mon. ②五卷 ③道範(元曆元—建長四 A. D. 1181—1252)說建長四年七五叙 ④(參考) 章疏錄

**十住心論勸文** ①(日) Jū-jū-shin-ron-kam-mon. ②三十八卷 ③存 ④賴瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304) ⑤(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄 ⑥正平一〇寫 ⑦(寶壽院)

**十住心論義批** ①(日) Jū-jū-shin-ron-gi-hi. ②三十六卷或三十七卷 ③存 ④凝然(仁治元—元亨元 A. D. 1240—1321)述 ⑤正和二(A. D. 1313)

⑥弘法大師撰十住心論の第四・五・六・九の四卷の註書である。論四に九卷、論五に七卷、論六に十三卷、論九に七卷の義批がある。正和二年東大寺戒壇院に於て、實圓禪明房のために述べたる旨、奥書に記してある。凝然は曾つて弘長の末年から文永の頃にかけて、木幡通心上人真空について真言を學び、特に十住心論を研究したと稱せられる。凝然は華嚴の學匠で又八宗の宗義歴史等にも造詣深き人であるから、その釋す

名所行發 ⑩ (名庫書)者屬所現 ⑪ 月年の刊寫 ⑫ (書考參書釋註)書末 ⑬ 說解存内 ⑭ 代年作者 ⑮ 著書 ⑯ 缺存 ⑰ 數卷 ⑱ (名書)名題 ⑲ 號略字數

名所行發 ⑩ (名庫書)者屬所現 ⑪ 月年の刊寫 ⑫ (書考參書釋註)書末 ⑬ 說解存内 ⑭ 代年作者 ⑮ 著書 ⑯ 缺存 ⑰ 數卷 ⑱ (名書)名題 ⑲ 號略字數

る所啓發せらるゝ點が尠くない。惜いことには十住心論全巻の註書を存してゐない。最初から現存の三十六卷丈であつたか、或は他の巻についても執筆せられたものか明でない。諸宗章疏録二に論卷六新玄鈔二巻を別出してゐるが、義批とは別本なるか否か明でない。又論九の鈔は現存せぬものゝ如くである。

⑦〔参考〕章疏録 ⑧應永一二、文安元等寫十五卷(高大、寄・一・四〇)寶曆一〇寫(谷大、長保・一八五)論四・五・六義批二十九卷寫(智專)(正大) (小田慈舟)

十住心論義林 ①(日)Ja-jū-shin-ron-gi-rin. 十住心義林 ②二卷 ③存、大正七七・八三七No.2454 ④宥快貞和元應永二三 A. D. 1345—1416)述 ⑦〔參考〕章疏録 ⑧明治一九刊 ⑨(京大、日大末・三八一)

十住心論義林懸談 ①(日)Ja-jū-shin-ron-gi-rin-ken-dan. 十住心論之講録 ②一冊 ③存 ④寫本(高大、一・四〇)

十住心論義林鈔 ①(日)Ja-jū-shin-ron-gi-rin-shō. ②一巻 ④快辨(一寛延頃 A. D. 1748—1750)述 ⑦〔參考〕章疏録

十住心論問書 ①(日)Ja-jū-shin-ron-kiiki-gaki. ②三冊 ③存 ④正平一六寫 ⑤(寶壽院)

十住心論愚草 ①(日)Ja-jū-shin-ron-gu-sō. ②三十八卷 ③存 ④頼瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1326—1304)述 ⑤十住心論の要文に關する論義決擇の草稿

を輯録した書である。正嘉・正元・文永の頃、にその一部を草し、弘安・正應・永仁の頃これを修訂増補したもので、著者三十歳頃より約三十年にわたつた苦心の作である。何れも傳法會談義などに因んで作つたもので、論則七百五十三條ある。頼瑜の著に十住心論兼毛鈔十八卷二十五冊があるが、本書とは全く別であり、兩者相待つて十住心論の要旨と疑義を詳細に論述してゐる。

⑦〔參考〕諸宗章疏録第三、章疏録、結網集中 ⑧寫本(寶壽院)(京專) (小田慈舟)

十住心論科註 ①(日)Ja-jū-shin-ron-kwa-chū. ②十二卷或二十二卷 ③存 ④秀翁(寛延三—元祿二二 A. D. 1626—1699)述 ⑤〔參考〕章疏録 ⑥元祿四刊 ⑦(龍大、研佛)(高大、一・四〇)

十住心論卷一之十問題 ①(日)Ja-jū-shin-ron-kwan-ichi-no-jū-mon-dai. ②一冊 ③存 ④(寶壽院)

十住心論卷六七私示 ①(日)Ja-jū-shin-ron-kwan-chū-ri-shi-shi. ②二冊 ③存 ④寫本(寶壽院)

十住心論冠註 ①(日)Ja-jū-shin-ron-kwan-chū. 祕密曼荼羅十住心論冠註、冠註十住心論 ②十卷 ③存 ④如實(元祿二—寶曆五 A. D. 1698—1755)述 ⑤寛延二(A. D. 1749)

⑥祕密曼荼羅十住心論冠註、冠註十住心論と云ふ。玄談に於て、立教大綱、解釋樣式、造論緣起、所依差別、所被機根、十住種類を述べ、次に題目を釋し、本文を解したもので、先賢の諸書を參考し、最も要領

よく註釋を施したものである。 ⑦〔參考〕章疏録 ⑧明曆三刊(龍大、二六六一・四〇)寫本(正大、一四九・八二)

十住心論顯密問答鈔 ①(日)Ja-jū-shin-ron-kem-mitsu-mon-dō-shō. ②二卷 ③存 ④頼瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1296—1304)述 ⑤慶安二寫 ⑥(京大、日大末・四二九)

十住心論廣名目 ①(日)Ja-jū-shin-ron-ko-myō-moku. 十住心廣名目 ②六卷 ③存 ④印融(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519)述 ⑤永正七(A. D. 1510)

⑥十住心論について主要題目二百五十四條を抽出し、一々に先徳の釋を引用して解説し、更に私見を述べてゐる。解説簡明で初心者に便宜である。永正七年著者七十六歳の時、高野山に於て仙願房のために作る旨典書に記してある。寛文三年以後高野山莚壽院秀翁これを重校し、冠註を加へて同六年開版。

⑦〔注釋〕冠註(秀翁)〔參考〕章疏録 ⑧寛文六刊 ⑨(龍大、二六六一・四二)(京專)

十住心論講要 ①(日)Ja-jū-shin-ron-kyō-yō. ②二冊 ③存 ④寫本(高大、寄・一・四〇)

十住心論私記 ①(日)Ja-jū-shin-ron-shiki. 十住心論鈔 ②十二卷 ③存 ④政祝(貞治五—永享一一後 A. D. 1366—1439)述 ⑤永享六(A. D. 1434) ⑥隨文釋義甚だ詳密を極め、如實の十住心論冠註、秀翁の科註十住心論と共に、並び

稱せられる名著。 ⑦〔參考〕章疏録 ⑧明曆元刊 ⑨(龍大、研佛)(立大、A. D. 二〇二七)

十住心論指示 ①(日)Ja-jū-shin-ron-shiji. ②一冊 ③存 ④建永元寫 ⑤(寶壽院)

十住心論指事 ①(日)Ja-jū-shin-ron-shiji. ②一巻 ③壽門主 ④〔參考〕章疏録

十住心論指事卷第九 ①(日)Ja-jū-shin-ron-shi-jū-kyū. ②一冊 ③存 ④承文四寫 ⑤(寶壽院)

十住心論首書 ①(日)Ja-jū-shin-ron-shū-sho. ②六巻 ③〔參考〕章疏録

十住心論聚矩紙 ①(日)Ja-jū-shin-ron-jū-kan-shi. ②一巻 ③存 ④寫本(高大、寄・一・四〇)

十住心論衆毛鈔 ①(日)Ja-jū-shin-ron-shū-mō-shō. ②十五卷今分二十八卷二十五冊、③存 ④頼瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1296—1304)述 ⑤弘安五—永仁三(A. D. 1282—1295)

⑥十住心論の要文について問答體で論述した書である。傳法會論義に因み弘安五年から永仁三年に亘り、十四年間に根來山又は醍醐山にて作つたものである。所收の條目は六百九十八條あり、同人の著たる十住心論愚草と相まちて十住心論の文義について詳密なる解説を與へてゐる。 ⑦〔參考〕諸宗章疏録第三 ⑧鎌倉末期寫(寶壽院)萬治三刊(智山常盤藏)(小田慈舟)

ron-jo-chū. ①一卷 ②【参考】章疏錄

十住心論鈔

①(日)ja-jū-shin-ron-shū. 十住心論肝要鈔、十住心論略鈔 ②三卷 ③存、大正七・六四八ノ.2442 ④重譽撰 ⑤保延五(A. D. 1139)

⑥十住心論第三より第十に至る八巻中の要義について問答せる書である。保延五年夏大和光明山に於て撰した旨高山寺藏一本の古寫本の奥書にある。

⑦【参考】諸宗章疏錄第三 ⑧文治三寫、古寫、元和二刊 ⑨(梅尾高山寺藏)(同上) (小田慈舟)

十住心論鈔 ①(日)ja-jū-shin-ron-shū. ②十卷 ③存 ④果實(徳治元—貞治元 A. D. 1306—1362)述 ⑤【参考】諸宗章疏錄第三

十住心論鈔 ①(日)ja-jū-shin-ron-shū. 十住心論私記 ②十二卷 ③存 ④政祝(貞治五—永享一一後 A. D. 1366—1439)述 ⑤永享六(A. D. 1434) ⑥明暦元刊 ⑦(正大一四四一・三〇四)(京亭)(高大、寄一・四〇)

十住心論新法鈔 ①(日)ja-jū-shim-ron-shin-gen-shū. ②二卷 ③【参考】章疏錄

十住心論相續秘密鈔 ①(日)ja-jū-shin-ron-sō-zoku-hi-mitsu-shū. ②一卷 ③【参考】章疏錄

十住心論他縁鈔 ①(日)ja-jū-shim-ron-ta-en-shū. ②三卷 ③道鏡(元暦元—建長四 A. D. 1181—1252)説建長四年七五寂、述 ④【参考】章疏錄

十住心論他縁大乘撰要文集

①(日)ja-jū-shin-ron-ta-en-dai-jū-sen-yō-mon-shū. ②【参考】章疏錄 ③寫本(如意輪寺藏)

十住心論打聞集

①(日)ja-jū-shin-ron-da-mon-shū. ②一卷 ③存、大正七・六七三No. 2443

④十住心論談義の問書を抄出したものである。撰者は不明であるが、保延四五兩年の談義に因むものたること端書に明である。重譽の口説かと思はれる。解説は問答體で簡明に記してある。しかし、大正藏本は脱文が多くて意を通ぜざる所も尠くない。

⑤古寫本 ⑥(梅尾高山寺藏)(小田慈舟)

十住心論大綱記 ①(日)ja-jū-shin-ron-tai-kō-ki. ②一卷 ③存 ④澄榮(天正一四—慶安三 A. D. 1586—1650)述 ⑤【参考】章疏錄 ⑥延寶四刊 ⑦(龍大、研佛)

十住心論第一見聞鈔 ①(日)ja-jū-shin-ron-dai-ichi-ken-mon-shū. ①快雅(永享五 A. D. 1433)撰 ②【参考】章疏錄

十住心論第一、二問書 ①(日)ja-jū-shin-ron-dai-ichi-ni-kiki-gaki. ②二册 ③存 ④南北朝頃寫 ⑤(寶壽院)

十住心論第一問題 ①(日)ja-jū-shin-ron-dai-ichi-mon-dai. ①寶口 ②【参考】章疏錄

十住心論第一問答問書 ①(日)ja-jū-shin-ron-dai-ichi-mon-dō-kiki-gaki. ②一册 ③存 ④建永元寫 ⑤(寶壽院)

院)

十住心論第一類聚鈔第四

①(日)ja-jū-shin-ron-dai-ichi-rui-jū-shū-dai-shi. ②【参考】章疏錄

十住心論第九問書

①(日)ja-jū-shin-ron-dai-ku-kiki-gaki. ②一卷 ③【参考】章疏錄

十住心論第九卷鈔

①(日)ja-jū-shin-ron-dai-ku-kwan-shū. ①成快速 ②【参考】章疏錄

十住心論第九鈔

①(日)ja-jū-shin-ron-dai-ku-shū. ①成雄(永徳元—寶徳三 A. D. 1381—1451)述 ②【参考】章疏錄

十住心論第九難問抄

①(日)ja-jū-shin-ron-dai-ku-nan-mon-shū. ②一册 ③存 ④南北朝頃寫 ⑤(寶壽院)

十住心論第三私鈔

①(日)ja-jū-shin-ron-dai-san-shi-shū. ②六帖 ③存 ④明範口 ⑤嘉吉元(A. D. 1441) ⑥足利時代寫 ⑦(寶壽院)

十住心論第四論義

①(日)ja-jū-shin-ron-dai-shi-ron-gi. ②一册 ③存 ④正長二寫(寶壽院)

十住心論第七卷鈔

①(日)ja-jū-shin-ron-dai-shichi-kwan-shū. ①修房作 ②【参考】章疏錄

十住心論第七卷鈔

①(日)ja-jū-shin-ron-dai-shichi-kwan-shū. ①道日房 ②【参考】章疏錄

十住心論第十卷鈔

①(日)ja-jū-shin-ron-dai-jū-kwan-shū. ①有快(貞和元—應永三 A. D. 1315—1416)述 ②【参考】章疏錄

十住心論第八勸注第一

①(日)ja-jū-shin-ron-dai-hachi-kan-chū-dai-ichi. ②【参考】章疏錄

十住心第八勸文

①(日)ja-jū-shin-dai-hachi-kan-mon. ②二卷 ③道鏡(元暦元—建長四 A. D. 1181—1252)説建長四年七五寂)述 ④【参考】章疏錄

十住心論第八卷鈔

①(日)ja-jū-shin-ron-dai-hachi-kwan-shū. ①成快速 ②【参考】章疏錄

十住心論第六已指事

①(日)ja-jū-shin-ron-dai-roku-i-shi-ji. ①章疏錄に云く「完、如意輪寺ニアリ」云云。

十住心論第六卷知足鈔

①(日)ja-jū-shin-ron-dai-roku-kwan-chi-soku-shū. ②八卷 ③【参考】章疏錄

十住心論第六抄

①(日)ja-jū-shin-ron-dai-roku-shū. ①一帖 ③存 ④文明六寫 ⑤(寶壽院)

十住心論得名略文事

①(日)ja-jū-shin-ron-toku-myō-ryaku-mon-no-koto. ②一卷 ③【参考】章疏錄

十住心論名目

①(日)ja-jū-shin-ron-myō-moku. ②二卷 ③快雅(一永享五 A. D. 1433)撰 ④【参考】章疏錄

十住心論名目

①(日)ja-jū-shin-ron-myō-moku. ②二卷 ③迎辨院作 ④【参考】章疏錄



十住心論名目 ①(日) Ju-jū-shin-rom-myō-moku. ②一卷 ③章疏錄に云く「正智院ニヤリ」云々。

十住心論目録抄 ①(日) Ju-jū-shin-rom-moku-di-shō. ②十五卷 ③存 ④英岳(寛永一六一—正徳二 A. D. 1639—1712)述 ⑤(参考) 眞言宗全書刊行豫定目録

十住心論問題 ①(日) Ju-jū-shin-rom-mon-dai. ②(参考) 章疏錄

十住心論問答 ①(日) Ju-jū-shin-rom-mon-dō. ②一卷 ③空海(寶龜五一—承和二 A. D. 774—835)撰

諸宗章疏錄第三に云く「按。住心論愚艸云。密嚴院住心論問答同異更詳云々。

十住心論問答第四 ①(日) Ju-jū-shin-rom-mon-dō-dai-shi. ②一冊 ③存

南北朝時代寫 ④(寶壽院)

十住心論用音 ①(日) Ju-jū-shin-rom-yō-on. ②二冊 ③存 ④(参考) 章疏錄

十住心論用音撰學鈔 ①(日) Ju-jū-shin-rom-yō-on-tei-gaku-shō. ②九卷 ③快通口 ④嘉吉二 (A. D. 1442) ⑤(参考) 章疏錄

十住心論落脫文 ①(日) Ju-jū-shin-rom-fuki-datsu-mon. ②一卷 ③空海(寶龜五一—承和二 A. D. 774—835)

諸宗章疏錄第三に曰く「按。乘毛鈔云。今論第十補闕章不知作者。今云落脫。恐是。然一本鏡錄高野。高山二錄。云。第二卷落脫。未知適從。又覺錄落作亂。恐誤」云々。

十住心論略記 ①(日) Ju-jū-shin-rom-yaku-ki. ②一卷 ③(参考) 章疏錄

十住心論略指導 ①(日) Ju-jū-shin-rom-yaku-shi-jū. ②一冊 ③存 ④建保七寫 ⑤(寶壽院)

十住心論略頌 ①(日) Ju-jū-shin-rom-yaku-jū. ②一卷 ③存 ④興教大師全集之内 ⑤覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑥(参考) 章疏錄

十住心論略鈔 ①(日) Ju-jū-shin-rom-yaku-shō. ②十住心論鈔、十住心論肝要鈔 ③三卷 ④存、大正七・六四八 No. 2442 ⑤重譽述 ⑥保延五 (A. D. 1139) ⑦(参考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄

十住心論略鈔 ①(日) Ju-jū-shin-rom-yaku-shō. ②十二卷 ③存 ④澄菴(天正一四—慶安三 A. D. 1586—1650)述 ⑤(参考) 眞言宗全書刊行豫定目録

十住心論略問答鈔 ①(日) Ju-jū-shin-ron-yaku-mon-dō-shō. ②十卷 ③性心(弘安一〇—延文二 A. D. 1287—1337)述 ④(参考) 章疏錄

十住心論六末問題 ①(日) Ju-jū-shin-ron-roku-matsu-mon-dai. ②一冊 ③存 ④建武三寫 ⑤(寶壽院)

十住心論論義開書 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-gi-kai-gaki. ②(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

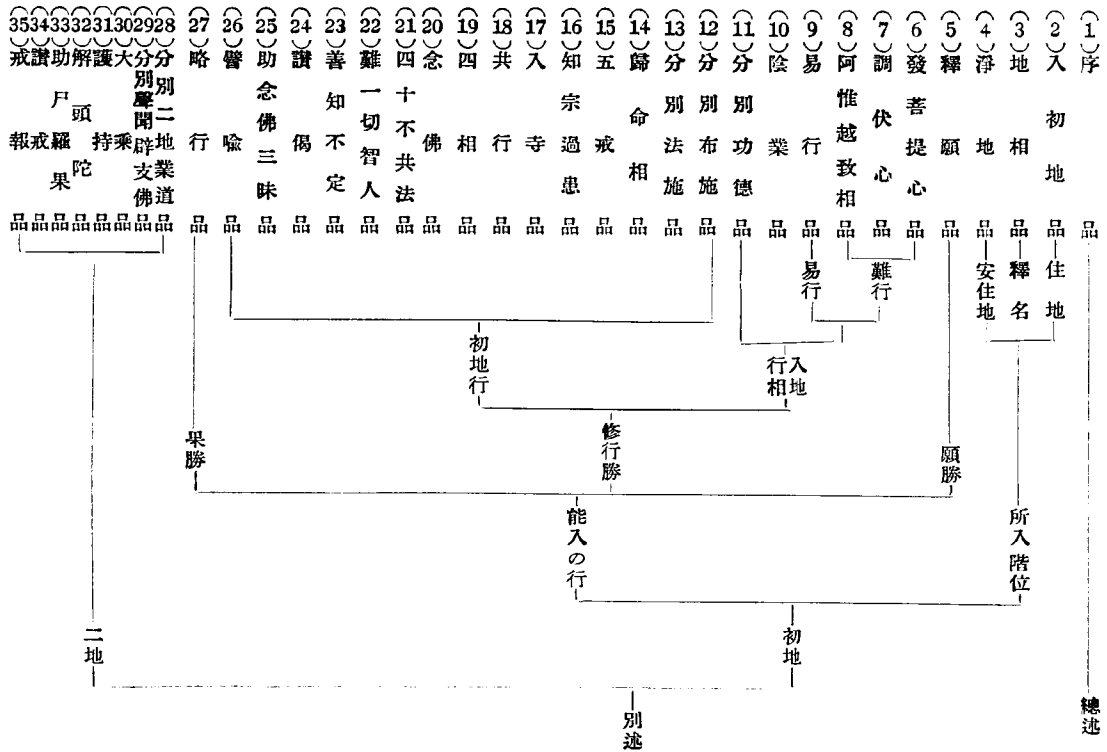
十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十住心論論草 ①(日) Ju-jū-shin-ron-ron-so. ②一卷 ③存 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤(参考) 章疏錄

十五品であるけれども、明藏の本は三十六品となつて居り、古目錄には、或は十六巻と云ひ、或は十七巻と記して居るものもあり、調卷は一定して居らない。

大方廣佛華嚴經(華嚴經)中の一、十地品の初二地の經文を註釋したものである。元來、此の華嚴經の十地品は、本經中に於いても、最も重要な地位を占めて居るので、學者の重んずる處であつた。故に印度にあつては、早くから本經と別に流布して居つた形跡があり、支那に於いても、華嚴經の全譯が顯はれる以前に、已に是れを別譯して居た。後秦の竺佛念譯の十地斷經。西晉聶道真譯の十住經十二卷。姚秦羅什耶舍共譯の十住經四卷。西晉竺法護譯の漸備一切智德經五卷は、何れも此の十地品の別譯である(賢首大師華嚴傳卷一による)題號の Dasa bhūmi と云ふは、十地の梵語と同一である、故に此の論の十住の語は、また十地と譯すべきであるから、本經には十地品と云ふて居る。此の論に於いても十地經と云ふ名が出て居る。是れは、住の語は地の別義であるから、互ひに用ゐたものである。爾るに、十住經の名は、獨り十地品を稱するのみでなく、華嚴經十住品の別行したものを、十住經と名けることもある。是れを區別せんがために、華嚴探玄記(卷一、十一)等では、大小の文字を附して、十住品の別行を小十住經と名け、十地品の別行は大十住經と名けて居る。而して、毘婆沙(Vibhāṣā)は廣解、廣說、勝說、異說等と譯する文字である。即ち題號は、廣く

名所行發 (名庫書) 著藏所現 ① 月年の刊載 (書考參書釋註) 書末 ② 說解存内 ③ 代年作者 ④ 著書 ⑤ 缺存 ⑥ 數卷 (名書) 名題 ⑦ 號略字數



十地の位のことを解釋した典籍と云ふ意である。此の題號の意によつて、此の論の内容は、ほど推察される。けれども、上に大體の組織を圖示して、内容と推知する一助に供へることとする。

是れに依つて見るに、第一の序品は總論であるが、第二の入初地品以下、略行品まで二十六品あるが、菩薩の初歡喜地を叙述するものである。その中の(2)(3)(4)の三品は、所入位即ち初歡喜地の内容を説明したものである。第五品以下は、能入の修行即ち歡喜地に入るについての修行の有様を説明したものである。第二十八品以下は十地の中の第二地の相を叙へたものである。題號は、十地全般に渡つて論述してあるやうに附してあるけれども、此第二地の相を述べて本論は終つて居る。賢首の華嚴傳にも、三地以後の釋は是れを缺くと云ふてあるから、最初から、本書は、第二地の解釋で終つて居たものであらうと考へるのである。

【参考】 諸宗章疏錄第一、花嚴宗經論章疏目錄 ①寬文六刊(正大、一一七六・一一四、一一三四・三)(谷大、宗大・三三九)(龍大、二二・二)寬文一三刊(正大、一一三四・一)刊本(哲、ふ・七・中・一六)(高、寄・一・二四) (上杉文秀)

**十住毘婆沙論易行品** ①(日) Jā-jū-bi-ba-sha-ron-i-gyō-bon. (支) Shih-chu-pi-p'o-sha-lun-i-jing-pin. 易行品 ②一卷 ③存、十住毘婆沙論第五(大正二六 No. 1521. 9) 眞宗聖典全書之内、七祖聖

教卷上 ①龍樹造、姚秦鳩摩羅什(建元二—義熙九 A. D. 344-413) 說弘始一一、或義熙中寂譯 ②易行品の下を見よ。 ③【参考】 淨土眞宗教典志第一 ④延享五寫(谷大)

**十住毘婆沙論易行品** ①(日) Jā-jū-bi-ba-sha-ron-i-gyō-bon. 冠註十住毘婆沙論易行品、冠註易行品 ②二卷 ③存 ④單問作 ⑤延享三(A. D. 1746) ⑥【參考】 淨土眞宗教典志第二 ⑦明和元刊 ⑧(谷大、宗大、二二〇八、四六〇七、四八二一)(龍大、研眞)

**十住毘婆沙論易行品** ①(日) Jā-jū-bi-ba-sha-ron-i-gyō-bon. 國譯十住毘婆沙論易行品 ②存、國譯一切經々論部第五卷 ③島地大等(明治八—昭和二 A. D. 1875—1927) 譯

**十住毘婆沙論易行品開演日記** ①(日) Jā-jū-bi-ba-sha-ron-i-gyō-bon-i-kai-en-ni-kki. 易行品開演日記 ②二卷 ③存、眞宗大系第五 ④德龍(安永元—安政五 A. D. 1772—1855) 述 ⑤易行品開演日記の下を見よ。 ⑥自筆本(谷大、宗甲、一四)

**十住毘婆沙論易行品弘化誌** ①(日) Jā-jū-bi-ba-sha-ron-i-gyō-bon-gu-ke-shi. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一三四・五)

**十住毘婆沙論易行品科** ①(日) Jā-jū-bi-ba-sha-ron-i-gyō-bon-kwa. 分科十住毘婆沙論易行品、易行品分科 ②一卷 ③存 ④圓瑛(一正德頭 A. D. 171—

名所行發⑩(名庫書)書藏所現⑨ 月年の刊寫⑧(書考書書釋註)書末⑦ 說解容内⑥ 代年作者⑤ 香著④ 缺存③ 數卷②(名書)名題① 說略字數

1715)分科、寂順校訂 ①(参考) 淨土真宗教典志第二 ②寶曆三刊 ③(谷大、宗大・三三六五〇〇七)(正大、一一九七・七九)(高大、寄・一・二四)(龍大、研眞)

**十住毘婆沙論易行品懸譯並分科** ①(日)Ja-jū-bi-ba-sha-ron-i-gyō-bon-ken-dan-narabini-bun-kwa. 易行品懸譯並分科 ②一卷 ③存 ④倍樸(享保四一寶曆一一A. D. 1719-1762)作 ⑤(参考) 淨土真宗教典志第二

**十住毘婆沙論易行品講義** ①(日)Ja-jū-bi-ba-sha-ron-i-gyō-bon-ko-san. 易行品講義 ②四卷 ③存 ④眞宗高倉大學寮編 ⑤明治三三刊 ⑥(帝國、一八七・一四八)(谷大、宗大・三三六三、四二二三、四六〇五-四六〇六)

**十住毘婆沙論易行品講述** ①(日)Ja-jū-bi-ba-sha-ron-i-gyō-bon-ko-jutsu. ②一卷 ③存 ④開誠述 ⑤寫本(龍大)

**十住毘婆沙論易行品乘船記** ①(日)Ja-jū-bi-ba-sha-ron-i-gyō-bon-ju-sen-ki. ①月皎乘船(享保一四一文化八A. D. 1729-1811)作 ②(参考) 淨土眞宗教典志第二

**十住毘婆沙論易行品笠踏** ①(日)Ja-jū-bi-ba-sha-ron-i-gyō-bon-sen-tai. 易行品笠踏 ②三卷或五卷 ③存、眞宗大系第五 ④法海(明和五一天保五A. D. 1798-1834)述 ⑤文化十(A. D. 1810) ⑥易行品笠踏の下のミヤ。 ⑦寫本(谷大、宗大・九五)

**十住毘婆沙論易行品讀易行品** ①(日)Ja-jū-bi-ba-sha-ron-i-gyō-bon-doku-i-gyō-bon. ②三卷 ③海西道元作 ④(参考) 淨土眞宗教典志第二

**十住毘婆沙論易行品餅館** ①(日)Ja-jū-bi-ba-sha-ron-i-gyō-bon-hon-ki. 易行品餅館 ②十卷 ③存 ④月皎乘船(享保一四一文化八 A. D. 1729-1811)作 ⑤明和二(A. D. 1765) ⑥(參考) 淨土眞宗教典志第二 ⑦寫本(龍大、一二三三、三三三)

**十住毘婆沙論易行品要津錄** ①(日)Ja-jū-bi-ba-sha-ron-i-gyō-bon-yō-shū-roku. 易行品要津錄 ②三卷 ③存 ④寂淵作 ⑤明和六(A. D. 1769) ⑥(參考) 淨土眞宗教典志第二 ⑦明和七刊 ⑧(龍大、一二三三、三三六)(谷大、宗大・六八六)

**十住毘婆沙論易行品錄** ①(日)Ja-jū-bi-ba-sha-ron-i-gyō-bon-roku. ②一卷 ③存 ④調雲集(文政二一明治三三A. D. 1819-1899)深海記 ⑤明治二一寫本(正大、一一三四、四)

**十住毘婆沙論講記** ①(日)Ja-jū-bi-ba-sha-ron-ko-ki. ②六卷 ③存 ④德龍(安永元一安政五A. D. 1772-1858)述 ⑤嘉永三(A. D. 1850) ⑥寫本(谷大、宗大・二〇三九、餘大・三三三)

**十住毘婆沙論講勸要文解** ①(日)Ja-jū-bi-ba-sha-ron-san-kwan-yō-mon-ge. 校録十住毘婆沙論講勸要文解 ②四卷 ③存 ④慧湖(一寶曆七A. D. 1757)述 ⑤安永九寫 ⑥(谷大、宗大・一三六)

**十住論** ①(日)Ja-jū-ron. (支)Shih-chu-ron. 十住毘婆沙論、十住毘婆沙 ②十卷 ③存、大正二・六・二〇No. 1521、縮暑八、正二・五、北356頁、南603頁、元596頁、明北1174規、清1174規亡、麗591頁、天563頁、指552頁、法577頁、至1311樓觀、明南332志滿、Nj. 1180 ④龍樹造、姚秦鳩摩羅什(建元二一義熙九A. D. 344-413)一說弘始一一或義熙中寂譯 ⑤十住毘婆沙論の下のミヤ。 ⑥(參考) 花嚴宗經疏章疏目錄、諸宗章疏錄第一

**十住論** ①(日)Ja-jū-ron. (支)Shih-chu-ron. ②十卷 ③缺 ④姚秦鳩摩羅什(建元二一義熙九A. D. 344-413)一說弘始一一或義熙中寂譯 ⑤(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

**十住論易行品義記** ①(日)Ja-jū-ron-i-gyō-bon-gi-ki. 易行品義記 ②一卷 ③存 ④僧觀(寶曆三一文政八A. D. 1753-1825)一說文政九、年六五寂述 ⑤明治二九刊 ⑥(龍大)

**十住論易行品講義錄** ①(日)Ja-jū-ron-i-gyō-bon-ki-gi-roku. ②一卷 ③存 ④松島善海(安政二一正大二A. D. 1855-1923)述 ⑤明治四五刊 ⑥(龍大)

**十重血脈鈔** ①(日)Ja-jū-kechi-maku-shō. ②一卷 ③存 ④惠尊

**十重俗註** ①(日)Ja-jū-zoku-chie. ②一冊 ③存 ④(哲・七・八・左・一八)

**十重波羅提木叉俗詮** ①(日)Ja-jū-hara-dai-moku-sha-soku-ken. ②一卷 ③存 ④慈山(寬永一四一元祿三A. D. 1637-1690)述 ⑤享保一九刊(龍大、二二六・一一・一六)(正大、一一八四、四)(京大、一一三・一)天和三刊(谷大、餘大・二八八六)

**十重波羅提木叉和釋** ①(日)Ja-jū-hara-dai-moku-sha-wa-shaku. 十重和釋 ②一卷 ③存、國文東方佛教叢書第一輯第二 ④慈山妙立(寬永一四一元祿三A. D. 1637-1690) ⑤延寶八刊 ⑥(龍大、二六・一一・一七)(谷大、餘大・二八八六)

**十重不審請決** ①(日)Ja-jū-ta-shin-shō-ketsu. ①聖聰(貞治五一永享一一A. D. 1366-1440) ②(參考) 淨土正依經論書籍目錄

**十重唯識圖鑑記** ①(日)Ja-jū-yū-shiki-en-kan-ki. 華嚴十重唯識圖鑑記 ②二卷 ③存、大日本佛教全書第一三華嚴小部集、日本大藏經華嚴宗章疏卷下 ④(仁治元一元亨元A. D. 1250-1321)述 ⑤善嚴十重唯識圖鑑記の下のミヤ。 ⑥(參考) 諸宗章疏錄第一

**十重唯識瓊鑑章** ①(日)Ja-jū-yū-shiki-gyō-kan-shō. 華嚴十重唯識瓊鑑章 ②一卷 ③存、大日本佛教全書第一三華嚴小部集 ④凝然(仁治元一元亨元A. D. 1240-1321)述 ⑤華嚴十重唯識瓊鑑章の下のミヤ。 ⑥(參考) 諸宗章疏錄第二

**十重唯識瑠鑑記** ①(日)Ja-jū-yū-shiki-jō-kan-ki. 華嚴十重唯識瑠鑑記 ②七卷之內五卷現存、大日本佛教全書第一三華嚴小部集、日本大藏經華嚴宗章疏卷下

名所行發①(名庫書)書類所現②月年の刊算③(書考參書釋註)書末④說解存内⑤年代作者⑥書著⑦缺存⑧數卷⑨(名書)名題⑩號略字數

④凝然(仁治元—元亨元 A. D. 1240—1321) 述 ⑥華嚴十重唯識瑠璃鏡記の下を見よ。

⑦(参考) 諸宗章疏第二 ⑧(参考) 諸宗章疏第二

⑨十重和釋 ①(日) Ja-ju-wa-shuku. 十重波羅提木叉和釋 ②一巻 ③存、國文

東方佛教叢書第一輯第二 ④慈山妙立(寛永一四—元祿三 A. D. 1637—1690) ⑤(折、む・八・右・二七)

⑥十章鈔 ①(日) Jissho-shu. ②一巻 ③存、高祖遺文録第一、日蓮聖人御遺文

(六七四—六七八)、録内三十一 ④日蓮(貞應元—弘安五 A. D. 1222—1282) ⑤文

永八(A. D. 1271)或は文永七(A. D. 1270) 建治二(A. D. 1276)異説あり。

⑥弟子三位房日行の比叡山留學中、天台の摩訶止觀の講學について得意を書き遣したるもの、十章鈔の名は止觀廣しと雖も十章

には出でずの意より呼ばれたのである。止觀の觀法は一念三千である。その實義は法

華本門の心であつて述門にさへその意はないのである。然るに今の學者、皆爾前の間

と法華の圓と、二圓同等の義をなすより、凡ての誤りは生ずると論じ、當時の天台、眞言、念佛者を破し、三位房の不得意

を述べたのである。

⑦録内啓蒙第三三、内書鈔第二三、録内拾遺第六、録内扶老一二 ⑧日蓮聖人眞蹟(下總、中山法華經寺聖教藏)、六紙始めの三紙を缺くものゝ如し。

(望月敬厚)

十勝十劣辨記 ①(日) Jissho-ju-retsu-ben-ki. (2) D. 34 Dasutara S. ②

一巻 ③存 ④寫本(正大、一五九・七二) ⑤十上經 ①(日) Ju-jo-kyo. (支) Shishang-kying. (2) D. 34 Dasutara S. ⑥

存、長阿含經第九(大正一・五二 A. D. 1. 10) ⑦十上經 ①(日) Ju-jo-kyo. 現代意譯十

上經 ③存、現代意譯根本佛教聖典叢書第一〇 ④羽溪了諦、甲斐實行共譯

⑧十帖御文 ①(日) Ju-jo-o-tsumi. ②一巻 ③存 ④蓮如(應永二—明應八 A. D. 1415—1499) 作

⑤越後高田本誓寺十帖御文現存七卷百一十一通(六十一通—帖外。五十通—帖内)。河内

光善寺本三十七通(中十七通。坊刊帖外の本合八十二通の中三十一通。越前永臨寺本

二十一通の中夏御文四通。越前淨願寺本七十五通の中四通。江州西光寺本五十通の

中三通。濃州安福寺本六十四通の中四通。丹州圓覺寺本四十一通の中二通。同光瑞寺

本二十七通を輯録したもの。

⑨寫本(谷大、宗大・三〇七九) ⑩十帖御文之鈔 ①(日) Ju-jo-o-tsumi-ron-shu. 拾帖御文之鈔 ③存、蓮如上人全

書之内 ④蓮如(應永二—明應八 A. D. 1415—1499) ⑤拾帖御文之鈔の下を見よ

⑥十帖日記 ①(日) Ju-jo-no-nikki. ②十帖 ③存

④一、日月記。二、缺。三、傳法事。四、印明事。五、祕密事。六、如法華嚴

事。七、第三事を收録す。

⑨寫本(金剛三昧院) ⑩十條大綱 ①(日) Ju-jo-taika. ②一巻 ③存 ④明治三寫 ⑤(谷大)

⑥十條問答 ①(日) Ju-jo-mon-tsu. ②一巻 ③存 ④知宗(寛永一一—享保三 A. D. 1634—1718) 述 ⑤正徳五刊 ⑥(龍大、一五〇二—一九六) (谷大、宗大・二六一八)

⑦十誓願 ①(日) Ju-jo-gwan. ②一巻 ③覺諭(参考) 淨土依憑經論章疏目錄

④十利世代記 ①(日) Ju-jo-seidai-ki. ②一巻 ③存 ④(参考) 禪籍目錄

⑤十善 ①(日) Ju-zen. ②一巻 ③存 ④寫本(正大、一一八四・一〇一)

⑥十善戒義 ①(日) Ju-zen-kaigi. ②一巻 ③敬光(元文五—寛政七 A. D. 1740—1793) 述 ④(参考) 山家祖徳撰述篇目集

卷下 ⑦十善戒勸誘辨釋 ①(日) Ju-zen-kaito-kan-kyu-jo-ben-jaku. ③存、的門上人全集第二卷之内

⑧十善戒御法語 ①(日) Ju-zen-kaigo. ②一巻 ③存、慈雲尊者全集第一三輯之内 ④慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804) 語 ⑤安永初年賦 ⑥

義文尼寫本(京都長福寺藏) ⑦十善戒作法 ①(日) Ju-zen-kaisa-ho. ②一巻 ③存、慈雲尊者全集第六輯

④慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804) ⑤安永二(A. D. 1773)

⑥恭禮門院御所持本、御卷物箱入にして門院御受戒の時尊者奉獻す。この本は尊者門弟をして書せしめ自ら朱を施し且つ請戒の文を加書せらる。

⑦寫本(京都長福寺) ⑧十善戒自受法 ①(日) Ju-zen-kai-jou. (高見寛應)

⑨(寶龜院) ⑩十善戒相 ①(日) Ju-zen-kaiso. 十善戒名法語、十善略法語 ②一巻 ③存、慈雲尊者全集第一三輯之内 ④慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804) 述 ⑤安永三(A. D. 1774)

⑥この書は尊者自ら三部を認め、後桃園天皇、恭禮門院、開明門院に奉獻せられたものである。

⑦恭禮門院御所持本(京都長福寺藏) (高見寛應)

⑧十善戒法 ①(日) Ju-zen-kai-ho. ②一册 ③存 ④慶雲海量述 ⑤明治二三寫 ⑥(正大、一一八五・五八)

⑦十善戒法語 ①(日) Ju-zen-kai-ho-go. ②一册 ③存 ④(哲、こ・八・右・一)

⑧十善戒法語の縁起 ①(日) Ju-zen-kai-ho-gyoki. ②一巻 ③存、慈雲尊者全集第一二輯之内 ④法泉慧琳尼記 ⑤安永四(A. D. 1773) 秋日 ⑥記者自筆本(京都長福寺藏)

⑨十善戒法則草案 ①(日) Ju-zen-kai-ho-keisaku-ansan. ②一巻 ③存、慈雲尊者全集第六輯 ④慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804)

⑥この草案は尊者が開明門院に十善戒を授け奉る時の作である。⑦自筆本(河内高貴寺) (高見寛應)

名所行發⑩(名庫書)者藏所現⑩ 月年の刊誌⑩ (書考參書釋註)書末⑦ 説解存内⑩ 代年作著⑩ 者著⑩ 缺存⑩ 數卷⑩ (名書)名題⑩ 號略字數

十善戒法論

①(日)Ji-zen-kai-ho-ron. 冠註十善戒法論 ②一卷 ③存 ④淨慧述、良隨註 ⑤明治二九刊 ⑥(正大、一八四・一〇七)

十善戒略解

①(日)Ji-zen-kai-rya=ku-ge. ②一卷 ③存 ④智滿述 ⑤(京專)

十善戒略解總論

①(日)Ji-zen-kai-rya-ge-si-ron. ②一卷 ③存 ④雲照(文政一〇—明治四二) A. D. 1827—1909) 述 ⑤明治一九刊 ⑥(帝國、二五・三五)

十善講話

①(日)Ji-zen-ko-wa. ②一卷 ③存 ④中島觀琳述 ⑤明治四〇刊 ⑥(正大、一一八四・一一〇) (帝國、三二・一九)

十善業道經

①(日)Ji-zen-gō-jō-kyō. (支)Shih-shan-yeh-tao-chang. ②一卷 ③存、大正一五・一五七No. 600. 縮列一、二、一七二、北3553作、南5655作、元359作、明北1095初、清4093初、惡3555念、天358作、指507念、法514念、至1235條、明南3499從、Nj. 1100 ④實叉難陀譯 ⑤編譯二—長安四(A. D. 695—704)

十善業道經講義

①(日)Ji-zen-gō-jō-kyō. ②一卷 ③存、佛敎通俗講義之内 ④雲照(文政一〇—明治四二) A. D. 1827—1909) 述 ⑤(龍大、二四一一・六)

十善業道經節要

①(日)Ji-zen-gō-jō-kyō-sessu-yō. (支)Shih-shan-yeh-tao-ching-chieh-yas. ②一卷 ③存、(已續)

ある。菩薩たるものは常に善法を視察して分毫の不善間雜をも容れてはならぬ。さてその善法と云ふは即ち十善業である。永く十善を離れて十善を修する者には次の如き功德がある。即ち離殺生は十離惱法を成就し、離偷盜は十種可保信法を得、離邪行は四種智所讚法を得、離妄語は八種天所讚法を得、離兩舌は五種不可壞法を得、離惡口は八種淨業を成就し、離綺語は三種決定を成就し、離貪欲は五種自在を成就し、離瞋恚は八種喜悅心法を得、離邪見は十功德法を成就するを得る。而してこの十善業は以上の無量の功德を得るのみならず、十力四無畏乃至十八不俱法等一切の佛法を圓滿するもので、城邑聚落藥草芥木叢林、何れも大地に依て安住する如く、菩薩行一切佛法皆十善大地に依り成就するものであると結論する。

本經は『海龍王經』中の「十德六度品」の抄譯で、北宋施護譯の『佛爲沙曷羅龍王所說大集法經』とは同本異譯である。(三好鹿雄)

十善業道經

①(日)Ji-zen-gō-jō-kyō. ②一卷 ③存、現代意譯佛敎經典叢書第三 ④池田卓然譯

十善業道經講義

①(日)Ji-zen-gō-jō-kyō-kyōgi. ②一卷 ③存、佛敎通俗講義之内 ④雲照(文政一〇—明治四二) A. D. 1827—1909) 述 ⑤(龍大、二四一一・六)

十善業道經節要

①(日)Ji-zen-gō-jō-kyō-sessu-yō. (支)Shih-shan-yeh-tao-ching-chieh-yas. ②一卷 ③存、(已續)

一・九五・二 ①清藕益編訂 ②雍正一一(A. D. 1733?) ③雍正一一 ④本書は十善業と十惡業と、並にその果報を略解したもの。卷首に清の雍正十一年に世宗の上諭を掲ぐ。上諭の要旨は「儒佛道三教は民を海内に覺らしむるものであり、理は同じく一原から出たものである。佛の五戒十善、儒の五常百行は國家太平を致すもの天下を治むるの要道である。故に信じてこれに従ひ型方訓俗すべきものである云」と述べてゐる。先づ殺生を戒めれば十種の惱みから離れられる。次に殺生を犯せば十種の惱みを受ける。次に戒偷盜。得成十種可保信法。次に犯邪淫。得成十種不可保信法。次に犯邪淫。得成十種智人所讚法。次に犯邪淫。得成十種智人所讚法。次に犯妄語。得成八種天所讚法。次に犯妄語。得成八種天所讚法。次に犯兩舌。得成五種不可壞法。次に犯兩舌。得成五種可壞法。次に犯惡口。得成八種淨業。次に犯惡口。得成八種淨業。次に犯綺語。得成三種決定。次に犯綺語。得成三種決定。次に四分律の酒戒一條を附し、戒酒、得成十種無過失法。犯酒戒、得成十種過失法。次に戒貪欲。得成五種自在。次に犯貪欲。不成就五種自在。次に戒瞋恚。得成八種喜悅心法。次に犯瞋恚。不成就八種喜悅心法。次に戒邪見。得成十功德法。次に犯邪見。不成就十功德法。と一々各條を列記してゐて解釋を施してゐる。(田島徳音)

①(日)Ji-zen-sha-mi-kai-ron. ②一卷 ③存、圓戒十要第六 ④亮碩(寶曆一〇—寛政四) A. D. 1760—1792) 述 ⑤寛政一〇寫(谷大、餘大・七九七)寫本(正大、一一八七・二五、一一一)

十善集

①(日)Ji-zen-shū. ②十戒卑下心集、十善鈔 ③存、惠心僧都全集第五 ④源信(天慶五—寛仁元) A. D. 942—1017) ⑤(参考) 本朝台祖撰述密部書目

十善十惡經

①(日)Ji-zen-jū-aku-kyō. (支)Shih-shan-shih-eh-ching. ②一卷 ③缺 ④西晋支法度(—永寧元) A. D. 301—) 譯 ⑤(参考) 出三藏記第三、開元錄第一五、貞元錄第二四

十善十惡經

①(日)Ji-zen-jū-aku-kyō. (支)Shih-shan-shih-eh-ching. ②一卷 ③缺 ④東晋竺曇無蘭(—太元六一) A. D. 381—399) 譯 ⑤(参考) 出三藏記第三、開元錄第一五、貞元錄第二四

十善鈔

①(日)Ji-zen-shū. ②十戒卑下心集、十善集 ③存、惠心僧都全集第五 ④源信(天慶五—寛仁元) A. D. 942—1017) ⑤(参考) 諸宗章疏錄第二

十善大意

①(日)Ji-zen-tai-i. ②一卷 ③存 ④澤柳政太郎(—昭和二) A. D. 1927) 著 ⑤明治二八刊 ⑥谷大、餘洋、一〇(正大、一一八四・一五一) 京大、一〇二六(シ・三八)

十善之系統

①(日)Ji-zen-no-kei-ritsu. ②一卷 ③存、慈雲尊者全集第六輯之内 ④慈雲飲光(享保三—文化元) A. D. 1718—1804) ⑤安永三(A. D. 1774)

①開明門院御所持本。天竺にて大迦葉以下五十八人、支那にて慧遠以下九人、日本にて如實以下十四人を擧ぐ、この外に春日明神を二回系統中に列ぬ。この本は水薬師寺藏で、長福寺藏は恭禮門院御所持本である。

②自筆本(京都水薬師寺)(長福寺藏) (高見寛應)

十善之系統

①(日)Jū-zen-no-kie-ri. ②一卷 ③存、慈雲尊者全集六輯之内 慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804) ④安永三(A. D. 1774)

⑤尊者御所持本。開明門院の請に依りて原本として認めしもので、天竺に大迦葉以下五十八人、支那に慧遠以下九人、日本に如實より忍稱貞紀まで十四人を擧げ且この外に春日明神を二回列ねてゐるから十六名となる。

①自筆本(高貴寺藏) (高見寛應)

②善法戒 ①(日)Jū-zen-bo-kai. ②一卷 ③潜真 ④(参考) 諸宗章疏録第二 十善法語 ①(日)Jū-zen-hō-go. ②十二卷 ③存、日本大藏經戒律宗章疏第三 慈雲尊者全集第二 ④慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804)語 ⑤安永二—三(A. D. 1773—1774)

⑥尊者が京都阿彌陀寺に住し四衆の請に依つて垂示せし講演録で、第九卷までは各一戒づゝを説き、十、十一、十二の三卷に不邪見戒を説かれた。經論を旁證し、傳説を引投し、平易に明快に十善の眞髓を解説してゐる。

⑦文政七刊 ⑧(龍大、二六一九・二八)

十善略記

①(日)Jū-zen-ryak-ki. ②一卷 ③存、日本大藏經戒律宗章疏第三、慈雲尊者全集第一三 ④慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804) ⑤安永元(A. D. 1772)

⑥この書に「人となる道」とも云ふ。眞實、知足、業報、正智、孝順、三寶、十善等の概略を示された。且つ誘滞撰飲光慈雲尊者傳を附録としてゐる。(高見寛應)

十善略法語隨行記

①(日)Jū-zen-ryaku-hō-go-zui-gyō-ki. ①一卷 ②存、慈雲尊者全集第一三輯之内 ③誦滿(寶曆元—天保元 A. D. 1751—1830)記 ④寫本 刊本(高貴寺藏)

十善和漢略解

①(日)Jū-zen-wa-kun-ryaku-ge. ①一卷 ②存 ③雲照(文政一〇—明治四)A. D. 1827—1909)述 ④(京專)

十福支錄

①(日)Jū-zen-shi-roku. 虎關十福支和尚錄 ②三卷 ③存 ④虎關師鍊(弘安元—貞和)A. D. 1278—1346) ⑤(参考) 禪籍日録、日本禪林撰述書目

十大願

①(日)Jū-dai-gwan. ①一卷 ②千觀(延喜一八—永觀元)A. D. 918—983 ③一説永觀二、年六六歳 ④(参考) 山家祖德撰述篇目集卷下、諸宗章疏録第二

十大願

①(日)Jū-dai-gwan. ②存、大日本佛教全書第三三、惠心僧都全集第五 ③源信(天慶五—寛仁元)A. D. 942—1017) ④本書は經力によつて發心。離苦、除障(信心堅固)。三界六道。苦難救済。臨終正念

往生極樂。值遇善知識聽聞此經悟解一乘速證無生忍。結緣同心互作佛事。未來衆生安慰度脫。父母師長、七世四恩令離生死苦海。到善國涅槃彼岸。親近慈誘悉當平等一味法雨の十種の願を成就せんと祈願した文。前後の文が缺けてゐるために「此經」とは何經か不明。何年に何處で誰人等と同心して結緣したものであるかも不明。

十大段明義

①(日)Jū-dai-dan-ming-ji. (支)Shi-ta-tuan-ming-ji. ②三卷 ③疑偽經 ④(参考) 武周録第一五、開元録第一八

十大弟子傳

①(日)Jū-dai-de-shi-den. ②一卷 ③存 ④空海(寶龜五—承和)A. D. 774—835) ⑤(京專)

十通

①(日)Jū-tō. ②一卷 ③存 ④泰準相傳 ⑤寛政三寫 ⑥(龍大、研眞) ⑦(参考) 寛政三寫 ⑧(龍大、研眞) ⑨(参考) 承應元—元文四 A. D. 1562—1739) ⑩(龍大、研眞)

十天

①(日)Jū-ten. ②一卷 ③存、聖不動明王二十八宿 ④一卷 ⑤存 ⑥寫本(龍大、別置) ⑦(参考) 聖不動明王二十

十天儀軌

①(日)Jū-ten-gi-ki. (支)Shi-tien-i-kuai. ②一卷 ③存、大正二—三(八二)No. 1296

④東北方自在天(Mahesvara)。東方帝釋天(Indra)。東南方火天(Agni)。南方焰摩天(Yama)。西南方羅刹天(Nirrti)。西方水天(Varuna)。西北方風天(Vayu)。北方毘沙門天(Vaishrava)。上方梵天(Brahma)。下方地天(Prithivi)。日天(Aditya)。月天(Cand=

こ)の十二天、並に七曜二・十八宿の印契と眞言とを説く。これは十二天供儀軌の中から、十二天の形像を省いて印明のみ別出し、それに前者と同様、七曜二・十八宿の印明を加へて、一の儀軌としたものらしい。(神林隆淨)

十天形像

①(日)Jū-ten-kyō-zō. ②一卷 ③存 ④元祿一五寫 ⑤(京大藏、一六・五)

十弟子勸文

①(日)Jū-de-shi-kannon. ①一帖 ②存 ③徳川時代寫 ④(寶善提院)

十弟子讚

①(日)Jū-de-shi-san. (支)Shi-ti-tai-tsun. ②一卷 ③(参考) 傳教大師將來越州録

十弟子進退所作法附法事年曆考

①(日)Jū-de-shi-shin-tai-sho-sa-hō-tsuketari-hō-jin-en-ryak-ko. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、宗大・一八六六)

十弟子進退堂上二人

①(日)Jū-de-shi-shin-tai-dō-jō-ni-nin. ②七帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

十度異名

①(日)Jū-do-i-myo. ②一帖 ③存 ④寫本(高大、寄・一・七二) ⑤(参考) 異名幸心流 ⑥一葉 ⑦存 ⑧傳、實雅 ⑨寫本(谷大、餘小・二六)

十度異名抄

①(日)Jū-do-i-myo-shō. ②(参考) 本朝台祖撰述密部書目 ③(日)Jū-do-i-myo-arabini-shū-in-zu. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

十度見聞

①(日)Ja-do-kam-mon. ②一卷 ③存 ④有後述、光欽記 ⑤明應五寫

十度抄

①(日)Ja-do-sho. ②長寛(長和五—永保元 A. D. 1016—1081)

①本朝台祖撰述密部書目に云く、或目錄云、大原作、號十波羅蜜、  
②寫本(明徳院)

十度傳法私記

①(日)Ja-do-den-bo-shi-ki. ①一卷 ③存 ④玄航撰

十等藏經

①(日)Ji-to-gō-kyō. (支)Shi-teng-tō-ang-ching. ②一卷 ③缺

④西晉竺法護(—太始二—建興元 A. D. 266—313)譯 ⑤(參考)仁壽錄第五、靜泰錄第五、武周錄第一二、開元錄第一四、貞元錄第二四

十堂四季天供式

①(日)Jū-shū-shi-ki-ten-gū-shiki. ②一帖 ③存 ④南北朝時代寫 ⑤(寶善提院)

十二阿練若高行經

①(日)Jū-ni-aren-ya-kō-gyō-kyō. (支)Shi-er-ha-hien-fo-kao-hsing-ching. ②一卷 ③缺

④失譯 ⑤(參考)出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

十二意經

①(日)Jū-ni-igi-kyō. (支)Shi-er-hi-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯

⑤(參考)出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

十二因緣阿含口解經

①(日)Jū-ni-in-en-a-gon-ku-ge-kyō. (支)Shi-er-hi-yin-yüan-a-lan-kou-chieh-ching.

②一卷 ③失譯 ④(參考)武周錄第一一

十二因緣記

①(日)Jū-ni-in-en-ki. ②一卷 ③存 ④寬明(—明治一七 A. D. 1881)述 ⑤明治一八刊 ⑥(谷大、餘大・三六九一)寫本(谷大、餘大・三五七七)

⑦(参考)大日本佛教全書第二四 ⑧千觀(延喜一八一—永觀元 A. D. 918—983)一說永觀二、年六六(寂) ⑨康保四(A. D. 967) ⑩寬文六(高六、寄一・二四)

十二因緣義私記

①(日)Jū-ni-in-en-gi-shi-ki. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第二四、天台小部集釋第一三 ④千觀(延喜一八一—永觀元 A. D. 918—983)述 ⑤康保四(A. D. 967)

十二因緣義私記

①(日)Jū-ni-in-en-gi-shi-ki. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第二四、天台小部集釋第一三 ④千觀(延喜一八一—永觀元 A. D. 918—983)述 ⑤康保四(A. D. 967)

⑥本書は「法華玄義第二(會本二之二ノ二丁)に依つて此問答を作る」と題下に記してある。玄義二の十二因縁は法華玄義の科文の配列から見ると玄義を先づ二に分ち、序分と正釋五義となす。正釋五義は又二に分る。一は列名。二は解釋。解釋を判と釋に分け、釋を通釋と別釋とし、別釋を標章と隨釋とに分け、隨釋を釋名、辨體、明宗、論用、判教と分つ。釋名を釋別名と釋通名とに分け、釋別名を釋妙法と釋蓮華に分ける。釋妙法を開章と解釋に分ける。解釋を判通別、定前後、出舊解、正解の四段に分ける。正解を借光宅義顯(今妙)と正釋とに分ける。正釋を標と釋とに分け、釋を釋法と釋妙とに分ける。釋妙を約本迹と料簡とに分け、約本迹を列通別二門と依門解釋

とに分ける。依門解釋と通釋と別釋とに分け、別釋を結、數示妙と正釋名とに分ける。正釋名を迹門十妙と本門十妙と分け、迹門十妙を列釋と解釋とに分ける。解釋を列五番と隨釋とに分け、隨釋を標章、引證、生起、廣解、權實に分ける。廣解を境、智、行、位、法、感應、神通、說法、眷屬、利益に分け、境を列章、隨釋に分ける。隨釋を釋諸境と論諸境同異とに分ける。廣解を十如、因縁、四諦、二諦、三諦、一諦、無諦とに分ける。この因縁の一段に於いて四種の十二因縁を釋せんとして本書を作つたのである。上の科段を簡單に述べれば五重玄義の下の釋名の中で妙の解釋をするに當つて本迹二門を立て、本迹二門に各十妙を説く。今は迹門十妙の第一妙の下の因縁を釋する一段がある。この因縁の義に就いて記述したものが本書である。本書は問答百七十有餘條を重ね、始終悉く問答體に作つてある。最後に至つて約一枚は破損のために原本が讀めなかつたと寛文六年刊行のために記してあるからこの破箇所に問答が幾條あつたか不明であるから「有餘」と記したのである。本書は跋語によれば「康保四年三月十三日等師の請ひに依つて此私記を述ぶ。同志の義にも依らず、文書の勸も經ない。今は但管見のまを記したものである」といひ、又本文の最後には「後三教の因縁については追つて之れを記すべし」と記してあるから千觀が稿を起した時には四種十二因縁義を論ずる考へであつたことが知られる。然るに本書は僅かに第一思議生滅十二因縁を説くに留り、思議不生滅十二因縁、不思議生滅十二因縁、不思議不生滅十二因縁の三種を記さずに終つてゐる。本書の記述の體度から想像すれば若し四種十二因縁義が著作されたならば實に堂々たる立派な因縁論が日本天台に残されることとなつたと思はれる。撰述せずに終つたことは遺憾の限りと云はねばならぬ。本書は中論の中に三藏教の思想あることを述べて、玄義の説を論證し、次に因縁説に外道と佛道との相違として三仙二天の縁起を紹介し、遂に佛教縁起説との人心に影響する効果論に及ぶ。次に無明と行と識と關係を論ずる點は實に精細であり鋭利である。次に縁起縁生論も三藏教意に立つて論ずるものとして見る時示唆する所が多い。次に無明支體の論。癡愛の説、増數十一因縁説等は日本天台の性相學として見ると、本書は最も優秀な論文であると考へられる。惠心の對俱舍妙と對立するには其量も妙く、論點も僅かに十二因縁の一に過ぎないが、其筆致は誠に精妙である。性相研究者が天台學の縁起論特に天台の觀たる小乘の縁起説を知らんと欲する者の必讀書である。千觀は園城寺派の學僧、攝津箕面山に住したから箕面の千觀といはれ、攝津安滿に金龍寺を創立したから金龍寺の學僧とも云はれる。又彌陀念佛を勸進し、八誓を立て十大願を發し行持堅固の念佛行者でもあつた。その態度は惠心僧都と相類し而も同時代の先望であることは注目すべき

考へであつたことが知られる。然るに本書は僅かに第一思議生滅十二因縁を説くに留り、思議不生滅十二因縁、不思議生滅十二因縁、不思議不生滅十二因縁の三種を記さずに終つてゐる。本書の記述の體度から想像すれば若し四種十二因縁義が著作されたならば實に堂々たる立派な因縁論が日本天台に残されることとなつたと思はれる。撰述せずに終つたことは遺憾の限りと云はねばならぬ。本書は中論の中に三藏教の思想あることを述べて、玄義の説を論證し、次に因縁説に外道と佛道との相違として三仙二天の縁起を紹介し、遂に佛教縁起説との人心に影響する効果論に及ぶ。次に無明と行と識と關係を論ずる點は實に精細であり鋭利である。次に縁起縁生論も三藏教意に立つて論ずるものとして見る時示唆する所が多い。次に無明支體の論。癡愛の説、増數十一因縁説等は日本天台の性相學として見ると、本書は最も優秀な論文であると考へられる。惠心の對俱舍妙と對立するには其量も妙く、論點も僅かに十二因縁の一に過ぎないが、其筆致は誠に精妙である。性相研究者が天台學の縁起論特に天台の觀たる小乘の縁起説を知らんと欲する者の必讀書である。千觀は園城寺派の學僧、攝津箕面山に住したから箕面の千觀といはれ、攝津安滿に金龍寺を創立したから金龍寺の學僧とも云はれる。又彌陀念佛を勸進し、八誓を立て十大願を發し行持堅固の念佛行者でもあつた。その態度は惠心僧都と相類し而も同時代の先望であることは注目すべき

ことである。(田島徳音)

**十二因縁義私記** ①(日)Ja-ni-inn-en-gi-shi-ki. 十二縁起私記、十二因縁私記 ②一巻 ③存 ④覺運(天曆七—寛弘四 A. D. 953—1007) ⑤(参考) 本朝台祖撰述密部書目

**十二因縁義私記** ①(日)Ja-ni-inn-en-gi-shi-ki. 十二因縁私記 ②源信(天慶五—寛仁元 A. D. 942—1017)述 ③(参考) 本朝台祖撰述密部書目 山家祖德撰述篇目集卷下

**十二因縁開書** ①(日)Ja-ni-inn-en-ki-gaki ②一巻 ③存 ④阿滿得聞(文政九—明治三九 A. D. 1826—1906)著 ⑤(龍大)二六二九(三)

**十二因縁經** ①(日)Ja-ni-inn-en-gyo. (支)Shih-erh-yin-yüan-ching. 開城十二因縁經 ②一巻 ③缺 ④後漢安世高(—建和二—建寧三 A. D. 148—170—)譯 ⑤第一譯 ⑥(参考)開元錄第一四、貞元錄第二四

**十二因縁經** ①(日)Ja-ni-inn-en-gyo. (支)Shih-erh-yin-yüan-ching. 貝多樹下思惟十二因縁經 ②一巻 ③缺 ④西晋竺法護(—太始二—建興元 A. D. 266—313—)譯 ⑤第四譯 ⑥(参考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

**十二因縁經** ①(日)Ja-ni-inn-en-gyo. (支)Shih-erh-yin-yüan-ching. 貝多樹下思惟十二因縁經、開城十二因縁經、樹下思惟十二因縁經、思惟十二因縁經 ②一巻 ③存、大正一六・八二六 No. 713 縮印

七、卅一 C. 七、北 265 女、南 277 女、元 266 女、明北 274 良、清 274 良、麗 270 傷、元 274 女、指 249 傷、法 260 傷、至 33 得、明南 263 効、天 278 ④支謙譯 ⑤吳黃武二—建興二(A. D. 233—235) ⑥貝多樹下思惟十二因縁經 ⑦下見よ。

**十二因縁經** ①(日)Ja-ni-inn-en-gyo. (支)Shih-erh-yin-yüan-ching. ②一巻 ③缺 ④齋肅求那思地(—永明一〇—建武二 A. D. 492—495—)譯 ⑤第五譯 ⑥(参考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

**十二因縁經** ①(日)Ja-ni-inn-en-gyo. (支)Shih-erh-yin-yüan-ching. ②一巻 ③增一阿含經第四十六卷の抄出。④(参考) 法經錄第五、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

**十二因縁經疏** ①(日)Ja-ni-inn-en-gyo-sho. (支)Shih-erh-yin-yüan-ching-shu. 貝多樹下思惟十二因縁經疏 ②一巻 ③(参考) 奈良朝現在一切經疏目錄 2022

**十二因縁觀** ①(日)Ja-ni-inn-en-kwan. (支)Shih-erh-yin-yüan-kuan. ②一巻 ③唐澄觀(開元三五一—開成三 A. D. 727—838) ④(参考) 花嚴宗經論章疏目錄 諸宗章疏錄第二

**十二因縁觀經** ①(日)Ja-ni-inn-en-kwan-gyo. (支)Shih-erh-yin-yüan-kwan-ching. ②一巻 ③缺 ④姚秦鳩摩羅什(建元二—義熙九 A. D. 344—413)說弘始一一或義熙中寂譯 ⑤(参考) 開元錄第一五、貞元錄第二五

**十二因縁啓蒙** ①(日)Ja-ni-inn-en-kei-mo. ②一巻 ③存 ④小山憲榮(—明治三六 A. D. 1933)述 ⑤明治一六刊 ⑥(谷大、餘大・二〇九一)(龍大、二六二九・四)

**十二因縁結縛神咒經** ①(日)Ja-ni-inn-en-keisu-ran-jin-ju-kyo. (支)Shih-erh-yin-yüan-chieh-lu-shen-chou-ching. 十二因縁結縛神呪 ②一巻 ③缺 ④失譯 ⑤(参考) 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第一二、開元錄第五、第一四、貞元錄第八、第二四

**十二因縁御書** ①(日)Ja-ni-inn-en-go-sho. ②一巻 ③存、日蓮聖人御遺文之内 ④日蓮(貞應元—弘安五 A. D. 1222—1282)述 ⑤康元元(A. D. 1256)

⑥成佛とは我身を知ること、我身を知ることとは本来の佛であることを知ることである。我身は六根六境六識の十八界から成り立ち五蘊和合の身である、五蘊の和合は十二因縁(無明、行識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死)に依る、十二因縁は業苦の三を三世兩重の因果に配當したもので、この十二因縁即ち是れ佛法である法華經である、故に此の十二因縁を知れば成佛することが出来る」と説き、次に六根を細説し就中意根を詳説して、天台妙樂等の論釋に及び、以て即身成佛を説いた書である。⑦(参考) 錄外考文第五、錄外微考卷下

**十二因縁私記** ①(日)Ja-ni-inn-en-shi-ki. ②一巻 ③存 ④千觀(延喜一八

—永觀元 A. D. 918—981)說永觀二、年六六寂述 ⑤山家祖德撰述篇目集卷下に十二因縁義私記と十二因縁私記を列舉し後者の下に細註して曰く「此標題脫義字一歟。義字無之。故後人誤テ重出スト見タリ焉」云々。十二因縁義私記の下を見よ。

**十二因縁私記** ①(日)Ja-ni-inn-en-shi-ki. 十二縁起私記、十二因縁義私記 ②一巻 ③存 ④覺運(天曆七—寛弘四 A. D. 953—1007) ⑤(参考) 諸宗章疏錄第二

**十二因縁私記** ①(日)Ja-ni-inn-en-shi-ki. 十二縁起私記、十二因縁義私記 ②一巻 ③存 ④覺運(天曆七—寛弘四 A. D. 953—1007) ⑤(参考) 諸宗章疏錄第二

**十二因縁私記** ①(日)Ja-ni-inn-en-shi-ki. 十二因縁義私記 ②源信(天慶五—寛仁元 A. D. 942—1017)述 ③(参考) 諸宗章疏錄第二

**十二因縁鈔** ①(日)Ja-ni-inn-en-sho. 一念三千抄、一念三千法門 ③存、日蓮聖人御遺文、日蓮上人全集第五、日蓮宗々々學全書第一八 ④一念三千法門の下を見よ。⑤明治二六刊 ⑥(谷大、餘大・二六七四)(龍大、研佛)

**十二因縁の研究** ①(日)Ja-ni-inn-en-no-ken-kyu. ②一巻 ③存、西藏文唯識論附錄 ④寺本婉雅著 ⑤刊本(谷大、外洋・五三六)

**十二因縁事** ①(日)Ja-ni-inn-en-no-koto. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)



台祖撰述密部書目山家祖德撰述密日集卷上

十二因緣論

①(日)Ja-ni-en-en-ron. (支)Shih-eh-yin-yuan-tan. (梵)Pratyasamupādhaya. (藏)ren-cin-hbr-el-par. (前)半の頌に當る。ren-cin-hbr-el-par. (後)半の長行に當る。②一卷。存。大正三二・四八〇No. 1661. 縮藏三、三二二・二、北637臨、南651臨、元633臨、明北1204沛、清1204沛、麗653命、天637臨、指602命、法635命、至1359甲、明南338華、N. 1211. 淨意菩薩造、後魏菩提流支(一)永平元—大統元 A. D. 508—535—)譯

①初に六偈半の頌を出し、次に之れを釋する問答體の長行を以て十二因緣法を説ける小論。緣起十二支の初・八・九即ち無明・愛・取・煩惱、二・十即ち行・有は業、餘の七即ち識・名色・六入・觸・受・生老死等は苦であつて、煩惱より業、業より苦、苦より煩惱を生じて欲・色・無色三界を輪轉する。恰も師の説より弟子の説、燈より燈、鏡より像、聲より聲ある如く不一不異不即不離に因緣に従つて展轉する。もし一切世間無常不淨苦無我の義を觀察し染着しなければ行なく生なく苦なく解脱を得べしと説いてある。梵本傳らないが、西藏本は丹殊爾經疏部Tsa. 函中に本頌の部と長行の部と二本になつて傳へられ、又漢譯に於ても近時燉煌出土大正藏經新編入のNo. 1655因緣心論頌及同釋はこの十二因緣論の同本異譯である。而して著者を流支譯は淨意菩薩とする

が、燉煌本及び西藏譯は何れも頌釋ともに龍樹(龍猛)造と傳へてゐる。諸有流轉を空思想によりて説ける點よりみて龍樹作とするも差支なからう。淨意菩薩といふのは他に知られてゐない名である。(櫻部文鏡)

十二因緣和談鈔

①(日)Ja-ni-en-en-wa-dan-shō. ②一卷。③存。④天保二寫。⑤(京大、藏)一五〇・六

十二員易知錄

①(日)Ja-ni-en-chi-roku. ②一卷。③存。④禿氏道徹記

十二有支義

①(日)Ja-ni-u-shi-gi. (支)Shih-eh-yu-tsh-i. ②一卷。③(參考)入唐新求聖教目錄

十二緣起義

①(日)Ja-ni-en-gi. (支)Shih-eh-yuan-chi-i. ②一卷。③(參考)奈良朝現在一切經疏目錄2736

十二緣起私記

①(日)Ja-ni-en-gi-shi-ki. ②十二因緣義私記、十二因緣私記。③一卷。④存。⑤覺運天曆七—寬弘四 A. D. 953—1007述。⑥寫本(龍大、二六五二・一六五)

十二緣起章

①(日)Ja-ni-en-gi-shō. (支)Shih-eh-yuan-chi-i-chang. ②一卷。③(參考)唐神泰(一)永徽六 A. D. 655—)述

十二緣生解迷顯智悲論

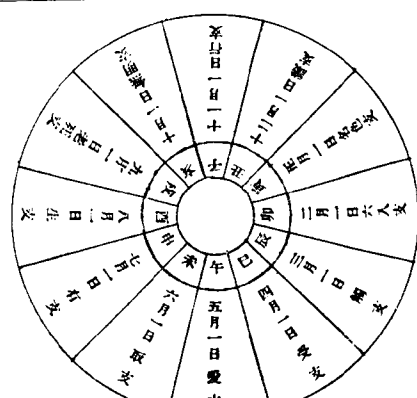
①(日)Ja-ni-en-shō-ge-mai-ken-chi-hi-ron. (支)Shih-eh-yuan-sheng-chieh-mi-shien-chi-hi-ron. 解迷顯智成悲十明論、釋華嚴十明論、華嚴十明論、十明論、釋華嚴十二緣生解迷顯智成悲十明論。②一卷。③

存、大正四五・七六七。1888、正續二・八・四。唐李通玄(貞觀九—開元一八 A. D. 639—730)述。④解迷顯智成悲十明論の下を見よ。(參考)花嚴宗經論章疏目錄

十二緣生祥瑞經

①(日)Ja-ni-en-shō-shō-zui-kyō. (支)Shih-eh-yuan-shō-hsueh-gang-jū-ching. ②二卷。③存。大正一六・八四五No. 719. 縮藏六、二一五・三、北1129卿、南1151卿、元1145卿、明北809則、清809則、麗1134壁、天1131卿、法1250高、至1163外、明南110則、頁814。④宋施護譯

佛、諸大衆の請を容れて十二緣生吉祥瑞應を説きたまふ。上卷に於ては無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死の十二支を十二月に、各月一日より十五日に配し、十月一日を無明として二日は老死、三日は生以下十二日行に及び十一月一日は行、十二月一日は識と云ふ風に、而して十三日十四日十五日は夫々三四日五日に同じくする。今圖解を擧げると



この十二支に従つて生れ日に依つてその人の生涯に受くべき苦樂より壽命まで定つてゐると説き、病む日によつてその病狀を説き、日に依つて盜難の方向をとき、未來所有の功德を決定せりと説く。

下卷に入りても又右の圖を出し、烏鳥の鳴く日と方向によつて吉凶を判斷し、心齋上向を説き、更に大衆の望にまかせて此の十二支を以て日用の事、卜問の事にまで説き及ぶ。

佛教の十二因緣が十二支と合したもので、佛敎本來の思想よりは寧ろ遠ざかつてゐるのではないかと思はれる。(三好鹿雄)

十二箇條問答

①(日)Ja-ni-ka-jō-mon-kō. ②一卷。③存。④超然(寬政四—明治元 A. D. 1793—1868)寫本(龍大、一九七一・五六)

十二個條問答

①(日)Ja-ni-ka-jō-mon-dō. ②存。淨土宗全書第九冊和語燈錄第四、拾遺黒谷上人語燈錄之内、法然上人全集。③源空(長承二—建曆二 A. D. 1133—1212)述。了慧(寛元元—元徳二 A. D. 1243—1330)編

十二合掌

①(日)Ja-ni-gass-shō. ②二合掌合心流。③一華。④存。⑤實雅傳

十二均章

①(日)Ja-ni-kin-shō. (支)Shih-eh-chün-chang. 大乘四論玄義。②二卷。③唐代慧均。④(參考)奈良朝現在一切經疏目錄2326

十二宮耳提記

①(日)Ja-ni-kyū-ji

一、leik-ki. ⑤存、七部雜纂之内 ⑥宿曜經を講じたもの。⑦寫本(龍大、一〇三・四)

**十二月聲明講三法則** ①(日) [Jā-ni-gwatsu-shō-myō-ko-san-hō-soku. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

**十二月表** ①(日) [Jā-ni-gwatsu-hyō. ②一卷 ③安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—) ④(參考) 密乘撰述目錄、山家祖德撰述篇目集卷上、本朝台祖撰述密部書目、諸宗章疏錄第二

**十二卷章** ①(日) [Jā-ni-kwan-shō. (支) Shih-eh-chuan-chang. 十二卷 ②十二卷 ③新羅義寂述 ④(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2713. 2714

**十二卷傳** ①(日) [Jā-ni-kwan-den. (參考) 淨土真宗教典志第二

**十二觀經** ①(日) [Jā-ni-kwan-gyō. (支) Shih-eh-kuan-ching. ②一卷 ③失譯 ④(參考) 貞元錄第八

**十二牽連鈔** ①(日) [Jā-ni-ken-ren-shō. 法華十二因緣抄 ②二卷 ③存 ④日如 ⑤刊本(谷大、餘大・三二五九)

**十二賢者經** ①(日) [Jā-ni-ken-jā-kyō. (支) Shih-eh-hsien-chē-ching. 十三賢經 ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤(參考) 出三藏記第三、法經錄第三、仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第二、第一五、貞元錄第二五

**十二光圓解** ①(日) [Jā-ni-kō-en-ge. ②一卷 ③存、說林乾冊之内 ④法露元祿六一寛保元 A. D. 1693—1741) 述 ⑤寫本(谷大、宗大・二六二〇)

**十二光義** ①(日) [Jā-ni-kō-gi. ②一卷 ③存 ④法霖(元祿六一寛保元 A. D. 1693—1741) 述 ⑤(參考) 淨土真宗教典志第二 ⑥寫本(谷大、宗大・二四一)

**十二光義遺芳錄** ①(日) [Jā-ni-kō-gi-ihō-roku. ②一卷 ③存 ④若蒙(延寶三—享保二 O. A. D. 1675—1735) 法霖(元祿六一寛保元 A. D. 1693—1741) 共說、道粹(正徳三—明和元 A. D. 1713—1764) 錄 ⑤(參考) 淨土真宗教典志第二 ⑥寶曆七寫(龍大、一五〇二・九(谷大、宗大、二八八二))

**十二光正則辨** ①(日) [Jā-ni-kō-shō-soku-ben. ②一卷 ③存 ④易往庵主 ⑤寫本(龍大、一二三六・八〇)

**十二光佛勸進往生文** ①(日) [Jā-ni-kō-butsu-kwan-jin-ō-jō-mon. ②(參考) 淨土真宗教目録

**十二光佛讚** ①(日) [Jā-ni-kō-bus-san. ②一卷 ③宋元照(慶曆八—政和六 A. D. 1048—1116) ④(參考) 淨土依憑經論章疏目錄

**十二講々勸集私記** ①(日) [Jā-ni-kō-kō-gon-shū-shi-ki. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

**十二殘水目方** ①(日) [Jā-ni-zan-sui-ae-kata. ②一包 ③存 ④明德二寫(金剛三昧院)

**十二死經** ①(日) [Jā-ni-shi-kyō. (支) Shih-eh-sā-ching. 十二品生死經 ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤(參考) 出三藏記第三、開元錄第二、第一五、貞元錄第四、第二五

**十二時願文** ①(日) [Jā-ni-jū-gwan-mon. 永平高祖十二時願文 ②一卷 ③存 ④道元希玄(正治二—建長五 A. D. 1200—1253) ⑤(參考) 禪籍目錄

**十二時不修行法** ①(日) [Jā-ni-jū-tai-ryō-hō. ②一軸 ③存 ④康永四寫(高大、寄、一・六四)

**十二時法語** ①(日) [Jā-ni-jū-tō-go. ③存、禪門法語集上卷之内 ④大智素溪語山田孝道、森慶造共編 ⑤明治二八、大正一〇刊 ⑥東京光融館

**十二宗綱要** ①(日) [Jā-ni-shū-kyō. 蓋頭十二宗綱要、東洋哲學必携 ②二卷 ③存 ④町元春空編 ⑤明治二〇刊 ⑥(谷大、餘大・二六九六)(帝國、九・三九、一〇九一三四)(立大、A 六一・二〇—二二)(正大、一〇七・六七)(哲、之、四、中三四)(京專)

**十二章** ①(日) [Jā-ni-shō. (支) Shih-eh-chang. 十二卷章 ②十二卷 ③新羅義寂述 ④(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄3712

**十二鈔聞書** ①(日) [Jā-ni-shū-ki-kyō. ②一卷 ③存 ④釋論を講述したるもの。 ⑤文明三寫 ⑥(谷大、餘甲・一〇五)

**十二帖口決** ①(日) [Jā-ni-jū-ka-ke-san. 七師十二帖口決 ③中院流大事の口決中、七師の口決十二帖を輯めたるもの。帖名左の如し。 ④(一)中院流口傳、成雄記。 ⑤(二)中院流大事、成雄記。 ⑥(三)中院相傳(異本中院流相傳)永通記。 ⑦(四)中院流口傳、成雄口、永通記。 ⑧(五)高野中院流(異本中院流・中院流事)宥快口、快全記。 ⑨(六)印信口決、快全記。 ⑩(七)他不見集(異本中院他不見集)宥快口、快全記。 ⑪(八)中院灌頂式聞書、任遍記。 ⑫(九)中印口決、任遍記。 ⑬(十)中院流大事口傳、行遍記。 ⑭(十一)中院流作法、快曼記。 ⑮(十二)明算流大事私記(異本中院流大小二卷私記)快曼口、宥智記。 ⑯大正六刊 ⑰高野山八葉學會

**十二眞言王儀軌** ①(日) [Jā-ni-shin-gon-ō-gi-ki. ②一卷 ③存、日本大藏經第四四、弘法大師全集第六之内 ④空海(寶龜五一承和二 A. D. 774—835) ⑤暗缺暗惡糝索合那囉嚩囉の十二眞言を一身に觀布することを示す書で、胎藏法の十二布字觀である。 ⑥(參考) 諸宗章疏錄第三、本朝台祖撰述密部書目、大師御作書目録、釋教諸師製作日録 ⑦寫本(寶壽院)(寶善提院) (小田慈舟)

**十二頭陀經** ①(日) [Jā-ni-zū-da-kyō. (支) Shih-eh-tou-to-ching. 沙門頭陀經 ②一卷 ③存、大正一七・七二〇 No. 783. 縮富八、卅二・四、北532行、南537行、元531行、明北488半、清488半、麗511景、天532行、指477景、法511景、至74景、明南530賢、No. 453 ④求那跋陀羅譯 ⑤劉宋元嘉二二—二〇(A. D. 435—443) ⑥經末に於て佛自ら阿難の問に答へて經名

を「頭陀苦行」となし、亦「離著集諸善本」と名けて居る。阿難に對して阿蘭若の法を説き十二頭陀行を詳しく述べるものである。

一、阿蘭若處——もと居家惱多きを以て出家したのであるから空閑に住して衆の聞聲を離れ五欲五蓋を遠離せねばならない。

二、常乞食——衆落に入りて乞食する時は六根を制されねばならない。得と不得とに保らず心を平等にせよ。

三、次第乞食——頭陀比丘は色に著せず、衆生を輕んぜず等心に憐愍し貧富を擇ばないこと。

四、一食法——一食を求むるさへ猶多いのである。況して小食中食後食をとるに於てをや、一心に行道することが出来ない。數々食を斷じて一食法をうくべきである。

五、節量食——一食を得ては渴乏の衆生に一分を施せば慳貪に墮せざるを思ひ、而も一分を留る時は身は輕安となるのである。

六、中後不飲漿——食後中を過ぎて漿を飲めば心に樂著を生じて種々の漿を求めて厭くことを知らず、一心に善法を修得することが出来な。

七、幣納衣——塵染物を拾ひ集めて之を浣ぎ幣納衣を作つて寒露を覆除する。そうすれば親著することなく賊難、奪命の患もない。

八、但三衣——衣は形を蓋ふを以つて足る。種々の衣を着へ、又は裸形を避け佛弟子は但三衣の法を受くべきである。

九、家間住——止觀無常空觀の二法を修すべきで、その爲めには家間に住するが無常觀不淨觀を得易くて最もよろしい。

十、樹下止——無常觀不淨觀を作して未得道者は心大いに厭くことがある。その際は樹下に至つて求道を思惟すべきである。

十一、露地坐——樹下も涼樂にして愛著を生ずると今度は露地に至り、樹下は濕冷、鳥屎、毒蟲の患があるが露地は快樂なりと考へよといふ。

十二、但坐不臥——身四威儀中、坐は第一である。食は消化し易く氣息は調和する。求道者は若しは行、若しは立、睡を欲する時も腋を地に著けない。

以上の十二頭陀行を以て心を散亂せしめず禪定の功德は是より生ずるのであると説き終つた佛は、諸菩薩に向つて像法中此の經を護持せんことを勧め、帝釋等は護持者衛護を誓ひ、文殊師利は此の經を護持し修行者のため開導とならんことを述べてゐる。(三好鹿雄)

十二頭陀經

①(日)Jā-ni-tu-dā-kyō. (支)Shih-eh-t'ou-to-ding. ②一卷

③缺 ④東晋求那跋陀羅(太元一九一)泰始四 AD. 391—463)譯 ⑤(參考) 出三藏記第四、法經錄第三、開元錄第一五、貞元錄第二五

十二祖贊略傳

①(日)Jū-ni-sō-san-ryaku-den. 西山十二祖贊略傳 ②一卷

③存 ④明空譯了 ⑤享保一〇刊 ⑥(龍大、研眞)(正大一、一五・三二)

十二調子事

①(日)Jū-ni-chō-shi-no-koto. ②一卷 ③存、大正八四・八六〇

No. 2719

①日本音樂特に聲明の根本原理としての一越、斷金、平調、勝絕、下無、雙調、烏鐘、黃鐘、鸞鏡、熬涉、神仙、上無の十二律をそのまゝ十二調子に配した時の、それらの聲の性質意味を種々の方面より記述したものである。初めには十干十二支に配し、後には宮、商、角、徵、羽といふ五音を吟ずる時の心得、發聲法、呂と律との分け方、調子を時刻に配當する前後の事などを併せ記述してある。(大山公淳)

②存、大日本佛教全書第五〇覺禪鈔之内 ③覺禪(康治二—建曆二後 A. D. 1143—1212)撰 ④南北朝時代寫 ⑤(寶善提院) ⑥(寶善提院) ⑦一册 ⑧存 ⑨平安朝時代寫 ⑩(寶善提院)

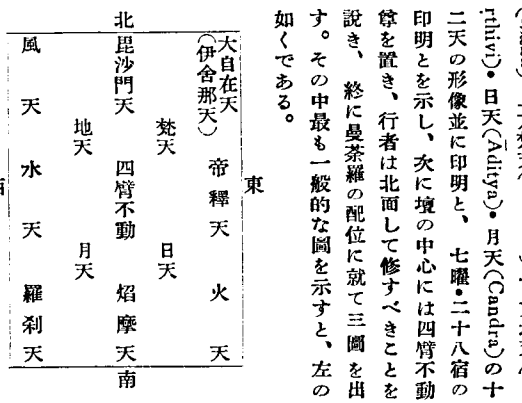
⑪十二天供 ①(日)Jū-ni-ten-gū. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第四〇阿婆縛抄之内 ④承澄(元久二—弘安五 A. D. 1205—1382)撰

⑤十二天供儀軌 ①(日)Jū-ni-ten-gū-ki. (支)Shih-eh-tien-kung-i-kuai. ②一卷 ③存、大正二一・三八五 No. 1298. 縮餘四、記續二・九四

④胎金合軌して、初に供養法を説く。即ち、先づ各座に一淨葉を置き、次に香水、華、燒香、焚香、雜粥小蠟燭或は紙燭の順序にて位毎に獻するに、各々本眞言を以て三通つゝ加持するのであるが、其の燭を諸位に通く獻し終るまで、滅せしめないことに

成つてゐるので、助伴或は驅使數人をして、供せしむべきことが明してある。次で

東方帝釋天(Indra)・東南方火天(Agni)・南方焰摩天(Yama)・西南方羅刹天(Rakshas)・西方水天(Varuna)・西北方風天(Vayu)・北方毘沙門天(Vaishravaṇa)・東北方伊舍那天(Ikani)・上方梵天(Brahma)・下方地天(Prithivi)・日天(Aditya)・月天(Candra)の十二天の形像並に印明と、七曜・二十八宿の印明とを示し、次に境の中心には四臂不動尊を置き、行者は北面して修すべきことを説き、終に曼荼羅の配位に就て三圖を出す。その中最も一般的な圖を示すと、左の如くである。



之を要するに、本儀軌は不空三藏譯の金剛頂瑜伽護摩儀軌(大正一八・九一六)を節略し、それに十二天曼荼羅を加へた不動十二天法にして、而も諸天の眞言は皆胎藏に依つてゐるから、胎金合部の儀軌であることは明かである。(神林隆淨)

十二天供頭次第

①(日)Jū-ni-ten-gū-shū-dai. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)(寶善提院)

⑥十二天供次第 ①(日)Jū-ni-ten-gū

⑦(寶龜院)(寶善提院)

shi-dai. ③存、修驗聖典第五編

④十二天廣等 ①(日) Ju-ni-ten-ko-  
50. ②凡三十五帖 ③存 ④足利時代寫

⑤(寶善提院)

⑥十二天呪字 ①(日) Ju-ni-ten-shu  
②一袋 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶  
善提院)

⑦十二天集 ①(日) Ju-ni-ten-shu. ②  
安然(承和八)延喜年間A. D. 841-901) ③  
〔參考〕 諸宗章疏錄第二、山家祖徳撰述  
篇目集卷上、本朝台祖撰述密部書目

⑧十二天諸尊道場觀拔書 ①(日)  
Ju-ni-ten-sho-son-do-jo-kwan-nuki-ga-  
ki. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶  
龜院)

⑨十二天圖說 ①(日) Ju-ni-ten-zu-  
seisu. ②一冊 ③存 ④寫本(哲、カ、1・  
左、7)

⑩十二天屏風事 ①(日) Ju-ni-ten-  
byo-bu-no-koto. ②一紙 ③存 ④足利  
時代寫 ⑤(寶龜院)

⑪十二天報恩儀 ①(日) Ju-ni-ten-ho-  
on-gi. ②定深(天仁元A. D. 1108) ③  
〔參考〕 本朝台祖撰述密部書目、諸宗章  
疏錄第三

⑫十二天略念誦次第 ①(日) Ju-ni-  
ten-yaku-nen-jū-shi-dai. ②一冊 ③存

⑬刊本(高大一・六七)

⑭十二部經名 ①(日) Ju-ni-bu-kyo-  
myo. (支) Shi-eh-pu-ching-ming. 十二  
部經名經 ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤〔參  
考〕 出三藏記第四、武周錄第一二、開元

録第五、第一五、貞元録第八、第二五

⑮十二部雜纂 ①(日) Ju-ni-bu-zas-  
san. ②一卷 ③存 ④僧榮等編

⑯觀經隱顯記。二種深信記。二卷鈔記。聖  
人一流章記。卷頭讚記。領解文記(二部)。  
禮讚聽記。大原問答演唱記。正信働勸考。  
淨土和讃勸信録。大經和讃勸考を収む。

⑰寫本龍大(一〇三・八)

⑱十二部大乘開發 ①(日) Ju-ni-bu-  
dai-jō-kai-hotsu. 十二部大乘開發 ②一卷  
③最澄(神護景雲元一弘仁一)A. D. 767-  
822) ④〔參考〕 本朝台祖撰述密部書目

⑲十二佛名神呪校量功德除障滅  
罪經 ①(日) Ju-ni-butsu-myō-jin-  
shū-kyō-ryō-ku-doku-jo-shō-metsu-zai-  
kyō. (支) Shi-eh-to-ming-shen-chou-  
chiao-ling-kung-tê-ri-u-chang-mieh-  
tsui-ching. (梵) Dvādasabuddhaka. (藏傳)

(藏) Dhags-pa sans-rygas bou-gñis-pa  
shes-bya-ba theg-pa chen-pohi mdo. 十  
二佛名神呪經、十二佛名神呪除障滅罪經  
③存、大正二一・八六〇No. 1348 縮成  
七、已一一・一、北302効、南314効、元310  
効、明北331能、清331能、麗302男、天310  
効、指287男、法996男、至556因、明南306  
必、N. 335 闍那難多譯 ⑤隋大嘉二一  
開皇二〇(A. D. 561-600)

⑥雜密經、除障滅罪法を説く。即ち佛が彌  
勒菩薩に對し、東方二佛及び四方四維上  
下十方の十二佛の名號とその功德並に一首  
の陀羅尼を説くことゝする。當經の十二佛名  
と「五千五百佛名神呪除障滅罪經」(大正一

四・三一八)の初めの部分は全然同一である  
が、西藏々經廿殊爾經部第九百三十九番目  
(N. za. 09, P. hu) 又は祕密部第五百十一  
番目(P. Na.)、第四百七十八番目(P. hu)  
に出づる聖十二佛大乘經の十二佛名とも  
左の如く大體一致するを見る。

1、東方 虛空功德清淨微塵等目端正功德  
相光明華波頭摩琉璃光寶體香最上香供養  
訖種々莊嚴頂髻無邊日月光明顯力莊嚴變  
化莊嚴法界出生無障礙王如來……  
de-bjin-gsegs-pa……namkha-dbal-dr  
si-med-rdul-sel-rab-mpses-yon-tan-gy  
i-pod-me-dog da-dna-baiduryahi pod  
-yer-rin-po-chehi-gyug-ita-buhsiku-  
dan-ldan-pa-spos-mchog-dam-pas-mu-  
hos-pa-sku-rnam-par-spras-sin-legs-  
par-bryan-pa-gtsug-tor-gyi-gtsug-ni-  
ri-mahi-pod-zer-dpag-med-za-hod-  
smon-lam-gyis-brgyan-pa-rab-sprul-  
bkod-pa-chen-po-chos-kyi-dbyins-las-  
mnon-iphags-chags-med-rin-chen-rg-  
yal-po.

2 東方 毫相日月光明華寶蓮華堅如金剛身  
毘盧遮那無障礙眼圓滿十方放光照一切佛  
刹相王如來  
sats-rygas bcom-ldan-fda schu-lla-gs  
-on-nuñ-mahi-sgron-ma-za-bahi-me-  
tog-rin-chen-padma-gser-sdag-nank-  
ha-ta-buñ-sku-ldan-rnam-par-snañ-  
mbsad-hod-yer-rab-brgyan-thogs-me-  
d-ikhor-to-diyi-ikhor-plyogs-bow-  
hod-yer-rab-hbyin-hjig-ten-khams-

kun-tu-snan-byed-tog-gi-ryal-mthan  
-ryal-po.  
3 東方 一切莊嚴無垢光如來  
byod-pa-thams-cad-dri-mcd-hod.  
4 南方 辯才瓔珞思念如來  
spobs-pahi-ryan-la-dronis-pa.  
5 西方 無垢月相王名稱如來  
dri-med-za-bai-to-gi-ryal-po-gra-  
gs-ldan.  
6 北方 華莊嚴作光明如來  
me-tog-gi-bkod-pa-snan-bur-mdsad-pa  
7 東南方 作燈明如來  
doh-mdsad.  
8 西南方 寶上相名稱如來  
rin-chen-mchog-gi-grags-ldan.  
9 西北方 無畏觀如來  
hjigs-med-rnam-par-gyis.  
10 東北方 無畏無怯毛孔不堅名稱如來  
hjigs-bral-bag-tsha-bu-mi-mñah-spa-  
zin-mi-byed.  
11 下方 師子奮迅根如來  
seh-ge-bgyis-pañ-med-pi.  
12 上方 金光威王相似如來  
gsar-tod-gyi-bjid-ryal-po.  
尙異譯「佛說稱讚如來功德神呪經」の十二  
佛名はその方向を當經の順序の如くすれば  
大同するやうである。  
此等の十二佛名を至心に唱受すれば、生  
々世々の中に於て除障滅罪し、他人の愛敬  
を得、光明威力廣大に生れながらにして人  
尊となり後世に佛陀を成ずと云ひ尙注意す  
べきは

若有諸女人 受持此經者 捨離女人形。轉生智男身。得男子身已 身成於菩提。と云ひて女人は男身に變成して而して後成佛するの功徳を明せることである。

(神林隆淨)

十二分大乘開發

①(日)Jā-ni-hon-dai-jō-kai-jōtsu. 十二部大乘開發 ②1卷 ①最澄(神護景雲元—弘仁一三A. D. 767—822) ②(參考) 山家祖徳撰述篇目集卷上

十二反音九弄十紐

①(日)Jā-ni-hen-on-ku-rō-jō-chū. ②1卷 ③存 ④尊意 ⑤(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

十二品生死經

①(日)Jā-ni-shō-jī-kyō. (支)Shih-erh-pin-sheng-ssā-ching. ②1卷 ③存、大正一七・五七五No. 753. 縮箱六、卅一五・一、北856寬、南863寬、元857寬、明北736寬、清736寬、麗847無、天850寬、指809無、法837甚、至1083上、明南733孝、Nj. 740 ④求那跋陀羅譯 ⑤元嘉二二二〇(A. D. 433—443)

佛、諸比丘の爲めに四果の人より三塗に至るまで善惡生死に十二品あるを説く。その十二品とは、無餘死羅漢果、度於死阿那含果、有餘死斯陀含果、學度死須陀洹果、無欺死八等人、歡喜死行一心、數々死惡戒人、悔死者凡夫、橫死者孤獨苦、縛著死者生、燒爛死地獄、飢渴死餓鬼である。比丘はよく是を曉知せねばならぬとて、放逸、姪色、諸横を誡め閑處に在して一心に禪を學ぶべしと説く。(三好鹿雄)

十二品生死經

①(日)Jā-ni-shō-jī-kyō. (支)Shih-erh-pin-sheng-ssā-ching. ②1卷 ③失譯 ④(參考) 出三藏記第四、法經錄第三、武周錄第一

十二萬神王護比丘尼經

①(日)Jā-ni-man-jinn-ō-go-bi-ku-ni-kyō. (支)Shih-erh-wan-shen-wang-hu-pi-chin-ni-ching. ③存、灌頂經第二(大正二一・四九九No. 1331)

十二萬神王護比丘尼呪經

①(日)Jā-ni-man-jinn-ō-go-bi-ku-ni-jū-kyō. (支)Shih-erh-wan-shen-wang-hu-pi-chin-ni-chou-ching. ②1卷 ③失譯 ④(參考) 三寶記第七、內典錄第三

十二門宗致義記玄談

①(日)Jā-ni-mon-shū-chi-gi-ki-gen-dan. ②1冊 ③存 ④宜然述 ⑤文化七寫 ⑥(高木、寄・一・一四)

十二門禪經

①(日)Jā-ni-mon-zen-kyō. (支)Shih-erh-mên-ch'an-ching. ②1卷 ③缺 ④(參考) 法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、武周錄第一

十二門陀羅經疏

①(日)Jā-ni-mon-da-ra-kyō-shū. (支)Shih-erh-mên-to-lo-ching-su. ②1卷 ③新羅環興(一開羅元A. D. 681—) ④(參考) 東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第一

十二門大方等經

①(日)Jā-ni-mon-dai-hō-dō-gyō. (支)Shih-erh-mên-ta-lang-teng-ching. ②1卷 ③缺 ④吳支謙(一黃武二—建興二A. D. 233—253—)譯 ⑤(參考) 武周錄第一二、開元錄第一四、

貞元錄第二四

①(日)Jā-ni-mon-tom-moku. (支)Shih-erh-mên-p'ia-mu. ②1卷 ③(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2728

十二門略疏

①(日)Jā-ni-mon-ryō-shū. (支)Shih-erh-mên-liao-su. ②1卷 ③隋吉藏(太清三—武徳六A. D. 549—623)述 ④(參考) 東域傳燈目錄卷下

十二門論

①(日)Jā-ni-mon-ron. (支)Shih-erh-mên-lun. 十二門觀論、十二品目 ②1卷 ③存、大正三〇・一五九No. 1568. 縮來一〇、卅二一・七、北584是、南598是、元591是、明北1179側、清1179側、麗866陰、天588是、指550陰、法573F、至1306殿盤、明南337破守、Nj. 1186 ④龍樹造、姚秦鳩摩羅什譯 ⑤弘始一一(A. D. 409)

①(一)内容目次 觀因緣門第一、觀有果無果門第二、觀緣門第三、觀相門第四、觀有相無相門第五、觀一異門第六、觀有無門第七、觀性門第八、觀因果門第九、觀作者門第十、觀三時門第十一、觀生門第十二。(二)解説 十二門論は其の名の示す如く、又右の内容目次にも明なる如く、因縁等の十二の部門に於て世界人生を觀じて、結局一切空の深義に達せしめんとするものにて、その意味に於ても、又その組織内容より見るも、同じく龍樹の著なる中論の綱要書或は入門書の性質を有するものなり。此の論は本論の部と釋の部とより成る。本論の部とは偈のみにて、しかもそは一部門

につき一偈なり。各門に於ける本論偈は國譯大藏經(國民文庫刊行會發行)三論の解題に於て宇井伯壽博士の舉出されし如し。しかもこの本論十二偈中にも中論の偈より取りしもの四偈あり、即ち、第三、第五、第八、第十の各門の偈なり。「嘉祥大師はその十二門論疏(大正、四二、頁一七七)に、猶第二門の偈は、中論別破四緣初偈に同じく、又第十二門の偈は中論三相品三時門破に同じとせるが、これは意味は合するも文句は異なるを以てこゝに入れず」又第七門の偈は空七十論より取れるものなるが、その他の七門の偈と雖も、中論中に相類するものを見出し得。釋にも散文のみならず必要に應じて偈を引用せるが、こは第一門釋中の一偈が空七十論のものなるを除き、他の十三偈は全部中論中のものなり。これによりても中論との關係如何に密接なるかは明なり。空七十論は漢譯には存せざるも西藏譯には現存し、勿論龍樹の作なるが、十二門論はこれをも豫想せるは既述によりて明なり。釋の部分も龍樹自身の眞作なるべきは、古く既に嘉祥大師吉藏の十二門論疏卷上(大正、四二、頁一七八)に證明せる如し。猶本論の現存出版本には、初に釋僧觀撰の十二門論品目並に序を附するを通例とす。

⑦(注釋) 疏六卷(隋、吉藏撰)、疏宗教義記二卷(唐、法藏撰)、疏開思記一卷(日本、藏海撰)、疏抄(日本大藏經刊本表題、十二門論抄出)一卷(日本、尋慧撰) ⑧寛文四刊(谷大、餘大・三八五)(龍大、二三三・五、研

佛(高六、寄・一・一四)(正大、一一九・一三  
一)正徳元刊(谷大、餘大・六〇)光緒二二刊  
(京大、藏・一・一〇) (干潟龍祥)

**十二門論** ①(日)Ja-ni-mon-ton.  
國譯十二門論 ②存、國譯大藏經論部第五  
③字井伯壽譯

**十二門論** ①(日)Ja-ni-mon-ton.  
國譯十二門論 ②存、國譯一切經中觀部第  
一 ③羽溪了諦譯

**十二門論疏** ①(日)Ja-ni-mon-  
ron-gi-sho. (支)Shih-eh-men-tun-tsu.  
②一巻 ③(參考) 奈良朝現在一切經疏日  
録2463

**十二門論玄義** ①(日)Ja-ni-mon-  
ron-gen-gi. ①一巻 ②(參考) 諸宗章疏  
録第11

**十二門論宗致義記** ①(日)Ja-ni-  
mon-ton-shu-chi-gi-ki. (支)Shih-eh-  
men-tun-tsun-g-chh-t-chi. ②二巻 ③存、  
大正四二・一一二No. 1836 ④正統一・十三・  
五 ⑤唐法藏(貞觀一七一先天元 A. D. 643  
—712)述 ⑥儀鳳元—先天元(A. D. 676—  
712)

①本書は唐代華嚴宗の大成者賢首大師法藏  
が龍樹の十二門論を釋せるもの、比較的簡  
なるも良釋なり。根本趣旨に於ては造論主  
龍樹の趣旨に反せず。世に之を新三論の書  
とするも、そは日照三藏(地婆訶羅 Diva-  
nava唐儀鳳初、西曆六七六印度より來り六  
八七年迄譯經に従事す)所傳の説を法藏が  
親しく就いて傳へしによるものとし、日照  
三藏を以て印度中觀派の一派なる清辨論師

系統の説を奉ぜるものとなすによるも、日  
照三藏は必ずしも殊に清辨系統の思想のみ  
の祖述者なりともいへざるべく、況んや本  
書の内容を檢するに、特に清辨系統の思想  
を發揮せりとは思へず。たゞ時代は既に印  
度那爛陀の最盛期の教學が來りて支那唯識  
法相學を起せる後のものであり、且、法藏  
がその圓融無碍の華嚴の立場に立ちて解釋  
せるものなれば、自ら羅什系統の吉藏の著  
に比してそれだけの特色はあり、その意味  
に於ては新なるも、本書に於て別に新三論  
宗を起すといふが如き意味はあらず。

①正徳元刊(京大、藏・六・五)(高六、寄・  
一・一四)(谷大、餘大・六一)(龍大、二四三  
三・一)(正大、一一九・一三五)光緒二二刊  
(京大、藏・六・四) (干潟龍祥)

**十二門論宗致義記玄談** ①(日)  
Ja-ni-mon-ton-shu-chi-gi-ki-gen-tan.  
②存、底耳記之内 ③宜然述 ④寫本(龍  
大・二〇三・四七)

**十二門論疏** ①(日)Ja-ni-mon-ton-  
sho. (支)Shih-eh-men-tun-su. ②三巻  
③存、大正四二・一七1 No. 1825 ④正統一・  
七・三五 ⑤吉藏(太清三一武徳六A. D. 549  
—633)述 ⑥隋大業四(A. D. 608)六月譯

①この書はその名の示す如く龍樹の十二門  
論の疏にて、中論疏及百論疏と並びて重ん  
ぜらるゝものなり。最初の觀因緣品第一の  
疏の初頭に於て、本論の性質特徴、殊にその  
中論等と對比して本論存在の意義價值等に  
ついて序し、次に本論の解釋に入りて本論  
の順序に従ひ忠實に解説す。而してそは全

體に於て亦部分的字句の解釋に於ても、  
よく本論の趣旨に合し、龍樹の大乗空觀を  
闡明せる好著なり。猶現存出版本にはその  
初めに十二門論序(これは僧報撰)疏なるも  
のを附す。

⑦(注釋) 疏開思記一卷(日本、藏海撰)、  
疏抄(日本大藏經刊本表題、十二門論抄出)、  
一卷(日本、尋慧撰)。⑧(參考) 諸宗章疏録  
第一 ⑨寫本(京大、藏・六・二)(高六、寄・  
一・一四刊本(高六、寄・一・一四)  
(干潟龍祥)

**十二門論疏** ①(日)Ja-ni-mon-ton-  
sho. (支)Shih-eh-men-tun-su. ②一巻  
③唐法藏(貞觀一七一先天元 A. D. 643—  
712) ④(參考) 新編諸宗致義總録卷第  
三、東域傳燈目錄卷下、花嚴宗經論章疏目  
録、諸宗章疏録第一

**十二門論疏** ①(日)Ja-ni-mon-ton-  
sho. (支)Shih-eh-men-tun-su. ②二巻  
③琛師述 ④(參考) 東域傳燈目錄卷下、諸  
宗章疏録第二

**十二門論疏** ①(日)Ja-ni-mon-ton-  
sho. (支)Shih-eh-men-tun-su. ②一巻  
③我眉山惠亮述 ④(參考) 東域傳燈目錄  
卷下、諸宗章疏録第二

**十二門論疏** ①(日)Ja-ni-mon-ton-  
sho. (支)Shih-eh-men-tun-su. ②二巻  
③元康述 ④(參考) 東域傳燈目錄卷下、  
諸宗章疏録第一

疑是誤歟」云々。  
**十二門論疏** ①(日)Ja-ni-mon-ton-  
sho. (支)Shih-eh-men-tun-su. ②一巻  
③曇影述 ④(參考) 東域傳燈目錄卷下、  
智證大師請來目錄、諸宗章疏録第二

**十二門論疏記** ①(日)Ja-ni-mon-  
ron-sho-ki. (支)Shih-eh-men-tun-su-  
chi. ①一巻 ②上我眉 ③(參考) 東域  
傳燈目錄卷下、智證大師請來目錄

**十二門論疏玄義** ①(日)Ja-ni-mon-  
ton-sho-gen-gi. (支)Shih-eh-men-tun-  
su-tsun-gi. ①一巻 ②(參考) 東域傳燈  
目錄卷下、智證大師請來目錄

**十二門論疏要** ①(日)Ja-ni-mon-  
ton-sho-kyo-yo. ①一巻 ③存 ④義範  
述 ⑤寫本(龍大)

**十二門論疏抄** ①(日)Ja-ni-mon-  
ron-sho-sho. ①一巻 ②存、日本大藏經三論章疏卷下 ③尋慧述 ④元應二(A. D. 1330)九月二十一日抄出了(寫本與書)

①本書名は日本大藏經出版本によれば十二  
門論抄出とあるを以て、それが正しから  
ん。本書は表題の割註には元應二年八月二  
十四日於法園寺聖然大徳講席、聊註師說引  
文證。とあり、又その奥書には元應二年九  
月二十一日當精日抄出了、談義首尾十九ヶ  
日聽衆十一人也、尋慧房。とあり。これに  
よれば尋慧なる者が元應二年八月より九月  
にかけて法園寺聖然大徳の講義を聴きてそ  
れを聞き書し、且多少註し又文證を引きて  
成りしものと考へらる。然るに聖然大徳は

名所行發⑩(名庫書)書藏所現⑪ 月年の刊寫⑫(書考參書釋註)書本⑬ 說解容内⑭ 代年作者⑮ 著者⑯ 缺存⑰ 數卷⑱(名書)名題⑲ 號略字數

律苑僧寶傳卷十三、及、招提千歲傳記卷中之二等によれば正和元年八月十五日寂にて、元應二年より八年前に入寂せる人なり。本書表題の割註にある聖然とこの人とは別人ならざる可からざるが如きも、この頃に於て聖然といふ人、殊に三論等に達し居りし聖然といふ人が二人ありとするも疑はし。同人とすれば右兩記事の年記の何れかが誤りと見ざるべからず。或は他に會通の仕方あるや、予は目下何れとも決し難し。

本書の内容は十二門論疏の講義の聞書にて、疏の文句の難解又は重要なを引出して、それを法華義疏、中論疏、百論疏等に従つて解釋し、又時々師云として師の説を擧げ、又時には一義云、として異説を擧ぐ、故にその當時の三論家の説を見るに資する所あり。但本書は十二門論疏の卷上末(大正藏、四二、頁一九二下)「今捉一果以對二因」の所迄の解釋にて終り、以下については無し。しかも注意すべきはこの最後の文には多くの異本を擧げてこれを判定し、こは「今捉二因以對一果」とすべきものなりと結なり。

**十二門論疏問答** ①(日)Ja-ni-mon-ron-sho-mon-di. ②一冊 ③存 ④寫本(高大奇・一・一四)

**十二門論疏聞思記** ①(日)Ja-ni-mon-ron-sho-mon-shi-ki. ②一卷 ③存 ④大正六五・二五七 No. 2257 日本大藏經三論章疏卷下 ⑤藏海述 ⑥正應三(A. D. 1290)十一月九日

⑦本書は藏海が東山攝嶺院坊に於て師より

十二門論疏の講義を聞きつゝある間に、疏中の重要な、又は難解なる字句文章についての解釋の聞書をなせるものなり。猶卷頭には十二門論の僧叡の序についての註釋を附す、この部は吉藏の序疏の文句を引用して解釋し、それ以外の説を擧げず。

①(日)元三寫(高大、寄・一・一四)大正二寫(谷大、餘大・二四二五) (千湯龍祥)

**十二門論疏翼贊抄序** ①(日)Ja-ni-mon-ron-sho-yoku-san-sho-jo. (支) Shih-eh-men-tun-sai-tsan-chi-ao-hsi. ②一卷 ③亡名 ④(參考) 東城傳燈目錄卷下、入唐新求聖教目錄、諸宗章疏錄第二

**十二門論抄出** ①(日)Ja-ni-mon-ron-sho-shutsu. 十二門論疏抄 ②一卷 ③存 ④日本大藏經三論章疏卷下 ⑤尋慧(元應二A. D. 1320) ⑥十二門論疏抄の下を見よ。⑦寫本(谷大、餘大・一三五〇)

**十二門論捕影記** ①(日)Ja-ni-mon-ron-sho-yu-ki. ②一卷 ③存 ④三井淳辨述 ⑤大正七刊 ⑥(龍大、二四三三・六)(谷大、餘洋四六二)

**十二門論略疏** ①(日)Ja-ni-mon-ron-ryaku-sho. (支) Shih-eh-men-lan-liao-su. ②一卷 ③隋吉藏太清三武德六A. D. 549-623 ④(參考) 諸宗章疏錄第一

**十二門題講義** ①(日)Ja-ni-mon-dai-ko-gi. ②二卷 ③存 ④龍溫(寛政一二年明治一八 A. D. 1800-1885)述 ⑤寫本(谷大、宗大・二三〇)

**十二門問答** ①(日)Ja-ni-mon-do. ②二卷 ③存、法然上人全集、和語燈錄、淨土宗全書第九卷 ④源空(長承二一建曆二 A. D. 1133-1212) ⑤(參考) 淨土真宗教典志第一

**十二遊經** ①(日)Ja-ni-yu-kyo. (支) Shih-eh-yu-ching. ②一卷 ③缺 ④西晉代羅梁婁至譯 ⑤(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、靜泰錄第四、開元錄第一、貞元錄第二

二卷 ③存、法然上人全集、和語燈錄、淨土宗全書第九卷 ④源空(長承二一建曆二 A. D. 1133-1212) ⑤(參考) 淨土真宗教典志第一

**十二問答** ①(日)Ja-ni-mon-do. ②一卷 ③存 ④北總逸士 ⑤明治四序 ⑥(龍大、二〇九九・三)

**十二遊經** ①(日)Ja-ni-yu-kyo. (支) Shih-eh-yu-ching. ②一卷 ③缺 ④西晉代羅梁婁至譯 ⑤(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、靜泰錄第四、開元錄第一、貞元錄第二

**十二遊經** ①(日)Ja-ni-yu-kyo. (支) Shih-eh-yu-ching. ②一卷 ③存、大正四・一四五 No. 195、縮藏八、已二六・九、北1012圖、南1027圖、元1024圖、明北1367英、清1367英、麗1016圖、天1016圖、指972圖、至1463圖、明南1085終、Nj. 1374 ④迦留陀伽譯 ⑤東晉太元一七(A. D. 392)

⑥(異譯) 本經は大正藏經にて二紙に足らざる小經であるが、出三藏記集は十二遊經(各一卷)を二部擧げて、共に之を失譯としてゐる。然るに費長房の歴代三寶紀は六、七、十の各卷に三本の異譯を擧げ、凡て小異とし、實唱録其他の舊録を參看すべしと言つてゐる。其の一は晉の武帝太始二年(A. D. 266)羅梁婁至譯、其二は晉の孝武帝太元十七年(A. D. 392)迦留陀伽譯、其三は宋代求那跋陀羅譯である。此中で第一譯は三寶紀第三卷年代記中にも載せて而かも譯出時を更に遅らし、晉景帝太康二年辛丑(A. D. 281)羅梁婁至來朝同時となしてゐる。内典

錄、譯經圖紀、大周刊定錄、開元錄等皆之に従ひ三本の異譯を擧げ、第一譯の譯出時については、或は太始二年説を取り(開元錄等)、或は太康二年説を取つてゐる(内典錄、譯經圖紀等)。鬼にかく三本の異譯の存在は事實であつたらうが、今日は迦留陀伽本のみ存する。

〔内容及特色〕 佛成道後十二年間の傳道生活の概要を述べたものであるが、それは量からいへば全經の四分一にも足らず、他は傳道以外の事を述べてゐる。従つて本經の内容を分類すれば

一、釋迦族の祖先より父白淨王に至る系譜。  
二、兜術天より菩薩が托胎すべき王家の觀察。  
三、父系の叔父及従兄弟の名、母系及婦系の名稱。  
四、二十九出家三十五成道後十二年間の遊化地及對機。(十四箇國)  
五、當時の諸國土及人民の特徵。其中四天子の國名は晉、天竺、大秦、月氏とし、五黑人國名は斯黎、迦羅、不羅、闍耶、那額となし、各々その名産を擧ぐ。

尙ほ此等の所説の多くが他經と一致せず本經獨特のものであることは、小經ながら本經存在の價値を高めるものである。殊に私呵味經(第五年)、般舟經(第七年)、也真陀羅經(第八年)、弗迦沙王經(法句譬喻經第六惟念品、第十年)、彌勒經(第十一年)、差摩竭經(菩薩生地經、第十二年)等諸經典の説法

錄、譯經圖紀、大周刊定錄、開元錄等皆之に従ひ三本の異譯を擧げ、第一譯の譯出時については、或は太始二年説を取り(開元錄等)、或は太康二年説を取つてゐる(内典錄、譯經圖紀等)。鬼にかく三本の異譯の存在は事實であつたらうが、今日は迦留陀伽本のみ存する。

〔内容及特色〕 佛成道後十二年間の傳道生活の概要を述べたものであるが、それは量からいへば全經の四分一にも足らず、他は傳道以外の事を述べてゐる。従つて本經の内容を分類すれば

一、釋迦族の祖先より父白淨王に至る系譜。  
二、兜術天より菩薩が托胎すべき王家の觀察。  
三、父系の叔父及従兄弟の名、母系及婦系の名稱。  
四、二十九出家三十五成道後十二年間の遊化地及對機。(十四箇國)  
五、當時の諸國土及人民の特徵。其中四天子の國名は晉、天竺、大秦、月氏とし、五黑人國名は斯黎、迦羅、不羅、闍耶、那額となし、各々その名産を擧ぐ。

尙ほ此等の所説の多くが他經と一致せず本經獨特のものであることは、小經ながら本經存在の價値を高めるものである。殊に私呵味經(第五年)、般舟經(第七年)、也真陀羅經(第八年)、弗迦沙王經(法句譬喻經第六惟念品、第十年)、彌勒經(第十一年)、差摩竭經(菩薩生地經、第十二年)等諸經典の説法

錄、譯經圖紀、大周刊定錄、開元錄等皆之に従ひ三本の異譯を擧げ、第一譯の譯出時については、或は太始二年説を取り(開元錄等)、或は太康二年説を取つてゐる(内典錄、譯經圖紀等)。鬼にかく三本の異譯の存在は事實であつたらうが、今日は迦留陀伽本のみ存する。

〔内容及特色〕 佛成道後十二年間の傳道生活の概要を述べたものであるが、それは量からいへば全經の四分一にも足らず、他は傳道以外の事を述べてゐる。従つて本經の内容を分類すれば

一、釋迦族の祖先より父白淨王に至る系譜。  
二、兜術天より菩薩が托胎すべき王家の觀察。  
三、父系の叔父及従兄弟の名、母系及婦系の名稱。  
四、二十九出家三十五成道後十二年間の遊化地及對機。(十四箇國)  
五、當時の諸國土及人民の特徵。其中四天子の國名は晉、天竺、大秦、月氏とし、五黑人國名は斯黎、迦羅、不羅、闍耶、那額となし、各々その名産を擧ぐ。

尙ほ此等の所説の多くが他經と一致せず本經獨特のものであることは、小經ながら本經存在の價値を高めるものである。殊に私呵味經(第五年)、般舟經(第七年)、也真陀羅經(第八年)、弗迦沙王經(法句譬喻經第六惟念品、第十年)、彌勒經(第十一年)、差摩竭經(菩薩生地經、第十二年)等諸經典の説法

錄、譯經圖紀、大周刊定錄、開元錄等皆之に従ひ三本の異譯を擧げ、第一譯の譯出時については、或は太始二年説を取り(開元錄等)、或は太康二年説を取つてゐる(内典錄、譯經圖紀等)。鬼にかく三本の異譯の存在は事實であつたらうが、今日は迦留陀伽本のみ存する。

年時を明かにせることは注目し値する。更に經錄に三異譯を數へたる點からすれば、譯出の所依の原典は存せるものの如くであるが、本經所説の體裁は之を迦留陀伽自身の選述とも思はせる。若し翻譯とするも可なり達意的の翻譯で、例へば支那の天子の如きも譯出時の王朝名を原典の他の王朝名に代へたるものと見なければならぬ。尙ほ本經が十二年間の傳道の次第を年代別に述べたるは、その特色となるもので、斯の如きは僧伽羅利經が四十五年の説法地を述べたる以外に類例を見ぬ。而も本經と羅利經の十二年間とを對照すれば、多少の異同が存する。

⑦(参考) 出三藏記集四、歷代三寶紀第三、六、七、十。內典錄第二、三、四、譯經圖記第二、四、大周刊定錄第九。開元錄第二、三、五。貞元錄第四、五、七。⑧實文一二刊 ①(龍大、二一九・一)(寺崎修一) ②(日)Ja-ni-yu-kyo. (支) Shih-eh-yu-ching. ③1卷 ④缺 ⑤宋求那跋陀羅(太元一九一泰始四 A. D. 391—488)譯 ⑥第三譯 ⑦(参考) 三出三藏記第四、法經錄第四、靜泰錄第四、開元錄第一五、貞元錄第二五

十二禮 ①(日)Ja-ni-rai. (支) Shih-eh-li. ②1卷 ③存、七祖聖教第一、眞宗聖教大全中卷、大谷眞宗法彙之内 ④龍樹造、禪那願多譯 ⑤阿彌陀佛の莊嚴功德を讚歎せる偈頌にして、七言四句を一頌とし、十二頌四十八句より成る。初に稽首天人所恭敬等の一頌は

總じて佛徳を讃じ、次に金色身淨如山王等の六頌は主徳、即ち主佛の徳、十方所來諸佛子等の二頌は伴徳、即ち聖衆の徳、彼尊無量方便境等の二頌は報徳、即ち國土の徳を讃じ、最後に我説彼尊功德事等の一頌は廻向文を以て結歎せしもの、なほ各頌に願共諸衆生往安樂國の句が添へられてある。此偈は諸家の經錄に載せざるも、迦才の淨土論卷中に十二經七論の隨一として引用し、善導の往生禮讚に龍樹菩薩願往生禮讚偈と題して中夜偈に引用してある。蓋、十二禮と稱するは十二頌より成り、前記迦才の淨土論に如く禪那願多三藏別譯龍樹菩薩讚禮阿彌陀佛文有十二禮とあるに従へるもので、他に別題ありしならんか。以上迦才の淨土論と善導の往生禮讚との所引に就て對照するに、淨土論に至心歸命禮西方阿彌陀佛とあるを、往生禮讚には南無の二字を加へて南無至心歸命禮西方阿彌陀佛、また第二頌以下の末句、故我頂禮彌陀佛の佛が尊となり、第十頌の彼尊無量方便境等と第十頌の彼尊佛利無惡名等の二頌が、前後位置を易へてゐる。なほ此偈は眞宗にては正依經論中の隨一に收め、また梵唄として淨土三昧法中に用ひられてある。

⑦(参考) 淨土眞宗教典志第一、二、三 ⑧明和六刊 ①(谷大、宗大・二三八一)(龍大、二〇三・二〇)(京大、藏・一八五・五) (高木俊一)

十二禮經懺法 ①(日)Ja-ni-rai-kyo. ①一卷 ②(参考) 淨土依憑經論章疏目錄

十二禮恭敬記 ①(日)Ja-ni-rai-ki. ②二卷 ③存、眞宗大系第五之内 ④大舍(安永二一嘉永三 A. D. 1773—1803)述 ⑤本書は六門を以て龍樹菩薩の著十二禮を釋す。即ち一、興由。二、藏攝。三、教判。四、宗教。五、題號。六、本文の六門である而して本文を釋するに就て三分し初に總じて讀禮を標し二に別して讀禮を明し三に結願廻向を釋す。

①寫本(谷大、宗大・二六四) (水谷) ②(参考) 淨土眞宗教典志第一、二、三

十二禮科解 ①(日)Ja-ni-rai-kyo. ②1卷 ③(参考) 淨土眞宗教典志第一、二、三

十二禮冠註 ①(日)Ja-ni-rai-kan. ①一卷 ②支智景權(享保一九一寛政六 A. D. 1734—1794)述 ③(参考) 淨土眞宗教典志第二

十二禮偈 ①(日)Ja-ni-rai-ge. ②1卷 ③存 ④慧吟註 ⑤元祿一三刊 ⑥(谷大、宗大・二二二四)

十二禮偈隨筆 ①(日)Ja-ni-rai-ge-zu-hitsu. ②1卷 ③存 ④道隱(寛保元一文化一〇 A. D. 1741—1813)述 ⑤寫本(龍大、研眞)

十二禮偈墨江錄 ①(日)Ja-ni-rai-ge-oku. ②1卷 ③存 ④慧雲(享保一五一天明三 A. D. 1730—1782)述 ⑤(参考) 淨土眞宗教典志第二 ⑥寫本(龍大、一二二・五四)

十二禮結懺法 ①(日)Ja-ni-rai-kyo. ②1卷 ③(参考) 淨土眞宗

教典志第三 十二禮講錄 ①(日)Ja-ni-rai-kyo-roku. ②1卷 ③存 ④柔遠(寛保二一寛政一〇 A. D. 1742—1798)述 ⑤寫本(龍大、研眞)(谷大、宗大・六八四)

十二禮講錄 ①(日)Ja-ni-rai-kyo-roku. ②1卷 ③存 ④環中(一享保元 A. D. 1716—)述 ⑤(参考) 眞宗全書刊行豫定書目

十二禮講錄 ①(日)Ja-ni-rai-kyo-roku. ②1卷 ③存 ④僧樸(享保四一寶曆一 A. D. 1719—1762)述 ⑤(参考) 眞宗全書刊行豫定書目、淨土眞宗教典志第二

十二禮講錄 ①(日)Ja-ni-rai-kyo-roku. ②1卷 ③存 ④法海(明和五一天保五 A. D. 1763—1834)述 ⑤寫本(谷大、宗大・六八三)

十二禮講錄 ①(日)Ja-ni-rai-kyo-roku. ②1卷 ③存 ④龍温(寛政一二一明治一八 A. D. 1800—1885)述 ⑤明治九(A. D. 1876) ⑥寫本(谷大、宗大・一五五九)

十二禮講錄 ①(日)Ja-ni-rai-kyo-roku. ②二卷 ③存 ④常觀述 ⑤寫本(龍大、一二二・四五)

十二禮纂述 ①(日)Ja-ni-rai-kyo-jutsu. ②1卷 ③存 ④慧巖(寶曆六 A. D. 1756—)述 ⑤寫本(谷大、宗大・二〇九九)(龍大、研眞)

十二禮纂要 ①(日)Ja-ni-rai-kyo-yo. ③存 ④智鏡述 ⑤寫本(龍大、研眞)

名所行發⑩ (名庫書)者顯所現⑪ 月年の刊載⑫ (書考書釋註)書末⑬ 説解存内⑭ 代年作者⑮ 著者⑯ 缺存⑰ 數卷⑱ (名書)名題⑲ 號略字數



十二禮首註

①(日)Ja-ni-rai-shu-chu. ②一卷 ③玄智景耀(享保一九一寛政六A.D.1734-1794)述 ④(参考)淨土眞宗教典志第二

十二禮疏

①(日)Ja-ni-rai-sho. ②一卷 ③覺樹述 ④(参考)淨土依憑經論章疏目錄、淨土眞宗教典志第三

十二禮敝蓋縁

①(日)Ja-ni-rai-bei-gai-roku. ②二卷 ③存、眞宗全書第九

仰誓享保六

寛政六A.D.1721-1794)龍樹の十二禮に就て、第一傳承を檢す、第二興由を明かす、第三大旨を辨ず、第四首題を釋す、第五文句を解すの五門に分ちて詳解せしもの。卷首に天明八年龍集戊申十二月二十八日即ち著者六十八歳の自序並に寶雲(深諦院)の序文がある。自序によれば、本書の草稿は明和七年夏の筆録にかゝり、後に僧樸の講録と寶雲の墨江録とを得て、更に兩書の長を取りて合様し、天明八年に完成せしもので、寶雲の序文は草稿の成れる明和八年の秋に作られたものである。その敝蓋縁と題せるは禮記檀弓に敝蓋不棄爲埋狗也とあるに依つたもので、卑謙の意を表したものである。

淨土眞宗教典志第二

①(日)Ja-ni-rai-shi-shu-jō-shen. ②一卷 ③存 ④寂淵作

淨土眞宗教典志卷二

①(日)Ja-ni-rai-shi-shu-jō-shen. ②一卷 ③存 ④寂淵作

十二禮隨聞記

①(日)Ja-ni-rai-shi-shu-jō-shen. ②一卷 ③存 ④寂淵作

十二禮心淨編

①(日)Ja-ni-rai-shi-shu-jō-shen. ②一卷 ③存 ④寂淵作

十二禮隨聞記

①(日)Ja-ni-rai-shi-shu-jō-shen. ②一卷 ③存 ④寂淵作

十二禮隨聞記

①(日)Ja-ni-rai-shi-shu-jō-shen. ②一卷 ③存 ④寂淵作

十二禮聽記

①(日)Ja-ni-rai-sho-ki. ②一卷 ③存 ④靈明記 ⑤寫本(龍大、一二三・四六)

十二禮聽録

①(日)Ja-ni-rai-sho-roku. ②一卷 ③存 ④慧雲(享保一五一天明二A.D.1730-1782)述 ⑤天明五寫(谷大、宗大・二六五)

十二禮通講

①(日)Ja-ni-rai-shi-kyō. ②一卷 ③存 ④隆英(文化七一明治二六A.D.1810-1893)述 ⑤寫本(龍大、一二三・四七)

十二禮備檢

①(日)Ja-ni-rai-shi-ken. ②一卷 ③存、眞宗大系第五 ④慧琳(正徳五寛政元A.D.1715-1789)述 ⑤寶曆九巳卯(A.D.1759)閏七月

十二禮報恩録

①(日)Ja-ni-rai-sho-on-roku. ②一卷 ③存 ④南溪(天明三明治六A.D.1783-1873)述 ⑤寫本(龍大)

十二禮聞記

①(日)Ja-ni-rai-shi-sho-ki. ②一卷 ③存 ④惠海述 ⑤明和七年、門人郭州の筆録せるもの。⑥寫本(龍大、

十二禮聞記

①(日)Ja-ni-rai-shi-sho-ki. ②一卷 ③存 ④惠海述 ⑤明和七年、門人郭州の筆録せるもの。⑥寫本(龍大、

十二禮聞記

①(日)Ja-ni-rai-shi-sho-ki. ②一卷 ③存 ④惠海述 ⑤明和七年、門人郭州の筆録せるもの。⑥寫本(龍大、

十二禮聞記

①(日)Ja-ni-rai-shi-sho-ki. ②一卷 ③存 ④惠海述 ⑤明和七年、門人郭州の筆録せるもの。⑥寫本(龍大、

十二禮聞記

①(日)Ja-ni-rai-shi-sho-ki. ②一卷 ③存 ④惠海述 ⑤明和七年、門人郭州の筆録せるもの。⑥寫本(龍大、

十二例

①(日)Ja-ni-rai-rei. 悉曇十二例 ②一卷 ③存、大正八三・四六二No.2703 ④安然(承和八延喜年間A.D.841-901)撰 ⑤悉曇十二例の下を見よ。⑥(参考)本朝台祖撰述密部書目

十二論辨記

①(日)Ja-ni-rai-ron-ben-ki. ②一卷 ③存、三師要論記之内 ④南條神興(文化一一明治一〇A.D.1814-1887)述 ⑤寫本(谷大、宗大・二八五三)

十日鈔

①(日)Ja-ni-shū. ②賢海(應保二嘉禎三A.D.1162-1237)述 ⑦(参考)諸宗章疏録第三

十如私決

①(日)Ja-ni-yo-shi-ke-su. ②一卷 ③存 ④貞享四刊 ⑤(哲、え、一、右・一五)(正大、一三六・二五)

十如是音釋

①(日)Ja-ni-yo-on-shi. ②一卷 ③存 ④大順述 ⑤文政一三刊 ⑥(正大、一四二・二六一・二七)

十如是義

①(日)Ja-ni-yo-gi. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第二、惠心僧都全集第三 ④源信(天慶五寛仁元A.D.942-1017)撰 ⑤寫本(帝國、か・二三)

十如是義私記

①(日)Ja-ni-yo-gi-shi-ki. ②千觀(延喜一八一永觀元A.D.918-981)說永觀二年六六(寂)述 ⑦(参考)山家祖德撰述篇目集卷上、諸宗章疏録第二

十如是義私記

①(日)Ja-ni-yo-gi-shi-ki. ②千觀(延喜一八一永觀元A.D.918-981)說永觀二年六六(寂)述 ⑦(参考)山家祖德撰述篇目集卷上、諸宗章疏録第二

十如是義私記

①(日)Ja-ni-yo-gi-shi-ki. ②千觀(延喜一八一永觀元A.D.918-981)說永觀二年六六(寂)述 ⑦(参考)山家祖德撰述篇目集卷上、諸宗章疏録第二

十如是義私記

①(日)Ja-ni-yo-gi-shi-ki. ②千觀(延喜一八一永觀元A.D.918-981)說永觀二年六六(寂)述 ⑦(参考)山家祖德撰述篇目集卷上、諸宗章疏録第二

信(天慶五寛仁元A.D.942-1017)撰

①本書は法華經方便品の十如是の相生次第を説き十界互具百界千如の意義を問ひ、詳しく十界の十如是を問答したものである。文句の説に基き天台大師が古師特に光宅の十如權實説を破した事を述べ、次に天台大師の十如權實を明す。本書の所説は何等新説もなく、忠實に文句及び妙樂大師の記の語を解説したものである。

⑦(参考)諸宗章疏録第二、本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上、淨土眞宗教典志第一 ⑧寛文九刊(立大、A・一二・三五三)(高大、寄・一・一五)(谷大、餘大・一〇五二)慶安二刊(立大A・一二・三五四一三五五)

十如是義抄

①(日)Ja-ni-yo-gi-shō. ②一卷 ③存 ④(参考)大日本佛教全書續刊豫定書目

十如是私

①(日)Ja-ni-yo-shi. ②一卷 ③存 ④日遠(元龜三寛永一九A.D.1572-1622)述 ⑤(龍大、二六九・二二)

十如是集

①(日)Ja-ni-yo-shū. ②二卷 ③最澄(神護景雲元弘仁一三A.D.767-822)撰 ④(参考)本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上

十如是集

①(日)Ja-ni-yo-shū. ②二卷 ③最澄(神護景雲元弘仁一三A.D.767-822)撰 ④(参考)本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上

十如是集

①(日)Ja-ni-yo-shū. ②二卷 ③最澄(神護景雲元弘仁一三A.D.767-822)撰 ④(参考)本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上

十如是集

①(日)Ja-ni-yo-shū. ②二卷 ③最澄(神護景雲元弘仁一三A.D.767-822)撰 ④(参考)本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上

十如是集

①(日)Ja-ni-yo-shū. ②二卷 ③最澄(神護景雲元弘仁一三A.D.767-822)撰 ④(参考)本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上

十如是集

①(日)Ja-ni-yo-shū. ②二卷 ③最澄(神護景雲元弘仁一三A.D.767-822)撰 ④(参考)本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上

十如是集

①(日)Ja-ni-yo-shū. ②二卷 ③最澄(神護景雲元弘仁一三A.D.767-822)撰 ④(参考)本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上

名所行發①(名庫書)者屬所現② 月年の刊寫③(書考參書釋註)書末④ 説解内容⑤ 代年作者⑥ 香著⑦ 缺存⑧ 數卷⑨(名書)名題⑩ 號略字數



師在目錄中。後人ノ書損歟。後學正之」云云。

【参考】本朝台祖撰述密部書目

十如是章略解

①(日) Jū-nyō-zō-shō-yaku-ige. ②一卷 ③存 ④靈空光謙

(承應元—元文四 A. D. 1652—1739) 述

⑤寶保二刊 ⑥(龍大、二六五二・一六七) (哲、ま・一・中・一六)

十如是讀文

①(日) Jū-nyō-zō-doku-mon. ②一卷 ③存 ④元祿一三刊 ⑤(龍大、研佛)

十如是事

①(日) Jū-nyō-zō-no-ko-to. ②一卷 ③存、日蓮聖人御遺文之内、日蓮聖人全集第五 ④日蓮(貞應元—弘安五 A. D. 1222—1282) 述 ⑤正嘉二(A. D. 1283)

法華經方便品の十如是

(如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等)は、吾等凡夫衆生が本來三身即一の如來(法報應の三身が吾等の一身に本具せること)であることを説かれたものであるとして、この十如是的如是相は應身如來、如是性及報身如來、如是體は法身如來であると説明し、更に三諦(空、假、中)と三千との關係を説いて、三諦即一、三身即一と斷じ、この立場を本覺の悟りの境とし、「本覺のうつゝの覺にかへりて法界をみれば、皆放光の極樂にて、日來賤しと思ひし我此身が三身即一の本覺の如來にてあるべきなり」と結んだもので觀心の法門を説いた書である。

【参考】

録内啓蒙第三二、所書鈔第二〇

等 (馬田行啓)

十如是法話

①(日) Jū-nyō-zō-hō-wa. ②一卷 ③存 ④日蓮(一明治三八 A. D. 1905) 述 ⑤明治四四刊 ⑥(正大、一四二・二一〇)

十如是問答

①(日) Jū-nyō-zō-mon-do. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、二六五二・一六八)

十如是略釋

①(日) Jū-nyō-zō-ryaku-shaku. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、二六五二・一六九)

十念宇佐八幡印信

①(日) Jū-nen-utsu-yachi-mura-in-jin. ②二葉 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

十念緣起

①(日) Jū-nen-en-gi. ②源信(天慶五—寛仁元 A. D. 942—1017) 述 ③(参考) 本朝台祖撰述密部書目、諸宗章疏錄第二

十念極樂易往集

①(日) Jū-nen-oku-raku-iō-shū. ②一卷(卷第六) ③存 ④佛殿撰 ⑤(参考) 大正新修大藏經刊行豫定書目

十念寺緣起

①(日) Jū-nen-ji-en-gi. ②一卷 ③存 ④(参考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

十念章和解評

①(日) Jū-nen-chō-kaieibyō. ②一冊 ③存 ④眞察著、觀了校 ⑤寶曆二二刊 ⑥(京大、一・二六シ・一)

十念辨玄談

①(日) Jū-nen-hen-uan-dan. ②一卷 ③存 ④成譽大玄(延寶八—寶曆六 A. D. 1680—1756) 述 ⑤寫本

(立大、A三〇・六二)

十念法語

①(日) Jū-nen-hō-go. ②一卷 ③存、日本教育文庫第一一 ④源空(長承二—建曆二 A. D. 1133—1212) 述 ⑤刊本(谷大、外洋、一三三)

十波羅

①(日) Jū-pa-ra. ②(参考) 本朝台祖撰述密部書目

十波羅密羯磨形觀相儀

①(日) Jū-pa-ra-mitsu-kōm-gyō-kwan-shō. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

十波羅密抄

①(日) Jū-pa-ra-misshō. ②十卷 ③(参考) 本朝台祖撰述密部書目、密乘撰述目錄

十八會指歸

①(日) Jū-hachi-e-shiki. (支) Shih-pa-hui-chi-kuei. 金剛頂經瑜伽十八會指歸、金剛頂瑜伽十八會指歸、金剛頂瑜伽指歸 ②一卷 ③存、大正八・二八四 No. 869、縮印、二二七・二、北 1363 惠、南 1386 佐、元 1357 佐、明北 1444 隸、清 1444 隸、麗 1315 佐、天 1338 佐、法 1134 卿、至 804 盛、明南 1150 無、Z. 1448、三十帖策子第二〇 ④不空神龍元—大曆九 A. D. 705—774) 譯 ⑤唐天寶五—大曆九(A. D. 746—774) ⑥金剛頂瑜伽十八會指歸の下を見よ。 ⑦文永八寫(寶善提院)明曆元刊(龍大、二二八・三二)(高木、寄・一・三二)(京專)(寶壽院)

十八會指歸鈔

①(日) Jū-hachi-e-shi-shū. ②十八會指歸類鈔鈔 ③一卷 ④存 ⑤賴諭(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304) 述 ⑥(参考) 諸宗章疏錄第三

寶永二刊(正大、一一六二・二八)(京專)(谷大、餘大・二九五八)明曆三刊(龍大、二一八・三三)萬治元刊(高木、一・三二)

十八會指歸瑜鈔拔書

①(日) Jū-hachi-e-shi-ki-yū-shō-nuki-gakki. ②一冊 ③存 ④明治元寫 ⑤(高木、寄・一・三二)

十八會指歸幼學鈔

①(日) Jū-hachi-e-shi-ki-yō-gaku-shō. ②一卷 ③存 ④賢實(正慶二—應永五 A. D. 1333—1398) (参考) 眞言宗全書刊行豫定目錄

十八會瑜伽法

①(日) Jū-hachi-e-yū-gyō-hō. (支) Shih-pa-hui-yi-chi-hō. ②一卷 ③(参考) 傳教大師將來越州錄

十八空論

①(日) Jū-hak-kyōron. (支) Shih-pa-k'ung-lun. ②一卷 ③存、大正三一・八六一 No. 1616、二二・七、縮景・二 ④龍樹造、陳眞諦(永元元—太建元 A. D. 499—569) 譯

現存十八空論

は便宜上五節に分つて見るべきである。最初から此下第四分別空道理有三の以前までを第一節とし、此文から就此十六空作四科料簡の以前までを第二節とし、此文から第三明唯識眞實云々の以前までを第三節とし、此文から十勝智眞實者有十種勝智云々の以前までを第四節とし、其以下を第五節となすのである。第一節は中邊分別論相品第一の第十六偈の下に於て空の分別を説く爲としての十六空を述ぶるに相當して十八空を辨じたもの、第二節は同論に續いて空の成立の理を述ぶるに相當して論ずるもの、第三節は此論にのみある部分で、以上の結論をなす如きもの、第四節

は中邊分別論眞實品第三の十種眞實の第九分破眞實の下に七種眞實を説く中の第三唯識眞實に相當して論述するもの、第五節は其第十勝智眞實の下に十種の邪執を對治するを説く中の第五までを述べ、偈第三を脱せるものである。かく十八空論は斷片的のものであるが、中邊分別論の一種の注釋敷衍の論たるに過ぎない。故に著者を龍樹となす如きは全く誤で、眞實の著者は不明である。内容は中邊分別論以外に特殊な而も重要なものを有し、唯識説發達史上注意すべきものを含むで居る。(宇井伯壽)

**十八卷傳** ①(日)Ji-hak-kwan-den.

〔参考〕淨土眞宗教典志第三

**十八願講述** ①(日)Ji-hachi-gwan-ko-jitsu. ②一卷 ③存 ④雲山龍珠著

⑤大正五刊 ⑥(龍大、研眞)

**十八願仰高記** ①(日)Ji-hachi-gwan-go-ko-ki. ②一卷 ③存 ④僧叙

(寶曆三—文政八 A.D. 1753—1835)一説文政九、年六五寂述 ⑤寫本(龍大、研眞)

**十八願津江漫錄** ①(日)Ji-hachi-gwan-shin-ko-man-roku. ②一卷 ③存

④僧叙(寶曆三—文政八 A.D. 1753—1835)一説文政九、年六五寂述 ⑤寫本(龍大、研眞)

**十八願刀記** ①(日)Ji-hachi-gwan-cho-cho-ki. ②四卷 ③存 ④曇龍

(明和六—天保二 A.D. 1769—1841)述

**十八願聽記** ①(日)Ji-hachi-gwan-cho-ki. ②一卷 ③存 ④無蓋記 ⑤寫本

(龍大、研眞)

**十八願文聽記** ①(日)Ji-hachi-gwan-mo-cho-ki. ②一卷 ③存 ④栖

城(寛政五—文久元 A.D. 1793—1861)記 ⑤寫本(龍大、研眞)

**十八願文聽視** ①(日)Ji-hachi-gwan-mo-cho-shi. ②一卷 ③存 ④寫

本(龍大、研眞)

**十八願略説** ①(日)Ji-hachi-gwan-ryaku-seisu. ②一卷 ③存 ④名和宗瀛

(天保六—明治二七 A.D. 1835—1894)述 ⑤明治二九刊 ⑥(龍大、研眞)

**十八契印** ①(日)Ji-hachi-ge-in.

(文)Shi-ha-cho-yin. 十八契印軌、十八道契印、十八道儀軌 ②一卷 ③存、大正一八・七八一No. 900、縮餘一、記續一・三一、日本大藏經眞言宗事相章疏第一 ④慧果(天寶五—永貞元 A.D. 746—805)造

⑤此は又十八契印軌、十八道契印、十八道儀軌とも云はれ十八道立の本據となつて居る。初めに莊嚴行者の五儀即ち淨三業、佛部三昧耶、蓮華部三昧耶、金剛部三昧耶、被甲護身の印言、次に結界法の二儀即ち地界(地結)、金剛牆(四方結)、次に莊嚴道場法の二儀即ち道場觀(但し印言を説かず、此れは本尊により流々により印言を異にするからである)大虚空藏、次に勸請法の三儀即ち寶車輪、請車輪、迎請、次に結護法の三儀即ち馬頭觀音、金剛網、火院密縫、次に、供養法の三儀即ち閻伽、蓮華座、普供養等の六法十八義の印言を説く。此の軌の初めより淨三業までは不空譯觀自在菩薩

如意輪瑜伽を着座法より以下は同譯如意輪菩薩念誦法と同文なれば、兩軌の合作と云つてよからう。但し終りに十八契印生起略頌を附加す。

本軌の作者に二説あり。惠果造説、空海造説であるが、前説の根據は三十帖册子目錄に十八契印ある所より支那造とし支那造なれば惠果造ならんとするの説である。後説主張者は安然、皇慶、慧什等である。(神林隆淨)

**十八契印** ①(日)Ji-hachi-ge-in. 十

八道契印、十八契印軌、十八道儀軌 ②一卷 ③存、大正一八・七八一No. 900、縮餘一、記續二・三一、日本大藏經眞言事相章疏、弘法大師全集第七、豐山版藏密儀軌初一 ④空海(寶龜五—承和二 A.D. 774—835)撰 ⑤一説に惠果(天寶五—永貞元 A.D. 746—805)

⑥密教事相に於ける十八道修法の根據、淨三業、三部、被甲、地結等十八種の印契眞言を説いてある。觀自在菩薩如意輪瑜伽及び如意輪菩薩念誦法に依りて作られたものである。

⑦保延五寫(石山寺)承安二寫(石山寺)享保二〇寫(大通寺) (吉祥眞雄)

**十八契印** ①(日)Ji-hachi-ge-in. 國

譯十八契印 ②存、國譯密教々軌部第四

**十八契印義釋生起** ①(日)Ji-hachi-ge-in-gi-shaku-sho-ki. 十八道義釋

②一卷 ③存、大正七八・一一五No. 2475 ④定深(—天仁頃 A.D. 1108—1109)記

⑤密教の修法次第に十八道立・別行立・大法立の區別があつて、十八道立はその中でも簡略な法で、十八契印を本として修するものである。本書はこの十八契印を結誦する次第順序について其理由を述べ、十八契印の如何なるものなるかを明にしてゐる。十八契印の所依の儀軌たる十八契印軌には十七印言を説いて道場觀に印眞言を説かないので、十八種の印契を定むるについては古來異説があるが、本書には行儀を大別して六法とし、第一莊嚴行者法に淨三業・佛部三昧耶・蓮花部三昧耶・金剛部三昧耶・護身の五印契、第二結界法に地結・金剛牆の二印契、第三莊嚴道場法に道場觀・虚空藏普通供養の二種、第四勸請法に送車輪・請車輪・奉請の三種、第五結護法に當部明王印明・金剛網・火院の三種、第六供養法に閻伽・花座・普供養の三種とし、合計十八印契としてゐる。一説には道場觀を大虚空藏に屬し、本尊の印眞言を加へて十八種とするが、今は道場觀を別立する説をとつてゐる。東密にも主として此説によつてゐる。

⑥仁安三箇果寫 ⑦(高山寺藏)(小田藤舟) ⑧一巻 ⑨存、大日本佛教全書第三六阿婆縛抄之内

**十八契印儀軌** ①(日)Ji-hachi-ge-in-gi. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第三六阿婆縛抄之内

④承澄(元久二—弘安五 A.D. 1205—1282)撰

**十八契印儀軌口決** ①(日)Ji-hachi-ge-in-gi-ku-ke-su. 三六抄 ②西山觀性記 ③(參考)本朝台祖撰述密部書

④(日)Ji-hachi-ge-in-gi-ku-ke-su. 三六抄 ⑤西山觀性記 ⑥(參考)本朝台祖撰述密部書

**十八契印儀軌抄** ①(日)Ji-hachi-ge-in-gi-ku-ke-su. 三六抄 ②西山觀性記 ③(參考)本朝台祖撰述密部書

④(日)Ji-hachi-ge-in-gi-ku-ke-su. 三六抄 ⑤西山觀性記 ⑥(參考)本朝台祖撰述密部書

seirin-gi-ki-sho. ⑦〔参考〕 本朝台祖撰  
述密部書目

十八契印次第 ①(日)Ja-hachi-gei-  
in-shi-dai. ②一軸 ③存 ④寛元四寫

①(寶善提院)

十八契印私記 ①(日)Ja-hachi-gei-  
in-shi-ki. ②一卷 ③存 ④長安記 ⑤

寫本(曼殊院)

十八契印類聚秘抄 ①(日)Ja-ha=  
chi-gei-in-ryū-ki-sho. ②一卷 ③存

①(親橋記) ②(嘉承元寫)

十八契生疑 ①(日)Ja-hachi-gei-  
sho-ri. ②一册 ③存 ④鎌倉時代寫 ⑤

(寶善提院)

十八決秘抄 ①(日)Ja-hak-ketsu-  
ji-sho. ②二卷 ③存 ④安然(承和八—延喜年  
間A. D. 841—901)撰 ⑤〔参考〕 山家祖  
德撰述篇目集卷上

十八種物圖便蒙鈔 ①(日)Ja-has-  
shu-motsu-ben-mō-sho. ②一卷 ③存

大日本佛教全書第七三服具叢書 ④義開  
(—文政—A. D. 1830—) ⑤文政二(A. D.  
1819)

①本書は三井寺法明院敬光師の著である  
「大乘比丘十八物圖」の註釋。本書の序文に  
よれば「顯道老和上(敬光)が存生中、大乘  
比丘十八種物圖及び便蒙鈔を著作された。  
この便蒙一冊は和上が出雲鰐淵山に寓居の  
時に火災に罹つて焼失した。それ以後寫本  
を尋ねたが得られぬ。今年は和上滅後二十  
五年に當るので十八種物圖を刊行した。  
然るに初學者に了解し得ない點が多々ある

と云ふからこれが註を作つたのである」と。  
本書は先づ懸談六門を立て、律の大小、大  
律に權實あること、律に傍正あること、三  
國の律に相異なること、十八種物に異説あ  
ること、持犯の説明を述べ、次に題目を釋  
し、次に撰者の傳、次に入文解釋してゐ  
る。各方面に涉り親切に異説を引き文證を  
舉げて歴史的にも亦大律の意義から十八物  
なるものを比丘が護持せねばならぬこと、  
其物の形態等を容易に理解し得られるよう  
に記してある。義開の傳は不明。

(田島德音)

十八章聞書 ①(日)Ja-has-sho-ki=  
ji-gaki. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫

①(寶龜院)

十八章私建立 ①(日)Ja-has-sho-  
shikan-ryū. ②〔参考〕 本朝台祖撰述密  
部書目

十八章反音私鈔 ①(日)Ja-has-sho-  
hen-on-shi-sho. ②一帖 ③存 ④印  
融(永享七—永正一六A. D. 1433—1519)記

④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

十八神道源起鈔 ①(日)Ja-hachi-  
shin-to-gen-ki-sho. ②一册 ③存 ④徳  
川時代寫 ⑤(寶龜院)

十八胎護 ①(日)Ja-hachi-tai-go. 十  
八胎護幸心方 ②一册 ③存 ④寶曆一一  
寫 ⑤(金剛三昧院)

十八大師略傳 ①(日)Ja-hachi-dai-  
shi-ryaku-den. 敎證十八大師畧傳 ②一  
卷 ③存 ④清谷良綱、痴山義亮共編 ⑤  
明治二七刊 ⑥龍大、二九六五・一三(帝

國、一八・四二四)  
十八段私記 ①(日)Ja-hachi-dan-  
san-ki. ②一卷 ③亮貞 ④〔参考〕 諸宗  
章疏錄第三  
十八壇林順路記 ①(日)Ja-hachi-  
dan-ri-jun-ro-ki. ②一卷 ③存 ④龍  
大、二九七三・八(帝國、一二三・一一六)

十八通 ①(日)Ja-hachi-tsu. 敎相十八  
通、三六通 ②二卷 ③存、淨土宗全書第  
一二 ④聖阿(曆應四—應永二七A. D. 1341  
—1420) ⑤嘉慶二(A. D. 1388) ⑥敎相十  
八通の下を見よ。⑦慶長一六寫(正大、一五  
五・三六二)寛永一四刊(正大、一五五二・  
二五六)正保二刊(谷大、長保・六九、宗大三  
七八)(正大、一五五二・二六六・二六七)(龍  
大、研眞)慶安元刊(龍大、二六八四・五四)文  
政一二刊(正大、一五五二・二四六)(龍大、二  
〇三・二七)

十八通 ①(日)Ja-hachi-tsu. 批判附首  
書十八通 ②二卷 ③存 ④元祿一二刊  
⑤龍大、二六八三・五三、研眞(谷大、宗大、  
二二六七)(正大、一五五二・二四七、二五四、  
二五八)

十八通異安心考 ①(日)Ja-hachi-tsu-  
an-shin-ka. ②一卷 ③存 ④慧琳(正徳  
五一—寛政元A. D. 1715—1789)

①本寫本卷首に曰く「今將此卷名龜陵師説。  
予案不爾。後見者能思慮可觀之」云々。

十八通裏書 ①(日)Ja-hachi-tsu-ura-  
sho. 三六通裏書、敎相十八通裏書 ②一卷  
③存、淨土宗全書第一二 ④聖阿(曆應四

一應永二七A. D. 1341—1420) ⑤三六通裏  
書の下を見よ。⑥正保二刊 ⑦(谷大、宗  
大・三七八)(正大、一五五二・二六九)  
十八通科解 ①(日)Ja-hachi-tsu-  
ka-ge. ⑤五卷 ③存 ④寫本(正大、一五五  
二・二九〇)

十八通玄談 ①(日)Ja-hachi-tsu-  
gen. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一五五  
二・二八九)

十八通講記 ①(日)Ja-hachi-tsu-  
ko-ki. ②二卷 ③存 ④制心(—慶應IIA. D.  
1860)述 ⑤寫本(谷大、宗大、二六四四)

十八通講述 ①(日)Ja-hachi-tsu-  
jutsu. ②二卷 ③存 ④白辨述 ⑤正徳  
二(A. D. 1712) ⑥嘉永五寫 ⑦(正大、一  
五五二・二八八)

十八通講録 ①(日)Ja-hachi-tsu-  
roku. ②二卷 ③存 ④忠阿(—延寶六A.  
D. 1678)述 ⑤寛文五寫 ⑥(谷大、宗大、  
一九五六)

十八通私記 ①(日)Ja-hachi-tsu-shi-  
ki. ⑤五卷 ③存 ④隨流(—寛永一三A.  
D. 1636)述 ⑤寛文六刊 ⑥(正大、一五五  
二・二七五—二七六)(龍大、二六八四・五五、  
研眞)

十八通抄事理縦横鈔 ①(日)Ja-  
hachi-tsu-sho-ji-ryō-hō-sho. ②七卷 ③存  
④寂照述 ⑤延寶六刊 ⑥龍大、二六八  
四・一五五(谷大、宗大、二五一九)

十八通樞要鈔 ①(日)Ja-hachi-tsu-  
shū-yō-sho. ②二卷 ③存 ④無絃(—寛  
永一七A. D. 1640)述 ⑤寛永一九刊 ⑥

名所行發⑩(名庫書)著藏所現⑪ 月年の刊寫⑫(書考參書釋註)書未⑬ 説解存内⑭ 代年作著⑮ 著者⑯ 缺存⑰ 數卷⑱(名書)名題⑲ 號略字數

(正大、一五五二・二八四一・二八五)

十八通拔 ①(日) Ju-hachi-tsu-butsu.

②一巻 ③存 ④寫本(正大、一五五二・二八四一)

十八道 ①(日) Ju-hachi-do. 十八道略

②一巻 ③存、興教大師全集 ④覺鏡  
(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述

⑤普通の十八道は、身五界二道場二、召三  
結三供養三となり居るのであるが、此の作  
法は護身法が普禮、淨三業、佛部三昧耶、  
蓮華部三昧耶、金剛部三昧耶、被甲護身の  
六法となり、道場觀が如來拳印の一印で、  
大虚空藏は後の供養法の三の中に入つて居  
る、即ち普通の十八道法とは異なるのであ  
る、一名は十八道略頭とも稱すと云ふも頌  
文の體とはなつて居らぬ。

⑦(参考) 諸宗章疏錄第三 (富田駿純)

十八道 ①(日) Ju-hachi-do. ②一帖

③存 ④類證記 ⑤永享七寫(寶龜院)元亨  
二寫(高大、寄・一・六二)

十八道安流傳授聞書 ①(日) Ju-  
hachi-do-an-ryu-den-ju-kiki-gaki. ②一  
帖 ③存 ④淨嚴(寛永一六一—元祿一五 A.  
D. 1639—1702)記 ⑤徳川時代寫 ⑥(寶  
龜院)

十八道暗誦事振鈴闕伽汲作法

①(日) Ju-hachi-dō-an-ryū-den-ju-ji-shū-rei-a-  
ka-kumi-sa-hō. ②一巻 ③存 ④徳川時  
代寫 (寶龜院)

十八道印軌儀 ①(日) Ju-hachi-do-  
in-ki-gi. ②一帖 ③存 ④正和二寫 (寶  
壽院)

(寶壽院)

十八道印義句義深祕口傳鈔

①(日) Ju-hachi-do-in-gi-ku-gi-jin-pi-ka-  
den-shō. ②三巻 ③存 ④寫本(立大、A  
二〇・一六)

十八道及金剛界口傳抄 ①(日)

Ju-hachi-do-oyahi-kon-gō-kai-ku-den-  
shō. ①一帖 ③存 ④有快(貞和元—應永  
三 A. D. 1345—1415)述 ⑤文明一六寫  
(寶龜院)

十八道勘文 ①(日) Ju-hachi-do-  
kan-mon. ②五軸 ③存 ④鎌倉時代寫  
(寶龜院)

十八道義釋 ①(日) Ju-hachi-do-gi-  
shaku. ⑦(参考) 本朝台祖撰述密部書目

十八道義釋生起 ①(日) Ju-hachi-  
do-gi-shaku-shō-ki. ⑦(参考) 本朝台祖  
撰述密部書目

十八道儀軌 ①(日) Ju-hachi-do-gi-  
ki. (文) Shū-pa-tao-i-kaui. 十八契印、十  
八道契印、十八契印軌 ②一巻 ③存、大  
正一八・七八一 No. 900(縮餘一、正續二・三・  
一、日本大藏經眞言事相章疏、弘法大師全集  
第七、豐山版祕密儀軌初一 ④唐惠果(天寶  
五—永貞元 A. D. 746—805)撰 ⑤十八契印  
の下を見よ。⑦(参考) 諸宗章疏錄第三

十八道儀軌並野澤次第目錄

①(日) Ju-hachi-do-gi-ki-narabini-ya-ti=  
ku-shi-dai-moku-roku. ②一巻 ③存  
④顯證(慶長二—延寶六 A. D. 1597—1678)  
編 ⑤寫本(京大、藏・二・二・一一)

十八道聞書 ①(日) Ju-hachi-do-ki=  
ki-gaki. ②一巻 ③存 ④清覺記 ⑤永

和二寫 ④(南溪藏)

十八道聞書 ①(日) Ju-hachi-do-ki=  
ki-gaki. ②一巻 ③存 ④宗淵述 ⑤安  
政二寫 ⑥(西教寺)

十八道聞書 ①(日) Ju-hachi-do-ki=  
ki-gaki. ②一巻 ③存 ④成雄、永徳元  
—寶徳三 A. D. 1381—1451)記 ⑦(参考)  
眞言宗全書刊行豫定目錄

十八道聞書 ①(日) Ju-hachi-do-ki=  
ki-gaki. 十八道聞書西大寺流 ②一巻 ③  
存 ④寫本(谷大、餘大・九四二、二九八八)

十八道聞書 ①(日) Ju-hachi-do-ki=  
ki-gaki. 十八道聞書加茂金剛院流 ②一巻  
③存 ④覺澄草 ⑤寫本(高大、寄・一・六  
二)

十八道聞書 ①(日) Ju-hachi-do-ki=  
ki-gaki. 出雲大僧都口傳 ②一軸 ③存

十八道聞書 ①(日) Ju-hachi-do-ki=  
ki-gaki. 實賢方十八道聞書 ②一帖 ③存

十八道聞書 ①(日) Ju-hachi-do-ki=  
ki-gaki. 寫本(金剛三昧院)

十八道聞書 ①(日) Ju-hachi-do-ki=  
ki-gaki. 十八道聞書西院流 ②一帖 ③存

十八道聞書 ①(日) Ju-hachi-do-ki=  
ki-gaki. 文化八寫 ④(高大、一・六二)

十八道頭次第 ①(日) Ju-hachi-do-  
kyō-shi-dai. ②一帖 ③存、弘法大師全  
集第七、日本大藏經眞言事相章疏 ④空海  
(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)撰 ⑤足  
利中期寫 ⑥(高大、寄・一・五〇)

十八道頭次第附持寶金剛次第

①(日) Ju-hachi-do-kyō-shi-dai-tsuketari-  
ji-hō-kon-gō-shi-dai. ②一帖 ③存

正應三寫 ④(金剛三昧院)

十八道頭次第如意輪 ①(日)  
Ju-hachi-do-kyō-shi-dai-tsuketari-nyō-i-  
rin. ②一帖 ③存 ④嘉曆四寫 ⑤(金剛  
三昧院)

十八道行軌 ①(日) Ju-hachi-do-gyō-  
i-ki. 十八道行軌覺雄方 ②一帖 ③存  
徳川時代寫 (寶龜院)

十八道口決 ①(日) Ju-hachi-do-ku-  
-ketsu. 十八道口決抄、十八道決抄 ②二  
巻 ③存、大正七九・六一 No. 2329 ④類  
證(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304)記  
⑤弘長元(A. D. 1261)六月十六日—二十二  
日

⑥十八道は十八通りの印明を結誦して佛果  
を證する作法である。本書は此十八道次第  
に就て印の結び方や眞言觀想等を詳解した  
ものである。而して、十八道の本文に入る  
前に「御口決云、小野次第有二。一石山御  
作二延命院造也、今本是也」と述べ更に又  
傳授作法を故僧正口決によつて、先づ灑水  
塗香を机に備へて師の前に置き、師は香を  
取て手に塗り、常の如く護身法を結び、次  
に香水を加して自身及び弟子に灑ぎ、次  
に我が胸に鍔字を觀じて大日如來とし弟子  
の胸に卍字を想つて金剛薩埵と觀する等と  
出し、是は鐵塔受法の儀式を擬したものか  
云々と述べて、次に房中觀等より次第に十八  
道次第に就て詳解し、最後に道決鈔類證記  
畢として經軌と口傳とは何を重むべき  
か十八道の名義や十八道の儀軌作者五種壇  
法十指を十度に配當すること等に就て記し

一〇三。諸宗章疏錄第三 ①弘長元寫  
 (正大、一四八・九五)正應五寫(谷大、餘甲・  
 九三)正中二寫(谷大、餘甲・七六)貞和元寫  
 (高大、寄・一・六二)寫本(正大、一四八・九  
 六)(谷大、餘大・一〇二) (岡田契昌)  
**十八道口決** ①(日)Jū-hachi-dō-ku  
 -ketsu. 十八道口決幸心方 ②一帖 ③存  
 ④正平八寫 ①(高大、寄・一・六二)  
**十八道口決** ①(日)Jū-hachi-dō-ku  
 -ketsu. 道決抄 ⑦(參考) 本朝台祖撰述  
 密部書目  
**十八道口決** ①(日)Jū-hachi-dō-ku  
 -ketsu. ②一册 ③存 ④淨印上人 ⑤文  
 政一二寫 ⑥(寶善提院)  
**十八道口決** ①(日)Jū-hachi-dō-ku  
 -ketsu. ②四卷 ③聖昭(一康平三 A. D.  
 1060)作 ④(參考) 密乘撰述目錄、山  
 家祖德撰述篇目集卷下  
**十八道口決** ①(日)Jū-hachi-dō-ku  
 -ketsu. ②一軸 ③存 ④潤惠作 ⑤明應  
 六寫 ⑥(寶善提院)  
**十八道口決** ①(日)Jū-hachi-dō-ku  
 -ketsu. ②存 ③成雄(永徳元—寶徳三 A.  
 D. 1381—1451)記 ④寫本(金剛三昧院)  
**十八道口決** ①(日)Jū-hachi-dō-ku  
 -ketsu. ②一册 ③存 ④徳川中期寫 ⑤  
 (金剛三昧院)  
**十八道口決** ①(日)Jū-hachi-dō-ku  
 -ketsu. ②一册 ③存 ④興雅(一永和和  
 A. D. 1377)註 ⑤享保一三寫 ⑥(金剛  
 三昧院)

**十八道口決** ①(日)Jū-hachi-dō-ku  
 -ketsu. 十八道口決常喜院 ②一帖 ③存  
 ④寛政四寫 ⑥(寶善提院)  
**十八道口決私記** ①(日)Jū-hachi-  
 dō-ku-ketsu-shi-ki. ②一册 ③存 ④天  
 明二寫 ⑥(寶善提院)  
**十八道口決抄** ①(日)Jū-hachi-dō-  
 ku-ketsu-shō. 十八道口決、十八道決抄  
 ②二卷 ③存、大正七九・六一二 No. 2829  
 ④賴瑠(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1344)  
 記 ⑤寫本(京大、日大末・三五八)  
**十八道口決鈔** ①(日)Jū-hachi-dō-  
 ku-ketsu-shō. ②一卷(卷下) ③存 ④  
 印融(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519)  
 記 ⑤寛永二一寫 ⑥(高大、一・六二)  
**十八道口訣並四度事** ①(日)Jū-  
 hachi-dō-ku-ketsu-narubini-shi-do-no-  
 koto. ①一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤  
 (寶龜院)  
**十八道口傳** ①(日)Jū-hachi-dō-ku  
 -den. 十八道口傳抄 ②二册 ③存、教舜  
 鈔之内 ④教舜(一文永弘安頃 A. D. 1261—  
 1287)記 ⑤寶曆八寫 ⑥(高大、一・六  
 二)  
**十八道口傳** ①(日)Jū-hachi-dō-ku  
 -den. ①道簡(元暦元—建長四 A. D. 1184  
 —1232)一說建長四、年七五歳) ②(參考)  
 諸宗章疏錄第三  
**十八道口傳** ①(日)Jū-hachi-dō-ku  
 -den. ②一册 ③存 ④空尊記 ⑤寫本  
 (金剛三昧院)  
**十八道口傳** ①(日)Jū-hachi-dō-ku  
 -den. ②一册 ③存 ④有快(貞和元—應  
 永二三 A. D. 1345—1416)記 ⑤明和元寫  
 ⑥(寶善提院)  
**十八道口傳抄** ①(日)Jū-hachi-dō-  
 ku-den-shō. 十八道口傳 ②二册 ③存、  
 教舜鈔之内 ④教舜(一文永弘安頃 A. D.  
 1261—1287) ⑤正平二四寫(谷大、餘甲・  
 九四)足利末期寫(金剛三昧院)  
**十八道科文** ①(日)Jū-hachi-dō-  
 kwan-mon. ①聖昭(一康平三 A. D. 1060  
 )撰 ⑦(參考) 山家祖德撰述密部書目  
**十八道科文** ①(日)Jū-hachi-dō-  
 kwan-mon. ⑦(參考) 本朝台祖撰述密部  
 書目  
**十八道觀法** ①(日)Jū-hachi-dō-  
 kwan-jō. ①聖昭(一康平三 A. D. 1060)撰  
 ⑦(參考) 山家祖德撰述篇目集卷下  
**十八道觀法** ①(日)Jū-hachi-dō-  
 kwan-jō. ⑦(參考) 本朝台祖撰述密部  
 書目  
**十八道加行** ①(日)Jū-hachi-dō-ka-  
 -gyō. 十八道加行常喜院 ②一裏 ③存  
 ④徳川時代寫 ⑥(寶龜院)  
**十八道加行折紙** ①(日)Jū-hachi-  
 dō-ke-gyō-ori-kami. ②一紙 ③存 ④寫  
 本(高大、一・六二)  
**十八道加行聞書** ①(日)Jū-hachi-  
 dō-ke-gyō-kiiki-gaki. ②一帖 ③存 ④  
 有快(貞和元—應永二三 A. D. 1345—1416)  
 記 ⑤天正一九寫 ⑥(金剛三昧院)(寶龜  
 院)  
**十八道加行口訣** ①(日)Jū-hachi-  
 dō-ke-gyō-ku-ketsu. ②一帖 ③存 ④天  
 文一六寫 ⑥(寶龜院)  
**十八道加行故實** ①(日)Jū-hachi-  
 dō-ke-gyō-ko-jitsu. ②一册 ③存 ④貞  
 治六寫 ⑥(金剛三昧院)  
**十八道加行幸聞記** ①(日)Jū-ha-  
 chi-dō-ke-gyō-ko-hon-ki. 十八道幸聞記  
 ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、餘大・一〇三  
 九)  
**十八道加行作法** ①(日)Jū-hachi-  
 dō-ke-gyō-sa-hō. ②一帖 ③存 ④鎌倉  
 初期寫 ⑥(高大、一・六二)  
**十八道加行作法** ①(日)Jū-hachi-  
 dō-ke-gyō-sa-hō. ②一帖 ③存 ④貞享  
 五寫 ⑥(寶善提院)  
**十八道加行作法** ①(日)Jū-hachi-  
 dō-ke-gyō-sa-hō. 加茂方十八道加行作法  
 ②一册 ③存 ④徳川時代寫 ⑥(寶龜院)  
**十八道加行作法** ①(日)Jū-hachi-  
 dō-ke-gyō-sa-hō. 十八道加行作法中院流  
 ②二包 ③存 ④徳川時代寫 ⑥(寶善提  
 院)  
**十八道加行作法** ①(日)Jū-hachi-  
 dō-ke-gyō-sa-hō. 十八道加行作法岩藏方  
 ②一帖 ③存 ④明應頃寫 ⑥(寶善提院)  
**十八道加行作法** ①(日)Jū-hachi-  
 dō-ke-gyō-sa-hō. ②三紙 ③存 ④覺濟  
 (安貞元—嘉元元 A. D. 1227—1303)記 ⑤  
 應永一一寫 ⑥(金剛三昧院)  
**十八道加行作法** ①(日)Jū-hachi-  
 dō-ke-gyō-sa-hō. ②一卷 ③存 ④實賢  
 (安元二—建長元 A. D. 1176—1249)口 ⑥

名所行發⑩(名庫書)著願所現⑪月年の刊寫⑫(書考參書籍註)書本⑬説解存内⑭代年作著⑮著書⑯缺存⑰數卷⑱(名書)名題⑲號略字數

徳川時代寫(寶善提院)寫本(高大、寄・一・六二)(京大、印哲・U・一七)

十八道加行作法

①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-sa-ho. 十八道加行作法三寶院成賢方 ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

十八道加行作法及目錄

①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-sa-ho-oyobi-noku-roku. ②一括 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

十八道加行作法口決

①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-sa-ho-ku-ketsu. ③存 ④(金剛三昧院)

十八道加行作法傳授聞書

①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-sa-ho-dan-juku-gaki. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、二六五・九)

十八道加行作法表白等

①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-sa-ho-hyo-hyaku-to. 十八道加行作法表白等當喜院 ②一結 ③存 ④足利末期寫 ⑤(金剛三昧院)

十八道加行次第

①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-shi-dai. ②一册 ③存 ④文政一二寫 ⑤(寶善提院)

十八道加行次第散念誦

①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-shi-dai-san-nen-ju. ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

十八道加行次第諸表白

①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-shi-dai-sho-hyo-byaku. 十八道加行次第諸表白尊壽院 ②一結 ③存 ④足利中期寫 ⑤(金剛三昧院)

十八道加行私聞書

①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-shi-kiri-gaki. ②一册 ③存 ④永正五寫 ⑤(金剛三昧院)

十八道加行所作 ①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-sho-sa. 十八道加行所作安井方 ②一包 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(金剛三昧院)

十八道加行所作折紙

①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-sho-sa-ori-kanji. ②一裹 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

十八道加行所作次第

①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-sho-sa-shi-dai. ②一紙 ③存 ④覺滿記 ⑤徳川時代寫 ⑥(寶龜院)

十八道加行所作法則

①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-sho-sa-ho-soku. ②一帖 ③存 ④安永七寫 ⑤(寶龜院)

十八道加行日記

①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-niki-ki. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶善提院)

十八道加行日記四度表白

①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-niki-ki-shi-to-hyo-byaku. ③三紙 ④存 ⑤徳川時代寫 ⑥(寶龜院)

十八道加行事

①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-no-koto. 十八道加行事中院 ②一卷 ③存 ④宥夢 ⑤元祿一六寫 ⑥(谷大、餘大・一三〇六)

十八道加行法則

①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-ho-soku. ②一帖 ③存 ④文一六寫 ⑤(寶龜院)(寶善提院)

十八道加行用意

①(日)Ja-hachi-do-ke-gyo-yo-i. ②一卷 ③存 ④蒙宗作 ⑤享保頃寫 ⑥(正教藏)

十八道契印見聞抄

①(日)Ja-hachi-do-ke-goi-in-kunmon-sho. ②一册 ③存 ④廣譽傳、良範記 ⑤正長二寫 ⑥(金剛三昧院)

十八道決抄

①(日)Ja-hachi-do-kes-sho. 十八道口決、十八道口決抄 ②二卷 ③存、大正七九・六一二 No. 2529 ④頼璋(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304)記 ⑤寫本(金剛三昧院)

十八道見聞 ①(日)Ja-hachi-do-kunmon. ②二卷 ③存 ④亮章記 ⑤永正七(A. D. 1519) ⑥(叡山文庫)

十八道見聞

①(日)Ja-hachi-do-kunmon. ②一卷 ③存 ④西山後師說 ⑤至徳四寫

十八道見聞

①(日)Ja-hachi-do-kunmon. ②二卷 ③存 ④十如房談 ⑤應永十七(A. D. 1410)

十八道見聞

①(日)Ja-hachi-do-kunmon. ②一卷 ③存 ④運海記 ⑤貞和三寫 ⑥(正教藏)

十八道見聞

①(日)Ja-hachi-do-kunmon. 十八道見聞三昧院流 ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、餘大・一四九八)

十八道見聞

①(日)Ja-hachi-do-kunmon. ②二卷 ③存 ④寫本(谷大、餘大・一五五六)

十八道見聞抄

①(日)Ja-hachi-do-kunmon-sho. 十八道見聞抄岩藏流 ②二册 ③存 ④明應三寫 ⑤(金剛三昧院)(寶善提院)

十八道幸聞記

①(日)Ja-hachi-do-kon-ki. 十八道加行幸聞記 ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一四八・一四)寛政六寫(高大、一・六二)

十八道金剛界口傳

①(日)Ja-hachi-do-kon-gokai-kuden. ④隆海(參考) 諸宗章疏錄第三

十八道金剛界表白加行作法

①(日)Ja-hachi-do-kon-gokai-hyo-byaku-ke-gyo-sa-ho. ②一括 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

十八道建立

①(日)Ja-hachi-do-kon-ya. ②一卷 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

十八道作法 ①(日)Ja-hachi-do-sa-ho. ②一結 ③存 ④寫本(金剛三昧院)

十八道沙汰

①(日)Ja-hachi-do-sa-ta. ②一帖 ③存、大正七九・二五 No. 2517 興教大師全集之内 ④覺蟻(嘉保二 康治二—1093—1123)述

十八道見聞抄

①弘法大師御作の十八道念誦次第の口訣を師範より聞きて記したるものである、此の沙汰の師範は東大寺公とある、然れば圓勝の口訣を興教大師の記されたものとなるのである、圓勝は中院流の人であるから、此の口訣は中院流のものとなるのであるが、今日までの師傳に依れば、廣澤流の口訣であるとせられて居る、此の十八道とは

十八の印契より組立てられたる修法で、是れに前方便、正念誦、後供養等が附加せられて居るのである、此の十八道法が、眞言宗の人の普通に修する秘法である。

【参考】諸宗章疏録第三 (富田毅純) 十八道糸玉抄 ①(日)Ja-hachi-do-shi-gyoku-sho. ②三巻 ③存 ④純瑜(大永元—天正一〇 A. D. 1521—1582)述

【参考】眞言宗全書刊行豫定目録 十八道次第 ①(日)Ja-hachi-do-shi-dai. ②二巻 ③存、大日本佛教全書第三六阿婆縛抄之内 ④承澄(元久二—弘安五 A. D. 1205—1282)撰

十八道次第 ①(日)Ja-hachi-do-shi-dai. 十八道次第安流 ②四帖 ③存 ④寫本(高大、寄・一・六二)

十八道次第 ①(日)Ja-hachi-do-shi-dai. 十八道次第第三寶院流 ②四帖 ③存 ④寫本(高大、寄・一・六二)

十八道次第 ①(日)Ja-hachi-do-shi-dai. 十八道次第中院流 ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶善提院)

十八道次第開書 ①(日)Ja-hachi-do-shi-dai-kiki-gaki. ③存 ④寫本(金剛三昧院)

十八道次第口訣 ①(日)Ja-hachi-do-shi-dai-ku-ketsu. ②一冊 ③存 ④長淳(—永正三 A. D. 1506—)述 ⑤天明八寫 ⑥(寶龜院)

十八道次第口傳 ①(日)Ja-hachi-do-shi-dai-ku-den. ②四紙 ③存 ④寫本(金剛三昧院)

十八道次第私見聞 ①(日)Ja-hachi-do-shi-dai-shi-kem-mon. ②一帖 ③存 ④寫本(金剛三昧院)

十八道次第面授抄 ①(日)Ja-hachi-do-shi-dai-men-jū-shō. ②二巻 ③存 ④嚴家談 ⑤寫本(南溪藏)

十八道私記 ①(日)Ja-hachi-do-shi-ki. ②四巻 ③存 ④(正大、一四八・一〇〇)

十八道私記 ①(日)Ja-hachi-do-shi-ki. 改正十八道私記 ②一巻 ③存 ④辯慧航校 ⑤文政四刊(龍大、別置)(京大、印哲・〇・一四)寫本(京大、日大・三・二二)

十八道私記口決 ①(日)Ja-hachi-do-shi-ki-ku-ketsu. 十八道私記口決松橋方 ②一冊 ③存 ④寛延年間寫 ⑤(高大、一・六二)

十八道私記傳授私記 ①(日)Ja-hachi-do-shi-ki-den-jū-shi-ki. ②一巻 ③存 ④權田雷斧著 ⑤(大正三刊 ⑥(高大、一・六二))

十八道私聞書 ①(日)Ja-hachi-do-shi-ki-gaki. ②一帖 ③存 ④寫本(高大、寄・一・六二)

十八道私口決 ①(日)Ja-hachi-do-shi-ku-ketsu. ②一帖 ③存 ④後海法印口傳 ⑤(大永五寫 ⑥(金剛三昧院))

十八道私次第 ①(日)Ja-hachi-do-shi-shi-dai. ②一帖 ③存 ④(與云、或印佛讀經云云已上任常喜院口傳、粗記私次第而已)。此の次第には委しき朱書あり。

十八道私注 ①(日)Ja-hachi-do-shi-cha. ②一軸 ③存 ④寛文四寫 ⑤(寶善提院)

十八道私註 ①(日)Ja-hachi-do-shi-cha. ②一巻 ③法助(安貞元—弘安七 A. D. 1227—1284)註 ④(參考)諸宗章疏録第三

十八道師口 ①(日)Ja-hachi-do-shi-ku. ②一帖 ③存 ④(德川時代寫 ⑤(寶龜院))

十八道師傳抄 ①(日)Ja-hachi-do-shi-dan-shō. ②一帖 ③存 ④證道(寶治元—曆應三 A. D. 1247—1339)記 ⑤足利時代寫 ⑥(金剛三昧院)

十八道事鈔 ①(日)Ja-hachi-do-shi-shō. ②二巻 ③存 ④道快(—明徳元 A. D. 1390—)述 ⑤四度事鈔の下を見よ。

寛永頃寫(寶善提院)寫本(谷大、餘大・二九二)刊本(高大、一・六二)(京大、藏・二四九・四九)

十八道初行開白表白類 ①(日)Ja-hachi-do-shi-aku-rai. ②一結 ③存 ④足利末期寫 ⑤(金剛三昧院)

十八道初行記 ①(日)Ja-hachi-do-shi-gyō-ki. ②一巻 ③存 ④尊玄記 ⑤寫本(無動寺)

十八道初行作法並不動法 ①(日)Ja-hachi-do-sho-gyō-sa-ho-narubini-tsu-dō-hō. ②一帖 ③存 ④(禪宥記 ⑤(德川時代寫 ⑥(寶龜院))

十八道初行事 ①(日)Ja-hachi-do-shi-gyō-no-koto. ②一帖 ③存 ④天正一九寫 ⑤(寶善提院)

十八道初行表白 ①(日)Ja-hachi-do-sho-gyō-hyō-hyaku. ②一冊 ③存 ④享徳四寫 ⑤(寶善提院)

十八道初行表白神分等 ①(日)Ja-hachi-do-sho-gyō-hyō-byaku-jin-bun-tō. ②一帖 ③存 ④寫本(寶善提院)

十八道初行法則及闕伽汲作法 ①(日)Ja-hachi-do-sho-gyō-hō-kyō-hō-sukano-yōbi-a-ka-kumi-sa-hō. ②四紙 ③存 ④(德川時代寫 ⑤(寶龜院))

十八道書合 ①(日)Ja-hachi-do-sho-gō-shi-dai. 相實次第 ②一巻 ③存 ④(明徳院)

十八道書合次第 ①(日)Ja-hachi-do-sho-gō-shi-dai. 相實次第 ②一巻 ③存 ④(明徳院)

十八道助成記 ①(日)Ja-hachi-dō-jō-jō-ki. ④定深(—天仁元 A. D. 1108—)〔參考〕本朝台祖撰述密部書目、諸宗章疏録第三

十八道小次第 ①(日)Ja-hachi-do-sho-shi-dai. 十八道小次第安 ②一帖 ③存 ④天保一二寫 ⑤寫本(高大)

十八道小次第政興傳來 ①(日)Ja-hachi-do-sho-shi-dai-shō-kō-den-rai. ③存 ④寫本(寶龜院)

十八道生起 ①(日)Ja-hachi-do-shō-ki. ②一巻 ③存 ④寫本(京大、日大末・二九七)

十八道生起 ①(日)Ja-hachi-do-shō-ki. ②一巻 ③存 ④寫本(京大、日大末・二九七)

十八道生起 ①(日)Ja-hachi-do-shō-ki. ②一巻 ③存 ④寫本(京大、日大末・二九七)

十八道生起 ①(日)Ja-hachi-do-shō-ki. ②一巻 ③存 ④寫本(京大、日大末・二九七)

十八道生起 ①(日)Ja-hachi-do-shō-ki. ②一巻 ③存 ④寫本(京大、日大末・二九七)

十八道生起 ①(日)Ja-hachi-do-shō-ki. ②一巻 ③存 ④寫本(京大、日大末・二九七)

十八道生起 ①(日)Ja-hachi-do-shō-ki. ②一巻 ③存 ④寫本(京大、日大末・二九七)

十八道生起 ①(日)Ja-hachi-do-shō-ki. ②一巻 ③存 ④寫本(京大、日大末・二九七)

十八道生起 ①(日)Ja-hachi-do-shō-ki. ②一巻 ③存 ④寫本(京大、日大末・二九七)

十八道生起 ①(日)Ja-hachi-do-shō-ki. ②一巻 ③存 ④寫本(京大、日大末・二九七)

十八道生起 ①(日)Ja-hachi-do-shō-ki. ②一巻 ③存 ④寫本(京大、日大末・二九七)

十八道生起 ①(日)Ja-hachi-do-shō-ki. ②一巻 ③存 ④寫本(京大、日大末・二九七)



十八道三疑、長實三昧記、三陸鈔  
 四卷 ①長實撰  
 ①自在金剛集第八に曰く「題三陸鈔。長實三昧記。以て發心修行者提涅槃一爲二卷別之標」云々。  
 ②(参考) 密乘撰述目錄、山家祖德撰述篇日集卷下、諸宗章疏錄第二

十八道生起義釋 ①(日)Jū-hachi-dō-shō-ki-ji-shaku. ②一卷 ③定深(一天仁元 A. D. 1108-) ④(参考) 諸宗章疏錄第三  
 十八道生疑 ①(日)Jū-hachi-dō-shō-ji. 十八道生起、長實三昧記、三陸鈔 ②四卷 ③長實撰  
 ①本朝台祖撰述密部書目に云く「長實三昧是内題也、外題三陽ト書ク〇長實ハ法勝寺三昧僧也元年々々於法勝寺之砌抄二記之云云。故知長實三昧之所記之本也。アサハ抄所引今此三卷之本本文ナリ」云云。

十八道抄 ①(日)Jū-hachi-dō-shō. ②一卷 ③存 ④道教(正治二—嘉禎二 A. D. 1200—1236) ⑤寫本(正大、一四八—九八)〇(高大、寄・一六二)  
 十八道抄並不動 ①(日)Jū-hachi-dō-shō-narabini-ju-dō. 十八道抄並不動西院流 ①一帖 ②存 ③寫本(寶龜院)

十八道場圖 ①(日)Jū-hachi-dō-jō-zu. ②一葉 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

十八道神分祈願等 ①(日)Jū-hachi-dō-jin-bun-ki-gwan-ig. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)  
 十八道打集鈔 ①(日)Jū-hachi-dō-ju-ju-shō. ②三册 ③存 ④支那房記 ⑤足利末期寫 ⑥(金剛三昧院)  
 十八道談義見聞 ①(日)Jū-hachi-dō-dan-gi-ken-mon. 十八道談義見聞實賢方及岩藏方 ②一卷 ③存 ④興國三寫 ⑤(高大、寄・一六二)

十八道註釋 ①(日)Jū-hachi-dō-chū-shaku. ②一帖 ③(参考) 本朝台祖撰述密部書目  
 十八道傳受記 ①(日)Jū-hachi-dō-den-ju-ki. ②一册 ③存 ④八坂一圓口決 ⑤(應安七寫) ⑥(金剛三昧院)  
 十八道傳受聞書 ①(日)Jū-hachi-dō-den-ju-ki-ki-gaki. ②一帖 ③存 ④性善(延寶四—寶曆一三 A. D. 1676—1763) ⑤慶長記 ⑥德川時代寫 ⑦(寶龜院)  
 十八道傳受聞書 ①(日)Jū-hachi-dō-den-ju-ki-ki-gaki. ②一卷 ③存 ④宥快(貞和元—應永二 A. D. 1345—1416) ⑤述 ⑥(應永六刊) ⑦(龍大、二六六—五〇〇)  
 十八道傳受抄 ①(日)Jū-hachi-dō-den-ju-shō. ②一册 ③存 ④文政一二寫 ⑤(寶菩提院)  
 十八道傳受日記 ①(日)Jū-hachi-dō-den-ju-nikki. ②一册 ③存 ④寶曆一二寫 ⑤(寶龜院)  
 十八道並加行折紙口 ①(日)Jū-hachi-dō-narabini-ke-gyō-ori-kami-ku.

①一帖 ②存 ③德川時代寫 ④(寶龜院)  
 十八道並護摩聞書 ①(日)Jū-hachi-dō-narabini-go-ma-ki-ki-gaki. 十八道並護摩聞書理性院 ②一册 ③存 ④寫本(金剛三昧院)  
 十八道並金胎頸次第 ①(日)Jū-hachi-dō-narabini-kon-tai-kyō-shi-dai. ②一帖 ③存 ④德川初期寫 ⑤(寶龜院)  
 十八道日記 ①(日)Jū-hachi-dō-nikki. ②一紙 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)  
 十八道念誦頌次第 ①(日)Jū-hachi-dō-nen-ju-kyō-shi-dai. ②一卷 ③存 ④德川時代寫(寶菩提院)〇(龍大、二六六—五〇〇)  
 十八道念誦口決 ①(日)Jū-hachi-dō-nen-ju-ku-ketsu. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)  
 十八道念誦口訣 ①(日)Jū-hachi-dō-nen-ju-ku-ketsu. ②一册 ③存 ④長淳(—永正三 A. D. 1506—) ⑤述 ⑥德川時代寫 ⑦(寶龜院)  
 十八道念誦口傳抄 ①(日)Jū-hachi-dō-nen-ju-ku-dan-shō. ②一册 ③存 ④慶安五寫 ⑤(寶菩提院)  
 十八道念誦次第 ①(日)Jū-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. ②一卷 ③存 ④日本大藏經眞言宗事相章疏、弘法大師全集第七 ⑤空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)撰 ⑥弘法大師全集の本は空海原作のまゝ、日本大藏經に收むるものは五梅等の文を寛平

法皇の添加したるものである。  
 ①(香川縣與田寺)〇(京都大通寺)〇(京都觀智院) (吉祥眞雄)  
 十八道念誦次第 ①(日)Jū-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. ②存、國譯密教事相部第四册之内  
 十八道念誦次第 ①(日)Jū-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. ②一卷 ③存 ④守覺法親王(久安六一建仁二 A. D. 1150—1202)撰 ⑤押紙云、行用次第暗誦同用ニ此次第一と。表白、神分、祈願詞等は別紙に認め、此の次第に載せず。  
 十八道念誦次第 ①(日)Jū-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. ②一卷 ③存 ④守覺法親王(久安六一建仁二 A. D. 1150—1202)撰 ⑤初心者の爲めに表白、神分等を加ふ。便宜に任せて行用に供すと云ふ。北院流の所用か。

十八道念誦次第 ①(日)Jū-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. ②一卷 ③存 ④經瑜(—文永元 A. D. 152—) ⑤(参考) 眞言宗全書刊行豫定目錄  
 十八道念誦次第 ①(日)Jū-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. ②一卷 ③存 ④建久三(A. D. 1192)十二月二日  
 十八道儀軌並野澤次第目錄に以て梵本無量壽儀軌(書)梵字所缺勘(金剛界梵本儀軌)書之梵漢共手自校合畢、金剛佛子と云ふ。  
 十八道念誦次第 ①(日)Jū-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. ②一卷 ③存

①(日)Jū-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. ②一卷 ③存

①(日)Jū-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. ②一卷 ③存

①(日)Jū-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. ②一卷 ③存

<p>①十八道儀軌並野澤次第目錄に、本記云仁平元年(A. D. 1151)五月二十一日點了、已上日記法印和尚暗御自筆也、覺本とあり。</p> <p><b>十八道念誦次第</b> ①(日)Ja-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. ②一帖 ③存 ④端書云、先入堂云々。</p>	<p>六六五・一三(京專)</p> <p><b>十八道念誦私記</b> ①(日)Ja-hachi-dō-nen-ju-shi-ki. ②一卷 ③存 ④龍大、二六六五・一一)</p> <p><b>十八道念誦私次第</b> ①(日)Ja-hachi-dō-nen-ju-shi-shi-dai. 十八道念誦私次第常喜院 ②一帖 ③存 ④寫本(金剛三昧院)</p>	<p>①安然(承和八)延喜年間 A. D. 841—901) ②(參考) 本朝台祖撰述密部書目</p> <p><b>十八道梵本</b> ①(日)Ja-hachi-dō-hon-pōn. ②一卷 ③安然(承和八)延喜年間 A. D. 841—901) ④(參考) 本朝台祖撰述密部書目、諸宗章疏錄第二、山家祖德撰述篇目集卷上、密乘撰述目錄</p>	<p><b>十八道略頌</b> ①(日)Ja-hachi-dō-ryaku-ju. 十八道 ②一卷 ③存、興教大師全集 ④覺鏡(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ⑤十八道の下を見よ。</p> <p><b>十八道立印口傳</b> ①(日)Ja-hachi-dō-ryū-in-ku-den. 十八道立印口傳尊壽院 ②一册 ③存 ④延德二寫 ⑤(金剛三昧院)</p>
<p><b>十八道念誦次第</b> ①(日)Ja-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. ②一帖 ③存</p> <p>①十八道儀軌並野澤次第目錄に、先淨三業云云五悔略之、保壽院傳受本也、西院流傳受之本丈同少異、五悔有無異計也、著提院流傳受之本五悔有之、廻向句廻向大菩提云云。</p>	<p><b>十八道表白</b> ①(日)Ja-hachi-dō-hyō-byaku. ②一帖 ③義範(治安三—寛治二 A. D. 1023—1083)記 ④(參考)諸宗章疏錄第三</p> <p><b>十八道表白</b> ①(日)Ja-hachi-dō-hyō-byaku. ②一帖 ③存 ④大永五寫(寶善提院)寫本(高大寄一・六二)</p>	<p>①(立大、A. D. 1100—1140) ②(參考) ③存 ④(寶曆六刊)</p> <p><b>十八道面授抄</b> ①(日)Ja-hachi-dō-man-ju-shō. ②一卷 ③存 ④(寶曆六刊)</p>	<p><b>十八道類聚鈔</b> ①(日)Ja-hachi-dō-rui-ju-shō. ②四卷 ③存 ④長實集 ⑤嘉承元寫 ⑥(日光)</p> <p><b>十八道泥犁經</b> ①(日)Ja-hachi-nai-ri-kyō. (支)Shi-ri-pa-ni-i-ching. ②一卷 ③失譯 ④(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、靜泰錄第四</p>
<p><b>十八道念誦次第</b> ①(日)Ja-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. 十八道念誦次第地流 ②一册 ③存 ④文政一二寫 ⑤(寶善提院)</p> <p><b>十八道念誦次第</b> ①(日)Ja-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. ②一帖 ③存 ④延寶六寫 ⑤(寶善提院)</p>	<p><b>十八道表白</b> ①(日)Ja-hachi-dō-hyō-byaku. ②一帖 ③存 ④大永五寫(寶善提院)寫本(高大寄一・六二)</p> <p><b>十八道表白神分等</b> ①(日)Ja-hachi-dō-hyō-byaku-shin-bun-bun-tō. ②一帖 ③存 ④天明五寫 ⑤(寶善提院)</p>	<p>①(立大、A. D. 1100—1140) ②(參考) ③存 ④(寶曆六刊)</p> <p><b>十八道面授抄</b> ①(日)Ja-hachi-dō-man-ju-shō. ②一卷 ③存 ④(寶曆六刊)</p>	<p><b>十八道泥犁經</b> ①(日)Ja-hachi-nai-ri-kyō. (支)Shi-ri-pa-ni-i-ching. ②一卷 ③失譯 ④(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、靜泰錄第四</p> <p><b>十八道泥犁經</b> ①(日)Ja-hachi-nai-ri-kyō. (支)Shi-ri-pa-ni-i-ching. ②一卷 ③地獄經、地獄衆生相害十八泥犁經 ④一卷 ⑤存、大正一七・五二八No. 731、縮宿六、元884、清894、天317、明北884、元884、明南884、清894、天317、無、指787、法305、至1035、明南709、安、安世高譯、後漢建和二一建寧三(A. D. 148—170)</p>
<p><b>十八道念誦次第</b> ①(日)Ja-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. 十八道念誦次第尊壽院 ②一帖 ③存 ④寫本(金剛三昧院)</p> <p><b>十八道念誦次第</b> ①(日)Ja-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. 十八道念誦次第西院 ②一帖 ③存 ④寫本(金剛三昧院)</p>	<p><b>十八道覆審鈔</b> ①(日)Ja-hachi-dō-fuku-shin-shō. 十八道覆審鈔法曼流 ②一卷 ③存 ④文化一四寫 ⑤(谷大、長保・一九七)</p> <p><b>十八道法則</b> ①(日)Ja-hachi-dō-hō-soku. ②一帖 ③存 ④德川時代寫(寶善提院)寫本(金剛三昧院)</p>	<p>①(立大、A. D. 1100—1140) ②(參考) ③存 ④(寶曆六刊)</p> <p><b>十八道面授抄</b> ①(日)Ja-hachi-dō-man-ju-shō. ②一卷 ③存 ④(寶曆六刊)</p>	<p><b>十八道泥犁經</b> ①(日)Ja-hachi-nai-ri-kyō. (支)Shi-ri-pa-ni-i-ching. ②一卷 ③地獄經、地獄衆生相害十八泥犁經 ④一卷 ⑤存、大正一七・五二八No. 731、縮宿六、元884、清894、天317、明北884、元884、明南884、清894、天317、無、指787、法305、至1035、明南709、安、安世高譯、後漢建和二一建寧三(A. D. 148—170)</p>
<p><b>十八道念誦次第</b> ①(日)Ja-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. 十八道念誦次第西院 ②一帖 ③存 ④寫本(金剛三昧院)</p> <p><b>十八道念誦次第</b> ①(日)Ja-hachi-dō-nen-ju-shi-dai. 十八道念誦次第西院 ②一帖 ③存 ④寫本(金剛三昧院)</p>	<p><b>十八道法則</b> ①(日)Ja-hachi-dō-hō-soku. ②一帖 ③存 ④德川時代寫(寶善提院)寫本(金剛三昧院)</p> <p><b>十八道梵字</b> ①(日)Ja-hachi-dō-hon-pōn. ②一卷 ③存 ④文化一四寫 ⑤(谷大、長保・一九七)</p>	<p>①(立大、A. D. 1100—1140) ②(參考) ③存 ④(寶曆六刊)</p> <p><b>十八道面授抄</b> ①(日)Ja-hachi-dō-man-ju-shō. ②一卷 ③存 ④(寶曆六刊)</p>	<p><b>十八道泥犁經</b> ①(日)Ja-hachi-nai-ri-kyō. (支)Shi-ri-pa-ni-i-ching. ②一卷 ③地獄經、地獄衆生相害十八泥犁經 ④一卷 ⑤存、大正一七・五二八No. 731、縮宿六、元884、清894、天317、明北884、元884、明南884、清894、天317、無、指787、法305、至1035、明南709、安、安世高譯、後漢建和二一建寧三(A. D. 148—170)</p>

名所行發⑩(名庫書)若藏所現⑪ 月年の刊寫⑫ (書考參書釋註)書末⑬ 說解容内⑭ 代年作者⑮ 著者⑯ 缺存⑰ 數卷⑱ (名書)名題⑲ 號略字數

劫数の相狀を叙べて、惡行を去り善行に就くべきを、佛自ら教へ給ふ所の經である。即ち説いて云く、火泥犁は八、寒泥犁は十、前者は入地半以下、後者は天地際にある。

第一、先就乎——相見れば直ちに聞はんとする。人間の三千七百五十歳を一日として萬歳の壽命あり。第二、居盧停略——大火中に在つて鬪ふ。人間の七千五百歳を一日として二萬歳の長壽を有す。第三、桑居都——火中に在つて熱きこと言ふべからず。人間の萬五千歳を一日として四萬歳の長壽あり。第四、樓——城中に入れば燒鐵の如く熱く肌盡く爛れる。人間の三萬歳を一日として八萬歳の大壽あり。第五、旁卒——火に滿ちたる大深浴中に鐵杖を持ちたる守犁者の爲めに追ひ込まれ、身は燒焦せられる。人間の六萬歳を一日として十六萬歳の長壽あり。第六、草烏卑次——火にて滿てる高廣なる城内に入れられ鐵を以て覆はれる。人間の十二萬歳を一日として三十二萬歳の長壽あつて苦しめられる。第七、都意難且——燒きたる大鐵を以て貫いて内に入れられ、出でんとすれば門は閉ぢて無歳数の間苦を受く。人間の二十四萬歳を一日として六十四萬歳の長壽なり。第八、不慮都般乎——地盡く火である。息をすることが出来ず、爛焦して苦しきこと他の犁に萬倍する。人間の四十八萬歳を一日として百二十八萬歳の長壽である。第九、烏竟都——寒きこと言ふべからず、身は盡く凍結する。その壽命に至つては芥種百二十八斛

を百歳に一粒づゝ去つてそれが盡きても猶壽は盡きない。第十、泥盧都——二百五十斛の芥種を百歳に一貫づゝ去つてこれが盡きても壽は盡きぬ。第十一、烏略——長壽なること、右の芥種が五百一十二斛となる。第十二、烏滿——千二十四斛の芥種を盡す。第十三、烏藉——二千四十八斛。第十四、烏呼——四千九十六斛。第十五、須健渠——八千一百九十二斛。第十六、末頭乾直呼——一萬二千三百八十四斛。第十七、區述塗——三萬二千七百六十八斛。第十八、沉英——六萬五千五百三十六斛の夫々芥種を盡して猶餘りある。

かくの如き泥犁に一度落ちたるものと雖も善を行ふこと多く、惡を行ふこと少いならば出づることを得、その反對ならば益々深く入るのである。故に佛道は必ず知らなければならぬのである。(三好鹿雄)

**十八難經** (日) *Jū-hachi-nan-gyō*. (支) *Shih-pa-nan-ching*. ①一卷 ②缺 ③失譯 ④參考] 出三藏記第四、法經錄第四、三寶紀第五、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、內典錄第二、武周錄第一、開元錄第二、第一五、貞元錄第三、第二五

**十八日觀音供** (日) *Jū-hachi-nichi-kwan-on-ku*. ①一卷 ②存、大日本佛教全書第四七疊禪抄之内 ③覺禪(康治二)建曆二後 A. D. 1143—1212—撰  
**十八日觀音供異傳秘訣** (日) *Jū-hachi-nichi-kwan-on-ku-i-den-hi-kyō*. ①一帖 ②存 ③寫本(寶龜院)  
**十八日觀音夜宿夜居法** (日)

*Jū-hachi-nichi-kwan-on-ya-shuku-ya-go-ho*. ①一葉 ②存 ③徳川時代寫(寶龜院)  
**十八秘抄都會壇天法** (日) *Jū-hachi-hi-shō-e-dan-ten-pō*. ①一卷 ②安然(承和八)延喜年間 A. D. 841—901—撰 ③參考] 山家祖徳撰述篇目集卷上、密乘撰述目錄、諸宗章疏錄第二

**十八臂陀羅尼經** (日) *Jū-hap-pi-da-ra-ni-kyō*. (支) *Shih-pa-pai-to-lo-ni-ching*. ①一卷 ②存、大正二〇・五〇七 No. 1118、縮成八、卅一五・五、北299 肇、南233 肇、元124 肇、明北888 臨、清888 臨、麗1241 高、天1233 肇、法1335 觀、至789 薄、明南911 夙、Nj. 893 ④宋法賢(咸平四 A. D. 1001)譯

⑤雜部密教の經であつて、除障法が明されてある。十八臂陀羅尼とその功德とを説き「世尊、阿難に告げて曰く、世間の衆生は實智に昧く三界に輪廻して苦本を知らず。恣に身口意の四重罪を造る。是の如き人は深く憐愍すべし。我に十八臂陀羅尼あり。若し此の陀羅尼を常に誦するものあらば、所作の根本罪業皆悉く障滅し、復能く無量功德を積集す。」とあり、以下十八臂陀羅尼を説く。大正藏經の一頁の三分の一餘の短き經典である。(神林隆淨)

**十八不共品經** (日) *Jū-hachi-ichihon-gyō*. (支) *Shih-pa-pu-kung-pin-ching*. ①一卷 ②大集經寶女品の抄出。③參考] 法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

**十八部論** (日) *Jū-hachi-bu-ron*. (支) *Shih-pa-pu-lun*. (梵) *Samaya-dhedā-paracana-cakra*. (藏傳) *Gshun-lugs kyibye-brag bkod-pahi lkhori-to* ①一卷 ②存、大正四九・一七 No. 2032、縮藏四、卅二五・四、北977 潤、南993 潤、元990 潤、明北1277 設席、清227 設席、麗983 潤、天982 潤、指976 潤、法967 潤、至149 礪、明南1433 漆、Nj. 1234

③本論は部執異論と共に、異部宗輪論の異譯であつて、小乗部派の分派の次第本論初分の文殊師利問並に部派所執の教理を明したもので、經によれば大衆部より七部、上座部より十一部派を派出し、枝末部派數合して十八部と成ることから十八部論の名が存するのである。

本論の組織は二部を合集したもので、前分は文殊師利問經卷下の分別部品第十五にして、その後分に羅什法師集としてのこの論を附加し、その前分に於て佛文殊師利に摩訶衍祇(大衆・體毘嵐(上座)の根本分派、並に諸章派の分派次第、その年代を明し、次に後分の本論に於て、分派の因縁、次第、その年代を叙し、更に各部派の教理、その末派の教理を叙したものである。

本論によれば摩訶衍祇部即ち大衆部より第一次に一説・出世間説・窟居の三部、第二次に多聞、第三次に施設論、第四次に支提伽・佛婆羅・德多羅施羅の三部合して八部の派生を見本末合して九部、上座部より第一次に薩婆多・雪山の二部、第二次に薩婆多部よりの犢子部、第三次に犢子部より達摩



難多梨・跋陀羅耶尼・彌離・六城部派出し、第四次に薩婆多部より彌沙部、第五次に彌沙部より、曇無德部、第六次に薩婆多部より優梨沙又は迦葉推部、第七次に修多羅・論部の十一部本末合して十二部となる。(異部宗輪論・部執異論並に本論の部派分裂の對照については林・平松共譯邦譯マハーヅンサ附録、及び木村・干瀉共譯國譯異部宗輪論附録「結集分派史考」を見よ。元來本論は宗輪論と共に説一切有部の分派觀並に有部を標準として、諸部派の教理を叙したものであるから、北傳の本論等による部派分裂の次第年時を以て直ちに歴史的事實と連斷すべものではなく、南傳資料と比較對照の上になる綜合的研究によつて始めて、正鵠を得るものであつて、これらの考證、並にその所説の南北資料對照の結果に成る部派の教系については拙譯邦譯カタマツトウ上巻解題を見よ。

⑦【參考】開元錄第四、貞元錄第六 (林五邦)

**十八佛梵字** ①(日)Ja-hachi-butsum-bon-jū ②十八册 ③存 ④弘化四寫 (京大、一・二六・五四)

**十八物圖** ①(日)Ja-hachi-motsu-zu 大乘比丘十八物圖 ②一卷 ③存 ④敬光(元文五—寛政七 A.D. 1740—1795) ⑦【參考】山家祖德撰述篇目集卷下 政二刊 ⑧(谷大、餘大・一七六八)

**十八物圖便蒙鈔** ①(日)Ja-hachi-motsu-zu-bem-mō-shō ②一卷 ③存 ④義聞(嘉永四 A.D. 1851) ⑤寫本(正大、

一八九・三三)

**十八羅漢圖讚** ①(日)Ja-hachi-ta-kān-zu-san(支)Shih-pa-lo-han-t'u-tsan. ②一卷 ③存 ④蘇東坡(一建中靖國元 A.D. 110)頌、王弼州讚 ⑤貞享四刊 ⑥龍大、研史(哲、あ、一左二七)(京大、一・二一・三二)

**十八龍王神呪經** ①(日)Ja-hachi-ryū-ō-jin-shū-kyō(支)Shih-pa-lung-wang-shen-chou-ching. ②一卷 ③缺 ④東晉竺曇無蘭(一太元六一〇 A.D. 381—395)譯 ⑦【參考】出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一四、貞元錄第二四

**十善辨才天法** ①(日)Ja-hi-be-zen-ten-bō ②一帖 ③存 ④寫本(金剛三昧院)

**十不善業道經** ①(日)Ja-in-zen-gō-dō-kyō(支)Shih-pu-shan-yeh-tao-ching(梵)Daśakūśala-karma-pāṭha-nirdeśaṅg. ②(藏)mi-dge-ba bouhi las kyi lam bstan-pa. ③一卷 ④存、大正一七・四五七 No. 727、縮藏八、正二六九、明北 1372 英、清 1372 英、歷 1517 亨、Nj. 1379

⑤馬鳴菩薩集、宋日稱等譯 ⑥身三口四意三の十不善業の何たるかを説き、正法念處經その他の經にも説ける如く、この十不善業は地獄の因であるから、之を遠離して十善業道を修學せよと結んである極短篇。西藏譯も漢譯も馬鳴の作と傳ふ。梵文は、年教授之を佛國亞細亞協會誌二一五卷に發表し、西藏譯は丹殊爾經疏部

三十三函第三十九番と九十四函第二十三番とに重出せられてる Journal asiatique, Tome CCXV, 1929 Oct.-Dec. pp. 268—271 参照。

**十不同御作並法花密號** ①(日)Ja-tō-dō-gyo-eaku-narubini-hō-ke-mi=tsu-go. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 (寶徳院)

**十不二義** ①(日)Jip-pu-ni-gi. 十不二義集 ②一卷 ③最澄(神護景雲元—弘仁一三 A.D. 767—822)

④本朝台祖撰述密部書目に曰く「復止觀文句。天台宗未決抄。無天論宗私記。天台文句音抄。」云々

**十不二義集** ①(日)Jip-pu-ni-gi-shū. 十不二義 ②一卷 ③最澄(神護景雲元—弘仁一三 A.D. 767—822)撰 ⑦【參考】山家祖德撰述篇目集卷上

**十不二義集** ①(日)Jip-pu-ni-gi-shū. 十不二門義集 ②三卷 ③圓仁(延暦一三—貞觀六 A.D. 794—864)撰 ⑦【參考】本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上

**十不二科文** ①(日)Jip-pu-ni-kwa-mon(支)Shih-pu-erh-ko-wen. ②一卷 ⑦【參考】傳教大師將來越州錄

**十不二門** ①(日)Jip-pu-ni-mon. (支)Shih-pu-erh-men. ②一卷 ③存、大正四六・七〇(No. 1927、正三三・七、縮陽一〇、明北 1374 起、明南 1598 窮、Nj. 1501 湛然(景雲二—建中三 A.D. 711—782)述 ④天台大師智顛述章安記に係る「法華玄義」

を六祖荊溪湛然が註釋し、これを「釋籤」と名けた。この「釋籤」の内て迹門十妙の註が終りに本門十妙の解釋に移る中間に於て、十ヶの不二門を立て本迹不二、教觀一如、解行雙修の義を述べて天台宗義の大綱を論じたものが本書である。本書は近くは「法華玄義釋籤會本七上ノ二三右以下七紙に記されて居るから古來の傳説は確實である。本書は「釋籤」から抜抄されたものであることは疑ひはないが、誰が何年に別行したかといふことは全く不明。荊溪湛然は「法華文句記」(八ノ一七右)に「具如不二門説」と記してゐるから或は荊溪自ら別行したかも知れない。乍然荊溪門下の者が荊溪滅後別行したと見べきが正しからう。その事は一には傳教大師將來目錄の台州錄には「十不二門義一卷」とあり。又同越州錄には「十不二科文一卷」とあり、智證大師將來目錄には「十不二門義一卷、妙樂」とあること、二には「指要鈔詳解」(上本一八右)には「孤山智圓の十不二門正義の文を引用して「行滿法師の涅槃記には法華玄記十不二門と指稱してゐる」とあるから滅後前後に別行したといふ考へは允當である。本書の名稱には十不二門(指要鈔)。十不二門義(元久元年寫の心性本)。十不二門論(玄義略要)。法華本迹十不二門(註十不二門)。法華十妙不二門(示珠指)等の異説があるが、一般には「十不二門」と稱呼されてゐる。本書の述作の主意は一には妙解を成せしめんがために要略した文章を以つて三大部の大要を示し、二には妙行を成せしめんが爲めに

簡易に一家天台の修行を示し、諸種の修行の複雑で實修し難いとの感じを懐かしめなようにと工夫して作つたのである。即ち「爲成二妙解」以略顯廣。爲成二妙行「以易通難」のである。これを要するに教觀雙修解行一致の旨を明らかにせんと企てたものである。何故に是くの如き述作が必要であるかといへば、法華玄義法華文句は主として教義を説き摩訶止觀は主として觀行を述ぶ。即ち玄義文句は教正觀傍、止觀は觀正教傍である。特に玄義は本迹二十妙等の義を以つて佛教教義を縱横に説き、其理趣愈多岐に走り、遂に理論建設のために法華經を講述してゐるかの如くに思はるるに至る。荆溪自ら玄義を註解して此感を抱いた。荆溪の考ふる如くであれば玄義の眞意は教義の該博を示さんとしたものではなく、巧妙なる原理を貫いた實踐であつたのだと。この觀點に立脚して色心等の十門を列ね、門々の下で三千三諦の要旨を明し、教門を表に掲げながら實は觀門の本義を確立したものである。かく玄義と止觀との綜合統一を企てたものが本書である。これが同時に本書著作の主意である。若し玄義と止觀とが天台大師の佛教概論であるとすれば、本書は玄義止觀の總論であり、結論であると云へる。更に換言すれば印度佛教即ち翻譯佛教を支那佛教に改造したものが玄義と止觀とであり、支那佛教を總括したものが本書である。本書は初めに著作の意を叙べ次に十門を立て教觀相資の宗趣を彰し次に十門の意義を説く、十門とは色心

不二門。内外不二門。修性不二門。因果不二門。染淨不二門。依正不二門。自他不二門。三業不二門。權實不二門。受潤不二門である。この門々に於いて相持的關係に立つ二の原理を知ることが直ちに一念三千一心三觀の實修實證であることを述べ、又この十門は一本迹十妙の名稱を變更して名けたものであり、十門は十妙の異名であると述べてゐる。これを要するに本書は玄義と止觀との綜合であり、本迹十妙を十門に統合したものであり、妙解即妙行を示したものである。(田島德音)

不二門 ①(日)Jip-pu-ni-mon. 分科不二門 ②一卷 ③存 ④梅田謙敬 ⑤大正三刊 ⑥龍大、二六五一・一四七)

十不二門義 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四六・七〇二No. 1927. 縮陽一〇、七三三・七、七三三・五・一、明北1574起、清1552定、明南1569剪、N. 1581 ⑤唐湛然(景雲二)建中三 A. D. 711—788)述 ⑥本書は「十不二門」と内容は全く同一であるが表題が相異してゐるのみである。本書は伊勢西來寺宗淵師が山城大原如來藏本の古板本を翻刻したのである。本書の由来、考異等を宗淵師が卷末に附した。本書卷末に「點本云。元久元年六月二十八日以來如來藏本移點畢。沙門心性々々」と記してある。この點本とは慈覺大師の點であると。猶熊抄(十不二門見聞)は「本朝古本者。山家將來本也」と云ふ。宗淵師は字體筆勢が山家の法華經と同じだから傳教大師手迹本だといふ。「十不二門」の解説參照。

十不二門義 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、記續二・五・一 ⑤唐道遂(貞元頃 A. D. 785—804)撰 ⑥十不二門の下を見よ。 ⑦(參考) 諸宗章疏錄第一 ⑧寫本(京大藏、八〇・四)刊本(哲、や・六・中・七)(高、寄・一・一五)

十不二門義集 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、記續二・五・一 ⑤唐道遂(貞元頃 A. D. 785—804)撰

十不二門義 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四六・七〇二No. 1927. 縮陽一〇、七三三・七、七三三・五・一、明北1574起、清1552定、明南1569剪、N. 1581 ⑤唐湛然(景雲二)建中三 A. D. 711—788)述 ⑥本書は「十不二門」と内容は全く同一であるが表題が相異してゐるのみである。本書は伊勢西來寺宗淵師が山城大原如來藏本の古板本を翻刻したのである。本書の由来、考異等を宗淵師が卷末に附した。本書卷末に「點本云。元久元年六月二十八日以來如來藏本移點畢。沙門心性々々」と記してある。この點本とは慈覺大師の點であると。猶熊抄(十不二門見聞)は「本朝古本者。山家將來本也」と云ふ。宗淵師は字體筆勢が山家の法華經と同じだから傳教大師手迹本だといふ。「十不二門」の解説參照。

十不二門義集 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、記續二・五・一 ⑤唐道遂(貞元頃 A. D. 785—804)撰 ⑥十不二門の下を見よ。 ⑦(參考) 諸宗章疏錄第一 ⑧寫本(京大藏、八〇・四)刊本(哲、や・六・中・七)(高、寄・一・一五)

十不二門私見聞 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四一刊 ⑤龍大、研佛)

十不二門指要鈔 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四六・七〇四No. 1928. 縮陽一〇、七三三・七、明北1575起、明南1569剪、N. 1582 ⑤知禮(建隆元)天聖六 A. D. 960—1028)述 ⑥景德元(A. D. 1004)正月九日

十不二門見聞 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四一刊 ⑤龍大、研佛)

十不二門見聞 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四一刊 ⑤龍大、研佛)

十不二門見聞 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四一刊 ⑤龍大、研佛)

十不二門見聞 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四一刊 ⑤龍大、研佛)

十不二門見聞 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四一刊 ⑤龍大、研佛)

十不二門見聞 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四一刊 ⑤龍大、研佛)

十不二門見聞 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四一刊 ⑤龍大、研佛)

十不二門見聞 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四一刊 ⑤龍大、研佛)

十不二門見聞 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四一刊 ⑤龍大、研佛)

十不二門見聞 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四一刊 ⑤龍大、研佛)

十不二門見聞 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四一刊 ⑤龍大、研佛)

十不二門見聞 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四一刊 ⑤龍大、研佛)

十不二門見聞 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四一刊 ⑤龍大、研佛)

十不二門見聞 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四一刊 ⑤龍大、研佛)

十不二門見聞 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四一刊 ⑤龍大、研佛)

十不二門見聞 ①(日)Jip-pu-ni-mon. ②(支)Shih-pu-erh-men-i. 十不二門 ③一卷 ④存、大正四一刊 ⑤龍大、研佛)

名所行發⑩(名庫書)善部所現⑪ 月年の刊載⑫(書考家書釋社)書本⑬ 説解存内⑭ 代年作著⑮ 著者⑯ 缺存⑰ 數卷⑱(名書)名題⑲ 號略字數

た。四明は二書を評して「事理明らかならず、解行を寄託すべき所がない。荆溪の妙解は全く隠くされ、天台圓宗は行人修行に無益のものとなり終つた」と又本書には選式が序文を附して流通せしめた。選式は釋籤十不二門は今昔講義の中に困難なものとされて居り、註釋も多くあるが異端の説を陳べてゐるもののみである。四明これ等の註釋を覽て再歎して云ふ、釋文が充當ならざるばかりでなく、一家教觀解行の大綱を紊亂するものである。良に悲痛に堪えない。將に正宗を舉示せんとする者は我を捨てて誰れかあるといひ、遂にこの文を草し、教門權實に味き者を覺醒せしめ、觀道の境智に迷ふ者を開悟せしめたと。「十不二門」の註釋は支那に八種あり。日本に十五部ある(但し現存僅かに盛談(見聞)一部あるのみ)が此の中最も廣く行はれたものは本書である。本書の註及び註の註(末疏)等が刊寫十有餘部あるのでも知られるであらう。山外流の註としては文心解に三種あるを知るのみ。四明の學説は本書に依つて其の綱要を習ふのである。是の故に四明の學説の最も代表的な發表が本書の何々であるかといふことが問題となるのである。或人は別理隨緣説だといひ、或人は眞妄觀境論だといふ。前者は教義問題である、後者は觀心問題である。此の他に性惡説が四明の發明であり、兩重能所が新説だといふ。ここに至れば事理三千論も發揮した點がある。乍然四明の説に山外派以外の者は皆悉く同意するかと云ふに反對する者もある。

例せば普寂德門の如きがそれである。

十不二門指要鈔 (田島德音)

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō. 科註十不二門指要鈔 ② 二卷 ③ 存 ④ 等譽註 ⑤ 正保三刊 ⑥ (正大、一三五二二)(龍大、二六五一・一五二)

十不二門指要鈔 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō. 詳解選翼十不二門指要抄

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō. ② 四冊 ③ 存 ④ (哲、ヤ、四・中・八)

十不二門指要鈔會本 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-e-hon.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-e-hon. ② 二卷 ③ 存 ④ 刊本(立大、A二・三)明治一九刊(谷大、六刊)(立大、A二・三)明治一九刊(谷大、餘大・三七〇) ⑤ 東京森江佐七齋刻

十不二門指要鈔會本 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-e-hon. 冠註傍解十不二門指要鈔會本

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-e-hon. 冠註傍解十不二門指要鈔會本 ② 二卷 ③ 存 ④ 慧澄(安永九—文久二 A. D. 1780—1832)口、普潤錄 ⑤ 明治三六刊 ⑥ (立大、A二・三八、五三九)(龍大、二六五一・一五七)(帝國、二二四・二二一)(京大、一・二四シ・一四)(谷大、餘大・二四七)

十不二門指要鈔聞書 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kiiki-gaki.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kiiki-gaki. ② 一巻 ③ 存 ④ 一如(一文政二 A. D. 1819—)述

十不二門指要鈔聞書 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kiiki-gaki.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kiiki-gaki. ② 一巻 ③ 存 ④ 慧澄(安永九—文久二 A. D. 1780—1832)述 ⑤ 寫本(正大、一三五・五六)

十不二門指要鈔聞書 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kiiki-gaki.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kiiki-gaki. ② 一巻 ③ 存 ④ 慧澄(安永九—文久二 A. D. 1780—1832)述 ⑤ 寫本(正大、一三五・五六)

十不二門指要鈔見聞 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kiiki-gaki.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kiiki-gaki. ② 一巻 ③ 存 ④ 平野法梁述 ⑤ 明治二五寫 (谷大、餘大・三九九二)

十不二門指要鈔科 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-ka.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-ka. ② 一巻 ③ 存 ④ 寫本(京大、藏・ハシ・六)

十不二門指要鈔科解 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-ka-ge.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-ka-ge. ② 三巻 ③ 存 ④ 日存述 ⑤ 寛文九刊 ⑥ (龍大、二六五一・一五八)

十不二門指要抄科文 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-ka-wa-mon.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-ka-wa-mon. ② 存 ③ 科文集之内 ④ 安永四寫 ⑤ (谷大、宗大・一四一)

十不二門指要鈔冠考 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kan-kō.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kan-kō. ② 二巻 ③ 存 ④ 享保一三寫 ⑤ (谷大、餘大・一九六)

十不二門指要鈔見聞 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-ken-mon.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-ken-mon. ② 三巻 ③ 存 ④ 慶安五刊 ⑤ (龍大、二六五一・一五九)(谷大、長保・一三七)

十不二門指要鈔見聞雜錄 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-ken-mon-zatsū-yōku.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-ken-mon-zatsū-yōku. ② 一巻 ③ 存 ④ 靈潭(寛政一〇—明治七 A. D. 1798—1874)述 ⑤ 寫本(谷大、長保・一三九)

十不二門指要鈔玄談 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-egen-dan.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-egen-dan. ② 一巻 ③ 存 ④ 私淑篇第一之内 ⑤ 輝潭述 ⑥ 寫本(谷大、餘大・一九四七)

十不二門指要鈔玄談 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-egen-dan.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-egen-dan. ② 一巻 ③ 存 ④ 經歷述 ⑤ 寫本(龍大、研佛)

十不二門指要鈔考 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kō.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kō. ② 二巻 ③ 存 ④ 寫本(谷大、餘大・二四〇七)

十不二門指要鈔講義 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kō-gei.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kō-gei. ② 三巻 ③ 存 ④ 風千(一天保一一 A. D. 1840)述 ⑤ 明治四四刊 ⑥ (龍大、二六五一・一六二)(谷大、餘小・六六)

十不二門指要鈔講義 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kō-gei.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kō-gei. ② 一巻 ③ 存 ④ 義辨述 ⑤ 文化二(A. D. 1805) 寫本(谷大、餘大・四三四五)

十不二門指要鈔講義 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kō-gei.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kō-gei. ② 二巻 ③ 存 ④ 秀嶺述 ⑤ 天保一四(A. D. 1843) 寫本(谷大、餘大・四三四一)

十不二門指要鈔講義 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kō-gei.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kō-gei. ② 二巻 ③ 存 ④ 慧澄(安永九—文久二 A. D. 1780—1832)述 ⑤ 嘉永二刊(龍大、二六五一・一六一、研佛)(正大、一三五・五四—一五五、八七、一三五)(京大、一・二四シ・一五)

十不二門指要鈔講義 (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kō-gei.

- ① (日) Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-kō-gei. ② 二巻 ③ 存 ④ 守脫大寶(文化元—明治一七 A. D. 1801—1838)述、門人守源記 ⑤ 明治一三刊 ⑥ (龍大、二六五一・一六三、研佛)(帝國・七

名所行發⑩ (名庫書)著題所現⑨ 月年の刊寫⑧ (書考參書釋註)書本⑦ 説解存内⑥ 代年作著⑤ 著者④ 缺存③ 數卷② (名書)名題① 號略字數

二二〇(京大、一・二四〇・一六)(正大、一三  
五・一〇二)(立大、A・一・二四八九・五三六)  
(谷大、餘大・二七二)

十不二門指要鈔講錄

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-ko-roku. ②二卷  
pu-ni-mon-shi-yō-shō-ko-roku.

③存 ④慈室(—嘉永頃 A. D. 1348—1353  
—)述 ⑤明治二五寫(谷大、餘大・一九九  
二)寫本(高大、寄・一・一五)(正大、一三五・  
五七)

十不二門指要鈔國字疏

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-koku-ji-shō.  
②二卷 ③存 ④櫻木谷慈齋述 ⑤明治三  
〇刊 ⑥(谷大、餘洋・三・一一三二)(正  
大、一三五・五八)(帝國、七七・六二)

十不二門指要鈔左券

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-sa-ken. ②六卷  
pu-ni-mon-shi-yō-shō-sa-ken.

③存 ④寫本(龍大、二六五・一・一六四)  
⑤(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-satsuyō  
-oku-tsui-ka. ⑥一卷 ⑦存 ⑧寫本(谷  
大、長保一七六)

十不二門指要鈔雜纂

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-zas-san. 十不二門  
指要鈔雜纂 ②三卷 ③存 ④守篤本純  
(—寶曆頃 A. D. 1751—1763—)撰 ⑤(參  
考) 山家祖德撰述篇目集卷下

十不二門指要鈔雜套

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-zai-tō. 十不二門指  
要鈔雜纂 ②二卷 ③存 ④守篤本純(—  
寶曆頃 A. D. 1751—1763—) ⑤刊本(龍  
大、二六五・一・一六五)(谷大、長保一三四)  
(立大、A・一・二四八—五〇)(高大、寄・一・一

五)

十不二門指要鈔鑽仰

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-san-gō. ②三卷  
pu-ni-mon-shi-yō-shō-san-gō. ③存 ④周泉記 ⑤文化一三寫 ⑥(立大、  
A・一・五六)

十不二門指要鈔私記

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shi-ki. 十不二門指  
要鈔和解 ②四卷 ③存 ④亮珍記 ⑤寫  
本(谷大、餘大・三四八)

十不二門指要鈔試贊

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shi-san. ④四卷  
pu-ni-mon-shi-yō-shō-shi-san. ⑤存 ⑥鳳千(—天保一—A. D. 1840)述  
⑦明治三七寫 ⑧(谷大、餘大・一三二一)

十不二門指要鈔釋疑

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shaku-gi. ②一卷  
pu-ni-mon-shi-yō-shō-shaku-gi. ③存 ④寂靜述 ⑤正保二刊 ⑥(龍大、二  
六五・一・一六七)

十不二門指要鈔集考

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shū-ka. ②三卷  
pu-ni-mon-shi-yō-shō-shū-ka. ③存 ④日親述 ⑤寶永七刊 ⑥(谷大、餘  
大・一三〇)(立大、A・一・二五八)(龍大、二  
六五・一・一六八)

十不二門指要鈔修性離合述聞

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shū-shō  
-ri-gō-jūsu-mon. ②一卷 ③存 ④寫本  
(龍大、二六五・一・一六九)

十不二門指要鈔助解

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-jō-gō. ②一卷或二  
卷 ③存 ④重華述 ⑤享保一六寫(谷大、  
長保・一三五)正徳二刊(正大、一三五・三六  
二卷寫本(龍大、二六五・一・一七〇))

十不二門指要鈔詳解

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shō-ge. (支)Shih-  
pu-eh-mên-shih-yao-ch'ao-hsiang-g'chih.  
②四卷 ③存 ④正徳二・五・一一三 ⑤宋可  
度詳解、正證分會  
⑥武林の無極大師可度(傳は未詳。南屏系  
竹菴可觀—北峯宗印—佛光照照—無極可  
度)は指要鈔の逆式の序文から初め、次に指  
要鈔の文の一々に至るまで、南屏系の學說  
に従つて訓詁的に詳解したもの。可度は一  
家教觀を明らかにこれを詳解せんと欲し研鑽  
効を積み、文義を解すること正斷。柯を執  
つて薪を折り刃を游して竹を破るが如くに  
明快であつた。然し本書は相當に草案が出  
來たが、整理されずに寂した。それ故無盡  
大師傳燈の高弟雲石が法兄の以支の跡を繼  
いで本書を參會して梓行するに至つたので  
あるといふ。この時に科文一冊と合せ五冊  
の詳解が出来た。時に明の崇禎四年であ  
る。この明本は指要鈔詳解序(武林沙門海  
眼撰)と指要鈔科とを合せて一卷とし、指  
要鈔を詳説し、正證(傳は未詳)これを分解  
した。本書の説は四明派特に南屏系の學說  
を奉じて記したものであるから、廣く指要  
鈔研究者の參考書に用ひられた。

十不二門指要鈔詳解會本

(田島德音)  
①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shō-ge-  
-hon. (支)Shih-pu-eh-mên-shih-yao-  
-ch'ao-hsiang-g'chih-hui-pên. ②二卷 ③  
存 ④正徳二刊(龍大、二六五・一・一七一—  
一七二、研佛)(谷大、餘大・一五九)(立大、A  
・一・二四六、四九)天和二刊(正大、一三五・三

七)(内閣)

十不二門指要鈔詳解幻錄

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shō-ge-  
-gen-gen-roku. ②一卷 ③存 ④光謙靈  
空(承應元—元文四 A. D. 1652—1739)述、  
慈泉記 ⑤享保一二寫 ⑥(谷大、餘大・三  
八三)

十不二門指要鈔詳解詮註

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shō-ge-  
-gen-sen. ②三卷 ③存 ④光謙靈空(承  
應元—元文四 A. D. 1652—1739)述 ⑤享  
保一三刊 ⑥(龍大、二六五・一・一七三)(谷  
大、餘大・一八二)(正大、一三五・四八)(京  
大、一・二四〇・一七)

十不二門指要鈔詳解私記

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shō-ge-  
-shi-ki. ②一卷 ③存 ④苑延編 ⑤元祿  
一一寫

十不二門指要鈔詳解私考集

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shō-ge-  
-shō-shū. ②五卷 ③存 ④寫本(谷大、  
餘大・二〇七八)

十不二門指要鈔詳解事義

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shō-ge-  
-ji-gi. ②一卷 ③存 ④慈泉記 ⑤寫本  
(龍大、二六五・一・一七五)

十不二門指要鈔詳解條簡

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shō-ge-  
-jō-kan. ②一卷 ③存 ④刊本(正大、一三  
五・四〇)

十不二門指要鈔詳解折疑錄

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shō-ge-  
-shō-shō-ge.

shaku-gi-roku. ②十二卷 ③存 ④達門記 ⑤寫本(立大、A.112・四五)(谷大長保・1133)

**十不二門指要鈔詳解選覽**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shō-ge-sen-yoku. ②二卷 ③存 ④鳳潭(承應三一元文三 A.D. 1651-1738)述 ⑤享保五刊(龍大、研佛)(正大、一三五・四三・四五)(立大、A.112・四四)(谷大、餘大・四〇五五)(高、大、寄・1・15)(京大、1・24シ・1八)享保一二刊(高、大、1・15)安永五刊(谷大、餘大、112・九七)

**十不二門指要鈔詳解評**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shō-ge-hyō. ①一卷 ③存 ④光謙(靈空)(承應元一元文四 A.D. 1652-1739)述 ⑤寫本(谷大、餘大・110・三四)

**十不二門指要鈔詳解辨訛**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shō-ge-ben-kwa. ②一卷 ③存 ④光謙(靈空)(承應元一元文四 A.D. 1652-1739)述 ⑤正徳三寫 ⑥(谷大、長保・1136)

**十不二門指要鈔詳解聞記**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shō-ge-mon-ki. ②二卷 ③存 ④寫本(龍大、1165・1176)

**十不二門指要鈔精義**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-shō-gei. ②一卷 ③存 ④上田照通(文政一一一明治四〇 A.D. 1828-1907)述 ⑤明治二八刊 ⑥(正大、1135・五九)(高、大、寄・1・15)

**十不二門指要鈔續講**

pu-ni-mon-shi-yō-shō-zō-ki. ②二卷 ③存 ④智海述 ⑤寫本(龍大、1165・1182)

**十不二門指要鈔竹隱草書**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-chiku-in-shō. ②五卷 ③存 ④良運 ⑤寛文一一刊 ⑥龍大、1165・1183)(谷大、餘大・五五二)(正大、1135・九八)(高、大、寄・1・15)

**十不二門指要鈔註解評林**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-chū-ge-hyō-in. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、長保・1138)

**十不二門指要鈔聽記**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-chō-ki. ②一卷 ③存、台家雜講之内 ④惠澄(靈空)(安永九一文二 A.D. 1780-1862)述 ⑤寫本(龍大、研佛)(谷大、餘大・1109)

**十不二門指要鈔聽記**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-chō-ki. ②二卷 ③存 ④寫本(龍大、1165・1185)

**十不二門指要鈔聽記**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-chō-ki. ②一卷 ③存 ④法住(一明治子 A.D. 1874)述 ⑤寫本(龍大、研佛)

**十不二門指要鈔丁巳錄**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-tei-shi-roku. ②一卷 ③存 ④玄成述 ⑤寫本(龍大、1165・1186)

**十不二門指要鈔秘訣**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-hi-keku. ②一卷 ③存 ④刊本(龍大、1165・1187)

**十不二門指要鈔別理隨緣文備釋**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-betsu-ri-zui-en-mon-bi-shaku. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、1135・六三)

**十不二門指要鈔辨書**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-ben-sho. ②四卷 ③存 ④寫本(龍大、1165・1188)(正大、1135・六二)

**十不二門指要鈔聞記**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-mon-ki. ②三卷 ③存 ④寫本(谷大、餘大・四一八)

**十不二門指要鈔要決**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-yō-keku. ②二卷 ③存 ④戒順述 ⑤寫本(谷大、餘大・二八〇)(正大、1135・六〇)文化七刊(立大、A.112・五三)

**十不二門指要鈔略解**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-ryaku-ge. ②二十卷 ③存 ④主海(一天和二 A.D. 1682)述 ⑤貞享元刊 ⑥龍大、1165・1189)(谷大、餘大・四三〇)(正大、1135・五一、九九)

**十不二門指要攝塵集**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-shō-jin-shū. ③存 ④日統述 ⑤寫本(立大、A.112・五七)

**十不二門指要隨覽**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-yō-zui-ran. ②三卷 ③存 ④慶龍集

**十不二門示珠指**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shi-shū-shi. (支)Shih-pu-erh-mén-shih-chu-chih. 法華十妙不二門示珠指 ②二卷 ③存、已續二・五・一 ④宋源清

(一)至道二 A.D. 996)述 ⑥法華十妙不二門示珠指の下を見よ。 ⑦正保三刊 ⑧(立大、A.112・111・112)

**十不二門心解**

①(日)Jip-pu-ni-mon-shin-ge. (支)Shih-pu-erh-mén-hsin-chieh. 十不二門心解 ②一卷 ③存、已續二・五・一 ④宋仁岳(淳化三—治平元 A.D. 991-1064)述 ⑤寬文一〇刊 ⑥(正大、1135・1133)

**十不二門樞要**

①(日)Jip-pu-ni-mon-sū-yō. (支)Shih-pu-erh-mén-shū-yao. ②二卷 ③存、已續五・二 ④宋了然(紹興一一 A.D. 1141)述 ⑤紹興八(A.D. 1138)

⑥了然の自序に著作の意が述べてある。これによれば「湛然が十門を立てたのは正しく觀門のためであつた。故に觀心は教行の樞機である」と故に樞要と名づけた」と。了然は神照第四世の法孫。智湧と號した。傳は佛祖統記一五に出づ。同門の與成は本書に跋語を記してゐる。本書は上記の序に記してあるように止觀の義を宣揚せんとして註したるもの。指要鈔とは其傾向が相異してゐる。

**十不二門分科**

①(日)Jip-pu-ni-mon-bun-ka. ②一卷 ③存、台家雜講之内 ④慧澄(靈空)(安永九一文二 A.D. 1780-1862)作 ⑤寫本(谷大、餘大・1109)

**十不二門文心解**

①(日)Jip-pu-ni-mon-mōn-shin-ge. (支)Shih-pu-erh-mén-wen-shin-chieh. ②一卷 ③存、已續二・



五十一 ①仁岳(淳化三)一治平元 A.D. 992-1064撰 ②天聖六冬十月一皇祐四秋八月 (A.D. 1028-1052)

③本書は淨覺仁岳が四明の會下から離れ自説を暢ぶるに至つた以後の作であるから「十不二門」の解釋は「指要鈔」とは全く相違してゐる。文心解とは仁岳の自序に「章安が云く。玄意は文心を述ぶると。文心とは述本に過ぎない。十門は述本に攝せられると。今もこの意によつて文心と題した」と。本書撰述の年月は卷末の仁岳の奥書にある錢塘の石室蘭若で講じて私に之を記して置いた。後に吳興の西溪の草堂で門人の請ひに従つて再治し版に刻した。故に新古の別があること新舊を明知せよと。(田島徳普)

十不二門文心解私抄 ①(日) Jip-pu-ni-mom-mon-shin-ge-shi. ②二卷 ③存 ④房純述 ⑤寫本(龍大、二六五・一・一八〇)

十不二門文心解私抄 ①(日) Jip-pu-ni-mom-mon-shin-ge-shi-sha. ②一卷 ③存 ④日遠(元龜三)寛永一九 A.D. 1572-1642述 ⑤慶安二刊(谷大、餘大・二二八) ⑥龍大、二六五・一・八一(立大、A. 二・二四一・二六)

十不二門文心解要文 ①(日) Jip-pu-ni-mom-mon-shin-ge-yo-mom. ②二卷 ③存 ④日詔述 ⑤萬治三刊 ⑥(谷大、餘大・二二八) (龍大、二六五・一・七八) 十不二門文心解要文 ①(日) Jip-pu-ni-mom-mon-shin-ge-yo-mom. ②二

卷 ③存 ④日達(延寶二)延享四 A.D. 1671-1747) ⑤寛文一三刊 ⑥(龍大、二六五・一・七九)

十不二門文理 ①(日) Jip-pu-ni-mom-mon-ri. ②一卷 ③存 ④慈等(一寛政頃 A.D. 1789-1800)述 ⑤(参考) 山家祖徳撰述篇目集卷下 ⑥刊本(龍大、二六五・一・九二) (立大、A. 二・七六) (正大、一三五・九五) 寫本(谷大、長保一七七)

十不二門譯論 ①(日) Jip-pu-ni-mom-yaku-sen. ②一卷 ③存 ④慧澄撰(安永九)文久二 A.D. 1780-1862)述 ⑤多田孝泉校 ⑥明治九刊 ⑦(立大、A. 二・七七) 寫本(谷大、餘大・五一一)

十不二門論議 ①(日) Jip-pu-ni-mom-ro-dan. ②二卷 ③存 ④照源盧記、慧達筆記 ⑤萬治三刊 ⑥(京大、日大末・二三五) (哲、ま・一・中二〇)

十不二門論議 ①(日) Jip-pu-ni-mom-ro-dan. ②一册 ③存 ④島地大等(明治八一昭和二 A.D. 1875-1927)著 ⑤大正一一刊 ⑥東京光融館 十不二門論指要鈔科文 ①(日) Jip-pu-ni-mom-ro-shi-yo-shu-ke-wan-mom. ②一卷 ③存、科文集之内 ④造眞 ⑤寫本(谷大、宗大・二四一)

冠註十部錄 ②一卷 ③存 ④町元存空編 ⑤大正二刊 ⑥京都具葉書院 十佛因緣經 ①(日) Jū-pu-sū-in-en-gyō. (支) Shih-to-yin-yuan-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤(参考) 武周錄第一

十佛頂陀羅尼 ①(日) Jū-pu-chō-da-ra-ni. ②一帖 ③存 ④實融(寶治元曆應二 A.D. 1247-1339) 寫本(寶壽院) 十念大事 ①(日) Jū-fun-dai-ji. ②二紙 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院) 十念怒明王經 ①(日) Jū-fun-nū-nyō-dō-kyō. (支) Shih-fen-nū-ming-wa-ning-ching. ②十念怒明王大明觀想儀軌經、幻化網大瑜伽十念怒明王大明觀想儀軌經 ③一卷 ④存、大正一八・五八三 No. 891、縮成三、二一六・一〇、北1210冠、南1231冠、元1220冠、明北1056思、清1056思、麗1238千、天1206冠、法1335鼓、至863取、明南884履、Nj. 1061 ⑤宋法賢(一咸平四 A.D. 1001)撰 ⑥幻化網大瑜伽十念怒明王大明觀想儀軌經の下を見よ。

十方淨土隨願往生經 ①(日) Jū-pō-jō-zū-i-gwan-tō-jō-gyō. (支) Shih-fang-ching-tu-sui-yuan-wang-cheng-ching. 灌頂隨願往生十方淨土經、十方隨願往生經 ②一卷 ③存、灌頂經第一(大正二・一五二八 No. 1331) ④東晋帛尸梨蜜多羅(一咸康八 A.D. 342) 譯 ⑤元祿七刊 ⑥(高、奇・一・二三)

十方隨願往生經 ①(日) Jū-pō-jō-zū-i-gwan-tō-jō-gyō. (支) Shih-fang-ching-tu-sui-yuan-wang-cheng-ching. 灌頂隨願往生十方淨土經、十方隨願往生經 ②一卷 ③存、灌頂經第一(大正二・一五二八 No. 1331) ④東晋帛尸梨蜜多羅(一咸康八 A.D. 342) 譯 ⑤元祿七刊 ⑥(高、奇・一・二三)

Shih-fang-sui-yuan-wang-cheng-ching. 灌頂隨願往生十方淨土經、十方淨土隨願往生經 ②一卷 ③存、灌頂經第一(大正二・一五二八 No. 1331) ④東晋帛尸梨蜜多羅(一咸康八 A.D. 342) 譯 ⑤(参考) 淨土依憑經論章疏目錄

十方千五百佛名經 ①(日) Jū-pō-sen-gō-hyaku-butsu-myo-kyō. (支) Shih-fang-chien-wu-pai-to-ming-ching. ②一卷 ③存、大正一四・三一三 No. 442 ④失譯 ⑤現在東西南北四維上下なる十方各百五十佛、合せて千五百佛の名號を列ねてその功德を説けるもの。最初の方が散逸してゐる。まづ(南方)南方の佛名をきて疑を懐かず禮拜すれば現在世に於て功德具足して五法を速得する。若し女人ならば女身を離れて淨佛土に生じ神通具足して能く七百萬億劫の生死の罪を却くとて南方純寶藏佛以下百五十佛の名目を列ね、(西南方)佛は舍利弗に對つて此の西南方の諸如來の名を開くことの出来るものは既に過去の諸佛を供養した人であると告げ、更に、一心に信樂持念すれば無量の福を得べく三塗の厄を遠離するとて西南方普明佛以下百五十佛を列し、(西方)西方の佛名をきく者は無量の三昧門を速得し命終の時は十方各々十億後諸佛を見、千劫生死の罪を却けて永く受けずとて西方寶生佛以下百五十佛を出し、(西北方)此の諸如來の名號をきくことの出来る者は既に過去に五十萬佛を見奉つたもので三惡八難の處に生じないとて西北方寶相佛

十方千五百佛名經 ①(日) Jū-pō-sen-gō-hyaku-butsu-myo-kyō. (支) Shih-fang-chien-wu-pai-to-ming-ching. ②一卷 ③存、大正一四・三一三 No. 442 ④失譯 ⑤現在東西南北四維上下なる十方各百五十佛、合せて千五百佛の名號を列ねてその功德を説けるもの。最初の方が散逸してゐる。まづ(南方)南方の佛名をきて疑を懐かず禮拜すれば現在世に於て功德具足して五法を速得する。若し女人ならば女身を離れて淨佛土に生じ神通具足して能く七百萬億劫の生死の罪を却くとて南方純寶藏佛以下百五十佛の名目を列ね、(西南方)佛は舍利弗に對つて此の西南方の諸如來の名を開くことの出来るものは既に過去の諸佛を供養した人であると告げ、更に、一心に信樂持念すれば無量の福を得べく三塗の厄を遠離するとて西南方普明佛以下百五十佛を列し、(西方)西方の佛名をきく者は無量の三昧門を速得し命終の時は十方各々十億後諸佛を見、千劫生死の罪を却けて永く受けずとて西方寶生佛以下百五十佛を出し、(西北方)此の諸如來の名號をきくことの出来る者は既に過去に五十萬佛を見奉つたもので三惡八難の處に生じないとて西北方寶相佛

名所行發 ⑩ (名庫書) 著者所現 ⑪ 月年の刊數 ⑫ (書考參書釋註) 書末 ⑬ 說解容内 ⑭ 代年作者 ⑮ 著書 ⑯ 缺存 ⑰ 數卷 ⑱ (名書) 名題 ⑲ 號略字數

以下百五十佛を説き、(北方)この佛名をきいて信樂して疑はねば十方各十恒河沙の佛を見、善知識に遇つて深法忍を獲、所生の處常に人尊と爲るとして北方人王佛以下百五十佛を出し(東北方)この諸佛の名號をき、歡喜信樂する者の所得の功德は一切の布施に勝れ、諸佛の國土に隨意に往生することを得るとして東北方一切間怖畏佛以下百五十佛を列し、(上方)此の佛名をきく者は在々所生、身に三十二相を離るゝことがない。亦諸佛國土に往生するを得るとして上方華嚴日王佛以下百五十佛を擧げ、(下方)此の佛名をきいて至心に受持燒香敬禮する者は、所生の處に普光三昧を得、命終の時は億百千伎諸佛住前し而も十方何れも然るを見ることが出来るとして下方明德佛以下百五十佛を出してゐる。

さて以上の中で東方及び東南方を缺いてゐるわけであるが、前述せる如く最初の方が散逸してゐる部分に缺字を含みつゝ二十一佛の名號が残つてゐる。これは東南方の佛名であつて、その前に東方があつたもので、散逸せる部分は明らかに東方東南方の佛名で、これで十方を完全に具へてゐたのである。(三好鹿雄)

**十方佛決狐疑經** ①(日) Jip-pō-butsu-kekkō-kyō. (支) Shih-fang-to-chueh-lu-t-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④【參考】法經錄第二、內典錄第一〇、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

**十方佛神呪經** ①(日) Jip-pō-butsu-jin-shu-kyō. (支) Shih-fang-to-shen-chou

①-hin. 十方佛神呪 ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤【參考】出三藏記第四、法經錄第二、靜泰錄第三、武周錄第一一、開元錄第五、第一四、貞元錄第八、第二四

**十方佛名** ①(日) Jip-pō-butsu-nāyō. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、二六九九・一)

**十方佛名經** ①(日) Jip-pō-butsu-myō-kyō. (支) Shih-fang-to-ming-ching. ②一卷 ③缺 ④西晉竺法護(一太始二建興元 A. D. 266-313)譯 ⑤【參考】出三藏記第四、法經錄第二、三寶紀第四、第七、仁壽錄第三、靜泰錄第三、內典錄第一、第三、武周錄第一一、開元錄第五、第一四、貞元錄第八、第二四

**十方佛名功德經** ①(日) Jip-pō-butsu-myō-kū-deki-kyō. (支) Shih-fang-to-ming-kung-te-ching. ②一卷 ③【參考】法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三

**十方菩薩品** ①(日) Jip-pō-bosatsu-hon. (支) Shih-fang-p'u-sa-p'in. 明度五十校計經 ②二卷 ③存、大方等大集經第五九一六〇(大正一三・三九四 No. 397. 17)之内 ④那連提耶舍譯 ⑤高齊大建九一開皇五(A. D. 577-585)

⑥こは、右掲の如く、『大方等大集經』第五九一六〇に收められてゐる。『麗藏』本では、那連提耶舍の譯としてゐるが、『宋』『元』『明』『三藏本』では、『後漢天竺』又は安息)三藏法師安世高譯』とあり、かつ經名も、『佛說明度五十校計經』二卷として別行

されてゐる。譯者に關して、叙上の何れであるかは、異説の存するところであるが、恐らく安世高譯とするを至當とすべきであらう。よつて本經は、元來『佛說明度五十校計經』三卷として別行されてゐたものを、隋代招提寺沙門僧就が、曇無讖譯に歸せらるゝ『大集經』に、更に『日藏分』以下の諸經を加へた際、『十方菩薩品』を改名して附加せるものである。その内容は、まづ十方菩薩が佛に向つて、「何の故に諸行の因縁に不問あるや」と問へるに初まつて、佛がこれに對して、五根及び意識を校計すべきことを説かれる。この校計すべき法として、疑・疑乃至盡力に至る五十法を數ふるところより、本經が一名『五十校計經』と呼ばれたのである。(深浦正文)

**十法會** ①(日) Jip-pō-e. (支) Shih-fa-hui. 大乘十法會 ②一卷 ③存、大寶積經第二八(大正一一・一五二 No. 316. 9) ④佛陀扇多譯 ⑤元魏正光六元象二(A. D. 525-539)

**十法界義** ①(日) Jip-pō-kai-gi. (支) Shih-fa-ai-chih-i. ②一科 ③隋灌頂(天嘉二一貞觀六 A. D. 561-632)記 ④【參考】傳教大師將來台州錄

**十法界鈔** ①(日) Jip-pō-kai-shō. 十法界事 ②一卷 ③存、縮箱一〇 ④日蓮(貞應元一弘安五 A. D. 1222-1282) ⑤正元元(A. D. 1239) ⑥十法界事の下を見よ。(馬田行啓)

**十法界鈔私** ①(日) Jip-pō-kai-shō-shi. ②一卷 ③存 ④日透記 ⑤享保二

寫⑥(立大、D.O.三三)

**十法界鈔私記** ①(日) Jip-pō-kai-shō-shi-ki. ②存 ③寫本(立大、D.O.一五八)

**十法界鈔本述自鏡編** ①(日) Jip-pō-kai-shō-hon-jutsu-jikō-hen. 十法界鈔自鏡編 ②一卷 ③存、日蓮宗々學全書顯本法華宗部第二 ④日受(元祿五—安永五 A. D. 1692-1766)述 ⑤明和六(A. D. 1769)

⑥顯本法華宗(舊稱妙滿寺派)近世の碩學日受が日蓮の『十法界鈔』を釋した書。

「一、此書都合四問三答、吾祖發問至第四重難問、正顯本門觀心意、是則此書本意也。以下十八項に亘つて報應顯本の立場に於て十法界鈔の要點を釋し、「啓蒙」等の釋義の誤謬を訂するところあり、「自鏡編」「如實事觀錄」等の諸要編と共に宗教者の一讀を要する書である。(馬田行啓)

**十法界鈔略要** ①(日) Jip-pō-kai-shō-ryakuyō. ②存 ③寫本(立大、D.O.一五八)

**十法界事** ①(日) Jip-pō-kai-no-to=to. 十法界鈔 ②一卷 ③存、日蓮聖人御遺文之内、日蓮聖人全集第三 ④日蓮(貞應元一弘安五 A. D. 1222-1282) ⑤正元元(A. D. 1239)

⑥本書の述作は正文元年とせられてゐるが古來異説がある、或は佐渡以後のものではないかとも言はれてゐる。法華經以前の諸經は十界互具を説いてゐないから、二乘が見思の煩惱を斷じて六道を出離したといふ

ても空文であり、菩薩も眞の成佛は出来な  
い。(以上權實相對)。然るに法華經に於て  
も迹門は佛の久遠實成が顯はれず佛界の常  
住が説いてないから十界互具一念三千の教  
理も其の意を盡さず眞の成佛は出来ない。  
本門の壽量品に來じて始めて久遠實成が開  
顯せられ、十界互具一念三千の教理が究竟  
して、こゝに眞の佛因佛果が明らかとなつ  
たのである。(以上本迹相對)故に本門壽量  
品未説以前の權經迹門には眞の成佛がない  
六道の出離もないと説いたものである。

●録内啓蒙第三四、録内扶老第一三、等

十法界事略要

①(日) Jip-pō-kai-  
no-koto-ryaku-yō. ②一卷 ③存 ④寫  
本(立大、A.O.二・九七)

十法界明因果鈔

①(日) Jip-pō-  
kai-myō-in-gwa-shō. 十界明因果鈔、十界  
因果鈔 ②一卷 ③存、縮寫一〇、日蓮聖  
人御遺文之内、日蓮聖人全集第四、祖書要  
津之内 ④日蓮(貞應元—弘安五 A. D.  
1222—1282) ⑤文應元(A. D. 1260)

⑥問答體を以つて、初めに十界の一々の因  
と果とを經文によつて詳述し、次に戒法  
を論じ、法華經の戒には相待妙の戒、絶對  
妙の戒とあり、法華經の絶對妙の戒によら  
ざれば、二乘七逆等の如き他經に於て受戒  
を許されない者を受戒成佛する法はないと  
説いたものである。書名は初めの十界の因  
果を明すところに就いて名づけたのである  
が、述作の動機は最後の絶對妙戒にあるこ  
とは言ふまでもなく。

●録内啓蒙第二六、御書註第一六、御書鈔  
第一六等 (馬田行啓)

十法界明因果鈔略要

①(日) Jip-  
pō-kai-myō-in-gwa-shō-ryaku-yō. ②一  
卷 ③存 ④(立大、A.O.二・九八)

十法經

①(日) Jip-pō-kyō. (支) Shih-  
fa-ching. 大乘十法經 ②一卷 ③存、大  
正一・七六四No. 314、縮地八、卅六・三  
北36服、南33服、元26服、明北26服、清26  
服、麗26乃、天30服、指26乃、法31乃、至  
96位、明南26服、元29 ④僧伽婆羅譯  
⑤梁天監五—普通元(A. D. 506—520) ⑥  
大乘十法經の下を見よ。

十法成就惡業入地獄經

①(日) Jip-pō-  
jō-ju-ku-gō-nu-yi-gōk-kyō. (支)  
Shih-fa-ch'eng-ch'u-e-yeh-ju-ti-yü-chi-  
ng. ②一卷 ③失譯 ④雜阿含經第三十  
七卷の抄出。 ⑤(參考) 出三藏記第四、  
法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第  
四、開元錄第三、貞元錄第四

十法成乘義

①(日) Jip-pō-  
jō-gi. (支) Shih-fa-ch'eng-ch'eng-  
i. ②一科 ③隋灌頂(天嘉二—貞觀六 A. D. 561—632)  
記 ④(參考) 傳教大師將來台州錄

十報法三統略

①(日) Jū-hō-hō-  
hō-yaku. (支) Shih-pao-fa-san-tung-  
hō. 十報法三統略經、十報三統略經 ②一  
卷 ③缺 ④宋求那跋陀羅(太元一九—泰  
始四 A. D. 394—468) 譯 ⑤(參考) 出三藏  
記第四、法經錄第五、仁壽錄第三、靜泰錄  
第三、開元錄第一五、貞元錄第二五

十寶鈔十帖評

①(日) Jū-pō-shō-  
jū-ten-pyō. ①圓光坊仁宴 ②(參考) 本朝  
台祖撰述密部書目

③十魔記 ①(日) Jū-ma-ki. ②一卷  
③存 ④無明記 ⑤(參考) 神籍目錄

十萬億利不違辨附去此不違辨

①(日) Jū-man-  
oku-setsu-ten-on-to-ben. ①一卷  
②(支) Jū-man-oku-setsu-ten-on-to-ben  
-tsukuri-ko-shi-fa-on-no-ben. ②一卷  
③存 ④慈春(一享保一八 A. D. 1733—) 述  
⑤寫本(谷大、宗大・八二〇)

十萬億土不違辨

①(日) Jū-man-  
oku-fu-ō-no-ben. ②二卷 ③存 ④  
寫本(正大、一六六・11)

十萬億佛土衆說決擇義

①(日) Jū-man-  
oku-butsu-dō-shū-setsu-ke-  
chaku-gi. ②一卷 ③存 ④惠然(元祿六  
—明和元 A. D. 1693—1764) 述 ⑤寫本(龍  
大)

十萬白龍

①(日) Jū-man-  
byaku-ryū. ②一卷 ③存 ④  
西藏古代神話十萬白龍 ⑤(參考) 西  
藏本純雅譯 ⑥明治三九刊 ⑦(立大、B  
四・1)(京專)

十萬枚護摩口決

①(日) Jū-man-  
mai-go-ma-ku-keisu. ②一卷 ③存 ④  
了辨記 ⑤天明二寫

十萬枚護摩日記

①(日) Jū-man-  
mai-go-ma-ri-ki. ②二卷 ③存 ④覺  
實記 ⑤明治五寫 ⑥(藥樹院)

十妙義案立

①(日) Jū-myō-  
gi-an. ②一卷 ③存 ④隱海撰 ⑤(參考)  
大日本佛教全書續刊豫定書目

十妙義私記

①(日) Jū-myō-  
gi-shi-ki. ②二卷 ③存 ④千觀(延喜一九—永  
觀二 A. D. 919—975) 述 ⑤(參考) 諸宗章  
疏錄第二、山家祖德撰述篇目集卷下 ⑥寬  
文年間刊 ⑦(龍大、二六五・二〇七)(京  
大、日大末・二四六)

⑧十妙義私抄 ①(日) Jū-myō-  
gi-shi-shō. ②一卷 ③存 ④應永二二寫 ⑤(谷  
大、餘甲・一〇四)

十妙不二門示珠指

①(日) Jū-myō-  
fu-ni-mon-ji-shū-shi. (支) Shih-miao-pu-  
erh-men-shih-chu-chih. 法華十妙不二門  
示珠指 ②二卷 ③存、已續二・五・一  
宋源清(一至道二 A. D. 995—) 述 ④法華  
十妙不二門示珠指の下を見よ。 ⑤(哲・  
五・左・13)

十明論

①(日) Jū-myō-  
ron. (支) Shih-  
ming-lun. 解迷顯智成悲十明論、釋華嚴  
十明論、華嚴十明論、釋華嚴經十二緣生解  
迷顯智成悲十明論 ②一卷 ③存、大正四  
五・七六七No. 1888、已續二・八・四 ④唐  
李通玄(貞觀九—開元一八 A. D. 633—730)  
一說開元二八寂述 ⑤解迷顯智成悲十明論  
の下を見よ。 ⑥(參考) 諸宗章疏錄第二  
部書目

十無上義

①(日) Jū-mu-  
jō-gi. ①古祖撰 ②(參考) 本朝台祖撰述密  
部書目

十無盡院舍利講私記

①(日) Jū-  
mu-jin-in-sha-ri-ko-shi-ki. ②1軸 ③  
存 ④鎌倉時代寫 ⑤(高大、奇・一・四九)

十無盡院舍利講式

①(日) Jū-mu-  
jin-in-sha-ri-ko-shiki. 舍利講式 ②1  
卷 ③存、四座講式(大正八四・九〇四No.  
2731)之内 ④高辨(承安三一貞永元 A. D.  
1231—)之内

1173—1232 一説貞永元、年六一歳撰 ①四座講式の下を見よ。⑦〔参考〕諸宗章疏録

第一  
十夢經 ①(日)Ji-mu-kyō. (支)Shi-mēng-ching. ②一卷 ③失譯 ④〔参考〕出三藏記第三

十門辨惑論 ①(日)Jū-mon-ben-waku-ron. (支)Shi-mēn-pken-huo-lun.

③三卷或二卷 ④存 大正五二・五五一 No. 2111. 縮録八、正三〇・五、北1081 既、南1097 既、元1092 既、明南1491 既、清1491 既、麗1086 集、天1080 既、指1039 集、法1067 集、至1557 約法、明南1473 冠、N. 1498 ④復禮述 ⑤唐永隆二(A. D. 681)七月一日

⑥この書は麗本には上中下三卷に分ける。然るに宋元明三本は通して一卷とする。唐沙門復禮が、太子文學權無二の釋典に於ける十門の稽疑に答へたものである。即ち十門とは、通力上感門、應形俯化門、淨穢土別門、迷悟見殊門、顯實得記門、反經譚道門、觀業救捨門、隨教抑揚門、化佛隱顯門、聖王興替門がこれである。權無二は復禮に弟子の禮を以て交り、その稽疑から察すれば佛典に對する見解は小乘的ではあるが相當な學識を持ち、亦佛典に就ても可成りに深い造詣を持つて居た。乃ち復禮はこれが惑を辯するのに、その所說の中に、或は佛典を擧げ、亦儒言を引き、以て連類として所說の根據となした。然れども儒言を引いたのは直ちに以て儒佛の同一を意味するものではなく、唯々その時々々の連類とす

るに過ぎない。扱て各門の要領を記すれば次の如くである。

〔通力上感門〕維摩の神力不思議なのは、維摩は法身の大神なるがためである。

〔應形俯化門〕龍女が成佛して、然も文殊が成佛しないのは如何とならば、龍女は五道に遊ぶも、位十地を光らし、文殊は菩薩なるも、實はこれ如來なるがためである。

〔淨土穢土別門〕法華經を説くの時を五十小劫と言ひながら、釋迦の説法は四十餘年、正法五百(千年)像法千年等言ふは、後者は穢土の化身に就てであり、前者は淨土の報身に就てある。(迷悟見殊門) 法華經に神光遠照三他界、涅槃經に寶蓋廣覆三千一と言ひ、然も人々は無縁にして見る事能はざるは如何とならば、若し信に廣きも醜雜は塵に遊んで見ず。白日蓋し明かなるも、仙鼠は晝伏して見ざるが如く、見不見は人の迷悟による。(顯實得記門) 提婆は佛弟にして閻王に勸めて佛を害して尙天王如來となり、善星は佛子にして罪提婆より輕くして生きながら地獄に入れるは如何とならば、これ大小權實を示すものである。

〔反經譚道門〕提婆が後に如來となつたらば、則ちこれ菩薩でなければならぬ。菩薩にして然も人に勸めて父を害せしめたのは如何、若し業が害に合ふならば、閻王は自害すべきである。業が非害にあるならば、菩薩の害せしめたのは如何。これ即ち理人の道に順逆がある爲である。(觀業救捨門) 頻婆娑羅王は首として佛を供養した。その幽せられて未だ死せざる時、佛は

大悲神力を以てこれを救はざるは如何。凡そこれ業である。業の感報に三時あり不同である。(隨教抑揚門) 涅槃經に涅槃によらざれば成佛し難しとて、般若、法花を輕んずるは如何。時に隨つて義は沿革するが故に、其の常を守る事は出来ない。唯、病に隨つて藥を授くるのみである。(化佛隱顯門) 二月十五日、佛將に涅槃せんとすと言ひ、却つて後三月、聖業佛を勸請すと記せらる。滅時の時日は果して如何。涅槃には始終がない。故に時日が無いのである。(聖王興替門) 轉輪聖王四天を化すと言ひ、又法花を説く時、輪王傾聽すと言ふも、未だ、金輪の東轉するを見ない。然も輪王の現るゝに中夏の帝皇と異なるは如何。中夏に聖王のあるは、金輪が屢々東轉せるを示すものである。

以上十門。復禮はこれを權無二に與へて言ふ。「言は意に出づる所以なれども、意にあらず。跡は本を明す所以なれども本に非ず。大聖の教は跡淺くして本深し。この故に一而を以て見る事は出来ない」と。權文學はこの論を見、百年の疑、一朝頓に盡きたりと云ふ。

⑨延寶五寫(谷大、餘大・三〇一五)刊本(正大、一三五・七)(哲、え・六・右・八)

十門辨惑論纂述 ①(日)Jū-mon-ben-waku-ron-san-jūsu. ②二卷 ③存

④臥雲(一寛保元 A. D. 1741)述 ⑤寛保二刊 ⑥龍大、二八一三・三〇〇(正大、一三五・一〇)(哲、え・五・中・二〇)

十門辨惑論神核 ①(日)Jū-mon-ben-waku-ron-shi-ken. ②五卷 ③存 ④知空述 ⑤正徳六刊 ⑥龍大、二八一三・三〇一三(谷大、餘大・一七五五)正大、一三五・九(高大、寄一・二四)(哲、え・五・左・八)

十門和諍論 ①(日)Jū-mon-wa-ji-ron. (支)Shi-mēn-ho-chēng-lun. ②二卷 ③新羅元曉(眞平王三九 A. D. 617)述 ④〔参考〕新編諸宗教藏總録第三、東城傳燈目錄卷下、諸宗章疏録第一

十夜念佛緣起 ①(日)Jū-yā-nem-butō-eri-ki. 冠註十夜念佛緣起 ②一卷 ③存 ④天和二刊 ⑤谷大、宗大・一五〇三(高大、一・一八)(正大、一〇八・八四)

十夜念佛發願由來根元記 ①(日)Jū-yā-nem-butō-eri-ki-hon-e-gan-yū-ki. ②三卷 ③存 ④空無述

⑤享保五刊 ⑥(龍大) 十要第一述註 ①(日)Jū-yō-dai-i-chū-jū-ichū. ②一卷 ③存 ④正大、一五三二・六六)

十樣錦 ①(日)Jū-yō-kin. ②一卷 ③存 ④宗海記 ⑤〔参考〕釋籍目錄

十羅刹 ①(日)Jū-rakshā. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第四〇阿婆縛抄之内 ④承澄(元久二—弘安五 A. D. 1203—1282)撰

十樂歡喜辨 ①(日)Jū-raku-kwan-i-ban. ②三卷 ③存 ④倂英述 ⑤安永九刊 ⑥龍大、一・五五・六二)

h5. ①一卷 ②源信(天慶五—寛仁元 A. D. 942—1017)述 ③(参考) 淨土真宗教典志第一、淨土依憑經論章疏目錄

十樂手鏡

①(日)Ja-raku-te-kegan=ii. 寶曆新撰十樂手鏡 ②二卷 ③存 ④諦忍(寶永二—天明六 A. D. 1705—1786)述 ⑤寶曆一〇刊 ⑥(高大、寄・一・一八)(京大、一・二六・五五)

十樂和譜

①(日)Ja-raku-wa-san. ②存、恵心僧都全集第一 ③源信(天慶五—寛仁元 A. D. 942—1017)

「恵心御作」と作者名を記してあるが恐らくは後人の作。十樂とは第一聖衆來迎樂。第二蓮華初開樂。第三身相神通樂。第四五妙境界樂。第五快樂無退樂。第六引接結緣樂。第七聖衆俱會樂。第八見佛開法樂。第九隨心供佛樂。第十增進佛道をいふ。この十樂は往生要集上之本の欣求淨土の章に記してある十樂と其の名稱が同一。この故に本歌を恵心作と傳ふるのひあらう。

④(参考) 淨土依憑經論章疏目錄 (田島德音)

十力經

①(日)Ja-rik-kyō. (支)Shih-li-ching. ②一卷 ③存、大正一七・七一五 No. 780. 縮刷一五、續正一三・一、麗子合 ④唐代勿提々犀魚譯

⑤本經は佛が諸の苾芻等の爲めに如來の十種大智力を具すことを説けるもので、施護等譯の『佛十力經』とは同本である。十智力とは第一處非處智力、第二業異熟智力、第三靜慮解脫等持智力、第四根上下智力、第

五種々樂欲勝解利別智力、第六種々諸界智力、第七遍趣行智力、第八宿住智力、第九死生智力、第十漏盡智力で、如來はこの十力を具するを以て如來應正等覺等と名くすることを得、又能く無上清淨梵輪を轉ずることを得るのである。本經には序として本文の二倍もの長さを有する「大唐貞元新譯十地等經記」と云ふのがある。これは沙門悟空が、『十地經』廻向輪經等と共に本經傳來の有様を述べたものである。(悟空入竺記[參照]) (三好鹿雄)

十輪義記

①(日)Ja-rin-gi-ki. ②八卷 ③(参考) 東域傳燈目錄卷上

十輪經依義立名

①(日)Ja-rin-gyō-e-gi-ryū-myō(支)Shih-lun-ching-i-i-jing. ②三卷 ③隋信行(興和三一開皇一四 A. D. 541—594)撰 ④(参考) 東域傳燈目錄卷上

十輪經音義

①(日)Ja-rin-gyō-on-gi(支)Shih-lun-ching-yin-i. ①一卷 ②(参考) 東域傳燈目錄卷上

十輪經義記

①(日)Ja-rin-gyō-gi-ki(支)Shih-lun-ching-i-ki. ②四卷 ③(参考) 東域傳燈目錄卷上

十輪經疏

①(日)Ja-rin-gyō-shū. (支)Shih-lun-ching-shū. ②十輪疏 ③八卷 ④唐代靖邁撰 ⑤(参考) 東域傳燈目錄卷上

十輪經疏

①(日)Ja-rin-gyō-shū. (支)Shih-lun-ching-shū. ②三卷 ③(参考) 東域傳燈目錄卷上

十輪經抄

①(日)Ja-rin-gyō-shū. (支)Shih-lun-ching-shū. ②三卷 ③(参考) 東域傳燈目錄卷上

(支)Shih-lun-ching-chiao. 十輪鈔 ③三卷 ④大乘防撰 ⑤(参考) 東域傳燈目錄卷上、注進法相宗章疏

十輪經略抄

①(日)Ja-rin-gyō-ryō-shū. (支)Shih-lun-ching-lyan-chiao. ②一卷 ③隋信行(興和三一開皇一四 A. D. 541—594)撰 ④(参考) 東域傳燈目錄卷上

十輪疏

①(日)Ja-rin-shū. (支)Shih-lun-shū. ②三卷 ③大乘防撰 ④(参考) 諸宗章疏錄第二

十輪疏

①(日)Ja-rin-shū. (支)Shih-lun-shū. ②八卷 ③大乘防撰 ④(参考) 諸宗章疏錄第二

十輪疏

①(日)Ja-rin-shū. (支)Shih-lun-shū. ②八卷 ③唐代靖邁撰 ④(参考) 諸宗章疏錄第二

十輪鈔

①(日)Ja-rin-shū. (支)Shih-lun-shū. ②三卷 ③大乘防撰 ④(参考) 諸宗章疏錄第二

十輪略疏

①(日)Ja-rin-ryakū-shū. (支)Shih-lun-ryakū-shū. ②一卷 ③護命(天平勝寶二—承和元 A. D. 750—834)述 ④(参考) 諸宗章疏錄第二

十類因革論

①(日)Ja-rui-in-kaku-ron. (支)Shih-lei-yin-ko-lun. ②台宗十類因革論 ③四卷 ④存、正續一・九五—一〇五 ⑤(参考) 諸宗章疏錄第二

十六會序

①(日)Ja-toku-e-jo. (支)Shih-lin-hui-hsu. ②一卷 ③玄則述 ④(参考) 諸宗章疏錄第二

⑤(日)Ja-toku-e-jo. ⑥一巻 ⑦存 ⑧慈觀述 ⑨寫本(正大、一五五四・六四)

十六箇條疑問

①(日)Ja-toku-ka-jō-gimon. 淨土十六箇條疑問答、十六箇條疑問答 ②一卷 ③存、淨土宗全書第一 ④良辨(延應元—正和後 A. D. 1239—1314)述 ⑤寫本(正大、一五五四・六一)

十六箇條疑問答

①(日)Ja-toku-ka-jō-gimon-dō. 淨土十六箇條疑問答 ②一卷 ③存、淨土宗全書第一 ④良辨(延應元—正和後 A. D. 1239—1314)述 ⑤寫本(正大、一五五四・六一)

十六箇條疑問答見聞

①(日)Ja-toku-ka-jō-gimon-dō-kan-mon. ②四卷 ③存、續淨土宗全書第一 ④良榮理本(康永元—正長元 A. D. 1342—1428)述 ⑤應永七(A. D. 1400)十一月

⑥本書は名越尊觀の著十六箇條疑問答及附録五箇條を註釋したるもの。卷首に當流と異義との稱呼に就いて説明し、黒谷上人の弟子中、流義を立つる者は隆寛、善慧、長西、辨阿の四人にして辨阿の鎮西流を當流と云ひ、十六箇條の立義に背く者を異義とし、善導寺派(名越派)は正義、白旗派は異議なりとして十六箇條に對する是非を論じて居る。その説明細微に亘り、當に名越の教義を祖述するのみでなく、藤田、三條、一條等の教義をも述べて其相異點を明にしてある。寛文三年五月西村六兵衛梓行本と享保二年麗澤堂本との二本がある。

十六箇條書

①(日)Jū-roku-ka-jū-no-koto. ②一卷 ③存、續淨土宗全書第一四 ④良嚴慈觀述 ⑤正中二(A.D. 1325)十二月

⑥本書は名越尊觀が白旗寂慧の説に疑問を構へて論難したる宗義十六箇條に就いて、尊觀の門下良嚴が自坊の江州河瀬の報恩寺に於て鏡智の爲めに説明したるもの。十六箇條の要點を概括して「先師(尊觀)と白旗との兩上人の相傳の義道參差ありと雖、風聞の如くば先づ兩義あり、一は三心具足念佛業成事、二は九品來迎佛身報化事」となし、その所説の相違に就いては一念業成多念業成に關し「水火の相違に似たりと雖も私に兩義意を領解するに唯是れ業成の名言に於て立不立の義を論せらるゝ計なり、義道に於ては強ち相違にあらざるか」と云へる如く兩上人の説は各據一義なりとして、その是非を決定するものでない。九品來迎佛身の報化に就ても此の態度で説明して居る。

十六記哩章

①(日)Jū-roku-ki-ri-shō. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤寶龜院

十六義科目錄

①(日)Jū-roku-gi-kwa-moku-roku. ②一卷 ③存 ④千觀(延喜一九一永觀二A.D. 919—984一説永觀元、年六六歳) ⑤【參考】大日本佛敎全書續刊豫定書目

十六觀經記

①(日)Jū-roku-kwan-gyō-ki. (支)Shih-jin-kuan-ching-chi. ②

二卷 ④宋代源清述 ⑤【參考】諸宗章疏錄第二

十六觀古道情

①(日)Jū-roku-kwan-an-ko-to-jo. (支)Shih-jin-kuan-ku-tao-ching. ②一卷 ③存 ④清代悟開 ⑤寫本(龍大、二六八一・九六)

十六觀相

①(日)Jū-roku-kwan-sō. ②一卷 ③存 ④(正大、一一五三・二〇七) ⑤十六玄門義 ①(日)Jū-roku-guan-mon-ji. ②一册 ③存 ④哲、け、三・左・三四)

十六算

①(日)Jū-roku-san. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一三七・四二) ⑤十六算所依 ①(日)Jū-roku-san-shō-e. ②十二卷或十六卷 ③存 ④正保四—延寶三刊 ⑤(谷大、餘小・一三六)

十六讚等

①(日)Jū-roku-san-ō. ②一帖 ③存 ④寫本(寶善提院) ⑤十六小部集釋 ①(日)Jū-roku-shō-bu-shū-shaku. ②一册 ③存 ④(正大、一三六・四)

十六鐘鳴

①(日)Jū-roku-shō-me. ②二卷 ③存 ④奥龍玄樓(享保五—文化一〇A.D. 1720—1813) ⑤明治一六刊 ⑥(駒大)帝國(一四一・二〇四)

十六丈白鐵塔

①(日)Jū-roku-jō-byaku-tō. ②一紙 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

十六帖決

①(日)Jū-roku-jō-ketsu. ②十六卷 ③存 ④興國記 ⑤正和五(A.D. 1316) ⑥(來迎寺)

十六善神

①(日)Jū-roku-zen-jin. ②一紙 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶善提院)

十六善神總說

①(日)Jū-roku-zen-jin-sō-sōsu. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶善提院)

十六善神名號集

①(日)Jū-roku-zen-jin-myō-gō-shū. ②【參考】本朝台祖撰述密部書目

十六善神名相問答

①(日)Jū-roku-zen-jin-myō-gō-mon-dō. ②一册 ③存 ④(哲、こ、七右、二)

十六想觀雜記

①(日)Jū-roku-sō-kwan-zak-ki. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶善提院)

十六想觀讚

①(日)Jū-roku-sō-kwan-san. ②一卷 ④慶保胤(長徳三A.D. 997) ⑤【參考】東城傳燈目錄卷一

十六想觀詩

①(日)Jū-roku-sō-kwan-shū. ④空然 ⑤【參考】淨土依憑經論章疏目錄

十六尊讚

①(日)Jū-roku-son-san. ②一結 ③存 ④足利—徳川時代寫 ⑤(寶善提院)

十六講義出隨相論釋

①(日)Jū-roku-tai-gi-sōsu-zui-sō-ron-shaku(支)Shih-jin-ti-chi-u-sui-ji-siang-jun-shih. ②一卷 ⑤【參考】奈良朝現在一切經疏目錄2600

十六大阿羅漢因果識見頌

①(日)Jū-roku-dai-ra-kuan-in-gwa-shi=ki-ken-jū. (支)Shih-jin-ta-e-to-han-yin-kuo-shih-chien-sung. 十六大羅漢因果識見頌、十六阿羅漢因果識見頌、十六羅漢頌

頌、十六阿羅漢因果識見頌、十六羅漢頌 ②一卷 ③存、正續一・三・五 ④唐代闍那多迦譯 ⑤貞享元刊 ⑥(谷大、餘大・二二五九)龍大)

十六大阿羅漢福田宣耕記

①(日)Jū-roku-dai-ra-kuan-fuku-den-sen-to-ki. ②一卷 ③存 ④而山瑞方(天和三—明和六A.D. 1683—1769)述 ⑤享保二刊 ⑥東都具書院

十六大菩薩讚

①(日)Jū-roku-dai-ra-kuan-in-gwa-shiki-kanji. ②一册 ③存 ④延享四寫 ⑤(寶善提院)

十六大羅漢因果識見頌

①(日)Jū-roku-dai-ra-kuan-in-gwa-shiki-kanji(支)Shih-jin-ta-e-to-han-yin-kuo-shih-chien-sung. 十六大阿羅漢因果識見頌、十六阿羅漢因果識見頌、十六羅漢頌 ②一卷 ③存、正續一・三・五 ④唐代闍那多迦譯 ⑤本頌一卷は天竺沙門闍那多迦譯とあり、宋の范文公の序分に依れば、宋の仁宗の慶曆の初頃、知政事たりし時、保徳米谷の傳舎に寓宿せしに、堂簾幃の間に於て、之れを得たりしが、字體は古の隸書で書かれ、大藏經中に未だ録せざる珍勝なりとし、十六國の大阿羅漢が、摩拏羅多等の爲めに誦述したるもので、佛説因果識見悟本成佛大法の頌文であつた事を記してゐる。

十六羅漢に就いては、佛滅後、八百年中、師子國(錫蘭)の阿羅漢難陀密多羅の法住記に彼等の名字、住處等を詳しく出してゐるのであるが、本頌は十六羅漢の因果識見に關して頌文を出して説明せる所よりす

れば、當然法住記を豫想しての述作であり、その偽領は皆押韻にて語義亦頗る絶妙なる所よりすれば、恐くは唐代頃の述作であらんかと推せらる。十六羅漢などに就いては外人の論文もある。

今本頌の本綱に就いて、一言述べれば、摩察羅多が諸の尊者に尋ねて、何故に因果識見と名づくるやの答に、因とは因縁、果とは果報識、識とは自らの本心を識すること、見とは其の本心を見ることであると、若し因縁にして善有り、果報にして福有れば、自ら其の本心を識りて其の本心を見、萬法をして生ぜざらしめて當に成佛することを得べしと云つてゐる。其の十六羅漢とは、

- (一)跋羅跋闍尊者 Pindola-bharadvāja—賓度羅跋囉憍闍(法住記)。(二)迦諾迦伐陞尊者 Kanakavatsa—同名(同上)。(三)諸迦跋耆尊者 Kanakabharadvāja—迦諾迦跋耆(同上)。(四)蘇頻陀尊者 Savinda—同名(同上)。(五)諸矩羅尊者 Nakula—諸誼羅(同上)。(六)跋陀羅尊者 Bhadrā—跋陀羅(同上)。(七)迦哩尊者 Karika—迦哩(同上)。(八)非多羅尊者 Vajraputra—伐闍羅非多羅(同上)。(九)成博迦尊者 Svaka—同名(同上)。(十)半諾迦尊者 Pandhaka—半托迦(同上)。(十一)羅怛羅尊者 Rahula—同名(同上)。(十二)那伽那尊者 Nagasena—同名(同上)。(十三)因揭陀尊者 Ingata—同名(同上)。(十四)伐那婆斯 Vanavasin—同名(同上)。(十五)阿氏多尊者 Ajita—同名(同上)。(十六)法茶半託迦尊者 Cāḍāpanthaka (Sṅghaḍāpanthaka)—注茶半托迦(同上)。

右の十六名の大阿羅漢達が、摩察羅多の爲めに、佛の因果識見悟本成佛の大法を頌したのである。そして言ふには、吾等の頌した所の者は、皆佛世尊の全國にして叮嚀に衆聖を開悟して、證果成佛を體得せしめるの言葉である。されば汝等がよく恭敬奉持して衆生を度脱せしめて生死の大苦を免れしめなくてはいかぬと訓誡してゐる。法住記の項参照せよ。(成田昌信)

**十六題草稿** ①(日) Jū-roku-dai-gō ②存、七部雜纂之内 ③寫本(龍大、一〇三・四)

**十六題大旨** ①(日) Jū-roku-dai-dai-shi ②一卷 ③存 ④宗興述 ⑤明治八刊 ⑥龍大、一五〇二・一六一

**十六分等勸文要鈔** ①(日) Jū-roku-bun-bō-kyō-mon-yō-shō ②道範(元曆元—建長四 A. D. 1181—1232 一説建長四、年七五寂)

③諸宗章疏錄第三に曰く「十六事。青龍和尚教相。傳教大師受灌頂於弘法大師。」云々。

**十六無漏心經** ①(日) Jū-roku-muro-shin-kyō (支) Shih-jin-wu-lou-shin-king ②一卷 ③失譯 ④(參考) 法經錄第五、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第十一

**十六門記** ①(日) Jū-roku-mon-ki ②黑谷源空上人傳、黑谷上人傳、十六門記圓光大師傳 ③一卷 ④存、淨土宗全書第一七、法然上人全集、續群書類從第九 ⑤聖覺(仁安二—嘉祿元 A. D. 1167—1235)撰

①黑谷源空上人傳の下を見よ。 ②刊本(谷大宗洋・一八五)

**十六門記圓光大師傳** ①(日) Jū-roku-mon-ki-uen-kō-dai-shō-den ②黑谷源空上人傳、黑谷上人傳、十六門記圓光大師傳 ③一卷 ④存、淨土宗全書第一七、法然上人全集、續群書類從第九 ⑤聖覺(仁安二—嘉祿元 A. D. 1167—1235)撰 ⑥黑谷源空上人傳の下を見よ。 ⑦延寶五刊 (谷大宗大・一一三)

**十六問返破** ①(日) Jū-roku-mon-hōpa ②一卷 ③存 ④開隨述 ⑤寫本(龍大、一七五・四三)

**十六羅漢** ①(日) Jū-roku-ra-kan ②一卷 ③存 ④永井龍潤述 ⑤昭和七刊

⑥東京洗心書房

**十六羅漢講式** ①(日) Jū-roku-ra-kan-kō-shiki ②一卷 ③存、四座講式(大正八四・九〇 No. 273)之内 ④高辨(承安三—貞永元 A. D. 1173—1232 一説貞永元、年六一寂)撰 ⑤四座講式の下を見よ。 ⑥寫本(龍大、二〇七二・一〇)(谷大、餘大・二二三六)

**十六羅漢講式勸註** ①(日) Jū-roku-ra-kan-kō-shiki-kan-ochū ②一卷 ③存 ④永辨述 ⑤寛文元 (A. D. 1661) ⑥自筆本(高山寺)

**十六羅漢祭文** ①(日) Jū-roku-ra-kan-sai-mon ②慧日峰兆殿司感得十六羅漢祭文 ③一卷 ④存 ⑤寫本(谷大、餘大、三七〇九)

**十六羅漢頌** ①(日) Jū-roku-ra-kan

ju (支) Shih-jin-to-han-sung ②十六大羅漢因果識見頌、十六大阿羅漢因果識見頌、十六阿羅漢因果識見頌 ③一卷 ④存、記續一・三・五 ⑤唐代闍那多迦譯

**十六羅漢眞影縮圖** ①(日) Jū-roku-ra-kan-zu-shin-ei-shukū-zu ②一卷 ③存 ④渡邊祥鳳 ⑤明治二五刊(帝國、四〇二・四五)明治三五刊(帝國、八三・一九〇)

**十六羅漢圖讚** ①(日) Jū-roku-ra-kan-zu-san (支) Shih-jin-to-han-tu-tsan ②一卷 ③存 ④光緒三刊 ⑤(谷大、餘大・三七八三)

**十六羅漢傳** ①(日) Jū-roku-ra-kan-den ②一卷 ③存 ④聰悟述 ⑤安政二(A. D. 1855) ⑥寫本(谷大、餘大・三一一四)

**十六羅漢法話** ①(日) Jū-roku-ra-kan-hō-wa ②阿彌陀經十六羅漢法話 ③一卷 ④存 ⑤祐正(文政二—明治一 A. D. 1819—1878)述 ⑥明治四〇刊 ⑦(谷大、宗洋・二四六)

**十論依義立名** ①(日) Jū-ron-i-gi-ryū-myō (支) Shih-tun-i-ti-ming ②一卷 ③隋信行(大統七一—開皇一四 A. D. 541—594)撰 ④疑偽經 ⑤(參考) 開元錄第一八

**十論師及玄并往還銘集** ①(日) Jū-ron-shi-oyobi-gen-yō-ō-gen-shō-shū ②十論師及玄并往還銘集 ③一卷 ④最澄(神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—832) ⑤(參考) 本朝台祖撰述密部書目

**十論師及玄并往還銘集** ①(日) Jū-ron-shi-oyobi-gen-yō-ō-gen-shō-shū ②十論師及玄并往還銘集 ③一卷 ④最澄(神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—832) ⑤(參考) 本朝台祖撰述密部書目

ron-shi-oyohi-gen-to-ō-gem-mei-shu.  
十論師及支那往還鈔集 ②一巻 ①最澄  
(神護景雲元一弘仁一三 A. D. 767—822)  
⑦(参考) 本朝台祖撰述密部書目

十論略抄 ①(日)Jū-ron-ryaku-shō.  
(支)Shih-lun-jiao-ch'ao. ②一巻 ①疑偽  
經 ⑦(参考) 開元錄第一八

什慶記 ①(日)Jū-ket-ki. ②三册 ③  
存 ④(哲、や・七・左・三)

什師略傳記 ①(日)Jū-shi-ryaku-  
den-ki. ②二巻 ③存 ④日達述 ⑤安政  
五刊(正大、一〇三七・三一)明治一八刊(立  
大、A. O. 八・五六—一五七)

什法師付法 ①(日)Jū-hos-shi-fū-  
hō. (支)Shih-fa-shih-fa-fa. ②一巻 ⑦  
(参考) 傳教大師將來越州錄

什門三字經 ①(日)Jū-mon-sa-jū-  
kyō. ②一巻 ③存 ④山中良藏 ⑤明治  
一八刊 ⑥(谷大、餘大・三二七九)

什門二關又九雜記 ①(日)Jū-mon  
ni-kwan-su-ru-zak-ki. ②一巻 ③存  
④寫本(立大、D. O. 二二二)

什門論義一正疏 ①(日)Jū-mon-  
ron-gi-is-shō-shō. ②二巻 ③存 ④寫本  
(立大、D. O. 二〇二)原本(身延山)

充治園全集 ①(日)Jū-go-on-zen-  
shū. ⑤五巻 ③存 ④日輝(寛政一一一  
安政六 A. D. 1800—1839) ⑤蕤海編 ⑥大正  
一一・一三刊 ⑦東京池上充治園出版會

充治園の靈影 ①(日)Jū-go-on-ri-  
ō. ②一册 ③存 ④日輝(寛政一一一安政六 A. D. 1800  
—1839) ⑤寫本(立大、D. O. 二二二)

住持籍 ①(日)Jū-ji-seki. ③存  
史籍集覽第二六册五山記考異之内 ④錄  
倉五山記考異(附)住持籍解説の項下参照せ  
よ。

住職御禮留記事 ①(日)Jū-shoku-  
ōrei-dome-ki-ji. ②六帖 ③存 ④徳川  
時代寫 ⑤(寶龜院)

住職試験五論題講解 ①(日)Jū-  
shoku-shi-ken-go-ron-dai-kō-ge. ②一  
巻 ③存 ④堀江慶了(一明治二九 A. D.  
1896)述 ⑤明治一〇寫 ⑥(谷大)

住職試験論題講述 ①(日)Jū-shō-  
ku-shi-ken-ron-dai-kō-jutsu. ②一巻 ③  
存 ④堀江慶了(一明治二九 A. D. 1896)述  
⑤明治八寫 ⑥(谷大)

住心決疑抄 ①(日)Jū-shin-ketsu-  
shō. ②一巻 ③存、大正七七・五一  
No. 2437 ④信證(應徳三—康治元 A. D.  
1086—1142)述 ⑤弘法大師所立の十住心の判に於て、第八

一1859)撰 ⑥明治四二刊 ⑦(高大、一・二  
六)  
充治園禮誦儀記 ①(日)Jū-go-on-  
ritsu-gi-ki. ②一巻 ③存 ④日輝(寛  
政一一一安政六 A. D. 1800—1839)述 ⑦  
(参考) 法華宗門著述目録 ⑧明治三刊  
⑨(龍大、二六九九・一二)(京大、日大未、五  
八九)(立大、A. O. 八・三一九八三)(哲、え・  
三・右・二八)(高大、寄、一・一七)

住山校合掟 ①(日)Jū-zan-kyō-gō-  
okite. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤  
(寶龜院)

住持籍 ①(日)Jū-ji-seki. ③存  
史籍集覽第二六册五山記考異之内 ④錄  
倉五山記考異(附)住持籍解説の項下参照せ  
よ。

住職御禮留記事 ①(日)Jū-shoku-  
ōrei-dome-ki-ji. ②六帖 ③存 ④徳川  
時代寫 ⑤(寶龜院)

住職試験五論題講解 ①(日)Jū-  
shoku-shi-ken-go-ron-dai-kō-ge. ②一  
巻 ③存 ④堀江慶了(一明治二九 A. D.  
1896)述 ⑤明治一〇寫 ⑥(谷大)

住職試験論題講述 ①(日)Jū-shō-  
ku-shi-ken-ron-dai-kō-jutsu. ②一巻 ③  
存 ④堀江慶了(一明治二九 A. D. 1896)述  
⑤明治八寫 ⑥(谷大)

住心決疑抄 ①(日)Jū-shin-ketsu-  
shō. ②一巻 ③存、大正七七・五一  
No. 2437 ④信證(應徳三—康治元 A. D.  
1086—1142)述 ⑤弘法大師所立の十住心の判に於て、第八

住心品疏玉振鈔 ①(日)Jū-shim-  
hon-shō-gyoku-shū-shō. 大日經住心品疏  
玉振鈔 ②十册 ③存 ④法住(享保八—  
寛政一一 A. D. 1723—1800) ⑤(哲、お・  
四・丁・八)

住心品疏開書 ①(日)Jū-shim-bon  
ho-ki-i-gaki. 大日經住心品疏開書 ②  
一帖 ③存 ④密乘 ⑤徳川時代寫 ⑥  
(寶龜院)

住心品疏冠解 ①(日)Jū-shim-bon  
shō-kwan-ge. 大日經住心品疏冠解 ②九  
册 ③存 ④妙極述 ⑤元祿一五刊 ⑥  
(高大、一・三四)

住心品疏冠註 ①(日)Jū-shim-bon  
shō-kwan-cha. ②九巻 ③覺眼(寛永一  
〇—享保一〇 A. D. 1643—1725)述 ⑦  
(参考) 諸宗章疏錄第三

住心品疏冠註玄談 ①(日)Jū-shi-  
m-bon-shō-kwan-cha-gen-dan. 大日經住  
心品疏冠註玄談 ②一册 ③存 ④(哲、  
お・五・中・一)

住心品疏懸談 ①(日)Jū-shim-bon  
shō-ken-dan. 大日經住心品疏懸談 ②一  
册 ③存 ④寫本(哲、お・七・中・一一)

住心品疏私記 ①(日)Jū-shim-bon  
shō-shi-ki. 大日經住心品疏私記 ②二十  
册 ③存 ④曇寂(延寶二—寛保二 A. D.  
1674—1742)述、道空(寛文六—寶曆元 A.  
D. 1666—1751)刪訂 ⑤寫本(京坂)

住心品疏試講 ①(日)Jū-shim-bon  
shō-shi-ki. 大日經住心品疏試講 ②二十  
册 ③存 ④寫本(京坂)

住心品疏 ①(日)Jū-shim-bon-shō.  
大日經住心品疏 ②五册 ③存 ④刊本

住心品私記 ①(日)Jū-shim-bon-  
shō-shi-ki. ②二巻 ③最澄(神護景雲元—弘  
仁一三 A. D. 767—822)述 ④(参考) 密  
乘撰述目録、本朝台祖撰述密部書目、山家  
祖德撰述篇目集卷上

住心品疏 ①(日)Jū-shim-bon-shō.  
大日經住心品疏 ②五册 ③存 ④刊本

住心品私記 ①(日)Jū-shim-bon-  
shō-shi-ki. ②二巻 ③最澄(神護景雲元—弘  
仁一三 A. D. 767—822)述 ④(参考) 密  
乘撰述目録、本朝台祖撰述密部書目、山家  
祖德撰述篇目集卷上

住心品疏 ①(日)Jū-shim-bon-shō.  
大日經住心品疏 ②五册 ③存 ④刊本

住心品私記 ①(日)Jū-shim-bon-  
shō-shi-ki. ②二巻 ③最澄(神護景雲元—弘  
仁一三 A. D. 767—822)述 ④(参考) 密  
乘撰述目録、本朝台祖撰述密部書目、山家  
祖德撰述篇目集卷上

住心品疏 ①(日)Jū-shim-bon-shō.  
大日經住心品疏 ②五册 ③存 ④刊本

住心品私記 ①(日)Jū-shim-bon-  
shō-shi-ki. ②二巻 ③最澄(神護景雲元—弘  
仁一三 A. D. 767—822)述 ④(参考) 密  
乘撰述目録、本朝台祖撰述密部書目、山家  
祖德撰述篇目集卷上

住心品疏 ①(日)Jū-shim-bon-shō.  
大日經住心品疏 ②五册 ③存 ④刊本

住心品私記 ①(日)Jū-shim-bon-  
shō-shi-ki. ②二巻 ③最澄(神護景雲元—弘  
仁一三 A. D. 767—822)述 ④(参考) 密  
乘撰述目録、本朝台祖撰述密部書目、山家  
祖德撰述篇目集卷上

住心品疏 ①(日)Jū-shim-bon-shō.  
大日經住心品疏 ②五册 ③存 ④刊本

住心品私記 ①(日)Jū-shim-bon-  
shō-shi-ki. ②二巻 ③最澄(神護景雲元—弘  
仁一三 A. D. 767—822)述 ④(参考) 密  
乘撰述目録、本朝台祖撰述密部書目、山家  
祖德撰述篇目集卷上

住心品疏 ①(日)Jū-shim-bon-shō.  
大日經住心品疏 ②五册 ③存 ④刊本

住心品私記 ①(日)Jū-shim-bon-  
shō-shi-ki. ②二巻 ③最澄(神護景雲元—弘  
仁一三 A. D. 767—822)述 ④(参考) 密  
乘撰述目録、本朝台祖撰述密部書目、山家  
祖德撰述篇目集卷上

住心品疏 ①(日)Jū-shim-bon-shō.  
大日經住心品疏 ②五册 ③存 ④刊本



五卷 ⑤存 ⑥良恭(—安永六 A.D. 1777  
一)述 ⑦安永六寫 ⑧(正大、一六二・八  
三)

**住心品疏拾義鈔**

①(日) [Ja-shim-  
bon-sho-shū-ri-shū. 大日經住心品疏拾義  
鈔 ②十卷 ③存 ④覺眼(寛永二〇一)享  
保一〇 A.D. 1643—1725)述 ⑤(参考)  
眞言宗全書刊行豫定目錄

**住心品疏專心鈔**

①(日) [Ja-shim-  
bon-sho-sen-shin-shō. 大日經住心品疏專  
心鈔 ②十卷 ③存 ④寶曆二寫(正大、一  
一六二・六七)寫本九册(哲、お・五・中・二)寫  
本六卷(正大、一六二・六六)

**住心品疏分科**

①(日) [Ja-shim-bon-  
sho-bun-kwa. 大日經住心品疏分科  
一帖 ⑤存 ⑥徳川時代寫 ⑦(寶龜院)  
**住心品大意事** ①(日) [Ja-shim-bon-  
tai-ri-to-koto. 大日經住心品大意事 ②一  
帖 ⑤存 ⑥徳川時代寫 ⑦(寶龜院)

**住心品味唱帳**

①(日) [Ja-shim-bon-  
mi-so-cho. 大日經住心品味唱帳 ②一册  
⑤存 ⑥密釋述 ⑦寫本(高大寄、一・三  
四)

**住心品要解**

①(日) [Ja-shim-bon-yo-  
ge. 科註住心品要解 ②七册 ③存 ④惠  
照(—延寶頃 A.D. 1673—1680—)述 ⑤  
元和三刊 ⑥(高大、一・三四)(哲、お・三  
左・一)

**住心品疏略解**

①(日) [Ja-shim-bon-  
sho-ryaku-ge. 冠註住心品疏略解 ②九卷  
③存 ④淨嚴(寛永一六一—元祿一五 A.D.  
1639—1702)述 ⑤元祿一五刊 ⑥(京專)

**住心論覺心鈔**

①(日) [Ja-shin-ron-  
kaku-shin-shō. ②三帖 ③道範(元曆元  
—建長四 A.D. 1184—1252)—說建長四、年  
七五叙)述 ④(参考) 諸宗章疏錄第三

**住心論勸文**

①(日) [Ja-shin-ron-  
kan-mon. ③道範(元曆元—建長四 A.D.  
1184—1252)—說建長四、年七五叙)述  
④(参考) 諸宗章疏錄第三

**住心論廣名目**

①(日) [Ja-shin-ron-  
ko-myō-moku. 十住心論廣名目、十住心廣  
名目 ②六卷 ③存 ④印融(永享七—永  
正一六 A.D. 1435—1519)述 ⑤十住心論廣  
名目の下を見よ。 ⑥(参考) 諸宗章疏錄  
第三

**住心論疏略解**

①(日) [Ja-shin-ron-  
sho-ryaku-ge. 十住心論疏略解 ②七册  
③存 ④(京專)

**住心論抄**

①(日) [Ja-shin-ron-shō.  
十住心論抄 ②三卷 ③存、大正七・六  
四八 No. 2442 ④重譽(—康治一 A.D.  
1142—)述 ⑤十住心論抄の下を見よ。

**住心論他緣鈔**

①(日) [Ja-shin-ron-  
ta-en-shō. ②三帖 ③道範(元曆元—建  
長四 A.D. 1184—1252)—說建長四、年七五  
叙) ④(参考) 諸宗章疏錄第三

**住心論第九卷義批**

①(日) [Ja-shin-  
ron-dai-ku-kwan-gi-hi. ②七卷 ③凝  
然(仁治元—元亨元 A.D. 1240—1321)撰  
④十住心論義批の下を見よ。 ⑤(参考)

**住心論第五卷義批**

①(日) [Ja-shin-  
ron-dai-go-kwan-gi-hi. ②七卷 ③凝  
然(仁治元—元亨元 A.D. 1240—1321)撰  
④諸宗章疏錄第二下目、「第五卷義批後記  
云。予昔弘長季曆至元永四年、首尾五年。  
隨遂木幡廻心上人。學眞言教。不棄寸  
陰。於十住心論研精瑩練。其後四十餘  
回。久積星霜。今至衰老。消文陳義。  
但恥斐然狂簡再值孔丘之責。陋焉短章  
汚佛海之澄而已」云々。

**住心論第四卷義批**

①(日) [Ja-shin-  
ron-dai-shi-kwan-gi-hi. ②九卷 ③凝  
然(仁治元—元亨元 A.D. 1240—1321)撰  
④十住心論義批の下を見よ。 ⑤(参考)  
諸宗章疏錄第二

**住心論第六卷義批**

①(日) [Ja-shin-  
ron-dai-rok-kwan-gi-hi. ②十三卷 ③  
凝然(仁治元—元亨元 A.D. 1240—1321)  
撰 ④十住心論義批の下を見よ。 ⑤(參  
考) 諸宗章疏錄第二

**住心論第六卷新玄鈔**

①(日) [Ja-  
shin-ron-dai-rok-kwan-shin-gen-shō. ②  
二卷 ③缺 ④凝然(仁治元—元亨元 A.D.  
1240—1321)撰  
⑤諸宗章疏錄第二に住心論第四、五、六、  
九卷及び第六卷新玄鈔を列舉して新玄鈔の  
下に細注して曰く「按。此中第九卷義批。

**住僧清範**

①(日) [Ja-sō-sei-han. 日  
本諸寺住僧清範 ②一卷 ③存 ④上田照  
通(文政一一—明治四〇 A.D. 1828—1907)  
記 ⑤明治二九刊 ⑥(谷大、餘洋・二六〇)  
(京專)

**住法經**

①(日) [Ja-hō-kyō. (支) Chu  
-fa-ching. (日) A. X. 63 Thitt. ③存、中  
阿合經第二三(大正一・五七七 No. 26, 95)

**住蓮と安樂**

①(日) [Ja-ren-to-an-  
ran. ②一卷 ③存 ④佐和圓眞著 ⑤大  
正四刊 ⑥滋賀法藏寺

**重位祕密灌頂加行等日記**

①(日) [Ja-i-himitsu-kwan-jō-ke-gyō-  
jō-ni-ki. ②一軸 ③存 ④足利中期寫 ⑤  
(金剛三昧院)

**重刊貞和類聚祖苑聯芳集**

①(日) [Ja-kan-jō-wa-rui-jū-jō-on-ten-hō-  
shū. ②十卷 ③存、大日本佛教全書第一  
四三

④本書は、五山詩僧中の俊英たる空華道人  
義堂周信禪師が、諸祖の偈頌を蒐録したも  
のである。義堂の空華集卷十八題跋に收め  
られた永和元年(A.D. 1375)夏の首の撰で  
ある「書新刊貞和集後」並に本書の卷末に收  
められた嘉慶二年(A.D. 1388)三月十四日  
の撰である。本書の題跋に依つて、本書刊  
行の緣由を見るに、初め義堂和尚は、貞和  
年間(京都嵯峨の靈龜山天龍寺)に在つて、  
童蒙の求めに應じ、宋元二代の耆宿の五言  
七言の絶句數千首を選取し、後これを編定



名所行發⑩ (名庫書) 活蔵所現⑪ 月年の刊寫⑫ (書考堂書標註) 書⑬ 説解卷内⑭ 代年作著⑮ 著者⑯ 缺存⑰ 數卷⑱ (名書) 名題⑲ 號略字數

して三巻と成し、一千五百首を収め、貞和集と題して、向陽谷に命じて楷書せしめ、鏡梓流通せしめんとしたが、延文三年(A. D. 1538)に其の稿を燬いた。然るに利を襲ぐ俗士が、刪定前の原稿を窃寫して貞和集を刊行したが、錯誤極めて多きを以て、校讎を加へ重刊せんと志し、未だ果さざるに、興國室翁の命を承けて、永和元年初夏、編を整理し、疑はしきものには朱點を加へ、更に從來に加へなかつた眞淨克文禪師以下尊宿の五七言八句を採つて三千首を補入し「重編貞和類聚祖苑聯芳集」と題し、嘉慶二年三月十四日自跋して上梓流通せしめたものである。重刊貞和集十卷は即ち是れである。義堂は、同年(A. D. 1386)四月四日、壽六十四、臘五十にして示寂したのであるから、本書の跋に「余是時老病相凌。命在呼吸」とある如きは、死に至るまで禪坐諷誦を缺かざりし義堂和尚の風格を偲ばしめるものである。

新撰貞和分類古今尊宿偈頌集と題するものは、所謂新撰貞和集三巻の初刻本で、三巻五册又は三巻六册の五山版であり、佛教全書一四三册にも収められて居る。重刊貞和集は、鼓叔守仙和尚が書入した十巻五册の嘉慶二年刊記の五山版、三册本の五山版、寛永九年の十册本慶安五年の五册本等が現存し、一端中曼和尚が貞和集抄を撰したと傳へられて居り、印成和尚の聯芳集抄六册(一册缺)の寫本が在る。(禪籍目錄參照)本書、項目を分つこと六十五、其の内容を示せば左の如くである。

- 【卷一】(一)頌古百首。(二)經教四十一首。(三)語錄題跋附三十六首。(四)禮塔八九首。(五)造塔舍利附二十二首。【卷二】(六)讚二百六十二首。【卷三】(七)天文二十八首。(八)節序七十八首。(九)時事八首。(一〇)地理二十五首。(一一)靈跡三十九首。(一二)寺觀二十首。(一三)居處百二十七首。(一四)田地十三首。(一五)接待九首。【卷四】(一六)帝王十首。(一七)宰臣儒士附五十一首。(一八)慶賀十三首。(一九)道士七首。(二〇)父母三十二首。(二一)伎藝七十一首。(二二)住院五十六首。(二三)示衆十首。(二四)退院十七首。(二五)辭免二十五首。【卷五】(二六)頭首六十九首。(二七)侍者二十四首。(二八)知事二十二首。(二九)化士十一首。(三〇)沙彌童子尼女附十六首。(三一)師弟二十六首。(三二)法眷二十首。(三三)悟道七首。(三四)道號百一首。【卷六】(三五)送行二百四首。(三六)禮請十六首。(三七)行旅二十二首。(三八)遊覽十首。【卷七】(三九)簡寄九十七首。(四〇)酬答七十三首。(四一)懷友十四首。(四二)招友十八首。(四三)尋訪十七首。(四四)會合十首。(四五)離別十二首。(四六)留人七首。(四七)住庵九首。(四八)山居二十二首。(四九)紀夢四首。【卷八】(五〇)道具三十首。(五一)法器二十首。(五二)衣服三十首。(五三)器用樂器附九十一首。(五四)文用二十七首。(五五)食物藥物附九十三首。(五六)茶陽二十七首。(五七)燈燭炭附三十七首。(五八)沐浴四首。【卷九】(五九)圖畫百七十二首。(六〇)飛走六十二首。(六一)草木百十五首。【卷十】(六二)法數八十一首。(六三)疾病十八首。(六四)哀悼百二十三首。(六五)雜類

四十九首 以上 (大久保堅瑞) 重刊瑞應集錄 ①(日)Jū-kan-sū-to jū-toku. (支)Chung-kan-jū-ying-chi-lu. ②一册 ③存 ④妙然集 ⑤刊本 (谷大、餘大、四四三五)

重誨冥懲鈔 ①(日)Jū-kei-ai-nin-shō. ②一卷 ③存 ④荒木了隆述 ⑤專念の欣淨妙術を破したるもの。 ⑥寫本 (龍大、一七九九・二〇)

重幸由來傳記 ①(日)Jū-ko-yū-ai-den-ki. ②一卷 ③存 ④安政七寫 (龍大、別置)

重興南都大佛殿讚頌集 ①(日)Jū-kei-nan-to-dai-butsu-den-san-jū-shū. ②四卷 ③存、大日本佛教全書東大寺叢書第二 ④紹榮(元祿元A. D. 1688)等集 ⑤元祿元(A. D. 1688)

①永祿十年十月、三好、松永の兵火に遭つて大佛殿炎上し、寶構は化して草莽の廢墟となり、大佛は風雨に曝されて露座し給ふに至る。爾來、年を経る事百二十餘年、元祿元年に及んで、龍松院の公慶上人(慶安元一寶永二A. D. 1688-1705)大佛殿再建の大願を起し勅によりにその財を天下に勸請し、三月八日より四月八日迄、大佛開眼供養を執行(『大佛開眼供養記』及び『大佛開眼供養並萬僧供養之記』參照)又、四月二日より七日間、新始規式が行はれた。本書は此の間に於て諸方より寄せられた讚頌の詩文、賀狀等を輯録したもので、東大寺別當二品親王濟深及び東大寺華嚴長吏二月堂別當安井道恕の賀偈並序を始め百

六十有餘を集載してある。何れも公慶の功を讚し、再興の業を感嘆してある。本書四卷の内、一、二、四卷は紹榮、元嵩、宗智の謹録する所であるが各卷末に周賢の補遺があり、三の卷は補遺のみより成つてある。尙、卷頭の序は沙門性激の執筆にかゝる。(不破幹雄)

重治毘尼事義集要 ①(日)Jū-ji-bin-i-jū-gi-jū-yō. (支)Chuang-chi-pi-ni-shih-t-chi-yao. ②十七卷 ③存、正續六三・一一三 ④明智旭(萬曆二七—永曆九A. D. 1599-1635)撰

①本書は大小二律の中から四分律を宗とし併せて餘家の毘尼を採録したもの。凡例によるに律藏は煩複してゐて初學に領解し難い。故に今は初學のために義理を簡約し文字を節約して學律に容易ならしめたと。本書撰集の主意は、一には五分法身は戒を以つて依となし、三無漏學は戒を以つて首となす。一如來も戒體を具せないものはない。一菩薩も戒度を修さないものはない。一聖賢も戒行を嚴持しないものはない。持戒は大地の如くである。萬法は此れに由つて生成する。持戒は城廓の如くである。魔障は此れに遠離される。是の故に戒學を研習しなければならぬ。二には智旭が出家授戒の後戒を學び、戒に通じて愈々戒本戒經を簡約ならしむべきであり大小乗の戒が二つに分るべきでないこと知つた。此の故に集録した。三には唐宋以來、律寺、講寺、禪寺が各獨立し、講禪兩寺では戒を輕んじ受持

病十八首。(六四)哀悼百二十三首。(六五)雜類

が不如法となつた。この故に本書を撰した。四には律は元來居士の譏嫌に因つて制定されたものだ。支那では戒行を遵奉しなくも居士が未だ必しも譏嫌しないから持犯などを嚴訓するには及ばない等と主張し、戒學が亂れ衰へたから戒學興隆のために撰集した等。内外の因縁によつて本書を撰したものである。故に本書は戒學の形式は四分により、四分は懷素の精神を取り、五分十誦並に菩薩戒を採り、戒學の教理は天台の戒疏により、時代に適應するように戒學を組織し、これに依つて一般に普及せしめ律寺ばかりに限らず教寺、禪寺皆悉く戒を奉ぜしめようと念じて撰したものである。特に禪寺に對する態度には頗る強い力が注がれてゐる。本書は卷首に序文三種を跋文一種と目次とを收め、卷一乃至十までは四分戒本を、卷十一には總辨羯磨法、結界法、授戒法を、卷十二には依止法、師法、弟子事師法、上座法、同學法、禮敬法、孝父母法、安居法、自恣法、迦絺那衣法を、卷十三には治罪法を、卷十四には衣法、鉢法、食法、藥法、受食法、看病法、房舍法、臥具法、器物法、杖法、叢林法を、卷十五には阿闍若法、大衆會法、分物法、說法法、讀誦法、坐禪法、雜法、佛說犯戒輕重經、戒相攝頌を、卷十六、十七には比丘尼戒を收め、最後に跋語を附す。(田島德音)

**重釋安養顯正記** ①(日)U-shaku-an-yo-ken-sho-ki. ②二卷 ③存 ④性心(弘安一〇—延文二 A. D. 1287—1357)述 ⑤寫本(觀智院)

**重受次第** ①(日)U-ji-shi-dai. 重受灌頂作法 ②一葉 ③存 ④(金剛三昧院) **重修人天眼目集** ①(日)U-shu-nin-den-gan-moku-shu. ②三卷 ③存 ④智照集 ⑤寬永一二刊 ⑥(帝國二二〇二二二)

**重集大乘血脈圖** ①(日)U-ji-dai-jo-kechi-myaku-zu. (支) Chung-chi-ta-oheng-hsieh-mo-tu. ②一卷 ③宣陽 ④(參考) 智證大師請來目錄 **重書** ①(日)U-sho. ②六卷 ③辨阿(長寬元—嘉禎四 A. D. 1163—1238) ④(參考) 淨土正依經論書籍目錄 **重書裏書** ①(日)U-sho-ura-gaki. ②良曉(建長三—嘉熙三 A. D. 1251—1328) ③(參考) 淨土正依經論書籍目錄 **重書相傳** ①(日)U-sho-goden. ②一册 ③存 ④寫本(寶菩提院) **重書無題鈔** ①(日)U-sho-mu-dai-sho. ②一卷 ③存、淨土宗全書第一〇 ④本書は作者不明の淨土宗要集(西宗要)の末疏にして、元内題を缺き外題を移して名付けし西宗要の要項に就いて加釋し秘傳相承されしもの様である。

眺め、尙ほ論加すべきものを釋せるものとすべきである。(森本貞順)

**重諸尊法** ①(日)U-sho-so-m-ho. ②五十六帖 ③存 ④親快(建保三—建治二 A. D. 1215—1276)撰 ⑤寫本(高大、寄二、六六)

**重正五講式** ①(日)U-sha-go-ko-shiki. ②一卷 ③存 ④明和四刊 ⑤(龍大二〇七二・九)

**重續日域洞上諸祖傳** ①(日)U-zoku-nichi-eki-do-jo-sho-so-den. ②四卷 ③存、大日本佛教全書第一一〇 ④良機 ⑤享保二(A. D. 1717) ⑥日本曹洞宗に列傳體の大部の歴史が刊行されたのは、日域洞上諸祖傳を以て嚆矢とする。元祿六年(A. D. 1693)堪元自澄の爲す所である。U. J. 寶永五年(A. D. 1708)西來良高が、續日域洞上諸祖傳を著して、前者に漏れたる八十餘人を傳した。良高は更に尙ほ脱漏するものあるを遺憾とし、蒐集専ら努めたが、未だその業を了せずして去つた。弟子良機は頗るこれを惜み、自ら業を繼いで享保二年、終に刊行を見るに至つたのが、この重續洞上諸祖傳である。傳する所九十餘人。(山田靈林)

**重訂西方公據** ①(日)U-tei-sai-ho-ko-kyo. (支) Chung-ting-tai-fang-kuang-chu. 西方公據 ②二卷 ③存、(續二・一四・四) ④清彭際濟(—乾隆四〇 A. D. 1775)集 ⑤西方公據の下を見よ。

**重訂二課合解** ①(日)U-tei-ni-kuwa-go-ge. (支) Chung-ting-eh-k'o-ho-chi-shi. ②七卷 ③存 ④民國親月 ⑤民國一刊 ⑥(谷大、餘大・四四二九)

**重天花水供** ①(日)U-ten-ga-sui-ki. ②一包 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

**重天諸法** ①(日)U-ten-sho-ho. ②一括 ③存 ④足利—徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

**重編諸天傳** ①(日)U-hen-sho-ten-den. (支) Chung-pien-tien-tien-chuan. ②二卷 ③存、(續二・二・三・二) ④宋行靈述 ⑤本書は宋行靈の述する所の諸天傳集である。抑々諸天とは隱實施權の天神を云ひ、國民を保衛し至教を輔翼するを任務とするもので、天台百餘光明鬼神品によりて其の列位を詳にせるが、慈雲懺供を製してより紛紜の論當時に喧ひすしく、始め彰南煥師天傳を集めしも、天位を列するに尊卑の位を失し、昭穆の儀を闕きしが故に、今行靈大藏を検して諸天列傳を作り、以て諸天排列の位次を明し、紛紜の俗論を拈定して煥師天傳の闕漏誤謬を是正したもので、宋乾道九年刊行世に公にしたものである。重なる項目左の如し。

〔卷上〕(一)息縁別位次之諱。(二)大梵天王傳。(三)帝釋天王傳。(四)天王總傳。(五)北方天王傳。(六)東方天王傳。(七)南方天王傳。(八)西方天王傳。(九)金剛密迹傳。(十)摩醯首天傳。(十一)散脂大將傳。〔卷下〕(十二)大辯天傳。(十三)功德天傳。(十四)草天將軍傳。(十五)堅牢地神傳。(十六)菩提樹神傳。

名所行發⑩(名家書)著題所現⑪ 月年の刊載⑫(書考參書釋註)書末⑬ 誤解存内⑭ 代年作者⑮ 著者⑯ 缺存⑰ 數卷⑱(名書)名題⑲ 號略字數

〔七〕鬼子母天傳。〔八〕摩利支天傳。〔九〕日宮天子傳。〔一〇〕月宮天子傳。〔一一〕娑竭龍王傳。〔一二〕閻魔羅王傳。〔一三〕傳後續編

(紀氏隆貞)

重編天台諸文類集

①(日)Jū-hen-ten-dai-shō-mon-ri-shū. (支) Chūng-pien-tien-tai-chū-wen-tei-chi. ②卷一〇

③存、④記續二・六・二

⑤宋代如吉編

⑥本書は山家智徳の孫弟宋の如吉の編する所で、天台經疏の諸文を類集したもので、第十卷のみ現存して大日本續藏經に編輯されてゐる所である。即ち「諸文習氣類」の項下に四十三文を掲載してゐる。(紀氏隆貞)

重辨稿

①(日)Jū-ben-kō. ②一卷

重離墨變決

①(日)Jū-ri-jo-hen-keitsu. ②一卷

③存、④南英謙宗(嘉慶元一寛正元 A. D. 1387—1460) ⑤貞享三

刊(駒大)寫本(龍大、二六七二・四三)

重離墨變秘訣

①(日)Jū-ri-jo-hen-ki-keitsu. ②一卷

③存、④無着道忠(承應二—延享元 A. D. 1653—1744)述

重樓戒經

①(日)Jū-rō-kai-kyō. (支) Chūng-lou-chieh-ching. ②一卷

③存、④疑偽經 ⑤(參考) 開元錄第一八、貞元錄第二八

拾因記

①(日)Jū-in-ki. ②三卷

③了惠(寛元元—元徳二 A. D. 1343—1330)作

④(參考) 總淨土依憑章疏目錄

拾因見聞

①(日)Jū-in-ken-mon. ②一卷

③聖因(曆應四—應永二 A. D. 1341—1420) ④(參考) 淨土正依經論書籍目錄

拾帖御文之鈔 ①(日)Jū-jō-o-fumi-no-shō. ②存、蓮如上人全書之内

③本書、その内容を拾帖御文其一、其二の二部に分ち、拾帖御文其二には、越後高田本誓寺所傳實如上人集録の拾帖御文真本(中帖中後三卷缺)の中、帖内と坊本とに出

てたるものを省略して其他二十九通を順次に鈔録し、拾帖御文其二には南條博士所藏の十帖御文校本中、帖内帖外の刊本及び越後本誓寺所傳の真本に出でたるもの、み七十四通を鈔録してゐる。

從開山傳日順法門

①(日)Jū-kai-san-den-nichi-jū-hō-mon. ②一卷

③存、④日順撰 ⑤(參考) 大正新修大藏經刊行豫定目錄

從假入眞辨

①(日)Jū-ka-ni-shin-ben. ②一卷

③存、④衆鏝(享保一四—文化八 A. D. 1729—1811)述

⑤寫本(龍大、一五〇二・二二)

從俊圭法印授與目錄

①(日)Jū-shūn-kei-hō-in-jū-yō-moku-roku. ②一帖

③存、④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

從如上人御葬送記

①(日)Jū-nyō-shō-mai-go-ō-sō-ki. ②一卷

③存、④寫本(谷大、宗大、一八七四)

集一切福德三昧經

①(日)Jū-issai-fuku-to-ku-zan-mai-kyō. (支) Chi-ichihieh-fu-té-san-mei-ching. (梵) Sarva-puṇyasaṃcayasaṃvidhi (藏傳) (釋) Jijh-ag-s-pa bsod-nams thams-cad bsdu-s-pahi

②一經、③集三昧經一卷(缺)とがある。

④本經の異譯には竺法護譯(A. D. 206—313)の等集衆德三昧經三卷と西晉惠帝(A. D. 290—306)の時、帛(白)法祖が譯した等集三昧經一卷(缺)とがある。

⑤經の趣意は集一切福德三昧なるものを明すにあつて、佛に配するに那羅延菩薩と淨威力士等を以てしてゐる。第一卷は佛が毘舍離菴羅樹園に在せしとき、却後三月にして入涅槃すると豫言せられしを聞いて、那羅延が佛亡き後の心得を訊ねまつると、佛は集一切福德三昧を成就せよと教へられる。其處へ城内で大力無雙を誇る淨威力士が佛と力を角せんとやつて來たが、佛を見るや却つて其の威容に打たれて跪拜する。佛は淨威の心を察して、嘗て菩薩たりし時、人と角力して三千大千世界の下に射込んだ大金剛輪の箭を目連に抜いて持ち來らしむ。目連は此の力は神通力なりやを問へば、佛はそれは父母の生力で、神通力を以てすれば、無量の諸佛世界にも達すべく、更に如來の力を以てすれば、之に百千萬倍の威力を發揮すると説く。淨威は之を聞いて大いに驚き怖れ、三寶に歸依する。乃で那羅延が先に名字のみを聞いた集一切福德

三昧を問ふ。佛は人にして無上正眞道の心を發すれば皆此の三昧を得べく、菩薩が初發心中に入つてゐるのは恰も江河が海に歸入するが如くである。されば集一切福德を欲せば、無上正眞道の心を發せよと説かれる。淨威は之に相應する法を訊ね、佛は布施・持戒・多聞の三を修すべきことを教へられ、先づ布施に於ては身命をも施すべきを説かれる。第二卷に入ると、持戒の功德や多聞の効果が詳説される。多聞について一前生譚が挿話される。昔最勝仙人が多聞して正見を起さんとし、魔の言に従つて佛所説の一偈を記するために、皮を剥いで紙と爲し、血を以て墨と爲し、骨を折つて筆と爲したが、魔は其の法を求めると眞剣な態度に恐れて逃げ去つた。併し其の誠意によつて淨名王如來より集一切福德三昧を聞いた。其の時の最勝こそは我であると佛は仰せられる。斯くて淨威は無生法忍を得、佛より當來に嚴淨國土に莊嚴王佛たるべきを授記される。那羅延の質問に應じて淨威は佛法凡夫法の不二にして一切法の不可得なるを答へる。第三卷には文殊師利が登場して菩提の修行は福德・利養・名稱・生天・封邑・眷屬・自樂の爲めにせず、衆生のため、法のため、煩惱を斷ずるためにすべきことを述べる。次に離魔菩薩が出て眞諦第一義から一切の行、衆生行も魔行も畢竟菩薩行と説く。更に文殊と那羅延との間に集一切福德三昧を修するについて、佛法を持するは勿論、凡夫法も捨てざるべきことが話される。有漏無漏、有爲無爲、善不善、罪福皆

名所行發①(名庫書)高麗所現② 月年の刊寫③(書考參書釋註)書末④ 說解容内⑤ 代年作者⑥ 否著⑦ 缺存⑧ 數卷⑨(名書)名題⑩ 號略字數

法性に入るべければ、差別すべからざる旨が説かれる。斯くて那羅延が佛は實に百福徳の相を具せられると讃へ、大衆は同聲に此の集一切福徳三昧經を世に流布せんと誓ひ、阿難は此の經を持する者には佛涅槃せず、法も滅せず、此の經を開示する者は佛を見、正法を護るものと證する。

【参考】三寶紀第一三、法經錄第一、內典錄第六、武周錄第四、第一三、寛文一刊(黄葉)④(京大藏・一・九)

**集會規則** ①(日)Shin-ki-soku. ②存 ③(龍大、二〇九四・八)

**集會議事細則** ①(日)Shin-ki-soku. ②存 ③(龍大、二〇九四・八)

**集記** ①(日)Juk-ki. 集記石山流 ②八卷 ③存 ④正徳四寫 ⑤(谷大、餘大・一〇〇六)

**集記胎藏念誦次第** ①(日)Juk-ki-tai-zō-nen-jū-shū-dai. ②二卷 ③存 ④寫本(正大、一四八・八三)

**集記錄** ①(日)Juk-ki-roku. ②一巻 ③存 ④文政一一寫 ⑤(龍大、別置)

**集議制雜記** ①(日)Shū-gi-sai-zuk-ki. ②一卷 ③存 ④荒木良仙著 ⑤昭和四刊 ⑥奈良室生寺

**集願文** ①(日)Jū-gwan-mon. (支)Chū-yuan-wen. ②九卷 ③(参考) ④奈良朝現在一切經疏目錄3691

**集解** ①(日)Shū-ge. (支)Chū-chieh. 天台四教儀集解、四教儀集解 ②三卷 ③存、

己續三・七一 ④從義(元祐年間 A. D. 1086—1093)述 ⑤宋熙寧九(A. D. 1076)四教儀集解の下を見よ。 ⑥【参考】諸宗章疏錄第二

**集解大涅槃經記** ①(日)Jū-ge-dai-nepan-kyō-ki. (支)Chū-chieh-ta-nieh-p'an-king-chi. ②一卷 ③明駁 ④【参考】東域傳燈目錄卷上

**集解大涅槃經略例** ①(日)Jū-ge-dai-nepan-kyō-ryakurei. (支)Chū-chieh-ta-nieh-p'an-king-riao-li. ②一卷 ③【参考】東域傳燈目錄卷上

**集解要文** ①(日)Shū-ge-yō-mon. 天台四教儀集解要文、四教儀集解要文 ②存 ③正保二刊(龍大、二六五二・九二、研佛)寛文九刊(龍大、二六五二・九一)刊本(京專)

**集解要文追加** ①(日)Shū-ge-yō-mon-kūi-ka. ②四卷 ③存 ④明曆元刊(立大、A一・二・三三)明曆九刊(龍大、二六五二・九〇)

**集古今佛道論衡** ①(日)Jū-ko-kon-butsu-ō-ron-ko. (支)Chū-ku-chū-ō-fo-lun-heng. 集古今佛道論衡實錄、古今佛道論衡、古今佛道論、佛道論衡 ②四卷 ③存、大正五三・三六三No. 2104、縮露七、二二七、四、北1069疑、南1086疑、元1081疑、明北1464疑、清1525曲、麗1073星、天1069疑、指1028星、法1055疑、至1545横、明南146給、Nj. 1471 ④唐道宣(開皇一六一乾封) A. D. 596—667)撰

⑤道教の名の下に呼ばれるものに三種あり。

一には老子の無爲、二には神仙の餌服、三には張葛の符籙禁厭。この三種の道教は各々特質はあるが、三種截然區別されるのではない。中に就て、老莊の無爲は佛教一部の思想と甚だ相通するものがあり爲に屢々道佛同一論の根柢を興へた。然るに神仙張葛に至れば、老子に出づと稱せられるが、大いにその意に乖くのみならず、誣亂も甚しいものがある。然も尙、支那民族思想に深く根柢を置き、宗教的に組織せられたるが故に、亦佛教との間に屢々葛藤を惹き起した。而して魏晉時代に於ては佛道の關係する時、この三種道教は判然區別されず、少くとも張葛のものは其の前面には出ない。然もその論争は主として思想的同一論に終始した。然るに劉宋から南齊に掛けては、佛者は前代の同一論を斥け、この三種道教を截然區別し、老莊をば思想として佛教の連類として纒に認めるものがあるとしても、神仙張葛は天下の邪俗として排した。然も張葛の鬼道は、多くの黄書、紫録を作り、釋罪に度厄に、妄りに眞道と稱して愚民を惑はし、屢々政治に利用されて動亂の主となり、亦排佛の因を爲した。

本書に攝する資料は、二教の思想的論争と言はんより、寧ろ道教が、政治的に利用せられて、爲政者の廢佛の用に供せられたものを主とする。即ち卷甲、乙は隋以前、卷丙、丁は唐初に於けるもの。この中、卷甲、乙の大部分、即ちその最後の二篇、即ち隋のものを除けば、同じく本書の編者道宣の撰めた『廣弘明集』卷一より卷十四に至る歸心篇、辨惑篇中に既に收攝される資料であり、卷丙、丁は編者道宣が在世經驗した二教に關する資料であり、亦親らの記録でもある。

〔卷甲〕『漢法本内傳』以下その資料的價値に乏しいものもあるが其の中には曹子建や孫盛の論文も亦包攝せられて居る。即ち後漢以來、二教は或は法を角し、その優劣を論じ、又その先後を争つた。然れども固より佛教に一日の長がある。然も佛教は北魏の大武帝に廢された。所以は、司徒崔皓が、道士冠謙之を扶信し、左道を奉じてこれを政治的地位に利用した爲のみである。

〔卷乙〕北周武帝の佛法を廢滅せんとしたのも、道士張賓の言を用ひ、その邪妄を奉信したからである。この故に甄鸞は『笑道論』を、道安は『二教論』を作り、道教の邪妄を破した。武帝は『父母の恩重きに沙門は敬せず、勅逆の甚しき國法容れず』として僧尼を還俗せしめ、佛像を毀滅せんとし、惠遠がこれに抗拒した。亦周武が巡鄴に佛法を除殄せんとしたが、任道林が却つて開發せん事を上奏した。これら廢佛の始末の他に、本卷には逆に、隋文帝が佛法を奉信して老君の像を火焚した經緯等をも載せる。〔卷丙〕唐高祖武徳四年、太史令傅奕が道を重じ佛を忌み、佛法を廢するの事十一ヶ條を上り、法琳はこれに奉對した。奕はその奏する所が施行されないのを見、表狀を寫して公然遠近に流布した。これが爲法琳は『破邪論』を著した。更に高祖は國學に幸して三教を集め、老を先とし、孔を

【シ】

次とし、釋を後にせんとした。慧乘法師、爲に佛法を廣述し、亦法琳が『辨正論』を爲つた。これ等の葛藤の經緯以下、貞觀中に於ける道佛交渉に關するものを五項を載せる。就中、貞觀二十一年、文帝が、玄奘をして『老子道德經』を梵文に翻譯せしめんとした。然しながら老子の言は佛と連類となす事は出来るが、佛語を以てあらはす事の出来ない故を以て翻譯の事は止めた。【卷丁】道宣が所謂今上帝—高宗時代の記録にしてその中、特に擧ぐべきは、顯慶五年、僧靜泰と道士李榮の『老子化胡經』の問答がある。尙、卷丁續附として高宗龍朔元年に於ける記録であるがこれは原本に限り、宋元明三本には缺く。

右の如くして本書に収むる所の道佛關係資料は、古くは兩教の角法、近くは道教が當時の爲政者に重んじられて廢佛の因をなした經緯並に資料である。されどこれ等の外劉宋南齊時代の兩教の思想的に同一或は優劣の論がなされたそれ等は梁僧祐篇『弘明集』に収録せられるものが多い。然もそれ等は本書には一篇も載せられて居ない。目次左の如し。

【卷甲】

(一)後漢明帝感夢金人騰蘭人誦諸道士等請求角試事。(二)前魏時吳主崇重釋門爲佛立塔寺因問三教優劣事。魏陳思王曹子建辯道論、晉孫盛撰聖賢同軌老聃非大賢論、晉孫盛老子疑門反訊。(三)元魏君臨釋李雙信致有興廢故述其由事。(四)宋太宗文皇帝朝會群臣論佛理治致太平事。(五)魏明帝登極召

沙門道士對論叙佛道先後事。(六)梁高祖先事黃老後歸信佛下勅捨奉老子事。(七)北齊高祖文宣皇帝下勅廢道教事。

【卷乙】

(八)周高祖武帝將滅佛法有安法師上論事。(九)周武帝齊大集僧徒問以興廢慧遠法師抗詔事。(一〇)周高祖巡狩除珍佛法有僧徒道林上表請開法事。(一一)周天元皇帝納王明廣表開佛法事。(一二)隋文帝詔爲降州天火焚老君像事。(一三)隋兩帝重佛宗法俱受歸戒事。

【卷丙】

(一四)大唐高祖問僧形服有何利益法琳法師奉對事。(一五)高祖幸國學當集三教問僧道是佛師辯正論以抗事。(一六)太宗下勅道先佛後僧等上諫事。(一七)皇太子集三教學者諍論事。(一八)太子中含辛誥齊物論并淨瑠二法師抗拒事。(一九)太宗文皇帝問沙門法琳交報顯應事。(二〇)文帝幸弘福寺立願重施叙佛道先後事。(二一)太宗下勅以道士三皇經不足傳授令焚除事。(二二)文帝詔令英法師翻老子爲梵文事。

【卷丁】

(一)今上召佛道二宗人內詳述名理事。(二)上以西明寺成功德圓滿佛僧創入榮泰所期又召僧道士入內殿躬御論揚觀其義理事。(三)帝以冬旱內立齋祀召佛道二宗論議事。(四)上幸東都又召西京僧道士等往論事。(五)今上在東都有洛邑僧靜泰勸對道士李榮叙道事。(六)大慈恩寺沙門慧辯與道士對論。

(一)茅齋中興國學博士范贊談論。(二)寫本(京大・藏・一サ・一) (太田梯藏)

集古今佛道論衡實錄

①(日) In-ko-bun-shu-tō-ton-ko-jisū-toku.

②(支) Chin-ku-chin-to-tō-jun-jeng-shih-1. 集古今佛道論衡、古今佛道論、佛道論衡、古今佛道論、四卷、大正五

二、三六三No.2104、縮録七、二二七、四、北1069疑、南1086疑、元1081疑、明北1464

壁、清1225曲、麗1073星、天1069疑、指1028星、法1055疑、至1453横、明南1444

給、N.1471 唐道宣(開皇一六一—乾封二 A. D. 596—667)撰 寛永一五刊 ③(谷

大、餘丙・七) 集古雜篇 ④(日) In-ko-zan-pen.

⑤二卷 ⑥存、眞宗全書第五 ⑦惠空(正保元—享保六 A. D. 1641—1722)集 ⑧元祿一五(A. D. 1702)

⑨本書は室町末期(天正頃)より江戸初期(慶長、元和頃)に亘る、本願寺に關する史實の雜篇を集めたものであつて、これに三種の異本がある。

⑩次第編 二卷 本書は眞宗大谷派の初代講師光遠院惠空が元祿九年に撰するところであつて、次に記す集古雜篇の草稿本となつたものである。すなはち、本書の卷首題下に「此上下二卷甚タワロキ故ニ、後

ニ清書シテ集古雜篇ト名ク、彼ヲ正トスヘシ。此二卷ヲハ正トセス。此本者草本也、重テ再治スヘシ」といひ、下巻の卷尾には「右草篇、詞モ拙ク亂脱モ多シ、事ノ品モ略越シ、其ノ始終モ詳カナラス。只古記ニ誌ス所アルノミヲ拵ヒ集メ、次第ニ任テ一

所ニ寫スハカリ也。冥聞短識ニシテ百年ノ昔ヲ議スルコト尤モホケナク、人亦不可ニ信用、又有恐可慎。(中略)若又委ク舊記ヲ披見スルアラハ、斯編二卷ノ所集其事實タルコトヲ知ヌヘシ。」とあるによつて、本書の内容一斑を知るべきである。なほ本書は「大坂記」、「七條記」の二編に分れてゐる。【二】集古雜篇 二卷 本書は講師惠空が、さきに撰せし次第編を改修して、元祿十五年に撰述せしところである。本書上巻々尾には、「右所編ハ唯古記ノ所誌ヲ取集メ、依ニ次第ニ連續スル計ナリ。一事トシテ更ニ不レ加ニ才覺、事實ノ殘ル所アラハ後弟是ヲ加ヘヨ、今ノ所レ記タ

、見安キヤウニ思テ略スル事尤多シ」とあるが、大坂石山本願寺の建立より、東西本願寺の分立に至る間の史實、殊に天正年間における石山戦争と、慶長初年における東西分立の史實については、詳細に叙述せられ、ある。尙ほ本書執筆の參考書を擧ぐれば、如くである。光闡坊記、實倍記、信長記、太田別記、將軍家譜、武鑑、淺井記、朝倉記、加越記、後太平記、年代考、粟田記、道範由緒記、ト半家記、覺書、事書、表裏問答、金鑰記、七條鏡、顯如御書、教如御書、信玄狀、隆登狀、下間狀、總見記、木澤狀、明智記、細川記。【三】事書 一卷、本書も外題、内題共に集古雜篇とあり、安養寺某の選述するところと傳へてゐる。本書一部分の内容を見るに、主として東西分立の史實に關するものであり、殊に教如上人正統説を主張する邊より見れば、恐らく大谷派の學匠の手になるもので

集古今佛道論衡實錄 ①(日) In-ko-bun-shu-tō-ton-ko-jisū-toku. ②(支) Chin-ku-chin-to-tō-jun-jeng-shih-1. ③(谷大、餘丙・七) 集古雜篇 ④(日) In-ko-zan-pen. ⑤二卷 ⑥存、眞宗全書第五 ⑦惠空(正保元—享保六 A. D. 1641—1722)集 ⑧元祿一五(A. D. 1702) ⑨本書は室町末期(天正頃)より江戸初期(慶長、元和頃)に亘る、本願寺に關する史實の雜篇を集めたものであつて、これに三種の異本がある。 ⑩次第編 二卷 本書は眞宗大谷派の初代講師光遠院惠空が元祿九年に撰するところであつて、次に記す集古雜篇の草稿本となつたものである。すなはち、本書の卷首題下に「此上下二卷甚タワロキ故ニ、後ニ清書シテ集古雜篇ト名ク、彼ヲ正トスヘシ。此二卷ヲハ正トセス。此本者草本也、重テ再治スヘシ」といひ、下巻の卷尾には「右草篇、詞モ拙ク亂脱モ多シ、事ノ品モ略越シ、其ノ始終モ詳カナラス。只古記ニ誌ス所アルノミヲ拵ヒ集メ、次第ニ任テ一所ニ寫スハカリ也。冥聞短識ニシテ百年ノ

昔ヲ議スルコト尤モホケナク、人亦不可ニ信用、又有恐可慎。(中略)若又委ク舊記ヲ披見スルアラハ、斯編二卷ノ所集其事實タルコトヲ知ヌヘシ。」とあるによつて、本書の内容一斑を知るべきである。なほ本書は「大坂記」、「七條記」の二編に分れてゐる。【二】集古雜篇 二卷 本書は講師惠空が、さきに撰せし次第編を改修して、元祿十五年に撰述せしところである。本書上巻々尾には、「右所編ハ唯古記ノ所誌ヲ取集メ、依ニ次第ニ連續スル計ナリ。一事トシテ更ニ不レ加ニ才覺、事實ノ殘ル所アラハ後弟是ヲ加ヘヨ、今ノ所レ記タ、見安キヤウニ思テ略スル事尤多シ」とあるが、大坂石山本願寺の建立より、東西本願寺の分立に至る間の史實、殊に天正年間における石山戦争と、慶長初年における東西分立の史實については、詳細に叙述せられ、ある。尙ほ本書執筆の參考書を擧ぐれば、如くである。光闡坊記、實倍記、信長記、太田別記、將軍家譜、武鑑、淺井記、朝倉記、加越記、後太平記、年代考、粟田記、道範由緒記、ト半家記、覺書、事書、表裏問答、金鑰記、七條鏡、顯如御書、教如御書、信玄狀、隆登狀、下間狀、總見記、木澤狀、明智記、細川記。【三】事書 一卷、本書も外題、内題共に集古雜篇とあり、安養寺某の選述するところと傳へてゐる。本書一部分の内容を見るに、主として東西分立の史實に關するものであり、殊に教如上人正統説を主張する邊より見れば、恐らく大谷派の學匠の手になるもので

名所行發⑩(名庫書)著題所現⑨ 月年の刊寫⑧ (書考參書釋註)書太⑦ 説解存内⑥ 代年作書⑤ 著書④ 缺存③ 數卷② (名書)名題① 號略字數

あらうと思はれる。因みに大谷大學に現存する惠空自筆の寫本の奥には左の記事がある。「右斯一冊、本紙ハ爲三四帖一是肥後國安養寺(法名失念)所集也、粟津大進(法名道純)大學ト云シ時、彼僧在京、則命之而令書者也。但其紙面、諸記ニ異、又不詳事アリ、今以三八木監物(重繼)之本、寫之耳、是雖似三部一本一部」

集洪州黃龍山南禪師書釋

①(日) 寫本(龍大) 一卷 ②守素編 shi-sho-shaku. ③一巻 ④貞治六刊 ⑤延享元刊(立大、A五〇・二九) 貞治六刊 (谷大、餘甲・四〇)

集雜錄

①(日) 寫本(龍大) 一巻 ②西雲記 ③寫本(龍大)

集沙門不應拜俗等事

①(日) 寫本(龍大) 一巻 ②西雲記 ③寫本(龍大) 一巻 ④西雲記 ⑤寫本(龍大) 一巻 ⑥西雲記 ⑦寫本(龍大) 一巻 ⑧西雲記 ⑨寫本(龍大) 一巻 ⑩西雲記 ⑪寫本(龍大) 一巻 ⑫西雲記 ⑬寫本(龍大) 一巻 ⑭西雲記 ⑮寫本(龍大) 一巻 ⑯西雲記 ⑰寫本(龍大) 一巻 ⑱西雲記 ⑲寫本(龍大) 一巻 ⑳西雲記 ㉑寫本(龍大) 一巻 ㉒西雲記 ㉓寫本(龍大) 一巻 ㉔西雲記 ㉕寫本(龍大) 一巻 ㉖西雲記 ㉗寫本(龍大) 一巻 ㉘西雲記 ㉙寫本(龍大) 一巻 ㉚西雲記 ㉛寫本(龍大) 一巻 ㉜西雲記 ㉝寫本(龍大) 一巻 ㉞西雲記 ㉟寫本(龍大) 一巻 ㊱西雲記 ㊲寫本(龍大) 一巻 ㊳西雲記 ㊴寫本(龍大) 一巻 ㊵西雲記 ㊶寫本(龍大) 一巻 ㊷西雲記 ㊸寫本(龍大) 一巻 ㊹西雲記 ㊺寫本(龍大) 一巻 ㊻西雲記 ㊼寫本(龍大) 一巻 ㊽西雲記 ㊾寫本(龍大) 一巻 ㊿西雲記

集

んとする沙法問題も伴つた。本書は東晋成帝の時、輔政庾冰によつて起されてから、唐の龍朔二年、高宗の拜君の勅令事件に至る間、屢々繰返された拜不拜事件の資料集成である。即ち東晋庾冰が成帝に代つて勅して以下、晚晋桓玄、夏赫連勃々、宋孝武帝、齊武帝、隋煬帝、唐高宗等は、何れも沙門に勅して敬を致さしめんとした。これに對して儒家佛者から、夫れ一拜不拜の表啓議狀等が上られた。これを目次の如く各々上下宛三篇に分ける。故事篇とは隋以前のもの、聖朝とは編者彦棕の生存した唐高宗時代に於けるものを指す。右の中、庾冰、桓玄に關するもの總ては、護法を以て篇せられた梁僧祐『弘明集』中に。これより後、及唐高宗の勅令並にこれに對する沙門の表啓三首、即ち本卷三の半に至る迄は、既に亦唐道宣『廣弘明集』中に攝せられる資料である。

擬て、晋成帝咸康六年。輔政庾冰が、帝に代つて「名教は百代の廢せざる所、名教一朝に廢棄すれば、國家の憲度破れん」とて、沙門致敬の詔をなし、尙書何充等多數これに反對上奏した。これより下つて晋安帝元興二年、桓玄篡位して、復た沙門をして君親を拜せしめんとした。乃ち八座に書を與へて、其の可否を論ぜしめ、亦五論、廬山慧遠に不拜の理を問うた。桓玄の拜敬の理は、王者の尊は資生通運にあり、儒教的禮容も全て是に出づる。而も沙門はその惠に沾うて其の敬を廢するの理はない。而してこの王者とは桓玄自らの事であ

る。これに對し、八座以下何れも皆不可とし、桓玄は遂に「沙門の禮を致さざるを許す」の詔を發し、唯、侍中臣下嗣之等が四度この詔の不可を上奏したが、やがて桓玄は敗死した。これ等不拜の論の組織的なものに廬山慧遠の『沙門不敬王者論』五篇がある。その趣旨は沙門は出家して順化せず、然も其道は六合に洽く、澤は天下に流れり。故に内は天屬の重に乖くも而も其の孝に違はず、外は君主の恭を闕くも、而も其敬を失はぬ。と。かくして在家、出家、求宗不順化、體極不兼應、形盡不滅の五篇に分ち、佛法に順つて不拜の理を擧げた。不敬問題の前後を通して慧遠のこの論は最も理を得、後世の範をなして居る。劉宋に入つて佛法が愈々宣布せられ、その弊も從つて伴ひ、孝武帝は衆僧を沙汰してこれを還俗せしめんとすると同時に、亦一般沙門をして王者に敬を致さしめんとして酷虐を極めた。本書にはその詔勅を載せるが、その事情に至つては『梁高僧傳』その他を参照すべきである。又、隋煬帝が、無條件の拜敬の詔を發し、隋の沙門彦棕が爲に『福田論』を爲つて不拜を諷刺し、沙門は遂に依然として敬拜しない。これ等の理論は前代、晋のもの外特に擧げる程のものもない。以上は卷一、二故事篇に屬する。唐高宗龍朔二年四月、勅して「君臣の義は在三の訓を重しとなす。愛敬の道は凡百の行の先とするのの外特に擧げる程のものもない。以上は卷一、二故事篇に屬する。唐高宗龍朔二年四月、勅して「君臣の義は在三の訓を重しとなす。愛敬の道は凡百の行の先とするのの外特に擧げる程のものもない。以上は卷一、二故事篇に屬する。

集め、並に州縣官等千有餘人、總て中臺都堂に坐して其事を議し、沙門道宣、威秀、靈會、會穩等三百餘人、經文の意を將つてし、又歴代佛教隆替の狀を陳べ、其不拜の事を具し、乃ち各々其の見地から表啓した。本書卷三、四には高宗の親勅一首、並にこれに對する沙門の表啓三。外に群官の議狀三十二を攝め、卷五には同じく群官にして儒教的或は國家政策的立場から拜禮を言ふ議狀三十二を収める。高宗の詔の翌五月、拜不拜の議紛然たる時、普光寺玄範が晋の廬山慧遠等の説を採つて拜の意を質し、更に其翌六月五日、隴西王博又等の不拜を請ふもの五百三十九人、拜を請ふもの三百五十四人の意を併せて奏聞し、同月八日高宗は遂に「沙門拜君を停むる」の詔を發したが、然も尙沙門不拜の啓表の上らるるもの六。以て唐初の不拜事件は終つた。而して編者彦棕は亦親ら「沙門不應拜俗總論」を爲つて、この巻を結んだ。此の如くして屢々繰返された拜俗問題も、その理論は遂に晋代のものを出でず、然も多くは佛教の隆盛と共に起るその弊害を機とし、沙法問題とも關聯し、排佛の根據に於て成された。かゝる間に佛教は支那化した。而して宋代禪者に依つて成された佛儒融合は、亦完全に王法即佛法の思想を作り成した。目次左の如し。

故事篇(卷一)  
(一) 晉尙書令何充等執沙門不應敬王者奏。  
(二) 車騎將軍庾氷爲成帝出令沙門致敬詔。  
(三) 大尉桓玄與八座桓護等論道人應致敬事



書。(四)八座等答桓玄明道人不應致敬事書。  
 (五)桓玄與中書令王謐論沙門應致敬事書。  
 (六)王謐答桓玄明沙門不應致敬事書。(七)桓玄難王謐不應致敬事。(八)王謐答桓玄應致敬難。桓玄與廬山法師慧遠使述沙門不敬王者意書(并遠答往反二首)。

〔卷二〕

(一)晉廬山釋慧遠沙門不敬王者論、在家一出家一求宗不順化體極不兼應一神不滅。  
 (二)桓楚許沙門不致禮詔。(三)待中大嗣之等執沙門應致敬啓。(四)宋孝武帝抑沙門致拜事。(五)夏赫連勃勃令沙門致拜事。(六)齊武帝論沙門抗禮事。(七)隋煬帝勅沙門致拜事。(八)洛濱翻經館沙門釋福田論

聖朝議不拜篇(卷三)

(一)今上制沙門等致拜親勅。(二)大莊嚴寺僧威秀等上沙門不拜俗表。(三)西明寺僧道宣等上雅三十牧玉賢論沙門不應拜俗啓。(四)西明寺僧道宣等營國夫人楊氏請論沙門不拜俗啓。(五)西明寺僧道宣等序佛敎隆替事簡諸幸輔等狀。(六)中台司禮太常伯隴西王博又大夫孔志約等議狀。(七)司元太常伯寶德玄少常伯張仙壽等議狀。(八)司戎少常伯護軍鄒欽泰員外郎秦懷恪等議狀。(九)司刑太常伯城陽縣開國侯劉祥導等議狀。

〔卷四〕

(一)中御府少監高藥尙等議狀。(二)內侍監給事王泉博士故玄亮等議狀。(三)春常寺承劉慶道主簿郝處傑等議狀。(四)詳刑寺丞王千石司直張道遜等議狀。(五)司稼寺卿梁孝仁等議狀。(六)外府寺卿韋思齊主簿賈舉等議狀。(七)繕工監大監劉審禮監作上官突厥

等議狀。(八)司成館大司成令狐德季等議狀。(九)司成館守宜業范義頤等議狀。(一〇)左衛大將軍張延師等議狀。(一一)右衛長史崔修業等議狀。(一二)右衛衛長史王玄策賈賈灌等議狀。(一三)右衛衛將軍李晦等議狀。(一四)左衛衛將軍懷寧縣公杜君綽等議狀。(一五)左衛衛將軍上柱國開國侯權善才等議狀。(一六)右奉宸將軍辛弘亮等議狀。(一七)右春坊主事謝壽等議狀。(一八)馭僕寺大夫王思泰丞牛玄璋等議狀。(一九)萬年縣令源誠心等議狀。(二〇)長安縣尉崔道默等議狀。(二一)沛王府長史皇甫公義文學陳至德等議狀。(二二)周王府長史源直心參軍元思敬等議狀

聖朝議拜篇(卷五)

(一)左威衛長史崔安都緣事沈玄明等議狀。(二)右清道衛長史李治等議狀。(三)長安縣令張松壽議狀。(四)中台司列少常伯楊思玄司績大夫楊守拙等議狀。(五)司元太常伯闕立本等議狀。(六)蘭台祕閣局郎中李淳風儀狀。(七)秦常寺博士呂才等議狀。(八)司宰寺丞豆盧暉等議狀。(九)司衛寺卿楊思儉等議狀。(一〇)司取寺丞韓處玄等議狀。(一一)詳刑寺少卿元大士等議狀。(一二)同文寺丞謝祐等議狀。(一三)內府監丞柳元貞等議狀。(一四)司津監李仁方等議狀。(一五)右武衛兵曹參軍趙崇素等議狀。(一六)右戎衛長史李義範等議狀。(一七)右金吾衛將軍薛孤吳仁長史劉文琮等議狀。(一八)右監門衛中郎將能玄逸等議狀。(一九)右端尹府端尹李寬等議狀。(二〇)左春坊中議賀蘭敏之贊善楊令節等議狀。(二一)右春坊中議鄒慶俊贊善楊思止等議狀。(二二)司更寺

丞張約等議狀。(三)左典戎衛尙曹王九思等議狀。(四)右典戎衛將軍斛斯敬則等議狀。(五)左司禦衛長史馬大師等議狀。(六)右司禦衛長史崔崇業等議狀。(七)左清道衛長史蔣貞貞等議狀。(八)左崇掖衛長史竇尙義等議狀。(九)右崇掖衛長史李行敏等議狀。(一〇)右奉裕衛率韋懷敬等議狀。(一一)雍州司功劉仁寂等議狀。

〔卷六〕

(一)普光寺沙門玄範質議拜狀。(二)中台司禮太常伯隴西王博又等執議奏狀。(三)今上停沙門拜君詔。(四)京邑老人程士頤等上請出家子女不拜親表。(五)直東台感神德上請依舊僧尼等不拜親表。(六)西明寺僧道宣等重上榮國夫人楊氏請論不拜親啓。(七)大莊嚴寺僧威秀等上僧尼請依內教不拜父母表。(八)玉華宮寺譯經沙門靜邁等上僧尼拜父母有損表。(九)襄州禪居寺僧崇拔上請僧尼父母同君上不受出家男女致拜表。

沙門不應拜俗總論

〔太田佛藏〕

**集沙門不拜俗儀** (一) *Ji-sha-mon-fu-hai-zoku-gi* (支) *Chi-sha-men-pi-pai-sai* 集沙門不應拜俗等事 (二) 六卷 存、大正五二・四四三No. 2108 縮露七、  
 二二八・一、北1072星、南1088星、元1083星、明北1473星、清1494星、麗1075右、天1070星、指1031右、法1059右、至1583星、明南1471星、*Nj* 1480 唐彥懷(一)龍朔二A. D. 662(一) (參考) 諸宗章疏錄第二、東域傳燈目錄卷下

集修行士經

(一) *Ji-shu-xing-shi-jing* 集修行士經、修士行經 (二) 一卷 (三) 失譯 (四) 出曜經第二卷的抄出 (參考) 出三藏記第四、法經錄第五、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

集諸經禮懺儀

(一) *Ji-shuo-kyo-rai-san-gi* (支) *Chi-shu-ching-ri-ch'an-i* 諸禮懺懺悔文、集諸經禮懺懺悔文 (二) 二卷 存、大正四七・四五六No. 1982 縮調一〇、  
 二二〇・八、北1089星、南1101星、元1095星、明北1498星、清1551星、麗1094英、天1089星、指1045英、法1073英、至1560起、明南1486功、*Nj* 1505 二樂叢書第一 (三) 唐智昇(開元一八A. D. 730)撰 本書は上下二卷より諸經の禮懺儀を集録したものであつて、上卷は十方佛名經、大集經、文殊師利禮佛身佛文、華嚴經、西方禮阿彌陀佛文、華嚴偈、菩薩戒法偈、菩薩戒香湯法、破戒偈、智度論偈、藥王藥上經、毘尼經、佛名經、無常偈、三厨經による禮懺文、下卷は善導の往生禮讚偈をそのまゝ輯録したものである。

〔參考〕

東域傳燈目錄卷下、淨土真宗教典志第一 (林五邦)  
**集諸經禮懺懺悔文** (一) *Ji-shuo-kyo-rai-san-gi-mon* (支) *Chi-shu-ching-ri-ch'an-hui-men* 集諸經禮懺懺悔儀、諸禮懺懺悔文 (二) 二卷 存、大正四七・四五六No. 1982 縮調一〇、  
 二二〇・八、二樂叢書第一 (三) 唐智昇(開元一八A. D. 730)撰

集諸法實最上義論

(一) *Ji-sho-ho*

名所行發 (一) 名庫書) 著者所現 (二) 月年の刊載 (三) (書考) 書釋註) 書本 (四) 說解存内 (五) 代年作者 (六) 著者 (七) 録存 (八) 教經 (九) (名書) 名題 (一〇) 略略字數



10-Jō-ku-shū-ji-gō-ron. (支) Chi-chu-ta-pao  
tsui-chang-t'uan. ②二卷 ③存、大正三  
二、一五〇 No. 1638. 縮巻三、三二五、一  
〇、北1303且、南3308肥、元1298肥、明北  
1295星、清2295星、麗1456起、天1188肥、  
至1329枚、明南1435書、Nj. 1302 ④宋施  
護(太平興國五A. D. 980)譯

①この論は諸經所説の法寶中、その最上眞  
實の勝義を集録したるものなれば此名があ  
る。最上眞實の勝義とは萬法唯識、因縁所  
生、如幻即空の理趣である。上巻には先づ  
諸經から引文して、唯識所變、空無所有、  
有無の二邊を遠離して中間にも住せざる旨  
を明し、次に「我れ今、經に依りて略して  
餘義を釋せん」とて、菩提の不可得なるこ  
と、一切法の識を離れては生ぜず、すべて  
緣生無性であるから有無一異を超えて平  
等、清淨、眞實なるもの、生死、涅槃も畢  
竟不二平等なるものであることを明す。下  
巻には生住異滅の四相不可得なることよ  
り、眼等の諸識の三量不可得なること、五  
遍行、五別境の心所も亦隨て如幻虚假で、  
本來平等自性清淨であるから皆な菩提の相  
と云はれ、眞如の清淨相大光明の義である  
からこれ佛寶と云はれ、これ清淨の因とな  
り、正解開發の性相である點からは法寶と  
云はれ、これを相應するを僧寶と名ける。  
故に三寶も皆無爲の相に勝義諦である。此  
の如實の道から如實に來現するを以て「如  
來」と稱せられる。此の道を「大乘の諸法  
の要道」とも「最上甚深如實の法」とも名け  
る。故に人若し「此道を覺了するは是れ如

實の道なり、是れ無著の道なり、最上最勝  
なり。而れば能く清淨の信を發生する者は  
諸佛も稱讚し給ふ」と述べ、七言六句の結  
偈を以て此論を結んでゐる。

この書全體の構成は、前半は諸經引文  
段、後半は依經略釋段である。引用經典と  
しては、法集經、寶積經、楞伽經、轉識  
經、華嚴經、寶雲經、無垢稱經等で、概し  
て諸法皆空を説けるものが多いが、また唯  
識所變を説けるものもある。隨つて異釋に  
も唯識教義に觸れ乍ら、多く無自性空の立  
場を持つてゐる。故に此の論は全體として  
は唯識と中觀との兩思想を打つて一丸とし  
たものと云はれやう。然るに直接には般若  
の諸經も解深密經も、又論としては中論も  
瑜伽論等をも引用してゐない。即ち瑜伽・  
中觀の最も根本的な經論をば取り扱はず  
に、却つて前述の如き經典に依りて、所謂  
諸の法寶中の最上義を集めたるものであ  
る。(月輪賢隆)

**集鈔決疑問** ①(日) Jō-shō-kezu-  
ji-mon. (支) Chi-chu-chieh-i-i-wen. ②

一卷 ④耳文(文一作久) ⑦参考) 智證  
大師請來目錄

**集成光明善導大師別傳纂註**

①(日) Jō-ō-myō-zen-ō-dai-shū-de-  
tsū-iden-san-chū. ②二卷 ③存 ④葵翁  
〔正保二—正徳元A. D. 1645—1711〕述 ⑤  
文久三刊(正大、一五一六・二八六)延寶八刊  
(正大、一五一六・三一九)

**集新舊齋文** ①(日) Jū-shū-ku-shū-  
mon. (支) Chi-shū-ku-shū-wen. ②五卷

**集神州三寶感通錄** ①(日) Jū-shū-  
san-bō-kan-tō-roku. (支) Chi-shū-  
chou-san-pao-kan-tung-lo. 集神州塔寺三

寶感通錄、東夏三寶感通錄、三寶感通錄、感  
通錄 ②三卷 ③存、大正五三、四〇四 No.  
2106. 縮巻七、三二九、二、北1071星、南  
1087星、元1083星、明北1477富、清1529  
微、麗1076右、天1071星、指1630右、法  
1088右、明南1468兵、Nj. 1484 ④道宣(開  
皇一六—乾封二A. D. 596—607) ⑤唐麟徳  
元(A. D. 664)

⑥支那の後漢から唐初に至るまで、約六百  
年に亘り、塔寺、佛像、經典、僧侶等の上  
に現はれたる感應の事蹟を、歴代の記傳、  
或は撰者の見聞によつて、集輯し、記録し  
たもの。卷首に自序を掲げ、本文を初明・  
舍利表塔、次列・靈像垂降、後引聖寺瑞經  
僧の三段に分ち、各々に序を載せて、  
事蹟を列記し、卷尾に撰集の時處と因縁と  
を附記してある。三段を次第の如く上中下  
三卷に配屬し、卷上には舍利表塔を明し  
て、西晋會稽瑯琊塔以下二十條を記し、卷  
中には靈像垂降を列して、東漢雒陽畫釋迦  
像縁以下五十條を録し、卷下には聖寺、瑞  
經、神僧を引いて、聖寺に臨海天台山石梁  
聖寺以下十二條、瑞經に曇無竭の觀音經以  
下三十八條、神僧に安世高以下三十條を載  
せてゐる。撰者道宣はこれより先高僧傳  
を撰し、その中に、咸通の一科を設け、多  
くの神僧を傳してゐる。依つてこの書卷末  
の附記に、齊、周、隋、唐代百年間の神異

に關する少からぬ見聞をば、これを僧傳に  
讀つて、ここには略述した旨を語り、更に  
端を改めて、麟徳元年七十に垂んとする老  
齡に及び、靈感の沈没することを恐れ、疾  
を力めてこれを撰したが、大略を存するだ  
けであるから、餘の盡さないものは道世の  
新撰に係る法苑珠林に就て見るやうに奨め  
てゐる。この書の記載はそのふ如く簡略  
ではないが、撰者が平素神異に對して深い  
景仰の念を懐いてゐたことは、之等の言や  
僧傳の論贊に照して明に察せられる。され  
ばこの書に記するもの、一見虚誕の説話  
を羅列したやうであつても、彼自らは極め  
て嚴肅な態度を以て筆を執り、力めてその  
典據をも指示してゐる。謂ふに當時に在つ  
ては、一般に神異感通こそは三寶の尊信せ  
らるべき絶好の支證として、その意義が認  
められてをり、殊に世俗を誘引する有效な  
手段としても、その流行を見てゐた爲に、  
かかる撰述が試みられたのであらう。支那  
には由來怪異の文獻が多く、六朝の頃から  
佛教關係のこの種の記傳も多少制作された  
が、道宣の感通錄の右に出づるものはない  
が、後世續出する諸種の感應傳の先驅をな  
したものと云へよう。

この書とは別に道宣律師感通錄一卷があ  
つて、同じく麟徳元年の撰となつてゐる。  
麗藏中に傳はり、縮巻及び大正藏の收むる  
所となつた。宋本の三寶感通錄は錯つてこ  
れをその上巻に充ててゐる。目次左の如し。  
〔卷上〕  
(一)西晋會稽瑯琊塔。 (二)東晋金陵長干塔

緣。(三)石道青州古城寺塔緣。(四)姚秦河東蒲坂古塔緣。(五)周岐州扶風岐山南古塔緣。(六)周瓜州城東古塔緣。(七)周沙州城內觀大乘寺塔緣。(八)周洛州京都西塔緣。(九)周涼州姑臧塔緣。(一〇)周甘州刪丹塔緣。(一一)周晉州北霍山南原大堆塔緣。(一二)齊代州城東古塔緣。(一三)隋益州郭下福感寺塔緣。(一四)隋益州晉源塔緣維縣塔附。(一五)隋鄆州超化寺塔緣。(一六)隋懷州妙樂寺塔緣。(一七)隨并州子城東淨明寺塔緣。(一八)隋并州大谷楡社塔緣。(一九)隋魏州臨黃塔緣。(二〇)雜明神州山澤所藏寶等緣。

【卷中】

(二一)東漢滎陽畫釋迦像緣。(二二)南吳建鄴金像從地出緣。(二三)西晉吳郡石像浮江緣。(二四)西晉泰山七國金像瑞緣。(二五)東晉楊都金像出諸緣。(二六)東晉襄陽金像遊山緣。(二七)東晉荊州金像遺緣。(二八)東晉吳興金像出水緣。(二九)東晉會稽木像香瑞緣。(三〇)東晉吳郡金像傳真緣。(三一)東晉東掖門金像出地緣。(三二)東晉徐州太子思惟像緣。(三三)東晉廬山文殊金像緣。(三四)元魏涼州石像山裂出現緣。(三五)北涼州石崖瑞像緣。(三六)北涼沮渠丈六石像現相緣。(三七)宋都城文殊師利金像緣。(三八)宋東陽銅像從地出緣。(三九)宋江陵金像出樹光照緣。(四〇)宋浦中金像光現及出緣。(四一)宋江陵上明澤中金像緣。(四二)宋荊州壁畫像却現緣。(四三)宋江陵小金像誓志緣。(四四)宋湖州祠后感通作佛光緣。(四五)齊香禺石像遇火輕舉緣。(四六)宋徐州彭城金像汗出表祥緣。(四七)齊楊都觀世音金像緣。(四八)梁荊州優填王栴檀像緣。

(四九)梁楊都光宅寺金像緣(剡縣石像附)(五〇)梁高祖等身金銀像緣。(五一)元魏定州金觀音像高王經緣。(五二)陳重雲殿非像飛入海緣。(五三)北齊末晉州靈石寺石像緣。(五四)周宜州北山鐵石像緣。(五五)周襄州峴山華嚴行像緣。(五六)隋蔣州與皇寺焚像移緣。(五七)隋釋明憲五十善薩像緣。(五八)隋京師日嚴寺瑞石影像緣。(五九)隋鄆州沙河寺四面像緣。(六〇)唐坊州石像出山現緣。(六一)唐簡州佛跡神光照緣。(六二)唐涼州山出石文有佛字緣。(六三)唐滄州相思寺佛跡出石緣。(六四)唐循州靈龜寺佛跡緣。(六五)唐撫州降潭州行像緣。(六六)唐雍州藍田金像出石中緣。(六七)唐雍州郿縣金像出邊緣。(六八)唐沁州像現光明常照林谷緣。(六九)唐岱州五臺山像變聲現緣。(七〇)唐遼口山崩自然出像緣。

【卷下】

(七一)明聖寺。臨海天台山石梁聖寺。東海蓬萊山聖寺。抱罕臨河唐述谷仙寺。相州石鼓山竹林聖寺。嚴州林慮山靈隱聖寺。晉陽冥寂山聖寺。岱州五臺山大孚聖寺。西域黑峰山石窟聖寺。雍州太一山九空仙寺。子午關南大秦嶺竹林寺。梁州道子午關南獨聖寺。終南山折谷炬明聖寺。(七二)瑞經錄。曼無竭。釋道安。釋僧生。釋道同。釋普明。釋慧果。釋慧進。釋弘明。孫敬德。釋道琳。釋志滿。范陽僧。并東看山。魏陶官。周經上天。隋揚州僧。釋道積。釋寶瓊。釋空藏。釋道俗。史阿誓。令狐元軌。釋曇頤。釋僧徹。河東尼。釋曇延。釋道遜。釋智苑。嚴恭。李山龍。李思一。陳公太夫人。岑文。蘇長羨。董雄。益州空經。京師高表

仁孫子。崔義起。(七三)神僧感通錄。安世高。朱士行。耆域。佛調。捷陀勒。抵世常。闍公則。膝並。竺法進。李恒。佛圖澄。釋道安。單道開。何充僧。桓溫尼。杜願僧。廬山僧。竺法朗。梁法相。杯度。釋道閑。求那跋摩。命兩尼。釋慧全。劉凝之。釋曇始。釋慧遠。釋慧朗。釋寶誌。釋慧達。(名如應順)

集大乘相論

(日)Tsu-t'ing-shih-t'ung-n. (支) Chi-t'ieh-ehng-shih-t'ung. (梵) Mahayānabuddhasūtra-samūhaya (藏傳)(藏) Theg-pa chen-poji mshku-nid kun-tas bsdu-spa shes-bya-ba. ②二卷 ③存。大正三三・一四五No. 1637。縮著三・二二五・一〇。北3308執。南1333輕。元303輕。明北1299星。清1299星。麗1461剪。天1293輕。至1383檢。明南1399書。N1.1306 ④宋施護(太平興國五A. D. 980)譯

下卷)四聖諦・四靜慮・四無量心・四無色定・八解脫・入觀次第・三解脱門・六神通・諸羅羅尼門・十力・四無畏・四無礙解・大慈大悲・十八不共法・四聲聞果・了知一切相・真如實際・無相・法界等略釋して「是の如き等の一切法は、當に知るべし皆悉く如量の正語をもて菩提心と相應し、大慈は一切衆生に隨順す。是の一切法は平等にして同一所緣なれば無相最上の法門と相應し。此相應の故に是れを一切法無我と名づく。智者當に知るべし佛所説の法は解脱門より如實に出生することを」と云ひ、次に結偈を説いて此論を終つてゐる。

論の中に佛身に關しては法報化の三身を説き、或は眞如と十力とは大圓鏡智を以て觀じ、彼の實際の所證と四無所畏とは平等性智を以て觀じ、無相微妙清淨と四無礙解性とは妙觀察智を以て觀じ、大慈大悲等は成所作智を以て觀じ、乃至一切の觀法は皆法界清淨智に安住すると説く。かくの如き一般法相の説明は唯識教義に似たる所があるけれども、彼の有名な三性・三無性論もなく、眞如を論ずれど七種眞如・十種眞如等の事もない。隨つて此論の取り扱ふ法相は極めて大乘一般的のもので、特に立場を唯識教學においたものでない。さりとて中觀に據つたものとも見えない。且つ著者は西藏所傳にては密教の大家の如く傳へられるけれど、此書には更にその形跡もない。かゝる法相を集録し解説することは、法集名數經や決定義經や法乘義決定經などにその型がある。或はさやうな經典から骨子を取り來

たものであるかも知れぬ。(月輪賢隆)

集註 ①(日)Jue-chu. ④古崖新師作

①淨土真宗教典第三に曰く「出越溪句解自跋及大佑略解自序。疏鈔亦引古崖説」云々。

集註 ①(日)Jue-chu. ③衛論師作

①淨土真宗教典第三に曰く「出大佑略解自序」云々

集佛經六時行道儀 ①(日)Jā-nu=

tsu-eyō-roku-ji-eyō-dō-gi. (支) Chi-to-ching-iu-shih-hsing-tao-i. ②一卷 ③唐道宣開皇一六一乾封二 A. D. 596—667)述

④(參考) 諸宗章疏錄第二

集法悅捨苦陀羅尼經 ①(日)Jā

—hō-tsu-shu-ku-da-i-ni-kyō(支) Chi-ta-yüeh-shē-ku-tu-tō-lo-ni-ching. ②一卷 ③存

④七佛八菩薩所說大陀羅尼神呪經第二(大正二一・五四四)及び陀羅尼雜集第九(大正二一・六三一)に出づ。⑤(參考) 法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第一

⑥寫本(京大、藏・一・六)

集訪遺忘章 ①(日)Jū-tō-yū-mō-

shō(支) Chi-fang-i-wang-chang. ②一卷 ③文超撰 ④(參考) 東域傳燈目錄卷下

集文字禪 ①(日)Jū-mo-ji-zen. (支)

Chi-wen-tzū-ch'an. ②一卷 ③存 ④清代、達夫(賴上) ⑤康熙三四刊 ⑥(駒大)

集要智因論 ①(日)Jū-yō-chi-in-

ron. (支) Chi-yao-chih-yin-lan. 集要法門數 ②一卷

①東域傳燈目錄卷下に曰く「内題云集要法門數。此論依瑜伽等錄法門名數」云々。

集量論 ①(日)Jū-yō-ton. (支) Chi-

hang-lan. ②四卷 ③缺 ④唐義淨(貞觀九—先天二 A. D. 635—713)譯 ⑤(參考) 開元錄第一四 貞元錄第二四

集論疏 ①(日)Jū-ton-sho. (支) Chi-

lan-su. 雜集論疏 ②十三卷 ③唐代靈奘述 ④(參考) 東域傳燈目錄卷下、奈良朝現在一切經疏目錄2331

叔離比丘尼本緣經 ①(日)Shuka-

ri-bi-ku-ni-hon-en-kyō. (支) Shu-ti-pi-chin-ni-pen-yüan-ching. ②一卷 ③賢愚經第七卷の抄出。④(參考) 開元錄第一六、貞元錄第二六

祝無膺詩集 ①(日)Shuku-mu-yō-

shi-shū. (支) Chu-wu-ying-shih-shi. ②一卷 ③(參考) 日本國承和五年入唐求法目錄、入唐新求聖教目錄

宿五通勸文 ①(日)Shuku-go-tsu-

kam-mon. ②一卷 ③(參考) 本朝台祖撰述密部書目

宿善無善之事 ①(日)Shuku-zen-

nu-zen-no-koto. ②一册 ③存、雜亞小部集第五 ④(龍大)

宿命智陀羅尼 ①(日)Shuku-myō-

chi-da-ra-ni. (支) Hsia-ming-chih-tō-lo-ni. 宿命陀羅尼、佛說宿命智陀羅尼 ②一卷 ③存、大正二一・九〇四、No. 1382、縮成一二・二五・五、北1237、南1265、元1259、明北909、深、清909、深、麗1253、冠、天1245、法1351、毅、至7士海、

明南907、夙、Ni. 914 ④宋法賢(一成平四 A. D. 1001)譯

⑤宿命智陀羅尼一呪を明するのみ。別に同人譯、佛說宿命智陀羅尼經一卷(大正二一・九〇四)あり、これによれば此の陀羅尼を誦持する者は千劫中作事所の重罪消滅し、七俱胝の生に於て宿命を知ると説き一呪を明す。但し兩呪を比較するに大いに異なるあり。

宿命智陀羅尼經 ①(日)Shuku-

myō-chi-da-ra-ni-kyō. (支) Hsin-ming-chih-tō-lo-ni-ching. 宿命智經 ②一卷 ③存、大正二一・九〇四、No. 1383、縮成八、二一五・五、北1255、南1265、元1243、肇、明北884、清884、麗1237、高、天1229、肇、法1351、毅、至7士海、明南907、夙、Ni. 889 ④宋法賢(一成平四 A. D. 1001)譯

⑤世尊が阿難に對して言はるゝには、我に陀羅尼あり、宿命智と名づく、若し衆生有つてこの陀羅尼を聞き、至心に受持する者は、千劫中に爲し來つた、極重罪業を皆悉く消滅し、若し終身間斷なく此の陀羅尼を受持する者は、七俱胝(koiti)劫の間の前生の事を知ることが出来る」と説き、次に其の陀羅尼が擧げてある。此の陀羅尼は、漢音譯で、大正藏經では、五行半程で、尙その卷末に梵字陀羅尼が記してあるから便利である。(神林隆淨)

宿曜疑義 ①(日)Shuku-yō-gi. 宿曜經疑義 ②一卷 ③圓珍(弘仁五—寬平三 A. D. 814—891)説寬平四、年七八(寂)述 ④(參考) 本朝台祖撰述密部書目

宿曜儀軌 ①(日)Shuku-yō-gi-ki. (支) Hsu-yao-i-kuai. ②一卷 ③存、大正二一・四二二、No. 1304、縮成一・二、續二・九・三 ④唐一行(弘道元—開元一五 A. D. 683—727)撰

⑤初めに曜宿に關係ある虚空藏(Akṣaya-bha)・文殊(Maṅgali)・普賢(Saṃantabhadra)・延命(普賢延命)・帝釋(Sakradewandra)・毗沙門(Vaiśravaṇa)の諸尊の印明、及び日(Āditya)・月(Soma)・火星(Ahṅiraka)・水星(Budha)・木星(Bṛhaspati)・金星(Sukra)・土星(Sanaścara)・羅睺(Rāhu)計都(Ketu)等の九曜の眞言、並に九執曜天印・二十八宿印・能吉祥眞言・北斗七星眞言を列ね、終に金剛大成就經吉祥成就品を引き、文殊八字眞言・熾盛光佛頂・被業衣觀音・一字佛頂法に依り息災護摩を行つて、惡宿曜を攘除すべきことを説く。但し金剛大成就經とは、何經を指すのか未だ明かでない。

康元二寫 ④(寶善提院) (神林隆淨) 宿曜經 ①(日)Shuku-yō-kyō. (支) Hsin-yao-ching. 文殊師利菩薩及諸仙所説吉凶時日善惡宿曜經、文殊諸仙説吉凶時日經宿曜經 ②二卷 ③存、大正二一・三八七、No. 1299、縮成一四・二六・八、明北1349、清1349、亦、麗1393、執、明南1208、優、Ni. 1356 ④唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)譯 ⑤文殊師利菩薩及諸仙所説吉凶時日善惡宿曜經の下を見よ。

宿曜經香義 ①(日)Shuku-yō-kyō-on-gi. 眞寂(仁和—延長五 A. D. 886

—927) ①(参考) 本朝台祖撰述密部書目  
**宿曜經肝要辨** ①(日) Shuku-yō-gyō-kanan-yō-den. ②一卷 ③存 ④寫本 (正大・一一六〇・三三)

**宿曜經疑義** ①(日) Shuku-yō-gyō-gi. 宿曜疑義 ②圓珍(弘仁五—寬平三 A. D. 814—801) 說寬平四、年七八寂) 述 ③(参考) 本朝台祖撰述密部書目

**宿曜經疑問** ①(日) Shuku-yō-gyō-gi-mon. 宿曜經疑問答、宿曜經問答 ②一卷 ③圓珍(弘仁五—寬平三 A. D. 814—801) 一說寬平四、年七八寂) 述 ④(参考) 山家祖撰述密部書目

**宿曜經疑問答** ①(日) Shuku-yō-gyō-gi-mon. 宿曜經疑問、宿曜經問答 ②一卷 ③圓珍(弘仁五—寬平三 A. D. 814—801) 一說寬平四、年七八寂) 述 ④(参考) 山家祖撰述密部書目

**宿曜經講義** ①(日) Shuku-yō-gyō-kyō-gi. ②二卷 ③存 ④圓照述 ⑤寫本 (谷大、餘大・八九八)

**宿曜經撮要** ①(日) Shuku-yō-gyō-satsū-yō. ②一卷 ③存 ④良完述 ⑤(京專)

**宿曜經諸傳授纂要和解** ①(日) Shuku-yō-gyō-shō-dō-jū-sann-yō-wa-se. ②一卷 ③存 ④延享三寫 ⑤(京大、藏一四・八)

**宿曜經占真傳** ①(日) Shuku-yō-gyō-sen-shin-den. ②一卷 ③存 ④脇田文紹編 ⑤明治三〇刊 ⑥(帝國、一〇四・六六)

**宿曜經撰日法** ①(日) Shuku-yō-gyō-sen-nichi-hō. ②三卷 ③存 ④圓通普門(寶曆四—天保五 A. D. 1751—1834) 撰 ⑤(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

**宿曜經並講錄** ①(日) Shuku-yō-gyō-narabini-kō-roku. ②一卷 ③存 ④脇田文紹編 ⑤明治三〇刊 ⑥(龍大、二四一・八・一〇一)

**宿曜經問答** ①(日) Shuku-yō-gyō-mon-do. 宿曜經疑問、宿曜經問答 ②一卷 ③圓珍(弘仁五—寬平三 A. D. 814—801) 一說寬平四、年七八寂) 述 ④(參考) 本朝台祖撰述密部書目、密乘撰述目錄、諸宗章疏錄第二、山家祖撰述密部書目

**宿曜供略次第** ①(日) Shuku-yō-gū-ryaku-shi-dai. ②一帖 ③存 ④鎌倉時代寫 ⑤(寶善提院)

**宿曜護摩祝火法** ①(日) Shuku-yō-go-ma-shuk-kwa-hō. ②一卷 ③存、祕密儀軌集第一 ④超際大仙說 ⑤享保一二刊 ⑥(谷大、餘大・三七六九)

**宿曜護摩法** ①(日) Shuku-yō-go-ma-hō. ②一帖 ③存 ④平安朝寫 ⑤(寶善提院)

**宿曜私記附古事要文** ①(日) Shu-ki-yō-shiki-tsuketari-ko-ji-yō-mon. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶善提院)

**宿曜占法** ①(日) Shuku-yō-sen-hō. ②五帖 ③存 ④德川末期寫 ⑤(寶龜院)

**宿曜相應事** ①(日) Shuku-yō-sō-ō-no-koto. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶善提院)

**宿曜圖說** ①(日) Shuku-yō-zu-shō. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

**宿蘆稿** ①(日) Shuku-ro-ko. ③存、續群書類從一三輯 ④俊括(宿蘆) ⑤(天正二〇(A. D. 1592))

**菽麥私記** ①(日) Shuku-baku-shi-ji. 菽麥私記、藏外法要菽麥私記 ②一卷 ③存、真宗全書第七四 ④泰殿(正徳元—寶曆一三 A. D. 1711—1763) 撰 ⑤(參考) 淨土真宗教典志第二

**菽麥私記** ①(日) Shuku-baku-shi-ji. 藏外法要菽麥私記、菽麥私記 ②一卷 ③存、真宗全書第七四 ④泰殿(正徳元—寶曆一三 A. D. 1711—1763) 撰 ⑤(參考) 淨土真宗教典志第二

⑥具に藏外法要菽麥私記と云ひ、略して菽麥私記又は菽麥記と云ふ。多く真宗法要外の真宗和語聖教の眞價菽麥を辨明せるものである。此書に收めて論ずるところ、真宗教典誌には百七部と云へるも、真宗全書所收本は百五部である。異本かも知れない。そうして末尾に善亮、隆賢、慶證寺、隆存四人の考へる所、合せて三十三部を附してある。恐らく後人の附記であらう。此書は俗樸の管窺録と共に、真宗法要外の眞宗和語聖教の眞價を甄別した書の雙壁であらう。眞宗教典誌卷一には「近來我門有管窺録、菽麥辨兩評家、標若干部、糺斷眞偽、辨析毫末、於是玉石朱紫無所不逃」形、實後進之良導也」と評して居る。ところが管窺録には眞宗法要所收のものを全く省けるに、此書には本願鈔、最要鈔、女人

往生聞書、淨土見聞集等の法要所收と思はるゝ書目が擧げられてあるから、法要所收本の確定を見ざる已前の著作であらう。それで管窺録よりは少し已前に成るものであらうと考へらるゝ。(杉紫朗)

**縮刷藏經要論** ①(日) Shuku-satsu-etsu-zō-yō-yaku. 縮刷藏經問覽便利 ②二卷 ③存 ④和淨所編 ⑤明治二〇刊 ⑥(龍大、二〇一一・一)

**縮刷藏經問覽便利** ①(日) Shuku-satsu-etsu-zō-kyō-etsu-ran-i-ben-ri. ②二冊 ③存 ④(哲、外・一・右・八)

**縮刷藏經校正本** ①(日) Shuku-satsu-zō-kyō-etsu-kei-shō-bon. ②一卷 ③存 ④(龍大、別設)

**縮刷藏經正誤表** ①(日) Shuku-satsu-zō-kyō-etsu-sei-go-hyō. ②十一冊 ③存 ④寫本(正大、一〇二・二八)

**縮刷大藏經** ①(日) Shuku-satsu-dai-zō-kyō. 大日本校訂大藏經 ②四十帙 ③存 ④弘教書院編 ⑤大日本校訂大藏經の下を見よ。⑥明治一三—一八刊 ⑦東京弘教書院

**縮刷大藏經目錄** ①(日) Shuku-satsu-dai-zō-kyō-moku-roku. ②一冊 ③存 ④東京弘教書院

**縮象應時曆書** ①(日) Shuku-zō-ō-jō-reki-shō. ③存 ④寫本(龍大、二七三・三七七)

**縮象符天曆書推步草稿** ①(日) Shuku-zō-ō-ten-reki-shō-sui-ho-sō-ki. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、二七三・三七七)

名所行發 (名庫書) 善藏所現 ① 月年の刊寫 ② (書考參書釋註) 書本 ③ 説解存内 ④ 代年作書 ⑤ 善善 ⑥ 缺存 ⑦ 數部 ⑧ (名書) 名題 ⑨ 號略字數

出家明 ①(日)Shuk-ke-uta. ②一帛

存 ③徳川時代寫 ④(寶善提院)

出家緣經 ①(日)Shuk-ke-en-gyo.

(支)Ch'u-chia-yuan-ching. ②一卷 ③失

譯 ④(參考) 出三藏記第四、法經錄第三

譯 ⑤(日)Shuk-ke-en-gyo.

出家緣經 ①(日)Shuk-ke-en-gyo.

(支)Ch'u-chia-yuan-ching. 出家功德因緣

經 ②一卷 ③存、大正一七・七三六No.

791、縮宿八、巳一四・一〇、北814無、南

823無、元832無、明北771當、清771當、

麗814甚、天815無、指783甚、法803甚、至

1030卑、明南698敬、Nj.686 ④後漢安世

高(建和二—建寧三A.D. 148—170)譯

⑤詳しくは『出家功德因緣經』を云ふ。出家

の功德甚だ多きこと及び出家を難する者の

罪報甚だ重きことを説くものである。冒頭

に「出家の因縁は其の福甚だ多し」と書き

起し、或は男女、奴婢、人民を出家せし

め、或は自ら出家せる功德は布施の報、持

戒の果報、大七寶塔起立の功德、盲人の目

を開きたる明醫の福等に比して遙かに勝

れ、人天の中に念に樂を受くること極りな

く盡くるなく、遂に佛道を成ずるのである。

その故は出家の法によつて魔を滅して佛種

を増益し、惡法を摧滅して善法を長養し、

罪垢を除滅して無上の福業を興すからである。

此を以て佛は出家の功德を説いて「須

彌よりも高く、大海よりも深く、虚空よりも

廣し」と云つてゐる。これに反して出家

のため諸の留難をなし、その志に従はざら

しめるものゝ罪は甚だ重く、深地獄に入り

り、一切の諸惡其の身に集り、地獄の火に

出

燒き盡されるのである。是の如く罪福は迦

留樓訖尼藥と石密との如く相反して甚だし

きものであるとして、最後に阿難に向つて善

薩の四法を説つて一經を終る。極めて短い

ものではあるがよく纏つて出家の功德を説

くゝるである。(三好鹿雄)

出家經法 ①(日)Shuk-ke-kyo-ho.

②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶善提

院)

出家功德 ①(日)Shuk-ke-ka-doku.

②一卷 ③存、慈雲尊者全集第一四 ④慈

雲飲光(享保三—文化元A.D. 1718—1804)

⑤明和元(A.D. 1764) ⑥古寫本(河内長

榮寺)(京都長福寺)

出家功德因緣經 ①(日)Shuk-ke-

ka-doku-kyo. (支)Ch'u-chia-kung-te-yin-

yuan-ching. 出家緣經、出家因緣經 ②一

卷 ③存、大正一七・七三六No. 791、縮宿

八、巳一四・一〇、北814無、南838無、元

823無、明北698敬、清698敬、麗818甚、天

871學、指785甚、法838甚、至1030卑、明

南755當、Nj.686 ④後漢安世高(—建和二

—建寧三A.D. 148—170)譯 ⑤出家緣

經の下を見よ。⑥寫本(京大、藏・一シ・

六)

出家功德經 ①(日)Shuk-ke-ku-

tok-kyo. (支)Ch'u-chia-kung-te-ching.

②一卷 ③存、大正一六・八一三No. 707、

縮宿七、巳一五・一、北371學、南884學、

元875學、明北892敬、清698敬、麗897寬、

天871學、指788甚、法838甚、至1105和、

明南754當、Nj. 776 ④失譯

⑥阿難が王子を化して出家せしめたるを緣

として、佛、出家の功德は布施等一切の功

徳に勝り、諸の功德中此の功德を最上とな

すを説く所のものである。佛、毗舍離國に

在り城中に入らんとして象車族の王子鞞羅

美那が五欲を貪りたる爲めに當に命終して

地獄に墮せんとするを知り阿難をして教化

せしむ。王子は佛の教を聽いて更に六日間

樂を受け、第七日目の命終の日に佛所に往

詣して出家せんことを求む。佛之を許し給

ひ、一日一夜淨戒を持ちたる功德を以て命

終の後は天上に生じ二十劫の間三塗に墮ち

ずして常に天上人中に生をうけ最後に發心

して辟支佛となる。そこで阿難は佛に出家

の福を問ふ。佛答へて出家の功德は甚だ大

にして若し人をして出家せしめ或は出家の

因縁を助くる時は、この人は恒に天上人中

に生じて常に國王となり、之に反して他人

の出家の因縁を毀せば三塗に墮して無目の

者となりて苦を受くると説く。最後に譬を

以てこの功德を説かんとて、四天滿中の阿

羅漢を百歳の間心を盡して供養するも、出

家して一日一夜に作る所の功德に比べて十

六分の一にも及ばないと云つてゐる。

⑦(參考) 開元錄第四、第一六、第一七、

貞元錄第六、第二六 (三好鹿雄)

出家功德經釋 ①(日)Shuk-ke-

ka-doku-kyo-shi-shaku. ②一卷 ③存

④正亮(—貞享四A.D. 1687—)述 ⑤元祿

四刊 ⑥(龍大、二四一七・一八二)(谷大、餘

大・二六五六)(哲、お・八・右・四)(京專)(高

大、寄・一・二三)(正大、一一七九・一〇五)

出家功德卷講義 ①(日)Shuk-ke-

ka-doku-no-makki-ko-gi. ②存、曹洞禪講

義第九 ③松田淇堂述 ④(駒大)

出家功德福増因緣經 ①(日)

Shuk-ke-ka-doku-to-fuku-zo-in-en-

gyo. (支)Ch'u-chia-kung-te-tu-fu-isen-g-

yin-yuan-ching. ②一卷 ③賢愚經の抄出

④(參考) 開元錄第一六、貞元錄第二六

出家洪範 ①(日)Shuk-ke-ho-han.

②一卷 ③存 ④敬光(元文五—寛政七A.

D. 1740—1795)述 ⑤(參考) 山家祖德撰

述篇目集卷下 ⑥寛政六刊 ⑦(正大、一〇

八・七〇・一九二、一一八二・六六B)

出家作法 ①(日)Shuk-ke-sa-ho.

②一軸 ③存 ④長任房快慶記 ⑤足利時

代寫 ⑥(寶龜院)

出家作法 ①(日)Shuk-ke-sa-ho.

②一卷 ③存 ④文正文寫(谷大、餘丙・七

九)永祿一三寫(谷大、餘丙・四四)寫本(高

大、寄・一・六五)

出家作法 ①(日)Shuk-ke-sa-ho. 出

家作法西院 ②一軸 ③存 ④延徳三寫

⑤(金剛三昧院)

出家歲註解 ①(日)Shuk-ke-sai-

chu-ge. ②一冊 ③存 ④正亮(—貞享四

A.D. 1687—)述 ⑤刊本(哲、う・一右・一

六、う・八・中・二)(高六、寄・一・二四)

出家授戒記 ①(日)Shuk-ke-ju-kai-

ki. ②一軸 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶

善提院)

出家授戒作法 ①(日)Shuk-ke-ju-

kai-sa-ho. ②存、大日本佛教全書第三三

惠心僧都全集第五 ①源信

①本書は出家得度授戒作法としては最も整つたもので、惠心僧都源信撰たることは確かなものであらう。授戒本尊を蓮華臺上寶滿如來とし、梵網の十重戒を授け、四弘誓願は十戒の中に含まるとなし、四弘と三聚淨戒との不二を述べ、回向を以つて畢る。

出家授戒作法

①(日) Shuk-ke-ji-kai-sa-ho. ②一卷 ③道元(正治二)建長五 A. D. 1200—1233) ④【参考】 禪籍目録

出家授戒法

①(日) Shuk-ke-ji-kai-ho. ②一卷 ③存、日本大藏經戒律宗章疏第三 ④實範(一天養元 A. D. 1144)

①新たに出家する者は剃度授戒する作法を記せるもの。和上と阿闍梨を兼ねる一戒師の場合に就て説く。その次第は、先づ露地に香水を洒ぎ、七尺四方の四隅に幡を懸け、中に出家のための一座と和上のための勝座を設く。次ぎに和上三禮し三歸の文を唱へ、次ぎに如來唄、如來妙色身の文。次に表白。次に出家の功德を記す經律の文を抄唱。次に請和上の言。次に氏神等に別辭。入無爲傷三說濯水。次に出家者衣服を改めて師前に胡跪し、師は出家を許す。次に香水灌頂讚。次に禮十方佛說偈。次に剃髮。次法名。次授與袈裟。次出家者禮佛、行道三匝、説自慶偈。次法同單白。次禮僧足胡跪合掌。次三歸三竟各三説。次に沙彌十戒を授く。次に發願。次に神分祈願回向。次に下禮盤。次に着座にて終る。書後に

「中川實範上人作」とあるは後人の置くとこゝろ、寶徳四年(A. D. 1452)金剛佛子重賀、文祿五年(A. D. 1596)法印恭畏の後批あり。

①徳川時代寫(寶龜院)永享五寫(金剛三昧院) (大野法道)

出家授近圓羯磨儀範

①(日) Shu-kai-ji-gon-en-kom-ma-gi-han. (支) Chi-ha-shou-chun-yuan-chieh-mo-tian. ②一卷 ③存、正一・九・六、縮寒六 ④元抜合思巴(嘉熙三—至元一七 A. D. 1239—1290)集 ⑤根本説一切有部出家授近圓羯磨儀範の下を見よ。

出家箴註解

①(日) Shuk-ke-shin-chi-ge. ②一卷 ③存 ④正亮述 ⑤刊本(谷大、長保・三二二)(龍大、二六一・二・九)

出家大綱

①(日) Shuk-ke-tai-ko. ②一卷 ③存 ④菜西(永治元—建保三 A. D. 1141—1213)纂 ⑤【参考】 山家祖德撰述篇目集卷下、日本禪林撰述書目 ⑥寛政元刊(谷大、餘大・四五〇)(京大、日大未・四六七)明治一三刊(駒大)(正大、一七六・六)(高大、寄・一・二四)(哲、ふ・三・左一七)

出家得度狀

①(日) Shuk-ke-to-ku-do-ji. ②一紙 ③存 ④徳川時代寫

出家略作法

①(日) Shuk-ke-ryaku-sa-ho. ②存、日本大藏經戒律宗章疏第二 ③此の略作法の聖衆勸請に於て南無菩提達磨圓覺大師一切諸佛菩薩歷代諸祖諸天神仙

大日本國諸大權現…等とあれば禪宗系の出家作法なること明かである。且つ本作法の末尾には「此外、雖作法多爲小庵小衆執行、記之、至大刹稠人廣衆之時、詳于清規、矣」とあり。此の作法中、剃髮後に尼師壇・三衣・鉢盂を受くる時、大徳一心念我比丘某甲云々と標出しつゝ、次に三歸・五戒・八戒・十戒を受けて出家位に入り、次いで三衆及び梵網十重戒を受けて佛位に入るとせるは、この作法に統一なきを暗示せるものである。

④寛永一六寫(谷大、餘卷・三)寫本(高大、寄・一・六五)(龍大、二六一・三・一三) (西本龍山)

出家略作法

①(日) Shuk-ke-ryaku-sa-ho. ②三卷 ③存 ④信證(應徳三—康治元 A. D. 1086—1143) ⑤【参考】 眞言宗全書刊行豫定目録

出家略作法

①(日) Shuk-ke-ryaku-sa-ho. 出家略作法西院 ②一軸 ③存 ④足利末期寫 ⑤(金剛三昧院)(寶龜院)

出家略作法並廣作法

①(日) Shuk-ke-ryaku-sa-ho-narabini-ke-sa-ho. ②一巻 ③存 ④省快(貞和元—應永二三 A. D. 1345—1416)述 ⑤徳川時代寫 ⑥(寶龜院)

出家略授戒作法

①(日) Shuk-ke-ryaku-ji-kai-sa-ho. ②一卷 ③存 ④眞性録

出現光明會

①(日) Shutsu-gei-ko-hyo-e. (支) Chi-hsien-kuang-ming-hui. (梵) Rahn-sananta-mukta-nirveta(藏傳)

(藏) Hphags-pa bod-zer kun du bkye ba bstan-ba shes-dya-ba theg-pa chen-po-hi hdo. ②五巻 ③存、大寶積經第三〇—三四(大正一一・一六三 No. 310. 11) ④菩提流志譯 ⑤唐景龍二—開元元(A. D. 708—713)

①本經の名は經中に出現光經・現光經典・現光經と呼ばれてゐるが、つまり佛が其の身に赫灼たる光明を出現したまふ所以を種々の方面より説いた經で、全文は殆んど偈より成つてゐる。

〔第一巻〕佛が王舍城者闍嶺山に在せしとき、會中の月光童子が佛に何の業によつて斯く光明を得、光明を攝取し、光明を發起し、光明を顯現せらるゝかを質ね、佛が善業の因縁によつてと答へ、更に偈を以て精しく光明の種々の名稱を擧げ、其れ等が皆六度・四梵行・尊重三寶等の諸徳の結果に出づると説き、此の經を思惟し、出現光明の智を成就する者は如來に顯發はられて、眼の空性に通達し、其の功德は百千の塔を建て、諸佛に供養し、百千の妓樂もて舍利に供養するよりも過ぎてゐると、此の經の受持をすゝめられる。〔第二巻〕佛が此の經のために二十種の功德を受け、又は施したことを述べて月光に此の經を演說せんことを依頼し佛道を修め、佛の如く大法炬を燃して世間を照さんことを期待し、其の光を出現し得べき八十の道と否らざる道とを纏説せられる。月光は之れを聞いて大いに歡喜し、長い偈を以て佛徳を讚歎し、佛の如き智を成就して一切世間を利益せんと誓

ふ。(第三卷) 佛は満足の微笑を泛べ、金色の手もて月光の頂を摩でつゝ、佛が因位に燃燈佛の弟子摩訶として成佛して釋迦牟尼佛たらんとせし時、月光もその宣化を助けんと發願したことを應念せられ、正法滅せんとする時は衆生のために此の出現光經を開示せよと仰せられる。それから佛は大衆と共に城中に入らんとし、大地震動し、虛空中に殊妙の聲が開える。(第四卷) 此の空中の聲を聞いて諸の衆生は眼等の六根が清淨になる。佛は眞に如來を見る所以は眼の寂滅、眼の無有、眼の滅壞、眼の無常、眼の因縁生にして空寂無我なることを了知するにあることを述べ、佛の威神力で盲者は能く見、聾者は能く聴き、不完具者は完具となり、不安樂者は安樂となる。

〔第五卷〕 佛は更に神通力を以て空中に微妙の聲を出し、種々の陀羅尼の行を演説して、此の陀羅尼は如來の殊勝の力、威徳の力を成就し、世間の衆生を歡喜せしめ、煩惱を摧滅せしめ、功徳を増長せしめ、菩提の道に趣向せしむることを述べ、月光の家に行き、之れに告げて大乘に住する者に布施すれば、八十(實は五十三)の功徳があり、大乘に住して陀羅尼を成就せんとするには八十の非法を遠離すべきことを説かれ最後に法を宣説する上に於て特に眼性の空なるを了知すべきことを詳説される。佛が此の經を説き已るや月光童子等歡喜して、信受奉行する。(江田俊雄)

**出講義定** ①(日) Shuk-ko-ji-p. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大)

**出三藏記** ①(日) Shus-san-zō-ki. (支) Ch'u-san-sang-chi. 出三藏記集、僧祐錄 ②十五卷 ③存、大正五五・一・No. 215. 縮結一、二七・九一〇、北1055肆建、南1071肆建、元1067肆建、明北1469肆建、麗1050肆建、天1054肆建、指1015肆建、法1042肆建、至1532密勿、明南1589肆百、No. 1476 ④梁僧祐(元嘉二二)天監一七 A. D. 445—518)撰 ⑤〔參考〕禪籍志卷上

**出三藏記集** ①(日) Shus-san-zō-ki-shū. (支) Ch'u-san-sang-chi-shū. 出三藏記、僧祐錄 ②十五卷 ③存、大正五五・一・No. 215. 縮結一、二七・九一〇、北1055肆建、南1071肆建、元1067肆建、明北1469肆封、麗1050肆肆、天1054肆肆、指1015肆肆、法1042肆肆、至1532密勿、明南1589肆百、No. 1476 ④僧祐(元嘉二二)天監一七 A. D. 445—518)撰 ⑤梁天監九—天監一七(A. D. 510—518)

⑥出三藏記集全十五卷は律師釋僧祐の撰集せるものである。故に、又僧祐錄とも云ふ。本集は現存諸經錄中の最古のものに屬するが爲めに、佛教聖典學の研究上最も重要な資料の一として學者間に珍重せられつゝあるものである。

本集の内容組織は、既にその卷第一の序中に指摘されて居る如く、(一)撰緣起、(二)詮名錄、(三)總經序、(四)述列傳の四部に分れ、撰緣起はその卷第一に、詮名錄

は卷第二より卷第五に、總經序は卷第六より卷第十二に、述列傳は卷第十三より卷十五に收められて居る。尤も、この卷数は現存の出三藏記集の上に云つたものであつて、歴代三寶紀乃至内典錄等は之れを十六卷と記載し、本集の卷第十二に收められて居る釋僧祐法集總目錄序第三の中には「出三藏記集十卷、右一部第三帙」とあつて、本集の卷数を十卷となして居るのである。歴代三寶紀等の十六卷は、その當時の本集が十六卷に調卷されて居つたことに依るものであつて、その内容に變化があつた譯ではない。釋僧祐法集總目錄序の中に云ふ十卷は、多少不思議に見えるかも知れないけれども、この總目錄序をよく注意して見ると、その中に出三藏記集と別記しある釋迦譜、世界記、薩婆多部相承傳、法苑集、弘明集、十住律記、法集雜記傳名等の目錄及び序が、本集の卷第十二以後に收められて居るのを見る。この點から見ると、本集が最初に纏められた時は十卷であつたのであらうが、その後於てその内容中に收むる必要を認められたものは隨時之れを追加編入して行つた爲めに最後には十五卷又は十六卷のものとなつたのであらう。本集の内容の一般を概説するに、その第一卷は前述の如く撰緣起である。この撰緣起は彼がその序中に「緣起撰原始之本克昭」と云へる如く、本集の編纂の因縁、聖典成立の因縁等を記述せるものであつて

十誦律五百羅漢出三藏記第二  
善陳處胎經出八藏記第三  
胡漢譯經文字音義同異記第四  
前後出經異記第五

等が收められて居る。最後の前後出經異記は古譯經典と舊譯經典との間に存する用語の相違を表示したものである。

第二の詮名錄は、經錄に關するものであつて、この部分はその卷第二より卷第五に亘り本集の中心をなすものである。尤も、これを分量的に云へば、この詮名錄は十五卷の内容中四卷を占むるに過ぎないものであるけれども、本集其のものゝ編纂の動機は、この經錄の撰述にあつたものであつて、その餘の部分は畢竟經錄の編纂に關聯して便宜編入せしめられたものに他ならぬものである。これ本錄の内容中には經錄以外の種々なるものを藏して居るに拘らず、從來の藏經がこれを目錄部に收めて居る所以である。この詮名錄の内容に收められて居るものは次の如くである。

新集撰出經論錄第一	一八六〇部
新集條解異出經錄第二	四三七部
新集安公古異經錄第一	九二部
新集安公火譯經錄第二	九二部
新集安公涼土異經錄第三	一四二部
新集安公關中異經錄第四	一四七部
新集律分爲五部記錄第五	七九卷
新集律分爲十八部記錄第六	二四卷
新集律來漢地四部序錄第七	四部
出毘婆沙	卷第三



新集撰撰失譯雜經錄第一	一三〇	第六部	第四卷
新集抄經錄第一	一五七	〇部	卷
新集安公疑經錄第二	三五	二部	二卷
新集疑經錄第三	二〇〇	〇部	二卷
新集安公注經及雜經志	二〇〇	〇部	二卷
新集安公注經及雜經志	二〇〇	〇部	二卷
小乘迷學竺法度造異儀記	四二	四部	第五卷
第五	六二	二卷	
長安觀法師喻疑第六	六二	二卷	

この中×印を付した五項は直接經錄に關係のないものであるが、その餘のものは總て經錄に關するもののみである。この詮名錄の内容に就て述ぶる前に一言述べて置かなければならない點は、僧祐が本集の撰集した動機である。

僧祐が本集を撰集したる動機は、彼の住院（その住院が建初寺であつたか、定林寺であつたかは現在のところ確定的には云へないが）に輪藏を創設せんとする念願を起し、その輪藏の内容に如何なる聖典を蒐集すべきかに關して當時既存の經錄の研究を始めたことによるものである。つまり、彼は先づ當時既存の經錄中最も信用ありし釋道安の綜理衆經目錄を基本として蒐集經典の研究を始めたのであるが、この道安の經錄は經錄としては極めて信用すべきものであつたけれども、その内容は西晋代迄の譯經を記載するに止つて、東晋以後の譯經に就ては全然之れを記載して居らないものであつた。従つて、彼は東晋以後の譯經に就て、その當時存したる二三の經錄や、その時代の傳説に從つて自らそれを研究せざるを得なかつた。この意味の研究をなしつゝ、ある間に於て、又道安錄に存せざる西晋代以前の譯經に就ても、多少發見せるものがあつた。兎に角彼は道安錄を基本として各代の譯經の研究をなし、本錄の本になる草案を作り得たのである。然る後彼はこの草案を基礎にして彼の輪藏に收むべき聖典の蒐集に取掛つたのであつたが、斯く取掛つて見ると彼の草案に存して現在求め得られないものや、又彼の草案に存せざる經典にして、實物の集められたものも尠くなかつた。爰に於て彼はその草案に存して現在求め得ないものは未得經としてその旨を記し、從來無きものにして新たに得たものは之れを草案の上に追加し、斯くして最後に完成されたものが現在の出三藏記集である。従つて、この出三藏記集の詮名錄なるものは、その中に無本も合んで居るけれども、特に無本として記載されて居らないものは、總て彼の輪藏中に存したものを記載したものであるといふ點に於て特徴を持つものである。

如斯、この僧祐錄は道安錄を基本としたものである爲めに、その組織も大體道安錄の組織に從つて居るものである。道安錄なるものは本辭典に釋道安の綜理衆經目錄の項に説明する如く、新集安公經律論錄、新集安公古異經錄、新集安公失譯經錄、新集安公涼土異經錄、新集安公關中異經錄、新集安公疑經錄、新集安公注經及雜經志錄の七錄より成つて居つた爲めに、彼の經錄も亦大體之れに準據し、新集安公經論錄を基礎に新集撰出經論錄を作り、安公の古異經錄、失譯經錄、涼土異經錄、關中異經錄を基礎に置いて、その以外に發見された失譯經をば集めて新集撰撰失譯雜經錄を作り、安公疑經錄以外に發見した疑經を新集疑經錄に之れを纏めた。而して、道安錄になかつた彼自身の全然新しい試みとしては、新集條解異出經錄を作つて異譯經の整理をなし、新集撰撰失譯雜經錄中に條解撰目録關經なる一項を設けて、從來の經錄に存せる經にして未得のものを一括して整理をなし、又新集抄經錄を設けて本經の譯出後に抄出されたものをば別出せる如きがそれである。

以上の説明に依て、本集の詮名錄が撰集された大體の経路が明かになつた筈であるから、次には卷次に從つて各卷の内容を簡單に述べることになしたい。

卷第二は、前述の如く、新集撰出經論錄第一と、新集條解異出經錄第二の二項から成つて居る。然るに、卷第二の序文の中を見るに

新集撰出經律論錄第一  
 新集條解異出經錄第二  
 新集表序四部律錄第三

とあつて、實際にない新集表序四部律錄第三なるものが存するのみならず、内容の第一は新集經論錄になつて居るのに、この序では經律論錄になつて居る。これ恐らく僧祐が本錄を始め製作した時は、彼が律師たる關係上律を重視して經論以外に別出せんと意企した爲めに、その第一を經論錄とな

したのであるが、新集律來漢地四部序錄第七なるものを卷第三の終りに挿入した爲に、律のみを別出する必要がなくなつて、その翻譯に關する事項だけを經論錄第一の中に攝せしむるに止めた。従つて、經論錄第一は經律論錄第一と訂正すべき筈であつたのを、序中だけを訂正して本文の訂正を忘れたものであらう。又序中にある新集表序四部律錄は、前掲の新集律來漢地四部序錄と同一のものである筈であるから、これも始めには卷第二に挿入する豫定でこの序文を書いたのであるが、後に之れを卷第三に挿入することになし、その序文の記事を訂正することを忘れたものであらう。

新集撰出經律論錄第一は詮名錄中でも最も重要なもので、經錄分類中の所謂代錄に當り、各譯者の譯經を年代順に譯者別に記載したものである。而して、この中には竺摩騰譯四十二章經一卷以下失譯須達長者經一卷に至る四百五十部一千八百六十七卷の聖典を擧げて居るが、この中晋代以前の譯出經は安世高・支謙・支曜・嚴佛調・安玄・康孟詳・支謙・康僧會・朱士行・竺法護・曇摩羅察・安文惠・白元信・竺叔蘭・法炬・法立（本文には「自安世高以下至法立以上。凡十七家」とあるも、實際に計算すると以上の十六家に過ぎない。加之ものの中には朱士行の如き經典の送附者や、安文惠、白元信の如き筆者、又曇摩羅察の如き竺法護の本名迄も普通の翻譯者と同列に數へて居る矛盾はあるが）の十六家の譯經に關するものは、その下注に「安錄無」又は「安錄之闕」とあるも



のを除いては、總て道安錄を其の儘に繼承したものである。故に、西晋代の譯出經に關する限り、僧祐が自ら編入したものは竺摩騰譯四十二章經、竺朔佛譯道行經、維祇難、竺將炎、支謙共譯法句經、白延譯首楞嚴經、須賴經、除災經、白法祖譯惟述菩薩經の七經、及び「安錄無」の注ある支謙譯首楞嚴經以下六經、竺法護譯阿差末經以下四經だけである。而して、東晋代以後のものは、彼自身が「自衛士度以後、皆祐所新撰」と云へる如く彼の撰に係るものである。乍併、私が其れ等の内容を研究した上から云ふと、彼自身の集めた部分に對しては餘程研究の餘地のあるものが尠くないやうである。兎に角、本集のこの部分が今日の聖典史學者に非常に重視せらるゝ所以は、道安の綜理衆經目錄を其の儘繼承し、加之もそれを繼承して居る部分を明かにして居ることである。猶彼が道安錄を繼承するに當つても非常な苦心を拂つて居ることであつて、一體、道安錄なるものは、その内容は非常に尊重すべきものであつたけれども、彼が新集安公失譯經錄の序に於て「安錄誠佳。頗恨太簡。注目經名撮題兩字。且不列卷數行間相接。後人傳寫名部混糅。且朱點爲標。朱滅則亂。循空追求困於難了。斯亦瓊瑤之一玷也。」と指摘して居る如く、極めて簡潔なものであつて、經名の如きは二字を以て之れを示し、卷數を記載せず。極めて讀み難いものであつたのである。然るに僧祐は其の上に研究を加へ、完全な經名を安じ、その卷數を記入し、それを現在の形

に整へたことは非常な功績であつたと云はなければならぬ。而して、又本錄の經錄としての價値は、その基本になつた道安錄が極めて信用すべきものであつた上に、彼自身に依つて纏められた部分も現實に輪藏に蒐集された聖典と對象されて作られたものである爲に、比較的間違ひの尠いものである。このことが總て本錄の記載に絶對的の價値を認めんとする學者を生ぜしめ、中には他の經錄に記載があつても、本錄に記載のないものはそれを信用しないと云ふやうな見解を採る人迄も生ぜしめて居るけれども、本錄は隋代以後の經錄の如く、國家統一後に編纂されたものではなく、齊梁といふ一局地に於て蒐集された材料に基いて編纂されたものであるから、齊梁地方に流行して居らなかつた經典でも、他の地方に流行して居つたものも尠くないから、本錄を如何に信用すればとて、本錄に記載のないものはその時代に存しなかつたといふ如き見解は絶對に避けなければならぬところである。

前記卷第二に收められて居るものは、主として譯者の明瞭なる有譯本か、或は無譯であつても翻譯年代の明瞭なるもののみに限られて居つたが、卷第三以後のものは失譯の聖典を主體にして居るものである。これ道安錄が「其經有譯名則繼錄上卷、無譯名者則條目干下卷」の體裁に編纂されて居つたことに依つたもので、卷第三には道安錄中の古異經錄、失譯經錄、涼土異經錄、關中異經錄の四錄と、新集律分爲五部記錄、新集律分爲十八部記錄、新集律來漢地四部記錄の三錄を收めて居るけれども、後の三錄が直接經錄に關係のないものであることは、曩に述べた如くである。前記安公の四錄の中、古異經錄は道安がその譯者の明かならざる聖典中に於ても、特に古代の譯出經と見做したものを集めたもので、道地經中要語章一卷乃至四生長者難經の九十二部九十二卷を掲げて居る。この部分に記載されて居るものは、總て後の經錄に於ては後漢代失譯經錄中に收められるのを常として居る。次の安公失譯經錄第二には、修行本起經二卷乃至迦梅伽一卷の九十二部の有本經と、七車經乃至打毘雅法一卷の五十部の闕本との合計百四十二部一百四十七卷を記載して居る。是れ等の諸經は僧祐の時には前記の如く五十部の未得經を生ずるに至つたにしても、兎に角道安は現實に其れ等の經を見てその譯者を知り得なかつたものである。是れ等の失譯經は後の經錄に於て譯者を撰定されるものもあるが、然らざれば魏吳代又は西晋代の失譯經中に收

められて居る。涼土異經錄及び關中異經錄は、涼土並に關中に流行せる諸經の目錄であつて、前者には大忍辱經以下の五十九部七十九卷、後者に阿難爲難道呪經以下の二十四部二十四卷を收めて居る。是れ等は後の經錄に於ては魏吳代の失譯經に入れられて居る。その卷第四には前記安公の四錄に記載されて居るもの以外に、僧祐が見聞し又は現物を蒐集することを得た失譯經をば、新集失譯雜經錄の名に依つて之れを記録して居る。この錄の内容中に收められて居るものゝ總數は一千三百六部一千五百七十卷であつて、その中大方便思經七卷乃至三歸五戒神王名の八百九十五卷は、彼が現實に之れを書寫して經藏内に收めたものであり、雜譬喻經八十卷乃至異出了本經一卷の四百六十部六百七十五卷は、既存の經錄にその名を存するに拘らず、未だその本を見ざりしものである。

卷第五には新集抄經錄、新集安公疑經錄、新集疑經錄、新集安公注經及雜經志錄の四錄と他に小乘迷學竺法度造異儀記、長安叔法師喻疑の二を收めて居る。然し、後二者が經錄に關係のなきものであることは前述の如くである。爰に抄經とは既に譯出されたる聖典を後人が抄約したるものであつて、その翻譯に當つて原本を抄譯したものの意味ではない。この錄中には抄華嚴經十四卷以下四十六部三百五十二卷を掲げて居る。安公疑經錄は安公に依つて査定された疑經であつて、寶如來經以下二十六部

三十卷を挙げ、僧祐の新集疑經疑雜錄には疑經と疑撰とを合して四十六部五十六卷を擧げて居る。猶新集安公法經及雜經志錄を飛ばして、其の後に齊末太學博士江泌處女尼に誦出の寶頂經一卷以下二十部三十五卷、鄂州投陀道人妙光誦出の薩婆若陀眷屬莊嚴經一卷、作者不明の法苑經一百八十九卷抄爲法捨身經六卷を疑經として記載して居る。安公の注經及雜經志錄は釋道安が彼の經錄中に自記して置いた自著の目錄である。

〔卷第六〕  
卷第六より卷第十二に至る七卷は經の序、後記を集めたものであつて、各卷に收められて居る内容は

四十二章經序、安般守意經序、安般注序、安般守意經序、陰持入經序、人本欲生經序、了本生死經序、十二門經序、大十二門經序、法境經序。

〔卷第七〕  
道行經序、道行經後記、放光經記、合放光光讚略解、須臾天子經記、普曜經記、賢劫經記、般舟三昧經記、首楞嚴三昧經注序、合首楞嚴經記、首楞嚴經後記、新出首楞嚴序、法句經序、阿維越致進經記、魔逆經記、慧印三昧及濟方等學二經序讚、聖法印經記、文殊師利淨律經記、王子法益壞目因緣經序、合微密持陀以尼總持三本。

〔卷第八〕  
摩訶鉢羅若波羅蜜抄序、小品經序、小品注經序、小品經序、大小品對比要抄序、正法華記、正法華後記、法華宗要序、法華經後

序、持心經後記、思益經序、維摩詰經序、合維摩詰經序、毘摩羅詰提經疏序、自在王經後序、大涅槃經序、大涅槃經記序、六卷泥洹經記、二十卷泥洹經記。

〔卷第九〕  
華嚴經記、十住經合注序、漸備經十住胡名并書叙、菩薩善戒菩薩持二經記、大集虛空藏無盡意經記、如來大哀經記、長阿闍梨經序、中阿闍梨經序、增一阿闍梨經序、四阿闍梨抄、優婆塞戒經序記、菩提經序、關中出禪經序、廬山修行方便禪經序、禪要祕密經記、修行地不淨觀序、勝鬘經序、勝鬘經序、文殊師利發願記、賢愚經記、八吉祥經後記、無量義經序、譬喻經序、百句譬喻經前記。

〔卷第十〕  
道地經序、沙彌十慧章句序、十法句義經序、三十七品序、舍利弗阿毘曇序、僧伽羅刹經序、僧伽羅刹集經後記、婆須蜜經序、阿毘曇序、阿毘曇心序、阿毘曇心序、三法度記、三法度記、八捷度阿毘曇根捷度後別記、十四卷雜婆沙序、六十卷毘婆沙序、雜阿毘曇心序、後出雜心序、大智釋論序、大智論記、大智論抄序。

〔卷第十一〕  
中論序、中論序、中論序、十二門論序、成實論記、略成實論記、成實論抄序、訶梨跋摩傳序、菩薩波羅提木叉後記、比丘尼戒本出本末序、比丘大戒序、大比丘二百六十戒三部合異序、關中近出尼二種禮文夏坐雜十二事并雜事共卷前中後三記、摩得勒伽後記、善見律毘婆沙記、千佛名號序。

〔卷第十二〕  
宋明帝勅中書侍郎陸澄撰法輪目錄序、齊太宰竟陵文宣王法集錄序、釋僧祐法集法集總目錄序、釋迦譜記目錄序、世界記目錄序、薩婆多部資記目錄序、法苑目錄序、弘明集目錄序、十誦律義記目錄序、法集雜記銘目錄序。

の如くである。今日に於ては是れ等の序等の大多數のものは藏經中に於ける其れ等の聖典の卷頭に安ぜられて居るけれども、未だ斯の如きことなかつたこの時代に、これだけの序や後記を集め得たといふことは、彼の非常な貢獻に歸すべきもので、聖典譯出の史實因縁等を究むる上に極めて貴重な材料となつたのみならず、次の第十三卷以降に於ける僧傳の編纂に對しても有力な材料を提供して居るものである。實際十三卷以後の僧傳を通觀して見ても、その材料の半ばは前記の經序經記に仰がれて居るものである。

卷第十三より卷第十五に至る三卷には、次の表に示す如く、安世高以下翻譯三藏乃至義解の法師三十有二人の列傳を掲げて居る。その一々の傳記は次の如くである。

〔卷第十三〕  
安世高傳、支謙傳、安玄傳、康僧會傳、朱士行傳、支謙傳、竺法護傳、竺叔蘭傳、尸梨蜜傳、僧伽跋澄傳、曇摩難提傳、僧伽提婆傳。

〔卷第十四〕  
鳩摩羅什傳、佛陀耶舍傳、曇無讖傳、佛陀跋陀傳、求那跋摩傳、僧伽跋摩傳、曇摩蜜

多傳、求那跋陀羅傳、沮渠安陽侯傳、求那毘地傳。

〔卷第十五〕  
法祖法師傳、道安法師傳、慧遠法師傳、道生法師傳、佛念法師傳、法顯法師傳、智嚴法師傳、寶雲法師傳、智猛法師傳、法勇法師傳。

尤も、この三十有二人の他にも、例へば安玄傳内に嚴佛調、康孟詳、白延等の傳を記載して居る如く、一人の傳内に數人の傳を記載して居るものが尠くないから、そこに記載されて居る人名數といふ點に至ると、更にその人名は増加すべき筈である。この出三藏記集の僧傳は寶唱の名僧傳と並んで、僧傳としては最古のものである。梁の慧皎の高僧傳の如きは、大體、寶唱の名僧傳を基本に増補を加へたものと考へられるものであるが、この慧皎の高僧傳と出三藏記集の高僧傳を比較して見るに、前者は殆ど後者の増補なるかの如き感がある。猶開元錄に従へば、寶唱は僧祐律師の高足であつたといふことであるから、寶唱の名僧傳も殆んどこの出三藏記集の僧傳を繼承したものと考へられなければならない。兎に角、本集の僧傳は僧傳研究に對する最も重要な資料であると共に、その資料的價值も甚だ大なるものである。

以上の説明に依つて、出三藏記集の内容組織の大體とそれに對する必要な批評を了した筈である。猶最後に一言説明して置かなければならない點は、本集の撰述の年時及び場所である。先づその撰述の時代に就

名所行發 (名庫書) 著編所現 ① 月年の刊藏 ② (書考參書釋註) 書末 ③ 說解卷内 ④ 代年作者 ⑤ 著者 ⑥ 缺存 ⑦ 數卷 ⑧ (名書) 名題 ⑨ 號字記

て云へば、歴代三寶紀は卷第十五に「出三藏集記録、齊建武年律師僧祐撰」と云ひ、大唐内典録は卷第十に單に「齊末梁初沙門釋僧祐撰」となして居る。齊の建武年は西紀四九四年から四九七年に至る間であり、梁の天監年はそれから恰度五年目、即ち五〇二年から始まるのであるから、兩説とも時代的に餘りかけ距れたものではないにしても、兎も角、三寶紀と内典録との間にはその編纂の時を異にして居るものである。

開元、貞元の二録は内典録に依り「梁建初寺沙門釋僧祐撰」と云つて居るが、至元録は卷第十に於て「蕭齊建初寺沙門僧祐撰」と云ひて三寶紀に加増して居る。乍併、本集の卷第五の新集雜經志録第四の條下を見ると、梁天監九年、郢州投陀道人妙光なるもの、誦出せる薩婆若陀眷屬莊嚴經一卷なるものに關する記事が載せられ、又同處の「僧法尼所誦出經入疑録」を見るに、天監四年、彼女が十六歳の時に誦出したる踰陀衛經、阿那含經、妙音師子吼經等のものが記載されて居る。此れ等の事實より推す時は、本録の完成は尠くとも天監九年以後の製作に係るものと見なければならぬのであらう。而して、この天監九年(A. D. 519)は僧祐の六十六歳の時であつて、七十四歳の時、即ち天監十七年(A. D. 516)に彼は示寂してゐるから、本録は天監九年より同十七年に至る間にその撰集が完成されたものとして考へられなければならない。

本録撰集の場所に就ては、建初寺説、定林寺説の二説がある。然し、建初寺は彼の

示寂の場所であり、定林寺はその塔所のある所であるから、この兩者は何れも彼に縁故の深かつたところである。従つて、俄かにその何れとも斷ずることは出来ない。若し強いて現在の文献だけでこれを定めなければならぬものとすれば、大唐内典録が梁天監年中定林寺に於てと云つて居るものが、前述の製作年代と合致して居るから、従つて、或は之れを以て正説としてよいと思ふ。

●(参考) 法經録、歴代三寶紀、彥琮録、内典録、大周刊定目錄、開元録、貞元録、慧皎の高僧傳 (林屋友次郎)

### 出生一切如來法眼遍照大力明王經

●(日) Shus-shū-issai-nyō-rai-hō-gen-hen-jō-dai-rikū-myō-dō-kyō (支) Chū-sheng-i-chi-ich-jū-lai-fa-yen-pien-cho-tai-ming-wang-ching. 遍照大力明王經 ②卷 ③存、大正二一・二〇七No. 1243、縮成五、二一六・四、北1103相、南1118相、元1112相、明北1014流、清1014流、麗1044流、法1221十、Nj. 1019 ④宋法護(應和三一)康平元 A. D. 963—1038)譯

①本書は一時世尊、摩訶母質隣那山大寶樓閣中に於て金剛手菩薩、降三世明王甘露軍荼利、聖降三世明王、金剛鉤、金剛索、白衣觀自在菩薩、多羅菩薩、毘俱胝菩薩、馬頭明王、摩賀大白大吉祥菩薩等の百千の菩薩摩訶薩や日月天焰摩火天閻提那羅延羅叉主水龍主風天俱尾羅、伊捨囊帝釋天等東南西北四方の諸天に前後に圍遶せられて大教明王呪を説かれた。(明王とは陀羅尼のこと)

と)。而して此の明王呪は極めて深甚不思議の功德力用を有するを以て慙慙に受持誦する者は死者は蘇生し懷娠者は安穩にして諸苦を離れ、陣中に入て傷害なく早天に大雨を降らし、乃至轉輪王となつて四天下に王たり未來世には阿耨多羅三藐三菩提を得る等、専ら陀羅尼の効驗を説いたものである。(岡田契昌)

●(日) Shus-hō-gi (支) Chū-sheng-i-chi-ich-jū-lai-fa-yen-pien-cho-tai-ming-wang-ching. 金剛頂瑜伽三十七尊出生義、三十七尊出生義 ②一卷 ③存、大正一八・九七五No. 872、縮成二、二續一・二・四 ④不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)譯 ⑤唐天寶五—大曆九(A. D. 746—774) ⑥金剛頂瑜伽三十七尊出生義の下を見よ。

### 出生菩提心經

●(日) Shus-shō-ho-dai-shin-kyō (支) Chū-sheng-pū-ti-hsin-ching. 出生菩薩經、出生菩提經 ②一卷 ③存、大正一七・八九一No. 837、縮成二、二二・四、北471羊、南85羊、元479羊、明北46羊、清46羊、麗44羔、天477羊、法459讀、明南478行、Nj. 450 ④那崛多譯 ⑤隋開皇五—二〇(A. D. 585—600)

①迦葉初めて佛を見たてまつり、佛は迦葉のために三乘を説きたまふを叙するものである。王舎大城の波羅門大迦葉は大蓮華の夢を見て、當時沙門瞿曇が大菩提を證したるをき、瞿曇に往詣してこの夢を問ふたのである。世尊は四種夢を説いて蓮華の夢は必ず大利益あるだらうといふ。その大利益とは一切智であるとして偈を以て、何事

を欲するも發心せば能くそれを得るといひ、更に迦葉の「發心者は幾許の福業を攝するや」との問に對し偈を以て答へ、而も發菩提心者は解脱中に於て退轉なしと云ふ。但し事に就いて三種の菩提がある。聲聞菩提は阿耨多羅三藐三菩提を發して他をして菩提心を發さしめることをしない。辟支佛菩提は自ら菩提心を發して他をして菩提心を發さしめない。阿耨多羅三藐三菩提は自ら阿耨多羅三藐三菩提心を發し亦他をして阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめるものである。併しこれは乘に於て差別あるのみで解脱と道に於ては差別なきこと、譬へば王路の如く、象驢者馬驢者驢者との差別はあつても路と至るべき一城には差別ないのである。然してその差別ある乘に勝劣あるも言をまたない。譬へば河を渡るに草を以て筏として渡る者も、皮船を以て渡るものも等しく彼岸に達するけれども大船を造つて多人衆と共に渡るには如かない。自ら菩提心を發し他をも發さしむる人は實に摩訶行に至るを得るのであるといひ、最後に破魔業會修多羅を説いて魔を降し、迦葉等此の經をきいて歡喜奉行する。三乘差別行相を述べ二乘と菩薩乘との勝劣を相待の上に説くのである。(三好鹿雄)

●(日) Shus-shō-ho-dai-shin-kyō (支) Chū-sheng-pū-ti-hsin-ching. 出生無邊門陀羅尼不同集 ①(日) Shus-shō-mu-hen-ta-ra-ni-tō-shū. 出生無邊門陀羅尼不同集 ④定深(—天仁元 A. D. 1108—) ●(参考) 本朝台祖撰述密部書目

### 出生無邊門陀羅尼儀軌

●(日) Shus-shō-mu-hen-ta-ra-ni-gi. 出生無邊門陀羅尼儀軌 ①(日) Shus-shō-mu-hen-ta-ra-ni-gi. 出生無邊門陀羅尼儀軌 ④定深(—天仁元 A. D. 1108—) ●(参考) 本朝台祖撰述密部書目

出生無邊門陀羅尼儀軌 ①(日) Shus-shō-mu-hen-ta-ra-ni-gi. 出生無邊門陀羅尼儀軌 ④定深(—天仁元 A. D. 1108—) ●(参考) 本朝台祖撰述密部書目

Shus-shō-mu-hen-mon-da-ra-ni-gi-ki. (支) Ch'u-sheng-wu-pien-men-to-lo-ni-i-kuai. ①一卷 ②存、大正一九・六七九 No. 1010、縮成九、三十帖策子第二九之内 ③唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)譯

④本書は出生無邊門陀羅尼經に依つて作られたる供養法である。先づ卷頭に「眞言如經」として之を省略し、凡そ正覺を成ぜんとせば斯の法最も深秘なり云々と述べて本尊羯磨波羅蜜菩薩の形像を説く。謂く、左手金剛拳にして心に當て蓮花を持ち、般若の梵篋を置き。右手は説法の相掌を揚げて五指を申へ忍(中指)の拳に羯磨十字の金剛輪を現じ、首に五如來冠を戴き、遍身草綠色なりと説き、更に本尊の身の支分の上に数字羅字葱字迦字馱字著字又字の八字を次の如く心・毫・舌・頭・右・掌・左・掌・右・足・左・足に布置する法等を説く。出生無邊門曼荼羅は本儀軌と別出不空譯本とに依つて贅けるものである。

⑤(參考) 淨土依憑經論章疏目錄 ⑥寫本 (正大)一六〇・一四 (岡田契昌)

**出生無邊門陀羅尼經** ①(日)Shus-shō-mu-hen-mon-da-ra-ni-kyō(支)Ch'u-sheng-wu-pien-men-to-lo-ching. (梵藏) sheng-wu-pien-men-to-lo-ching. (梵藏名次經參照) ②一卷 ③存、大正一九・七〇二 No. 1018、縮成九、卅一一・一、北333知、南333知、元331知、明北356莫、清356莫、麗352良、天311知、法334男、至359善、明南335得、元360 ④唐智嚴(一開元九 A. D. 721—)重譯

⑦本書は不空譯出生無邊門陀羅尼經の同本異譯である。而して内容は全體に於て同様であるが他の諸本よりも整つて居り、佛の色身たる父母所生の身と如來の法身たる無盡無滅の身を區別したり又は遍計所執依地起性圓成實性眞如等の語を使用する所は他に類がない。

⑧(參考) 淨土依憑經論章疏目錄 (岡田契昌)

**出生無邊門陀羅尼經** ①(日)Shus-shō-mu-hen-mon-da-ra-ni-kyō(支)Ch'u-sheng-wu-pien-men-to-lo-ni-ching. (梵)Ananta-mukha-nihara-dharaṇī(引用) (藏)Hphags-pa sgo mthah-yus pas-bags= rub-pa shes-bya-pai-gzugs 無邊門陀羅尼經、出生無邊門經 ②一卷 ③存、大正一九・六七五 No. 1009、縮成八、卅一五・八、北356惠、南356佐、元1353佐、明北961興、清931興、麗1105尹、明南998流、元956 ④唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)譯

⑤本經は空海圓仁圓珍の將來する所。貞元錄第二十二によれば不空の譯する本經には此の外同本異譯八本あることを説く。八本とは謂く、(一)無量門微密持經一卷、吳月支優婆塞支謙譯。(二)出生無量門持經一卷、東晉天竺三藏佛跋陀羅譯。(三)阿難陀目佉阿離陀經一卷、宋天竺三藏求那跋陀羅譯。(四)無量門破處陀羅尼經一卷、宋西域沙門功德直共支暢譯。(五)阿離陀目佉尼阿離陀羅尼經一卷、元魏天竺三藏佛陀扇多譯。(六)舍利弗陀羅尼經一卷、梁扶南三

藏僧伽婆羅譯。(七)一向出生菩薩經一卷、隋天竺三藏闍那崛多譯。(八)出生無邊門陀羅尼經一卷、大唐至相寺沙門釋香嚴譯。本經は薄伽梵、曾て毘舍離城大林重樓閣に在せし時、三千大千世界や十方如恒河沙數佛國土の中に住する諸多の聲聞乘緣覺乘や諸大菩薩の來集を求め、其衆會の中に於て陀羅尼法要を説かれる。先づ、菩薩に四清淨行法ありとて有情清淨、法清淨、願清淨、佛土莊嚴功德清淨を説き、次に四種悅意法ありとて、身悅意、語悅意、意悅意、生悅意を説き、また四陀羅尼門とて入出生無盡陀羅尼門、入衆生根善巧陀羅尼門、入業報善巧無爲陀羅尼門、入甚深法忍陀羅尼門を出し、次に世間他等の陀羅尼をあげて其義を詳説し此の出生無邊門陀羅尼義に通達すれば不退轉を得て無上正等菩提を證すと述べ、更に此の陀羅尼を受持する功德の廣大なることを偈頌を以て重説す。次に菩薩は四法を成就して陀羅尼を得といふ。所謂四法とは、貪欲に著せず、諸の有情に嫉妬を生ぜず、一切自己の財物を捨施して心追悔なし、晝夜に法を愛しまた法を自ら娛むことである。また次に菩薩は四法を成就して陀羅尼を得といふ。所謂四法とは阿蘭若(空寂の所)行を修習すること、深法忍辱力に住すること、利養名聞に執着せず、諸の所愛物乃至身命をも顧戀せざることである。次に数字羅字・羅字・羅字・羅字・羅字・羅字・羅字・羅字等の八字の義を思惟し書寫し半月に讀習すべきことを勤め、次に此の陀羅尼を修習せば四種の功德たる諸佛皆攝受

し、諸魔の障なく、業障速に遠離することを得、無礙辯才を獲得することを説く。次に持光轉輪聖王の子不思議功德寶吉祥が寶吉祥威光王劫如來に承事出家して無上菩提を得たことや、長者の子日月幢が、此の出生無邊陀羅尼を開持して無上菩提を證したことを説き、又此の出生無邊陀羅尼を誦持せば八大藥叉と八大菩薩が晝夜に加持擁護すとて、八大藥叉の梵漢名と八大菩薩とをあげ。謂く、戊囉藥叉唐に勇猛、涅哩茶藥叉、堅固、鉢囉部藥叉、主宰、那羅延末羅藥叉、那羅延力、左哩怛囉末底藥叉、行慧、訥達沙藥叉、難摧、迦摩囉藥叉、囉嚩、蘇磨呼藥叉、妙臂、八大菩薩は、遍照菩薩、照明菩薩、慧光菩薩、日光菩薩、警覺菩薩、滿一切意樂菩薩、星宿王菩薩、行慧菩薩、而して出生無邊門經曼荼羅は本經と別出の儀軌によりて贅けるもの。猶ほ本經の最後には梵字眞言を靈雲寺版普通眞言藏に依つて載せてある。

①刊本(龍大、二一八・八) (岡田契昌)

**出生無邊門陀羅尼不同集**

①(日)Shus-shō-mu-hen-mon-da-ra-ni-i-do-shū. 出生無邊陀羅尼不同集 ②定深(一天仁元 A. D. 1108—) ③(參考) 諸宗章疏錄第三

**出生無量門持經** ①(日)Shus-shō-mu-yō-mon-ji-kyō(支)Ch'u-sheng-wu-pien-men-ohin-ching. (梵藏) sheng-wu-pien-men-ohin-ching. (梵藏名次經參照) ②成道降魔得一切智經、無量門持經、新微密持經 ③一卷 ④存、大正一九・六八二 No. 1012、縮成九、卅一一。

一、北321知、南322知、元323知、明北323  
英、清323英、麗326良、天335知、法319  
男、至588善、明南380岡、Nj. 326 ⑤東晋  
佛陀跋陀羅(升平三—元嘉六 A. D. 359—  
429)譯

①本書は別出の空譯出生無邊門陀羅尼經  
の同本異譯である。而して彼と對比するに  
譯語の上に於て相異なるものがある。例へば  
彼の四清淨法に對し此は四無盡清淨法門と  
て、衆生淨、法淨、辯才淨、佛土嚴淨を出  
し、彼の四種悅意法に對し、四最勝和悅之  
法とて、身和悅口和悅意和悅方便和悅を出  
し、四陀羅尼門に對し、四種微妙持門と  
て、出生無量門持、甚深法忍持、善於衆生  
諸根持、善於衆生因果持を出し、其他閑居  
寂志、得深法忍不求利養、一切内外盡施無  
遺といひ、八大夜叉を八大鬼として、勇健  
神、強力神、自在神、雄猛神、知行神、難  
勝神、鳩摩羅神、善臂神を説き八菩薩とし  
て照明十方天子、離欲行天子、慧光天子、  
如日天子、眞諦天子、願滿天子、星王天  
子、知行天子を出す。要するに此の陀羅尼  
を思惟し書寫し讀誦すれば其功德は無量廣  
大にして、諸鬼神諸菩薩の擁護を得て阿耨  
多羅三藐三菩提を成ずることを得と説く、  
但し本書には陀羅尼は出してない。(岡田契昌)

出定後語

①(日) Shutsu-jō-ko-go.  
②二卷 ③存 ④富永仲基(一延享元 A. D.  
1741)述 ⑤文化二刊 ⑥(正大、一〇七、  
二〇九)龍大、二八一三・二五研佛(谷大、  
外大・五五七)立大、A〇五・一五五(帝國、

一三九・一九二)(京大、一・二〇シ・一三)  
出定笑語 ①(日) Shutsu-jō-shō-go.  
佛道大意 ②七卷 ③存、平田篤胤全集第  
一(A. D. 1776—1843) ④平田篤胤(安永  
五一—天保一四 A. D. 1776—1843)述 ⑤文  
化一〇(A. D. 1813)

①本書は平田篤胤の排佛書の尤なるもの  
で、富永仲基の「出定後語」に倣つて作つた  
言文一致體の書で、巻頭に「撰是出定笑  
語の大意で、演説することは、先第一に天  
竺の國の水土風俗より致して、其國の始の  
傳説出來、また釋迦一代のあらまし、また  
もろゝの佛教一部一册として釋迦のまこ  
とのものでなく、残らず後人の記したるも  
のなる憚な論辨、さて佛法が諸越へ傳り、  
夫より御國へつたはつたる事のあらゝ、  
また御國に有所の諸宗の始り、および其宗  
旨々々の立かた、さて佛法の本意又當時に  
おる者の佛法の心得かたなどの事を申すも  
のでござる」と記した通り、俗談平語を以  
て排佛的に記述論評をし、第一卷は西域記  
其他に依りて印度の地理氣候風俗、四姓の  
別、古傳説を述べ、釋氏の系統、釋尊の降  
誕より納妃、出家、修行に就て一々深刻に  
粉飾の記事を剔抉し、第二卷は初轉法輪よ  
り、諸國遊行に起れる事を山ごと、神通を  
幻術とし、諸弟子の出家につきて絮説、  
長阿含等に依りて入涅槃の前後の事狀を記  
し、衆聖點記に依りて佛滅年紀より周の穆  
王の五十三年二月十五日説の謬れるを指摘  
し、周の敬王の三十四年、日本の懿德天皇  
の二十五年なりといひ、六百年も懸値があ

出定笑語

ると冷かして、第三卷には釋尊後敎の結集  
のことを述べ、經典が金口直説にあらずし  
て後世の作なることをいひ、此處で篤胤は  
其師本居宣長の玉勝間に依りて、富永仲基  
の「出定後語」の名著なることを知り、これ  
を入手するまでの苦心、次いで服部天遊の  
「赤裸々」を得たこと、この二書に依りて本  
書を著はしたと語り、結集當時の上座部、  
大乘部の分れた事、大乘非佛説を高張し、  
經典成立の前後を擧げ、華嚴、般若、法華  
の諸大乘經、大日、阿彌陀、觀音等のこ  
と、淨土敎のことをいひ、次いで佛教の系  
統を論じて龍樹のことを述べ、支那傳來の  
時代と、道教との關係をいひ、第四卷には  
我國傳來當時の蘇我物部兩氏の論争軋轢を  
叙して物部氏を揚げ、厩戸皇子を貶し、令  
人親王の史筆を難じ、三論、法相、律、華  
嚴、天台、眞言、禪の渡來順序に略記し、  
淨土、眞宗、日蓮の日本新興の諸宗派を述  
べて、此等の諸宗も畢竟禪の所謂見性治心  
に異ならないとて、多くの信徒を持つ眞言、  
天台、淨土の各敎の宗旨を述べ、經文を援  
引し、佛は覺であり、性は眞心で、その立言  
は面白いが、各宗派の開祖達の行ひが、篤  
胤等の所謂眞道と異つてゐるので非難を放  
ち、當時の僧徒の墮落方面を引いて難じた  
上、國法なれば是非もないとて、本居宣長  
の言を引いて「學問するは道を明める爲め  
で、これは道でない事だなど、國法を非  
難すべきでない」と筆を收めてゐる。

出定笑語附録

①(日) Shutsu-jō-shō-go.  
②存、平田篤胤全集第一  
—1843)述 ③文化一四刊 ④(立大、A〇  
五・一五六)龍大、研佛(正大、一〇九一・一  
一五)

出定笑語和解

①(日) Shutsu-jō-  
go-ka-ji.

ること、不應行爲などを擧げ、佛法は不吉  
なりとて、神宮の忌詞を列べ、地獄變のこ  
と、阿彌陀、觀音のこと、善門品のこと、清  
水觀音、千手觀音、盧遮那佛、稻荷のこ  
と、在家佛壇のことより年忌を難じ、宇治  
拾遺の穀屎聖の話を引いて嘲つてゐる。卷  
一下及卷二は神敵二宗で、卷一下には淨土  
眞宗を非難攻撃し、正實直言記を引いて、  
立敎、安心を難じ、戰國時代の門徒一揆、  
天明京都出火の際の門徒の行爲を排してゐ  
る、卷二は日蓮宗に對する非難で、法華勸  
請の神に非ざれば神ならずといふこと、日  
蓮の家系、菩薩號のこと、淨土宗の宗論、  
不受不施のこと、蓮華往生、法華經の妙の  
こと、不信法華のことなど痛烈に攻撃して  
ゐる。

本書に對しては法蓮は「羊狗辨」を、時非  
庵主は「唾笑語」を、良月は治鳥の名を以て  
追蠅拂を著はして、その妄を辨じ、「しりう  
ご」との作者は、聖德太子平田篤胤を尊ると  
題して篤胤の短視僻見を指摘した。本書は  
徳川幕府末期に出でて、遂に明治維新の廢  
佛毀釋の導火となつたのである。

出定笑語附録

①(日) Shutsu-jō-shō-  
go-ka-ji.

shu-go-wa-re. ①一卷 ②存 ③平田篤胤(安永五一)天保一四A.D.1776-1843)述、湯谷其守解 ④明治二七刊 ⑤(帝國)・六六・一八六)

**出乘師子吼經** ①(日)Shu-ji-shi-shi-ka-gyō. (支)Ch'u-cheng-shih-tai-hou-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④(參考)出三藏記第五、法經錄第二、仁壽錄第四、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

**出世元意** ①(日)Shus-se-gwan-i. 法華念佛同體異名事 ②一卷 ③存、眞宗假名聖教第三、眞宗法要第六之内、眞宗聖典全書之内 ④覺如(文永七一)觀應(11A.D.1270-1331)撰

⑤眞宗法要本、假名聖教本共に出世元意と題し、次に「法華念佛同體異名事」と置く、寛永元年に成れる一雄の眞宗正依典籍集、已下寶曆三年に成る僧鑑の眞宗法鏡左券に至るまで、いづれも法華念佛同體異名事又は法華念佛同體異名としてある、明和二年刊行の眞宗法要に於て出世元意の題を見、已後此題を以て呼ばれることとなつたやうである。所が著者の第二子從覺の慕歸繪詞卷十に、覺如の著述を並べた後に「この外に法華念佛同體異名のこと、いへるうす雙紙これあり」と云へるものが此書に當るものであることは疑ふべくもないから、此書の本來は出世元意なる題目は存せなかつたのを後人が内容から加へたものであり、眞宗法要は其本に依つたのであらう、此書には法華と念佛とが同體異名であるから、法華が

釋尊出世の本懐なると等しく、念佛も釋尊出世の本懐なりと示されてあるから法華念佛同體異名事と題せられ、それを出世元意と呼ばれたのは元意は本意又は本懐と云ふに同じであつて、其内容から名づけられたのであらう、出世の元意なる語は著者も口傳鈔第十五章に用ひられて居るところである。

此書は僅かに二紙に過ぎない短篇であつて、其内容は法華經が醍醐味であつて、出世の本懐たるが如く、淨土眞宗の經典たる大無量壽經も醍醐味であつて出世の本意であると云ふ、法華念佛同體の說と、法華の說時に當つて王宮興逆の事件があつて觀無量壽經が説かれたのであるから、兩經は同時の說であると云ふ、法華念佛同時の說によつて、同體異名の說を立て、しかもそこに自ら劣機救済に於て念佛最勝なることを顯はし、遂に念佛こそ唯一眞實の教法なることを暗示して居るものである、これは法然の選擇集、親鸞の教行信證等の意を承けて、當時尙ほ教界の權威たる天台宗、新興宗教たりし日蓮宗の法華高調の說に對抗したものであらう。

此書の刊行は慧琳の和語聖教目録には眞宗法要が最初であるとし、琢成の關典錄また其說である、所が別に刊時不明の一町板が現存し、それには出世元意の題目なく法華念佛同體異名事とし、末尾に覺如上人作としてある、其谷大所藏本には明和四年の慧琳の書入ありと云へば其已前のものであらう、眞宗法要及び假名聖教に收められて

から廣く行はれた。

⑥(註釋) 出世元意辛卯錄(宜成)、出世元意略述(覺如)

⑦(參考) 淨土眞宗教典志第一 ⑧文化八、本山藏(谷大、宗小・八二) (杉紫朗)

**出世元意聞書** ①(日)Shus-se-gwan-i-ki-ki-gaki. ②一卷 ③存 ④義導(文化二)明治一四A.D.1805-1831)述

⑤元治元寫 ⑥(谷大、宗大・三八五七)

**出世元意講義** ①(日)Shus-se-gwan-i-ko-gi. ②一卷 ③存 ④觀月(天明七)安政六A.D.1787-1835) ⑤寫本(谷大、宗大・三八五六)

**出世元意講義** ①(日)Shus-se-gwan-i-ko-gi. ②一卷 ③存 ④義導(文化二)明治一四A.D.1805-1831) ⑤寫本(谷大、宗大・三七二)

**出世元意辛卯錄** ①(日)Shus-se-gwan-i-shin-bo-roku. 出世元意聞記 ②一卷 ③存、眞宗大系第二六 ④宜成(安永六一)文久元A.D.1777-1861)述 ⑤天保二辛卯(A.D.1831)七月

⑥出世元意は覺如上人の眞撰にして法華念佛同體異名なりと明すに在る、今、辛卯錄は天保二年辛卯七月皆遠院宜成が河内國西瓜破村恩敬寺に於ける講義書で有る其の叙述は一、來意二、大意三、釋名四、入文の次第を以てし第四、入文の下に於て標名本文の二つを分ちて辯ず。

**出世元意隨聞記** ①(日)Shus-se-gwan-i-zuin-mon-ki. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、宗大・一九八〇) (水谷壽)

寫本(谷大、宗大・二〇三六)

**出世元意聽記** ①(日)Shus-se-gwan-i-ochi-ki. ②一卷 ③存 ④惠然(元祿六一)明和元A.D.1693-1764)述 ⑤寫本(龍大、研眞)

**出世元意丁巳錄** ①(日)Shus-se-gwan-i-tei-shi-roku. ②二卷 ③存 ④崇宣(安政五A.D.1838)述 ⑤(參考)眞宗大系刊行豫定書目

**出世元意聞記** ①(日)Shus-se-gwan-i-mon-ki. 出世元意辛卯錄 ②一卷 ③存、眞宗大系第二六 ④宜成(安永六一)文久元A.D.1777-1861)述 ⑤天保二(A.D.1831) ⑥寫本(谷大、宗大・一九八〇)

**出世元意聞記** ①(日)Shus-se-gwan-i-mon-ki. ②一卷 ③存 ④龍華述 ⑤文化一〇(A.D.1813)講 ⑥嘉永二寫本(谷大、宗大・二七四三)

**出世元意略述** ①(日)Shus-se-gwan-i-yaku-jutsu. ②一卷 ③存 ④吉谷覺壽(天保一三)大正三A.D.1842-1914)述 ⑤明治三三刊 ⑥(龍大)二四一・二九(谷大、宗小・一六九)(立大、A四〇・九七)

**出世不動明王略緣起** ①(日)Shus-se-gwan-i-dō-myō-ō-yaku-en-gi. ②一卷 ③存 ④寫本(正大)一〇三三・一一)

**出世本懐** ①(日)Shus-se-hon-gwan-i. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、研眞)

**出纏大綱** ①(日)Shut-tan-tai-tō. ②存、日本大藏經天台宗密教章疏第三 ③榮西 ④承安五(A.D.1175)

①本書は顯密一致の義に立脚して發菩提心の義を説いたものであるが、多分に禪學的の傾向を含むと共に師資口傳の義を尊重してゐる。先づ序に於いて心性は法爾にして無始無終であり、根境は不二で無迷無悟であり、染淨は一如、善惡は一法、故に如實に心月輪を知り通達すれば自性身の如來の相が顯れる。この故に世諦に約し眞諦に寄せて法佛の妙境を辨じ、自心他心共に三密の本源なることを示さんとして本書を作る。

と。次に菩提心は五智である五行、五方、五部の義に明達すればこれ眞俗二諦を以つて心性法爾の發心不思議を説するのであると述べ、次に菩提心を五智、五行、五方、五部に約して解説し次に「出曜」とは出は悟の義、曜は我の義である。我即佛と觀するから「出曜」と名けたのであると題名を説明し、次に之の深義を傳授するには他門並に小智の人を簡び能々機を見て傳授すべしと制限し、最後には「自らの運心作意のために之れを草す」といふ。本書は榮西時代の思想傾向を示したものであり、後世に至つて日本天台口傳法門の原型が含蓄されておるかの如く思はれる。(田島德音)

から「出曜」と名けたのであると題名を説明し、次に之の深義を傳授するには他門並に小智の人を簡び能々機を見て傳授すべしと制限し、最後には「自らの運心作意のために之れを草す」といふ。本書は榮西時代の思想傾向を示したものであり、後世に至つて日本天台口傳法門の原型が含蓄されておるかの如く思はれる。(田島德音)

出要經

①(日) Shutsu-yō-gyō. (支) Chu-yao-ching. ②二十卷 ③缺 ④失譯

【參考】 出三藏記第四、法經錄第一、仁壽錄第五、靜泰錄第五、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

出要律儀綱目章

①(日) Shutsu-yō-risui-gi-ko-moku-shū. (支) Ch'u-yao-tu-i-kang-mu-chang. ②一卷 ③智首述

⑦【參考】 新編諸宗教藏總錄第二

出曜經

①(日) Shuech-yō-gyō. (支) Ch'u-yao-ching. (梵) Udana-varga(藏傳) Ches-du b'riod-pahi tshoms. 出曜論

②三十卷或二十卷 ③存、大正四・六〇九 No.212、縮藏五、二二六二一三、北984 宮殿、南1006宮殿、元296宮殿、明北1314 廣内、清1314廣内、麗89宮殿盤、天989宮殿、指26宮殿、法973宮殿盤、至134佐至 衡、明南1075定篤初、Nj.1331 ④竺佛念 譯 ⑤東晋永和六—義熙一三(A.D.350—427)

①出曜經は佛教の教訓的偈頌とその註釋的説話とから成るものであり、その偈頌の部分が實は出曜と呼ばれるので、出曜は Udana の譯語である。又の名を法句(Dhammapadam)と云ひ、現に巴利所傳のものは法句の名に依つて呼ばれてゐる。それであるから實はこの出曜經は委しく云へば出曜譬喩經とも呼ばれるべきものである。それで出曜自體に十二部經の分類に當ると優陀那に當てうるが、譬喩説話を含む出曜經全體は譬喩に收めらるべきものである。この出曜の原語が優陀那であることは西藏譯のこの偈頌の名が Udana-varga となつてゐること、及び智度論三十三卷の所説、この出曜經第六卷の出曜の下の解釋に依つて疑ふべき所はない。

この出曜(即ち法句)は婆沙論一、俱舍論二、ターラナータの印度佛教史は法救の撰とし、僧報は出曜經の序にこれに従ひ、智度論三十三卷では佛入滅後諸弟子の集むる

所としてゐる。然し巴利系の法句には何人の撰であるかの傳説がなく、この出曜との編者及び傳持の關係は不明である。この類經は巴利系のも Sūtra Dhammapadam athakatha(法句經註)があり、漢譯に法句譬喩經(大正四)がある。法句經註の註は佛鳴の作であるが法句譬喩經の譬喩の部分は作者不明であり、これと同じくこの出曜經の出曜の部分は法救撰としても譬喩の部分は作者不明であると云はねばならぬ。

この經の内容は左の三十四品である。無常品第一。欲品第二。愛品第三。無放逸品第四。放逸品第五。念品第六。戒品第七。學品第八。誹謗品第九。行品第十。信品第十一。沙門品第十二。道品第十三。利養品第十四。忿怒品第十五。惟念品第十六。雜品第十七。水品第十八。華品第十九。馬喩品第二十。悲品第二十一。如來品第二十二。閉品第二十三。我品第二十四。廣演品第二十五。親品第二十六。泥洹品第二十七。觀品第二十八。惡行品第二十九。嚮要品第三十。樂品第三十一。心意品第三十二。沙門品第三十三。梵志品第三十四。(赤沼智善)

出曜經

①(日) Shuech-yō-gyō. 國譯 ②存、國譯一切經本緣部第一〇

③江田俊雄譯

出曜華經

①(日) Shuech-yō-ke-kyō. (支) Ch'u-yao-hua-ching. ②一卷 ③失譯 ④出曜經第十三卷の抄出。⑦【參考】 出三藏記第四、法經錄第五、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

出離最要

①(日) Shutsu-ri-sai-yō. ②一卷 ③存 ④貞慶(久壽二—建保元 A.D.1155—1213)述 ⑤寫本(谷大、餘大・二三九七)

出離生死脈

①(日) Shutsu-ri-shō-jī-kechi-myaku. 妙法蓮華經出離生死脈 ②一卷 ③存、日本大藏經天台宗顯教章疏第二、傳教大師全集第四 ④最澄

①本書は傳教大師最澄が入唐し道遂・行滿から法花による出離生死の實因の口決を傳へ、これを後輩のために註記したものである。法華流通には三力具足を説き信の一行のみで往生成佛を述べ、是の如き思想は顯密一致、合禪融合の運動が發生した後に現れたものであるから本書は明らかに偽撰。本書は人身を受け佛法に値ひ親しく妙法蓮華經に値へること喜び入唐求法の述べ、次に法花による出離生死の要義三ありとし、一は諸法實相の説を言下に開悟し不斷煩惱不證菩提に觀達して生死を出離し、二は一念三千を觀じて生死を出で、三は一心三觀を修して生死を出る。是の三を行ふものは無相觀門の機である。下劣の鈍人は有相門から速かに生死を出る。一は法花を信じて直ちに成佛を期し、二は法花を信じて十方の佛土に往生を期する二途がある。前者は今生得説の人。後者は他上往生の人である。信法花の功德利益は經力、願力、信力の三力具足による。餘經餘佛を信する者には三力がなく。若し後生成佛すれば行がないかと疑ふであらうが、第二生以後には有相無相の機に就いて縱横の信行證を説く。これが



法華行者の明鏡であると。次に良源の案文を出す。この案文は「この傳は決花本有相無相の二行であつて、無相の三種と有相の二種と合せて五種行である。この傳によつて根性に隨ひ所好にまかせて出離生死證大菩提の安心を治定すべし」といふのである。次に血脈次第を出す。妙法蓮華經一釋迦大師一智者大師一章安大師一と人本尊でなく法本尊の所立の血脈であることを明示してゐる。上記によつて考ふるに本書は禪宗日蓮宗の影響を受けた後の偽撰か。

⑤慶安三刊 ⑥(谷大、餘大・二七二八)

(田島德音)

**出離生死要文**

①(日)Shutsu-ri-shō-jū-yō-mon. (支)Chū-ri-sheng-shi-yō-mon. ②一卷 ③隋智顛(中大通三)開皇一(24.D.531-597)撰 ④(参考)淨土依憑經論章疏目錄

**述異記**

①(日)Jussu-ri-ki. (支)Shu-ri-chi. ②二卷 ③梁任昉作 ④(参考)東域傳燈目錄卷下

**述懷記**

①(日)Juk-kwai-ki. ②一卷 ③明禪(一仁治三)A.D.1242)記 ④(参考)本朝台祖撰述密部書目

**述懷記**

①(日)Juk-kwai-ki. 述懷抄 ②一卷 ③存、續淨土宗全書第四 ④舜昌(一建武)A.D.1335)記 ⑤(参考)本朝台祖撰述密部書目

**述懷讚管見**

①(日)Juk-kwai-san-kwan-ken. ②一卷 ③存 ④服部範敏

**述懷讚講義**

①(日)Juk-kwai-san-kyōgi. ②(龍大、一二三六・一八三)

②一卷 ③存 ④木曾惠然(一明治二九)A.D.1896)述 ⑤寫本(龍大、一二三六・一八四)

**述懷抄**

①(支)Juk-kwai-shō. 述懷記 ②一卷 ③存、續淨土宗全書第四 ④舜昌(一建武)A.D.1335)述

⑤著者は元と天台の學徒、比叡山功德院の僧侶であつたが、念佛の法門に歸し、淨土宗祖法然房源空入寂の地知恩院に入りて専ら淨土の行を修し、同院第九代の住職となつた。本書によると著者は勅を受けて法然上人一期教化の跡を記して奉りしところ、山門の徒の激怒を受け、名を叡山の衆徒に假りながら顯密の行を捨て、念佛の興行にあたる、誠に慮外なりと誹られたため、敢て一心三觀の教を忽緒にするにあらず、濁世末代に生を受けたる身、到底聖道難行に堪へざる故、淨土易行の悲願に頼るものと辯明を行つたもので、我が國に佛教傳來以來、聖德太子、弘法大師、山王權現、傳教大師、慧心僧都、承圓僧正、顯行坊、顯真僧正、慈鎮和尚、良快僧正、明禪法印等悉く淨土他力の念佛を稱揚し。又支那にありては南岳、智者、章安、妙樂の各大師何れも念佛を稱へらる。天台圓教の祖、すでにかくのごとし、云はんや鈍根の吾身、圓教の法水に浴して念佛を信ずる、決してゆゑなきことにあらずと主張したものである。著述の年代は不明であるが、卷頭に「齡既に八旬にせまりて病頻りに五内を犯す」とある。著者入寂の年代は明らかでないが、一説に建武二年八十餘歳入寂といはれてゐるから、正中、嘉曆の頃と思はれる。自叙に勅を受けて法然上人一期教化の跡を記したと云ふものは、勅修御傳縁起によると法然上人行狀畫圖四十八卷であると云はれてゐる。(法然上人行狀畫圖參照)

⑦(參考)山家祖德撰述篇目集卷下、總淨土依憑章疏目錄 ⑧延寶三刊(正大、一五五・五六・五八)(龍大、二六八四・六一)(谷大、一二三五)延享五刊(正大、一五五五・五七)安永七刊(正大、一五五五・五五)

**述懷抄**

①(日)Juk-kwai-shō. ②一帖 ③存 ④明禪(一仁治三)A.D.1242)撰 ⑤(參考)山家祖德撰述篇目集卷下

**述懷和讚**

①(日)Juk-kwai-wa-san-ron. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一二三六・一八五)

**述懷和讚錄**

①(日)Juk-kwai-wa-san-ron-kyō. ②一卷 ③存 ④小川覺了述 ⑤寫本(龍大、一二三六・一八五)

**述誠**

①(日)Jussu-jō. 西山述誠 ②一卷 ③存、淨土西山流秘要藏第五 ④實信問、證空(治承元)寶治元(A.D.1177-1247)答 ⑤寫本(龍大、研眞)(谷大、宗大、二八〇三)

**述夢瑣言**

①(日)Jussu-mu-ka-gon. (支)Shu-meng-so-yen. ②一卷 ③存 ④月堂居士著 ⑤(參考)朝鮮佛教總書刊行豫定書目

**述聞口決鈔**

①(日)Jussu-mon-ku-ke-shō. ②二卷 ③存 ④了譽(曆應四)應永二七(A.D.1341-1420)述 ⑤淨土正依經論書籍目錄に云く「一本注有御本云、延文四年八月十日、嘉慶二年始之、康安元年十月七日全判形畢、了譽廿一歲時」云云。

**述懷讚管見**

①(日)Juk-kwai-san-kwan-ken. ②(龍大、一二三六・一八三)

**述懷讚講義**

①(日)Juk-kwai-san-kyōgi. ②(龍大、一二三六・一八三)

**述懷讚管見**

①(日)Juk-kwai-san-kwan-ken. ②(龍大、一二三六・一八三)



述聞口決本末兩鈔講錄

①(日) Jutsu-mon-ku-kietsu-hon-matsu-ryo-sho-ku-i-roku. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一五五二・二四五)

述聞口語補正

①(日) Jutsu-mon-ku-go-ho-sei. ②三卷 ③存 ④寫本(正大、一五五二・二四四)

述聞口傳切紙

①(日) Jutsu-mon-ku-den-kiiri-kami. 淨土述聞口傳切紙 ②一卷 ③存、淨土宗全書第一一 ④良曉(建長七—嘉曆三A. D. 1255—1328)述 ⑤淨土述聞口傳切紙の下を見よ。

承應三刊

①(正大、一五五二・二三一一三三三)

述聞見聞

①(日) Jutsu-mon-kem-mon. 淨土述聞見聞 ②一卷 ③存、淨土宗全書第一一 ④良曉(建長七—嘉曆三A. D. 1255—1328)述 ⑤淨土述聞見聞の下を見よ。

承應二刊

①(正大、一五五二・二三一一三三六・三六五)

述聞制文

①(日) Jutsu-mon-sei-mon. ②一卷 ③存、淨土宗全書第一一 ④良曉(建長七—嘉曆三A. D. 1251—1328)述 ⑤建長七A. D. 1255生)述 ⑥正中二(A. D. 1325)三月 ⑦名越尊觀が白旗義に對して誣妄の言を弄するを慨し、白旗義こそ三代相傳の正義たる事實を擧げて、佛天に誓はれたる誓文である。初めに自己の閱歷を述べて記主より正統を繼ぎし事實を明にし、次に尊觀に許可書の授與せられたるは良曉の懇請に依る

ことを述べ、後に尊觀の誣妄の言を責めて白旗義の相傳の正義たる事實を擧げて佛天の證明を請はれてある。奥書に「此述聞制文者、先師爲除遺弟疑慮、被書置之處也、然則任誓文之趣、可守相傳之正義者也、仍以先師が判之本、所授聖滿良順也、康安元年八月三十日、桑門良譽」とある。(原田黨道)

原本(鎌倉光明寺)

述聞論義

①(日) Jutsu-mon-ron-ri. 淨土述聞論義、述聞 ②一卷 ③存、淨土宗全書第一一 ④良曉(建長七—嘉曆三A. D. 1255—1328)述 ⑤淨土述聞論義の下を見よ。⑦(參考)淨土正依經論書目録

述聞論義追加

①(日) Jutsu-mon-ron-ri-sui-ka. 淨土述聞追加 ②一卷 ③存、淨土宗全書第一一 ④良曉(建長七—嘉曆三A. D. 1255—1328)述 ⑤淨土述聞追加の下を見よ。⑦(參考)淨土正依經論書目録

術水之法

①(日) Jutsu-sui-no-ho. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一四八・一五九)

俊賀記

①(日) Sunn-gaki. ②一軸 ③存 ④俊賀記 ⑤文和二寫 ⑥(金剛三昧院)

俊乘上人奉納大般若伊勢神宮記

①(日) Sunn-jo-sho-nin-ho-no-tai-han-ya-i-se-jin-ga-ki. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第一二(東大寺叢書) ④慶俊記 ⑤文治二(A. D. 1186)五月二十七日 ⑥伊勢太神宮に於ける大般若經轉讀供養の

由來たるや、『俊乘坊參宮記』の所説に依れば。かの治承の兵火に東大寺大佛殿灰燼となり、之れが再興の大勳進職に補せられし俊乘坊重源が大佛殿造營祈願の爲、文治二年二月、太神宮參籠の砌、瑞垣の邊で通夜の際に受けた太神の夢告に起因するもので、其の折、吾近年身疲力衰難成大事。若欲遂此願汝早可令我身云々の太神の夢告に感銘した重源が早速歸山して衆議の結果、神明の威光増益は般若の威力に過ぎるもの無しとて大般若經を新寫して之れが轉讀供養を行ふに決したものである。本記は即ち、此の供養の有様を記録したもので、その冒頭に、内宮長へ傳達された後白河法皇の院宣を掲げ、次いで文治二年四月十六、七兩日の供養次第、建久四年及び同六年に於ける、前後三度に亘る大般若經書寫轉讀供養を叙述してゐる。凡そ神前に於ける讀經或は寫經供養は既に延暦、大同の頃より其の事實を窺ひ得るも(日本逸史、日本後紀)、本記にある如く、太神の夢告を受け、院宣を賜つて神宮で佛事を行はれた事は、『俊乘坊參宮記』に云ふ如く、其の先蹤を見ざる所であつて、此の記載の有つ重要な内面的意義即ち、當時に於ける本地垂迹思想の發達の事實を物語るものなる事を見のがしてはならぬ。

今、大日本佛教全書所載の本記は、續群書類從釋家部所收の神宮大般若經轉讀記(俊乘坊參宮記)の前文と内容同一なり。而も本記の題金の脚註に、原本無題金今私安之」とあるを考へ合すれば恐らく本來は神宮大般若經轉讀記の一部たりしものが久しき傳寫の間に分離せしものならんか。

俊鳳和尚行業事實

①(日) Shun-po-sho-ryo-go-ji-jitsu. 蔡算行實 ②二卷 ③存 ④寶幢 ⑤刊本(谷大、宗大・二〇一)

春屋妙葩和尚語錄

①(日) Shun-oku-myō-ha-o-shō-go-roku. 智覺普明國師語錄 ②八卷 ③存、大正八〇、六三二 No. 2560 ④春屋妙葩(應長元—嘉慶二A. D. 1311—1383)語、侍者周佐等編 ⑤知覺普明國師語錄の下を見よ。⑥天保八寫 ⑦(駒大)

春肝和尚述作錄

①(日) Shun-kan-o-shō-jus-sa-roku. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大)

春輝集

①(日) Sunn-ki-shū. ②二卷 ③通知心岳(一應永二〇A. D. 1413) ④(參考)扶桑禪林書目

春耕四會錄

①(日) Sunn-ko-shi-e-roku. 心田錄 ②一卷 ③存 ④清播心田(永和元—文安四A. D. 1375—1447) ⑤(參考)禪籍目録

春耕集

①(日) Sunn-ko-shū. 聽雨集、松華集 ②一卷 ③存 ④清播心田(永和元—文安四A. D. 1375—1447) ⑤(參考)禪籍目録、日本禪林撰述書目

春秋曆

①(日) Sunn-ji-ryaku. ②五卷 ③存 ④凝然(仁治元—元亨元A. D. 1251—1321)撰 ⑤(參考)諸宗章疏錄第二 ⑥寫本(東大寺圖書館)

名所行發⑩(名庫書)著編所現⑪ 月年の刊⑫(書考參書釋註)書末⑬ 說解存内⑭ 代年作者⑮ 著書⑯ 佚存⑰ 數卷⑱(名書)名題⑲ 號略字數

【シ】

春貞記録

①(日)Shun-ji-ki-roku. ②三卷 ③存、真宗全書第七二 ④春貞(實曆元—文化三A.D.1751—1806)述 ⑤文化二(A.D.1805)十二月

⑥真宗本願寺派に於ける三業惑亂關係の一資料である。文化二年冬、東都公儀の法廷に於て學林派の巨頭たる智洞と正義派の重鎮春貞との四回にわたる對論を春貞が手記せるもので、第三卷には文化元年より二年にかけて本山及び公儀へ呈上せし書面とその他の記録を編集してある。金剛槌(真宗全書七二)參照。(高千穂敬乘)

春睡稿

①(日)Shun-sai-ko. ②一卷 ③存 ④宗瑠玉舟 ⑤(參考) ⑥禪籍目錄

春澤和尚錄

①(日)Shun-taku-o-sho-roku. ②一卷 ③存 ④(參考) ⑤禪籍目錄

春田閑話

①(日)Shun-den-kan-wa. ②一卷 ③存 ④三業の説を述ぶ。⑤寫本(龍大、一七五・五二)

春浦錄

①(日)Shun-po-roku. ②三卷 ③存 ④宗熙春浦(應永一六一—明應五A.D.1499—1496) ⑤(參考) ⑥禪籍目錄

春夢庵詩鈔

①(日)Shun-mu-an-shi-sho. ②三卷 ③存、真宗全書第七三 ④無著(—文化一〇A.D.1813)作 ⑤石州濱田の學僧、無著の詩集である。無著は履善について真宗學を學び更に内外の學を究む、その餘暇に詩文を好み、老後一家風を成すに至る。本詩集はその傑作集ともいふべく、彼と交遊深き村山佛山の校せしものにして、草場佩川の序、村山佛山の跋あり、その收録するところ二百六十首、毎首諸家の評語を付加してある。また卷末には「鶴漢十遊題語」を添へ、恩師の著述日録を加へてある。(荻生隆三)

春庸和尚語錄

①(日)Shun-yo-o-sho-go-roku. ②七卷 ③存 ④宗想春庸 ⑤(參考) ⑥禪籍目錄

春林和尚行實

①(日)Shun-rin-o-sho-kyo-jitsu. ②一卷 ③存、續群書類從第九 ④宗瑠記 ⑤本書は京都大德寺宗淑(1488—1566)の記傳で、弟子宗瑠の誌す所である。其の行實の一般を略述するに、師諱は宗淑、字は春林、咄々齋と號した。俗姓大江氏、丹後の人、幼齡州の玉龍寺に入りて薙髮し、長じて大德寺悦溪小溪の二師に參訊し、後微岫に參叩すること實に三十餘年、遂に印可嗣法し、詔に依りて大德寺に住した。後柏原天皇の問法に答へ奉るに及び、特に佛通大心禪師の號を賜ふ。其の後和泉陽春庵、攝津禪通寺、但馬圓通寺等に歴任して大いに宗風を張る。晩年大德寺邊の黃梅庵に退休し、永祿七年十二月二十八日示寂。壽七十七、遺偈に曰く「來也咄、去也咄々。七十七年咄々々々」。(紀氏隆眞)

春和絶句集

①(日)Shun-wa-zoku-ku-shu. ②一卷 ③存 ④西堂春和 ⑤(參考) ⑥禪籍目錄

春和驪語

①(日)Shun-wa-ri-go. ②一卷 ③存 ④西堂春和 ⑤(參考) ⑥禪籍目錄

隼疑問決集

①(日)Shun-gi-gi-ke-sus-shu. ②一卷 ③存、淨土宗全書第一 ④聖問(屏應四—應永二七A.D.1341—1420)撰 ⑤本書は禪門覺華が淨土宗聖問に對して、淨土真宗の真義に就いて寄問答決を成せる數紙の短篇書である。内容を見るに先づ聖問が覺華の一間に對して一偈を呈示す、即ち「時、跳心地、非空空、憑、絶機知、別有風、孰識無生、生即路、東西不、移、自然通」と、而して覺華は此の偈意に他足せず且つ事出を擧げて淨土門の機智の教旨を解受し得ずと云ふに對して機智を詳述定義し、更に淨土の三界攝不を判じ、本無煩惱の霧を拂ひ、高く菩提の臺に升る禪門は性頓にして、物機の解知を離れざるが故に不斷煩惱得涅槃の弘願の淨教は窺知し得ざる所出を高調し一偈を示して結んでゐる。

要之本書は著者が禪門の妄計を離拆せる論旨の一端を叙示せるものとして、その反破の大意を窺ふに足る。

浄土正依經論書篇目錄

⑤寛永六刊 ①(正大、一〇三六・一) (森本眞順) ②(參考) ③浄土正依經論書篇目錄 ④寛永六刊 ①(正大、一〇三六・一) (森本眞順)

峻明德禪師語錄

①(日)Shun-myō-toku-zen-ji-go-roku. ②一卷 ③存 ④(參考) ⑤禪籍目錄

舜閣疏稿

①(日)Shun-an-sho-ko. ②一卷 ③存 ④德昌桂林(—延徳元A.D.1499—) ⑤(參考) ⑥日本禪林撰述書目、禪籍目錄

巡寺御八幡宮行事雜記

①(日)Jun-ji-go-hachi-man-gu-gyō-jizaki. ②一帖 ③存 ④明和七寫 ⑤(高大、奇、一・五五)

巡禮記

①(日)Jun-rei-ki. ②四卷 ③存、大日本佛教全書第一一三遊方傳叢書第一 ④圓仁(延暦一三一—貞觀六A.D.791—866) ⑤入唐求法巡禮行記の下を見よ。⑥(參考) ⑦本朝台祖撰述密部書目

巡禮所作次第

①(日)Jun-rei-sho-ji. ②一卷 ③存、日本大藏經修驗道章疏第三 ④家圓記 ⑤台嶺行門修驗書の一。無動寺に始まり大師堂、三井寺等を経て叡山に登り、東塔、西塔、横川を巡り、大嶽に至るまでの諸所を擧げ、各所に於て結印觀想すべき印明を記述したもので、天正年間、大先達寶積院家圓の記にかゝり、慶長二年及び貞享五年書寫の奥書がある。(服部如實)

平樂寺書房

純正宗教論

① (日) Jun-sei-shū-kyōron. 破邪顯正純正宗教論 ② 1卷 ③ 存

泰嶽述

① (京專) ② 存

純正日蓮主義

① (日) Jun-sei-ni-chi-ren-shū-gi. ② 1卷 ③ 存 ④ 荒木清勇著 ⑤ 大正一〇刊 ⑥ (谷大、餘洋、六〇五)(帝室)

純日蓮の研究に就て

① (日) Jun-nichi-ren-no-ken-kyū-ni-tsuite. ② 1卷 ③ 存 ④ 川勝一郎著 ⑤ 昭和七刊

純秘鈔講義

① (日) Jun-hi-shō-kōgi. ② 五卷 ③ 存 ④ 荒汰(元和八—延寶八 A. D. 1622—1680)述、英岳(寛永一六一—正徳二 A. D. 1639—1712)註 ⑤ (参考) 諸宗章疏第三 ⑥ (京專)

准后御移徙御列

① (日) Jun-kō-go-i-shi-ni-kō-sha-shi-dai. ② 1卷 ③ 存 ④ 安政二

准后御移徙飛香舍次第

① (日) Jun-kō-go-i-shi-ni-kō-sha-shi-dai. ② 1卷 ③ 存 ④ 寛永(龍大、別置)

准宗主送終記

① (日) Jun-shū-shū-sō-jū-ki. ② 1卷 ③ 祐俊(慶長六一天和一 A. D. 1601—1682)記 ④ 寛永八 (A. D. 1631) ⑤ (参考) 淨土眞宗教典志第二

准尊覺書其他

① (日) Jun-son-ō-bō-gaki-sono-ta. ② 1卷 ③ 存 ④ 慶長

准提三昧行法

① (日) Jun-dai-sam-mai-gyō-bō. (支) Chun-ti-san-mei-hsing-ta. ② 1卷 ③ 存、(正續)二・二・一 ④ 346

明受登集

① 本書は顯密一致即ち華嚴眞實融合思想に基いて禪宗の間に行はれた准提觀音念誦の行法である。行法の組織は殿公の圓通集及び判溪湛然の法華三昧補助儀を参照し、准提經に依つて編纂したものである。述勸修第一。明受戒發心第二。定行人及日期時數第三。出正修法第四。(一)嚴治道場。二清淨三業。三三業供養。四請三寶諸天。五讚歎申誠。六作禮。七持呪。八修行五悔。九行道旋繞。十入三摩地。分持明驗相第五の五段に分ち附錄には本呪回譯を起してある。猶本書には行純范驥の序と、明源の序との二章を卷首に掲げてある。勸修の段が宋元明代に本法の流行した所以を見る最も好い資料である。「本法を修すれば、出家の菩薩は定現し、在家の菩薩は現世の所求が悉く満足する。そして實生活上では福祿壽を完備し、求官すれば遷されな

純、准

明受登集

い。この故に發心專念に本法を修すべし」と勸めらる。(田島德音)

准提陀羅尼經

① (日) Jun-dai-da-ra-ni-kyō. (支) Chun-ti-to-lo-ni-ching. (梵) Cundī-dhāraṇī(譯傳)(藏) Hphags-pa lha-mo-bskal-byed-ma shes-bya-baṅgi. 七俱胝佛母所說准提陀羅尼經、准提陀羅尼經、准提經 ② 1卷 ③ 存、大正二〇・一七・八 No. 1076、館閣一〇、正二・一、北 1393武、南 3397衛、元 1384衛、明北 3340莫、清 340莫、麗 136宅、天 1375衛、指 94才、法 111男、至 576練、明南 1017湖、正、346 ④ 唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—

准提焚修悉地懺悔玄文

① (日) Jun-dai-bon-shū-shū-jū-san-ge-mon. (支) Chun-ti-fan-hsin-hai-ti-oh-an-istan-wen. 佛母准提焚修悉地懺悔玄文 ② 1卷 ③ 存、(正續)二・二・一 ④ 清夏道人集

准提焚修懺悔懺悔玄文

① 本書は准提菩薩は月輪三摩地に住し、十

准提儀軌

① (日) Jun-dai-gi. ② 1卷 ③ 存、大日本佛教全書第三七阿婆縛抄之内 ④ 承

准抵

① (日) Jun-dai. ② 1卷 ③ 存、大日本佛教全書第三七阿婆縛抄之内 ④ 承

准抵儀軌

① (日) Jun-dai-gi. ② 1卷 ③ 存、七俱胝佛母所說准提陀羅尼經(大正二〇・一八〇 No. 1076)之内 ④ 唐不空(神龍元—大曆九

准如上人往生之記

① (日) Jun-nyō-shō-nin-tō-jō-no-ki. ② 1卷 ③ 存、寛永七寫 ④ (龍大、別置)

准如上人御書

① (日) Jun-nyō-shō-nin-go-sho. ② 五通 ③ 存 ④ 自筆本

准如上人消息案文

① (日) Jun-nyō-shō-nin-shū-soku-an-mon. ② 二通 ③ 存 ④ 寫本(龍大、別置)

准如上人消息案文

① (日) Jun-nyō-shō-nin-shū-soku-an-mon. ② 二通 ③ 存 ④ 寫本(龍大、別置)

774)譯 ⑦ 七俱胝佛母所說准提陀羅尼經の

下を見よ ⑧ (帝國、八二一・二四九)

准提陀羅尼法

① (日) Jun-dai-da-ra-ni-hō. ② 1帖 ③ 存 ④ 足利時代寫

准提焚修懺悔懺悔玄文

① (日) Jun-dai-bon-shū-shū-jū-san-ge-mon. (支) Chun-ti-fan-hsin-hai-ti-oh-an-istan-wen. 佛母准提焚修悉地懺悔玄文 ② 1卷 ③ 存、(正續)二・二・一 ④ 清夏道人集

准提焚修懺悔懺悔玄文

① 本書は准提菩薩は月輪三摩地に住し、十

准提儀軌

① (日) Jun-dai-gi. ② 1卷 ③ 存、大日本佛教全書第三七阿婆縛抄之内 ④ 承

准抵

① (日) Jun-dai. ② 1卷 ③ 存、大日本佛教全書第三七阿婆縛抄之内 ④ 承

准抵儀軌

① (日) Jun-dai-gi. ② 1卷 ③ 存、七俱胝佛母所說准提陀羅尼經(大正二〇・一八〇 No. 1076)之内 ④ 唐不空(神龍元—大曆九

准如上人往生之記

① (日) Jun-nyō-shō-nin-tō-jō-no-ki. ② 1卷 ③ 存、寛永七寫 ④ (龍大、別置)

准如上人御書

① (日) Jun-nyō-shō-nin-go-sho. ② 五通 ③ 存 ④ 自筆本

准如上人消息案文

① (日) Jun-nyō-shō-nin-shū-soku-an-mon. ② 二通 ③ 存 ④ 寫本(龍大、別置)

准如上人消息案文

① (日) Jun-nyō-shō-nin-shū-soku-an-mon. ② 二通 ③ 存 ④ 寫本(龍大、別置)

705—774)譯 ⑧ 足利時代寫 ⑨ (寶善提

院)

准抵獨行法

① (日) Jun-dai-doku-hō. ② 1帖 ③ 存 ④ 德川時代寫

准抵念誦儀軌

① (日) Jun-dai-nen-jū-gi. (支) Chun-ohin-nien-sung-t-kwei. 七俱胝准提陀羅尼念誦儀軌、准提儀軌 ② 1卷 ③ 存、七俱胝佛母所說准提陀羅尼經(大正二〇・一八〇 No. 1076)之内

准抵念誦儀軌

① 唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)譯 ② 平安朝時代寫 ③ (寶善提院)

准抵觀音

① (日) Jun-dai-ikwan-on. ② 1卷 ③ 存、大日本佛教全書第四七覺禪鈔之内 ④ 覺禪(康治二—建曆二後 A. D. 1143—1212)撰

准抵法

① (日) Jun-dai-hō. ② 存 ③ 覺禪(康治二—建曆二後 A. D. 1143—1212)抄 ④ 延慶三寫 ⑤ (寶龜院)

准如樣御筆御影讚御裏留

① (日) Jun-nyō-sama-gyō-hitsu-go-eri-go-kan-o-ura-todome. ② 三十八通 ③ 存 ④ 寫本(龍大、別置)

准如上人往生之記

① (日) Jun-nyō-shō-nin-tō-jō-no-ki. ② 1卷 ③ 存、寛永七寫 ④ (龍大、別置)

准如上人御書

① (日) Jun-nyō-shō-nin-go-sho. ② 五通 ③ 存 ④ 自筆本

准如上人消息案文

① (日) Jun-nyō-shō-nin-shū-soku-an-mon. ② 二通 ③ 存 ④ 寫本(龍大、別置)

准如上人消息案文

① (日) Jun-nyō-shō-nin-shū-soku-an-mon. ② 二通 ③ 存 ④ 寫本(龍大、別置)

准、淳、順

准如上人文錄慶長元和寛永御  
裏留 ①(日)Jun-nyo-shō-nim-bun-  
roku-kei-chō-genn-a-kwan-ci-o-ura-du-  
me. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大)

准如上人芳蹟考 ①(日)Jun-nyo-  
shū-nin-hi-seki-ki. ②一卷 ③存 ④上  
原芳太郎著 ⑤昭和四刊 ⑥(龍大)(谷大)

准如上人芳蹟略考 ①(日)Jun-  
nyo-shū-nin-hi-shō-kyō-ki. ②一卷  
③存 ④岡部宗城著 ⑤昭和四刊 ⑥(龍  
大)

准如上人讓狀 ①(日)Jun-nyo-shū-  
nin-yuzuri-ki. ③存 ④寫本(龍大、別置)

淳賢許可印信 ①(日)Jun-kan-ka-  
ka-n-jin. ②一通 ③存 ④寶曆年中寫  
⑤(寶菩提院)

淳陀沙彌經 ①(日)Jun-da-sa-mi-  
kyō. (支) Chun-tō-sa-mi-ching. 純陀沙  
彌經 ②一卷 ③失譯 ④雜阿含經第二十  
四卷の抄出 ⑤【参考】出三藏記第四、法  
經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四  
開元錄第一六、貞元錄第二六

順教御聞調附趣意書 ①(日)Jun-  
kyō-go-mon-chō-isaketari-shū-i-shō. 三  
河順教御聞調附趣意書 ②一卷 ③存 ④  
渡邊法瑞(文政一〇—明治三七 A. D. 1827  
—1904)記

渡邊法瑞(文政一〇—明治三七 A. D. 1827  
—1904)記

渡邊法瑞明治十七年十二月九日より同十  
八日まで三河順教の異義につきて聞調した  
る記録。

寫本(谷大・宗大・六三九)

順教再往聞調 ①(日)Jun-kyō-sai-  
mō. 轉女身菩薩經(經題下割註)、順權方

三河順教再往聞調 ②一卷  
③存 ④渡邊法瑞(文政一〇—明治三七 A.  
D. 1827—1904)記  
⑤明治十八年一月五日より二月二日迄、三  
河順教の異義を、再往取調へた記録。

順阿闍梨付法文 ①(日)Jun-  
a-ka-ri-ai-hō-mon. ③存、日本大藏  
經天台宗密教章疏卷一、傳教大師全集別卷  
④順曉 ⑤貞元二十一年(A. D. 805)

本書は唐貞元二十一年四月十九日、順曉  
か最澄に善無畏所傳の大法轉を傳授した時  
の付法狀である。大法轉とは何法であるか  
不明。この不明なる所から後世種々の異説  
が起る。内證血脈、仁忠の傳教大師傳、三  
種悉地決印信等を參照。(田島德音)

順逆事 ①(日)Jun-gyaku-no-koto.  
逆順加持作法事 ②一通 ③存 ④成喜説  
⑤鎌倉時代寫 ⑥(高大、寄・一・六五)

順興寺顯從葬禮記 ①(日)Jun-  
kyō-jō-shō-rei-ki. ②一卷 ③存 ④寫  
本(龍大、別置)

順興寺實從葬禮並中陰記 ①(日)  
Jun-kyō-jō-shō-rei-ki-sō-rei-narabini-chū-  
in-ki. ②一卷 ③存 ④元祿七寫 ⑤(龍  
大、別置)

順權方便經 ①(日)Jun-gon-hō-ben-  
kyō. (支) Shun-chuan-fang-pien-ching.  
(梵) Śūtriyānta-vyākaraṇa-sūtra (藏傳)  
(藏) Hphags-pa bnd-med hgyur-ha luh-  
dstan-pa shes-hya-ha theg-pa chen-poi-  
mho. 轉女身菩薩經(經題下割註)、順權方

便品經、轉女身菩薩所問授決經(經流通記)  
②二卷 ③存、大正一四・九二一 No. 568.  
縮字一〇、二一〇・五、北235號、南248號、  
元223號、明北223號、清210號、麗225號、  
天303號、指235號、法198號、至822知、明  
南303號、Ni. 214 ④竺法護譯 ⑤西晋太  
始二—建興元(A. D. 266—313)

①(一)曇摩耶合譯、樂瓔珞莊嚴方便品經の  
異譯、藏譯あり、品名を別たざる點等曇摩耶  
合譯に近し。(二)經題は順權方便經の意。  
衆生の意樂に従つてその所願を充さしめ、  
而も導いて道意を發さしむることが、本經  
の眼目となつてゐる(假號品第四の始に詳  
説す)而してこの主意を最も効果的に表現  
する手段として、大乘菩薩たる一女性を拉  
し來つて聲聞道に於ける解空第一といはる  
須菩提に對問せしむる點、本經の文學的  
構相の妙となし得る。聖典史學上にては月  
上女經等等その類少しとせず、全體として  
維摩經の思想を受くること最も濃厚なる經  
典である。(三)全經四品より成る。○沙門品  
第一。佛靈鷲山に在せし時、一日須菩提入  
城分衛し、某長者家に至るに、端正姪好な  
る一女人に會し、その來意を問はれて分衛  
の爲に來ると答へたのを發端として本經の  
開説となる。(1)女、須菩提に對し、分衛  
の想に就て問難し、結論して、「其れ諍訟に  
處すれば則ち沙門に非ず、法義に應ぜず」と  
呵詰す。(2)よつて須菩提、沙門法の義  
に就いて問ひ、女即ち大乘句義三十句を陳  
して眞實の沙門法義を開説す(3)時に集會  
せる諸大等此説を聞いて或は法眼淨を得、

或は無上眞道意を起せり。○見諦品第二  
(1)須菩提、女の辯才を歎じて是れ如來の  
所化ならんと心念す。女即ち須菩提の心念  
の如くその如來の所化なることを認め、こ  
れによつて一切法本無の義を廣説す。(2)  
女、その須菩提の心念を知れるは皆佛の威  
神によると明す。(3)須菩提、女に對して  
その何人にして何處より來れるかを問ひ、  
女、即ち如來の所化に從來する所なく、唯  
因縁によつてのみ存在することを明す。  
(4)時に空に聲ありて女の言を歎す。女更  
に見諦に就て問答し、至誠とは一切法に於  
て悉く所生なきなり、其れ誠を見れば則ち  
顛倒を觀ん」等と説く。(5)集會の諸天讚  
歎す。女更に忍地に就て示説し、淨不淨、  
禍福、苦樂、賢愚等の所對に於て不平等  
心を抱くことを明す。(6)須菩提、女に如  
何なる志求ありて是の如く誦子吼するやと  
問ひ、女、志求ある所想顛倒し食身ありて  
誦子吼する能はず、志求なき所。始めて眞  
の誦子吼あり等と答ふ。(7)よつて須菩提  
この女必ず大乘を志きんといふ。女、即ち  
大乘の義に就て廣説す。○分衛品第三。須  
菩提、女に曰ふ、姉、我に何の故に分衛す  
と問へり、分衛は如來も亦行じたまふ所。  
我亦之に従ふのみと。女、即ち、諸佛には  
善權方便ありて衆生を開化せんが爲めに分  
衛したまふなりとて、如來が二十事(細目  
を擧ぐ)を以て法儀を觀察して分衛したま  
ふことを明し、更に二十句義を以て如來の  
分衛が一切衆生をして道心を發さしむる所  
以なることを説く。須菩提即ち、是の如き

は一切の聖賢縁縁之乘に堪任せざるところといひ、集會せる女の父母、家中の大小等二萬八千人、之を開いて皆無上正眞道意を發せり(以上、上卷)。○假號品第四。(1)須菩提、女に夫罪あるやを問ひ、女、能く善權方便を奉順するの故に好樂自恣の衆生は皆是れ我夫主なりと答へ、以下好樂順權方便の意に就て廣説す。觀音が三十三身を變現して所應に從つて衆生を開示悟入せしむとする思想に同じ。(2)時に二童子あり須菩提に對して、自らの智を以て他人の慧を度る勿れと難じ、女即ち之に應じて聲聞乘の遙かに菩薩乘に及ばざることを廣く論説す。須菩提即ち二童子にその女との關係を問ふに童子等傷を以て「是れ我が父母、斯れ慈弘く安を施す人、此れ家室親厚の人亦無上の世尊なり」等とその徳を歎す。(3)須菩提、男子を教化するに女人の像を以てすること機宜を得とせんも、女人を教化するに女人の像を以てするに云何と問ふ。よつて彼女須臾にして十二才(達磨耶舍本は三十二才)の尊者子となり男子服をつけて須菩提に向ひ、我に不變の所持なしとて諸法無住の理を明す。(4)時に須菩提日中迫りて分衛の時刻の過ぎんことを告ぐ。轉女の族姓子即ち普周佛土妙華と名くる三昧に入り、須菩提をして一切十方の佛土を觀見せしむるに、日出なるあり日中なあり晡時なるあり、初夜中夜後夜等、佛土によりて時を定めず、轉女いふ、何の時を以てか食に就くべきと。(5)須菩提、轉女にその名を問ふ。轉女、一切の名號は假

號に過ぎず、唯だ思想に基き本無なる所以を廣説す。(6)轉女、須菩提の歎言に基き衆祐の義を明す(六句)。(7)諸天の讚歎と悔過あり。(8)女妓に於て舍に入りて百味の食を持ち來り、懇切に受食の法を説きて(維摩經弟子品迦葉の下參)食を取らしむ。(9)須菩提謝して歸途に就き、途中、施衆典法と名づく菩薩に會し、一切諸法悉無、所受戒皆不可得、亦無犯禁等の解解を聞きてこれを不退轉の菩薩となし、所受の分衛食を施し已る。(10)須菩提宴處し晡時に至つて佛所に詣り、女のことを白す。佛即ち彼女が轉女と名づくる菩薩にして女人身に轉現して衆生を化益することの甚大なるを讚じ給ふ。(11)時に轉女、五百の女人と共に佛所に詣る。須菩提即ち迎へてこれに敬禮す。舍利弗之を見て非賢聖法として詰る。よつて轉女、舍利弗のために賢聖の眞義並に大乘無所住の義を明す。(12)舍利弗即ち是女其身を莊嚴瓔珞するも而も辯才聖達是の如しと歎すれば、轉女よつて菩薩には八莊嚴瓔珞あることを説く。(13)舍利弗佛に是女何れの佛土より來れるやを問ひ、佛その本地を明して阿閼佛の妙樂世界より來れる高士なりと明し給ふ。(14)轉女、佛に授記を請ひ、佛即ち諸劫數を越えて佛となり、光明重王と號すべく、且つ五百の女人は共に變成男子してその佛土の菩薩となるべきことを記し給ふ。(15)流通。首記の如き二種の經名を附して本經を阿難に附し給ふ。(美濃光順)

順之和尚法語

○(日) Jun-shō-ō

shō-hō-go. (支) Shun-chih-to-shang-ta-yi. ①一卷 ③存 ④朝鮮順之語 ⑦(參考) 禪籍目錄

順次往生講作法

○(日) Jun-ji-ō-jō-jō-ka-sai-hō. ①一卷 ④仁覺記 ⑦(參考) 淨土依憑經論章疏目錄

順次往生講式

○(日) Jun-ji-ō-jō-jō-shiki. ①一卷 ③存 ④永觀(長元六一天永二 A. D. 1033—1111)撰 ⑤文治二寫(正大・一五三三・二七)寫本(龍大)

順次往生講式

○(日) Jun-ji-ō-jō-ka-shiki. ①一卷 ③眞源撰 ⑤永久二(A. D. 1114) ⑦(參考) 淨土依憑經論章疏目錄

順次往生要行

○(日) Jun-ji-ō-jō-yō-yō. ①一卷 ④仁覺述 ⑦(參考) 淨土依憑經論章疏目錄

順正異義御札一件記錄

○(日) Jun-shō-ji-ō-on-tadashi-ika-ken-ki-roku. ①十卷 ③存 ④寫本(龍大、一七二二)

順正記

○(日) Jun-shō-ki. (支) Shun-cheng-hi. ②三卷 ④宋從義(一)元祐年間 A. D. 1086—1093)述 ⑤光明玄義を釋したるもの ⑦(參考) 諸宗章疏錄第二

順正に関する口上書

○(日) Jun-shō-ni-kwan-saruri-kō-jō-gaki. ①一卷 ③存 ④寫本(龍大)

順正理論

○(日) Jun-shō-ri-ron. (支) Shun-cheng-li-ron. 阿毘達磨順正理論、俱舍電論 ②八十卷 ③存 大正二九・三二九 No. 1562 縮冬三三六、三三三・七一〇、北960逐至操、南974逐至操、元970

逐至操、明北1258背至溼、清1258背至溼、慶923志至持、天923逐至操、指923志至持、法974志至持、至1406千至毅、明南121納至通、Nj. 1265 ④兼賢造、玄奘(仁壽二—麟德元 A. D. 602—651)譯 ⑤唐永徽四—五(A. D. 652—654) ⑥阿毘達磨順正理論の下の見よ。

順正理論述記

○(日) Jun-shō-ri-ron-jak-ki. (支) Shun-cheng-li-ron-shū-ōhi. ⑤五卷 ④元裕述 ⑦(參考) 新編諸宗教藏總錄卷第三

順正理論述文記

○(日) Jun-shō-ri-ron-jūsu-mon-ki. (支) Shun-cheng-li-ron-shū-wen-ki. 正理論、正理鈔、正理文記、順正理論疏 ⑤卷九、一八現存、正續一・八三・三 ④元裕述

順正理論述文記第九

○(日) Jun-shō-ri-ron-kyō-shū-kyō. 正理論第十二卷の初(無色法中已辯心心所、今當辯心不相應行)より、第十三卷の半(命根の釋する)に至るまでを釋す。卷末に快道師の識語あり曰く「永超の東域傳燈錄に云く、順正理論述文記。元瑜撰。業品以下未だ成らず。序は神助撰す。西大寺本は二十四卷。元興寺本は二十卷なり。成辨序して云く、或は二十卷。或は二十四卷と」。已上。「寛政六甲寅年、洛西久瀨村光福寺に於て俱舍論を講ずるの日に此の本を智積院の大衆藏に得、本誓をして之を寫さしむ。惜哉、但だ第九卷のみにして未だ餘を見ず。後學當に全本を弘通すべし。豊山愛染院住沙門林常快道誌す」。順正理論述文記第十八。順正理論第二十九卷の初(已辯無明當辯三名

色)より。第三十卷の終(正性定聚等の三聚の釋了)までを釋す。卷末に菴師の識語あり曰く、「昔年余此の原本を獲て其の筆蹟を愛し常に古法書と同じく玩ぶ。雲華上人偶々此を觀て大に駭て謂く是れ希世の書なり。此れ原と極めて難讀の論なり。此の記の裨ふ所少しとせず。是れ一斑なりと雖も尙重んずべし。豈に徒に筆迹のみを愛すべけんや」と。乃ち余に一本を寫さんことを需む。余其の草體を誤らんことを恐れて摹搭を爲し以て呈し、併せて上人の前日考ふる所を左に錄す。

義天日錄下に云く順正理論述記五卷。元裕述。東域錄に云く順正理論述文記二十四卷。元瑜。藥品以下未だ盡くさず。序は神昉撰。一乘院見本。西大寺二十四卷あり。元興寺見行本二十卷。成辨序して云く二十卷。或は云ふ二十四卷と。東寺の本は二十卷。五宗章疏錄に云く、順正理論疏二十四卷、八百三十帙、元瑜述。或本に末書あり云く僅に智山所藏の第九卷一本を見るのみ述文記と曰ふ。文政戊子之春清明節。菴識す。

⑦(参考) 東域傳燈目錄卷下 ⑧寫本(京大藏・二三・一) ⑨寫本(京大藏・二三・一)

**順正理論疏**

①(日) Jun-shō-ri-ton-shō. (支) Shun-cheng-li-lun-shū. 順正理論述文記、正理論、正理鈔、正理文記 ②二十四卷(卷九、一八現存) ③存、已續一、八三・三 ④元瑜述 ⑤(参考) 諸宗章疏錄第一、奈良朝現在一切經疏目錄357

**順正理論鈔**

①(日) Jun-shō-ri-ton

—shō. (支) Shun-cheng-li-lun-chiao. ②一卷 ③極太述 ④(参考) 新編諸宗教藏總錄第三

**順世八心之事**

①(日) Jun-se-hat-su-shin-do-koto. ②一册 ③慶長一九

**順中論**

①(日) Jun-chū-ron. (支) Shun-chung-lun. 順中論義入大般若波羅蜜經初品法門 ②二卷 ③存、大正三〇・三九No. 1565、新裝二、卅二・四、北393日、南607日、元500日、明北1240情、清1240情、麗596君、天597日、指556君、法581君、至1315驚、明南137意、1246 ④龍樹菩薩造、無著菩薩釋、元魏瞿曇般若流支譯 ⑤武定元(A. D. 533)

⑥現行本は龍勝菩薩造、無著菩薩釋となつてゐるが、諸經錄にては凡て無著菩薩造となつており、且つ翻譯記に依れば、龍勝菩薩龍樹(Mahāyāna)は通法の師なり、大般若に依りて中論衆典を造る。義に於て包んで悉さず。大乘論の阿僧佉(Asaṅga)無着と名づくるあり。未解處を解して別に此の部と爲す。魏の尙書令僕同高公延國上賓翟曇流支第に在りて供養せらる。正しく佛法に通じ釋曇林に對して斯の義論を出す。武帝元年歲次癸亥八月十日揮辭丙寅凡有一萬三千七百二十七字となつてゐる故無着造なることが明である。本論の譯者に關して隋の法經錄卷五に後魏世菩提流支譯とあり、歷代三寶紀第九卷にも侍中崔光筆受として菩提流支譯となつてゐるが、開元錄卷六に「長房等錄並云、菩提流支所譯今按經

初本譯序並云曇曇流支非菩提也」としており、又貞元錄卷九にも續高僧傳を引用し「當魏時有沙門菩提流支與般若流支、前後出經、而衆經傳寫率多略略各去上字、但云流支而不之知、是何流支」として開元錄に從て居る故菩提流支とせるは誤である。

此書は梵本、西藏譯共になく、唯漢譯の單本にのみあつて、宇井氏印度哲學研究第一には、この書の梵名は恐らく、Madhyama-naka-sūtra-artha-anvayata-mahāprajñā-pāramitāsūtra-ādhiparivārtha-dharmapāyāya-pravacana-nāraṇaと推定してゐる。其の内容は中論の根本問題たる戲論と八不について釋することに始終してゐるもの、如く、即ち上卷に於ては卷頭歸命一切智として中論の歸敬偈「滅亦不生、不斷亦不常、不一不異義、不來亦不去、佛已說因緣、斷諸戲論法、故我稽首禮、說法師中勝」を掲げ、其の第二偈を中心に、般若を相似般若と眞實般若とに分ち、相似般若とは五蘊の無常、苦、無我、不寂常を説くも、取著、有所得の故に戲論(Prapañca)を生ずるを言ひ、眞實般若は一切法空なる故、戲論の體無く、戲論を論ずべき人も無きを云ひ、戲論の何たるかを外道説など引用して開明して居る。下卷に於ては八不の偈に初まり非自亦非他、非二非無因、一切法如是、是故皆不生なる四不生の偈で終つてゐる故、一切法が自體空にして生滅、斷常、一異、來去等の八範疇を捨離したる無性、不生の寂靜の涅槃であるとして、中論中の重要な

偈文を引用しこれを釋してゐる。更に注意すべきは二諦を釋するに當り、對論者が世諦と第一義諦とは各別であるとの間に對し本論釋者は世諦と第一義とは異らずとして龍樹の言教の二諦説の原意を存せしめてゐる點である。

尙上卷に於て佛已說因緣、斷諸戲論法を釋する所に摩訶首羅(Mahāvīra)時節(Kāla)微塵(Anu)勝(Pradhāna)自性(Prakṛti)斷滅等の外道説を擧げ、勝を破する個處に、數論師の論證法として宗、因、喻の三相が引用せられてゐる。此の因の三相に關して漢譯では從來因明正理門論が最古のもの如く考へられてゐるが猶古いものに世親の如實論があり、順中論は如實論よりも古いから因の三相として順中論は初めて支那に知らしめたものであり、又印度に於ても無着以前に因の三相のいはれてゐるものは曾て知られてゐないから順中論は因明論理學發達史上重要な資料を提供してゐると言はねばならぬ。

本書の如きは主として中論の歸敬偈の八不と戲論との釋で、中論全體の釋では無いけれども、中觀派の祖である龍樹の中論を瑜伽派の無着によつて釋されたと言ふことを顯るならば兩學派はその源流に於ては決して相反するもので無かつた事を知る一例となる。引用せる偈文五十五偈。

⑦(参考) 三寶紀第九、法經錄第五、開元錄第六、第一二、貞元錄第九(伊藤高順)

**順中論義入大般若波羅密多經亦法門秘翻之記** ①(日) Jun-chū-

ron-gi-nyu-dai-han-nyu-ha-ra-mi-ti-k  
yo-yaku-ho-mun-hi-hon-no-ki. (支)Shun  
-chung-jun-i-ji-la-pan-to-po-to-mi-to-  
chung-i-la-mun-pi-fan-chih-chi. ②二卷  
⑦〔參考〕奈良朝現在一切經疏目錄3475

**順彼佛願記** ①(日)Jun-pi-butsu-  
gwan-ki. ②一卷 ③存 ④惠安正保元一  
享保大A.D. 1644-1721)述 ⑤寶永五(A.  
D. 1708) ⑥十八願體を論じたもの ⑦〔參  
考〕淨土真宗教典第二 ⑧寫本(龍大、  
一五〇二・四四)(谷大、宗大・二〇三三)享保  
九寫谷大、宗大・三二二〇)

**順禮歌要解** ①(日)Jun-rei-ka-yō-  
se. ②一册 ③存 ④刊本(哲、こ・八・右・  
一〇)

**順禮物語** ①(日)Jun-rei-mono-ga-  
tari. ②三卷 ③存 ④寫本(龍大、研史)  
**準提軌** ①(日)Jun-dai-ki. (支)Chun-  
-ti-kuai. 七俱胝佛母所說準提陀羅尼經、  
七俱胝佛母陀羅尼經、準提陀羅尼經、準提  
經 ②一卷 ③存、大正三〇・一七八 No.  
1076、縮印一〇、卅一・一、北1393武、  
南1397衛、元1388衛、明北343英、清342英  
慶1364宅、天1375衛、法1091相、Nj. 345  
④唐不空(神龍元一、大曆九A.D. 705-774)  
譯 ⑤七俱胝佛母所說準提陀羅尼經の下を  
見よ。

**準提觀音靈驗記圖會** ①(日)Jun-  
dai-kwam-on-rei-ken-ki-ue. ②二卷  
③存 ④南山龍領、辻本基定編、喜多川祭  
魚畫 ⑤弘化二刊(正大、一〇三三・三三)天  
保一四刊(帝國、二二〇・一九一)

**準提淨業** ①(日)Jun-dai-jō-gō. (支)  
Chan-ti-ching-yeh. ②三卷 ③存、卅續  
二・九・四 ④明謝于教著  
⑤本書は顯密圓通即ち華嚴眞言融會の旨を  
奉じて準提經、布字法、持誦便覽、持誦儀  
軌(卷二)の。觀行儀軌(卷二)。顯密雙修  
觀行說、淨業圓修說等を編輯したもの。初  
心の者には觀行には入り難いから經と布字  
法との次に持誦を列ね、次に觀行と修行淺  
深の次第に従つて配列したものである。淨  
業と名けた所以は、普賢行願究竟の願を果  
さんがために帝網無盡の妙觀を行ひ、顯密  
雙融して準提陀羅尼の觀行を修するからであ  
る。謝于教が本書を作つた動機は顯密心要  
を讀んで大に感動したからであるが謝于教  
は自序を記してゐる。本書卷三に述ぶる顯  
密二教論は頗る發明した説である。  
(田島德音)

**準提心要** ①(日)Jun-dai-shin-yō.  
(支)Chan-ti-shin-yao. ②一卷 ③存、卅  
續二・九・五 ④堯挺述  
⑤準提菩薩の印法と、持誦の儀軌と、咒の  
功德と及び持咒の工夫を説く。不空三藏譯  
の七俱胝佛母所說準提陀羅尼經(大正二〇・  
一七八)には、此等の項目が詳細に説かれ  
てゐる。  
(神林隆淨)

**準提尊法** ①(日)Jun-dai-sō-hō  
②一卷 ③存 ④(正大、一四八・三六)

**準提陀羅尼經** ①(日)Jun-dai-da-  
ra-ni-kyō. (支)Chan-ti-to-lo-ni-ching.  
七俱胝佛母所說準提陀羅尼經、七俱胝佛母  
陀羅尼經、準提軌 ②一卷 ③存、大正二

**準提陀羅尼法** ①(日)Jun-dai-  
ra-ni-hō. (支)Chan-ti-to-lo-ni-fa. 七佛  
俱胝佛母心大準提陀羅尼法 ②一卷 ③存  
大正二〇・一八六No. 1078、縮印三、卅續  
一・三・三 ④唐善無畏(貞觀一一一開元二  
三A.D. 637-735)譯 ⑤七佛俱胝佛母心大  
準提陀羅尼法の下を見よ。

**準提大明陀羅尼經** ①(日)Jun-  
dai-dai-myō-da-ra-ni-kyō. (支)Chun-ti-  
ta-ming-to-lo-mi-ching. 七俱胝佛母準提  
大明陀羅尼經 ②一卷 ③存、大正二〇・  
一七三No. 1075、縮印一〇、卅一・一、北  
318良、南329良、元326良、明北344英、清  
341英、慶316才、天320良、指29才、法311  
男、至577緣、明南322改、Nj. 345 ④唐  
金剛智(咸亨二一開元二九A.D. 671-741)  
說開元二〇、年七一(波)譯 ⑤七俱胝佛母準  
提大明陀羅尼經の下を見よ。

**準提菩薩念誦靈驗記** ①(日)Jun-  
dai-bō-satsu-nen-jū-rei-gen-ki. ②二卷  
③存 ④如實(元祿一一一寶曆五A.D. 1698  
一1755)記 ⑤天保一二刊(谷大、餘大・二四  
九九)(正大、一〇三三・三〇・四四)(哲、こ・  
八・右・五)(高大、奇・一・二)(寬延二刊(高  
大、奇・一・五七)

**準提法要** ①(日)Jun-dai-hō-yō.  
(支)Chan-ti-fa-yao. 持誦準提眞言法要  
②一卷 ③存、卅續二・九・五 ④清代弘贊  
輯 ⑤持誦準提眞言法要の下を見よ。  
**準抵持法** ①(日)Jun-dai-ji-hō. (支)  
Chan-chih-chi-hō. ④明智旭(萬曆二七  
一永曆九A.D. 1599-1655) ⑦〔參考〕諸  
宗章疏錄卷第二

**準抵法要鈔** ①(日)Jun-dai-ji-hō-yō-  
shō. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶  
龜院)  
**潤光澤禪師全集** ①(日)Jun-kō-  
shō. ②二卷 ③存 ④(參考) 禪籍目錄  
**潤州牛頭山第六祖師碑** ①(日)  
Jun-shū-go-zū-san-dai-toku-so-shi-hi.  
(支)Jun-chou-ni-tō-shan-ti-hi-tsu-  
shih-pai. ⑦〔參考〕 比叡山最澄和尚法門  
道具等目錄  
**潤甫玉禪師語錄** ①(日)Jun-hō-  
gyoku-zen-jū-to-roku. ②一卷 ③存  
④周玉潤語 ⑦〔參考〕 禪籍目錄  
**初學暗誦要文** ①(日)Sho-gaku-an-  
jū-yō-mon. ②一卷 ③存 ④觀應(明曆  
二一寶永七A.D. 1656-1710)輯 ⑤元祿  
六刊(正大、一・七・一五七-一五八、二二二、  
二四三、一三〇・四七、一四二・七六、八一)  
(龍大、研佛(京專)哲、ま・一・中・一五)(高  
大、奇・一・二四)(谷大、餘大、一九三)天保  
八刊(京大、日大末、二八三)

**初學記** ①(日)Sho-gaku-ki. (支)Chu-  
-tsūch-ki. ②一卷 ③存、卅續二・一七・  
五 ④元代清覺(慶曆三一宣和三A.D. 1043

一(111)述、道安註

①本書は、白雲宗祖である河南府洛陽龍門山寶應寺本然清覺和尚が初心者の爲に起行造修の法として依行すべき三乘十地の要法を説き、初覺者をして佛知見に入らしめんとしたもので、嗣孫である南山大菩薩寺道安和尚が、是れに加注して行はしめたもので、此の初學記は、元皇慶二年(A.D.1313)四月白雲宗主明仁が、仁宗帝に奏進し、大慈隱寺に鑱梓して入藏したもので、其の奏進文は別項の正行集の卷末に收められて居る。本書には、集賢侍講學士趙孟頫(字子昂)が、同年三月七日に白雲祖師初學記序を撰し、卷首に收められて居る。清覺の略傳は、別項正行集に記した通りである。①寫本(京大、藏・二四・五一) (大久保堅瑞)

初學勸誘鈔 ①(日)Sho-gaku-kwan-ya-shō. ②存 ③寫本(龍大、研史)

初學三論標宗義 ①(日)Sho-gaku-san-ron-hyō-shū-ki. ②一卷 ③智光(一天平頃A.D.729-748)述 ④[參考] 諸宗章疏錄第二

初學鈔 ①(日)Sho-gaku-shō. ②存、黒谷上人語燈錄(漢語)(大正八三N. 3611)之内、淨土宗全書第九 ③漢語燈錄の下參照。

初學題額集 ①(日)Sho-gaku-dai-ryō-shū. ②三卷 ③存、大日本佛教全書第三 ④良山(一康安元A.D.1361)撰

①本書は淨土宗沙門良山の撰集にかゝり、祖典の一たる淨土初學鈔を擴充敷衍したもので、上中下三卷よりなり、上卷は三國縁

起并淨家題名、中卷は華嚴・法華・三論・法相・地論・攝論題名下卷は圓戒・眞言・成實・俱舍・戒律・宗門題名を問答體漢文を以て叙述注解し、初學に便したものである。⑤應永三刊 ①(正大、一〇七、七一)(龍大、二六八二・一〇二、研佛)(哲、あ・四・中・一)(紀氏降真)

初學入門 ①(日)Sho-gaku-nnyō-mon. ②一卷 ③存 ④嚴藏(一天明頃A.D.1781-1788)述 ⑤寫本(谷大、餘大・二四二三)

初學發心記 ①(日)Sho-gaku-hos-shin-ki. ②一卷 ③存 ④寂靜(一寛永七A.D.1630)述 ⑤寛永九刊 ⑥(谷大、餘大・二七八八)(立大、A〇四・三一九)

初學文譯 ①(日)Sho-gaku-mon-dan. ②一卷 ③存 ④大典顯當(寛永一一享保元A.D.1634-1716) ⑤寛政八刊 ⑥(駒大)

初學要法集 ①(日)Sho-gaku-yō-bō-shū. ②三卷 ③存 ④圓忍(一寛文八A.D.1668)撰 ⑤刊本(谷大、餘大・三三六九)(龍大、二六六二・九三)

初期本山教團に於ける北陸教線の發達 ①(日)Sho-kihon-zan-kyō-dan-ni-o-ke-ru-hokurikoku-kyō-sen-no-hat-tatsu. ②一卷 ③存 ④高崎圓邊編 ⑤昭和七刊 ⑥興教書院

初機淨業指南 ①(日)Sho-ki-jō-yō-shin-nan. (支)Chū-ki-jing-yō-shi-nan. ②一卷 ③存 ④黃慶淵述 ⑤民國四五刊 ⑥(正大、一〇九・二七五)(龍大)

初教經

①(日)Sho-kyō-gyō. (支)Chū-chiao-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④[參考] 內典錄第一〇(開元錄第一八、貞元錄第二八)

初行護摩指示 ①(日)Sho-gyō-gō-ma-shi-ji. ②存 ③智海述 ④建長四(A.D.1232) ⑤寫本(金剛三昧院)

初行護摩法則 ①(日)Sho-gyō-gō-ma-hō-soku. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶善提院)

初行作法 ①(日)Sho-gyō-sa-hō. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

初行表白結願作法 ①(日)Sho-gyō-byaku-kechi-gwan-sa-hō. ②一帖 ③覺鑾(嘉保二一康治二A.D.1095-1143) [參考] 諸宗章疏錄第三

初行表白並結願事由 ①(日)Sho-gyō-byaku-byaku-narabai-kechi-gwan-ji-ya. ②一紙 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶善提院)

初後心行法要集記 ①(日)Sho-gō-shin-gyō-hō-yō-shū-ki. ②二帖 ③存 ④賴譽記 ⑤足利時代寫(寶龜院) ⑥寫本(金剛三昧院)

初後內場圖 ①(日)Sho-gō-nai-jō-zu. ②一紙 ③存 ④德川時代寫 ⑤(金剛三昧院)

初後夜 ①(日)Sho-gō-ya. ②三部 ③存 ④寫本(金剛三昧院)

初後夜教授 ①(日)Sho-gō-ya-kyō-shū. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶善提院)

初後夜教授作法

①(日)Sho-gō-ya-kyō-ji-sa-hō. ②一軸 ③存 ④有快(貞和元一應永二三A.D.1345-1416) ⑤文中二(A.D.1373) ⑥寫本(金剛三昧院)

初後夜教授手鏡 ①(日)Sho-gō-ya-kyō-ju-to-kagami. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

初後夜教授手日記 ①(日)Sho-gō-ya-kyō-ju-to-nik-ki. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

初後夜教授用意 ①(日)Sho-gō-ya-kyō-ju-yō-i. ②三帖 ③存 ④寫本(金剛三昧院)

初後夜作法 ①(日)Sho-gō-ya-sa-hō. ②存 ③平安末期、鎌倉時代寫(高寄・一・六八)寫本(金剛三昧院)

初後夜作法 ①(日)Sho-gō-ya-sa-hō. ②一軸 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶善提院)

初後夜作法教授入壇護摩用心 ①(日)Sho-gō-ya-sa-hō-kyō-ju-nya-dan-jō-ma-yō-jin. ②一軸 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

初後夜式 ①(日)Sho-gō-ya-shiki. ②三寶覺雄方初後夜式 ③三帖 ④存 ⑤足利及德川時代寫 ⑥(寶龜院)

初後夜法則 ①(日)Sho-gō-ya-hō-soku. ②一帖 ③存 ④傳法灌頂祥流初後夜法則 ⑤一帖 ⑥寫本(金剛三昧院)

名所行發⑩(名庫書)著書所現⑨ 月年の刊寫⑧(書考參書釋註)書末⑦ 説解卷内⑥ 代年作著⑤ 著書④ 缺存③ 數卷②(名書)名題① 號略字數



初山屬賢錄

①(日) Sho-zan-rei-ken-toku. ②一卷 ③存 ④獨湛性堂(寛永五—寛永三A.D.1628—1706) ⑤寛文九刊 ⑥(駒大)(高大、奇、一、二五)

初受道經

①(日) Sho-ju-do-gyo. (支) Ch'u-chou-tao-ching. ②一卷 ④失譯 ⑤雜譬喻經の抄出。⑦(参考) 出三藏記第四、三寶紀第五、仁壽錄第三、靜泰錄第三、內典錄第二、開元錄第一六、貞元錄第二六

初授折紙

①(日) Sho-ju-ori-kumi. ②一葉 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院) ⑥初授諸尊法 ⑦(日) Sho-ju-sho-som-bo. 安祥寺流初授諸尊法 ⑧一帙 ⑨存 ⑩寫本(高大、奇、二六六)

初住記

①(日) Sho-ju-ki. ②一卷 ③存 ④寫本(京大、印哲・S・III・三三)

初重薄草子

①(日) Sho-ju-usu-zo-shi. 薄草子初重 ②二帖 ③存 薄雙紙(大正七八・六二〇No.2495)之内 ④成賢(應保二—寛喜三A.D.1162—1231)述 ⑤薄雙紙の下を見よ。⑥慶長一七寫 ⑦(寶龜院) ⑧一卷 ⑨存 ⑩安政六寫 ⑪(正大、一五五二・一一八)

初重指南目錄集

①(日) Sho-ju-shi-nan-moku-toku-shu. ②二卷 ③存、傳燈禪要卷上 ④聖聰(貞治五—永享二A.D.1366—1440)説、慶善(一文明一五A.D.1483)記

⑤此の書は五重指南目錄集の上巻を指して斯く呼ぶことがあるところから、別本の如く見ゆるも、彼れと同一書である。即ち増上寺開山の西譽聖聰の弟子了曉慶善が聖問の指南目錄に就て上巻に初重住生記の口訣を記し、下巻に二重授手印に就ての口傳を記した、その上巻だけを別に初重指南目錄集と呼ぶのである。(林彦明)

初重二印二明事

①(日) Sho-ju-ni-in-ni-myō-no-koto. ②九帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

初重二三抄

①(日) Sho-ju-ni-san-shō. ②三卷 ③了譽聖問(曆應四—應永二五A.D.1341—1420) ④(参考) 浄土正依經論書籍目錄

初重八結

①(日) Sho-ju-hachiketsu. ②二帙 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院) ⑥初重本末講義 ⑦(日) Sho-ju-hon-matsu-ko-gi. ⑧一冊 ⑨存 ⑩安政六寫 ⑪(正大、一五五二・一一九)

初重卷物

①(日) Sho-ju-no-maki-hono. ②傳、源空(長承二—建暦二A.D.1133—1212) ③(参考) 浄土依憑經論章疏目錄

初重和語口決之大事

①(日) Sho-ju-wa-go-ku-kei-no-dai-ji. ③存、傳燈禪要卷上 ④見譽善悅述 ⑤此の書は見譽善悦の作であらう、此の書の終りに見譽、感譽、欣譽の三人を列記し各、在御判とあるから、三人次第相傳したものと認むべきである。或は了譽聖問の作と云ふ説もあるがそれは誤であらう。見譽は五重始末の著者であつて増上寺西譽より六世の法孫で、飯沼弘經寺の第七世であ

る。此の和語と云ふは初重住生記の奥に載せられたる假名法語謂ゆる小消息を指すので、此の法語は和語燈錄第四には黒田聖人に遺す文として録され、勅修御傳では第二十一に載せられてある。而して初重住生記の了譽末釋投機鈔には總結文和字法語無別子細、故不釋之耳と云つて註解が略されており、五重指南目錄には「四、和語」と題して口訣が記され、了譽の指南目錄集には之を襲つて解説が施してある。見譽の五重始末にはそれを承けて詳細説明を爲して居るのである。して見ると此の私語口決の大事も見譽が従来の師傳口訣を記したものと謂ふべきである。(林彦明)

初集因明

①(日) Sho-ju-in-myō. ②一部 ③最澄(神護景雲元—弘仁一三A.D.767—822) ④(参考) 本朝台祖撰述密部書目

初出家戒儀

①(日) Sho-shū-kei-ki. ②一卷 ③存 ④明治二刊 ⑤(正大、一一八七・六)(京大、一、二九サ・一)

初出家儀

①(日) Sho-shū-kei-gi. ②一卷 ③存 ④賢願記 ⑤寫本(穴太寺)

初出家法式

①(日) Sho-shū-kei-hō-shiki. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、研史)

初章

①(日) Sho-shō. (支) Ch'u-chia-hō. ②一卷 ③缺 ④新羅元曉(眞平王三九A.D.617—)述 ⑤(参考) 新編諸宗教藏總録第三

初章觀文

①(日) Sho-shō-kan-bun. ②二卷 ③(支) Ch'u-chang-kan-wen. ④(参考) 奈良朝現在一切經疏目錄 2699

初心暗誦要文

①(日) Sho-shin-an-jū-yō-mon. 初心誦要文 ②一卷 ③存 ④光映(文政二—明治二八A.D.1819—1895)編 ⑤刊本(谷大、餘大・一七九八)(正大、一三〇・三六)

初心回向儀註釋

①(日) Sho-shin-e-kō-ji-chū-shaku. ②一卷 ③存 ④日輝(寛政二—安政六A.D.1800—1859)述 ⑤大正三刊 ⑥(正大、一八四・一六) ⑦日宗新報社

初心行護鈔

①(日) Sho-shin-gyō-go-shō. ②一卷 ③存、大正八三・五三二No.2642 ④仁空實道(一名惠仁)(延慶二—嘉應二A.D.1309—1388)述 ⑤應安六(A.D.1367)

初心行護鈔

①本書は座右鈔と共に一流衆徒の履修すべき清規を、延文年間に制定したる式目を主とし。再度初心者の行護すべき條々を定めたるものにて、内容は一佛殿勤行法九ヶ條、二食座法九ヶ條、三入浴法八ヶ條、四上廁法五ヶ條、五雜十八ヶ條より成立して其旨趣は延文式目の如く、師跡を護らんが爲に法界の一滴を波で普く我門の一衆に示す、庶幾は同學の法侶皆共に遵行して正法を久住せしめ師道をして遐代に傳へしめよと誓策してゐる。座右鈔、講院學道通規と共に通讀し履修すべき清規とす。

初心行護鈔

②享保一二刊 ③(龍大、二六八五・八)(谷大、宗大・二九二)(粟生光明寺) (石黒觀道)

初心行者用心私記

①(日) Sho-shin-kyō-jō-jō-jin-shi-ki. ②一帖 ③存

④正徳元寫 ⑤(寶龜院)

初心行者要文

①(日) Sho-shin-kyō-jō-jō-mon. ②存 興教大師全集 ③覺鑠(嘉保二)康治[A. D. 1095—1143]

④眞言宗の初心者が知り置くべき要文を、諸經論并に諸書より抄出したるものである、最初に大日經始め抄出したりと云ふ十一の經論等を列してあるが、内容は之と合はぬのである、「未再治之」と初めに注記せられて居るが如く、興教大師が備忘のため諸書より抄出せられたるものを、後人が初心行者要文と名けたものであらう。

⑦(参考) 諸宗章疏録第三 (富田駿純) ⑧初心勸學鈔 ①(日) Sho-shin-kwawa-gaku-shō. ②二卷 ③存 ④承應二刊(谷大、餘大・二七〇)(龍大、二六五九・二六)(正大、一三〇・三八)(哲、ま・一・右・二〇、あ・一・左・二五)明治一七刊(帝國、一三八・九三)

⑨初心勸學鈔私見聞 ①(日) Sho-shin-kwawa-gaku-shi-kō-jin-kō-mon. ②二卷 ③存 ④刊本(谷大、餘大・二二五五)

⑩初心五音伽陀私譜 ①(日) Sho-shin-ryō-on-ka-dō-shū-jū. ②一册 ③存 ④寫本(高大、寄・一・四九)

⑪初心示六端 ①(日) Sho-shin-ji-ro-kū-tan. ②一卷 ③存、續淨土宗全書第一四 ④良山妙觀(永仁二)康安元 A. D. 1294—1361 說永仁元 A. D. 1293 生)述 ⑤本書は大乗聖道門六宗の義理の一端を示

したるもの。即ち八萬の教門各別なりと雖も、皆機根に稱ひ、面々の樂欲に隨つて得脱無法なり、諸門に於て是非無く唯所望に順つて精細を盡すべしとして、一、密宗の即身成佛。二、佛心宗の直指人心見性成佛。三、天台宗の即身成佛。四、華嚴宗の初發心時便成正覺。五、三論宗の三祇成佛。六、法相宗の三祇成佛の旨を簡潔に説明してある。

⑫初心修行用心 ①(日) Sho-shin-shū-jō-jō-yō-jin. ②一帖 ③存 ④文明一一寫 ⑤(寶龜院)

⑬初心誦要文 ①(日) Sho-shin-jū-yō-mon. ②初心暗誦要文 ③一卷 ④存 ⑤光映(文政二)明治二八 A. D. 1819—1895 編 ⑥刊本(正大、一三〇・三七)

⑭初心小名目 ①(日) Sho-shin-shō-myo-moku. ②眞言初心小名目 ③一卷 ④存 ⑤寫本(京大藏・二四シ・五四)

⑮初心抄 ①(日) Sho-shin-shō. ②野山正明坊 ③(参考) 本朝台祖撰述密部書目 ④初心聲明私譜 ①(日) Sho-shin-shō-an-yō-shū-jū. ②一卷 ③存 ④寫本(帝國、二二四・九三)

⑯初心成佛抄 ①(日) Sho-shin-ji-ro-hus-shū. ③存 ④日我撰 ⑤原本(稻田海素藏)寫本(立大、D〇・二五九)

初心探調子口傳

①(日) Sho-shin-tan-chō-shū-ka-den. ②一卷 ③存 ④内山正如編 ⑤(京專)

初心得意章

①(日) Sho-shin-tōku-shō. ②一册 ③存 ④(哲、え・二・左・一〇)

⑤初心頓覺鈔 ①(日) Sho-shin-tōkan-shō. ②三卷或一卷 ③存 ④道範(元暦元)建長四 A. D. 1184—1232 說建長四、年七五寂(記) ⑤(参考) 諸宗章疏録第三 ⑥慶安二刊 ⑦(京專)龍大、二六六・二七七(哲、け・四・左・四一)(正大、一四二・四七)(京大、日大未・四二八)(高大、寄・一・四八)

⑧初心法衣訓 ①(日) Sho-shin-hō-e-kun. ②一卷 ③存 ④雲照(文政一〇)明治四二 A. D. 1827—1909 述 ⑤明治一四刊 ⑥(正大、一一八九・八三)(京專)

⑨初心用心抄 ①(日) Sho-shin-yō-jin-shō. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

⑩初心要學論 ①(日) Sho-shin-yō-jaku-ron. ②二卷 ③存 ④費永二刊 ⑤(龍大、二五二・三)

⑪初心要義鈔 ①(日) Sho-shin-yō-jū-shō. ②妙宗圓通記 ③存、國文東方佛教叢書第一 ④(日)類(寛政二)安政六 A. D. 1800—1859 述

⑫別名を「妙宗圓通記」とも云ふ。法華初心行者の心得べき要義を十ヶ條として擧げ、各條につき説明を加へ信心修行の方法を示したものである。歸依本章第一。本章に歸依する第一番である。本章には木畫の二があり、木像よりは畫像、即ち曼荼羅の方がすぐれてゐる。日蓮大士が佐渡始願の

十界勸請曼荼羅が宗門の正意であり、これ即ち釋迦佛である。依止妙戒第二。持戒とは即ち持法華經である。「法華經」には「讀持此經一是名持戒」と云つてゐる。故に法華經を歸依するが戒行第一である。然るに餘宗餘經に心をよせると法華經の信心がうすくなるから堅く制すべきである。諸佛の通戒は「諸惡莫作諸善奉行」である。何事もつゝしみまもれば佛戒に叶ふのである。起立信心第三。信心とは佛の教を疑はず法華經を持ち題目を唱へて成佛を求むることである。勿論信心は唱題の多少にはよらないが信する者は忘れず、忘れれば唱へるのであるから怠らず唱題する人は信心ある人である。併し題目を唱へても疑つてはいけな

い。修行より信心が第一である。受持正行第四。信心を以て法華經を受取り唱題修行する。これあらゆる修行の根本で無量の利益がある。即ち五番の功德を擧げる。一に佛一代の經々の功德、二に三世十方の諸佛の悟の功德、三に諸菩薩の修行の功德、四に天地法界萬法の功德、五に自己一心の不思議功德、この五はすべて五字の題目に具つてゐる。聽聞教義第五。信心を起す爲めには善知識について法義をきかねばならぬ。義理をわかまへると信心増長す。今法門の肝要十意を擧ぐ。一、凡ての教は惡を戒め善を勸む。二、佛教の根本尊主は釋迦佛である。三、佛教中法華經のみ佛の實義を明す。四、題目を持つは萬行の根本である。五、佛の心は平等安樂を願ふ。(道心)

六、出家は在家の師、在家は出家の親。七、

名所行發⑩(名庫書)著説所現⑩ 月年の刊寫⑩ (書考委書釋註)書未⑦ 説解容内⑩ 代年作者⑥ 著者④ 録存④ 數卷② (名書)名題① 號略字數

智者を求めて疑を決せよ。八、解了をもとめよ。九、正行(唱題)に併せて助行(讀誦解説等)をも修せよ。十、回向を怠るな。

隨順王制第六。王制に隨ふとは己の職分を守ることである。斯くて和合せばこれ佛の本意に叶ふ。そのためには我が儘を退け佛教をきいて心の樂とせよ。謹守世法第七。忠孝を始めとして世法を守るは妙法の功德を守るのであると心得、疎かにしてはならない。供養三寶第八。三寶を供養するとは佛像の修護、寺塔の造補、道場の莊嚴、本尊の供養、法の宣布、僧の供養等である。併せて國王、父母、衆生、三寶の四恩を報ずべきを説く。隨喜功德第九。唱題には天地十方法界に通じて功德莫大であると深く信じて喜び、常に平等に回向すれば必ず無量の福徳利益を被る。これは妙法の不思議で述べ難い。志願成佛第十。成佛とは事々物々に微妙の樂あるを通達すること、この妙法を持つものは佛の四徳を具ふるのである。常に成佛を志願して樂しめ。即ち現世にも未來にも成佛である。以上十ヶ條は日常生活上の心得で、五とか十とかの記憶し易い箇條に纏めたこと、共に『初心要義抄』の名に適しく、日蓮宗の學者に斯くの如く理論を超越して卑近なる事項を述べた著述は珍らしいものである。又著者は神儒佛の三教の根本は同一で、三教に隨ふは佛教信心と相違背せずとの思想なりしが本書の内容より何はれる。(三好鹿雄)

初祖道元和尚行録 ①(日) Sho-so-jo-gen-o-sho-gyo-roku. 永平開山道元和尚行録、道元和尚行録 ②一卷 ③存、續群書類從第九 ④道元和尚行録の下を見よ。

初祖菩提達磨三朝傳 ①(日) Sho-bo-dai-daru-ma-san-chō-den. ②四卷 ③存 ④泰嵩(一寶永元A.D.1704) ⑤寛政三刊 ⑥(谷大、餘大・三・一四) 初祖菩提達磨大師入道四行 ①(日) Sho-so-bo-dai-daru-ma-dai-shi-nya-dai-shi-gyo. (支) Chi-so-pu-ti-tai-no-ta-shi-hi-to-shi-gyo. ②一卷 ③存、神海十珍(上續二・三・一、爲霖禪師旅泊菴稿附録)之内 ④爲霖道滂(一康熙二三A.D.1681)編 ⑤元祿八刊 ⑥(谷大、餘大・四一) ⑦(駒大) 初胎後金 ①(日) Sho-tai-go-kon. ②帖 ③存 ④宥快(貞和元一應永二三A.D.1345-1410) ⑤文化一〇、寶曆三寫 ⑥(金剛三昧院) 初胎後金入句 ①(日) Sho-tai-go-kon-nyū-ku. ②帖 ③存 ④寶曆九寫 ⑥(寶善提院) 初大本經 ①(日) Sho-dai-hon-gyo. 現代意譯初大本經 ②存、現代意譯根本佛教聖典叢書第一長阿含經抄 ③羽溪了諦、林五邦共譯 初代佛教 ①(日) Sho-dai-buk-kyō. ②一卷 ③存 ④ライヌ、ダウツト著、白石喜之助譯 ⑤昭和四刊 ⑥東京新生堂 初誕生現大瑞應經 ①(日) Sho-tan-shō-gō-tan-jū-ō-gyo. (支) Chi-tan-shō-gō-tan-jū-ō-gyo. ②一卷 ③存

根本説一切有部毘奈耶雜事第二十卷の抄出。(参考) 開元録第一六、貞元録第二六

初中後善義 ①(日) Sho-chū-ho-zen-ri. ②一卷 ③存、眞宗全書第六二 ④智洞(一文化三A.D.1806)編 ⑤法華經序品に「演説正法初善中善後善其義深遠」とある文に就いて、光宅の義記、嘉祥の義疏、天台の文句等の諸疏より十五義を列挙したものである。終りに十五説を略説して次の如く述べてゐる。 一者序正流通天台等正用之、二少壯老、三入行出、四捨罪捨福及一切捨(已上三義成論三善品説)、五讚禮度讚戒及二法果生天佛前、六見五衆生、厭身業捨居家心離煩惱(七説三乘法(已上三義智論四十九説)、八開時歡喜修時無苦究竟離垢(瑜伽八十三説)九從、他聞、法如説修行得、聖正見、十見苦斷、集修、道證、滅(此二小乘三善寶篋經説嘉祥慈恩引之)、十一發善提心、不念二乘迴、向一切智、十二行六度、破六弊迴、向一切智(此二亦寶篋經説大乘三善)、十三戒定慧(天台所出異解中)、十四初中後心(天台依、金光明經説、已上二義出、文句)、十五聞思修(判溪記引論説)。(藤枝昌道)

初天問如來警戒不思議經 ①(日) Sho-ten-mō-nyō-rai-kyō-kai-i-shi-gi-kyō. (支) Chi-ten-wen-wen-i-tai-ching-pa-est-i-ching. ②一卷 ③失譯 ④(參考)出三藏記第四 初傳授記 ①(日) Sho-dōn-ju-ki. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院) 初分説經 ①(日) Sho-bun-ek-i-gyo. (支) Chi-bun-shuo-ching. 初分別經 ②一卷 ③存、大正一四・七六三No. 498、縮辰一〇、卅一五・七、北1217和、南1237功、元1312功、明北90功、清91功、麗174功、天1302功、至144唱、明南970繁、N. 916 ⑥宋施護譯 ⑤(推定)雍熙二以後(A. D. 983) ⑥本經は主として迦葉及其の千弟子の化度の由來を説いた佛傳であるが、此の事件に續く頻婆沙羅王の歸佛、及舍利弗目連の得度の事も簡略に附記してゐる。その經名は恐らく此の所説が釋尊説法の初分に屬する所から、斯く名づけられたものであらう。さてこの内容は通説と大差なく、佛は事火外道優樓頻螺迦葉を訪問し、龍舎に宿りて龍を降伏し、次いで迦葉と神通を競うて自らの無比の力を示す。或は四天王及び上方帝釋の五方天の爲に説法し、或は迦葉の密かに思惟する所を熟知して他心智證通を示すなど諸種の神力に依て迦葉自らの慢

初傳授記 ①(日) Sho-dōn-ju-ki. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院) 初分説經 ①(日) Sho-bun-ek-i-gyo. (支) Chi-bun-shuo-ching. 初分別經 ②一卷 ③存、大正一四・七六三No. 498、縮辰一〇、卅一五・七、北1217和、南1237功、元1312功、明北90功、清91功、麗174功、天1302功、至144唱、明南970繁、N. 916 ⑥宋施護譯 ⑤(推定)雍熙二以後(A. D. 983) ⑥本經は主として迦葉及其の千弟子の化度の由來を説いた佛傳であるが、此の事件に續く頻婆沙羅王の歸佛、及舍利弗目連の得度の事も簡略に附記してゐる。その經名は恐らく此の所説が釋尊説法の初分に屬する所から、斯く名づけられたものであらう。さてこの内容は通説と大差なく、佛は事火外道優樓頻螺迦葉を訪問し、龍舎に宿りて龍を降伏し、次いで迦葉と神通を競うて自らの無比の力を示す。或は四天王及び上方帝釋の五方天の爲に説法し、或は迦葉の密かに思惟する所を熟知して他心智證通を示すなど諸種の神力に依て迦葉自らの慢

心を挫き、彼をして遂に五百弟子を率ゐて出家するに至らしめる由來が述べられて上卷は終る。下卷に入りて彼が弟子と共に出家するに説き起されて、彼の二弟にして共に兄と道を通じうする那提迦葉は三百の弟子を率ゐ、伽耶迦葉は二百弟子を率ゐて共に長兄に倣つて出家することが説かれる。

それより佛は彼ら新附の弟子を率ゐて象頭山に入り、彼らに説法し、又杖林山に入り、次いで王舍城に到りて頻婆沙羅王を教化せんとす。此の時王及會衆、佛と有名なる老迦葉と何れが師にして何れが弟子なるかに疑念を抱いたので、佛は迦葉をして之を會衆に告知せしめ、やをら説法を始めて王の歸佛を得たる事が述べられ、最後に簡略に刪闕夜の弟子舍利弗目連の得度の事が説かれて、一經は終つてゐる。所説通途と異なる處なけれども、那提の弟子三百、伽耶の弟子二百といふは、本經と佛本行集經、五分律、nāhavaṅga, Theragāthā註、などで、他經は多く各二百五十とする。

尙ほ本經の内容は多くの經典に説かれてはゐるが、此の經に説く三事のみを取扱へる經即ち異譯は漢譯中に見えぬ。又西藏にもない(大藏目錄參看)。本經の譯出は北印度烏填曩國帝釋宮寺の沙門にして、宋の太宗太平興國五年(A. D. 980)來支せる施護に依つてせられたが、その年時は不明である。但、宋元明三本及宮内省本に於て譯者に冠する官位。朝奉大夫試光祿卿に依て(高麗本之れを缺く)、彼が官位に補せられたる雍熙二年(A. D. 985)以後と之を推定し得

るだけである。(寺修一)

初發意菩薩行易行法經 ①(日)

Sho-ho-chi-bo-sang-go-ti-gyo-bo-kyo. (支) Ch'u-tai-p'u-sai-sing-ti-sing-tai-ching. ①一卷 ④失譯 ⑤十住論易行品の抄出 ⑦(參考) ⑧三藏記第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

初發意菩薩常晝夜六時行五事經 ①(日)

Sho-ho-chi-bo-sang-go-ti-gyo-bo-kyo. (支) Ch'u-tai-p'u-sai-sing-ti-sing-tai-ching. ①一卷 ④失譯 ⑤十住論易行品の抄出 ⑦(參考) ⑧三藏記第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

第一、武周錄第一一、開元錄第一、第一四貞元錄第二、第二四  
②一卷 ③存、日本大藏經華嚴宗章疏卷下、大日本佛敎全書第一三華嚴小部集 ④禪爾撰 ⑤鎌倉時代

初發心時 ①(日)

Sho-hos-shin-ji. ①本書は六十華嚴經梵行品の終りに、「初發心時便成正覺」といふ文に就て立てたる論義にして、幾多の問答を設けてある。今其の梗概を擧て云はゞ、初發心時とは十住中の初發心住に於て、即ち信滿入住の位なれば、何ぞ究竟果滿の正覺を成すべけんや、故に八十華嚴經發心品の文に依れば、「以是發心當得佛故」とあり、況んや初住の位に佛果を極めば、後々の諸位は更に何の所用ありやと問て。其の答に、六位重々の成道は一乘至極の玄談、我宗無餘の妙道なり。初後相即の旨を説じ、因果圓融の義を述ぶるが

故に、初發心住の位に妙覺の果を成ずるとて、探玄記等の釋を引用し、八十經の當得佛故の當の字は、演義鈔の釋の如く、「譯人欲不壞初後二故作此釋」と會通し。又「後の諸位を説くは即ち是れ初中の一切なり」といふ五教章の文を引き、初發心住の一念中に二住已去乃至佛果を攝して圓備せざることなしといへり。されど行布門のときは、彼れを舒べて後々の諸位を爲すのであり、行布又は三乘を誘引するに便である。若し後々の位を説かざれば、却りて緣起圓融の道理を忘失するもの歟と論じてある。尙之れに對し重々の難を擧げて、一々之を釋してある。されば此の書は小部なりと雖も、華嚴宗に於ける古論草中の優秀なものといつて可い。(松原恭讓)

故に、初發心住の位に妙覺の果を成ずると

初發心要 ①(日)

Sho-hos-shin-yo. ①一帖 ③存 ④最澄(神護景雲元一弘仁一三A. D. 767-822) ⑤平安朝中期寫 ⑥(高大、寄・一・一五)

初發願得鈔 ①(日)

Sho-hotsu-ton-tokoku-yo. ①一帖 ③存 ④理觀述 ⑤徳川時代寫 ⑥(寶龜院)

初夜後夜口決 ①(日)

Sho-ya-go-yaku-ketsu. ①六卷 ③存 ④隆源(一應永二A. D. 1405-)記 ⑤寶永七刊 ⑥(正大、一四八・一八二)

初夜後夜作法聞書 ①(日)

Sho-ya-go-yaku-sho-ho-ho-ki-gaki. ①二軸 ③存 ④應永一二寫 ⑤(寶善提院)

初夜金剛界 ①(日)

Sho-ya-kon-go-kai. ①一卷 ③存 ④寫本(京大、印香)

初夜作法 ①(日)

Sho-ya-shu-ho. ①一軸 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶善提院) ⑥初夜作法 ①(日) Sho-ya-shu-ho. 廣澤方金剛界初夜作法 ②一軸 ③存 ④延徳二寫 ⑤(金剛三昧院)

初夜導師作法 ①(日)

Sho-ya-dō-shi-sa-ho. ①一軸 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶善提院) ⑥初夜禮讚偈 ①(日) Sho-ya-rai-san-kyo. 梵唄探譜初夜禮讚偈 ②一卷 ③存 ④藤井制心著 ⑤昭和五刊 ⑥(龍大) ⑦初例抄 ①(日) Sho-rai-sho. ②二卷 ③存、群書類從第一五

初夜禮讚偈 ①(日)

本書は法苑事蹟の初例を集録したもので上下二卷併せて二百三十一項目に亘り、佛敎渡來以來平安末期に至る間の萬般の初例濫觴を記載してゐる。而して今案に堪えざるが故に一々項目の掲出は之を省略す。(紀氏隆眞)

所依身私記 ①(日)

Sho-e-shin-shi-ki. ①一卷 ③義聖述 ④(參考) 花嚴宗經論章疏目錄

所欣釋經 ①(日)

Sho-gon-jak-kyo. (支) So-hsin-shih-ching. ③存、生經第二(大正三・八六No. 154, 23)

所讚念佛集 ①(日)

Sho-san-nen-bus-shu. ③三卷 ③存 ④刊本(哲二・四・左・一五)

所止辨 ①(日)

Sho-shi-ben. ③存、難波塵壺之内 ④知空(寛永一一享保三A. D. 1631-1718)述 ⑤正徳四刊 ⑥(龍

大、研眞)

所信能信之辨

①(日)Sho-shin-no-shin-no-ben. ②一卷 ③存 ④紙成述 ⑤大正二寫 ⑥(谷大)宗大・一九三一)

所非汝所經

①(日)Sho-hi-nyo-shio kyū(支)So-fai-ju-so-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤(參考) ⑥出三藏記第三、法經錄第三、仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第一、第一五、貞元錄第二、第二四

所欲致忠經

①(日)Sho-yoku-chi-ten-kyū. (支)So-yū-chih-huan-ching. ②一卷 ③存、大正一七・五三九No.737、縮宿八、二一四・一〇、北792安、南805安、元798安、明北708敬、清708敬、麗795辭、天792安、指758辭、法780容、至1027政、明南574尺、Ni.712 ④竺法護譯 ⑤西晋太安三(A.D.304)

⑥佛一時祇園に五百比丘と共に患り、一日諸比丘分衛して外道異學に會し、患の因、五陰(色、痛痒、思想、生死、識)を苦となす所以等に就て難問せらる。よつて諸比丘分衛後佛所に詣て此の事を問ふ。佛即ち五所欲は因縁より生ずとて事例を擧げて廣説し、尋で欲を捨てる道を明して特に婦人に就て不淨觀を提示し、更に四禪等を勸説しつある。(美濃晃順)

所欲致忠經

①(日)Sho-yoku-chi-ten-kyū. (支)So-yū-chih-huan-ching. ②一卷 ③缺 ④東晋代祇多蜜譯 ⑤第二譯 ⑥(參考) ⑦開元錄第一五、貞元錄第二四 ⑧(参考) ⑨(日)Sho-ri-ki. (支)Chiu-ling-i. 鈴杵義 ⑩一卷 ⑪存、日本大藏

經眞言宗事相章疏

①眞然(延曆三三—寛平三A.D.801—802)記

⑥眞言の修法に用ひる金剛鈴と金剛杵とについて、その象徴する所の意義を説いた書で、僅か二百餘字の短篇ではあるが、古來有名な書である。卷末に大日を中尊とし金剛手除蓋障等八菩薩圍繞の種子曼荼羅が付いてゐる。これは多分後人の加筆で、原本には無かつたものと思ふ。

文和五、賢寶寫

①(觀智院)(小田慈舟) ②書 ③(日)Sho. (支)Shu. ④一卷 ⑤存、(續)二・六・五 ⑥明克勤(—洪武六A.D.1373—)

⑥明の太祖が、三度目に日本に送つた使僧金陵瓦官教寺無逸克勤が、明洪武六年五月二十日(A.D.1373)明州を出發して、肥前の五島、博多を経て、六月二十九日上洛して嵯峨の向陽院に入り、天皇に拜謁して、足利幕府と外交交渉をし、九月一日叔山の天台座主青蓮院遠道法親王に此の書を致して日本と明との修好關係の斡旋を懇願し、兼ねて明に於て遺佚せし天台關係書の寄贈を請ふたものである。明使は、太祖(朱元璋)が元を亡して金陵に即位した明洪武元年十一月と、翌二年三月との二回が此に先だつものであるが、何れも日本をして屬國たらしめんとし、國書も倨傲の言辭に充ちて居たので、九州に在つて時の征西府將軍たりし懷良親王の赫怒を買ひ、第二回の使臣楊載、吳文華は拘留三ヶ月に及んで釋放され、日本との修好を冀ふて、僧侶でなくては、

征西府に拒まれて上洛し難きを知り、前記の天台僧なる克勤を嘉興府天寧禪寺仲猷祖開禪師(元叟行端禪師の法嗣にして南岳下二十世)とに命じ、當時在明せし日本僧林庭海壽和尚(足利義滿の歸依を受け京の眞如、鎌倉の淨智、圓覺、京の天龍南禪等に歴住す)並に杭州中竺の藏主權中巽の二名を通事として同行せしたもので、本書の文中に最澄、源信、俊仍等日本僧と支那との關係、唐宋以來の修好に言及して、暗に天台座主の斡旋を冀ふて居り、且つ唐末五代の兵火に燬かれたる經典のこと、錢鏐の子、忠懿王が高麗に使を派し、高麗の諦觀、經典を奉じて朝貢したることを述べ、盧堂智愚禪師贊の天台像一軸を進むることを記し終りに支那に遺佚せし天台教典の目錄を掲げて居る。日支外交關係書として興味あるものであり、且つ佛教書誌學上より彼我典籍の研究に就ても興味あるものである。尙ほ克勤は詩文に長じ、五山僧の詩文を閲して賞讃したる事など、義堂周信禪師の空華日工集應安六年八月、同八年三月、至德二年二月の項などに散見して居る。

尙ほ續藏本に於ては、本書の終りに、續文獻通考、圖書百四十六、圖書編五十、明太祖朱元璋文集、九靈山房集、夢觀集、佛祖統紀、續佛祖統紀等の諸書に現れた關係文書を掲げてある。克勤の書に記された當時支那に遺佚せし天台典籍は左の如くである。

(南岳)大乘止觀二卷。四十二字門二卷。無諍行門二卷。三智觀門。次第禪要。釋論

玄各一卷。

(天台)智度論疏二十卷。彌勒成佛經疏五卷。觀心釋一切經義一卷。彌勒上生經疏一卷。仁王般若經疏二卷。禪門章。般若行法雜觀行。入道大旨。五方便門。七方便義。七學人義。一二三四身義。法門儀。禪門要略。彌陀經義疏。金剛般若經疏各一卷。(草安)八教大意。南獄志。眞觀法師傳各一卷。

(荆溪)止觀搜要記十卷。涅槃後分疏。授菩薩戒文。止觀文句。方等補闕儀各一卷。尙ほ天台傳列祖として、高祖龍樹尊者より十七祖法智尊者に至り、次で南屏、慈辨、車溪、竹菴。北峰、剡源、雲夢、湛堂、我菴、並に無逸克勤の嗣法の師たる元瑛法師に至る傳燈を掲げて居る。(大久保堅瑞)

書翰 ①(日)Sho-kan. ②一卷 ③存、慈雲尊者全集第一五 ④慈雲飲光(享保三—文化元A.D.1718—1804) ⑤尼衆の爲に書せられたる習字手本である ⑥自筆本(河内高貴寺) ⑦(日)Sho-kan. ⑧三軸 ⑨存 ⑩(正大一五九六)

書翰二通 ①(日)Sho-kan-ni-tsu. ②存、眞言宗安心全書第四雜篇 ③書簡 ④(日)Sho-kan. ⑤一軸 ⑥存 ⑦眞源 ⑧徳川時代寫 ⑨(寶善提院)(寶鏡院) ⑩書簡 ⑪(日)Sho-kan. ⑫一紙 ⑬存 ⑭本淨より純淨律師へ送りし書簡 ⑮元祿四寫 ⑯(寶鏡院) ⑰書簡草案 ⑱(日)Sho-kan-so-an. ⑲

所、書

一卷 ⑥存 ⑦支智(享保一九)算政六 A. D. 1731-179)撰 ⑧寫本(龍大、別置) ⑨『高僧傳』や『元亨釋書』等を參照して聊か附記したものである。本書の一本に繪の字有ること及び、文中に「た、在世萬徳のあらましを。筆畫にうつして云々」と云つてある點を考ふれば、原本即ち、『悉地傳』は恐らく繪傳なりならんも今親しく見るを得ず。

書寫山緣起

①(日)Sho-shu-zan-in ②播州書寫山緣起 ③存、大日本佛教全書第一一七寺誌叢書第一、國文東方佛教叢書第二輯第六寺誌部 ④快倫 ⑤寛永二一(A. D. 1644)仲夏

⑥播州書寫山圓教寺は村上八景の康保三年(A. D. 1636)、性空の開創する所、爾來、朝野の尊崇を受け天台三道場の一に數へられし靈刹である。本書は即ち當山の緣起であつて、其の奥書にある如く、寛永二十一年、書寫山理教房前住内供奉快倫の撰録する所である。

撰者の言によれば、性空未だ存命の初、即ち、長保四年三月五日に花山法皇が書寫山に再度の幸駕ありし折、通寶山に一日御逗留ありて、上人の形貌と行業を圖記せしめられしものを『悉地傳』と稱して仙洞の文車に置かせられしを、上人の歿後四年にして寛弘七年十月に衆徒の願により當山に送り給はりて今に靈寶となつてゐるといふ。本書は此の『悉地傳』に據りて成りしもので「此かかに書ぬるも。皆かの文の心をうつしてわたくしなし云々」の「かの文」とは『悉地傳』を指示するもので、又、「くはしきむねは。眞名の文を見へし」と云つてゐる所から『悉地傳』は漢文體のものである事も知られる。即ち、快倫撰録の本緣起は其の原

本たる『悉地傳』の意を變改することなく、之を平易なる假名交り文となし、それに『高僧傳』や『元亨釋書』等を參照して聊か附記したものである。本書の一本に繪の字有ること及び、文中に「た、在世萬徳のあらましを。筆畫にうつして云々」と云つてある點を考ふれば、原本即ち、『悉地傳』は恐らく繪傳なりならんも今親しく見るを得ず。

書寫山舊記

①(日)Sho-shu-zan-ku ②存、大日本佛教全書第一一七寺誌叢書第一

③本記はその奥書に依つて貞享二年に書寫山圓教寺寶藏本を撰萃したものである事が分る。書寫山は其の開山性空以來、上下の尊崇厚く、叡山、大山(伯耆)と共に天臺三道場の一に數へられし程の靈刹なれば、當山に關する舊記も亦多かりならんも今は之を見るを得ず。

本記の内容に就いて云へば、最初に、承安四年四月三日、後白河法皇、當山に幸駕あり、其際、勅定を以て如意堂の本尊『書寫山緣起』によれば、開山性空が安饒に仰て、靈櫻を以て作らしめ給ひし生木の如意輪尊を拜見され、御自筆の御札を賜はりて如意堂の正面に打たせられし事を記してゐる。次に、惠心僧都並に寂心上人(八徳山の開基、保胤入道)の證上人詩を載せ、最後に、元弘三年五月廿七日、後醍醐天皇が隱岐より京都へ還幸の途次、當山に行幸あり、翌廿八日には如意堂、増位、法華の二寺に行幸ありし事を仔細に記してゐる。

今、此の行幸の記載の内容を按ずるに、天皇の當山臨幸には、且なる御參詣の御思召のみではなく、深き御宿願の意の存せしことを窺ひ得る。尙、此の記事は『群書類從帝王部』所載の『書寫山行幸記』と其の本全文同一であつて、天皇行幸の御、御先導役をなせし權律師行春が同年六月三日に記録せしもののである。(不破幹雄)

書寫聖人懺悔法

①(日)Sho-shu-in-shan-ku ②書寫聖人懺悔法 ③一卷 ④(參考)淨土依憑經論章疏目錄

⑤『參考』淨土依憑經論章疏目錄 ⑥一卷 ⑦存、大日本佛教全書第二佛教書籍目録 ⑧宗寂(大同四一元慶八 A. D. 809-887)撰 ⑨成通六(A. D. 865)

⑩本書は眞言宗東寺入唐五家の隨一宗寂の請來目錄であつて、全體が三部から成つて居る。第一部は金剛頂瑜迦中略出念誦經一部六卷以下百六十六種の聖典を掲げ、第二部は五針鈴三口以下九種の道具目錄であり、第三部は都利律斯書一部五卷以下十部の雜書目錄である。第一部中收めらる書籍は宗寂在唐中各地にて蒐集せる聖典中にて先に弘法大師、或は他師に依て既に我が國に將來されて他所に在りと雖も、未だ東寺に至らざるものと、既に東寺に藏せられ居るも多少とも字句に異點の存する眞言經・儀軌・雜法門のみを特に選んで目錄を製したものである。即ち、第一部の終りに

據。

と云へるは此の消息を語つたものである。冒頭に一百三十四部一紙書十九張と云へるも、卷本一百四十二部、一紙書二十四部とすべきか。第二部は青龍寺法全、善無畏三藏の舊址等にて附せられたる道具目錄であり、第三部は當時我が國の入唐僧圓載が宣宗皇帝の請に應じて宮中に法輪を轉じ、勅を奉じて西明寺に住し、釋典備書數千卷を本國に齎持せんとして蒐め居りしを以て、宗寂是を訪ひ、乞ふて寫得せるものである。宗寂の西明寺に至りしは成通六年(A. D. 865)なり、この年歸朝し、右聖典道具を東寺に藏するに當つて本目錄を製したのである。(林屋友次郎)

書寫理趣經願文

①(日)Sho-shu-ri-sui-kyo-gwan-mon. ②一卷 ③存 ④光盛記 ⑤徳川時代寫 ⑥(寶龜院)

書籍聖教貸不忘記

①(日)Sho-shu-sei-kyo-kai-wasi-naki. ②一帖 ③存 ④天保一四寫 ⑤(寶龜院)

書籍目錄

①(日)Sho-seki-moku-roku. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

書籍目錄

①(日)Sho-seki-moku-roku. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、餘大、三五二)

書判會異文集

①(日)Sho-kai-iai-mon-jū. ②一卷 ③存 ④關英 ⑤寛文九刊 ⑥(龍大、二六九四、四)

書目集覽

①(日)Sho-moku-shū-an. ②一卷 ③存 ④禿氏祐詳著 ⑤昭和

⑥(龍大、二六九四、四) ⑦(龍大、二六九四、四) ⑧(龍大、二六九四、四) ⑨(龍大、二六九四、四) ⑩(龍大、二六九四、四)

三刊 ①(龍大)

書札式 ①(日) Sho-sas-shiki. ②

卷 ③存 ④寫本(龍大別置)

庶人王並庶民受五戒正信除邪

經 ①(日) Sho-nian-ti-narabini-sho-

min-ju-go-kai-sho-shin-jo-ya-kyo. (支)

Shu-jen-wang & shu-min-shou-wu-chieh

-cheng-hsin-ch'u-hsieh-ching. ②一卷

疑偽經 ⑦(參考) 開元錄第一八

疏及念誦類 ①(日) Sho-oyohi-nen

ju-rui. ②一卷 ③存 ④刊本(駒大)

疏記第七古記 ①(日) Sho-ki-dai-

shichi-ko-ki. ③存 ④寫本(立大、V.1.1-

一三六)

疏記抄 ①(日) Sho-ki-shu. ②十卷

③山家祖德撰述篇目集卷下に大論義抄、法

華五部九卷、高漢德王抄、枕雙紙、三大部

七百科、疏記抄十卷、四教類抄三卷を列擧

にその下に細註して曰く「已上七部天臺體

標爲三兵部仁快撰、五大院闍梨安然撰以七

部爲忠尋撰、甚誤也。今即記之。天正錄。

仁快撰玉泉抄一部而已。今依之。後賢思、

之云々

疏御釋目錄 ①(日) Sho-go-shaku-

moku-roku. ②一冊 ③存 ④寫本(高、大、

寄・一五〇)

疏相承次第 ①(日) Sho-sai-ju-shi-

dai. ②一軸 ③存 ④有範記 ⑤永祿六

寫 ⑥(高、大、寄・一六四)

疏草第七有慶記 ①(日) Sho-sai-

dai-shichi-u-gyo-ki. ②二冊 ③存 ④信

想(貞享二—寶曆一三 A. D. 1685—1763)述

眞良記 ①寫本(高、大、一・三四)

疏草第十有慶記 ①(日) Sho-sai-

daishichi-u-gyo-ki. ②一卷 ③存 ④寫本

(正、大、一四四・五〇)

疏六啓蒙 ①(日) Sho-roku-kei-mo,

②一冊 ③存 ④泊如運做(慶長一九—元

祿六 A. D. 1614—1693)述 ⑤延寶元刊 ⑥

(京、大、日、大未・四四〇)

處處經 ①(日) Sho-sho-kyo. (支) Ch'u-

ch'u-ching. ②一卷 ③失譯 ④(參考)

出三藏記第四、法經錄第四、靜泰錄第四

處處經 ①(日) Sho-sho-kyo. (支)

Ch'u-ch'u-ching. ②一卷 ③存、大正一

七・五二三 No. 730、縮印六・二四・一〇、

北812無、南826無、元230無、明北880敬、

清680敬、麗815世、天213無、指725世、法

800世、至1047卑、明南690敬、Z. 634 ④後

漢安世高譯 ⑤建和二—建寧三(A. D. 148

—170)

⑥本經は支那譯經中の初期に屬するもので

あるだけに、雜然と佛教智識を集めた觀が

あり、云はば佛教一般に關する紹介とも見

るべきものである。従つて經として首尾一

貫の組織を持たぬ。佛教傳來の初期に於

ては、この種のもが特に必要とされたも

の思はれる。大略五十許りの項目になる

が、佛、菩薩、阿羅漢、辟支佛等について

各その特性を擧げ、佛教徳目に就いても極

めて端的に記述する等、特に實踐道徳に關

する方面が説かれてゐる。故に戒律に關す

るもの多く、しかも所謂戒律としての組織

も持たぬ。惟ふに支那佛教初期の資料と合

せ見るならば興味深きものがあらう。次に  
内容について因縁の項目とその他四五の文  
を引くことにする。

道人行。不隨自犯。意中大深聲。菩薩四

事。佛四事。四無畏。頂光三因緣。舉手四

因緣。不著屣三因。(以下略)佛行足大地

四寸三因。行地高下平等三因。不飛行四

因。初成道時七日不食四因。佛三病六憂。

佛棄餘壽二十年三因。佛燒身三因。佛笑口

中有五色光五因。佛度世去四因。彌勒不來

下四因。阿那含三結。須陀洹七結。鉢有四

名。後不食五福。

○阿羅漢守空不得菩薩道。

○諸阿羅漢共責阿難。佛在世時欲得水何以

故不與。十方一切皆當從佛解脫汝何以不留

佛。

○佛本行共學道者有八十億萬人皆求菩薩

道、唯有兩人得道耳、一有釋迦文二者彌勒。

○佛忍辱過於地、心軟過於水、意堅過於須

彌山、功德過於海水、智慧過於虛空、以是

故前得佛耳。

○彌勒時人眼見四千里者、本行十因緣得、

不掩人眼明、不捨人眼、不覆敬人眼、不藏

人善、不視殺、不視盜、不視姪、不視及人

短、諸惡事不視、然燈於佛事。

○佛辟支佛阿羅漢是三人法同行異、佛者爲

覺意、辟支佛爲見因緣知、阿羅漢坐禪乃知

……辟支佛身已有三十相、無二相不及佛、

無善根方便故、阿羅漢自斷苦不斷他人苦。

○彈指之間人有意有六十生死、彈指之間三意

並行。

○佛言舍利弗點第一、目健連神足第一、阿

難聞第一、羅雲戒第一、阿那律徹視第一、  
舍利弗牽帶三千大千日月天地悉動等。

○不知身生意意生身。

○梅那比丘得病言、地水火風空皆當滅但爲

意識移生耳。

○阿那律難投金毘羅三人共坐自思惟七事

……少欲知足精進守六衰自護守意智慧乃至

得菩薩。

○人在世間五十歲、出息不還屬後世、人命

在呼吸之間耳。

○比丘入人舍中當如手在空中無所罣礙。

○人命盡神不滅。(稻葉文海)

處世應用禪ノ殺活 ①(日) Sho-se

to-ji-zan-no-shu-kyaku. ②一卷 ③存

竹田默雷著 ④昭和六刊 ⑤東京中央佛教

社

處世禪 ①(日) Sho-sei-zen. 殺活自在

處世禪 ②一卷 ③存 ④丸山徳仙述

大正七刊 ⑤(駒大) ⑥東京若月書店

處世と信仰 ①(日) Sho-sei-to-shin

to. ②一卷 ③存 ④瑞穂教郡著 ⑤大

正七刊 ⑥東京顯道書院

處中行道經 ①(日) Sho-chu-kyo-

do-kyo. (支) Ch'u-chung-hsing-to-ching.

②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤雜阿含經の抄出

⑦(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、仁

壽錄第三、靜泰錄第三、第四、武周錄第一

二、開元錄第一六、貞元錄第二六

署杜婆娑羅門經 ①(日) Sho-to-to

ba-re-mon-kyo. (支) Shu-to-to-cheng-to

to-men-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯

⑦(參考) 出三藏記第三、法經錄第三、仁

壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第一、第一五、貞元錄第二、第二四

緒錄集

①(日)Sho-yo-shū(支)Iku

②三卷 ③宋善月(紹興一九一淳祐元 A. D. 1149-1241) ④[參考] 諸

宗章疏錄第二

蔗庵遺稿

①(日)Sho-an-i-ku. ②一(元慶九年錄) (延喜二年錄)

〔上卷〕

灌頂法錄

大日經錄

金剛頂錄

蘇悉地錄

諸如來錄

諸佛頂錄

諸佛母錄

諸經法錄

觀世音錄

談菩薩錄

金剛手錄

普世天錄

護摩供錄

證懺錄

梵字輪錄

碑傳具錄

卷 ④存 ⑤季弘大叔(一文明一九A. D. 1487) ⑥[參考] 扶桑禪林撰述書目、禪

籍目錄

蔗庵範禪師語錄

①(日)Sho-an-han-zen-ji-go-roku. (支)Ché-an-fan-oh-an-shih-yü-tu. ②六卷(三十卷六册之內二〇至二四卷之一册缺五册在本) ③存

諸阿闍梨真言密教部類總錄

①(日)Sho-ken-nichi-ro=ku. ②存 ③大叔(季弘)(一文明一九A. D. 1487) ④[參考] 日本禪林撰述書目、禪籍目錄

〔下卷〕

三灌頂部 胎藏界灌頂本經法。金剛界灌頂本經法。蘇悉地灌頂本經法。三摩耶戒本錄法。三摩耶戒錄外法。

胎藏界部 本經義釋。本錄略儀軌。錄外廣儀軌。

本經集錄。義疏集錄。儀軌法。加用法。

蘇悉地部 本經疏。同類法。儀軌法。加用法。

諸如來部 諸佛通法。諸佛別法。藥師佛法。阿闍佛法。阿彌陀佛法。千光王佛法。釋迦佛法。諸佛通真言法。

諸佛頂部 五佛頂法。大佛頂法。金輪佛頂法。一字佛頂法。尊勝佛頂法。白傘蓋佛頂法。

諸佛母部 七俱胝佛母法。佛眼佛母法。佛母孔雀王法。

諸經法部 法華法。華嚴法。般若法。方等法。延命法。造塔法。浴像法。念誦法。持世法。除病法。滅罪法。莊嚴道場法。

諸觀音部 聖觀音法。千手千眼法。十一面法。如意輪法。不空絹索法。多羅法。被葉衣法。青頸法。降三世法。馬頭法。

諸菩薩部 普賢法。文殊法。隨求法。彌勒法。虛空藏法。地藏法。轉法輪法。八大菩薩法。

諸金剛部 大輪金剛法。金剛薩埵法。金剛王法。諸金剛法。

諸忿怒部 不動法。降三世法。軍荼利法。六足尊法。金剛藥叉法。烏桓瑟摩法。穢跡金剛法。金剛童子法。

諸世天部 大自在天法。多門天法。宿曜法。三兄弟四姊妹天法。摩利支天法。大吉祥天女法。訶利帝母法。襄虞梨法。童子法。歡喜天法。

諸天供部 諸天供部。

諸護摩部 諸護摩部。

諸禮懺部 諸禮懺部。

諸讚歎部 胎藏金剛二界灌頂通用讚。胎藏界通讚。金剛界通讚。蘇悉地通讚。法身佛讚。大日讚。釋迦讚。佛頂讚。觀音讚。普攝讚。文殊讚。諸菩薩讚。諸金剛讚。諸世天讚。雜用讚。

諸悉曇部 字母本教。悉曇異本。悉曇解釋。梵唐對譯。

諸碑傳部 諸碑傳部。

諸圖像部 胎藏界四種曼荼羅圖。金剛界四種曼荼羅圖。錄外秘密曼荼羅。諸尊曼荼羅圖。塔龕。真言諸三藏影。諸聖僧影。天台諸大師影。

諸法華諸禪師靈異影。雜事圖。

諸法華諸禪師靈異影。雜事圖。



目録を整理し十六録とし、次に延喜二年五月十一日、更に八家秘録によつて二十部類に分けたもの。本書によつて平安朝に請來された眞言密教關係の典籍が如何なるものであつたかを知り得ると共にこの分類によつて此等の經軌の内容が掌を見るように知れることは獨り書誌學研究家を裨益するばかりでなく、教理並に歴史研究上頗る効果が多大である。若し本書と共に奈良六宗、北嶺天台宗の圖書將來目録が編纂されてゐたならば猶更に學界を益したことであらう。今見易いように圖表を以つて本書の分類を示さう。(前頁參照) (田島德音)

**諸惡莫作文講談** ①(日) Sho-aku-maku-sa-mon-kō-dan. ①一巻 ②存 ③義導(文化二一明治一四 A. D. 1805—1881) ④刊本(龍大、二六二二・二〇〇)

**諸位灌頂祕密目錄** ①(日) Sho-i-kwan-jō-hi-mitsu-moku-roku. ②一巻 ③存、日本大藏經天台宗密教章疏第一 ④本書は前唐院十三重灌頂の根本印明を記し、次に義釋(一一之五二)の灌頂有三種の一段の文を引き、終りに阿闍梨はこれを知り妄に教授すべからずと誠め。最後に附記の如くに「圓仁は入唐して八箇の名徳全雅、元政、義眞、法全、元侶、義操、法潤」に謁して十三重灌頂を受け、眞言止觀義理冥符すること知つて入唐求法の素意を遂げた。この灌頂を悉く承雲に授與する」といふ、貞觀四年壬午十一月二十日の印信血脈が付いてゐる。叡山總持院十四禪師義源は奥書に「右灌頂は山門一流の大事。門跡相

承の秘訣である」と嘉曆元年丙寅十二月日附で記してゐる。(田島德音)

**諸印儀** ①(日) Sho-in-ji. ②一巻 ③存 ④明曆三寫 ⑤(正大、一四八・二一五)

**諸印契集** ①(日) Sho-in-ji-setsu. 御流諸印契集 ②四軸 ③存 ④正保三寫 ⑤(高六、寄・一・三一)

**諸印信** ①(日) Sho-in-jin. 諸印信勸流 ②十三巻 ③存 ④寫本(高六、寄・一・七〇)

**諸印信** ①(日) Sho-in-jin. ②一裏 ③存 ④寫本(寶龜院)

**諸印信** ①(日) Sho-in-jin. ②十二通 ③存 ④内に成賢より勝海に興つたる印信あり。⑤鎌倉、徳川時代寫 ⑥(寶善提院)

**諸印信口訣** ①(日) Sho-in-jin-koku-ketsu. ②二十八巻 ③存 ④印融(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519) ⑤(參考)眞言宗全書刊行豫定目錄

**諸印信口訣** ①(日) Sho-in-jin-koku-ketsu. ②一巻 ③存 ④祐盛(初名有慶)

**諸印信大事集** ①(日) Sho-in-jin-jūshū. 小嶋流諸印信大事集 ②一軸 ③存 ④寫本(高六、寄・一・七〇)

**諸廻向清規** ①(日) Sho-kyō-kei. 諸廻向清規式 ②五巻 ③存、大正八一・六二四No. 2578 ④天倫楓隱編 ⑤永祿九丙寅(A. D. 1566)三月

錄し、重ねて僧衆の依違すべき儀規を示したもの。内容は最初の諸廻向之部には逐日三時、日中の廻向諷經より請雨禳疾病等の諸祈禱を示し、卷三は諸疏之部、雜疏之部、諸勝之部より成り、諸疏之部には三佛忌等、雜疏之部には僧堂開堂、山門立柱、釋迦如來安座、隨鳴祈禱を擧げ。卷四の諸葬禮法式之部には在家及び出家の葬禮。卷五には懺法陳白小同向之部、懺摩法式之部、諸念誦之部、四節土地堂念誦之部、受式作法之部、日用諸文諸偈咒之部がある。③明曆三刊 ④龍大、二六七六・七(駒大)京大、印哲・〇・四(一・二六シ・一六) ⑤京都、只葉書院

**諸廻向寶鑑** ①(日) Sho-kyō-hōkan. ②五巻 ③存 ④龍山必夢(一元祿頃 A. D. 1688—1703—) ⑤元祿一一刊(正大、一〇八・三一四・一五〇)(龍大、二〇七・一・三)文化七刊(京大、一・二六シ・一七・六〇)

**諸緣禪智集** ①(日) Sho-en-zen-chi-shū. (參考)淨土眞宗聖教目錄

**諸折紙** ①(日) Sho-ori-kami. ②八裏 ③存 ④宥快(貞和元—應永二三 A. D. 1345—1416)記 ⑤寫本(高六、寄・一・七〇)

**諸加持** ①(日) Sho-kaji. ②一巻 ③存 ④寫本(高六、寄・一・七〇) ⑤(谷大、餘大・三七九〇) ⑥(明和八寫(高六、一六・五)寫本(京大・印哲・一一・三三・七))

**諸加持五道** ①(日) Sho-kaji-go-dō. ②五帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

**諸加持祕中祕** ①(日) Sho-kaji-hi-chū-hi. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶善提院)

**諸加持法則** ①(日) Sho-kaji-hō-toku. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶善提院)

**諸伽陀** ①(日) Sho-ka-dā. ②一帖 ③存 ④享保一四英鏡寫 ⑤(寶善提院)

**諸開題** ①(日) Sho-kai-dai. ②四巻或三巻 ③存 ④空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)述 ⑤享保一九刊 ⑥(京大、日大末・六九、藏・二一シ・四)(京大)

**諸開題鈔** ①(日) Sho-kai-dai-shū. ②一巻 ③存 ④宥快(貞和元—應永二三 A. D. 1345—1416) (參考)眞言宗全書刊行豫定目錄

**諸嶽開山二祖禪師行實** ①(日) Sho-gaku-kai-san-ni-so-zen-ji-gyō-jitsu. ②一巻 ③存 ④龍大(研史)

**諸嶽開山二祖禪師行錄** ①(日) Sho-gaku-kai-san-ni-so-zen-ji-gyō-roku. ②一巻 ③存 ④刊本 ⑤(勵大)

**諸嶽觀音堂之記** ①(日) Sho-gaku-kannon-on-dō-no-ki. ②一巻 ③存、常濟大師御傳記附錄 ④瑩山紹瑾(文永五—正中二 A. D. 1268—1335)記 ⑤大正一四刊 ⑥(神奈川總持寺)

**諸記決大事** ①(日) Sho-ki-ketsu-jūshū. ②十包 ③存 ④寫本(寶善提院)

**諸記要語類聚** ①(日) Sho-ki-yō-go-ruijū. ②一巻 ③存 ④慶順 ⑤刊本

(正大、一五八・四六)

諸記録

①(日)Sho-ki-roku. ②一葉

諸義雜要

①(日)Sho-gi-zansu-yo.

諸義目錄

①(日)Sho-gi-moku-ro=ku. ②一巻

③最澄(神護景雲元一弘仁一三 A. D. 767-822) ④(参考) 山家祖徳撰述篇目集巻上

諸儀軌聞書

①(日)Sho-gi-ki-ki-ki-ki. ②十巻 ③存 ④寶盤述 ⑤元文二

諸儀軌口訣

①(日)Sho-gi-ku-ku-ku-ku. ②八巻 ③存 ④淨嚴(寛永一六

元祿一五 A. D. 1639-1702)口 ⑤寫本

諸儀軌口授目錄

①(日)Sho-gi-ku-ku-ku-ku-roku. ②八册 ③存

④淨嚴(寛永一六一元祿一五 A. D. 1639-1702)口 ⑤性寂(享保二 A. D. 1717)記

諸儀軌訣

①(日)Sho-gi-ki-ki-ku-ku-roku. ②十二巻 ③存 ④性寂(享保二 A. D. 1717)述 ⑤(参考) 眞言宗全書刊行豫定目錄

諸儀軌隨聞記

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②三十巻或三十一巻 ③存 ④性寂(享保二 A. D. 1717)述 ⑤(参考) 大正新修大藏經刊行豫定書目

諸儀軌傳授記

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一帖 ③存 ④除鎮述 ⑤

徳川時代寫 ⑥(寶龜院)

諸儀軌傳授聞書

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②八册 ③存 ④寫本

諸儀軌傳授口決

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②八册 ③存 ④眞常(享保四一享和二 A. D. 1719-1802)集記

諸儀軌傳授次第目錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一巻 ③存 ④蓮體(寛文三一享保一一 A. D. 1663-1726)編 ⑤享保三刊 ⑥(正大、一六三・一一)

諸儀軌傳隨聞記

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②三十巻 ③存 ④性寂(享保二 A. D. 1717)述 ⑤(参考) 眞言宗全書刊行豫定目錄

諸儀軌傳授日記

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一册 ③存 ④淨嚴(寛永一六一元祿一五 A. D. 1639-1702)記 ⑤寫本(高大、寄、一・三二)

諸儀軌傳授目錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一册 ③存 ④大日本佛教全書第二 ⑤妙極淨嚴編

諸儀軌傳授次第目錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一册 ③存 ④大日本佛教全書第二 ⑤妙極淨嚴編

徳川時代寫 ⑥(寶龜院)

諸儀軌傳授聞書

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②八册 ③存 ④寫本

諸儀軌傳授口決

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②八册 ③存 ④眞常(享保四一享和二 A. D. 1719-1802)集記

諸儀軌傳授次第目錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一巻 ③存 ④蓮體(寛文三一享保一一 A. D. 1663-1726)編 ⑤享保三刊 ⑥(正大、一六三・一一)

諸儀軌傳隨聞記

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②三十巻 ③存 ④性寂(享保二 A. D. 1717)述 ⑤(参考) 眞言宗全書刊行豫定目錄

諸儀軌傳授日記

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一册 ③存 ④淨嚴(寛永一六一元祿一五 A. D. 1639-1702)記 ⑤寫本(高大、寄、一・三二)

諸儀軌傳授目錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一册 ③存 ④大日本佛教全書第二 ⑤妙極淨嚴編

諸儀軌傳授次第目錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一册 ③存 ④大日本佛教全書第二 ⑤妙極淨嚴編

諸儀軌傳授次第目錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一册 ③存 ④大日本佛教全書第二 ⑤妙極淨嚴編

諸儀軌傳授次第目錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一册 ③存 ④大日本佛教全書第二 ⑤妙極淨嚴編

諸儀軌傳授次第目錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一册 ③存 ④大日本佛教全書第二 ⑤妙極淨嚴編

諸儀軌傳授次第目錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一册 ③存 ④大日本佛教全書第二 ⑤妙極淨嚴編

諸儀軌傳授次第目錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一册 ③存 ④大日本佛教全書第二 ⑤妙極淨嚴編

諸儀軌傳授次第目錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一册 ③存 ④大日本佛教全書第二 ⑤妙極淨嚴編

諸儀軌傳授次第目錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一册 ③存 ④大日本佛教全書第二 ⑤妙極淨嚴編

諸儀軌傳授次第目錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一册 ③存 ④大日本佛教全書第二 ⑤妙極淨嚴編

諸儀軌傳授次第目錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一册 ③存 ④大日本佛教全書第二 ⑤妙極淨嚴編

諸儀軌傳授次第目錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一册 ③存 ④大日本佛教全書第二 ⑤妙極淨嚴編

諸儀軌傳授次第目錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一册 ③存 ④大日本佛教全書第二 ⑤妙極淨嚴編

をせられた。本書は此の時の傳授目錄にして最初に序分や凡例を出し、更に左の目次を出してゐる。

第一禮儀部。第二受戒部。第三悉曇部。第四壇法部。第五念珠部。第六普通部。第七護摩法。第八天等部。第九金剛部。第十菩薩部。第十一觀音部。第十二諸經部。第十三如來部。第十四佛頂部。第十五佛母部。第十六胎藏部。第十七金剛部。第十八讚嘆部。

即ち始め「佛說三十五佛名禮懺文」「金剛頂瑜伽三十七尊禮懺文」等より終り「文殊師利菩薩法身禮」「地藏菩薩問法身讚」等に至る二百八十有餘の經軌目錄を出してある。

④寶永元寫(谷大、餘大・九三二)寫本(京大、藏・二二・二)(高大、寄、一・三二)

諸儀軌稟承錄

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②七巻或十三巻 ③存

④眞常(享保四一享和二 A. D. 1719-1802)錄 ⑤大正二刊(谷大、餘大・二二・二九)(京大、印哲・九)大正五刊(龍大、二四一・八九)(京專)大正六刊(立大、A二〇・一〇四)

諸儀軌稟承錄附卷

①(日)Sho-gi-ki-ki-roku. ②一巻 ③存 ④八葉學會編 ⑤大

諸聞書

①(日)Sho-ki-roku. ②一帖 ③存 ④寫本(金剛三昧院)

諸聞書集

①(日)Sho-ki-roku. ②一帖 ③存 ④寫本(金剛三昧院)

諸聞書附二十四帖

①(日)Sho-ki-roku. ②一葉

諸教戒體

①(日)Sho-kyo-ku-ku. ②一巻 ③存 ④敬光(元文五一寛政七 A. D. 1740-1795)撰 ⑤(参考) 山家祖徳撰述篇目集 ⑥(龍大、二六五・一九)

諸教決定名義論

①(日)Sho-kyo-ku-ku. ②一巻 ③存 ④大正三二・五〇七 No. 1658、縮成一四、二二六

⑤慈氏菩薩造、宋施護(太平興國五 A. D. 980)譯

⑥この書は諸教中の根本字を擧げて、その如實の義を説明し、それによりて萬法を諸觀し、正念に安住して涅槃大樂の境地に到ることを明したもので、題して諸教決定名義論と云ふは、蓋し諸教中の根本字の如實の名義を解釋し決定する意である。内容は

大體唵字と吽字、並に其他の諸字の奥義を開陳して、大菩提に導く觀念を説くのであるから、先づ唵(om)字を書上首とし、一切の文字も延いては教法もこゝから出生する處であるとし、此字は清淨にして不二の相であるから、これを誦すれば眞實の智慧の根本を得る。之れ一切教中の甚深祕密であると説く。次に吽・惡・益の三字に就いて、吽(hum)字は正因、これ三界の心、惡(ah)字はその説相で慧母と云はれ、益(ah)字は即ち空性を意味する。一切の文字は迦(ah)・法(ah)・説(ah)・伽(ah)等であるが、此等を盜字に攝すれば一切の文字も教法も皆

空性に歸して、空性から顯現することとなり、又惡字に攝すれば皆智性に歸して一切智々から出生する事となる。次に吽字は金剛三昧を表象し、一切事業の根本とするから、これが開展して迦引(Kāy)・佉引(Hita)・誤引(Sō)・伽引(Gā)等の一切事業となる。此等の長字を總じて一の阿引(Ā)字で表はし唵・吽との三角關係を見れば、唵字は金剛身業、阿引字は金剛語業、吽字は金剛身業となる。又他面から云へば吽字は法身、阿字は報身、唵字は化身となつて三乘の解脱の道もこゝから出現する所とする。斯く觀じ来れば一切の文字・事業・所作すべて皆絕對なもので諸佛の一切智々、金剛三昧を離れたものは何ものもない。これを「所有の一切有情界、乃至諸佛菩薩等は皆此の吽字より出生し變化す」とも「世間所有の旃陀羅(Cāndala)等最下族類たる彼等の諸行、乃至傍生等類の彼の所行も皆亦た一切智々を離れず」と説いてある。されば行人若し「是の如く了知し已れば、輪廻の中に於ても勇猛精進にして、普く涅槃の大樂を獲得せしむ。若し此心に往する、是れを智者の苦惱を滅する法となす」と云うてある。此書は眞言密教に關するものなることは勿論であるが、未だ三部・五部中の攝屬を明かにするものではない、隨つて雜部密教の域を出るものでない。(月輪賢隆)

諸教對比本尊優劣阿彌陀佛の解剖

①(日)Shō-kyō-tai-hi-hon-zon-yū-tetsu-a-mi-da-butsu-no-kai-bō. ② ③存 ④小野清秀著 ⑤昭和六刊

①東京中央出版社

諸教獨斷

①(日)Shō-kyō-dokū-dan ② ③存 ④寫本(谷大、餘大・三三三) ⑤諸教要義略辨 ①(日)Shō-kyō-yō-ri-yaku-ben. ② ③存、大日本佛教全書第三册、諸教要義集 ④普寂(寶永四一、天明元A.D.1707-1781)述

諸教要義略辨

①和文にて諸宗教義の要略を述べたるもの。初めに天台宗に就いては藏別別圓の四教の斷惑證理、行法、佛身、三諦三觀を略辨し、次に華嚴宗に就いては五教の行位を略述し如來藏心と煩惱所知の二障との關係を説き、次に律宗に就いては四律五論を説き、南山、靈芝を評し大乘誇りを説めて居る。次に楞嚴經の摘要を説くに欄間正説分として一顯如來藏心。二明修行方便。三辨離塵業行。四示地位階差。五出聖教名殊五項、再陳詰益分として一辨趣生同異、二陳禪那境界、三頓漸修證の三項に分けて述べた。次に唯識宗に就いては百法、三性、斷障次第を説き、次に毘婆沙宗に就いては四大論師、斷惑に就いて述べ、俱舍との比較もある。附録として起信論の分別發趣通相に就いて述べてある。(原田肇道)

諸教要文

①(日)Shō-kyō-yō-mon. ② ③存 ④親鸞(承安三、弘長二A.D.1173-1262)撰 ⑤安禎二(A.D.1228)

諸教要文集

①(日)Shō-kyō-yō-mon-shū. ② ③存 ④寫本(龍大、一

諸教對本尊優劣阿彌陀佛の解剖

①(日)Shō-kyō-tai-hi-hon-zon-yū-tetsu-a-mi-da-butsu-no-kai-bō. ② ③存 ④小野清秀著 ⑤昭和六刊

諸教對本尊優劣阿彌陀佛の解剖

①(日)Shō-kyō-tai-hi-hon-zon-yū-tetsu-a-mi-da-butsu-no-kai-bō. ② ③存 ④小野清秀著 ⑤昭和六刊

〇二四・六)

諸教論大意

①(日)Shō-kyō-ron-shū. ② ③存、佛教講義錄之内 ④清原秀惠述 ⑤大正二、三刊 ⑥(京大、一・二六・一〇一)(京專)(龍大、二五二・九、一一)

諸經阿伊字音註

①(日)Shō-kyō-ai-ji-on-shū. ② ③存、大日本佛教全書第三七阿婆縛抄之内 ④承澄(元久二、弘安五A.D.1205-1282)撰

諸經會要

①(日)Shō-kyō-e-yō. ② ③存、鮮有(一、無二、蓮潭) ④(龍大)

諸經開題

①(日)Shō-kyō-kai-dai. ② ③存、空海(寶龜五、承和二A.D.774-835)述

諸經義題

①(日)Shō-kyō-gi-dai. ② ③存、諸宗章疏錄第三 ④承應三刊

諸經教述

①(日)Shō-kyō-kyō-shū. ② ③存、奈良朝現在一切經疏目録2835

⑦(參考) 朝鮮佛教總書刊行豫定書目

諸經撮要

①(日)Shō-kyō-sūshū-yō. ② ③存、(支)Chū-chin-ron-yō. ④ ⑤存、(參考) 朝鮮佛教總書刊行豫定書目

諸經雜記

①(日)Shō-kyō-zaki. ② ③存、(哲、あ・一、中・一九)

諸經三段並唱導法式

①(日)Shō-kyō-san-dan-narabini-shō-dō-hō-shiki. ② ③存、徳川時代寫 ④(寶菩提院)

諸經梵聽錄

①(日)Shō-kyō-san-chō-ron. ② ③存、道隱(寛保元文化一〇A.D.1741-1813)記 ④寫本(龍大)

諸經讚眞言要集

①(日)Shō-kyō-san-shin-gon-yō-yō-shū. ② ③存、諸經眞言要集 ④二帖 ⑤存、刊本(京大、一・二三・一一)

諸經疏序集

①(日)Shō-kyō-shū-jō-shū. ② ③存、寶雲寛政三、弘化四A.D.1791-1847)記 ④寫本(龍大)

⑤(正大、一〇七・一〇)

諸經多在彌陀採摘

①(日) Sho-kyo-ni-kyo-ta-zai-mi-da-sai-tekki. ②二卷 ③存 ④開論述 ⑤寶永四刊 ⑥龍大、二六八六・一九

諸經日誦集要

①(日) Sho-kyo-ni-chi-ji-shu-yo. (支) Chu-ching-ji-shu-yo-chi-yao. ②二卷 ③存、雲棲法苑第一二 ④明株宏(嘉靖一一一萬曆四〇 A. D. 1532—1612) 說萬曆四三、年八一寂) ⑤光緒二三刊 ⑥龍大、二〇四二・四(高大、寄一・二四)

諸經佛名

①(日) Sho-kyo-butsumyo. (支) Chu-ching-fu-ming. ②三卷 ③缺 ④後漢代失譯 ⑤(參考) 出三藏記第四、法經錄第二、三寶紀第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、內典錄第一、武周錄第一、開元錄第一、第四、貞元錄第二、第二四

諸經菩薩名

①(日) Sho-kyo-jo-sa-sai-myo. (支) Chu-ching-p'u-sa-ming. ②二卷 ③失譯 ④(參考) 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三

諸經菩薩名經

①(日) Sho-kyo-jo-sai-myo-kyo. (支) Chu-ching-p'u-sa-ming-ching. ②一卷 ③缺 ④西晋法炬(一惠帝代 A. D. 290—306) 譯 ⑤(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

諸經法並本尊事

①(日) Sho-kyo-ho-ho-harubini-hon-zon-no-koto. ②一軸 ③存 ④鎌倉時代寫 ⑤(寶善提院)

諸經摸象記

①(日) Sho-kyo-mo-zo-ki. (支) Chu-ching-mo-hsiang-chi. ②一

卷(卷下) ③存 ④明株宏(嘉靖一一一萬曆四〇 A. D. 1532—1612) 說萬曆四三、年八一寂撰 ⑤刊本(京大藏一四四・二〇)

諸經要集

①(日) Sho-kyo-yo-shu. (支) Chu-ching-yao-chi. ②二十卷 ③存、大正五四・一 No. 2123 縮刷一一二・二七・七一八、北1054帳至極、南1070帳至極、元1066帳至極、明北1467路至極、麗1059甲至對、天1083帳至極、指1014甲、法1041甲對、至1531十至又、明南1463八至家、N. 1474 ④唐代道世撰

⑤諸の經律論より諸種の事項に關する要文を類別纂輯したるもので『諸經要集』の名ある所以である。序に本書著述の目的を述べて「教述滄海文句浩汗にして卒かに尋覽し難し、故に顯慶年中に於て一切經を讀み情に隨ひ要を逐うて人の行ふに堪ふる者、善惡の業報、錄出するもの一千、述ぶるもの篇三十、勒して兩帙となす」とある。蓋し一切經を検尋するに便ならしむるものである。通じて三十部は細分されて百八十五條となつてゐる。

〔第一卷〕(三寶部) 敬佛篇—普敬述意緣。念十方佛緣。念釋迦佛緣。念彌陀佛緣。念彌勒佛緣。念佛三昧緣。

〔第二卷〕 敬法篇—述意緣。說法緣。聽法緣。漸頓緣。求法緣。感福緣。報恩緣。訪法緣。敬僧篇—述意緣。順益緣。違損緣。

〔第三卷〕(敬塔部) 述意緣、引證緣、興福緣、感報緣、旋塔緣、入寺緣、修故緣。

〔攝念部〕 述意緣、十念緣、六念緣、發願緣。

〔第四卷〕(入道部) 述意緣、欣厭緣、出家緣、引證緣。(唱讚部) 述意緣、引證緣、歡德緣。(香燈部) 述意緣、華香緣、然燈緣、懸幡緣。

〔第五卷〕(受請部) 述意緣、供養緣、簡僞緣、聖僧緣、施食緣、食時緣、食法緣。食訖緣。

〔第六卷〕(受齋緣) 述意緣、引證緣。(破齋部) 述意緣、引證緣。(富貴部) 述意緣、引證緣。(貧賤部) 述意緣、引證緣、須達緣、貧兒緣、貧女緣。

〔第七卷〕(渡道部) 述意緣、誡男緣、誡女緣、勸道緣、眷屬緣、離著緣、敬誠緣。

〔第八卷〕(報恩部) 述意緣、報恩緣、背恩緣。(放生部) 述意緣、興害緣、放生緣、救厄緣。(興福部) 述意緣、修福緣、應法緣、脚施緣、洗僧緣、雜福緣。

〔第九卷〕(擇交部) 述意緣、善友緣、惡友緣、債負緣、懲過緣。(思慎部) 述意緣、慎過緣、慎禍緣、慎境緣、慎用緣。

〔第十卷〕(六度部) 布施篇—述意緣、慳儉緣、財施緣、法施緣、擇施緣、福田緣、相對緣。持戒篇—述意緣、勸持緣、忍辱篇—述意緣、勸忍緣、忍益緣。精進篇—述意緣、怠惰緣、策修緣。禪定篇—述意緣、定相緣。智慧篇—述意緣、求法緣。

〔第十一卷〕(業因部) 述意緣、發業緣、罪行緣、福行緣、雜業緣。

〔第十二卷〕(欲善部) 述意緣、五欲緣、五善緣。(四生部) 述意緣、舍名緣、相攝緣、五生緣、中陰緣、受胎緣。

〔第十三卷〕(受報部) 述意緣、報類緣、現報緣、生報緣、後報緣、定報緣、不定緣、善報緣、惡法緣。

〔第十四卷〕(十惡部) 殺生緣、偷盜緣、邪淫緣、妄語緣、惡口緣。

〔第十五卷〕 兩舌緣、綺語緣、慳貪緣、瞋恚緣、邪見緣。

〔第十六卷〕(詐偽部) 述意緣、詐親緣、詐毒緣、詐貴緣、詐怖緣、詐畜緣。(墮慢部) 述意緣、引證緣、立志緣。

〔第十七卷〕(酒肉部) 述意緣、飲酒緣、食肉緣。(占相部) 述意緣、觀相緣、歸依緣。

〔第十八卷〕(地獄部) 述意緣、會名緣、受報緣、時量緣、典主緣、王都緣、業因緣、誠助緣。

〔第十九卷〕(送終部) 述意緣、瞻病緣、醫療緣、安置緣、斂念緣、捨命緣、遣送緣、受生緣、祭祠緣。

〔第二十卷〕(雜要部) 述意緣、怨苦緣、八苦緣、蟲禽緣、五辛緣、嗔氣緣、便利緣、護淨緣、鳴鏡緣、入衆緣、衰相緣、眠夢緣、雜行緣。

本集は梁の『經律異相』に倣へるもので、後大成されて『法苑珠林』となつたのであらう。著者について『諸宗章疏錄』は上卷に於て道宣の撰としてゐる。

〔參考〕 東域傳燈目錄卷下 ①慶安四刊(正大、一〇七・二六) 寛文元刊(正大、一〇一・八九)

諸經要集 ①(日) Sho-kyo-yo-shu. ②二卷 ③疑僞

(支) Chu-ching-yao-chi.

經 ⑦〔參考〕開元錄第一八

諸經要集

①(日) Sho-kyō-yō-shū. (支) Chu-ching-yao-chi. ②二十卷 ③唐

道宣(開皇一六一)乾封二 A. D. 596—567)述

④諸宗章疏錄第一に曰く「按。南山錄云、

今藏題云「支那。隋函音云「道世」或云「道集

道譯等」皆誤也。今依「卷首「祖師自序云云」

⑦〔參考〕淨土依經論章疏目錄

諸經要集

①(日) Sho-kyō-yō-shū. ②覺超(天德四—長元七 A. D. 960—1034)

⑦〔參考〕山家祖德撰述篇目錄卷上

諸經要集

①(日) Sho-kyō-yō-shū. ②國譯諸經要集 ③存、國譯大藏經々部第一

諸經要集解題

①(日) Sho-kyō-yō-shū-kaidai. ③存、國譯大藏經々部第一

諸經要集捷徑

①(日) Sho-kyō-yō-shū-shō-kei. ②一卷 ③存 ④楚恕(寛永

一七一)元祿八 A. D. 1640—1695)撰 ⑤寫

本(妙法院)

諸經要集條箇

①(日) Sho-kyō-yō-shū-jū-ko. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、

一〇一・八一)

諸經要抄

①(日) Sho-kyō-yō-shū. (支) Chu-ching-yao-chi. ②一卷 ③存、

大正八五・一一九二 No. 2819

④本書は熾煌出土古寫本で大谷大學に藏せ

られてゐる。首尾斷缺、諸經の要文を集め

たものである。

諸經要略文

①(日) Sho-kyō-yō-ryaku. (成田昌信)

ryaku-mon (支) Chu-ching-yao-liao-wen.

②一卷 ③存、大正八五・二二〇四 No. 2821

④本書はスタン・氏蒐集熾煌出土古寫本、

大英博物館に藏する。諸經文を要略類集せ

しもので詳しくは鳴沙餘韻解説第一部二二

三—二二四頁参照せよ。

④熾煌出土本(大英博物館藏 S. 779) (成田昌信)

諸經論序並翻譯時節 ①(日) Sho-kyō-ron-kyō-ron-jo-n-rubun-ron-yaku-jisetsu.

(支) Chu-ching-lun-ju & fan-t-shih-chieh. ②一卷 ③缺 ⑦〔參考〕奈良朝現在

一切經疏目錄 2770

諸經論大意 ①(日) Sho-kyō-ron-tai-i. ②一卷 ③存 ④脇谷搗謙著 ⑤刊

本(龍大、二五二・二二)

諸經論知津集 ①(日) Sho-kyō-ron-chi-shin-shū. ②八冊 ③存 ④寫本(正

大、一〇七・二七)

諸經和讃聞書 ①(日) Sho-kyō-wa-san-kiki-gaki. ②一卷 ③存 ④安政二

寫 ⑤寫本(谷大、宗大三八一〇)

諸經和讃略記 ①(日) Sho-kyō-wa-san-ryak-ki. ②一卷 ③存 ④寶實寛

政三—弘化四 A. D. 1791—1847)述 ⑤弘

化四寫 ⑥谷大、宗大、二四二二)

諸行有爲經 ①(日) Sho-gyō-ū-kyō. (支) Chu-shing-yu-wai-ching. (梵)

Anityat-sūtra (藏傳) (藏) mi-ta-g-pa-rid-kyi-mdo. ②一卷 ③存、大正一七・六〇

ON. 758 縮宿八、二一五・二 ④宋法天

(—開寶六 A. D. 973—)譯

⑥佛、祇園にて千二百五十人の比丘に「一

切の行は還流して無常である。生なくば滅

なかるべきも、婆羅門、帝王、仙人、天衆、

羅漢、辟支佛、正等覺者も皆、無常を免る

べからざること、造られたる陶ものの破壊

し、熟れたる果の落つるが如きである。比

丘等、生滅を怖れよ」と説く經典である。

西藏譯には同名のもの二本あり(大谷甘殊

爾劫同目錄 No. 975, No. 976) その中 No.

976 の經に對同せしめうるが、終始吻合す

るものではない。無常經。無常三啓經と對

照研究を要する。(櫻部文鏡)

諸行三心具不生論義 ①(日) Sho-gyō-san-jin-gu-fu-shō-ron-gi. ②一卷

③存、淨土宗全書第一四 ④良天聖觀(正

應二—應安二 A. D. 1289—1369)述

⑥名越派相傳祕書の一にして、三心具足の

ものにも不生者ありと説く名越派諸師の

論義を集めたもの。問答體にて念佛は易

勝の名號、本願の行なれば不生類あるべか

らざるも、行は難劣の故に非本願の故に

不堪の下機は往業成し難く、往生不能なる

を詳論し、心具決定往生を説く經論疏抄に

不生義あることを引證するに努め、更に正

行中にも四種正行各別の行の時は、不生

者百の中一二、千の中三五あることを明に

し、又授手印の虚實俱具、若得往生、若不

得往生、多實少虚、若可往生に就いて述

べ、尊觀、道光、寂慧、性心等の説を擧げ

て居る。卷末の附記にある如く此書は然

あれば、良慶明心の考案なる心具不生義に

關する諸師の論義を良天が弟子良寂の爲め

に記したのならん。

⑥永祿九寫 ⑦(越前西福寺) (原田雲道)

諸行三心具不定義 ①(日) Sho-gyō-san-jin-gu-fu-shō-ron-gi. ②一卷 ③存、

續淨土宗全書第一四 ④良榮理本(康永元

—正長元 A. D. 1342—1428)述

⑥名越派の心具不生一義を整理叙述したる

もの。即ち聖阿か心具決定往生を主張する

に對し、稱名念佛以外の諸行は機根の堪

不、心の淺深に隨て往生不定なる旨を評論

力説してある。往生極樂の目足指南たる正

雜二行は異なるも三心の力に依つて往生の

業成辨するも、行に頗非願、機に堪不、心

に淺深、益に生不れば、本願の名號は百

即百生して一失なきも、非本願の諸行は難

劣の法なれば、上機は起行強く安心固くし

て往生決定するも、下根の人は起行緩く、

安心弱ければ行の失に引かれて或は心行退

き、或は三心薄らぎ不生者あるべき旨を、

經論祖釋並に相傳の説を引用して總説し、

これに關する疑難の一掃、論議の決擇に努

めて居る。

⑥著者自筆本(原岡本覺寺) (原田雲道)

諸切紙 ①(日) Sho-kiri-kami. ②十

五帖 ③存 ④寫本(寶龜院)

諸口訣 ①(日) Sho-ku-ketsu. ②一

帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院) (金

剛三味院) 諸口訣 ①(日) Sho-ku-ketsu. 諸口訣

剛三昧院

諸口訣作法等 ①(日)Sho-ku-keisan  
—sai-kyō. ②一帖 ③存 ④成賢(應保  
二—寛喜三A.D.1162—1231)作 ⑤足利—  
徳川時代寫 ⑥(寶龜院)

諸口傳

①(日)Sho-ku-den. ②一裏  
③存 ④慈深(建久三—弘長三 A.D.1192  
—1263)記 ⑤徳川時代寫 ⑥(寶龜院)

諸口傳集

①(日)Sho-ku-den-shū.  
②一卷 ③覺印(承德元—長寛二A.D.1097  
—1167) ④〔参考〕諸宗章疏錄第三

諸供作法集

①(日)Sho-ku-sa-tō-  
shū. ②一卷 ③存、日本大藏經修驗道章  
疏第二法則類 ④中野達慧編

修驗道に於ける諸種の作法次第を集めたもの

で、下記の七法より成つてゐる。役君  
無染供・神變菩薩片供次第・神變大士本地  
供・弘法大師片供作法・理源大師片供作法・  
金剛藏王法・神供祕記。中に於て役君無染  
供は文化十二年七月、大峯山五鬼童義雄が  
佐渡の觀行院觀賢に授けたものであること  
が奥書に記されてゐる。(服部如實)

諸官寺朝謁録

①(日)Sho-kwan-ji-  
chō-etsu-yōku. ②五卷 ③存 ④〔参考〕  
大日本佛教全書續刊豫定書目

諸灌頂印信集

①(日)Sho-kwan-ji-  
in-jin-shū. ②一帖 ③存 ④足利時代寫

諸灌頂秘々中深秘心肝鈔

①(日)Sho-kwan-ji-hi-hi-cha-jim-jūchin-  
kan-shū. ②一帖 ③存 ④鎌倉時代寫  
(寶善提院)

諸觀音

①(日)Sho-kwan-on. ②一  
軸 ③存 ④鎌倉中期寫 ⑤(寶善提院)

諸觀音法

①(日)Sho-kwan-on-  
hō. ②一軸 ③存 ④鎌倉時代寫 ⑤(寶  
善提院)

諸觀音法第八卷

①(日)Sho-kwa-  
n-on-hō-dai-hak-kwan. ②一軸 ③存  
④文政七寫 ⑤(寶善提院)

諸觀口傳

①(日)Sho-kwan-ku-den.  
②一帖 ③存 ④任通(享徳三—永正一三  
A.D.1451—1516)草 ⑤明和四寫 ⑥(高  
大・寄・一・六九)

諸觀集

①(日)Sho-kwan-shū. ②長  
安(長和五—永保元 A.D.1016—1081)  
⑦〔参考〕本朝台祖撰述密部書目

諸觀世音經

①(日)Sho-kwan-ze-  
on-kyō. (支)Chia-kuan-shih-yin-ching.  
②一卷 ③缺 ④姚秦鳩摩羅什(建元二—  
義熙九 A.D.344—413)説弘始一一或義熙  
中寂)譯 ⑤第一譯 ⑦〔参考〕開元錄第  
一四

諸願成就鈔

①(日)Sho-gwan-jō-ju-  
shō. ②五波羅蜜鈔 ③存、日蓮聖人御遺文  
之内 ④日蓮(貞應元—弘安五A.D.1222—  
1282)述 ⑤建長元(A.D.1249)

諸家教相同異集

①(日)Sho-ke-  
kyō-go-dō-i-shū. ②甘露集、開甘露門集 ③  
存、大正七四・三一〇No.2365、大日本佛教  
全書第二六、智證大師全集第二、天台小部  
集釋第八 ④圓珍(—寛平三A.D.891)

⑤本書は智證大師圓珍が若狭母のために製  
した支那日本十家の教相の同異を略記した

もの。本書は教相を立つる者二十五家ある  
中略して十家だけを挙げると云ひ、一、嘉  
祥の三法輪二藏。二、元曉の四教。三、法  
藏の五教。四、惠苑の四教。五、遍覺三藏  
(玄奘)の三時教。六、法寶の五時教。七、  
劉虬の七階五時教。八、上宮太子の五時教。  
九、天台大師の五時八教。十、慈覺大師の  
二種教を列ね、次に總じて此等の同異を研  
詳し更に別して研詳し我大日本國には總じ  
て八宗ある。南京の六宗、上都の二宗がそ  
れだと述べ、龍樹高祖を天台が立てざる理  
由。相傳で云ふ所によれば佛弟子徒黨を三  
類とす。禪師・律師・法師がそれ。禪門宗、  
天台宗、眞言宗は禪師となし、律宗を律師  
となし、自餘の諸宗を法師となすといひ、  
神防の十輪經疏に出づといふ。この説は寺  
院史研究上注目される名稱である。本書が  
眞撰であれば母のために著述した典籍の最  
古のものであると思はれる。(田島德音)

諸家灌頂

①(日)Sho-ke-kwan-jū.  
②一軸 ③存 ④建武二寫 ⑤(寶善提院)

諸家女談集

①(日)Sho-ke-gū-dan  
shū. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一五五  
三・一一九)

諸家宗派

①(日)Sho-ke-shū-ha.  
(支)Chia-chie-i-shūng-pai. ②一卷 ③存  
④守一空成編 ⑤光緒一六刊 ⑥(駒大)

諸家點圖

①(日)Sho-ke-ten-zū.  
②一卷 ③存、群書類從第六二二

④本書は古點譜と同様、漢文訓譯に文字の  
周圍に點を施せる所謂手古止點の諸家の點  
圖を集めたものである。輯むるところは

喜多院點(興福寺法相宗)、東南院點(東大  
寺三論宗、醍醐川之)。圓堂點(仁和寺所用  
也)、觀音院付正被加點。中院點(高野所用  
也)。智證大師點(三井寺所用也)。西基點(三  
井寺所用也)。寶幢院點(比叡山所用也)。三  
寶寺點(發菩提心寺所用也)。水尾點(圓堂僧  
正用之)。禪林寺點、遍照寺點、香隆寺點。  
淨光房點。順曉點。俗家點。俗點。經點。  
經家。紀傳。經傳である。

これを古點譜に比較するに古點譜に載する  
ところの方が多いが、同書の圖と本書との  
一致するものが頗る少い、寫誤、校訂の粗  
なる爲めと思はれるが、此等の點の傳が失  
はれたる今日、此等の點を施されたる古寫  
本等が已に散佚してゐるので、充分の校訂  
が出来ないのは是非もないといはねばなら  
ない。④寫本(龍大、研史)。(中谷在禪)

諸家念佛集

①(日)Sho-ke-nem-  
bus-shū. ②九卷 ③存、淨土宗全書第一  
五 ④懷音(—正徳三A.D.1713)編 ⑤寛  
文一一(A.D.1672)五月十八日

第一卷律宗念佛

律宗の諸師も多く安養  
を慕ひ、又人を勧めて念佛せしむ、中に就  
いて念佛の義に不同あることは群籍諸文に  
明す所であるが、本章にはその要文を詮索  
して纂めたものである、即ち道宣は觀經等  
によりて、事觀稱名を指示し(行事鈔、資事  
記等の數種の文獻を抄出す)元照は觀經義  
疏等に、觀念稱名に事理を立て、善く利鈍

⑥是の書は跋文に依れば懷音の纂輯せるも  
のを密賢校正し、佛定寛政十二年に公刊せ  
るものである。

の機を収め、而も稱名を誦じて餘善を貶す  
 (芝苑遺編等を抄出す)、第二卷法相念佛  
 法相の諸師も多く經を註し、書を著して  
 安養を誦じ、或は兜率を嘆じ、機縁により  
 往生を勧めたり、その所説は觀想持名の法  
 にして、勝易の二徳を認む、中に就いて窺  
 基は西方要訣等によりて、極樂に報化二土  
 を認め、説く所は唯識の理觀にあり、勸ず  
 る所は稱名にあり、(阿彌陀通贊序等を抄出  
 す)義寂は大經疏に十念を以て大經の十念  
 に會せしめ、横豎より詳解し以て稱名に慈  
 等の十念を具すと云ひ、法位は大經疏に十  
 念に兩義を擧げ、特に臨終苦道の十念は稱  
 名なりとす、憬興は大經述文贊に、三輩を  
 解し、十念を稱名とし慈等の十念に異なる  
 とす、貞慶は心要抄に念佛の念を別境中の  
 念の心所とし、三昧發得を説き、稱名によ  
 りて名號を憶念すると云ふ、良通は道意鈔  
 に、諸の願行ある中特に十八願を選して、  
 往生の正定業と爲せり。第三卷三論念佛龍  
 樹が中觀論中の觀如來の一品に如來法身を  
 觀ずるを示し、智度論に念佛三昧の功能を  
 擧げて、自らも修習して彌陀を觀念し、  
 安養を願ぜり、故に三論の諸家も念佛を弘  
 通し淨業を務めるもの尠からず、而して所  
 説見解異なるもの多し、或は理觀、或は事  
 觀、或は稱名、或は持名を擧ぐる等なり、  
 中に就いて僧肇は小經疏に念佛と諸行とに  
 關せず、共に往生業として勧めり。嘉祥は  
 觀經疏に三福十六種を得生の因とするも、  
 別して菩提心を以て業主とせり、又念佛三  
 昧に念法身と念生身を分別す、智光は往生

論疏に念佛に心念口念を分別し、空也法  
 語を擧げて、口に任せて三昧なれば聲に従  
 みて見佛來迎を得べしとし、永觀は往生十  
 因を示して、稱名の六善根なる理を明せり。  
 又珍海は決定往生集に往生の正業を明す  
 に、菩提心を業主とし、稱名の正中の正な  
 る意を示す。第四卷禪宗念佛 禪門諸祖の  
 念佛章疏を見れば、箇々に淨業を修し、  
 彌陀を贊揚して勧め淨土を願せしめり。  
 元來禪の宗旨は生身頓悟、見性成佛を本領  
 とすると雖も、無始の習惑除去し難く、本  
 有圓成の理に體達するを得ざるに因り、機  
 に從ひ縁に投じて念佛を勸進せり、而して  
 六種に列別して以て總括す。(1)攝心念佛  
 (2)數息念佛 (3)參究念佛 (4)直念々  
 佛、(5)實相念佛、(6)信願念佛なり。以  
 上の六種に就いて(1)は念佛の始事、(3)  
 は念佛の終事にして偏廢すべきでなく、  
 (2)(3)は人量に用ひ、真心を明め、昏散  
 を對治し、(6)は悟不悟に通じて修し、以  
 て往生を求むる由り諸内の後に在るなりと  
 云へり。(玄門捷要、蓮宗寶鑑、淨土或問等  
 の文獻を抄出す)。第五卷華嚴念佛 華嚴所  
 説の念佛に種々の不同有るも、悉く事々無  
 碍圓融の念佛内なり、華嚴經入法界品を見  
 るに、無碍智慧念佛内、唯心念佛内、觀德  
 相念佛門の三種あり、然るに諸家の説相は  
 義一様ならずして慈等の十念、諸行往生、稱  
 名往生を説き、或は多念、觀念を勧め、或は  
 菩提心を正因とする等である。中に就いて  
 杜順は華嚴經疏等を抄出して、念は明記  
 不忘を義とし、體即ち慧なり、念佛に稱名と

觀像と觀想と實相の四種分別す、子璿は起  
 信論疏筆削記を抄出して、往生者に九品有  
 り、因所に勝劣、往生に高低、華開に遲速、  
 成道に前後あり、因は十念にして易く、緣  
 は願力にして強し十念具足は往生を得ると  
 す。元曉は小經疏に往因に二種を立て、菩  
 提心を正因とし念佛を助因とす(遊心安樂  
 道等を引く)高辨は莊嚴記に念佛の義を料  
 簡して、自性念佛、資糧念佛を擧ぐ、第六  
 卷眞言念佛 本宗は金剛頂經、陀羅尼集經  
 等の密部の經論章疏に彌陀念佛を説く事多  
 きを擧げ、密家の念佛の意は秘釋にして、  
 名號即秘密眞言なれば、稱名と云ふも淺略  
 に非らずと云ふ、又理趣釋を引きて密教の  
 意は彌陀觀音一體、因果主伴の相を示し(菩  
 提心義を擧ぐ)、更に統利字の合成釋を施  
 し、弘法の秘藏記を抄出して密教の十念を  
 十度に擬し、實範の病中修行記に彌陀の四  
 種法身の依正を念すべきことを説き、覺鑊  
 の阿彌陀秘釋、五輪九字明秘釋、道範の秘  
 密念佛集を引きて阿彌陀の義を註釋し、更  
 に三諦、三智、三身、三道、三部に配して  
 施釋し、煩惱即菩提生死即涅槃の性徳を顯  
 現する義を示して居る。第七卷天台念佛智  
 者法華弘通の外、弘く西方の教門を開く、  
 從て傳燈の諸師亦淨土を修し、盛に人を教  
 へて彌陀を念せしむ、その讚勸の文獻中よ  
 り要を聚めたもの、台宗に勧める所、種々  
 あり、即ち念佛あり、諸行あり、念佛に觀  
 念、稱念あり、而して台宗の本領は理觀に  
 あり、先づ智者の觀經疏に極樂を凡聖同居  
 の應身土とするも、因行として廣く念佛、

諸行を立て、觀念、稱名を事理と分別詳釋  
 せり、(摩訶止觀、十疑論等の文獻を抄出  
 す)飛錫の念佛三昧寶王論に三昧成就を説  
 き、知禮の念佛淨社疏を擧げて、菩提心を  
 發して得生する旨を説き慈雲の往生淨土懺  
 願儀に佛の相好を觀じて、空假中の三觀を  
 爲すことを説き、その他擇瑛の阿彌陀經疏、  
 彦倫の念佛修心術、大佑の淨土指歸、慎則  
 の淨土境觀要門、傳燈の無生々論、更に智  
 旭の小經要解、楞嚴文句を抄出して極樂の  
 相、因に對する見解を施し、更に慈惠の九  
 品往生義、源信の往生要集を擧げて、九  
 品の往生、念佛の本義、往生の教相を詳に  
 し、念佛寶號には覺運の彌陀本門説を、良  
 忍の融通念佛顯眞の法語、忍空の觀心往生  
 義等の文獻に證顯される念佛の要義を述示  
 せり。第八卷蓮宗念佛上 蓮宗念佛は所謂  
 淨土門の念佛にして、聖道門諸師の説に異  
 なる見解あり、種々の不同あり、本章に  
 於ては四門に分別して(1)觀佛相好門、  
 (2)觀佛法身門、(3)有相稱名門、(4)無  
 相稱名門とし本宗の明す所は正しく有相單  
 信の本願稱名念佛なる事を明し、群疑論、  
 念佛鏡、五會法事譜、選擇集、法然法語、  
 徹選擇集、傳道玄記、述開鈔、大綱抄等を  
 抄出してその義を鮮明して居る。第九卷  
 蓮宗念佛下 前章に續いて大經の十八願、  
 三輩九品特に下三品を細釋して秘密なる私  
 釋を施し、以て本願念佛を主唱し、尙小經、  
 往生論等を抄出して十念論、正業論、得生  
 論等に渡つて論述されて居る。  
 以上本書は諸經論釋に顯はれたる彌陀念

佛の教義、見解、釋義、等を抄出して念佛の義趣を闡明し、以て諸宗に於ける念佛義を概説私釋せるものである。選者懷音は淨土宗の末流なるを以てその批判の態度、典籍文献の取扱上遺憾の餘地を認めるも、通観すれば諸家の念佛義を窺ふに比較的手近な参考書として推さるべきものである。

諸家分派

①(日) Sho-ke-hun-pi. 大日本諸家分派 ④四卷(二十卷中現在四卷) ⑤存 ⑥仙玉 ⑦(参考) 禪籍目録

諸家立教誌

①(日) Sho-ke-ri-kyo-shi. ②一册 ③存 ④元和二刊 ⑤(京大、日大未・七九七) (折、え・四・右・九) (高大、寄・一・二七) (正大、一三三・三八)

諸儒類要

①(日) Sho-ge-rui-yo. ②四卷 ③存 ④希果東岡 ⑦(参考) 日本禪林撰述書目、禪籍目録

諸賢問答

①(日) Sho-gem-mon-d. (支) Chu-hsien-wen-ta. ②一巻 ⑦(参考) 傳教大師將來越州録

諸五山十利持簿

①(日) Sho-go-san-jis-satsu-ji-ho. ②一巻 ③存 ⑦(参考) 禪籍目録

諸護身法

①(日) Sho-go-shin-bu. ②二帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

諸護摩記

①(日) Sho-go-ma-ki. ②十巻 ③存 ④昭和八寫 ⑤(高大、寄・一・六四)

諸護摩作法

①(日) Sho-go-ma-sa-ho. ②五帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

諸講祭文

①(日) Sho-ko-sai-mon. 校正諸講祭文 ②一軸 ③存 ④寛光(元文元—文政五後 A. D. 1736—1823) 撰 ⑤(金剛三昧院) (高大、一・四九)

諸講式

①(日) Sho-ko-shiki. ②一册 ③存 ④寫本(金剛三昧院)

諸講式集

①(日) Sho-ko-shiki-shu. ②一巻 ③存 ④寫本(龍大、研史)

諸國一見聖物語

①(日) Sho-koku-iken-ji. ②一巻 ③存 ④亮海記 ⑤至徳四寫(十如院) 寛永一六寫(谷大、餘大・三七四八)

諸國古寺譚

①(日) Sho-koku-ko-ji-dan. ②五巻 ③存 ④嘉永三刊 ⑤(折、あ・二・右・二七) (帝國、二〇〇・一三七)

諸國寺社御朱印書

①(日) Sho-koku-ji-sha-go-shu-in-gaki. ②三巻 ③存 ⑦(参考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

諸國寺社講緣起

①(日) Sho-koku-ji-sha-ko-en-gi. ②四册 ③存 ④(帝國、二一・五・三六)

諸國寺社略緣起

①(日) Sho-koku-ji-sha-ryaku-en-gi. ②一巻 ③存 ④(帝國、丑・一五)

諸國へ使僧勤王復命書

①(日) Sho-koku-e-shi-shu-kinn-o-fuku-meisho. ②一巻 ③存 ④寫本(龍大、別置)

諸國盆踊唱歌

①(日) Sho-koku-bon-odori-sho-ka. ③存、新群書類從第六

諸國末寺言上書類

①(日) Sho-

諸國漫遊澤庵禪師

①(日) Sho-ko-man-yu-zai-an-zen-ji. ②一巻 ③存 ④無漏道人編 ⑤大正二刊 ⑥(駒大)

諸國靈場記圖繪

①(日) Sho-koku-ryo-ji-ki-zu-e. 法華諸國靈場記圖繪 ②一巻 ③存 ④明治一五刊 ⑤(谷大、餘小・一三)

諸作法

①(日) Sho-za-ho. 諸作法中院流 ②九帖或三十帖 ③存 ④寫本(高大、寄・一・六五)

諸作法

①(日) Sho-sa-ho. 諸作法三寶院流 ②一册 ③存 ④明治五寫 ⑤(高大、寄・一・六五)

諸作法大事

①(日) Sho-sa-hi-dai-ji. ②十一包 ③存 ④寫本(寶善提院)

諸作法用意事

①(日) Sho-sa-ho-yo-i-no-koto. ②一册 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

諸作法目録

①(日) Sho-sa-ho-mo-ku-roku. ②十九帖 ③存 ④高大、寄・一・六五

諸作法類

①(日) Sho-sa-ho-rui. ②五帖 ③存 ④寫本(高大、寄・一・六五)

諸祭文

①(日) Sho-sai-mon. 改正諸祭文 ②一軸 ③存 ④阿陽泉山僧龍編 ⑤御影供、明神講、大黒講、辯天講、常樂會、佛生會、諸尊講の祭文を輯む。

諸祭文

①(日) Sho-sai-mon. ②一軸 ③文政五刊

諸祭文

①(日) Sho-sai-mon. ②一軸 ③存 ④御影供、明神講、大黒講、御誕生會、辯才天、涅槃講、佛生會の祭文を輯む。

諸祭文

①(日) Sho-sai-mon. ②一軸 ③存 ④御影供、明神講、大黒講、御誕生會、辯才天、涅槃講、佛生會の祭文を輯む。

諸祭文

①(日) Sho-sai-mon. ②一軸 ③存 ④葦原寂照編 ⑤御影供、弘法大師誕生會、涅槃會、佛生會、明神講等の諸祭文を輯む。

諸祭文

①(日) Sho-sai-mon. ②一巻 ③存 ④御影供祭文、佛生會祭文、遺跡講祭文、舍利講祭文、施餓鬼祭文、涅槃講祭文、朝日羅漢祭文を收む。

諸册拔萃錄

①(日) Sho-tatsu-bus-sui-roku. ②六巻 ③存 ④惟高妙安(文明一一—永祿一〇 A. D. 1480—1567) 撰 ⑦(参考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

諸雜記

①(日) Sho-zaki. ②一巻 ③存 ④祕密識心、雙内性海、加持門説、根本無明而二不二、内處外道同於本尊等の事を記す。

諸雜記

①(日) Sho-zaki. ②一巻 ③存 ④寫本(正大、一四二・五〇) (高大、寄・一・五)

諸雜誌論說密教研究の索引

①(日) Sho-zas-shi-ron-seis-i-milk-kyo-



Ken-kyu-no-saku-in. ②一卷 ③存 ④

上田圓照編 ⑤大正五刊 ⑥龍大、二六六八・二二(京專)

諸雜禮佛文 ①(日) Sho-zatsu-ran-butsu-mon. (支) Chu-tsa-li-to-ven. ②

三卷 ③思孝述 ④(參考) 新編諸宗教藏總錄第二

諸護集 ①(日) Sho-san-shu. ②一卷 ③(參考) 淨土依憑經論章疏目錄

諸山開祖傳 ①(日) Sho-zan-kai-so-den. ②存、五部合刻之内 ③明治二二刊 ④(駒大)

諸山御法度 ①(日) Sho-zan-go-hat-to. ②存、輪池叢書第二 ③屋代弘賢(寶曆八一天保二A.D. 1758-1841)輯

④本條の内容について見るに、入院式復舊規留書、老中賀儀之狀、東照宮御法度、三長老訴狀、五山十刹諸山御法度、秀吉公寺領目録、當家老中條目、御朱印六通、東海寺輪番之始酒井譜岐守殿書狀、住持之次第等があり、終りに東海禪寺開山澤庵宗彭の遺誡十六ヶ條を附記してゐる。

本叢書の輯録者屋代弘賢は始め詮賢といひ、更に詮文と改稱し、輪池と號した。江戸文化の爛熟期に出で、和學を塙門に修め、書法に熟達して幕府の祿筆となり、官に仕へたる人。輪池叢書四十三冊、或は十九冊本は共に本館の貴重本とされてゐる。

⑤(帝國、ち・七) 諸山秘點集 ①(日) Sho-zan-hi-ten-shu. ②存、輪池叢書第二 ③屋代弘賢(塚田弘導)

(寶曆八一天保二A.D. 1758-1841)輯 ④諸山夫々用ひたる訓點法を圖示せるもの、次の如き九箇の點圖を擧げたる筆寫本である。

東大寺點(三論宗用之)、喜多院點(興福寺用之)、圓堂點(仁和寺用之)、中院僧正點(高野山用之)、西葛點(園城寺用之)、寶幢點(延曆寺用之)、仁都波迦點、東大寺東南院點、水尾點(圓堂僧正用之)。

⑤(帝國、ち・七) 諸子雜言史隨 ①(日) Sho-shi-zo-gon-shi-zui. (支) Chu-tzu-tsa-yen-shi-sui. ②宋仁岳(淳化三治平元A.D. 992-1054) ③(參考) 諸宗章疏錄第二

諸司代巡見録 ①(日) Sho-shi-dai-jun-ken-to-ku. ②一卷 ③存 ④寫本(帝室、一九六・四六)

諸次第 ①(日) Sho-shi-dai. ②二十二帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)(寶善提院)

諸次第記 ①(日) Sho-shi-dai-ki. ②一軸 ③存 ④南北朝頃寫 ⑤(寶善提院)

諸次第私記 ①(日) Sho-shi-dai-shi-ki. ②一軸 ③存 ④南北朝時代寫 ⑤(寶善提院)

諸次第抄 ①(日) Sho-shi-dai-sho. ②一括 ③存 ④南北朝頃寫 ⑤(寶善提院)

諸次第私記 ①(日) Sho-shi-dai-shi-ki. ②一軸 ③存 ④南北朝時代寫 ⑤(寶善提院)

諸次第抄記類 ①(日) Sho-shi-dai-sho-ki-ri-ri. ②一括 ③存 ④徳川時代寫

諸師會論義 ①(日) Sho-shi-ei-ron-ge. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大)

諸師義林 ①(日) Sho-shi-gi-jin. ②四部 ③存 ④傍觀正偽編(崇禎)、還着百八失(善慶)、學林と善慶との往復、三十五誤領解(實明院)を収む。

諸師行實 ①(日) Sho-shi-gyō-jitsu. ②二卷 ③存 ④惟高妙安(文明二一永祿一〇A.D. 1480-1567)撰 ⑤(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

諸師口傳 ①(日) Sho-shi-kuden. ②一帖 ③存 ④鎌倉初期寫 ⑤(高大、寄・一六四)

諸師製作目錄 ①(日) Sho-shi-sei-saku-moku-roku. ②一卷 ③存、大日本佛教全書佛教書籍目錄第二

④本書は眞言、天台、華嚴、三論、法相等の五宗の諸師の製作に係る章疏の目錄であつてその中に於ても眞言宗に關するもの最も多く、天台之に亞ぎ、爾餘の三宗に關するものは最も簡單である。本書の編纂體裁は諸師製作目錄の名が示す如く、各宗諸師製作章疏の書名を著者別に記載せるものであるが、その記載には可なり杜撰の點が尠くない。例へば眞言宗の部に於て冒頭に龍猛を脱し、華嚴宗中に淨影寺惠遠を入れ、三論宗中に元曉を編入せるが如きがその一端を示すものである。尤も數多き誤謬の中には轉寫の際の誤りと考へらるゝものもあるけれども、大體本書は初から諸宗間の均衡に意を須ひて、周到なる研究の結果編纂せられたものとは云ひ難く、恐らく、學人が研學の便宜上その座右に備へんが爲に、自己の記憶せる限りを記録した覺書の程度に過ぎなかつたものであらう。本書を釋教諸師製作目錄と比較するに、後者は著者別目錄の前に圓瑠等の五宗錄を其儘掲出せるも、本書は之を省略して居る點に相違を認むるも、著者別目錄の内容に關する限り、兩者間に頗る相通する所がある。然し、釋教諸師製作目錄の方は本書に比して餘程増補修正されて居る點が認めらるゝから、この點から推して釋教諸師製作錄は本書を本に修正したものでなからうかと考へられる。

本書にはその編者の名も又その編纂の年時も共に示して居らない。現在に於て知り得る點は、それが元祿十六年(A.D. 1703)豊山に於て書寫されたといふことだけであるけれども、前の推定が誤りなものとすれば、釋教諸師製作錄(A.D. 1548-1667)より幾分古い編纂のものであらう。(釋教諸師製作目錄並に諸宗章疏錄の項参照)

⑤寶曆一三寫 ⑥(寶龜院) (林屋友次郎) 諸師製作目錄集 ①(日) Sho-shi-sei-saku-moku-roku-shū. ②一冊 ③存 ④寫本(金剛三昧院)

諸師製作錄 ①(日) Sho-shi-sei-saku-roku. ②一卷 ③惠範(慶長一五一慶安二A.D. 1610-1649)

④諸宗章疏錄卷三に曰く「按流布釋教錄二卷者合採五宗錄與此書。重出繁多。繆誤

れども、大體本書は初から諸宗間の均衡に意を須ひて、周到なる研究の結果編纂せられたものとは云ひ難く、恐らく、學人が研學の便宜上その座右に備へんが爲に、自己の記憶せる限りを記録した覺書の程度に過ぎなかつたものであらう。本書を釋教諸師製作目錄と比較するに、後者は著者別目錄の前に圓瑠等の五宗錄を其儘掲出せるも、本書は之を省略して居る點に相違を認むるも、著者別目錄の内容に關する限り、兩者間に頗る相通する所がある。然し、釋教諸師製作目錄の方は本書に比して餘程増補修正されて居る點が認めらるゝから、この點から推して釋教諸師製作錄は本書を本に修正したものでなからうかと考へられる。

本書にはその編者の名も又その編纂の年時も共に示して居らない。現在に於て知り得る點は、それが元祿十六年(A.D. 1703)豊山に於て書寫されたといふことだけであるけれども、前の推定が誤りなものとすれば、釋教諸師製作錄(A.D. 1548-1667)より幾分古い編纂のものであらう。(釋教諸師製作目錄並に諸宗章疏錄の項参照)

非一。皆後人所爲也。非關範公云々

諸師傳 ①(日) Sho-shi-dan. ②六卷  
③存 ④(參考) 禪籍口録

諸嗣宗脈記 ①(日) Sho-shi-shu-  
myak-ki. ②二卷 ③存 ④享保三刊 ⑤  
(谷大・餘大・八五六) (京專) (正大) ①〇三  
一・六四・六六・一〇三(哲、ち・四・右・五)

諸嗣宗脈記 ①(日) Sho-shi-shu-  
myak-ki. 新刊諸嗣宗脈記 ②一册 ③存  
④刊本(高大寄、二二)

諸寺異說彈妄 ①(日) Sho-ji-tsetsu-  
dan-mu. 大谷遺蹟録附翼 ③存、眞宗全  
書第六五、親鸞傳叢書之内 ④先啓(享保  
五—寛政九 A.D. 1730—1797)撰 ⑤明和八  
(A.D. 1771)

⑥本書は眞宗大谷派の史家として知られた  
る先啓了雅師が、その著「大谷遺蹟録」の附  
録として撰せられたものであつて、その名  
の示すが如く、眞宗に於ける諸由緒寺院の  
傳説について、師の該博なる知識と、その  
鋭き史的考證眼より、謬れる異説を正して、  
すなはち標題に諸寺とあるのは、大谷本廟、  
佛光寺、越前四箇寺、越前法雲寺、岩倉法  
光寺、福井本覺寺、興宗寺、越後淨興寺、  
常敬寺、瑞泉寺、信州康樂寺、下總常敬寺、  
東弘寺、常陸光明寺、西念寺、報佛寺、眞  
佛寺、稱名寺、奥州蓮生寺、武藏善福寺、  
相模最寶寺、永勝寺、三河如意寺、上宮寺、  
勝登寺、伊勢專修寺、江州錦織寺の諸寺に  
して主として、『享保記』、『費永記』、『高田  
正統傳』等の誤謬を指摘してゐるやうであ

る。因に本書の舊本には、『大谷遺蹟録附  
翼』の外題がある  
⑦安永八刊 ⑧(龍大、一九六一・一〇六)  
(岡崎正謙)

諸寺院縁起 ①(日) Sho-ji-in-en-  
ji. ②十一册 ③存 ④(帝國、一〇三・二  
九二)

諸寺院階格秘御留記 ①(日) Sho-  
ji-in-kai-kaku-bitsu-go-ryu-ki. ②四卷  
③存 ④寫本(正大、一〇三二・一〇三二)

諸寺院上申 ①(日) Sho-ji-in-ji-  
shin. ②四册 ③存 ④寫本(帝室)

諸寺院上申皇親事蹟 ①(日) Sho-  
ji-in-ji-shun-jo-shin-jo-shin-ji-seki. ②一册 ③  
存 ④寫本(帝室)

諸寺縁起 ①(日) Sho-ji-en-ji.  
②存、大日本佛教全書第一一八寺誌  
叢書第二 ③清範(應和二—長保元 A.D.  
962—999)輯録

④本集は其の原本の箋に、法眼清水清範  
(A.D. 1622—1639)筆記とあるが、その内  
容より見れば清範が當時著名なる諸寺、諸  
會の縁起を輯集記録せる所のものなること  
を知り得る。今、内容の目を列挙すれば、  
法華八講縁起事、四天王寺縁起事、笠置寺  
縁起事、大安寺縁起、元興寺縁起、興福寺  
縁起、西大寺縁起、藥師寺縁起、招提寺縁  
起、長谷寺縁起、東大寺縁起、勝尾縁起、

竹生島縁起、角寺縁起、維摩會縁起、常樂  
會事、法花寺事、超昇寺、興福院縁起、濟  
恩寺、法隆寺、多武峯、橋寺、河原寺、本  
元興寺、山田寺、當麻(付萬タラ事)、北京  
御願寺所、矢田縁起、金剛山、有馬温泉等  
なり。右の内、有馬温泉は目のみにて其の  
本文を闕く。(不破幹雄)

諸寺縁起綴 ①(日) Sho-ji-en-ji-  
tsuzuri. ②一册 ③存 ④(哲、あ二・左・  
八)

諸寺奇物記 ①(日) Sho-ji-ki-motus-  
-ki. ②存、説部第二二六 ③遊園居士  
(帝國、二・一)

諸寺系圖略 ①(日) Sho-ji-kei-zu-  
ryaku. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、別  
置)

諸寺社吏務 ①(日) Sho-ji-sha-ri-  
mu. ②一卷 ③存 ④寫本(帝室、四一九・  
七)

諸寺塔供養記 ①(日) Sho-ji-to-ka-  
-ji. ②存、史籍集覽第一二別記第八五  
③本書は表題に示すが如く、諸寺塔の供養  
法會に就つての儀式を記述したるもの。以  
下之を簡述すれば左の如し。

(一)延曆寺、二通り。根本中堂の供養法會  
は延曆十三年(A.D. 795)九月、桓武帝行幸  
の下に行はれたるものと、大講堂のそれは  
圓融帝天延元年(A.D. 973)四月に行はれ  
たるもので當時の盛儀を偲ばしむ。(二)無  
量壽院、藤原道長、寛仁四年(A.D. 1030)  
三月の法會と治安元年から同二年(A.D.  
1021—1022)の法會を記す。(三)法成寺金

堂供養、同じく道長治安二年七月に執行し  
た。法成寺金堂五大堂の建立につき、新佛  
奉安の開眼供養法會の記述、(四)法成寺藥  
師堂、萬壽元年(A.D. 1024)六月の同じく  
道長の執行したるもの。(五)圓明寺、延久  
二年(A.D. 1070)十二月源經信の慶讃供養  
したるもの。(六)法勝寺、承暦元年(A.D.  
1077)十二月白河法皇の行幸の下に供養法  
會が行はれた。此の法會も随分盛大に執行  
されたらし。(七)東寺塔は應徳三年(A.D.  
1086)の(八)護國寺は建武元年(A.D.  
1334)の(九)法勝寺九重塔、(一〇)歡喜壽  
院に就いて述べてゐる。史籍集覽別記類に  
輯録せられたる本書の跋文に左の如く書か  
れてゐる。  
此本出三子水戸彰考館古寫本。行間似頗  
有誤脫。而無別本之可對校。者上矣。謄  
寫一校直附手民云  
明治十五年六月 近藤瓶城 識  
同 三十四年再校了 同 圭造

諸寺寶物錄 ①(日) Sho-ji-ho-mo-  
-roku. 京都諸寺寶物錄 ②一卷 ③存  
④寫本(帝國、二三一・九九)

諸寺略記 ①(日) Sho-ji-ryaku-ki.  
②一卷 ③存、大日本佛教全書第四一阿婆  
縛抄之内 ④承澄(元久二—弘安五 A.D.  
1205—1282)撰

諸事心得之記 ①(日) Sho-ji-koko-  
-no-ki. ②三册 ③存 ④寫本(龍大、  
別置)

諸事雜集 ①(日) Sho-ji-zas-shu. ②

名所行發 ① (名庫書) 著者所現 ② 月年の刊寫 ③ (書考卷書釋註) 書末 ④ 説解存内 ⑤ 代年作者 ⑥ 著者 ⑦ 缺存 ⑧ 數卷 ⑨ (名書) 名題 ⑩ 號略字號

一卷 ⑥存 ⑦寫本(谷大、餘大・三六八) ⑧  
**諸式日記** ①(日) Sho-shiki-niki-ki.  
 ②一通 ③存 ④現在所藏の講式目録。⑤  
 寫本(高大、寄・一・四七)

**諸社禁忌** ①(日) Sho-sha-kin-ki.  
 ②存、日本教育文庫第一附録

**諸社遷宮作法** ①(日) Sho-sa-sen  
 -ga-sa-ho. ②一帖 ③存 ④寫本(京大、  
 一・二六・小別)

**諸釋種出家因縁** ①(日) Sho-shaku  
 -sha-shuk-ke-in-on. ②一卷 ③存、慈  
 雲尊者全集第一六 ④皓月尼(寶曆六一天保  
 四 A. D. 1756—1833)譯、慈雲(享保三)文  
 化元 A. D. 1718—1804)添削 ⑤皓月尼直筆  
 尊者添削本(京部長福寺藏)

**諸宗位格衣體書上類聚** ①(日)  
 Sho-shu-i-ka-ku-ai-tai-kei-shu-jo. ②  
 四卷 ③存 ④(参考) 大日本佛教全書續  
 刊豫定書目

**諸宗依經しらべ** ①(日) Sho-shu-i-  
 -kyo-shira-be. ②一冊 ③存 ④(哲  
 学・三・中・二二)

**諸宗依經事** ①(日) Sho-shu-i-kyo-  
 -no-koto. ②一帖 ③存 ④足利時代寫  
 ⑤(寶龜院)

**諸宗伽藍開基記** ①(日) Sho-shu-  
 -gan-an-kai-ki-ki. ②十冊 ③存 ④道溫  
 編 ⑤元錄七刊 ⑥(高大、寄・一・二二)

**諸宗階級** ①(日) Sho-shu-kai-kyu.  
 ②二卷 ③存、續々群書類從第一二  
 ④天台宗を始め十二宗諸派及び修験道僧侶  
 の經歷昇進衣體行儀法式學制權林等の沿革

を記録したもの。享和元年(A. D. 1801)  
 から翌二年に亘りて諸宗諸刹より徳川寺社  
 奉行に提出した書上を蒐めたものである。  
 本書は諸宗制度組織の尤も完全に集出した  
 ものであつて徳川時代の寺院の制度、經濟  
 を研究する好資料である。(鎌田良賢)

**諸宗階級並衣體記** ①(日) Sho-shu  
 -kai-kyu-nai-tai-ki. ②二卷 ③  
 存 ④寫本(正大、一一八九・四七)

**諸宗規範抄録** ①(日) Sho-shu-kan-  
 -ban-sho-roku. ②一卷 ③存 ④寛政三  
 ⑤二卷 ⑥存 ⑦義統述 ⑧安永七寫 ⑨  
 (谷大、餘大・二二六八)

**諸宗教藏總録** ①(日) Sho-shu-kyo-  
 -zu-so-roku. (支) Chu-tsung-chiao-tsung  
 -lu. 海東有本現行録、義天録、新編諸宗教  
 藏總録 ②三卷 ③存、大正五五・一六五  
 No. 2184、大日本佛教全書第一佛教書籍目  
 録 ④高麗義天(一建中靖國元 A. D. 1101)  
 編 ⑤海東有本現行録の下を見よ。⑥(参  
 考) 淨土真宗教典第三 ⑦元祿六刊  
 ⑧(谷大、餘大・一七七〇)(正大、一〇〇・四  
 一五)(京專)(龍大、二〇三・四二)哲、マ・  
 三・右・一〇)

**諸宗教理同異釋** ①(日) Sho-shu-  
 -kyo-ri-do-i-hi-shaku. 諸宗教理同異秘釋  
 ②一卷 ③存、大正七九・五五 No. 2328、大日  
 本佛教全書第三、諸宗要義集之内 ④頼瑜  
 (嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304)述  
 建治二(A. D. 1276)二月一日

⑥本書は法相宗と三論宗と天台宗と華嚴宗  
 との顯教四ヶ大乗と金剛一乘教たる眞言宗  
 との五宗の教理を比較論評したものであ  
 る。即ち此等の五宗は一往は其の説く所  
 の理は淺深はないとの立場から、法相宗の三  
 時教三論宗の二藏三轉法輪天台宗の五時八  
 教華嚴宗の五教十宗眞言宗の二教十住心論  
 をあげて論ずるが、西往吟味すると其間に  
 教理の優劣淺深の差降のあるものなり立  
 場から、各々の教理を比較論議して最後に  
 眞言宗が究竟眞實の教なりと述べてゐる。  
 之を一言にすれば顯教は攝相歸性の法門密  
 教は性相當住の法門であると説く。(岡田契昌)

**諸宗教理同異秘釋** ①(日) Sho-  
 -kyo-ri-do-i-hi-shaku. 諸宗教理同異  
 釋 ②一卷 ③存、大正七九・五五 No. 2328、  
 大日本佛教全書第三、諸宗要義集之内 ④  
 頼瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304)述  
 (参考) 諸宗章疏録第三

ひ採録せるものにして、華嚴部に於ては  
 華嚴經 六十卷 覺賢譯  
 以下三十四部を擧げ、  
 此宗章疏雖多、今取其要、不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>于此<sub>一</sub>  
 此等法門中、五教十宗十玄六相等法、文  
 義雖<sub>レ</sub>廣、而不<sub>レ</sub>演<sub>二</sub>往生極樂之事<sub>一</sub>、是非<sub>二</sub>西  
 方指南<sub>一</sub>也  
 と記して、一言に淨土教者の立場より華  
 嚴聖典を批評し、天台宗に於ては什譯法華  
 經以下二十四部を掲げ、三論宗にては三十  
 三部、法相宗にては四十三部、地論宗九部、  
 攝論宗三部、大乘律宗十一部、成實宗三部、  
 俱舍宗二部、四分律宗一部を掲げたり、各  
 宗聖教に對する評言略ね華嚴宗に於けると  
 同様である。本書の成立年時は明記され  
 ず、編者の生存年代長承二年(A. D. 1133)  
 より建曆二年(A. D. 1212)なるが故に、そ  
 の間のものなることは明かなことである。  
 (林屋友次郎)

**諸宗官位階級記** ①(日) Sho-shu-  
 -kwan-i-kai-kyu-ki. ②一卷 ③存 ④昭  
 和四寫 ⑤(谷大)

諸宗輿略宗系圖

①(日) Sho-sha-ko-ryaku-shi-kei-zu. ②一卷 ③最澄(神護景雲元一弘仁一三 A.D. 767—822)撰 ④(參考) 山家祖德撰述篇目集卷上、本朝台祖撰述密部書目

諸宗止觀

①(日) Sho-sha-shi-kwan. (支) Chu-tsung-chih-kuan. ②三卷 ③道

諸宗止觀科

①(日) Sho-sha-shi-kwan-kwa. (支) Chu-tsung-chih-kuan-kwa. ①一卷 ②道

諸宗寺格記

①(日) Sho-sha-ji-ka=ki. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一〇三二・九)

諸宗寺格史

①(日) Sho-sha-ji-ka=ku-shi. ②三卷 ③存 ④(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

諸宗寺格帳

①(日) Sho-sha-ji-ka=ku-chō. ②六卷 ③存 ④天保二寫 ⑤(谷大、餘大・二九八七)

諸宗寺格錄

①(日) Sho-sha-ji-ka=ku-to-ku. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一四一・六九)

諸宗寺鑑

①(日) Sho-sha-ji-kan. ②二卷 ③存 ④(參考) 禪籍目錄

諸宗朱點集

①(日) Sho-sha-shu-ten-shū. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一〇九・二二二)

諸宗所依經大意

①(日) Sho-sha-sho-e-kyō-tai-i. ②二卷 ③存 ④寶雲(寛政三一弘化四 A.D. 1791—1847) ⑤寫

諸宗所依經論記

①(日) Sho-sha-sho-e-kyō-ron-ki. ②二卷 ③存 ④寶雲(寛政三一弘化四 A.D. 1791—1847) ⑤寫本(龍大、二〇三・四)

諸宗所造書目錄

①(日) Sho-sha-sho-zō-sho-moku-roku. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、二〇二・七)

諸宗諸社御朱印普法度書

①(日) Sho-sha-sho-sha-go-shu-in-tu-hat-to-no-sho. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

諸宗諸陀羅尼集經

①(日) Sho-sha-sho-dara-ni-shū-kyō. ②一卷 ③存 ④圓山達音輯 ⑤刊本(谷大、餘小・三四)

諸宗諸法度留

①(日) Sho-sha-sho-hat-to-dome. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

諸宗章疏目錄

①(日) Sho-sha-sho-sho-moku-roku. 諸宗章疏錄 ②一卷 ③存、大日本佛教全書佛教書籍目錄第一 ④謙順(元文五—文化九 A.D. 1740—1812)撰 ⑤(參考) 淨土真宗教典志第三 ⑥寫本(正大、一〇〇・二三)

諸宗章疏錄

①(日) Sho-sha-sho-sho-roku. 諸宗諸疏目錄 ②三卷 ③存、大日本佛教全書佛教書籍目錄第一 ④謙順(元文五—文化九 A.D. 1740—1812)撰

⑤本書は智教院下の謙順なる人の編纂に係るものであつて、その内容は諸宗章疏録と増補諸宗章疏録の二大部より成つて居る。前半の諸宗章疏録は、圓超等の五宗録並に

惠範の祖師製作録を改訂せるものを以て是れに充て、後半の増補諸宗章疏録は謙順が自ら新に編纂せるものである。前半の主體をなす五宗録は、延喜年中勅命を奉じて六宗の碩學、各その宗の書籍目錄を闕下に奉呈したものであつて、其中、華嚴宗章疏並に因明錄は東大寺圓超大法師この任に當り、天台宗章疏は延曆寺支日大法師、三論宗章疏は元興寺安遠律師、法相宗章疏は東大寺平祐大法師、律宗章疏は藥師寺榮穩大法師が擔任した。その他の一宗は恐らく眞言宗ならんと思惟されるけれども、今は逸して傳らない。是れ五宗録の名ある所以である。然るに、後世六波羅蜜寺の住僧惠範なる人、祖師製作録なる眞言宗依用の章疏目錄を作りたる爲、後人前記の五宗録とこの祖師製作録とを合本とし、些かそれに加筆して釋教諸師製作目錄(其項參照)なるものを製した。然しその内容には極めて杜撰の點が多かつた。遇々寛政二年(A.D. 1790)智積院下の謙順なる人五宗録の古寫本を得、之を釋教諸師製作目錄と比較するに、後者が前者に比して非常に舛錯多きを見て、茲に完全なる書籍目錄編纂を思ひ立つに至つた。彼は先づ彼が發見した古寫本の五宗録と、惠範の祖師製作録の訂正増補を企て、華嚴部は賢首の華嚴傳、義天海東錄、永超東域傳燈錄、凝然法界義鏡、通路記、高山寺聖教錄等に依り、天台部は志盤の佛祖統紀、慈雲天台教觀錄、隨函錄、寂澄圓仁圓珍三大師錄、東域錄を以て、三論部は東域錄等に依り、法相部は東域錄、藏後法相錄

等を依憑とし、戒律部は圓照眞元錄、東域錄を以て校訂し、眞言錄を校するに、安然八家錄、本圓六大錄、相覺祖師書籍錄、小野祖師製作録、諸師製作録、高山寺錄等を以て校訂増補したのである。就中、本書第三卷をなす眞言宗章疏録の基本をなした六波羅蜜寺惠範の眞言宗諸師製作録なるものは、同書の跋語に「範師一時見聞之草葉未下細削、多其紕謬、亦宜矣。」と評して、それを未定稿のものと斷じて居る如く、圓超等の五宗録の如きと同列に置くべきものでなかつたのであるが、五宗録中に眞言宗章疏録が缺けて居つたことが、この兩者を合した釋教諸師製作目錄の如きものを生ぜしめた所以である。然るに、謙順は前記の如く安然の八家錄、本圓の六大錄等を依憑として、眞言八大祖師、唐朝祖師、大師法資、入唐諸師、廣澤、小野、東寺、高野、根柢の眞言諸師を列次に掲げ、著者別に書名を掲げ、以て圓超等の五宗録に拮抗し得る眞言宗章疏目錄を作つたことは、確に彼の功績であつたと云はなければならぬ。兎も角も、本書の前半は五宗録を訂正したものであるが、この五宗録の成立年代は延喜朝にあつて、年代としても相當早かつた上に、書籍の蒐集も充分なること能はず、その後に渡來せるものや、又その後の本朝名匠に依て著されたる章疏も尠なかつたから、其等も亦追加増補する必要が認められた。この意味に於て、謙順が新に追加編纂したものが増補諸宗章疏録である。就中凝然撰集の華嚴、法相、律、淨教、密教、

等

雜部等の百二十二部、梅尾明恵上人撰集四十一部を收容せるが如きは其の尤なるものである。要するに、本書は各宗に亘るこの種の章疏目録中、最も完備せるものの一と云つてよい。猶本書の編纂の目的は有本録を製せんと爲せしに非ずして、曾て著作されたものは當時既に失はれたものと雖もその書名を録して、一は後世に先徳の芳業を傳へんとし、又將來學者の訪得の便りとなさしめんとしたものである。

寛政二刊 ①(京專)(谷大、餘大・二六二)(正大一〇〇・三八)(龍大、二〇二・五)(高寄・一・二〇)(帝國・一〇四・三二六)

**諸宗水波喻況同異章** (林屋友次郎)

①(日) Sho-shui-ha-yu-kyo-dai-shu. ②一卷

③存 ④禪家(寛政五 A. D. 1793)撰

⑤寛政五刊 ⑥谷大(長保三〇一)(龍大、二五四・九)(正大、一〇七・一五三、二一四、二一八)(京專)

**諸宗水波喻況同異章**

①(日) Sho-shui-ha-yu-kyo-dai-shu. 冠導諸宗水波喻況同異章 ②一卷 ③存 ④好山隆俊註 ⑤明治二七刊 ⑥(正大、一〇七・一五四、二一五・二一九)(帝國、一六・二二四)

**諸宗水波喻況同異章私考**

①(日) Sho-shui-ha-yu-kyo-dai-shu-shi-ko. ②三卷 ③存 ④相寛(天保三—明治三 I. A. D. 1832—1898)述、慈光(明治二九 A. D. 1896)記 ⑤明治二九寫 ⑥(正大、一〇七・二二一)

**諸宗制令**

①(日) Sho-shu-sei-ri. ②一卷 ③存 ④享保至天明寫 ⑤(駒大) 諸宗說教要義 ①(日) Sho-shu-sei-ri-kyo-yo-gi. ②一卷 ③存 ④教典局編 ⑤明治五刊 ⑥(龍大、一〇五五・八三、研佛)(正大、一〇九・一六六—一六七)(立大、A. D. 1916)(高寄、一・二四)

**諸宗祖師略傳**

①(日) Sho-shu-so-shi-yaku-den. ②一卷 ③存 ④明三慧 ⑤明治一六刊 ⑥(龍大、二九六二・一一)(谷大、餘小・五)(帝國、六五・一九四)

**諸宗僧官記**

①(日) Sho-shu-so-kyan-ki. ②一卷 ③存 ④寫本(帝室、四二二・二八)

**諸宗僧侶階級並衣體次第書**

①(日) Sho-shu-so-ryo-kai-kyu-narabini-et-tsu-dai-sho. ②二卷 ③存 ④寫本(帝國、一〇七・一五八)

⑤諸宗總系譜 ①(日) Sho-shu-so-kai-shu. ②一軸 ③存 ④(龍大、別置)

⑤諸宗大意 ①(日) Sho-shu-tai-i. ②一卷 ③存 ④明治元刊 ⑤(龍大、二五四・一〇)(哲、え・四・中・二九)(谷大、餘大・二九七二)

**諸宗大綱**

①(日) Sho-shu-tai-ko. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、二五四・一一)

**諸宗大綱問答**

①(日) Sho-shu-tai-ko-mon-do. ②四卷 ③存 ④洞徹述 ⑤正徳六刊 ⑥(龍大、二五四・一一)

**諸宗鐵槌論**

①(日) Sho-shu-tet-tsu-ron. ②五卷 ③存 ④南紀白眼居士 ⑤貞享四刊 ⑥(京大、日大末・七九八)

**諸宗點圖**

①(日) Sho-shu-ten-zu. ②一帖 ③存 ④明曆元寫 ⑤(寶善提院) 諸宗傳通錄 ①(日) Sho-shu-den-zu-roku. ②六卷 ③凝然(仁治元—元亨元 A. D. 1230—1321)撰 ④(參考) 諸宗章疏錄第二

**諸宗傳來並雜歌集**

①(日) Sho-shu-den-rai-narabini-zak-ka-shu. ②一冊 ③存 ④寫本(高寄、一・二四)

**諸宗傳略**

①(日) Sho-shu-den-ryaku. ②一冊 ③存 ④大典顯常(寛永一一享保元 A. D. 1634—1716)撰 ⑤明和七刊 ⑥(高寄、一・二二)(帝國、八二一・一〇九)

**諸宗拔書**

①(日) Sho-shu-nuki-gan-ki. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、別置)

**諸宗念佛教義の概観**

①(日) Sho-shu-nem-bu-su-kyo-gi-no-gai-kwan. ②一卷 ③存 ④花園映澄著 ⑤昭和五刊

**諸宗念佛法語拔萃**

①(日) Sho-shu-nem-butsu-ho-go-bas-sui. ②一卷 ③存 ④是心(—安永頃 A. D. 1772—1780)編 ⑤天明五刊 ⑥(正大、一五五・二五)(京大、一・二六・一八)

**諸宗之意得**

①(日) Sho-shu-no-i-toku. ②一卷 ③存 ④慈雲尊者全集第一四 ⑤慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804)述 ⑥戒律、禪定、密教、僧儀、所學、學法、住處、聲明學、諸宗意得の九條に解説を施し、僧糧、資具、己財、亡物の四條は名目のみを擧げてゐる。

**諸宗評判記**

①(日) Sho-shu-byo-ban-ki. ②三卷 ③存、國文東方佛教叢書第一輯第九 ④鷲尾順敬編

⑤佛教各宗及諸僧信者等と演戲の立役、實役、敵役、女形、若衆形等に配して評判した戲作滑稽本である。文政天保の頃、流行した評判記の一種で和文體に出来て居る。批判に上る宗旨は天台宗、淨土宗、禪宗と次第し三論宗で終る。總て三十七を取扱ふ。開口に初夢の福神皆さい、夷舞。と書き出し、木のまた小平といふ者の初夢に托して布袋和尚が頭取となり初め天台宗から各宗の特徴をひきき役、見物、わる口役、功者役、きおい役等を配して面白く演戲化させて居る。最後に益々榮る佛道は、我神國にひろまりて、しうこう兩部の中もよく、聖の道も諸ともに、三教三聖三ヶ國、一にきたる浦あん國、東もしらむよごぐもに、大師參りのいたづらに、戸をたゝかれてめをさまし、初夢のまきな事、ふでこころのたはむれも、治る御代こそ久しけれ。と結んでゐる。(鎌田良賢)

**諸宗佛書雙六**

①(日) Sho-shu-busho-sago-roku. ②一冊 ③存 ④折本(哲、え・四・中・三〇)

**諸宗佛像圖彙**

①(日) Sho-shu-bu-zu-zu-i. 増補諸宗佛像圖彙 ②六冊 ③存 ④(京專)

**諸宗便議疏**

①(日) Sho-shu-ben-ri-sho. ②四卷 ③存 ④(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

名所行發⑩ (名庫書)著書所現⑨ 月年の刊寫⑧ (書考書書撰註)書太⑦ 説解存内⑥ 代年作著⑤ 著者④ 缺存③ 數卷② (名書)名題① 號略字數

【シ】

諸宗便覽

①(日) Sho-sha-ben-ran. ②四帖 ③存 ④寛永一〇寫 ⑤(寶龜院) 諸宗寶鑑 ①(日) Sho-sha-ho-kan. ②五册 ③存 ④端什著 ⑤元祿二刊 ⑥(龍大、二五四・一四) (哲・え・四・中・一九) (帝國、二三二・二六八)

諸宗本山本寺諸法度

①(日) Sho-sha-hon-zan-hon-ji-sho-hat-to. ②存、大日本史料第一二編第二二 ③徳川家康(天文一一元和二A.D. 1592-1616) ④大正九刊 ⑤(駒大) 諸宗本寺ヨリ差出候法度書 ①(日) Sho-sha-hon-ji-yo-ni-sashi-dashi-sho-hat-to-gaki. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、二九九九六)

諸宗無得道論

①(日) Sho-sha-mu-toku-doron. ②一卷 ③存 ④日朝作

諸宗問答鈔

①(日) Sho-sha-mon-tsu. ②三種教相鈔 ③一卷 ④存、日蓮聖人御遺文之内、日蓮聖人全集第一 ⑤日蓮貞應元一弘安五 A.D. 1222-1282) 述 ⑥建治三(A.D. 1277) 或云建長三(A.D. 1253) ⑦日蓮が弟子三位房日行に與つた書。諸宗と問答の用意を教示したもので、諸宗としては(一)禪宗。(二)華嚴等南都六宗。(三)眞言宗。(四)念佛宗の九宗にわたつてゐる。初めに天台の「三轉教相」に「相待妙、絕待妙」等を擧げて、諸宗に對する教相上の意を示し用次に禪宗以下の諸宗の所立を擧げて一々之を反駁してある。

諸宗要論

①(日) Sho-sha-yo-ron. ②一卷 ③存 ④寫本(哲・え・四・右・一五) 諸宗略傳 ①(日) Sho-sha-ryaku-den. ②一卷 ③存 ④刊本(立大、A六六一・二五)

諸集

①(日) Sho-shu. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第一二二東大寺叢書第二 諸抄記類 ①(日) Sho-sho-ki-rui. ②一括 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶善提院) 諸星母陀羅尼經 ①(日) Sho-sha-mo-da-ra-ni-kyo. (文) Chu-hsing-mu-to-to-ni-ching. ②一卷 ③存、大正二一・四二〇No. 1302 ④唐代法成譯

諸星要集

①(日) Sho-sha-yo-shu. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院) 諸聲明口傳隨聞注 ①(日) Sho-sho-myaku-den-zui-mon-chu. ②一卷 ③存 ④圓珠注 ⑤文永九(A.D. 1272) ⑥(無動寺藏) 諸上善人詠 ①(日) Sho-jō-zen-nin-iei. (支) Chu-shang-zen-jen-ung. ②一卷 ③存、正續二乙・八・一、續淨土宗全書第一六 ④道衍撰 ⑤明洪武一四(A.D. 1391)五月

諸上善人詠

①(日) Sho-jō-zen-nin-iei. (支) Chu-shang-zen-jen-ung. ②一卷 ③存、正續二乙・八・一、續淨土宗全書第一六 ④道衍撰 ⑤明洪武一四(A.D. 1391)五月

諸上善人詠略釋

即ち諸上善人とは阿彌陀經所説の極樂淨土往生を願求する者の稱であつて、本書は淨土願往生者僧俗男女の代表者の德行を讃詠したものである。撰者道行は始め天台を學び、中頃禪門に歸したが、後ち淨土門に歸入し専ら禮拜誦經を事としてゐた。自序によると、撰者はこの書によりて普く十方の有縁に淨土往生を勧め、若し能くこれによりて信を起し念を興さば輒ち我が願は遂げられ、他日諸上善人とともに淨土に於て遊戯三昧をなし得べしと述べてゐる。本書成るの年七月、大佑は隨喜のあまり跋を叙し洪武十六年有志の援助によりて開板に際し性深は出版の由序を述べ、且つ楊次公撰の念佛願文を附記した。猶本書の撰者道行には「淨土簡要錄」なる淨土往生者の心得べき要項を述べた著述一卷が傳存してゐる。 (參考) 淨土正依經論書籍目錄、淨土眞宗教典志第三、總淨土依憑經論書籍目錄、④寛文元刊(正大、一〇三六・八、八二)(龍大、二九六四・五二)(京大、藏・一九三・一三) 天保三刊(谷大、宗大・二五九九)(正大、一〇三六・九)(哲、て・二・左・一四) (高瀬承載) 諸上善人詠略釋 ①(日) Sho-jō-zen-nin-iei-ryaku-shaku. ②一卷 ③存 ④良定(天文二一)寛永一六 A.D. 1539-1539) 述 ⑤寛文元刊 ⑥(龍大、二九六四・五三)(正大、一〇三六・一〇)(哲、あ・二・中・二二) 諸定書集 ①(日) Sho-jō-sho-shū. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一五一・一・二二)

諸定書集

①(日) Sho-jō-sho-shū. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一五一・一・二二)

諸乘法數

①(日)Sho-jo-ho-shu (支) Chu-cheng-ta-shu 賢首諸乘法數 ②十一卷 ③存、佛學三書第一 ④明代行深編、野村淳達校 ⑤寛文五刊(正大、一〇一・二二)貞享二刊(正大、一〇一・二二)京大、藏、二一・六(帝國、一八六・六)寛政一二刊(龍大、二〇二・一八一・九)明治一三刊(龍大、研佛)内閣(正大、一〇一・九六)(高、大、一・二四)(京專)宣徳二刊(龍大、二〇二・二一八)

諸申物御禮等記

①(日)Sho-shim-mo-shu-on-ri-to-no-ki ②一卷 ③存 ④安政二寫 ⑤(谷大、宗大・二八八六)

諸眞言

①(日)Sho-shin-gon ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)寶書提院)

諸眞言句義私鈔

①(日)Sho-shin-gon-ku-gi-shi-shu ②三卷 ③存 ④刊 ⑤本龍大、二六六・六九)

諸眞言集

①(日)Sho-shin-gon-shu ②二卷 ③存 ④心覺(永久五—治承四、A. D. 1117—1180) ⑤徳川時代寫 ⑥(寶善提院)

諸眞言要集

①(日)Sho-shin-gon-yo-shu ②四卷 ③存 ④貞享三刊 ⑤(谷大、餘大・一四六二)(正大、一四二・九)

諸神呪經

①(日)Sho-jin-shu-kyo ②(支)Chu-shen-chou-ching ③三卷 ④缺 ⑤西晉竺法護(—太始二—建興元、A. D. 265—313)譯 ⑥[參考]開元錄第一四、貞元錄第二四

諸神受戒記集

①(日)Sho-jin-ji-

ka-ki-shu ②一卷 ③存、慈雲尊者全集首卷 ④長谷實秀編 ⑤大正一五(A. D. 1926)

⑥慈雲尊者全集の編輯に方り新に編次したるもの、此の中に貴高明神由來記、慈雲尊者御消息四通、諸神受善薩戒安名集、受善薩戒神號記、諸神灌頂投華包記の五種を収録してある。 ⑦初三は慈雲尊者(飲光)筆、後二は他筆(河内西方院) 諸神諸佛御詠歌 ①(日)Sho-jin-sho-butsu-go-ki-ka ②存 ③慶安四刊 ④(龍大、二六八・一八六)

諸神遷宮略作法

①(日)Sho-jin-sen-gu-ryaku-sa-ho ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

諸神本懷集

①(日)Sho-jin-ton-eva-shu ②一卷或二卷 ③存、異義集(了稿稿本)第七、同第二(眞宗大系本) ④源空(長承二—建曆二、A. D. 1133—1212)撰 ⑤本書は漢文體の諸神本懷集上下二卷の合冊せられたもので、その撰號に沙門源空記とあつて、法然上人の著述とせられ、奥には承應三甲午正月吉日吉田庄左衛門刊行之とある。されど此の刊記は後から其板形を嵌めたものと見られるから、實際開板の年時は其前とも或は其後とも考へられることとなる。之を源空記とする所は、或は本書を以て假名聖教本法要本の國文諸神本懷集の底本に擬せるものらしいが、之を以て存覺の日来流布之本と稱するものに充てるには、餘りに多くの疑義がある。了祥師は版

本の儘を異義集の中に編入し、之を誓名不同計の謀書と看做された。そして卷首に今集評具有別記云云と記されてあるが、惜いかな其別記は現存せるや否や不明である。されど師は假名聖教本に對照して内容の相異を検討せられたと見えて、下一九左に觀經曰念阿彌陀佛即是念一切佛亦曰念阿彌陀佛即念諸佛故、念佛人即身成佛矣の文が、假名聖教本になきこと、又同二〇左念佛三昧經云……二二右所有佛神等守給故の文も同じく假名聖教本に無きことを指示せられてある。其中前所の文は最も宗義に違反せるものと見られたであらう。眞宗大系本、了祥師自筆本の異義集は共に其の第二卷に本書の名を列ねたれど、具文は自筆本第七卷のみに出されてある。而して之を以て存覺撰の諸神本懷集の底本と見るには、本書が單に古様和風體の漢文に書かれてあるだけで、餘りに其の内容が始終殆んど同一であるから首肯し得られないのである。既に存覺が自ら跋文に雖有日来流布之本一文言似令相違義理非無不審之間大略加添削畢と記されたからには、隨分と添削の形迹が見出されねばならぬ。然るに前掲二ヶ所の文の外に、たとひ些細の相違があるとしても、これでは文言も相違せず、義理も不審のないこととなつて、添削したとも言はれない。特に源空上人の記せるものであるなら、之を添削するにも及ばない事となる。それゆゑ甚だ奇怪な書と見られるばかりか、集中の下一七左八幡大菩薩託宣の我昔出家等の文は、一遍上人が弘安九

年冬八幡宮に參詣した時の託宣である。と、六條縁起第九に出てあるし、又同一八右に出る千勢破の歌も、玉葉和歌集神祇部に出てゐて、何れも源空の時代より後のことであれば、それが既に源空撰の本集に出ることは時代の錯誤となること先哲の指摘せる如くである。それゆゑ寧ろ之を逆に考へれば、存覺の國文本懷集を底本とし、何人か漢文體に書き改め、源空記として、存覺添削の底本に擬せしものとも見られ得ることとなる。

①正保三刊(正大、一五四・三三五)承應三刊(正大、一五四・三三六)(龍大、研眞) (大須賀秀道)

諸神本懷集

①(日)Sho-jin-ton-eva-shu ②一卷或二卷 ③存、眞宗假名聖教第二、眞宗假名聖教第六(本山藏)、眞宗法要第一二、假名聖教(惠空編)八十八部 ④存覺(正應三—應安六、A. D. 1290—1373)撰

⑤本書は其の跋文に依れば、存覺上人が元亨四年正月(三十五歳)、澁谷の第七世空性房了源の懇囑に由り、從來世に流布せる一本に就いて、其の文言の相違せるが如き點や、又義理の不審な所に、大略これが添削を加へ、願主了源に授與せられたものである。假名聖教、眞宗法要俱に之れを編入し存如書寫の奥書を存すれば、本書が存覺の添削に成れるものなることに疑ひはない。されどその添削の原本たりし日本流布之本とあるが果してどんな本であつたかといふことは古來の疑問である。爾るに坊刊にか

かる漢文體の諸神本懐集一冊（上下二巻合冊）があつて、その撰號に沙門源空記とあるけれど、たゞ本集が和風體の漢文に書かれてゐるのみで、其の内容が殆んど一致し、添削せられた形迹が餘りに乏しい、殊に源空記とあるは奇怪である。（別項参照）されば日來流布の本と謂はれるものが今日に於いて全く不明であるとすれば、隨つて存覺が之れを添削せられた程度もまた明かでない。されど、其の遺意のある所は、日本に古くより行はれた神佛二道の調和思想たる本地垂迹説に立脚して、眞宗一流の神祇觀を創建せんが爲めであつた。何となれば佛教が日本に傳つてより、在來の敬神思想との衝突は免れぬ所であつたが、佛教の特質たる包容性はいつか其の教義の上から神明と協調し融合して、本地垂迹といへる神佛混淆の教義を建設し、時代の推移に伴ひて當時既に一般民間に抜くべからざる信仰を形成してゐた。されば聖道諸宗殊に眞言天台等にあつて、それ〴〵神祇觀を構成し神々の本地を佛菩薩に認めて、神佛一如の崇拜を民衆に勧めてゐたが、眞宗もまたこれら一般の神祇觀と如何に關涉し如何に融會すべきかを、宗團として實際上解決を迫られた問題であつた。特に眞宗は一向専念の宗義を高調し、諸神諸佛の崇信を雜行として禁ずることだから、動もすれば國神を排斥するとの謗を招く虞がある。爾るに宗祖親鸞にあつて、未だ國神に對する明白なる教示がないのであるから、本問題の解決は容易な事業ではないばかりか、當時の宗團

として實際の傳道上、特に民衆誘引のため最も必要に區られてゐたことであらう。而して本集一部本末二巻の大綱は、要するに佛陀は神明の本地、神明は佛陀の垂迹なりとし本述二門の利生を對説して、竟に之れを彌陀一佛に歸するのである。故に書中三門を分ち、第一に佛菩薩の垂迹たる權社の諸靈神を擧げて、本地の利生の尊むべきを教へ、こゝに具體的に當時世に崇敬せらるる國神の一々につき其の本地たる佛菩薩を擧げ來り、是れ等の諸神何れも其の本地を尋ねれば、極果の如來深位の大神であつて利益衆生の悲願に催され、かりに神明の形を現じたまへるものとし、最後に其の本地は觀音勢至文殊彌勒等それ〴〵に異なれど皆是れ本師たる彌陀一佛の智慧に攝まる、従つて彌陀一佛に歸すれば自ら他の諸佛諸菩薩に歸することゝなると、此れに一般佛敎に於ける神明の迹門と佛菩薩の本門との間に於ける本勝迹劣の相對的神明觀は、更に轉じて眞宗別途たる本師彌陀と弟子諸菩薩との間に於ける本迹師弟相對の絕對的統一的の神明觀を成立せしめた。第二段には生靈死靈者類等を祀れる實社の邪神を明し、これが承事の思ひを止むべき旨を勧めた。是れ迷信の打破であつて、徒らに淫祠邪神に詣ひ祈れども福を獲ずして却つて禍を招くことを戒められた。第三段に廣く諸神の本懐を明し、幾多の方面から、何れの神々も其の本懐とする所、全く佛法を行じ念佛を修するにあることに結歸せられた。而して存覺の著述中、本書の外に神祇問題

に觸れてゐるは、破邪顯正鈔、持名鈔、六要鈔であるが、それは書中の一部分に過ぎない。本集は専ら此の問題のみを取扱へるものであつて、其の後に於ける眞宗の神祇觀は、概ね此の思想を繼承せるものに外ならない。加之、存覺の神祇に對する態度は、斯くの如く本述思想に依れる融會調和を基調とせるものであつたけれど、其の内面には權社の神に與へて、實社の神に之れを奪ふ與奪を含むものであつて、其の外面は至つて穩和なるに拘らず、而も諸佛諸菩薩を彌陀一佛に統攝し來つて、眞宗に於ける廢立の趣旨を當時の散漫なる神祇觀に徹底せしめて、一宗別途の神明に對する教義を組織せるところ、以て本集の特色とせらるべきである。

① 淨土眞宗教典志第一、總淨土依憑經論書目録、淨土眞宗聖教目録、淨典目録、高宮聖教目録、遺徳法輪集卷一 ④ 端之坊本（谷大・宗丙・七一）（龍大・研眞）寫本（龍大別置）文化六寫（谷大・宗大・三八六）刊本（龍大、一一二・三、研眞）（谷大、宗大三四八五）（大須賀秀道）

**諸神本懐集引據記** ①（日）Sho-jin hon-gwai-shu-ko-ki. ② 二卷 ③ 存

④ 義讀（寛政八—安政五 A. D. 1796—1835）

⑤ 寫本（谷大、宗大・二二七）

**諸神本懐集記** ①（日）Sho-jin hon-gwai-shu-ki. ② 三卷 ③ 存 ④ 義讀（寛政八—安政五 A. D. 1796—1835）述 ⑤ 寫本（谷大、宗大・二九、二七六）（谷大、宗大・二九、二七六）

**諸神本懐集甲辰記** ①（日）Sho-jin hon-gwai-shu-ko-shin-ki. ② 二卷 ③ 存

④ 份別（明和六—嘉永四 A. D. 1769—1851）述 ⑤（參考）眞宗全書刊行豫定書目

**諸神本懐集講義** ①（日）Sho-jin hon-gwai-shu-ko-ki. ② 一卷 ③ 存、眞宗大系第二 ④ 義讀（寛政三—安政五 A. D. 1791—1835）述 ⑤ 天保七（A. D. 1836）

⑥ 本書は存覺作諸神本懐集を天保七年三月尾張國淨賢寺に於て講せしものである。製作の人體、選集の所由、一部大綱、入文解釋の四項に分つて詳細に述べてある。

**諸神本懐集講義** ①（日）Sho-jin hon-gwai-shu-ko-ki. ② 三卷 ③ 存、眞宗全書第四三 ④ 義讀（寛政八—安政五 A. D. 1796—1835）述

⑤ 汎く神道の典籍を涉獵して、神佛二道の關係を詳細に論辯し、眞宗の宗意を認解せざらしめんと意を須ひられし跡歴然たるものがある、諸神本懐集の講義としては桑梁の跋涉録と共に東西兩派に於ける雙壁と稱すべきものである。

**諸神本懐集講義引據** ①（日）Sho-jin hon-gwai-shu-ko-ki-ka. ② 二卷 ③ 存 ④ 惠鈔述 ⑤ 寫本（谷大、宗大・三五六九）

**諸神本懐集講義並引文** ①（日）Sho-jin hon-gwai-shu-ko-ki-kanbun-jinmon. ② 七卷 ③ 存 ④ 元治元—二（A. D. 1861—1865） ⑤ 寫本（谷大、宗大・一七六八）

**諸神本懐集親聽記** ①（日）Sho-jin



hon-gwai-shu-shin-cho-ki. ② 1巻 ③ 存 ④ 義導(文化二—明治一四 A.D. 1805—1831)述 ⑤ 元治元—二(A.D. 1861—1865) ⑥ 寫本(谷大・宗大・二六八九)

**諸神本懷集典據** ①(日) Sho-jin-hon-gwai-shu-ten-ko. ② 1巻 ③ 存 ④ 寫本(谷大・宗大・二〇八〇)

**諸神本懷集跋涉錄** ①(日) Sho-jin-hon-gwai-shu-bas-sho-roku. ② 1巻 ③ 存 ④ 眞宗全書第六二 ⑤ 桑梁述 ⑥ 文政五(A.D. 1822)

⑥ 本願寺派學匠中の唯一の神道研究者と稱せられし阿波國、桑梁師の撰である。簡明に神道と佛教との關係を叙述し、直宗教徒の神祇に對する心得を示してある。

⑦ 寫本(龍大・二四三・四) (大原性實)

**諸神本懷集分科** ①(日) Sho-jin-hon-gwai-shu-bun-kwa. ② 1巻 ③ 存 ④ 慧鏡作 ⑤ 寫本(谷大・宗大・三五九五)

**諸神本懷集聞次錄** ①(日) Sho-jin-hon-gwai-shu-mon-ji-roku. ② 1巻 ③ 存 ④ 惠鏡述 ⑤ 天保三寫 ⑥(谷大・宗大・三五六八)

**諸神本懷集略述** ①(日) Sho-jin-hon-gwai-shu-ryaku-jutsu. ② 1巻 ③ 存 ④ 吉谷覺諭(天保一三—大正三 A.D. 1842—1914)述 ⑤ 明治三九刊 ⑥ 龍大(一二四・五) (谷大・宗小・一七二) (立大・A四〇・九九) ⑦ 京都西村護法館

**諸說草** ①(日) Sho-sei-sa. ② 訂正諸說草 ③ 三册 ④ 存 ⑤ 延寶六刊 ⑥(京大・日大未・八二四)

**諸說不同記** ①(日) Sho-sei-sa-fu-do-ki. 大悲胎藏普通大漫荼羅中諸尊種子標幟形相聖位諸說不同記、胎藏諸說不同記 ② 十卷、八卷或十一卷 ③ 存、大日本佛教全書第四四 ④ 眞寂親王(仁和二—延長五 A.D. 886—927)撰

⑤ 大悲胎藏普通大漫荼羅中諸尊種子標幟形相聖位諸說不同記の下を見よ。

**諸祖製作目錄** ①(日) Sho-so-sei-saku-moku-roku. ② 1巻 ③ 存 ④ 寫本(京大・藏・二二・七)

**諸祖大師號** ①(日) Sho-so-dai-shi-ho. ② 1巻 ③ 存 ④ 享保八寫 ⑤(正大、一四九・三八)

**諸祖年譜略頌** ①(日) Sho-so-nen-pu-ryaku-jin. 東海鐵塔諸祖年譜略頌 ② 一册 ③ 存 ④ 刊本(哲、ら、四、左、三〇)

**諸尊** ①(日) Sho-son. ② 1軸 ③ 存 ④ 南北朝時代寫 ⑤(寶龜院)

**諸尊位** ①(日) Sho-son-i. ② 1軸 ③ 存 ④ 德川時代寫 ⑤(寶善提院)

**諸尊會** ①(日) Sho-son-e. ② 1巻 ③ 存 ④(正大、一四六・三)

**諸尊各別法曼荼羅** ①(日) Sho-son-kaku-bep-pō-man-da-ra. ② 1帖 ③ 存 ④ 德川時代寫 ⑤(寶龜院)

**諸尊聞書** ①(日) Sho-son-kiiki-ra. ② 六卷 ③ 存 ④ 宥快(貞和元—應永二 A.D. 1345—1416)述 ⑤(參考) 眞言宗全書刊行豫定目錄

**諸尊行法** ①(日) Sho-son-gyō-ho. ② 1帖 ③ 存 ④ 嘉祿二寫 ⑤(高大、奇・一・六六)

**諸尊口決** ①(日) Sho-son-ku-kei-su. 普和鈔 ② 二卷 ③ 澄禪(安貞元—德治二 A.D. 1227—1307)述 ④(參考) 諸宗草疏 ⑤ 錄第三

**諸尊口傳集** ①(日) Sho-son-ku-den-shū. ② 六卷 ③ 存 ④ 朗澄撰

⑤ 諸尊法に關する口決を記す。醍醐、勸修寺諸家の口傳及び修法の支度等を載す。その内容左の如し。

〔上卷本〕孔雀經、仁王經、六字經、法華經、如法尊勝、〔上卷末〕請雨經、後七日、遊邪晦御念誦、奧砂子平法、加持香水作法、十八日觀音供、止風雨經、寶樓閣經、守護國界經、無垢淨光、〔中卷本〕大日、阿闍、寶生、阿彌陀、釋迦、佛眼、金輪、藥師、尊勝、大佛頂、光明眞言、五秘密、理趣經、五大虛空藏、虛空藏、愛染王、如法、愛染王、〔中卷末〕五字文殊、八字文殊、一髻文殊、彌勒、隨求、普賢延命、舍利、兩寶陀羅尼、持世經、聖觀音、千手、十一面、馬頭、准胝、如意輪、七星如意輪、不空絹索、白衣觀音、多羅、青頸、阿摩鉢、葉衣、〔下卷本〕不動、安鎮、烏瑟沙麼、降三世、軍荼利、大威德、金剛藥叉、金剛童子、太元、轉法輪、大威德轉法輪、〔下卷末〕北斗法、諸星供通用作法、妙見、毗沙門、吉祥天、四天王惣行、裏裏裂童女、金翅鳥、水天、辯才天、摩利支天、訶利帝母、畢哩孕迦法、咒賊經法、炎摩天、聖天、十二天、令引、泥塔、鎮壇付地、御加持作法、五色系繞作法、帶加持作法、立座作法、御衣木加持作法、沐浴、作法、念誦了禮佛、立願作法。

① 古寫本(仁和寺)

**諸尊卷數** ①(日) Sho-son-kan-zu. ② 1軸 ③ 存 ④ 南北朝時代寫 ⑤(寶龜院)

**諸尊見聞抄** ①(日) Sho-son-kem-hon-shō. ② 四卷 ③ 存 ④ 蒙氣記 ⑤ 寫本(南溪藏)

**諸尊護摩** ①(日) Sho-son-go-ma. ② 四軸 ③ 存 ④ 南北朝時代寫 ⑤(寶龜院)(寶善提院)

**諸尊護摩集** ①(日) Sho-son-go-ma-shū. ② 1軸 ③ 存 ④ 安元三寫 ⑤(寶善提院)

**諸尊護摩抄** ①(日) Sho-son-go-ma-shō. ② 五卷 ③ 存 ④ 守覺親王(久安六一建仁二 A.D. 1150—1202)撰

⑤ 保壽院流の相傳により下記五十尊の護摩法につきて記し、間々小野流の説をも示す、仁和御流、保壽院流に尊重する祕書。目次下の如し。

〔第一〕如來佛頂部、阿彌陀。釋迦。藥師。佛眼。大佛頂。金輪。尊勝。如法尊勝(小野)。光明眞言。後七日(息災增益)。〔第二〕經部、孔雀經。仁王經(廣澤小野)。請雨經(小野)。法華經、理趣經。六字經(廣澤小野)。〔第三〕觀音部、聖觀音。千手。馬頭。十一面。准胝。如意輪。不空絹索。白衣。葉衣。大勢至。〔第四〕菩薩部、延命。普賢延命。五秘密。普賢。金剛薩埵。大勝金剛。五大虛空藏。虛空藏。八字文殊。五字文殊。彌勒。般若菩薩。隨求。地藏。〔第五〕忿怒

名所行發⑩(名書)著者所現⑪ 月年の刊載⑫(書考案書釋註)書末⑬ 說解存内⑭ 代年作者⑮ 著書⑯ 紙存⑰ 數卷⑱(名書)名題⑲ 號略字數

【シ】

部、轉法輪(小野)。愛染王。如法愛染王(小野敬愛)。調伏。不動。安鎮。降三世。軍荼利。大威德。金剛藥叉。烏揭沙摩。

諸尊護摩抄 ①(日) Sho-son-go-ma-sho. ②五卷 ③存 ④良明述 ⑤寶永元

寫(金剛三昧院)慶安三寫(寶善提院)

諸尊次第 ①(日) Sho-son-shi-dai. ②十二卷 ③存 ④元文四刊 ⑤(正大、一四八・二七)

諸尊手印圖 ①(日) Sho-son-shu-in-zu. ②三卷 ③存 ④(參考) 眞言宗全書刊行豫定目錄

諸尊種子集 ①(日) Sho-son-shu-ji-shu. ②(參考) 本朝台祖撰述密部書目

諸尊種子眞言集 ①(日) Sho-son-shu-ji-shin-gon-shu. ②一卷 ③存 ④檉(一)寬文頃? A. D. 1661—1672—)編

⑤寬文一一刊(正大、一四八・三三)(帝國、二三一・四九)寬文一二刊(龍大、二六六・二七〇)(京專)昭和複寫版(立大、A. D. 1917・九)刊本(高大、一・五二)(京大、一・二六・一九)寫本(高大、寄・一・六六)

諸尊宿入寺法語 ①(日) Sho-son-shaku-nyu-ji-ho-go. ②一卷 ③存 ④五山尊宿入寺法語 ⑤(參考) 禪籍目錄

諸尊諸正點訓解 ①(日) Sho-son-sho-sho-ten-kun-ge. ②一册 ③存 ④德川中期寫 ⑤(金剛三昧院)

諸尊諸菩薩法 ①(日) Sho-son-sho-do-satsu-ho. ②一軸 ③存 ④平安朝時代寫 ⑤(寶善提院)

諸尊鈔 ①(日) Sho-son-sho. ②一軸

③存 ④南北朝時代寫 ⑤(寶善提院) 諸尊眞影本誓集 ①(日) Sho-son-shin-ei-hon-ei-shi-dai. ②一卷 ③存 ④我覺 ⑤高野山清淨心院所藏、諸佛像並に兩界法曼荼羅眞影 ⑥刊本(谷大、餘大・三一四九)(高大、一・五四)(帝國、二三三・六一)

諸尊眞言句義 ①(日) Sho-son-shin-gon-ku-gi. ②一卷 ③存 ④空海(寶龜五—承和二A. D. 774—835)述 ⑤(參考) 本朝台祖撰述密部書目

諸尊眞言句義抄 ①(日) Sho-son-shin-gon-ku-gi-sho. ②二卷或三卷 ③存 ④印融(永享七—永正一六A. D. 1435—1509)述 ⑤刊本(谷大、餘大・九一七)(高

大、寄・一・五二)(京專) 諸尊眞言梵字句義 ①(日) Sho-son-shin-gon-ku-gon-jaku-gi. ②一卷 ③存 ④空海(寶龜五—承和二A. D. 774—835)述 ⑤(參考) 諸尊章疏錄第三

諸尊圖印 ①(日) Sho-son-zu-in. ②一卷 ③存 ④刊本(正大、一四八・一六六)

諸尊圖像鈔 ①(日) Sho-son-zu-zo-shu. ②十卷 ③存 ④原本(仁和寺)寫本(帝國、亥・二〇五)

諸尊通行次第 ①(日) Sho-son-tsu-byo-shi-dai. ②一帖 ③存 ④天文二三寫 ⑤(寶龜院)

諸尊通相口訣 ①(日) Sho-son-tsu-kyo-ku-ketsu. ②一帖 ③存 ④寬政元寫 ⑤(寶龜院)

諸尊通用 ①(日) Sho-son-tsu-yo. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

諸尊通用行法略次第 ①(日) Sho-son-tsu-yo-go-byo-ryaku-shi-dai. ②一帖 ③存 ④嘉祿二寫 ⑤(高大、寄・一・六六)

諸尊通用私略口決 ①(日) Sho-son-tsu-yo-shi-ryaku-ku-ketsu. ②一册 ③存 ④寫本(金剛三昧院)

諸尊通用表白 ①(日) Sho-son-tsu-yo-ryo-byaku. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

諸尊通用表白集 ①(日) Sho-son-tsu-yo-ryo-byaku-shu. ②一帖 ③賴瑜(嘉祿二—嘉元二A. D. 1296—1304)考 ④(參考) 諸尊章疏錄第三

諸尊通用略次第 ①(日) Sho-son-tsu-yo-ryaku-shi-dai. ②一帖 ③存 ④南北朝時代寫 ⑤(寶善提院)

諸尊傳授聞書 ①(支) Sho-son-den-ju-ken-gaki. ②一帖 ③存 ④寫本(金剛三昧院)

諸尊道場觀 ①(日) Sho-son-do-jo-kwan. ②一册 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶善提院)

諸尊並重義等目錄 ①(日) Sho-son-narabihi-jō-gō-to-moku-roku. 元瑜方諸尊並重義等目錄 ②一帖 ③存 ④文明一八寫 ⑤(金剛三昧院)

諸尊念誦次第 ①(日) Sho-son-nen-jū-shi-dai. ②四十九帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

諸尊念誦次第目錄 ①(日) Sho-son-nen-jū-shi-dai-moku-roku. ②一帖

③存 ④寂堂(建仁元—正應三A. D. 1201—1290)記 ⑤寬文三寫 ⑥(寶龜院) 諸尊祕事口傳集 ①(日) Sho-son-hi-kwa-den-shū. ②六卷 ③存 ④源運(天永三—治承四A. D. 1112—1180)考 ⑤眞言宗全書刊行豫定目錄

諸尊祕密集 ①(日) Sho-son-himitsu-shū. ②一軸 ③存 ④常喜院流の九五法を集めしもの。嘉祿二寫 ⑤(高大、寄・一・六四)

諸尊表白 ①(日) Sho-son-ryo-byaku-shū. ②一軸 ③存 ④嘉曆元寫 ⑤(寶善提院)

諸尊表白集 ①(日) Sho-son-ryo-byaku-shū. ②一卷 ③存 ④印融(永享七—永正一六A. D. 1435—1519) ⑤元祿一〇刊(高大、寄・一・四九)大正二刊(谷大、餘小・一〇六) ⑥京都六大社

諸尊別行次第等 ①(日) Sho-son-betsu-gyō-shi-dai-tō. ②一括 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶善提院)

諸尊菩薩明王法等 ①(日) Sho-son-do-satsu-myō-ō-hō-tō. ②一結 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶善提院)

諸尊法 ①(日) Sho-son-hō. 諸尊法常喜院流 ②一帖 ③存 ④平安朝中期寫 ⑤(高大、寄・一・六四)

諸尊法 ①(日) Sho-son-hō. 諸尊法西院流 ②一軸 ③存 ④永和二寫 ⑤(高大、寄・一・六六)

諸尊法 ①(日) Sho-son-hō. ②三卷 ③存 ④光寶(治承元—延應元A. D. 1177—

名所行發⑩(名庫書)高藏所現⑪月年の刊寫⑫(書考參書釋註)書末⑬説解卷内⑭代年作者⑮著者⑯缺存⑰數卷⑱(名書)名題⑲略略字數

1238) ①(參考) 眞言宗全書刊行豫定目録

諸尊法 ①(日) Sho-som-bō, ②一卷

存 ①宗淵記 ②嘉永七寫 ③(西教寺)

諸尊法 ①(日) Sho-som-bō, ②七卷

存 ①豪喜記 ②(明德院)

諸尊法 ①(日) Sho-som-bō, 諸尊法

穴太流 ②六卷 ③存 ④覺性 ⑤嘉永六

寫 ①(谷大, 餘大・二九一二) (哲・あ・一・

中・五) (高大, 寄・一・六六)

諸尊法 ①(日) Sho-som-bō, 花嚴院流

諸尊法 ②數結 ③存 ④寫本 (金剛三昧

院)

諸尊法 ①(日) Sho-som-bō, 勸流諸尊

法 ②六結 ③存 ④如來部八帖, 經部十

帖, 菩薩部十二帖, 明王部十帖, 天等部十

九帖, 觀音部十三帖。⑤足利末期寫 ⑥

(金剛三昧院)

諸尊法 ①(日) Sho-som-bō, 金流六十

一法諸尊法 ②十二結 ③存 ④寫本 (金

剛三昧院)

諸尊法 ①(日) Sho-som-bō, 諸尊法黑

拍子 ②三軸 ③存 ④文曆元寫 ⑤(寶

善提院)

諸尊法 ①(日) Sho-som-bō, 不動諸尊

法 ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶

善提院)

諸尊法 ①(日) Sho-som-bō, 保壽院

諸尊法 ②四十三軸 ③存 ④足利時代寫

⑤(寶善提院)

諸尊法薄口決 ①(日) Sho-som-bō-

usu-ku-keisu, ②三帖 ③存 ④永祿八寫

①(金剛三昧院)

諸尊法加持祕府傳 ①(日) Sho-

som-bō-ka-ji-hi-fu-den, ②一帖 ③存

④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

諸尊法肝心鈔 ①(日) Sho-som-bō-

kan-jin-shō, ②八卷 ③存 ④亮淳撰

⑤諸尊法に就きて經軌疏鈔を引きてその

肝心の義を釋す。日次左の如し。

【第一】藥師。阿闍。寶生。阿彌陀。釋迦。

光明眞言。佛眼。【第二】大佛頂。金輪。尊

勝。轉法輪。大勝金剛。【第三】孔雀。仁王。

請雨。水天。止雨。理趣。心經。六字。法

華。【第四】正觀音(並に間十八日與砂法)。

千手。如意輪。馬頭。十一面。准胝(牛黃

加持) 不空絹索。楊柳。白衣。葉衣。青頸。

【第五】五大虛空藏。求聞持。【第六】普賢。

文殊。彌勒。般若。隨求。勢至。五祕密。

地藏。延命。招魂。北斗。屬星。【第七】五

大尊(四魔破事)。降三世。軍荼利。大威德。

轉法輪。金剛夜叉。烏菟沙摩。太元。【第八】

焰摩。大黑。深砂。訶梨帝。童子經法並經。

毘沙門。吉祥。十二天。摩利支。帝釋。施

俄鬼。地天。大白在。以上。

諸尊法記 ①(日) Sho-som-bō-ki,

②七册 ③存 ④寫本(高大, 寄・一・六六)

諸尊法記錄 ①(日) Sho-som-bō-ki-

roku, ②一卷 ③存 ④寬保二寫 ⑤(谷

大, 餘大・九四〇)

諸尊法聞書 ①(日) Sho-som-bō-ki-

ki-gaki, ②一册 ③存 ④宥快(貞和元

一應永二三A.D.1345-1416)述, 全有記

⑤元祿五寫 ⑥(金剛三昧院)

諸尊法口 ①(日) Sho-som-bō-ku,

②一册 ③存 ④寶曆一四寫 ⑤(寶善提

院)

諸尊法口決 ①(日) Sho-som-bō-ku

-ketsu, ②五册 ③存 ④寶曆一秀範寫

⑤(高大, 一・六六)

諸尊法口決 ①(日) Sho-som-bō-ku

-ketsu, 金薄鈔 ②一卷 ③存 ④憲深

(建久三—弘長三A.D.1192-1263)口説,

聖藏記 ⑤金薄鈔の下を見よ。⑥明和七寫

⑦(高大, 一・六六)

諸尊法口決 ①(日) Sho-som-bō-ku

-ketsu, ②五卷或十二卷 ③存 ④果實

(德治元—貞治元A.D.1306-1362)述 ⑤

寫本(京大, 日大未・三六六)

諸尊法口決 ①(日) Sho-som-bō-ku

-ketsu, ②五帖 ③道快(一明德元A.D.

1390—) ④(參考) 諸宗章疏錄第三

諸尊法口訣 ①(日) Sho-som-bō-ku

ketsu, 三寶院薄冊紙初二重口決 ②二卷

③存 ④寬延四寫 ⑤(谷大, 餘大・九六七)

諸尊法口傳 ①(日) Sho-som-bō-ku

-den, ②一册 ③存 ④永通記 ⑤足利末

期寫 ⑥(金剛三昧院)

諸尊法具書 ①(日) Sho-som-bō-ku

-sho, ②八帖 ③存 ④足利, 德川時代寫

⑤(金剛三昧院)

諸尊法見聞錄 ①(日) Sho-som-bō-

ken-mon-roku, ②一册 ③存 ④廣永三

二寫 ⑤(高大, 一・七二)

諸尊法小卷 ①(日) Sho-som-bō-ko

-maki, ②十六軸 ③存 ④德川時代寫

⑤(寶善提院)

諸尊法作法 ①(日) Sho-som-bō-sa

-ho, 諸尊法作法理性院流 ②一軸 ③存

④平安朝時代寫 ⑤(高大, 寄・一・六五)

諸尊法次第 ①(日) Sho-som-bō-shi

-dan, ②三帖 ③存 ④文治四寫 ⑤(寶

善提院)(金剛三昧院)

諸尊法私 ①(日) Sho-som-bō-shi,

②三十二卷 ③存 ④良快抄 ⑤寫本(正

教藏)

諸尊法私記 ①(日) Sho-som-bō-shi

-ki, ②十四軸 ③存 ④鎌倉時代寫 ⑤

(寶善提院)

諸尊法眞言集 ①(日) Sho-som-bō-

shin-gon-shū, ②二册 ③存 ④宗命集

⑤元祿一三寫 ⑥(金剛三昧院)

諸尊法通次第 ①(日) Sho-som-bō-

-tsū-shū-dai, ③存 ④足利, 德川時代寫

⑤(寶龜院)

諸尊法傳授印決 ①(日) Sho-som-

-bō-den-jū-in-keisu, ②三卷 ③(參考)

本朝台祖撰述密部書目

諸尊法傳授師決 ①(日) Sho-som-

-bō-den-jū-shi-keisu, ②三卷 ③存 ④

玄雅記 ⑤貞和三(A.D.1347) ⑥明德藏)

諸尊法日記 ①(日) Sho-som-bō-ni

-ki, ②一軸 ③存 ④南北朝時代寫 ⑤

(寶善提院)

諸尊法目錄 ①(日) Sho-som-bō-

-moku-roku, ②一卷 ③存 ④勝海記 ⑤

寫本(谷大, 餘甲・七〇)

諸尊法目錄 ①(日) Sho-som-bō-

1238) ①(參考) 眞言宗全書刊行豫定目録

moku-roku. ①一卷 ②存 ③亮然記 ④元文四寫 ⑤(南溪藏)

諸尊法目錄

①(日) Sho-son-to-ro-moku-roku. ②四十帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶善提院)

諸尊法目錄

①(日) Sho-son-to-ro-moku-roku. 諸尊法目錄安祥寺流 ②一帖 ③存 ④足利中期寫 ⑤(金剛三昧院)

諸尊法目錄

①(日) Sho-son-to-ro-moku-roku. 諸尊法目錄慈尊流 ②一軸 ③存 ④永徳三寫 ⑤(金剛三昧院)

諸尊法略次第

①(日) Sho-son-to-ro-yaku-shi-dai. ①頼瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304) ②(參考) 諸宗章疏錄第三

諸尊曼荼羅圖

①(日) Sho-son-man-da-ra-zu. ①一卷 ②存 ③永仁五年寫 ④(寶善提院)

諸尊曼荼羅圖像鈔

①(日) Sho-son-man-da-ra-zu-zo-sho. ①一卷 ②存 ③寫本(正大、一四六—一四)

諸尊名香記

①(日) Sho-son-myō-kō-ki. ①一卷 ②存 ③堯恭記

諸尊用心草

①(日) Sho-son-yō-jin-so. ①十帖 ②存 ③延懷撰 ④康和三(A. D. 1101)

諸尊要鈔

①(日) Sho-son-yō-shō. 廟鈔、妙鈔 ②十五卷 ③存、大正七八・二八九 No. 2484+ 醍醐憲深方聖教、國譯密

諸尊要鈔

①(日) Sho-son-yō-shō. 教事相第三 ②實運(長治二—永曆元 A. D. 1105—1160) 說、寬命(一保元三 A. D. 1158—) 記

①諸尊法の口説を記した書である。醍醐の住侶寛命がその師實運の口説を受けて記したもので、その源は金寶鈔にある。寛命は短命なりしを以てその滅後更に實運これを修補したと稱せられる。一傳には實運が松橋の元海について受法せる要旨を寛命に筆記せしめたものと云ひ、一傳には實運が醍醐移住の後勸修寺流を寛命に傳授し、これを筆記せしめたものと云ふ。此書には勸流の傳が多く記してあるから多分後説が事實であらう。三寶院流には金寶鈔、玄祿鈔と共に後三部又は後三部鈔と稱してゐる、廟鈔の名稱は實運が小栗柄常曉の廟側に居住せし故に世人が廟僧都と稱したから、實運の口説を記した意味で此稱を付けたものと云ふ。妙鈔は廟鈔の借名である。

内容目次。卷一、釋迦、阿彌陀、阿闍、藥師、延命、多羅、菩薩、普賢延命。卷二、孔雀經、卷三、仁王經。卷四、心經、理趣經、寶樓閣・六字經、法華。卷五、愛染王・大勝金剛・五大虚空藏、泥塔供養・大佛・頂・光明眞言・無垢淨光陀羅尼。卷六、一髻文殊、五字文殊・六字文殊・八字文殊・一字金輪・佛眼・尊勝。卷七、六觀音。卷八、不空絹索・葉衣・白衣・大白衣・多羅毗俱胝・滅惡趣・圓滿金剛。卷九、五大尊。卷十、北斗・妙見。卷十一、瓊瓔天・五天天供・神供・施餓鬼。卷十二、梵天・帝釋・地天・毘沙門・最勝太子・訶利帝・毗呪經・寶藏天女・護俱利童子・摩利支。卷十三、太元・聖天・十二天・焰摩天。卷十四、護摩要鈔、卷十五、如法尊勝・轉法輪地鎮・鎮壇・後七日・摩御念誦・加持香水。

寶生尊・吉祥天・駄都・寶珠・避蛇・奧砂子。以上。

①平安朝時代寫(高大、寄一・六四) 徳川時代寫(寶龜院) 寶善提院、萬治三寫(高大、寄一・六四) 天和元寫(高大、一・六四) 寫本(京大、日大未・三四三、印哲・n・一〇) 明治四一刊(谷大、餘小・二四) (正大、一四八・一六四) (小田慈舟)

諸尊要鈔

①(日) Sho-son-yō-shō. 國譯諸尊要鈔 ②存、國譯密教事相部第三

諸尊要鈔聞書

①(日) Sho-son-yō-shō-ki-ki. ②一册 ③存 ④文化七寫 ⑤(高大、寄一・六四)

諸尊要鈔口決

①(日) Sho-son-yō-shō-ki-keutsu. ②一册 ③存 ④明治二一

諸尊要鈔傳授記

①(日) Sho-son-yō-shō-dan-jū-ki. ②一册 ③存 ④光

諸尊略行

①(日) Sho-son-ryaku-kyō. 四卷抄 ①良曉作 ②(參考) 本朝

諸尊略行聞事

①(日) Sho-son-ryaku-kyō-ki. ②(參考) 本朝台撰撰述

諸尊略法

①(日) Sho-son-ryaku-hō. ②一軸 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶善提院)

諸尊略要

①(日) Sho-son-ryaku-yō. ②一卷 ③存 ④亮海記 ⑤至徳四寫 ⑥(眞如藏)

諸陀羅尼集句義

①(日) Sho-da-ra-ni-shū-gi. ②一帖 ③存 ④鎌倉時代寫 ⑤(寶善提院)

諸陀羅尼真言

①(日) Sho-da-ra-ni-shin-go. ②一帖 ③存 ④文久二刊 ⑤(寶龜院)

①(寶龜院) ②(寶龜院) ③(寶龜院) ④(寶龜院) ⑤(寶龜院)

諸大師忌日記 ①(日) Sho-dai-ji-kin-nichi-ki. ②一卷 ③圓珍(弘仁五—寬平三 A. D. 814—891) 說寬平四年七八寂記 ④(參考) 本朝台撰撰述密部書目、山家祖

諸大師傳

①(日) Sho-dai-ji-den. ②十七卷 ③(參考) 東城傳燈目錄卷下

諸大地獄果報經

①(日) Sho-dai-ji-ku-ku-ka-hwa-ku-ryō. (支) Chu-tai-ji-ku-ku-choing. ②一卷 ③失譯 ④(參考) 法經錄第三、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第一

諸大事

①(日) Sho-dai-ji. ②一卷 ③或二卷 ④存 ⑤延寶九寫(谷大、餘大・二〇三二、三八三一) 元祿三寫(龍大、二六六五・五四)

諸大事

①(日) Sho-dai-ji. 地藏院方 ②十帖 ③存 ④寬政二寫 ⑤(寶善提院)

諸大事印信

①(日) Sho-dai-ji-in. ②一包 ③存 ④文久年間寫 ⑤(寶善提院)

諸大事印信類

①(日) Sho-dai-ji-in-rui. ②三括 ③存 ④寫本(金剛三昧院)

諸大事聞書及字觀覺悟

①(日) Sho-dai-ji-ki-ki-gaki-a-ji-kwan-kaku-go.

⑥存 ⑦寫本(寶龜院)

諸大事切紙次第 ①(日)Sho-dai-ji-  
kai-ri-kami-shi-dai. ②一册 ③存 ④德

川時代寫 ④(寶善提院)

諸大事口訣 ①(日)Sho-dai-ji-ku-  
katsu. ②一帖 ③存 ④弘安二寫 ⑤

(寶善提院)

諸大事口訣 ①(日)Sho-dai-ji-ku-  
katsu. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一四

八・一二八)

諸大事結目錄 ①(日)Sho-dai-ji-  
katsu-moku-roku. ②十卷 ③存 ④寫本

(正大、一四八・一二九)

諸大事百十三通 ①(日)Sho-dai-  
ji-hyaku-ju-san-tsū. ②一卷 ③存 ④

寫本(正大、一四八・一二七)

諸大事類集 ①(日)Sho-dai-ji-rui-  
shū. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一四

八・一二六)

諸大事類藏 ①(日)Sho-dai-ji-rui-  
zō. ②五卷 ③存 ④寬文一三刊 ⑤(正

大、一四八・一三〇)

諸大宗數珠纂要 ①(日)Sho-dai-  
shū-ju-zu-san-yō. ②一卷 ③存 ④那

須大慶述 ⑤明治二八刊 ⑥(龍大、二〇七

四・一八)(帝國、一〇九・一三)

諸檀方への御書 ①(日)Sho-dam-  
pō-e-no-go-sho. ②三十四篇 ③存、日

蓮聖人全集第六 ④日蓮(貞應元一弘安五

A. D. 1222—1282)記

篇を輯めたものである。詳細は各書の部に  
ついで見よ。

諸檀林並精貞法類 ①(日)Sho-dan-  
rin-narabini-sei-kei-hō-rui. ②一卷 ③

存 ④景山秀雄、關觀朗、井上忍宏著 ⑤

大正七刊 ⑥(立大、B〇六・一二〇)

諸鏡 ①(日)Sho-chin. ②十四帖 ③

存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

諸鈎物 ①(日)Sho-tsūrim-no. ②一

卷 ③存 ④(京專)

諸弟子への御書 ①(日)Sho-de-  
shi-e-no-go-sho. ②四篇 ③存、日蓮聖

人全集第五 ④日蓮、貞應元一弘安五A. D.

1222—1282)記

①日蓮聖人御遺文の中から、特に「與治

郎房祖母「治郎房御返事」同向功德鈔「出

家功德鈔」の四篇を輯めたものである。詳

細は各書の部に ついで見よ。(馬田行啓)

諸天 ①(日)Sho-ten. ②二帖 ③存

④寫本(寶善提院)

諸天阿須倫閻經 ①(日)Sho-ten-a-  
su-rin-to-kyō. (支)Chu-tien-a-hsi-tun

ton-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯

(參考) 出三藏記第四、開元錄第五、第

⑦(參考) 武周錄第一

諸天經 ①(日)Sho-ten-kyō. (支)Chu-  
tien-ching. 諸天事經 ②一卷 ④失譯

(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、仁

壽錄第三、靜泰錄第三、第四、武周錄第一

諸天讚 ①(日)Sho-ten-san. ②一卷

存 ④刊本(龍大、二〇五・五)

諸天讚考證 ①(日)Sho-ten-san-ka-  
shō. ②一卷 ③存 ④貞源錄 ⑤寫本

(無動寺)

諸天地經 ①(日)Sho-ten-ji-kyō. (支)Chu-  
tien-ti-ching. ②一卷 ③缺

東晉竺曇無蘭(太元六一〇A. D. 381

—395)譯 ⑦(參考) 開元錄第一五、貞

元錄第二五

諸天地獄壽量分限 ①(日)Sho-ten-  
ji-goku-ji-ryō-dan-gen. (支)Chu-tien-  
ti-yi-shou-jiang-er-tsi-en. ②一帖 ⑦

(參考) 慈覺大師在唐送進錄、入唐新求聖

教目錄

諸天七曜圖像 ①(日)Sho-ten-shi-  
chi-yō-zau-zō. ②一軸 ③存 ④寫本(金剛

三昧院)

諸天壽經 ①(日)Sho-ten-ju-kyō. (支)Chu-  
tien-shou-ching. ②一卷 ③缺

失譯 ⑦(參考) 出三藏記第四、武周錄第

一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、

第二五

諸天尊法 ①(日)Sho-ten-son-hō. ②十三帖 ③存 ④寫本(高天、奇・一・六六)

諸天傳 ①(日)Sho-ten-den. (支)Chu-  
tien-den. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大)

一-tien-tchuan. 重編諸天傳 ②二卷 ③存

已續二乙・二三・二 ④宋代行靈撰 ⑤重編

諸天傳の下を見よ ⑥寬文元刊 ⑦(谷大、

餘大・一九〇八)(正大、一〇五・四五)龍大、

二〇九九・二七一)(京大、一・二二・五五、

藏・二四・五六)折・な・五・右・三)(帝國、

一〇四・二六、八二・二五〇)(内閣)

諸天傳 ①(日)Sho-ten-den. (支)Chu-  
tien-tchuan. ②一卷 ④宋代思溪神煥

撰 ⑦(參考) 諸宗章疏錄第二

諸天法 ①(日)Sho-ten-hō. ②一軸

存 ⑤鎌倉時代寫 ⑥寶善提院)

諸天問如來境界不思議經 ①(日)Sho-  
tem-nun-nyō-rai-kyō-gai-ta-  
shi-gai-kyō. (支)Chu-tien-wen-jai-ai-  
ching-chieh-pu-si-ti-ching. ②一卷 ⑥

大集經第四卷の抄出 ⑦(參考) 法經錄第

二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一

六、貞元錄第二六

諸傳授聞書 ①(日)Sho-den-jiki-  
ki-faki. ②一册 ③存 ④寬文八寫

(寶龜院)

諸傳集 ①(日)Sho-den-shū. ②一卷

存 ④寫本(正大、一五五二・一一四)

諸堂安像記 ①(日)Sho-dō-an-yō-  
ki. 洞上迦藍諸堂安像記 ②一卷 ③存

瑞方面山(天和三十明和六A. D. 1638—  
1769)述 ④寶曆九刊 ⑤(谷大、餘大・三四

九九)(駒大)

den-gyō. (文) Chin-tē-fu-tien-ching. 福田經、諸福田經 ② 一巻 ③ 存、大正一六・七七七、No. 683、縮印八、卅一・四、北366必、南882過、元372必、明北375彼、清379彼、麗367過、天374必、指338過、法359男、至375能、明南867志、Nj. 383 ④ 西晉代法立、法炬共譯

① 本經は經末に佛自ら『諸德福田經』と名けよと云つてゐる。佛、天帝に對して五德七法を説き、比丘比丘尼天帝等各々往昔の因縁を説くのである。即ち五德とは一に發心して俗を離れ道を懷佩し、二に其の形好を毀り應法服し、三に永く親愛を割いて適英するなく、四に驅命を委棄して衆善に違ひ五に大乘を志求して人を度せんと欲す。この五德を福田と云ふは良美にして早喪無き爲め福を得ること無量なるによる。七法とは一に佛圖僧房空閑を興立し、二に園果浴地樹木清涼、三に常に醫藥を施して衆病を療救し、四に牢堅なる船を造つて人民を濟度し、五に橋梁を安設して羸弱を過度し、六に近道に井を作り渴乏なれば飲むを得しめ、七に閭廁を造作して便利處を施す。この七事の爲めに梵天の福を受くのである。

佛この法門を説き給ふとき座中の聽聰比丘は過去に於て道邊に小精舎を作つて衆僧に止息を給したる福報により天帝釋と爲り轉輪聖王となりたるを曰ひ、波拘藍比丘は衆僧に一呵衆勅を供養したる功德を以て九十一劫の間無病なるを得たるを曰ひ、須陀耶比丘は瓶酪を施して豪傑榮貴なるを得たるを曰ひ、阿難比丘は沐浴を施して無病に

して身金色なるを得たるを曰ひ、奈女は一奈を佛及び衆僧に奉り累劫端正なるを得たるを曰ひ、天帝は珠璣を施して天帝釋となりたるを曰ふ。此に於て佛は園圃を施して今日の功德を得たるを説くのである。(三好鹿雄)

諸日記 ① (日) Sho-ni-ki. ② 一巻 ③ 存 ④ 慶應四寫 ⑤ (龍大、別置) 明治元寫(龍大、別置)明治四寫(龍大、別置) (和語)(大正八三・一〇五 No. 2611)之内、淨上宗全書第九

諸藩藏版書目筆記 ① (日) Sho-han-zō-han-shō-moku-ki. ② 存、解題叢書之内 ③ 廣谷雄太郎編 ④ 大正五刊 ⑤ (龍大、二〇三・一一)

諸秘印信口訣 ① (日) Sho-hin-jin-ketsum. ② 一巻 ③ 存 ④ 寫本(立大、A二〇・一一三)

諸秘記 ① (日) Sho-hi-ki. ② 一帖 ③ 存 ④ 足利時代寫 ⑤ (寶善提院)

諸秘讚 ① (日) Sho-hi-san. ② 一帖 ③ 存

諸秘密伊呂波呼出 ① (日) Sho-hi-mitsu-i-ro-ya-yōbi-dashi. ② 三巻 ③ 存 ④ 覺寶集 ⑤ 寫本(十妙院)

諸秘密儀軌目錄 ① (日) Sho-hi-mitsu-gi-ki-moku-roku. ② 一巻 ③ 存 ④ 亮範記 ⑤ 寶曆二寫 ⑥ (叡山文庫)

諸表白 ① (日) Sho-hyō-byaku. ② 八帖 ③ 存 ④ 印融(永享七—永正一六 A.D. 1433—1519)集 ⑤ 寫本(高大、一・四九)

諸符集 ① (日) Sho-fu-shū. ② 一册 ③ 存 ④ 寫本(哲、あ・一・中・一)

諸部私訣 ① (日) Sho-bu shi-kezu. ② 一巻 ③ 存 ④ 日忠(一萬治三 A.D. 1660)述 ⑤ 元祿二刊 ⑥ 龍大、二六五九、二八(谷大、餘大、一四二)(哲、え・一・右・九)(立大、A二・四八一)(京大、一・二六・二〇)

諸部宗計 ① (日) Sho-bu-shō-kei. ② 存 ③ (京專)

諸部書籍評林 ① (日) Sho-bu-shō-seki-hyō-rin. ② 一巻 ③ 存 ④ 寫本(正大、一〇〇・五四)

諸部捷徑 ① (日) Sho-bu-shō-kei. ② 二巻 ③ 存 ④ 蕨想(寛永一七一元祿八 A.D. 1640—1695)述 ⑤ 寫本(妙法院)

諸部眞言 ① (日) Sho-bu-shin-gon. ② 存、修驗聖典第一諸經要集 ③ 修驗行者の知つておかねばならぬ諸尊の眞言を集めたものである。金胎大日、藥師佛をはじめ諸佛、菩薩、明王、天等の大小咒等百首を出してゐる。(服部如實)

諸部要目 ① (日) Sho-bu-yō-moku. (支) Chu-pu-yō-mu. 陀羅尼門諸部要目、都部陀羅尼目 ② 一巻 ③ 存、大正一八・八九八 No. 903、縮印三、卅一七・二、北1395武、南1402衛、元1390衛、明北1415隸、清1415隸、麗362宅、天1379衛、法1461封、明南1472竟、Nj. 1439 ④ 唐不空(神龍元—大曆九 A.D. 705—774)譯 ⑤ 都部陀羅尼目の下を見よ。

諸諷誦 ① (日) Sho-fu-jū. ② 一括 ③ 存 ④ 足利徳川時代寫 ⑤ (寶龜院)

諸福德經 ① (日) Sho-fukū-toku-kyō. (支) Chu-fu-tē-ching. ② 一巻 ③ 缺 ④ 失譯 ⑤ (參考) 出三藏記第四 武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

諸佛 ① (日) Sho-butsu. 西南院諸佛 ② 一帖 ③ 存 ④ 徳川時代寫 ⑤ (寶龜院)

諸佛感應見好書 ① (日) Sho-butsu-kan-ō-ken-ko-shō. ② 二巻 ③ 存 ④ 壹陽猷山述 ⑤ 享保一刊 ⑥ (龍大、二〇九九・三五)(高大、寄、一・二四)

諸佛經 ① (日) Sho-butsu-kyō. (支) Chu-fō-ching. ② 一巻 ③ 存、大正一四・一一二 No. 439、縮印一〇、卅一五・五、北1198兵、南1210兵、元1204兵、明北861隸、清861隸、麗1202八、天1190兵、明南867履 Nj. 866 ④ 宋施護(一太平興國五 A.D. 980—)譯

① 佛王舍城鷲峯山中に在はす時、目乾連が三昧に入り色究竟天に到りて滿百千劫にして佛出現し給ふとき、歸り、佛にその眞か否かを問ふた。佛之れに對し、色究竟天の言は少知少見である。往昔より幾萬千百の佛出現し各々無數劫を経て發心成佛し入滅し給うて今我れこの世に出現してゐるのであるとて次第を追うて佛名を擧げて之れを競ふ勿れと説いてある。たゞ多佛出世を説いただけの經典である。(櫻部文鏡)

諸佛境界攝眞實經 ① (日) Sho-butsu-kyō. (支) Chu-fō-ching. ② 一巻 ③ 存、大正一四・一一二 No. 439、縮印一〇、卅一五・五、北1198兵、南1210兵、元1204兵、明北861隸、清861隸、麗1202八、天1190兵、明南867履 Nj. 866 ④ 宋施護(一太平興國五 A.D. 980—)譯

butsu-kyō-gai-shō-shū-jitsu-kyō. (支)  
 Chu-to-ching-chieh-she-chen-hih-ching.  
 攝眞實經、眞實經 ②三卷 ③存、大正一  
 八・二七〇No. 865、縮閣二、己續一・二・四  
 ④般若譯 ⑤唐建中二一元和五(A. D. 781  
 —810)

⑥目次、序品第一、出生品第二、大道場品  
 第三、金剛外界品第四、金剛界外供養品第  
 五、修行儀軌品第六、建立道場發願品第七  
 持念品第八、護摩品第九

概要、序品第一、大毘盧遮那如來、大釋  
 宮中に於て十六菩薩、四金剛天女、四金剛  
 天等に圍繞せられて光明を以て無量世界を  
 照し、摩訶瑜伽諸佛秘密心地法門諸佛境界  
 攝眞實經を説かんとする瑞相を現じ玉ふ。

出世品第二、如來、一切諸佛普賢菩薩三摩  
 耶出世金剛薩埵廣大威德三昧に入り、定よ  
 り出で、秘密眞言を説き玉ふ。これより  
 無數の滿月を變成し、滿月は大智金剛を出  
 生し、大智金剛再び如來の身に入り、智慧  
 金剛となり、これより大光鬘を現じ、鬘は  
 變じて五股金剛となり如來の掌中に住す。

五股金剛より光金剛を出生し、口より出で  
 十方世界に遍滿し、普賢菩薩を現じ、菩  
 薩は一切如來より灌頂號金剛手を受く。大  
 道場品第三、金剛手菩薩、金剛界大曼荼羅  
 無上大法を説かんと佛に請ひ、教勅を  
 得て瑜伽行者初入道場の次第を説く。即ち  
 減罪乃至四波羅蜜の印明を説く。金剛外界  
 品第四、十六菩薩の座位次第印明を説く。  
 金剛界外供養品第五、金剛喜戲乃至金剛鈴  
 の十二菩薩の印明、建立道場及び修法の功

徳を説く。修行儀軌品第六、十二天の方位  
 眞言。求道場法、淨地眞言。建立道場法を  
 説く。建立道場發願品第七、利他乃至速證  
 菩提の願を説く。持念品第八、眞言を持習  
 するに數、時、形像の三種あるを説き、次  
 で五部による念珠及びその執持法の差別、  
 所獲の功德による念珠の差別を明す。護摩  
 品第九、内護摩法及び調伏、求財、愛敬、  
 増益の四護摩法及びその功德を明し、最後  
 に灌頂阿闍梨、弟子に灌頂を授くる次第及  
 び灌頂の功德を説く。(坪井徳光)

諸佛境界攝眞實經 ①(日) Sho-  
 butsu-kyō-gai-shō-shū-jitsu-kyō. 國譯諸  
 佛境界攝眞實經 ③存、國譯密教部第二

④神林隆淨譯

諸佛下生經 ①(日) Sho-but-su-ge-  
 sho-gyō. (支) Chu-to-hsia-sheng-ching.

②二十卷 ③疑偽經 ④(參考) 武周錄第  
 一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

諸佛下生大法王經 ①(日) Sho-  
 butsu-ge-shō-dai-hō-gyō. (支) Chu-to-  
 hsia-sheng-ta-fa-wang-ching. ②六十卷

③疑偽經 ④(參考) 內典錄第一〇、開元  
 錄第一八、貞元錄第二八

諸佛護念經 ①(日) Sho-huisu-ge-  
 nen-gyō. (支) Chu-to-hu-nian-ching. ②

十卷 ③缺 ④隋闍那崛多(一開皇五—二  
 O. A. D. 585—600)等譯 ⑤(參考) 武周  
 錄第二二、開元錄第一四、貞元錄第二四

諸佛集會經 ①(日) Sho-huisu-ge-  
 gyō. (支) Chu-to-chi-hui-ching. 諸佛集

會陀羅尼經 ②一卷 ③存、大正二一・八

五八No. 1346、縮成七、己二・五、己續  
 一・三・四、北457羊、南470羊、元433羊、明  
 北401行、清911行、麗823羔、天463羊、法  
 445讀、至645支、明南461行、天473 ④  
 唐提雲般若譯 ⑤永昌元年天授二(A. D.  
 689—691) ⑥平安朝時代寫 ⑦(寶鏡院)

諸佛集會陀羅尼經 ①(日) Sho-  
 butsu-ge-da-ra-ni-kyō. (支) Chu-to-chi-  
 hui-to-lo-ni-ching. (林) Sarva-buddhān-  
 gawā-dhāraṇa (藏傳) (藏) Hphags-pa  
 sabs-tegyas thav's cad-kyi yun-lag dan-  
 idan-pa shes-bya-ba'i gzau. 諸佛集會

經 ②一卷 ③存、大正二一・八五八No.  
 1346、縮成七、己二・五、己續一・三・四、  
 北457羊、南470羊、元463羊、明北401行、  
 清911行、麗823羔、天463羊、法445讀、至  
 645支、明南461行、天473 ④唐提雲般若  
 譯 ⑤永昌元年天授二(A. D. 689—691)

⑥概要、佛、恒河邊に在して護世四天王に  
 圍繞せられ、一切衆生の生老病死の四大苦  
 を除遣する法を説かんとして佛眼を以て十  
 方世界を觀し玉ふに、十方世界の諸佛分明  
 に顯現して俱時に發聲して呪を説き玉ふ。

次で一切諸佛に親近せる密跡金剛、俱に呪  
 を説き、毘沙門天、毘盧勒叉天王、提頭頰吒  
 天王、毘樓博叉天王等は一切衆生擁護の爲  
 めに各一呪を説く。その時、佛、四天王所  
 説の呪は一切諸佛より生じたるものにして  
 此の呪を持する者は息災延命を得べしと説  
 き、次いで一如來壇、二十金剛王壇、四小  
 壇の作壇及び供養法を説き玉ふ。本經は八  
 家祕録には諸佛道法なりと云ふ。又別譯、

施護譯、息除中天陀羅尼經は密跡金剛の陀  
 羅尼及び作壇、供養法は説かず。又譯時は  
 開元錄第九に曰く、天授二年(A. D. 691)於  
 大周東寺譯。(坪井徳光)

諸佛掌中要決 ①(日) Sho-but-su-  
 sho-chū-yō-ketsu. ②一卷 ③存、日本大  
 藏經天台宗顯教章疏第二 ④圓仁述 ⑤貞  
 觀元(A. D. 859)

⑥本書は最澄が入唐して道邃から傳へたも  
 のを、圓仁が最澄に從つて傳授した四教五  
 時一心一念三千三觀の綱要を録したも  
 の。本師釋迦如來は四教五時を説き、高祖智者  
 大師は教觀を釋し教についで化法化儀と分  
 つた。これを四教・五時・觀心の三段となす。

初めに四教を經卷相承と知識所傳とに分  
 つ、經卷相承は一般に知られてゐる化法四  
 教の説明の通りである。此相承を二種に分  
 つ。一は爾前四教相承即ち中論四句偈によ  
 つて慧文が八萬法藏を掌中に收めた龍樹を  
 初祖とする相承。二は法華による相承。こ  
 れは南岳大師が大蘇山で得たもの。釋迦を  
 第一師とし南岳を第二祖とする相承。この  
 相承に得た後、天台大師は本師に遇つて金  
 口から直授した相承がある。これを直授金  
 口知識相承といふ。前者を南岳所傳の四  
 教。後者を智者傳法の四教といふ。第二に五  
 時を明す。これにも經卷相承と知識相承と  
 が分る。經卷相承は常の通りの五時。知識  
 相承は法花會上の五時。この五時大通佛の  
 五時である。第三に觀心を明す。これに三  
 種ある。初めは附法觀。次は託事觀。次は  
 實相觀。實相觀を明す下に「止觀心要」の文

たる「常用の一心三觀」を引用してゐる。文安三年丙丑五月二十六日に幸海が記した奥書を見ると「忠尋私に云く、此の書は慈覺大師の掌中の決である」といふ。口決相承の秘傳の立場で天台宗大綱を述べたものであるが其所述は實に明確整然。口傳秘卷の初期のものか。又禪宗風が現れてゐないから榮西の禪風が叡山に影響しない頃の作である。思ふに圓仁の眞撰ではなく、後人の偽撰であるが藤原末期以降の作であらう。

**諸佛淨穢二土事**

①(日) Sho-butsu jō-e-ni-do-no-koto. ②眞慶(久壽二)建保元.A. D. 1155-1213)述 ③(参考) 淨土依憑經論章疏目錄

**諸佛心印陀羅尼經**

①(日) Sho-bus-shin-in-da-trani-kyō. (支) Chu-to-hsi-tai-yin-to-lo-ni-ching. (梵) Buddha-hrdaya-dharani(藏傳) (藏) Hphags-pa sams-rgyas-kyi shin-po shes-bya-dzhi gzauis-kyi chos-kyi nam-grans. ②一卷 ③存、大正一九・一 No. 919、縮成八、二一五・三、北1143封、南1156封、元1192封、明北820則、清820則、麗1141經、天1138封、法1252高、明南820蓋、Nj. 825 ④宋代法天譯

⑤佛兜率天に在して諸菩薩の爲めに陀羅尼を説きたまふ。名づけて諸佛心印と云ふ。是の陀羅尼を聞く者は宿命智を得、重罪消滅し、乃至千劫輪廻して魔界に生ぜず、速かに無上菩提を證得すと。次に一切諸佛心印陀羅尼を説く。これ伏魔除障の法なり。

本經は佛心印と一切諸佛心印との陀羅尼を説く。然し、同本異譯と云はるゝ玄奘譯、諸佛心陀羅尼經を見るに、これは諸佛心陀羅尼を説くのみなり。兩者の陀羅尼を比較するに玄奘譯は法天譯よりも廣大にして、法天の佛心印は玄奘の陀羅尼の部分と一致し、一切諸佛印は玄奘の陀羅尼の後分と一致するものゝ如し。かくして玄奘譯には法天譯兩呪の何れにも無き句が挿入しあるを見る。諸佛心陀羅尼經參照。(坪井德光)

**諸佛心陀羅尼經**

①(日) Sho-bus-shin-da-trani-kyō. (支) Chu-to-hsin-to-lo-ni-ching. (梵藏名前經參照) 諸佛心經、諸佛心印經、佛心陀羅尼經 ②一卷 ③存、大正一九・一 No. 918、縮開五、二二五、北50蓋、南53蓋、元55蓋、明北53行、清53行、麗43讀、天56蓋、法43讀、至638頁、明南53行、Nj. 489 ④唐玄奘(仁壽二)麟德元.A. D. 602-664)譯

**諸佛世尊如來菩薩尊者神僧名經**

①(日) Sho-butsu-se-son-nyo-rai-to-satsu-son-ji-jin-sō-myō-kyō. (支) Chu-to-shih-tsun-ji-lai-p'u-sa-tsun-che-shen-tō-shih-ming-ching. ②四十卷 ③存、縮籍二一三、二三五七七八 ④明永樂一五(A. D. 1417)四月

⑤本書は望月信亨氏が佛教大年表に、福田行編稿の御製大藏經序跋集の説を引用して

明の太宗永樂十五年四月勅命によつて製したものであると記してゐる如く、諸佛世尊如來菩薩尊者神僧名を稱念することによつて、大明帝國の安泰と無窮の隆昌とを回願し、國民幸福を祈願し、國民をして君上に忠ならしめ、父母に孝し、天地を敬し、祖宗を奉じ、三寶を尊び、神明を敬し、王法に遵ひ、言行を謹み、殺生せず陰陽を行はしめんがために著したものであつて、所謂國民の遵守すべき德行を教示した書である。其の内容は諸佛世尊如來菩薩尊者神僧の名を稱念する儀軌を記したものであつて第一卷より第二十卷までは、諸佛世尊如來菩薩尊者神僧名が記してあり、第二十一卷以下は、弘法門、慶太平、勝妙明具莊嚴、勝妙明、具莊嚴、降福祚、普法界、弘利益等の曲が記されてあり、最後に五供養、懺悔、興善滅惡懺悔、大明神呪、回向、十二因緣呪、吉祥讚等が記してある。

**諸佛世尊如來菩薩尊者名稱歌**

①(日) Sho-butsu-se-son-bo-satsu-son-ji-myō-shō-ka-kyōku. (支) Chu-to-shih-tsun-ji-lai-p'u-sa-tsun-che-ming-ehng-ko-ku. ②四十七卷 ③存、縮籍四一五、二三五九一〇、三六甲・一一二

**太宗御製**

④明永樂一五(A. D. 1417) ⑤本書は明の太祖の御製で、その立場は本書の浩瀚な割合に極めて簡單である。要するに諸佛・世尊・如來・菩薩・尊者の名號を稱念すれば其の功德は甚深廣大で福を得ることとは最も多いといふ建前より出發したるの

で、しかも斯くすることに依つてはじめて眞の開導誘掖が出来るといふ信念に基づいて、佛經に載するところの諸佛・如來・菩薩尊者の名號を取つて、歌曲に仕組み、以て讚歎諷誦に便ならしめた所にある、その列次は左の如くである。卷一は序二編(最初の序には永樂十五年四月十七日といふ日附がある)發四無量心・發願並に佛名稱歌曲(北)篇の第一曲華嚴海會之曲。卷二・卷三・卷四・卷五は佛名稱歌曲篇の引續きで、たゞ卷五の終りに世尊名稱歌曲(北)としての隆福祚之曲外二曲。卷六から卷十までは如來名稱歌曲(北)篇。卷十一・卷十二は菩薩名稱歌曲(北)篇。卷十三は菩薩名稱歌曲(北)十數曲並に尊者名稱歌曲(北)十曲。卷十四・卷十五は佛名稱歌曲(南)篇。卷十六・卷十七は如來名稱歌曲(南)篇。卷十八は菩薩名稱歌曲(南)篇並に尊者名稱歌曲(南)篇。卷十九から卷二十八までは普法界之曲。卷二十九から卷四十五までは弘利益之曲・廣善緣之曲・利一切之曲・普應利之曲・朗混融之曲。卷四十六は五供養・懺悔・興善滅惡懺悔・大明神呪回向・五供養・發願頌・十二因緣呪・吉祥賛。卷四十七は文並に御製後序二編前者は永樂十五年四月十七日、後者は永樂十八年正月初一日の日附になつてゐる。

序に縮刷藏經本・已藏經本に依ると「諸佛世尊如來菩薩尊者名稱歌曲」は五十卷(或は五十一卷)本の體裁になつてゐるが、卷四十八以下は所謂「諸佛世尊如來菩薩尊者名稱歌曲感應篇」で、本書の補遺と見るのが



釋當である。感應篇にはそれ／＼序があるから著年代も自ら判然たるものがある。

①永樂一五刊 ②(谷大、別一、一三)

(前田聰瑞)

諸佛道見聞集

①(日)Sho-butsu-to-ken-mon-shu. ②(参考) 淨土真宗聖教目録

諸佛要集經

①(日)Sho-butsu-yo-ik-kyo. (支)Chu-to-yao-chi-ching. (梵)Buddha-samgrh(藏傳) Hphags-pa sans-rgya hgro-ba shes-bya-ba theg-pa chen-pohi mdo. ②二卷 ③存、大正一七・十五No. 810、縮黃一〇、正一・四、北386頁、南397頁、元393頁、明北397頁、清397頁、麗385頁、天393頁、指355頁、至393頁、明南389頁、正401 ④竺法護譯

⑤西晉泰始二—建興元(A. D. 266—313)

⑥佛王舍城帝釋窟洞にあり、比丘等聽法に厭き法教心耳に入らざるを見て自ら他方佛土に遊び諸佛と共に諸佛の要集を講せんと欲し、東方普光國天王如來の處に諸佛の集會せるを觀じ彼處に至らんと欲し、燕坐中に四衆訪ひ來たらば此の如く説けよと阿難に教へおきて三昧に入り、普光國に詣りたまふ。こゝに於て同様に十方諸國より來現せられた諸佛と共に天王如來を中心として諸佛の要集を講説せらる。諸佛の要集とは、

眞諦の如く諸法を還禁するので、(1)諸法空、(2)諸法常住、(3)初發菩提心、(4)六度無極、(5)菩薩十地所入處、(6)佛不可得の義であると詳説したまふ。時に文殊菩薩もこゝに詣らんと欲して彌勒及び辯積

を誘うたが皆同意せず……(以上上卷)……文殊獨り娑婆よりの普光土天王佛の所に至る。天王佛、文殊を鐵圍山上に退立せしむ。而も天王佛の右に離意女あり、文殊不

飛をいなく、以下文殊と光明幢天子、天王如來、葉諸陰菩薩、離意女との間に種々問答あり、恰も維摩經に於ける問疾者と維摩、又舍利弗と天女との對應説話に髣髴たる記述あり、終に佛彌勒に對して此の經の流通を附屬して一經を經じてある。此の經梵本を傳へてゐないが、西藏譯あり、題名は上記の如くである。大谷廿殊爾勒同目錄No. 894を参照せよ。

諸佛要集經

①(日)Sho-butsu-yo-ik-kyo. (支)Chu-to-yao-chi-ching. ②二卷 ③缺 ④西晉講道眞(一太康元—永嘉六A. D. 280—312)譯 ⑤第二譯 ⑥(參考)開元錄第一四、貞元錄第二四

諸佛要集經

①(日)Sho-butsu-yo-ik-kyo. (支)Chu-to-yao-chi-ching. ②一巻 ③疑偽經 ④(參考)仁壽錄第四、靜泰錄第四

諸菩薩

①(日)Sho-bo-satsu. ②一軸 ③存、鎌倉時代寫 ④(寶善提院)

諸菩薩求佛本業經

①(日)Sho-bo-satsu-pu-sa-chi-to-pen-yeh-ching. (支)Chu-pu-sa-chi-to-pen-yeh-ching. ②一巻 ③存、大正一〇・四五No. 282、縮天一〇、正八・四、北66頁、南96頁、元94頁、明北103頁、清103頁、麗94頁、天96頁、法93頁、至96頁、明南95通、正109 ④辨道眞譯 ⑤西晉太

康元—永嘉六(A. D. 280—312) ①吳支謙譯諸菩薩本業經第二願行品の全と第三十地品初少分の別傳である。(菩薩本業經參照)

諸菩薩部祕要

①(日)Sho-bo-satsu-pu-hi-yo. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫

諸菩薩本業經

①(日)Sho-bo-satsu-pu-sa-chi-to-pen-yeh-ching. (支)Chu-pu-sa-chi-to-pen-yeh-ching. ②一巻 ③存、大正一〇・四五No. 282、縮天一〇、正八・四、北66頁、南96頁、元94頁、明北103頁、清103頁、麗94頁、天96頁、法93頁、至96頁、明南95通、正109 ④辨道眞譯 ⑤西晉太

諸菩薩明王法

①(日)Sho-bo-satsu-myō-ō-hō. ②一結 ③存 ④徳川時代寫

諸菩薩明王法

①(日)Sho-bo-satsu-myō-ō-hō. ②一結 ③存 ④徳川時代寫

諸菩薩明王法

①(日)Sho-bo-satsu-myō-ō-hō. ②一結 ③存 ④徳川時代寫

康元—永嘉六(A. D. 280—312) ①吳支謙譯諸菩薩本業經第二願行品の全と第三十地品初少分の別傳である。(菩薩本業經參照)

②(近藤隆晃)

諸菩薩部祕要

①(日)Sho-bo-satsu-pu-hi-yo. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫

諸菩薩本業經

①(日)Sho-bo-satsu-pu-sa-chi-to-pen-yeh-ching. ②一巻 ③缺 ④(參考) 仁壽錄第五、靜泰錄第五

諸菩薩明王法

①(日)Sho-bo-satsu-myō-ō-hō. ②一結 ③存 ④徳川時代寫

諸菩薩明王法

①(日)Sho-bo-satsu-myō-ō-hō. ②一結 ③存 ④徳川時代寫

諸菩薩明王法

①(日)Sho-bo-satsu-myō-ō-hō. ②一結 ③存 ④徳川時代寫

諸菩薩明王法

①(日)Sho-bo-satsu-myō-ō-hō. ②一結 ③存 ④徳川時代寫

諸菩薩明王法

①(日)Sho-bo-satsu-myō-ō-hō. ②一結 ③存 ④徳川時代寫

諸菩薩明王法

①(日)Sho-bo-satsu-myō-ō-hō. ②一結 ③存 ④徳川時代寫

諸菩薩明王法

①(日)Sho-bo-satsu-myō-ō-hō. ②一結 ③存 ④徳川時代寫

諸方門人參問語錄 ①(日)Sho-ho-mon-nin-sanmon-go-roku. (支)Chu-lang-mén-tên-san-wen-yü-lu. ②一巻

③存、正續二・五・五 ④唐代大珠慧海撰

⑤江西馬祖道一禪師の法嗣である越州大雲寺大珠慧海禪師が、門人の參問に答へた語要である。慧海は、建州(福建建寧)の人、

越州(浙江紹興府)大雲寺道智に受業し、江西の馬祖に參じて大悟し、待すること六年にして受業師道智の老衰に依つて大雲寺に歸り、晦迹藏用し、頓悟入道要門論一巻を著したのを、師姪の玄晏が竊に馬祖に呈示した。馬祖は此を閲して「越州に大珠圓明なるものあり、光透自在にして遮障の處無し」と讚嘆したのと、慧海の姓が朱氏であつたので、時人大珠を以て號した。平生「我れ禪を會せず並に一法の人に示す可き無し」と謂つて居たが、以上の如き慧海の道行を慕つて、參問の學人は極めて多數に上つたもので、本書に於ては此等諸方より來問せし學人は、學侶、行者、三藏法師、道流、韞光大德、道光座主、志座主、維摩座主、源律師、慧座主、宿德十餘人、法師、僧、客などと多彩なるものがあり、其の取扱はれた問答も多様である。即ち、佛、即心即佛、教と禪、眞如、世間と法、生死、大虛、乃至は誦經、念佛、言語是心、定慧などに及んで居る。

浙江會稽道四明翠山の大中理の法嗣である妙叶和尚は、禪餘慧海禪師の語録を閲して證入する所あり、頓悟入道要門論に本書を合して二巻とし、捐資鏤板したもので、

諸方相傳 ①(日)Sho-ho-so-den. ②一軸 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

諸方傳授大事

①(日)Sho-ho-den-jū-dai-ji. ②一册 ③存 ④徳川時代寫

諸方答書

①(日)Sho-ho-to-sho. ②存、黒谷上人語燈燧(漢語)(大正八三・一〇五No. 2611)之内、淨土宗全書第九 ③(參考) 淨土真宗教典志第一

諸方佛名功德經

①(日)Sho-ho-butsu-myō-ku-dok-kyō. (支)Chu-fang-to-ning-kuang-te-ching. 諸方佛名經 ②一巻 ③缺 ④西晉竺法護(一太始二—建興元A. D. 266—313)譯 ⑤(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

諸方佛名功德經

①(日)Sho-ho-butsu-myō-ku-dok-kyō. (支)Chu-fang-to-ning-kuang-te-ching. 諸方佛名經 ②一巻 ③缺 ④西晉竺法護(一太始二—建興元A. D. 266—313)譯 ⑤(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

諸方佛名功德經

①(日)Sho-ho-butsu-myō-ku-dok-kyō. (支)Chu-fang-to-ning-kuang-te-ching. 諸方佛名經 ②一巻 ③缺 ④西晉竺法護(一太始二—建興元A. D. 266—313)譯 ⑤(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

諸方佛名功德經

①(日)Sho-ho-butsu-myō-ku-dok-kyō. (支)Chu-fang-to-ning-kuang-te-ching. 諸方佛名經 ②一巻 ③缺 ④西晉竺法護(一太始二—建興元A. D. 266—313)譯 ⑤(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

諸方佛名功德經

①(日)Sho-ho-butsu-myō-ku-dok-kyō. (支)Chu-fang-to-ning-kuang-te-ching. 諸方佛名經 ②一巻 ③缺 ④西晉竺法護(一太始二—建興元A. D. 266—313)譯 ⑤(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

明洪武六年正月十日笑隱大訥禪師の法嗣である浙江寧波府阿育王山廣利禪寺の約之崇裕禪師(明洪武十一年壽七十五歲寂)の序を請ひ、同六年九月望日、前龍河の萬金和尚の後序を得、同七年(A. D. 1374)三月二十日自序して行つたものである。後、吳江居士吳瑞徵が亡父母の冥福の爲に、此の要門論、參問語錄の二卷を施賫し、端學堯、端學舜が上刻し、明萬曆二十五年(A. D. 1597)六月浙江餘杭縣徑山興聖萬壽禪寺に留板して行つたもので、續藏本には、此等の序跋刊記をも採録して居る。尙ほ卷末に聯燈會要に出て居る、達磨大師作と稱せられて居る少室六門中の安心法門を附してある。

⑤正保三刊 ⑥(駒大)(京大、藏、一七ト・一)

諸方勇王經

①(日) Sho-to-yū-ō-kyō. (支) Chu-lang-yung-wang-ching. ②一卷 ③缺 ④後漢支婁迦讖(一建和元—中平三A. D. 147—186—)譯 ⑤第一譯 ⑥【參考】開元錄第一四、貞元錄第二四

諸方輪番心得之條々

①(日) Sho-to-rim-lan-kokoro-e-no-jō-jō. ②一卷 ③存 ④寂龍誌 ⑤刊本(谷大、宗小・二〇六)

諸法會儀則

①(日) Sho-hō-e-gi-soku. 密宗諸法會儀則 ②三卷 ③存 ④南山靈瑞撰 ⑤安永二刊 ⑥(高大、寄・一・六三)(京專)(金剛三昧院)

諸法緣起通論八題

①(日) Sho-hō-an-gi-ishi-ron-hachi-dai. ②一卷 ③存

④憲瑞述 ⑤寫本(谷大)

諸法儀

①(日) Sho-hō-gi. ②一册 ③存 ④享保三寫 ⑤(寶菩提院) 諸法經 ①(日) Sho-hō-kyō. (支) Chu-fa-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤【參考】出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

諸法最上王經

①(日) Sho-hō-shō-jō-kyō. (支) Chu-fa-shi-shang-wang-ching. ②一卷 ③存、大正一七・八五九ノ. 84、縮宙八、卅二・六、北八景、南八景、元八景、明北五〇三行、清五〇三行、麗七五半、天七九景、指七五半、法七五半、至十悲、明南九維、Nj. 507 ④閻那崛多譯 ⑤隋開皇五—二〇(A. D. 585—600)

⑥本經の經題については經中に佛の言葉として「諸法最上王經」と二度までも云つてゐる。又閻利弗との問答中本經所説の法門を以て最勝とし最上とし無上とし或は諸法上王とせるは蓋し經題の淵源する所である。出家したばかりの一比丘の疑問に答へて菩薩の布施を受けるの所以を説き、菩薩及び發菩提心の人には如何なる布施をなすとも報ずるに足らざる旨を明してゐる。王舍竹林迦蘭陀精舎に於ての説法中、出家して未だ久しからず本日具足戒を受くべき一比丘が、云何んが淨施を得るやとの質問を發したるも、佛は、決して虚しく棄落食を受くるのではないと云ひ、僧中僧業僧利について述べたるのみで、比丘が三請すらも答へられない。佛の眉間大光明を見て三千

大千世界の天人は竹林迦蘭陀精舎に集合する。それを見て佛は微笑されたので舍利弗は偈を以てこの神變の因由をきき、佛亦偈を以て新比丘の質問あり、それに對する説法をきかんとしての集會だと答へる。舍利弗もそれをきかんと三請し、佛は遂に、菩薩摩訶薩は初發心より乃至成道まで畢竟して常に淨施であり、菩薩摩訶薩は諸の衆生に於て是れ無上福田である。故に若し衆生が諸の樂具を以て菩薩に供養するも猶菩薩の恩に報ずることとは出来ないとい説く。舍利弗領解して、阿那婆阻鉢多羅王は四大河を出して四大海を滿じ大潤を蒙らしめ三怖を免ずるとの譬喩を説き、佛は「是の如し」とて菩薩は布施愛語利行同事の四攝事を以て衆生を攝取し、諸佛の偏智は菩薩より生じ、三有はよく諸法を生ず、三有所出の諸供養を以て菩薩に供養するは、宛も多くの貧人が一人の富人より百千無量の諸財寶を與へられ、一貧人が一分の水精を以てこの恩に報ひんとしてもそれは不可能なると同じである。故に恩に報ぜんと思ふならば阿耨多羅三藐三菩提心を發すべきである。そうすれば始めて先恩を報ずることが出来るのであると、次いで二種の富伽羅を説き、本經を以て廣く他人に説く者の功德、本經を受持讀誦する者の功德の最多最勝なるを説き、會中の者菩提心を發すを見て佛は笑ませられるのである。本經と『養字函一切法高王經』とは同本異譯である。

諸法事法則

①(日) Sho-hō-jihō-soku. ②一卷 ③存 ④往古仁和寺に於ける法會儀則に關する集録。

諸法實相觀經

①(日) Sho-hō-jisō-kwan-kyō. (支) Chu-fa-shih-shi-ang-kwan-ching. ②一卷 ③思惟略要法の抄出。④【參考】開元錄第一六、貞元錄第二六

諸法實相鈔

①(日) Sho-hō-jishō-sō. ②一卷 ③存、日蓮聖人御遺文之内、日本各宗祖師遺文之内 ④日蓮(貞應元—弘安五A. D. 1223—1283)述 ⑤安永一〇(A. D. 1273)

⑥日蓮が佐渡一ノ谷から弟子最蓮房日淨の問に答へた書。最蓮房が法華經方便品の諸法實相十如の文意を問ふたに對し、これは十界依正の當體が妙法蓮華經の當體當相であるといふこととで、こゝに本門壽量品の事の一念三千の法門がある。故に、妙法蓮華經が本佛で諸佛は述佛である。諸法即妙法、實相即妙法で、十界が十界の實の相を見せたのが諸法實相であり、妙法蓮華經の當體であると答へ、一轉して斯かる最勝の妙法蓮華經を末法に弘めるべく日蓮は本化地涌の菩薩の一人として出現したところ、果して三類の

敵人出で、流罪死罪に及んだ。されば日蓮と同意の弟子檀那は矢張り地誦の菩薩の内であらうと説き、更に進んで末法に法華經の弘まる事は「大地を的とするなるべし」。妙法は末法の衆生を佛にせんとする經である。此の經を弘める者が吾れであると思へば「流人なれども喜悅ばかりなし、うれしきにもなみだ、つらきにもなみだなり、涙は善惡に通ずるものなり」と法悦を表はし、最後に貴邊も折角法華經の信に入つたのであるから、閻浮提第一の本尊たる妙法蓮華經本佛を信じ、強盛の信心によつて三佛の守護を受けよ、と勸信し、左の如き有名な末尾を以て結んである。

「行學の二道をはげみ候べし、行學たへなば佛法はあるべからず、我もいたし人をも教化候へ、行學は信心よりこるべく候、力あらば一文一句なりともかたらせ給ふべし、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、恐恐謹言。」

尙ほ本書には本文にも「此文には日蓮が大事の法門どもかきて候ぞ、よくよく見ほどかせ給へ意得させ給へし」とあり、更に「道申」として再び「日蓮が相承の法門等前にかき進らせ候き。ことに此文には大事の事どもしるしてまいらせ候ぞ、不思議なる契約なるか。(中略)總じて日蓮が身に當ての法門わたしまいらせ候ぞ。(中略)日蓮が已證の法門等かきつけて候ぞ」とある。以て本書がいかに重大な信境を語つたものであるかを推知すべきである。(馬田行啓)

諸法集要經

○(日)Sho-ho-jū-yō

Byō (支) Chu-ri-chi-yō-ching. ②十卷  
 ③存、大正一七・四五八No. 738、縮藏九、  
 ④正續一・二・一、麗503版 ⑤宋代日稱等譯  
 ⑥本經は正法念處廣大契經の海より集成したもので十卷三十六品は總て伽陀を以て述べられてある。

【第一卷】 伏除煩惱品第一。六波羅蜜を樂ひ四無量心を以て煩惱を伏除し、三塗に墮ちざれと教ふ。說法品第二。若し人善く法を説いて開解せしめる時は、永く癡纏縛を斷ずる。是の法は世俗所説のものではなくて、これを聞く時は諸有の海を渡り、智者あつて此に於て勤めて修習すれば四種の福田がある。厭離自身品第三。此の身は衆病の依止する所、不淨常に盈流して實に罪惡の器である。是の身は厭離すべきもので、諸界の所依たるを覺了して速かに解脱を得ねばならない。遠離不善品第四。愚癡の人は常に知覺せずして業風の飄すまゝになつて三界に輪轉してゐる。一たび五欲を棄捨すれば最上安隱を得、諸佛聖人の如く貪なく憂惱なきを得るのであるから一切の不善は捨てねばならぬ。無常品第五。何人と雖も死を勾攝することは出来ない。生あつて滅なきものは無く、三界は凡て無常である。【第二卷】 無常品第五之餘。徒らに快樂を貪著することなく、眞實法を顯示して諸の罪因を造らず、永く險道を離るゝやう心掛くべきである。不放逸品第六。放逸は第一苦の根本である。無數の諸天人は皆放逸の爲めに地獄に墮ちる。不放逸は友の如くで、これに親近すれば常に饒益を得る。

【第三卷】 不放逸品第六之餘。放逸は毒苗の如く諸の懈怠を出生する。放逸は極苦であり、不放逸は最樂である。訶厭五欲品第七。諸欲に著する時は無邊の苦を受くる。故に常に解脱を樂つて欲を遠離し不善法を破壊せよ。然らば日の黑暗を除くが如きを得る。【第四卷】 訶厭五欲品第七之餘。欲を捨て眞志を除き、癡等の過失を離る時、眞當果を證し諸天に敬奉せらる。離愛品第八。愛の火は地獄の劫火の如きものである。石地獄の衆生は業盡きて必ず出るが愛は休息することがない。常に之に遠ざかるものは菩提道に近づくのである。離欲邪行品第九。女人は罪の本である。女人を見て貪を生ずる時必ず燒害を被る。清淨の樂を求めんには女を遠離しなければならぬ。離酒過失品第十。酒は毒である。之を遠離せねばならない。飲酒を樂むものは善法を壞し、酒に近づくものは明慧を生じない。遠離すれば最上安隱に住し不滅處に至るを得る。【第五卷】 治心品第十一。身は無常である。酒や女人を憤み放逸を生じない様にする時は心の如く自在を得る。離惡語言品第十二。智者は惡言を離れて常に正語を發する。惡言を樂む者は常に惡趣に墮ち、虚妄の言を發すれば眞實法を捨て至るに至る。智者は妄言を離れて諸佛に稱讃せらる。【第六卷】 福非福業品第十三。所造の諸業に福業非福業があるが、何れも自ら造つて自ら受けるのである。即ち惡業を造れば苦報を受ける。善惡の業に出つて輪廻に隨つて流轉するのである。教示衆生品

第十四。煩惱の冤賊は三有に通く逼迫してゐる。若し佛教を知つて衆生の爲めに演説し常に純淨の行を修する時は梵天に生ずることを得る。說罪品第十五。衆生が諸の罪を造れば皆苦報を受くるのであるから遠離せねばならない。【第七卷】 說罪品之餘。罪福の相を明了せる者は具智者である。地獄品第十六。衆の惡業を造作すると地獄に墮ちる。その地獄には八地獄がある。餓鬼品第十七。施を行じない者は餓鬼趣に墮ちて飢渴に困ずる。畜生品第十八。畜生の報とは牽縛捶打である。施戒の因を修めぬものは畜生の報を受く。飢乏業報品第十九。飲食を求めぬのに自身より火を起して罪の衆生を燒き百劫中を経て食物がない。世の火は熱いがこの飢火はそれに過ぎる。是の如き業報を了知して心に怖畏を生じ樂うて施戒を修せよ。【第八卷】 捨離憍怠品第二十。劣慧の故に懈怠を生ずるのである。善知識を遠離し惡友に習近して破法の因縁を爲す。若し精進を發起すれば正念に安住することを得る。悲愍有情品第二十一。心に常に憍愍を生じて施戒忍慈を以て無垢智を修成する様ぞ知せよ。布施品第二十二。淨施に由つて十二種の功德がある。この勝報を感じて淨戒を奉持し三有の苦を脱するを得よ。持戒品第二十三。戒は最勝の財にて日光の普く照らす如くである。命終の時には戒のみ伴侶となる。忍辱品第二十四。忍行を修する時は世に恭敬せられる。故に一心に堅固に修習し吉祥安樂を得よ。等しく諸の有情を見ること世の慈母の如くなる

諸

に至るであろう。精進品第二十五。精進の心を發起するは第一最勝であつて、淨智現前するを得、常に正念を生じ、老死を遠離して眞常果を證することを得る。禪定品第二十六。定を修すると常一心に清淨意樂を生ずる。心を一境性に住せしむると生死の流を超えて不滅處に至るを得る。勝慧品第二十七。慧は金剛の如くであつて。諸の煩惱を摧壞して大智車に乗せしめる。〔第九卷〕寂靜品第二十八。諸の煩惱を盡せば最上樂を得る。これを寂靜道と云ふのである。諸の放逸を離れて菩提に趣むかんと求め、最上寂靜を得よ。聖道品第二十九。若し人四諦に於て智を以て善く觀察すれば諸の輪廻を解脱し無爲の彼岸に趣くのである。善く四諦の法を解して施等の行を修し最上安隱に住せよ。教誡比丘品第三十。意に空寂を樂うて専ら諸の禪定を修し、善く安隱道に住さねばならない。福行品第三十一。福業を營めば殊勝の報を得る。〔第十卷〕生天品第三十二。衆の善を修するものは清淨心質直にして天中に生ずることを得る。快樂品第三十三。三有の快樂を智者は愛樂せず、最上寂靜樂を樂うのである。善知識品第三十四。惡知識に近づくとか苦惱を生ず、善知識に近づけば供養稱讚を得る。王者治國品第三十五。王が正法を行じ臣は悉く清淨なる時、善く諸根を調伏し諸天に守護せらる。稱讚功德品第三十六。佛世尊の相好、諸の功德を稱讚すれば最上吉祥を獲て諸の恐怖を離れることが出来る。

以上總て二千六百八十四頌は六波羅蜜四

無量心八聖道等について述ぶる所を網羅してあるもので、佛教思想の總ての内容を此處に集めて大成した觀がある。觀無畏尊者の集むる所である。(三好鹿雄)

諸法分別抄

①(日) Sho-to-hon-tsu-shu. ②一卷 ③存、大正七七・七一四

④賴實口説、了賢記

⑤眞言宗に唱ふる六大體大の義を詳説したもので、東寺の學匠賴實の學説を知るに重要な書である。身心本元事・六大事・五大形色因縁生事・五大本末分別事・五大通名輪事・五大五色中何爲本事・法性内五大世間外五大分別事・五大重立離散本末事・五大相剋相生事・五大假質分別事・五大重立次第事・諸法能成六大一異事・五字門四曼六大分別事・五字有點無點事・色心法體形色同異事の十五條に分ちて論じてある。然るにこの中、身心本元事の一條は、身心本元鈔と題して別行せられ、身心二法何れが諸法の本元なるかを論じて、密教は身を元とすることを述べ、四重祕釋を設けて色心二法の勝劣を判じてある。而して別行本は法性内五大世間外五大分別事の一條を末尾に附してある。次に六大事以下の十四條は體大東開記又は六大奧義章の名の下に別行せられ、地水火風空の五大と第六識大との本質を論じ、兩者の關係を説き、此六大を諸法の本體とすることを詳述してある。刊本の六大奧義章は文に錯亂があつて意の通じ難き所があるが、この諸法分別抄はかゝる錯亂はない。

作者につき身心本元鈔は賴實の記、六大

奧義章は賴實の口説を弟子空覺上人了賢が記したものとして稱せられてゐる。諸法分別抄は或は此兩本を後人が合綴せしものかも知れない。

諸法本經

①(日) Sho-to-hon-gyo. (支) Chu-to-pen-ching. (支) A. V. 83. X. 58. Maia. ②一卷 ③存、大正一・八五五

④縮尺八、二一四・一、北693止、南

175止、元699止、明北386條、清386條、麗

973容、天993止、至999容、明南76・25、

590 ⑤支譯譯 ⑥吳黃武二一建興二(A. D. 223—253)

⑦この經典は中阿含一一三經諸法本經の異譯單行經であり、巴利にはA. V. 83. A. X. 58の二經が相當してゐる。左の表に示すものが經典の内容になつてゐて、四本は左のやうに出没してゐる。

欲爲本(一)	思想爲有(四)	更爲智(二)	痛爲同趣(三)	定爲前(六)	三昧爲第一(六)	念爲上首(五)	念爲致有(四)	慧爲上(七)	智慧爲最上(七)	解脫爲眞(八)	解脫爲牢固(八)	涅槃爲訖(九)	涅槃爲畢竟(九)
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上

この表に依つても明かであるやうにこの經典は最も中阿含に一致し、且つ經典の下半は中阿含と同様に巴利にないものを載せてゐる。

諸法本經

①(日) Sho-to-hon-gyo. (支) Chu-to-pen-ching. ②一卷 ③失譯

(參考) 出三藏記第三

諸法本不生顯密同異儀

①(日) Sho-to-hon-fu-sho-kem-nisu-dō-igi. ②一卷 ③存

④逆做(慶長一九一元祿六

A. D. 1614—1693) 逆 ⑤元祿六刊 ⑥正

諸法本無經

①(日) Sho-to-hon-mu-kyō. (支) Chu-to-pen-wu-ching. (梵) Sa-

rva-dharmāpratyut-nirdesa. (引用) (藏) Hphags-pa rnos thams-cad rbyun-ba med-par bstan-pa shes-bya-ba theg-pa che-pohi ndo. ②三卷 ③存、大正一五・七六一No. 651、縮字二、二九・八、北171常、南171常、元1975常、明北195、清

159五、麗170五、元171常、指163五、法167五、至349男、明南382傷、Nj. 163 ① 隋開那崛多譯 ② 開皇五—二〇(A. D. 585-630) ③ 諸法無行經と同名異譯。同項を参照せよ。

諸法無行經

①(日)Sho-hō-mu-gyō-kyō.(支)Chu-fa-wu-hsing-ching.(梵藏名、前經參照) ②二卷 ③存、大正一五・七五〇No. 630、縮字二、凡九、八、北170常、南170常、元166常、明北160常、清160常、麗69五、天170常、法165五、至248男、明南381傷、Nj. 164 ④鳩摩羅什譯 ⑤姚秦弘始三—四(A. D. 402—412)

⑥本行は般若の空思想的立場に於いて、殆んど佛教の實踐徳目を否定し、やがて大乘の窮極たる諸法の中道實相を説き示すのである。次にその一端を挙げよう。

師子遊步菩薩が世尊に向つて、一切法一相寂滅の法、即ち邪見諸愛慢、嫉妬瞋恚性。云何即是道。云何涅槃樂相。與世法無異。云何此五蓋。而等於菩提。云何是菩提。即同諸業性。是法是非法。云何同一相。無戒無忍辱。亦無有毀戒。是性佛道一。諸法無生滅。是三寶一相。無來亦無去。無滅無往來。無學無羅漢。亦無辟支佛。亦無求菩提。無人無地獄(以上抄出)等の法門を説き給んことを請ふ、世尊は此の請に應じて、如斯空見無相見無作見無生見無所有見無取相見佛見菩薩見等を聞いて、新發意の菩薩がそのために善業を斷じ、邪道に陥ることなき様願慮しつつ次の如く説かれる。衆生即菩提。菩提即衆生。菩提衆生一。知是爲

世尊。若人求菩提。則無有菩提。是人遠菩提。譬如天與地。戒非戒一相。知是爲導師。戒毀戒如夢。凡夫分別二。實無戒毀戒。知是爲導師。凡夫著名字。不知語言性。能入一相門。則得無上忍(抄出)次にこの一相の法相を淨威儀菩薩に囑累する。この淨威儀菩薩は衆生教化のために、必ずしも形式的戒律に囚はれることなく衆落を行乞した。有威儀比丘は淨威儀菩薩の毀戒を批難した爲めに、持戒清淨に四諦四無色定及び五神通を得たる身が却つて阿鼻地獄に墮ちたことを示し、菩薩の行爲は唯衆生教化あるのみで、持戒毀戒等と云ふ規範に入るべきでなく、若し人これを誹謗評量するものは大罪を得べしと説く。更に世尊は文殊師利に告げて、見貪欲際即是眞際、眞恚際即是眞際、一切衆生性即是涅槃性等を知らうとて、所謂不思議不思議を説く。かくて一切の分別を擧揚し、四念處八聖道七菩提分を否定し、一切法平等無二無分別を強調し、遂に想陰行陰識陰是種性と極言して第一巻を終る。然も長老須菩提はこの法を解せざる故に、如來身を得ずと斷ずるのである。

次に世尊、文殊師利に告げて、衆生性即是菩提性これを不動相と名くと説き、一切諸佛住四顛倒五蓋五欲三毒得阿耨多羅三藐三菩提と教示する。文殊師利は世尊に向つて次の如き重大なる問を發する。若法不生不滅。不斷一切不善法。不成一切善法。是所見何所斷何所證何所修何所得云云

と。於是、諸天子は文殊師利を讚歎するのであるが、文殊師利は却つて、我は是れ凡夫三毒所覆の邪行人なりと述べて、先の佛所説の如く、凡夫即菩薩佛なる所以を説するのである。

次に華嚴菩薩は世尊に向つて善聲慧法門を説かんとを請ふ、世尊は之に答へて、若し人惡聲に依つて過罪想を生じ、善聲に依つて利益想を生ずるならば、それは不學佛法なりと斷じ、所有佛教徳目とその反對概念を並べ擧げて、すべてこれ等を捨揚して暗に一相不二の法門を開示し、文殊師利は二聲平等を附言する。

更に喜根菩薩と云ふ不壞威儀不捨世法の菩薩(在家の菩薩)があつて、大乘の前に於いて、少欲知足細行獨處を稱讚せず、却つて衆生性即是佛性を説いた。勝意比丘と云ふ護持禁戒の法師があつて、喜根菩薩の行爲を評量誹謗して、大地獄に墮ちた。喜根菩薩は偈を以て、一切の著と慢とはすべて佛法の眞意に非ずと説く。佛不見菩提。亦不見佛法。不著諸法故。降魔成佛道。若人求菩提。是人無菩提。若見菩提相。是則遠菩提。菩提非菩提。佛陀非佛陀。若知是一相。是爲世間導(抄出)斯くて世尊は説き終り、文殊師利菩薩と彌勒菩薩とは俱に佛前に進み出でて、佛滅後五百歳に於いて此經を宣布すること誓ふ。

この經は般若否定の論法を以て大乘精神を強張したものであるが、不動相一相實相を説くあたり、やがて華嚴天台等の思想をなすものである。賢首大師は之を五教章に

頓教として扱ひ、傳教大師は顯戒論の主張に於いて、四十二、五十四、五十五の三章に引用してゐるのみならず、大師がその眞俗一貫の菩薩戒を提示するあたり一脈相通するの觀がある。

同本異譯總じて四譯三存、次の如くである。諸法無行經 二卷 姚秦鳩摩羅什譯 佛說諸法本無經(存)三卷 隋開那崛多譯 諸法無行經(闕)一卷 宋求那跋陀羅譯 佛說大乘隨轉宣說諸法經三卷 宋紹德等譯

諸法無行經

①(日)Sho-hō-mu-gyō-kyō.(支)Chu-fa-wu-hsing-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④(參考) 仁壽錄第四、靜泰錄第四

諸法無行經

①(日)Sho-hō-mu-gyō-kyō.(支)Chu-fa-wu-hsing-ching. ②一卷 ③缺 ④宋求那跋陀羅、太元一九一泰始四 A. D. 391—403 譯 ⑤第二譯 ⑥(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

諸法無行經疏

①(日)Sho-hō-mu-gyō-kyō-sho.(支)Chu-fa-wu-hsing-ching-shu. ②五卷 ③曼雅述 ④(參考) 新編諸宗教藏總錄卷第一

諸法無等三昧法門

①(日)Sho-hō-mu-jō-zan-mai-hō-mon.(支)Cha-fa-wu-chêng-san-mei-fa-men. ②二卷 ③存、大正四六・六二七No. 1923、縮陽四、凡三

二・九 ④陳代慧思述 ⑤菩薩が初發心から成佛に至るまでの一心一身一智慧をつくしてなす萬行は、悉く衆生教化のためである。これが即ち學佛法で

ある。學佛法せんと欲せば先づ淨戒を持ち禪定を勤めねばならぬ。一切の佛法の三昧門は皆坐禪から生ずる。坐禪は四念處から初めるのである。四念處は身心を觀するの心であり、眞實心である。次に心は衆生の心性である。衆生の心性は生死涅槃に染せられず斷常二見にも染せられず常無常に轉ぜられない。この如來藏自性清淨心の衆生心を坐禪工夫する當處に一佛を見、一念心中に一時に說法度生する。得道無二、只是れ一法である。是くの如く四念處を修することを述べたものが本書である。この四念處觀は般若經の空思想に立脚したものであるが、若しこれを天台大師の表現形式に依つて述べれば心佛衆生是三無差別の一心三觀を明にしたものである。但し無諍とは空の義である。空を無諍といふ例は順權方便經・樂瓊瑤莊嚴方便經にある。大智度論にもあつたと思ふ。然らば本書は諸法空三昧法門を明にしたものである。この空を南岳大師は如來藏といひ、自性清淨心といひ、衆生心といひ、一心一念といふ。この如來藏心を坐禪練磨する手段は四念處であるとなし、身受心法の觀行を詳説したものが本書である。本書の隨處でこの觀行の出來ない者即ち散心にして文字に著し高慢心を抱いたものが我慢心を以つて顛倒說法して衆生を誑し、禪を誇り衆を亂すといひ、忽々亂心講文字、死入地獄吞鐵丸、出爲畜生彌劫矣、輕毀一切坐禪人、壞亂正法作魔事と非難を加へてゐる。要するに本書には教判

もなく教理の淺深の比較もなく單に坐禪度生の所要であることを多く法花經の文を引いて述べてゐるが天台大師の一心三觀法門であり、若し本書所説の意義を分析すれば所謂漸次止觀とも不定止觀とも圓頓止觀ともなる。本書は只内鑑冷然であつて、未だ三種止觀とも三觀とも明確に組織されない祖判である。(田島德音)

**諸法無諍門** ①(日) Sho-ho-mu-jō-mon. (支) Chu-fa-wu-cheng-men. ②二卷 ③陳代慧思述 ④【参考】新編諸宗教藏總錄第三

**諸法勇王經** ①(日) Sho-ho-yō-ō-kyō. (支) Chu-fa-yung-wang-ching. ②一卷 ③存、大正一七・八四六No. 822、縮甫八、二一〇・五、北203號、南219號、元208號、明北209號、清309號、麗201號、天211號、指37

④法300號、至312號、明南209號、元213、⑤曼摩密多譯 ⑥宋元嘉元一一八(A. D. 421-41)

⑦この經は菩薩と聲聞阿羅漢とを拉し來りて、その利益の大小より價值を論じ、大乘思想を高揚するものである。今その大要を述べれば次の如くである。月の十五日布薩說禁戒の時、會中の出家未久の比丘が、世尊に向つて懺悔的質問を試してその教示を請ふのである。即ち、我出家未久。已受具足戒。於此事未了。唯願哀愍說。云何受信施。畢竟清淨報。信心出家已。具足諸所願。世尊は之に答へて、入於僧數。勤修僧業。得僧善利の三法をさへ成就すれば、信施に預つて恥づることなく、又信心出家の究竟

理想にも到達することが出來ると教説される。且つその三法を細説して、四向四得是名爲僧。四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分是名僧業。須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果是名僧利。と。然るにこの比丘は更に問を進めて、然らば大乘心を發して一切智淨心出家を求めた場合もなほ上の三法を得べきかと糺す。世尊は、その大智微妙の間であることを絶讃し、若し斯の如き發大乘心の善男子は、三法を得るを要せず只菩提を修せよとのみ教へて、容易にその理由を説明されない。然も三再び請はれて、遂に先づ大瑞相を現じ、始めてこの經の肝心たる大乘誓願の菩薩が如何に貴いかを説かれるのである。

當知皆由菩薩因緣、一切善法出現於世であるから、菩薩は本已清淨畢報施であつて、四天下を覆ふ衣服、須彌の如き食、三界の寶を擧げて供養するも、なほ菩薩の洪恩に報ひ盡せるものではない。菩薩は過現未に亘りての一切善の根本動力である。只この洪恩に報ずることの出來るのは善男子善女人の發阿耨多羅三藐三菩提心のみと斷ぜられる。

惟ふに、五戒十善を説き、戒定慧の三學を述べ、布施愛語利行同事の四攝法を示す等して、偏へに小乘的形式主義を打破せんとするものである。傳教大師の圓頓戒壇建立は、この思想の具體化である。因に次の三は同本異譯である。

譯。諸法最上王經一卷 隋闍那崛多譯。(稻葉文海)

**諸法要略抄** ①(日) Sho-ho-yō-ryō-shō. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第四〇阿婆縛抄之内 ④承澄(元久二一弘安五 A. D. 1205—1282)撰

**諸法流傳授要** ①(日) Sho-ho-ryūden-jūyō. ②三卷 ③存 ④元璋(寶曆六一文政九 A. D. 1756—1826)記、隆瑜補記

①智山淨空を以て濫觴とする野澤諸法流相承の印信口訣である。

**諸品略釋** ①(日) Sho-ton-ryō-shaku. ②一卷 ③存 ④刊本(京大・一四三・三)

**諸品略釋四論義** ①(日) Sho-ton-ryō-shaku-shi-ton-gi. ②一卷 ③存

**諸曼荼羅法** ①(日) Sho-man-dara-hō. ②一軸 ③存 ④諸尊法經曼荼羅の出門建立法を叙したるもの。⑤鎌倉時代寫

⑥(寶菩提院)

**諸名目** ①(日) Sho-myō-moku. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、餘大・九九九)

**諸明王法** ①(日) Sho-myō-ō-hō. ②一軸 ③存 ④鎌倉時代寫 ⑤(寶菩提院)

**諸文故事要解** ①(日) Sho-mon-ko-ji-yō-ge. ②六卷 ③存 ④松譽嚴的(寶永頃 A. D. 1704—1710)述 ⑤寶永元刊

⑥(龍大、二六八四・二四二〇四一・二五

諸文殊 ①(日) Sho-mon-ju. ②一葉  
③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

諸文集 ①(日) Sho-mon-ju. ③存  
④寫本(龍大、一一三・八六)

諸文書類 ①(日) Sho-mon-ju-tri.  
②三括 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶善提  
院)

諸文要解 ①(日) Sho-mon-yo-ge.  
諸文故事要解 ②六卷 ③存 ④松譽巖的  
(一寶永頃A.D.1704-1710-)述 ⑤寶永  
元刊 ⑥(龍大、二六八四・二二四、二〇四  
一・二五)

諸門出處臚持記 ①(日) Sho-mon-  
shus-sho-oku-ji-ki. ②二卷 ③存 ④覺  
寶記 ⑤弘化二(A.D.1845) ⑥(藥樹院)

諸門跡系統 ①(日) Sho-mon-zeki-  
kei-to. ②一卷 ③存 ④寫本(帝室、一一  
四・四七)

諸門跡譜 ①(日) Sho-mon-zeki-fu.  
②一卷 ③存、群書類從第四、中古叢書第  
二七

④本書は群書類從卷第六十一系圖部二に轉  
錄されてゐる仁和寺、青蓮院以下諸寺院の  
門跡六百九十三名に關する年表である。本  
書の初めに大正權三僧正の宮と、法印、法  
眼等の位補任の最初の年附を添へてゐる。  
以下目次を作りて之を示せば次の如し。

〔仁和寺〕 或は御室と號し、延喜三年  
(A.D.903)三月建立。寬平。性信。覺行。  
覺法。覺性。守覺。道法。道助。道深。法  
助。性助。性仁。深性。寬性。法守。源  
性。法仁。尊朝。永助。法尊。承道。靜

覺。覺道。任助。覺深。承法の廿六人。  
〔青蓮院〕 行玄。覺快。慈圓。良快。慈  
源。道覺。最守。尊助。慈禪。道玄。慈  
實。慈助。慈玄。良助。慈道。慈深。尊  
圓。慈眞。尊道。祐助。道圓。義圓。尊  
應。尊傳。尊鎮。尊朝。曾純。周賢。法  
親王の廿八人。

〔隨心院〕 小野曼茶羅寺のこと。弘法大  
師。眞雅。源仁。聖寶。觀賢。淳祐。元杲。  
仁海。成尊。範俊。嚴覺。増俊。顯嚴。親  
嚴。嚴海。宣嚴。俊嚴。嚴惠。靜嚴。嚴  
家。經嚴。通嚴。照嚴。嚴寂。祐嚴。嚴  
寶。忠嚴。仙朝。長靜。増孝。榮嚴の三十  
一人。

〔淨土寺〕 明救。圓基。尋基。慈勝。慈  
傳。慈忠。慈辨。政辨。慈禪。慈基。政  
玄。尊基。禪基。覺尋。相豪。仁操。持  
辨。辨雅。義尋。慈靜の二十人。

〔平等院〕 永承六年(A.D.1051)藤原賴  
通の建立、宇治殿とも號す。永圓。明行。  
行尊。良俊。忠快。尊忠の六人。

〔本覺院〕 良快。良禪。最源。尋源。源  
惠。道潤。顯尊。仲舜。信顯。聖助。仁  
澄。聖惠の十二人。

〔法住寺〕 尋覺。道仁。靜仁。仁惠。道  
瑜。増惠。増珍の七人。

〔安祥寺〕 惠運。朝壽。朝源。宗意。實  
嚴。成惠。光譽。實舜。實靜。道俊。良  
伊。隆雅。興雅。隆快。光意の十五人。  
〔妙香院〕 尋禪。尋空。尊忠。慈實。良  
性。慈慶。慈濟。相命の八人。

〔禪林寺〕 眞紹。宗叡。深覺。深觀。良  
深。永觀。尊譽。覺譽。道智の九人。  
〔常住院〕 證空。良尊。道慶。行昭。慈  
昭。道昭。良慶。良瑜。道尊。快豪の十  
人。

〔如意寺〕 隆辨。道珍。道瑜。道基。滿  
意。兼助。公曉。榮實。賴仲の九人。

〔毘沙門堂〕 明禪。公蒙。實禪。實超。  
實尊。實救。公承。明圓。實圓。實修。忠  
承の十一人。

〔聖護院〕 智證。增命。勢祐。智靜。最  
圓。靜覺。増譽。増智。覺忠。靜惠。圓  
忠。靜忠。尊圓。深忠。覺惠。覺助。忠  
助。順助。尊珍。惠助。覺譽。仁譽。聖  
助。靜尊。覺増。道意。滿意。道興。道  
應。道増。道澄。義觀。興意。道晃。道寬  
の三十五人。

〔龍井殿〕 又、梨木門跡と號す。傳教。  
慈覺。承雲。延雄。尊意。安恩。尋叡。明  
快。良眞。仁覺。仁豪。仁實。最雲。最  
忠。明雲。承仁。承圓。尊快。尊覺。最  
仁。澄覺。最助。覺雲。叡雲。恒雲。尊  
忠。承覺。承鎮。尊雲。尊胤。恒鎮。覺  
叡。明承。義承。義胤。彥胤。應胤。最  
胤。承快。慈胤。常尹の四十一人。

〔蓮華光院〕 又、安井門跡と號す。道  
尊。道圓。道性。性融。尊守。寬法。寬圓  
の七人。

〔三寶院〕 勝覺。定海。元海。實運。勝  
賢。實繼。成賢。良海。聖海。勝尊。憲  
深。定濟。定勝。道性。聖兼。聖雲。定  
任。賢助。聖尊。聖尋。賢俊。光濟。聖  
珍。光助。滿濟。義賢。政深。義覺。政

紹。持嚴。義堯。義演。覺定の三十三人。  
〔勸修寺〕 濟高。貞譽。雅慶。濟信。深  
覺。信覺。嚴覺。寬信。雅實。成實。聖  
基。道實。勝信。道淳。信忠。教寬。寬  
胤。尊信。興信。尊興。興胤。尊聖。教  
尊。恒弘。常信。海覺。寬欽。聖信。寬  
海。寬俊の三十人。

〔圓滿院〕 智證。康濟。增命。京意。敬  
一。運昭。行譽。餘慶。悟圓。永圓。明  
尊。行明。覺圓。覺實。行尊。行慶。道  
惠。圓惠。定惠。法圓。圓淨。仁助。圓  
助。淨助。眞覺。行覺。恆助。尊悟。長  
助。尊兼。定尊。行悟。行動。尊濟。圓  
悟。圓胤。尊雅。教如。仁悟。道悟。養  
慶。常尊の四十二人。

〔南都大乘院〕 隆禪。賴實。尋範。信  
圓。實尊。圓實。實信。尊信。慈信。尋  
覺。覺尊。聖信。孝覺。孝尊。孝信。孝  
球。孝圓。經壽。尋圓の十九人

〔輪王寺滋賀院〕 日光山御門跡。尊敬の  
一人。

〔妙法院〕 傳教。慈覺。惠亮。常濟。延  
冒。陽生。教圓。勝範。定慶。源通。相  
命。快實。快修。行眞。昌雲。實全。尊  
性。尊惠。俊圓。尊守。性惠。尊教。性

信。賴尊。覺信。玄覺。覺英。覺繼。信  
圓。良圓。實信。實靜。信昭。隆信。覺  
惠。覺昭。良信。良覺。信助。覺實。玄  
圓。實玄。良玄。良昭。玄昭。良兼。昭  
圓。教玄。信玄。良譽。覺舉。覺慶。尊  
勢。尊覺。信教の三十六人。

〔南都大乘院〕 隆禪。賴實。尋範。信  
圓。實尊。圓實。實信。尊信。慈信。尋  
覺。覺尊。聖信。孝覺。孝尊。孝信。孝  
球。孝圓。經壽。尋圓の十九人

〔輪王寺滋賀院〕 日光山御門跡。尊敬の  
一人。

〔妙法院〕 傳教。慈覺。惠亮。常濟。延  
冒。陽生。教圓。勝範。定慶。源通。相  
命。快實。快修。行眞。昌雲。實全。尊  
性。尊惠。俊圓。尊守。性惠。尊教。性

性。尊惠。俊圓。尊守。性惠。尊教。性

守。尊澄。亮性。亮仁。堯仁。堯性。明仁。敬覺。覺胤。堯尊。常胤。堯然。堯想の三十五人。

〔實相院〕智證。康濟。增命。京意。敬一。運昭。行譽。餘慶。勳修。心譽。行圓。頼家。行勝。勝運。公顯。覺朝。靜基。増忠。靜譽。増基。増静。頼家。増聲。増仁。靜深。良瑜。増珍。増詮。義命。増運。義桓。慈運。義尊の三十三人。

〔曼殊院〕是算。遍救。運圓。教圓。長算。仁運。頼圓。眞尊。忠尋。顯尋。圓仙。仙範。承信。承兼。公澄。道救。實濟。慈順。慈嚴。慈快。慈守。慈昭。道豪。良順。覺什。良鎮。慈運。覺想。良想。良尙の三十人。

〔大覺寺〕恆寂。後宇多院。寬尊。性圓。性勝。道寬。深守。弘覺。恆性。義昭。性守。義俊。性深。空性。尊性。性眞の十六人。

〔南都東大寺東南院〕聖寶。聖實。聖兼。仁澄。道快。聖珍。觀海。慶信。良覺。豪因。慈快。齊慶。有慶。勝賢。聖慶。覺樹。聖忠。惠珍十九人。

〔上乘院〕道乘。益助。益性。乘朝。道永。寬守。道朝。道喜。覺智。良惠。良覺。道順。公譽。實豪。實辨。實濟。尊實。公禪。道尋。増惠。明辨。乘伊の二十二人。

〔知恩院〕良純。尊光の二人。以上

〔帝國、ゆ、三〕  
諸問講表白 ①(日) Sho-mon-kyo-hyo-byaku. ②一括 ③存 ④足利時代寫

①(寶龜院)  
諸遺誠文 ①(日) Sho-yu-kai-mon. ②存、墨谷上人語燈錄(漢語)(大正八三・一〇五No. 201)淨土宗全書第九之内 ③(參考)淨土真宗教典志第一

諸用心 ①(日) Sho-yo-jin. 保壽院諸用心 ②一軸 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶善提院)

諸略雜類聚 ①(日) Sho-ryaku-zo-jin. 増補諸略雜類聚 ②一卷 ③存 ④刊本(正大、一〇七・一六三・一六五)(哲、多、二・左・二(外・一・右・二三))

諸略類聚 ①(日) Sho-ryaku-rui-jin. ②一卷 ③存 ④延寶七刊 ⑤(正大、一〇七・一六〇—一六一)

諸流一貫頓證秘訣 ①(日) Sho-ryu-ik-kwan-ton-sho-hi-ketsu. ②一巻 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

諸流印信 ①(日) Sho-ryu-in-jin. ②四巻 ③存 ④快範(一寛永頃A. D. 1624—1643—) ⑤(參考)眞言宗全書刊行豫定目錄

諸流印明 ①(日) Sho-ryu-in-myō. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

諸流印明口傳 ①(日) Sho-ryu-in-myō-ku-den. ②一軸 ③存 ④足利末期寫 ⑤(金剛三昧院)

諸流行要 ①(日) Sho-ryu-gyō-yō. ②一卷 ③存 ④榮嚴 ⑤(參考)眞言宗全書刊行豫定目錄

淨嚴(寛永一六一元祿一五A. D. 1639—1702) 記 ⑥徳川時代寫 ⑦(寶善提院)

諸流灌頂秘藏鈔 ①(日) Sho-ryu-kwan-jō-hi-to-sho. 諸流秘藏鈔 ②一卷、五巻或四巻 ③存 ④政祝(貞治五—永享一—一後A. D. 1366—1439—)記 ⑤(大正一切經刊行會)

諸流血脈 ①(日) Sho-ryu-kechi-byaku. ②一卷 ③存 ④隆增記 ⑤(參考)眞言宗全書刊行豫定目錄

諸流血脈略記 ①(日) Sho-ryu-kechi-myaku-ryaku-ki. ②一册 ③存 ④延享四寫 ⑤(高大、寄・一・五五)

諸流聖教目錄 ①(日) Sho-ryu-shō-gyō-moku-roku. ②一卷 ③存 ④源通集 ⑤寫本(金剛三昧院)

諸流眞言血脈口傳 ①(日) Sho-ryu-shin-gon-kechi-myaku-ku-den. ②一册 ③存 ④延享元寫 ⑤(寶善提院)

諸流總目血脈等 ①(日) Sho-ryu-sō-moku-kechi-myaku-to. ②一巻 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶善提院)

諸流通法十八道事 ①(日) Sho-ryu-tsū-hō-jū-hachi-dō-no-koto. ②一册 ③存 ④寶曆一三寫 ⑤(寶龜院)

諸流通用口決 ①(日) Sho-ryu-tsū-yō-ku-keisu. ②存、興教大師全集之内 ③覺鏡(嘉保二—康治二A. D. 1095—1143)撰

長なき故に諸流に適用するのである。此の名稱は後人が附したものであることは勿論である。(富田駿純)

諸流傳受目次 ①(日) Sho-ryu-den-jū-moku-roku. ②一卷 ③存 ④良基 ⑤(參考)眞言宗全書刊行豫定目錄

諸流傳受目錄 ①(日) Sho-ryu-den-jū-moku-roku. ②一卷 ③存 ④良基 ⑤(參考)眞言宗全書刊行豫定目錄

諸流秘記錄類 ①(日) Sho-ryu-hi-ki-roku-rui. ②一括 ③存 ④足利、徳川時代寫 ⑤(寶善提院)

諸禮銀計算覺 ①(日) Sho-ri-ei-jin-kaisan-oshoe. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、別置)

諸漏盡經 ①(日) Sho-ro-jin-gyō. (支) Chu-lou-chin-ching. ②一卷 ④失譯 ⑤雜阿含經第十卷の抄出。 ⑥(參考)出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

諸錄俗語解 ①(日) Sho-roku-zoku-go-ge. ②一卷 ③存 ④寫本(駒大)(帝國、一九一・五九〇)

諸論義聞書記 ①(日) Sho-ron-gi-kiki-gaki-ki. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

女子善行錄 ①(日) Jo-shi-zen-ko-roku. ②二巻 ③存 ④千河岸貫一編 ⑤(龍大、一九六九・二〇)

女性と宗教 ①(日) Jo-sei-to-shū-



kyō. ①一卷 ②存 ③濱口慧璋述 ④明治三九刊 ⑤(谷大、餘洋・二一一)

汝霖佐禪師疏 ①(日)Jo-rin-sa-zen ji-shō. 高岡稿 ②一卷 ③存 ④汝霖良佐(一應安元A.D.1368)述 ⑤(參考)禪籍目錄

汝霖文稿 ①(日)Jo-rin-mon-ko. ②一卷 ③存 ④汝霖良佐(一應安元A.D.1368)撰 ⑤(參考)禪籍目錄

如雲紫翁假名說法附いろは歌 ①(日)Jo-n-shi-teki-ō-ka-na-sep-pō-tsuletari-i-ro-ha-uta. ②一卷 ③存 ④如雲紫翁述 ⑤安永六刊 ⑥(駒大)

如雲紫翁道人不二門附孝の道 ①(日)Jo-n-shi-teki-ō-nin-ni-mon-kyō-ki. (支)Hsi-hui-lun-fan-i-chi. ②一卷 ③缺 ④(參考)奈良朝現在一切經疏目錄2769

序語類要 ①(日)Jo-go-rui-yō. ②一卷 ③存 ④天和三刊 ⑤龍大、二〇二三・九(正大、一〇七・一六六)

序七世經 ①(日)Jo-shichi-se-kyō. (支)Hsu-chi-shi-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④(參考)出三藏記第五、法經錄第二、仁壽錄第四、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

序聽迷詩所經 ①(日)Jo-chō-mei-shi-shō-kyō. (支)Hsu-t'ing-mai-shih-so-ching. ②一卷 ③存、大正五四・二二八六

No. 2142 ①本經は唐代一唐の太宗貞觀九年(A.D. 635)より徳宗の建中二年(A.D. 781)に流行せし景教(Nest rian Christianity)の經典で、燉煌出土本。現今存在する漢譯の景典三種の中、本經は有力なる景教研究の一資料となるもの。惜しくも末尾を闕き殘卷一軸、其の體裁は他の燉煌出土の佛典と同じく、黃紙堅約八寸七分位の卷子本で、行數總計百七十ある。本經は極めて難解の漢文で、其の所々に得體の知れない文字あり、殊に題名の序聽迷詩所經は如何なる意味を持ち、如何なる風に解讀すべきものなるか、一見しただけでは殆んど分らない。

又其の内容は景教が支那に傳來以後、景教徒が自己の教義を宣傳する爲に、未だ熟達しない漢文を以て論述されたものらしく、支那固有の社會状態をも考慮に入れてをるし、聖書の重要な所、基督の音譯、移風などを出してをる所から、見れば極めて苦心の結果製作されたものであらう。尙本經の解説に就いては、大正十五年發行、「内藤博士還曆祝賀支那學論叢」の中で、羽田博士執筆の「景教經典序聽迷詩所經に就いて」を参照せられたいものである。

燉煌出土本、高楠順次郎藏(成田昌信) 序分義 ①(日)Jo-bun-gi. (支)Hsi-t'ei. 觀無量壽經四帖疏序分義、觀經疏序分義、四帖疏序分義 ②存、觀無量壽佛經疏(大正三七・二四五No. 1753)記續一・三二・四、淨土宗全書第二)第一「眞宗聖教大全卷中、七祖聖教卷中、淨土古佚十書第三(眞)

唐善導(大業九一永隆二 A.D. 613—681) 說龍朔二年(六九)述 ⑤觀無量壽經疏の下を見よ。

序分義會解 ①(日)Jo-bun-gi-e-gē. 觀經疏序分義會解 ②九卷 ③存 ④月琴崇信(寛文一一享保一四A.D.1671—1729)作 ⑤(參考)淨土眞宗教典第二 ⑥刊本(龍大、一二三六・六〇)

序分義癸巳記 ①(日)Jo-bun-gi-i-shi-ki. 觀經疏序分義癸巳記 ②三卷 ③存 ④廣陵了榮(文政一一明治三三A.D. 1819—1900)述 ⑤寫本(龍大、一二三六・六一) ⑥(谷大、宗大・一六三五)

序分義聽書 ①(日)Jo-bun-gi-ki-ki-gaki. ②八卷 ③存 ④得住(一明治七A.D. 1874)述 ⑤寫本(龍大)

序分義愚要鈔 ①(日)Jo-bun-gi-ō-yō-shō. 觀經疏序分義愚要鈔、觀無量壽經序分義愚要鈔 ②三卷 ③存 ④淨音(建仁一一文永八A.D. 1202—1271)述 ⑤(參考)淨土眞宗教典第三 ⑥享保四刊 ⑦(龍大、二四一五・一三三・研眞)(谷大、宗大・二五二二)

序分義講記 ①(日)Jo-bun-gi-kyō-ki. 觀經疏序分義講記 ②三卷 ③存、眞宗大系第九 ④靈陞(安永四—嘉永四A.D. 1775—1851)述 ⑤天保二(A.D. 1831) ⑥觀經序分義講記の下を見よ。

序分義講義 ①(日)Jo-bun-gi-kyō-ki. ②五卷 ③存 ④深勵(寛延一一文化一四A.D. 1749—1817)述 ⑤寫本(龍大、研眞)

序分義講義 ①(日)Jo-bun-gi-kyō-ki. 觀經疏序分義講義 ②五卷或六卷 ③存 ④宜成(安永六—文久元A.D. 1777—1861)述 ⑤安政五(A.D. 1858) ⑥寫本(龍大)(谷大、宗大・一六三二)

序分義講誌 ①(日)Jo-bun-gi-kyō-shi. 觀無量壽經序分義講誌 ②二卷 ③存 ④寫本(正大、一一五三・一八〇)(龍大、二四一五・一三四)

序分義講聞記 ①(日)Jo-bun-gi-kyō-setsu-mon-ki. ③三卷 ④存 ⑤寶景(延享三—文政一一A.D. 1746—1829)述 ⑥寫本(龍大、一二三六・六二)

序分義講判 ①(日)Jo-bun-gi-kyō-han. 觀經疏序分義講判 ②一卷 ③存 ④南條神興(文化一一明治二〇A.D. 1814—1887)述 ⑤明治六寫(谷大、宗大・二一三一) ⑥大正四刊(龍大、一二二六・六三・研眞)(谷大、宗大・二七二七)

序分義講錄 ①(日)Jo-bun-gi-kyō-roku. ②二卷 ③存 ④松島善讓(文化三—明治一九A.D. 1806—1886)述 ⑤寫本(龍大、研眞)

序分義講錄 ①(日)Jo-bun-gi-kyō-roku. 觀經疏序分義講錄、觀經序分義講錄 ②二卷 ③存 ④連元慈廣(天保三—大正四A.D. 1832—1915)述 ⑤明治三六刊 ⑥(龍大、一二二六・六四)(谷大、宗大・一〇〇八)(帝國、一八七・二五三)

序分義私記 ①(日)Jo-bun-gi-shi-ki. 觀經疏序分義私記、觀無量壽經序分義私記、觀經疏序分義秘鈔 ②四卷 ③存、

名所行發⑩(名庫書)著藏所現⑨ 月年の刊寫⑧ (書考書釋註)書本⑦ 説解存内⑥ 代年作著⑤ 著書④ 缺存③ 數卷② (名書)名題① 號略字數

【シ】

觀無量壽經疏私記 ①行觀覺融(仁治二—正中二A. D. 1241—1335)述 ②觀無量壽經疏私記の下を見よ。 ③刊本(正大、一一五三・一五四・一五七・二五六)(谷大、宗大・六八九)

序分義私鈔

①(日)Jo-hun-gi-shi-sho. ②二卷 ③存 ④功存(享保五一寛政八A. D. 1720—1796)述 ⑤(参考)浄土真宗教典志第二

序分義集解

①(日)Jo-hun-gi-shi-ha-re. ②一卷 ③存 ④月珠(—安政三A. D. 1856)述 ⑤寫本(龍大、研眞)

序分義抄

①(日)Jo-hun-gi-sho. ②一卷 ③慧空(正保元—享保六A. D. 1641—1721)作 ④(参考)浄土真宗教典志第二

序分義他筆鈔

①(日)Jo-hun-gi-ta-hisa-sho. ②觀無量壽經序分義他筆鈔、觀經疏序分義他筆鈔 ③五卷 ④存、觀經疏他筆鈔(大日本佛教全書第五六一—五七、西山全書第四一—五)之内 ⑤證空(治承元—寶治元A. D. 1177—1247)述 ⑥觀經疏他筆鈔S下を見よ。

序分義短冊

①(日)Jo-hun-gi-tan-jaku. ②一卷 ③頼瑜(嘉祿二—嘉元二A. D. 1226—1304)述 ④(参考)諸宗章疏錄第三

序分義聽記

①(日)Jo-hun-gi-cho-ki. ②三卷 ③存 ④性海(明和二—天保九A. D. 1765—1838)述 ⑤寫本(龍大)

序分義聽記

①(日)Jo-hun-gi-cho-ki. ②一卷 ③存 ④松島善謙(文化三—明治一九A. D. 1806—1886)述 ⑤寫本(龍大、一二二六・六五)

序分義無射

①(日)Jo-hun-gi-mu-sho. ②觀經疏序分義無射 ③一卷 ④存 ⑤(寶曆三—文政八A. D. 1753—1825)説 ⑥文政九、年六五(寂)述 ⑦寫本(龍大、研眞)(帝國、一八七三〇)(谷大、長保・一四)

序要看柄

①(日)Jo-yo-kan-hai. ②(文)Hid-yuo-kan-ping. ③一卷 ④存 ⑤晦庵撰 ⑥(参考)朝鮮佛教總書刊行豫定書目

序要看柄私記

①(日)Jo-yo-kan-hai-shi-ki. ②(文)Hid-yuo-kan-ping-shi-ki. ③一卷 ④存 ⑤連潭撰 ⑥(参考)朝鮮佛教總書刊行豫定書目

助正釋問

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

助正釋問

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

助正釋問

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

助正釋問

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

助正釋問

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

助正釋問

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

助正釋問

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

助正釋問

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

助正釋問

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

助正釋問

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

助正釋問

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

助正釋問

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

①(日)Jo-sho-shaku-mon. ②一卷 ③存、真宗全書第五〇 ④僧叙(寶曆二—文政九A. D. 1762—1826)述 ⑤文化二(A. D. 1805)

名所行募⑩(名庫書)著者所現⑪ 月年の刊載⑫(書考參書撰註)書末⑬ 説解存内⑭ 代年作者⑮ 著者⑯ 缺存⑰ 數卷⑱(名書)名題⑲ 號略字數

行相難易異をあげて釋明してある。尙、助正の判意を述べて、稱名に於て業成を談ずるが故に、行に助正を辨別すと雖、宗祖の如く信心を以て正因となすときは、稱名は報恩行であつて、五正行は悉く報恩の所用となるものである。故にこゝには何等助正と分別すべきものがなると述べてゐる。これ石泉の弘願助正説に對辨せるものとあつて、石泉は更に助正荃梓」を著してこれが反駁をしてゐる。

**助説要含集** ①(日)Jo-sekan-yō-gan-shū. ②存、輪池叢書第二五 ③(帝國、特別・4・7)

**助宣記** ①(日)Jo-sen-ki. (支)Chū-hsuan-chi. ②二卷 ③宋仁岳淳化三—治平元 A. D. 992—1064)述 ④孤山遺教經疏を釋す。 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第二

**助善經** ①(日)Jo-zen-kyō. (支)Chū-shan-ching. ②一卷 ③缺 ④尖譯 ⑤(參考) 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

**杼山集** ①(日)Jo-san-shū. (支)Chū-shan-chi. ②十卷 ③存、三高僧詩集之内 ④唐代皎然集 ⑤寫本(京大、藏・二四シ・一〇)

**叙古啓明讀禪宗正脈法**

①(日)Jo-ko-kei-mei-doku-zen-shū-shō-miyaku-hō. (支)Liū-ku-chi-ming-tu-h'ant-sung-chieg-mo-fa. 禪宗正脈法 ②二十卷 ③存、縮牘一一二 ④如杳撰 ⑤禪宗正脈の下を見よ。

**恕中和尙語錄**

①(日)Jo-chū-o-shū

助、杼、叙、恕、除

①go-toku. (支)Shū-chung-ho-shang-yu. 恕中無愠禪師語錄、空室和尙語錄 ②六卷 ③存、己續二・二八・五 ④明恕中無愠(至大二—洪武一九 A. D. 1309—1386)語 宗編 ⑤(帝國、八二一・一七)

**恕中無愠禪師語錄**

①(日)Jo-chū-mu-on-zen-ji-go-toku. (支)Shū-chung-yu-wen-ch'an-shih-yū-tu. 空室和尙語錄、恕中和尙語錄 ②六卷 ③存、己續二・二八・五 ④明恕中無愠(至大二—洪武一九 A. D. 1309—1386)語、宗編等篇

⑤台州紫葢山竺原妙道禪師の法嗣にして南岳下二十二世台州瑞巖淨土禪寺恕中無愠禪師二會の語要を門人宗編等が編録したもので、明洪武七年(A. D. 1374)十月二十二日宋濂序文を撰し、同二十一年(A. D. 1388)九月既望四明山人烏斯道、天台空室愠禪師行業記を撰して此れに附したものである。

無愠は字は恕中、空室と號し、台州臨海の陳氏に生れ、七歲徑山の元叟行端禪師に薙髮し、淨慈の靈石如芝、湖州資福の—源靈、天童の平石如砥等に歴參し、台州紫葢山竺原妙道の狗子無佛性の話に大悟し、明州靈巖廣福禪寺に初住して嗣香を妙道に獻し、居ること三年にして台州瑞巖淨土禪寺に遷り、瑞巖の三關を以て學人を接待した。明洪武七年將軍足利義滿の命により管領細川頼之、貢物を獻じて無愠を特請したが、太祖帝老を憫みて許さず、天界寺に居らしめた、天界寺全室宗洵、宋濂居士と談じ、洪武十七年門人圓慧居頂に浙江寧波府鄞の翠山草堂に請せられて老を養ひ、洪武十九年

(A. D. 1386)七月十日壽七十八歳にして示寂した。道行綿密なる一代の宗匠である。今其の編次を見るに、卷首に宋濂の序を收め、卷一に初住象山靈巖廣福禪寺語錄(門人前住昌國萬壽禪寺宗編等編)。卷二に次住黃巖瑞巖淨土禪寺語錄(處州府南明禪寺道璋等編)。卷三に擧古、頌古並に小佛事(仗錫禪寺宗耳等編)。卷四に讚、銘、偈頌(翠山禪寺居頂等編)。卷五に偈頌、法語(清歲等編)。卷六に五言七言の律詩、七言絕句、題跋(清歲等編)を收め、卷末に烏斯道の撰に成る行業記、並に宋濂の空室和尙の詩一篇を附したものである。(大久保堅瑞)

**除闇鈔**

①(日)Jo-an-shō. 大日經疏除闇鈔 ②七卷(一一七)合本三册 ③存、佛光大系第一九 ④道範(治承二—建長四 A. D. 1178—1232) ⑤貞應三(A. D. 1234) ⑥本書は眞言密教に於ける根本聖典の一たる大日經一部七卷の注疏たる唐善無畏三藏の大日經疏に就いて、大毘盧遮那經疏文今此誰人請來乎」といふ問題を最初として、百十三箇條を設け、大日經疏卷一四大菩薩の釋段までを問答體に釋してゐる。然も本書は高野山華王院覺海大徳の口説を記して、彼の大日經疏通明鈔の如く、京都禪林寺靜通僧都の傳を混じてゐないといふので、古來高野山學徒の珍重する所となつてゐる。

奥書によれば、貞應三年七月御室(道助親王か)の仰により、宗禪檢校の計に於て、道範等の學侶を集めて談議せしめられしことあり、その後於て抄記したこととなつてゐる。

寶曆二年高野山の學徒妙瑞の記する所に依れば、同山如意輪寺の經庫に第三、四の二卷のみ存し、その完本を見ることが、出来なかつたと。然るに淡路の慈眼寺淨信、多年苦心の結果、洛西山崎神照院の祕庫に第四卷を缺いた餘の六卷を求め得、兩者を合せて七卷の完本となし、遂に刊行流布されることとなつた。

**除一切疾病陀羅尼經** ①(日)Jo-ich'ieki-chi-ping-to-to-ni-ching. (梵)Sarvavoga-prasamti-thraṇi(藏傳)(藏)Hphags-pa nad thams-cad rab-tu shi-bar-lyed-pahi znis. 除病經 ②一卷 ③存、大二一・四八九No. 1233縮問一五、己一五一〇、北1381感、南1385阿、元1374阿、明北978斯、清978斯、麗1365阿、天1365阿、法1115棟、至665君、明南1023淵、Nf. 983 ④唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)譯

⑤この經は佛が室羅維(Jambudvīpa)城の逝多(Śeta)林に居られた時に比丘衆並大菩薩衆の爲に説かれた經で、その對告主は阿難陀に告げて、此の陀羅尼を誦持する者は、宿食不消・癩亂・風黃・痰癘・婁痔・瘰癧・上氣・嗽瘡・寒熱・頭痛・背痛・著鬼魅者など皆悉く除差することを得と説いて居られる。

**除蓋障菩薩所問經** ①(日)Jo-kai-

名所行發 ①(名庫書)著藏所現 ②月年の刊頁 ③(書考)書釋註 ④書末 ⑤説解存内 ⑥代年作者 ⑦著者 ⑧缺存 ⑨數卷 ⑩(名書)名題 ⑪號略字數



sho-bo-sas-sho-mon-gyu. (文) Ch'u-kai-i-hung-p'u-sa-so-wen-ching. (梵) Ratna-meha-sutra(藏傳) (藏) Hiphags-pa dkon-mnog sphyin res-lye-ba heg-pa chen-pohi mdo. 除蓋障所問經 ②二十卷 ③存、大正一四・七〇四No. 489、縮字七、一五・八、北1334傾、南1339、磧路、元339磧路、明北956温、清939温、麗1502丹青、天1315磧路、明南938盛、元964 ④宋法護(乾德元—嘉祐三)A. D. 963—1053)等譯

①本經(D)は梁の曼荼羅仙譯寶雲經(A)・曼荼羅仙と僧伽婆羅との共譯大乘寶雲經(B)及び唐の達摩流支譯寶雨經(C)と同種のもので、是等は何れも梵名では Kanamgha-sutra 即ち寶雲(寶雨)經と稱せられる。經名は元來支那で附したもので、例は寶雲經(寶雨經)の最後にはこの經を寶雲(寶雨法門)・寶藏(寶積功德)・智燈(同)・除蓋障菩薩之所受持(止一切蓋障菩薩所問法門)と名くべしとあり、その何れを取つても差支へない譯である。本經(D)の最後にも、この經を除蓋障菩薩所問・寶雲・寶積功德・智燈と名くべしとあり、本經はその最初の名によつて經名とせられたのである。

本經の内容に關しては同本たる寶雲經等に譲り、前には本經を中心として他の三經との同異を述べよう。便宜上、右四經を翻譯の順序に隨つてA・B・C・Dで代表せしめることにする。先づ卷數から言へば、A七卷、B七卷、C十卷、D二十卷あり、頁數を見るに大正藏經で、A三十二頁、B四十二頁半、C四十五頁餘、D四十六頁で後代

となるに隨つて、多少の増加が認められる。この中Bのみは品名を設けて七品としてゐるが、他の三本には品名が置かれてゐない。更に細部に互つて異同を考察すれば、(一)先づ序文の次に除蓋障菩薩の諸問題提出の前に、空中の自然の妙鼓音の中から出づる偈頌と、除蓋障菩薩の唱ふる偈頌とが半頁餘に互つて述べられてゐるが、これはA・B・Dの三本にあつてCのみには存しない。(二)次いで除蓋障菩薩の質問に對する佛の説明が述べられ、その最初の十波羅蜜の次に菩薩の修法が地・水・火・風・空等に譬へられてゐる中で、菩薩は風の如き十種法を修すといふ一項の説明五頁程の所はC・DのみであつてA・Bには存しない。この項目は最初の問題提出に於てはAには存しないが、Bには掲げてある。然るにBは説明の部ではその項を缺いてゐる。この項目の説明は後にC・D等に於て加へられたものである。(三)更に問題の説明に進んで、十種の無顛倒の道と十種の禪定心との説明の間に、Bのみには一頁の三分の一程の陀羅尼を置き(Bの第四卷の最後)、その咒は他の陀羅尼品と稱してゐるが、この咒は他の三本には存しない。(四)更にBのみには一切の問題の説明が終つた直後に、寶積品といふ一品を設け、多數の四種法・種々の譬喩等を説き、次いで流通文に及んでゐるが、是等の經文は他の三本には全然なく、他の三本では一切の問題の説明が終ると直ちに殆んど 様の流通文が説かれてゐる。以上四項の外にも多少の相違がないではない

が、大體は一致してゐる。斯く右四本は同本異譯とは言へ、原本は決して同一ではなく、各幾分宛の出入がある。本經(D)を主として言へば、Dに近いものはCとAとであり、BはDとのみならず、A・Cともかなりの相違を有する。Dは最後のもの丈けに四本中最も整つたもので、Aに缺けたものとCに缺けたものとを補へば、換言すればAとCとを合すれば、Dが出て來るのである。この經典の眼目は約言すれば正法中心主義である。正法の尊重と、又隨つて正法の傳持者たる説法師の恭敬とを強調してゐる。何となれば、一切の聲聞も緣覺も菩薩も如來も法性中より來り、法性は諸法の母であり、正法の在る處は大善提場であり、轉法輪處であり、大靈塔處であるからである。經名たる寶雲・寶雨といふは畢竟正法の謂であらう。(水野弘元)

**除恐災患經** ①(日) Jo-ku-sai-ten-kyo. (支) Ch'u-king-i-shu-huan-ching. (梵) Shik nīlaka-sūtra. ②一卷 ③存、大正一七・五五二No. 74縮字八、元一一・四、北1756改、南387改、元384改、明北394短、清914短、麗375必、天384改、指3必、法398必、至3必、莫、明南383同、元399④乞伏秦聖堅譯 ⑤太初年間(A. D. 398—408)

①本經は大正藏經で五頁半程の量を有し、經典としては因緣部にでも屬すべきもので、思想内容もその程度である。經典の概略は次の如くである。世尊が王舍城に在し

た時、維耶離(Vāṣṭī)城に疫病が流行し死者無數であつた。國王始め國を擧げてその對策を議し、種々の説が出たが、城中の長者彈尼(才明)なる佛教信者の勸諭で世尊の來臨を仰ぐことになり、その使者として才明長者が選ばれた。當時維耶離は王舍城と敵對關係にあつたが才明の手腕によつて王舍城の阿闍世王の反對もなく、世尊の承諾をも得て、一ヶ月後に世尊は維耶離に赴かれる。其の時兩國で世尊の送迎に非常なる威儀莊嚴を施し、二千五百の七寶蓋を奉獻した。茲でかくも盛大なる世尊の威徳に對して、世尊は自己の過去世の善業によるものとしてその因緣談を説き給ふ。恒河を渡ると河岸に八萬四千の餓鬼が身體から煙火を出して苦痛を受けてゐる。世尊は餓鬼に過去の罪業を語らしめ、而して彼等を濟度し、彌勒佛の時に人中に出世して羅漢果を得べき授記をなし給ふ。次いで世尊は維耶離城に入り給ふや、種々の奇蹟が起り、衆病も一時に除癒した。才明長者は父母妻子の一族の名によつて世尊を十六日間供養し、國王始め他の一切の者は世尊に會ふ事が出来なかつた。かくも才明が一人で世尊を供養するを得るに至つた過去世の因緣談が茲に述べられてゐる。最後に世尊は奈女林精舍に遊至し、遊女奈女(Amrapali)の供養を受け給ひ、茲にも奈女の前世の善根に關する因緣談が説かれて、經典は終つてゐる。以上の如く本經には多くの因緣談が含まれ、その説法による聽者の得益、及び災患を除く等の世尊の大威神力等が述べられて

る。古來の經錄等ではこの經は大乗經の部に入れてあるが、所謂大乘思想は存しな

出でゐるのみであり、他方には須陀洹(道跡)・往來・不還・無著等の語も出てゐる。

經錄によれば本經以前に魏の白延が除災患經一卷を譯したとあり、出三藏記にはこの經を闕本としてゐるのに、次に出來た法

經錄・靜泰錄は白延譯に除災患經一卷が存在するとして出してゐる。こゝでは前の

字がないし、この兩經は大同小異だとしてあるが、白延譯本は當時存在しなかつた

し、出三藏記に見ゆとしてゐる。以後の經錄も費長房錄を襲つてゐる。思ふに白延譯

除、舒、鋤、小

①大聖妙吉祥菩薩說除災教令輪の下を見よ。

除災患經 ①(日) Jo-sai-gen-kyō. (支) Ch'i-t'ien-huan-ching. ②一卷、第一

③(支) Ch'i-t'ien-huan-ching. ④一卷、第一

除死難大事祈禱祕事口傳 ①(日) Jo-shi-nan-dai-ji-ki-to-hi-ji-ka-

除睡鈔 ①(日) Jo-sui-shō. ②八卷 ③

除難心鏡 ①(日) Jo-nan-shin-kyō. ②九卷

舒州峴公山釋和琛事述 ①(日) Jo-shū-ken-kō-zan-shaku-chi-san-ji-se-

智證大師請來目錄 ①(日) Jo-kyū-sen-ge. ②一册

小阿育王經 ①(日) Shū-a-i-ku-ō-kyō. (支) Hsi-o-ē-yü-wang-ching. ②一卷

小阿差末經 ①(日) Shō-a-sha-ma-kyō. (支) Hsi-o-ē-ch'a-mo-ching. ②二卷

③(支) Hsi-o-ē-ch'a-mo-ching. ④二卷

小阿闍梨作法 ①(日) Shō-a-ji-ri-sa-hō. ②一帖 ③存 ④寫本(金剛三昧

小阿彌陀經義記 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-gi-ki. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-i-

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

小阿彌陀經古述記 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-kō-shaku-ki. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-ku-chi-ki.

小阿彌陀經西資鈔 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sai-sai-shō. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-hsi-tzū-ch'ao.

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

小阿彌陀經疏 ①(日) Shō-a-mi-da-kyō-sho. (支) Hsi-o-ē-mi-to-ching-su.

阿彌陀經疏 ①一卷 ②存、大正三七・三四八No.1739、縮印一七三四・一〇、明北1396百、淨土宗全書第五、Nj.1603 ③新羅元曉(眞平王三十九A. D. 617—)述 ④阿彌陀經疏の下の見よ。⑤〔參考〕新編諸宗教藏總錄第一

小阿彌陀經疏 ①(日)Shō-a-mi-da-kyō-shō. (支)Hsiao-e-mi-to-ching-su. 阿彌陀經疏 ②一卷 ③存、大正三七・三五〇No.1760、己續一・三三・二、淨土宗全書第五 ④智圓(太平興國元—乾興元 A. D. 976—1022)述 ⑤宋天禧五(A. D. 1021) ⑥阿彌陀經疏の下の見よ。⑦〔參考〕新編諸宗教藏總錄第一

小阿彌陀經抄 ①(日)Shō-a-mi-da-kyō-shō. ②入阿 ③〔參考〕總淨土依憑章疏

小阿彌陀經鈔 ①(日)Shō-a-mi-da-kyō-shō. (支)Hsiao-e-mi-to-ching-chi=ao. ②五卷科一卷 ③缺 ④元傳述 ⑤〔參考〕新編諸宗教藏總錄第一

小阿彌陀經鈔 ①(日)Shō-a-mi-da-kyō-shō. (支)Hsiao-e-mi-to-ching-chi=ao. ②二卷 ③缺 ④智首述 ⑤〔參考〕新編諸宗教藏總錄第一

小阿彌陀經新疏 ①(日)Shō-a-mi-da-kyō-shin-shō. (支)Hsiao-e-mi-to-ching-shin-shū. ②二卷 ③宋仁岳(淳化三—治平元A. D. 992—1064)述 ④〔參考〕新編諸宗教藏總錄第一

小阿彌陀經新疏指歸 ①(日)Shō-a-mi-da-kyō-shin-shō-shi-ki. (支)Hsiao-e-mi-to-ching-shin-shu-shi-ki. ②二卷科一卷 ③宋仁岳(淳化三—治平元A. D. 992—1064)述 ④〔參考〕新編諸宗教藏總錄第一

小阿彌陀經通贊疏 ①(日)Shō-a-mi-da-kyō-tsū-san-shō. (支)Hsiao-e-mi-to-ching-tung-san-shū. 阿彌陀經通贊疏 ②二卷或三卷 ③存、大正三七・三二九No.1738、己續一・三三・一、淨土宗全書第五、淨土古逸十書第五 ④唐窺基(貞觀六—永淳元 A. D. 632—682)述 ⑤阿彌陀經通贊疏の下の見よ。⑥〔參考〕新編諸宗教藏總錄第一

小安般舟三昧經 ①(日)Shō-an-han-jū-san-mai-kyō. (支)Hsiao-an-pan-chou-san-mei-ching. ②一卷 ③缺 ④魏吳代失譯 ⑤〔參考〕出三藏記第四、法經錄第一、三寶紀第五、仁壽錄第五、靜泰錄第五、內典錄第二、武周錄第一、開元錄第二、第一五、貞元錄第三、第二五

小郁迦經 ①(日)Shō-ika-ka-kyō. (支)Hsiao-yi-chia-ching. ②一卷 ③缺 ④西晉竺法護(—太始二—建興元A. D. 266—313—)譯 ⑤〔參考〕仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第一四、貞元錄第二四

小因明論抄 ①(日)Shō-in-myōron-shō. (支)Hsiao-yin-ming-lun-chiao. ②一卷 ③缺 ④〔參考〕奈良朝現在一切經疏目錄2124

小雲棲詠物詩 ①(日)Shō-un-sei-utsu-no-shi. 雲棲詠物詩 ②二卷 ③存 ④大典顯常(寛永一一—享保元A. D.1634—1716)述 ⑤寛政二刊 ⑥(駒大)

小雲棲稿 ①(日)Shō-un-sei-kō. ②十二卷 ③存 ④大典顯常(寛永一一—享保元 A. D. 1634—1716) ⑤寛政八刊 ⑥(龍大、研史)

小雲棲消息集 ①(日)Shō-un-sei-shō-soku-shū. ②一卷 ③存 ④大典顯常(寛永一一—享保元 A. D. 1634—1716) ⑤〔參考〕禪籍目錄

小雲棲放生錄 ①(日)Shō-un-sei-hō-jō-foku. (支)Hsiao-yun-chi-fang-shēng-lu. ②一卷 ③存、武林掌故叢編第一〇 ④嘉慶九年(A. D. 1804)以來、武林の居士等の發願により創められし西湖小雲棲禪院に於ける放生法要に關する諸記を集録したものである。放生會は支那では唐宋以來盛行はれたが殊に江南西湖の地方は頗る盛であった。小雲棲とは、念佛放生の業を盛に勧めし蓮池大師雲棲株宏に對して名づけし所である。

小雲棲放生記 揚日禮。(二)又、吳錫麒。(三)又、江步青。(四)小雲棲放生會詩、劉墀。(五)又、朱珪。(六)又、梁同書。(七)汪志伊。(八)秦瀛。(九)吳錫麒。(一〇)馮世恩。(一一)苦茶居士示子作、沈舒華。(一二)後記、釋與楫。

尚最後に道光以來江南地方阿片事變長髮賊の亂裏にこの地が火藥の製造所となり、又賊軍の手中に歸し、光緒になりて佛事の復興を見しことを記してゐる。(塚本善隆)

小閱藏知津 ①(日)Shō-etsu-ō-chi-shin. ②四卷 ③存 ④珂然(寛文九—延享二A. D. 1669—1745)撰 ⑤正徳五刊 ⑥(正大、一〇七・一八、一九七)(高大、寄・一・二〇)(谷大餘大・三七八)(龍大、二〇二・一四)

小緣經 ①(日)Shō-en-kyō. (支)Hsiao-yün-ching. (日)D. 27 Aggrāna S. ③存、長阿含經第六(大正一・三六No.15)

小儀軌 ①(日)Shō-gi-ki. 佛祖正傳小儀軌 ②一卷 ③存 ④〔參考〕禪籍目錄

小經考 ①(日)Shō-kyō-ka. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大)

小經講義隨聞記 ①(日)Shō-kyō-kyō-gi-zui-mon-ki. ②二卷 ③存 ④圓解(明和四—天保一一A. D. 1767—1840)述 ⑤寫本(龍大)

小經讀攝釋 ①(日)Shō-kyō-san-shō-shaku. ②一卷 ③存 ④道隱(寛保元—文化一〇A. D. 1741—1813)述 ⑤寫本(龍大)

小經讀法話 ①(日)Shō-kyō-san-hō-wa. ②一卷 ③存 ④法海(明和五—天保五A. D. 1768—1834)述 ⑤寫本(龍大、一〇五五・六五)

小經私考 ①(日)Shō-kyō-shi-ki. ②一册 ③存 ④寫本(哲、さ・四・中・三)

小經直談要註記 ①(日)Shō-kyō

名所行發⑩(名庫書)者藏所現⑪ 月年の刊寫⑫(書考參書釋社)書末⑬ 説解容内⑭ 代年作者⑮ 香著⑯ 缺存⑰ 數卷⑱(名書)名題⑲ 號略字數

直談要註記 ③存、淨土宗全書第一三 ④聖聰(貞治五—永享一) A. D. 1366—1440. 一説永享一(一或應永二四寂)述 ⑤永享七(A. D. 1435)

⑥本書は著者が大經直談要註記と同じく、法然の經釋に則つて阿彌陀經の文意を註解義釋したものである。卷初の序に掲げる述作の由来を見るに師が淨教に歸値した宿因の厚きを痛感して、先達の勸めに依り經の宗旨を知り、法然の高判を祖述し、記主の妙釋を參照し、更に外數多の經釋疏籍を集覽引用して成れるものである。蓋し本書は能く古師の釋義を一所に集め、先開の經趣を取り、更に正統淨土宗義に立脚せる可成詳密なる私釋私勸を施した晩年に成れる力作と云ふべきである。而してその草筆中眼疾に侵されたるを以て資慶竺の筆受せるものである。

説總標分として註解し、第七卷に阿彌跋致より舍利弗我見是利乃至彼國土に至る章文、第八卷に舍利弗我今者以下の經終に至る章文を施釋し流通の旨を明し最後に本書講述の緣由を示してゐる。

思ふに本書は施釋すべき主要なる小經の文々句々を詳解せると共にその證示する念佛を以て、隨自の正説、生因の本願、證誠の妙行たる義邊を委説したる小經の解説書として相當敬重すべきものと思ふ。⑥慶安元刊 弘治三刊 ⑦(谷大、宗大・二九八) (龍大、二四一五・一七〇) (正大、一一五四・六三) (森本眞順)

小經釋 ①(日) Sho-kyo-shaku. 阿彌陀經釋 ②存、漢語燈錄第三(大正八三No. 2611)法然上人全集 ③源空(長承二—建曆二) A. D. 1133—1212)述 ④阿彌陀經釋(下)を見よ。⑦(參考) 淨土眞宗教典志第一

小經疏鈔首書 ①(日) Sho-kyo-sho-shu-shu-sho. ②四卷 ③玄貞(一寶永二 A. D. 1705—)作 ④(參考) 淨土眞宗教典志第二

小經聞持記引證 ①(日) Sho-kyo-mon-jik-i-hin-sho. ②二卷 ③峻諦(寛文四—享保六) A. D. 1664—1721)作 ④(參考) 淨土眞宗教典志第二

小經聞持記補科 ①(日) Sho-kyo-mon-jik-i-ho-kwa. ②三卷 ③性海(正保元—享保一) A. D. 1644—1727)作 ④(參考) 淨土眞宗教典志第二

小經要註記 ①(日) Sho-kyo-yo-chi-ki. 阿彌陀經直談要註記、小經直談要註記

②八卷 ③存、淨土宗全書第一三 ④聖聰(貞治五—永享一) A. D. 1366—1440)述 ⑤小經直談要註記の下を見よ。⑦(參考) 淨土正依經論書籍目錄

小經略記 ①(日) Sho-kyo-ryaku-ki. 阿彌陀經略記 ②一卷 ③存、大正五七・六七三No. 2310、大日本佛教全書第三一、惠心僧都全集第二 ④源信(天慶五—寛仁元) A. D. 942—1017)述 ⑤阿彌陀經略記の下を見よ。⑦(參考) 淨土眞宗教典志第一

小供養法 ①(日) Sho-ku-yo-ho. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院) (寶善提院)

小空經 ①(日) Sho-ku-kyo. (支) Hsiang-kung-ching. (日) Xi. 121. Gaia-Sūnātā. ②存、中阿含經第四九(大正一・七三六 No. 26, 193)

小灌頂阿闍梨作法 ①(日) Sho-kan-jō-ari-hō. ②一帖 ③存 ④仁隆(天養元—元久二) A. D. 1141—1205)作 ⑤元亨元寫 ⑥(高大、寄・一・六八)

小觀世樓炭經 ①(日) Sho-kwan-ze-to-tan-gō. (支) Hsiao-kuan-shi-tou-tan-ching. ②一卷 ③缺 ④魏吳代失譯 ⑦(參考) 出三藏記第四、三寶紀第五、內典錄第二、武周錄第一、開元錄第二、第一五、貞元錄第三、第二五

小溪和尚錄 ①(日) Sho-kei-ō-shū. ②一卷 ③存 ④小溪和尙語 ⑦(參考) 禪籍目錄

小五濁經 ①(日) Sho-go-jok-kyō. (支) Hsiao-wu-cho-ching. ②一卷 ③失

譯 ⑦(參考) 出三藏記第三

小山記 ①(日) Sho-zan-ki. ⑦(參考) 本朝台祖撰述密部書目

小參之抄 ①(日) Sho-san-no-sho. ②一卷 ③存 ④(參考) 禪籍目錄

小子訓 ①(日) Sho-shū-kun. ②一卷 ③存 ④安政四刊 ⑤(正大、一〇八・四八) ⑥(支) Sho-shi-kwan. (支) Hsiao-shih-kuan. 修習止觀坐禪法要、坐禪法要、童蒙止觀 ⑦一卷或二卷 ⑧存、大正四六・四六二No. 1913、縮陽九三三二・八、明北 1533途、明南 1533跋、Zi. 1540

隋智顛(中大通三—開皇一七) A. D. 531—597)述

⑥本書は、また一にこれを童蒙止觀とも名け、天台智顛禪師が、その俗見陳録のために、大部止觀の梗概、入道の樞機を記すところである。即ち、泥洹の法は入門乃ち多途なりと雖も、その急要を論ずれば止觀の二法を出でず。止はこれ心説を愛養するの善資、觀は即ち神解を策發するの妙術にして、此の二法は常に均等圓備すべきものたることを示し、而して次に十科を立て、止觀修習の要諦を説いてある。いはゆる十科とは即ち具緣、訶欲、棄蓋、調和、方便、正修、善發、覺魔、治病、證果の十章をいふ。

⑦(參考) 入唐新求聖教目錄、傳教大師將來台州錄、新編諸宗教藏總錄卷第三、東城傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第一、奈良朝現在一切經疏目錄2623

小止觀抄 ①(日) Sho-shi-kwan-sho.

⑦(參考) 入唐新求聖教目錄、傳教大師將來台州錄、新編諸宗教藏總錄卷第三、東城傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第一、奈良朝現在一切經疏目錄2623

より諸菩薩衆亦復如是に至る章文を正報廣

より諸菩薩衆亦復如是に至る章文を正報廣

より諸菩薩衆亦復如是に至る章文を正報廣

①(名) ②(名) ③(名) ④(名) ⑤(名) ⑥(名) ⑦(名) ⑧(名) ⑨(名) ⑩(名) ⑪(名) ⑫(名) ⑬(名) ⑭(名) ⑮(名) ⑯(名) ⑰(名) ⑱(名) ⑲(名) ⑳(名) ㉑(名) ㉒(名) ㉓(名) ㉔(名) ㉕(名) ㉖(名) ㉗(名) ㉘(名) ㉙(名) ㉚(名) ㉛(名) ㉜(名) ㉝(名) ㉞(名) ㉟(名) ㊱(名) ㊲(名) ㊳(名) ㊴(名) ㊵(名) ㊶(名) ㊷(名) ㊸(名) ㊹(名) ㊺(名) ㊻(名) ㊼(名) ㊽(名) ㊾(名) ㊿(名)

③三册 ④存 ⑤元政(元和九)寛文八A.D.1693-1698)撰 ⑥明曆三刊 ⑦(立大、A二・二〇八)(哲、や・六・右・一)(高大、や・六・右・一)

**小次第** ①(日)Sho-shi-dai. 安祥流小次第 ②一帖 ③存 ④慶長二寫 ⑤(金剛三昧院)

**小次第目録** ①(日)Sho-shi-dai-mokku-yoku. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫(寶善提院)

**小須頼經** ①(日)Sho-shu-rai-kyō. (支)Hsiao-hsu-lai-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤(參考) 出三藏記第三、法經錄第一、仁壽錄第五、靜泰錄第五、武周錄第一二、開元錄第二、第一四、貞元錄第四、第二四

**小十二門經** ①(日)Shō-jū-ni-mon-kyō. (支)Hsiao-shih-erh-mên-ching. ②一卷 ③缺 ④後漢安世高(一建和二建)譯 ⑤(參考) 仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第一五、貞元錄第二四

**小消息講說** ①(日)Shō-shō-sōka-kyō-sōsu. ②二卷 ③存、三法語講說之内 ④託阿法洲、明和二天保一〇A.D.1765-1839) ⑤天保一〇刊 ⑥龍大、二六八二・一一〇(谷大、宗大五五五)(正大、一五四・三〇六・三五〇)

**小消息托事辨** ①(日)Shō-shō-sōka-tokuri-jihen. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、二〇四・二二一)

**小乘位義** ①(日)Shō-jō-i-gi. ②一

卷 ⑤最澄、神護景雲元一弘仁一三A.D.767-822)撰 ⑥(參考) 山家祖徳撰述篇日集卷上

**小乘教大意** ①(日)Shō-jō-kyō-tai-i. ②一卷 ③存 ④村上專精(嘉永四一昭和四A.D.1851-1999)著 ⑤明治二九刊 ⑥龍大、二五三・五)

**小乘五位斷道** ①(日)Shō-jō-go-i-dan-dō. ②一卷 ③存 ④明治二九刊 ⑤正大、一〇七・二四六)

**小乘集** ①(日)Shō-jō-shū. (支)Hsiao-ch'ên-ehi. ②缺 ③(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2273

**小乘大乘分別鈔** ①(日)Shō-jō-dai-jō-fun-betsu-shō. ②一卷 ③存、日蓮聖人御遺文之内、日蓮聖人全集第三之内 ④日蓮、貞應元一弘安五A.D.1292-1293)述 ⑤文永一〇(A.D.1273)

⑥日蓮が佐渡の配所から富木氏(又は南條氏)に送つた書。小乘大乘の區別は相對的なもので、外道の教に相對すれば小乘も大乘である、これと同様に法華經、天台宗に相對すれば他の大小權實顯密の法經諸宗も悉く小乘經小乘宗である。其は法華經に十界成佛の因たる一念三千の法門があるからで、他經には是れが無い。故に法華經の二大特長は二乗作佛久遠實成であることは誰人も異議の無いところであるが、若し然らば他經に許してある二乗以外の成佛は眞の成佛ではない。然るに諸宗の學者は尤も自宗によつて成佛できるもの、如く鎌倉殿や一般世人を欺いてゐるのであるといふのが

本書の大意である。尙ほ本書の末尾は夙く遺失せられたものと思はれる。

⑦(參考) 録外徵考卷上、録外考文第三(馬田行啓)

**小乘入道位** ①(日)Shō-jō-nyūdō-i. (支)Hsiao-ch'ên-shih-jia-tao-wei. ②一卷 ③(參考) 入唐新求聖教目錄

**小乘部諸經の解題及び正文** ①(日)Shō-jō-bu-shō-kyō-no-kai-i-dai-ryō-obi-shū-bun. ③存、大藏經要義第七本多日生(一昭和六A.D.1931)著

**小乘佛教概論** ①(日)Shō-jō-buk-kyō-gairon. ②一卷 ③存 ④高井觀海著 ⑤昭和三刊 ⑥正大、一〇七・二六〇・二六八・三一七(高大、奇・一・二〇)(京專) ⑦龍大(谷大、餘洋・九三二)

**小乘佛教史論** ①(日)Shō-jō-buk-kyō-shiron. ②一卷 ③存 ④舟橋水哉著 ⑤明治三七刊 ⑥谷大、餘大・三八一六・餘洋・一四九(龍大、二九二・二四)(正大、一〇三・一七)(立大、B一六・一四・一九)(帝國、三一九・五二)

**小乘名目** ①(日)Shō-jō-myo-moku. ②一帖 ③存 ④嘉吉元寫 ⑤(寶壽院)

**小申日經** ①(日)Shō-shin-nichi-kyō. (日)Hsiao-shen-jih-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤(參考) 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

**小清規翼** ①(日)Shō-shin-gi-yoku. ②一册 ③存 ④(哲、や・六・一)

**小施餓鬼會疏玄談** ①(日)Shō-ke-gu-e-kyō-kae-shū-entan. ②一卷 ③存 ④寫本(正大一〇八・一〇八)

**小施餓鬼集** ①(日)Shō-ke-gu-ki-shū. ③存 ④必 ⑤(科註)小施餓鬼集 ⑥三卷 ⑦存 ⑧必 ⑨(天利)元祿頃A.D.1691-1703) ⑩天和二刊 ⑪龍大、二六一・九・三二)

**小双紙** ①(日)Shō-sō-shi. 宗要集私見聞且那流 ②四卷 ③存

**小叢林清規** ①(日)Shō-sō-rin-shin-i. ③存、大正八一・六八八No. 2579 ④無著道忠(承應二一延享元A.D.1653-1714)撰 ⑤貞享元(A.D.1684)甲子十二月

⑥禪門僧衆の依違すべき儀式軌範を示したものである。撰者は大叢林に大清規があるが如く、小叢林に小清規なかるべからずとなし、特に小叢林の儀規として之れを示されたものである。日次は通用清規第一、日分清規第二、月分清規第三、臨時清規第四に分ち、最後に同向、同式あり。通用清規第一には進退起坐の作法、住持衆僧侍香の動作等を示し、日分清規第二には毎日の念經晚課より諸風經及び坐禪に就て指示し。月分清規第三には正月より十二月に至る諸法要の作法を記し。臨時清規第四には得度儀規より相看茶禮垂示入室に及ぶ。下巻には諸種の同向を記載し、最後に得度受戒圖入室圖等六十四の圖式が擧げられてある。

⑦(胸大) ⑧京都柳枝軒 (安藤文英)

**小叢林略清規** ①(日)Shō-sō-rin-ryaku-shin-i. ③存



存 ④無著道忠(承應二)延享元A.D.1693—1711撰 ⑤真享元刊 ⑥(駒大)(哲)・三・中・一六(京大)印哲・〇・一三)

**小傳法院供養願文** ①(日) Sho-dem-bo-in-ku-ryō-gwan-mon. ②一帖

⑦覺鏡(嘉保二)康治三A.D.1095—1143) [参考] 諸宗章疏錄第三

**小道地經** ①(日) Sho-do-ji-kyō. (支) Hsiao-tao-ti-ching. ②一卷 ③存、大正一五・三六No. 608、縮景六、正二六・六、北1032、南1948、元104、明北1331、清1331、麗1035、法1016、明南1126、舊N. 1338 ④後漢支曜(一中平二A.D.186—)譯

⑤修行持息等の法を説くものである。道人、息を求めて息を得ないのは四因縁あるによる。息を得んと欲するならば必ず坐行の二事、生死の二因縁を知らなければならぬ。又道人、求めて道に向ふには必ず過去の念事を知らねばならない。譬へば稻を種うるは稻を收せんと念じ、豆を種うるは豆を收せんと念ずる如く、十悪は十惡哉を種うるのである。

⑦[参考] 法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四 (三好鹿雄)

**小泥洹經** ①(日) Sho-ni-on-kyō. (支) Hsiao-ni-yuan-ching. ②一卷 ③失譯 ④[参考] 武周錄第一

**小兒往生開疑鈔** ①(日) Sho-ni-ō-jō-ki. ②二卷 ③存 ④[参考] 淨土真宗教典志第二 ⑤享保二二刊 ⑥(龍大、一五〇二・一五三)

**小兒往生記** ①(日) Sho-ni-ō-jō-ki. ②一卷 ③存、真宗全書第六二 ④法霖(元祿六)寛保元A.D.1693—1741)述 ⑤元文四(A.D.1738)

⑥小兒の淨土往生は可能なりや否やは徳川中期に於ける眞宗學界の一問題であつた。即ち寛文年中に本願寺派に於て規定せられたる小兒教化の儀式、所謂「名代頼み」による小兒の往生を肯定する説と否定する説との論争が行はれたのであるが、本書はその肯定説の代表的なものである。(大原性實)

**小兒往生之記** ①(日) Sho-ni-ō-jō-ki. ②一冊 ③存 ④深勵(寛延二)文化一四A.D.1749—1817)述 ⑤文化六寫 ⑥(谷大、宗大三九一三)

**小兒往生辨** ①(日) Sho-ni-ō-jō-ki-ben. ②一卷 ③存、真宗全書第六二、説林乾冊之内

④延享三年の夏、慈詮といふ人に對して當時紛々の論議ありし小兒往生の得否に對する見解を示せるものである。肯定説の一種であつて、特に本書所説の特徴は胎教説を高潮せることである。即ち「止觀輔行」八の「子初在胎、依於父母息、故俗名子以之爲息」の文や、補經「氣在二人身中、所謂累以生也」の文を引き、又腹中女聽經の胎兒歸佛開法の説をかりて、母子は異體同氣であるから、母の信仰がそのまゝ、子の信仰となる旨を述べ、従つて名代頼往生は可能なりと論じてゐる。(大原性實)

**小兒往生辨問記** ①(日) Sho-ni-ō-jō-ki-ben-mon-ki. ③存 ④寫本(龍大、一七四四)

**小兒往生問答** ①(日) Sho-ni-ō-jō-ki-mon-do. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、宗大・二六一九)

**小兒往生理詮** ①(日) Sho-ni-ō-jō-ki-ri-shen. ②一卷 ③桂華南麟作 ④元文六(A.D.1741)四月 [参考] 淨土眞宗教典志第二

**小兒聞法即解經** ①(日) Sho-ni-ō-jō-ki-on-hō-ge-kyō. (支) Hsiao-eh-wen-tai-chi-chi-kyō. ②一卷 ④失譯 ⑥六度集經第六卷の抄出。⑦[参考] 出三藏記第四、三寶紀第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、內典錄第一、開元錄第一六、貞元錄第二六

**小兒聞名義** ①(日) Sho-ni-ō-jō-ki-myō-gi. ②一卷 ③存 ④柔遠(寛保二)寛政一〇A.D.1742—1798)述 ⑤寫本(龍大、一七五・九四)

**小般泥洹經** ①(日) Sho-hatsu-nai-on-kyō. (支) Hsiao-pan-ni-yuan-ching. ②一卷 ③缺 ④後漢安世高(一)建和二)建寧三A.D.148—170)譯 ⑦[参考] 開元錄第一五、貞元錄第二五

**小般泥洹經** ①(日) Sho-hatsu-nai-on-kyō. (支) Hsiao-pan-ni-yuan-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④[参考] 法經錄第二、仁壽錄第四、內典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八

**小部雜集** ①(日) Sho-bu-zas-shū. ②一卷 ③存

④二十邪義、帖外七種奉讚、顯如消息(天正四年)、證如消息、枕石寺詩(惠雲)、顯如消息四通、法如詠歌二首、古教奇屋法語(法霖)、下向衆白、文如御直諭(寛政三年)、功存消息(琉球尼講宛)、法霖消息(下向衆宛)を輯む。

⑤寫本(龍大、一〇三・五〇)

**小部集** ①(日) Sho-bu-shū. ②一卷 ③存、祕法法門集下篇、眞宗大系第三六之内

④短篇九種を集む。(一)「開山聖人御遺書」は五條から成る、自性安心で彌陀を我心の異名とし、明々たる本心にもとづくを他力に歸すといふ。又、男女の俗と席を同じ柔和を以て衆生をいたはり云々といふは怪しく、元より邪義の書である。(二)「根本之觀。大日彌陀の根本を見開くと根本の觀と名け、眞言の金胎兩部を持ち、だして怪しい説をなし、能々祕密形を觀すべき也、是本願に見準、南無阿彌陀佛」と結んでゐる。(三)「六字御傳書。名號を萬法の本源として凡てを之におさめ、南の字に阿含經がこもり、無の字に華嚴經がこもり……又、南の字に伊勢兩宮がこもり、無の字に熊野三社大權現がこもり……又、日月星晨も六字の光なりと怪しい説をなし、一會念佛するものは現世安穩後生攝取不捨と論じてゐる。末尾に建曆元年二月源空在判とあるが、もとより偽書である。(四)「一枚抄請文。前の「開山聖人御遺書」を取意したやうな書で、内容粗々同じ、兩書ともに武州報恩寺に祕傳すといふが元より信じ難い。(五)「阿彌陀本原經、神を創造主とし、その神を

名所行發⑩ (名庫書)者藏所現⑨ 月年の刊寫⑧ (書考書誌釋註)書末⑦ 説解容内⑥ 代年作者⑤ 者著④ 缺存③ 數卷② (名書)名題① 號略字數

印度では阿彌陀といひ、支那では上帝といひ、我國では國常立尊といふ、而して萬物は神の變化であるが、其中人間が最も靈的なものであるから、此の意を體して稱名せよと論じてゐる。(六)十八願。蓮如上人の御文を惡しく解して三業歸命一益法門のやうな説を述べてゐる。(七)無題。規覺、如信、覺如、蓮如上人の語として自性安心を述べてゐる。(八)無題。法然上人の一枚起請文を冗長に引きのばしたるもの、末尾に建曆二年源空御判とあるが、もとより偽書である。(九)五藏曼陀羅。五藏五行等を諸佛諸經等に配圖したものである。以上九篇何れも邪義秘法門の書である。

(安井廣度)

小部集釋

①(日)Shō-bu-shū-shaku. 天台小部集釋 ②一卷 ③存、大日本佛教全書第二四 ④敬光(元文五—寛政七、D. 1740—1795)校 ⑤安永七刊 ⑥帝國(一九六・七三)

小部集要十六部

①(日)Shō-bu-shū-yō-jū-roku-bu. ②四册 ③先啓(享保五—寛政九、A. D. 1720—1797)編 ④寶曆六(A. D. 1756)丙子

⑤淨土真宗教典志に曰く初二册蓮如師作、後二册實如師作、今案各部題目、恐是後人所安、一部不過數紙、要之帖外消息類耳、所撰諸文亦不純粹と、

小部輯釋

①(日)Shō-bu-shū-shaku. ②一卷 ③存 ④法華十不同並密號、理觀啓白文、四重禁戒祕事、劫章頌并鈔附六種釋、蓮花三昧經

八句祕釋付字輪觀、大日經疏緣起を輯む。

⑤延寶九刊 ①(龍大、二六六・八・一〇)(正)大、一四三二・二七三(立大、一四三二・二七二)

小部類聚

①(日)Shō-bu-rui-jū. ②二卷 ③存 ④(京專)

小法滅盡經

①(日)Shō-bō-metsu-jō. ②一卷 ③存、大正一三・一一一八No. 396(縮辰一〇、正一二・五、北五十四行、南三十三行、元4223行、明北6666景、清6666景、慶2777景、天3333行、指8111景、法5122景、至4555景、明南2777、N. 470 ④失譯 ⑤法滅盡經の下を見よ。

小法沒盡經

①(日)Shō-bō-motsu-jō. ②一卷 ③缺 ④西晉竺法護(一太始二—建興元、A. D. 266—313)譯 ⑤(參考)仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第一四、貞元錄第二四

小本起經

①(日)Shō-bon-gi-kyō. ②二卷 ③缺 ④後漢支曜(一—中平一、A. D. 181—)譯 ⑤第一譯 ⑥(參考)仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第一五、貞元錄第二四

小本起經

①(日)Shō-bon-gi-kyō. ②二卷 ③缺 ④(支)Hsiao-pen-chi-king. ⑤二卷 ⑥失譯 ⑦(參考)出三藏記第四、三寶紀第五、內典錄第二、武周錄第一

小本眞宗法要御上木一件

①(日)Shō-hon-shū-hō-jō-go-jō-bo=ku-ik-ken. ②一卷 ③存 ④安政二寫

龍大、別置)

小本本典開版記錄

①(日)Shō-bon-hon-ten-kai-han-ki-roku. ②一卷 ③存 ④弘化二寫 ⑤(龍大、別置)

小本六要鈔開版記錄

①(日)Shō-hon-roku-yū-shō-kai-han-ki-roku. ②一卷 ③存 ④安政四寫 ⑤(龍大、別置)

小品

①(日)Shō-bon. ②國譯小品 ③存、國譯大藏經論部第一四 ④立花俊道譯

小品解題

①(日)Shō-bon-kai-dai. ②存、國譯大藏經論部第一四 ④立花俊道譯

小品般若經

①(日)Shō-bon-han-nyā-kyō. ②(支)Hsiao-p'in-pan-jō-ching. 摩訶般若波羅蜜經、小品摩訶般若波羅蜜經、小品般若波羅蜜經、小品經、新小品經 ③十卷 ④存、大正八・五三六No. 227、正五・五、北二潛、南二潛、元二潛、明北の鱗、清の鱗、麗の鱗、天の鱗、法の鱗、至の鱗、明南の鱗、N. 6 ⑤鳩摩羅什(建元二—義熙九、A. D. 344—413)一說義熙中寂)譯 ⑥寛文一三刊 ⑦(高大、寄・一・二三)

小品般若波羅蜜經

①(日)Shō-bon-han-nyā-ha-ra-mik-kyō. ②(支)Hsiao-p'in-pan-jō-ching. 摩訶般若波羅蜜經、小品摩訶般若波羅蜜經、小品般若波羅蜜經、小品經、新小品經 ③十卷 ④存、大正八・五三六No. 227、正五・五、北二潛、南二潛、元二潛、明北の鱗、清の鱗、麗の鱗、天の鱗、法の鱗、至の鱗、明南の鱗、N. 6 ⑤鳩摩羅什(建元二—義熙九、A. D. 344—413)一說義熙中寂)譯 ⑥寛文一三刊 ⑦(高大、寄・一・二三)

經	題	卷	數	譯	時	譯	者	存	缺
(一)道	行	經	一	後漢熹平元年(又、光	竺佛朗	存	缺		
(二)道	行	經	十	和二年以前)	支婁迦讖	存	存		
(三)大	明	經	六	後漢光和二年	支婁迦讖	存	存		
(四)吳	品	經	五	吳黃武年間	支婁迦讖	存	存		
(五)更	出	經	七	吳太元元年前後	康僧會	缺	缺		
(六)經	般若波羅蜜道行	經	二	西晉太始八年	竺法護	缺	缺		
(七)大	智度	經	四	晉惠帝時	衛士度	缺	缺		
				東晉代	祇多密	缺	缺		

pin-pan-jō-po-to-mi-ching. (梵) Aṣṭāṣṭika-prajñāpāramitā (Ed. by Rajendralala Mitra, Calcutta, 1898). (藏) Hhags-pa Ges-rab kyi pha-tol-tu phyin-pa br-gyad-ston-pa. 小品經、新小品經、小品般若經、摩訶般若波羅蜜經、小品摩訶般若波羅蜜經 ③十卷 ④存、大正八・五三六No. 227縮月六、正五・五、北二潛、南二潛、元二潛、明北の鱗、清6鱗、麗8鱗、天7鱗、法7鱗、至7鱗、明南6鱗、N. 6 ⑤後秦、鳩摩羅什(建元二—義熙九、A. D. 344—413)一說義熙中寂)譯 ⑥正しくは『摩訶般若波羅蜜經』と云ふが、同名の所謂『小品般若經』と區別せむがために『小品摩訶般若波羅蜜經』と呼ばれ、略して『小品般若波羅蜜經』又は『小品經』ともはれてゐる。 後秦鳩摩羅什の譯する所であつて、弟子僧叡の序文によれば、弘始十年(A. D. 408)二月六日より同年四月三十日に互つて譯出せるものである。本經の異譯に關しては、一般に次表の如き十二種、七存五缺といはれてゐる。

(八) 摩訶般若波羅蜜經鈔	五 卷	符秦建元十八年?	曇摩鮮・竺佛念	存
(九) 摩訶般若波羅蜜經	七 卷	姚秦弘始十年	鳩摩羅什	存
(一〇) 大般若波羅蜜多經	十八卷	唐顯慶五年—龍朔三年	玄 奘	存
(一一) 佛母出生三法藏般若	二十五卷	宋太宗時	施 護	存
(一二) 波羅蜜多心經				
(一三) 佛母寶德藏般若波羅蜜經	三 卷	宋太宗時	施 護	存

これらの中、(二)に就いては、果して「小品般若經」の部黨に屬すべきか否か疑はしき點があり、(八)は漢譯よりの略出と思はれ、また(一三)の如きは「小品般若」の經意を偏して頌したものであつて、餘他異本と甚しく相異してゐる。尙現存七譯中羅什譯以前の三譯の譯時及び譯者に就いても、學者間に異説の存する所であるが、いまは且く『出三藏記集』、『歷代三寶記』等の古傳をそのまゝ襲踏して示したのである。上掲の表によつても知らるゝ如く、本經は、實に支那佛教における翻譯の初期より終期に及ぶまで、著名なる翻譯家の必ず手にした所であつて、これのみを以てしても、いかに本經が印度並に支那に於て重んぜられ來つたかを窺知することが出来るであらう。而して竺佛朗の『道行經』の譯出は、實に支那佛教史上に於ける大乘經典翻譯の嚆矢を爲せるものであり、なほ道安はこれに序並びに註を書いてゐるから、支那に於ける註經製序のことは、亦以て本經に端を發する所といはねばならない。本經が後漢代に既に漢譯されてゐることより考ふるに、本經の原本は遅くとも紀元前後には既にその成立を見てゐたものといはねばならない。「小品般若經」の原本との成立の前後に關しては、

道安や支道林の如きは本經が「小品般若」よりの抄出であるとみてゐたやうであるが、果して然るや否やは現在學者間にも異説の存する所であり、見方によつては寧ろ反對に、本經より「小品般若」へと増廣したともみられ得る點が存する。但しこのことはいま卒かに定め難い所である。本經に相當する原本は既に發見せられ、「Aśvaghosha-apariparimita」と題され、一八八八年、Mitra 氏によつてインドのカルカッタ府よりして出版されてゐる。なほ本經に對する Paribhadra の釋の梵本も發見されてゐる。漢譯諸本中、羅什譯以外の諸本に就いては茲に省略する。いま羅什譯『小品般若波羅蜜經』について、その講學の狀況を一瞥せむに、まづ如上、弘始十年(A.D. 400)羅什によつて本經が譯出さるゝや、弟子僧叡はこれが序を製し、中に於て彼は、「法華の鏡本は以て般若の冥を凝照す」と説き、また「法華、般若相待つて以て終りを期す」等といへるよりみれば、彼は本經を以て法華と同格に位せしめむとしたものとみられる。また同じく羅什の門下なる道生には、「義疏」なる註書あつて世に重用されてゐたことである。しかし、本經は元來その内容に於て「小品般若經」と殆んど同じであ

ることよりして、一般に般若思想の研究は『小品般若經』を主として爲されたがために、特に本經の講究註疏とはその著しいものを見るに至らなかつたやうである。さりながら、なほ宋代に於ては法業・法智・慧亮・曇斌等あり、また南齊の代には慧基・曇斐・智稱等のあるあつて、孰れも本經をよくしたてふ消息が傳へられてゐる。しかしこれらの人々も、やはり『小品般若』を以て主とするの傾向であつたから、特に本經のみの講究としていふならば寧ろ甚だ振はなかつた所といふべく、爾來般若思想への關心の薄らぐに従つて漸次本經の講讀も衰勢に赴いたやうである。最近(A.D. 1914)、Waller 氏は、前記 Mitra 氏出版の本經梵本中より、一・二・八・九・一三・一五・一六・一八・一九・二二・二七の十一品を獨譯し、般若經典に關する歴史的批判的解題を附し、「Tripiṭakaparimita」と題して出版した。泰西學界に直接本經の内容の一部を紹介したものととして、特に注目すべき所である。

本經は、すでに題して『般若波羅蜜經』と呼ばれてゐる如く、般若波羅蜜を説くを以てその根本的主張とする。般若(Brahmā)譯して智慧といひ、經驗的な智識(Vijñāna)とは全然異り、宗教的體驗に於ける直觀的智慧をいふのである。波羅蜜(Parimita)は、譯して「到彼岸」といひ、般若の智慧の究竟せる状態を指すのである。而して般若の智慧の内容は、一言以て蔽へば「空」(Śūnyatā)の一語に盡きる。よつて本經の内容は、主觀的には般若を以て、客觀的に

は空を以てその根本的立場とする。この點に於て本經は、餘他般若經典と共に、亦以て大乘佛教の根本的思潮の上に立つものといはねばならぬ。一經二十九品の總々たる教説は、孰れも、この般若・空の立場より觀ぜられたる世界觀・人生觀及び、その般若・空の立場に體達する實際的方法の敘述に外ならない。以下各品の梗概を述べてその内容の一斑を窺ふこととしよう。

〔第一卷〕(初品第一)佛者闍維山に在して千二百五十人の大阿羅漢と俱に居られた時、空行第一といはれた須菩提に向つて般若波羅蜜を説くべきことを命じたまふ。須菩提乃ち佛神力を承けて、般若波羅蜜を説く。特に五蘊皆空と體達するを以て菩薩の諸法無受三昧と名け、これによつて阿耨多羅三藐三菩提を得べしといひ、而も空は單なる空に非ずして有をも包含すべく、凡夫は無明のための故に諸法を如實に知らざるが故に、分別遍計する旨を説く。無明に採られた有無、斷常の二見を離れ、人法二無我の境に達せるを名けて菩薩摩訶薩とし、これを離れて更に摩訶衍即ち大乘はないとの意を明す。(釋提桓因品第二)時に釋提桓因等の諸天會座にあつて如上の説法を聽き、釋提桓因の請によつて須菩提は更に説法を續ける。曰く、般若波羅蜜は色受想行識の五蘊中に求むべからず、また五蘊を離れても求むべからず、般若波羅蜜は五蘊を離れても、また五蘊中にも求むべからざるが故に、と。色即是空、空即是色の奥義、こゝに遺憾なく説破される。〔第二卷〕

〔塔品第三〕會座の大衆は佛に向つて、若し人般若波羅蜜を離れざる時は、當にこの人を視ること佛の如くすべきかと問へば、佛は如是如是とて、燃燈佛の許に於ける佛自らの本生を説く。次いで般若波羅蜜を説く經典、並びに舍利・塔を崇拜供養すべきことが力説される。(明咒品第四)佛釋提桓因に向つて、般若波羅蜜は大明咒、無上咒たることを説き、種々の利益を述べ給ふ。また六波羅蜜中般若波羅蜜の最勝なることを説き給ふ。(舍利品第五)般若波羅蜜經の尊信と舍利供養とに於て前者を取るべきことが釋提桓因によつて説かれる。(第三卷)

〔佐助品第六〕前品に續いて佛更に般若經典書寫讀誦の功德を高調されると同時に、五蘊無常と説く小乘教義の所談を以て相似般若波羅蜜といひ、色を壞せざるが故に色無常を觀する。如き、大乘的空觀を以て正しく般若波羅蜜なりといふ。(廻向品第七)須菩提、彌勒に向つて、廻向隨喜も亦空によつて根柢づけられねばならないことを説く。「諸佛は取相の廻向を許したまはず」、而して取相分別は要するに有所得の立場なるが故に、有所得廻向は、亦「諸佛許したまはず」と説く。(泥犁品第八)舍利弗般若波羅蜜の徳を讃じて後、佛須菩提に向つて般若波羅蜜を誹謗し拒逆する者の地獄に墮せむことを説く。最後に五蘊と薩婆若との無二無異なることがいはれてゐる。(第四卷)〔歎淨品第九〕舍利弗によつて五蘊の畢竟淨なることが歎ぜられて後、更に須菩提は取相の著すべからざるを述べて空の義を

顯はす。また般若の行者たる菩薩は「一切衆生を度せむが爲めの故に、大莊嚴を發す」ことを説く。「般若經」の讀誦説法の日時を示し、また三轉法輪の説の片鱗を見せてゐることは注意すべき所である。(不可思議品第一〇)般若波羅蜜を信解する者を阿毘跋致とし、必ず授記を得べしとし、五蘊・十力等の不可思議を分別せざるを以て般若波羅蜜を行ずといふ。本品の最後の部分に本經の流傳を佛の預言される一段は、本經の成立年代及び地方を暗示してゐるとみられてゐる重要な部分である。(第五卷)魔事品第一一)般若修行に際しての種々の魔事を明す。(小如品第一二)恰も母の病に際しては衆子のこれを受ふる如く、十方諸佛皆その母たる般若波羅蜜を念ずると叙べ、更に佛は須菩提に向つて、般若は世間一切諸法の如實知にあることを説かれる。(相無相品第一三)諸法は恰も虚空の如く、作相なく、常住不變なることが説かれる。(船喻品第一四)恰も大海中に於て船の難破せむに、速かに木板浮囊等に纏らざれば直に溺死せむが如く、菩薩も亦直ちに般若波羅蜜を得ずんば、中道にして退没して二乘に墮せむといひ、般若を船に譬へて二乘に沈まむことを極力斥けてゐる點は、後世易行道として水路乘船の譬喩の出づる源としてみべきであらう。(第六卷)〔大如品第一五〕諸法甚深不來不去、一如不可得無障礙なる旨を明して後、般若の力によつて二乘に墮すべからずと説きつゝ、而も最後に於ては「如中に三乘人を求むるに差別有ること

と無し」と説いて、大乘一佛乘の思想を見せてゐる。(阿惟越致相品第一六)廣く阿惟越致の相を明す。就中惡魔沙門と化して菩薩の前に來り、般若波羅蜜の教説を指して「佛の説きたまふ所に非ず、皆是れ文飾莊校之辭なり。我が所説の經こそ眞に是れ佛語なり」とて、菩薩を誑惑するも、而も動ぜざる者、即ち阿惟越致の菩薩なりと説くあたりは、本經の成立當時、いかに大乘非佛説論の旺んなりしかを知るに足る文獻の一である。(第七卷)〔深功德品第一七〕佛、須菩提に向つて、阿惟越致菩薩の甚深功德の相を説き給ふ。曰く、「甚深相とは即ち是れ空の義、即ち是れ無相・無作・無起・無生・無滅・無所有・無染・寂滅・遠離・涅槃の義なり」と。本經所説の功德は、常に空の義によつて貫かれてゐる。また本品に於て「如來の所説は無盡・無量……なり、但だ名字方便を以ての故に説く」といへるは、まさに所謂言教の二諦説の源流と見られるであらう。(恒伽提婆品第一八)時に會中に恒伽提婆と名くる女人あり、佛に白して言く、「我れ來世に於て亦た衆生の爲めに斯の要を演説せむ」と。即ち金華を持して佛に散ずれば、佛微笑してこれを受け給ふ。阿難・佛の何故に微笑したまふやを問へば、佛は具さに恒伽提婆女の當來成佛のことを記したまふ。續いて更にまた須菩提の爲めに空三昧の義を詳説し給ふ。(阿惟越致覺魔品第一九)阿惟越致菩薩の相並びにその魔事を明す。(第八卷)〔深心求菩提品第二十〕六波羅蜜の行が高調され、更に特に般若

波羅蜜の相が叙べられてゐる。恭敬菩薩品第二一)菩薩般若波羅蜜を離れずば、惡魔も遂にその便を得ず、更に菩薩自ら衆生に謙下してこれを恭敬するの心を起すに至る。菩薩薩婆若を學ぶことの諸種の利益を擧げてゐる。(無慳煩惱品第二二)佛、須菩提に向つて、般若波羅蜜を學ぶ者は、煩惱心・慳心・破戒心等なきこと、並びに般若は大利たることを説き給へば、釋提桓因は曼陀羅華を化作して佛上に散ず、佛彼の爲に更に隨喜の福徳を明したまふ。(第九卷)〔稱揚菩薩品第二三〕佛、須菩提に對して、般若波羅蜜は無分別なるが故に、聲聞辟支佛は我を去ること遠し、阿耨多羅三藐三菩提は我を去ること近しと思ふべからざることを説き給ふ。般若波羅蜜を學ぶ菩薩は諸天諸佛に護念せられ阿毘跋致たり、菩薩は一切法を空と觀すること、及び一切衆生を捨てざることを二法を成就し、また説に隨つて能く行ずると諸佛に念せらるゝとの二法を成就するといひ、般若を學ぶ菩薩は、十方の諸佛その名字を讚嘆し給ふことが説かれる。(喝累品第二四)般若波羅蜜を學ぶことにより阿毘跋致に至り薩婆若に住すること等を叙べられた後、佛はこの般若を以て阿難に屬し給ふ。(見阿闍佛品第二五)佛神力を以て大衆に阿闍佛國に於けるかの佛の説法會座を觀見せしめ給ふことに因んで更に般若空の深理を高調し給ふ。(隨知品第二六)前品に引續いて般若空の無相にして廣大無邊なることを明す。(第十卷)〔薩陀波菴品第二七〕般若波羅蜜を行じて不惜

身命、求道の精進を勵みし薩陀波耆即ち常啼菩薩の有名なかの求道の物語りが爲される。(曇無竭品第二八)前品に引續いて、かの常啼菩薩、終に衆香城なる曇無竭菩薩の許に至り、法を聽きて般若不可思議の境涯を體験せしことが具きに記されてゐる。(囑累品第二九)最後に佛は本經を以て再び阿難に付屬し、廣く流布宣教すべきことを命ぜられ、以て本經一部の教説が結ばれる。(深浦正文)

### 小品文集

①(日)Shō-bon-anon-shū. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、別置)

### 小彌陀懺

①(日)Shō-mi-da-san. (支)Hsiao-mi-to-ghan. 小阿彌陀經往生淨土懺願儀、往生淨土懺願儀、往生淨土懺儀、小彌陀懺儀 ②一卷 ③存、大正四七・四九〇No.1984、縮陽一、卍三〇〇八、明北1506輔、明南191實、淨土十要第一、N.1513 ④慈雲蓮式(乾德元)明道元A.D.963—1032)撰 ⑤宋大中祥符八(A.D.1015)

### 往生淨土懺願儀

①(日)Shū-ni-da-san. (支)Hsiao-mi-to-ghan-i. 小阿彌陀經往生淨土懺願儀、往生淨土懺願儀、往生淨土懺儀、小彌陀懺儀 ②一卷 ③存、大正四七・四九〇No.1984、縮陽一、卍三〇〇八、明北1506輔、明南191實、淨土十要第一、N.1513 ④慈雲蓮式(乾德元)明道元A.D.963—1032)撰 ⑤宋大中祥符八(A.D.1015)

### 諸宗章疏錄第二

①(日)Shō-shū-rokū. ②一卷 ③存、大正四八・三六五No.3009

### 小無量壽經

①(日)Shō-mu-ryō-jō. (支)Hsiao-wu-liang-shou-ching. ②一卷 ③缺 ④宋求那跋陀羅(太元一九一—泰始四 A.D.394—422)譯 ⑤第二譯 ⑥(參考)開元錄第一四、貞元錄第二四

### 小樓炭經

①(日)Shō-tō-tan-kyō. (支)Hsiao-tou-tan-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④(參考)法經錄第二、仁壽錄第四、內典錄第一〇、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

### 上人繪詞傳

①(日)Shō-nin-e-shi-den. 黑谷上人傳繪詞、勅修御傳 ②四十卷 ③存 ④(參考)一建武(1147—1155)撰 ⑤(參考)總淨土依憑章疏目錄

### 上人傳

①(日)Shō-nin-den. 黑谷源空上人傳、十六門記 ②一卷 ③存、淨土宗全書第一七、法然上人全集、續群書類從第九、帝國文庫第四佛敎各宗高僧傳 ④聖覺(仁安二—嘉禎元 A.D.1167—1235)撰 ⑤黑谷源空上人傳の下を見よ。

### 上人と明通との問答

①(日)Shō-nin-to-myō-ten-no-mōn. ②存、黑谷上人語燈錄(和語)(大正八三No.3611)第五、淨土宗全書第九 ③源空(長承二—建曆二A.D.1133—1212)述

### 上人祕傳記

①(日)Shō-nin-hiden-ki. ②三卷 ③隆寛(久安四—安貞元 A.D.1148—1227)撰 ④(參考)總淨土依憑章疏目錄

### 少室六門

①(日)Shō-shitsu-rokumon. (支)Shao-shih-tu-men. 小室六門集 ②一卷 ③存、大正四八・三六五No.3009

### 己續二・一八・五

④傳、梁菩提達磨述 ⑤本書は、梁の菩提達磨大師の著作と傳承され、然も偽疑に屬するものと信ぜられて居る問題の著作である。内容は、六門に分たれ、第一門心經頌、第二門破相論、第三門二種入、第四門安心法門、第五門悟相論、第六門血脉論である。心經は唐の玄奘三藏の譯せる般若波羅蜜多心經を頌せるもので、達磨大師滅後大約百二十年に屬する譯經を頌するの理なく、後人の大師に托して頌せるものなること明了である。第二門の破相論に於ては「觀心の一法、總て諸法を攝す(中略)心は萬法の根本、一切諸法は唯心の所生なり」といふ觀心釋を採り「自心の起用を了見するに二種の差別あり(中略)一には淨心、二には染心」と説くなど宛然、起信論を思はしむるものがあり、靈樞出土スタイン氏蒐集本、同ベリオ氏蒐集本等(本辭典の第二卷一六七頁中段の觀心論の項參照)の觀心論は、本書破相論の異本で、五祖大滿弘忍禪師の法嗣、神秀上座の著作とも傳唱されて居る程で、且つ心を觀じて三毒を制するを解脱と名くと説くに就て「阿僧祇劫と云は三毒の心なり、胡に阿僧祇と云ひ、漢に不可數と名く」とあるが如き、大師にして西天を指して胡と云ひ、東土を漢と稱するの理なきなど、乃至、佛成道時に於ける乳糜食を不淨視し、稱名念佛を云々するなど、國情に暗く時代を知らざるものが多々ある。第三門の二種入は、所謂達磨の二入四行説として、正統思想と認定されて居るもので「夫れ入道多途なれども要

して之を言はば二種を出でず、一には是れ理入、二には是れ行入なり。」理入とは、謂く「教に藉りて宗を悟り、深く今生の同一眞性なることを信じ、但だ客塵妄想の爲に覆はれ顯了する能はず」云々とあり。行入とは、謂く「四行あり、其餘の諸行は悉く此の中に入る、何等をか四なるや、一には報究行、二には隨緣行、三には無所求行、四には稱法行」云々とあるもので、大師の眞説と認むべき所説に充ちて居る。第四門の安心法門は、別項にある宗門聯燈會要が南宋淳熙十年に成るに及んで、始めて此の文を見るに至つたもので「迷時は人、法を遂ひ。解時には法、人を遂ふ。(中略)若し誠心寂滅して一も動念の處無くば、是れを正覺と名く」云々と説いて居る。第五門の悟性論は「夫れ道と云ふは寂滅を以て體と爲す。修と云ふは離相を以て宗と爲す」云々と云ひ、見性悟道を論じたもので「諸の動念を離るるを大坐禪と名く、何を以ての故に、凡夫は一向に動じ、小乗は一向に定す、凡夫小乗の坐禪を出過するを謂つて大坐禪と名くるなり」と云ひて、坐禪に言及し、夜坐偈をも收めて居るが、この偈中に不起一念、歷三千ごなど云ひて天台思想を思はしむるものがあるなど、偽疑に屬すべきものである。殊に終りに眞性頌を録するが如き頗る疑難に當るものである。第六門の血脉論は「三界の興起は同じく一心に歸す、前佛後佛、心を以て心を傳へ、文字を立せず」と云ひ「若し本性を見れば十二部經は總に是れ閑文字、千經萬論は只だ是れ

心を明す、言下に契會せば教何を將てか用ひん、至理は言を絶す、教は是れ言詞、實に是道ならず」云々と云ふは、直指人心見性成佛教外別傳不立文字の言説に酷似するもので、以心傳心の見性を力説して居るが、第三門の二種入の理入を説くに「教に藉りて宗を悟り」云々とあるのと對比して、考究の餘地あるもので、後世の禪者が、教外別傳を言ひ不立文字を云々するに先立つて、先づ本書の如きは充分研究する必要があるものであらう。

本書の刊本には、正保四年本、寛文七年本等があり、註釋本には延寶三年の蓋頭少室六門第三卷、明治二十三年寶田梵成和尚の校正箋註少室六門集、並に明治四十四年北野元峰禪師の薰風會講義本等がある。

少室六門

①(日)Sho-shitsu-roku-mon. 校正箋註少室六門 ②二册 ③存

④寶田梵成述 ⑤明治二三刊 ⑥(高大、寄一・二五)(帝國、一〇九・一六七—一六八)(内閣)

少室六門集

①(日)Sho-shitsu-roku-mon. 首書少室六門 ②三册 ③存 ④延寶三刊 ⑤(帝國、八二二・二四五)

少室六門講義

①(日)Sho-shitsu-roku-mon-ko-gi. ②一卷 ③存 ④北野元峰述 ⑤明治四四刊 ⑥(駒大)

少室六門集

①(日)Sho-shitsu-roku-mon-shu. (支)Shao-shih-i-hu-mén-chi. 少室六門 ②一卷 ③存、大正四八・三六五

No. 2009 己續二一八・五 ④傳、梁善提

達摩(一大通二A. D. 528)

少多制戒經

①(日)Sho-ta-sei-kai-kyō. (支)Shao-to-ehi-tchie-ching. ②一卷 ③失譯 ④雜阿含經第三十三卷の抄出

⑦(参考)出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六貞元錄第二六

少林一曲

①(日)Sho-rin-ik-kyoku. ②四卷 ③存、④居中嵩山(建治三—貞和元A. D. 1277—1345) ⑦(参考)日本禪林撰述書目、禪籍目錄

少林一心戒普說

①(日)Sho-rin-ich-kyō. ②一卷 ③存 ④越宗(蘭陵夜雨)述 ⑤寛政一刊 ⑥(駒大)(哲、一・右二八)

少林棍訣

①(日)Sho-rin-kon-ke-tsu. (支)Shao-jin-kun-chieh. ②二卷 ③存 ④唐代晏宗撰 ⑤寫本(京大、藏・二四七・七〇)

少林三論

①(日)Sho-rin-san-ron. (支)Shao-jin-san-lun. ②三卷 ③存 ④達磨大師血脈論、悟性論、破相論を收む。

少林寺誌

①(日)Sho-rin-ji-shi. (支)Shao-jin-ssi-chih. ②四卷 ③存 ④清焦欽龍(康熙年代)、焦如衡(乾隆年代)等輯 ⑥康熙年代—乾隆一二丁卯(A. D. 1662—1747)

①支那五嶽の一なる嵩山少林寺は、河南省登封縣の北に在り、風景の絶佳なるを以て聞え、北魏孝文帝が、跋陀禪師の爲めに此地に寺を建てたのに創まる。其後、慧光、僧稠の禪徳や、菩提流支、勒那摩提玄井等の

三藏の留錫せし古蹟であると共に、特に達磨大師面壁九年の道場として、又その所傳といふ、參法に依つて知られてゐる。本書の内容總目は、序附、(修志紀事)繪圖、形勝、營建、古蹟、詳異藝林、題味の順序となつてゐるが、就中、藝林、題味の二部が主要部分を占め、特に藝林の中に辰翰、瀟王文翰、碑記、僧碑、僧傳がある。景日吟著、說嵩三十二卷(康熙五十五年刊)。常盤大定著、支那佛教史蹟。鷲尾順敬監修、菩提達磨嵩山史蹟大觀參照。

乾隆一三刊 ①(駒大)(水野梅曉文庫)

少林無孔苗

①(日)Sho-rin-mu-ku-teki. 東陽和尚語錄 ②六卷 ③存、大正八一・三四七No. 3571 ④東陽英朝正長元—永正元A. D. 1493—1504)語、侍者某等編

①佛日眞照禪師雪江宗深和尚の法嗣、關山下雲澤派の東陽英朝禪師の語録である。妙心寺二百九十一世大春元貞和尚が、秘録を搜尋すること幾ど二十星霜、遺編を拾ひ得て遂に全璧を成し、寶永五年五月二十四日妙心寺祖壁の序、並に元貞の同年(A. D. 1708)八月二十四日の撰に成る校訂梓行の緣由を叙したる跋文を付して流通せしめたのである。英朝和尚は、明應二年加賀の大守薄田司農の請に應じて、岐阜縣稻葉郡那加村新加納の龍慶山少林寺を再興開山し、大徳寺五十四世、妙心寺十三世に陞座し、丹波の龍興寺、尾張の瑞泉寺、美濃の定慧寺、大仙寺等に歴住し、後柏原天皇永正元

年(A. D. 1504)八月二十四日、壽七十七、臘六十四にて示寂された。従つて本書には初住地たる丹波米山龍興寺語録より終焉地たる美濃の龍慶山少林寺語録までを總て收めて居る。

卷首には、祖壁の序引。卷一に(一)文明十二年七月十五日五十三歳の時入寺せし丹州米山龍興寺語。(二)文明十三年十一月十九日五十四歳の時入寺せし京都龍寶山大徳寺語。(三)再住米山龍興寺語。(四)文明十六年六月六日五十七歳の時入寺せし尾張犬山青龍山瑞泉寺語。(五)文明十七年五十八歳の時住庵示衆せし推雲菴語。卷二には(一)京都花園の正法山妙心寺語。(二)明應元年十一月二十八日六十五歳の時、妙心寺養源院に於て受請した美濃賀茂郡不二菴語。(三)美濃法雲山定慧寺語。(四)明慶七年七十一歳の時の再住青龍山瑞泉寺語。(五)文龜元年七十四歳の時入寺した美濃臨潭山大仙寺語。(六)明應八年十月八日七十二歳の時入寺した美濃の龍溪山少林寺語。卷三卷四は佛事で括香秉炬等があり、卷五は偈頌。卷六は像贊。道號。雜文を收め、附録として、(一)承應二年八月二十四日英朝の百五十年忌に際して證號大眞源禪師と賜つた勅書。(二)本朝高僧傳に出づる東陽英朝禪師傳を收め。卷末に本書の校定梓行者たる元貞の跋文を收めたものである。

正位有漏善短釋並文集

①(日)Shō-ti-u-ro-zen-tan-shaku-narabini-mon-shū. ②一卷 ③存 ④正安四寫 ⑤(谷

大(餘甲・三一)

正位有漏善文集

①(日)Shō-in-ro-zem-mon-shū. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、餘丁・一〇)

正意經

①(日)Shō-kyō. (支)Cheng-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤(參考)出三藏記第四、開元錄第一四、貞元錄第二四

正因果集

①(日)Shō-in-gwa-shū. ②三卷 ③存 ④什海記 ⑤天文一五(A. D. 1546) ⑥(眞如藏)

正因十旋大補蕩

①(日)Shō-in-jis-sen-dai-fu-tō. 正因本法十旋大補蕩 ②一卷 ③存 ④本有 ⑤寶曆二(A. D. 1752) ⑥寶曆三刊 ⑦龍大、一〇五二・一五

正因本法十旋大補蕩

①(日)Shō-in-hon-po-jis-sen-dai-fu-tō. 正因十旋大補蕩 ②一卷 ③存 ④本有 ⑤寶曆二(A. D. 1752) ⑥述第十八願義 ⑦(參考)淨土眞宗教典志第二

正雲尼消息

①(日)Shō-un-ni-shō-soku. ②一卷 ③存 ④安政五寫 ⑤(龍大、別置)

正訛集

①(日)Shō-ka-shū. (支)Ché-ng-chi. ②一卷 ③存 ④雲棲法苑第二七 ⑤明株宏(嘉靖一一一萬曆四〇 A. D. 1532—1612)一說萬曆四三、年八一叙)撰

佛敎關係の事項にして、當時の世俗に謬

解され、誤用されたるものを擧げて其の訛謬を正せる書である。其の項目は千佛衣、五祖不養母、出家父母反拜、梵王侍佛、佛法本出老莊等であつて、六十六條ある、其の

當時支那に於ける俗説を知ると共にそれ等の項目に就いての佛敎の正しき意義を知ることが出来る。

①萬曆二刊(龍大、二〇四一・二〇)貞享四刊(谷大、餘大、二九四四)(正大、一〇九・二一四)光緒二三刊(龍大、二〇四二・四)

正覺開山法燈國師塔銘

①(日)Shō-gaku-kai-san-hō-hō-koku-shi-tō-me. ②一卷 ③存 ④西淵士曼(弘安八—康安元 A. D. 1385—1361)撰 ⑤(參考)大日本佛敎全書續刊豫定書目

正覺國師和歌集

①(日)Shō-gaku-koku-shi-wa-ka-shū. ③存、國文東方佛敎叢書第八 ④夢窓疎石(建治二—正平六(A. D. 1276—1331) ⑤夢窓國師疎石の和歌の集である。本書に載するところ百二十三首、耕雲軒明鏡が佛國國師和歌集と共に編集したものである。群書類從所收の夢窓國師御詠草と題するものと對比すると異同があつて和歌の數も百十四首である、續群書一覽の記する所のもは、策彦和尚の自筆と稱するもので、歌數八十七とふから、これもまた今本とは異なるものである。(中谷在禪)

正覺山中興大林俊禪師業略記

①(日)Shō-kaku-zan-chū-ka-dai-rin-shū-jen-jū-gō-yak-ki. ②一卷 ③存 ④(參考)大日本佛敎全書續刊豫定書目

正覺山妙光禪寺兩朝特賜三光國師孤峯大和尚塔銘

①(日)Shō-kaku-zan-myō-hō-zen-jū-yō-chū-toku-shi-san-ko-ko-ji-hō-dai-ō-shō-to-me. ②一卷 ③存 ④無著道忠(承應二—延享元 A. D. 1693—1744)撰 ⑤(參考)大日本佛敎全書續刊豫定書目

正覺寺改派一件

①(日)Shō-kaku-ji-kai-ha-ken. ②一卷 ③存 ④享和元寫 ⑤(龍大、別置)

與正覺寺書

①(日)Shō-kaku-ji-ni-tou-sho. ③存 ④日記 ⑤原本(姫路妙立寺)寫本(立大、D. O. 二一六)

正覺潤光澤禪師澡雪集

①(日)Shō-kaku-jūn-kō-zaku-zen-jū-ō-setsu-shū. (支)Cheng-chiao-jūn-kuang-ssō-chi-an-shih-tso-hsieh-chi. ②一卷 ③存 ④明潤光澤譯、香巖照水重編 ⑤康熙二四刊 ⑥(駒大)

正覺普通國師大林和尚塔銘

①(日)Shō-gaku-tsu-koku-shi-dai-rin-ō-shō-tō-me. 和泉州大島郡堺南莊龍興山南宗禪師開山前住大德特賜正覺普通國師大林和尚塔銘、正覺普通國師塔銘、大林和尚塔銘 ③存、續群書類從第九 ④最岳元良撰 ⑤本書は具に和泉州大島郡堺南莊龍興山南宗禪師開山前住大德特賜正覺普通國師大林和尚塔銘と云ひ、最岳元良の撰する所の宗套(1480—1568)の塔銘である。今其の銘文の大意を述べ、師諱は宗套、字は大林、京都の人、俗姓藤原氏、天龍寺天眼院に入り、肅元般禪師を拜して薙髮、後大德寺東溪和尚に參和し、又伊勢王英禪師に依り、更に古嶽和尚に就きて大林の號を附せられ第

一座となり和泉南宗庵に居る。後天文七年春詔を奉じて大德寺に主となる、止住三年即ち天文十年春和泉に歸り、裁松軒を勅建し、弘治二年南宗寺を開く。後奈良天皇時に佛印圓證禪師の號を賜ふ。永祿十一年正月二十七日寂、壽八十九、臘七十三、正親町天皇重ねて正覺普通國師の設號を賜ふと誌す。

正覺普通國師塔銘

①(日)Shō-gaku-tsu-koku-shi-tō-me. 和泉州大島郡堺南莊龍興山南宗禪師開山前住大德特賜正覺普通國師和尚塔銘、正覺普通國師塔銘、大林和尚塔銘 ③存、續群書類從第九 ④最岳元良撰

正學論要

①(日)Shō-gaku-ron-yō. ②一卷 ③存 ④七祖聖敎の論題を集めしもの ⑤寫本(谷大、宗大、一七三八)

正氣歌蛇足

①(日)Shō-ki-ka-ta-soku. ②一卷 ③存 ④赤松光映著 ⑤明治一四刊 ⑥(叡山文庫)

正教中正論

①(日)Shō-gyō-chū-shō-ron. ②一卷 ③存 ④岡本柳之助著 ⑤(京專)

正行集

①(日)Shō-gyō-shū. (支)Cheng-hsing-chi. ②一卷 ③存、己續一・一七・五 ④宋清覺(一政和頃 A. D. 1111—1117)撰

杭州靈隱寺白雲庵に居し、自ら

立宗して白雲宗と號し、白雲を以て別號とした本然清覺和尚が、河南府洛陽龍門山寶應寺に於て、人となる道を示したものである。即ち、君子となることは貴賤貧富に拘

り無く、唯だ行こそが君子の體を成すもので、徳行を以て之れを成し、孝敬を以て之れに加ふるに在るとて、四十八等の爲人の態様を掲げ、儒佛道三教の説も其の義一にして、畢竟聖賢君子の道を教ふるにありとし、讃を以て君子を讃嘆して居る。行文平易、よく其の意を盡して居る。卷末に、元皇慶二年(A. D. 1313)四月白雲宗主明仁が別項初學記の奏進文を附して居る。

清覺は、河南登封縣の人、姓は孔氏、字は本然、法華を閲して省あり、後、宋、熙寧二年海慧大師を禮して出家受具し、杭州靈隱寺懶庵童和尚に請せられ、寺後の白雲庵に居し、白雲宗を開宗して自ら白雲を號し、證宗論、三教編、十地歌ありと傳へられて居る。別項の初學記も清覺の著述で、宋徽宗宣和年間に示寂した人である。

④寫本(京大藏二四・五一) (大久保堅瑞)

**正恭敬經** ①(日)Shō-ku-kyō-kyō. (支)Cheng-kuang-ching-ching. 威德陀羅尼中說經、正法恭敬經、善敬經、應恭經 ②一卷 ③存、大正二四・一一〇(No. 1496)縮列二、二一〇・七、北三十五傷、南二十六傷、明北二七〇良、清三七〇良、麗三三六毀、天二六六傷、指二三七毀、法三二七毀、至三三一改、明南二五七効、N. 274 ④東魏佛陀扇多(一北魏正光六一東魏元象二 A. D. 525—539)譯

⑤元象二(A. D. 529)

⑥正しく三寶を恭敬することに立ち、特に多く法と和尙、阿闍梨を恭敬すべきを説く。佛法を樂求する者は、和尙阿闍梨の所

に至つて請問し、依止すべしといひ、委しく恭敬の所作所制を示し、最後にこの恭敬を爲さぬ者の墮獄の報の狀況を説く。此の經は歷代三寶紀第九に「正法恭敬經一卷、或無法學、亦云威德陀羅尼中說經」とあり、開元錄第六には正恭敬經として異名を擧げ、善恭敬經(隋闍那崛多譯)と同本で、元象二年の譯といふ。威德陀羅尼中說經といふ異名は、大威德陀羅尼經(隋闍那崛多譯)第十一に、此の經と殆ど同文があるためである。此の經を大乘律部に編入したのは縮刷藏經が始めで、佛説の二字を冠し、大正大藏經もそれを踏襲する。

⑦(參考) 三寶紀第九、第一三、內典錄第五、開元錄第六 (大野法道)

**正月之法式** ①(日)Shō-gensu-no-ri-shiki. 自慶長十年至同十六年正月之法式 ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、別置)

**正灌頂調作法** ①(日)Shō-kwan-jō-chō-bō-shō. ②存、修驗聖典第二峰中法流之内

③修驗道峯中正灌頂に調ふべき法具の名目を擧げ、且つ油單、地火風空、關伽札、頂大華、乳木、正灌頂外道場壇略圖等を出した書。(服部如實)

**正觀音** ①(日)Shō-kwan-on. 道範(元暦元—建長四 A. D. 1181—1232)一説建長四、年七五寂) ②(參考) 諸宗章疏錄第三

**正觀音法** ①(日)Shō-kwan-on-hō. ②一帖 ③存 ④徳川末期寫 ⑤(寶龜院)

**正觀論** ①(日)Shō-kwan-ron. ②一

卷 ①智光(天平頃 A. D. 730—?)述 (參考) 諸宗章疏錄第二

**正化内外經** ①(日)Shō-ke-nai-ge-kyō. (支)Cheng-hua-wei-wai-ching. ②二卷 ③晋蔡酒王學造 ④疑偽經 ⑤(參考)法經錄第二、仁壽錄第四、內典錄第一〇、武周錄第一五、開元錄第一八

**正血氣神呪經** ①(日)Shō-ke-ki-jin-ki-kō. (支)Cheng-hsi-eh-shen-chou-ching. ②一卷 ③失譯 ④(參考)開元錄第一

**正決** ①(日)Shō-ketsu. ②小川承澄(元久二—弘安五 A. D. 1205—1282)撰 ③(參考) 本朝台祖撰述密部書目、山家祖徳撰述篇目集卷下

**正眼國師假名法語** ①(日)Shō-zen-koku-shi-ka-ka-hō-go. 正眼國師假名法語 ②二卷 ③存、禪門法語集卷下 禪林法語集之内 ④盤珪永琢(元和八—元祿六 A. D. 1622—1693)語、弟子某筆錄 ⑤元祿年間(A. D. 1698—1703)

⑥正眼國師とは臨濟宗の高僧盤珪永琢和尚のことである。道譽を稱し、靈元天皇より佛智弘濟禪師の號を賜ひ、櫻町天皇また大法正眼國師と追諡あらせられた。國師が僧俗の間にかせ、また僧俗の心を酌み、以て時に對談の形式を以て、また時に談話の形式を以て、禪法を最も平明に俗耳に入り易く説きしめしたるものを、弟子某等が私かに筆録して、秘藏したるものに、この假名法語上下二卷がある。説示の平明を例示するに「拙僧が何れも申し聞かせます

説法は、別の事でも御ざらぬ、不生の理で御ざる」云々といふ調子である。この法語の刊行されるに至つたのは、寶曆七年(A. D. 1757)で、國師の法孫玉瑞の爲す所である。(山田靈林)

**正眼國師語錄** ①(日)Shō-zen-ko-ka-shi-go-roku. ②一卷 ③存 ④盤珪永琢(元和八—元祿六 A. D. 1622—1693)語、弟子逸山祖仁編 ⑤享保一五(A. D. 1730) ⑥正眼國師假名法語と内容は殆んど同一である。逸山祖仁がこれを編し自ら跋を書いて「師の言行の跡を記すのみ、其の大機大用に至りては、彷彿だも形容する能はず」云々といつてゐる。逸山が漢文を以て筆受せる法語であるだけに用語簡潔にして、假名法語とはまた自ら異なる妙味を感得すること出来る。(山田靈林)

**正眼寺誌附碧雲山誌** ①(日)Shō-zen-ji-shi-tsuketari-hei-un-san-shi. ②一卷 ③存 ④無著道忠(承應二—延享元 A. D. 1653—1744)記 ⑤(參考)禪籍日錄

**正眼智鑑禪師年譜** ①(日)Shō-zen-chi-kan-zen-jin-ni-pu. 安養山勅諭正眼智鑑禪師年譜、大敬和尚年譜 ②一卷 ③存、續群書類從第九 ④正察(一)元祿九 A. D. 1696—編

⑤本書は具に安養山勅諭正眼智鑑禪師年譜と云ひ、又大敬和尚年譜とも云ひ、元祿九年頃正察の編むところである。即ち師が後醍醐天皇元徳元年信州伊那郡長岡村に生れてより、至徳三年九月四日示寂に至る列年傳である。尙末尾に元祿九年師の塔を寺の

⑥(名書)名題② ③(名書)名題② ④(名書)名題② ⑤(名書)名題② ⑥(名書)名題② ⑦(名書)名題② ⑧(名書)名題② ⑨(名書)名題② ⑩(名書)名題② ⑪(名書)名題② ⑫(名書)名題② ⑬(名書)名題② ⑭(名書)名題② ⑮(名書)名題② ⑯(名書)名題② ⑰(名書)名題② ⑱(名書)名題② ⑲(名書)名題② ⑳(名書)名題② ㉑(名書)名題② ㉒(名書)名題② ㉓(名書)名題② ㉔(名書)名題② ㉕(名書)名題② ㉖(名書)名題② ㉗(名書)名題② ㉘(名書)名題② ㉙(名書)名題② ㉚(名書)名題② ㉛(名書)名題② ㉜(名書)名題② ㉝(名書)名題② ㉞(名書)名題② ㉟(名書)名題② ㊱(名書)名題② ㊲(名書)名題② ㊳(名書)名題② ㊴(名書)名題② ㊵(名書)名題② ㊶(名書)名題② ㊷(名書)名題② ㊸(名書)名題② ㊹(名書)名題② ㊺(名書)名題② ㊻(名書)名題② ㊼(名書)名題② ㊽(名書)名題② ㊾(名書)名題② ㊿(名書)名題②

①(名書)名題② ②(名書)名題② ③(名書)名題② ④(名書)名題② ⑤(名書)名題② ⑥(名書)名題② ⑦(名書)名題② ⑧(名書)名題② ⑨(名書)名題② ⑩(名書)名題② ⑪(名書)名題② ⑫(名書)名題② ⑬(名書)名題② ⑭(名書)名題② ⑮(名書)名題② ⑯(名書)名題② ⑰(名書)名題② ⑱(名書)名題② ⑲(名書)名題② ⑳(名書)名題② ㉑(名書)名題② ㉒(名書)名題② ㉓(名書)名題② ㉔(名書)名題② ㉕(名書)名題② ㉖(名書)名題② ㉗(名書)名題② ㉘(名書)名題② ㉙(名書)名題② ㉚(名書)名題② ㉛(名書)名題② ㉜(名書)名題② ㉝(名書)名題② ㉞(名書)名題② ㉟(名書)名題② ㊱(名書)名題② ㊲(名書)名題② ㊳(名書)名題② ㊴(名書)名題② ㊵(名書)名題② ㊶(名書)名題② ㊷(名書)名題② ㊸(名書)名題② ㊹(名書)名題② ㊺(名書)名題② ㊻(名書)名題② ㊼(名書)名題② ㊽(名書)名題② ㊾(名書)名題② ㊿(名書)名題②



後山に移した事、並びに其の時舊塔下より撥削された衣鉢遺品等の品目を記載しておる。(紀氏隆真)

正源明義鈔

①(日) Sho-gen-myō-shū. ②九卷 ③存 ④(参考) 浄土真宗教典志第一、浄土真宗聖教目録 ⑤承應二刊(龍大、研史、別置)元祿五刊(正大、一五一六・六八)(谷大、宗大、一一九〇)(帝國、一七・八四)(京大、一一・二一・一五)

正源略集附録

①(日) Sho-gen-ryaku-shū-tsuketuri-moku-jokū. (支) Chi-ang-yuan-liao-chi & mu-lin. ②十六卷(缺卷一) ③存、正續二〇・一八・二 ④清代建珍編

①本書は十六卷ある中の巻一を缺くもので序跋無く編輯の緣由を知る事が出来ぬが、初め揚州高旻寺天慧徹禪師の法嗣である南岳下三十九世揚州寶輪寺霽霖際源禪師並に際源の法眷である揚州高旻寺了凡聖禪師の法嗣、南岳下四十世揚州高旻寺昭月了貞禪師とが輯めたものを、際源、了貞の寂後、浙江天台山國清寺達珍禪師が、際源、了貞等をも添加して編纂したものである。霽霖際源は卷十六の南岳下三十九世の下に收められ、昭月了貞は同卷の南岳下四十世の下に收められて居る。了貞は、清乾隆五十年(A. D. 1785)十月七日壽五十七、臘四十七を以て示寂した。達珍は際源、了貞の輯めたものに補入し、別に補遺一卷を著して居る。此の卷二より卷十六に收められたものは、南岳下三十四世より四十世に至るもの、並に青原下宗鏡三世より同十三世に至るもの

で、總計四百五名の中、居士は黃端伯、余大成等の八名を含み、此れ等編纂の本貫、姓氏、並に機縁の諸要を編輯したものである。其の目録は、

〔卷第二〕(南岳下三十四世)夾山林草本豫禪師(以下敬稱を略す)。理安筭菴問。報恩玉林通秀。緣蘿山茨際。私際印通授。積翠唯一潤。雲門徹崖宏啟。明果形山宏淳。開先山鳴弘路。

〔卷第三〕(青原下宗鏡三世)大覺慈舟方念。壽昌無明慧經。(青原下宗鏡四世)顯聖湛然圓澄。博山無異元來。東苑晦台鏡。壽昌聞然謔。鼓山永覺賢。(青原下宗鏡五世)明因麥浪僧。佛日石雨方。顯聖三宜孟。東山爾密復。上虞具足明有。百丈瑞白雪。瀛山雪關閣。嵩乳道密。長慶宗寶獨。獨峯竹

山道嚴。天界覺浪盛。鼓山松霖道滯。〔卷第四〕(南嶽下三十五世)天壽謚融元。夾山蓮夫一。黃曇曉菴昱。五祖千仞岡。淨居次風果。理安梅谷悅。願浩子山如。黃鑿一菴月。廣教天章玉。理安天笠珍。勝法斯瑞法。金山鏡舟海。理安濟水沈。雪谷古石藏。理安六吉謙。勝法雲峯授。石霜爾瞻尊。峯山且菴芻。紫雲密嚴剛。破嶺山玄慈謙。香林宗玄旨。神鼎雲外行澤。報恩退菴重。善權白松譽。高臺不退勇。報恩骨巖峯。報恩棲雲行岳。圓照苾溪

森。報恩美發淳。報恩寂菴行洽。蘊行壁。天日全菴行進。磬山雲居行嶺。崇福濟芝行覺。竹林六解行恒。新安道仁行本。曉雲行謀。籌雪行澄。琴水行留。地藏洪濟演。法海祖山地。

〔卷第五〕(南嶽下三十五世)大鴻養構正明。三峯梵伊致。兜率一默成。焦山問石乘。華藏大樹證。瑞光頂日徹。顯慶濟子垣徑山具德證。鄧尉山削石壁。靈巖繼起儲。華嚴千熒鴻。祥符慧刃銛。安隱潭吉忍。高峯碩棧聖。孝廉劉道真居士。勝力燕居德申。昭覺文雪解。大竹百城著。寂光密。二仙覺城明柱。清果不會法。興隆深省純。寶光笑宗行密。崇因慧覺行衣。福國雲橋水。開峯密行寂忍。華嚴聖可玉。黃鑿隱元琦。金粟百癡元。資福靈機觀。慧雲本充盛。覺王千峯立。興陽獨冠敬。金粟石菴行瑤。法海白嵩俊。寶華諾諾行導。金粟息乾元。資國眉菴秀。龍池素嚴淵。南禪古鏡符。

〔卷第六〕(南嶽下三十五世)五磊達蓮權。五磊拙巖懷。平陽大嶽本晝。廣潤巨靈融。金粟天岸昇。龍牙雲叟住。佛日山曉哲。龍珠森鏡徹。天寧古田元。素山沖然義。西林以夫可。虎邱節嚴珠。清泉靈遠應。章巖獻可寂。道揚山神山瀛。鳥石南雲暉。寶峯大雷慶。翠峯懷光燦。國恩曠圓行果。蔣山芥菴大。淨居湛菴常。大梅法幢幟。椒山律牧制。雪竇宏遠紹。秀峯岫雲行瑤。祖燈崇已峻。寶掌雪隱道白。佛日南音言。無量可生慈。法輪石隱貞。崇勝雪堂甜。獅子古鑑圓。直指尼圓鑑玄。方爲戒居士。極樂獨癡口。寶藏範圍澤。東寺洪衍瀾。弘戒鈍斧澁。澄心寄菴溪。芙蓉自開覺。鴻福慧日昇。香林佛果聞。護國古泉清。崇化了悟能。萬年無礙徹。寂照芥子彌。香巖岩山遺。

〔卷第七〕(青原下宗鏡六世)龍華久默

音。洞山孔崖聰。三祖破闇燈。百丈石湖泐。雲巖元潔堂。善權百愚斯。金倦菴光瓊。大義山且拙訥。荆紫峯萬仞壁。獨園玄素體。福善雲松品。梅山歷然相。西山遜谷源。護國眠石嶺。崆峒不溢滿。崆峒謂斯

現。無量來雲現。龍塘遠門柱。自巖位中符。普寧天恩寶。徑山夢菴律。淨性紫仙陽。清化惟岑嶸。明覺寧遠地。善曇自若深。融光自開音。寶泉素端衛。慈雲俱亭挺。多福林妙叶啓。保寧端實嚴。能仁盟石息。龍田栢子地。東塔爲則範。

〔卷第八〕(青原下宗鏡六世)洪福靈燄燭。檀度南菴依。歸宗天然呈。龍泉刺人可。棲霞竺菴成。崇光觀濤奇。龍華梅逢忍。天界巨番選。曹溪石礪油。青原嘯峯然。天界方融颺。壽昌其天浩。福山石湖寧。青原無可智。大慈石公瓊。(附諸尊荷)雲棲蓮池株宏大師。紫栢達觀真可。黃鑿無念深有。白馬寺儀峯方象。鵝湖養菴心。眞寂開谷廣印。荆紫峯無學幻。曹溪慈山德清。雲居願愚觀衡。泐潭元白可。豪山大辯道焜。寶華山見月體。祠部黃端伯海岸居士。開府余大成集生居士。

〔卷第九〕(南嶽下三十六世)石霜碧眼開。眞慧無絃榮。眞慧緣雨蕉。眞慧大澤霖。金山可達杰。香林法乳樂。理安夢菴格。琅瑯榜關真。理安越鏡徹。理安獨超方。龍華巖舟元。新州訥菴辯。迴龍南風玠。東山伯嶽惶。永慶尺木休。天日南谷

音。洞山孔崖聰。三祖破闇燈。百丈石湖泐。雲巖元潔堂。善權百愚斯。金倦菴光瓊。大義山且拙訥。荆紫峯萬仞壁。獨園玄素體。福善雲松品。梅山歷然相。西山遜谷源。護國眠石嶺。崆峒不溢滿。崆峒謂斯現。無量來雲現。龍塘遠門柱。自巖位中符。普寧天恩寶。徑山夢菴律。淨性紫仙陽。清化惟岑嶸。明覺寧遠地。善曇自若深。融光自開音。寶泉素端衛。慈雲俱亭挺。多福林妙叶啓。保寧端實嚴。能仁盟石息。龍田栢子地。東塔爲則範。

〔卷第九〕(南嶽下三十六世)石霜碧眼開。眞慧無絃榮。眞慧緣雨蕉。眞慧大澤霖。金山可達杰。香林法乳樂。理安夢菴格。琅瑯榜關真。理安越鏡徹。理安獨超方。龍華巖舟元。新州訥菴辯。迴龍南風玠。東山伯嶽惶。永慶尺木休。天日南谷

類。武康區裔來。正宗形山寶。賢良如川盛。怡賢運峯源。覺生秀山成。天目晦石琦。大瀉慧山海。雙泉眉山霽。能仁微旨朗。維揚瓦湖恒。雲居晦山顯。慶雲碩揆志。雲林諦暉轄。蘇州字雲蹤。蘇州月函子。國清翼菴鄧。資福龍碩宏。雲瑞尼祖符。

〔卷第一〇〕(南獄下三十六世) 鳳林竹浪生。佛兔超綱。東川蒼碧。法海林我鑑。崇隆碧露夢。九臺山知空。海會慈瑛性聰。資福明心鑑。資福德水洧。佛日璠鑑衡。開先心壁淵。佛法持毅。善慧漢水浩。天童石吼微。慧山魯瑤奐。大悲祖幻寧。虎邱洞明照。廣壽字亭尹。福緣濟生度。淨慧破愚智。淨慧允中微。龍興靈潔源。西林仲泉空。興化谷庵朴。覺生雪鴻信。蟠龍子肅遠。南禪吼松澄。曇華碧雲天。城山大拙理。護國鐸夫凡。鶴林雲屋音。清涼千智幢。南陽雪乳律。相國曇紹泉。興福慈休乾。白雲雲兆性。金粟沖涵恒。萬年紀安經。永慶念予恒。竹林辯言海。聖感舜崙永。龍山顯悟秀。育王法鏡覺。向上具瞻仰。

〔卷第一一〕(南獄三十七世) 大梅與峯智。密印古梅例。大瀉易菴應。大瀉揆菴空。上林月慈權。龍山月堂菴。雄山千如一。鳳林雪圃修。九屏燕雷鴨。雲林互濤果。迴龍水月國。崇仁天乘參。太和長明吳。昭覺竹峯續。福嚴具宜開。普明赤潭珠。福善聖堂成。資福也間潛。龍泉匡源洪。靈山具如奇。天寧紫松彰。普度古門裕。慈光中洲獄。澄光繩木林。九峯三明

頤。龍池迅帆裕。金粟山禹門宗。萬年豁然緣。金粟慧海源濟。金粟悟心達。萬年止先定。法輪觀月光。金粟道三本。向上雙溪定。靜慧遠先預。興北天池鶴。一粟默菴言。覺林編知學。香林曉南吳。祝聖曉堂哲。秀峯猗蘭揆。福緣超宗智。福緣福國傳。聖因大徹永。聖壽歷阿菴。永慶天嘉卓。育王南溪碧。

〔卷第一二〕(南獄下三十七世) 慈峯南翁慧。祇園朗微印。香林月潭達。金山量開鈴。東禪海潮音。大覺迦陵音。萬壽調梅鼎。理安佛日義。崇福靈鷲誠。杭州無幻施居士。天目澄如永。菩提化昇啓。聖因悟修明慧。聖因大恒中。吉祥菴菴修。三昧不物震。

〔卷第一三〕(青原下宗鏡七世) 永寧式衡權。平山受宗智。焦山古樵智先。佛國頰吉祥。隆福寒松樑。靈源紫谷覺。褒山天鑑通。盤山拙菴智朴。月山洞初度。龍華湘翁溥。歷化雪遠照。彌勒院白彌純。古佛燈道讓超。西山不韻音。浦洪福隱知聞。檀度天根本。海幢阿字無。棲霞梵雲源。顯孝洪國泉。龍華子愚詰。天界靈潤機。南華大休珠。青蓮乾裕份。華藏顯翁遇。乾峯雲怡怡。寶壽尊道揆。(青原下宗鏡八世) 焦山鑑堂德鏡。棲靈道宏德南。會龍藉菴重。廣州浴日能。法輪自明哲。五州遠林德進。天然詰林吉。澄照紫珎珍。華嚴雪岸德容。白巖鐵菴清。歸元自光明。慈恩慈月圓。慈濟侶石清。海幢雲菴雲。

〔卷第一四〕(南獄第三十八世) 大覺佛泉安。歸宗佩瓊瑤。歸宗果宏德。大覺正宗

道。崇恩法南勝。拈花恢慈仁。萬壽粹如純。(南獄下第三十九) 薦福德山海。理安智朗月。永鎮樸夫拙。獄州印慧勝。金山大曉微。慈濟自開悅。天華有于成。天目開學定。天目桂嶺立。天目道謙智。淨慈在衡權。淨慈振一宗。能仁秀林俊。淨慈指遠近。高晏天慧微。崇福道明信。寶勝萬光家。崇福智嚴昌。崇福朗照。山谷聲聞。

〔卷第一五〕(青原宗鏡九世) 焦山碩卷行載。平山麗果行昱。大千佛道樞高。歸元且駁拙。月山惺學敏。淨因宗一真。乳山慈如行秀。熟濟竺風聖。靈谷道揆守。(青原下宗鏡十世) 敏修福毅。揚州棲靈善初。淨因運德輪。普利堊雲微。乳山得一善。慈濟慈幢惺。靈谷玉浮瑛。(青原下宗鏡十一世) 焦山碧巖祥潔。平山拙樵堅。焦山鐵機印。平山竹堂祥哭。焦山祥雲果首座。乳山廣仁祥能。靈谷祇園紹。(青原下宗鏡十二世) 焦山濟舟澄洗。平山秋浦澄朗。大聖允超澄輪。山無言澄天。萬壽中誠智。(青原下宗鏡十三世) 焦山擔雲清鏡。焦山互超清恒。

〔卷第一六〕(南獄下三十九世) 大瀉藏庵鋒。草堂允中會。珠明諦修本。昭覺守仁定。昭覺自光月。一粟霽滄霖。圓通心如靜。南禪靜孫慧。暗雲素芳華。天長天壽雲。佛國淇海宗。江天滄洪注。香林妙嚴

隆。香林碧雲寶。江天超宗榮。天寧定悟誠。天寧扶功明。天寧納川海。天寧德洪圓。三昧見微明。普仁一輪月。磬山桓悟際。瞻雲萬雲軸。薦福秀崖春。頭陀俊彩星。大覺月天寬。覺生微悟醒。天目旅亭會。方塔平川舟。高晏了凡聖。資福慧皎清。崇福曉峯良。寶輪霽霖源。安樂廣修圓。東禪道菴參。隆慶維圓勉。天台省微悟。(南獄下第四十世) 雙峯若果慧。天長守約信。金山六益謙。天長海宇清。精嚴性愷微。精嚴塚三勤。天寧覺性是。精嚴躬穎義。慈濟湛如真。藥湖寺頓悟。天寧淨德月。嘉山中和口。開利化南宏。善因最初心。高晏昭月貞。維揚秋門陳居士。揚州哲文袁居士。揚州逐園尤居士。(以下收補遺)

〔形山潭禪師法嗣〕武林永慶遠來青。衢州祥符頓開修。(敏修毅禪師法嗣) 四川羅漢幻白可。(破山明禪師法嗣) 關中興善易菴印。四川百丈敏樹相。(我隱容禪師法嗣) 杭州東明孤雲鑑。明州育王大白雪。杭州東蓮古風然。(萬如微禪師法嗣) 南湖普濟介爲舟。(弘覺念禪師法嗣) 本一薪傳淵。鄂州向上采商榮。(牧雲門禪師法嗣) 桐城清泉十洲瀛。

正源略集補遺 (日) Shōgen, Kan Kuroki (支) Chōgen, Yūan-tiao-chū-pu  
① 一卷 ② 存、記續二乙・一八・二  
清代達珍編  
① 本書は、浙江天台國清寺達珍禪師が、別項の正源略集に二十八名の補遺を加へたものである。其の所收の諸師は左記の如くである。(法嗣者の禪師號を略す)  
(形山潭禪師法嗣) 武林永慶遠來青。衢州祥符頓開修。(敏修毅禪師法嗣) 四川羅漢幻白可。(破山明禪師法嗣) 關中興善易菴印。四川百丈敏樹相。(我隱容禪師法嗣) 杭州東明孤雲鑑。明州育王大白雪。杭州東蓮古風然。(萬如微禪師法嗣) 南湖普濟介爲舟。(弘覺念禪師法嗣) 本一薪傳淵。鄂州向上采商榮。(牧雲門禪師法嗣) 桐城清泉十洲瀛。

(石奇雲禪師法嗣) 蕭山湖湖冷堂林。金華智嚴萬因聖。(淳石賢禪師法嗣) 蘇州法華彌聖遺。金陵保寧廟樞溥。(林野奇禪師法嗣) 汝州風穴雲義喜。京都淨壽道安靜。(石庵瑤禪師法嗣) 嘉興普明浪山嶼。(無礙徹禪師法嗣) 吉州耽源鏡鑑。(山曉哲禪師法嗣) 南岳大善天培鑑。(節巖秀禪師法嗣) 江陰大悲曇照明。(具德禮禪師法嗣) 廬山萬杉劉玉璞。(浪山嶼禪師法嗣) 嘉興普明字下圓。(述先預禪師法嗣) 揚州淨慧在明德。(骨巖峯禪師法嗣) 湖州報恩梓昌英。(十州瀛禪師法嗣) 桐城谷林大宜。(雲峯授禪師法嗣) 揚州西方南源信。

(大久保堅理)

**正誤宗派** ①(日) Sho-go-shū-ha. ②五册 ③存 ④桂芳全久 ⑤寛文八刊 ⑥(哲、な七、左・三) ⑦(駒大) ⑧(帝國、八二・一七九)

**正誤佛祖正傳宗派圖** ①(日) Sho-go-bus-so-shō-den-shū-ha-zū. ②四卷 ③存 ④昌三編 ⑤寛文八刊 ⑥(龍大、二九五・六)

**正齋經** ①(日) Sho-sai-kyō. (支) Che=ng-chi-ching. ②1卷 ③缺 ④後漢安世高(建和二) 建寧三 A. D. 148-170) 譯 ⑤(參考) 開元錄第一五、貞元錄第二五

**正齋經** ①(日) Sho-sai-kyō. (支) Che=ng-chai-ching. ②1卷 ③疑偽經 ④(參考) 法經錄第四、仁壽錄第四、禪泰錄第四、內典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八

**正直集** ①(日) Sho-jiki-shū. ②1卷

③存、大日本佛教全書第九七宗論叢書第一 ④寛永一八一正保頃(A. D. 1641-1647) ⑤本書論破の對象たる日賢の「論迷復宗決」が寛永十八年の述作である事から見れば、其れから數年後の作であることが推知される。眞超(日蓮宗)から天台宗に改轉した學者の「破邪顯正記」に對し日蓮宗の寂靜日賢が「論迷復宗決」を造つて反駁した中に、偶々淨土宗を譏るところあるを慨し、淨土の正義を顯揚するため述作した書で、論云。淨土家以安養名報此說不然矣。論云。蓮華化生者、今生修妙法蓮華之行業、當得蓮華化生、今厭蓮華之行業、何以當來蓮華化生、以此筋目、惠心僧都作觀心略要集、記往生要集、顯理應念佛、其義可見、論云。三部經一念十念往生乃至評三部經意、有二、神直准三部經意、論往生實不二約、法然所立論、往生實不二等の八條を掲げて逐一之を駁してゐる。蓋し「論云」とは「論迷復宗決」の所論を指す。

⑥正保五刊 ⑦(谷大、餘大、三二二) (馬田行啓)

**正邪會辨** ①(日) Sho-ja-e-ben. ②五卷 ③存 ④伊東原考編 ⑤文化一三刊 ⑥(帝國、一七・六七)

**正邪強會辨** ①(日) Sho-ja-go-e-ben. ②四卷 ③存 ④法洲(明和二) 天保一〇 A. D. 1765-1839) 述 ⑤文化一四刊 (谷大、宗大、四九四) ⑥正大、一五七・八八、一〇二) ⑦(龍大、一六九・四) 明治二七刊(龍大、一六九六) ⑧(正大、一五七・四六) ⑨(立大、A 四〇・一七)

**正邪不可會辨** ①(日) Sho-ja-ko-e-ben. ②1卷 ③存 ④法洲(明和二) 天保一〇 A. D. 1765-1839) 述 ⑤文化一二刊(正大、一五七・四三、九〇・一〇一) ⑥文化一四刊(谷大、宗大、四九三) ⑦(龍大、一六九・五) (立大、A 四〇・一八)

**正受老人** ①(日) Sho-ju-ro-nin. ②1卷 ③存 ④阿部芳春著 ⑤昭和七刊 ⑥長野臥月庵

**正受老人行錄** ①(日) Sho-ju-ro-nin-gyō-roku. ②1卷 ③存 ④東嶺圓慈(享保六一寛政四 A. D. 1721-1792) ⑤寫本(駒大)

**正受老人崇行錄附語偈** ①(日) Sho-ju-ro-nin-so-gyō-roku-tsuketari-gō. ②1卷 ③存 ④道鏡慧端(明曆三) 享保六 A. D. 1657-1721) 語、今北宗愷(文化一三) 明治二五 A. D. 1816-1892) 編 ⑤明治一〇刊 ⑥(駒大) ⑦(帝國、一一・一〇)

**正宗國師年譜** ①(日) Sho-oku-shi-nen-pu. ③存、白隱和尚全集之内 ④(参考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

**正宗國師語錄** ①(日) Sho-oku-shi-gō. ②十卷 ③存 ④白隱慧鶴(貞享二) 明和五 A. D. 1685-1763) 語 ⑤(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

**正宗國師徽號勅書草稿** ①(日) Sho-oku-shi-kei-gō-chōku-shō-gō. ②1卷 ③存 ④寫本(正大、一五一六・一一八)

**正宗國師語錄** ①(日) Sho-oku-shi-gō. ②1卷 ③存 ④古先印元(永仁三) 應安七 A. D. 1295-1374) ⑤(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

**正宗心印後續聯芳** ①(日) Sho-shū-shin-in-go-zoku-ien-hō. (支) Cheng-tsung-hsin-yin-hou-shū-ien-fang. ②1卷 ③存、已續二、三、二、一 ④明代善燦編

**正宗贊** ①(日) Sho-shū-san. 首書五家正宗贊 ②六册 ③存 ④萬治三刊 ⑤(高大、寄・一・二五)

**正宗贊考** ①(日) Sho-shū-san-ko. 五家正宗贊考 ②二卷或一卷 ③存 ④刊本(龍大、二六七・二四四) 寫本(駒大)

**正宗贊鈔** ①(日) Sho-shū-san-shō. 五家正宗贊鈔 ②二十卷 ③存 ④龍溪述 ⑤刊本(哲、な七、左・一) ⑥(帝國、せ・二・一一)

**正宗國師年譜** ①(日) Sho-oku-shi-nen-pu. ③存、白隱和尚全集之内 ④(参考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

**正宗贊** ①(日) Sho-shū-san. (支) Che=ng-tsung-san. 五家正宗贊 ②四卷 ③存、已續二乙・八・五、國譯禪宗叢書第六 ④宋紹曇撰 ⑤寶祐二(A. D. 1254) ⑥五家正宗贊の下を見よ。 ⑦(參考) 禪籍志卷上 ⑧貞和五刊(帝國、特別・貴) 慶長一三刊(駒大) 寛永一刊(京專) ⑨(帝國、一〇九一五) ⑩(龍大、二九六・二四) ⑪(京大、藏・一七二) ⑫(内閣)

**正宗贊** ①(日) Sho-shū-san. 首書五家正宗贊 ②六册 ③存 ④萬治三刊 ⑤(高大、寄・一・二五)

**正宗贊考** ①(日) Sho-shū-san-ko. 五家正宗贊考 ②二卷或一卷 ③存 ④刊本(龍大、二六七・二四四) 寫本(駒大)

**正宗贊鈔** ①(日) Sho-shū-san-shō. 五家正宗贊鈔 ②二十卷 ③存 ④龍溪述 ⑤刊本(哲、な七、左・一) ⑥(帝國、せ・二・一一)

**正宗心印後續聯芳** ①(日) Sho-shū-shin-in-go-zoku-ien-hō. (支) Cheng-tsung-hsin-yin-hou-shū-ien-fang. ②1卷 ③存、已續二、三、二、一 ④明代善燦編

①本書は、明の善燦和尚が主として福建福州府を中心とする當代の編纂にして果字系、正字系の大約七十二名の本貫姓氏並に其の機縁の語を蒐録したものである。即ち秀岡果增。明鏡徳圓。天洞果淵。月江徳法。洞庵圓暉。壽岳果延。碧雲果暉。大乘明直。古心徳宗。徹空徳光。大乘果道。正

名所行發⑩(名家書)著處所現⑨ 月年の刊頁⑧(書考叢書附註)書末⑦ 説解卷内⑥ 代年作者⑤ 著者④ 録存③ 數卷②(名書)名題① 號略字數

宗普遇。大海果清。大洲果遠。大融德鑑。天章果聰。樂堂圓壽。天鑑果清。無瑕明玉。天濟果澄。晶齊果融。天資果滿。本應果現。天律果潤。慧庵果明。悟空圓淨。中天正圓。無壞圓金。鳳岐正瀚居士。大用果提。三祇如果。性海正瀟。大潮圓滔。無壞眞智。映橋果礦。風崗正祜。銘齊果誌。和剛正亨。映空圓澄。通泉圓應。慧泉圓現。大千果惠。現泉正濁。弘惠明桂。大運果鈞。誠庵果啊。昨海果洙。玉波果浩。大慧果恩。清泉正慎。無壞眞智。慶堂果元。瑠泉正淑。靜庵果元。大泉東澹。仰石仁槐。大暉正明。是江果沼。紹仁果文。龍泉正植。香林正檀。皓泉正恕。琦泉正錠。敬泉正障。珍泉正鏡。弘隱正泰。紹泉果騰。月泉正恭。期泉正愈。大昇果陽。大勝果津。琮泉正鏡などであつて、何れも正宗の心印を相承し、遷代聯芳を繼ぎ、祖庭に耀くの人なりとして居る。

**正宗禪鑑** ①(日) Sho-shū-zen-kan. ①一册 ②存 ③哲、三・中・二八)

**正宗略傳** ①(日) Sho-shū-yaku-den. ①一卷 ②存 ③集雲 ④(参考) 禪籍目録

**正修觀** ①(日) Sho-shū-kwan. 正修觀記 ②三卷 ③存、大日本佛教全書第三一、惠心僧都全集第一、天台小部集第一 ④源信(天慶五—寛仁元 A. D. 942—1017) 述 ⑤(参考) 本朝台祖撰述密部書目

**正修觀記** ①(日) Sho-shū-kwan-ki. ②三卷 ③存、大日本佛教全書第二四天台小部集釋、同第三一、惠心僧都全集第一之内

④源信(天慶五—寛仁元 A. D. 942—1017) ①本書は極樂の依正を觀察して來迎に預るべしと勸めたるもの。先づ極樂の依報の國土樹木鳥獸風雲・音樂殿宅・衣服飲食が悉く完全圓滿なる莊嚴を示し一切が皆三身萬徳の相貌であり三諦即是の說法であり一乘醍醐の法音である。是の如き淨土は彌陀願力の現れであると極樂依報を明す(上卷了)。次に彌陀如來は三身具足の如來である。又胎藏界理曼荼羅である。又金剛界智曼荼羅である。又蘇悉地修行方軌である。自行の三身即一の彌陀は常寂光土に住する。法身は常土に、報身は光土に、應身は寂土に住する。新成久成初後不二である。化他身の彌陀は三土に住する。他受用身は實報土に、勝應身は方便土に、劣應身は同居土に住する。阿彌陀を無量光と翻す。この彌陀は法花蓮門の佛、又無量壽と翻す、この彌陀は法花本門の佛。又阿彌陀の名字を三諦と觀する。阿は空、彌は假、陀は中である。三諦一諦圓融の彌陀である。是の如き萬善萬徳具足の彌陀の名號を執持するを大乘善根といひ、教主彌陀を讚歎し、次に極樂正報の中教主の彌陀佛と諸菩薩を明し來迎攝取し給ふことを述べて畢る。

⑦(参考) 諸宗章疏錄第二、淨土依憑經論章疏目録 (田島徳音)

**正修論** ①(日) Sho-shū-ron. ②一卷 ③存 ④虎關師鍊(弘安元—貞和二 A. D. 1278—1346) 述 ⑤(参考) 日本禪林撰述書目、扶桑禪林書目、禪籍志卷下 ⑥寛文六刊(駒大)正保三刊(龍大、二六七・二四五)

**正修論注** ①(日) Sho-shū-ron-cha. ②存 ③幹山述 ④(参考) 日本禪林撰述書目、禪籍目録

**正集** ①(日) Sho-ju. ②十卷 ③豪盛(一天正二—A. D. 1584) ④(参考) 本朝台祖撰述密部書目

**正定鈔** ①(日) Sho-jo-setsu. ②一卷 ③存 ④圓慈述 ⑤寫本(谷大、宗大、二〇五〇)

**正信偈** ①(日) Sho-shin-ge. 正信念佛偈 ②一卷 ③存、大正八三・五八九云。④縮寫九、佛教大系第五三、眞宗聖教大全卷上、眞宗聖典全書 ⑤親鸞(承安三弘長二 A. D. 1173—1262) 撰 ⑥正信念佛偈の下を見よ。⑦寛延四刊 ⑧(谷大、宗大、三二五五)

**正信偈** ①(日) Sho-shin-ge. ②一卷 ③存、佛教通俗講義之内 ④前田慧雲(安政四—昭和五 A. D. 1857—1930) 述 ⑤(帝國、六二・二六五)

**正信偈會鈔句義** ①(日) Sho-shin-ge-shū-tsu-gi. 正信念佛偈會鈔句義 ②二卷 ③存、眞宗全書第三九 ④慧然(元祿六一—明和元 A. D. 1693—1764) 述 ⑤享保一八(A. D. 1733) ⑥正信念佛偈會鈔句義の下を見よ ⑦(参考) 淨土眞宗教典志第二 ⑧享保一八寫 ⑨(谷大、宗大、二二)

**正信偈繪抄** ①(日) Sho-shin-ge-e-shō. 正信念佛偈繪抄 ②二卷 ③存 ④皆遵述 ⑤安永二刊 ⑥(龍大、一二三三・五七) (谷大、宗大、二三九)

**正信偈駕說帶佩記** ①(日) Sho-shin-ge-setsu-tai-kai-ki. 正信念佛偈駕說帶佩記 ②三卷或六卷 ③存、眞宗全書第三九 ④慧琳(正徳五—寛政元 A. D. 1715—1789) 述 ⑤安永五(A. D. 1766) ⑥著者慧琳は眞宗大谷派の講師にして、慧然講師の高弟である。本書は慧琳の講説を義陶の記録せるものにかゝる。義陶は慧琳の高弟にして副講の學階に進む。本書は慧琳の最も力を注げる傑作の一にして、義陶の補記するところである。大谷派に於ける正信偈の注釋書としては代表的ものとして、其の説くところ實に微に入り細を穿つてゐる。名は譯録たりと雖も、西山、鎮西眞宗の安心の比較をなし、更に進んでは其史蹟に及ぶところ、實に一篇の史學考證に供ふべきである。

⑦寫本(龍大、一二三五・一四) (谷大、宗大、三九九)

**正信偈皆攝** ①(日) Sho-shin-ge-kai-shō. 正信念佛偈皆攝 ②三卷 ③存 ④宗信述 ⑤(参考) 淨土眞宗教典志第二 ⑥萬治四刊 ⑦(龍大、一二三五・九) (哲、こ・六・左・一五) (谷大、宗大、三六六五)

**正信偈開首** ①(日) Sho-shin-ge-kai-shū. 正信念佛偈開首 ②一卷 ③存 ④若森(延寶三—享保二〇 A. D. 1675—1735) 述 ⑤刊本(谷大、宗大、三七九)

**正信偈夏爐篇** ①(日) Sho-shin-ge-ka-ron-hen. 正信念佛偈夏爐篇 ②三卷 ③存、眞宗全書第四〇 ④仰誓、享保六一寛政六 A. D. 1721—1794 述 ⑤著書仰誓は、伊賀に生れ、石州淨泉寺に

住す。學を僧様に受け篤行學業並び稱せらる。この書古來より推稱されながら未だ刊行せられなかつたが、解義釋當、引據該博、而も精微徹底せずんば止まざるもの、即ち本書の特色である。内容に六門を分つ。云く一、異因。二、體列。三、宗。四、製時、五、題目。六、正解。

④寫本(龍大、一二三五・一一)(谷大、長保四三)  
⑤寫本(龍大、一二三五・一一)(雲山龍珠)

**正信偈解説** ①(日)Sho-shin-ge-ki-se-sui. ②一卷 ③存 ④平安專修學院編 ⑤大正一〇刊 ⑥龍大、一二三五・八

**正信偈記** ①(日)Sho-shin-ge-ki. ②一卷 ③存 ④道超述 ⑤寫本(龍大、一二三五・一五)

**正信偈歸仰錄** ①(日)Sho-shin-ge-ki-ko-roku. ②二卷 ③存 ④白率(元祿一一一安永四A.D.1698—1753)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・一〇)

**正信偈聞書** ①(日)Sho-shin-ge-ki. ②二卷 ③存 ④寫本(龍大、一二三五・一一)

**正信偈聞書** ①(日)Sho-shin-ge-ki. ②一卷 ③存 ④真宗全書第三九

④光教(永享二一文龜三A.D.1430—1533)述 ⑤文龜三(A.D.1503)

⑥著者光教は、佛光寺第十三世の宗主、諱は堯仁。光教の示寂は、本派本願寺第八世蓮如の示寂後四年である。されば當時蓮師と並び、真宗教義を弘布せられたる上人の法音を依りて聞き得る唯一の書である。

内容は、大意、題事、入文事(入文解釋)。⑦(參考) 淨土真宗聖教目錄、淨土真宗教典志第二 ⑧明治九刊(龍大)、寫本(龍大、別置)(谷大、宗大、四三五八)(佐々木篤祐藏) (雲山龍珠)

**正信偈聞書** ①(日)Sho-shin-ge-ki. ②一卷 ③存 ④峻諦(寛文四一享保六A.D.1661—1721)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・一七)

**正信偈聞書** ①(日)Sho-shin-ge-ki. ②二卷 ③存 ④若霖(延寶三一享保二〇A.D.1675—1735)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・一八)

**正信偈聞書** ①(日)Sho-shin-ge-ki. ②二卷 ③存、真宗全書第四〇 ④僧鏡(享保八一天明三A.D.1723—1783)述 ⑤天明三(A.D.1783)

⑥著者僧鏡は空華處と號す。越中國浦山善巧寺に住す。本願寺派學界に於て最も勢力ある空華派の鼻祖。本書は師の寂年三月十二日より後十七會能州光徳寺に於て一般僧俗に對し、最も難解の教義を最も平易に開講せられしものに係る。正に是れ師の遺教經である。言々肺腑より出で、熱誠人をして感動せしめしこと、書中二ヶ所に落涙せることを記せるによりても知り得らる。以て筆質篤篤の風を仰ぐべきである。内容如左

大分爲二——  
一總説分  
二解釋分  
三者釋偈目

一者起發  
二者略辨大意  
三者釋偈目

④寫本(龍大、一二三五・一六・一九) (雲山龍珠)

**正信偈聞書** ①(日)Sho-shin-ge-ki. ②一卷 ③存 ④功存(享保五—寛政八A.D.1720—1796)述 ⑤寫本(龍大、研眞)

**正信偈聞書** ①(日)Sho-shin-ge-ki. ②九卷 ③存 ④大合(安永二—嘉永三A.D.1773—1830)述 ⑤寫本(龍大)

**正信偈慶嘆錄** ①(日)Sho-shin-ge-ki-kyo-tan-roku. ②二卷 ③存、真宗全書第四〇 ④觀信(寶曆二—文政五A.D.1752—1822)述 ⑤觀信は周防國平尾眞覺寺の住。慧雲に宗學を受けて藝轍の蘊奥を極む。従つてこの書は藝派の粹に加ふるに該博なる自家の見を以てし、其所論常に一頭地を抜く。内容次の如し。(一)製雲。(二)大意。(三)科節。(四)題號。(五)入文。(雲山龍珠)

**正信偈句義發隱** ①(日)Sho-shin-ge-ki-ku-ji-ho-shu-on. ②一卷 ③存 ④義龍述 ⑤寫本(龍大)

**正信偈句題和歌** ①(日)Sho-shin-ge-ki-ku-ji-wa-ka. ②一卷 ③存 ④超然(寛政四—明治元A.D.1792—1868) ⑤明治一一刊 ⑥帝國、一八三・二一七(龍大)

**正信偈佛偈科** ①(日)Sho-shin-ge-ki-kwa. ②一卷 ③存 ④若霖汝尙(延寶三—享保二〇A.D.1675—1735)作 ⑤(參考) 淨土真宗教典志第二 ⑥寫本(龍大、一二三五・一一)

**正信偈佛偈科** ①(日)Sho-shin-ge-ki-kwa. ②一卷 ③存、科文集之内 ④慧雲(享保一五—天明二A.D.1730—1782)作 ⑤寫本(谷大、宗大、一一四一、一六八九)

**正信偈勸考** ①(日)Sho-shin-ge-ki-kan-ko. ②存、十二部雜纂之内 ③寫本(龍大、一〇三八)

**正信偈勸講** ①(日)Sho-shin-ge-ki-kan-ko. ②二卷或四卷 ③存 ④慧鏡(元祿七—寶曆元A.D.1694—1731)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・一三)(谷大、宗大、八八三)

**正信偈勸講聞書** ①(日)Sho-shin-ge-ki-kan-ko-ki. ②五卷 ③存 ④功存(享保五—寛政八A.D.1723—1796)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・一〇)

**正信偈勸則** ①(日)Sho-shin-ge-ki-kan-soku. ②六卷 ③存 ④粟津義圭(一寛政一一A.D.1799)述 ⑤寛政四刊(龍大、一〇五五・六七) 明治二九刊(谷大、宗大、一六)

**正信偈勸諭録** ①(日)Sho-shin-ge-ki-kan-yu-roku. ②三卷 ③存 ④明治一六刊 ⑤帝國、六五・一六一)

④寫本(龍大、一二三五・一六・一九) (雲山龍珠)

④寫本(龍大、一二三五・一六・一九) (雲山龍珠)

**正信偈佛偈科鈔** ①(日)Sho-shin-ge-ki-kwa-sho. ②三卷 ③存 ④羊歩(慶長一三A.D.1638—)述 ⑤(參考) 淨土真宗教典志第二 ⑥承應三刊(龍大、一二三五・三)(谷大、宗大、二一八九)

**正信偈佛偈科文** ①(日)Sho-shin-ge-ki-kwa-hon. ②一卷 ③存、科文集之内 ④慧雲(享保一五—天明二A.D.1730—1782)作 ⑤寫本(谷大、宗大、一一四一、一六八九)

**正信偈勸考** ①(日)Sho-shin-ge-ki-kan-ko. ②存、十二部雜纂之内 ③寫本(龍大、一〇三八)

**正信偈勸講** ①(日)Sho-shin-ge-ki-kan-ko. ②二卷或四卷 ③存 ④慧鏡(元祿七—寶曆元A.D.1694—1731)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・一三)(谷大、宗大、八八三)

**正信偈勸講聞書** ①(日)Sho-shin-ge-ki-kan-ko-ki. ②五卷 ③存 ④功存(享保五—寛政八A.D.1723—1796)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・一〇)

**正信偈勸則** ①(日)Sho-shin-ge-ki-kan-soku. ②六卷 ③存 ④粟津義圭(一寛政一一A.D.1799)述 ⑤寛政四刊(龍大、一〇五五・六七) 明治二九刊(谷大、宗大、一六)

**正信偈勸諭録** ①(日)Sho-shin-ge-ki-kan-yu-roku. ②三卷 ③存 ④明治一六刊 ⑤帝國、六五・一六一)

④寫本(龍大、一二三五・一六・一九) (雲山龍珠)

④寫本(龍大、一二三五・一六・一九) (雲山龍珠)

④寫本(龍大、一二三五・一六・一九) (雲山龍珠)

④寫本(龍大、一二三五・一六・一九) (雲山龍珠)

名所行號 (名庫書) 著者所現 ① 月年の刊寫 ② (書考參書釋註) 書末 ③ 説解存内 ④ 代年作著 ⑤ 著者 ⑥ 缺存 ⑦ 數卷 ⑧ (名書) 名題 ⑨ 寶略字數

正信偈觀瀾記

①(日) Sho-shin-ge-  
-kwan-ran-ki. 正信念佛偈觀瀾記 ①一卷  
或二卷 ②存 ③了雲(寶曆一〇A.D.  
1760)述 ④(參考)淨土真宗教典志第二

正信偈訓讀圖繪

①(日) Sho-shin-  
-ge-kun-doku-zu-e. ②五冊 ③存 ④曉  
晴翁(木村明啓)著 松川半山畫 ⑤安政三  
刊 ⑥(帝國)二一〇・一八九)

正信偈訓蒙

①(日) Sho-shin-ge-  
-kun-mo. ②一卷 ③存 ④利井鮮妙(天  
保六一大正三A.D. 1835—1914)述 ⑤明治  
三五刊 ⑥(龍大)一二三五・二二)

正信偈甄解

①(日) Sho-shin-ge-  
-ken-ge. 正信念佛偈甄解 ②二卷 ③存  
眞宗全書第四〇 ④道隱(寛保元—文化一  
〇A.D. 1741—1813)述

⑤道隱は僧録の高足、三業惑亂の時、大謚  
と共に異議を糾弾して反正の功あり。行信  
の論、教義の精は道隱の時代に正に爛熟せ  
ること、是書によりて知り得る。内容左の  
如し。

一、緣起門  
二、大意門  
三、釋名門  
四、二者解義分  
五、大分爲二  
六、寫本(龍大、一二三五・二三)(谷大、長保・  
四五)(岡本費香、岡道亮藏) (雲山龍珠)

正信偈顯通記

①(日) Sho-shin-ge-  
-ken-tsu-ki. ②二卷 ③存 ④演澄(眞享  
二—享保一A.D. 1685—1726)述 ⑤寫本  
(龍大、一二三五・二二)

正信偈玄談

①(日) Sho-shin-ge-  
-gen. ②(日) Sho-shin-ge-  
-dan. ①一卷 ②存 ③寫本(龍大、一二三  
五・一三六)

正信偈湖南錄拾遺

①(日) Sho-  
-shin-ge-ko-nan-toku-shu-i. ②二卷 ③  
存 ④慧雲(享保一五—天明二A.D. 1730—  
1782)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・四四)

正信偈五註評

①(日) Sho-shin-ge-  
-go-chu-hyo. 正信念佛偈五註評 ②一卷  
③存 ④僧樸(享保四—寶曆二A.D. 1719  
—1762)述 ⑤安永六寫 ⑥(龍大)一二三  
五・五二)(谷大、宗大・二五七四)

正信偈五部評林

①(日) Sho-shin-  
-ge-go-bu-hyo-rin. ②三卷 ③存 ④僧樸  
(享保四—寶曆二A.D. 1719—1762)述  
⑤明治一三刊 ⑥(龍大)一二三五・五五)

正信偈吳江錄

①(日) Sho-shin-ge-  
-go-ku-roku. 正信念佛偈吳江錄 ②一卷  
③存、眞宗全書第四〇 ④慧雲(享保一五  
—天明二A.D. 1730—1782)述 ⑤安永八  
(A.D. 1792)

慧雲は藝輦の鼻祖。廣島市報專坊に住す。宗學を僧樸に受け、更らに諸山の講肆に遊んで他部を極め、畢生力を經釋祖誥の註疏製作に盡す。この書は廣島縣吳江市に於て講ぜしものに係る。說専ら亡師僧樸の『七家評註』に依り、其の典義を發揮す。行文簡潔、句苟もせず、滋味に富む。『報恩記』『慶嘆録』の二書はこの書の注脚たるべきものである。内容は三門に分る。一、明道偈意。二、判偈科節。三、入文解釋。

淨土真宗教典志第二

①(日) Sho-shin-ge-  
-gen. ②(日) Sho-shin-ge-  
-dan. ①一卷 ②存 ③寫本(龍大、一二三  
五・一三六)

正信偈光樹錄

①(日) Sho-shin-ge-  
-ko-jū-roku. ②二卷 ③存 ④善鑑(寶  
曆三A.D. 1753—)述 ⑤寫本(龍大、一二三  
五・四四)

正信偈考

①(日) Sho-shin-ge-  
-ko. ①一卷 ②存 ③寶雲(寛政三—弘化四A.  
D. 1791—1847)述 ④寫本(龍大、研眞)  
⑤(龍大、一二三五・三〇七)長保・四四) (雲山龍珠)

正信偈庚辰錄

①(日) Sho-shin-ge-  
-ko-shin-roku. ②二卷 ③存 ④道勳(一  
文政三A.D. 1820—)述 ⑤寫本(龍大、一二  
三五・四二)

正信偈講義

①(日) Sho-shin-ge-  
-ko. ①八卷 ②存 ③深  
勵(寛延二—文化一四A.D. 1749—1817)述  
④明治二三刊(龍大、一二三五・二八、研眞)  
明治二四刊(谷大、宗小・一)

正信偈講義

①(日) Sho-shin-ge-  
-ko. ②二卷 ③存 ④泰山述 ⑤嘉永三  
寫 ⑥(谷大、宗大三一七八)

正信偈講義

①(日) Sho-shin-ge-  
-ko. ①一卷 ②存 ③法律述 ④寫本(龍  
大、一二三五・二七)

正信偈講義

①(日) Sho-shin-ge-  
-ko. ①一卷 ②存 ③斷鐙(一明治二A.  
D. 1869) ④寫本(龍大、一二三五・二六)

正信偈講義

①(日) Sho-shin-ge-  
-ko. ①一卷 ②存 ③連  
井雲溪(一明治一八A.D. 1885)述 ⑤明治  
一七(A.D. 1884) ⑥寫本(谷大、宗大・三  
六六、宗大・四三三二)

正信偈講義

①(日) Sho-shin-ge-  
-ko. ①一卷 ②存 ③松島善海(安政二—  
大正二A.D. 1835—1923)述 ④大正二刊  
⑤(龍大、一二三五・三五)(京大、一・二六・  
九八)

正信偈講義

①(日) Sho-shin-ge-  
-ko. ①一卷 ②存 ③前  
田慧雲(安政四—昭和五A.D. 1857—1930)  
述 ④大正元、一一再刊 ⑤(龍大、一二三  
五・二九)

正信偈講義

①(日) Sho-shin-ge-  
-ko. ①一卷 ②存 ④斯波隨性述 ⑤刊  
本(龍大、一二三五・三三)

正信偈講義

①(日) Sho-shin-ge-  
-ko. ①一卷 ②存、眞宗通信講義 ④住  
田智見述 ⑤大正九刊 ⑥(龍大、一二三  
五・三七)

正信偈講義

①(日) Sho-shin-ge-  
-ko. ①一卷 ②存 ④雲  
山龍珠述 ⑤大正四刊 ⑥(龍大、研眞)

正信偈講義

①(日) Sho-shin-ge-  
-ko. ①一卷 ②存 ④勝山善謙述 ⑤大  
正八刊 ⑥(龍大、研眞)

正信偈講義

①(日) Sho-shin-ge-  
-ko. ①一卷 ②存 ④脇谷攝述 ⑤大  
正六刊 ⑥(龍大、一二三五・三四)

正信偈講義

①(日) Sho-shin-ge-  
-ko. ①一卷 ②存 ④柏原祐義述 ⑤大  
正四刊

正信偈講義說約

①(日) Sho-shin-  
-ge-ko-to-kyōshi-yaku. 正信念佛偈講義說  
約、正信偈說約 ②三卷 ③存、眞宗全書  
第三九 ④隨慧(一、大明二A.D. 1782)述

名所行發⑩(名庫書)考題所現⑨ 月年の刊寫⑧(書考參書釋註)書未⑦ 說解容内⑥ 代年作者⑤ 著者④ 映存③ 數卷②(名書)名題① 號略字數

寶曆六(A. D. 1756)

①巻初に本偈の註書として六要鈔、正信偈大意等十八書目を出し、此ノ外私記講録ノタクヒ勝テ計ハ難シ、今六要鈔、大意ヲ指南トシ、略祖意ヲ窺ハントス、其他ハ偏ニヨルベキコト難ク、又盡ク評量スルニ違アラズ、専ラ師說ヲ述シ、間々舊解ヲ取テ講義ニ備フルといつてゐる。その師說とは大谷派四代講師慧琳を指すのである。乃ちこれを依據として縱横にその蘊奥を發揮してゐる。殊に考證に精しいから本偈字句の出現を知るに便である。來意、大意、題號、本文の四大段に分ち、來意には自信教人信眞成報佛恩の述作なることを明かにし、大意には廣くいへば行信機往生佛土の五法、略していへば信心を示すにありといつてゐる。奥書によるに、寶曆六年十一月一日より十二月十一日まで筆述したものである。

正信偈講義と法語

①(日) Sho-shin-ge-ko-shin-ge-ko-gi-to-ho-wa. ②一卷 ③存 ④朝倉了昌(一明治四三A. D. 1910)述 ⑤明治四二刊 ⑥(龍大、一二三五・三九)

正信偈講讀

①(日) Sho-shin-ge-ko-shin. 正信念佛偈講讀 ②一卷或二卷 ③存 ④僧録(享保八一天明三A. D. 1733—1783)述 ⑤明治二刊(龍大、研眞)寫本(龍大、一二三五・四〇)

正信偈講讀

①(日) Sho-shin-ge-ko-shin. ②一卷 ③存 ④島地大等(明治八—昭和三A. D. 1875—1927)述 ⑤昭和五刊(龍大)

正信偈講辨

①(日) Sho-shin-ge-ko-ben. ②一卷 ③存 ④行照(一文久二A. D. 1863)述 ⑤寫本(龍大、研眞)

正信偈講林

①(日) Sho-shin-ge-ko-jin. 正信念佛偈講林 ②二卷 ③存 ④智河(一文化三A. D. 1806)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・四五)

正信偈講林助覽

①(日) Sho-shin-ge-ko-jin-jo-ran. ②四卷 ③存 ④智河(一文化三A. D. 1806)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・四七)

正信偈講錄

①(日) Sho-shin-ge-ko-roku. ②二卷 ③存 ④慧鑑(一天明元A. D. 1781)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・四九)

正信偈講錄

①(日) Sho-shin-ge-ko-roku. 正信偈桃華錄 ②一卷或二卷 ③存 ④智河(一文化三A. D. 1806)述 ⑤寫本(龍大、研眞)

正信偈講話

①(日) Sho-shin-ge-ko-wa. ②一卷 ③存 ④大内青精(弘化二—大正七A. D. 1845—1918)述 ⑤明治三六刊 ⑥(正大、一六三・七)

正信偈講話

①(日) Sho-shin-ge-ko-wa. 正信念佛偈講話 ②一卷 ③存 ④多田鼎著 ⑤明治四四刊、大正一五刊 ⑥(龍大、一二三五・四一)帝國(三二四・四六)

正信偈三思錄

①(日) Sho-shin-ge-san-shi-roku. 正信念佛偈三思錄 ②二卷 ③存 ④東陽圓月(文政元—明治三五A. D. 1818—1902)述 ⑤明治二九刊 ⑥(龍大、研眞)

正信偈講指掌圖

①(日) Sho-shin-ge-san-shi-sho-zu. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一二三五・四)

正信偈講談之書

①(日) Sho-shin-ge-san-dan-no-sho. ②三卷 ③存 ④功存(享保五—寛政八A. D. 1720—1796)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・五七)

正信偈私記

①(日) Sho-shin-ge-si-ki. 正信念佛偈私記 ②一卷 ③存 ④慶秀(弘治二—慶長一四A. D. 1556—1609)述 ⑤刊本(龍大、一二三五・五八)

正信偈私記

①(日) Sho-shin-ge-si-ki. ②一卷 ③存 ④寶雲(寛政三—弘化四A. D. 1791—1847)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・六一)

正信偈私記補關鈔

①(日) Sho-shin-ge-si-ki-ho-kei-si-sho. 正信念佛偈私記補關抄 ②一卷 ③存 ④是空(寛文一一—享保一三A. D. 1671—1738)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・六三)

正信偈私記略評

①(日) Sho-shin-ge-si-ki-ryaku-hyo. 正信念佛偈私記略評 ②二卷 ③存 ④慶秀(弘治二—慶長一四A. D. 1556—1609)述 ⑤享保四刊 ⑥(龍大、一二三五・六二)

正信偈私見聞

①(日) Sho-shin-ge-si-ken-mon. 正信念佛偈私見聞 ②五卷 ③存 ④空誓(慶長八—元祿五A. D. 1603—1692)述 ⑤刊本(龍大、研眞)

正信偈私考

①(日) Sho-shin-ge-si-ko. ②一卷 ③存 ④正惠述 ⑤寫本(龍大、一二三五・六五)

正信偈私註解

①(日) Sho-shin-ge-si-cho-ge. ②四卷 ③存 ④空誓(慶長八—元祿五A. D. 1603—1692)述 ⑤寫本(龍大、研眞)

正信偈師資發覆鈔

①(日) Sho-shin-ge-shi-shi-hop-puku-sho. 正信念佛偈師資發覆鈔 ②四卷 ③存、眞宗全書第三九 ④普門述

⑤著者普門は眞宗高田派の巨匠である。本書は高田派に於ける正信偈註釋の最も代表的なるもの、もと、この書は普門の著なる「本典發覆鈔」二百五十卷に收められたるものなるが、特に正信偈の講録の部分だけを抽出して別行せしものである。本書著作の意圖は教學兩様の資料に供せんとするにあるが故に、其の叙述概ね卑近に流れず、難澁に陥らざるを特色とする。但し、從來餘り眞宗學者の注意せざりし禪宗典籍を引用すること多きは、讀者に奇異の感をいだかしむる様である。(雲山龍珠)

正信偈自得解

①(日) Sho-shin-ge-toku-ge. 正信念佛偈自得解 ②二卷 ③存 ④義端勇進(一享和三A. D. 1803)述 ⑤安永五刊(龍大、一二三五・六七)(哲、こ、六・中・二八) ⑥寫本(龍大、一二三五・六八)

正信偈耳餐

①(日) Sho-shin-ge-jikan. ②一卷 ③存 ⑤寫本(龍大、一二三五・九一)

正信偈取要

①(日) Sho-shin-ge-shu-yo. ②一卷 ③存 ④僧録(享保八—天明三A. D. 1723—1783)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・七二)



正信偈拾藩録

①(日)Sho-shin-ge-shu-shin-toku. ②一卷 ③存 ④觀山述 ⑤寫本(龍大、一二三五・六九)

正信偈集解

①(日)Sho-shin-ge-shu-ge. 正信念佛偈集解 ②二卷或四卷 ③存 ④了諦述 ⑤享保三刊(龍大、一二三五・七〇)元文元刊(龍大、研眞)

正信偈集註

①(日)Sho-shin-ge-shu-cha. ②三卷 ③存 ④撰善(寶曆四一文政二)A.D.1754-1819)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・七十一)

正信偈述古録

①(日)Sho-shin-ge-juk-ko-roku. ②一卷 ③存 ④常音(一安政五)A.D.1833)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・七三)

正信偈稱揚鈔

①(日)Sho-shin-ge-sho-yo-sho. 正信念佛偈稱揚鈔 ②三卷 ③存 ④慧雲(慶長一八—元祿四)A.D.1613-1691)述 ⑤寬文一二刊(龍大、一二三五・七四)(哲、二六・中・一)寛政一一刊(京大、一・二六・六三)

正信偈隨聞記

①(日)Sho-shin-ge-zui-mon-ki. ②四卷 ③存 ④性海(明和二—天保九)A.D.1765-1838)記 ⑤寫本(龍大、研眞)

正信偈隨聞記

①(日)Sho-shin-ge-zui-mon-ki. ②一卷 ③存 ④慧麟(天明八—明治二)A.D.1788-1869)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・七五)

正信偈說約

①(日)Sho-shin-ge-se-e-tsu-yaku. 正信念佛偈講義說約、正信念佛偈說約 ②一卷 ③存、眞宗全書第三九

④隨慧(天明二)A.D.1782)述 ⑤寶曆六(A.D.1756) ⑥正信偈講義說約の下の見よ

正信偈祖釋會本

①(日)Sho-shin-ge-so-shaku-e-hon. ②一卷 ③存 ④雲山龍球述 ⑤大正四刊 ⑥龍大、一二三五・三二)

正信偈藻鑑

①(日)Sho-shin-ge-so-kan. 正信念佛偈藻鑑 ②三卷 ③存 ④慧觀述 ⑤寫本(龍大、一二三五・八二)

正信偈勸說

①(日)Sho-shin-ge-oi-satsu. 正信念佛偈勸說 ②三卷 ③存 ④月筈(寛文一一—享保一四)A.D.1671-1759)述 ⑤正徳元(A.D.1711) ⑥正徳四、五刊 ⑦龍大、一二三五・七七—七九、研眞)折、二五・左・二二)

正信偈勸說義憑

①(日)Sho-shin-ge-so-satsu-gi-hyo. 正信念佛偈勸說義憑 ②七卷 ③存 ④月筈(寛文一一—享保一四)A.D.1671-1729)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・八〇)別置(寶曆一一—寛(谷大、長保・九四)寶曆一二—寛(谷大、宗大・三〇五五)

正信偈勸說義憑觀由辨

①(日)Sho-shin-ge-so-satsu-gi-hyo-kwan-yu-ben. 正信念佛偈勸說義憑觀由辨 ②一卷 ③存 ④泰巖(正徳元—寶曆一三)A.D.1711-1763)述 ⑤寛延元(A.D.1748) ⑥寫本(龍大、一二三五・八一・別置)

正信偈大意

①(日)Sho-shin-ge-tai. 正信念佛偈大意 ②一卷 ③存、蓮如上人全集、眞宗法要第二、眞宗聖教大全上巻、眞宗聖典全書、眞宗假名聖教第一

〇之内 ④蓮如(應永二—明應八)A.D.1415-1499) ⑤長祿四(A.D.1460)

⑥常に蓮如を後授せし有名な信徒近江國野洲郡金森村の道西(後に善從と改む、通稱金森彌七)の再三の懇望により、本偈の文意を和けて簡明に筆述せるもの。本書の奥書に自らこのことを記し、文言ノイヤシキヲカハリミズ、マタ義理ノ次第ヲモイハズ、

タ、願主ノ命ニマカセテ、コトバヲヤハラゲ、コレヲシルシアタフ」と述べて、年時をも書き添へておられる。長祿四年は蓮如四十六歳の時である、初めに本偈の前半は、大無量壽經の意、後半は三朝七祖の教意を讀詠せるものなる由を一言し、次に本文を追ふて解釋を下してゐる。本偈の研究には必ず参考すべき指針であり、蓮如の生涯中唯一の著書といふべきである。

⑦(参考) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗教典志第一 ⑧明和七刊(谷大、宗大・三四一五・三五二九)龍大、研眞)元祿二刊(谷大、宗大・三四九六)寫本(谷大、宗大・三四一八—三四一九)(龍大、別置) (相原祐義)

正信偈大意

①(日)Sho-shin-ge-tai. 漢文正信偈大意 ②一卷 ③存 ④蓮如(應永二—明應八)A.D.1415-1499) ⑤善性寺本影寫(谷大、宗丙・一〇五)

正信偈大意講義

①(日)Sho-shin-ge-tai-ko-gi. ②一卷 ③存、眞宗大系第二九 ④徳龍(安永元—安政五)A.D.1772-1838)述 ⑤天保一五(A.D.1844)

⑥天保十五年二月十八日より近江國長濱別院にて講述せるもの、録録である。來意、

題號、入文の三門に分ち、繁簡よくその度を計つて述べてあるから、意を汲むに極めて便利である。殊に述者は有名な篤信者であつたから、その篤信の片鱗が叙述の上に閃いてゐる。

正信偈大意講解

①(日)Sho-shin-ge-tai-ko-gi. ②三卷 ③存 ④福田義導(文化二—明治一四)A.D.1805-1881)述 ⑤明治一〇刊(龍大、一二四三・一)明治二二刊(谷大、宗小・九七)

正信偈大意講述

①(日)Sho-shin-ge-tai-ko-jutsu. ②一卷 ③存 ④徳龍(安永元—安政五)A.D.1772-1838)述 ⑤明治二八刊 ⑥(谷大、宗洋・一二三)

正信偈大意二十題撮英

①(日)Sho-shin-ge-tai-jiu-ju-daiki-techi. ②二卷 ③存 ④占部觀順(文政七—明治四三)A.D.1824-1910)述 ⑤明治一〇刊 ⑥(龍大、一五〇一・一三七)(谷大、宗大・八四一)(帝國、五・一四七)

正信偈大意分科

①(日)Sho-shin-ge-tai-ibu-bun-ka. ②一卷 ③存 ④占部觀順(文政七—明治四三)A.D.1824-1910)作 ⑤明治一〇刊 ⑥龍大、一二四三・二二)(帝國、一八三・三〇三)

正信偈大意略解

①(日)Sho-shin-ge-tai-ryaku-ge. ②一卷 ③存 ④富地義天(文化一四—明治一二)A.D.1817-1879)述 ⑤明治一七刊 ⑥(谷大、宗小・一九〇)

正信偈大意略述

①(日)Sho-shin-ge-tai-ryaku-jutsu. ②一卷 ③存



吉谷覺壽(天保一三一大正三 A.D. 1842-1914)述 ①明治四二刊 ②(谷大、宗小・一八一)(龍大、研眞)

正信偈大綱 ①(日)Sho-shin-ge-tai-ko. ②一卷 ③存 ④觀法述 ⑤寫本(龍大)

正信偈短練錄 ①(日)Sho-shin-ge-tan-ko-roku. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一二三・五・八三)

正信偈談講 ①(日)Sho-shin-ge-dan-ko. ②一卷 ③存 ④行照(一文久 I.A.D. 1862)述 ⑤寫本(龍大)

正信偈註釋 ①(日)Sho-shin-ge-chu-shaku. ②一卷 ③存 ④曉晴述 ⑤寫本(龍大、研眞)

正信偈聽記 ①(日)Sho-shin-ge-cho-ki. ②一卷 ③存 ④頓乘(寬政一一元久 I.A.D. 1799-1862) ⑤寫本(龍大、一二三・五・八六)

正信偈聽記 ①(日)Sho-shin-ge-cho-ki. ②一卷 ③存 ④龍溪記 ⑤寫本(龍大、一二三・五・八七)

正信偈聽記 ①(日)Sho-shin-ge-cho-ki. ②一卷 ③存 ④松島善讓(文化三十一明治一九A.D. 1806-1886)述 ⑤寫本(龍大、一二三・五・八八、研眞)

正信偈聽錄 ①(日)Sho-shin-ge-cho-roku. ②一卷 ③存 ④道隆記 ⑤寫本(龍大)

正信偈隨意鈔 ①(日)Sho-shin-ge-zui-i-sho. ②勸化拾葉正信偈隨意鈔 ③十二卷 ④存 ⑤南溪 ⑥元文元刊 ⑦龍大、

一〇五・六八) 正信偈通釋 ①(日)Sho-shin-ge-tou-shaku. ②一卷 ③存 ④高木俊一述 ⑤大正一〇刊 ⑥龍大、一二三・五・八九、研眞)

正信偈天親章 ①(日)Sho-shin-ge-ten-shin-sho. ②一卷 ③存 ④常觀述 ⑤寫本(龍大、一二三・五・一三七)

正信偈桃華語 ①(日)Sho-shin-ge-to-ka-wa-go. ②二卷 ③存 ④若霖(延寶三十一享保二〇A.D. 1675-1735)述 ⑤延享二寫 ⑥(龍大、研眞)

正信偈統略 ①(日)Sho-shin-ge-ryaku. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一二三・五・九〇)

正信偈如幻錄 ①(日)Sho-shin-ge-nyo-gen-roku. ②二卷 ③存 ④性海(明和二一天保九A.D. 1765-1839)述 ⑤寫本(龍大、一二三・五・九二)

正信偈念佛略解 ①(日)Sho-shin-ge-nem-hinshu-roku. ②一卷 ③存 ④靈陞(安永四一嘉永四A.D. 1775-1851)述 ⑤明治二六寫 ⑥(龍大、研眞)

正信偈之中興書 ①(日)Sho-shin-ge-no-naka-no-oku-gaki. ②一卷 ③存 ④異義集(了祥稿本)第一 ⑤傳、連如(應永二一一明應八A.D. 1415-1499) ⑥文明一 I(A.D. 1479)

正信偈一念佛の一念の區別を簡單に説明したもので、中に「信の一念トイフハ領解ノコノロヲ信の一念トイハバ、マタタ凡夫ノ念ニアラズトイフナリ、コレヲ眞因ヲ決了スル安心ノ一念トモ、隠ノ一念トモ、信

心決定ノ一念トモコ、ロウベキナリ」として、隠の一念といふ珍らしき術語を出し、行の一念は佛恩報謝にして、これ「稱名ノ一念ナレバ、スナハチ行者ノ念ナレバ行ノ一念トイフナリ」と云ひ、巻尾に「于時文明十一年三月二十三日、アマリ山中徒然ノ、筆ナグサミニ、コレヲ書、コレサラニ人ノミンタメニアラズ、フカク信ズベキモノナリ、アラノ片腹イタキコトモ、モヤ、シカリトイヘドモ、カタク所望ノアヒダ、コレヲカキアタフルモノナリ、南無阿彌陀佛」と記し、別行に「連如上人之御眞筆令書寫訖」と書添へてゐるが、了祥は異義集巻十一の末尾に本書を集録し、それより十数紙前の一紙に本書の眞偽を稽へて、「信行一念抄と全く同じ、文に「釋尊ノ經教、代々相承ノ善知識、コトニハ今時聖人御尊達」といふによるに、蓮師の御筆にはあらざるべし」と推定してゐる。

正信偈版本一件記録 ①(日)Sho-shin-ge-han-ben-ken-ki-roku. ②一卷 ③存 ④文政九寫 ⑤(龍大、別置)

正信偈祕訣鈔 ①(日)Sho-shin-ge-hi-kes-sho. ②一卷 ③存 ④寶雲(寛政三一弘化四A.D. 1791-1847)述 ⑤寫本(龍大、一二三・五・一〇〇)

正信偈備檢 ①(日)Sho-shin-ge-bi-ken. ②二卷 ③存 ④支智(享保一九寛政六A.D. 1731-1794)述 ⑤寫本(龍大、一二三・五・九四)

正信偈備忘錄 ①(日)Sho-shin-ge-bi-wo-roku. ②一卷 ③存 ④寶雲(寛政三一弘化四A.D. 1791-1847)述 ⑤寫本(龍大、研眞)

正信偈筆記 ①(日)Sho-shin-ge-hi-ki. ②四卷 ③存 ④僧録(享保八一天明三A.D. 1723-1783)述 ⑤寫本(龍大、一二三・五・九三)

正信偈評註 ①(日)Sho-shin-ge-byo-cha. ②正信念佛偈評註 ③存、眞宗全書第四〇 ④僧録(享保八一天明三A.D. 1723-1783)述

正信偈標註撮要 ①(日)Sho-shin-ge-hyo-cho-shu-sai-yo. ②一卷 ③存 ④僧録(享保八一天明三A.D. 1723-1783)述 ⑤寫本(龍大、研眞)

正信偈不及錄 ①(日)Sho-shin-ge-fu-kyo-roku. ②一卷 ③存 ④靈藏(一文久元A.D. 1861)述 ⑤寫本(龍大、一二三・五・一〇一)

正信偈丙子記 ①(日)Sho-shin-ge-hei-shu-ki. ②四卷 ③存、眞宗大系第一七 ④宣明(寛延三一文政四A.D. 1750-1821)記 ⑤文化一三(A.D. 1816)

著者僧録は眞宗本願寺派に於いて最も勢力ある學派なる空華轍の鼻祖である。本書は極めて簡潔に正信偈の註釋を施せるものである。題號に已に評註とあるが如く、存覺上人の「六要鈔」、西吟の「要解」、知空の「助講」、性海の「刊定記」、月鑿の「勸説」、若霖の「文軌」、法霖の「蹄漫記」の七部の正信偈註釋書に批評を加へ、もつて後學の指針となせるものである。(雲山龍珠)

名所行發 ① (名庫書) 書處所現 ② 月年の刊載 ③ (書考委古釋註) 書末 ④ 説解卷内 ⑤ 代年作著 ⑥ 著者 ⑦ 缺存 ⑧ 數卷 ⑨ (名書) 名題 ⑩ 號略字數

①高倉學寮講義年鑑によるに、師は文化三年及び同十三年の前後兩度に本偈を講述してゐるが、本書は後の文化十三年の大谷派夏安居における講義の筆録である。先づ初に淨土眞宗の大綱たる教行信證の四法につきて要義を述べ、次に正しく本偈の來意、大意、題號を講じ、更に本文を追ふて懇切に詳解してゐる。即ち本偈の來意には遠近の二義ありとして、遠くは教行證文類の行卷に言他力者如來本願力とあるより出で、近くは同行卷偈前の文に示されたる意より出づといひ、大意釋には唯他力の信心を示すが本偈の大意なりと講じ、題號釋また甚だ詳解をきはめ、本文の解釋も師の蘊著を傾けてその解釋實に至れり盡せりの觀がある。四月十五日開筵以後、會を重ねること五十二回、蓋し正信偈講義の精細なるものであらう。

**正信偈辨述抄** ①(日)Sho-shin-ge-ban-jus-sho. ②三卷 ③存 ④元祿九刊 (龍大、一二三五・九五)

**正信偈捕影記** ①(日)Sho-shin-ge-to-yo-ki. 正信念佛偈捕影記 ②三卷 ③存、眞宗全書第四〇 ④法森、元祿六一寛保元A.D.1693—1711)述

①著者法森は眞宗本願寺派の第四能化にして、其の學識は廣く佛教一般に通じ、眞宗宗學の大成者である。本書は古來眞宗の學

匠の末書には多く引用せられたるところにして、あらゆる點に於いて眞宗々學の基礎となれる雄著である。殊に一般佛教の原理の上に、眞宗々學の種々なる問題を調理せんとするものには、是非とも参考とすべき書である。

①寫本(龍大、一二三五・九六) (雲山龍珠)

**正信偈法語** ①(日)Sho-shin-ge-to-go. ②一册 ③存 ④藤井信悟述 ⑤大三刊 ⑥(谷大)

**正信偈報恩記** ①(日)Sho-shin-ge-hon-on-ki. 正信念佛偈報恩記 ②二卷 ③存、眞宗全書第四〇 ④道振(安永二—文政七A.D.1773—1824)述

①著者道振は眞宗本願寺派の學匠にして、仍園學派の大成者である。本書は文簡なれども仍園學派の精粹を盡し、其の師大瀧の衣鉢をよく繼承せる點に於いて注意されるべき書である。眞宗々學史上、仍園學派の學說を把握せんと欲するものは、是非本書の編讀を忘れてはならぬ。

①寫本(龍大、一二三五・一〇四—一〇五) (雲山龍珠)

**正信偈本義** ①(日)Sho-shin-ge-hon-gi. 正信念佛偈本義 ②四卷 ③存 ④眞阿(寶永二A.D.1705—)述 ⑤寶永二刊 ⑥(龍大、一二三五・一〇六)

**正信偈妙義寶錄** ①(日)Sho-shin-ge-myō-gi. 正信念佛偈妙義寶錄 ②四卷 ③存 ④寫本(龍大、一二三五・一〇七)

**正信偈忘己錄** ①(日)Sho-shin-ge-mō-ki-ri-oku. ②三卷 ③存 ④行感(一

享保一〇A.D.1725—)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・九九)

**正信偈文軌** ①(日)Sho-shin-ge-mon-ki. 正信念佛偈文軌 ②三卷或四卷 ③存 ④若森汝岱(延寶三—享保二〇A.D.1675—1735)撰 ⑤元文頃刊 ⑥(京大、日大未・六八七)(龍大、一二三五・一一二)

**正信偈文軌附書** ①(日)Sho-shin-ge-mon-ki-ki-ka-gaki. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一二三五・一一四)

**正信偈文軌旁通** ①(日)Sho-shin-ge-mon-ki-ka-bō-tsu. 正信念佛偈文軌旁通 ②存 ③若森(延寶三—享保二〇A.D.1675—1735)述 ④刊本(龍大、一二三五・一一二)

**正信偈文說** ①(日)Sho-shin-ge-mon-satsu. 正信念佛偈文說 ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一二三五・一一五)

**正信偈文林** ①(日)Sho-shin-ge-mon-jin. 正信念佛偈文林 ②一卷 ③存、眞宗全書第三九 ④慧空(正保元—享保六A.D.1641—1721)述 ⑤寛文四(A.D.1664)

①普通の講録と異り、本偈の字句を講述の文章中にはめこみ、巧に達意的解釋を下したところが本書の特色である。即ちその一節を出せば、本偈の極重惡人唯稱佛、我亦在彼攝取中、煩惱障眼雖不見を講述して、「極重惡人無他方便、幸今值彌陀佛之願、唯稱佛名一生極樂、若稱佛名者名義相應、而蒙攝取之益、故、一光明遍照十方世界念佛衆生、攝取不捨、是故我亦在被攝取之光中、問、已處光中、何不不見光明乎、

答雖處光中、恒沙煩惱障蔽智眼、不能見」といふ風である。若し本書の意をとつて和譯したならば、平易流麗なる一篇の正信偈大意が得られるであらう。

①享保一六刊 ②(龍大、一二三五・一〇二) (柏原祐義)

**正信偈問答記** ①(日)Sho-shin-ge-mon-do-ki. ②二册 ③存 ④勝山善讓編 ⑤明治二八刊 ⑥(帝國、一一〇・三三)

**正信偈聞記** ①(日)Sho-shin-ge-mon-ki. ②一卷 ③存 ④功存(享保五—寛政八A.D.1720—1796)述 ⑤寛政五寫 ⑥(谷大、宗大・三〇五四)

**正信偈聞記** ①(日)Sho-shin-ge-mon-ki. ②二卷 ③存 ④雲嶺(寶曆九—文政七A.D.1759—1824)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・一〇九)

**正信偈聞記** ①(日)Sho-shin-ge-mon-ki. ②一卷 ③存 ④行照(文久二—A.D.1862)記 ⑤寫本(龍大、一二三五・一〇八)

**正信偈聞林** ①(日)Sho-shin-ge-mon-jin. ②三卷 ③存 ④寫本(龍大、一二三五・一一六)

**正信偈由序解** ①(日)Sho-shin-ge-yū-ji-ka. ②五卷 ③存 ④寫本(龍大、一二三五・一一七)

**正信偈愈彥錄** ①(日)Sho-shin-ge-yū-gen-ryoku. ②一卷 ③存 ④古道記 ⑤寫本(龍大、一二三五・一一八)

**正信偈要解** ①(日)Sho-shin-ge-yō-ge. 正信念佛偈要解 ②四卷 ③存 ④西

答雖處光中、恒沙煩惱障蔽智眼、不能見」といふ風である。若し本書の意をとつて和譯したならば、平易流麗なる一篇の正信偈大意が得られるであらう。

①享保一六刊 ②(龍大、一二三五・一〇二) (柏原祐義)

**正信偈問答記** ①(日)Sho-shin-ge-mon-do-ki. ②二册 ③存 ④勝山善讓編 ⑤明治二八刊 ⑥(帝國、一一〇・三三)

**正信偈聞記** ①(日)Sho-shin-ge-mon-ki. ②一卷 ③存 ④功存(享保五—寛政八A.D.1720—1796)述 ⑤寛政五寫 ⑥(谷大、宗大・三〇五四)

**正信偈聞記** ①(日)Sho-shin-ge-mon-ki. ②二卷 ③存 ④雲嶺(寶曆九—文政七A.D.1759—1824)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・一〇九)

**正信偈聞記** ①(日)Sho-shin-ge-mon-ki. ②一卷 ③存 ④行照(文久二—A.D.1862)記 ⑤寫本(龍大、一二三五・一〇八)

**正信偈聞林** ①(日)Sho-shin-ge-mon-jin. ②三卷 ③存 ④寫本(龍大、一二三五・一一六)

**正信偈由序解** ①(日)Sho-shin-ge-yū-ji-ka. ②五卷 ③存 ④寫本(龍大、一二三五・一一七)

**正信偈愈彥錄** ①(日)Sho-shin-ge-yū-gen-ryoku. ②一卷 ③存 ④古道記 ⑤寫本(龍大、一二三五・一一八)

**正信偈要解** ①(日)Sho-shin-ge-yō-ge. 正信念佛偈要解 ②四卷 ③存 ④西

吟(慶長一〇—寛文三A.D.1605—1663)述  
④明曆四刊 ④龍大、一二三五・一二三三  
(哲、二・五・左・三)

正信偈要解刊定記

①(日) Sho-shin-ge-yo-ge-kan-tei-ki. 正信念佛偈要解刊定記 ②三卷或五卷 ③存 ④性海(正保元—享保二A.D.1644—1727) ⑤天和三(A.D.1683) ⑥正徳三寫(龍大、一二三五・一二四)寶永八寫(龍大、一二三五・一二五)

正信偈要解評説

①(日) Sho-shin-ge-yo-ge-hyo-setsu. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、研眞)

正信偈要訣

①(日) Sho-shin-ge-yo-kuetsu. 正信念佛偈要訣 ②一卷 ③存 ④偈叙(寶曆三—文政八 A.D.1753—1825 一説文政九、年六五寂)述 ⑤明治二七刊(龍大、一二三五・一一九)(京大、日大未六八八)明治三四刊(帝國、一八七・一九六)

正信偈要略

①(日) Sho-shin-ge-yo-ryaku. ②一卷 ③存 ④松原一誠述 ⑤寫本(龍大、一二三五・一二七)

正信偈略記

①(日) Sho-shin-ge-ryaku-ki. ②一卷 ③存 ④寶雲(寛政三—弘化四 A.D.1791—1847)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・一二八)

正信偈略考

①(日) Sho-shin-ge-ryaku-ko. ②一卷 ③存 ④偈銘(享保八—天明三A.D.1723—1783)述 ⑤寫本(龍大、研眞)

正信偈略讚

①(日) Sho-shin-ge-ryaku-san. ②二卷 ③存 ④偈銘(享保八—天明三A.D.1723—1783)述 ⑤寫本(龍大、研眞)

八—天明三A.D.1723—1783)述 ⑥寫本(龍大、研眞)

正信偈略釋

①(日) Sho-shin-ge-ryaku-shaku. ②一卷或二卷 ③存 ④後藤霞城(文化九—明治一三A.D.1812—1880)述 ⑤明治一一、三〇再刊 ⑥(帝國、五・一四六)(龍大、研眞)

正信偈略釋

①(日) Sho-shin-ge-ryaku-shaku. 正信念佛偈略釋 ②一卷 ③存 ④藤永清徹述 ⑤大正一二刊(龍大、一二三五・一二九)

正信偈略釋

①(日) Sho-shin-ge-ryaku-shaku. ②一卷 ③存 ④平安專修學院編 ⑤大正一五刊 ⑥(龍大)

正信偈略述

①(日) Sho-shin-ge-ryaku-jutsu. 正信念佛偈略述 ②一卷 ③存、眞宗全書第三九 ④慧空(正保元—享保六A.D.1644—1727)述 ⑤元祿一六(A.D.1703)

正信偈略述

①元祿十六年夏、師六十歳のとき本偈を講義し、後その要領を自ら草したのが本書である。來意、大意、題目、正文の四大段に分ち、處々に佛光寺第十三主光教の正信偈問書、并に慶秀の同偈私記の説を批判し、別に一義を立てたる點が、永く大谷派學界の權威とされてゐる。説述の體裁は比較的簡約であるが、明透適確、殊に本偈の字句に關する典據の文獻を一々細密に抄出してゐるから、この方面のことを知るに至便である。

正信偈略辨

①(日) Sho-shin-ge-ryaku-ban. ②八卷 ③存 ④寫本(龍大)

正信偈領解鈔

①(日) Sho-shin-ge-ryo-ge-sho. 正信念佛偈領解鈔 ②二卷 ③存 ④元秀述 ⑤延享四寫(龍大、一二三五・二四)寫本(龍大、一二三五・二五)(哲、二・六・左・二八)

正信偈類文要

①(日) Sho-shin-ge-rui-mon-yo. ②二卷 ③存 ④紫陽撰 ⑤寫本(龍大、一二三五・一二三)

正信偈錄

①(日) Sho-shin-ge-roku. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一二三五・一三四)

正信偈錄

①(日) Sho-shin-ge-roku. ②四卷 ③存 ④向西記 ⑤寫本(龍大、一二三五・一三三)

①(日) Sho-shin-ge-roku. ②一卷 ③存 ④功存(享保五—寛政八A.D.1720—1796)述 ⑤寫本(龍大、一二三五・一三二)

正信清濁附本

①(日) Sho-shin-ge-daku-jūhon. ②玄智景耀(享保一九—寛政六A.D.1734—1794) ③明和八(A.D.1771) ④(参考) 淨土眞宗教典志第一(1771) ⑤(参考) 淨土眞宗教典志第一(1771) ⑥(参考) 淨土眞宗教典志第一(1771) ⑦(参考) 淨土眞宗教典志第一(1771) ⑧(参考) 淨土眞宗教典志第一(1771) ⑨(参考) 淨土眞宗教典志第一(1771) ⑩(参考) 淨土眞宗教典志第一(1771)

正信念佛偈

①(日) Sho-shin-nen-butsu-ge. 正信念佛 ②一卷 ③存、大正八三・五八九 No. 2646、縮霜九、佛敎大系第五三、眞宗聖敎大全卷上、眞宗聖典全書 ④親鸞(承安三—弘長二A.D.1173—1262)撰

正信念佛偈

①正信念佛偈は淨土眞宗の開祖親鸞聖人の撰述なる「顯淨土眞實敎行證文類」の中の

正信念佛偈

「行卷」末尾に出ずる七百二十句の偈頌である。略して正信偈とも呼ぶ。別行する所

正信念佛偈

以は佛前に於ける誦詠のためにして、何人によつて創始されしかは不明である。但し

正信念佛偈

運如上人に至つて、和讃と共に佛前勤行に

正信念佛偈

並用せられ、上人の越前吉崎に居住の時、

正信念佛偈

三帖和讃に合刻せられた。製作年代は「敎

正信念佛偈

行證文類」と同時代である。親鸞聖人がこの偈頌を製作せられし理由は、佛前の文に

正信念佛偈

「爾者歸大聖眞言、聞大祖解釋、信知佛恩深遠、作正信念佛偈」と明記せられる如く、經釋の解釋によつて以て宗意を宣述し、廣大の佛恩を謝せんとするにある。本偈は大別して二段となる。初めの一段は依經分にして、「歸命無量」等の二句は壽命光明の二徳を標して所讃の佛體を出し、「法藏菩薩」等八句は彌陀成佛の因を明し、「普放無量」等六句は彌陀成佛の果を顯し、「本願名號」等四句は衆生往生の因果を示し、「如來所以」等二四句は釋尊の眞説を出せるものである。後の一段は依釋分にして三國傳來の七高祖の功勳を歌歎せるもの、就中、「釋迦如來」等十二句は龍樹菩薩「天親菩薩」等十二句は天親菩薩「本師曇鸞」等十二句は曇鸞大師、「道綽決聖」等八句は道綽禪師、「善導獨明」等八句は善導大師、「源信廣開」等八句は源信和尙、「本師源空」等八句は法然上人を讚嘆し其所説を宣述せられたものである。而して「弘經大士」等の四句はこの七祖の恩徳を勸結するものである。要するに、一偈の明すところは淨土眞宗の精要にして、一宗の肝腑はこの中に盡

されてゐる。その所説は一言にして覆へば、大行と大信を明すものにして、これはその題號に顯はれてゐる。正信は大信、念佛とは大行にして、共にこれ選擇本願の行信にして、如來回施の眞實法である。衆生はこの大行大信によつて、往生の因を成辯し、些の機功を用ふるを要せないのである。本偈の註釋は無慮数十部の多きに達し、先哲の力を盡して講究せるところである。註釋書については別項を参照せられたる。

⑦〔参考〕淨土眞宗教典志第一 ⑧寛延四刊 ⑨〔谷大、宗大・三二五五〕(雲山龍珠) **正信念佛偈** ⑩〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ge. ⑪二册卷 ⑫存 ⑬朝鮮李智光譯 ⑭大正一二刊 ⑮〔谷大、宗洋・七六三〕

**正信念佛偈一言鈔** ①〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ichi-gon-shō. 正信念佛偈談話 ②四卷 ③存 ④信曉(安永三—安政五 A. D. 1771—1838)述 ⑤刊本(谷大、宗大・八七六)

**正信念佛偈乙巳講義引文** ①〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ge-e-shō-ku-gi. 正信念佛偈(谷大、宗大・三〇七三)

**正信念佛偈鈔句義** ①〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ge-e-shō-ku-gi. 正信念佛偈鈔句義 ②二卷 ③存、眞宗全書第三九

④慧然(元祿六一—寶曆一四 A. D. 1693—1764)述 ⑤享保一八(A. D. 1733)

⑥序に「舊註者不<sub>レ</sub>全依<sub>二</sub>於常樂鈔(六要鈔)多爲<sub>二</sub>自解、今會<sub>二</sub>偈與<sub>一</sub>鈔、以分<sub>二</sub>句義、故

編名「會鈔句義」といへる如く、各節毎に先づ一々本偈并に六要鈔の註文を擧げ、六要鈔を標準として解釋を下してある所が本書の特色である。本偈に對する存覺六要鈔、蓮如(正信偈大意)兩師の釋意を知るに參考すべきである。

⑦〔参考〕淨土眞宗教典志第二 ⑧享保一八寫 ⑨〔谷大、宗大・二三〕(柏原祐義) **正信念佛偈駕說帶佩記** ①〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ge-setsu-tai-hai-ki. 正信偈駕說帶佩記 ②三卷或六卷 ③存、眞宗全書第三九 ④慧琳(正徳五一—寛政元 A. D. 1715—1789)述 ⑤安永五(A. D. 1776) ⑥正信偈駕說帶佩記の下を見よ ⑦寫本(谷大、宗大・三九三)(龍大、一二三・五・一四)

**正信念佛偈皆攝** ①〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ge-kai-shō. 正信偈皆攝 ②三卷 ③存 ④宗信述 ⑤〔参考〕淨土眞宗教典志第二 ⑥萬治四刊 ⑦〔谷大、宗大・三六六五〕(龍大、一二三・五・九)(哲、こ・六・左・一五)

**正信念佛偈開首** ①〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ge-kai-shū. 正信偈開首 ②一卷 ③存 ④若森(延寶三一—享保二〇 A. D. 1675—1733)述 ⑤刊本(谷大、宗大・三七九)

**正信念佛偈鶴林記** ①〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ge-kaku-rin-ki. ②三卷 ③存 ④德龍(安永元—安政五 A. D. 1772—1838)述 ⑤刊本(谷大、宗大・二三五四)

**正信念佛偈刊仰錄** ①〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ge-kan-kō-roku. ②一卷 ③存 ④慧然(元祿六一—明和元 A. D. 1693—1764)述 ⑤寫本(谷大、宗大・一八八九)

**正信念佛偈記** ①〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ge-ki. ②二卷 ③存 ④蜂屋良潤(文政一〇—明治三八 A. D. 1827—1905)述 ⑤明治二二(A. D. 1889) ⑥寫本(谷大、宗大・一六八二)

**正信念佛偈義指** ①〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ge-gi-shi. ②四卷 ③存 ④支智景耀(享保一九—寛政六 A. D. 1731—1794)述 ⑤寶曆二(A. D. 1752) ⑥〔参考〕淨土眞宗教典志第二

**正信念佛偈聞書** ①〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ge-kiiki-gaki. 光教上人正信念佛偈聞書、正信偈聞書 ②一卷 ③存、眞宗全書第三九 ④光教(永享二—文龜三 A. D. 1430—1503)述 ⑤文龜三(A. D. 1503) ⑥正信偈聞書の下を見よ。 ⑦〔参考〕淨土眞宗教典志第二 ⑧明治九刊(龍大、寫本(龍大別置)(谷大、宗大・四三五八)(佐々木篤祐藏)

**正信念佛偈聞書** ①〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ge-kiiki-gaki. 正信偈聞書 ②二卷 ③存、眞宗全書第四〇 ④信鏡(享保八—天明三 A. D. 1733—1788)述 ⑤天明三(A. D. 1783) ⑥正信偈聞書の下を見よ。 ⑦寫本(龍大、一二三五・一六・一九)

**正信念佛偈聞書** ①〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ge-kiiki-gaki. ②三卷 ③存 ④法住(一明治七 A. D. 1874)述 ⑤明治五寫 ⑥〔谷大、宗大・三四三三〕

**正信念佛偈慶嘆錄** ①〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ge-kyō-tan-roku. 正信偈慶嘆錄 ②二卷 ③存、眞宗全書第四〇 ④觀信(寶曆二—文政五 A. D. 1752—1822)述 ⑤正信偈慶嘆錄の下を見よ。 ⑥自筆本(矢口觀淨藏)

**正信念佛偈口義** ①〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ge-ku-gi. ②四卷 ③存 ④宣明(寛延二—文政四 A. D. 1749—1821)述 ⑤寫本(谷大、宗大・三九四)

**正信念佛偈科** ①〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ge-kwa. ②一卷 ③存 ④若霖汝岱(延寶三一—享保二〇 A. D. 1675—1735)作 ⑤〔参考〕淨土眞宗教典志第二 ⑥寫本(龍大、一二三五・一一二)

**正信念佛偈科鈔** ①〔日〕Shō-shin-nem-butsu-ge-kwa-shō. 正信偈科鈔 ②三卷 ③存 ④羊歩(慶長一三 A. D. 1608—)述 ⑤〔参考〕淨土眞宗教典志第二 ⑥承應三刊 ⑦龍大、一二三五・三)(谷大、宗

名所行發⑩(名庫書)著題所現⑨ 月年の刊寫⑧(書考參書釋註)書本⑦ 説解容内⑥ 代年作著⑤ 著者④ 缺存③ 數卷②(名書)名題① 號略字數

大・二一八九

正信念佛偈料文

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kwan-mon. 正信佛料文 ②一卷 ③存、科文集之内 ④慧雲(享保一五一天明二A.D.1730-1782) ⑤寫本(谷大、宗大・一四一、一六八九)

正信念佛偈勸講

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kwan-kō. 正信佛勸講 ②二卷或四卷 ③存 ④慧鑄(元祿七一寶曆元A.D.1694-1751)述 ⑤寫本(谷大、宗大・八八三)(龍大・一二三五・一三)

正信念佛偈勸則

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kwan-soku. 正信佛勸則 ②一卷 ③存 ④粟津義圭(一寛政一A.D.1799)述 ⑤明治二九刊 ⑥(谷大、宗洋・一六)

正信念佛偈觀瀾記

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kwan-ran-ki. 正信佛觀瀾記 ②一卷或二卷 ③存 ④了雲(一寶曆一O.A.D.1760)述 ⑤(參考) ⑥淨土眞宗教典志第二 ⑦寫本(龍大・一二三五・一一)

正信念佛偈訓點讀

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kun-ten-doku. ②一卷 ③存、眞宗假名法典卷上

正信念佛偈訓讀抄

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kun-doku-shō. ②二卷 ③存 ④寫本(谷大・二五六一) ⑤shin-nem-butsu-ge-ge-ro-hen. 正信佛夏爐篇 ⑥三卷 ⑦存、眞宗全書第四〇 ⑧仰養(享保六一寛政六A.D.1721-1791)述

①正信佛夏爐篇の下を見よ。 ②寫本(谷大、長保四三)(龍大・一二三五・一一)

正信念佛偈甄解

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-ken-ge. 正信佛甄解 ②二卷 ③存、眞宗全書第四〇 ④道隱(寛保元一文化一O.A.D.1741-1813)述 ⑤正信佛甄解の下を見よ。 ⑥寫本(谷大、長保四四)(龍大・一二三五・二三)(岡本寶香、岡道亮藏)

正信念佛偈玄談聞記

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-gen-dan-mou-ki. ②一卷 ③存 ④惠隆述 ⑤寫本(谷大、宗大・三五九八)

正信念佛偈鼓吹

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-ka-sui. 正信念佛偈鼓吹鈔 ②九卷 ③存 ④元祿九刊 ⑤(帝國、一一〇・一七二)

正信念佛偈五注評

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-ochū-hyō. 正信佛五注評 ②一卷 ③存 ④僧樸(享保四一寶曆二A.D.1719-1762)述 ⑤安永六寫(谷大、宗大・二五七四)寫本(龍大・一二三五・五二)

正信念佛偈吳江錄

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-ō-kō-roku. 正信佛吳江錄 ②一卷 ③存、眞宗全書第四〇 ④慧雲(享保一五一天明二A.D.1730-1782)述 ⑤安永八(A.D.1779) ⑥正信佛吳江錄の下を見よ。 ⑦(參考) ⑧淨土眞宗教典志第二 ⑨弘化三寫(谷大、宗大・三〇七一)寫本(谷大、長保・四四)(龍大・一二三五・五五・五六、研眞)

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kō-roku. ②一卷 ③存 ④慧琳(正徳五一寛政元A.D.1715-1789)述 ⑤安永三寫 ⑥(谷大、宗大・三二一五)

正信念佛偈仰記

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kō-ki. ②二卷 ③存 ④嚴藏(一安永四A.D.1773)述 ⑤寫本(谷大、宗大・一九二二)

正信念佛偈廣談

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kō-dan. 正信佛廣談 ②二卷 ③存 ④法海(明和五一天保五A.D.1768-1834)述 ⑤寫本(谷大、宗大・八六一)

正信念佛偈講義

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kō-gi. 正信佛講義 ②八卷 ③存 ④深勵(寛延二一文化一四A.D.1749-1817)述 ⑤明治二四刊 ⑥(谷大、宗小・一)(龍大・一二三五・二八)

正信念佛偈講義

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kō-gi. ②二卷 ③存 ④龍華述 ⑤寫本(谷大、宗大・一九五九)

正信念佛偈講義

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kō-gi. ②三卷 ③存 ④靈旺(安永四一嘉永四A.D.1775-1851)述 ⑤嘉永二(A.D.1849) ⑥寫本(谷大、宗大・九八・二九四)天保一〇寫(谷大)

正信念佛偈講義

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kō-gi. ②一卷 ③存 ④德龍(安永元一安政五A.D.1772-1855)述 ⑤寫本(龍大)

法住(一明治七A.D.1874)述 ⑥寫本(龍大)

正信念佛偈講義

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kō-gi. ②一卷 ③存 ④龍温(寛政二一明治一八A.D.1800-1885)述 ⑤明治八寫 ⑥(谷大、宗大・三七九三)

正信念佛偈講義

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kō-gi. 正信佛講義 ②四卷 ③存 ④蓮井雲溪(明治一八A.D.1885)述 ⑤明治一七(A.D.1844) ⑥寫本(谷大、宗大・七一八)

正信念佛偈講義

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kō-gi. ②二卷 ③存 ④廣陵(榮(文政二一明治三三A.D.1819-1900)述 ⑤明治二五(A.D.1892) ⑥寫本(谷大、宗大・一六八四)

正信念佛偈講義

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kō-gi. ②一卷 ③存 ④朝倉了昌(一明治四三A.D.1910)述 ⑤明治四二刊 ⑥(谷大、宗洋・三六四)

正信念佛偈講義

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kō-gi. 正信佛講義 ②一卷 ③存 ④前田慧雲(安政四一昭和五A.D.1857-1930)述 ⑤大正元一一再刊 ⑥(谷大、宗大・一八六一)(龍大・一二三五・一九、研眞)

正信念佛偈講義

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kō-gi. ②二卷 ③存 ④足立禮幹述 ⑤明治二六(A.D.1893) ⑥寫本(谷大、宗大・一六八五)

正信念佛偈講義

①(日)Shō-shin-

名所行發⑩(名庫書)著所現⑪月年の刊載⑫(書考參書釋註)書末⑬説解存内⑭代年作著⑮名著⑯缺存⑰數卷⑱(名書)名題⑲略略字數

nem-butsu-ge-ko-gi. ②二卷 ③存 ④  
 毘盧玄密述 ①寫本(谷大,宗大・一六九〇)  
**正信念佛偈講義** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-ko-gi. ②三卷 ③存 ④  
 清井滋雲述 ①寫本(谷大,宗大一六八六)  
**正信念佛偈講義** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-ko-gi. ②一卷 ③存 ④  
 岸本義導述 ⑤大正五刊 ⑥(谷大,宗大・四〇六)  
**正信念佛偈講義** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-ko-gi. 正信偈講義 ②一卷 ③存 ④雲山龍珠述 ⑤明治四二,大正四再刊 ⑥(谷大,宗洋・一九〇)(龍大,一二三・五二〇—三二二)(研眞)  
**正信念佛偈講義說約** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-ko-gi-seisu-yaku. 正信偈講義說約 ②二卷 ③存 ④眞宗全書第三九 ⑤隨慧(一天明二A.D. 1782)述 ⑥正信偈講義說約の下の見よ。 ⑦明治四〇寫 ⑧(谷大,宗大・一〇一九)  
**正信念佛偈講義** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-ko-san. 正信偈講義 ②二卷或一卷 ③存 ④僧錄(享保八一天明三A.D. 1723—1783)述 ⑤(參考)淨土眞宗教典志第二 ⑥明治二一刊(龍大,研眞)寫本(龍大,一二三五・四〇)  
**正信念佛偈講義** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-ko-san. ②一卷 ③存 ④字野惠空述 ⑤大正一五刊 ⑥(龍大)  
**正信念佛偈講義** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-ko-jutsu. ②一卷 ③存 ④  
 ①吉谷覺壽(天保一三—大正三A.D. 1842—1914)述 ⑤明治二八刊 ⑥(谷大,宗洋・二四)  
**正信念佛偈講義** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-ko-setsu. ②一卷 ③存 ④慧空(正保元—享保六A.D. 1644—1721)述 ⑤寫本(谷大,宗大・三九五)  
**正信念佛偈講義** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-ko-to. ②一卷 ③存 ④齋藤唯信述 ⑤大正九刊 ⑥(谷大,宗大・三〇一八)  
**正信念佛偈講義** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-ko-rin. 正信偈講義 ②二卷 ③存 ④智洞(文化三A.D. 1806)述 ⑤(參考)淨土眞宗教典志第二 ⑥寫本(龍大,一二三五・四五一—四六)  
**正信念佛偈講義** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-ko-roku. ②一卷 ③存 ④慧空(正保元—享保六A.D. 1644—1721)述 ⑤寫本(龍大)  
**正信念佛偈講義** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-ko-roku. ②一卷 ③存 ④僧錄(享保四—寶曆一三A.D. 1719—1769)述 ⑤寫本(谷大,宗大・六五七)  
**正信念佛偈講義** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-ko-roku. ②二卷 ③存 ④龍山慈影(天保八—大正一〇A.D. 1837—1921)述 ⑤明治三六(A.D. 1903)刊本(谷大,宗大・一〇〇六)  
**正信念佛偈講義** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-ko-wa. ②二卷 ③存 ④藤枝令道(明治二五A.D. 1892)述 ⑤  
 明治二八刊 ⑥(谷大,宗小・一八)  
**正信念佛偈講義** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-ko-wa. 正信偈講義 ②一卷 ③存 ④多田鼎述 ⑤明治四〇,四四刊,大正一〇再刊 ⑥(谷大,宗洋・一六八)(龍大,一二三五・四一・五一)(研眞)  
**正信念佛偈三思錄** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-san-shi-roku. 正信偈三思錄 ②二卷 ③存 ④東陽圓月(文政元—明治三五A.D. 1818—1922)述 ⑤明治二九刊 ⑥(谷大,宗大・八一〇)(龍大,研眞)  
**正信念佛偈私記** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-shi-ki. ②二卷 ③古岡作 ④(參考)淨土眞宗教典志第二  
**正信念佛偈私記** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-shi-ki. 正信偈私記 ②一卷 ③慶秀(弘治二—慶長一四A.D. 1556—1629)述 ④慶長一〇(A.D. 1603) ⑤(參考)淨土眞宗教典志第二 ⑥明曆二刊 ⑦(谷大,宗大・三二二五)(正大,一六三・八)(龍大,一二三五・五八一六〇)(研眞)  
**正信念佛偈私記科註** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-shi-ki-ko-ka. ②一卷 ③慶秀(弘治二—慶長一四A.D. 1556—1609)記,空慧(寛文元—延享三A.D. 1651—1746)註 ④寫本(谷大,宗丙・九)  
**正信念佛偈私記首書** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-shi-ki-shu-sho. ②一卷 ③支貞(一寶永二A.D. 1705)作 ④(參考)淨土眞宗教典志第二  
**正信念佛偈私記補闕抄** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-shi-ki-ko-kezu-sita. 正信偈私記補闕抄 ②一卷 ③存 ④是空(寛文一一—享保一三A.D. 1671—1738)述 ⑤正徳三寫 ⑥(谷大,宗大・三〇七二)  
**正信念佛偈私記略評** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-shi-ki-ryaku-hyō. 正信偈私記略評 ②二卷 ③存 ④慶秀(弘治二—慶長一四A.D. 1556—1609)述 ⑤(參考)淨土眞宗教典志第二 ⑥享保四刊 ⑦(龍大,一二三五・六二)  
**正信念佛偈私見聞** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-shi-ken-mon. 正信偈私見聞 ②五卷 ③存 ④空誓(慶長八—元祿五A.D. 1603—1692)述 ⑤慶安三(A.D. 1650) ⑥(參考)淨土眞宗教典志第二 ⑦刊本(谷大,宗大・三三〇五)(龍大,研眞)  
**正信念佛偈私考** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-shi-ko. 正信偈私考 ②一卷 ③存 ④慧空(正保元—享保六A.D. 1644—1721)述 ⑤正徳四寫 ⑥(谷大,宗大・九四九)  
**正信念佛偈師資發覆鈔** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-shi-shi-top-poku-cho. 正信偈師資發覆鈔 ②四卷 ③存 ④眞宗全書第三九 ⑤普門述 ⑥正信偈師資發覆鈔の下の見よ。  
**正信念佛偈自得解** ①(日)Sho-shin-nem-butsu-ge-ji-toku-ge. 正信偈自得解 ②三卷 ③存 ④義端勇進(一享和三A.D. 1803)述 ⑤明和二(A.D. 1765)

名所行發⑩(名庫書)著藏所現⑨月年の刊寫⑧(書考發書釋註)書太⑦說解存内⑥代年作著⑤著著④缺存③數卷②(名書)名題①號略字數

⑦〔參考〕淨土真宗教典志第二 ①安永五刊(谷大・宗大・二九四)(龍大,研真)(龍大,一二三五・六八)

正信念佛偈集解

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-shū-ka-ge. 正信偈集解 ②四卷或二卷 ③存 ④了諦述 ⑤享保三(A. D. 1718) ⑥〔參考〕淨土真宗教典志第二 ⑦享保三刊(龍大,一二三五・七〇)元文元刊(龍大,研真)

正信念佛偈述贊

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-jū-san. ②一卷 ③存 ④鳳嶺(寬延三一文化)三A. D. 1750-1816)述 ⑤〔參考〕淨土真宗教典志第二 ⑥寫本(谷大,宗大・二〇五六)

正信念佛偈疏略

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-shō-ryaku. ②一卷 ③僧録(享保八一天明三A. D. 1723-1783)作 ④〔參考〕淨土真宗教典志第二

正信念佛偈照曜記

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-shō-yō-ki. ②一卷 ③存 ④松浦倚梁(天保一一一A. D. 1841-1922)述 ⑤大正一一刊 ⑥(龍大)

正信念佛偈稱揚鈔

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-shō-yō-shū. 正信偈稱揚鈔 ②三卷 ③存 ④惠雲(慶長一八一元祿四A. D. 1613-1691)述 ⑤〔參考〕淨土真宗教典志第二 ⑥寛政一二刊 ⑦(谷大,宗大・二六四七)(龍大,一二三五・七四(研真))

正信念佛偈壬申記

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-jin-shin-ki. ②七卷

③存 ④法住(一明治七A. D. 1874)述 ⑤寫本(谷大,宗大・一六八〇)

正信念佛偈深廣談

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-shin-kō-dan. ②二卷 ③存 ④法海(明和五一天保五A. D. 1768-1834)述 ⑤寫本(谷大,宗大・八六一)

正信念佛偈說教錄

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-shō-kyō-roku. ②三卷 ③存 ④智現(一天保六A. D. 1835)述 ⑤明治二八刊 ⑥(谷大,宗小・一六,宗洋・一一七)

正信念佛偈藻鑑

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-ō-kan. 正信偈藻鑑 ②三卷 ③存 ④慧叡述 ⑤〔參考〕淨土真宗教典志第二 ⑥寫本(龍大,一二三五・八二)

正信念佛偈勸說

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-kan-shō. 正信偈勸說 ②三卷 ③存 ④月筈(寛文一一一享保一四A. D. 1671-1729)述 ⑤正徳元(A. D. 1711) ⑥〔參考〕淨土真宗教典志第二 ⑦正徳四刊(龍大,一二三五・七七-七九)正徳五刊(龍大,研真)

正信念佛偈勸說義憑

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-ō-shō-setsu-ji-hyō. 正信偈勸說義憑 ②七卷 ③存 ④月筈寛文一一一享保一四A. D. 1671-1729)述 ⑤〔參考〕淨土真宗教典志第二 ⑥寶曆一寫(谷大,長保・九四)寶曆一三寫(谷大,宗大・三〇五五)寫本(龍大,一二三五・八〇,別置)

正信念佛偈勸說觀由辨

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-ō-shō-setsu-kwan-yū-bōn. 正信偈勸說觀由辨 ②一卷 ③存 ④靈榮泰巖(正徳元一寶曆一三A. D. 1711-1763)述 ⑤寛延元(A. D. 1748) ⑥〔參考〕淨土真宗教典志第二 ⑦寫本(龍大,一二三五・八一,別置)

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-tai-i. 正信偈大意 ②一卷 ③存,真宗假名聖教第一〇,真宗法要第二一,蓮如上人全書,真宗聖典全書,真宗假名聖教第四 ④蓮如(應永二二一明應八A. D. 1415-1499)述 ⑤正信偈大意的下を見よ。 ⑥〔參考〕淨土真宗教典志第二 ⑦明和七刊(龍大,研真)寫本(龍大,別置)

正信念佛偈大意冠註分科

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-tai-i-kan-chū-bun-kwa. ②一卷 ③存 ④坂田慈香作 ⑤明治二八刊 ⑥(谷大,宗大・九九)

正信念佛偈談話

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-dan-wa. 正信念佛偈一言抄 ②一卷 ③存 ④信曉(安永三—安政五A. D. 1771-1838)述 ⑤明治三一刊 ⑥(谷大,宗洋・一〇三)

正信念佛偈註解

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-chū-ge. ②六卷 ③空誓(慶長八—元祿五A. D. 1693-1692)述 ④延寶八(A. D. 1690) ⑤〔參考〕淨土真宗教典志第二

正信念佛偈聽記

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-cho-ki. ②二卷 ③存 ④寶景(延享三—文政一一A. D. 1746-1828)述 ⑤寫本(谷大,宗大・五七〇)

正信念佛偈傳真錄

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-dan-shin-roku. ②四卷 ③存 ④臨全記 ⑤寛政九寫 ⑥(谷大,宗大・一五二五)

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-hi-kyō-shū. ②二卷 ③存 ④空慧(寛文元—延享三A. D. 1661-1746)述 ⑤寫本(谷大,宗小・三二)

正信念佛偈評註

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-hyō-cha. 正信偈評註 ②一卷 ③存,真宗全書第四〇 ④僧録(享保八一天明三A. D. 1723-1789)述 ⑤正信偈評註の下を見よ。 ⑥〔參考〕淨土真宗教典志第二

正信念佛偈捕影記

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-hō-yō-ki. 正信偈捕影記 ②三卷 ③存,真宗全書第四〇 ④法霖(元祿六一寛保元A. D. 1693-1741)述 ⑤〔參考〕淨土真宗教典志第二 ⑥寫本(谷大,宗大・五六〇)(龍大,一二三五・九六一九八,研真)

正信念佛偈戊子錄

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-do-shi-roku. ②八卷 ③存 ④寶景(延享三—文政一一A. D. 1746-1828) ⑤寫本(谷大,宗大・一六八八)

正信念佛偈法話

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-hō-wa. ②二卷 ③存 ④澄玄(天明七—嘉永四A. D. 1787-1851)述 ⑤明治二五刊 ⑥(谷大,宗小・一七)

正信念佛偈法話

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-hō-wa. ②一卷 ③存 ④朝倉了昌(一明治四三A. D. 1910)述 ⑤明治四二刊 ⑥(谷大,宗洋・二五二)

正信念佛偈報恩記

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-hō-on-ki. 正信偈報恩記 ②二卷 ③存 眞宗全書第四〇 ④道振(安永二—文政十 A. D. 1773—1824)述 ⑤正信偈報恩記の下の見よ。 ⑥寫本(龍大、一二三五一〇五、研眞)

正信念佛偈本義

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-hon-gi. 正信偈本義 ②四卷 ③存 ④眞阿(—寶永二A. D. 1705—)作 ⑤(參考) 淨土眞宗教典志第二 ⑥寛永三刊 ⑦(龍大、一二三五・一〇六)

正信念佛偈忘己鈔

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-mō-ki-shō. ②三卷 ③存 ④寫本(谷大、宗大・一六八三)

正信念佛偈文軌

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-mon-ki. 正信偈文軌 ②三卷或四卷 ③存 ④若霖(延寶三—享保二 O. A. D. 1675—1735)述 ⑤享保一九(A. D. 1734) ⑥(參考) 淨土眞宗教典志第二 ⑦刊本(谷大、宗大・三七九)(龍大、一二三五・一一三—一一三、一三八、研眞)

正信念佛偈文軌旁通

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-mon-ki-hō-tsu. 正信偈文軌旁通 ②一卷 ③存 ④若霖(延寶三—享保二 O. A. D. 1675—1735)述 ⑤刊本(谷大、宗大・三七九)(龍大、一二三五・一一三—一一三、一三八)

正信念佛偈文義林

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-mon-gi-rin. ②一卷 ③存 ④惠廣述 ⑤寫本(谷大、宗大・九三八)

正信念佛偈文說

①(日)Shō-shin-

正信念佛偈文說

nem-butsu-ge-mon-setsu. 正信偈文說 ②一卷 ③存 ④(參考) 淨土眞宗教典志第二 ⑤寫本(龍大、一二三五・一一五)

正信念佛偈文林

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-mon-rin. 正信偈文林 ②一卷 ③存 眞宗全書第三九 ④慧空(正保元—享保六 A. D. 1644—1721)述 ⑤正信偈文林の下の見よ。 ⑥(參考) 淨土眞宗教典志第二 ⑦享保一六刊 ⑧(龍大、一二三五・一〇二)

正信念佛偈聞記

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-mon-ki. ②一卷 ③存 ④慧然(元祿六一—明和元 A. D. 1693—1764)述 ⑤寫本(谷大、宗大・八五八)

正信念佛偈聞記

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-mon-ki. ②二卷 ③存 ④大舍(安永二—嘉永三 A. D. 1773—1850)記 ⑤寫本(谷大、長保・五一)

正信念佛偈聞抄

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-mon-shō. ②二卷 ③存 ④天保一二寫 ⑤(谷大)

正信念佛偈要解

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-yō-ge. 正信偈要解 ②四卷 ③存 ④西吟(慶長一〇—寛文三 A. D. 1605—1663)述 ⑤承應二(A. D. 1653) ⑥(參考) 淨土眞宗教典志第二 ⑦明曆四刊 ⑧(龍大、一二三五・一二三、研眞)

正信念佛偈要解判定記

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-yō-ge-kan-jō-ki. 正信偈要解判定記 ②五卷或三卷 ③存 ④性海(正保元—享保一二 A. D. 1644—1727)述 ⑤(參考) 淨土眞宗教典志第二

正德三刊(谷大、宗大・二三〇〇)(龍大、一二三五・一二四、研眞)寶永八刊(龍大、一二三五・一二五)

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-yō-ge-shū-shō. ②四卷 ③存 ④(參考) 淨土眞宗教典志第二 ⑤延寶九刊 ⑥(龍大、一二三五・一二二)

正信念佛偈要解助講

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-yō-ge-jō-kō. ②一卷或二卷 ③存 ④知空(寛永一一—享保三 A. D. 1634—1718)述 ⑤萬治二(A. D. 1659) ⑥(參考) 淨土眞宗教典志第二 ⑦寛文九刊 ⑧(谷大、宗大・二三二七)(龍大、一二三五・一二六)

正信念佛偈要訣

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-yō-ketsu. ②一卷 ③存 ④僧數(寶曆三—文政八 A. D. 1753—1825)述 ⑤文政九、年六五叙)述 ⑥明治二七刊 ⑦(谷大、宗大・二四二)

正信念佛偈要註

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-yō-cha. ②二卷或一卷、四卷 ③存 ④道海(—寛文元 A. D. 1661—)述 ⑤(參考) 淨土眞宗教典志第二 ⑥元祿二刊 ⑦(谷大、宗大・二三一八)

正信念佛偈略解

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-ryaku-ge. ②二卷 ③存 ④鑾暉(安永四—嘉永四 A. D. 1775—1851)述 ⑤明治二六刊 ⑥(谷大、宗小・三〇一)

正信念佛偈略解

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-ryaku-ge. ②二卷 ③妙順哲公述 ④正徳元(A. D. 1711) ⑤(參考)

淨土眞宗教典志第二

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-ryaku-shaku. 正信偈略解 ②一卷 ③存 ④藤永清述 ⑤大正一二、一五再刊 ⑥(谷大、宗洋・七六二)(龍大、一二三五・一二九)

正信念佛偈略述

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-ryaku-jutsu. ②一卷 ③慧雲(慶長一八—元祿四 A. D. 1613—1691)述 ④(參考) 淨土眞宗教典志第二

正信念佛偈略述

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-ryaku-jutsu. 正信偈略述 ②一卷 ③存 眞宗全書第三九 ④慧空(正保元—享保六 A. D. 1644—1721)述 ⑤元祿一六(A. D. 1703) ⑥正信偈略述の下の見よ。 ⑦(參考) 淨土眞宗教典志第二 ⑧寫本(谷大、宗大・一六八七)

正信念佛偈領解鈔

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-ryō-ge-shō. 正信偈領解鈔 ②三卷 ③存 ④元秀述 ⑤(參考) 淨土眞宗教典志第二 ⑥延享四寫(龍大、一二三五・二四)寫本(龍大、一二三五・二五)(智、二・六、左・二八)

正信念佛偈錄

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-roku. ②六卷 ③存 ④蓮井雲溪(—明治一八 A. D. 1885)述 ⑤寫本(龍大)

正信念佛偈論議

①(日)Shō-shin-nem-butsu-ge-ron-kyō. ②一卷 ③存 ④松島善護(—文化三—明治一九 A. D. 1806—1886)述 ⑤寫本(谷大、宗大・二〇五七)

正信念佛偈和解

①(日)Shō-shin-



nom. butsu-go-wa-ge. 白毫餘光第二編

①一卷 ②存 ③朝倉了昌(一)明治四三A. D. 1910)述 ④明治三四刊 ⑤(谷大, 宗小・二五五)

正信問答 ①(日)Sho-shin-mon-do. ②一卷 ③存 ④忽滑谷快天著 ⑤大正一五刊 ⑥東京光嚴館

正信問答照魔鏡 ①(日)Sho-shin-mon-do-sho-na-kyo. ②一卷 ③存 ④安谷量衡著 ⑤昭和七刊 ⑥東京大日本佛教修養會

正説道理論 ①(日)Sho-seisu-dori-ron. (支)Cheng-shuo-tao-i-lun. ②一卷 ③缺 ④陳眞諦(永元元—大建元A. D. 499—569)譯 ⑤(參考) 仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第一四、貞元錄第二四

正善寺諸願綴 ①(日)Sho-zen-jisho-gwan-tsuzuri. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、九七一・三)

正倉院御開封勸例等御尋之日記 ①(日)Sho-so-in-go-kai-ta-kan-ri-to-o-tazune-no-nik-ki. ②存、續々群書類第一六雜部之内

③本書は題名に明瞭なる如く、享保七年京都所司代の問合に依り、東大寺年預位師性海が正倉院御開封勸例並に口上書を進ぜし事を記するもので、後半はこの事に就き、寺務安井門跡と東大寺年預との往復文書を記載したものである。(紀氏隆眞)

正倉院御開封記草案 ①(日)Sho-so-in-go-kai-ta-ki-sho. ②存、續々群書類第一六雜部之内 ③祐記 ④元

祿六(A. D. 1693)

①本書は元祿六年正倉院御開封の記録である。即ち同年五月十六日、正倉院御開封寶物點檢の事より筆を起し、八月御開封及び下行米、其他雜用、古傳説、御開封儀式、還列次第、寶物行列次第等を、東大寺執行薬師院祐想の記録したものである。奥書に云々。

「右正倉院御開封之記」卷者、近世雖爲邂逅之義、予幸而遇時預其事、其儀式逐一無錯亂相勸事已畢、仍暇日書其次第、以巨多所記録也、唯聊備後席之龜鏡之千一、云爾。于時元祿六癸酉八月日、執行大貳都那祐想」と。以て全班を推すことが出来る。(紀氏隆眞)

正倉院の果 ①(日)Sho-so-in-no-shiori. ②一卷 ③存 ④小野善太郎編

⑤大正一四刊 ⑥龍大、研史) 正倉院寶物御開封事書 ①(日)Sho-so-in-ho-mot-an-go-kai-ta-ji-sho. ②存、續々群書類第一六雜部之内

③本書は天保四年十月正倉院御開封の記事である。即ち文政の末年より正倉院寶庫の屋根大破に及びしを以て、此年修理を加ふると共に、併せて寶物點檢を行ったのであつて、奈良奉行梶野土佐守につひて、穂井田忠友が東大寺正倉院成卷四十五文書を編纂したのは、此の時の事である。因に「十月十四日朝少雨、晝四ツ時より快晴」より筆を始め、御開封の係り役員名、及び嚴重を極めし模様並に御開封の先例等を詳録してゐる。(紀氏隆眞)

正像末記 ①(日)Sho-zo-maki-ki. ②一卷 ③存、日本大藏經天台宗顯教章疏第二 ④最澄(神護景雲元—弘仁一三A. D. 767—822) ⑤「正像末文」參照。

正像末三時義 ①(日)Sho-zo-ma-tsu-san-ji-gi. ②一卷 ③存、真宗全書第六二 ④僧撰(享保四—寶曆一三A. D. 1719—1762)述

⑤正法像法末法の三時の判定について、嘉祥の中論疏、仁王青龍疏、群疑論、淨影大經疏等に引かれた多くの異説を列挙したものである。

正像末三時行相 ①(日)Sho-zo-maku-san-ji-gi-do-ga. ②一卷 ③存 ④月明述 ⑤原本(京都妙顯寺)寫本(立大、D. O. 一八六)

正像末淨土和讃講記 ①(日)Sho-zo-makura-jo-do-wa-san-ko-ki. ②一卷 ③存 ④暢道(—安永五A. D. 1776—)述 ⑤寫本(龍大)

正像末淨土和讃連環解 ①(日)Sho-zo-makura-jo-do-wa-san-ten-kwan-ta. ②十卷 ③存 ④憲榮(正徳元—寶曆一三A. D. 1711—1763)述 ⑤安永五刊(京大、一・二六三・六六)

正像末辨 ①(日)Sho-zo-matsu-jen. ②一卷 ③存 ④開嘆述 ⑤寫本(龍大、一三三六・一五〇)

正像末法和讃 ①(日)Sho-zo-map-ri-wa-san. 正像末和讃 ②一卷 ③存、大正八三・六六四No. 2623(真宗假名法典卷

上、真宗聖典全書和文部、真宗聖典之内

①親鸞(承安三—弘長二A. D. 1173—1262)撰 ⑤正嘉二(A. D. 1258)

①本書は佛滅後正像末三時の思想より、時機相應の教法として彌陀本願の彌仰ぐべきことを高調したる「正像末法和讃」。自己反省の痛烈なる「述懷讃」等、主として親鸞自身の信念を告白したる讃詠である。淨土高僧兩和讃よりは年時を隔て、脱稿されたものであるが自筆草稿本と顯智書寫完本とが高田山專修寺に藏されてある。顯智本奥書に「草本云、正嘉二歲九月二十四日、親鸞八十六歲」正應三年庚寅九月二十五日令書寫之畢」とあるから、之は親鸞自筆の完本を底本として書寫したるものなるべく、

本書の脱稿が正嘉二年九月二十四日といふことを明に知られる。この正應三年の顯智本が古寫完本として現存する唯一のものである。中興時代既に親鸞自筆本は傳承を失つてゐたものらしく、眞慧書寫本の奥書に「本文文明十五年癸卯二月二十四日以彼顯智書寫本所移書之也、專修寺釋眞慧同日染香筆與書之」とある。故に顯智本を第一に擧げねばならぬ。

本書外題は「正像末法和讃」である。俗に正像末和讃と稱する。卷首に「般舟三昧行道往生讃曰敬白一切往生智識等一大須臾慚愧釋迦如來實是慈悲父母種種方便發一起我等無上信心」の文あり。次に「康元二歲丁巳二月九日夜寅時夢告云、彌陀ノ本願信スヘシ本願信スル人ハミナ攝取不捨ノ利益ニハ無上覺オハサトルナリ」の夢告讃がある。

之は正像末法和讃草稿中に感見したる夢告であるから、讃文と共に巻首に安じたものであらう、草稿本には三十三首を列ねたる後にこの夢告讃を挙げ、コノ和讃ヲユメニオホセヲカフリテウレンサニカキツケマイラセタルナリ、正嘉元年丁巳三月一日愚禿親慧八十五歳書之」とあるに依ても察知される。願智本奥書の後に「涅槃經言面如淨滿月眼若青蓮花佛法大海水流入阿難心」「觀念法門云、又敬白一切往生人等若聞此語即應離悲雨淚連劫果劫粉身報謝佛恩文」と二文を引いてある。

本書の内容は左の如くである。

〔一〕正像末法和讃。五十八首。讃尾には「已上正像末之三時彌陀如來和讃」とある。即ち「淨土和讃」のうち勢至和讃を除いた彌陀和讃に攝在せしむる意趣が窺はれる、彼は法に約し此は機に約して彌陀法を讃詠したものである。親慧の三時思想は「末法燈明記を参考に資したること」「教行信證」に記載する所に依つて知られるが、本讃はなほ大集月藏經・大般涅槃經・蓮華面經等諸經典にも依り、隨處に淨土三部經七祖聖教を以て織り成されてある。又聖覺の唯信抄・表白文等にも取材されてある。第一佛法の盛衰を説くに先づ釋迦教に就て三時(一一四)五濁(五一九)根機(一〇一—一六)の相を明し、後に彌陀教に就て本願(一七—一八)信心(一九—二二)勝益(二二—二七)の相を明し、第二に佛の本懷に就て本佛の悲願(三一—三二)二尊の悲懷(三三—三六)願力の回向(三七—四一)諸佛の本懷(四二—四四)を

説き、第三に機の感恩に就て二種の回向(四五—五一)佛祖の洪恩(五二—五八)を示してある。

〔二〕愚禿述懐、二十二首。第一首のはじめに「佛智疑惑罪過」と註してある。讃尾には「已上疑惑罪過二十二首」と示し「佛智ウタカフツミトカノフカキコトアラハセリコレヲヘンチケマンタイシヤウナント、イフナリ」とある。疑惑の失(一一六)化土の失(七)胎生の失(八・九)を擧げて悔責(二〇—二二)を勸めてある。

〔三〕愚禿悲歎述懐、愚禿親慧作、十一首。讃尾に「已上三十三首愚禿悲歎述懐」とあり前の二十二首と一連のものとして合算し結んである。前者は疑惑罪過で正依の經に依つて説かれ、後者は専ら自得を告白したものである。機の悲しむべきこと(一一三)法の歸すべきこと(四一—六)時弊の慨くべきこと(七一—一)を讃詠したものである。

〔別本〕高田山藏自筆草稿本「正像末法和讃」には先づ三十三首を列ね次に夢告讃を擧げ後に五首を列ねてある。本書の草稿は建長七年著者八十三歳淨土和讃再治當時既にその幾分の出来てゐたことは淨土和讃に附する別和讃に依つて察することが出来る。此の草稿本は夢告讃感得前後迄に成つたものを彙輯したものであらう。又眞慧が「問答」に引用する和讃の如き草稿本願智本眞慧本の何れとも異なり、眞慧所覽の別本が存在したものであらうか。又高田山明曆開板本は願智本に依つたものゝ如くであるが文字の異同あり句の相異もあるから、

或は更に別に相當權威ある異本が存在したものであらうか。

文明五年蓮如開板本「正像末和讃」と題するあり、巻首の般舟讃文なく、夢告讃の次に「正像末淨土和讃、愚禿善信集」とあり本文は數ヶ所に變改あり讃尾に「已上正像末法和讃」とある。次に無題で二十三首あり願智本の愚禿述懐とは次第を異にし更に一首を加へてゐる、讃尾に「已上二十三首佛不思議ノ彌陀ノ御チカヒヲウタカフツミトカヲシラセントアラハセルナリ」と附記してある。次に「皇太子聖德奉讃、愚禿善信作」十一首を加へてある。(皇太子聖德奉讃別本の項参照)次に「愚禿悲歎述懐」は更に五首を加へて十六首となつてゐる、已上十六首コレハ愚禿カカナシメナケニシテ述懐トシタリコノ世ノ本寺山ノイミシキ僧トマフスモ法師トマフスモウキコトナリ、釋親慧書之」とある。次に無題の善光寺如來和讃五首あるも別和讃の域を出でざるべく、次に「親慧八十八歳御筆」として獲得名號自然法爾の法語を挿入し、最後に二首七句の和讃がある。この別本は體裁も整はず未定稿と覺しきもの多く完本とは認め難いやうであるが、文字の改められたる跡等に鑑みて願智本の底本となつたものゝ後に成つたものらしく、隨つて親慧八十六歳以後の筆録を後世取摺めたものではなからうか。(佛典研究の一、現代佛教六三、眞宗の世界一三の一参照)。

〔注釋〕正說十二卷(智通)。連環解十卷(泰慶)。青藍記三卷(慧雲)。後記六卷(僧鑑)。隨聽記三卷(道隱)。聽記一卷(都西)。聞書三卷(慧航)。碎骨三卷(開隨)。講錄一卷(尊淨)。庚午錄三卷(宣明)。可說五卷(義圭)。戊子錄三卷(惠劍)。聞香記四卷(了祥)。略解一卷(仰誓)。誨義六卷(深勵)。聽記二卷(善讓)。勸述一卷(逸名)。綱要三卷(慧辨)。講錄二卷(旭辨)。指掌記五卷(單回)。講錄二卷(忍成)。愚禿悲歎述懐錄一卷(法定)。(生桑完明)

正像末文

①(日) Sho-zo-matsu-mon. ②存、傳教大師全集第三。③最澄(神護景雲元—弘仁一三A.D.767—823)撰。④弘仁三(A.D.823)。

⑤本書は大集經法滅盡品(月藏分)の三時説によつて弘仁三年は佛滅後千七百四十歳に當るから末法に入つて既に二百四十年。今や第四造塔堅固の時であり、第五の闍闍堅固も近いと述べ、住持の三寶は實に人によつて消長盛衰することを説き自他の反省誠心に資したるもの。本書の撰者は不明であるが寶地房證眞は文句私記(二之八)に山家の作と認め、修禪錄にも本書を収め、可透錄もこれを偽撰としないから先づ最澄撰と認めても然るべきであらう。但し佛滅年代の考證をしないで年時を決することは傳教大師の研究態度とは思へないからこの點から考へれば偽作といひたい。更に可考。

正像末和讃

①(日) Sho-zo-matsu-shō. ②一卷。③存、大正八三・六六四Z. ④(日) 眞宗假名法典卷上、眞宗準典全書和文部。⑤親慧(承安三

一 弘長二 A. D. 1173—1263)撰 ⑤ 正嘉二 (A. D. 1285) ⑥ [参考] 淨土真宗聖教目錄 ⑦ 慶長版覆刻天明八刊 ⑧ (龍大、一一・四五)

**正像末和讃乙亥夏記** ① (日) Sho-zo-matsu-wa-san-itsu-gai-go-ki. ② 四卷 ③ 存 ④ 深蘭(寛延二—文化一四 A. D. 1749—1817)述 ⑤ 寫本(龍大)

**正像末和讃可説** ① (日) Sho-zo-matsu-wa-san-ka-sei-un. ② 五卷 ③ 存

④ 粟津義圭(寛政一—A. D. 1799)述 ⑤ 寛政九刊(龍大、一一三六・一一五二)明治二九刊(谷大、宗洋・三〇)

**正像末和讃聞書** ① (日) Sho-zo-matsu-wa-san-ki-gaki. ② 三卷 ③ 存

④ 慧航(一文政一二 A. D. 1829)述 ⑤ 寫本(龍大、一一三六・一一五五)

**正像末和讃九首讃略註** ① (日) Sho-zo-matsu-wa-san-ku-shu-san-ryaku-chu. ② 一卷 ③ 存

④ 僧鏡(享保八一天明三 A. D. 1723—1783)述 ⑤ 寫本(龍大、一一三六・一一八〇)

**正像末和讃口耳録** ① (日) Sho-zo-matsu-wa-san-ku-ni-roku. ② 二卷 ③ 存

④ 仰誓(享保六一寛政六 A. D. 1721—1794)述 ⑤ 寫本(龍大、一一三六・一一五六)

**正像末和讃科** ① (日) Sho-zo-matsu-wa-san-ka. ② 一卷 ③ 法藏(元祿六一寛保元 A. D. 1693—1741)作

④ [参考] 淨土真宗教典志第二

**正像末和讃科圖** ① (日) Sho-zo-matsu-wa-san-ka-wa-zu. ② 一卷 ③ 存

④ 圓解(明和四—天保一一 A. D. 1767—1846)撰 ⑤ 寫本(谷大、宗大・三八四六)

**正像末和讃管鏡録** ① (日) Sho-zo-matsu-wa-san-kan-ki-roku. ② 六卷

③ 存、真宗大系第二〇 ④ 慧劍(一天保元 A. D. 1830)述 ⑤ 文政八—文政一三 (A. D. 1825—1838)

⑥ 本書は正像末和讃の講義にして文政十一年の夏講高倉學寮に於ける安居の講本となりしもので有る而して本書の成れるはそれより以前文政八年で有つて『真宗大系』所収本四〇頁参照)其の後自身に改訂増補せられたもので有る原本は近江國蒲生郡市邊村蛇溝本啓寺に所藏されて居る。本書の内容は初めに總じて三帖に就て分別し次に別に別して此の一帖に就て分別する而して此の中更に初めに靈告の讃を標し次に和讃を述し後に總結するの三科を立つし講せり。

⑦ 著者自筆本(近江國蒲生郡市邊村蛇溝本啓寺)

**正像末和讃管蠶記** ① (日) Sho-zo-matsu-wa-san-kan-tsu-ki. ② 三卷 ③ 存

④ 慧雲(享保一五—天明二 A. D. 1730—1782)述 ⑤ 寫本(龍大、一一三六・一一五四、研眞)

**正像末和讃勸考** ① (日) Sho-zo-matsu-wa-san-kan-ko. ② 三卷 ③ 存

④ 寫本(一一三六・一一五三)

**正像末和讃勸述** ① (日) Sho-zo-matsu-wa-san-kan-jutsu. ② 三卷 ③ 存

④ 深廣述 ⑤ 寫本(龍大、一一三六・一一五三)

**正像末和讃見聞**

① (日) Sho-zo-matsu-wa-san-ken-mon. 正像末和讃見聞集 ② 一卷 ③ 存、異義集(了祥稿本)第六

④ 性信(普濟)撰

⑤ 本書一篇の體裁は『正像末和讃』一帖を六段を以て大科し、而も掲ぐる和讃の一々に師説を擧げて聞云と標し、撰者の自義を叙述するに當つては見云と表示せられてゐる。見聞を以て題號とすること、かゝる所以に基づく。所が、隨慧師の『正像末和讃見聞指瑕』に依れば、本書にあつて解説せらるゝ讃數四十一首と云ひ、更には獲得名號の法語までも添釋せられてゐるかに記されてゐる。然るに、現時谷大圖書館に藏せらるゝ了祥師の『異義集』に就いて見るに、本讃末尾の法語の出されざるのみか、そが讃數も僅か二十一首(正像末讃十一首、疑惑讚九首、太子讚一首)に過ぎず、從つて隨慧師の記述と稍と差違あるものと云ふ可きである。之れに依つて是を思ふに、當時本書に異本ありて流傳せられしものには非ざりしか。

次に一篇の内容は、他力と云ふも一往の名にして、その實機法一體能所不二を以て真宗の本意とするを強調するに根本思潮がある。從つてそが論旨全く西山教義の色彩を帯ぐることを思はねばならぬ。大谷派の先望慧琳師・隨慧師何れも『正像末和讃見聞指瑕』各一卷を著し、そが思想内容の眞宗教義に齟齬するもの多々あるを指摘して、宗祖の直弟たる性信の撰に非ず、正しく後人の偽作であると断定せらるゝ。因みに左

の一説あることを掲げて置かう。それは『反古裏』にて願正寺照心房を照信と作る異本あるより、そが照信と今の性信とが誤られたものであらうと。而して照心なれば、專信・圓善・如道の系統を引いて正當なる安心の人には非ざるから、この照心に本書の撰ありと見て不當ではないと云ふのである。とに角、本書の撰者に關し、充分検討の餘地あるものと云ふ可きである。

⑦ [参考] 淨土真宗教典志第二 ⑧ 明和二刊(谷大、宗甲・一七)(龍大、一一三六・一一五七)大正六刊(龍大、一〇三二九)

**正像末和讃見聞指瑕** ① (日) Sho-zo-matsu-wa-san-ken-mon-shi-ka. ② 一卷 ③ 存

④ 慧琳(正徳五一寛政元 A. D. 1713—1789)・隨慧(一天明二 A. D. 1782)共述 ⑤ 寫本(谷大、宗大・二七一四)

**正像末和讃見聞集** ① (日) Sho-zo-matsu-wa-san-ken-mon-shu. 正像末和讃見聞 ② 一卷 ③ 存、異義集第六

④ 性信(普濟) ⑦ [参考] 淨土真宗聖教目錄

**正像末和讃鼓吹** ① (日) Sho-zo-matsu-wa-san-ko-sui. ② 二卷 ③ 存

享保四刊 ④ (谷大、宗大三五五六)

**正像末和讃後記** ① (日) Sho-zo-matsu-wa-san-to-ki. ② 六卷 ③ 存、十

四部雜纂之内 ④ 僧鏡(享保八一天明三 A. D. 1723—1783)述 ⑤ 寫本(龍大、一一三六・一一八二)

**正像末和讃講義** ① (日) Sho-zo-matsu-wa-san-ko-gi. ② 七卷 ③ 存

④ 一巻 ⑤ 存

深颯(寛延二)文化一四 A. D. 1749—1817) 述 ①寫本(谷大・宗大・三一七七)

正像末和讃講義

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-ko-gi. ②三卷 ③存 ④外に分文科目一卷 ⑤存、眞宗全書第四三 ⑥徳龍(安永元—安政五 A. D. 1772—1853) 述 ⑦嘉永七甲寅(A. D. 1854) 五月

⑧本書は京都高倉山寮に於ける安居の講説で有る、三十七會に亘る、内容は來由、大意、入門、解釋の分科を以てし、第三科を更に初擧告讃、二、正述讀文、三、總結文の三分科とし、正述讀文を五科に分けて講ず。

⑨寫本(谷大・宗大・二一五六) (水谷壽)

正像末和讃講義

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-ko-gi. ②二卷 ③存 ④松本惠秀述 ⑤明治二四(A. D. 1891) ⑥寫本(谷大・宗大・一六九七)

正像末和讃講義

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-ko-gi. 正像末和讃講義 ②二卷 ③存 ④吉谷覺謙(天保一三—大正三 A. D. 1842—1914) 述 ⑤明治三七(A. D. 1904) ⑥刊本(谷大・宗大・一〇〇五)

正像末和讃講義

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-ko-gi. ②一卷 ③存 ④多田專淨(—大正五 A. D. 1916) 述 ⑤明治三四刊 ⑥(龍大、一二三六・一五九)

正像末和讃講義

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-ko-gi. ②一卷 ③存 ④住田智見述 ⑤大正五刊 ⑥(谷大、宗大・三三三六)(龍大、一二三六・一五八)

正像末和讃講義

matsu-wa-san-ko-gi. ②一卷 ③存 ④是山惠覺述 ⑤大正七再刊 ⑥(龍大、研眞)

正像末和讃講義

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-ko-gi. ②二卷 ③存 ④加藤智學述 ⑤大正四刊 ⑥(谷大、宗洋・八九七)

正像末和讃講義

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-ko-jitsu. ②一卷 ③存 ④圓解(明和四—天保一—A. D. 1767—1830) 述 ⑤天保一五寫 ⑥(谷大、宗大・三八二〇)

正像末和讃講義

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-ko-oku. 正像末和讃講義 ②一卷 ③存 ④吉谷覺謙(天保一三—大正三 A. D. 1842—1914) 述 ⑤明治三七刊 ⑥(龍大、一二三六・一六〇)

正像末和讃碎骨

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-sai-kotsu. ②三卷 ③存 ④開隨述 ⑤寫本(龍大、一二三六・一六一)

正像末和讃私記

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-shi-ki. ②三卷或二卷 ③存 ④承應二刊(龍大、一二三六・一六二) 正保四刊(立大、A 四〇・五八)

正像末和讃私科

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-shi-ka. ②一卷 ③存 ④大安(—享和三 A. D. 1803) 述 ⑤寛政五刊 ⑥(谷大、宗大三五五三)

正像末和讃私考

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-shi-ko. ②一卷 ③道粹(正徳三—明和元 A. D. 1713—1764) 述 ④(參考) 淨土眞宗教典志第二

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-jiki-ge. ②二卷 ③存 ④靈秀(—文化六 A. D. 1809—) 述 ⑤文化六寫 ⑥(谷大、長保・四六)

正像末和讃集義方軌

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-shu-gi-ho-ki. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大)

正像末和讃述懷聽記

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-jik-kwai-cho-ki. ②一卷 ③存 ④島地默雷(天保九—明治四四 A. D. 1838—1911) 述 ⑤寫本(龍大、一三三六・一七九)

正像末和讃助講

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-to-ko. ②三卷 ③存 ④寫本(龍大、一二三六・一六三)

正像末和讃助辭考

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-to-ji-ko. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大・宗大・三一九八)

正像末和讃正說

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-sho-sestu. ②十二卷 ③存 ④智通(元祿三—明和五 A. D. 1690—1768) 述 ⑤(參考) 淨土眞宗教典志第二 ⑥自筆本(龍大、別置)

正像末和讃正傳記

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-sho-den-ki. ②五卷 ③存 ④臨全(寶永元—天明元後 A. D. 1704—1781—) 述 ⑤寛政九寫 ⑥(谷大、宗大・一五二八)

正像末和讃壬申記

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-zhi-chi-to-ken. ②三卷 ③存 ④道隱(寶保元—文化一〇 A. D. 1741—1813) 述 ⑤寫本(龍大、一二三六・一六四)

正像末和讃青藍記

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-sei-ran-ki. ②三卷 ③存 ④慧雲(享保一五—天明二 A. D. 1730—1782) 述 ⑦(參考) 淨土眞宗教典志第二、眞宗全書刊行豫定書目

正像末和讃俗談

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-zoku-dan. ②三卷 ③存 ④秀啓述 ⑤寫本(谷大・宗大・二八六五)

正像末和讃大意

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-tai-i. ②一卷 ③存 ④淳述 ⑤寛政五刊 ⑥(龍大、一二三六・一六五)

正像末和讃太子讚筆記

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-tai-shi-san-hik-ki. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一二三六・一七八)

正像末和讃註解

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-cho-ge. ②二卷 ③存 ④空書(慶長八—元祿五 A. D. 1603—1652) 述 ⑤寛文一一刊 ⑥(龍大、一二三六・一六六)(谷大)

正像末和讃聽記

①(日) Sho-zo-matsu-wa-san-cho-ki. ②一卷 ③存 ④都西(天明二—慶應元 A. D. 1782—1865) 述 ⑤寫本(龍大、一二三六・一六八)

正像末和讃聽記

松島善讓(文化三一明治一九 A. D. 1806—1886)述 ①寫本(龍大、一二三六・一六九)

**正像末和讚聽記** ①(日) Sho-zo-matsui-wa-san-cho-ki. ②一卷 ③存 ④圓乘龍眠(文政七—明治三六 A. D. 1821—1903)述 ⑤寫本(龍大、研眞)

**正像末和讚聽次錄** ①(日) Sho-zo-matsui-wa-san-cho-ji-roku. ②三卷 ③存 ④功存(享保五—寛政八 A. D. 1720—1796)述 ⑤寫本(龍大)

**正像末和讚佔畢草稿** ①(日) Sho-zo-matsui-wa-san-tem-pitsu-sō-ka. ②五卷 ③存 ④寫本(谷大、宗大・三五五二・三五八)

**正像末和讚秘訣** ①(日) Sho-zo-matsui-wa-san-hi-keitsu. ②一卷 ③存 ④空慧(寛文元—延享三 A. D. 1661—1746)述 ⑤自筆本(谷大、宗丙・一六)

**正像末和讚筆記** ①(日) Sho-zo-matsui-wa-san-hiki. ②二卷 ③存 ④松島善讓(文化三一明治一九 A. D. 1806—1886)記 ⑤寫本(龍大、研眞)

**正像末和讚報恩解** ①(日) Sho-zo-matsui-wa-san-hō-on-gē. ②十八卷 ③存 ④月溪(—享保元 A. D. 1716—)作 ⑤【參考】淨土真宗教典志第二

**正像末和讚問答記** ①(日) Sho-zo-matsui-wa-san-mon-dō-ki. ②一卷 ③存 ④足利義山(文政七—明治四三 A. D. 1824—1910)述 ⑤大正八刊 ⑥(龍大、一二三六・一七七)

**正像末和讚聞記** ①(日) Sho-zo-matsui-wa-san-mon-ki. ②三卷 ③存 ④惠劍(—天保元 A. D. 1830)述 ⑤文政一一(A. D. 1828) ⑥寫本(谷大、宗大・一七四)

**正像末和讚聞香記** ①(日) Sho-zo-matsui-wa-san-mon-ka-ki. ②四卷 ③存 ④了祥(天明八—天保一三 A. D. 1788—1842)述 ⑤大正五寫 ⑥(谷大、宗大・二八〇六)

**正像末和讚聞誌** ①(日) Sho-zo-matsui-wa-san-mon-shi. ②三卷 ③存 ④宣明(寛延二—文政四 A. D. 1749—1821)述 ⑤文化七(A. D. 1810) ⑥寫本(谷大、宗大・二五)

**正像末和讚聞信鈔** ①(日) Sho-zo-matsui-wa-san-mon-shū-shō. ②一卷 ③存 ④慧然(元祿六—明和元 A. D. 1693—1764)述 ⑤寶曆六寫 ⑥(谷大、宗大・四四七七)

**正像末和讚要註** ①(日) Sho-zo-matsui-wa-san-yō-chū. 陳耕錄 ②二卷 ③存 ④寫本(龍大、研眞)

**正像末和讚來迎讚略解** ①(日) Sho-zo-matsui-wa-san-ryō-gō. ②一卷 ③存 ④僧録(享保八—天明三 A. D. 1723—1783)述 ⑤寫本(龍大、一二三六・一八)

**正像末和讚略解** ①(日) Sho-zo-matsui-wa-san-ryaku-gō. ②一卷 ③存 ④功存(享保五—寛政八 A. D. 1720—1796)述 ⑤寛政九寫 ⑥(谷大、宗大・二六六九)

**正像末和讚連環解** ①(日) Sho-zo-matsui-wa-san-ren-kwan-gō. ②六卷 ③存 ④靈榮泰巖(正徳元—寶曆一三 A. D. 1711—1763)述 ⑤寛延二(A. D. 1749) ⑥安永五刊 ⑦(龍大、一二三六・一七〇)(谷大、宗大・二二五二)

**正像末和讚錄** ①(日) Sho-zo-matsui-wa-san-roku. ②一卷 ③存 ④多田專淨(—大正五 A. D. 1916)述 ⑤明治三四刊 ⑥(龍大、一二三六・一七三)

**正雜自錄** ①(日) Sho-zō-ji-roku. ②一卷 ③存 ④道隆記 ⑤寫本(龍大、一五〇二・一三九)

**正雜二行記** ①(日) Sho-zō-ni-gyō-ji. ②一卷 ③存 ④柔遠(寛保二—寛政一〇 A. D. 1742—1798)述 ⑤寫本(龍大)

**正雜二行義言上** ①(日) Sho-zō-ni-gyō-gi-gon-jō. ③存 ④四部雜纂之内 ⑤寫本(龍大、一〇三・一五)

**正雜二行義林** ①(日) Sho-zō-ni-gyō-gi-jin. ②一卷 ③存 ④環中(—享保元 A. D. 1716—)述 ⑤寫本(龍大、一五〇三・一四〇)

**正雜二行聽書** ①(日) Sho-zō-ni-gyō-kiki-gaki. ②一卷 ③存 ④惠訓記 ⑤寫本(谷大、宗大、一三六一)

**正雜二行講義錄** ①(日) Sho-zō-ni-gyō-kō-gi-roku. ②一卷 ③存 ④南條神興(文化一一—明治二〇 A. D. 1814—1887)述 ⑤明治三〇刊 ⑥(龍大、研眞)(谷大、宗小、五二)(立大、A四〇・七四) ⑦京都護法館

**正雜二行諸家圖說** ①(日) Sho-zō-ni-gyō-sho-ke-zu-seisu. ②一卷 ③【參考】淨土真宗教典志第二

**正雜二行圖** ①(日) Sho-zō-ni-gyō-zū. ②一紙 ③隨慧(—天明二 A. D. 1782)作 ④【參考】淨土真宗教典志第二

**正雜二行得失義** ①(日) Sho-zō-ni-gyō-toku-shitsu-gi. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、研眞)

**正雜二對辨** ①(日) Sho-zō-ni-tai-ban. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大)

**正雜辨論** ①(日) Sho-zō-ban-ron. ②一卷 ③存 ④道龍(文政五—明治四〇 A. D. 1822—1907)述 ⑤寫本(龍大、一五〇二・一四二)

**正續大宗禪師行狀** ①(日) Sho-zoku-dai-shū-zen-ji-gyō-jō. ③存、續群書類從第九 ④宗眞(永享六—永正四 A. D. 1431—1507)撰 ⑤本書は春浦和尚行狀とも呼び、京都大徳寺宗照禪師(1409—1496)の行狀記で法孫宗眞の撰する所である。今其の大要を抜萃するに、宗照字は春浦、俗姓源氏、播磨赤松郡の人、幼歳業を東山乾心禪師に受け、十八歳難髪受戒し藏論を司る。二十四歳大徳寺養叟に參して其の衣法を承け、命により雲門祖塔を守る。養叟の寂後洛東大隆庵に居りしが、遂に寛正二年大徳寺に瑞世す。應仁の大亂に紫野兵火に罹るや、師逃れて攝津城福寺、和泉陽春庵に留る。八年の後再び龍寶山を道し、専ら火後の復興を計る。文明十三年伏見清水寺を建つ。後土御門帝師の徳望を聞き正續大宗禪師の號を賜ふ。明應五年正月十四日示寂、世壽八十八

名所行發① (名庫書)者屬所現② 月年の刊版③ (書考參書釋註)書末④ 説解存内⑤ 代年作者⑥ 著者⑦ 缺存⑧ 數卷⑨ (名書)名題⑩ 敬略字數

法齡七十一、云々と誌す。(紀氏隆真)

正續蓮門住持訓 ①(日)Shō-goku

tem-mon-jū-ji-kan. ②1卷 ③存 ④

刊本(高大、寄・一・一八)

正達和尚選擇講本 ①(日)Shō-

datstō-shō-sen-jaku-kō-hon. ②四卷

③存 ④義山 ⑤寛政元寫 ⑥(龍大、二六

八二・二八)

正智院道範御消息 ①(日)Shō-

chi-in-dō-han-go-shō-soku. ②四帖 ③

存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

正中記 ①(日)Shō-chū-ki. ②三卷

③信正記 ④正中年間(A. D. 1324—1325)

⑤(參考) 淨土真宗教典志第二

正中山緣起 ①(日)Shō-chū-zan-en-

gi. ③存 ④文政四刊 ⑤(龍大、研史)

正中山法華經寺誌 ①(日)Shō-

chū-zan-hō-ke-kyō-ji-shi. ②1卷 ③存

④石倉重繼記 ⑤明治三六刊 ⑥(立大、B

〇六・三四)(帝國、八一・九二)

正頂經 ①(日)Shō-chō-kyō. (支)

Chang-ting-ching. ②1卷 ③疑偽經 ④

【參考】出三藏記第五、仁壽錄第四、武周

錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

正傳現圖曼荼羅印行記 ①(日)

Shō-den-gen-zu-man-da-ra-hi-eyō-ki.

②1卷 ③存 ④常塔書 ⑤安永二刊 ⑥

(高大、寄・一・五四)

正統下南海和尚傳 ①(日)Shō-tō

ka-nan-kai-o-shō-den. ②1卷 ③存

④良鑑撰 ⑤(參考) 大日本佛教全書續刊

豫定書目

正統傳後集 ①(日)Shō-tō-dun-go-

shū. ②四卷 ③存 ④良空 ⑤享保六刊

⑥(立大、A四〇・九二)(谷大)

正統附法事 ①(日)Shō-tō-ho-hō-

no-koto. ②1冊 ③存 ④足利時代寫

(寶善提院)

正燈世譜 ①(日)Shō-tō-se-ki. ②1

卷 ③存 ④刊本(哲、四七)

正燈世譜 ①(日)Shō-tō-se-ki. 梓補

文政七刊 ②1卷 ③存 ④森其蕉編 ⑤

正如房(つかはす御返事

①(日)Shō-nyō-ō-e-tsu-ka-ra-si-go-

he-ni. ③存、黒谷上人語燈錄(和語)(大

正八三、No. 2611)第四、淨土宗全書第九

④源空(長承二)建曆二(A. D. 1133—1212)

正念往生事 ①(日)Shō-nen-ō-jō-

no-koto. ②1卷 ③存、淨土西山流秘要

藏第五 ④寫本(谷大、宗大・二八〇三)

正念誦義 ①(日)Shō-nen-ji-gi. ②

1帖 ③存 ④仵遍(享德三—永正一三A.

D. 1451—1516)記 ⑤明治時代寫 ⑥(寶

龜院)

正念誦觀想 ①(日)Shō-nen-ji-

kwan-sō. ②1卷 ③存 ④仵遍(享德三

—永正一三A. D. 1451—1516)記 ⑤明曆

二寫 ⑥寶龜院

正念誦等用心 ①(日)Shō-nen-ji-

ō-yō-jin. ②1帖 ③存 ④仵遍(享德三

—永正一三A. D. 1451—1516)記 ⑤徳川時

代寫 ⑥(寶龜院)

正念誦本尊加持 ①(日)Shō-nen

ji-hon-zon-ka-ji. ②1卷 ③存 ④仵遍

(享德三—永正一三A. D. 1451—1516)記

⑤寛延三寫 ⑥(高大、寄・一・六九)

正法華記並後記 ①(日)Shō-hō-ke-

ki-narabini-ko-ki. ②2卷 ③(參考)

東域傳燈目錄卷上

正法華經 ①(日)Shō-hō-ke-kyō.

(支)Cheng-fa-hua-ching. (梵)Saddharma-

puṇḍarīka Sūtra(Ed. by Kern & Nanjō,

1912, Bibl. B. X) (藏)dun-pai-chos pad-

ma-dkar-po shes bya-ba theg-pa chen-

po hi mdo. ②十卷 ③存、大正九・六三

No. 263. 縮盈二、正九・三、北119在、南

119在、元115在、明北134木、清34木、麗

118風、天113在、指109風、法116風、至

196萬、明南122木、No. 138 ④竺法護譯

⑤西晋太康七年(A. D. 286)

⑥法華經の漢譯現存三本中に於る最古の

譯。于闐(Khotan)國王宮所藏の六千五百

偈の貝葉本を原本として譯す、逐字譯に依

て且つ羅什譯の妙法華に缺けたる譬喩をも

含み内容も豊富である。

又經名及品名等の譯語妙法華と異なると

ころが少なくない、隨つて妙法華と對照研

究するには不可缺の資料である。今妙法華

と異なる重要な點を挙げれば、經典構成上に

於て囑累品が最後に廻され、提婆達多品

を「七寶塔品」(什譯の見寶塔品)の後半に含

めて二十七品となり、(什譯の始めは二十

七品) 内容に於ては普門品の偈頌を缺き

生育の喩を有し、授五百弟子決品(什譯の

五百弟子授記品)の初に入海探寶の喩を出

し、藥王如來品(什譯の法師品)中に寶益王

及び千子と善蓋太子との法供養があり、什

譯に於て不麟の陀羅尼を譯して居ること等

である。尙ほ參考のため品名を掲げれば次

の如し。(括弧内は什譯品名) 光瑞品(序

品)第一、善權品(方便品)第二、應時品(譬

喩品)第三、信樂品(信解品)第四、藥草品

(藥草喩品)第五、授摩開決品(授記品)第

六、往古品(化城喩品)第七、授五百弟子決

品(五百弟子授決品)第八、授阿難羅六決品

(授學無學人記品)第九、藥王如來品(法師

品)第十、七寶塔品(見寶塔品)第十一、勸

說品(勸持品)第十二、安行品(安樂經品)第

十三、菩薩從地湧出品(從地涌出品)第十

四、如來現壽品(如來壽量品)第十五、御福

事品(分別功德品)第十六、勸助品(隨喜功

德品)第十七、歎法師品(法師功德品)第十

八、常被輕慢品(常不輕菩薩品)第十九、如

來神足行品(如來神力品)第二十、藥王菩薩

品(藥王菩薩本事品)第二十一、妙吼菩薩品

(妙音菩薩品)第二十二、光世普門品(觀世

音菩薩普門品)第二十三、總持品(陀羅尼

品)第二十四、淨復淨王品(妙花嚴王本

品)第二十五、樂普賢品(普賢菩薩勸發品)

第二十六、囑累品(同名)第二十七。

⑥元祿四寫 ⑦(帝國、八二・二八)

(馬田行啓)

正法華經 ①(日)Shō-hō-ke-kyō.

(支)Cheng-fa-hua-ching. ②六卷 ③缺

④失譯 ⑤(參考) 法經錄第一、仁壽錄第

五、靜泰錄第五

正法華三昧經

①(日)Shō-hō-k-ku-sam-mai-kyō(支)Cheng-fa-hua-san-mei-ching. ②六卷 ③失譯 ④(参考)出三藏記第四

正法眼

①(日)Shō-hō-yan. 誠拙禪師正法眼 ②一卷 ③存 ④誠拙周楞(延享三—文政三A.D.1746—1820)述、疎竹宗俊編 ⑤寛政一〇刊、大正一〇寫 ⑥(駒大)

正法眼藏

①(日)Shō-hō-yan-zō. (支)Cheng-fa-yan-tsang. ②六卷 ③存、已續二二二・一 ④宋宗杲大慧(元祐四—隆興元A.D.1089—1163)語 ⑤紹興一七(A.D.1147)

①門弟との間に於ける問答の語要を抄録せるもの。紹興十七年に侍者冲密慧然の編輯する所なり。宗杲の自序に云く「予衡陽に居り衲子請益す目づけて正法眼藏といふ。尊宿前後の次序宗派殊異の分なく但向上の巴鼻を徹證し、人の與めに黏を解き縛を去り正眼を具する事を取るのみ」とあり。また明の李日華の序に「杲の著はす所は語録、書簡、宗門武庫と此の編とにして大都宗乘を貫申し孔老に入出す。蓋しその門徒を擧劉するもの十七、而も士大夫の爲めに拳を發するもの十三なり」と云へり。更にまた禪籍史には「彼れ大慧は本師の碧巖評を熾きて後に自己の正法眼藏を行ふ。此れ尋常の手段の英俊にして得難し」とあり。以て本書の内容を窺ひ知るを得べし。 ⑦(参考) 禪籍志卷上 ⑧唐元和年間刊

(駒大貴重藏書)宋代刊(駒大)

正法眼藏

①(日)Shō-hō-yan-zō. 永平正法眼藏 ②九十五卷 ③存、大正八二・七No.2352。日本大藏經曹洞宗章疏第一、禪學大系祖錄部第三、承陽大師聖教全集之内 ④道元(正治二—建長五A.D.1200—1253)撰 ⑤寛喜三—建長五(A.D.1231—1233)

①具さには永平正法眼藏といふ。道元禪師一代の撰述中最も重きをなすものなり。人皇八十五代後堀河天皇の寛喜三年辛卯(皇紀一八九一)禪師三十二歳の御時より八十八代後深草天皇の建長五年癸丑(皇紀一九一三)五十四歳に至るまで、前後二十三年間に渉れる禪師の親述に係る和語にて書かれ、その内容は日常の工夫辨道より宗門の規則、自己の用心、古人の行履を叙べ、或は公案を剖折するあり、或は當時宋土の五嶽諸刹門庭の高卑、僧儀の隆替及び吾邦沙門の減否を目撃して一々邪を糾し正を辨するあり。綾々たる数千萬言洵に佛祖の淵源を激發せる、日本曹洞宗最要の宗典たり。義雲の序に曰く「正法眼藏密傳密付、古と今と嫡佛嫡祖たり、永平元祖宋に入り、五葉の根帯を穿鑿して歸朝し、能く天の蔭涼となる。忒改婆心、和字を以て漢語を和らげ、奇妙善巧人をして文言に累はざらしむ。石の玉を含むが如く、地の山を撃ふるに似たり。聊か卑語を綴りて其の大意を述ぶるのみ。後昆にして此の八字を打開せず妙心源未だ通徹せずんば一大藏教、少林の妙訣、夢にだも未だ見ることあらざるなり」とあり。

妙訣、夢にだも未だ見ることあらざるなり」とあり。

本書の各卷を説時と説處とを對照し更に各卷の奥書に依つて案ずるに、寛喜三年八月初めて深草の安樂院に於て辨道話一巻を開示せられ、其の翌々年天福元年夏より十一年間に渉りて摩訶般若波羅蜜を初めに現成公案、一類明珠、重雲堂式、即心是佛、洗淨、禮拜得髓、谿聲山色、諸惡莫作、有時、袈裟功德、傳衣、山水經、佛祖、嗣書、法華轉法華、心不可得、後心不可得、古鏡、看經、佛性、行佛威儀、佛教、神通、大悟、坐禪箴、佛向上事、恁麼、行持、海印三昧、授記、觀音、阿羅漢、栢樹子、光明、身心學道、夢中說夢、道得、畫餅、都機、空華、菩提薩埵四攝法及び葛藤の四十四卷を提唱せられ。尙その間仁治三年壬寅十二月十七日波多野義重幕下に於て全機一巻。寛元々年癸卯四月二十九日六波羅密寺に於ては古佛心一巻の示業あり。寛元々年七月禪師四十四歳の御時、吉峯寺に於て三界唯心を初め説心説性、佛道、諸法實相、密語、佛經、無情説法、法性、陀羅尼、而授、坐禪儀、梅華、十方、春秋、祖師西來意、優曇華、發無上心、發菩提心、如來全身、三昧王三昧、三十七品菩提分法、轉法輪、自性三昧、大修行の二十四卷を開演せられ、また同年十一月禪師峯に於て見佛、編參の二卷、同十二月に眼睛、家常、龍吟の三卷を開説せられ。寛元三年乙巳禪師四十六歳の御時、永平寺に於て九ヶ月間に亘り虚空を始め鉢孟、安居、他心

通、玉索仙陀婆、示庫院文、出家、洗面、三時業、八大人覺の十卷を説示せらる。以上は説時説所の明瞭なるものにして之を總括するに山城時代に開説せられしもの四十六卷、越前時代に垂示せられしもの三十九卷、合計八十五卷なり。而して此の外に草案のまゝにて書き遺され禪師の滅後懷英和尚の書寫せられたと考へらるるものに四馬出家功德、供養諸佛、歸依三寶、深信因果、四禪比丘、唯佛與佛、生死、道心、受戒の十卷あり。現行せる正法眼藏九十五卷とは此等を總稱したるものなり。

本書は、建長七年即ち道元禪師の入滅後三年に懷英和尚が禪師の御草本を列次輯綴して七十五帖とす。然るに延慶の頃本山永平寺回祿の災ありて懷英編次の原本焼失せしが、嘉曆四年己巳(皇紀一九八九)義雲和尚が灰燼中より出でたる原本に就きて捫拾完結し六十卷とせり。義雲和尚編輯の六十卷本これなり。その後永平寺第九世如幻宗吾これを寫し傳へしより之を宗吾本とも稱す。應永二十六年己亥(皇紀二〇七九)加州佛陀寺の大家梵清が大乗寺寶庫より懷英和尚、編輯の七十五帖本を得て之を拜寫し、更に散逸せる九卷を捫拾して八十四帖とす。これを梵清本と稱す。降つて元祿三年庚午(皇紀二三五〇)永平寺第三十五世版橋晃全が更に永平寺の寶庫に傳はれる八卷と辨道話。重雲堂式、示庫院文の三卷とを加へて九十五卷とせり之を晃全本と稱す。現行せる永平正法眼藏は即ち是れなり。本書の註釋書その數二十種に餘るものあり。

神保如天・安藤文英共編「正法眼藏註解全書十卷」はそれ等總てを概羅輯合したるものとす。

⑦〔注釋〕 經家撰抄二十二卷。天桂撰辨註二十二卷。而山撰涉典錄十一卷。而山撰開解二卷。而山撰開邪訣一卷。乙堂撰續註義五卷。本光撰却退一字參十四卷。萬侶撰涉典補闕錄一卷。萬侶撰諫靈錄二卷。藏海撰私記十卷。老卯撰那一寶二十二卷。萬瑞撰和語梯一卷。黃泉撰涉典續貂六卷。空印撰迷隨亂二卷。移山撰開講備忘一卷。④延享二及安永年間寫(駒大)、寛政一二刊(駒大)(永平寺書庫)文化八刊(谷大、餘大・七八六)寫本(正大、一七五・三〇A) ①吉祥山藏版 (安藤文英)

正法眼藏 ①(日)Shō-bō-gen-tō. 本山版縮刷正法眼藏 ②一卷 ③存 ④大正一五刊 ⑤(谷大、餘大・六九三)

正法眼藏 ①(日)Shō-bō-gen-tō. ②一卷 ③存 ④弘津說三編 ⑤道心卷。三時業卷。歸依三寶卷を收めたるもの ⑥明治二三刊 ⑦東京森江書店

正法眼藏 ①(日)Shō-bō-gen-tō. ②一卷 ③存 ④大内青替(弘化二—大正七A.D.1845—1918)校 ⑤明治一八刊 ⑥(駒大)(高木、寄、一・二五)(帝國、二七・一三) ⑦東京鴻盟社

正法眼藏 ①(日)Shō-bō-gen-tō. ②一卷 ③存 ④鳥尾得庵校 ⑤明治二五刊 ⑥(帝國、五・四八)

正法眼藏影室 ①(日)Shō-bō-gen-tō-et-shitsu. ②八卷 ③存 ④經家(一延

慶元A.D.1208—) ⑤慶應三寫 ⑥(駒大) 正法眼藏御聽書 ①(日)Shō-bō-gen-tō-on-kiki-gaki. ②十卷 ③存、佛敎大系第六一九 ④設法記 ⑤寛喜三一建長五(A.D.1231—1235)

⑥道元禪師の嫡嗣永興詮慧和尚が常に禪師の椅子下にありて其の提唱を聽聞して其の儘を筆記せしもの。本書は禪師の直説を根本とせるものなれば其の尊重すべきものなることを言を俟たず。永平正法眼藏七十五帖に對する最も貴重な註釋書なり。而も文體極めて平易にして熟字の解釋あるを以て眼藏の眞意を知らんとするものには無二の寶典なり。久しく寫本として經家の影室本と共に傳承せしが、經家抄と同時に刊行流布せられたり。今悉く註解全書中に收輯せらる。

⑦明治三六刊 ①(永平寺書庫)(駒大) ②東京鴻盟社 正法眼藏開講備忘 ①(日)Shō-bō-gen-tō-kai-kyō-bi-ji. ②一卷 ③存、正法眼藏註解全書第一〇 ④西有移山(一明治四三A.D.1910)述 ⑤明治一六(A.D.1883)夏

⑥本書は明治十六年夏安居の日、著者が遠州長松院に於て永平正法眼藏提唱の際に豫備講話として示されたる玄談なり。その内容は次の五項目に分たる。即ち第一には卷數に多寡あること、第二には正法眼藏と題すること、第三には正法眼藏の四字に就て第四には末書名目について、第五には拜覽するもの用心。以上の五項に分ち懇々と

説示せられたるものなり。眼藏の大綱を知らんとする者に對しては慧亮の玄談と共に無上の良書なりとす。

⑦明治二九刊 ⑧(駒大) ⑨東京鴻盟社 (安藤文英)

正法眼藏解題 ①(日)Shō-bō-gen-tō-kai-dai. ②一卷 ③存、正法眼藏註解全書別卷 ④神保如天、安藤文英共著 ⑤大正三甲寅(A.D.1914)三月 ⑥東京無我山房

正法眼藏諫靈錄 ①(日)Shō-bō-gen-tō-kan-ryō-rokku. 正法眼藏辨々註、正法眼藏開邪訣補闕錄 ②二卷 ③存、正法眼藏註解全書第一〇 ④萬侶道坦撰 ⑤安永三(A.D.1774)春

⑥本書は始め正法眼藏辨々註(明和三年丙戌八月)と稱し、次に開邪補闕錄(明和八年辛卯夏)と改め、最後に諫靈錄(安永三年甲午春)と名づく。その間字句上に多少の變遷なきに非ざれども其の内容は大體に於て同一なり。即ち天桂傳尊の永平正法眼藏註の說を非議して逐條その所見を發表せしものなり。辨々註と名づけしは天桂の辨註を辯駁するの意、開邪補闕錄は而山和尚の開邪訣を補闕して辨註を駁するの意、諫靈錄と標題せし所以に就て其の序文に「木を樹るものは其の莖を愛へ民を保つものは其の賊を除くと今や憂除に非ず諫言なり」とあり。眼藏研史上の良末書たり。

⑦明和三寫(駒大) 寫本(谷大、餘大・三三一八) ⑧東京無我山房 (安藤文英)

正法眼藏歸依三寶講義 ①(日)Shō-bō-gen-tō-ke-i-san-bō-ko-gei. ③存、曹洞禪講義第九 ④山田孝道(文久三—昭和三A.D.1863—1928)述 ⑤大正六刊 ⑥東京光融館

正法眼藏歸依三寶卷 ①(日)Shō-bō-gen-tō-ke-i-san-bō-no-maki. ②一卷 ③存、正法眼藏第八八(大正八二・二九〇No.2582)之内 ④明治二三刊 ⑤(駒大) ⑥東京森江書店

正法眼藏却退一字參 ①(日)Shō-bō-gen-tō-kyaku-tai-ichi-ji-san. 却退一字參、參註、參本、正法眼藏參註 ②十四卷 ③存、佛敎大系第九、正法眼藏註解全書第一〇、正法眼藏諫靈錄之内 ④本光踏道(一安永二A.D.1772)述 ⑤却退一字參を見よ。

正法眼藏行持卷 ①(日)Shō-bō-gen-tō-kyō-ji-no-maki. ②二卷 ③存、正法眼藏第三〇(大正八二・一二九No.2583)之内 ⑦〔參考〕 禪籍目錄

正法眼藏行持卷講義 ①(日)Shō-bō-gen-tō-kyō-ji-no-maki-ko-gei. ③存、曹洞禪講義第九 ④松田淇堂述 ⑤大正六刊 ⑥東京光融館

正法眼藏裝裝功德 ①(日)Shō-bō-gen-tō-ke-sai-kuridokun. ②一卷 ③存、正法眼藏第一二(大正八二・四七No.2282)之内 ⑤大正一一刊 ⑥東京森江書店

正法眼藏顯開事考 ①(日)Shō-bō-gen-tō-ken-kai-ji-ko. ②一卷 ③存 ④瀧谷琢宗述 ⑤明治二八刊 ⑥(駒大)(帝國

名所行發 ⑦(名庫書)著藏所現 ⑧月年の刊寫 ⑨(書考堂書釋註)書未 ⑩説解容内 ⑪代年作者 ⑫著者 ⑬佚存 ⑭數卷 ⑮(名書)名題 ⑯號略字數



國(四〇二一九)

正法眼藏玄談科釋

①(日)Sho-bo-gen-zo-gen-dan-kwa-shaku. ②一卷 ③存、正法眼藏註解全書第一〇 ④慧亮忘光述 ⑤天保六(A. D. 1835)十月六日

⑥永平正法眼藏の字釋、大意、題目に就せらるゝ所以の三項目に就て釋述されたものなり。最後に卷目列次に就ての議論を叙す。本書は陸奥宮城郡國分庄金剛山輪王閣下に在りて開演の初めに談ずる所を筆記せしものなり。著者は武州馬込の萬福寺に住し正法眼藏に造詣極めて深かりしといふ。

(安藤文英)

正法眼藏御抄

①(日)Sho-bo-gen-zo-go-sho. ②十六卷 ③存 ④〔参考〕禪籍目錄

正法眼藏校讀

①(日)Sho-bo-gen-zo-ko-kwa. ②二卷 ③存 ④道忠撰 ⑤〔参考〕禪籍目錄

正法眼藏講話

①(日)Sho-bo-gen-zo-ko-wa. ②一卷 ③存 ④秋野孝道述 ⑤大正一五刊 ⑥東京鴻盟社

正法眼藏三時業卷

①(日)Sho-bo-gen-zo-san-ji-ge-no-maki. ②一卷 ③存、正法眼藏第八四(大正八二・二七四No. 2582) ④道元(正治二―建長五 A. D. 1200―1253)撰 ⑤明治二三刊 ⑥東京森江書店

正法眼藏參註

①(日)Sho-bo-gen-zo-san-chu. 正法眼藏却退一字參、却退一字參、參註、參本 ②十四卷 ③存、佛教大系第九、正法眼藏諫證録之内、正法眼藏註解全書第一〇 ④本光語道(一安永二A. D. 1773)述 ⑤却退一字參の下を見よ。

正法眼藏私記

①(日)Sho-bo-gen-zo-shi-ki. ②四卷 ③存、正法眼藏註解全書之内 ④藏海述 ⑤安永八(A. D. 1779)前後

⑥永平正法眼藏九十五卷の文段下に一々註譯を施せるもの。經家抄と本光參註とに據り且つ自己の意見を以つて簡潔に義解せしものなり。その眼藏本文を解するに當り、御抄よりは平易に、開解よりは剴切なるを以つて、初心者にも久參者にも適切な末書として眼藏學者の間に珍書せらるべき要書なり。殊にこの書は九十五卷の全編に涉りて一々宗旨を指示する點に於いて他の諸註に比して一頭地を抽くの感あり。

⑦天明二一五寫(駒大)寫本(駒大)

正法眼藏私記會本

①(日)Sho-bo-gen-zo-shi-ki-e-ion. ②八卷 ③存 ④明治二九、三二刊 ⑤(駒大) ⑥東京鴻盟社

正法眼藏拾遺

①(日)Sho-bo-gen-zo-shu-i. ②十九卷 ③存 ④寫本(正大、一七五・三〇B)

正法眼藏出家功德卷

①(日)Sho-bo-gen-zo-gu-shu-ke-ku-doku-no-maki. ②一卷 ③存、正法眼藏第八六(大正八二・二七八No. 2382)之内 ④明治時代刊 ⑤(駒大) ⑥東京鴻盟社

正法眼藏出家功德講義

①(日)Sho-bo-gen-zo-gu-shu-ke-ku-doku-ko-gi. ②一卷 ③存、曹洞禪講義第九 ④松田湛堂述 ⑤大正六刊 ⑥東京鴻盟社

正法眼藏抄

①(日)Sho-bo-gen-zo-sho. ②二卷 ③存、正法眼藏註解全書之内 ④經家述 ⑤延慶元(A. D. 1308)十二月二十二日

⑥永平正法眼藏七十五帖に對して經家和尚の註抄せしもの。先に詮慧和尚が道元禪師に隨侍して禪師の御提唱を聽書せるもの十卷ありき。詮慧の弟子經家また親しく道元禪師の御提唱を聽きしが、後に御聽書を根據として孤雲懷英和尚編集の永平正法眼藏七十五帖に註抄を施せり。これ乾元二年癸卯四月十五日より六箇年の星霜を費して延慶元年十二月に完成せるものなり。實に道元禪師滅後五十有六年に相當す。これ眼藏末書中最古のものたり。爾來、洛陽永興寺に傳はりしが建徳年間、無著妙融和尚これを豊後の泉福寺に移し影室(開山堂)に秘藏せり。故に本抄の通名を影室本、略して影本とも云へり。或は經家抄、御抄、秘抄、七十五帖等の名稱あり。文體極めて古雅にして字句稍難解なれども簡明直截に祖意を指示する點に於ては末書中本抄に及ぶものなし。故に古來正法眼藏參究者に最要の註抄として尊重せられたり。

⑦明治三六刊(駒大)筆寫原本(豊後泉福寺) ⑧東京鴻盟社

正法眼藏抄御聽書

①(日)Sho-bo-gen-zo-sho-on-ki-ki. ②二十二卷 ③存 ④詮慧(一寛元頭 A. D. 1201―1242)述 ⑤寫本(駒大)

正法眼藏涉典續貂

①(日)Sho-bo-gen-zo-sho-ten-zoku-cho. ②六卷 ③存、正法眼藏註解全書之内、佛教大系第六―第九 ④無著黃泉述 ⑤天保八(A. D. 1837)八月二十八日

正法眼藏涉典補闕錄

①(日)Sho-bo-gen-zo-sho-ten-ko-keisu-roku. ②一卷 ③存、正法眼藏註解全書第九 ④萬仞道坦撰 ⑤明和八(A. D. 1771)四月

正法眼藏抄御聽書

①(日)Sho-bo-gen-zo-sho-on-ki-ki. ②二十二卷 ③存 ④詮慧(一寛元頭 A. D. 1201―1242)述 ⑤寫本(駒大)

正法眼藏抄御聽書

①(日)Sho-bo-gen-zo-sho-on-ki-ki. ②二十二卷 ③存 ④詮慧(一寛元頭 A. D. 1201―1242)述 ⑤寫本(駒大)

⑥永平正法眼藏中の典據を涉獵せしもの。七十五帖の列次に隨ひ面山撰述の「涉典録」の闕けたるを補ふために錄せられたるもの。涉典録と共に眼藏の故事字義を知るに

は須要の書なり。本書は久しく寫本として展轉し來りしが、大正三年初めて印刷して正法眼藏註解全書第九卷に收められたり。

正法眼藏涉典錄

①(日)Shō-hō-zen-zō-shō-ten-toku. 永平正法眼藏涉典錄 五卷 ②存、正法眼藏註解全書第一〇、佛教大系第六一第九 ③面山瑞方(天和三—明和六A.D.1683—1769)撰 ④寶曆九(A.D.1759)

⑤永平正法眼藏九十五卷全部の典故を指摘解説せしもの。著者は元文三年五十六歳にして素願を發してより相州老梅庵に閑居し二十一年間にしてこの書を完成せり。全部九十五卷の涉典をなせるもの本録を以て權與とす。序に云く「遠孫の小機は信解に恍惚たり、この故に余多年涉典に従事して以て職由する所の全文を集む、更に經題を提して以て信根を培ふ者なり」と存す。有らゆる佛典祖錄和漢の書を獵り眼藏中の文字、成語、故事、典故、句意、傳記等を擧ぐるに及ぶ宛然眼藏故事成語辭典の觀を呈す。眼藏を研鑽せんとするもの、座右に具ふべき良書なり。

⑥享保元刊(駒大) 明和六刊(谷大、餘大・二五) (安藤文英)

正法眼藏涉典和語鈔

①(日)Shō-hō-zen-zō-shō-ten-wa-go-shō. 正法眼藏和語鈔 ②一卷 ③存、正法眼藏註解全書第九 ④面山瑞方(天和三—明和六A.D.1683—1769)撰 ⑤明和元(A.D.1754)春

⑥永平正法眼藏中の難解なる和語について

典據語例を出せるもの。漢文の涉典錄に對比すべき好書なり。卷の列次に拘らず出づるに隨ひ録せるもの、如し。序に「梵語は一語多義にして密家の所謂一字の理を含むもの之に因るなり。須らく知るべし天竺(語)と日本(語)とは之れ原始これ同じきなり」と云へり。以て其の内容を知るべし。建仁寺の推雲軒に於て書き了りしを徹榮、慧輪、良樹、萬瑞等展轉謄寫して傳へ、大正三年これを印刷して正法眼藏註解全書中に收めたり。

正法眼藏隨聞記

①(日)Shō-hō-zen-zō-zui-mon-ki. ②六卷 ③存、國文東方佛教叢書第一輯第四隨筆部、禪門法語全集第三、承陽大師聖教全集第三 ④孤雲懷契(建久九—弘安三A.D.1198—1280)編 ⑤嘉禎元—建長五(A.D.1233—1253)

⑥道元禪師が其の會下に隨時親訓せられたる示教を門人懷契和尚自ら筆記せられたる。禪師の平生を示し其の所信を語り參學の要道を示さる。和文にして語また平易なれば參學者の好指南にして、道元禪師の家風を知る最良書なり。本書の跋に「先師永平契和尚在學地之日、學道至要隨聞記録」と記されしは懷契和尚の筆録なることを證明するものなり。但し六卷の書冊として纏められたるは和尚滅後のことなるべし。本書に慶安版本と寶曆版本との二種あり。寶曆刊本の首に面山瑞方の序あり東海慧命の言を引用して「曾て越の祖山に留錫して古寫の正法眼藏隨聞記を拜讀す。印版する所本と之を對考するに大に差異あり、繕寫

に暇なくして今に到りて憐々たりと。略々自ら記持する所の差異を語る。余聞いて歡喜し頗る好本なりとす」といへり。之に依つて見るに面山は古寫本と寛文九年版とを比較校正して重刻せられしを知るべし。

⑦(注釋) 陸鏡巖著正法眼藏隨聞記布鼓。慶安四初版。寛文九己酉(皇紀二二二九)再版、翌年二月三版。寶曆八戊寅(皇紀二四一八)二月四版。明和六己丑(皇紀二四二九)五版。昭和四、六版 ⑧(駒大)(永平寺書庫等)正大、一七五・三一 ⑨初版中村長兵衛。二版三版京都五條小龜三左衛門。四版五版京都柳枝軒。六版道元禪師研究會。

正法眼藏隨聞記 ①(日)Shō-hō-zen-zō-zui-mon-ki. ②一卷 ③存 ④瑞芳校刻 ⑤明治七刊 ⑥(京大)一・二五・九) 正法眼藏隨聞記 ①(日)Shō-hō-zen-zō-zui-mon-ki. 道元語錄正法眼藏隨聞記 ②一卷 ③存 ④和辻哲郎校訂 ⑤昭和四刊 ⑥東京岩波書店 正法眼藏隨聞記布鼓 ①(日)Shō-hō-zen-zō-zui-mon-ki-fu-ko. 正法眼藏布鼓 ②一卷 ③存 ④陸鏡巖述 ⑤大正一〇刊 ⑥(駒大)(京大、一・二五・一八、一九)(帝室)

正法眼藏註解全書第一〇 ⑦(堂喚丑述 享保一六(A.D.1731)辛亥十一月 ⑧凡例に「續絃は予直に正文に註するの書目なり、講議は或者の誤解を議駁するなり」と存す。これ本書名稱の依り來る所以なり。或者とは天桂傳尊の辨註を指し、殊に面授、嗣法、授記の三卷に對しては一々辨駁して完膚なし。蓋し「辨註」に對して非議を唱へしもの、先驅をなす書なり。眼藏中に於ける疑義争論を研究せんとするもの、主要なる參考書たり。

正法眼藏續集 ①(日)Shō-hō-zen-zō-zoku-shū. (支)Cheng-fu-yen-tsan-ri-hsi-chi. ③存 ④清代英際 ⑤(參考) 禪籍目錄 正法眼藏知津布鼓 ①(日)Shō-hō-zen-zō-chi-shin-fu-ko. ②一卷 ③存 ④陸鏡巖述 ⑤大正一〇刊 ⑥(駒大) 正法眼藏註解全書 ①(日)Shō-hō-zen-zō-chū-kai-zen-shō. ②十一卷 ③存 ④神保如天、安藤文英共編 ⑤(第一卷)「辨道語。摩訶般若波羅蜜。現成公案。一顆明珠。重雲堂式。即心是佛。洗淨。禮拜得髓。溪聲山色。諸惡莫作。〔第二卷〕有時。袈裟功德。傳衣。山水經。佛祖。嗣書。法華轉法華。心不可得。後心不可得。古鏡。〔第三卷〕看經。佛性。行佛威儀。佛教。神通。〔第四卷〕大悟。坐禪箴。佛向上事。懺悔。行持(上、下)。海印三昧。〔第五卷〕授記。觀音。

正法眼藏續絃講議 ①(日)Shō-hō-zen-zō-zoku-gen-kyō-ri. ②五卷 ③存、

正法眼藏挿書錄 ①(日)Shō-hō-zen-zō-esho-roku. ②四卷 ③存、

正法眼藏續絃講議 ①(日)Shō-hō-zen-zō-zoku-gen-kyō-ri. ②五卷 ③存、

正法眼藏註解全書第一〇 ⑦(堂喚丑述 享保一六(A.D.1731)辛亥十一月 ⑧凡例に「續絃は予直に正文に註するの書目なり、講議は或者の誤解を議駁するなり」と存す。これ本書名稱の依り來る所以なり。或者とは天桂傳尊の辨註を指し、殊に面授、嗣法、授記の三卷に對しては一々辨駁して完膚なし。蓋し「辨註」に對して非議を唱へしもの、先驅をなす書なり。眼藏中に於ける疑義争論を研究せんとするもの、主要なる參考書たり。

阿羅漢。柏樹子。光明。身心學道。夢中說夢。道得。書餅。全機。都機。〔第六卷〕空華。古佛心。四攝法。葛藤。三界唯心。說心說性。佛道。諸法實相。密語。佛經。無情說法。法性。〔第七卷〕陀羅尼。洗面。面授。坐禪儀。梅華。十方。見佛。偏參。眼晴。家常。龍吟。春秋。祖師西來意。〔第八卷〕優曇華。發無上心。發菩提心。如來全身。三昧王三昧。三十七品菩提分法。轉法輪。自證三昧。大修行。虛空。鉢孟。安居。〔第九卷〕他心通。王索仙陀婆。示庫院文。出家。三時業。四馬。出家功德。供養諸佛。歸依三寶。深信因果。四禪比丘。唯佛與佛。生死。道心。受戒。八大人覺。正法眼藏涉典補闕錄〔萬仞道坦〕。正法眼藏補闕錄。正法眼藏和語抄〔面山瑞方〕。正法眼藏和語梯〔萬瑞〕。〔第一〇卷〕正法眼藏序跋題類。答客議〔山山道白〕。正法眼藏傳獅子一吼集〔定山良光〕。正法眼藏辨註調絃〔天桂傳尊〕。正法眼藏續絃講義〔乙堂喚丑〕。正法眼藏關邪訣〔面山瑞方〕。雪夜爐談〔面山瑞方〕。正法眼藏諫盡錄〔萬仞道坦〕。正法眼藏進髓乳〔心應空印〕。議永平排遣楞嚴圓覺辯〔面山瑞方〕。高祖破斥臨濟德山大鴛雲門等辯〔萬仞道坦〕。天桂不知正法眼藏之由來事〔公音道鋪〕。嘉錄考〔面山瑞方〕。正法眼藏品目頌金剛蓮草參〔本光階道〕。彫刻永平正法眼藏凡例並卷目〔種達〕。正法眼藏玄談科釋〔慧亮忘光〕。正法眼藏那一寶凡說並未記〔老卯父幼〕。正法眼藏開講備忘〔西有移山〕。承陽大師聖教全集解題〔弘津說三〕。正法眼藏註解書序跋凡

例目錄類。〔別卷〕正法眼藏註解全書總目次。正法眼藏註解全書內容書目解題。正法眼藏索引。正法眼藏註解全書故事成語索引。③大正三刊 ④〔駒大〕⑩東京無我山房

正法眼藏摘旨韻文布鼓 ①〔日〕Sho-do-gen-zo-teki-shi-om-mon-fu-ko. ②三卷 ③存 ④陸鏡巖述 ⑤大正一五刊

⑥名古屋圓通寺僧堂

正法眼藏典證 ①〔日〕Sho-do-gen-zo-ten-sho. ②二卷 ③無着〔一文政頃A. D. 1818—1829—〕撰 ④〔參考〕禪籍目錄

正法眼藏道心講義 ①〔日〕Sho-do-gen-zo-do-shin-ko-gi. ②存 ③曹洞禪講義第九 ④山田孝道〔文久三—昭和三A. D. 1863—1928—〕述 ⑤大正六刊 ⑥東京光融館

正法眼藏那一寶 ①〔日〕Sho-do-gen-zo-na-ippō. ②二十二卷 ③存 ④正法眼藏註解全書之内、佛教大系第六—第九 ⑤老卯父幼述 ⑥寛政三〔A. D. 1791〕仲秋 ⑦著者は天桂傳尊の法孫、無貴鐵文の直嗣なり。宇治の興聖寺に住院中師祖天桂の「辨註」を祖述して之れに僅かに自己の新註を加へ、正法眼藏の本文を平假名となし、處々に割註し、且つ卷尾に一括して註を列ぬ。初め六十卷本に據りしが、後拾遺別輯として三十五卷を加ふ。註解は師祖天桂の如く獨斷を以てせず、校訂もまた豊後の泉福寺、城州の永正寺、丹後の玉雲寺及び永平寺秘藏の諸本に據りて爲されたるが故に、比較的完全なるものなり。序に云く「秘封の藏本を得て覺えず舞踏して薰香拜

讀し始と貧兒の一寶を得るが如し」とあり、以てその題名を知るべし。⑧寛政三刊 ⑨〔駒大〕⑩宇治興聖寺藏版〔安藤文英〕

正法眼藏並述讀 ①〔日〕Sho-do-gen-zo-narabini-jus-san. ②二十五卷 ③存〔參考〕禪籍目錄

正法眼藏拈鐸 ①〔日〕Sho-do-gen-zo-nen-pi. ②一卷 ③無着〔一文政頃A. D. 1818—1829—〕撰 ④〔參考〕禪籍目錄

正法眼藏八大人覺 ①〔日〕Sho-do-gen-zo-hachi-dai-nin-kaku. ②一卷 ③存 ④正法眼藏第九〔大正八二・三〇八No. 2582〕之内 ⑤哲、ナ、中、ニ、七

正法眼藏秘鈔 ①〔日〕Sho-do-gen-zo-hi-shō. ②二十卷 ③萬仞道坦〔一享保頃A. D. 1716—1735—〕撰 ④〔參考〕禪籍目錄

正法眼藏關邪訣 ①〔日〕Sho-do-gen-zo-byaku-jia-keitsu. ②一卷 ③存 ④正法眼藏註解全書第一〇 ⑤面山瑞方〔天和三—明和六A. D. 1683—1769—〕述 ⑥元文三戊午〔A. D. 1738〕正月

天桂傳尊の「辨註調絃」の所解を邪なりとし、其の邪解を開き以て後學に貽さんがために著されたる書なり。學者間に此の書牽強臆說無きに非ずと評する者もあれども、宗義對論上に於ける面山系の主張を知る要書たり。首に永平四十二世江寂圓月和尙の序文を載せ、卷尾に自跋を載す。跋文に云く「若し夫れ世に反逆のもの有りて國紀まきに危からんとす、三寶も亦これが爲に留

難を生ずるときは則ち佛既に降伏の法を説く。今もまた祖訓留難を生ずるが爲の故に説く社吐鳴を治するの訣なり」と以つて本書著作の意氣を窺ふべし。⑧明治三〇刊、寛保二刊 ⑨〔駒大〕⑩京都柳枝軒。東京鴻聖社 〔安藤文英〕

正法眼藏關邪訣補缺錄 ①〔日〕Sho-do-gen-zo-byaku-jia-keitsu-fu-keisan-roku. 正法眼藏辨註註、正法眼藏諫盡錄 ②一卷 ③存 ④萬仞道坦〔一享保頃A. D. 1716—1735—〕 ⑤明和三寫 ⑥〔駒大〕

正法眼藏布鼓 ①〔日〕Sho-do-gen-zo-fu-ko. 正法眼藏隨聞記布鼓 ②七卷 ③存 ④陸鏡巖述 ⑤大正九刊 ⑥〔駒大〕⑦名古屋圓通寺僧堂

正法眼藏佛向上事卷行事卷 ①〔日〕Sho-do-gen-zo-butsumo-jō-jō-jō-maki-gyō-jō-no-maki. ②一卷 ③存 ④曹洞宗務局訂正 ⑤明治二四刊 ⑥〔帝國、六・三〕

正法眼藏辨註並調絃 ①〔日〕Sho-do-gen-zo-ben-chū-narabini-cho-gen. ②二十二卷 ③存 ④正法眼藏註解全書第一〇 ⑤天桂傳尊〔慶安元—享保二〇A. D. 1688—1735—〕述 ⑥享保一五〔A. D. 1730〕八月

義雲和尚編集の正法眼藏六十卷本に就て各卷に註し或は辨を加へしもの。而して初めに調絃〔最初は辨解と稱す〕一篇を附す。著者は六十卷本を正本として本文を平假名に書き改め、その餘の三十五卷を拾遺別輯となし片假名の儘に爲して多くは註せず。

名所行發⑩ (名軍書)書藏所現⑨ 月年の刊寫⑧ (書考參書釋註)書太⑦ 説解卷内⑥ 代年作者⑤ 著者④ 缺存③ 數卷② (名書)名題① 號略字數

曰く「本文は殆ど五百年間展轉謄寫し來れるものなれば、その間誤脱、添寫、鳥焉魯魚の失必ず多かるべし、之れを校訂添削する決して祖意に背かず、寧ろ孝子の爲すべき業なるべし」となし。著者はこの見地より本文の語句を訂し、文字を刪り、時に又己れが欲する文章を加へて眼藏章文に斧鉞を加へたる點少からず、然れば後世の學者より祖書を齎るものなりとの謗りを受け、殊に而授、嗣書、授記の三卷を中心として宗學者間に異論を生ぜしめたり。然れども其の見識の獨拔なるものありて眼藏參究に對して別箇の風格を現すものあり。以つて具眼の學者に取りては須要の末書たるを免れず。

〔注釋〕直指玄端著膠柱 ③寛政三及明治一四辛巳刊 ④駒大 ⑤東京擁萬閣、森江書店 (安藤文英)

正法眼藏辨道話 ①(日) Sho-bō-gen-zō-ben-dō-wa. ②一巻 ③存、正法眼藏第一(大正八・一五 No. 2583)之内 ④天明八刊(駒大)明治二九刊(龍大、二六七二・三)

正法眼藏辨道話卷私記會本 ①(日) Sho-bō-gen-zō-ben-dō-wa-no-hon. ②一巻 ③存、西有移山(一明治四三A.D. 1910)校訂 ④明治二九刊 ⑤龍大(一六七二・四)(駒大) ⑥東京鴻盟社

正法眼藏辨道話講義 ①(日) Sho-bō-gen-zō-ben-dō-wa-ko-gi. ②一巻 ③存、西有移山(一明治四三A.D. 1910)校訂 ④明治二九刊 ⑤龍大(一六七二・四)(駒大) ⑥東京鴻盟社

正法眼藏辨道話講義 ①(日) Sho-bō-gen-zō-ben-dō-wa-ko-gi. ②一巻 ③存、西有移山(一明治四三A.D. 1910)校訂 ④明治二九刊 ⑤龍大(一六七二・四)(駒大) ⑥東京鴻盟社

正法眼藏辨道話講義 ①(日) Sho-bō-gen-zō-ben-dō-wa-ko-gi. ②一巻 ③存、西有移山(一明治四三A.D. 1910)校訂 ④明治二九刊 ⑤龍大(一六七二・四)(駒大) ⑥東京鴻盟社

正法眼藏辨道話講義 ①(日) Sho-bō-gen-zō-ben-dō-wa-ko-gi. ②一巻 ③存、西有移山(一明治四三A.D. 1910)校訂 ④明治二九刊 ⑤龍大(一六七二・四)(駒大) ⑥東京鴻盟社

述 ⑤明治四一刊 ⑥駒大 ⑦東京鴻盟社

正法眼藏辨道話講義 ①(日) Sho-bō-gen-zō-ben-dō-wa-ko-gi. ②一巻 ③存、高田道見(一、大正一三A.D. 1923)述 ④明治四〇刊 ⑤駒大(龍大、二六七二・七) ⑥東京光融館

正法眼藏辨道話講義 ①(日) Sho-bō-gen-zō-ben-dō-wa-ko-gi. ②一巻 ③存、高田道見(一、大正一三A.D. 1923)述 ④明治四〇刊 ⑤駒大(龍大、二六七二・七) ⑥東京光融館

正法眼藏補闕錄 ①(日) Sho-bō-gen-zō-ho-ke-tsū-rōku. ②一巻 ③存、正法眼藏註解全書第九 ④萬仞道坦(一享保頃A.D. 1716—1735)編

正法眼藏補闕錄 ①(日) Sho-bō-gen-zō-ho-ke-tsū-rōku. ②一巻 ③存、正法眼藏註解全書第九 ④萬仞道坦(一享保頃A.D. 1716—1735)編

正法眼藏補闕錄 ①(日) Sho-bō-gen-zō-ho-ke-tsū-rōku. ②一巻 ③存、正法眼藏註解全書第九 ④萬仞道坦(一享保頃A.D. 1716—1735)編

正法眼藏補闕錄 ①(日) Sho-bō-gen-zō-ho-ke-tsū-rōku. ②一巻 ③存、正法眼藏註解全書第九 ④萬仞道坦(一享保頃A.D. 1716—1735)編

正法眼藏補闕錄 ①(日) Sho-bō-gen-zō-ho-ke-tsū-rōku. ②一巻 ③存、正法眼藏註解全書第九 ④萬仞道坦(一享保頃A.D. 1716—1735)編

試に獅乳一滴を投ずれば則ち六斛悉く迸散す。その一滴とは則ち獅子吼決定の一貫のみ」とあり。眼藏研究史上殊に天桂系の主張を知らんための良書なり。

安永五刊 ④駒大(哲、け・八・中・三) ⑤泰元院藏版

正法眼藏傍訓 ①(日) Sho-bō-gen-zō-bō-kun. ②二十巻 ③存、萬仞道坦(一享保頃A.D. 1716—1735) ④(参考) 禪籍目録

正法眼藏品目録 ①(日) Sho-bō-gen-zō-hō-moku-jū. ②一巻 ③存、(哲、ふ・左・一九)

正法眼藏品目録 ①(日) Sho-bō-gen-zō-hō-moku-jū. ②一巻 ③存、(哲、ふ・左・一九)

正法眼藏品目録 ①(日) Sho-bō-gen-zō-hō-moku-jū. ②一巻 ③存、(哲、ふ・左・一九)

正法眼藏品目録 ①(日) Sho-bō-gen-zō-hō-moku-jū. ②一巻 ③存、(哲、ふ・左・一九)

正法眼藏品目録 ①(日) Sho-bō-gen-zō-hō-moku-jū. ②一巻 ③存、(哲、ふ・左・一九)

第一〇 面山瑞方(天和三—明和六A.D. 1683—1769)撰 ⑤正徳二(A.D. 1712) ④四十餘年間隨時の作なるべし。

具きには永平正法眼藏品目述贊と稱す。眼藏九十五卷の各題下に述(散文)と贊(韻文)とを附す。述は題意並に一巻の要旨を指示し、贊は同じく韻體の偈頌にて宗旨を擧括せるものなり。而して初めに述贊の序あり。序に云く「卷一百に分ちて浩々たり、然れども逐巻題を別つ、其の題は一巻の大意を合藏し深固幽遠にして人の能く到ることなし、直ちに要機要なり」とあり。眼藏各卷の題意並に其の一巻の要旨を知るには甚だ便利なり。

安永六丁酉(皇紀二四三七)三月「面山廣録」中に編して刊行す ④駒大 ⑤京都具葉書院

正法眼藏開解 ①(日) Sho-bō-gen-zō-hō-kai. ②二巻 ③存、正法眼藏註解全書之内、佛教大系第六—第九 ④面山瑞方(天和三—明和六A.D. 1683—1769)述

正法眼藏開解 ①(日) Sho-bō-gen-zō-hō-kai. ②二巻 ③存、正法眼藏註解全書之内、佛教大系第六—第九 ④面山瑞方(天和三—明和六A.D. 1683—1769)述

正法眼藏開解 ①(日) Sho-bō-gen-zō-hō-kai. ②二巻 ③存、正法眼藏註解全書之内、佛教大系第六—第九 ④面山瑞方(天和三—明和六A.D. 1683—1769)述

正法眼藏開解 ①(日) Sho-bō-gen-zō-hō-kai. ②二巻 ③存、正法眼藏註解全書之内、佛教大系第六—第九 ④面山瑞方(天和三—明和六A.D. 1683—1769)述

正法眼藏開解 ①(日) Sho-bō-gen-zō-hō-kai. ②二巻 ③存、正法眼藏註解全書之内、佛教大系第六—第九 ④面山瑞方(天和三—明和六A.D. 1683—1769)述

正法眼藏辨道話講義 ①(日) Sho-bō-gen-zō-ben-dō-wa-ko-gi. ②一巻 ③存、西有移山(一明治四三A.D. 1910)校訂 ④明治二九刊 ⑤龍大(一六七二・四)(駒大) ⑥東京鴻盟社

正法眼藏辨道話講義 ①(日) Sho-bō-gen-zō-ben-dō-wa-ko-gi. ②一巻 ③存、西有移山(一明治四三A.D. 1910)校訂 ④明治二九刊 ⑤龍大(一六七二・四)(駒大) ⑥東京鴻盟社

正法眼藏辨道話講義 ①(日) Sho-bō-gen-zō-ben-dō-wa-ko-gi. ②一巻 ③存、西有移山(一明治四三A.D. 1910)校訂 ④明治二九刊 ⑤龍大(一六七二・四)(駒大) ⑥東京鴻盟社

正法眼藏辨道話講義 ①(日) Sho-bō-gen-zō-ben-dō-wa-ko-gi. ②一巻 ③存、西有移山(一明治四三A.D. 1910)校訂 ④明治二九刊 ⑤龍大(一六七二・四)(駒大) ⑥東京鴻盟社

誤抄しとせず。

明治二四刊 ①(駒大)(谷大、餘洋・六五) (安藤文英)

東京大藏宗淵 ①(日) Sho-ho-  
gen-zo-wa-go-sho. 正法眼藏涉典和語鈔

一卷 ②存、正法眼藏註解全書之内  
面山瑞方(天和三—明和六 A. D. 1683—  
1769)述 ③明和元(A. D. 1767) ④正法  
眼藏涉典和語鈔の下を見よ。

正法眼藏和語梯 ①(日) Sho-ho-  
gen-zo-wa-go-tei. ②一卷 ③存、正法眼  
藏註解全書第九 ④萬瑞述 ⑤文政九(A.  
D. 1826)四月

本書は面山の和語鈔と姉妹篇と見らるべき  
書なり。眼藏、御抄、隨聞記中の難解なる  
和語を摘出して、事例を挙げ解釋せるもの  
なり。著者は國學に造詣深きが故に和語鈔  
に比して解釋甚だ精しきものあり。

明治三〇刊 ①(駒大) ②東京鴻盟社  
(安藤文英)

正法眼藏和語梯拾要 ①(日) Shō  
-hō-gen-zō-wa-go-tei-shū-yō. ②一卷  
③存 ④萬瑞(—文政九 A. D. 1826—)述、  
青木千枝校 ⑤慶應元序 ⑥(駒大)

正法護國論 ①(日) Shō-hō-go-ko=  
ku-ron. ②一卷 ③存 ④深井義正著  
昭和七刊 ⑤東京大乘會

正法山誌 ①(日) Shō-hō-zan-shi.  
②十卷 ③存 ④無着道忠(承應二—延享  
元 A. D. 1653—1744)記 ⑤(京大、印哲・S  
II)

正法山宗派圖 ①(日) Shō-hō-zan-

shō-ha-zu. ②四卷或二卷 ③存 ④玄喬  
(寛政一一—明治元 A. D. 1799—1868) ⑤  
萬治三刊(谷大、餘大・二一〇〇)(正大・一〇  
三一・六八)(哲、な・七・左・二二)(龍大・二九  
五六・七)(駒大)嘉永二刊(京大、印哲・〇六)

正法山諸堂略記 ①(日) Shō-hō-  
zan-shō-dō-ryak-ki. ②一卷 ③存 ④無  
着道忠(承應二—延享元 A. D. 1653—1744)  
記 ⑤(参考)禪籍目録

正法山清規 ①(日) Shō-hō-zan-shin-  
gi. ②三卷 ③存 ④無着道忠(承應二—  
延享元 A. D. 1653—1744)記 ⑤(参考)大  
日本佛教全書續刊豫定書目、禪籍目録

正法山妙心禪寺記 ①(日) Shō-hō-  
zān-myō-shin-zen-ji-ki. ②一卷 ③存  
④宗深雪江(—文明一八 A. D. 1846)記  
刊本(龍大・二九六五・八〇)

正法山妙心禪寺宗派圖 ①(日)  
Shō-hō-zān-myō-shin-zen-ji-shū-ha-zu.  
②四卷 ③存 ④昌三 ⑤嘉永二刊 ⑥  
(龍大・二九五六・八、研史)

正法山歷代住持法語 ①(日) Shō  
-hō-zan-eki-dai-ju-hō-go. ②一卷  
③存 ④寫本(京大、印哲・S I・一三)

正法山列祖語錄 ①(日) Shō-hō-  
zan-ri-so-go-roku. ②一卷 ③存  
【参考】禪籍目録

正法山六祖傳 ①(日) Shō-hō-zan-  
roku-so-den. ②一卷 ③存、宗門正燈錄  
卷第一三 ④東陽英朝(正長元—永正元 A.  
D. 1428—1504) ⑤寛永一七刊 ⑥(龍大、  
研史)(谷大、餘大・二七五七)(高大)(駒大)

寫本(龍大・二九六五・八〇)

正法直傳 ①(日) Shō-hō-jiki-dan.  
①祖一(文永一一—延文二 A. D. 1374—  
1387)【参考】禪籍目録、日本禪林撰述書目  
記 ②(日) Shō-hō-dai-shō-ko-ku-shi-  
ho-gaku-dai-shō-dō-gyō-ki. 古岳大和  
尚道行記 ③存、續群書類從第九 ④鷹潮  
記 ⑤天文二〇(A. D. 1551) ⑥古岳大和  
尚道行記の下を見よ

正法傳弘決 ①(日) Shō-hō-den-gu-  
-ketsu. ②一卷 ③存 ④寛延三寫 ⑤  
(正大・一八四・六一)

正法念處經 ①(日) Shō-hō-nan-ju-  
kyō. (支) Cheng-fa-nien-ch'u-ching. (梵)  
Saddharma-smṛty-upasthāna. (引用) (藏)  
Hphags-pa dam-pahi-chos dran-pa ne-  
bar-rtsang-pa. ②七十卷 ③存、大正一七・  
一 No. 721. 縮本一四・二四・四一七、北  
805 篤至宜、南818 篤至宜、元812 篤至宜、明  
北675 非至資、清675 非至資、麗808 定至終、  
天805 定指666 定至終、法793 定至終、至1040  
以至詠、明南888 非至資、Nj. 699 ④元魏  
般若流支譯

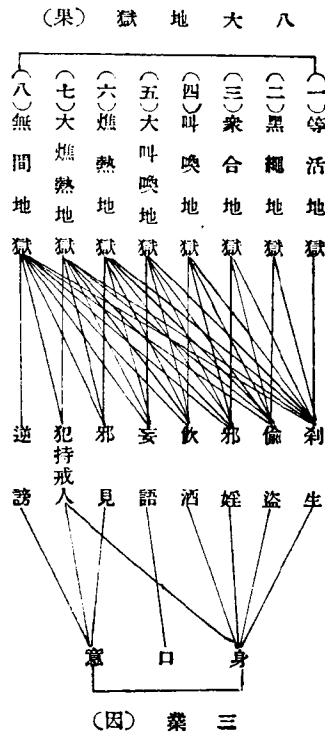
本經の譯者に就いては諸經錄に菩提流支  
か羅曇流支か決定しかねてあつたが「開元  
釋教錄」は「今搜訪實錄」羅曇流支として  
あるが「餘所未見者、俟諸後進耳」と最  
後の決定を避けてゐる。併し該教錄の編  
纂者智昇より以上に進むことが出来ないの  
で、本經叙文の記者も「貞元錄」とともに、  
その説に同意を表明してゐる。本經の發端は、

外道の一人が身口意の三業に關して新出家  
の比丘に質したことら起つたので、世尊  
が是に對して、「正法念處法門」を廣説せら  
れたのが本經である。即ち業とその果報を  
説いたもので、その内容は地獄、餓鬼、畜  
生、天上であるが、阿修羅は畜生に收めら  
れ、人界は別に説いてはゐないが、是等全  
體を含んでゐるといふべきであらう。一言  
にして云へば三界六道の因果を説いたので  
ある。而もその説法の體裁が、「又修業者  
は、内心に思惟し、正法に隨順し、法行を  
觀察す」といふ風に、すべて説かれる事項  
は、修行の内觀を通すことになつてゐると  
いふのが一つの特異性である。

大體の思想から云へば、比丘の修道を主  
としてゐるので、小乘思想であるが、構想  
は雄大で、筆致は放棄を極めてゐるから、  
時々針の袋を脱する如く、大乘思想を露は  
してゐる箇所も少くない。例せば第三十六  
卷の長偈の終りに「益と不益と異らず、縛  
と脱も亦是なり。放逸と不放逸と、功德と  
過と平等なり」といつて「法第一」を説いて  
ゐる所や、第三十卷の初の長偈の次文「今  
この林を觀るに、迦迦村陀如來の無等の色  
身を見るが如し、一切智慧、大悲如來の住  
處なり」といひ、又「或は如來を一切の禪  
處に見、或は如來を一切虚空の中に遍滿し  
て坐禪して住し給ふと見る(第三十六卷の  
終)」といふ如き(尙ほ、六十一、六十二卷  
の各處に自利々他をとき、佛徒の修道の内  
容として六度の行を説く如き)類々大乘的  
である。併し本經の特色とすべきは、六道の

名所行發 ①(名庫書) 著者所現 ② 月年の刊寫 ③(書考參書釋註) 書末 ④ 說解内容 ⑤ 代年作著 ⑥ 著者 ⑦ 缺存 ⑧ 數卷 ⑨(名書) 名題 ⑩ 號略字數

描寫である。「長阿含經」の世記經、「增一阿含經」第三十六の地獄、「雜阿含經」第十九の餓鬼、及び「同上」第四十、第四十六等の帝釋、阿修羅の關係等を思想的、文學的に總合し、統制した所にある。即ち地獄の罪



因、罪果に就いて、前述の經典は混雜を免れないが、本經は左の如く、實行犯から思想犯へと罪の深まりゆくことを明確に決してゐる。

即ち現世にあつては殺生(特に殺人の如き)偷盜は重罪であり、漸次に輕罪となつてゐるのであるが、地獄の刑罰は全く是に爲し、所謂「意業最重」の佛教の本格的立場から批判を下してゐる。従つて同じ身犯でも思想犯を含むことによりて最惡の刑罰が科せられる。かやうに六道輪廻の因果關係は本經に於いて尤も正確に又尤も周密に完成せられてゐる譯である。

かやうに第一卷より第二卷まで十善業道品、第三卷より第五卷まで生死品、第六卷より第十五卷まで地獄文學の最高峰を示し第十六、十七は餓鬼、第十八卷より第二十一卷まで畜生を描き、特に第二十卷、第二十一卷に亘りて説かれたる帝釋阿修羅の雄大なる戰鬥は、大凡人類の歴史に於ける二大潮流たる文化主義(平和)と軍國主義(戰

争)との相克を暗示せしめて興味津津たるものがある。更に第二十二卷より第二十四卷までに四王天を描き、第二十五卷より第三十五卷までに三十三天、第三十六卷より第六十三卷まで夜摩天を描き、第六十四卷より第七十卷まで身念處を説いてゐるが、その間に各種の道品、地理、人體生理等の細密に亘りて廣説せられ、宛然百科辭典の趣きがあり、偉大なる珍書たるを失はぬ。かやうな記述の體裁が文學的であり、雄大であるのと、そして「心業の畫師」が「愛の筆」をもつて地獄等の果地分を描く等と「唯心創造」を説く所(特に第五卷中、生死品第三)は全く小乗の「華嚴經」と稱すべきであらうが、三國の流傳の成績に關しては甚だ貧乏である。只日本に於いて源信の「往生要集」に重なる材料とせられたこと、親鸞

の「教行信證」化卷に唐の法琳の「辯正論」の文を引用してあるが、その中に本經の第十八卷の畜生品の重要な文が引かれてゐることが注意すべきであらう。

①元版卷一八(龍大、別置) (山邊習學)

正法念處經 ①(日)Shō-bō-nan-jō

譯 國譯正法念處經 ②存、國譯一切經

々集部第九 ③山邊習學譯

正法律與復大和上光尊者傳

①(日)Shō-bō-risū-ko-fuku-dai-wa-jō

全集首卷 ②譯滿(寛政頃 A.D. 1789-

1800)撰

③全集に撰者の定稿本と頼山陽添削本とを

收む。二本各三千三百数十字の長文なり。

④文政七開版十善法語附錄 ⑤定稿本、添

削本(河内長榮寺) (高見寬應)

正法律中四衆傳 ①(日)Shō-bō-

nisū-ōn-shi-shū-den. 新集正法律中四衆

傳 ②二卷 ③存、慈雲尊者全集首卷 ④

長谷實秀編 ⑤大正一五(A.D. 1926)

⑥上卷に僧衆百八十八人、下卷に尼衆百五

十六人、優婆塞衆十一人、優婆夷衆八人合

計三百六十三人の傳記を收む。(高見寬應)

正法輪藏 ①(日)Shō-bō-rin-zō. 平

氏傳註 ②十五卷 ③[參考] 淨土眞宗教

典志第三

正法論 ①(日)Shō-bō-rōn. ②一卷

③存 ④寫本(谷大、餘丙・六九)

正御影供 ①(日)Shō-ō-ei-ku. ②

一卷 ③存 ④長谷實秀述 ⑤(京專)

正脈之圖 ①(日)Shō-myaku-no-zu.

②一卷 ③存 ④[參考] 禪籍目錄

正名辨僞錄 ①(日)Shō-myō-ben-

ri-ōki. ②一卷 ③存 ④性慶記 ⑤刊

本(谷大、餘大・三六九六)

正明寺記並大宗正統禪師 ①(日)

Shō-myō-ji-ki-narabini-dai-shū-shō-to-

zan-ji. ②一卷 ③存 ④奥田誠隆編

[參考] 禪籍目錄

正理記 ①(日)Shō-ri-ki. (支)Cheng

yi-chi. 因明入正理論記 ②一卷 ③缺

④新羅元曉(眞平王三九 A.D. 617-)述

[參考] 諸宗章疏錄第二

正理義衡 ①(日)Shō-ri-gi-ō. (支)

Cheng-i-ti-heang. 因明入正理論義衡 ②二

卷 ③缺 ④唐代清素述 ⑤[參考] 諸宗

章疏錄第二

正理義心 ①(日)Shō-ri-gi-shin.

(支)Cheng-i-ti-shin. 因明入正理論義心

因明論義心、因明義心 ②一卷 ③缺

④道猷述 ⑤藏後の因明大疏抄(大正六・四

三七No. 227)に援引。⑥[參考] 諸宗章

疏錄第一

正理義疏 ①(日)Shō-ri-gi-sō.

(支)Cheng-i-ti-sō. 因明入正理論義疏

三卷 ③缺 ④唐代利明述 ⑤[參考] 諸

宗章疏錄第二

正理義斷 ①(日)Shō-ri-gi-dan.

(支)Cheng-i-ti-dan. 因明入正理論義斷

因明論義斷、因明義斷 ②一卷或二卷 ③存

大正四四・一四三No. 3841 己續一・八六・五

④唐慧沼(一開元二A.D. 714-)述 ⑤因明義

斷の下を見よ。⑥[參考] 諸宗章疏錄第一

正理義翼

①(日) Sho-ri-gi-yoku. (支) Cheng-i-i-i. 因明論義翼 ②三卷 ③ 缺 ④習空述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第二

正理古述

①(日) Sho-ri-ko-shaku. (支) Cheng-i-ku-chi. 因明論古述記、因明 入正理論古述記、因明入正理論古述、因明 論古述、因明古述 ②一卷 ③缺 ④新羅太 賢(—景德王一一A.D. 753—)述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第二

正理纂要

①(日) Sho-ri-san-yo. (支) Cheng-i-tsun-yo. 因明入正理論纂 要、因明論纂要、因明入正理論纂要、因 明纂要 ②一卷 ③存、大正四四・一五八 No. 1842. 正續一・八六・五 ④唐慧沼(—開 元一A.D. 714)述 ⑤因明入正理論義纂要 ⑥下を見よ ⑦(參考) 諸宗章疏錄第一

正理述記

①(日) Sho-ri-juk-ki. (支) Cheng-i-shu-chi. 因明入正理論述記 ② 一卷 ③存、正續一・八六・四 ④唐神泰 (—永徽頃A.D. 650—655—)述 ⑤因明入 正理論述記⑥下を見よ ⑦(參考) 諸宗章 疏錄第一

正理疏

①(日) Sho-ri-sho. (支) Cheng-i-su. 因明入正理論疏、因明論疏 ②一 卷 ③缺 ④唐代淨眼述 ⑤藏後の因明大 疏抄(大正六八・四三七 No. 2271)に授引。

正理疏

①(日) Sho-ri-sho. (支) Cheng-i-su. 因明入正理論疏、因明論疏 ②三卷 ③缺 ④壁法師述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄 第一

正理疏記

①(日) Sho-ri-sho-ki. 因明 軌疏 ②三卷(現存卷上) ③存、正續一・八 六・四 ④唐代文軌述 ⑤因明入正理論疏 の下を見よ ⑥(參考) 諸宗章疏錄第一

正理疏

①(日) Sho-ri-sho. (支) Cheng-i-su. 因明入正理論疏 ②二卷 ③缺 ④ 唐神泰(—永徽頃A.D. 650—655—)述 ⑤ (參考) 諸宗章疏錄第二

正理疏

①(日) Sho-ri-sho. (支) Cheng-i-su. 因明入正理論疏、因明論疏 ②二卷 ③缺 ④唐代清幹述 ⑤藏後の因 明大疏抄(大正六八四三七 No. 2271)に授 引。⑥(參考) 諸宗章疏錄第一

正理疏

①(日) Sho-ri-sho. (支) Cheng-i-su. 因明入正理論疏、因明論疏 ②三卷 ③缺 ④唐代玄應述 ⑤(參考) 諸宗章疏 錄第一

正理疏

①(日) Sho-ri-sho. (支) Cheng-i-su. 因明入正理論疏、因明論疏 ②一卷 ③缺 ④唐代玄範(—高宗代 A.D. 650—653—)述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第一

正理疏

①(日) Sho-ri-sho. (支) Cheng-i-su. 因明入正理論疏、因明論疏 ②三卷 ③缺 ④法藏(延喜五一安和一一A.D. 905— 969)述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第二

正理疏記

①(日) Sho-ri-sho-ki. 因明 入正理論疏記、因明疏記 ②九卷 ③缺 ④平備述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第二

正理疏記

①(日) Sho-ri-sho-ki. 因明 入正理論疏記 ②三卷 ③缺 ④孝仁(— 神護景雲元A.D. 767—)述 ⑤藏後の因明 大疏抄(大正六八・四三七No. 2271)に授引。

正理疏

①(日) Sho-ri-sho. (支) Cheng-i-su. 因明入正理論疏、因明論疏 ②二卷 ③缺 ④唐代林述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第二

正理疏

①(日) Sho-ri-sho. (支) Cheng-i-su. 因明入正理論疏、因明論疏 ②一卷 ③道猷 述 ④(參考) 諸宗章疏錄第一

正理疏

①(日) Sho-ri-sho. (支) Cheng-i-su. 因明入正理論抄、因明論抄 ② 一卷 ③缺 ④唐代順憬述 ⑤(參考) 諸 宗章疏錄第二

正理抄

①(日) Sho-ri-sho. (支) Cheng-i-su. 因明入正理論抄 ②一卷 ③缺 ④唐代文備述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第二

正理釋

①(日) Sho-ri-sho. (支) Cheng-i-su. 因明入正理論疏、因明論疏 ②一卷 ③缺 ④唐代 崇俊述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第一

正理釋

①(日) Sho-ri-sho. (支) Cheng-i-su. 因明入正理論抄、因明論抄 ②三卷 ③ 缺 ④唐代擇隣述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄 第一

正理釋

①(日) Sho-ri-sho. (支) Cheng-i-su. 因明入正理論抄、因明論抄 ②一卷 ③缺 ④唐代 崇俊述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第一

正理釋

①(日) Sho-ri-sho. (支) Cheng-i-su. 因明入正理論抄、因明論抄 ②一卷 ③缺 ④唐代 崇俊述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第一

正理釋

①(日) Sho-ri-sho. (支) Cheng-i-su. 因明入正理論抄、因明論抄 ②一卷 ③缺 ④唐代 崇俊述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第一

正理釋

①(日) Sho-ri-sho. (支) Cheng-i-su. 因明入正理論抄、因明論抄 ②一卷 ③缺 ④唐代 崇俊述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第一

正理門論古述記

①(日) Sho-ri-mon-ron-ko-shak-ki. (支) Cheng-i-man-ku-chi. 因明入正理論古述記、因 明論古述、因明古述 ②一卷 ③缺 ④新 羅太賢(—景德王一一A.D. 753—)述 ⑤藏 後の因明大疏抄(大正六八・四三七 No. 2271)に授引。

正理門論古述記

①(日) Sho-ri-mon-ron-ko-shak-ki. (支) Cheng-i-man-ku-chi. 因明入正理論古述記、因 明論古述、因明古述 ②一卷 ③缺 ④新 羅太賢(—景德王一一A.D. 753—)述 ⑤藏 後の因明大疏抄(大正六八・四三七 No. 2271)に授引。

正理門論古述記

①(日) Sho-ri-mon-ron-ko-shak-ki. (支) Cheng-i-man-ku-chi. 因明入正理論古述記、因 明論古述、因明古述 ②一卷 ③缺 ④新 羅太賢(—景德王一一A.D. 753—)述 ⑤藏 後の因明大疏抄(大正六八・四三七 No. 2271)に授引。

正理門論古述記

①(日) Sho-ri-mon-ron-ko-shak-ki. (支) Cheng-i-man-ku-chi. 因明入正理論古述記、因 明論古述、因明古述 ②一卷 ③缺 ④新 羅太賢(—景德王一一A.D. 753—)述 ⑤藏 後の因明大疏抄(大正六八・四三七 No. 2271)に授引。

正理門論古述記

①(日) Sho-ri-mon-ron-ko-shak-ki. (支) Cheng-i-man-ku-chi. 因明入正理論古述記、因 明論古述、因明古述 ②一卷 ③缺 ④新 羅太賢(—景德王一一A.D. 753—)述 ⑤藏 後の因明大疏抄(大正六八・四三七 No. 2271)に授引。

正理門論古述記

①(日) Sho-ri-mon-ron-ko-shak-ki. (支) Cheng-i-man-ku-chi. 因明入正理論古述記、因 明論古述、因明古述 ②一卷 ③缺 ④新 羅太賢(—景德王一一A.D. 753—)述 ⑤藏 後の因明大疏抄(大正六八・四三七 No. 2271)に授引。

諸宗章疏録第二

正理略纂

①(日)Shō-ri-ryū-ku-san. (支)Cheng-i-tiao-tsu-an. 因明入正理論略纂。因明略纂 ②四卷 ③缺 ④唐慧沼(一開元二A. D. 714)述 ⑤藏後の因明大疏抄(大正六・八・四三七No. 2271)に援引。 ⑦【参考】諸宗章疏録第一

正理論抄

①(日)Shō-ri-ron-shō. (支)Cheng-i-tiao-tsu-an. 因明入正理論抄。因明正理論抄 ②二卷 ③缺 ④唐代文佛述 ⑦【参考】奈良朝現在一切經疏目錄 2405

正流成邪流事

①(日)Shō-ryū-ji-ta-ryū-no-koto. ②三帖 ③存 ④寫本(高 大寄・一・七二)

正流布薩辨

①(日)Shō-ryū-fu-sa=tsu-ben. ②一卷 ③存 ④勸息義城(嘉永元—大正一〇A. D. 1848—1921)述 ⑤刊本(正大・一五五二・二四〇)

正流辨

①(日)Shō-ryū-ben. 淨業内辨附録正流辨。吉水遺誓論附録正流辨 ②存。淨土宗全書第九 ③忍波(正保二—正徳元A. D. 1645—1711)稿

④本書は浄土扶宗の志深き忍波が念佛往生の概要たる安心起行を示せる吉水遺誓論中に、鎮西相承、源智相承に就いて辨釋詳述して浄土正統流義を顯示したる草稿である。然るにその慈訓要義の朽ちるを忍びず、寶曆三年釋慈光が浄業問辨の附録として、加載したるも同書の梓板烏有に歸せるを以て、更に順阿隆圓が文政四年に該論の附録として上梓したものである。

内容は該論と同じく和文體の短篇にして初めに鎮西聖光の略傳歴并に鎮西相承の緣由を叙し、法然より鎮西に授けし法語及び附法の起請文を擧げて、鎮西相承の眞實吉水の正統なる所由を示し、次に源智の略傳歴及び同相承を擧げて前者と共に各々相承の正義を弘通する旨を示すと共に、法然の未來智を尊く仰ぐものなりと述懐してゐる。終りに隆圓の本書再校上木の誌語がある。要之本書は古來より浄土宗史上疑題として、論争される鎮西の正統説なるを知る單簡要を得たる一支持書である。

要之本書は古來より浄土宗史上疑題として、論争される鎮西の正統説なるを知る單簡要を得たる一支持書である。

正了知王藥又眷屬法

①(日)Shō-ryō-chi-o-ya-sha-ken-zoku-hō. (支)Cheng-liao-chih-wang-ya-sha-ken-chuan-shu-fa. ②一卷 ③存。正續一・二・四 ④唐義淨(貞觀九—先天二A. D. 635—713)勸譯 ⑤藥又の眷屬、即ち二十八部藥又に就て述べたものである。二十八部藥又(Kaksasas)は、大自在の神通威徳を現して、十方世界に於て、一切衆生を覆護して、衰妻厄難の事を除く。東西南北の四方に各々四藥又あり、その他四維と地上と空中との各々に四藥又あり、合算して二十八藥又となる。此等の藥又を供養し讚歎すれば、國土安穩、萬民富樂を得と説く。

東方 蘇泥怛羅(Sunetra) 地唎伽(Drigha) 毗哩摩(Puripa) 却畢羅(Kapila) 四藥又

嗽里(Hari) 嗽里雜舍(Harikesa) 鉢喇部(Prabhu) 水伽羅(Rigala) 僧訶(Sihna) 南 鄒波僧訶(Upasinha) 商金羅(Sankha) 旃憐那(Canda) 遠喇摩(Dharama) 北方 唵猶伽波羅(Udyasapta) 吠率奴(Visnu) 半支迦(Pancika) 四 般遮維健荼(Patalaghanaka) 四 娑侈祇利(Saptagiri) 薩摩跋多(Himavata) 部摩(Bhama) 地上 蘇部摩(Sudhama) 哥羅(Kala) 鄒波哥羅(Upakala) 四 蘇刺耶(Surya) 蘇摩(Soma) 空中 惡那尼(Arun) 婆庚(Ayud) 空中 四藥又

正和二年後宇多院高野御幸記 ①(日)Shō-wani-nen-go-u-da-in-kō-ya-go-kō-ki. 後宇多院御幸記 ②存。續群書類從第八七

生起 ①(日)Shō-ki. 金剛界生起 ②覺超(天徳四—長元七A. D. 963—1034) ③本朝台祖撰述密部書目曰く「受

法次第ニモ出之云々。 ④眞興(承平四—寛弘元A. D. 931—1004) ⑤本朝台祖撰述密部書目曰く「眞興太和小島寺法相後移眞言、〇十八道義釋生起一卷。アサハ所引此文也。但阿作生義。此本無記書人名。決是眞興作也」云々

生起集説 ①(日)Shō-ki-tsu-satsu. ②一卷 ③存 ④阿滿得聞(文政九—明治三九A. D. 1826—1906)述 ⑤明治一三刊 ⑥龍大(二〇九九・七一七三)研究史) ⑦生疑 ①(日)Shō-gi. 長實三昧、三陸 ②三卷 ③本朝台祖撰述密部書目曰く「長實三昧是内題也外題三陸抄書〇長實法勝寺三昧僧也。三陸抄。私云。今調爲三卷。無三卷内題等。卷末云。嘉承元年々々々於法勝寺之初抄記之云々。故知長實三昧之所記之本也。アサハ抄所引今此三卷之本文ナリ」云々

生經 ①(日)Shō-kyō. (支)Sheng-ching. ②五卷 ③存。大正三・七〇No. 154 縮宿五、正一四・三、北3033定、南8166定、元810定、明北663壁、清665壁、慶806安、天803定、指764安、法791卷、至1038存、明南884壁、Nj. 669 ④法法講譯 ⑤西晉泰始一一建興元(A. D. 266—313)

名所行發⑩ (名庫書)若顯所現⑩ 月年の刊載⑩ (書考參書釋註)書末⑩ 説解存内⑩ 代年作者⑩ 著書⑩ 缺存⑩ 數卷⑩ (名書)名題⑩ 號略字數



⑥この經典は錫蘭上座部の所位 Jataka(本生經) Cariyapitaka(行能) Panjisa-Jataka(五十本生經) Mahāvastu(大事)中 Gata-ka Jataka-nūta(本生變論)十六集經、菩薩本緣經(中に八個の本生譚あり)等と共に、所謂十二部經九分經中の本生に屬するもので、經そのものの性質から云ふと、佛の本生譚であるが、この生經は五十五經に分れ、第五十五經が更に八つの異なつた物語を含むから、都合六十二の物語から成り立つて居り、この中十五經は性質上生經ではなく、又最後の二經の中に含まれる八經は譬喩經(Upana)であるから、それを差し引いた残りの三十九經が生經であるわけである。然し猶その中には阿難の前生に關するもの(第二十八經)、分衛比丘の前生に關するもの(第三經)、和難比丘の前生に關するもの(第三經)、或る長者の前生に關するもの(第五經)、波斯匿の四將に關するもの(第四十七經)の五經があるから、正しく生經と呼べるべきもの、即ち釋尊の前生に關するものは三十四經に過ぎない。この中これらの説話に於て、釋尊がいかなる生を受け給ふたかを見ると左の通りになつてゐる。

- (一)轉輪王 No. 39
- (二)天 Nos. 23, 29, 50
- (三)仙人 Nos. 1, 4, 25, 48, 49, 53
- (四)國王 Nos. 11, 24, 27, 45, 52, 54
- (五)梵志 Nos. 7, 28, 40
- (六)菩薩 No. 55(第四)
- (七)大臣 No. 46,
- (八)比丘 No. 55(第三)

- (九)俗人 No. 9
- (一〇)船師 No. 8
- (一一)女 No. 55(第一)
- (一二)盜賊 No. 12
- (一三)動物
  - a 龍王 Nos. 10, 36,
  - b 鵝 No. 6
  - c 水牛王 No. 30
  - d 兔王 No. 31
  - e 烏王 No. 47
  - f 孔雀 No. 51
  - g 大魚 No. 55(第二)

この經典の所傳部派は不明であるが、五道説を取り、十二部經の語があり、又三千大千の佛國、異佛國、十方佛、普賢菩薩、阿彌陀佛の本生譚など、小乗部派の所傳として頗る變つた語と内容を示し、本無とか一切皆空とか云ふ語も出で、陀羅尼を説く經典が四經まである。大乘教興起後その影響を受けたものであることは十分に看取される。

**生經** ①(日)Shō-kyō. 國譯生經 ②存、國譯一切經本緣部第一 ③西尾京雄

**生經** ①(日)Shō-kyō. (支)Sheng-ching. ②五卷 ③缺 ④宋智嚴(一)元嘉四A. D. 427—)譯 ⑤第二譯 ⑥(參考)開元錄第一五、貞元錄第二四

**生家養者勸計記** ①(日)Shō-ke-yō-ji-kan-ge-ki. ②一册 ③存 ④快澄

**生未分語** ①(日)Shō-ge-mi-bun-go. ②一卷 ③存 ④正保四刊 ⑤(正

大、一四九・一二)京大、一・二六シ・二二) (帝室、一〇五・七〇)  
**生業門佛用如義話事** ①(日)Shō-mon-butsu-yō-nyō-ge-no-koto. ②一册 ③存 ④永享二寫 ⑤(寶龜院)

**生西指南要** ①(日)Shō-sai-shi-tan-yō. ②一卷 ③寂照 ④(參考)淨土依憑經論章疏目錄  
**生西方齋經** ①(日)Shō-sai-hō-sai-kyō. (支)Sheng-tsi-fang-chai-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑤(參考)出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

**生死一大事血脈鈔** ①(日)Shō-ji-ichi-dai-ji-kechi-enyaku-shō. ②一卷 ③存、日蓮聖人御遺文之内、日蓮聖人全集第六 ④日蓮(貞應元—弘安五A. D. 1282—1283)述 ⑤文永九(A. D. 1272)

①日蓮が弟子最達房日淨(與)た書。最達房が臨終の心得を問ふたに對し、十界の生死の當體が妙法蓮華經であつて、釋尊も多寶佛も、上行も我等も悉くこの生死の理即ち妙法の理に從つて居る所以を知り、所詮臨終只今にありと解して信心を致して、南無妙法蓮華經と唱ふる」ところに生死一大事の血脈がある、隨つて斯かる人は命終の際に必ず千佛の來迎があるに相違ない。故に「返す返すも強盛の大力を起して、南無妙法蓮華經、臨終正念と祈念し給へ、生死一大事の血脈此れより外に全く求ると勿れ、煩惱即菩提、生死即涅槃とは是れなり、信心の血脈なくんば法華經を持つとも

無益なり」と答へてゐる。「諸法實相鈔」と共に、日蓮聖人の重大な教義、安心の法門が説かれてゐる書である。⑦(參考)錄外考文第四 (馬田行啓)

**生死海法語** ①(日)Shō-ji-kai-hō-go. ②一卷 ③存、慈雲尊者全集第一四 ④慈雲飲光(享保三—文化元A. D. 1718—1804)述 ⑤寶曆一二(A. D. 1762) ⑥日筆本(河内長榮寺)

**生死海法語** ①(日)Shō-ji-kai-hō-go. ②二卷 ③存、慈雲尊者全集第一四 ④慈雲飲光(享保三—文化元A. D. 1718—1804)述 ⑤寶曆一三(A. D. 1763) ⑥日筆本(河内高貴寺)

**生死覺用抄** ①(日)Shō-ji-kaku-yō-shō. 本無生死論 ②一卷 ③存、大日本佛教全書第二四、天台小部集第五 ④最澄(神護景雲元—弘仁一三—A. D. 767—822)撰

①本書は檀那流惠光院の祕書(兩流含の説)であつて、著者を等海口傳(二之一二)では道暹といひ、山家祖德撰述篇目集は播磨道遂であるといふ。本書は生と死とは一心の妙用であり、有無の二道は本覺の眞德である。故に生死は體一、空有は不二なりと體解して俱體俱用の無作の生死界を説き、生死を畏れず涅槃に執せず直ちに佛地に至れといふ。檀那流口傳書の1。

**生死覺用抄** ①(日)Shō-ji-kaku-yō-shō. ①播磨道遂(—天養久安頃A. D. 1144—)

目集巻下  
一1150—撰 ⑦〔参考〕 山家祖徳撰述篇

生死覺用抄 ①(日) Shō-jū-kaku-yō  
-shō. ④伊勢道空撰 ⑦〔参考〕 本朝台祖撰述密部書目

生死自在 ①(日) Shō-jū-jai. ②一卷 ③存 ④河口慧海著 ⑤明治三十七刊  
⑥(谷大、余洋・一五二)

生死の研究 ①(日) Shō-jū-no-ken-kyō. ②一卷 ③存 ④修養協會編 ⑤大正三刊 ⑥(正大、一〇九・七七) ⑦修養世界社

生死變化經 ①(日) Shō-jū-hen-gē-kyō. (支) Sheng-sā-pien-hua-ching. ②一卷 ③矢譯 ⑦〔参考〕 出三藏記第三

生死變識經 ①(日) Shō-jū-hen-jiki-kyō. (支) Sheng-sā-pien-shih-ching. ②一卷 ③缺 ④宋沮渠京聲(一大明八A. D. 466)譯 ⑦〔参考〕 開元錄第一五、貞元錄第二五

生死辨 ①(日) Shō-jū-ben. ②一卷 ③存 ④萬俣道坦(一享保頃 A. D. 1716—1735—)述 ⑥折々、三・右・六)

生死本源集 ①(日) Shō-jū-hon-gen-shū. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第二八智證大師全集第四 ④圓珍(貞平三A. D. 891)撰

①本書は生死の本源を窮むることは諸佛出世の本懐にあるといひ、三世不可得の本有無作の生死に住すべしと勧め、終りに至つて道業を修して早く三界輪廻の生死界より解脱せよ。一乗世深の妙教を修すべしとす

ふ。本書は「南浮」を「南部」と記す程に俗化し、文章は平安末期以後の體であり、内容も禪淨混亂時代の思想であるから智證大師圓珍撰ではなす。  
⑤足利末期寫 ⑥(高大、寄・一・五七) (田島德音)

生死問題 ①(日) Shō-jū-mon-dai. ②一卷 ③存 ④北村教嚴著 ⑤明治四〇刊 ⑥(帝國、三二五・一三)

生身顯密事 ①(日) Shō-shū-ken-mitsu-no-koto. ②一冊 ③存 ④應正三寫 ⑥(寶壽院)

生身所說陀羅尼抄定事 ①(日) Shō-shū-shō-satsū-darāni-shū-jō-no-koto. ②一冊 ③存 ④貞治五寫 ⑥(寶壽院)

生身の大日 ①(日) Shō-shū-no-da-nichi. ②一卷 ③存 ④和田性海著 ⑥大正二刊 ⑦(高大、寄・一・五七)

生佛二界増減事 ①(日) Shō-butsumi-kai-zō-gen-no-koto. ②一冊 ③存 ④寫本(寶善提院)

生聞婆羅門經 ①(日) Shō-mon-bara-mon-gyō. (支) Sheng-wen-pō-lo-men-ching. 生聞梵志經 ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑦〔參考〕 出三藏記第三、法經錄第三、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第一、第一二、開元錄第一、第一五、貞元錄第二、第二四

召五方龍攝疫毒神呪經 ①(日) Shō-go-hō-ryō-shō-yaku-doku-jin-ji-kyō. (支) Chao-wu-fang-lung-shē-jū-tu-

shen-chou-ching. ②一卷 ③失譯 ⑦〔參考〕 三寶紀第七、內典錄第三

庄松ありのまゝの記 ①(日) Shō-matsu-ari-no-ma-ma-no-ki. ②一卷 ③存 ④清水順保編 ⑤大正一二刊 ⑥(龍大、研真)

肖柏獨吟觀世音名號百韻 ①(日) Shō-haku-doku-gin-kwan-zō-onmyō-go-hyaku-in. ③存、續群書類從第一七 ④肖柏撰

抄阿差末經 ①(日) Shō-a-sha-ma-kyō. (支) Chao-a-ct'ai-mo-ching. ④四卷 ⑤疑偽經 ⑦〔參考〕 出三藏記第五、開元錄第一八、貞元錄第二八

抄阿毘曇五法行經 ①(日) Shō-a-bi-don-go-hō-gyō-kyō. (支) Chao-a-pi-tan-wu-fa-hsing-ching. ②一卷 ③疑偽經 ⑦〔參考〕 出三藏記第五、內典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八

抄阿毘曇毘婆沙 ①(日) Shō-a-bi-don-bi-ba-sha. (支) Chao-a-pi-tan-pi-pō-sha. ⑤五十九卷 ⑥疑偽經 ⑦〔參考〕 開元錄第一八、貞元錄第二八

抄安般守意經 ①(日) Shō-an-ha-tsū-shū-i-kyō. (支) Chao-an-pān-shou-i-ching. ②一卷 ③疑偽經 ⑦〔參考〕 出三藏記第五、內典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八

抄爲法捨身經 ①(日) Shō-i-hō-sha-shin-gyō. (支) Chao-wei-fa-shē-shen-ching. ⑥六卷 ⑦疑偽經 ⑦〔參考〕 出三藏記第五、內典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八

貞元錄第二八  
抄優婆塞受戒經 ①(日) Shō-u-ba-soku-jū-kai-kyō. (支) Chao-yū-pō-sai-shou-chieh-ching. ②一卷 ③疑偽經 ⑦〔參考〕 出三藏記第五、內典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八

抄優婆塞受戒品 ①(日) Shō-u-ba-soku-jū-kai-hon. (支) Chao-yū-pō-sai-shou-chieh-pin. ②一卷 ③疑偽經 ⑦〔參考〕 出三藏記第五、內典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八

抄央崛摩羅經 ①(日) Shō-ō-gutsu-ma-ra-kyō. (支) Chao-yang-chueh-mo-lo-ching. ②二卷 ③疑偽經 ⑦〔參考〕 出三藏記第五、開元錄第一八

抄義足經 ①(日) Shō-gi-soku-kyō. (支) Chao-i-tsu-ching. ②二卷 ③〔參考〕 出三藏記第五、開元錄第一八、貞元錄第二八

抄花嚴經 ①(日) Shō-ke-gon-gyō. (支) Chao-hua-yen-ching. ②一卷 ③舊華嚴經の抄出 ⑦〔參考〕 法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

抄華嚴經 ①(日) Shō-ke-gon-gyō. (支) Chao-hua-yen-ching. ②十四卷 ③疑偽經 ⑦〔參考〕 出三藏記第五、開元錄第一八、貞元錄第二八

抄四諦經要數 ①(日) Shō-shi-tai-kyō-yō-sū. (支) Chao-sū-ti-ching-yao-sū. ②一卷 ③疑偽經 ⑦〔參考〕 出三藏記第五、內典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八

①本書は生死の本源を窮むることは諸佛出世の本懐にあるといひ、三世不可得の本有無作の生死に住すべしと勧め、終りに至つて道業を修して早く三界輪廻の生死界より解脱せよ。一乗世深の妙教を修すべしとす

貞元錄第二八

抄諸佛要集經

①(日)Shō-shō-du-  
tsu-yō-ji-kyō. (支)Ch'ao-chu-fō-yao-chi-  
ching. ②一卷 ③疑偽經 ④(參考) 出  
三藏記第五, 內典錄第一〇, 開元錄第一  
八, 貞元錄第二八

抄諸法無行經

①(日)Shō-shō-hō-  
mu-gyō-kyō. (支)Ch'ao-chu-fa-wu-hsing-  
ching. ②一卷 ③疑偽經 ④(參考) 出  
三藏記第五, 內典錄第一〇, 開元錄第一八,  
貞元錄第二八

抄勝鬘經

①(日)Shō-shō-man-gyō.  
(支)Ch'ao-sheng-man-ching. ②二卷 ③  
疑偽經 ④(參考) 開元錄第一八, 貞元錄  
第二八

抄照明三昧不思議事經

①(日)Shō-shō-myō-san-mai-fu-shi-gi-kyō.  
(支)Ch'ao-chao-ming-san-mei-fu-ssū-ti-  
shih-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④(參考)  
出三藏記第五, 內典錄第一〇, 開元錄第一  
八, 貞元錄第二八

抄成實論

①(日)Shō-jō-jitsu-ton.  
(支)Ch'ao-ch'eng-shih-lun. ②九卷 ③  
疑偽經 ④(參考) 出三藏記第五, 開元錄  
第一八, 貞元錄第二八

抄淨土三昧經

①(日)Shō-jō-do-  
sam-mai-kyō. (支)Ch'ao-ching-tu-san-  
mei-ching. ②四卷 ③疑偽經 ④(參考)  
出三藏記第五, 開元錄第一八, 貞元錄第二  
八

抄胎經

①(日)Shō-tai-kyō. (支)Ch'ao-  
tai-ching. ②三卷 ③疑偽經 ④參

考) 出三藏記第五, 開元錄第一八, 貞元  
錄第二八

抄大乘方等要慧經

①(日)Shō-  
dai-jō-hō-dō-yō-e-kyō. (支)Ch'ao-fa-tai-  
eng-fang-teng-yao-hui-ching. ②一卷  
③疑偽經 ④(參考) 出三藏記第五, 內典  
錄第一〇, 開元錄第一八, 貞元錄第二八

抄頭陀經

①(日)Shō-zu-da-kyō.  
(支)Ch'ao-tou-to-ching. ②二卷 ③疑  
偽經 ④(參考) 出三藏記第五, 開元錄第  
一八, 貞元錄第二八

抄德光太子經

①(日)Shō-tok-ko-  
tai-shi-kyō. (支)Ch'ao-tai-kuang-tai-tzu-  
ching. ②一卷 ③疑偽經 ④(參考) 出  
三藏記第五, 內典錄第一〇, 開元錄第一八,  
貞元錄第二八

抄貧女爲國王夫人經

①(日)Shō-  
hin-nyō-ji-koku-ō-bu-nin-gyō. (支)Ch'ao-  
po-pin-ni-wai-kuo-wang-fu-jen-ching.  
②一卷 ③疑偽經 ④(參考) 出三藏記第  
五, 內典錄第一〇, 開元錄第一八, 貞元錄  
第二八

抄普賢觀懺悔法

①(日)Shō-fu-  
gen-kwan-san-ge-hō. (支)Ch'ao-p'u-hsien-  
kuan-ch'an-hui-fa. ②一卷 ③疑偽經  
④(參考) 出三藏記第五, 內典錄第一〇,  
開元錄第一八, 貞元錄第二八

抄分別經

①(日)Shō-fun-bek-kyō.  
(支)Ch'ao-fen-pieh-ching. ②一卷 ③疑  
偽經 ④(參考) 出三藏記第五, 內典錄第  
一〇, 開元錄第一八, 貞元錄第二八

抄菩薩決定要行經

①(日)Shō-bo-  
p'i-tsu-ketsu-jō-yō-gyō-kyō. (支)Ch'ao-  
p'u-sa-chieh-ting-yao-hsing-ching. 淨行  
優婆塞經, 菩薩決定經 ②十卷 ③疑偽經  
④(參考) 開元錄第一八, 貞元錄第二八

①(日)Shō-bo-satsu-  
ji-kyō. (支)Ch'ao-p'u-sa-ti-ching. ②十  
二卷 ③疑偽經 ④(參考) 出三藏記第五,  
開元錄第一八, 貞元錄第二八

抄菩薩本業經

①(日)Shō-bo-satsu-  
hon-gō-kyō. (支)Ch'ao-p'u-sa-pen-yeh-  
ching. ②一卷 ③疑偽經 ④(參考) 出  
三藏記第五, 開元錄第一八, 貞元錄第二八

抄菩薩本業願行經

①(日)Shō-bo-  
satsu-hon-gō-gwan-gyō-kyō. (支)Ch'ao-  
p'u-sa-pen-yeh-yüan-hsing-ching. ②一  
卷 ③疑偽經 ④(參考) 內典錄第一〇  
抄菩薩本業願行品 ①(日)Shō-bo-  
satsu-hon-gō-gwan-gyō-hon. (支)Ch'ao-  
p'u-sa-pen-yeh-yüan-hsing-pin. ②一卷  
③疑偽經 ④(參考) 出三藏記第五, 內典  
錄第一〇, 開元錄第一八, 貞元錄第二八

抄方等大集經

①(日)Shō-hō-dō-  
dai-jū-kyō. (支)Ch'ao-fang-teng-ta-chi-  
ching. ②十二卷 ③疑偽經 ④(參考)  
出三藏記第五, 開元錄第一八, 貞元錄第二  
八

抄法句譬喻經

①(日)Shō-hō-ku-  
hi-yu-gyō. (支)Ch'ao-fa-chū-p'i-yü-ching.  
②三十八卷 ③(參考) 出三藏記第五, 開  
元錄第一九, 貞元錄第二八

抄法華藥王品

①(日)Shō-hō-ke-  
yaku-ō-hon. (支)Ch'ao-fa-hua-yao-wang-  
pin. ②一卷 ③疑偽經 ④(參考) 出三  
藏記第五, 內典錄第一〇, 開元錄第一八,  
貞元錄第二八

抄法律三昧經

①(日)Shō-hō-risū-  
sam-mai-kyō. (支)Ch'ao-fa-ti-san-mei-  
ching. ②一卷 ③疑偽經 ④(參考) 出三  
藏記第五, 內典錄第一〇, 開元錄第一八,  
貞元錄第二八

抄報恩經

①(日)Shō-hō-on-gyō.  
(支)Ch'ao-pao-en-ching. ②二卷 ③疑  
偽經 ④(參考) 出三藏記第五, 開元錄第  
一八, 貞元錄第二八

①(日)Shō-hō-shaku-kyō.  
(支)Ch'ao-pao-chi-ching. ②一卷 ③失  
譯 ④大寶積經普明華會抄出 ⑤(參考)  
出三藏記第三, 法經錄第二, 仁壽錄第三,  
靜泰錄第三, 開元錄第一六, 貞元錄第二六

抄寶積經

①(日)Shō-hō-shaku-kyō.  
(支)Ch'ao-pao-chi-ching. ②一卷 ③失  
譯 ④大寶積經普明華會抄出 ⑤(參考)  
出三藏記第三, 法經錄第二, 仁壽錄第三,  
靜泰錄第三, 開元錄第一六, 貞元錄第二六

抄摩訶摩耶經

①(日)Shō-ma-ke-  
ma-ya-kyō. (支)Ch'ao-mo-ho-mo-ya-  
ching. ②三卷 ③疑偽經 ④(參考) 出  
三藏記第五, 開元錄第一八, 貞元錄第二八

抄魔化比丘經

①(日)Shō-ma-ke-  
bi-ku-kyō. (支)Ch'ao-mo-hua-pi-chi-  
ching. ②一卷 ③疑偽經 ④(參考) 出  
三藏記第五, 內典錄第一〇, 開元錄第一八,  
貞元錄第二八

抄未曾有因緣經

①(日)Shō-mi-zō-  
un-in-en-gyō. (支)Ch'ao-wei-ts'eng-yu-  
yin-yüan-ching. ②一卷 ③(參考) 出三  
藏記第五, 內典錄第一〇, 開元錄第一八,  
貞元錄第二八

抄妙法蓮華經

①(日)Shō-myō-hō-  
mei-fō-hua-ching. ②八卷 ③疑偽經 ④參

【シ】

ren-gi-kyō (支) Ch'ao-miao-fa-jien-han-ching. ②五十九卷 ③疑偽經 ④【參考】開元錄第一八、貞元錄第二八

抄無爲道經

kyō (支) Ch'ao-wa-wei-tao-ching. ①一卷 ②疑偽經 ③【參考】出三藏記第五、內典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八

抄物

①(日) Shō-moitsu. ②三卷或五卷 ③圓珍(弘仁一—寬平三 A. D. 814—891) 說寬平四、年七八寂) ④【參考】本朝台祖撰述密部書目

抄維摩經

①(日) Shō-yui-ma-kyō. (支) Ch'ao-wei-mo-ching. ②二卷 ③疑偽經 ④【參考】內典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八

抄維摩所說佛國品

①(日) Shō-yui-ma-sho-sutsu-buk-koku-hon. (支) Ch'ao-wei-mo-so-shuo-fo-kuo-p'in. 抄維摩詰所說佛國品 ②一卷 ③疑偽經 ④【參考】出三藏記第五、開元錄第一八、貞元錄第二八

抄維摩方便品

①(日) Shō-yui-ma-hō-ben-bon. (支) Ch'ao-wei-mo-fung-p'in-p'in. 抄維摩詰方便品 ②一卷 ③疑偽經 ④【參考】出三藏記第五、開元錄第一八、貞元錄第二八

抄維摩問疾品

①(日) Shō-yui-ma-mon-shitsu-hon. (支) Ch'ao-wei-mo-wên-chi-p'in. 抄維摩詰問疾品 ②一卷 ③疑偽經 ④【參考】出三藏記第五、開元錄第一八、貞元錄第二八

抄維摩問疾品

①(日) Shō-yui-ma-mon-shitsu-hon. (支) Ch'ao-wei-mo-wên-chi-p'in. 抄維摩詰問疾品 ②一卷 ③疑偽經 ④【參考】出三藏記第五、開元錄第一八、貞元錄第二八

抄樂瓔珞莊嚴方便經

①(日) Shō-taku-yō-raku-shō-gon-hō-ben-gyō. (支) Ch'ao-lo-ying-lo-chuang-g-yen-fang-pien-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④【參考】出三藏記第五、內典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八

松蔭吟稿

①(日) Shō-in-gin-kō. ②存、續群書類從第一三 ③琴叔景越(松蔭) (一文明頃 A. D. 1469—1486—)

松蔭集

①(日) Shō-in-shū. ②一卷 ③琴叔景越(一文明頃 A. D. 1469—1486—) ④【參考】日本禪林撰述書目、禪籍目錄

松蔭三集、三集、續集

①(日) Shō-in-ni-shū-san-shū-zoku-shū. ②六卷 ③存 ④隱元隆琦(文祿元—延寶元 A. D. 1592—1673) ⑤【參考】禪籍目錄

松蔭唯禪師語錄

①(日) Shō-in-yui-zen-ji-go-roku. ②三卷 ③存 ④【參考】禪籍目錄

松蔭老人隨錄

①(日) Shō-in-rō-jin-yui-roku. ②一卷 ③存 ④隱元隆琦(文祿元—延寶元 A. D. 1592—1673) 語、柏巖道節編 ⑤【參考】禪籍目錄

松塙集

①(日) Shō-n-shū. ②【參考】日本禪林撰述書目

松雲宗融禪師語錄

①(日) Shō-un-sō-yū-zen-ji-go-roku. ②二卷 ③存 ④松雲宗融(慶長一四—寬文四 A. D. 1509—1664) 語 ⑤【參考】禪籍目錄

松雲宗融禪師傳

①(日) Shō-un-sō-yū-zen-ji-dan. 圓應寺九代松雲宗融禪師傳 ②一卷 ③存 ④素淵默子撰 ⑤

松翁閱藏雜攷

①(日) Shō-ō-etsu-zō-zak-ko. ②一卷 ③存 ④養鶴徹定(文化一一—明治二四 A. D. 1811—1891) 述 ⑤寫本(京大・一・二〇・一七)

松翁ひとりごと

①(日) Shō-ō-hitori-goto. ②一卷 ③存 ④布施矩道著 ⑤寬政八刊 ⑥帝國(一八九・二六七)

松吟

①(日) Shō-in. 宗要集 ②三卷 ③存 ④善海 ⑤天正七寫 ⑥(谷大、餘丙・二七)

松花集

①(日) Shō-ka-shū. ③存 ④以篤信仲(一寶徳三 A. D. 1451) ⑤【參考】日本禪林撰述書目、禪籍目錄

松花堂上人行業記

①(日) Shō-kawado-shōnin-gyō-go-ki. ②一卷 ③存 ④佐川田昌俊著 ⑤寫本(帝國・一九九・一三七)

松溪集

①(日) Shō-kei-shū. (支) Sung-chi-chi. ②一卷 ③存 ④松溪集 ⑤【參考】朝鮮佛教叢書刊行豫定書目

松源和尚語錄

①(日) Shō-gen-ō-shō-go-roku. (支) Sung-yuan-ho-shang-yū-tu. 松源崇岳禪師語錄、松源禪師語錄 ②二卷 ③存 ④己續二・二四・一

松源崇岳(紹興二—嘉泰二 A. D. 1132—1202) 語、善開編 ⑤元祿三刊 ⑥(龍大、二六七・四・一) 京大藏・一七・一・一九(駒大) 帝國(八二・二五六、特別・三・三四) 五山版(駒大)

松源岳禪師語要

①(日) Shō-gen-gaku-zen-ji-go-yō. (支) Sung-yuan-yō-gaku-zen-ji-go-yō. ②

Ch'an-shih-yü-yao. ③存、己續二・二四・一續古尊宿語要第四 ④宋松源崇岳(紹興二—嘉泰二 A. D. 1132—1202)

①別項、松源崇岳禪師八會の語錄中より、其の語要を編録したものである。其の内容は、上堂示衆の語要、乘拂、小參、普説、頌古、偈頌、佛事の七條を収めたものである。松源崇岳は、處州龍泉松源吳氏に生れ、南宋嘉興二年臨安西湖白蓮精舎に得度し、南宋嘉泰二年八月四日壽七十一にて示寂した。其の略傳は、松源崇岳禪師語錄に附した。陸游の撰に成る塔銘に就て見る可きである。(大久保堅瑞)

松源語錄

①(日) Shō-gen-go-roku. (支) Sung-yuan-yü-tu. 松源崇岳禪師語錄、松源禪師語錄、松源和尚語錄 ②二卷 ③存、己續二・二四・一 ④宋松源崇岳(紹興二—嘉泰二 A. D. 1132—1202) 善開編 ⑤(哲、ゆ・七・左・二九)

松源崇岳禪師語錄

①(日) Shō-gen-sō-gaku-zen-ji-go-roku. (支) Sung-yuan-ch'ung-yo-ch'an-shih-yü-tu. 松源和尚語錄、松源語錄、松源禪師語錄 ③存、己續二・二四・一 ④宋松源崇岳(紹興二—嘉泰二 A. D. 1132—1202) 善開編 ⑤(哲、ゆ・七・左・二九)

松源崇岳禪師語錄

①(日) Shō-gen-sō-gaku-zen-ji-go-roku. (支) Sung-yuan-ch'ung-yo-ch'an-shih-yü-tu. 松源和尚語錄、松源語錄、松源禪師語錄 ③存、己續二・二四・一 ④宋松源崇岳(紹興二—嘉泰二 A. D. 1132—1202) 善開編 ⑤(哲、ゆ・七・左・二九)

松源崇岳禪師語錄

①(日) Shō-gen-sō-gaku-zen-ji-go-roku. (支) Sung-yuan-ch'ung-yo-ch'an-shih-yü-tu. 松源和尚語錄、松源語錄、松源禪師語錄 ③存、己續二・二四・一 ④宋松源崇岳(紹興二—嘉泰二 A. D. 1132—1202) 善開編 ⑤(哲、ゆ・七・左・二九)

松源崇岳禪師語錄

①(日) Shō-gen-sō-gaku-zen-ji-go-roku. (支) Sung-yuan-ch'ung-yo-ch'an-shih-yü-tu. 松源和尚語錄、松源語錄、松源禪師語錄 ③存、己續二・二四・一 ④宋松源崇岳(紹興二—嘉泰二 A. D. 1132—1202) 善開編 ⑤(哲、ゆ・七・左・二九)

松源崇岳禪師語錄

①(日) Shō-gen-sō-gaku-zen-ji-go-roku. (支) Sung-yuan-ch'ung-yo-ch'an-shih-yü-tu. 松源和尚語錄、松源語錄、松源禪師語錄 ③存、己續二・二四・一 ④宋松源崇岳(紹興二—嘉泰二 A. D. 1132—1202) 善開編 ⑤(哲、ゆ・七・左・二九)

松源崇岳禪師語錄

①(日) Shō-gen-sō-gaku-zen-ji-go-roku. (支) Sung-yuan-ch'ung-yo-ch'an-shih-yü-tu. 松源和尚語錄、松源語錄、松源禪師語錄 ③存、己續二・二四・一 ④宋松源崇岳(紹興二—嘉泰二 A. D. 1132—1202) 善開編 ⑤(哲、ゆ・七・左・二九)

名所行發⑩(名庫書)考藏所現⑪ 月年の刊覧⑫ (書考參書釋註)書末⑬ 説解存内⑭ 代年作書⑮ 著書⑯ 缺存⑰ 數巻⑱ (名書)名題⑲ 略略字數

禪師、跋を撰して重刊し。我が國に於ては室町時代刊本、元祿三年六月妙心寺即川師點和尚後序を附して、上刻せし長尾平兵衛刊行本、翌四年尙古堂田中甚兵衛刊行本、寶永七年本、寛政十三年正月、自隱禪師の法嗣峨山慈禪師に嗣いた隱山惟政和尚の序を撰して刊行せし享保元年三月美濃堅相寺藏版の名古屋慶久兵衛刊行本、續藏本等がある。續藏本に依つて其の篇次を示せば、

卷首に、南宋嘉泰三年十月誰令意の序、同年九月法弟黃龍山慶如序、同年(A. D. 1203)十二月八日、河南省汲縣の孟猷の後序を收め、卷上に、平江府陽山徽照禪院語錄(善開、光隆等編)、江陰軍君山報恩光孝禪寺語錄(善開、光隆等編)無爲軍治父山實際禪院語錄(普巖等編)、饒州薦福禪院語錄(光隆等編)。明州香山智度禪院語錄(善開等編)平江府虎丘山雲巖禪院語錄(師範等編)。卷下に、慶元三年六月五日入院臨安府景德靈隱禪寺語錄(道巖等編)。開山顯親報慈禪寺語錄(了能等編)の八會語錄、並に兼拂普說、法語、頌古、贊佛祖、偈頌を收め、卷末に、陸遊の撰述に成る松源崇岳禪師塔銘を收めたものである。

貞治四(A. D. 1365) ①虎關師鍊禪師の法嗣であり、性海靈見禪師と法眷である京都萬壽寺三十二世龍泉冷湮禪師の詩文集である。龍泉和尚は、後醍醐天皇の庶子として、尾州海東郡の某氏に生れ、東福寺海藏院虎關和尚に嗣ぎ、後醍醐、後村上兩帝の歸依を受け、楞伽圓通承天萬壽寺等に歷任し、貞治四年十二月十一日(A. D. 1365)海藏院に示寂したもので、本書には海藏住院に至るまでの諸作を蒐めてある。即ち(一)偈頌數百首。(二)交難、絶交二篇の賦。(三)上海藏先師書その他侍者門人に與つた書十一篇。(四)大敬銘その他鐘銘などの銘五篇。(五)傳照、灘隱、戒菊、大樹、龍松、大山說などの六篇の説とを收めたものである。龍泉和尚は、本書の外に海藏紀年録を編し、虎關の元亨釋書の入藏に就て師の遺志を繼承し、延文五年遂に其の入藏を勸許された美諱の持主である。

①(日)Shō-gen-zen ji-go-roku. (支)Sung-yan-chen-shih-yü. ②松源崇岳禪師語錄、松源和尚語錄 ③二卷 ④存、己續二・二四・一 ⑤宋松源崇岳(紹興二)嘉泰二 A. D. 1132—1202)語 ⑥享和元刊 ⑦(駒大) ⑧(谷大、餘大・六〇三) ⑨松廣寺古文書選 ⑩(日)Shō-kō-ji-ko-mon-jo-sen. (支)Sung-kuang-ssū-ku-wan-shu-hsian. ⑪一卷 ⑫存 ⑬(參考)朝鮮佛教叢書刊行豫定書目 ⑭松廣寺嗣院事蹟碑 ⑮(日)Shō-ko-ji-shi-tō-ji-seki-hi. (支)Sung-kuang-ssū-ssū-yan-shih-chi-pe. ⑯存 ⑰(參考)朝鮮佛教叢書刊行豫定書目 ⑱松廣寺事蹟並全圖 ⑲(日)Shō-ko-ji-ji-seki-narabai-zen-zu. (支)Sung-kuang-ssū-shih-chi & chuan-tu. ⑳一卷 ㉑存 ㉒(參考)朝鮮佛教叢書刊行豫定書目 ㉓松廣寺普照國師甘露塔碑 ㉔(日)Shō-kō-ji-in-shō-koku-shi-kan-ro-to-hi. (支)Sung-kuang-ssū-pu-cho-kuo-shih-kan-ji-ta-pe. ㉕存 ㉖(參考)朝鮮佛教叢書刊行豫定書目 ㉗松山七祖錄 ㉘(日)Shō-zan-shichi-so-roku. ㉙七卷 ㉚存 ㉛寫本(京大藏、一七レ・二九(駒大)) ㉜松山集 ㉝(日)Shō-zan-shū. ㉞存、五山文學全集詩文部第一 ㉟龍泉冷湮(一

松

松

松

松

松

松

松

松

名所行故⑩(名庫書)者顯所現⑪ 月年の刊⑫(書考參書釋註)書末⑬ 説解存内⑭ 年代作著⑮ 香妻⑯ 缺存⑰ 數卷⑱(名書)名題⑲ 號略字數

嶺、俗姓藤原氏、武州川越の人、十二歳伊豆走湯山萬代法師の侍童となり、十四歳薙髮し、建長寺竺仙和尚に参訳す。十六歳叡山で受戒し、序に天龍夢窓に参して従事一年で關東に歸り、淨智寺實翁秀に依り、去りて常陸法雲寺、備中慈光寺、備前、因幡、相模を巡歴訪師参訳し、遂に備後に幽棲、藤原氏の貞徳寺に住す。後伊豆に移り虎杖原に臨濟庵を結び幽棲せしが、康暦元年大衆に招かれて永源寺を董し、止住十年道風大に振ふ。爾來備豆二國の間を往返せしが應永二十四年二月十四日示寂。壽八十八、臘七十二と述ぶ。(紀氏隆眞)

**松老録** ①(日)Shō-ō-roku. ②三卷 ③存 ④〔参考〕禪籍目録

**性惡論** ①(日)Shō-aku-ron. ②一卷 ③存 ④大我(寶永六一天明II A. D. 1709-1788)述 ⑤刊本(正大、一三六・四七)(哲、こ・四・左・二三)

**性員編目鈔** ①(日)Shō-in-hem-hoku-shō. ②二卷 ③存 ④尊雄 ⑤慶安五刊 ⑥龍大(二六五六・I)(正大、一三〇・七九)

**性應大師傳** ①(日)Shō-ō-dai-shi-den. ②二卷 ③存 ④〔参考〕大日本佛教全書續刊豫定書目

**性海一滴** ①(日)Shō-kai-itteki. ②一卷 ③存 ④宗活述 ⑤明治三四刊 ⑥(正大、一七五・五八)

**性海和尚行實** ①(日)Shō-kai-ō-shō-gyō-jiten. 東福四十三世性海和尚行實

②一卷 ③存、續群書類從第九

⑥本書は具に東福四十三世性海和尚行實と云ひ、京都南禪寺靈見禪師(A. D. 1315-1396)の記傳である。其の記述を一瞥するに、和尚諱は靈見、字は性海、自ら不還子と號す。俗姓橋氏、信濃横山の人。十一歳建長寺に得度し、十九才建仁寺清拙に参じて知賓となり、後奈良に華嚴を研ぎ、比叡に台教を學び、更に南禪寺虎關師鎮に請問して俗悟す。康平二年元に渡り通く江の南北を歴遊聞訊し、至正十一年東歸す。既に虎關の遺命により龍泉寺に住し、貞治二年將軍足利義詮に招かれて三聖寺に住したるも、應安元年東福寺に移る。更に天龍、南禪、常光在寺等に歴住し、應永三年病に罹るや遺偈を認め筆を投じて逝く、壽八十有二、臘七十二と記載す。(紀氏隆眞)

**性海儀泐** ①(日)Shō-kai-iki. ②六卷 ③存 ④宗峻峻峰述、今井福山編 ⑤寫本(谷大、餘大、二七一四)大正一四刊(正大、一〇九・二八)(駒大)

**性海靈見遺稿附行實** ①(日)Shō-kai-kei-jin-ko-senkai-jō-jiten. ②存、五山文學全集 ③靈見(號性海別號不還子)(正和四—應永三 A. D. 1315-1396)

④虎關師鎮禪師の法嗣である東福四十三世、天龍十七世、南禪四世に歴住した性海靈見禪師の遺稿を拮拾して本書一卷としたもので、五山文學全集詩文部第二輯に收むる本書は、東福寺大機院藏の寫本によつて東福寺に藏する本書を校訂したものである。卷末に收めた長享三年三月上澁(A. D. 1489)明之永誠の撰に成る性海和尚行實

に依れば、靈見、號は性海、別號不還子と云ひ、信州横山の橋氏に生れ、十一歳鎌倉建長寺に薙髮し、十九歳京都建仁寺清拙清澄和尚に参じ、康永元年二十八歳の秋入元し、在元十年にして、觀應二年三十七歳の五月歸朝し、龍泉令洋和尚を通じて虎關に嗣ぎ、丹州藥山に隠れ、長壽、禪居、興勝に歴住し、貞治二年四十九歳の冬、足利義詮の請に應じて三聖寺に住し、應安元年五十六歳の時、足利義滿の請によりて東福寺に住し、次で天龍南禪に陞住し、晚年東福寺退耕庵に閑坐し、應永三年(A. D. 1396)三月三十一日壽八十二、臘七十二にして示寂したもので、石屏集十卷、同拾遺二卷は散佚して傳らず、僅に本書を殘すのみであると云ふ。従つて本書には、東福住山後の作のみで、永和五年六十五歳の正月に撰した東福開山聖一國師忌齋幹緣疏を始めとして、虎關和尚七周忌座法語並に疏、山門疏、檀越請疏、東福羅漢供飯、三聖寺佛殿棟札及び虎關、剛中、大道和尚等の像贊並に自贊等大約五十餘篇の詩文を蒐めたものである。(大久保堅瑞)

**性學開蒙** ①(日)Shō-gaku-kaimō. ①(支)Hsing-ssiao-kai-meng. ②一卷 ③存 ④明智旭(萬曆二七—永曆九 A. D. 1599-1653) ⑤延寶九刊(龍大)(谷大、餘大、八八五)(哲、ま・二・中・九)天和元刊(京大、一・二四・一・一)

**性學指要** ①(日)Shō-gaku-shi-yō. ①(支)Hsing-ssiao-shi-yō. ②一卷 ③存 ④誠導 ⑤〔参考〕禪籍志卷下

**性起緣起辨** ①(日)Shō-ki-egai. ①(支)Hsing-ki-egai. ②一卷 ③存 ④誠導 ⑤〔参考〕禪籍志卷下

**性空上人傳** ①(日)Shō-kō-shō-nin-den. ②一卷 ③存、群書類從第四 ④本書は播磨書寫山圓教寺開基性空上人(A. D. 910-1007)の傳記である。今其の內容を略述するに、性空は東京(京都)の人、父は橘諸兄六世の孫善根、母は源氏、この夫婦は曾て諸子を難産した經驗に徴し、師胎中に宿るや百方墮胎の術を行ひしも効なく月満ちて師を生む。出生既に奇瑞あり、十歳法華八軸を讀みしが、承平七年父を失ふや母に従ひ日向に下り、天慶八年三十六歳で登嶺受戒し、慈慧僧正に師事教觀を習ひ、後日向に歸り、霧島に庵居し四年の後筑前春振山に登り、辛に晝夜苦修練行せしが、康安四年出で、諸名山を巡歴し、遂に播磨書寫山を下して圓教寺を創め、爾後山を出でず、花山太上法皇寛和二年徵行して上人に法を問ひ、爾來十七年長保四年三月六日重ねて結緣、密に仙駕に命じ、上人行狀を問ひ之を記したる本書と云ふ。而も其の時の狀態を叙して「于時地震。蓋是異相歟」と述べて擲筆し、性空の晩年を誌さざれば、上人在世中に編せるものなるを想像し得。因に續群書類從所載本は朝野群載を以て校正せりと云ふ。(紀氏隆眞)

**性空禪師語錄** ①(日)Shō-kō-shin-zen-ji-go-yōku. ①(支)Hsing-k'ung-chen-ch'an-shih-yü-ku. ②一卷 ③存 ④性空行錄語、趙曉編 ⑤康熙三十六刊(駒大)

⑥依れば、靈見、號は性海、別號不還子と云ひ、信州横山の橋氏に生れ、十一歳鎌倉建長寺に薙髮し、十九歳京都建仁寺清拙清澄和尚に参じ、康永元年二十八歳の秋入元し、在元十年にして、觀應二年三十七歳の五月歸朝し、龍泉令洋和尚を通じて虎關に嗣ぎ、丹州藥山に隠れ、長壽、禪居、興勝に歴住し、貞治二年四十九歳の冬、足利義詮の請に應じて三聖寺に住し、應安元年五十六歳の時、足利義滿の請によりて東福寺に住し、次で天龍南禪に陞住し、晚年東福寺退耕庵に閑坐し、應永三年(A. D. 1396)三月三十一日壽八十二、臘七十二にして示寂したもので、石屏集十卷、同拾遺二卷は散佚して傳らず、僅に本書を殘すのみであると云ふ。従つて本書には、東福住山後の作のみで、永和五年六十五歳の正月に撰した東福開山聖一國師忌齋幹緣疏を始めとして、虎關和尚七周忌座法語並に疏、山門疏、檀越請疏、東福羅漢供飯、三聖寺佛殿棟札及び虎關、剛中、大道和尚等の像贊並に自贊等大約五十餘篇の詩文を蒐めたものである。(大久保堅瑞)

性宗名目私鈔

①(日)Sho-shū-myo  
-noku-shi-sho. 綱目鈔 ②四卷 ③存  
天正九寫(正大、一三〇・五二)寛永八刊(谷  
大、餘大、二六二)(龍大、二六五・六三)  
(哲、七・左・一)

性眞圓智禪師語錄

①(日)Sho-  
shin-en-chi-zen-ji-go-roku. ②一卷 ③  
存 ④觀中中語(康永元一應永一三A.D.  
1394-1406)語 ⑦(參考) 大日本佛教全  
書續刊豫定書目

性善惡論

①(日)Sho-zen-aku-ro.  
(支)Ishing-shan-e-jun. ②六卷 ③存、已  
續二・六・五 ④傳燈述 ⑤明天啓元(A.D.  
1621)

⑥本書は天台一家圓頓の極談たる性具の説  
を儒者の疑問に對して答ふる形體に依つて  
八門を設け、儒佛道三教の人性に關する哲  
學的解釋を論評し天台の性惡説が最も深遠  
幽妙なりと論じたもの。八門とは一、眞如  
不變十界冥伏門。二、眞如隨緣十界差別  
門。三、不變隨緣無差而差門。四、隨緣不  
變差而差門。五、因心本具悉無虧欠門。  
六、果地融通一無所改門。七、隨淨圓修全  
修在性門。八、隨淨圓證舉一全收門。であ  
る。一念三千十界互具の説では一心から十  
界變作すること隨緣不變の義によつて圖示  
し、修性門、因果門では佛祖先哲の因縁を  
述ぶ。四明が山外の學説を破してから山家  
派の性惡論に至つて最も詳説されたといふ  
べきである。香光居士王立毅の序と無盡大  
師傳燈の自序とを卷首に出してある。本書  
の問答體は判溪の金鉉論の故智になつた

ものか。傳燈の傳は新續高僧傳四集(四四  
の四)に收めてあるが寂年七十五歳と記し  
年號を欠く。(田島徳吉)

性相義學必須

①(日)Sho-ō-  
gaku-his-su. ②一卷 ③存 ④權田雷斧  
著 ⑤昭和四刊 ⑥東京豊山宗務所教學部

性相見聞私

①(日)Sho-ō-ken-  
mon-shi. ②一卷 ③存 ④什慶述 ⑤寫  
本(谷大、餘丙、四八)

性相私

①(日)Sho-ō-shi. 天台性相  
私、什慶記抄 ②三卷 ③存 ④快倫註  
⑤寛永二十一(A.D.1644) ⑥正保四刊  
⑦(龍大)

性相大旨

①(日)Sho-ō-tai-shi. ②  
一卷 ③存 ④堀江慶了(一明治三九A.D.  
1906)述 ⑤寫本(谷大)

性相通説

①(日)Sho-ō-tsū-setsu.  
(支)Hsing-ang-t'ung-shuo. ②一卷  
③存 ④明德清嘉靖二五一天啓三A.D.  
1546-1623)述 ⑦(參考) 禪籍志卷下

①同治三寫(龍大、研佛)寫本(龍大、二六二  
九・二〇)

性相融會大旨

①(日)Sho-ō-yū-e-  
tai-shi. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、餘  
大、一一〇)

性天和尙妙心入寺儀註

①(日)  
shō-tan-o-shō-myō-shin-nyū-ji-gi-oku.  
②一卷 ③存 ④寫本(龍大、二六七・六六)

性靈集

①(日)Shō-ryō-shū. 遍照發  
揮性靈集 ②十卷 ③存、弘法大師全集第  
一〇 ④、空海(寶龜五—承和二A.D.774  
—835)述、眞濟(延暦一九—貞觀二A.D.

800—860)編 ⑤遍照發揮性靈集の下を見  
よ ⑥正保二刊(正大、一四三・一四九七)  
(京專)承暦三刊(高、寄、一・五二)明治二  
六刊(正大、一四三・一七一—一七二)(帝  
國)特別・三・二二)

性靈集

①(日)Shō-ryō-shū. 新點袖  
珍性靈集 ②三卷 ③存 ④(帝國一八  
五・一三九)

性靈集絨石鈔

①(日)Shō-ryō-shū  
-kun-seki-shū. ②六卷或十卷 ③存 ④  
果實(徳治元—貞治元A.D.1306—1362)述  
⑤古寫本(京專)

性靈集記註鈔等

①(日)Shō-ryō-  
shū-ki-chū-shū-tō. ②七帖 ③存 ④足  
利時代寫 ⑤(寶龜院)

性靈集聞書

①(日)Shō-ryō-shū-ki-  
ki-gaki. ②七帖 ③存 ④足利時代寫  
⑤(寶龜院)(金剛三昧院)

性靈集老語

①(日)Shō-ryō-shū-ko-  
go. ②四册 ③存 ④(哲、二・右・七)

性靈集私鈔

①(日)Shō-ryō-shū-  
shi-shō. ②七卷 ③存 ④澄榮(天正一四  
—慶安三A.D.1586—1650) ⑦(參考) 眞  
言宗全書刊行豫定目録

性靈集私註

①(日)Shō-ryō-shū-  
shi-cha. 性靈集鈔 ③存 ④足利中期寫  
⑤(寶壽院)

性靈集序科註

①(日)Shō-ryō-shū-  
jō-kiwa-cha. ②一卷 ③存 ④亮汰(元  
和八—延寶八A.D.1622—1650) ⑦(參考)  
眞言宗全書刊行豫定目録

性靈集序講要

①(日)Shō-ryō-shū

-jō-ki-yō. ②一卷 ③存 ④亮汰(元和八  
—延寶八A.D.1622—1650)述 ⑦(參考)  
眞言宗全書刊行豫定目録

性靈集抄

①(日)Shō-ryō-shū-shō.  
遍照發揮性靈鈔 ②十七卷 ③存 ④運  
慶長一九一元祿六A.D.1614—1693)述  
⑤慶安元二(A.D.1648—1649) ⑥性靈  
集便蒙は本書を改作せるもの ⑦(參考)  
諸宗章疏録第二 ⑧(京專)

性靈集抄

①(日)Shō-ryō-shū-shō.  
②十卷 ③存 ④實翁述 ⑤元和七(A.D.  
1621) ⑥(立大、A二〇・一四〇)(京專)  
(哲、二・右・一)(高、一・五二)

性靈集鈔序解

①(日)Shō-ryō-shū-  
shō-jō-ge. ②一册 ③存 ④(哲、二・  
右・六)

性靈集註

①(日)Shō-ryō-shū-cha.  
②七帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)  
⑥(寶壽院)

性靈集梅心口説私鈔

①(日)Shō-  
ryō-shū-bai-shin-ku-setsu-shi-shō. ②五  
卷 ③存

性靈集便蒙

①(日)Shō-ryō-shū-  
ben-mō. 遍照發揮性靈集便蒙 ②十卷 ③  
存 ④運慶(慶長一九一元祿六A.D.1614—  
1693) ⑥性靈集鈔十七卷を改作せるもの  
⑦(參考) 諸宗章疏録第三 ⑧延寶三刊

性靈集便蒙引文考

①(日)Shō-  
ryō-shū-ben-mō-in-mon-ko. ②四卷 ③

存 ①梅園述 ②(参考) 眞言宗全書刊行豫定目錄

性靈集便蒙鈔 ①(日) Sho-ryō-shū ben-mō-shō. ②十七卷 ③存 ④泰普述 ⑤刊本(高大寄・一・五二)(京尊)(哲・一・中二〇)

性靈集補關抄 ①(日) Sho-ryō-shū ho-keisu-shō. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

性靈集文筆私鈔 ①(日) Sho-ryō-shū-mom-pisu-shi-shō. ②五帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

性類抄 ①(日) Sho-ryū-shō. 一言抄 ②二卷或三卷 ③存 ④寫本(谷大、餘小・七〇、餘大・三二三〇)

尚齋先生筆記 ①(日) Shō-sai-sen-sei-nih-ki. ②三册 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(善菩提院)

尚時集 ①(日) Shō-jū-shū. 來々禪子尚時集 ②存、大日本佛教全書第九六梵竺禪師語錄之内 ③梵遷(正應五—貞和四A. D. 1292—1348) ④來々禪子尚時集の下を ⑤見々 ⑥(参考) 日本禪林撰述書目

尚直編 ①(日) Shō-jū-ken. (支) Shang-chih-pien. ②二卷 ③存 ④明空隆(—正統頃 A. D. 1436—1449—) ⑤儒佛道三教の論 ⑥(参考) 禪籍志卷下 ⑦萬曆二八刊(駒大) 寛永一八刊(谷大、餘大・三一六六)(哲、え・七・左・二)(京大、藏・二四・六七)(京尊)(帝國、八二・一・一九一)

尚用補忘記 ①(日) Shō-yō-fu-mō-ki. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

龜院)

承安記 ①(日) Shō-an-ki. ②一卷 ③浄土真宗教典志第二に曰く「京光瀨寺新藏。承安元年至元文六年十一月、記事」云々

承事勝己經 ①(日) Shō-jū-shō-ki. kyō. (支) Ch'eng-shih-sheng-chi-ching. ②一卷 ③失譯 ④出塵經第十四卷の抄出 ⑤(参考) 出三藏記第四、法經錄第五、七壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

承事進退事 ①(日) Shō-jū-shin-tai-no-koto. ②存 ③(寶龜院)

承不同事 ①(日) Shō-fu-dō-no-ko-to. ②一册 ③存 ④淨嚴(寛永一六一元祿一五A. D. 1639—1702)記 ⑤天保一〇寫 ⑥(金剛三昧院)

昌光寺開山德巖和上行實 ①(日) Shō-kō-ji-kai-san-to-ku-gan-wa-to-gyō-jūshū. ②一卷 ③存 ④智巖撰 ⑤(参考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

青岸寺事蹟碑 ①(日) Shō-gan-ji-seki-hi. (支) Ching-yen-sa-shih-chi-pai. ②存 ③(参考) 朝鮮佛教叢書刊行豫定書目

青頸 ①(日) Shō-kyō. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第四七覺禪鈔之内 ④覺禪撰

青頸觀音念誦次第 ①(日) Shō-kyō-kwan-on-nen-jū-shi-dai. ②存 ③寫本(寶龜院)

青頸觀自在念誦儀軌 ①(日) Shō-kyō-kwan-jizai-nen-jū-gi-ki. (支) Ching-kuan-jizai-nien-sung-i-kuai. ②一卷 ③存、大正二〇・四九〇No. 1112、縮餘二、記續一・三・二

青頸觀自在菩薩心陀羅尼經 ①(日) Shō-kyō-kwan-jizai-to-roni-ching. ②一卷 ③存、大正二〇・四八九No. 1111、縮餘二 ④唐不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)撰 ⑤(参考) 大正二〇・四八九No. 1111、縮餘二 ⑥唐不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)撰

して次に陀羅尼を出して不空三藏が陀羅尼の句を釋義されてゐる。終に三面四臂の畫像法と青頸印を説かれる。三面は正面は慈悲照怡の面相、右邊は童子の面相、左邊は猪の面相、首に寶冠を戴き冠中に化無量壽佛あり、四臂とは右第一臂は杖を執り、第二臂は蓮花を把り左第一臂は輪を執り、左第二臂は螺を執り虎皮を楯とす等と説く。(岡田契昌)

青頸觀自在菩薩心陀羅尼經 ①(日) Shō-kyō-kwan-jizai-to-roni-ching. ②一卷 ③存、大正二〇・四八九No. 1111、縮餘二 ④唐不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)撰 ⑤(参考) 大正二〇・四八九No. 1111、縮餘二 ⑥唐不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)撰

青頸觀自在念誦儀軌 ①(日) Shō-kyō-kwan-jizai-nen-jū-gi-ki. (支) Ching-kuan-jizai-nien-sung-i-kuai. ②一卷 ③存、大正二〇・四九〇No. 1112、縮餘二、記續一・三・二 ④金剛智(咸亨二—開元二九A. D. 671—735)譯 ⑤唐開元五—二二三(A. D. 717—735)譯 ⑥金剛頂瑜伽青頸大悲王觀自在念誦儀軌の下を見よ。

青頸觀自在念誦儀軌 ①(日) Shō-kyō-kwan-jizai-nen-jū-gi-ki. (支) Ching-kuan-jizai-nien-sung-i-kuai. ②一卷 ③存、大正二〇・四九〇No. 1112、縮餘二、記續一・三・二 ④金剛智(咸亨二—開元二九A. D. 671—735)譯 ⑤唐開元五—二二三(A. D. 717—735)譯 ⑥金剛頂瑜伽青頸大悲王觀自在念誦儀軌の下を見よ。

青頸觀自在念誦儀軌 ①(日) Shō-kyō-kwan-jizai-nen-jū-gi-ki. (支) Ching-kuan-jizai-nien-sung-i-kuai. ②一卷 ③存、大正二〇・四九〇No. 1112、縮餘二、記續一・三・二 ④金剛智(咸亨二—開元二九A. D. 671—735)譯 ⑤唐開元五—二二三(A. D. 717—735)譯 ⑥金剛頂瑜伽青頸大悲王觀自在念誦儀軌の下を見よ。

青頸觀自在念誦儀軌 ①(日) Shō-kyō-kwan-jizai-nen-jū-gi-ki. (支) Ching-kuan-jizai-nien-sung-i-kuai. ②一卷 ③存、大正二〇・四九〇No. 1112、縮餘二、記續一・三・二 ④金剛智(咸亨二—開元二九A. D. 671—735)譯 ⑤唐開元五—二二三(A. D. 717—735)譯 ⑥金剛頂瑜伽青頸大悲王觀自在念誦儀軌の下を見よ。

青頸觀自在念誦儀軌 ①(日) Shō-kyō-kwan-jizai-nen-jū-gi-ki. (支) Ching-kuan-jizai-nien-sung-i-kuai. ②一卷 ③存、大正二〇・四九〇No. 1112、縮餘二、記續一・三・二 ④金剛智(咸亨二—開元二九A. D. 671—735)譯 ⑤唐開元五—二二三(A. D. 717—735)譯 ⑥金剛頂瑜伽青頸大悲王觀自在念誦儀軌の下を見よ。

青頸觀自在念誦儀軌 ①(日) Shō-kyō-kwan-jizai-nen-jū-gi-ki. (支) Ching-kuan-jizai-nien-sung-i-kuai. ②一卷 ③存、大正二〇・四九〇No. 1112、縮餘二、記續一・三・二 ④金剛智(咸亨二—開元二九A. D. 671—735)譯 ⑤唐開元五—二二三(A. D. 717—735)譯 ⑥金剛頂瑜伽青頸大悲王觀自在念誦儀軌の下を見よ。

青頸觀自在念誦儀軌 ①(日) Shō-kyō-kwan-jizai-nen-jū-gi-ki. (支) Ching-kuan-jizai-nien-sung-i-kuai. ②一卷 ③存、大正二〇・四九〇No. 1112、縮餘二、記續一・三・二 ④金剛智(咸亨二—開元二九A. D. 671—735)譯 ⑤唐開元五—二二三(A. D. 717—735)譯 ⑥金剛頂瑜伽青頸大悲王觀自在念誦儀軌の下を見よ。

青頸觀自在念誦儀軌 ①(日) Shō-kyō-kwan-jizai-nen-jū-gi-ki. (支) Ching-kuan-jizai-nien-sung-i-kuai. ②一卷 ③存、大正二〇・四九〇No. 1112、縮餘二、記續一・三・二 ④金剛智(咸亨二—開元二九A. D. 671—735)譯 ⑤唐開元五—二二三(A. D. 717—735)譯 ⑥金剛頂瑜伽青頸大悲王觀自在念誦儀軌の下を見よ。



①(日)Shō-shūki-dai-kon-gō-ya-sha-byō=ku-ki-mu-hō(支)Ching-se-ta-chin-kang-yaō-chi-yi-kuai-mo-fa. 辟鬼殊法 ②一巻 ③存、大正二一・九九No. 1221 ④唐代空基述

①本書はまた辟鬼殊法とも名づけ、諸の惡魔・惡鬼の障害を摧滅する法を説いたものである。先づ根本印や眞言を出した病魔等を除くためには其の療法を示してゐる。例へば病人に灸する場合には、灸に頂心臍丹田等九の下し場處あることを説き、其處に灸を下すときには眞言五七反の「唱く」行ふものである。

①寫本(寶菩提院) (岡田契昌)  
青池口決 ①(日)Shō-chi-ku-ketsu. ②一巻 ③存 ④證憑記 ⑤應永四寫

青池宗義問書 ①(日)Shō-chi-sin-gi-iki-gaki. 例講問答問書 ②一巻 ③存 ④證憑記 ⑤應永六(A. D. 1399) ⑥寫本(妙法院)

青梅集 ①(日)Shō-bai-shū. (支)Ching-mei-chi. ②一巻 ③存 ④青梅著

①(参考) 朝鮮佛敎叢書刊行豫定目錄  
青白蓮華喻經 ①(日)Shō-byaku-ren-ge-yu-kyō. (支)Ching-pai-lien-hua-yü-ching. ③存、中阿含經第二三(大正一・五十四No. 26, 92)

青面金剛 ①(日)Shō-men-kon-gō. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶菩提院)

青面金剛供 ①(日)Shō-men-kon-gō-ku. ②一帖 ③存 ④寫本(京大、一

二六・小別)  
青面金剛法及入護摩 ①(日)Shō-men-kon-gō-oyobi-ryū-go-ma. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院) (寶菩提院)

青龍阿闍梨臨修觀行 ①(日)Shō-ryū-a-ja-ri-in-jū-kwan-gyō. ②一冊 ③存 ④寫本(京大、日未、五九一)

青龍阿闍梨臨終觀念 ①(日)Shō-ryū-a-ja-ri-in-jū-kwan-nen. ②一紙 ③存 ④鎌倉時代寫 ⑤(寶菩提院)

青龍儀軌 ①(日)Shō-ryū-gi-ki. (支)Ching-ling-i-kuai. 大毘盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏菩提幢標幟普通眞言藏廣大成就瑜伽青龍寺儀軌、青龍軌、青軌 ②三巻 ③存、大正一八・一四三No. 853. 縮餘六、記續二・九・四 ④唐法全集 ⑤大毘盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏菩提幢標幟普通眞言藏廣大成就瑜伽の下を見よ。

青龍權現大事 ①(日)Shō-ryū-gon-gen-dai-ji. ②一巻 ③存 ④明治時代寫 ⑤(寶龜院)

青龍寺阿闍梨臨終行儀 ①(日)Shō-ryū-ji-a-ja-ri-in-jū-gyō-gi. (支)Ching-ryū-ssū-a-shū-ji-in-chung-ling-gi. ②一巻 ③存、大正一八・一七二No. 855. 縮餘四、記續二・九・四

青龍寺軌記 ①(日)Shō-ryū-ji-ki. (支)Ching-ling-ssū-kuai-chi. ②一巻 ③存、大正一八・一七二No. 855. 縮餘四、記續二・九・四

①本書は胎藏法の次第を書いたものであるが、未だ完全な次第には成つて居ない。併し大日經の殆んど全部に亘つて、その法要を一座行法の上に觀じて行かうとする努力は見えてある。次に此の書は八家請來目錄中に見當らないが、青龍寺軌記とある所から考ふるに、惠果の法流を汲む人の手に依つて作られたものだけは明かであるが、それ以上は明言出来ない。弘法大師の胎藏略次第若しくは胎藏梵字次第(全集第二輯)などと比較するに、本書は統一が取れてなく、未だ次第とは成つて居ないのであるから、次第成立の上から見れば、惠果和上が集録されたものでは有るまいかと思はれるが、而も大師の請來錄に出て居ないから、斷定することも出来ない。併し法全阿闍梨以後のものであるとすれば、單に集録したままで、未再治のものと思はせなくはならぬ。

④享保三寫 ⑤(谷大、餘大・九九五) (神林隆淨)

青龍寺軌記 ①(日)Shō-ryū-ji-ki. 國譯青龍寺軌記 ②一巻 ③存、國譯密教經軌部第三

青龍寺求法目錄 ①(日)Shō-ryū-ji-gu-hō-moku-roku. ②一巻 ③存、大正五五・一〇五九No. 2171 ④圓珍(一寛平三A. D. 891)撰

①圓珍は大中九年七月十五日から十一月五日に至る間に青龍寺法全阿闍梨から胎金の大法を傳授し、大阿闍梨位灌頂を開壇した。この時に法全阿闍梨から本を借りて書寫した目錄と曼荼羅道具等の目錄とを圓珍が記し、猶圓珍は後日のため憑據を明確なら

しむるために法全に付嘱狀を記すことを乞ふた。それで法全は親ら卷末に狀を書した。本書はこの時の求法目錄である。

青龍寺新譯經等入藏目錄 (田島徳音)  
①(日)Shō-ryū-ji-shin-yak-kyō-to-nyū-zō-noku-roku. (支)Ching-ling-ssū-hsin-ching-kyō-ju-tsung-mu-ju. ②一巻 ③(参考) 入唐新求聖敎目錄

青龍慈門和尚行錄 ①(日)Shō-ryū-ji-mon-ō-shō-gyō-ronau. ②一巻 ③存 ④慈觀 ⑤享保七刊 ⑥駒大(谷大、餘大・三一八四)

青蓮院宮御領雜記 ①(日)Shō-ren-in-no-miya-go-ryō-zak-ki. ②一巻 ③存 ④寫本(希室、四二三・二八)

青蓮院宮御領圖 ①(日)Shō-ren-in-no-miya-go-ryō-zu. ②一巻 ③存 ④寫本(希室、四二三・二八)

青蓮院宮壬生村御家來先例事 ①(日)Shō-ren-in-no-miya-mi-bu-amara-go-ko-rai-sen-rei-no-koto. ②一巻 ③存 ④進藤爲純(一文化元A. D. 1801) ⑤文化一二、天保一五寫 ⑥希室(一一・二六)

青蓮院門跡系譜 ①(日)Shō-ren-in-mon-zeki-kei-fu. ②一巻 ③存、續群書類從第四補任部之内

①天台宗延曆寺三門跡の一である青蓮院開山行玄大僧正を中心として上は寛慶、廣算、慶範、慶命、遍賢、相應、安惠、慈覺、傳教大師と溯り、下は第二世覺快親王から慈

鎮、良毒、良快、慈源、道覺、最守、尊助、慈禪、道玄、慈實、慈助、慈玄、良助、慈道、行仁、慈深、尊圓、道照、慈真、祐助、尊道、慈濟、道圓、義圓、義快、尊應、尊傳、尊朝、尊純、尊證、親王等の三十三師を乗せてある。其間凡そ五百數十人、宗祖大師以下各師の行蹟を簡明に敘述して居る。行玄大師正は四十七歳のとき牛車御聽を以て名がある。鳥羽天皇第七子覺快法親王に至つて尊貴の枝葉法統を嗣ぐの端を發し青蓮院と稱し台宗三昧流の本寺となつた。慈鎮歌聖住して宗風の振策弘張をした事は誰も知る通りである。又尊圓法親王によつて其筆風今日に名のある栗田流又御家流はその日覺ましうである。

青蓮院門跡皇族御傳 ①(日) Sho-in-mon-jiki-ko-yoku-gu-dan. ② ① 卷 ③ 存 ④ 吉水覺昌編 ⑤ 明治九寫

招魂經 ①(日) Sho-kon-kyō. (支) Chao-hun-ching. ② 一軸 ③ 存 ④ 寶永八、建長八寫 ⑤(寶善提院)

招魂作法 ①(日) Sho-kon-sa-hō. ② 一帖 ③ 存 ④ 足利時代、徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

招魂魄經 ①(日) Sho-kon-paku-kyō. (支) Chao-hun-p'o-ching. 招魂經 ① 魄經 ② 一卷 ③ 疑偽經 ④(參考)法經錄第四、仁壽錄第四、靜泰錄第四、內典錄第一〇、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

招魂法 ①(日) Sho-kon-hō. 招魂法三

寶院流 ② 一册 ③ 存 ④ 寫本(高大、奇一・六五)

招魂法最秘 ①(日) Sho-kon-hō-sa-hō. ② 一括 ③ 存 ④ 徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

招提寺舍利記 ①(日) Sho-tai-ji-shō. ② 一卷 ③ 存 ④ 寫本(正大、一〇三三・五四)

招提寺之圖 ①(日) Sho-tai-ji-no-zu. ② 一枚 ③ 存 ④ 寫本(帝國、一〇八・二〇〇)

招提千歲傳記 ①(日) Sho-tai-sen-naiden. ② 九卷 ③ 存、大日本佛教全書第一〇五、群書類從第一一 ④ 義澄記 ⑤ 元祿一四(A.D. 1701)

⑥ 本書は元祿十四年義澄律師が唐招提寺に於て集計する所の十有五年辛苦の結晶たる律宗の史傳記で、上中下全九卷よりなり、初上の三卷は傳律篇で本山千歲住持傳を載せ、中の三卷は明律篇王臣篇等で一派千歲名律傳を顯はし、下の三卷は自門千歲之雜事を記し、僧員百九十三人、天平勝寶より元祿に至る上下一千年、記述の素意首尾併せて祖道勃興の一助となさんと志し之を集録せりと云ふ。今其の項目を列すれば次の如し。

〔卷上之一〕 傳律篇 (一) 扶桑律宗太祖鑑真大師傳。(二) 第二祖法載和尚傳。(三) 第三祖義靜和尚傳。(四) 第四祖如寶少僧都傳(五) 第五祖豐安僧正傳。(六) 第六祖眞景和尚傳。(七) 第七祖戒勝和尚傳。(八) 第八祖壽高和尚傳。(九) 第九祖增恩和尚傳。(一〇) 第十祖

安設和尚傳。(二) 第十一祖喜寬和尚傳。道靜仁階眞空三大和尚傳。施總尊叡二和尚傳。明哲和尚傳。隆紹實義顯盛三和尚傳。清福豐亮觀澄三和尚傳。昌禪壽延二和尚傳。圓勝豐惠安康三和尚傳。(三) 第十二祖曆懐和尚傳。(四) 第十三祖雲茂和尚傳。(五) 第十四祖戒光和尚傳。(六) 第十五祖一般老徳傳。(七) 第十六祖實範律師傳。(八) 第十七祖藏俊僧正傳。(九) 第十八祖覺慈僧正傳。(十) 第十九祖眞慶律師傳。(十一) 第二十祖戒如律師傳

〔卷上之二〕 傳律篇 (三) 第二十一世(中興第一世)大悲菩薩傳。(四) 第二十二世圓律玄和尚傳。(五) 第二十三世勝順性和尚傳。(六) 第二十四世道廣和尚傳。(七) 第二十五世勤性算和尚傳。(八) 第二十六世了寂證和尚傳。(九) 第二十七世受乘和尚傳。(十) 第二十八世示觀然國師傳。

〔卷上之三〕 傳律篇 (二) 第二十九世禪戒惠和尚傳。(三) 第三十世寂禪圓律師傳。(四) 第三十一世寂心凝和尚傳。(五) 第三十二世禪了眞和尚傳。(六) 第三十三世覺禪惠和尚傳。(七) 第三十四世圓了海和尚傳。(八) 第三十五世仍信智和尚傳。(九) 第三十六世尊空秀和尚傳。(十) 第三十七世靜忍譽和尚傳。(十一) 第三十八世即仙圓和尚傳。(十二) 第三十九世禪一海和尚傳。(十三) 第四十世心光猷和尚傳。(十四) 第四十一世等圓惠和尚傳。(十五) 第四十二世本地宗和尚傳。(十六) 第四十三世宗禪源和尚傳。(十七) 第四十四世禪如慧和尚傳。(十八) 第四十五世了觀助和尚傳。(十九) 第四十六世尊眞智和尚傳。(二十) 第

四十七世惠仁意和尚傳。(四) 第四十八世顯一林和尚傳。(五) 第四十九世惠明宗和尚傳。(六) 第五十世性如源和尚傳。(七) 第五十一世戒圓譽和尚傳。(八) 第五十二世賢如尊和尚傳。(九) 第五十三世良惠和尚傳。(十) 第五十四世良海和尚傳。(十一) 第五十五世源祐和尚傳。(十二) 第五十六世舜盛和尚傳。(十三) 第五十七世寬順英和尚傳。(十四) 第五十八世光忍海和尚傳。(十五) 第五十九世玉英珍和尚傳。(十六) 第六十世光宣憲和尚傳。(十七) 第六十一世智教照和尚傳。(十八) 第六十二世即航海和尚傳。(十九) 第六十三世圓巖周和尚傳。(二十) 第六十四世南溪海和尚傳。(二十一) 第六十五世玉峯和尚傳。

〔卷中之二〕 明律篇 (一) 唐揚州崇福寺祥彦師傳。(二) 唐台州開元寺思託律師傳。(三) 唐仁韓律師傳。(四) 唐法順律師傳。(五) 唐泉州超功寺曇靜律師傳。(六) 唐開元寺法成律師傳。(七) 唐智威律師傳。(八) 唐靈曜律師傳。(九) 唐懷謙律師傳。(十) 唐屋嶋寺空盛雲律師傳。(十一) 唐慧良律師傳。(十二) 唐慧達律師傳。(十三) 唐慧常律師傳。(十四) 唐慧喜律師傳。(十五) 道忠律師傳。(十六) 興福寺榮叡律師傳。(十七) 大安寺普照律師傳。(十八) 賢景僧都傳。(十九) 梵福山善謝傳。(二十) 靈福志忠善頂道緣平徳行忍證傳。(二十一) 唐聖一慧山二律師傳。(二十二) 大安寺善後律師傳。(二十三) 忍基律師傳。(二十四) 常觀慧二律師傳。(二十五) 惠新眞法二律師傳。(二十六) 法智道欽行濟三律師傳。(二十七) 安祇施平戴榮泰演四律師傳。

〔卷中之三〕 明律篇 (二) 生駒山大聖竹

林寺信願遍大俗都傳。(二)京兆大通寺開山  
廻心空律師傳。(三)城州法園寺開山中道守  
律師傳。(四)戒壇院實相律師傳。(五)橋  
寺慶運律師傳。(六)大安寺禪慧律師傳。  
(七)三輪山五智院乘心意律師傳。(八)白毫  
寺思運律師傳。(九)長谷往生院入阿律師  
傳。(十)極樂寺賢明濟律師傳。(十一)海龍王  
寺證覺忍律師傳。(十二)靜慶寂惠二律師傳。  
(十三)大智院禪忍律師傳。(十四)光臺寺理性律  
師傳。(十五)性遠覺鑑律師傳。(十六)增福寺眞  
照律師傳。(十七)室生寺中興忍空律師傳。  
(十八)眞言院道月然律師傳。(十九)下野州藥師  
寺中興密嚴律師傳。(二十)倫海律師傳。(二十一)泉  
州久米田寺圓戒爾律師傳。(二十二)戒壇院十達  
國師傳。(二十三)生馬山竹林寺教願律師傳。  
(二十四)戒壇院了心無律師傳。(二十五)稱名寺湛容  
律師傳。(二十六)戒壇院盛譽律師傳。(二十七)戒壇  
院照玄律師傳。(二十八)招提寺照遠律師傳。  
(二十九)室生寺眞海律師傳。(三十)招提寺源聖國  
師傳。(三十一)同淨律師傳。(三十二)淨心律師傳。  
(三十三)性通律師傳。(三十四)雪心聖地覺乘通證四  
律師傳。(三十五)戒壇院普一國師傳。(三十六)竹林  
寺眞賢律師傳。(三十七)招提寺賢盛律師傳。  
(三十八)招提寺詮秀律師傳。(三十九)法金剛院上順  
律師傳。(四十)安養院尊貞律師傳。(四十一)招提  
寺春海律師傳。(四十二)招提寺英祐律師傳。  
(四十三)招提寺行賢律師傳。(四十四)招提寺空泉律  
師傳。(四十五)招提寺良泉律師傳。(四十六)招提寺  
祐雅律師傳。(四十七)大覺寺泉秀律師傳。(四十八)  
壬生寺祐海律師傳。(四十九)法金剛院觀景律師  
傳。(五十)大龍寺實祐律師傳。(五十一)安養庵智  
空稱律師傳。

招、昭

〔卷中之三〕

(一)王臣篇 (1)聖武皇帝傳。(2)新田  
部親王傳。(3)孝謙皇帝傳。(4)廢帝傳。  
(5)眞人元開傳。(6)四條皇帝傳。(7)大  
相國道家公傳。  
(二)居士篇 (1)軍法力傳。(2)潘仙童  
傳。(3)善聽傳。(4)寶最傳。(5)慈禪上  
人傳。  
(三)尼女篇 (1)智首尼傳。(2)光明后  
傳。(3)轉男教圓傳。(4)正法寺開山信如  
傳。

〔卷下之一〕 殿堂篇 (一)寺基。(二)金  
堂。(三)講堂。(四)東塔。(五)西塔。(六)開山  
堂。(七)絹索堂。(八)禮堂。(九)彌陀堂。(十)  
沙彌堂。(十一)法起堂。(十二)不動堂。(十三)彌  
勒堂。(十四)文珠堂。(十五)地藏堂。(十六)大日  
堂。(十七)東宮。(十八)西宮。(十九)南宮。(二十)  
北宮。(二十一)僧堂。(二十二)庫院。(二十三)經藏。  
(二十四)寶藏。(二十五)鼓樓。(二十六)鐘樓。(二十七)舍利  
殿。(二十八)戒壇堂。(二十九)東室。(三十)西室。  
(三十一)北室。(三十二)浴室。(三十三)西井殿。(三十四)尊  
靈殿。(三十五)僧廁。(三十六)開山塔。(三十七)西廂。  
(三十八)迴廊。(三十九)山門。(四十)中門。(四十一)四方  
築地。(四十二)別院。

〔卷下之二〕 舊事篇  
〔卷下之三〕 (一)舊跡篇。(二)靈寶篇。  
(三)靈像篇。(四)法事篇。(五)校院篇。(六)撰  
述篇。(七)封祿篇。(八)辨訛篇。(九)遺疑篇。  
(十)異說篇。(十一)拾遺篇。(十二)連名篇

招提千歲傳續錄

①(日) Sho-tai-  
sen-zai-ten-soku-toku. ②存、大日本佛  
(紀氏隆眞)

教全書第一〇五

⑤元鏡 ⑥寶曆七(AD. 1737)  
⑦本書は寶曆七年元鏡の撰する所で、義澄  
の招提千歲傳記以後の律宗記傳史を述べた  
ものである。其の内容の主要項目を摘録せ  
ば左の如し。  
(一)系脈一照峰律師以來。(二)各院近來之  
住持 (三)英範以來藏松院住持 (四)教學  
院歷代 (五)能滿院歷代 (六)德園院歷代  
(七)彌勒院歷代 (八)圓光院歷代 (九)法  
華院歷代 (十)照山晃大千州二長老傳

昭覺寺志

①(日) Sho-ke-ji-shi.  
重修昭覺寺志 ②八卷 ③存 ④刊本(正  
大、一〇三、六八)  
(紀氏隆眞)

昭慶律寺志

①(日) Sho-kei-ri-  
ji-shi. (支) Chao-king-ri-  
寺志 ②十卷 ③存、武林掌故叢編第  
四 ④篆玉  
⑤書題原本は大昭慶律寺志と大字を冠す。  
本書は杭州西湖の昭慶律寺の寺志である。  
内容左の如し。先づ  
原序 乾隆七年淨慈沙門篆玉  
重刻大昭慶律寺志序 乾隆二十九年  
吳樹虛  
寺圖

卷一より

卷一より卷十まで類を分つこと左の如し。  
盛典、興建、舊蹟、淨社、戒律、軌儀  
僧伽、游集

此等は杭州地方の代表的寺院の一なれば、  
やがて此地方の佛教の研究に、殊に近世佛  
教の研究に貴重なる一資料である。杭州

地方が宋以來は殊に支那都市中繁榮の隨一  
に數へられしこと、また佛教の一中心地た  
りしことより、その重要性を知るべきであ  
る。(塚本善隆)

昭穆作述決

①(日) Sho-moku-  
作述決 ②一卷 ③存、眞宗全書第五二  
④道振(安永二—文政七 A.D. 1773—1824)  
⑤眞宗列祖の法門の綱格を簡明に述べたる  
もの、即ち列祖の教義、旨歸は同なれども  
施設に異なるものあり、その法義同にして  
釋相を異にせる點を、依經通別門、對絕傍  
正門、引願多少門、眞假具略門、願體行信  
門の五門に分別して論述してある。昭穆は  
儒學に於ては宗廟のことをいふ、著者はと  
りもつて列祖の意味となし、その法義の  
秘決を述作するとの意を顯はすのである。  
本書は原漢文であるが孫弟了嚴は「同複辨」  
を作り和文にてこれを複述してある。  
明治二五刊(前田慧雲の序あり)

昭和新纂國譯大藏經

①(日) Sho-  
wa-shin-san-koku-yaku-dai-  
四十八卷 ②存 ③東方書院編 ④國譯大  
藏經の下を見よ ⑤昭和三—七刊 ⑥東京  
東方書院

昭和法寶總目錄

①(日) Sho-wa-  
ho-bō-so-moku-  
大正一切經刊行會編  
①(第一卷) ②大正新脩大藏經總目錄。  
③(大正新脩大藏經一覽) ④大正新脩大藏  
經勘同目錄。⑤大正新脩大藏經譯目録



〔附印度諸論師著作目錄〕。〔五〕大正新脩大藏經索引目錄。〔六〕宮内省圖書寮一切經目錄(一卷)。〔七〕東寺經一切經目錄(一卷)。〔八〕南禪師經藏一切經目錄(一卷)。〔九〕上醍醐寺藏一切經目錄(二卷)。〔一〇〕知恩院一切經目錄(一卷)。〔一一〕安吉州恩溪法寶齋禪院新藏經目錄(二卷)。〔一二〕平江府嶺砂延聖院新藏經目錄(二卷)。〔一三〕正倉院御物聖語藏一切經目錄(二卷)。〔一四〕石山寺一切經目錄(二卷)。〔一五〕東寺一切經目錄(二卷)。〔一六〕神護寺五大堂一切經目錄(一卷)。〔一七〕御譯大藏經目錄(一卷)。〔一八〕如來大藏經總目錄(一卷)。〔一九〕燦煌本古逸經論章疏并古寫經目錄(一卷)。〔二〇〕日本奈良時代古寫經目錄(一卷)。〔二一〕第二卷(二)三藏三藏總目錄(三卷)。〔二二〕大藏目錄(三卷)。〔二三〕唐本一切經目錄(三卷)。〔二四〕三藏山輪藏目錄(二卷)。〔二五〕至元法寶劫總錄(十卷)。〔二六〕杭州路餘杭縣白雲宗南山大普寧寺大藏經目錄(四卷)。〔二七〕大明三藏聖教北藏目錄(四卷)。〔二八〕藏版經直畫一目錄(一卷)。〔二九〕大明三藏聖教南藏目錄(一卷)。〔三〇〕大清三藏聖教目錄(五卷)。〔三一〕日本武州江戶東叡山寬永寺一切經新刊印行目錄(五卷)。〔三二〕黃檗藏目錄。〔三三〕大日本校訂縮刻大藏經目錄(一卷)。〔三四〕大日本校訂縮刻大藏經目錄(一卷)。〔三五〕大日本續藏經目錄(四卷)。〔三六〕扶桑藏外現在目錄(一卷)。〔三七〕大藏經綱目提要錄(十三卷)。〔三八〕大藏聖教法寶標目(十卷)。

〔昭和四刊〕。〔三九〕東京大正一切經刊行會 **星宿劫千佛名經** ①(日) Sho-shu-ku-gō-sen-butsu-myō-kyō. (大) Hsing-hsin-chih-tien-to-ming-ching. 未來星宿劫千佛名經、集諸佛大功德山經 ②一卷 ③存、大正一四・三八No.18 縮寫三、六一・六、383長、南56長、元500長、明北503長、清503長、慶394己、天399己、指65己、法387跡、明南397長、Ni.47 ④失譯 ⑤未來星宿劫千佛名經の下を見よ。 ⑥刊本(谷大、餘丙・八一)

**星宿字印形契明集** ①(日) Sho-shuku-jin-kyō-gei-myō-shū. ②存 ③寫本(寶龜院)

**星宿屬生人等次第** ①(日) Sho-shuku-zoku-shū-nin-to-shū-dai. ②存 ③寫本(寶龜院)

**星宿等印明** ①(日) Sho-shuku-to-in-myō. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫

④(寶龜院)

**星遍口鈔** ①(日) Shō-hen-ku-shō. ②一卷 ③存 ④道教(正治二—嘉禎二)A. D. 1200—1236)記 ⑤天保四寫 ⑥(高大、寄・一・六四)

**星曼荼羅種子** ①(日) Shō-man-da-ra-shū-ji. ②一帖 ③存 ④寫本(高大、寄・一・五四)

**省庵法師語錄** ①(日) Shō-an-hō-shi-go-roku. (支) Sheng-an-fa-shih-yü-lu. ②二卷 ③存、已續二、一四、四 ④清影際清(一乾隆五一A. D. 1786—)重訂

⑤天台の紹曇法師より靈峰四世の記萌を受け、世人より蓮宗九祖と目された鳳山梵天講寺省庵實賢法師の淨土關係の語要を編録したものである。省庵は江蘇省常熟の

人、字思齊、諱實賢、省庵と號した。清康熙二十四年八月八日(A. D. 1685)に生れ、十五歳にして薙髮し、苦修鍊行、三觀十乘の旨を明らかに性相の學に曉通し、永福普慶海雲梵天の諸寺に歷住し、清雍正十二年四月(A. D. 1737)五十歳にして示寂した人で、其の語要は、先に弟子の際本編録し正因刻行せるものを、清乾隆五十一年元日(A. D. 1783)彭際清重訂して行ひ、後、清道光十九年三月(A. D. 1839)書禪寺浦法師の重刊の業成り貝塘跋を撰して行ひ、後、清同治十二年三月(A. D. 1873)江蘇省邦上の種瓜道人悟慧は、張悟基、陳悟候の助縁を得て梓行した。(本書序跋參照)續藏本に據つて、其の内容を見るに、卷首に、清乾隆五十一年元日。彭際清の序、清同治十二年三月悟慧の序、同年立秋日張悟基の序、同十一年十二月八日陳悟候の序を收め、卷上に省庵法師の代表的著述たる、勸發菩提心文、涅槃會發願文を始めとして、念佛警策、警世偈、然指問辯、念佛著慶辯、念佛規約、淨業堂規約等三十七篇を收め、卷下に同じく代表作たる勸修淨土詩一百八首を始めとして辭世の偈に至る十六篇を收め、卷末附録として、清乾隆十年九月重陽日(A. D. 1745)同學の西庵律然法師の撰に成る省庵法師傳、卷尾に清道光十九年三月貝塘の跋を收めたものである。

⑥乾隆五一刊 ⑦(京大、藏・一七三・一五) (龍大、二六八一・九七) (大久保堅瑞)

**省發心要** ①(日) Shō-hos-shin-yō. ②一卷 ③存 ④雲居希膺雲居發心省要 ⑤一卷 ⑥存 ⑦雲居希膺

(天正一〇—萬治二)A. D. 1582—1659) ⑧〔參考〕禪籍目錄

**相國寺供養記** ①(日) Shō-koku-ji-kyō-ki. ②一卷 ③存、群書類從第一五輯四三四卷、新校群書類從第一九卷四三四 ④東坊城秀長(延元三—應永一八)A. D. 1338—1411) ⑤明德三(A. D. 1392)八月二十八日

⑥本書は、後小松天皇の明德三年八月二十八日、將軍義滿が願主と成つて行はれた萬年山相國寺の佛殿上棟供養の次第を、參議東坊城秀長の記す所である。此の供養の盛儀と將軍の威勢が、路頭云、縦云、横、棧敷在、左在、右。都鄙群集而如堵。綺羅充滿而成、市。車不得廻、人無所顧。畏、威而屈伏、低頭而拜見。光華照眼。感有動、心者乎。云々の記載に於て窺はれる。尙末尾に、當時相國寺の住持たりし空谷明應の國師號謙退の事の特記してゐる。本書は、その奥書にある如く、中原家傳本、泉涌寺戒光寺本、天海僧正所持本、内閣文庫所藏古寫本等と異本極めて多し。(不破幹雄)

**相國寺舊記** ①(日) Shō-koku-ji-ku-ki. 萬年山本寺塔頭末寺事實 ②一卷 ③存 ④寫本(駒大)

**相國寺御八講記** ①(日) Shō-koku-ji-go-hak-ko-ki. ②一卷 ③存 ④〔參考〕禪籍目錄

**相國寺建立封疆記** ①(日) Shō-koku-ji-kon-ryū-ki-kyō-ki. ②一卷 ③存 ④〔參考〕禪籍目錄

**相國寺住持名簿** ①(日) Shō-koku

ji-jū-ji-me-i-bo. ③三卷 ④存 ⑤(參考) 禪籍目録

相國寺塔頭興慶記 ①(日) Sho-koku-jū-tō-ku-yō-ki. ②一卷 ③存

相國寺塔頭附末派略記曆代記 ①(日) Sho-koku-jū-tō-chn-tsu-ketari-ma-tsu-ha-ryak-ki-rke-dai-ki. ②一卷 ③存

相國寺塔供養記 ①(日) Sho-koku-jū-tō-ku-yō-ki. ②一卷 ③存、群書類從第一五輯四三四卷、新校群書類從第一九卷第四三四卷 ④一條經詞(正平一三一應永二H.A.D.1358-1418)記 ⑤應永六(A.D.1399)九月

⑥本書は、應永六年九月十五日に北山殿義滿が、寶篋院義詮の三十三回忌に當り追善の爲め行ひし相國寺大塔供養の次第を、一條經詞の記録せしものである。最初に、歴代帝王の崇佛の事蹟を一老人の談話の聞書として略述し、次いで當日の供養の有様を精細に叙述してゐる。就中、此度の大塔供養は建久六年の東大寺供養の例に准じて、一千僧を請ぜられ、准御齋會の宣下があつたこと、その歸還の際にも、かの建久供養の時の萬燈會の例に任せて路傍に萬燈を掲げしめたこと記してゐるあたり注意を惹く所である。更に又文中、「御幸行幸の時も、かやうにある事とかや」と感嘆の辭が見えるが、當時稍もすれば潜越を敢てした義滿の行事として今回の供養の盛觀の程が俾はれる。(不破幹雄)

相國寺堂供養記 ①(日) Sho-koku-jū-tō-ku-yō-ki. ②一卷 ③存 ④明德三寫 ⑤帝國(一一三・二四七)帝室、鷹(四二・二五)

消夏錄 ①(日) Sho-ka-roku. ③存 ④東本願寺分立に就て記す。⑤寫本(龍大、別置)

消災延壽藥師懺法 ①(日) Sho-sai-en-jū-yaku-shi-sam-bō. ②三卷 ③存 ④刊本(京大藏・一八・六)

消災軌 ①(日) Sho-sai-ki. (支) Hsiao-tsu-kuai. 藥師琉璃光如來消災除難念誦儀軌、藥師消災儀軌 ②一卷 ③存、大正一九・二〇No. 922(縮餘11)續一・三・一

④唐(弘道元一開元一五A.D.683-727)撰 ⑤藥師琉璃光如來消災除難念誦儀軌の下を見よ。

消災吉祥經 ①(日) Sho-sai-ki-chi-jō-kyō. (支) Hsiao-tsuai-chi-hsiang-ching. 熾盛光大威德消災吉祥陀羅尼經、大威德消災吉祥陀羅尼經、消災經 ②一卷 ③存、大正一九・三三七No. 963(縮潤六、二一六・二、明北1006N、清1005N、明南1065思 ④唐不空(神龍元一唐曆九A.D.705-774)譯

⑤熾盛光大威德消災吉祥陀羅尼經の下を見よ。

消災吉祥經直說 ①(日) Sho-sai-ki-chi-jō-kyō-jiki-setsu. 消災妙吉祥陀羅尼經直說 ②一卷 ③存 ④西山瑞方(天和三・明和六A.D.1683-1769)述 ⑤明和六刊 ⑥(京大、日大木・九四)哲・く・一・右・二七(龍大、二四一八・一〇二)

消災經 ①(日) Sho-sai-kyō. (支) Hsiao-tsuai-ching. 熾盛光大威德消災吉祥陀羅尼經、大威德消災吉祥陀羅尼經、消災吉祥經 ②一卷 ③存、大正一九・三三七No. 963(縮潤六、二一六・二、明北1005N、清1005N、明南1065思、Nj. 1010 ④唐不空(神龍元一唐曆九A.D.705-774)譯 ⑤熾盛光大威德消災吉祥陀羅尼經の下を見よ。

消災經 ①(日) Sho-sai-kyō. (支) Hsiao-tsuai-ching. 大威德金輪佛頂熾盛光如來消除一切災難陀羅尼經、佛頂消除一切災難陀羅尼經、消除災難經 ②一卷 ③存、大正一九・三三八No. 964(縮潤六、二一六・二、明北1004N、清1004N、麗1179視、法1091相、明南1065思、Nj. 1009 ④失譯 ⑤大威德金輪佛頂熾盛光如來消除一切災難陀羅尼經の下を見よ。

消災經記 ①(日) Sho-sai-kyō-ki. (支) Hsiao-tsuai-ching-ki. ②二卷科一卷 ③靈鑑述 ④(參考) 新編諸宗教藏總錄第一

消災經疏 ①(日) Sho-sai-kyō-sho. (支) Hsiao-tsuai-ching-shu. ②一卷 ③福客述 ④(參考) 新編諸宗教藏總錄第一

消災經疏 ①(日) Sho-sai-kyō-sho. (支) Hsiao-tsuai-ching-shu. ②一卷 ③靈鑑述 ④(參考) 新編諸宗教藏總錄第一

消災經鈔 ①(日) Sho-sai-kyō-shō. (支) Hsiao-tsuai-ching-chō. ②二卷科一卷 ③福客述 ④(參考) 新編諸宗教藏總錄第一

消災妙吉祥陀羅尼經直說 ①(日) Sho-sai-ki-chi-jō-kyō-jiki-setsu. 消災妙吉祥陀羅尼經直說 ②一卷 ③存 ④西山瑞方(天和三・明和六A.D.1683-1769)述 ⑤明和六刊 ⑥(京大、日大木・九四)哲・く・一・右・二七(龍大、二四一八・一〇二)

消除一切災障寶髻陀羅尼經 ①(日) Sho-jo-is-sai-sai-shō-hō-kei-da-ra-ni-kyō. (支) Hsiao-ch'u-i-chieh-tsuai-chang-pao-chi-to-lo-ni-ching. 寶髻陀羅尼經 ②一卷 ③存、大正二一・九一六No. 1400(縮成一二)二一五・五、北1244聲、南1245聲、元1239聲、明北880臨、清880臨、麗1233高、天1223聲、明南903夙、Nj. 885 ④宋法賢(一咸平四A.D.1001)譯

⑤佛、阿難に告ぐ、寶髻と名づくる陀羅尼あり、これ昔觀照と名づくる佛世界の觀自在如來の授け玉ふ所、若し誦持し、書寫せば所作心に隨ふ、故に隨求と名づく。天帝釋、阿修羅に退散せられし時、此の咒を誦して阿修羅を降伏せりと、次いで寶髻陀羅尼を説き、その功德を説いて曰く、此の陀羅尼を誦持せば阿修羅のみならず、一切天龍乃至部多、吠多摩等衆生を惱亂する者は害を爲し能はず、又飢饉、疾疫、天没等を除き、財寶を得、眷屬増盛するを得べし。これ除障法を説くものなり。(坪井德光)

消除一切閃電障難隨求如意陀羅尼經 ①(日) Sho-jo-is-sai-sen-den-shō-nan-zui-gu-nyo-i-da-ra-ni-kyō. (支) Hsiao-ch'u-i-chieh-shan-tien-chang-i-nan-sui-ch'u-ju-i-to-lo-ni-ching. 隨求如意經、消除障難隨求陀羅尼經 ②一卷 ③存、大正二一・九一八No. 1402(縮成八、

己一五・二、北119侯、南136侯、元129侯、明北79忠、清73忠、麗116隸、天1235輩、法1231兵、至728夙、明南501忠、天798 ①宋施護(—太平興國五A. D. 980—)譯

①佛、舍衛國に在し、過去如來所説の消除一切閃電障難隨求如意陀羅尼經を説いて言く、東方に阿伽曩、南方に舍多曷、西方に放光明、北方に燉那摩尼と名づくる電あり。一切閃電を發せざらしむるには捺囉弭孛眞言を書き彼處に安置すべしとてこの陀羅尼を説き玉ふ、その時聖觀自在菩薩また捺囉弭孛眞言を説く(佛所説の眞言と異なる)。次に金剛手祕密主は無能勝の眞言及びその功德を説き、大梵天王は梵天難摩陀羅尼を、帝釋天主は金剛坐明を、四天王は無怖畏眞言を説き、次で佛また娑嚩嚩龍王乃至百光龍王等の我慢貢高心を止息せんが爲に眞言及びその功德を説き玉ふ。本經は所謂の雷除の咒を説けるものであつて、これ障除法を説くものなり。(坪井徳光)

**消息** ①(日) Sho-soku. ②二通 ③存、日蓮宗々學全書法華宗部之内 ④日信 ⑤法華宗(舊稱本成寺派)派祖日陣の上足日信の消息文「與本禪寺書」二通を收む。日陣の流義により本迹勝劣の義を述べてある。

**消息** ①(日) Sho-soku. ②三十七通 ③存、日蓮宗々學全書法華宗部之内 ④日陣(曆應二—應永二—A. D. 1339—1405) ⑤法華宗(舊本成寺派)派祖日陣の消息文。「與圓光房書、與大賢房書」以下三十七通を收む、本迹勝劣の義、末法適時の要法は南

無妙法蓮華經に限る、唱題の一行に萬行萬善を攝す、南無妙法蓮華經ときへ唱へれば南無日蓮大聖人と唱ふるに及ばず等の陣門獨特の教觀の要義を窺ふに足る好資料で、假字書で解し易く書かれてある。

**消息** ①(日) Sho-soku. ②九通 ③存、日蓮宗々學全書 ④日存(應安三—文安四—A. D. 1268—1447) ⑤法華宗(舊本成寺派)派祖日陣の門下日存の消息文。「與妙法房書、與善式部丞書」以下計九通を收む、本迹勝劣の義、末法應寺の要法は本門壽量品の題目に限る等の義を説いたものである。(馬田行啓)

**消息阿字觀** ①(日) Sho-soku-kyō-kyō. ②一卷 ③存 ④道範(元暦元—建長四—A. D. 1184—1252) ⑤說建長四、年七五歳) ⑥延寶六刊 ⑦(谷大、長保・二一六)(龍大、二六六七・一一)(哲、け・二・中・一六)(正大、一四八・六七)

**消息五帖** ①(日) Sho-soku-kyō-kyō. ②五卷 ③存、大正八三・七七一No. 2668「蓮如上人全集、眞宗聖典、眞宗假名法典卷上」 ④蓮如集(應永二—一明應八—A. D. 1415—1499) ⑤述

①淨土眞宗教典志第一に曰く「初帖十五通。第二帖十五通。第三帖十三通。第四帖十五通。第五帖二十二通。合八十通。寛正元年庚辰至明應七八年。凡四十年間。中興蓮如上人著。眞弟福増院圓如僧都纂集。又於五帖中。擇二十四首別爲一卷。此亦有新舊兩本之差六條八條等異。」云々。御文の下を見よ。

**消息集** ①(日) Sho-soku-shū. 御消息集、親鸞聖人御消息集 ②一卷 ③存、大正八三・七二二No. 2660 ④親鸞門侶編

**消息狀** ①(日) Sho-soku-jō. ②一卷 ③存、空海實録五—承和二—A. D. 774—835) ④(參考) 諸宗章疏録第三

**消息帖** ①(日) Sho-soku-jō. ②一卷 (前後闕) ③存、慈雲尊者全集第一五 ④慈雲飲光(享保三—文化元—A. D. 1718—1803) ⑤尼衆のために書せられたる習字手本である ⑥自筆本(河内長榮寺)

**消息法語** ①(日) Sho-soku-hō-go. ②存、日本各宗祖師遺文之内

**消毒藥辨** ①(日) Sho-doku-yaku-ben. ②一卷 ③實道編 ④天明三(A. D. 1783) ⑤(參考) 淨土眞宗教典志第二

**笑庵了悟禪師語要** ①(日) Sho-an-ryō-go-zen-jō-go-yō. (支) Hsiao-an-lyao-wu-chi-an-shih-yō-gao. ②存、己續二・二四・一續古尊宿語録第四 ③宋代笑庵了悟

④密庵成傑禪師の法嗣である南岳下十八世、笑庵了悟禪師の上堂語要七條、讚一首を輯めたものである。笑庵は、江南蘇州府吳縣姑蘇の人、天童の密庵成傑に嗣いで、杭州靈隱寺に化を揚げた。僧集續傳燈錄第二卷、續燈存稿第二卷等に收むる語要は、本書の上堂語の終に收められた、昨日栽茄子、今日種冬瓜、云々の語要である。従つて本書に輯められたるものは、散逸せる笑庵了悟の語要の多くを蒐めたものと言ふことが出来る。(大久保堅瑞)

**笑隱語録** ①(日) Sho-in-go-roku. (支) Hsiao-yin-yō-ri. 廣智全悟禪師語録、笑隱大訴禪師語録 ②二卷 ③存、己續二・二六・二 ④元笑隱大訴(至元二—至正四—A. D. 1284—1344) 語、延俊等編 ⑤五山版(駒大)

**笑隱大訴禪師語録** ①(日) Sho-in-dai-sō-zen-jō-go-rōku. (支) Hsiao-yin-tai-sai-an-shih-yō-ri. 廣智全悟禪師語録、笑隱語録 ②二卷 ③存、己續二・二六・二 ④元笑隱大訴(至元二—至正四—A. D. 1284—1344) 語、延俊等編 ⑤五山版(駒大)

**笑雲入唐記** ①(日) Sho-un-n'yō-ki. ②一卷 ③存 ④笑雲瑞訴記 ⑤(參考) 禪籍目録

**笑語辨訛** ①(日) Sho-go-ben-kwa. ②三卷 ③存 ④摩尼菴著 ⑤寫本(帝國、一一一・一九〇)

**笑醉論** ①(日) Sho-sui-ron. ②一冊 ③存 ④寫本(高大、寄・一・二四)

**笑禪錄** ①(日) Sho-zen-roku. ②一卷 ③存、五朝小説第二四 ④寫本(京大、藏・一七シ・二一)(駒大)(帝國、七六・一一)

笑調理論

①(日) Sho-cho-ri-ron. ②三卷 ③存 ④頓成(寛政七—明治二〇 A. D. 1793—1887)述 ⑤寫本(谷大、宗丙、三大)

笑堂和尚語錄

①(日) Sho-to-o-ri-yō-ō-ko. (支) Hsiao-tang-ho-shang-yi-hi. ②一卷 ③存 ④明代笑堂明哲語、超略等編 ⑤康熙四刊 ⑥駒大)

笑評破塵問對

①(日) Sho-ryō-ha-jin-mon-tai. ②一卷 ③存 ④藤谷幸惠編 ⑤明治三刊(谷大、宗小、一〇四)龍大、一七七、五、明治三九刊(谷大、宗洋、五四二)

笑評破塵問對鐵鎚

①(日) Sho-ryō-ha-jin-mon-tai-tekusui. 増補笑評破塵問對鐵鎚 ②一卷 ③存 ④大村大念 ⑤明治三〇刊 ⑥(谷大、宗洋、三五八、五四一)

笑旨訣

①(日) Sho-mo-keisu. ②一卷 ③存 ④大圓(—安永六 A. D. 1777—)述 ⑤歸命本願訣を破したるもの。⑥参考) 淨土真宗教典志第二 ⑦寛政二刊 ⑧(龍大、一七五、四九)(谷大、宗大、一三二四)

笑卿臂

①(日) Sho-ryō-ji. ②六卷 ③存、真宗全書第五九 ④法霖(元祿六一—寛保元 A. D. 1693—1741)述 ⑤享保一六 (A. D. 1731)

華嚴風潭

①華嚴風潭が「念佛往生明導割」を著はして淨土門を罵倒せしに對して、法霖は「淨土折衝篇」二卷を作りて之を詳破するところあり、然るに老將風潭は意氣屈せず「雷斧」二

笑、祥

卷を作りて應戰を試みた、仍つて法霖は雷斧何するものぞ、牛車に向ふ蟬螂の疥我慢に過ぎずと一笑に附し、肝腑なきまでに辯駁せるものが六卷の本書である。實に本書は輕妙の筆致をもつて宗要の精髓を闡明にし、博引廣證到らざるなく、流石の猛將風潭をして後に瞻若たらしめたものであつて、法霖畢世の學殖を傾倒せるものである。その後風潭は本書に對して「却卿臂」といふ小冊子を編したが、もとより比肩すべくも非ず、本書の雄大に比すれば殆ど一顧の價値もなきものである。

⑦(参考) 淨土真宗教典志第二 ⑧正崇寺藏版(立大、A三〇・一五〇)享保一八刊(正大、一五七・一三)(龍大一六三・三)明和五刊(谷大、宗大、四二二)(正大、一五七・一五) (大原性實)

祥符法寶錄

①(日) Sho-ryō-hō-bō-roku. (支) Hsiang-fa-fa-pao-lu. 大中祥符法錄、祥符錄 ②二十一卷或二十二卷 ③缺 ④翰林學士楊億等編 ⑤宋大中祥符六 (A. D. 1013)

⑥本錄は具には大中祥符法寶錄と云ひ、又略して祥符錄とも云ふ。至元法寶勸同總錄卷第十に「祥符法寶錄二十二卷、翰林學士楊億等編」と記載して居るものが即ちこれである。本錄は現存しないものであるけれども、佛祖統紀卷第四十四を見ると、大中祥符六年(A. D. 1013)の條下に「八月兵部侍郎譯經潤文官趙安仁、奉詔編修大藏錄成、凡二十一卷、賜名大中祥符法寶錄、仍賜御製序云、自太平興國以來凡譯成經律論

四百十三卷、祕書監楊億光梵大師推淨等編次、又請以兩朝御製佛乘文集編入大藏、下勅褒許」とあるから、宋太祖の太平興國年より今祥符六年に至る。大約三十餘年間に譯出された經律論四百十三卷を整理したものであることが知られる。大藏聖教法寶標目第一には、祥符錄所紀經律論として、大乘經一百四十部二百九十卷三十帙、律一部一卷、論一十一部一十九卷三帙、小乘經四十四部六十九卷七帙、律五部五卷一帙、總數二百部(實數は二百一部)三百八十四卷を記載し、至元錄又これと全く同一の部数を擧げて居る。従て、本錄は此部数だけの經典を前代既入藏の法寶に附加したわけである。本錄附加の經典卷数は、統紀は四百十三卷と云ひ、法寶標目及び至元錄は三百八十四卷として、その間二十九卷の相違が存するが、これは至元錄等の一々の内容に當れば自ら決せられる問題である。猶、統紀は本錄を二十一卷となし、至元錄は二十二卷となして居るか、今のところ何れが正しいのか決定出来なす。

⑦(参考) 大藏聖教法寶標目第一、至元錄第一、第一〇、佛祖統紀第四四 (林屋友次郎)

祥流印信口訣興雅及有勢集記

①(日) Sho-ryū-in-jin-ku-kyaku-hō-gō-on-yō-i-yū-sai-shū-ki. ②二帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

祥流折紙傳授日記

①(日) Sho-ryū-ori-kami-den-jū-ni-ki. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

祥流折紙傳授用聞書

①(日) Sho-ryū-ori-kami-den-jū-yō-ki-gaki. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

祥流口

①(日) Sho-ryū-ku. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

祥流許可印明秘訣

①(日) Sho-ryū-ko-ka-in-myō-hi-keisu. ②一帖 ③存 ④寫本(金剛三昧院)

祥流最秘口

①(日) Sho-ryū-sai-hi-ku. ②一帖 ③存 ④興雅記 ⑤徳川時代寫 ⑥(寶龜院)

祥流授與記

①(日) Sho-ryū-ryū-ji. ②一軸 ③存 ④省快(貞和元—應永二 A. D. 1345—1416)記 ⑤永享八寫 ⑥(高大、奇、一・六四)

祥流抄護摩次第

①(日) Sho-ryū-shō-mo-shi-dai. ②一帖 ③存 ④貞享五寫 ⑤(寶龜院)

祥流抄曼荼羅供次第座

①(日) Sho-ryū-shō-man-da-ra-ka-shi-dai-hira-za. ②一帖 ③存 ④(金剛三昧院)

祥流鈔諸尊目錄

①(日) Sho-ryū-shō-shō-som-moku-roku. ②一册 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

祥流尊法目錄

①(日) Sho-ryū-sō-hō-moku-roku. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

祥流祕部傳授記

①(日) Sho-ryū-hi-bu-den-jū-ki. ②二帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

祥流臨終大事

①(日) Sho-ryū-in

ju-tai-ji. ②一裹 ③存 ④徳川時代寫  
⑤寶龜院)

從容錄 ①(日) Sho-yō-roku. (支)  
Tsun-g-jung-in. 天童覺和尚頌古從容庵錄、  
從容庵錄 ②符、大正四八・二六No.3004、  
己續二・三・四、禪學大系祖錄部第二 ④  
宋正覺宏智(元祐六一相興二七 A. D. 1091  
—1157)頌古、元萬松行秀(一承安頃 A. D.  
1196—1200)評唱、離知錄、靈瑞校 ①萬  
松老人評唱天童覺和尚頌古從容庵錄の下を  
見よ ①嘉定一六、萬曆三五及文久二刊(駒  
大)光緒七刊(京大、藏・一七・二五)刊本  
(京大、藏・一七・二四)谷大、餘大、六六  
四)

從容錄 ①(日) Sho-yō-roku. 増註從  
容錄 ②一卷 ③存 ④古田梵仙註 ⑤明  
治一九刊 ⑥(駒大)

從容錄解說 ①(日) Sho-yō-roku-ge  
-se-sai. 天童頌古略解 ②一卷 ③存 ④如  
宗了派述 ⑤(參考) 禪籍目錄

從容錄空解 ①(日) Sho-yō-roku-ku  
-ge. (支) Tsun-g-jung-in-k-ung-chieh. ②  
一卷 ③存 ④文政一一寫 ⑤(駒大)

從容錄頌解 ①(日) Sho-yō-roku-  
-gan-ge. ②一卷 ③存 ④默相述 ⑤  
(參考) 禪籍目錄

從容錄講話 ①(日) Sho-yō-roku-ko  
-wa. ②一卷 ③存 ④高田道見(一大正  
一一A. D. 1923)著 ⑤明治三三刊 ⑥(駒  
大)

從容錄講義 ①(日) Sho-yō-roku-ko  
-gi. ②二卷 ③存 ④曹洞禪講義第四一五

①山田孝道(文久三一昭和三 A. D. 1863—  
1928)述 ②大正七刊 ③東京光融館

從容錄講話 ①(日) Sho-yō-roku-ko  
-wa. ②二卷 ③存 ④秋野孝道、安藤文  
英共著 ⑤大正一一刊 ⑥東京丙午出版社

從容錄講話 ①(日) Sho-yō-roku-ko  
-wa. ②一卷 ③存 ④神保如天著 ⑤大  
正三刊 ⑥東京無我山房

從容錄講話附普觀坐禪儀講話  
①(日) Sho-yō-roku-ko-wa-suketari-tu-  
kwan-za-zen-gi-ko-wa. ②二卷 ③存  
④日置默然、久内大賢共著 ⑤大正七刊  
⑥(駒大)

從容錄國字解 ①(日) Sho-yō-roku  
-koku-ji-kai. 鳥飛魚行 ②二十三卷 ③存  
④本光語道(一安永二 A. D. 1773)述 ⑤(參  
考) 禪籍目錄

從容錄事考 ①(日) Sho-yō-roku-ji-  
-ko. ②六卷 ③存 ④(參考) 禪籍目錄

從容錄事略 ①(日) Sho-yō-roku-ji-  
-ryaku. 從容錄鈔 ②十七卷 ③存 ④松雲  
宗融(慶長一四—寛文四 A. D. 1609—1664)  
述 ⑤寛文年間刊 ⑥(帝國)二二八・一七  
八)

從容錄鈔 ①(日) Sho-yō-roku-shū.  
②三卷 ③存 ④寫本(駒大)

從容錄接骨錄 ①(日) Sho-yō-roku  
-sus-shi-roku. 宏智禪師頌古接骨錄 ②二  
卷 ③存 ④鼎三(即一)・江崎接航編 ⑤明  
治二二刊 ⑥(駒大)

從容錄註釋 ①(日) Sho-yō-roku-  
-chū-shaku. ②一卷 ③存 ④獨游稿仙述

⑦(參考) 禪籍目錄  
從容錄通解 ①(日) Sho-yō-roku-tsu  
-ge. 禪學通解全書第一從容錄通解 ②一卷  
③存 ④神保如天著 ⑤大正四刊 ⑥(駒  
大)

從容錄提唱略記 ①(日) Sho-yō-  
-roku-tei-sho-ryak-ki. ③存 ④(參考)  
禪籍目錄

從容錄提唱錄 ①(日) Sho-yō-roku  
-tei-sho-roku. ③存 ④風樹大賢(寶曆八  
—文政五 A. D. 1758—1822)述 ⑤(參考)  
禪籍目錄

從容錄筆削 ①(日) Sho-yō-roku-  
-his-saku. ②一卷 ③存 ④梵丁、洞門述  
⑤天保五刊 ⑥(駒大)(首、け・七・左・二三)  
(谷大、餘大・二八・二四)

從容錄百畫餅 ①(日) Sho-yō-roku  
-hyaku-gwa-bei. ②一卷 ③存 ④大塚  
洞外著 ⑤大正一四刊 ⑥(駒大)

從容錄辨解 ①(日) Sho-yō-roku-  
-ben-ge. ②二卷 ③存 ④傳尊天桂慶安  
元一享保二〇 A. D. 1648—1735)述 ⑤明治  
二九刊 ⑥東京森江書店

從容錄略鈔 ①(日) Sho-yō-roku-  
-ryaku-shō. ②三卷 ③存 ④天保七寫  
⑥(駒大)

清河常泰圓覺祖師塔碑 ①(日)  
Shō-kai-jō-tai-en-gaku-so-shi-tō-hi. (支)  
Ching-ho-or-ang-tai-yuan-chüeh-i-tsu-  
shih-ta-pei. ③存 ④(參考) 朝鮮佛教叢  
書刊行豫定書目

清虛集 ①(日) Shō-ko-shū. (支) Chi-  
ng-ko-shū. ③存 ④(參考) 朝鮮佛教叢  
書刊行豫定書目

ng-tsu-chi. ②一卷 ③存 ④休靜撰 ⑤  
〔參考〕 朝鮮佛教叢書刊行豫定書目

清珠集 ①(日) Shō-jū-shū. (支) Chi-  
ng-ju-shū. ②一卷 ③存、己續二・一五・  
一 ④清幻空治兆撰 ⑤同治九(A. D.  
1870)

⑥本書は清末の高僧、古靈山・普光寺・淨願  
社主幻空治兆が諸家の淨土法語を節録した  
るもので、定にその名の如く清珠集であり、  
同時に又警愾集でもある。その凡例に「往  
生方便有二門、一曰觀想、二曰持名、是集專  
主持名而略觀想者、衆生心亂、觀難成  
就、且此土根機持名甚易、有願必生故耳。」  
と云へるもの、以て本書の意趣を知るべき  
である。その目次には自己佛、祕密法門を  
初め二百二十有餘則を收め、引用書目だけ  
でも「淨土十疑論(智者)」「念佛三昧寶王論」  
(飛錫)など三十有餘を算する。尚ほ附録に  
葆光普元の「結社文(淨願社)」、美蓮性湛の  
「發願文」、霽雲圓明の「募緣疏」がある。卷  
首には精樹樓主人少荷居士の序、法幢山人  
虛舟堂德眞の序、並びに編者治兆の自序が  
あり、卷尾には門人六然居士淨信の跋、佛  
國翁三沙の跋が添へてある。(前田聰瑞)

清淨威儀經 ①(日) Shō-jō-i-gi-kyō.  
(支) Ching-ching-wei-i-ching. ②一卷  
⑥根本説一切有部毘奈耶雜事第十六卷の抄  
出 ⑦(參考) 開元錄第一七、貞元錄第二六

清淨經 ①(日) Shō-jō-kyō. (支) Chi-  
ng-ching-ching. (田) D. 29. Pāsāṅka S ③  
存、長阿含經之内(大正一・一 No. 1. 17)

清淨經 ①(日) Shō-jō-kyō. ③存、現



代意譯根本佛教聖典叢書第一卷長阿含經鈔  
羽溪了諦、林五邦共譯

清淨觀世音菩薩普賢陀羅尼經

①(日) Shō-jō kwan-ze-on-bo-satsu-tu-gen-da-ra-ni-kyō(支)Ch'ing-ching-kuan-shih-yin-p'u-sa-p'u-hsien-to-lo-ni-chi-ng.(梵)Samanabhadra dharaṇī(藏傳)(藏)Hhags-pa kun-tu-bzang-po shes-bya-bai gzus 觀音普賢陀羅尼、清淨觀世音普賢經 ②一卷 ③存、大正二〇・二一No. 1038、縮成一〇・二一・五、北455葉、南468葉、元623葉、明北490行、清490行、麗565讀、天守21葉、法443讀、至643葉、明南160行、No. 494 ④唐智通(一貞觀元一永徽四A. D. 627—653)譯

⑤概要、王舍城に於て觀世音、一切衆生利益の爲に、佛の許可を得て月光佛より受くる所の普賢陀羅尼、結界陀羅尼、奉請陀羅尼を説き、次で普賢陀羅尼の功德を説いて曰く、此の呪を誦する者は夜半に觀世音自ら爲に身を現じ、行者見已て勝地陀羅尼三摩地を得、四方に四佛、十方に諸佛如來の光明色相を見たまつり、命終して淨佛土に生ずと。觀世音、普賢陀羅尼を説き免れば同座の九十二俱胝の菩薩は所願満足し、首楞嚴等一切三昧、七寶三摩提、放光三摩提、大海水三摩提、騰空三摩提、出沒三摩提等の無量三昧を得。此の呪名を聞き、誦持する者は永く地獄等の惡趣に墮すること無しと。次に誦持者常見の釋迦、普賢、觀世音、毘陀天女等の畫像法、入壇及び供養法を説く。

本經は普賢及び觀音法を説けるものなり。異譯、不空譯、觀自在菩薩說普賢陀羅尼經あり。本經と比較するに叙述の順序に不同あり。又不空譯には畫像、入壇、供養法を説かず。開元錄第八に曰く、永徽四年(A. D. 653)總持寺に於て譯すと。

⑦(參考)開元錄第八 (坪井德光)

清淨願心破邪顯正義

①(日) Shō-jō-gwan-shin-ha-ja-ken-shō-gi. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、宗大・一七五)

清淨華院記錄拔鈔

①(日) Shō-jō-ke-in-ki-ri-ki-ri-oku-das-shō. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一五四、四七)

清淨華院誌要

①(日) Shō-jō-ke-in-shū-ya. ②一卷 ③存、淨土宗全書第二〇

淨華院編

⑤明治四四(A. D. 1911) ①本書は京都市二條にある淨土宗大本山清淨華院の院要記録を抜抄編集せるものにして宗祖法然の七百年遠忌記念に出版せるものを、大正二年補訂せるものである。第一沿革、第二歴代、第三古文書、第四什賣の四章に收めてゐる。第一沿革の項下に於ては清和天皇の觀願に依り貞觀年中御所御構内に創建せる經過并に院沿革の大略を叙し、殊に明治に至るまで幾度かの宮中の御外護の様を特筆して、清淨殿たる同院の面目を示し、第二歴代の項下に於ては開山慈覺大師より第六十九世賢融に至る略歴を擧げ、第三古文書の項下に於ては光明寺制法以下、繪旨、書狀、朱印、目錄等の二十餘部を列ね、第四什賣の項下に於ては僧像骨像十八、佛畫繪圖二十八、眞蹟古書二十

八、寶物重器二十六等の寺寶稀品を擧げてゐる。

要之本書は淨華院の手近なる案内書とも云ふべく、特にその編纂は近時なるを以てその叙述の如く大様の院誌を窺知する事が出来ると思ふ。

清淨居士子度人經

①(日) Shō-jō-ko-ji-shi-do-nin-gyō(支)Ch'ing-ching-chū-shih-tō-tu-fa-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④(參考)開元錄第一八、貞元錄第二八 (森本眞順)

清淨金剛宗淵四度授決辨聞抄

①(日) Shō-jō-kyō-kōn-gō-shū-en-shi-do-ju-ke-sū-ben-non-shō. ②一卷 ③存 ④覺寶記 ⑤寫本(藥樹院)

清淨精進無上眞諦大比丘慧法經

①(日) Shō-jō-shō-jim-mu-jō-shin-tai-dai-bi-ku-o-ho-kyō(支)Ch'ing-ching-ching-chin-wu-shang-chēn-tai-pi-chū-hui-fa-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④(參考)武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

清淨心經

①(日) Shō-jō-shin-gyō(支)Ch'ing-ching-hsin-ching. ②一卷 ③存、大正一七・七四九No. 803、已續一・一・四、麗500號 ④宋施護譯 ⑤太平興國五(A. D. 980—)

①本經は極めて短かく、大正藏經で言へば一頁の三分の一にも足らぬ程である。思想的に見れば阿含經的のもので、阿含類にも入れるべきものであらうが、阿含中には同類の經は見當らない。次に本經の内容は

經名の示す如く、心を清淨ならしむることを説いてゐる。即ち清淨心を得る爲には五法を斷じ七法を修すべきである。五法とは貪欲・瞋恚・昏沈睡眠・掉悔・疑の五蓋であり、七法とは擇法覺支等の七覺支である。而して清淨心とは心解脫と慧解脫とを指し、心解脫を障ふるは食染汚であり、慧解脫を妨ぐるは無明染汚である。以上の染汚を除くことによつて、心解脫を得れば身作證と名づけ、慧解脫を得れば無學と名づけ、乃至苦の邊際を盡すことが出来る。故に修學すべしと結んでゐる。(水野弘元)

清淨毘尼方廣經

①(日) Shō-jō-bi-ni-hō-kō-gyō(支)Ch'ing-ching-pi-ni-fa-ng-kuang-ching(藏)Hhags-pa kun-rd-sob dan don-dam-paii bden-pa bstan-pa shes-bya-ba theg-pa chen-pohi-mdo. 清淨毘尼經、毘尼方廣經、清淨毘奈耶方廣經 ②一卷 ③存、大正二四・一〇七五No. 1489、縮列二、二一七・二、北552作、南555作、元549作、明北1096初、清1096初、麗546念、天548作、指305念、法303念、至1195儀、明南1289從、No. 1101 ④後秦鳩摩羅什譯 ⑤弘始二二一四(A. D. 402—412)

①方廣大乘の淨戒を説けるもの、寂調伏音天子に對する文殊の説法の形相になつてゐる。經中、毘尼の意義を説く所と、聲聞毘尼と菩薩毘尼との相異を説く所とは、明らかに戒であるが、その他の人生について如實知見を開くことを説く部分も、毘尼の意義を、煩惱を調伏し、煩惱を知るが爲の故に毘尼と名づく」とするによりて、亦戒と

名所行發⑩(名庫書)表顯所現⑪ 月年の刊載⑫(書考參書釋註)書末⑬ 說解存内⑭ 代年作著⑮ 著書⑯ 佚存⑰ 數卷⑱(名書)名題⑲ 號略字數

して眺むべきである。聲聞と菩薩との毘尼の相異は、十七種の對比で説かれてゐるが實は兩者の生活態度の比較である。中には聲聞を貶して菩薩を揚ぐるものもある。此經の異本に寂調音所問經一卷(宋法海譯)、文殊師利淨律經一卷(西晉竺法護譯)がある。此經を羅什譯とするは法上録が始めで、開元録第十二、貞元録第二十二以下それを襲用するが、法經録第五、靜泰録第一、内典録第六は竺法護譯とする。しかし法護は淨律經を譯してゐるから、羅什譯とするが正し。

〔参考〕三寶紀第一三 (大野法道)

清淨毘尼方廣經 ①(日)Shō-jō-ji-ni-hō-kō-gyō. 國譯清淨毘尼方廣經 ②

存、國譯一切經律部一二 ③大野法道譯

清淨法行經 ①(日)Shō-jō-kō-gyō-kyō. (支)Ching-ching-fa-hsin-ching. ②

一卷 ③失譯 ④疑偽經 ⑤〔參考〕出三藏記第四、法經録第二、三寶紀第四、仁壽録第四、内典録第一、開元録第一八、貞元録第二八 ⑥奈良朝現在一切經疏目錄1765

清淨法身毘盧遮那心地法門成

就一切陀羅尼 ①(日)Shō-jō-hos-shim-bi-ru-sha-na-shin-ji-hō-mon-jō-ju-is-sai-da-ra-ni. (支)Ching-ching-fa-shen-pi-lu-che-na-hsin-ti-fa-meh-cheng-chin-i-chieh-to-lo-ni. 清淨法身毗盧遮那心地法門成就一切陀羅尼三種悉地、毘盧遮那別行經 ②一卷 ③存、大正一八・七

七六No.899(續)一・三・五 ④寫本(龍大、別置)

清淨法身毘盧遮那心地法門成就一切陀羅尼三種悉地 ①(日)Shō-jō-hos-shim-bi-ru-sha-na-shin-ji-hō-mon-jō-ju-is-sai-da-ra-ni-san-shu-shic-chi. (支)Ching-ching-fa-shen-pi-lu-che-na-hsin-ti-fa-meh-cheng-chin-i-chieh-to-lo-ni-san-chung-lsi-ti. 毘盧遮那別行經、清淨法身毘盧遮那心地法門成就一切陀羅尼 ②一卷 ③存、大正一八・七

七六No.899(續)一・三・五 ④毘盧遮那佛、蓮華藏世界に在し、百千億化身の釋迦佛の爲に心地戸羅淨行法門の行じ難き所以及び此の法門の功德を説きたまひ、釋迦佛聞き已り本源世界に至り、一切菩薩乃至鬼神等に向ひ此の法門により作佛すべしと説く、時に忿怒金剛。執金剛出でて三種悉地乃至大悉地を成就する相を釋迦佛に問ひ、こゝに於て釋迦佛は俱に毘盧遮那佛の前に至りて是を問ふに毘盧遮那佛は爲に心地神呪を説きたまふ。毘盧遮那佛説き已るや、忽然として滅して清淨法界同一身に入る。釋迦も文殊、普賢、觀音、彌勒、金剛藏の五菩薩と俱に法界同一眞體に入り、此處に於て佛、五菩薩の爲に持心地神呪法門軌則、威儀悉地の相、三部の神呪及び精勵心呪を説く。時に觀世音は三種悉地を求むる相を問ひ、佛は上悉地の相を説き、次に文殊の爲に中悉地を、又觀世音の爲に下悉地を説く。次に普賢の爲に。陀羅尼に惡鬼神、治病救業生苦、滅重罪及び破地獄苦等を説く所以を明す。時に觀世音は糧食乏少の爲に菩提心を退轉する者の爲に諸天厨

神呪、軌則、功德を説き。金剛藏王は三部の呪を持し而も未だ成就者を防護せん爲に呪を説くに釋迦佛は五菩薩を讚歎し、毘盧遮那佛は此の經の流布の功德を説きたまふ。

本經は經録には毘盧遮那別行經、大毘盧遮那三種悉地法、清淨毘盧遮那三種悉地等と云ふ。又これ別行經鈔上に蘇悉地中最極成就法也と云へる如く蘇悉地法を説ける者なり。

①別行經鈔二卷、(日本大藏經密經部章疏下二) ②寫本(京大、藏・一六・一)

清淨法身毘盧遮那心地法門成就一切陀羅尼三種悉地 ①(日)Shō-jō-hos-shin-bi-ru-sha-na-shin-ji-hō-mon-jō-ju-is-sai-da-ra-ni-san-shu-shic-chi. 國譯清淨法身毘盧遮那心地法門成就一切陀羅尼三種悉地 ②存、國譯一切經密教部第三 ③神林隆淨譯

清淨本覺問者ノ草 ①(日)Shō-jō-hon-gaku-mon-ja-no-so. ②一帖 ③存

德川時代寫 ④(黃龜院)

清信士阿夷扇持經 ①(日)Shō-shin-ji-a-i-sen-ji-kyō. (支)Ching-hsin-shih-a-i-shan-chih-ching. ②一卷 ③失譯 ④生經第五卷の抄出 ⑤〔參考〕出三藏記第四、法經録第四、仁壽録第三、靜泰録第三、第四、開元録第一六、貞元録第二

六

清辨護法空有諍論 ①(日)Shō-hen-go-hō-ku-u-jō-ton. 空有成不成諍論

②一卷 ③〔參考〕東城傳燈目錄卷下

清辨量決 ①(日)Shō-ben-ryō-ke-itsu. (支)Ching-pien-liang-chieh. ②一卷 ③〔參考〕東城傳燈目錄卷下、注進法相宗章疏

清涼遺芳 ①(日)Shō-ryō-i-hō. ②一卷 ③存 ④名和宗瀛(天保六一明治二七 A. D. 1835—1894)編 ⑤明治一七刊(谷大、宗大、二二七三)(龍大、一五〇二・一九七)明治二六刊(谷大、宗大、一三一一)(帝國、一〇・一五二)

清涼譚 ①(日)Shō-ryō-dan. ②一卷 ③存 ④辻森要眼(慶應三一昭和五 A. D. 1867—1930)藤谷義宗共編 ⑤明治二六刊

⑥(谷大、宗洋、七四)(龍大、研眞)

唱經堂聖人千案 ①(日)Shō-kyō-dō-shō-nin-sennan. ②存、唱經堂叢書之内 ③寫本(帝國、二二四・二二三)

唱題勸發抄 ①(日)Shō-dai-kwan-potsu-shō. ②一卷 ③存 ④日奥述 ⑤寫本(正大、一八四・二〇)

唱題抄見聞 ①(日)Shō-dai-shō-ken-mon. ②一卷 ③存 ④辰述 ⑤寫本(立大、D・〇・二四五)

唱題抄略要 ①(日)Shō-dai-shō-ryaku-yō. ②一卷 ③存 ④寫本(立大、A・〇・二・九七)

唱傳禪師詩集 ①(日)Shō-den-zen-i-shi-shū. ②一卷 ③存 ④〔參考〕禪籍目錄

唱道鈔 ①(日)Shō-dō-shō. ②一卷 ③存 ④澄意集 ⑤寫本(眞如藏)

唱導撮要

①(日) Sho-do sansu-yo. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一〇五・七四)

唱導選

①(日) Sho-do sen. 兒僧手引唱導選 ②二卷 ③存 ④續幾 ⑤天明五刊 ⑥(龍大、一〇五・七五)

唱導轍

①(日) Sho-do tetsu. ②一卷 ③存 ④慧麟(天明八—明治二A. D. 1788—1869)述 ⑤安政三刊 ⑥(龍大、一〇五・七六)

唱讀指南

①(日) Sho-doku-shi-nan. ②一卷 ③存 ④玄智景耀(享保一九—寛政六A. D. 1734—1794)述 ⑤安永二(A. D. 1773)

淨土真宗教典志

①(日) Sho-do sen. ②一卷 ③存 ④玄智景耀述。記。正信偈和讃口口五帖消息唱讀法。并附六首和讃念佛器譜。云々

唱讀集

①(日) Sho-do-shu. ②三卷 ③存 ④寛文二刊 ⑤(立大、A. O. 八・二三・一〇二)(哲、ふ・一・中・九)(京大、一・二六・二七)

唱法華題目鈔

①(日) Sho-hok-ke-dai-moku-sho. ②一卷 ③存 ④日蓮聖人御遺文之内、日蓮聖人全集第四 ⑤日蓮貞應元—弘安五 A. D. 1222—1284) ⑥文應元(A. D. 1260)

鎌倉に於て著はした書

法華經の題目を唱へる功德を十五番の問答を以て明し、法華經は上根上智の者には成佛の功德もあらうが、末代の下根下智の者には適しないといふ法然の「選擇集」の邪義を破斥し、法華經こそ釋尊出世の本懷であるから、上根下根を問はず、上智下智を擇ばず、一切衆生

が平等に成佛できる經典であることを經論疏釋を引いて説明し、かゝる法華經の題目を唱へる功德によつて一切衆生の成佛すべきを説いた書である。但し唱題成佛の眞義は未だ本書には充分現はされて居らない。(参考) 録内啓蒙第三、録内扶老第八、御書鈔第二二等 (馬田行啓)

唱、莊、涉、章

莊嚴王陀羅尼呪經

①(日) Shū-gon-gyō. (支) Chuang-yen-wang-t'o-lo-ni-chon-ching. (梵) Sarva-tathāgatahishamasivavalokanubuddha-kestrsandarsana-nyaharjā-sūtra. (藏傳)(藏) Dhags-pa de-bshin-gyegs-pa thams-cad kyilyin-gyis-labs sems-can lag-zigs 'chi sans-rgyas kyi shis gi bkod-pa kun-tu-ston-pa shes-bya ba theg-pa chen-po'i mdo. 莊嚴經、擁護饒益法

莊嚴供物錄

①(日) Shū-gon-ku-motsu-joku. ②一卷 ③最澄(神護景雲元年—弘仁一三A. D. 767—822)撰 (参考) 山家祖德撰述篇目集卷上、密乘撰述目錄、本朝台祖撰述密部書目

莊嚴菩提心經

①(日) Shū-gon bo-dai-shin-gyō. (支) Chuang-yen-p'i-t'i-hsin-ching. 菩提心經 ②一卷 ③存、大正一〇・九六一No. 307、縮黃一〇・九八・二、北307成、南94成、元85成、明北305壹、清95壹、

莊嚴論疏

①(日) Shū-gon-ron-shū. (支) Chuang-yen-ron-shū. 大乘莊嚴經論疏 ②一卷 ③存、唐代慧淨述 (参考) 奈良朝現在一切經疏目録2350

法典續貂

①(日) Shō-ten-zokki-chō. 正法眼藏法典續貂 ②六卷 ③存、正法眼藏註解全書之内 ④黃泉無着述 ⑤正法眼藏法典續貂の下を見よ ⑥刊本(哲、ふ・二・左・六)

法典錄

①(日) Shō-ten-roku. 正法眼藏法典錄 ②十一冊 ③存、正法眼藏註解全書之内 ④面山瑞芳述 ⑤正法眼藏法典錄の下を見よ ⑥刊本(哲、ふ・二・中・九)

莊嚴菩提心經

①(日) Shū-gon bo-dai-shin-gyō. (支) Chuang-yen-p'i-t'i-hsin-ching. 菩提心經 ②一卷 ③存、大正一〇・九六一No. 307、縮黃一〇・九八・二、北307成、南94成、元85成、明北305壹、清95壹、

章疏序並跋

①(日) Shū-shō-jō-nā=rabini-tatsu. ③存、惠心僧都全集附錄之

に開きたてまつるものなりと。次で誦持及び書寫の功德、神呪を説き、終に功德成就の修法及び如法修法者は捨身の後必ず極樂世界に往生し、壽命色力悉く皆具足すべしと説く。本經は擁護饒益法を説けるものなり。開元錄第九に曰く、大足元年(A. D. 703)東都大福光寺に於て譯すと。(坪井徳光) 莊嚴記 ①(日) Shū-gon-ki. 推邪輪莊嚴記 ②一卷 ③存、淨土宗全書第八 ④高辨(承安三—貞永元 A. D. 1173—1232)説貞永元年六一寂撰 ⑤推邪輪莊嚴記の下を見よ。(参考) 諸宗章疏録第二 莊嚴經 ①(日) Shū-gon-gyō. (支) Chuang-yen-ching. 莊嚴王陀羅尼呪經、雜密經、擁護饒益法 ②一卷 ③存、大正二一・八九四No. 1375、縮成八、正二・六、北461羊、南474羊、元469羊、明北500行、清90行、麗455壹、天467美、法49讚、至650父、明南677行、N. 504 ④唐義淨(貞觀九—先天二A. D. 635—713)譯 ⑤佛、布世洛迦山に在し、觀自在菩薩及び妙吉祥菩薩に告げて言く、經有り、一切如來所護觀察衆生示現佛刹莊嚴王陀羅尼と名づく、これ佛、初發心時、花光顯現如茶

名所行發⑩(名庫書)著藏所現⑪ 月年の刊寫⑫(書考參書釋註)書末⑬ 説解存内⑭ 代年作者⑮ 著者⑯ 缺存⑰ 數卷⑱(名書)名題⑲ 號略字數

内  
①本書は恵心僧都全集編輯者が往生要集、  
新校往生要集、阿彌陀經略記會本、刻大乘  
對俱舍鈔、刻因明論疏四相違略註釋、自誓  
戒等に附記してある序跋例言を集録したも  
のである。(田島徳吉)

章疏傳集目錄 ①(日)Sho-sho-den  
—shu-moku-roku (支) Chang-su-chuan-  
—hi-mu-lu. ②[參考] 奈良朝現在一切經  
疏目錄3863

章疏錄 ①(日)Sho-sho-roku. ②1  
卷 ③存、大日本佛教全書第二佛教書籍日  
錄第二 ④良猷編 ⑤徳川中期以後

①本書は眞言宗高野山正智院良猷に依て編  
纂されたものであつて、大日經疏・釋摩訶衍  
論(十卷章)(即身義、摩字義・呼字義)二教論・  
祕藏寶輪・心經秘鏡・菩提心論(十住心論、理  
趣經等の末書目録である。大日經疏の末疏  
として弘法大師作大日經開題以下百三十六  
部を掲げ、釋摩訶衍論には濟邊著顯秘鈔以  
下六十八部を、即身義には賴瑜著顯得鈔以  
下四十一部摩字義には有快著摩字義鈔以下  
十八部、呼字義には勘文注以下二十一部、  
二教論には濟邊著懸鏡鈔以下五十二部祕藏  
寶輪には權輿の藤原敦光註以下二十八部、  
心經秘鏡には濟邊の開門決以下三十八部、  
菩提心論には濟邊の菩提心論私記以下四十  
九部、十住心論には道範の十住心論勘文以  
下五十五部、理趣經には理趣釋以下六十六  
部を擧げて居る。本書の編纂の年はその編  
者正智院良猷なる人の紀傳不明なる爲、正  
確なことは云ひ難きも、中に安永年中の出

世なる徳寶の二教論纂要等空の二教論釋蒙  
等を納め居る點より見て、本録が徳川期中  
葉以後の成立のものなることは疑のない所  
である。(林屋友次郎)

章服儀應報記 ①(日)Sho-buka-  
gi-ho-ki. ②1卷 ③存 ④哲・う・一・  
右(二三)

章服儀法記釋要鈔 ①(日)Sho-  
huku-gi-ho-ho-shaku-yo-sho. ②1卷 ③  
存 ④寫本(龍大、二〇七四・一七)

章門雜孔目 ①(日)Sho-mon-zo-ku  
—moku. (支) Chang-men-tsa-kung-mu. 華  
嚴孔目章、華嚴經內章門等雜孔目章、華嚴  
經孔目章、孔目章 ②四卷 ③存、大正四  
五・五三六No. 1570 巳續二・七・五 ④唐智  
儼(仁壽二)總章元A. D. 602—668)述 ⑤  
華嚴孔目章の下を見よ。⑥[參考] 新編諸  
宗教藏總錄第一

捷徑辨義 ①(日)Sho-kei-ben-gi.  
②1卷 ③存 ④善興子 ⑤享保一七刊  
⑥(谷大、餘大・四一九一)

捷徑法集 ①(日)Sho-kei-ho-shu.  
②1卷 ③存 ④尙善—延享四A. D. 1747  
—⑤寫本(正大、一〇九・四〇)

逍遙遺稿 ①(日)Sho-yo-ki-kō. ②1  
卷 ③存 ④光萬丈光敬道共編 ⑤[參考]  
禪籍目錄

逍遙堂集附行狀並碑銘 ①(日)  
Sho-yo-do-shu-tsuketari-gyo-jo-narubini-  
—hi-mei. (支) Hsiao-yao-tang-chi & Hsing  
—chung & pei-ming. ②1卷 ③存 ④  
朝鮮、太能(逍遙堂) ⑤大正九刊 ⑥京城

新文館  
紹興重雕大藏音 ①(日)Sho-ko-ji  
—ho-dai-zō-on. (支) Shao-hsing-chung-  
—iao-ta-tsang-yin. ②3卷 ③存、縮寫1  
〇・己三五・1 ④處觀 ⑤宋熙寧三—元祐  
八—(A. D. 1070—1093)

①本書は宋の精嚴寺沙門處觀の著になり上  
中下の三卷に分れ、大藏經中に使用せられ  
たる文字の發音辭典ともいふべきものであ  
つて、兼て藏經中に於ける誤寫文字を指摘  
したるものである。初め處觀落髮して修學  
を志し、先づ一大藏經を閲して智見を磨か  
んと欲せしも、藏教は卷軸浩渺、且義理淵奥  
容易に窺ふ可くもあらず。加ふるに字畫に  
舛誤多く、音韻の明かならざるが爲に、之  
を讀するだけでも妙からざる苦心を拂は  
しめられた。この經驗が聽て後學の爲にこ  
の患を除かんが爲には、藏經中に於て疑ひ  
を挿まるべき總ての文字の正しき音韻を示  
したる書物の存せざる可らざることを痛感  
せしむるに至り、本書の編纂を志した。こ  
の目的を以て彼は廣く藏經を通覽して、一  
般讀者が音韻の上に疑問を生ずるならんと  
思惟さるるものを涉獵抽出し、それに適切  
なる發音を示す傍ら、藏經が筆寫轉々の際  
に誤寫せられたと思惟さるるものは諸藏經  
を廣く校合して、各藏間に於ける文字の同  
異を精究し、寫誤と考へらるるものにはそ  
の旨を記載した。斯くして作られたものが  
本書である。

本書の編纂體裁は文字の属、旁等により  
て文字を分類し、凡てを百七十四部と爲し、  
每卷五十八部宛を納む。玄應の一切經音義、  
慧苑の華嚴經音義の如く字義を教ふるを主  
眼とするに非ずして、正音を示すを特色と  
して居るものである。

本書は熙寧三年(A. D. 1070)より元祐八  
年(A. D. 1093)に至る二十餘年間の努力に  
依つて成れるものであるが、それより三十  
餘年を下る南宋高宗紹興年中重ねて上梓さ  
れたるが爲に今の名を生じたものである。  
(林屋友次郎)

紹文 ①(日)Sho-mon. ②一通 ③存  
④賢助記 ⑤寫本(高大、寄・一・七〇)

商主天子所問經 ①(日)Sho-shu-  
—ten-tsu-tsu-wen-ching. (支) Shang-chu-  
—ten-shu-tsu-wen-king. ②1卷 ③存、大正一五・一  
九No. 591、縮印二、正二・六、北28景、南  
475景、元471景、明北515維、清525維、廢588  
羊、天488景、指483羊、法433羊、至456悲、明  
南490維、正519 ④闍那崛多譯 ⑤隋開  
皇五—二〇(A. D. 585—600)

①本經の題名は卷末に佛自ら阿難に告げて  
「此の法本を名けて神通優波提捨と曰ひ」  
「亦商主天子所問と名く」と云ふによるので  
あつて、その大綱は文殊師利が商主等諸天  
の爲めに諸菩薩の一切智に入り一切法の彼  
岸に達し速かに六度を満足するを説けるも  
のである。佛、王舍城耆闍崛山に大比丘衆、  
大菩薩衆と俱に住せし時、商主天子は佛所  
に詣り、諸天子の爲め文殊師利をして法要  
を説かしめられんことを請ふ。文殊師利、  
佛の教をうけて菩薩の一切智々を連ねて

名所行發 ①(名庫書) 漢藏所現 ① 月年の刊 ② (書考參書釋註) 書末 ② 說解存内 ③ 代年作著 ④ 著書 ④ 缺存 ④ 數條 ② (名書) 名題 ① 號略字款

「是の如き等の智を以ての故に當に諸佛無礙の大智を得べし」と説くや、商主天子は「希有なり」と歎じ、諸菩薩の智は諸の三界に於て最も特殊となすと名義の因縁と菩薩行の成ずる所以とについて質問する。文殊師利又一々に答へ、佛は善哉と讃め給ふ。次いで天子は佛に對して無生とは何の謂ぞとの質問を發するや佛は微笑される。此處に於て阿難は偈を以て、佛の微笑するは必ず因がある筈だと問ふ。佛は爲めにその因を説き、商主天子に記を授く。會中の觀息天子は商主天子成佛の時その界に轉輪聖王となつて佛及び菩薩衆を供養せんことを誓ひたる。

商人求財經

①(日) Sho-ni-gu-zai-kyō. (支) Shang-jen-chiu-tsai-ching. (日) J. No. 196 Vahakassa. ②存、中阿含經第三四(大正一・六四二) No. 26. 136)

商人求財經

①(日) Sho-nin-gu-zai-kyō. (支) Shang-jen-chiu-tsai-ching. ②一卷 ③失譯 ④中阿含經第三十四卷の抄出 ⑤【參考】出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

商人子作佛事經

①(日) Sho-nin-shi-sa-butsu-ji-kyō. (支) Shang-jen-tzu-so-fo-shih-ching. ②一卷 ③失譯 ④雜阿含經第二十五の抄出 ⑤【參考】出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六 商人脫財難經 ①(日) Sho-nin-dai-sai-zai-nan-gyō. (支) Shang-jen-to-tsai-

商、將、勝

nan-ching. ②一卷 ③失譯 ④雜阿含經第二十二卷の抄出 ⑤【參考】出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六 將軍願文 ①(日) Sho-guan-gwan-mon. ②一軸 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶善提院) 勝圓寺記寺 ①(日) Sho-en-ji-ki-ji. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、研真) 勝義空經 ①(日) Sho-gi-ka-kyō. (支) Sheng-i-kuang-ching. ②一卷 ③存、大正一五・八〇六 No. 655. 己續一・一四、麗正96馳 ④施護譯 ⑤宋(太平興國五—A. D. 980—)

①本經は佛が第一義諦正法としての勝義空の説明を極めて簡略に説かれたもの。勝義空とは、謂く眼生ずる時少法に從來する所有ること無く、又眼滅する時も亦少法に離散して去るべきこと無し。一言以て之を掩へば、業有り、報有るも作者不可得なるを言ふ。同様に耳鼻舌身意も亦然り。然も別法合集するは因縁所生の故なりとし、その縁生とは所謂、十二因縁の事で、無明によつて行有り、行によつて識あり、識によつて名色あり乃至生に縁つて老死憂悲苦惱あり。是の如くして一大苦蘊生ずるのである。然れども此の所生法は實として得べきこと無し。生じ已れば即ち滅す。此に由りて無明滅す。乃至生滅すれば老死憂悲苦惱も滅するのである。是の如くして一大苦蘊滅するのである。是を勝義空と爲すのであると説かれたる短篇である。(成田昌信)

勝義兩重觀境論 ①(日) Shōgi-ryō-jūan-kyō-ron. ②一卷 ③存 ④皆空 ⑤享保一〇刊 ⑥龍大、二六五五・一五(哲、や、七、左七) 勝教寺僧聽申渡四夫 ①(日) Shō-kyō-ji-sō-chū-eno-shi-watashi-shi-shitsu. 越後判斷記 ②一卷 ③存 ④智洞 ⑤文化三A. D. 1806) ⑥寫本(龍大、研真) 勝敬諸塔經 ①(日) Shō-gyō-shō-to-kyō. (支) Sheng-ching-chu-ta-ching. ②一卷 ③缺 ④【參考】開元錄第一四 勝願寺志 ①(日) Shō-gwan-ji-shi. 鴻臚勝願寺志、鴻臚檀林志、鴻臚志 ②一卷 ③存、淨土宗全書第二〇寺誌宗史之内 ④攝門(天明二)天保一〇A. D. 1782—1833)記 ⑤鴻臚勝願寺志G下を見よ 勝願寺事志考 ①(日) Shō-gan-ji-setsu-ko. ②一卷 ③存 ④春怒 ⑤寫本(正大)一〇三三(一)

勝軍王所問經 ①(日) Shō-gun-ō-shō-mon-gyō. (支) Sheng-chūn-wang-so-wen-ching. (梵) Rājā-vadhika-sūtra(引用) ②(藏) Hphags-pa rgyal-po la gdams-she-s-bya-ba-theg-pachen-po himdo. ③一卷 ④存、大正一四・七八九 No. 516. 縮本六、己一五・一〇、北1406、南1411卷、元1398卷、明北983斯、清983斯、麗1443約、天1391卷、至1139天、明南1027瀾、No. 988 ⑤施護譯 ⑥宋太平興國五—(A. D. 980—) 勝軍王所問經 ①(日) Shō-gun-ō-shō-mon-gyō. 意譯勝軍王所問經 ②一卷 ③存、現代意譯佛敎經典叢書第一二 勝軍儀軌 ①(日) Shō-guan-gi-ki. (支) Sheng-chūn-i-kuai. 勝軍不動明王四十八使者祕密成就儀軌、不動儀軌、勝軍不動祕密儀軌、勝軍儀軌 ②一卷 ③存、大正二一・三三 No. 1205. 縮本四、己續二・九三 ④唐不空(神龍元)大曆九A. D. 705—774)譯 勝軍化世百喻伽他經 ①(日) Shō-gun-ke-se-hyaku-yu-ka-ta-kyō. (支) Sheng-chūn-hua-shih-pai-yü-chieh-ta-ching. 勝軍百喻經、百喻伽他經 ②一卷 ③存、大正三三・七八八 No. 1693. 縮藏九、己一五・三、北1122棧、南1172棧、元1132棧、明北815則、清815則、麗125漆、天1119棧、法1241兵、至1517合、明南816則、No. 820 ④宋天息災(—咸平三A. D. 1000)譯

①勝軍王が百喻の伽陀を作つて世間を教化したもので、全て九十八偈あり。人生は無常にして世間の富貴は恃むべからざるが故に宜しく、無爲寂靜の法を求むべしと教へ、布施持戒精進禪定を勧めて、飲酒淫欲兩舌惡口等を戒む。實無實を辨せず、利と非利とを悟らざれば、人形を具すと雖も畜

力説し、宜しく出世の法を求むべしと云つて、十二因縁の法を説く。宋元明の三本は麗本に缺けたる六百餘字を有するが、それでも尙且つ簡潔なる小經である。(横超慧日)

勝軍王所問經 ①(日) Shō-gun-ō-shō-mon-gyō. 意譯勝軍王所問經 ②一卷 ③存、現代意譯佛敎經典叢書第一二 勝軍儀軌 ①(日) Shō-guan-gi-ki. (支) Sheng-chūn-i-kuai. 勝軍不動明王四十八使者祕密成就儀軌、不動儀軌、勝軍不動祕密儀軌、勝軍儀軌 ②一卷 ③存、大正二一・三三 No. 1205. 縮本四、己續二・九三 ④唐不空(神龍元)大曆九A. D. 705—774)譯 勝軍化世百喻伽他經 ①(日) Shō-gun-ke-se-hyaku-yu-ka-ta-kyō. (支) Sheng-chūn-hua-shih-pai-yü-chieh-ta-ching. 勝軍百喻經、百喻伽他經 ②一卷 ③存、大正三三・七八八 No. 1693. 縮藏九、己一五・三、北1122棧、南1172棧、元1132棧、明北815則、清815則、麗125漆、天1119棧、法1241兵、至1517合、明南816則、No. 820 ④宋天息災(—咸平三A. D. 1000)譯

①勝軍王が百喻の伽陀を作つて世間を教化したもので、全て九十八偈あり。人生は無常にして世間の富貴は恃むべからざるが故に宜しく、無爲寂靜の法を求むべしと教へ、布施持戒精進禪定を勧めて、飲酒淫欲兩舌惡口等を戒む。實無實を辨せず、利と非利とを悟らざれば、人形を具すと雖も畜

生に同じと論じ、論議工商等の生活は全人  
つ法に違ふべしと説く。(横超慧日)

**勝軍地藏秘法** ①(日) Shō-gun-ji-  
zō-hi-hō. ②一册 ③存 ④徳川時代寫

⑤(寶善提院)  
**勝軍地藏法** ①(日) Shō-gun-ji-zō-  
hō. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶  
善提院)(寶龜院)

**勝軍比量集記** ①(日) Shō-gun-hi-  
ryō-shū-ki. ②一卷 ③願建述 ④(參考)  
東域傳燈目錄卷下、注進法相宗章疏、諸宗  
章疏錄第一

**勝軍不動儀軌** ①(日) Shō-gun-fu-  
dō-gi-ki. (支) Sheng-chün-pu-tung-i-kuai.  
勝軍儀軌、勝軍不動祕密儀軌、不動儀軌、  
勝軍不動明王四十八使者祕密成就儀軌 ②  
一卷 ③存、大正二一・三三No. 1205、縮  
餘四、己續二・九・三 ④唐通智(神龍元一  
大曆九A.D. 705—774)譯 ⑤寫本(寶壽院)

**勝軍不動祕密儀軌** ①(日) Shō-  
gun-fu-dō-hi-mitsu-gi-ki. (支) Sheng-  
chün-pu-tung-pi-mi-i-kuai. 勝軍不動明王  
四十八使者祕密成就儀軌、勝軍不動儀軌、  
勝軍儀軌 ②一卷 ③存、大正二一・三三  
No. 1205、縮餘四、己續二・九・三 ④唐不  
空通智(神龍元一—大曆九A.D. 705—774)集

**勝軍不動明王四十八使者祕密  
成就儀軌** ①(日) Shō-gun-fu-dō-  
hō (本地) (右手) (形色)

(左使者) (本地) (右手) (形色)  
① 俱哩迦羅龍王 不動明王  
② 健達婆叉王 阿闍佛  
③ 尸棄大梵王 開敷華王佛

獨股杵 押腰 忿怒青  
鉢 押腰 赤

錘 押腰 赤

myō-ō-shū-jū-hachi-shū-sha-hi-mitsu-jō  
-ju-gi-ki. (支) Sheng-chün-pu-tung-ming-  
-wang-sai-shih-pa-shih-chē-pi-mi-ch'eng-  
-chū-i-kuai. 勝軍不動祕密儀軌、勝軍不  
動儀軌、勝軍儀軌 ②一卷 ③存、大正二  
一・三三No. 1205、縮餘四、己續二・九・三  
④唐通智(神龍元一—大曆九A.D. 705—774)  
集

①初に功德を説く中に於て、勝軍不動明王  
とは、大日の心より出生せる五明王の一な  
ることを示し、次に成就諸法を列ね、次に畫  
像法として、身赤黄色にして赤衣を著し、  
左手には絹索、右手には其の首蓮華の葉狀  
の如き劍を把れる形像を畫くべきことを明  
し、次に道場觀として、壇の中に須彌有り  
上に赤蓮華有り、蓮華の上に樓閣有り、其  
の中に瑟石有り、瑟石の中に憾(han)字有  
り、字變じて勝軍不動尊と成ると觀すべき  
ことを説き、次に略布字法として、唵(om)  
を頂に、縛(wa)を肩間に、日羅(ri)を兩  
肩に、阿左(a)を心上に、夫々配すべき  
ことを示し、次に護身、入佛三昧耶、法界  
生、轉法輪、四方結界(無摧忍)、慈救、閻  
伽。華座、塗香、華鬘、燒香、飲食、燈  
明、普供養等の作法印明を列ね、次に不動  
尊像を明し、次に四十八使者の本地と形像  
とが詳細に説いてある。今簡単に表で示す  
と左の如くである。

(右手) (形色) (左手) (形色)  
赤 劍形立盤石上

赤 忿怒青

赤 鉢

赤 錘

赤 鉢

赤 鉢

(四) 七天五母夜叉王 阿彌陀佛 針 赤  
(五) 初禪若干大梵王 不空成就佛 箭 赤  
(六) 二三四禪大明王 普賢菩薩 杖 赤  
(七) 三十三天各各天王 文殊菩薩 大刀 赤  
(八) 阿迦尼多天王 觀自在菩薩 錫杖 赤  
(九) 央俱將迦羅王 彌勒菩薩 索 赤  
(十) 修羅金縛王 拘樓孫佛 刀 赤  
(十一) 大鉢沙羅王 拘那含牟尼佛 杖 赤  
(十二) 拔苦婆多羅王 毘婆支佛 輪 赤  
(十三) 多羅迦王 發沙佛 合掌 赤  
(十四) 牛頭密呪王 迦葉佛 經 赤  
(十五) 光火炎摩王 觀自在菩薩 寶珠 赤  
(十六) 五天人散羅王 毘沙門天 金剛杵 赤  
(十七) 神母大小諸王 延命菩薩 押腰 赤  
(十八) 健健迦羅大王 准提觀音 三股杵 赤  
(十九) 迦毘羅修法王 千手觀音 蓮華 赤  
(二十) 藥叉諸天王 妙見菩薩 大刀 赤  
(二十一) 三界授天大王 藥王菩薩 塔 赤  
(二十二) 俱多遷化天王 藥上菩薩 弓 赤  
(二十三) 火羅諸天王 地藏菩薩 繩縛沙羅 赤  
(二十四) 皆攝持天王 龍樹菩薩 金剛合掌 赤  
(二十五) (右使者) (本地) (右手) (形色) (左手) (形色)

(二十六) 金剛修羅王 勢至菩薩 杖 赤  
(二十七) 神王引攝大士王 吉祥天女 杖 赤  
(二十八) 宿諸大王 觀自在菩薩 蓮華 赤  
(二十九) 一切諸法受用王 毘盧舍那如來 鈴 赤  
(三十) 迦葉大呪大士王 無盡意菩薩 錫杖 赤  
(三十一) 一一各有大士王 妙音菩薩 杖逆 赤  
(三十二) 護持諸法王 陀羅尼菩薩 經卷 赤  
(三十三) 咩發多羅王 虛空藏菩薩 塔 赤  
(三十四) 蘇小拔苦王 荼吉尼天 幡 赤  
(三十五) 忿忿大小神天王 奉敬宮 金剛合掌 赤

赤 劍形立盤石上

赤 忿怒青

赤 鉢

赤 錘

赤 鉢

赤 鉢

赤 鉢

(一) 那縛迦羅王 月天  
 (二) 悉底地大士王 暗夜天  
 (三) 神王眷屬大智王 焰魔羅王  
 (四) 摩登迦羅天人王 那羅延天  
 (五) 天地受用大明王 廣目天  
 (六) 諸神皆得大王 水天  
 (七) 一一東西南北王 辯才天  
 (八) 密呪受持王 羅刹天  
 (九) 迦葉大王 阿修羅王  
 (十) 沙羅仙大神王 滿意天  
 (十一) 莫呪大呪大明王 大日如來  
 (十二) 會集神王 遍音天  
 (十三) 太一德王 普世天  
 (十四) 一切諸神王 火天

獨股杵 拳押腰 黑  
 杖 押腰 赤  
 三股杵 索 黑  
 劍 押腰 赤  
 獨股杵 押腰 黑  
 念珠 押腰 白  
 如意珠 押腰 赤  
 大刀 索押腰 赤  
 鏡 押腰 白  
 劍 索 黑  
 鉞 押腰 赤  
 三股杵 劔印押腰 黑  
 五股鈴 押腰 黑  
 點が多々ある所から察すると、名を不空三藏に借りた偽經ではあるまいかと想像される。

**勝語集** ①(日)Shō-go-shū. ②安然(承和八)延喜年間 A. D. 841—901—) ③〔参考〕本朝台祖撰述密部書目

**勝語集** ①(日)Shō-go-shū. ②安然(承和八)延喜年間 A. D. 841—901—) ③〔参考〕本朝台祖撰述密部書目

②二卷 ③存、大正七八・二〇九 No. 2479

④覺印(承德元—長寛二 A. D. 1097—1164) 記

⑤諸尊法に關する東密廣澤方相傳の口説を記した書。大正大藏經には惠什撰とせるも實は惠什の説を覺印が筆録したものである。卷上の冒頭には保延元年十二月十一日於安養谷勝定房隨聞記と云ひ、卷下奥書の一節に、本批云、寫本記云、長寛元年四月上旬、以釋迦院御草本自筆云々同比蒙許了。命云、先年於勝定房邊受習問、聞事

等悉是後十卷抄外事等注之也云云とある。この勝定房が惠什のことで、十卷抄とは圓像鈔又は尊容鈔と稱せらるゝ諸尊法關係の有名なる書である。又覺印の付法心覺が著はせる心覺抄は本書を基として記したと稱せられてゐる。

⑥寫本 ⑦(智專) (小田慈舟)

**勝光王信佛經** ①(日)Shō-kō-ō-shin-bō-kyō. (支)Sheng-kuang-wang-shin-to-ching. ②一卷 ③根本說一切有部毘奈耶雜事第八卷の抄出 ④〔参考〕開元錄第一六、第一七、貞元錄第二六

**勝興寺巡講一件文書** ①(日)Shō-kō-ji-jū-san-iki-ken-mon-jō. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、別置)

**勝金光明德女經** ①(日)Shō-kō-ko-myō-toku-nyō-kyō. (支)Sheng-kuang-kuang-ming-te-ni-ching. ②二卷 ③缺 ④〔參考〕武周錄第二二

**勝算禪師行略** ①(日)Shō-san-zen-jū-gyō-ryaku. ②一卷 ③存 ④〔參考〕禪籍目録

**勝思惟梵天所問經** ①(日)Shō-shi-yui-hon-ten-shō-mon-kyō. (支)Sheng-sui-wei-fan-tien-so-wen-ching. (梵)Vishucinabrahma-puripiccha (藏傳)(藏)Hphags-pa shans-pa khyad-par-semis kyis shus-pa shes-hya-ba theg-pa chen-po'i ndo. 勝思惟經 ②六卷 ③存、大正一五六二 No. 587、縮字一、正一〇・三、北146萬、南145萬、元143萬、明北288萬、清188萬、麗145萬、天145萬、指135萬、法

173類、至233類、明南176六、正159、大藏經要義第一一巻之内 ④元魏菩提流支譯 ⑤本經は一名勝思惟經とも稱し五百十八年の藏譯なり。更に本經の終りに記する所によれば、その内容より平等攝一切法又は莊嚴一切佛法、又は勝思惟梵天所問、或は文殊師利論議とも稱す。本經以前に同本異譯二本あり。一は四智法護譯(A. D. 286) 持心梵天所問經四卷にして他は姚秦鳩摩羅什譯(A. D. 402) 思益梵天所問經四卷である。此等二本は何れも品を分ちて十八となすも本經にありては品名なし。今假りに羅什譯の品名を本經六卷に配當すれば次の如し。

〔第一卷〕 序品第一、四法品第二、分別品第三。〔第二卷〕 分別品第三之餘、解諸法品第四、難問品第五。〔第三卷〕 難問品第五之餘、問談品第六。〔第四卷〕 問談品第六之餘、談論品第七、論寂品第八。〔第五卷〕 論寂品第八之餘、仍行品第九、志大乘品第十、行道品第十一、稱歎品第十二、誦德品第十三、等行品第十四、授不退轉天子記品第十五。〔第六卷〕 授不退轉天子記品第十五之餘、建立法品第十六、諸天歎品第十七、囑累品第十八。

本經は大乗經典初期のものにして般若經典と法華經との中間に成立するものと稱せられ、維摩經と共に小乗排斥に尤も力を盡せるものである。本經は上述異譯二本中羅什譯とよく似てゐる。猶ほ本經の注釋として世親造勝思惟梵天所問經論四卷あり。(中田源次郎)

勝思惟梵天所問經論

①(日)Shō-shi-hi-bon-ten-shō-mon-gyōron. (支)Sheng-sai-wi-fan-tien-so-wen-ching-tsu.

勝思惟梵天經論、勝思惟問經論。四卷或三卷。存。大正二六・三三七No. 1532。縮暑一、二二一・八、北568堂、南582堂、元575堂、明北1186弗、清1186弗、慶569虛、天573堂、指531虛、法577虛、至1290(2)。明南332離、No. 1193。菩提流支譯。⑤後魏永平元—天平二(A. D. 508—535)。

①本論は「勝思惟梵天所問經」を世親が註釋せるものにして、同じく菩提流支の譯であり、又一名勝思惟問經論とも云ふ。本論は四卷あるも經の六卷中卷第二の終り即ち羅什譯によれば解諸法品第四までの註釋にして全釋ではない。先逃せる如く本論は世親の釋にして釋中所々に虛妄分別、種子、習氣等の唯識系の語が使用せられ、又、以無世間心意識分別相故とか以識不能分別知故等の唯識思想の入つてゐるのに注意せしめられる。(中田源次郎)

勝地記

①(日)Shō-ji-ki. 勝地私記。三卷。隆増記。〔參考〕本朝台祖撰述密部書目。

勝地私記

①(日)Shō-ji-shi-ki. 勝地記。八卷或三卷。隆増記。〔參考〕自在金剛集第八。

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 十句義論。一卷。存。大正五四・一二六二No. 2138。縮藏一〇、二二五・八、

北1048書、南1054書、元1060書、明北1288納、清1288納、慶1052書、天1046書、指1003書、法1030書、至1498桓、明南1410吹、No. 1295。勝者慧月(六・七世紀頃)造、唐玄奘(仁壽二—麟德元 A. D. 602—611)譯。①勝論派の根本經典たる勝論經に説く實・德・業・同・異・和合の六句義に有能・無能・俱分・無説の四句義を加へて十句義を立てゝゐる所に本書の特色がある。大別して二部となる。第一部は各句義の定義及び分類を説いてゐるが、その中分類としては實句義に地・水・火・風・空・時・方・我・意の九實を、業句義に取・捨・用・伸・行の五業を上げる點は勝論經と同様である。但し德句義では經で數へる色・味・香・觸・數・量・別體、合・離・彼體・此體、覺・樂・苦・欲・瞋・勤勇の十七德の外に更に重體・液體・潤・行・法・非法・聲の七德を加へて二十四德としてゐる。これは五六世紀頃のプラシャスタパーダ註以後本派一般に認められた數へ方である。更に無説句義では未生無・已滅無・更互無・不會無・畢竟無の五無を説くがこの分類も本書特有のものである。次に第二部では先づ各實に就て、有動作・無動作、有德・無德、有觸・無觸、有色・無色、常・無常、根・非根、各實の有する德の數、以上七問題から論じてゐる。德も現境・非現境、所作・非所作、常・無常、根所取、因、依一實・依非一實、遍所依・不遍所依、相違、有實・無實の九問題から、業は有實・無實、依何實、遍所依・不遍所依、和

合因縁・不和合因縁の四問題から、その他も二三の問題から論じてゐる。かく本書は題號の示す如く句義論に終始し極めて簡潔に論述してゐて本派の實踐論的方面及び後世現はれた神の問題には觸れてゐない。即ち本派の教義全體に及んだのでなく、又この十句義も本書の原典佚の爲めに印度では餘り流行しなかつたが、本書は數論派の金七十論と共に漢譯一切經に所謂外道書として輯められてゐるので從來支那、日本では本派研究の第一資料とされてゐた。

〔注釋〕 基辨、勝宗十句義論釋二卷。嚴藏、勝宗十句義論試記二卷。快道、勝宗十句義論訣擇五卷。實雲、十句義論附記一卷。存教、冠導勝宗十句義論一卷。〔參考〕 U. vaishaka Philosophy ⑤延享五改點元祿一三原則、海雲改點刊 ④(高大一・二七) (山本快龍)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 科註勝宗十句義論。一卷。存。寬曆一〇刊。④(高大寄・一二七) (哲、ら・六・右・一六)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 冠註勝宗十句義論。一卷。存。清原公諱述。⑤明治二三刊。④(高大、一・二三) (帝國、一一〇・六七) (哲、ら・六・中・一八)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 增補科註冠導勝宗十句義論。一卷。存。明治二九刊。④(帝國、一〇・六七)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 科註勝宗十句義論。一卷。存。明治二九刊。④(帝國、一〇・六七)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 科註勝宗十句義論。一卷。存。明治二九刊。④(帝國、一〇・六七)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 科註勝宗十句義論。一卷。存。明治二九刊。④(帝國、一〇・六七)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 科註勝宗十句義論。一卷。存。明治二九刊。④(帝國、一〇・六七)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 科註勝宗十句義論。一卷。存。明治二九刊。④(帝國、一〇・六七)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 科註勝宗十句義論。一卷。存。明治二九刊。④(帝國、一〇・六七)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 科註勝宗十句義論。一卷。存。明治二九刊。④(帝國、一〇・六七)

合因縁・不和合因縁の四問題から、その他も二三の問題から論じてゐる。かく本書は題號の示す如く句義論に終始し極めて簡潔に論述してゐて本派の實踐論的方面及び後世現はれた神の問題には觸れてゐない。即ち本派の教義全體に及んだのでなく、又この十句義も本書の原典佚の爲めに印度では餘り流行しなかつたが、本書は數論派の金七十論と共に漢譯一切經に所謂外道書として輯められてゐるので從來支那、日本では本派研究の第一資料とされてゐた。

〔注釋〕 基辨、勝宗十句義論釋二卷。嚴藏、勝宗十句義論試記二卷。快道、勝宗十句義論訣擇五卷。實雲、十句義論附記一卷。存教、冠導勝宗十句義論一卷。〔參考〕 U. vaishaka Philosophy ⑤延享五改點元祿一三原則、海雲改點刊 ④(高大一・二七) (山本快龍)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 科註勝宗十句義論。一卷。存。寬曆一〇刊。④(高大寄・一二七) (哲、ら・六・右・一六)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 科註勝宗十句義論。一卷。存。清原公諱述。⑤明治二三刊。④(高大、一・二三) (帝國、一一〇・六七) (哲、ら・六・中・一八)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 冠註勝宗十句義論。一卷。存。清原公諱述。⑤明治二三刊。④(高大、一・二三) (帝國、一一〇・六七) (哲、ら・六・中・一八)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 增補科註冠導勝宗十句義論。一卷。存。明治二九刊。④(帝國、一〇・六七)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 科註勝宗十句義論。一卷。存。明治二九刊。④(帝國、一〇・六七)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 科註勝宗十句義論。一卷。存。明治二九刊。④(帝國、一〇・六七)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 科註勝宗十句義論。一卷。存。明治二九刊。④(帝國、一〇・六七)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 科註勝宗十句義論。一卷。存。明治二九刊。④(帝國、一〇・六七)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 科註勝宗十句義論。一卷。存。明治二九刊。④(帝國、一〇・六七)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 科註勝宗十句義論。一卷。存。明治二九刊。④(帝國、一〇・六七)

修科佛教講義之内 ④寺島光法述 ⑤明治二九—三三刊 ④(帝國、一四・三三四)

勝宗十句義論

①(日)Shō-shū-jū-ki. 二卷。存。法住(享保八—寬政一二 A. D. 1723—1800)撰。〔參考〕 大日本佛教全書續刊豫定書目

勝宗十句義論訣擇

①(日)Shō-shū-jū-ki-ku-ji-toku. 十句義論訣擇。五卷。存。日本大藏經勝宗十句義論章疏。④林常快道(寶曆元—文化七 A. D. 1751—1810)述。④十句義論訣擇の下を見よ。⑤寬政八刊。④(高大、寄・一・二七)

勝宗十句義論私記

①(日)Shō-shū-jū-ki-shi-ki. 二卷。存。〔参考〕 大日本佛教全書續刊豫定書目

勝宗十句義論試記

①(日)Shō-shū-jū-ki-shi-ki. 二卷。存。〔參考〕 大日本佛教全書續刊豫定書目

勝宗十句義論釋

①(日)Shō-shū-jū-ki-shi. 十句義論釋。一卷。存。日本大藏經勝宗十句義論章疏。④基辨(享保三—寬政三 A. D. 1718—1791)述。④十句義論釋の下を見よ。④安永八刊。④(京大、一・二四・二〇) (高大、寄・一・二七) (哲、ら・六・右・一六)

勝宗十句義論釋傍歡錄

①(日)Shō-shū-jū-ki-shi-bō-kan-ryoku. 一卷。存。〔參考〕 大日本佛教全書續刊豫定書目

①(日)Shō-shū-jū-ki-shi-bō-kan-ryoku. 一卷。存。〔參考〕 大日本佛教全書續刊豫定書目





—ying-lo-to-lo-mi-ching (梵) Dvajāgrā-  
kagurā(寫本) ②一卷 ③存、大正二一、  
九二五No. 1410、縮成八、二一五、四、北  
1175家、南1188家、元1188家、明北835命、  
清833命、麗1170侯、天1168家、法1284卷、  
至735薄、明南848臨、天1838 ④宋施護譯  
⑤雜部密教の所屬にして、除障法を明す。  
釋尊が喜樂山頂の天宮に於て、大梵天王  
(Mahābrahman)及び觀世音(Avalokiteśva-  
ra)菩薩の爲に、此の勝旃理路陀羅尼一首  
と、其の功能とを説き、能く之を受持し讀  
誦すれば、所有の五逆重罪悉く皆滅盡し  
て、大富貴を獲、當來世には上族に生るゝ  
ことを得と云ふ。(神林隆淨)

**勝峯山峨眉光傳** ①(日) Shō-bu-  
san-ga-ri-ko-den. (支) Sheng-feng-shan-  
-ch-mei-kuang-ku-an. ②四卷 ③存 ④  
明 明光集 ⑤寫本(京大、藏・二〇〇・四)

**勝福往生淨土經** ①(日) Shō-fuku-  
ō-jō-jō-do-kyō.(支) Sheng-fu-wang-shēng-  
-ching-tu-ching. 拔濟苦難陀羅尼經、拔濟  
苦難經 ②一卷 ③存、大正二一、九二二  
No. 1393、縮成七、二二・五、北423蓋、  
南46蓋、元483蓋、明北486行、清486行、  
麗433讀、天457蓋、指426讀、法399讀、至  
639卷、明南456行、天490 ④拔濟苦難陀  
羅尼經の下を見よ

**勝佛頂儀軌** ①(日) Shō-butō-cho-  
-gi-ki. ②一帖 ③存 ④南北朝時代寫 ⑤  
(寶善提院)

**勝寶院門跡列祖次第** ①(日) Shō-  
-hō-im-mon-zeki-tes-so-shi-dai. ②存、

續群書類從第四  
⑥高祖弘法大師十二代の祖、勝寶院阿闍梨  
賴舞(佛頂房)に初まり、源實勝寶院已講、  
定法房、隆興勝寶院法印、彌勒寺、貞  
曉勝寶院法印、鎌倉法印、道勝(勝寶院  
法務大僧正)、道輝(勝寶院法務大僧正)、  
道意(勝寶院法務大僧正)、道嚴(勝寶院僧  
正)、道紹(勝寶院僧正)を経て勝寶院法眼  
實定に至る十世の各稱號と出生に就いて略  
記せるもS。(不破幹雄)

**勝寶感神聖武皇帝銅板詔書**  
①(日) Shō-hō-kan-jin-shō-mu-kyō-tei-ko-  
-ban-shō-shō. ②存、大日本佛教全書第一  
二一東大寺叢書第一 ③聖武天皇 ④天平  
勝寶五(A. D. 753)正月十五日  
⑤本詔書は天平勝寶五年正月十五日、東大  
寺落成の際、其の塔中に金字金光明最勝王  
經一卷を安置し給へる時の勅額文で、現在  
奈良正合院に藏せられてある銅板の詔書で  
ある。その内容を見るに、かの天平十九年  
十一月己卯の詔と其意同じであつて、天平  
十三年二月十四日に全國に國分寺造營を發  
願せられた動機と目的に就いて述べられて  
ゐる。聖武帝の國分寺創立の意圖は、金光  
明最勝王經の信仰に基くものであることは  
天平十三年の詔勅に於て明かに示されてゐ  
る所で、其の目的が、此經を供養し流通する  
時は四天王の擁護を受け、一切の災障疾疫  
が除滅されると、説く本經の功德を得ん爲  
に在つたものであるが、偶々當時に於ける  
疫癘の流行が一層その直接の動機となつた  
ものであらう。其の國分僧寺を以て金光明

四天王護國之僧寺となし、國分尼寺を法華  
滅罪之尼寺と稱し、上下一致して金光明經  
及法華經の二經を供養せしめ、その功德を  
以て國家安穩と萬民の除災招福を祈念され  
たのである。本詔書に關して『古京遺文』に  
其考證が見えてゐる。  
④(正合院) (不破幹雄)

**勝覺寺寺御寶物品錄** ①(日) Shō-  
-kann-ō-ji-go-ko-hō-motsu-hin-roku. ②存  
③(龍大、二九六五・二三三)

**勝覺開講** ①(日) Shō-kann-kyō-  
-kō. ②一卷 ③最澄(神護景雲元年—弘仁一三A.  
D. 767—923)撰 ④(參考) 山家祖德撰述  
篇日集卷上

**勝覺義記** ①(日) Shō-kann-gi-ki.  
(支) Sheng-man-ti-chi. ②一卷 ③存、大  
正八五・二五三No. 2761  
④本書はスタイン氏蒐集の燉煌出土古寫本  
で、跋記に依れば北魏の年號を有し、現存  
せらるる數多き勝覺經の註釋書の中で、最古  
の珍疏である。奥題並に後記は  
慧掌撰

勝覺義記一卷  
正始元年二月十四日寫訖 用紙十一張  
とあり、北魏の正始元年(A. D. 504)の筆  
寫にかゝり、從來未だ曾て我國に將來せら  
れざりしは勿論、抑も亦支那に於ても多く  
の勝覺疏主も興り知られざりしもので、實  
に稀代の逸品である。  
本義記一部殘卷の結構は、首部缺如して  
知り難きも、如來妙色身の偈文の中で、如

來色無盡の無盡の句釋以下より、經末流通  
段に及び、各行三十字内外にして奥題を合  
して、全部四百六行を存し、卷子本の全  
長、大約十七呎に及び、筆體は雅致にして  
雄勁である。本書に關しては、鳴沙餘韻の  
解説第一部四九一五〇頁と第二部三二五四  
頁の論文『北魏正始元年筆寫現存最古の勝  
覺經義記に就いて』に、弘く諸目錄並に僧  
傳に勝覺の古疏を搜りて本書の由来と其の  
特質とを明にしてゐるので参照すべきもの  
である。  
④燉煌出土本(大英博物館藏 S. 2660)  
(矢吹慶輝—成田昌信)

**勝覺經** ①(日) Shō-kann-kyō. (支)  
Sheng-man-ching. ②一卷 ③缺 ④北涼  
曇無讖(—支始三一—五A. D. 414—496—)  
譯 ⑤第一譯 ⑥(參考) 開元錄第一四、  
貞元錄第二四

**勝覺經** ①(日) Shō-kann-kyō. (支)  
Sheng-man-ching. 勝覺師子吼經、師子吼  
方廣經、勝覺大方廣經、勝覺師子吼一  
乘大方廣經 ②一卷 ③存、大正一  
二・二一七No. 353、縮地二二、二六・五、北  
54推、南83推、元83推、明北83推、清83  
推、麗53推、天53推、指46推、法40推、至  
123有、明南83推、天55、禪學大系經論部  
之内 ④劉宋求那跋陀羅(太元一九—泰始  
四A. D. 391—486)譯 ⑤勝覺師子吼一乘大  
方便方廣經の下を見よ ⑥寶永元刊(高、大、  
寄・一・二三)慶安二刊(龍大、研佛)大正一三  
刊(正大、一一七・二〇)刊本(哲、あ・二・  
左・九)

名所行發⑩ (名庫書)酒蔵所現⑪ 月年の刊寫⑫ (書考叢書釋註)書本⑬ 説解卷内⑭ 代年作著⑮ 著者⑯ 缺存⑰ 數卷⑱ (名書)名題⑲ 號略字數

勝鬘經

Sheng-man-hing. ①(日) Shō-man-gyo. (支) ②一巻 ③疑偽經 ④(參考) 出三藏記第五、法經錄第二、仁壽錄第四、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

勝鬘經

Sheng-man-hing. ①(日) Shō-man-gyo. (支) ②二巻 ③新羅元曉(眞平王三九A. D. 617-) ④(參考) 花嚴宗經論章疏目錄

勝鬘經

Shō-man-gyo. ①(日) Shō-man-gyo. ②一巻 ③存 ④河口慧海譯 ⑤大正一二刊 ⑥(高六・一・二六) ⑦東京世界之庫刊行會

勝鬘經記

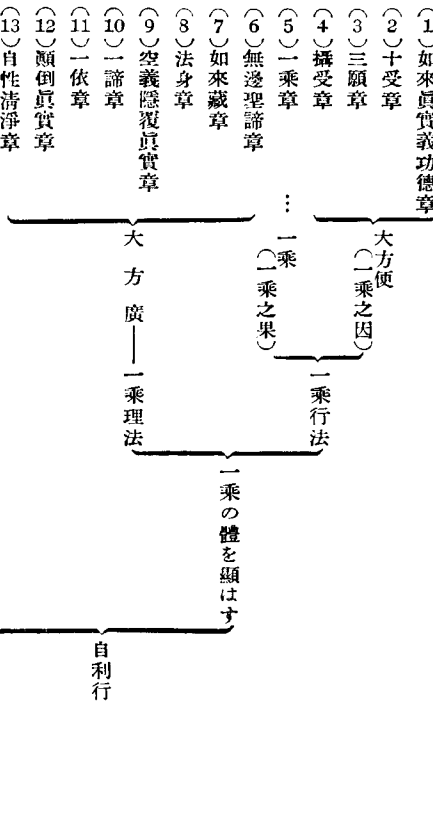
Shō-man-gyo-ki. ①(日) Shō-man-gyo-ki. ②二巻 ③存 ④蜂屋良潤(文政一〇—明治三八A. D. 1827—1905)述 ⑤明治一四(A. D. 1881) ⑥寫本(谷大、餘大・一五七)

勝鬘經義記

Shō-man-gyo-gi. (支) Sheng-man-ching-i-chi. ①一巻(缺下巻) ②存、已續一・三〇・四 ③階慧遠(普通四—開皇一一A. D. 533—529)述 ④聖教萬差なるも要はこれを大別して聲聞藏と菩薩藏との二種に分ち得る。更に聲聞藏を開いて聲聞聲聞と緣覺聲聞となし、菩薩藏を漸悟と頓悟とに分ち得る。而して本經は此の二藏の中菩薩藏に收められ、根熟人の爲の頓教の法輪である。本經は詳しくは勝鬘師子吼一乘大方廣經と稱す。此の經名はその所説の内容を總稱して名づけしものである。即ち勝鬘師子吼とは本經を十五章に分つ中、第十五勝鬘章より得たものであり且つ又本經を師子吼せる勝鬘夫人

の名を題したのである。次に一乗とは第五一乗章より取れるものにして、一乗は今經に於て強張せる根本義である。更に大方廣とは前四章の所説より名づけ、方廣とは第六無邊聖壽章より第十三自性清淨章に至るまで一乗の理法を包含するが故に名づけしものである。次に本經を三分して序分正宗分流通分とす。此内序分を分ちて發起序と證信序とし、第一章の中の第四頌即ち歡佛實功德までを發起序となし、第十五勝鬘章中佛が阿難に所傳せるを證信序となす。次に正宗分は第一章中第五頌、如來妙色身よ

り第十五章の初め汝已親近百千億佛能說此義に至る大部分これである。更に流通分は次の爾時世尊放勝光明以下である。此の義記は上下二巻ありしも下巻は缺して傳はらず、たゞ上巻のみ現存する。而して上巻は第四攝受章までの釋にして、第五一乗章以下の大切なる部分の缺けてゐるのは甚だ遺憾である。第一章は菩提(薩)起行の根本を明かし、第二第三第四の三章は菩提行を明かしてゐる。今便宜の爲義記所明の大略を左に圖示す。



勝鬘經義記

Shō-man-gyo-gi. ①(日) Shō-man-gyo-gi. ②一巻或三巻 ③存、大正五六・一・二、2135、日本

勝鬘經疏

Shō-man-gyo-sū. ①(日) Shō-man-gyo-sū. ②一巻或三巻 ③存、大正五六・一・二、2135、日本

○寂製

聖德太子が、推古天皇の御前に於て、勝鬘經の御講讀のあつたことは、史上有名な事實である。其の御講讀の年に就いて異説があり、日本書紀は推古十四年とし、法王帝説は推古六年といふ説である。十四年説は、法華講讀と混同した疑があるから、六年説が正しいかと思ふ。然し御講讀は三日にして終つたとあるから、極めて要領を講ぜられしものと推察される。講讀の場所は、一般に後の橘寺のある所で、こゝはもと天皇の離宮の在りし所だといふことである。太子の義疏御製作も、之と關係のあるもので、多分講讀の必要から研究を御進めになつたものか、或は既に御製疏の御意志で、大體の組織の立てられしものにより、略して講讀したまひしものであらう。義疏御製作の年代に就いては、太子補闕記には、推古の十七年四月起稿、十九年正月に脱稿せられたと傳へて居る。尤も之にも異説ありて、古今日録抄には、現今流布するものは略疏であり、之を初疏とし、後に更に廣疏を著はされた。これ後疏であると言つて居る。然しこれは信じ難い。推古の十七年は、太子御年三十六歳である。此の義疏は、本經を解するに、序正流通の三大科に分つことは常の如くであるが、更に正宗分をば、本經末文の語によりて、十四章に分ち、以て全經を秩序的に説明して居るのである。即ち所謂十四章とは、一、嘆佛眞實功德章。二、十大受章。三、三大願章。四、攝受正法章。五、一乘章。六、無邊聖

大藏經方等部章疏第五、大日本佛教全書第四、世界聖典全集前輯第四、三經義疏之内(延書本) ①求那跋陀羅(太元一九—泰始四A. D. 394—168)譯、聖德太子(敏達帝二—推古帝二九A. D. 573—621)說推古帝三

論章。七、如來藏章。八、法身章。九、空義隱覆眞實章。十、一諦章。十一、一依章。十二、顛倒眞實章。十三、自性清淨章。十四、如來眞子章

此の十四章の中で、初五章は「乘の輿」、次ぎの八章は「乘の境」を明し、最後の一章は、「乗を御する人」を明すと判じて居る。

要するに此の書、古來勝覺經を註するもの、中、簡潔にして、最も要領を得たるものとして推さるゝ所である。本書引くところの「本義に云く」としてある原本は、果して何であり、誰の説であるかは、今日では推測を許さないのであるが、太子は蓋し之を本として、自己の意見を加へ、製作したまふものと見らるゝのである。

①慶安二刊(正大、一一七・一一二)(高大、奇・一・二三)安永八刊(正大、一一七・一一三)安永九刊(高大、奇・一・二三)明治二八刊(龍大、二四一五・二二二、研佛)(京專)(正大、一一七・一一一)(哲、九・二・二四)

(瑛野黄洋)

**勝覺經義疏私鈔** ①(日)Sho-man-kyō-gi-shō-shi-shō (支)Sheng-man-chi=pe-i-su-ssai-ch'iao. 勝覺經疏義私鈔、勝覺經疏義私記 ②六卷 ③存、正續一・三〇・四、大日本佛教全書第四 ④聖德太子(敏達帝二)推古帝二九 A.D. 573—621 說推古帝三〇(疏)、唐代明空述

⑤聖德太子(敏達帝二)推古帝二九 A.D. 573—621 說推古帝三〇(疏)、唐代明空述

明空といふ人が、更に註を加へて略釋したものである。太子製疏以後、日本の留學僧携へて支那に赴き之を傳へ、明空之を得て

更に釋を施したものである。明空は惟揚法雲寺の僧とあり、天台の妙樂大師荆溪の弟子であると言はれて居る。偶々觀山の慈覺大師が支那に赴くや、此の書を得て頗る其の因縁の奇に驚き、至急に之を寫し、携帶して歸朝し、世に弘まつたものである。

①刊本(京大、藏九三・二)(龍大、研佛)寫本(谷大、餘大・一七〇三) (瑛野黄洋)

**勝覺經口義** ①(日)Sho-man-kyō-ku-gi ②四卷 ③存 ④隨慧(一天明二)A.D. 1782 述 ⑤寫本(谷大、餘大・一五七六)

**勝覺經顯宗鈔** ①(日)Sho-man-kyō-ken-shū-shō. 勝覺顯宗鈔、勝覺師子吼經顯宗鈔 ②三卷 ③存、日本大藏經方等部章疏第五、大日本佛教全書第五 ④普寂(寶永四)天明元 A.D. 1707—1781 述

⑤德川時代に於ける、一大學者として推重せらるゝ、淨土宗の普寂徳門が、主として太子の義疏に基き、傍嘉祥の勝覺經寶窟の説を參照し、普寂自己の見解によつて取捨し、新意を加へて成す所である。其の太子の義疏に就いては、上宮の義疏は、其の文簡なりと雖、其の義最も豊なり、方等の玄猷を申明し、修證の淵府を陶甌す、謂ひつべし此の經の司南といひ、又「其れ事義文釋を詳にし、以て創學の識智を擴むる者は、宜なり、寶窟より精しきはなし、其の藏性の脈義を究め、以て權實の幽蹟を探る者は、聖皇の義疏獨り其の美を擅にす。二家各此の經を解するに利ありと雖、而も上宮の疏、特に其の右に居る」とも言つて居る。其の太子義疏に重きを置きしことは推

して知るべきである。然しながら其の分科に註して、「分科の大綱は上宮の疏に依る、但し一乘章は、率ね寶窟依る、其餘は宜しきに隨つて、稍補刪を事とす」と言つて居るので寶窟にも取り、創見も加へしことが、略ぼ推知さるゝのである。

①安永九刊(正大、一一七・一四一—一五)(龍大、二四一五・二二五)(谷大、餘大・九五)寫本(龍大、二四一五・二二六) (瑛野黄洋)

**勝覺經述記** ①(日)Sho-man-kyō-juk-ki (支)Sheng-man-ching-shu-chi. ②二卷或一卷 ③存、正續一・三〇・四 ④唐窺基(貞觀六—永淳元 A.D. 633—683)説、義令記

本經を三分して由致分と廣説分と依行分とす。由致分は第一章の初四頌までにして、これに通叙と別叙とあり、更に別叙を四分して一、平章遺信。二、勝覺喜請(勝覺得書以下)。三、佛現在空(即生此念時以下)。四、接歎歸禮(勝覺及眷屬以下)とす。廣説分は第一章の第五頌如來妙色身より第十五勝覺章の初め迄已親近百千億佛能説此義に至るまでにして、その内容を區分すれば(下段別表)の如くである。

依行分は第十五勝覺章の爾時世尊放勝光明以下にして、これを三分し一、如來等還。二、重述其教(爾時世尊入祇洹以下)。三、大乘奉行(時天帝釋以下)とす。

此の述記は慈恩基法師の説けるものをも有し、これを書寫し、慈恩示寂の儀鳳二年の夏洛都東太原寺に於て門人義令が更にこれを

如來眞實功德章第一	十受章第二	三願章第三	攝受章第四	一乘章第五	無邊聖諦章第六	如來藏章第七	法身章第八	空義隱覆眞實章第九	一諦章第十	一依章第十一	顛倒眞實章第十二	自性清淨章第十三	如來眞子章第十四	勝覺獅子吼章第十五
行	果	果	果	果	果	果	果	果	果	果	果	果	果	果
明法	明法	明法	明法	明法	明法	明法	明法	明法	明法	明法	明法	明法	明法	明法
修行者	修行者	修行者	修行者	修行者	修行者	修行者	修行者	修行者	修行者	修行者	修行者	修行者	修行者	修行者
辨人	辨人	辨人	辨人	辨人	辨人	辨人	辨人	辨人	辨人	辨人	辨人	辨人	辨人	辨人
利他行	利他行	利他行	利他行	利他行	利他行	利他行	利他行	利他行	利他行	利他行	利他行	利他行	利他行	利他行
修萬行	修萬行	修萬行	修萬行	修萬行	修萬行	修萬行	修萬行	修萬行	修萬行	修萬行	修萬行	修萬行	修萬行	修萬行
自利行	自利行	自利行	自利行	自利行	自利行	自利行	自利行	自利行	自利行	自利行	自利行	自利行	自利行	自利行
教理	教理	教理	教理	教理	教理	教理	教理	教理	教理	教理	教理	教理	教理	教理

延昌四年五月二十三日於京承明寺寫勝鬘  
疏一部高昌客道人得受所供養許  
とあるに依れば、本書は勝鬘經疏の筆寫本  
たるを知る。江字は法の寫誤なれば、照法  
師といふ人の註釋書で、延昌四年に就いて  
は高昌のそれと、北魏の延昌とあり。こゝ  
ではその何れかは定め難きも、北魏の延昌  
四年ならば、西紀五一五に當り、高昌の  
それならば西紀五六四に當り、略五十年間  
の差異を見る。照法師の傳未だ詳かでない  
。

本書は經首「勝鬘夫人是我之女(中略)心  
得無疑」の句釋に始つて、經末の流通結題  
に及んでゐる。一經を十五章に分ち、同じ  
く熾煌本の正始義記や慧遠の義記などに似  
て、十五章經と見てゐる。太子の勝鬘疏は  
十四章となし、兩者の間に差異を見る。本  
疏を通讀して見るに、本經の文句を細釋す  
るに當り、後代の如く徒らに博引傍證に努  
め、訓詁の弊に陥るの風なく、専ら、一經  
の大宗大義を闡明して、直に佛道修行の實  
際に適用せんとしたることに注目すべきで  
ある。其の點、他の正始の義記に於ても認  
めらるゝ所である。勝鬘經研究者に取りて  
必讀の書で、又良參考書である。鳴沙餘韻  
解説第一部五〇—五三頁を参照せよ。

①熾煌出土本(大英博物館藏S. 524)  
(次吹慶輝—成田昌信)  
勝鬘經疏 ①(日)Shō-man-kyō-sho.  
(支)Shēng-man-ching-su. ②二卷 ③唐  
代遺倫述 ④(參考) 新編諸宗教藏總錄第  
一

勝鬘經疏 ①(日)Shō-man-kyō-sho.  
勝鬘經義疏、勝鬘上宮疏 ②二卷或一卷  
③存、大正五六・一No. 2185、日本大藏經  
方等部章疏第五、大日本佛教全書第四、世  
界聖典全集前輯第四、三經義疏之内 ④聖  
德太子(敏達帝二—推古帝二九 A. D. 573—  
621)說推古帝三〇疏述 ⑤勝鬘經義疏の  
下を見よ ⑥(參考) 淨土真宗教典志第一  
卷 ⑦二卷 ⑧惠範 ⑨(參考) 奈良朝現在一  
切經疏目錄1910

勝鬘經疏 ①(日)Shō-man-kyō-sho.  
(支)Shēng-man-ching-su. ②一卷 ③唐  
代靖遺述 ④(參考) 諸宗章疏錄第一、奈  
良朝現在一切經疏目錄1907  
勝鬘經疏 ①(日)Shō-man-kyō-sho.  
(支)Shēng-man-ching-su. ②二卷 ③新  
羅元曉(眞平王三九A. D. 617—)述 ④(參  
考) 新編諸宗教藏總錄第一、諸宗章疏錄第  
一、注進法相章疏、奈良朝現在一切經疏  
目錄1908  
勝鬘經疏義合註 ①(日)Shō-man-  
kyō-sho-gi-guc-ha. ②六册 ③存 ④  
(哲)ふ・二・左・二六)

勝鬘經疏義私記 ①(日)Shō-man-  
kyō-sho-gi-shi-ki. (支)Shēng-man-ching-  
su-i-shi-ki. 勝鬘經義疏私鈔、勝鬘經疏義  
私鈔 ②六卷 ③存、己續一・三〇・四、大日  
本佛教全書第四 ④聖德太子(敏達帝二—  
推古帝二九 A. D. 573—621)說推古帝三〇  
疏、唐代明空述 ⑤(參考) 諸宗章疏  
錄第一

勝鬘經疏義私鈔 ①(日)Shō-man-  
kyō-sho-gi-shi-ki. (支)Shēng-man-ching-  
su-i-shi-ki. 勝鬘經義疏私鈔、勝鬘經  
疏義私記 ②六卷 ③存、己續一・三〇・  
四、大日本佛教全書第四 ④聖德太子(敏  
達帝二—推古帝二九 A. D. 573—621)說  
推古帝三〇疏、唐代明空述 ⑤(參考) 入  
唐新求聖教目錄 ⑥寫本(谷  
大、餘大・一七〇三)

勝鬘經疏詳玄記 ①(日)Shō-man-  
kyō-sho-shō-gen-ki. ②十八卷(内五卷缺)  
③存、大日本佛教全書第四 ④凝然(仁治  
元—元亨元 A. D. 1240—1321)述  
⑤凝然大德は、聖德太子の崇拜者で、其の  
三經義疏の解釋については、特に其の力を  
盡して研鑽の結果、各三經義疏に關する三  
部の大著を公にして居る。自ら三經學士と  
稱して居たのを見て、其の自信の程が思  
はれる。本書は其の三部の中の一つであつ  
て、勝鬘義疏の研究には、他に類のない唯  
一のものである。惜しい哉十八卷の内、前  
の五卷を缺き、十大受章以下を存するのみ  
である。

勝鬘經疏聞記 ①(日)Shō-man-kyō-  
sho-mon-ki. ②一卷 ③存 ④寫本(龍  
大・二四一五・二一八)  
勝鬘經隨疏義記 ①(日)Shō-man-  
kyō-zui-sho-gi-ki. ②四卷 ③智洞(一文  
化三A. D. 1806)作 ④(參考) 淨土真宗教  
典志第二  
勝鬘經款佛偈釋 ①(日)Shō-man-

勝鬘經通解 ①(日)Shō-man-kyō-  
tō-gai. ②一卷 ③存 ④小林一郎述  
大正一一刊 ⑤(龍大、研佛)谷大、餘大・五  
五九)

勝鬘經實窟 ①(日)Shō-man-kyō-  
hō-kutsu. (支)Shēng-man-ching-pao-k'u.  
勝鬘實窟 ②三卷或六卷 ③存、大正三  
七・一No. 174、己續一・三〇・三 ④隋吉  
藏(大正三—武德六A. D. 549—633)述 ⑤  
勝鬘實窟の下を見よ ⑥(參考) 東城傳燈  
目錄卷上、諸宗章疏錄第一 ⑦光緒二六刊  
(京大、藏・九・三)(谷大、餘大・一三一八)  
寶永元刊(龍大・二四一五・二一九)(谷大、餘  
大・六八〇)(京大、藏・九・四)(高大、奇・  
一・三)(正大、一一七一・七一九)  
勝鬘經實窟科 ①(日)Shō-man-kyō-  
hō-kutsu-ka. ②一卷 ③存 ④寫本  
(正大、一一七一・一〇)

勝鬘經實窟校正 ①(日)Shō-man-  
kyō-hō-kutsu-kō-sei. ②一卷 ③存 ④  
明和二刊 ⑤(龍大、二四一五・二二一)  
勝鬘經略解 ①(日)Shō-man-kyō-  
ryaku-gai. ②二卷 ③存 ④寫本(龍大・二  
四一五・二二三)  
勝鬘顯宗鈔 ①(日)Shō-man-ken-  
shū-sho. 勝鬘顯宗鈔、勝鬘師子吼經顯宗  
鈔 ②三卷 ③存、日本大藏經方等部章疏  
第五、大日本佛教全書第四 ④普寂(寶永  
四—天明元 A. D. 1707—1781)述 ⑤勝鬘經

顯宗鈔の下を見よ ①寫本(龍大、二四一  
五・二一六)安永九刊(正大、一一七一・一四  
一・一五)(龍大、二四一五・二一五)(谷大、餘  
大・九五二)

**勝鬘師子吼一乘大方廣經**

①(日)Shō-man-shi-ku-ichi-ji-dai-ho  
ben-hō-kō-gyō. (支) Sheng-man-shih-  
tā-hou-i-ch'ing-ta-fang-pien-fang-kua=  
ng-ching. (梵)Śrīmata-simha-nāda-sūtra  
(引用)(藏)Hhags-pa lha-mo dpal-phren  
gi sen-geñi sgra shes-bya-ba theg-pa  
chen-pohi nudo. 勝鬘師子吼一乘大方廣經、  
勝鬘經、師子吼經、勝鬘師子吼經、師子吼  
方廣經、勝鬘師子吼經、勝鬘大方廣經

②一卷 ③存、大正一一・二一七No. 333、  
縮地一二・二六・五、北54推、南52推、元  
53推、明北55推、清55推、麗55推、天53  
推、指46袋、法55袋、至122有、明南52推、  
Nj. 59 ④求那跋陀羅譯 ⑤劉宋元嘉一一  
一〇(A. D. 435—443)

①求那跋陀羅三藏が、劉宋の文帝の元嘉十  
三年八月十四日、丹陽郡にて譯出すとあ  
る。これは求那跋陀羅の支那に來た翌年の  
ことで、譯者は未だ支那語には通じて居な  
かつたと思ふ。故に譯すと云つても、譯主  
として、印度語にて之を講述し、其の經意  
を明にしたので、之れを聞いて支那語に轉  
じたのは、實に寶雲の力である。此の經の  
特色は、純小乘を破斥して、大小二乘の一  
致、即ち大乘を離れて小乘の成立しないこ  
とを明し、次に大乘の體としての各人の  
如來藏を闡明し、本性清淨なることを示

し、本性開顯すれば、即ち法身現出して、  
成佛の主旨に歸することを述べ、しかも此  
の經は勝鬘夫人なる一女性が、佛の威神力  
を蒙りて、全經を説けることを大體の形式  
として居るので、男女二者平等の妙境を暗  
示し、以て男尊女卑の、舊來の一般思想を  
打破したる所にあるのである。

⑥光緒二二刊(京大、藏・一・五)寛文二二  
刊(谷大、餘大・一六二七)(高大、寄・一・二  
三)寶永元刊(高大、寄・一・二二)(正大、一  
七一・一一二) (境野黃洋)

**勝鬘師子吼一乘大方廣經**

①(日)Shō-man-shi-ku-ichi-ji-dai-ho  
ben-hō-kō-gyō. 國譯勝鬘師子吼一乘大方  
便方廣經 ③存、國譯大藏經各部第三  
境野黃洋譯

**勝鬘師子吼經**

①(日)Shō-man-shi-  
ku-ku-gyō. (支) Sheng-man-shih-tā-hou  
ching. 勝鬘師子吼一乘大方廣經、勝  
鬘經、勝鬘師子吼經、勝鬘大方廣經、勝  
師子吼經、師子吼方廣經 ②一卷 ③存、  
大正一一・二一七No. 353、縮地一二・二六・  
五、北54推、南52推、元53推、明北55推、  
清55推、麗55推、天53推、指46袋、至122  
有、明南52推、Nj. 59 ④求那跋陀羅譯

**勝鬘師子吼經顯宗鈔**

①(日)Shō  
man-shi-ku-ku-gyō-ken-shū-shō. 勝鬘  
經顯宗鈔、勝鬘顯宗鈔 ②三卷 ③存、日  
本大藏經方部章疏第五、大日本佛教全書  
第四 ④普救(寶永四一天明元 A. D. 1707

一178)述 ⑤勝鬘經顯宗鈔の下を見よ  
⑥安永九刊 ⑦(正大、一一七一・一四一  
五)(龍大、二四一五・二一五)(谷大、餘大・九  
五二)

**勝鬘疏**

①(日)Shō-man-shō. (支)  
Sheng-man-shū. ②二卷 ③隋惠遠(普通四  
一開皇一一A. D. 523—529)述 ④(參考)  
諸宗章疏錄第二

**勝鬘疏**

①(日)Shō-man-shō. (支)  
Sheng-man-shū. 勝鬘經述記 ②一卷或二卷  
③存、記續一・三〇四 ④唐窺基(貞觀六  
一永淳元 A. D. 632—639)記 ⑤勝鬘經述  
記の下を見よ。 ⑥(參考) 諸宗章疏錄第  
二

**勝鬘上宮疏**

①(日)Shō-man-jō-gū  
-shō. 勝鬘經義疏、勝鬘經疏 ②一卷或三  
卷 ③存、大正五六・一No. 2185、日本大  
藏經方部章疏第五、大日本佛教全書第  
四、世界聖典全集前輯第四、三經義疏之内  
海印懸譚之内 ④聖德太子(敏達帝二)推  
古帝二九 A. D. 573—631 一説推古帝三〇  
寂)述 ⑤勝鬘經義疏の下を見よ。 ⑥寫本  
(龍大、二〇三・一)

**勝鬘註解**

①(日)Shō-man-chū-ge.  
(支) Sheng-man-chū-chieh. ②二卷 ③僧  
復述 ④(參考) 諸宗章疏錄第二

**勝鬘夫人會**

①(日)Shō-man-lu-  
nin-e. (支) Sheng-man-fū-jin-hui. (梵)  
Śrīmata-simha-nāda-sūtra (引用)(藏)  
Hhags-pa lha-mo dpal-phren gi sen-ge-  
ñi sgra shes-bya-ba theg-pa chen-pohi  
ndo. ③存、大寶積經第四八(大正一一・六

**勝鬘夫人本緣經**

①(日)Shō-man  
fu-nin-honnen-ku-gyō. (支) Sheng-man-fū-  
jèn-pên-yuan-ching. ②一卷 ③根本說  
一切有部毘奈耶雜事第七卷の抄出。 ④(參  
考) 開元錄第一六、第一七、貞元錄第二  
六

**勝鬘寶窟**

①(日)Shō-man-hō-ku  
su. (支) Sheng-man-pao-ku. 勝鬘經寶窟  
②六卷 ③存、大正三七・一No. 174、正  
續一・三〇・三 ④隋吉藏(太清三—武德六  
A. D. 549—633)述

①支那で製作された勝鬘經註疏中で、最も  
詳密を極めて居るので、後世の學者此の經  
を學ぶもの、専ら此の註を依用して來て居  
るのである。著者吉藏嘉祥大師は「余既味  
すること既に重く、鑿鑽年を累ね、古今を  
拊拾し、經論を搜檢し、其の文を撰し、  
勒して三卷を成す」とあるので、自ら得意  
の作たることを想像せしむるに足るのであ  
る。三卷を更に六卷となすものは、後世の  
便に隨ふのである。太子義疏は正宗全體を  
十四大段に區分せるに對し、此の寶窟は之  
れを十五章となし、前の十三章を正說法と  
し、後二章を勸信護法とし、また正說法十

名所行發①(名庫書)著處所現②月年の刊③(書考參書釋註)書末④説解存内⑤代年作著⑥著者⑦缺存⑧數卷⑨(名書)名題⑩號略字數

三章の中で、初めの三章を説を起すの方便とし、次ぎの十章が、眞の正説段と見て居るのである。

④寶永元刊(正大、一一七一・七一九)(谷大、餘大・六八〇)(龍大、二四一五・二一九)(高

大、寄・一・二三)(京大、藏九シ・四)(光緒二六

刊(京大、藏・九シ・三)(谷大、餘大・一三一

八)

⑤文政一二(A. D. 1829)

⑥(大原)

⑦(大原)

⑧(大原)

⑨(大原)

⑩(大原)

⑪(大原)

⑫(大原)

⑬(大原)

⑭(大原)

⑮(大原)

⑯(大原)

⑰(大原)

⑱(大原)

⑲(大原)

⑳(大原)

㉑(大原)

㉒(大原)

㉓(大原)

㉔(大原)

㉕(大原)

㉖(大原)

㉗(大原)

㉘(大原)

㉙(大原)

㉚(大原)

㉛(大原)

大、二六五一・七)

①(日) Sho-cha-sho. 三大部

切合 ②一卷 ③存、天台小部集釋第八

④圓珍(弘仁五—寛平三 A. D. 814—891—

説寛平四、年七八寂) ⑤(参考) 山家祖

德撰述編目集卷上、諸宗章疏卷第二

⑥(日) Sho-cha-sho. ⑦一包

⑧存 ⑨徳川時代寫 ⑩(寶善提院)

⑪(日) Sho-cha-sho. ⑫一包

⑬(日) Sho-cha-sho. ⑭一包

⑮(日) Sho-cha-sho. ⑯一包

⑰(日) Sho-cha-sho. ⑱一包

⑲(日) Sho-cha-sho. ⑳一包

㉑(日) Sho-cha-sho. ㉒一包

㉓(日) Sho-cha-sho. ㉔一包

㉕(日) Sho-cha-sho. ㉖一包

㉗(日) Sho-cha-sho. ㉘一包

㉙(日) Sho-cha-sho. ㉚一包

㉛(日) Sho-cha-sho. ㉜一包

㉝(日) Sho-cha-sho. ㉞一包

㉟(日) Sho-cha-sho. ㊱一包

㊲(日) Sho-cha-sho. ㊳一包

㊴(日) Sho-cha-sho. ㊵一包

㊶(日) Sho-cha-sho. ㊷一包

㊸(日) Sho-cha-sho. ㊹一包

㊺(日) Sho-cha-sho. ㊻一包

㊼(日) Sho-cha-sho. ㊽一包

㊾(日) Sho-cha-sho. ㊿一包

㋀(日) Sho-cha-sho. ㋁一包

㋂(日) Sho-cha-sho. ㋃一包

㋄(日) Sho-cha-sho. ㋅一包

㋆(日) Sho-cha-sho. ㋇一包

㋈(日) Sho-cha-sho. ㋉一包

㋊(日) Sho-cha-sho. ㋋一包

一般に遅いものであるから、たとひ此の論

が西蔵に譯された時既に提婆菩薩の著とせ

られて居たにしても、漢譯よりも後である

爲に、此の論の著者に關する説としても、

漢譯の方が古傳である。又義淨三藏は印度

に留まつたこと長く、印度で此の論を自ら

得て來たのであるから、陳那菩薩の著とな

すことも印度の説である。西蔵の提婆菩薩

説も、たとひそれが印度の説であつて決し

て西蔵に來てからいはるに至つたのでは

ないにしても、年代上西蔵に傳はつた説の

方が新しい。故にかゝる點のみでいうても

古説たる陳那菩薩説を眞と認む可である。

然し既に傳説が一致しない以上は、一層決

定的となる根據は之れを此の論中の内容に

求むべきである。其の内容は所謂蛇繩麻の

三喻によつて唯識無境を明すにあるのであ

るから、かゝる説が提婆菩薩の時代に存す

る所以は、到底考へらるゝことでない。殊

に蛇繩麻の三喻は元來攝大乘論に於て説か

れたものであつて、従つて此の論はそれに

基いて、簡単に纏めたものであると見らる

る。故に此の内容は瑜伽行派の人たる陳那

菩薩の著となす方が正しいと考へらるゝ。

従つて時に學者が兩傳説を折衷して論中の

頌文は提婆作で釋文が陳那造であらうとな

すのも決して承認せられ得る説でないとい

はねばならぬ。

本論は極めて簡単なものであつて、僅か

に六頌と長行とから成つて居る。而も最後

の一頌は別頌といはれて居るから、本論に

屬するものとしては五頌のみの理である。

第一頌に蛇繩麻の三喻が説かれて居るので

あるが、こゝには麻の代りに分(又は長行

には支分)とせられて居る。此の喻は一切

の境は繩に喩へらるゝ依他性のもので因縁

法たるに過ぎないが、凡夫は、之れを蛇と

計度妄想し蛇想によつて恐怖等の心を起し

て居るも、元來繩に過ぎないことを知れば

分別性たる蛇の解は消散するに至るに相違

ないし、更に又之れと同じく依他性の繩も

麻であり、分が繩と現はれて居るに外なら

ぬことを了知し得れば繩の解も亦消散する

こと蛇の解の如くで分のみとなり遂には分

も留まらないに至り眞實性となるといふの

である。第二頌に於ては此の喻を諸有の假

設の事にあつて、説いて一切は世俗諦の境と

なし、第三頌では、恰も麻又は分に當る如

き極微が残ると考へられむも至極微は非有

と同じで惑亂心の所産のみとなすのである

から、此の所縁の無から當然能縁の非有が

いはれねばならぬとなし、所謂境識俱泯が

其の最後點なることを表はして居る。第五

頌は以上を實踐に適用して煩惱斷除に進む

べきを説くのである。最後の別頌は以上の

いはゞ、自利の行を利他の方面に向はし

め、和光同塵の同事に於て化他に努め其の

間にも眞勝義を明にして共に解脱に至るべ

きを勧むるものである。かく一覽するに此

の論は甚だ要領を得た簡潔な論なることが

判る、まさにこれ陳那菩薩が攝大乘論に基

いて簡単にかく述べたもので、菩薩にはか

ゝる簡潔にして要領を得た著書が少くない。

漢譯に傳はらなかつた入瑜伽論の如き

も亦かゝる種類の論である。

掌中論には古い異譯として眞諦三藏が陳代に譯した解拳論が在する。解拳の拳は數々捲ともせられて居るが、此の場合捲は拳と全く同意味で、相通じて用ひられたものに外ならぬ。掌中と解拳とは如何にも意味が反對の如くにも見ゆるが、實際はさうではなくして、恐らく師の秘する如き掌中の説を、掌中論はこゝに解き明して述ぶる意味となし、解論はそれを解き述べるの意味となしたのであると見るべきであらう。従つて掌中も解拳も其の原語を異にするのではなく、全く同一であつたに相違ない。

原語が如何なる字であつたかについては説が異つて、或はハスターバツ(Chasthava)ともハスタワラ(Hastavala)ともハスタバーサ(Hastavasa)とも或はムシュティ(Musti)ともターラントラカ(Galantarakka)ともなされるから明確でない。或は此の外に眞の原語たるものがあるのかも知れぬ。(宇井伯壽)

掌中和讃 (日) Sho-chu-wa-san.

存、國文東方佛教叢書第八

掌珍料簡 (日) Sho-chin-ryo-ken.

(支) Chang-chen-hiao-chen. 掌珍論料簡

一卷 (新羅元曉) 眞平王三九A.D. 617

一述 (参考) 東域傳燈目錄卷下

掌珍量薄 (日) Sho-chin-ryo-do.

掌珍量薄注 二卷 存、大正六五・二六六 No. 2328、大日本佛教全書第八〇、日本大藏經掌珍智度宗論論章疏 秀法師述

本論一卷は所謂清辨護法空有の諍論に對

して法相宗の人なる秀法師(日本)が自宗の立場より解説批判を加へしもの、一編の主旨は論初頭の「夫空有之論其來尙矣、略舉本教彰諍論由」の句に表はさる、先づ瑜伽論三十六(大正三〇・四八八頁・C、尙掌珍論上卷、大正三〇・二七一頁・C、二七二頁A終ノ方參照)の惡取空者善取空者の説を引き、彼(遍計所執)に於ても此(依他起性)に於てもその空となす所以の正理(遍計は體相都無の空、依他は緣生假有上の空)を信受せずして一切無所有となすを惡取空者とし、唯遍計のみを空と遮遣し、依他は因緣有とするを善取空者と名づくとして、此に正しく諍論の中心問題即ち依他空有の問題を提起す。同上文が掌珍論にも引かるゝも指摘して、清辨護法の取義不同にして清辨は三無性を眞、三性を俗とし、護法は三性を眞、三無性を俗として各別意を以て空有を釋すと云ひ、更に瑜伽七十六卷(實は七十五卷、大正三〇卷、七一三頁・B)の世俗故一切皆有、勝義故一切皆無と説くを惡取空者と名づくとの定義を掲げ、清辨が「諸法從緣起、緣法兩皆無、能如是正知、名通達緣起」若法從緣生、此法都無性、若法都無性、此法非緣生」の經頌を引き以て依他の體を空なりと證する(廣百論第八卷)を以て惡取空者に擬し、之れに對して相應師(即護法瑜伽師)が從緣生法而有二種、一遍計所執、二依他起性、彼經唯說「遍計緣生一名爲空、非依他起」と通釋し、證するに「遍計所執無、依他起性有、妄分別失壞、墮增減二邊」の經頌(廣百論卷八所引)を以

てし以て護法が中道を立つるの證とす。此れに問者の「不善瑜伽は一向に有に執し、清辨は惡取して一向に空に執す、但だ護法のみは廣百論卷八に「應捨執有空兩邊領悟大乘不二中道」と説き獨り中道を存す。偏有、偏空ならば應に互に相對敵すべし、然るに護法を引いて清辨の敵となすは何ぞ」と問ふに對して、偏の有空は俱に二邊に墮す、則ち過あり。故に護法の中道を引いて清辨の偏空を破すなりと答ふ。更に問者、清、護、二宗の本意如何と問ふに對し、慈恩の所傳に基いて「一切の諸法は本來智の證表を離る有・空あることなし。但偏病を遣らんが爲に離言法中假に有空と説きて中道を悟會せしむ」と答へ、更に「阿含・般若等の有・空の説も皆遍計を遣るも依圓を遣るに非ず、具には深密の所説の如し」と開示す。之れを以て「佛敎は皆中道に依るも學人偏執して過をなす、清護の二宗既に俱に中道を立するも、但清辨は俗有非空眞無非有之中道と名づく、此の眞性の空無は般若經等の宗極にして不可説の眞性中に假説するなり。即ち三性を俗、三無性を眞とし遂に掌珍論の主題偈の如き「眞性有爲空」云々の量を立て、然るに今護法は集起經を引き「第八義有染淨の法を生ず、故に眞性中唯空のみと云ふべからず」と云ふ、故に中道敎は一切法に於て説も廢證も俱に非空にして有を以て宗極とし、我法の二空を遣つて依圓の有を存す、之れを中道と名づく。世俗の故に我・法有と説き、勝義に依らば之れを空とす。三無性の情有を俗とし、依。

圓二性の理有を眞とす。若し皆空と言はゞ集起・華嚴・深密・法華・涅槃所説の理事因果一乘佛性に達す。と論じ、慈氏の、有爲無爲有、我及我所空、故説一切法非空非不空の説及び成唯識論卷七(導本、二二丁右)の我法非有、空識非無、離有離無故契中道の説を引き中道を説明す。次に清辨所立の空の宗を吟味し、之れを以て自ら負き、宗と敎とに違するの二失ありとし、又(彼清辨)の宗の有法(主辭)は眞性に約して空なりと立するも、我が宗の眞性は心言絶するが故に空・不空に非ず、寄言假説せば依・圓は空に非ず、遍計は有に非ず、これ中道の義なり、故に汝が宗の有法は一分非極成の過なりと説き、續いて清辨の伏難を破し、更に疏(掌珍論疏ならん法相家人作の)によつて「我は四種の勝義(即四重の二師中)を立てずも汝は之れを許さずして眞性は定んで空なりとす、空有相待して中道を成す、故に汝の一分の空のみを何んぞ中道と名づけん」と説き、又護法の宗は空有並びに破す。有人の護法を難じて「護法の宗は有を立し空を破す、これ深く本義に乖く、これ上の清辨の正顯(眞性)有爲」の有法の成ぜざる所以なり、との論は不當なり、豈護法の宗は廢證門に於て非空を立てんや」と護法の爲に辯ず。更に問に答へて廣百論卷八の「眞非・有無、心言絶故、爲破・有執假説爲無、有無二説皆世俗言、勝義理中有無俱遣、聖智所證非有非無、而有而無」等の句を引き護法が中道を以て清辨の空を破するの證とす。更に重ねて樞要の言を引い



て清辨の空宗は非空非不空の中道宗に望めて一分の失有り論ず。疏は之れを自教の失と數ふ。更に重ねて疏の句により「護法は俗神中に三重の勝義（法相宗四重二神の内）を開くも清辨は之れを許さず、これ還て清辨が有に依つて真となさずして空に依つて真を立つるの證とし、清辨の（眞性）有爲空は護法が廢論内に於て非有非空の勝義を立つるを謂ふに非ず」として飽迄清辨を以て中道に契はざるものとす。而して問に答へて清辨の「眞性有爲」は並びに皆是れ空にして中道に望むるにこれ一分なりと前説を詳しくす。更に了義燈を引きて「彼清辨は皆空の眞性を擧す。故に有爲法無し。本来の意は眞性を取つて有法と爲すにあらず。眞性中には一切言説無きに云何ぞ眞性も以て有爲の有法となさん。故に有法に過なり。而して清辨の擧ぐる眞性は即ち有爲有法の無なり、有爲の空なり。然らば還つて有法（家の主辭）を成ぜずべし。故に彼の眞性は宗を離れたる簡別の（絶對中道の）眞性に非ず。かゝる眞性に對しては能依の有爲のみに獨り不空なり」として演秘、續記等の「眞性有爲既是有法」の句を引き、當代末學不依此文、別導疏文、甚以可笑。とて次に疏文を引く。即ち「若し小乘に隨はば彼（有爲有法）は實有と轉ず、下に既に有爲有法不成の所以を知るは皆簡別に依るなり、此れに由つて次に簡別眞性不成の理由を出さん」と。次に「此の量の喻（空花）に俱不成あり、因明中のこれと同異如何」との問に對し、因明中に有及び無の二の俱不成あり、

此れに四句有り、先に擧げたる樞要の俱不成は第四句（無體の宗因の無俱不成）なりと明す、何となれば本来眞性中には（有・空）二宗並びに許して而も空・有を云はず、然るに清辨は眞性に空及び因縁生を云ひ、護法は之れを許さず、故に清辨の宗と因とは並びに無體なり、喻たる空花等も亦無體なるが故にこれ即ち喻の無俱不成なり。又清辨の有法は敵護法が許さざるを以て、之宗の所別（即有法）無く、又因の所依（即有法）も成ぜざるなりと、更に「此の二不成は唯、喻の失にして宗と因とは俱に有なるが故にこれ初句（宗因有體無俱不成）に當るべし」との疑問に對して、若し清辨の眞性にして宗・因有體に當らば中道眞性中に何んぞ有・空・縁生を立てんや。故に初句に同せず、第四句の義の如しと答釋す。次に佛頂經と掌珍論（論初頭の主題偈）との立量の同異如何との問に、文似義異なりとて、經の量は（我法）二空の理を取つて簡別の眞（絶對的眞理）とし、依他非有は外人の實有の妄執を遣らんが爲の能別の宗（相對的眞理）なり、廣百論に「諸有爲法非實有體」と云ふは是也、般若及び攝論等の十喻中八・九・十の喻は皆依他非有の義を喻へ、遍計を喻ひざるも同意なりと明す。又問者が「般若經には眞性の異名十餘種を擧ぐれど其の中に依他を勝義となすの文を見ず、護法が依他中に勝義を説くは何經に依るや」との問に、涅槃仁王又之によれる瑜伽・顯揚等諸論の多重の勝義を説くを示し、清辨は此の義を許さざる故理は不了なりとす。次に廣百論卷七中の「所執境略有二種、一者有爲、二者無爲、諸法從縁生、故猶如幻事、非實有體、諸無爲法亦非實有以無生故譬似龜毛」の二量を引きて掌珍主題の二量と同一なりとし批判を求むるに對し、答へて不當なりとし、廣百の比量と第八識を有とする佛頂經の比量とは同じ（俱に非有非空の勝義を説くが故に）然るに清辨の勝義は一切無所有として偏空に墮するが故に之れと異ると。又疏九に三性を説くを引き、清辨等が依他起を假有と名づくるも此の假は無體假なり、即ち俗に約しての假有にして眞に約すれば無なりと釋す。又慈恩の因明疏に「若し宗に勝義を標せば掌珍に云ふ如き「眞性有爲空、如幻縁生故」の宗量も自教世間に違するの過無し」と云ふを引き、然れば則ち大小乘所説の漏無漏因縁所生俗有の法は勝義を以て云へば皆已に遮し了れり、今勝義に依つて諸法の空を立するに何教に違するが故に自教及び宗等に違すと説くやとの反問に對し、空有教中に説く勝義は眞の勝義に非ず。非空非有の勝義を説く、宗に違するが故に宗及び自教に違すと名づく、若し勝義に了・不了無くば今勝義の言を以て已に簡別し了れり。更に何教に違せんや、世尊判にて有空二教を不了義、非有非空を了義と爲し給へり。之れに依つて中道に違するを宗教に違すと名づくと答釋す。更に問答して數論の我是思の宗は佛教と舊來相諍へるに依り所別（宗の有法）成ず。勝論の有性は此の如からずとし、次に掌珍論の量起の因を説く（正

藏三〇卷二六八頁（中頃）中、「若し他が遍計所執の有爲を勝義神に就いて實に自性有りと爲すも（是れ薩婆多の義也）今は立て、空と爲す」と云ふを引き、之れを疏に「若し法を分別する時捨すべき名有らばこれ俗神無くんば（四大の自性の如し）勝義神なりとするこれ有部の義なり。今彼有部の義を破せんが爲めに空を以て有病を破す、病除かば空も亦除く」有部の勝義神は清辨宗の俗神門なり、故に自教・世間等に違するの失は有部に就いて云ふべからず、唯清辨の勝義に約して云ふべきのみとす。」と説く、又疏は下に十八異執を破す、その第二に有性論者は清辨に有法不成及び因所依（即ち有法）不成の過を擧ぐれど、これ護法の清辨に對する所別（即ち有法）不同の難との同異如何との問に對し、有性論者は俗神に約して勝義空を難するも護法は中道門に約して清辨の眞性空の有法を難する故全く相異す。但、第十六に相應師（瑜伽師）の三無性の義を破するはこれ護法に當れど疏中名を擧げざる故不明なり。但だ彼の勝義に由つての故に此の依他の法は實には無なりと云ふ。此の勝義に依つて空する所の依他は即ち世俗神に約しては實に是れ有なり、然れば護法は遍計に由つての故に實には無なりと説く、此れに由らば依他上の遍計が空なるが故に依他法は實に有なり。」と。又以下に問答して清辨・護法の唯境・唯識の義を論ず。曰く、清辨は唯境を立つ、眞性有爲空と云ふ如し。唯空境を立し（空も亦境なり）議を立てざるが故に。問曰、此量は一切色心を遮し

て總じて空を立つるも遮表にして詮表に非ず、俗神に約しては心境並有と立つるも正しくは唯識の義を立つ、勝義に約しては心境並無と立つ、然らば何によつて唯識の義を立つるや。答曰、護法は識が境を變現するの能變所變門に約して唯識を立つ、清辨は境によりて識を生ずとの境因識果の門に依つて唯識を立つ(何れも俗に依る)廣百論疏十(何人の疏なりやは不明)に若隨世說唯識二者、亦應隨世故、說唯境と云ふ。境無くは心生ぜず、又境は常恒、心は間絶する故唯境と説くと論じ、以上かく清辨護法の宗義を略述し了りて後に撰者は私見を以て云ふ、凡て清辨の義は玄奘の所傳なり、何故に餘師言を加ふるや(玄奘の義即ち瑜伽唯識の、即ち護法の義を以て正義とすべし)の義か)玄奘已に基師(慈恩)に授く、此の系統以外に何人か入竺して清辨宗を受けたりや、諸三論家は皆基師に(清辨の義を受く、然るに今誰に依つて還つて師を誹るや(秀法師當時の論争を思ふべし)。又智度中・十二の三論は龍樹造及び百廣百二論は提婆の造にして玄奘譯の廣百論を除いて餘は羅什の所譯なり、羅什は悉有佛性の義を立せず(一)、今三論師誰の所説を受けて悉有佛性の義を立つるやと本論を終る。要するに本論一卷法相宗の立場より空・有の諍論を述論し護法を以て中道の正義を説くものとして掲げ、清辨を以て偏空に墮するの過を犯すものと判定せんとするものゝ如し、その清辨解釋、從つてその判定の是非は遽に首肯し難かるべし、唯空有諍論に

關する文献として珍重すべきものゝ一ならんか。

次に撰者秀法師に就いては不明なるも寫本の奥書によれば、最初の寫本は保元元年(A.D. 1150)に已に藏俊の弟子覺慧によりて爲されたるより見て藏俊以前の人なることを知るべく、又寫傳の人々が皆法相宗の人となることより秀法師も亦然りしを察し得べし。今試みに藏俊等より法相宗系譜を遡りて此の名を探るに洪秀等を得れど果して此の人なるや否やは審ならず。最後の寫本は藥師寺僧大同房基辨(A.D. 1722-1791)によりて安永二年に成されしものなり。

●享保三寫 ●(谷大、長保・二五四)寫本(藥師寺藏本) ●(遠藤二平)

●掌珍量遺注 ●(日)Sho-chin-ryō-do-shi. 掌珍量遺 ●一卷 ●存、大正六五・二六六No. 2353、大日本佛教全書第八〇、日本大藏經掌珍智度宗論章疏 ●秀法師述

●掌珍論 ●(日)Shō-chin-ron. (支)Chang-chen-ron. 大乘掌珍論 ●二卷 ●存、大正三〇・二六八No. 1578、縮景五、卅二・四、北623畫、南365畫、元628畫、明北1231性、清1231性、麗627則、天622畫、指538則、法610則、至134十條、明南1370都、N. 1237 ●清辨菩薩造、唐玄奘(仁壽二)麟德元 A. D. 692—694譯

●本論は上下兩卷に分れ、上巻最初の總序に於ては諸法の無自性空の理を證つて法性に入り、煩惱より解脱せしめて、以て有情を饒益せんとする造論の目的が宣示せら

れ、次いで本論の主題たる「眞性有爲空、如幻緣生故、無爲無有實、不起似空華」といふ一偈が掲げられてゐる。その前の二句「眞性には有爲は空なり、幻の如し、緣生なるが故に」と云ふは、有爲の空を立言したものであつて、以下の上巻全部はその立場の意義を説明したものであり、その後の二句「無爲は實有ることなし、不起なればなり、空華に似たり。」といふは、無爲の空を立言したものであつて、その立場の意義は下巻に於て説明せられてゐる。かくして有爲無爲ともに空なることを夫々宗・因・喻の整然たる論理的形式を辿つて證明した後、本論の總結として「諸心慧境現、智者由不取、慧行無分別、無所行而行」といふ一偈を擧げ、分別を離れたる空智を以て八正道並に六波羅蜜を完成すべきことが力説せられてゐる。(羽溪了諦)

●掌珍論義疏 ●(日)Shō-chin-ron-gi-sho. (支)Chang-chen-ron-i-su. ●五卷 ●(參考) 東域傳燈目錄卷下

●掌珍論古述 ●(日)Shō-chin-ron-ko-shaku. (支)Chang-chen-ron-ku-chi. 掌珍論古述記 ●一卷 ●新羅太賢(一景徳王)二二A. D. 753—)述 ●(參考) 東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第一

●掌珍論古述記 ●(日)Shō-chin-ron-ko-shak-ki. (支)Chang-chen-ron-ku-chi-chi. 掌珍論古述 ●一卷 ●新羅太賢(一景徳王)二二A. D. 753—)述 ●(參考) 新編諸宗教藏總錄第三

●掌珍論宗要 ●(日)Shō-chin-ron-shū-yō. (支)Chang-chen-ron-tsung-yao. ●一卷 ●新羅元曉(眞平王)三九A. D. 617—)述 ●(參考) 新編諸宗教藏總錄第三

●掌珍論疏 ●(日)Shō-chin-ron-shō. (支)Chang-chen-ron-shu. ●二卷 ●唐代備述 ●(參考) 東域傳燈目錄卷下、注進法相章疏錄、諸宗章疏錄第一

●掌珍論疏 ●(日)Shō-chin-ron-shō. (支)Chang-chen-ron-shu. 大乘掌珍論義疏 ●五卷 ●道温(一作雲)述 ●(參考) 東域傳燈目錄卷下、奈良朝現在一切經疏目錄2506

●掌珍論疏 ●(日)Shō-chin-ron-shō. (支)Chang-chen-ron-shu. ●二卷或一卷 ●唐神泰(一永徽六A. D. 655—)述 ●(參考) 東域傳燈目錄卷下、注進法相宗章疏錄、諸宗章疏錄第一

●掌珍論發揮 ●(日)Shō-chin-ron-hō-kai. (支)Chang-chen-ron-fa-hui. ●三卷 ●存 ●烏水寶雲(寬政三)弘化四A. D. 1791—1847)述 ●明治二三刊 ●(哲、四、右二〇)(京大、日大末、一四六)

●掌珍論料簡 ●(日)Shō-chin-ron-ryō-kan. (支)Chang-chen-ron-liao-chieh. 掌珍料簡 ●一卷 ●新羅元曉(眞平王)三九A. D. 617—)述 ●(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2503、2504

●掌珍論問答 ●(日)Shō-chin-ron-mon-tō. (支)Chang-chen-ron-wen-tō. ●一卷 ●新羅元曉(眞平王)三九A. D. 617—)述 ●(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2503、2504

●掌珍論問答 ●(日)Shō-chin-ron-mon-tō. (支)Chang-chen-ron-wen-tō. ●一卷 ●新羅元曉(眞平王)三九A. D. 617—)述 ●(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2503、2504

mōn-dō. (支) Chang-chen-tun-mian-ta.  
②二卷 ④唐代懷感述 ⑤(參考) 奈良朝  
現在一切經疏目録 501L 2502

焦山芥航和尚尺牘

①(日) Shō-jan-kai-kō-o-shō-seki-toku. (支) Chiao-shan-chieh-hang-ho-shang-chih-tu.  
一卷 ③存 ④清芥航撰 ⑤寫本(京大、  
藏・二四シ・六〇)

焦山志

①(日) Shō-zan-shi. (支) Chiao-shan-chih.  
②二十六卷 ③存  
清代吳雲撰 ⑤同治九(A. D. 1870)

⑥焦山は、江蘇省鎮江縣に在り、揚子江中の一小島であつて、江岸の金山、北固山と鼎立して京口三山と稱せられ、古來、景勝の地として知られてゐる。山志は初め、明正徳年間に京口三山志なる舊志があつたが、明天啓年間、釋智先が輯録したのを清朝に入つて釋行載、謝家樹、潘輝が共補し、又、釋詳印が増刪して、志略と名づけ

たものが基礎となり、乾隆年間には十二卷となり、道光年中、王柳村等が更に之を修輯したが、長髮賊の難に遭ふて散佚した。其後、吳雲が主として編纂して本書を完成したものである。内容目録は、焦山全圖、卷首宸翰、卷一、山水、建置。卷二、三、周鼎。卷四、定陶鼎、雜器。卷五、六、瘞鶴銘。卷七、八、碑刻。卷九、高隱。卷十、方外。卷十一、雜談。卷十二—二十六、藝文といふ順序である。

⑦同治十三刊 ⑧(谷大、餘大・三七九四) 駒大(水野梅曉文庫) (藤井草宣)

焦山續志

①(日) Shō-zan-zoku-shi. (支) Chiao-shan-jish-chih.  
②八卷 ③存  
清代陳任鳴撰 ⑤光緒三〇(A. D. 1904)

⑥焦山志の成りしより三十五年の後、其の缺くるを補ひ、特に山水の中に就て水を詳細に述べてをる。卷一、山水。卷二、建置。卷三、碑刻。卷四、方外。卷五、雜議。卷六、七、八、藝文。京口三山志(焦山志、北固山志、金山志)參照。

焦尾帚

①(日) Shō-bi-ō. (支) Chiao-wei-chou.  
③存 ④清播心田(天授元—文安四 A. D. 1375—1417) (參考) 日本禪林撰述書目、禪籍目録

湘谿集

①(日) Shō-kei-shū. ③存  
④本圖(兜率) (參考) 禪籍目録

湘山野錄

①(日) Shō-zan-ya-toku. (支) Hsiang-shan-ye-tu.  
②三卷 ③存  
④宋文鑒撰 ⑤寫本(京大、藏・二四シ・六一)

湘南和尚語錄

①(日) Shō-nan-ō-jō-go-toku. 大鑑眞源禪師湘南和尚語錄  
②一卷 ③宗沅(湘南)語、宗瑛編 ④禪籍目録

湘南葛藤錄

①(日) Shō-nan-ka-to-toku. ②一卷 ③存 (參考) 禪籍目録

楢樹林指南記

①(日) Shō-jū-rin-shi-nan-ki. ②一卷 ③存 ④月舟宗胡 (元和四—元祿九 A. D. 1618—1696) 記 (參考) 禪籍目録

楢樹林大乘護國禪寺清規指南

①(日) Shō-jū-rin-dai-jō-go-ko-ken-shū. ②二卷 ③存 ④月舟宗胡(元和四—元祿九 A. D. 1618—1696) ⑤大正一四寫 (駒大)

傷歌邏經

①(日) Shō-ka-ra-kyō. (支) Shang-ko-lo-ching. (日) A. H. 60 San-Grava. ③存、中阿含經第三五(大正一・六五〇No. 26. 143)

聖一語錄並年譜注

①(日) Shō-ichigo-ku-ni-nen-pu-chū. ④乾山 (參考) 日本禪林撰述書目

聖一國師語錄

①(日) Shō-ichigo-ku-ni. ②一卷 ③存、大正八〇・一七No. 234  
大日本佛教全書第九五、禪學大系祖錄部第四、國譯禪宗叢書第一〇 ④圓爾辨圓建仁二—弘安三 A. D. 1202—1280) 語、虎關師鍊(弘安元—貞和二 A. D. 1278—1346) 編

⑤東福寺開山勸證神光聖一國師圓爾辨圓和尚の語録中の東福寺語録、法語、偈頌、佛祖贊、自贊、並に宋の徑山の無準師範、四明天童の了慧禪師の書牘を収めたものである。即ち弘安三年(A. D. 1280)十月十七日壽七十九の示寂より五十一年後の元徳三年(A. D. 1331)二月五日東福寺十五世三聖寺虎關師鍊禪師序文を附して校纂したものである。重刻は、元和六年(A. D. 1620)二月下浣守藤の識語にある如く、東福寺二百二十三世集雲守藤和尚が、聖一國師年譜再刊の助縁の餘資を以つて重刻し、東福寺藏板

として梓行したものである。三刻は、文政十二年(A. D. 1829)十月虎關の法孫令村和尚等が捐資して、元和本を釐整し、三林長老請以下六首の自贊を増補して、國師示寂の地たる東福寺常樂庵に留板し、刊行流通せしめたもので、佛教全書本、國譯禪宗叢書本等は文政本を参照したものである。其の列次は、卷首に元徳三年二月五日虎關師鍊の序、次に東福寺に於ける上堂小參の語要三十二、示空明上人などの法語七、偈頌十六、佛祖贊六、自贊六並に無準師範の復書。宋寶祐三年三月二十五日天童了惠の書二通。元和六年本の守藤の識語となつて居り、更に文政十二年本に依つて、六首の自贊を補入し、令村の識語を以つて終つて居る。

(參考) 扶桑禪林撰述書目 ④元和六刊 (谷大、餘大・二八六九) 文政一二刊(駒大) (京大、日大末・四六九) 延寶三刊(帝國、八二一・二二七) 大正九刊(駒大) (帝國、二二七・二〇五)

聖一國師住東福禪寺語錄

①(日) Shō-ichigo-ku-ni-jū-ō-toku. ②一卷 ③存、大正八〇・一七No. 234、大日本佛教全書第九五、禪學大系祖錄部第四、國譯禪宗叢書第一〇 ④圓爾辨圓(建仁二—弘安三 A. D. 1202—1280) 語、虎關師鍊(弘安元—貞和二 A. D. 1278—1346) 編 ⑤元和六刊 ⑥龍大(二六七四・一〇)

聖一國師住東福禪寺語錄

①(日) Shō-ichigo-ku-ni-jū-ō-toku. ②一卷 ③存、大正八〇・一七No. 234、大日本佛教全書第九五、禪學大系祖錄部第四、國譯禪宗叢書第一〇 ④圓爾辨圓(建仁二—弘安三 A. D. 1202—1280) 語、虎關師鍊(弘安元—貞和二 A. D. 1278—1346) 編 ⑤元和六刊 ⑥龍大(二六七四・一〇)

聖一國師住東福禪寺語錄

①(日) Shō-ichigo-ku-ni-jū-ō-toku. ②一卷 ③存、大正八〇・一七No. 234、大日本佛教全書第九五、禪學大系祖錄部第四、國譯禪宗叢書第一〇 ④圓爾辨圓(建仁二—弘安三 A. D. 1202—1280) 語、虎關師鍊(弘安元—貞和二 A. D. 1278—1346) 編 ⑤元和六刊 ⑥龍大(二六七四・一〇)

⑦(參考) 扶桑禪林撰述書目 ④元和六刊 (谷大、餘大・二八六九) 文政一二刊(駒大) (京大、日大末・四六九) 延寶三刊(帝國、八二一・二二七) 大正九刊(駒大) (帝國、二二七・二〇五)

一) *ji-go-to-oku* 國譯聖一國師住東福禪寺語錄  
 存、國譯禪宗叢書第一〇

聖一國師度牒 ①(日) *Shō-ichi-ko = ka-shi-do-cho* ②一軸 ③存 ④承久元  
 寫 ⑤(龍大、別置)

聖一國師年譜 ①(日) *Shō-ichi-ko = ka-shi-nem-pu* ②一卷 ③存、大日本佛教全書第九五  
 ④鐵牛圓心(一弘安四A.D. 1281)編、岐陽方秀(貞治二—應永三A.D. 1363—1424)校

⑤東福寺開山勸證神光聖一國師圓辨圓和尚七十九年の行業を、法嗣たる太宰府崇福寺鐵牛圓心(一作圓心)和尚が、國師示寂の翌年たる弘安四年(A.D. 1281)二月遺命を奉じて編述したものである。後、東福寺八十世岐陽方秀和尚が、應永二十四年(A.D. 1424)十月十七日校正して壽梓し。東福寺二百二十三集雲守藤和尚が、元和六年(A.D. 1620)十月上滑諸本を考へ、新しく刻點句讀を添へ、摹縁再刻し、國師示寂の地たる東福寺常樂庵に留板したものである。辨圓、字は圓爾、土御門天皇建仁二年十月十五日に駿河國安倍郡桑科村に生れ、入宋して斷橋、環溪、兀庵、希叟等に歴參し、徑山の無準師範禪師に嗣ぎ、九條道家、北條時頼、後醍醐上皇などの歸依を受け、承天、崇福、普門寺等に歴住し、東福寺を開創したもので、弘安三年(A.D. 1280)十月十七日壽七十九にして東福寺常樂庵に示寂された。正和元年(A.D. 1312)勅して聖一國師と諡號あり、國師號の嚆矢と稱せられる。昭和五年六百五十年遠忌に

際し、神光の諡號を加賜せられた。行業は編者その人を得たるため、簡約の中に眞面目を傳ふるものとして尊重されて居る。卷末に損貸助縁者が記録されて居る。  
 ⑥元和六刊 ⑦哲、ら、五、右、一、一(駒大) (大久保堅瑞)

聖一國師祕書 ①(日) *Shō-ichi-ko = ka-shi-hi-sho* ②一冊 ③存 ④圓爾辨圓(建仁二—弘安三A.D. 1202—1280)撰  
 ⑤寫本(京大、日大末、三〇七)

聖一國師法語 ①(日) *Shō-ichi-ko = ka-shi-ho-go* 東福聖一國師法語、聖一法門法語集卷中 ④圓爾辨圓(建仁二—弘安三A.D. 1202—1280)撰  
 ⑤聖一國師坐禪論とも稱せられ、更に略して坐禪論とも稱せられるもので聖一國師が坐禪に就て九條道家公に示された假名法語である。坐禪に就ての總説と參禪中に續出する諸種の疑惑を掲げた二十四項の答問より成るもので、附録の古人法語と云ふ法語は、同じく坐禪に就ての用心を示したもので、其の説示の内容に依つて、聖一國師の法語と認めて差支ないものである。其の二十四項中には、極めて興味あり且つ參究を要す可き問題が提起されて居る。詳細に就ては、第四卷九頁坐禪論の部に於て解説して置いたから右を見られたい。

⑥正保五刊(駒大) 龍大、研究(京大、一、二五シ・六) 慶安元刊(龍大、二六七四・四〇) 文政一二刊(京大、日大末、四七〇) 寫本(龍大、二〇三・二) (大久保堅瑞)

聖一法語 ①(日) *Shō-ichi-ho-go* 聖一國師法語、東福聖一國師法語 ②一卷 ③存、禪門法語全集第一、禪門法語集卷中 ④圓爾辨圓(建仁二—弘安三A.D. 1202—1280)撰 ⑤(參考) 日本禪林撰述書目  
 聖因接待寺誌 ①(日) *Shō-in-setsu-tai-ji-shi* (支) *Sheng-yin-chieh-tai-ssu-chih* 勸賜聖因接待寺誌 ②四卷 ③存  
 ④邱峻晴編 ⑤乾隆一〇刊 ⑥京大、印哲・R・九)

聖閻曼德迦威怒王立成大神驗念誦法 ①(日) *Shō-eman-tok-ka-i-na-o-ryū-jō-dai-jin-gen-nen-jū-hō* (支) *Sheng-yen-man-tō-chia-wei-nu-wa-ng-li-eh-eng-tai-shen-yen-nien-sung-la* 威怒王念誦法、閻曼德迦念誦法 ②一卷 ③存、大正二一・七三A.D. 1214縮開一三二七・一、明北145葉、清145葉、明南1183克、元、1422 ④唐不空(神龍元—大曆九A.D. 705—774)譯  
 ⑤雜部密教の所屬に「P」空海(A.D. 774—835)・圓( A.D. 794—864)・惠運(A.D. 798—871)・宗叡(A.D. 809—884)・圓珍(A.D. 814—891)等の請來にかゝり、大威德獨部法の初出である。初に根本・大心・心中心・三字・隨心・心頂口心眞言六首と、大威德明王(Yamantaka)讚及び諸咒詛法とを明し、終に掃地・請召・關伽・獻座・染浴・金剛鈴・獻衣・塗香・焚香・華・加持五色粉圍壇・寶長・幢旛・旛・寶軒・寶樓閣・扇・莊嚴・燈・獻食・獻念誦偈數・奉送・拂等の供養の眞言二十三種を説く。(神林隆淨)

聖王大師傳 ①(日) *Shō-dai-shi-den* 開山聖應大師傳 ②二卷 ③存、兩祖師繪史傳之内 ④龍大、二九六五・一〇二)  
 聖可禪師語錄 ①(日) *Shō-ka-zen-ji-go-to-ku* (支) *Sheng-ko-cha-an-shih-yü-lu* 華嚴聖可禪師語錄 ②二卷 ③存  
 ④清代聖可王語、光佛等編 ⑤(參考) 禪籍目錄

聖可禪師年譜 ①(日) *Shō-ka-zen-ji-nem-pu* (支) *Sheng-ko-cha-an-shih-nien-p'u* 華嚴聖可禪師年譜 ③存、聖可禪師語錄附錄 ④清代發鳴等編 ⑤(參考) 禪籍目錄  
 聖可禪師百頌錄 ①(日) *Shō-ka-zen-ji-hyaku-jū-to-ku* (支) *Sheng-ko-cha-an-shih-pai-sung-lu* 雲峰聖可禪師百頌錄 ③存、聖可禪師語錄附錄 ④清代聖可王語、善明編 ⑤(參考) 禪籍目錄

聖迦柁忿怒金剛童子菩薩成就儀軌 ①(日) *Shō-ka-ni-fun-nu-ken-gō-dō-ji-bo-satsu-jō-ju-gi-ki* (支) *Sheng-chia-ni-fen-nu-chin-kang-tung-tō-p'u-sa-ah-ang-chiu-i-kau-i* 聖迦柁忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經、聖迦柁忿怒儀軌經、金剛童子儀軌 ②三卷 ③存、大正二一・一〇二No. 1222 縮開一四、二一六・一〇、明北1059言、清1059言、明南1037取、三十帖策子第五、No. 1064 ④唐不空(神龍元—大曆九A.D. 705—774)譯 ⑤平安朝時代寫 ⑥(寶菩提院)

聖迦柁忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經 ①(日) *Shō-ka-ni-fun-nu-ni-ken-gō-dō-ji-bo-satsu-jō-ju-gi-ki* (支) *Sheng-chia-ni-fen-nu-chin-kang-tung-tō-p'u-sa-ah-ang-chiu-i-kau-i* 聖迦柁忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經、聖迦柁忿怒儀軌經、金剛童子儀軌 ②三卷 ③存、大正二一・一〇二No. 1222 縮開一四、二一六・一〇、明北1059言、清1059言、明南1037取、三十帖策子第五、No. 1064 ④唐不空(神龍元—大曆九A.D. 705—774)譯 ⑤平安朝時代寫 ⑥(寶菩提院)

聖迦柁忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經 ①(日) *Shō-ka-ni-fun-nu-ni-ken-gō-dō-ji-bo-satsu-jō-ju-gi-ki* (支) *Sheng-chia-ni-fen-nu-chin-kang-tung-tō-p'u-sa-ah-ang-chiu-i-kau-i* 聖迦柁忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經、聖迦柁忿怒儀軌經、金剛童子儀軌 ②三卷 ③存、大正二一・一〇二No. 1222 縮開一四、二一六・一〇、明北1059言、清1059言、明南1037取、三十帖策子第五、No. 1064 ④唐不空(神龍元—大曆九A.D. 705—774)譯 ⑤平安朝時代寫 ⑥(寶菩提院)

名所行發 ⑩ (名庫書) 著者所現 ⑪ 月年の刊 ⑫ (書考參書釋註) 書末 ⑬ 説解存内 ⑭ 代年作著 ⑮ 著者 ⑯ 缺存 ⑰ 數卷 ⑱ (名書) 名題 ⑲ 號略字數

kon-gō-dō-ji-bo-satsu-jō-jū-gi-ki-kyō.  
(支) Sheng-chia-ni-tan-nu-chin-kang-

tung-tzū-pu-sa-cheng-chiu-i-kuai-chi-  
ng. 聖迦柅忿怒金剛童子菩薩成就儀軌、聖  
迦柅忿怒儀軌經、金剛童子儀軌 ②三卷  
③存、大正二一・一〇二No. 1222、縮周一四、  
卅一六・一〇、明北1059言、清1059言、明南  
1037取、三十帖黃字第二五、Nj. 1064 ④唐  
不空(神龍元—大曆九A. D. 703—774)譯

⑤雜部密教の所屬にして、空海(A. D. 774—  
835)・圓仁(A. D. 791—864)・惠運(A. D.  
798—871)・圓珍A. D. 814—891)等の請來  
にかゝり、金剛手菩薩が佛前に於て説いた  
經である。全卷殆ど呪詛法で終始して居る  
が、卷上には、四印曼荼羅と眞言印契念誦  
次第法と畫像法とが明してある。念誦次第  
法には、根本・第二根本・獨股杵・護身・甲冑・  
寶山・輪界・網・縛毗那夜迦・迎請聖者・迎請  
聖者眷屬・闍伽座・塗香・華・燒・食・燈明・  
頭・頂・甲冑・最勝・奉送聖者等の二十三の印  
明と心眞言とを示し、畫像法には、偏身に火  
焰有り、種々の瓔珞を以て莊嚴し、右の手  
に三股杵を持し、斜に左の手を擧げ、右の  
頤の印を作し、脚は磐石の上に阿里茶立を  
作す金剛童子の尊形、並に身海より涌出し、  
琉璃色にして六臂有り、三日赤色にして、  
狗牙上に出で、左の足で、海中の一寶山を  
踏み、山上の妙蓮華、其の足を承け、右の  
足は半ば海水に没し、右の第一手には、三  
股金剛杵、第二手には、母娑羅棒、第三手  
には、鉞斧を執り、左の第一手には、棒を  
持し、第二手は金剛拳を作つて、頭指を舒

べ、第三手には劍を把り、身には大蛇を絡  
ひ、腰・臂・膊・髮・耳瑠、皆蛇を以て莊嚴す  
る像を畫く可きことが説いてある。次に卷  
中には、忿怒形にして虎皮を褌と爲し、右  
の手に金剛杵を把り、左の手を施願に作る  
一畫像法を示し、最後に卷下には、灌頂曼  
荼羅法が明してある。其の曼荼羅は、中心  
に蘇嚩蘇嚩大忿怒王金剛、東邊に金剛手明  
王、その右邊に金剛鉤明妃、左邊に大抱誤  
縛底明妃、南邊に步嚩金剛大恐怖眼等、そ  
の右邊に難觀・水中・降伏・阿波囉爾・摧天・  
恐怖天・須彌・寶峯・降三世・光明熾盛等の十  
大忿怒金剛、北邊に青棒・談時伽羅・劫比羅・  
大笑・勇健步・舉尼步・魔醯首羅步・一霹靂・  
摧伏・大棒等の十金剛・西方に難勝・忿怒・難  
持・恐怖・極忿怒・三世・成就大忿怒等の八  
大金剛を畫くことに成つて居る。

此の經に明本(縮、閏一四)と麗本同、餘  
三)との二本ある中、今は前者に依つて、  
其の内容を概観したのであるが、以上の外、  
題下に出る蘇悉地經大明王教中第六品と云  
ふ註が附してある。然し蘇悉地經の第六品  
には、斯事が説かれてなく、且つ全經を檢  
すれば、全くの虚偽であることが明白であ  
る。加之、曼荼羅に他に類例のない異色の  
金剛名が列ねてある所から察すると、或は  
蘇悉地經・蘇婆呼童子經・瞿耶耶經等の意に  
依つて、偽作されたのではないかとも思は  
れるのである。而して二本を比較するに、  
後者の麗本には、題下の註はないけれども、  
成就法が増補されてゐるばかりでなく、一  
文毎に、其の頭に番號を附し、或は眞言の

漢字音の上に、悉曇文字が挿入してあるな  
ど、前者の如く脱文なく、能く整頓されて  
ゐることが充分に窺はれる。

①寫本(京大藏一六三・一三)(神林隆昌)  
聖迦柅忿怒金剛童子菩薩成就  
儀軌經 ①(日) Sho-ka-ni-tan-nu-  
kon-gō-dō-ji-bo-satsu-jō-jū-gi-ki-kyō.  
(支) Sheng-chia-ni-tan-nu-chin-kang-tu-  
ng-tzū-pu-sa-cheng-chiu-i-kuai-ching.  
②三卷(別本) ③存、大正二一・一〇一八No.  
1222 ④唐不空(神龍元—大曆九A. D. 703  
—774)

聖迦柅忿怒金剛童子菩薩成就  
儀軌經 ①(日) Sho-ka-ni-tan-nu-  
kon-gō-dō-ji-bo-satsu-jō-jū-gi-ki-kyō. 國譯  
聖迦柅忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經 ②三  
卷 ③存、國譯密教經軌第五 ④塚本賢曉  
譯

聖野紇哩縛大威怒王立成大  
神驗供養念誦儀軌法品 ①(日)  
Shō-ga-ya-ki-ri-ba-dai-i-nu-ō-ryū-jō-  
dai-jin-ken-ku-yō-nen-jū-gi-ki-hō-don.  
(支) Sheng-ho-yeh-chi-ri-fu-ta-wei-nu-  
wang-ji-cheng-ta-shen-yen-kin-g-yang-  
nien-sung-i-kuai-fa-pin. 聖闍曼德迦威  
王立成大神驗念誦法、馬頭念誦儀軌 ②二  
卷 ③存、大正二〇・一五五No. 1072A、  
縮餘二、已續一・三・二 ④唐不空(神龍元—  
大曆九A. D. 703—774)譯

①馬頭明王の念誦法を説く。即ち金剛界立  
と十八道立とを合採した次第で、本尊眷族  
には十波羅蜜・四大童子・八大龍王の印言を

出してある。下卷の念誦法の終りに、賀野  
紇哩(馬頭)、四大童子、八大龍王の像法が  
説かれてある。

賀野紇哩とは梵語音寫で正しくはHaryā  
śiva. 西藏語なれば ta-er-ria で、馬頭  
と譯さるべきであらうが、漢には意譯して  
馬頭と云つてゐる。馬頭大威怒王の意義に  
就て、上卷には馬頭尊微妙心、亦如大馬口  
吞噉、焚燒一切衆生藏識中若干熏習雜種  
心等と云ひ、又下卷には大慈大悲馬口願  
深重故、化一切衆生專勝(中略)斷  
盡種々諸惡趣、滅盡六道四生、生老病死苦、  
又能噉食滅盡取事近喻、如羸飢馬食草更  
無他念、と説てある。即ち觀自在は慈悲心  
深く、恰かも飢馬が水草を噉食する如く、  
大威怒を以て衆生の無明煩惱を噉食して餘  
念なきが故にかく馬頭に喩へたものであ  
る。(神林隆淨)

聖鑑國師行狀 ①(日) Shō-kan-kō-  
ku-shū-gyō-jō. ②一卷 ③存 ④明治二  
八刊 ⑤(帝國、一一一・二六九)

聖鑑國師無文錄並行狀 ①(日)  
Shō-kan-kō-ku-shū-mu-mon-toku-narabi-  
ni-gyō-jō. ②二卷 ③存 ④無文元選元  
亨三—康應二A. D. 1323—1390)譯、祖秀校  
⑤明治二八刊 ⑥(駒大)(帝國、一一一・二  
六九)

聖記 ①(日) Shō-ki. ②一卷 ③存  
④空海記 ⑤貞享三寫 ⑥(谷大、餘大・一  
四四八)

聖吉祥持世陀羅尼經 ①(日) Shō-  
kichi-jō-jise-da-ta-ni-kyō. (支) Sheng-

聖

chi-hsiang-chih-shih-to-to-ni-ching. 大乘聖吉祥持世陀羅尼經、聖吉祥持世經 ② 一卷 ③ 存、大正二〇・六六九No. 1164、縮成八、二一五・三、北1096將、南1112將、元1106將、明北782力、清782力、麗1101杜、天1095將、法1213千、至772夙、明南778端、Nj. 809

① 宋法天譯 ② 大乘聖吉祥持世陀羅尼經の下を見よ

**聖鬪贊** ①(日) Sho-kyu-san. ② 四卷 ③ 存 ④ 良定(天文一三—寛永一六 A. D. 1541—1639) ⑤ 慶安四刊 ⑥(正)大、一〇九二(九一)

**聖行決** ①(日) Sho-gyo-ketsu. 聖行坊決 ② 院尊(—永承頃 A. D. 1046—1052)撰 ③(参考) 山家祖德撰述篇目集卷下、密乘撰述目錄、諸宗章疏錄第二

**聖行坊決** ①(日) Sho-gyo-bo-ketsu. 聖行決 ② 院尊(—永承頃 A. D. 1046—1052)撰、アサハ抄所引、又傍註に曰く、院尊ナル(シ)云々。

**聖教集め書き** ①(日) Sho-gyo-a-tsume-gaki. ② 1巻 ③ 存 ④ 文化一〇寫

①(谷大、宗大・一五二二)

**聖教隱形** ①(日) Sho-gyo-on-gyo. 天台圓宗至極口決血脈 ② 1巻 ③ 存 ④ 忠孝記 ⑤ 寫本(正教藏)

**聖教開版諸記録** ①(日) Sho-gyo-kai-han-sho-ki-roku. ② 1巻 ③ 存 ④ 文化五寫 ⑤(龍大、別設)

**聖教校合之記** ①(日) Sho-gyo-kyo-go-no-ki. ② 1巻 ③ 存 ④ 明治八寫

**聖教訓譯法身藏** ①(日) Sho-gyo-kun-yaku-hos-shin-zo. ② 1巻 ③ 存 ④(京專)

**聖教寫得校合目錄** ①(日) Sho-gyo-sha-toku-kyo-go-moku-roku. ② 1巻 ③ 存 ④ 明治九寫 ⑤(谷大、宗大・一八〇七)

**聖教拾遺** ①(日) Sho-gyo-shu-i. ② 1巻 ③ 存 ④(参考) 眞宗全書刊行豫定書目

**聖教書寫校合目錄** ①(日) Sho-gyo-sho-sha-kyo-go-moku-roku. ② 1巻 ③ 存 ④ 明治九寫 ⑤(谷大、宗大・一八二〇)

**聖教助見** ①(日) Sho-gyo-jo-ken. ② 存、輪池叢書第六

**聖教小集** ①(日) Sho-gyo-shu-shu. ② 1冊 ③ 存 ④ 上村長子編 ⑤ 昭和三年刊 ⑥(京大、一・二六・二三)

**聖教全集** ①(日) Sho-gyo-zen-shu. 承陽大師聖教全集 ② 3巻 ③ 存 ④ 弘津說三編 ⑤ 明治四二刊 ⑥ 東京 永平寺出版所

**聖教の正義** ①(日) Sho-gyo-no-sei-gi. ② 1巻 ③ 存 ④ 荒木英一著 ⑤ 大正四刊 ⑥(立大、B〇四・六一)

**聖教目錄** ①(日) Sho-gyo-moku-roku. 録内録外聖教目錄 ② 1巻 ③ 存、目錄集之内 ④ 知空(寛永一一—享保三 A. D. 1631—1718)撰 ⑤ 寫本(龍大、一〇三・四九)

**聖教目錄** ①(日) Sho-gyo-moku-roku. ② 1巻 ③ 存 ④ 空隸(寛文元—延享三 A. D. 1661—1746)撰 ⑤ 正徳二寫 ⑥(谷大、宗丙・一七)

**聖教目錄** ①(日) Sho-gyo-moku-roku. ② 1巻 ③ 存 ④ 超摩撰 ⑤(参考) 眞宗全書刊行豫定書目

**聖教目錄** ①(日) Sho-gyo-moku-roku. ② 1巻 ③ 存 ④ 寶永五寫 ⑤(谷大、餘小・八〇)

**聖教目錄** ①(日) Sho-gyo-moku-roku. ② 1巻 ③ 存 ④ 原本(攝津西福寺藏) ⑤ 寫本(龍大)

**聖教目錄** ①(日) Sho-gyo-moku-roku. ② 1巻 ③ 存 ④ 文化七寫(寶善菩提院)寫本(京大、藏・二一・一二七)

**聖教目錄** ①(日) Sho-gyo-moku-roku. ② 1冊 ③ 存 ④ 德川時代寫 ⑤(寶善菩提院(寶龜院))

**聖教問答鈔** ①(日) Sho-gyo-mon-do-sho. 温泉若譯 ② 1巻 ③ 存 ④ 東武棟人(淳應)述 ⑤(参考) 淨土眞宗教典志第二 ⑥ 正徳四刊 ⑦(龍大、一九四・三〇—三一)哲、ノ、七、七)

**聖教略述章** ①(日) Sho-gyo-ryaku-jus-sho. ② 1巻 ③ 存 ④ 道證 ⑤(参考) 東城傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第十一

**聖教料簡口傳事** ①(日) Sho-gyo-ryaku-ken-ku-den-no-koto. ② 存、續淨土宗全書第一四 ③ 傳、最澄(神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—822)撰

**聖教論題摘要録** ①(日) Sho-gyo-ron-dai-teki-yo-roku. ② 1冊 ③ 存 ④ 寫本(京大、日大末・六九五)

**聖教度佛母二十一種禮讚經** ①(日) Sho-ku-do-butsu-mo-ni-ju-iss-shu-rai-san-gyo. (支) Sheng-chiu-tu-to-mu-erh-shih-i-chung-i-tsan-ching (梵) Eka-vinsati-stotraṃ (Tara-stotraṃ) (寫本) Tara-devi-stotra ekavinsaka-sādhana (藏) Sgrol-ma la phyag-hshal hi-cu-ri-sa-gcig gis bstod-pa phan-yon dan-bcas-pa. 二十一種禮讚經 ② 1巻 ③ 存、大正二〇・四七八 No. 1108、縮成一三、二一六・一〇、明北1063言、清1063言、明南875夙、元1063 ④ 元代安藏譯

⑤ 雜部密經で、多羅法に屬す。多羅菩薩を、二十一種に禮讚し、終りに根本十字眞言及び救度八難の眞言を説く。救度佛母とは梵語多羅(Tara)の譯で、西藏語の sgrol-ma に相當する。多羅菩薩を二十一様に禮讚すれば、現世に富貴、長壽、安穩を得、當來世に佛と成る。若復此れを二、三七日轉讀すれば、諸の苦惱を蠲除し、隨意に男女の子供、及び財寶を獲得することが出来ると言はれてある。

此の經の西藏譯は版によりて、題名に小異がある。

ナルタン版 lphyag-hshal her-gcig-gi phon-yon(二十一功德禮拜)

ネルク版 sgrol-ma-la phyag-hshal

名所行發⑩(名庫書)著顯所現⑨ 月年の刊寫⑧(書考參書釋註)書未⑦ 說解存内⑥ 代年作著⑤ 著書④ 缺存③ 數卷②(名書)名題① 號略字數

母二十一禮讚) 北京版 boom-ldan-jdas-ma sgrul-ma a-la yul-dag-pur-rdros-pauli sams = gyas bstod-pa(世尊救度佛母正等覺者稱讚)

尚北京の町版 ryul-yum iplags-ma sgrul (sphuri?) phyag-lstsal ni-tsa-rsa-gcig (勝母聖救度佛母二十一禮拜)

とある様に、西藏譯と漢譯とが對照してある。これに依り漢譯は西藏譯よりの重譯ではなからうかと思はれる點が多々ある。但し終りの根本十字眞言と救度八難眞言とが缺けてゐる。

聖應問答鈔 ①(日)Shō-ku-an-ids-shō. ②二卷 ③存、日蓮聖人御遺文之内日蓮聖人全集第一 ④日蓮(眞應元)弘安五A. D. 1222—1282)述 ⑤文永二(A. D. 1255)

⑥聖人と愚人との問答に託して生死問題より説き起し、極めて通俗的に律宗、念佛宗、禪宗、眞言宗の四宗が出離生死の眞法に非ず佛意に契合せざる所以を順次明にし、最後に法華經の信に歸せしめた書。

聖果寺志 ①(日)Shō-kwa-jī-shi. (支)Sheng-kuo-ssū-chih. ②一卷 ③存、武林掌故叢編第六 ④超乾輯 ⑤最初に聖果寺所在の鳳皇山の位置を記して、白居易、蘇軾趙孟頫等の詩詞を列擧

してゐるが、大體以下皆此の體に倣つてゐる。即ち次の寺山舊蹟の條には峯、巖、石、洞、塢、嶺等に説明、乃至考證を加へて詩人墨客の吟什を添へてゐる。一例を示せば石の條には臥醉石。在寺右郭公泉下。石如掌平長。江浮面。其形若醉若臥。上鑄臥醉二字。蘇軾詩。有道難行不如醉。有口難言不如睡。先生醉臥此石間。萬古無人識此意。(以下省略)の如し。次に寺誌を載せてゐる。其れに依れば聖果禪寺は隋文帝開皇二

年の創設に係り、後唐昭宗乾寧年間無著喜禪師再興す。其の後隆慶あり、然かも此の寺鳳皇山の右に在り、南秦望東吳山の諸刹と相輝映し、江濤澎湃、松徑盤紆、潮淙潺湲、竹木蔭翳、洵に昭代の竺祇園、叢林の魯靈光と最後に歴代弘法の諸禪師の傳を掲げて終つてゐる。要するに此寺志は僅に一卷であるが良く寺の面目を述べて遺憾なく以て撰者、超乾の凡筆に非ざるを表明してゐる。

聖歡喜天式法 ①(日)Shō-kwan-shū-ten-shiki-hō(支)Sheng-huan-hsi-tien-shih-fa. ②一卷 ③存、大正二・三二四No. 1275 ④唐代般若若菴經撰 ⑤聖天法に於て大いに靈驗を得んと欲する者の爲めに、式法、次第を簡單に説いたものである。即ち天地盤の造立法、召請印乃至盛冥文符圖、秘攝符圖を明し、次に凡そ

二十七の成就事項及びその方法を列擧して式法を了り、最後に同天次第巻を附加してゐる。此の次第は同式法を念誦次第の形式に改めたもの、如くである。(神林隆淨)

聖歡喜天叢書 ①(日)Shō-kwan-an-gi-ten-shō. ②一卷 ③存 ④眞源編 ⑤安政二刊 ⑥(正大一四八・二一七) ⑦聖歡喜天叢書甲集 ⑧(日)Shō-kwan-an-gi-ten-shō-shū-kaishū. ⑨一卷 ⑩存 ⑪願海集刻 ⑫安政二刊 ⑬(谷大、餘大・三五九五)

聖觀音 ①(日)Shō-kwannon-on. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第四七覺禪鈔之内 ④覺禪(建曆二A. D. 1212)撰 ⑤延慶三寫 ⑥(寶龜院) ⑦聖觀音 ⑧(日)Shō-kwannon-on. ⑨一卷 ⑩存、大日本佛教全書第三八阿婆娑抄之内 ⑪承澄(元久二弘安五A. D. 1205 1282)撰 ⑫徳川時代寫 ⑬(寶善提院) ⑭聖觀音 ⑮(日)Shō-kwannon-on. 聖觀音安祥流 ⑯一帖 ⑰存 ⑱足利時代寫 ⑲(寶龜院) ⑳聖觀音講式 ㉑(日)Shō-kwannon-kō-shiki. ㉒一軸 ㉓存 ㉔足利中期寫 ㉕(高六、奇一・四九)

聖觀音讚 ①(日)Shō-kwannon-san. ②一紙 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶善提院) ⑥聖觀音如意輪千手法 ⑦(日)Shō-kwannon-nyō-in-ryū-sen-jū-hō. ⑧一軸 ⑨存 ⑩徳川時代寫 ⑪(寶龜院) ⑫聖觀自在儀軌 ⑬(日)Shō-kwan-ji-zai-ki. ⑭(支)Sheng-kuan-tzu-tsu-ki-kuei.

聖觀自在菩薩一百八名經 ①(日)Shō-kwan-ji-zai-ho-sansu-jū-pya = ku-hachi-myō-kyō. (支)Sheng-kuan-tzu-tsu-p'u-sa-i-pai-pa-ming-ching. (梵)Avalokitesvara-nāmāsāstakā(藏傳)(藏)hphags-pa spyan-ras-gzigs-dbat-pling mtshan bgya-tsa-drgad-pa. 觀自在一百八名經 ②一卷 ③存、大正二〇・六九No. 1054(縮成八、正一五・三、北1127棟、南1144棟、元1137棟、明北811則、清811則

聖觀自在成就大悲蓮華部心瑜伽念誦法 ①(日)Shō-kwan-ji-zai-ji-yū-dai-hi-ren-ge-bu-shin-yū-ganen-jū-hō. (支)Sheng-kuan-tzu-tsu-cheng-chia-ta-pei-lien-hua-pu-tsuin-yū-chieh-nien-ching-fa. 觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門、蓮華部念誦法門 ②一卷 ③存、大正二〇・一No. 1030(縮圖一〇・正續一・一五) ④唐不空(神龍元)大曆九A. D. 705—774)譯 ⑤觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門の下を見よ。

聖觀自在成就大悲蓮華部心瑜伽念誦法 ①(日)Shō-kwan-ji-zai-ji-yū-dai-hi-ren-ge-bu-shin-yū-ganen-jū-hō. (支)Sheng-kuan-tzu-tsu-cheng-chia-ta-pei-lien-hua-pu-tsuin-yū-chieh-nien-ching-fa. 觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門、蓮華部念誦法門 ②一卷 ③存、大正二〇・一No. 1030(縮圖一〇・正續一・一五) ④唐不空(神龍元)大曆九A. D. 705—774)譯 ⑤觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門の下を見よ。

聖觀自在成就大悲蓮華部心瑜伽念誦法 ①(日)Shō-kwan-ji-zai-ji-yū-dai-hi-ren-ge-bu-shin-yū-ganen-jū-hō. (支)Sheng-kuan-tzu-tsu-cheng-chia-ta-pei-lien-hua-pu-tsuin-yū-chieh-nien-ching-fa. 觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門、蓮華部念誦法門 ②一卷 ③存、大正二〇・一No. 1030(縮圖一〇・正續一・一五) ④唐不空(神龍元)大曆九A. D. 705—774)譯 ⑤觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門の下を見よ。

聖觀自在成就大悲蓮華部心瑜伽念誦法 ①(日)Shō-kwan-ji-zai-ji-yū-dai-hi-ren-ge-bu-shin-yū-ganen-jū-hō. (支)Sheng-kuan-tzu-tsu-cheng-chia-ta-pei-lien-hua-pu-tsuin-yū-chieh-nien-ching-fa. 觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門、蓮華部念誦法門 ②一卷 ③存、大正二〇・一No. 1030(縮圖一〇・正續一・一五) ④唐不空(神龍元)大曆九A. D. 705—774)譯 ⑤觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門の下を見よ。

聖觀自在成就大悲蓮華部心瑜伽念誦法 ①(日)Shō-kwan-ji-zai-ji-yū-dai-hi-ren-ge-bu-shin-yū-ganen-jū-hō. (支)Sheng-kuan-tzu-tsu-cheng-chia-ta-pei-lien-hua-pu-tsuin-yū-chieh-nien-ching-fa. 觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門、蓮華部念誦法門 ②一卷 ③存、大正二〇・一No. 1030(縮圖一〇・正續一・一五) ④唐不空(神龍元)大曆九A. D. 705—774)譯 ⑤觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門の下を見よ。

聖觀自在成就大悲蓮華部心瑜伽念誦法 ①(日)Shō-kwan-ji-zai-ji-yū-dai-hi-ren-ge-bu-shin-yū-ganen-jū-hō. (支)Sheng-kuan-tzu-tsu-cheng-chia-ta-pei-lien-hua-pu-tsuin-yū-chieh-nien-ching-fa. 觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門、蓮華部念誦法門 ②一卷 ③存、大正二〇・一No. 1030(縮圖一〇・正續一・一五) ④唐不空(神龍元)大曆九A. D. 705—774)譯 ⑤觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門の下を見よ。

聖觀自在成就大悲蓮華部心瑜伽念誦法 ①(日)Shō-kwan-ji-zai-ji-yū-dai-hi-ren-ge-bu-shin-yū-ganen-jū-hō. (支)Sheng-kuan-tzu-tsu-cheng-chia-ta-pei-lien-hua-pu-tsuin-yū-chieh-nien-ching-fa. 觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門、蓮華部念誦法門 ②一卷 ③存、大正二〇・一No. 1030(縮圖一〇・正續一・一五) ④唐不空(神龍元)大曆九A. D. 705—774)譯 ⑤觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門の下を見よ。





伽觀行儀軌、觀音瑜伽觀行儀軌、瑜伽觀行儀軌  
 ②一卷 ③存 大正二〇・四No. 1031  
 縮間一〇・二七・一、北1420又、南1425  
 曲、元1420曲、明北1408葉、清1408葉、麗  
 1353卷、天1403曲、法1198ノ、至839息、明  
 南1178葉、Nj. 1415 ④唐不空(神龍元一  
 曆九A. D. 705—774)譯 ⑤應德三寫 ⑥(寶  
 壽院)

**聖觀自在瑜伽觀行儀軌** ①(日)

Shō-kwan-ji-zui-yu-ga-kwan-gyō-gi-ki.  
 (天) Sheng-kuan-tai-tsu-yi-chih-kuan  
 -hsing-i-kuai. 聖觀自在菩薩心眞言瑜伽觀  
 行儀軌、觀音瑜伽觀行儀軌、瑜伽觀行儀軌、  
 聖觀自在菩薩瑜伽念誦儀軌 ②一卷 ③  
 存、大正二〇・四No. 1031、縮間一〇・二  
 七・一、北1420又、南1425曲、元1420曲、明北  
 1408葉、清1408葉、麗1353卷、天1403曲、法  
 1198ノ、至839息、明南1178葉、Nj. 1415 ④  
 唐不空(神龍元一曆九A. D. 705—774)譯  
 ⑤天永三寫 ⑥(寶善提院)

**聖訓要義** ①(日)Shō-kun-yō-gi. 日

蓮聖人聖訓要義 ②一冊 ③存 ④本多日  
 生(一昭和六A. D. 1931)著 ⑤大正八刊  
 ⑥(谷大、餘洋、四七三)

**聖華水供次第** ①(日)Shō-ke-sui-

ku-shi-dai. ②一帖 ③存 ④足利時代寫  
 ⑤(寶龜院)

**聖景記** ①(日)Shō-kei-ki. ②一卷

存 ③道聖(無已) ④(參考) 禪籍目錄  
**聖阿禪師** ①(日)Shō-gei-zen-ji. 聖  
 阿禪師傳 ②一冊 ③存 ④開祖五百年遠  
 忌準備局編 ⑤(立大、B一六・四六)

**聖阿禪師傳** ①(日)Shō-gei-zen-ji.

den. 聖阿禪師 ②一卷 ③存 ④野澤俊岡  
 (嘉永五、昭和八A. D. 1852—1933)編  
 大正八刊 ⑤(正大、一五一六・一五九二八  
 五)(龍大、二九六五・八四、研眞)(京大、一  
 二一〇・五四)(谷大、宗洋、四三)

**聖見阿字觀** ①(日)Shō-ken-ji.

kwan. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤  
 (寶龜院)

**聖虚空藏菩薩陀羅尼經** ①(日)

Shō-ko-ku-zō-do-sūtra-da-ra-ni-kyō.  
 (支) Sheng-kuo-tsun-g-tsung-pi-tsa-to-  
 -ni-ching. (梵) Saptasrī bhūddhaka-sūtra (藏  
 傳) (藏) Tshags-pa sats-rgyas bdun-pa  
 shes-bya-ba theg-paha chen-poi mdo. 虛  
 空藏經、虚空藏菩薩陀羅尼經 ②一卷 ③  
 存、大正二〇・六〇四No. 1147、縮成八、二  
 五・二、北1113路、南1129路、元1123路、明北  
 788葉、清788葉、麗1113鏡、天1109路、法  
 1230兵、至725版、明南795力、Nj. 793 ④  
 宋法天譯

⑤本書は、世尊、一時、慈氏菩薩摩訶薩、普賢  
 菩薩摩訶薩、無邊華菩薩摩訶薩、普通華菩  
 薩摩訶薩、虚空藏菩薩摩訶薩等五百人と俱  
 に喜樂山頂天宮を遠からざる仙人の住處に  
 在した。時に彼山下河邊林中に二比丘の裸  
 形にして手を舒へ叫喚啼泣するものが居つ  
 た。是の時虚空藏菩薩は佛に向て此の二比  
 丘は何故に裸形にして手を舒へ叫喚啼泣せ  
 るやと問はれた。爾時、世尊は、此の二比  
 丘は疾病に纏はれ部多(夜叉)に執せられる  
 からだと虚空藏菩薩に告げられた。茲に於

て菩薩は佛に向つて、云何にして疾病を消  
 除し、夜叉神を除遣すべきやと問ひ、佛は  
 神通力を以て諸神を召集し、時に虚空の中  
 に六如來を出現した。六如來とは尼鉢尸如  
 來・尸企如來・毘舍浮如來・羯矩怛那如來・羯  
 曇牟尼如來・迦葉波如來にして、六如來は一  
 切衆生を利益し疾病を消除し、夜叉を除遣  
 せんために、隨喜して各々陀羅尼を説き、  
 更に虚空藏菩薩に告げて此の陀羅尼を若し  
 衆生が晝夜六時に憶持思惟念誦すれば病疾  
 消除、鬼魅遠離、惡夢退散、富貴長壽にし  
 て恒に如來を見、諸佛に護念せらると説き、  
 終に釋迦牟尼如來も亦心印陀羅尼を説か  
 れ、而も此の陀羅尼を受持讀誦供養せば刀  
 杖も傷けず水も漂溺せず云々と説いて陀羅  
 尼の功德を讚歎してゐる。(岡田契昌)

**聖語藏古經卷目錄** ①(日)Shō-go-

zō-ko-kyō-kwan-moku-roku. ②一卷  
 ③存 ④寫本(龍大、三〇一一・一〇〇)  
**聖語掇輯** ①(日)Shō-go-tes-shū.  
 ②二卷 ③存 ④堅樹 ⑤刊本(谷大、餘  
 大・二二〇八)

**聖語錄** ①(日)Shō-go-roku. ②一卷

③存 ④本多日生(一昭和六A. D. 1931)著  
 ⑤明治三九刊 ⑥(立大、B〇一・一一) ⑦  
 東京統一社

**聖護院宮御由緒並御寺領村書**

①(日)Shō-go-in-no-miya-go-yū-etsu-  
 narabini-go-ji-yō-son-sho. ②一卷 ③  
 存 ④寫本(正大、一〇三二・一一二)

**聖護院門跡歴代記** ①(日)Shō-go-

in-mon-zokuri-ekitai-ki. 聖門御累代記

て菩薩は佛に向つて、云何にして疾病を消  
 除し、夜叉神を除遣すべきやと問ひ、佛は  
 神通力を以て諸神を召集し、時に虚空の中  
 に六如來を出現した。六如來とは尼鉢尸如  
 來・尸企如來・毘舍浮如來・羯矩怛那如來・羯  
 曇牟尼如來・迦葉波如來にして、六如來は一  
 切衆生を利益し疾病を消除し、夜叉を除遣  
 せんために、隨喜して各々陀羅尼を説き、  
 更に虚空藏菩薩に告げて此の陀羅尼を若し  
 衆生が晝夜六時に憶持思惟念誦すれば病疾  
 消除、鬼魅遠離、惡夢退散、富貴長壽にし  
 て恒に如來を見、諸佛に護念せらると説き、  
 終に釋迦牟尼如來も亦心印陀羅尼を説か  
 れ、而も此の陀羅尼を受持讀誦供養せば刀  
 杖も傷けず水も漂溺せず云々と説いて陀羅  
 尼の功德を讚歎してゐる。(岡田契昌)

**聖光上人傳** ①(日)Shō-kō-shō-nin

den. ②一卷 ③存、淨土宗全書第一七  
 續群書類從第九 ④了惠(寛元元一元徳二  
 A. D. 1313—1330)著、信阿(寶曆五—文政三  
 A. D. 1735—1820)纂註 ⑤弘安十(A. D.  
 1784)

**聖光上人傳** ①(日)Shō-kō-shō-nin

⑥本傳續群書類從本は了惠著作のもので、  
 淨土宗全書本は清光信阿が博引旁證纂輯し  
 たもの、傳の本文は同じであるが體裁は異  
 つてゐる。筑後善導寺の開山、淨土宗の第  
 二祖、鎮西派祖聖光坊辨長の傳記を漢文で  
 作つたものである。

上人は、筑前香月の人、應保二年の生誕、  
 七歳州の菩提寺に入り妙法法師に従ひたる  
 こと、十四歳に受戒し、常寂法師に天台宗  
 の綱目を稟けて修學年を累ねたが、邊土の  
 學問達せざるところありとて二十二歳の時  
 叡山に登り觀法橋の室に入つた時の事、  
 二十九歳歸郷、三十二歳舍弟の絶入せるを  
 見て眼前の無常に驚き、この時より往生行  
 業を修するやになつた。明星寺の衆徒の請  
 に依て造塔の勸進をされ、次で塔の本尊を  
 迎ふる爲め上洛し、昔し證眞法印が常に法  
 然上人を讚めたのを思ひ出して、東山の禪  
 室に詣て、初めて謁した、此時上人年三十  
 六、法然上人は六十五歳であつた。上人心  
 中に法然上人の勸化富めりとも何ぞ我が所  
 存に過ぎんや、彼の懷念を試むる爲めに、  
 先づ我が發心を暢べしとて、法然上人が  
 子何行を修するかと問はれたのに答へて、

塔を建立し、常に念佛を行ずるといふと、法然上人が、善導の勸を見るに起立塔寺を疎雑の業とし稱名念佛を正定の行とす、但念佛の義は横に九宗に通じ、堅に淺深を該ぬ、子の念佛は何の念佛ぞと問はれて、始めて身不肖なるを知つて閉口して、吾若し謁せざんば豈に天の高を知り、地の厚を學ばんと。法然上人より三重念佛を分別を受けた、これより高擧の心頓に息み、大歡喜して三月の間片時も座下を離れなかつた。

後歸郷して更に建久年三十八歳の時上洛し、大師に謁した時選擇集を授けられ六年間連日參學懈らず、相傳剩すところなかつた事實を記し、次に元久元年歸郷の後の行化、安養寺の本尊の奇瑞、善導寺の起立、往生院に於て授手印製作の顛末、嘉禎三年徹選擇の述作。

淨土法門と第三祖然阿へ付屬の事を記し、法然上人に謁してよりの日常の行儀、靈儀感見等の奇瑞ありしを述べ、嘉禎三年十月已來漸く不食翌四年二月二十九日入滅に至る間の法語、行儀、垂示を記し、往生の瑞相等を述べ本傳を終り。

專修念佛師 辨阿聖靈基 正助行不退 途往生極樂 嘉禎四年戊戌閏二月二十九日御入滅

と善導寺石塔地輪の刻文を擧げ、了惠が本傳を草し、再治したる夜、先師良忠と聖光上人が膝を交へて語る席に了惠が居たのを夢んだのを弘安十年十一月追記してゐる。淨土宗全書收載本は付録として上人の道蹟、京都聖光寺、石州大願寺以下二十二ヶ

寺を擧げ、記主の乞戒疏文。金光禪師行狀附正中山緣起として、陸奥行岳西光寺開山金光上人の傳記を掲げ、奥州東日流正中小大權現略縁起を録してゐる。

清光寺信阿は刻金光禪師傳跋を書き更に尾張國圓光大師遺蹟再興記を付して居る。淨土宗全書收載本即ち文政四年の刊本は松坂清光寺信阿の校訂纂註をしたもので、專念寺隆圓の識語に依ると、本書は鏤板は出來たが、まだ校訂が終らないで、信阿が示寂したので、隆圓が代つて校訂し、卷頭に二祖肖像と華頂山大僧正眞嚴の序を冠して、出版して宿志を遂げさせたのである。

信阿は白蓮社徵譽喚阿と號し、寶曆五年尾張海西郡に生れ、俗姓中山氏、九歳にして梅香院譽和尙に依り雜染し、三條山に學び、初め江州金勝山に住し、城州藤森誓願寺に轉じ、後勢州松坂清光寺に轉じ、到るところ專修念佛を勧め、菩薩大戒を授け、行化盛であつた、文政三年十一月十一日寂、世壽六十七であつたことが知れる。

〔參考〕 總淨土依憑章疏目錄 ①弘安一〇刊(龍大、二九六五、一三一、研眞)(慶安四刊(龍大)文化一四刊(正大、一五一六、三一)文政四刊(正大、一五一六、一一三)(京大、一・二一七・七〇)刊本(谷大、宗大・二六九〇)(龍大、二〇三・二七) (中谷在禪)

**聖光上人道蹟** ①(日)Shō-kō-shō-in-dō-seki ②一卷 ③存 ④信阿(寶曆五一)文政三A.D.1755-1820) ⑤文政四刊 ⑥(正大、一五一六・一一二)(龍大、研史) **聖光上人臨終用意** ①(日)Shō-kō-

shō-nin-jin-no-yō-i ②一卷 ③存、臨終南錄之内 ④辨長(應保二—嘉禎四A.D.1162-1238)述 ⑤刊本(谷大、宗大・九八七)

**聖皇本紀** ①(日)Shō-tō-jōn-ki ②四卷 ③淨土眞宗教典第三に曰く「作者未詳。依内題。先代舊事本紀。三十五至三十八之四卷也。舊事本紀。又名大成經。宣傳流世。唯今紀四卷。印本別行。或云。大成經爲後人偽造。未考。且如此紀所叙。多同平氏傳。間有少差。加旃屢載。怪異事述。謂之眞偽混淆。亦可云云。

**聖金剛手菩薩一百八名梵讚** ①(日)Shō-kōn-go-shū-do-satsu-i-pya=ku-lachi-myo-dōn-san. (支) Sheng-chin-kuang-shou-pu-ta-sai-pai-pa-ming-fan-tan. ②金剛手菩薩一百八名梵讚、一百八名梵讚 ③一卷 ④存、大正二〇・五六九 No. 131. 縮成一三、二一六・一〇、北122階、南1237階、元1231階、明北1070言、清1070言、麗1231高、天1217階、明南894夙、Nj. 1075 ⑤宋法賢(一咸平四A.D.1001)譯 ⑥本書は聖金剛手菩薩を第一會より第二十會に至つて一百八名梵名を以て讚歎してゐる。(岡田契昌)

**聖最勝陀羅尼經** ①(日)Shō-sai-shō-da-ra-ni-kyō. (支) Sheng-tsui-shang-to-lo-ni-ching. (梵) Vissavāṭṭa-nama-dhāraṇī(藏傳) (藏)Hphags-pa khyad-par-can shes-ya-paṅi gzuis. ②一卷 ③存、大正二・一九二四No. 1409. 縮成一〇。

④(日)Shō-sai-jō-ō-myo-nyo-rai-da-ra-ni-kyō. (支) Sheng-tsui-shang-teng-ning-jū-tai-to-lo-ni-ching. (梵)A-ga-paṅpa-dhāraṇī(藏傳) (藏)Hphags-pa rig-shags-kyi rgyal-mo srol-ma mehog-gi gzuis. ⑤聖最上燈明陀羅尼經 ⑥一卷 ⑦存、大正二・一八七二No. 1335. 縮成七、二一五・二、北1120階、南1137階、元1130夙、明北794忠、清794忠、麗1115隸、天1117夙、法1238兵、至777興溫、明南802忠、Nj. 799 ⑧宋施護(一太平興國五A.D. 980)譯 ⑨本書は佛、舍衛國祇樹給孤獨園に大苾芻

已一五・五、北1193兵、南1216兵、元1210兵、明北873臨、清673臨、麗1196夙、天1196兵、法1311虛、至771夙、明南876夙、Nj. 878 ⑩宋施護(一太平興國五A.D. 980)譯 ⑪佛、一時、波囉鉢多國星左大城廣彌糞精舍に在した時、苾芻驪野佐糞と名づくものあつた。時に、彼の苾芻星左大城を出でて支那城に往かんとする路中に於て、一大人の身長三丈面長四尺なる者に出會つた。而して是れ、文殊師利菩薩なること知り、何故此に來るやと問ひしに、菩薩答へて曰く、此の閻浮提内の諸の衆生等は頭痛・腹痛・眼痛・耳痛・鼻痛等諸多の病苦あり、又癱・瘡・痔漏・癩癧・瘧疾等一切の惡病あり、又寒熱・滂旱・五穀不豐・人民飢渴等の苦惱あるを以ては此等の諸災惡を除去せんがためなりと述べて、文殊師利菩薩は、聖最勝陀羅尼を説き、更に陀羅尼の功德の廣大なることを述べたる。(岡田契昌)

**聖最上燈明如來陀羅尼經** ①(日)Shō-sai-jō-ō-myo-nyo-rai-da-ra-ni-kyō. (支) Sheng-tsui-shang-teng-ning-jū-tai-to-lo-ni-ching. (梵)A-ga-paṅpa-dhāraṇī(藏傳) (藏)Hphags-pa rig-shags-kyi rgyal-mo srol-ma mehog-gi gzuis. ②聖最上燈明陀羅尼經 ③一卷 ④存、大正二・一八七二No. 1335. 縮成七、二一五・二、北1120階、南1137階、元1130夙、明北794忠、清794忠、麗1115隸、天1117夙、法1238兵、至777興溫、明南802忠、Nj. 799 ⑧宋施護(一太平興國五A.D. 980)譯 ⑨本書は佛、舍衛國祇樹給孤獨園に大苾芻

⑩(日)Shō-sai-jō-ō-myo-nyo-rai-da-ra-ni-kyō. (支) Sheng-tsui-shang-teng-ning-jū-tai-to-lo-ni-ching. (梵)A-ga-paṅpa-dhāraṇī(藏傳) (藏)Hphags-pa rig-shags-kyi rgyal-mo srol-ma mehog-gi gzuis. ⑪聖最上燈明陀羅尼經 ⑫一卷 ⑬存、大正二・一八七二No. 1335. 縮成七、二一五・二、北1120階、南1137階、元1130夙、明北794忠、清794忠、麗1115隸、天1117夙、法1238兵、至777興溫、明南802忠、Nj. 799 ⑭宋施護(一太平興國五A.D. 980)譯 ⑮本書は佛、舍衛國祇樹給孤獨園に大苾芻

⑯(日)Shō-sai-jō-ō-myo-nyo-rai-da-ra-ni-kyō. (支) Sheng-tsui-shang-teng-ning-jū-tai-to-lo-ni-ching. (梵)A-ga-paṅpa-dhāraṇī(藏傳) (藏)Hphags-pa rig-shags-kyi rgyal-mo srol-ma mehog-gi gzuis. ⑰聖最上燈明陀羅尼經 ⑱一卷 ⑲存、大正二・一八七二No. 1335. 縮成七、二一五・二、北1120階、南1137階、元1130夙、明北794忠、清794忠、麗1115隸、天1117夙、法1238兵、至777興溫、明南802忠、Nj. 799 ⑳宋施護(一太平興國五A.D. 980)譯 ㉑本書は佛、舍衛國祇樹給孤獨園に大苾芻

名所行發⑩(名庫書)者處所現⑪ 月年の刊寫⑫(書考參書釋註)書末⑬ 說解卷内⑭ 代年作者⑮ 香著⑯ 缺存⑰ 數卷⑱(名書)名題⑲ 號略字數

千二百五十人と俱に在せし時、娑婆世界を去ること百千俱胝刹に於て世界あり無邊花世界といひ、最上燈明如來と稱する如來住し給ふ、而して彼處に大光明と無量光と名づくる二菩薩が居た。最上燈明如來は此の二菩薩を娑婆世界に遣して世尊の少病少惱を問訊し兼て娑婆世界には人非人夜叉羅刹等横行し王法・盜賊・蛇蝎・惡瘡・蟲蟻等擾亂するを以て常恒に陀羅尼眞言章問を説かんとて陀羅尼六種出し、而して世尊は尊者阿難に告げて此の陀羅尼章句は甚だ得難く受持誦讀し他のために解説すれば一切の煩惱は皆悉消除し、乃至正法久住す等と説いて陀羅尼の功德を讃歎してゐる。

(岡田契昌)

聖財集

①(日)Shō-zai-shū. ②三卷

③存 ④無住嘉祿二一正和元A. D. 1236—1243)著 ⑤(參考) 扶桑禪林書目、日本禪林撰述書目 ⑥寛永二〇刊、明治二六再刊 ⑦(京大、藏・四・九・九九)哲、あ・六・右・二〇) (龍大、二六七九・二〇) (谷大、餘洋・五八) (正大、一〇一・三) (京大、一・二五乙・七) ⑧京都一切經印房

聖財論私釋 ①(日)Shō-zai-ron-shi-shaku. 麒麟聖財論私釋、聖財論私記 ②二卷或四卷 ③存 ④良定袋中(天文二一—寛永一六A. D. 1532—1639)述 ⑤寛永一六(A. D. 1639) (參考) 總淨土依憑章疏目錄 ⑥寛永二二刊(谷大、宗大・六〇九) (龍大、二六八一・八五、研眞)延寶四刊(正大、一五三二・六) 哲、ふ・七・中・一五)

聖四十二賢聖儀

①(日)Shō-shi-ji

①(日)Shō-ji-se-da-ra-ni-kyō. (支)Sheng-chi-shih-erh-hsien-sheng-i. 四十二賢聖錄 ②一卷 ③唐洪然(景雲二—建中三A. D. 711—782)述 ④(參考) 傳教大師將來台州錄 ⑤(實龜院) ⑥一帖 ⑦存 ⑧徳川時代寫

聖持世陀羅尼經

①(日)Shō-ji-se-da-ra-ni-kyō. (支)Sheng-chi-shih-t'o-to-ni-ching. (梵)Yasudhara-dharani (寫本) (藏) Hphags-pa nor-gyi ryan shes-bya-bahi gzus. 聖持世經 ②一卷 ③存、大正三〇・六七二No. 1166、縮成八、卅一五・三、北1133卿、南1146卿、元1149卿、明北804則、清804則、麗1132壁、天1135卿、法249高、至736版、明南806忠、No. 809 ④宋施護(—太平興國五A. D. 980)譯

持世菩薩とは「財寶を雨らして世間を賑はし、又世間を護持する故に」持世と名づけた。本書は初め白旃檀香水を絹に塗り、畫匠師に命じて齋戒を受け、澡浴新衣して持世菩薩の本形を畫くことを説き、次に持世呪を誦持するときは、國王無災、穀實倍増、大富貴等を得ると其の功德の廣大なることを述べ、更に持世菩薩の根本呪と其の印等を説く。玄奘譯持世陀羅尼經、不空譯佛說雨寶陀羅尼經、法天譯佛說大乘聖吉祥持世陀羅尼經は何れも本經の同類本である。

聖者名

①(日)Shō-jan-myō. (支)Sheng-ang-che-ming. ②一卷 ③(參考) 慈覺大師在唐送進錄

聖者文殊師利發菩提心願文 ①(日)Shō-ji-mon-ji-shi-ri-hatsu-dō-dai-shin-gwan-mon. (支)Sheng-chi-wen-shu-shih-ri-ta-p'u-t'i-hsin-j'uan-wen. 文殊師利發菩提心願文 ②一卷 ③存、大正二〇・九四〇No. 1198、縮藏九、卅一六・六

宋代智慧譯 ①文殊師利菩薩、往昔、啞馬國王たりし時、雷音王佛の處に於て此の菩提心願文を發せる由を卷末に註記してある。最初敬禮一切諸佛菩薩と卷首に出し、次に救護一切而前住、究竟發於菩提心云々の頌文を以て菩提心を發して一切有情を利益し乃至無邊の惡業を造らず等と説つてゐる。(岡田契昌)

聖莊嚴陀羅尼經

①(日)Shō-shō-gon-da-ra-ni-kyō. (支)Sheng-chuang-yun-to-to-ni-ching. (梵)Melkala dhara-ni. (藏傳) Me-thal shes-bya-bahi gzus. 聖莊嚴經 ②二卷 ③存、大正二一・八九五No. 1376、縮成八、卅一五・四、明北899命、清899命、麗1166侯、天1164家、明南884士、臨、No. 884 ④宋施護(—太平興國五A. D. 980)譯

佛、迦毘羅城無憂樹園に在せる時、羅睺童子夜に於て惡羅刹に擾亂せられ佛前に詣り涕泣す。佛、童子及び未來の衆生の爲に大莊嚴陀羅尼を説き、この陀羅尼の功德及び持念に於ける擲地、結界、作壇、供養法、結界陀羅尼を説き阿難に告げ玉はく、

この結界陀羅尼を誦し已つて大莊嚴陀羅尼を誦せば一切の所作成就せざるは無しと。時に慈氏菩薩、大梵天王、善時分天、帝釋天、四天王、妙月天子、一切天衆、諸星宿天、一切龍衆、二十八天衆、軍主衆、畢隸多毘舍遮鳩槃荼等衆、布單囊羯吒布單囊衆、一切末怛哩衆、四方四羅刹、捺囉彌多羅刹女等々順次に莊嚴陀羅尼を説く。次で大梵天王は此れ等莊嚴陀羅尼の功德を佛に白し、又佛は大梵天王所説の眞實なること及び佛所説の陀羅尼の功德を阿難に告げ玉ふ。

本經は雜密經にして、その類本に施護譯寶帶陀羅尼經一卷あり。(坪井徳光)

聖淨權實義

①(日)Shō-ji-jōgon-jitsun-gi. ③存、眞宗玄論之内 ④道振(安永二—文政七A. D. 1773—1824)述 ⑤寫本(龍大、一〇五一・五)

聖淨二門義

①(日)Shō-ji-ni-mon-gi. ②一卷 ③存、眞宗全書第六二、十一部雜纂之内 ④僧録(享保八一—天明三A. D. 1793—1783)述

聖道淨土二門の名義を四門に分別して解釋したるもの、(一)辨相、(二)文證、(四)料簡、これである。辨相の中二攝相望して四句に分別す、云く、一、自力攝聖道大乘等、二、他力攝、淨土眞宗、三、他力自攝、四明蓮式等、四、自力攝、淨土要門これなりとす。又二門相望して四句に分別をなす、一、唯聖道、二、唯淨土、三、聖道淨土、四淨土聖道、以つてさきの二攝相望の分別と次第の如く對配せり。

聖者の後から

①(日)Shō-jan-no-ho-kari. ②一卷 ③存 ④山邊習學者

大正二刊 ⑤(谷大、餘洋・三四〇)

聖

大正二刊 ⑤(谷大、餘洋・三四〇)

聖

大正二刊 ⑤(谷大、餘洋・三四〇)

⑦〔参考〕 淨土真宗教典志 ⑧寫本(龍大、一五〇二・一八) (大原性實)

聖淨二門兩眞實之記旨趣

①(日)Shō-jō-ni-mon-ryō-shin-jitsu-no-ki-shi-sho. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大)

聖水經

①(日)Shō-sui-kyō(支)Shō-ng-shui-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④〔參考〕 武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

聖水山養源寺記

①(日)Shō-sui-san-yō-gen-ji-ki. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一九四・六)

聖水寺志

①(日)Shō-sui-ji-shi(支)Shōng-shui-ssā-chih. 雲居聖水寺志 ②六卷 ③存、武林掌故叢編第一六 ④明倫原輯、實錄重纂

①本寺志は上天竺講寺志や聖果寺志に比し些か記述の體を異にしてゐる。即ち卷一形勝、建置、卷二、祖師、耆宿、倚寓、靈異、卷三題詠、卷四法講、卷五贊偈、卷六清規と分け、形勝の部には雲居聖水寺附近の山河の形勝を述べ、建置の部には堂塔の興廢、規模を述べて、寺田、常住法器に及ぶ。卷二に於ては歴代の住持、耆宿より、來往の詩人墨客に至るまで細大漏さず彙輯し、その末に靈異、古蹟を添へてゐる。卷四法講には初祖菩提達磨尊者より四十一祖巨如奇禪師に至る迄の法統を擧げ、道膺禪師、明本、守臈禪師、心上人、寶雨禪師等の傳を述べ、最後に贊偈清規を収めて終つてゐる。要する此の寺志は陸宗楷の序にも

云へる如く從違達委、井井有條、別類分門、班班可考、情最就乎吟咏、後復附以詩篇、允矣と云つてゐるのは篤論と云ふべきである。

⑤寫本(京大、藏・二〇三・三) 光緒一八重刊(谷大、外大・一五六九) (關根靜應)

聖水寺志補遺

①(日)Shō-sui-ji-shi-ho-i(支)Shōng-shui-ssā-chih-pu-i. ②一卷 ③存、武林掌故叢編第一六

①此の補遺、武林掌故叢編本にては聖水寺志と合冊を爲す。然して此の補遺を撰した理由は開卷第一の書已成帙。易來掛漏之譏事有可觀用增綴細之富。況乎名勝之地、實多異見新聞。而且說法之場不棄片言隻字。散金碎玉皆生色於琳宮。集錦鋪裘每重煩于毛穎。と云つてゐるので知る事が出来る。然して補ふところ宋仁宗、佛牙贊、智覺禪師明本傳、澹慈道人周初平百忍說、許時若修雲居記、浙江巡撫都察院張公定案、元雲居寺中峯和尚札、茅坤貴池令近溪沈公墓誌銘、徐一夔重刊中峯和尚廣錄序等是也。

聖誓師子經

①(日)Shō-zai-shi-shi-kyō(支)Shōng-shih-shih-tzu-ching. ②一卷 ③〔參考〕 靜泰錄第三

聖箭堂述古

①(日)Shō-san-dō-juk-ko(支)Shōng-chien-tang-shu-ku. ②一卷 ③存、正續二・三三・一 ④明爲霖道霈(萬曆四三—康熙二三後A.D. 1615—1684)

①福建福州府鼓山湧泉寺永覺元賢禪師の法嗣として明末清初に洞上の宗風を宣揚し

た爲霖道霈禪師が、繼席せる鼓山の聖箭堂に於て、古の佛祖の言行にして末法の弊風を救ひ、其の行業よく學人をして慧目を肅清せしめ、智證を潔白ならしめ、履踐嚴明にして道業の規範たるべきものを、見聞に隨つて記述したもので、同志の人々、捐貲して鑲梓せんことを請ひたるに任せ、道霈四十五歳の明永曆十三年二月(A.D. 1659)自叙して梓行せしめたものである。記述に際しては、時の古今、人の先後を分たず、見聞のまゝ、隨記して、此れに評を加へたもので、述記せられた經論並に祖師は、宏智正覺禪師の僧堂記、大般若經、性空菴主、慧洪覺範禪師、宏智正覺禪師、嵩嶽元珪禪師、雲門匡眞禪師、寶誌和尚十二時頌、汾陽善昭禪師、香嚴和尚、死心願禪師、芙蓉道楷禪師、大寶積經、靈源惟清禪師、後分大涅槃經、黃龍清禪師、明教契嵩禪師、蔣山贊元禪師、羅湖野錄、圭峯宗密禪師、汾陽善昭禪師、永明延壽禪師、天童圓悟禪師、大洪恩禪師、汾州大達無業國師、大智度論、善慧大士、移刺眞卿丞相、大珠和尚、菩提達磨大師、六祖大師、息心銘の三十二條に

⑤寫本(京大、藏・二四三・六六) (大久保堅瑞)

聖善住意天子所問經

①(日)Shō-zen-jū-tien-shih-sho-mon-kyō(支)Shōng-shan-chu-i-tien-tzu-so-wen-ching. ②四卷 ③缺 ④隋闍那崛多(一)開皇

①寫本(京大、藏・二四三・六六) (大久保堅瑞)

聖善住意天子所問經

①(日)Shō-zen-jū-tien-shih-sho-mon-kyō(支)Shōng-shan-chu-i-tien-tzu-so-wen-ching. (梵)Sustimati-devaputra-paripicohā(藏)Ihphags-pa thah-bu blo-gros-rab-gnus-kyis shes-bya-ba theg-pa chen-poi-mdo. 善住意天子所問經、善住意天子經

②三卷 ③存、大正一三・一一五No. 341. 縮地一一・二七六・五、北三卷、南三卷、元六卷、明北七卷、清七卷、麗七卷、天三卷、指三衣、法七衣、至三三國、明南三卷、五、48

④元魏代毘目智仙、般若流支共譯 ⑤宋元明の三本には經名の初の「聖」字がない。大寶積經の第三十六善住意天子會の早き異譯で、佛說如幻三昧經は更に之よりも早き異譯である。寶積經所收の隋達摩笈多譯のみ十品に分けてゐるが、本經と如幻三昧經には品目を出してゐない。文殊菩薩が入定し放光して十方佛國より菩薩衆を集め、主として善住意天子と文殊菩薩との問答と云ふ形で説かれてゐるから善住意天子所問經と名づけられ、一切法は空にして幻化の如しと説くが故に、説法の内容の上から如幻三昧經と名づけられる、本經は經首の如是我聞の前に歸敬序を有して居り、一切諸佛菩薩に歸命し、世尊大智慧海毘盧遮那釋迦牟尼佛法光明に歸命し、聖者文殊師利大菩薩に歸命し、聖者善住意天子遍行大乘者に歸命すと説かれてゐるが、此は他の二譯に全くない所であつて、大體に於てよく一致する三譯中、特に注意すべき相違である。(横超慧日)

⑥開元錄第一四、貞元錄第二四

聖多羅菩薩一百八名陀羅尼經

①(日) Sho-ta-ra-do-sat-u-ip-iyaku-ha=chi-myō-da-ra-ni-kyō. (支) Sheng-to-lo-p'u-sa-i-pai-pa-ming-to-lo-ai-ching. (梵) Tara-devī-namastakata (藏傳)

(藏) Iha-mo sgröl-mahī mshan-brgya-rtsa-brgyad-pa. 聖多羅一百八名經、一百八名陀羅尼經 ①一卷 ③存、大正二〇・四七二No. 1105、縮成一、二一五・三、北1134卿、南1138卿、元1142卿、明北808則、清808則、麗1138經、天1181千、法1264高、至710深、明南808忠、Nj. 813

④宋法天(一咸平四 A. D. 1001)譯 ⑤多羅大菩薩、陀羅尼法を説き、天人夜叉乾闥婆等は之れを聞き怖す。時に自在天王は呪を説き、多羅菩薩の一百八名を讚歎し、多羅菩薩十方国土を照し自在天王及び諸天人の爲に一切如來の一切衆生を覆護し度脱する所以を説く。次で光焰種々莊嚴如來は多羅菩薩一百八名を誦する者の功德を明し玉ふ。

本經は雜密經、多羅法を説けるものにして天息災譯讚揚聖多羅菩薩一百八名經一卷、施護譯、聖多羅菩薩梵讚一卷と類なり。

聖多羅菩薩經 ①(日) Sho-ta-ra-do-sak-kyō. (支) Sheng-to-lo-p'u-sa-ching. 聖多羅經 ①一卷 ③存、大正二〇・四七〇No. 1104、縮成一、二一五・五、北1126卿、南1274卿、元1268卿、明北901深、清901深、麗1260卿、天1260卿、法1374殿、至709深、明南932興、Nj. 906 ④宋代法賢

譯 ⑤佛祖統紀四三、四四(四)によれば法天を法賢と改名せるは雍熙二年(A. D. 985)であり、示寂は咸平四年(A. D. 1001)なるが故に譯時は此の間の十七年間と云ふし。

⑥佛、香醉山五髻乾闥婆王宮に在し、五髻乾闥婆王の請により會座の衆の爲に多羅菩薩陀羅尼を説き、多羅菩薩一百八名を宣説し玉ひ、次で多羅菩薩の畫像或は香木像を安置し、一日三時に陀羅尼及び一百八名を誦せば諸罪消滅し、又一遍乃至二十七遍誦せば所願成就し、諸賢聖はその本身を隠してこの人を擁護し、常に蘇珂嚩帝佛刹に生ぜしむと説きたまふ。時に五髻乾闥婆王は佛の所説を聞き頌を説き佛を讚歎す。

聖多羅菩薩梵讚 ①(日) Sho-ta-ra-do-satsu-bon-san. (支) Sheng-to-lo-p'u-sa-lan-tsan. 聖多羅菩薩梵讚 ①一卷 ③存、大正二〇・四七六No. 1107、縮成一、二一六・一〇、北1196兵、南1207兵、元1201兵、明北1074言、清1074言、麗1195八、天1187兵、法1138處、至1507匡、明南874殿、Nj. 1079 ④宋施護(一太平興國五 A. D. 980-)譯

⑤多羅菩薩讚歎の梵頌。法天譯、聖多羅菩薩一百八名陀羅尼經一卷、天息災譯、讚揚聖多羅菩薩一百八名經一卷と類なり。

聖諦經 ①(日) Sho-tai-kyō. 現代意譯 ②存、現代意譯根本佛教聖典叢書第一〇 ④羽溪了諦、甲斐實行共譯

聖大總持王經

①(日) Sho-dai-so-i-kyō. (支) Sheng-ta-tsung-chih-wang-ching. ②一卷 ③存、大正二一・八八八No. 1371、縮成一、二一五・三、北1167家、南1182家、元1176家、明北825則、清825則、麗1172槐、天1162家、法1293聲、至732履、明南841命、Nj. 830 ④宋施護(一太平興國五 A. D. 980-)譯

⑥佛、祇樹給孤獨園に在し、阿難に告げたまはく、摩訶陀羅尼大總持王あり、過去七十七俱胝如來の説く所、これ威德勢力皆具足し、讀誦せば宿命通を得て七生事を知り、永く菩提を退かずとて、この陀羅尼を説きたまふ。次で過去八十八俱胝如來所説にして十四生事を知り得る陀羅尼、無量の威德力あり、二十一生事を知り得る陀羅尼及びこれに培する功德あり、受持讀誦せば他人を護り、書寫し身に持すれば自らを擁護する陀羅尼等を説き、最後にこの陀羅尼に違逆する者の受くる報を明す。

本經は雜密經にして除障得道法を説けるものなり。

聖代老の手鼓 ①(日) Sho-dai-oi-no-te-tsuzumi. ②三卷 ③存 ④遇親子 ⑤刊本(谷大・宗大・五二八)(龍大)

聖天 ①(日) Sho-ten. 聖天法 ②一卷 ③存、大日本佛教全書第五〇覺禪之 ④覺禪(康治二一建曆二後 A. D. 1143-1212)撰 ⑤寫本(寶善提院)(寶龜院) 聖天儀軌 ①(日) Sho-ten-gi-ki. (支) Sheng-tien-i-kuai. 摩訶毘盧遮那如來定惠均等入三昧耶身雙身大聖歡喜天菩薩修

行祕密法儀軌、雙身大聖天菩薩修行祕密法儀軌 ②一卷 ③存、大正二一・三〇五No. 1271、記續一・三五、唐不空(神龍元一、大曆九 A. D. 765-774)譯 ④摩訶毘盧遮那如來定惠均等入三昧耶身雙身大聖歡喜天菩薩修行祕密法儀軌の下を見よ

⑤承久元寫(寶壽院)貞享五寫(寶善提院) 聖天頸次第 ①(日) Sho-ten-kyō-sai-dai. ②一軸 ③存 ④足利時代寫 (寶善提院) 聖天供 ①(日) Sho-ten-gu. ②一帖 ③存 ④寛文五寫(寶善提院)寫本(金剛三昧院)

聖天供 ①(日) Sho-ten-gu. 聖天供三寶院 ②一帖 ③存 ④寫本(金剛三昧院) 聖天供開結作法 ①(日) Sho-ten-gō-kai-keisaku-jo. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 (寶龜院) 聖天供開結表白 ①(日) Sho-ten-gō-kai-keisaku-jo-byaku. ②一帖 ③存 ④空海(寶龜五一承和二 A. D. 774-835) ⑤徳川末期寫 ④(金剛三昧院)

聖天供次第 ①(日) Sho-ten-gu-shi-dai. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 (寶龜院)(寶善提院) 聖天供七ヶ日略支度 ①(日) Sho-den-gu-shichi-ka-nichi-yaku-shi-do. 聖天供七ヶ日略支度小島流 ②一紙 ③存 ④寫本(高大・寄・一・六六)

聖天供神分 ①(日) Sho-ten-gu-shin-bun. ②一帖 ③存 ④徳川初期寫

名所行發①(名庫書)者總所現② 月年の刊寫③(書考叢書釋註)書末④ 説解容内⑤ 代年作著⑥ 香著⑦ 缺存⑧ 數卷⑨(名書)名題⑩ 號略字數

①(金剛三昧院) ①(日) Sho-den-gu-ha.  
 ②一帖 ③存 ④南北朝時代寫 ⑤(寶善提院)  
 聖天供用意 ①(日) Sho-den-gu-yō  
 ①一巻 ②存 ③德川時代寫 ④(寶  
 龜院)  
 聖天火水供祕法 ①(日) Sho-den  
 kwa-sui-gu-hi-ho. ②一帖 ③存 ④明  
 治時代寫 ⑤(寶龜院)  
 聖天花水供 ①(日) Sho-den-ke-  
 sui-gu. 聖天花水供勸流 ②一帖 ③存  
 ④德川末期寫 ⑤(金剛三昧院)(寶善提院)  
 聖天荒神祕法 ①(日) Sho-den-ko-  
 jin-hi-ho. ②一巻 ③存 ④足利時代寫  
 ⑤(寶龜院)  
 聖天講式 ①(日) Sho-den-ko-sūki.  
 ②一軸 ③存 ④足利中期寫 ⑤(高大、  
 奇・一・四九)  
 聖天様の傳説と由來 ①(日) Sho-  
 den-sama-no-den-seisan-to-yu-rai. ②一  
 巻 ③存 ④菅清彦著 ⑤昭和七刊 ⑥奈  
 良菅清彦  
 聖天三日成就法 ①(日) Sho-den-  
 san-nichi-to-jū-ho. 聖天三日成就法小島流  
 ②一册 ③存 ④足利中期寫 ⑤(金剛三  
 昧院)  
 聖天支度ノ洛像作法讚 ①(日)  
 Sho-den-shi-taku-no-yoku-zō-sa-ho-sin.  
 ②三紙 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)  
 聖天次第 ①(日) Sho-den-shi-dai  
 ②一巻 ③支靜(一延喜元 A. D. 901)

⑦(參考) 諸宗章疏錄第三  
 聖天抄 ①(日) Sho-den-shū. ②一帖  
 ③存 ④應永二二寫 ⑤(寶善提院)  
 聖天相承口傳事 ①(日) Sho-den-  
 sō-jō-ku-den-no-ko-to. 小島聖天相承口傳  
 事 ②一軸 ③存 ④寫本(金剛三昧院)  
 聖天入用 ①(日) Sho-den-nyū-yō.  
 ②一册 ③存 ④延享四寫 ⑤(寶善提院)  
 聖天念誦次第 ①(日) Sho-den-nen  
 jū-shi-dai. ②一巻 ③存 ④德川時代寫  
 ⑤(寶龜院)  
 聖天祕記 ①(日) Sho-den-hi-ki. ②  
 一册 ③存 ④延享三寫 ⑤(寶善提院)  
 聖天毘那夜迦法 ①(日) Sho-den-  
 bi-na-ya-ka-ho. (支) Sheg-ri-tion-pi-na-  
 yeh-cha-fa. 大聖天歡喜雙身毘那夜迦法。  
 毘奈夜迦法、雙身毘奈夜迦法、大聖歡喜天  
 法 ②一巻 ③存、大正二・二九六 No.  
 1266、縮岡一四、正一六・一〇、明北1396杜、  
 清1396杜、麗1404骨、明南1194學、正、1403  
 ④唐不空(神龍元—大曆九A.D.705—774)譯  
 ⑤大聖天歡喜雙身毘那夜迦法の下を見よ。  
 聖天辨天吒天三天講私記  
 ①(日) Sho-den-ben-ten-ta-ten-san-ten-  
 kō-shi-ki. ②一軸 ③存 ④文政三寫  
 ⑤(金剛三昧院)  
 聖天法 ①(日) Sho-den-hō. 聖天  
 一巻 ③存、大日本佛教全書第五〇覺禪鈔之  
 內 ④覺禪(康治二—建曆二後A.D.1143—  
 1212)撰 ⑤延慶三寫 ⑥(寶龜院)  
 聖天法緣起 ①(日) Sho-den-hō-en-  
 gi. 聖天法緣起小島 ②一帖 ③存

應長元寫 ①(高大、寄・一・六四)  
 聖天法口訣 ①(日) Sho-den-hō-ku-  
 -ketsu. ②一帖 ③存 ④寫本(高大、寄・  
 一・六四)  
 聖天法口傳 ①(日) Sho-den-hō-ku-  
 -den. 聖天法口傳仁和寺 ③存 ④慶長元  
 寫 ①(高大、寄・一・六四)  
 聖天浴油次第 ①(日) Sho-den-yō-  
 ku-yū-shi-dai. ②一帖 ③存 ④安永六  
 寫 ⑤(寶善提院)  
 聖天略作法 ①(日) Sho-den-ryaku-  
 -sa-hō. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤  
 (寶善提院)  
 聖德 ①(日) Sho-toku. ②一册 ③存  
 ④德山現道 ⑤大正八刊 ⑥(龍大、二九六  
 五・二〇七)  
 聖德會法用次第 ①(日) Sho-toku-  
 e-hō-yō-shi-dai. 本願聖皇一千三百年御講  
 聖德會法用次第 ②一巻 ③存 ④法隆寺  
 編 ⑤大正一〇刊 ⑥(龍大、二〇七・一  
 一)  
 聖德皇御廟窟磯長山叡福寺之  
 事實 ①(日) Sho-toku-ko-go-ryō-  
 kutsu-shi-anga-san-ei-fuku-jin-no-jijūsu.  
 ②一巻 ③存 ④寫本(正大、一〇三三・一  
 九)  
 聖德皇太子 ①(日) Sho-toku-tō-  
 tai-shū. ②一册 ③存 ④高島米峰著  
 大正一〇刊 ⑤(谷大)  
 聖德皇太子御傳 ①(日) Sho-toku-  
 kō-tai-shū-gō-den. ②一巻 ③存 ④大  
 久保好著 ⑤明治二六刊 ⑥(正大、一〇三

七・一四)(谷大、餘大、二六七九)(龍大、二九  
 六五・二〇七)  
 聖德皇太子雪冤 ①(日) Sho-toku-  
 kō-tai-shū-setsu-en. 聖德太子雪冤 ②一  
 巻 ③存 ④伊澤道一著 ⑤明治三四刊  
 ⑥(龍大、二九六五・二〇九)(帝國、九〇・一  
 八七)  
 聖德皇太子略緣起 ①(日) Sho-  
 goku-kō-tai-shū-ryaku-en-gi. ②一巻 ③  
 存 ④刊本(龍大、二九六五・二三二)  
 聖德抄 ①(日) Sho-toku-shō. ②二巻  
 ③覺超(天德四—長元七A. D. 950—1034)  
 ⑦(參考) 本朝台祖撰述密部書目  
 聖德太子 ①(日) Sho-toku-tai-shū.  
 ②一巻 ③存 ④南田宗惠(文久三—大正  
 一A. D. 1863—1922)著 ⑤明治二八刊  
 (谷大、餘洋、一七〇)(正大、一〇三七・二六)  
 大正九刊(正大、一〇三七・四三)(龍大、研  
 史)  
 聖德太子 ①(日) Sho-toku-tai-shū.  
 ③存、世界思潮第四 ④辻善之助著  
 聖德太子記文 ①(日) Sho-toku-tai-  
 shū-ki-mon. ②一巻 ③存、説林十四部乾  
 册之內 ④刊本(谷大、宗大、二六二〇)  
 聖德太子御製法華義疏 ①(日)  
 Sho-toku-tai-shū-kyō-sei-hōk-ke-gi-sho.  
 法華義疏 ②一册(上巻) ③存、岩波文庫  
 ④花山信勝編 ⑤昭和六刊 ⑥東京岩波書  
 店  
 聖德太子袈裟驗證記 ①(日) Sho-  
 -toku-tai-shū-ke-sa-ken-shō-ki. ③存、  
 慈雲尊者全集第一尼尼編第一之一

名所行發⑩(名庫書)高麗所現⑪月年の刊寫⑫(書考)全書釋註⑬書末⑭説解容内⑮代年作者⑯香著⑰缺存⑱數巻⑲(名書)名題⑳號略字數

聖德太子研究

①(日) Sho-toku-tai-tai-shi-ken-kyū. ②一册 ③存 ④井上右近著 ⑤大正一四刊 ⑥(京大、一・二六・一四二)

聖德太子憲法

①(日) Sho-toku-tai-shi-kem-pō. ②一軸 ③存 ④徳川時代刊 ⑤(寶龜院)

聖德太子憲法注

①(日) Sho-toku-tai-shi-kem-pō-cha. ②一卷 ③存 ④玄惠註 ⑤寛永二一刊 ⑥(眞如藏)

聖德太子憲法と法王帝説の研究

①(日) Sho-toku-tai-shi-kem-pō-to-hō-ō-tei-satsu-no-ken-kyū. ②一卷 ③存 ④倉田範治著 ⑤昭和五刊 ⑥(京大、佛教・D五・二五)(龍大)

聖德太子憲法並制條

①(日) Sho-toku-tai-shi-kem-pō-narabini-sei-jū. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、二〇九三・一一)(寶龜院)

聖德太子言行錄

①(日) Sho-toku-tai-shi-gen-ko-roku. ②一卷 ③存 ④秋山悟庵編 ⑤明治四一刊(龍大、二九六五・二二)大正元刊(正大、一〇〇七・一五)

聖德太子五憲法

①(日) Sho-toku-tai-shi-go-kem-pō. ②一卷 ③存 ④天明八刊(龍大、二〇九三・一四)延寶三刊(龍大、二〇九三・一三)

聖德太子五節略解

①(日) Sho-toku-tai-shi-go-satsu-ryaku-ge. ②二卷 ③存 ④大輯 ⑤天保八刊 ⑥(龍大、二九六五・二二三)

聖德太子御繪傳附說明書

①(日) Sho-toku-tai-shi-go-e-den-tsukerari-sei-zu-naei-sho. ②一册 ③存 ④北畠具雄編 ⑤大正一一刊 ⑥(龍大、別置)

聖德太子御繪傳略解

①(日) Sho-toku-tai-shi-go-e-den-ryaku-ge. 四天王寺繪堂聖德太子御繪傳略解 ②三卷 ③存 ④天明四刊 ⑤(谷大、餘大・一四三三・五一〇七)

聖德太子御憲法玄惠註抄

①(日) Sho-toku-tai-shi-go-kem-pō-gen-e-cha-shō. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、研究)

聖德太子御述文

①(日) Sho-toku-tai-shi-go-jutsu-mon. ⑦(參考) 淨土眞宗聖教目錄

聖德太子御像解說

①(日) Sho-to-kutai-shi-go-zō-kai-satsu. ②一卷 ③存 ④平子輝嶺 ⑤大正九刊 ⑥(立大、B一八・二二)(正大、一〇〇七・二〇) ⑦東京丙午出版社

聖德太子御傳

①(日) Sho-toku-tai-shi-go-den. ②一卷 ③存 ④聖德太子一千三百年御遠忌奉讚會編 ⑤大正一二刊(高大、一・二二)(谷大、餘洋・八〇一)大正一五刊(立大、B一六・九二)(龍大、二九六五・二二二)(谷大)

聖德太子講式

①(日) Sho-toku-tai-shi-ko-shiki. ②一卷 ③存 ④眞宗法苑之内、翰林拾葉第二〇 ⑤傳、存覺(正應三—應安六 A.D. 1290—1373)撰 ⑥聖德皇太子之盛徳を讃嘆せるもの、六門に分別す、第一、第二は本地垂迹の功徳、

第三、第四は在世、滅後の利益、第五、第六は發願廻向の意趣を數じてある。餘宗にても存覺の舊名尊覺の名に於て之を用ひてゐる。

⑦(參考) 淨土眞宗教典志第一 ⑧明和九刊(龍大、一・三二二)寫本(谷大、餘大・五九六)(龍大、一・三二二) (大原性實)

聖德太子講式

①(日) Sho-toku-tai-shi-ko-shiki. ②一卷 ③存、翰林拾葉第二〇 ④眞慶撰 ⑤寫本(谷大、外大・一四五八)

聖德太子講式

①(日) Sho-toku-tai-shi-ko-shiki. ②一卷 ③存、翰林拾葉之内 ④寫本(谷大、外大・一四五八)

聖德太子講式

①(日) Sho-toku-tai-shi-ko-shiki. 極樂院傳聖德太子講式 ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、宗大・二二七二)

聖德太子講式集

①(日) Sho-toku-tai-shi-ko-shiki-shū. ②一卷 ③存 ④大屋徳城編 ⑤大正一〇刊 ⑥(龍大、二〇七二・一一)(正大、一〇八・一六)(谷大、餘洋・六〇四)(京大、一・二六・二三)(高、大、一・二六)(京專)

聖德太子講式略式

①(日) Sho-to-kutai-shi-ko-shiki-ryakushiki. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、餘大・五九六)

聖德太子索隱

①(日) Sho-toku-tai-shi-saku-in. ②一卷 ③存 ④佐田介石著 ⑤明治八刊 ⑥(龍大)

聖德太子三天瑞記

①(日) Sho-toku-tai-shi-san-ten-zūi-ki. 眞至大聖三天瑞記 ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、二九六五・三四)

聖德太子讚

①(日) Sho-toku-tai-shi-san. 皇太子聖德奉讚、聖德太子和讚、聖德和讚、皇太子聖德和讚、太子奉讚、太子和讚、迦藍和讚、皇太子奉讚 ②一卷 ③存、國文東方佛教叢書第八、眞宗遺文纂要之内、眞宗假名法典卷上、眞宗法要拾遺

第三 ④親鸞(承安三—弘長二 A.D. 1173—1262) ⑤建長七(A.D. 1255)十月 ⑥皇太子聖德奉讚の下を見よ、 ⑦刊本(谷大、宗大・一三二二)(龍大、一〇三・一〇)

聖德太子讚歎式

①(日) Sho-toku-tai-shi-san-dan-shiki. ②一軸 ③存 ④鎌倉中期寫 ⑤(高、大、寄・一・四九)

聖德太子事蹟正辨

①(日) Sho-toku-tai-shi-jiseki-shū-ben. ③存 ④龍湫(寛政一一—明治一八 A.D. 1800—1885)述 ⑤元治元寫 ⑥(谷大、宗大・三九二七)

聖德太子實錄

①(日) Sho-toku-tai-shi-jitsu-roku. ②二卷 ③存 ④如意林一風(長崎一風)作 ⑦(參考) 淨土眞宗教典志第三 ⑧明和四刊(谷大、餘大・三六五八)(正大、一〇三七・五五)明和八刊(龍大、研眞)文化一一刊(龍大、二九六五・二一五)(京大、一・二二・三三)(帝室、一一四・六八)

聖德太子實錄

①(日) Sho-toku-tai-shi-jitsu-roku. ②一卷 ③存 ④久米邦武著 ⑤大正八刊 ⑥東京丙午出版社

聖德太子頌徳文

①(日) Sho-toku-tai-shi-jū-toku-mon. ②一卷 ③存 ④刊本(龍大、二九六五・二一七)

**聖德太子十七箇條憲法** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den. ②一卷 ③明一(神龜五一延曆一七A.D. 728-798)作 ④(参考) 淨土真宗教典志第三

**聖德太子十七憲法註** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den. ②一卷 ③存 ④湖普通道海(寛永五元祿八 A.D. 1638-1695) ⑤寛文一〇刊 ⑥(龍大、二〇九三・二二)(京大、一・二六・二四)

**聖德太子小觀** ①(日) Sho-toku-tai-shi-sho-kwan. ②二卷 ③存 ④黒板勝美著 ⑤(京專)

**聖德太子生身供式** ①(日) Sho-to-ku-tai-shi-sho-shin-gu-shiki. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、餘大・五九六)(金剛三昧院)

**聖德太子垂裕記** ①(日) Sho-toku-tai-shi-shi-sui-yu-ki. ②一卷 ③存 ④明治五寫 ⑤(谷大、餘大・四三五〇)

**聖德太子聖訓** ①(日) Sho-toku-tai-shi-sei-kun. ②一冊 ③存 ④塚崎榮智著 ⑤大正一三刊 ⑥(高大、寄・一・二二)

**聖德太子雪冤** ①(日) Sho-toku-tai-shi-sei-sen. ②一卷 ③存 ④伊澤道一著 ⑤明治三四刊 ⑥(帝國、九〇・一八七)(龍大、二九六五・二〇九)

**聖德太子追恩錄** ①(日) Sho-toku-tai-shi-sui-on-toku. ②一卷 ③存 ④田中舍身著 ⑤明治三六刊 ⑥(谷大、餘洋・一三五)

**聖德太子傳** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den. ②一卷 ③明一(神龜五一延曆一七A.D. 728-798)作 ④(参考) 淨土真宗教典志第三

**聖德太子傳** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den. ②現存卷七、八 ③存 ④寛正撰 ⑤應仁年間寫 ⑥(谷大、餘丙・二〇)

**聖德太子傳** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den. ②四卷 ③存 ④良英撰 ⑤明和五寫 ⑥(谷大、餘大・三六五八)

**聖德太子傳** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、餘大・三五八五)

**聖德太子傳** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den. ②十卷 ③存 ④寛文六刊(谷大、餘大・二七一) ⑤足利末期寫(寶壽院)(寶龜院)

**聖德太子傳** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den. ②二軸 ③存 ④文明六寫 ④(寶壽院)

**聖德太子傳** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den. ②二卷 ③存 ⑤寛文六刊 ④(京大、一・二二・三一)(正大、一〇三七・五四)

**聖德太子傳** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den. ②一卷 ③存 ④眞能義彦著 ⑤大正五刊 ⑥(龍大、二九六五・二二〇)

**聖德太子傳** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den. ②一卷 ③存、教界傳人叢書第二 ④(龍大、二九六五・二二八)(二二)(帝室)

(正大、一〇三七・三・五九)(立大、一三二六・三三)(高大、一・二二)

⑥東京丙午出版社

**聖德太子傳記** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den-ki. ②三軸 ③存 ④覺汁 ⑤德川時代刊 ⑥(寶龜院)

**聖德太子傳記** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den-ki. ②八卷 ③存 ④寫本(谷大、餘丙・一八)(龍大、研史)

**聖德太子傳鼓吹** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den-ko. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、研史)

聖德太子傳曆備講、聖德太子傳備講 ②三十卷 ③存 ④了意(一元祿四 A.D. 1691)作 ⑤(参考) 淨土真宗教典志第二 ⑥刊本(龍大、二九六五・二二八)(正大、一〇三七・一三・五一・五二)

**聖德太子傳考** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den-ko. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、研史)

**聖德太子傳講演** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den-ko-en. ②一卷 ③存 ④佐藤巖英著 ⑤大正六刊(龍大、二九六五・二二二) ⑥大正一〇刊(龍大、二九六五・二二三) ⑦研真(谷大、餘洋・五三九)(正大、一〇三七・一九)

**聖德太子傳講演** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den-ko-en. ②一卷 ③存 ④大須賀秀道著 ⑤大正三刊 ⑥(谷大、宗洋・三八九)(龍大、二九六五・二二四) ⑦大正八刊(正大、一〇三七・二五)

**聖德太子傳私記** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den-shi-ki. ②古今目錄抄 ③二卷

⑥存、大日本佛教全書聖德太子傳叢書 ④顯真

⑥聖德太子建立の法隆寺其他の諸寺に關する所傳を太子の傳記と併せ記されたもので從來の太子に關する諸傳記や法隆寺日記等を引用考證されてゐる。其内容より推して著作年代は恐らく南北朝の頃なるべし。著者顯真は『顯真得業口決抄』の奥書により調子九十八代の孫である事を知るのみ。

**聖德太子傳圖繪** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den-zue. ②四卷 ③存、日本歴史圖繪第一 ④若林葛滿 ⑤享和四刊 ⑥(帝國、一八一・二六一)(龍大、二九六五・二一〇)

**聖德太子傳撰集鈔** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den-sen-jisho. 太子傳撰集鈔通要 ②三卷 ③存 ④寛文元刊 ④(高大、寄・一・二二)(谷大、餘大・二二一五)

**聖德太子傳撰集鈔通要** ①(日) Sho-toku-tai-shi-sen-jisho-kyo. 聖德太子傳撰集鈔 ②三卷 ③存 ④寛文元刊 ④(谷大、餘大・二二一五)(高大、寄・一・二二)

**聖德太子傳叢書** ①(日) Sho-toku-tai-shi-den-so-sho. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第一二二 ④佛書刊行會編 ⑤明治四五(C.A.D. 1912)

⑥聖德太子の御傳十種、即ち上宮皇太子菩薩傳、一卷、唐思說撰(天平勝寶六來朝廷曆末改A.D. 731-805) ⑦上宮聖德太子傳補闕記、一卷、撰者不詳(弘仁以後延喜十七以前 A.D. 823-917) ⑧聖德太子傳曆(二卷、

名所行發⑩(名庫書)者藏所現⑨ 月年の刊載⑧(書考參書釋註)書未⑦ 說解存内⑥ 代年作者⑤ 著者④ 缺存③ 數卷②(名書)名題① 號略字數



藤原兼輔撰後世増補、但し義書編者は平氏撰とす(延喜十七A.D. 917—)上宮聖德法王帝説、一卷、撰者不詳(古事記撰進以前—A.D. 711)太子傳古今目錄抄、一卷、顯眞撰(建久三寂謗六三A.D. 1195)聖德太子傳私記、二卷、顯眞撰(同上)顯眞得業口決抄、一卷、顯眞口決、俊嚴編(同上)、聖德太子平氏傳雜勘文、六卷、法空撰(正和三年A.D. 617)上宮太子拾遺記、七卷、法空撰(正和三現在人壽缺A.D. 617)聖譽鈔二卷、聖譽撰。以上十部二十四卷を收む。その中聖德太子平氏自雜勘文と聖譽鈔は聖德太子傳曆の註釋書である。

④刊本(京專)帝國、七一九・一一)

**聖德太子傳秘抄**

①(日) Sho-toku Tai-shi-den-jis-sho. 聖德大師末傳 ②四卷 ③存 ④延寶五寫 ⑤(谷大)餘大・三七五七)

**聖德太子傳秘略**

①(日) Sho-toku Tai-shi-den-jis-sho. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大・二一四)

**聖德太子傳密記**

①(日) Sho-toku Tai-shi-den-jis-sho. ②六卷 ③存 ④觀山記 ⑤寫本(龍大・二九六五・二二五)

**聖德太子傳曆**

①(日) Sho-toku Tai-shi-den-jis-sho. 太子傳曆、傳曆、二卷傳、平氏傳 ②二卷、流布本の題次に「分成上下」の四字を註する如く元は卷を分たなかつた。 ③存、復原聖德太子傳曆、流布本は大日本佛教全書第一一二聖德太子傳叢書、續群書類第八等所収 ④藤原兼輔(元

慶元—承平三 A.D. 877—933)撰、古來流布 ⑤延喜一七(A.D. 917)八月

⑥本の撰號に平氏撰とあるを基礎として、古今の太子傳研究の佛教史學者が編者と成立年時の論證に努め、(一)調子丸の手記奇蹟書を基として平氏某が曆錄等を合様したるもの、(二)平群翁曆の奇蹟書に充てたるもの、(三)孝德天皇の勅撰にして平群の翁平基親をして専ら其編纂に當らしめたるもの、(四)單に平基親の撰とするもの、(五)葛原親王の原撰に對し平基親同季貞の兩者日本紀を合様したるもの、(六)單に平季貞の撰とするもの、(七)葛川(井叔)親王の撰とするもの等に分れて居るが、大正十年本稿筆者の聖德太子傳曆正本復原の研究により其編者を上記の如く決定して學界の承認する所となつた。

編年體に撰述された本書は、從來史家の間に史的價値に乏しいと言はれて居る。元より史實の上に若干の誤謬と不確な點は免れないが、單に太子追慕の餘に成つた宗教的文學的表現として批判せば、其等の缺點は全く問題とならぬばかりでなく、殆ど顧みる價値を有しないと見做された奇蹟怪談も、内面的には反つて有力なる觀察を加へたものと言ふことが出來、該時代に於て已にかゝる豐饒なる太子觀を有し、爾來長く我民心に培はれつゝあつた太子傳であることに想到せば、反つて別の意味に於ての史的價値を有することとなる。されば太子傳曆撰者の功績は、決して冷かたる史料の價値によりて速断さるべきでない。而して平

安朝以來、我が國文學における其影響の大なるは言ふまでもなく、其後の太子傳記の多くは殆どすべて本書に依據すると言ふてよい。然るに本書の内容は流布本と原本との相違大にして、本文研究をまちて初めて解説される。而して又、本書編纂の基礎となつた史籍を擧ぐべきであるが、それは重復を斥けて直ちに本文研究の一端を示しておかう。古來聊か本文研究に觸れた學者に

橋寺の法空只一人ありて、自著平氏傳雜勘文に意見を述べて居る。即ち其所説は傳曆の中に日本書紀と聖眞傳を引く上は、書紀勅撰の天武天皇御宇以後なること一定とし、更らに進んで聖眞入寂の光仁天皇寶龜七年(天平寶字七年の誤ならん)以後にありと論じた。かく現流本傳に引用する古書の成立年代を考へて傳曆成立の年代を知ることは、言ふまでもなく史的な方法であるが、傳曆には法空の指示した二書の外に、本願緣起、七代記、曆錄等の文が引かれ、又跋文には在四天王寺壁の聖德太子傳、上宮聖德太子傳補闕記、奇蹟書等の書名が見える以上、これ等の六書も亦當然その成立を考へねばならぬ。之等を精究して初めて其所に傳曆成立の最高限即ち何年以後の書と云ふことが確められる。然し是は一端であつて、かゝる方法を以てするなれば、更らに傳曆を引載したる史籍の成立年代を考へて傳曆のそれに及ばざなくてはならない。

少くも太子傳古今目錄抄、台記、三寶繪詞、政治要略、本朝月令等の成立年代を確めて、傳曆成立の最低限即ち何年以前の作な

るかを査定すべきである。かくて傳曆の成立を達觀すると、七代記を引くことによりて寶龜二年以後の作となり、又奥書及び引用補闕記の卷初に日本紀を日本書紀と書字を加へて呼ぶことによりて弘仁三年以後となるが、若し傳曆の撰者が其の弘仁三年以後、寛弘四年即ち本願緣起發見の年以前に本願緣起を見るの機會がなかつたならば、傳曆は本願緣起を引くことによりて、傳曆成立の最高限は寛弘四年となりて、傳曆は決して同年以前の撰述でないことになる。

されば轉じて其最低限を傳曆を引用する史籍の成立年時に求むるに、先づ右府賴長の台記久安四年の條に傳曆の書名が見ゆる點より見れば、傳曆は一往寛弘久安の百四十年間に成れるものと想像することが出來る。然るに永觀二年の序ある源爲憲の三寶繪詞にも平氏撰聖德太子とあるから、傳曆は永觀二年以前に成立したことを證する。加之是より先、政治要略及び本朝月令等にも聖德太子傳曰として傳曆取意の文を擧げてあるから、傳曆の撰述は決して延喜年代を下らぬことを考察せしめる。かくて問題となるは、傳曆に自曆が引用した所の古書の成立から見て寛弘四年以後の作であるのに、反對に傳曆を引用する後の史籍の成立から見れば、寛弘四年に先立つこと少くも廿四年の永觀二年以前の編纂となる。即ち換言せばこの兩端より攷究したる結果は意外にも廿餘年前の書物(永觀二年以前の傳曆)に二十餘年後の本(寛弘四年發見の本願緣起)が引用されてあると云ふ奇態な

るかを査定すべきである。かくて傳曆の成立を達觀すると、七代記を引くことによりて寶龜二年以後の作となり、又奥書及び引用補闕記の卷初に日本紀を日本書紀と書字を加へて呼ぶことによりて弘仁三年以後となるが、若し傳曆の撰者が其の弘仁三年以後、寛弘四年即ち本願緣起發見の年以前に本願緣起を見るの機會がなかつたならば、傳曆は本願緣起を引くことによりて、傳曆成立の最高限は寛弘四年となりて、傳曆は決して同年以前の撰述でないことになる。

名所行發⑩(名庫書)者處所現⑪ 月年の刊寫⑫(書考叢書釋註)書末⑬ 說解存内⑭ 代年作者⑮ 著書⑯ 佚存⑰ 數卷⑱(名書)名題⑲ 黃略字數

ことゝなつて、其所に何等かの誤が伏在する。この千古以來の疑問を解くべき唯一の秘鍵は、一に本稿の筆者が東京帝國大學附屬圖書館の藏書中に發見した、太子傳傍註の書入を研究考査することによりて見出さるゝのである。同書は大正十二年の震災火災に焼亡したが、永遠の光を史學界に投げたものと云へる。この太子傳傍註は蒙潮の自著自筆本であつたことが其奥書で知られたが、蒙潮の人物が詳かでないから其著作年時を知ることは難いが書入文字の研究によつて享祿廿年を測るものでない史徴があり、又書風喬様等から見ても慶長を下るものとは考へられぬから、想ふに享祿慶長間の考註と定むるも大なる誤はないと信ずる。蒙潮が書寫して本文とした傳曆の低本には奥書があつて、本文は文明四年に印秀が其師靈波の遺志を繼承して、橋寺にて書寫したものの轉寫であることが知れる。然るに此の文明書寫本は豊浦寺寶藏の寺外不出の祕本を寫したもので、大和豊浦寺本には洛東安井門跡の本と南都一心院末阿彌陀寺の本とが對校されてあつた。而して又豊浦寺本は古の比曾寺なる現光寺、今の吉野寺の可空の寫傳にかゝり、可空の校合した安井寺の傳流は詳かでないが、阿彌陀寺本の方は保安五年の法隆寺本の轉寫であることが明かである。而して此の阿彌陀本は恐らく法隆寺所出の傳曆中蓋し最古の面影を傳へるものであらう。彼の法隆寺現藏の觀應二年書寫本、並に阿波本願寺所藏の國寶乾元二年書寫本は共に法隆寺系統に屬して

法隆寺本と稱するに足るものであるが、其原本の古寫なる點に於て、到底今の保安の阿彌陀寺所傳法隆寺所出本に優越すべきでない。蒙潮はこの安井文庫本を背、阿彌陀寺本を朱を以つて校合の標とし、更らに菅原爲長の寛元三年書寫本を得て、これが校異を紫で區別した。然るに近時、本稿の筆者は伏見宮家御所藏の貞應二年書寫の本を拜見するの榮を得たが、其原本は永久元年加點以前のものである。されば保安本よりも古い事となるが、對査の結果は反つて保安本の方が古色を存し、保安書寫の底本は永久加點のそれよりも古いものと考察し得ると思ふ。かくて本稿の筆者が太子傳傍註の書入、主として校異の上記三本を比較研究し、之に伏見宮御藏本を參看して得たる歸結は、菅家正本と現流本並に其過渡期にある古寫三本の比較と云ふことになつて、初に彼と此との本文と註文とが轉換されたに過ぎずして文の上には何等加除の相違なきものより指摘し、次に全く原文を後世消滅して仕舞つたものに移り、最後に全く原本になき文が後世先づ註文として加へられ、終には本文として摺入するに至つたことを論證すべきである。然るに一々其個所を摘出する番員を有しないのを遺憾とするが、この對査研究によりて、本稿の筆者は菅家本が傳曆の原型を傳ふるものであることを確信するに至つた。茲に於てか現流通途の傳曆に引用された曆録、七代記、補闕記、鑑眞傳、法華文句、本願緣起の文はすべて原本にはなかつたもので、後世の註記

に過ぎないことが明となつて、前に述べた傳曆成立の最高限定と最低限定との矛盾は成立しないこととなる。即ち傳曆への引用書の成立年時を以て、傳曆成立の最高限に充つること全然不可能であることが知れた。されば傳曆は他書に引用される點より、三寶繪詞の永觀二年以前の編纂と言ふ以上には之を制約することは出来ない。但し本朝月令に見ゆる邊より延喜頃と認定し得るのである。然るに此の太子傳傍註に紫墨を以て對校された菅家本なるものには「古本奥云、延喜十七年九月藏人頭兼輔撰、又云此書平(本の誤)兼輔卿貫首之時所撰也云々」とあり、次に「按兼輔(兼盛)の事蹟を兼輔に誤る者、光孝天皇曾孫篤行賜平姓、其子兼輔(盛)の誤也、(以下兼輔の事蹟)延喜十七年八月八補藏人頭任中納言右衛門督、承平三十二年、世號提黃門是也、今度應尹官所望情書此傳文が愚點者也、寛元三年八月、爲長」の識語があつて傍註の表番裏に紫墨にて書込まれて居る。されば菅原爲長書寫の寛元三年より見て古本と稱し得る古寫本の奥書に、延喜十七年八月藤原兼輔の撰述と明記するからには、三寶繪詞成立の永觀二年より六十七年測ることゝなつた。

一巻後附。聖德太子平氏傳雜勅文六卷法空。上宮太子拾遺記七卷法空。聖譽鈔二卷聖譽(以上大日本佛教全書所收)、太子傳玉林鈔二十一卷訓海(日本思想家史傳全集所收)。聖德太子傳曆鈔八卷正應。聖德太子傳曆備講三十卷淺井了意(延寶六刊)。聖德太子傳首書四卷。聖太子傳曆補註十卷其空(享保七刊)。聖德太子傳曆要解八卷松譽(正徳六刊)。聖德太子傳曆用意抄十八卷香海。聖德太子傳曆義深鈔(寛延三刊)。聖德太子傳曆講義一卷。聖德太子傳曆講義一卷岡田諱賢(明治廿七刊)。聖德太子傳要解十卷嚴的(寶曆三刊)。太子傳選集鈔通要三卷(寛文元刊)。太子傳選集鈔別要一卷實秀(寛文十一刊)。聖德太子傳曆法鼓編三卷。聖德太子傳曆門外不出口傳書一卷。太子傳金玉鈔一卷榮惠。太子傳傍註一卷蒙潮。①觀應二寫(大和法隆寺所藏) 乾元二寫(阿波本願寺所藏國寶) 貞應三寫(伏見宮御所藏) 天文四寫(東大所藏燒失) 寛永五刊(龍大、研究)(谷大、餘大、二〇一四)(正大、一〇三七・五三)(帝國、八二〇・三三) 寛文一二刊(正大、一〇三七・一二) 正徳二刊(正大、一〇三七・一一、四六、五〇) 寫本(帝國、午、三九)

聖德太子傳曆 ①(日) Saito, K. H. H. 1911. 首書詳註聖德太子傳曆 ②二卷 ③存 ④寛永一二刊 ⑤(谷大、餘大、二二四四)(龍大、二九六五・二二六)

聖德太子傳曆義深抄 ①(日) Shō Tokoku 1914. 聖德太子傳曆義深抄 ②九卷 ③存 ④寛延三寫 ⑤(谷大、餘大、

一八二五)

聖德太子傳曆鼓吹

①(日) Sho-toku-tai-shi-den-ryaku-ko-sui. 聖德太子傳曆備講、聖德太子傳鼓吹 ②三十卷 ③存 ④了意(一元祿四A.D.1691)作 ⑤刊本(正大、一〇三七・五一)(龍大、二九六五・二二八)

聖德太子傳曆講義

①(日) Sho-toku-tai-shi-den-ryaku-ko-gi. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、餘大・二七一三)

聖德太子傳曆備考

①(日) Sho-toku-tai-shi-den-ryaku-bi-ko. ②三十卷 ③存 ④刊本(谷大、餘大・一八二四)

聖德太子傳曆譯解

①(日) Sho-toku-tai-shi-den-ryaku-yaku-ge. ②一卷 ③存 ④岡生諦賢述 ⑤明治二七刊 ⑥(谷大、宗洋・一四九)

聖德太子傳曆要解

①(日) Sho-toku-tai-shi-den-ryaku-yo-ge. ②九卷 ③存 ④巖的(一費永元A.D.1701)述 ⑤元祿七刊(京大藏、二四シ・六八)寶曆三刊(龍大、二九六五・二三一)

聖德太子と逆臣馬子

①(日) Sho-toku-tai-shi-to-gyaku-shin-nama-ko. ②一卷 ③存 ④高島米峰著 ⑤大正九刊 ⑥東京丙午出版社

聖德太子と國民生活

①(日) Sho-toku-tai-shi-to-koku-min-sei-kwatsu. ②一册 ③存 ④東本願寺内佛教學會 ⑤大正九刊 ⑥(谷大)

聖德太子と眞宗

①(日) Sho-toku-tai-shi-to-shin-shu. ②一卷 ③存 ④佛

教學會編

聖德太子と其事業

①(日) Sho-toku-tai-shi-to-sono-jigyō. ②一册 ③存 ④高瀬承敏著 ⑤大正九刊 ⑥(正大、一〇三七・六二)

聖德太子と念佛

①(日) Sho-toku-tai-shi-to-nen-butsu. ②一卷 ③存 ④雲山龍珠著 ⑤大正一〇刊 ⑥(龍大)

聖德太子と夢殿本尊

①(日) Sho-toku-tai-shi-to-yume-dono-hon-zon. ②一册 ③存 ④伎人戒心著 ⑤大正五刊 ⑥(高大、一・二二)

聖德太子と我國體

①(日) Sho-toku-tai-shi-to-waga-kokutai. ②一册 ③存 ④草繁全宜著 ⑤大正八刊 ⑥(高大、一・二二)

聖德太子日本國未來記

①(日) Sho-toku-tai-shi-nippon-koku-mirai. ②一卷 ③存 ④慶安元刊(龍大、二〇九三・一)慶安二刊(谷大、宗大・八一)

聖德太子日本國未來記破誤

①(日) Sho-toku-tai-shi-nippon-koku-mirai-kaigo. ②一卷 ③存 ④慶安二刊 ⑥(谷大、宗大・二三四〇)

聖德太子念佛法語註

①(日) Sho-toku-tai-shi-nen-butsu-hō-go-gen-cha. ②一卷 ③存 ④空華諦忍(寛保元文化一〇A.D.1741-1813)述 ⑤明治五刊 ⑥(谷大、宗大・一四〇六)(高大、寄・一・一八)

聖德太子の研究

①(日) Sho-toku-tai-shi-ken-kyū. ②一卷 ③存 ④境野黃洋著 ⑤大正一〇刊 ⑥(龍大、二九六五・二九)(正大、一〇三七・二四)(谷大、餘洋・五二五)(立大、B一六・三四)

聖德太子の信仰

①(日) Sho-toku-tai-shi-no-shin-kyō. ②一册 ③存 ④吉田修夫著 ⑤大正二刊 ⑥東京森江書店

聖德太子の信仰

①(日) Sho-toku-tai-shi-no-shin-kyō. ②一卷 ③存 ④大屋徳城著 ⑤大正一〇刊 ⑥京都法藏館

聖德太子平氏傳雜勸文

①(日) Sho-toku-tai-shi-hei-shi-den-zō-kammon. ②六卷 ③存、大日本佛教全書第一二二 ④法空 ⑤正和三(A.D.617)

⑥聖德太子傳曆の注釋書中、最も古く、又詳細なるもの。而かも本書には或は上官記の逸文を載せ、又唐思詔の上宮太子菩薩傳が同著延曆僧錄第二卷に收むるものなるを傳ふる等、他に見えざる記事ありて、太子研究者の見直し難い有用な史籍である。(藤原猶雪)

聖德太子法華義疏

①(日) Sho-toku-tai-shi-hōke-ge-shō. 法華義疏 ②五卷或四卷 ③存、大正五六・六四No.2187 ④聖德太子(敏達帝二)推古帝二九A.D.573-81)述 ⑤法華義疏の下を見よ ⑥寫本(帝國、八二・三二四)

聖德太子奉讚

①(日) Sho-toku-tai-shi-hō-san. ②良觀作 ③[參考] 淨土眞宗聖教目錄

聖德太子奉讚

①(日) Sho-toku-tai-shi-hō-san. ②良觀作 ③[參考] 淨土眞宗聖教目錄

聖德太子奉讚

①(日) Sho-toku-tai-shi-hō-san. ②良觀作 ③[參考] 淨土眞宗聖教目錄

聖德太子奉讚

昭利七刊

聖德太子未來記文

①(日) Sho-toku-tai-shi-mirai-ki-mon. 聖德太子日本國未來記 ②一卷 ③存 ④淨土眞宗教典志卷一に曰く、假名太子、毀三斥一遍、親鸞・日蓮三師、有人作破誤、辨之。並印三行于世、又類雜集九(四十)載、馬腦記四言四十句。亦是偽造。凡太子預記、將來者。不過一碼礪石識文一百三十三字及本願緣起文二耳。

聖德太子略傳

①(日) Sho-toku-tai-shi-ryaku-den. ②一卷 ③存 ④空慧(寛文元一延享三A.D.1661-1746)撰 ⑤元文五寫 ⑥(谷大、宗丙・八)

聖德太子論纂

①(日) Sho-toku-tai-shi-ron-san. ②一卷 ③存 ④平安考古會編 ⑤大正一〇刊 ⑥(龍大、二〇九三・三)(高大、一・二二)(京大、一・二二シ・六三)(帝室、七一・九二)

聖德太子和讚

①(日) Sho-toku-tai-shi-wa-san. 皇太子聖德奉讚、聖德和讚、皇太子聖德和讚、太子奉讚、太子和讚、伽藍和讚、皇太子奉讚 ②一卷 ③存、大正八三・六六九No.2053、眞宗假名法典卷上、眞宗法要拾遺第三、眞宗遺文彙要第一、國文東方佛教叢書第八 ④親鸞(承安三一弘長二A.D.1173-1263) ⑤建長七(A.D.1255)十月 ⑥皇太子聖德奉讚の下を見よ ⑦[參考] 淨土眞宗教典志第一



聖如意輪觀自在菩薩念誦次第

①(日) Sho-nyo-i-riin-kwan-ji-zai-do-sa= tsu-nen-ri-shi-dai. ②一帖 ③存 ④醍醐根本僧正作 ⑤寫本(金剛三昧院)

聖如意輪觀自在菩薩念誦法

①(日) Sho-nyo-i-riin-kw n-ji-zai-ho-sa tsu-nen-ri-ho. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

聖如意輪觀自在菩薩念誦略次

第 ①(日) Sho-nyo-i-riin-kwan-ji-zai-bo-satsu-nen-ri-ryaku-shi-dai. ②一帖 ③存 ④寫本(寶善提院)

聖如意輪觀自在法

nyo-i-riin-kwan-ji-zai-ho. ①一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

聖如意輪念誦次第

nyo-i-riin-nen-ri-shi-dai. 聖如意輪念誦次第勸流 ②一帖 ③存 ④榮海述 ⑤文龜元寫 ⑥(金剛三昧院)

聖人一統御文講義

nin-ichi-ryu-o-fami-ko-gi. ①一巻 ③存 ④深勵(寛延二)文化一四 A. D. 1749-1817)述 ⑤明治二五刊 ⑥龍大(研眞)(立大、A四〇・二一)

聖人一統章記

ryu-shu-ki. ①(日) Sho-nin-ichin-ryu-shu-ki. ③存 ④十二部雜纂之内 ⑤寫本龍大(一〇三・八)

聖人一統章聞書

ichi-ryu-sho-kiki-gaki. ②一巻 ③存 ④充賢(一天保五 A. D. 1834)述 ⑤寫本(龍大)

聖人一統章說林

聖

ichi-ryu-shu-seisan-riin. ③存 ④大正四刊 ⑤龍大(一〇五五・七)

聖人一統章談林

ichi-ryu-sho-dan-riin. ②一巻 ③存 ④大仙述 ⑤京都寫法館

聖人一統章聽記

ichi-ryu-sho-cho-ki. ②一巻 ③存 ④寫本(龍大)

聖人一統章實章勸考

nin-ichi-ryu-sho-to-sho-kwan-ko. ②一巻 ③存 ④寫本(龍大)

聖人一統湛々錄

ichi-ryu-tan-tan-toku. ②一巻 ③存 ④大玄述 ⑤寫本(龍大)

聖人一統法話

ryu-ho-wa. ③三巻 ③存 ④明治一六刊 ⑤帝國(一八三・二二三)

聖人御袖裏

go-se-mono-gatari-shu. 淨土眞宗聖人後世物語抄 ③三巻 ③存 ④皆圓述 ⑤寶永二刊 ⑥(帝國(二一〇・二〇七))

聖人御降誕地由縁一件書類

ken-sho-rui. ②一巻 ③存 ④文政一〇寫 ⑤龍大(別置)

聖人御傳

go-den. 御傳鈔、善信聖人繪、善信聖人親變傳繪、親變傳繪 ②二巻或四巻 ③存、大正八三・七五〇 No. 2661、眞宗聖典宗祖續仰齋

①覺如(文永七)親應二 A. D. 1270-1351)撰 ②永仁三(A. D. 1295) ③御傳鈔の下の見よ ④(参考) 淨土眞宗聖教目録

聖人御傳和讃

den-wa-shu. 善變和讃 ①(日) Sho-nin-go-den-wa-shu. 善變和讃

聖人修行物語

gyo-mono-gatari. ②一巻 ③存 ④顯誓(明應八一)元龜元 A. D. 1499-1570)編 ⑦(参考) 眞宗全書刊行豫定書目

聖人親鸞と禪師道元

nin-shin-ran-to-zen-ji-do-gen. ②二巻 ③存 ④村上專精(嘉永四)昭和四 A. D. 1851-1929)著 ⑤昭和二刊 ⑥東京東方書院

聖人傳繪揃集

den-e-hiku-tai-shu. ②十巻 ③存 ④慶山撰 ⑤寫本(谷大、宗大・一八一四)

聖人傳繪照蒙記

denn-e-sho-mo-ki. ②十巻 ③存 ④知空(寛永一一)享保三 A. D. 1634-1718)述 ⑤寛文三刊 ⑥(帝國(一一七・六五))

聖人之御法門聽聞分集

sho-nin-no-go-ho-mon-cho-mom-bun-shu. ②一巻 ③存 ④日蓮宗々學全書第一八上聖部之内 ⑤日法(建長四)曆應 F. A. D. 1252-1341)撰

聖人之御法門聽聞分集

①日蓮の直弟子日法が其の聽聞した法門を輯録したもの。

聖廟御縁起

「就」見諸菩薩等文、明爾前無得道義。四十餘年等の文、三乘、等事。法華之修業者可從攝受一耶事。就始見我身等文、明爾前無得道義。就於一佛乘等文、辨今昔二經同異。の如き宗義に關するもの、華嚴宗事。法相宗事。辨能開所開之義、破淨家之謬」の如き他宗對破に關するもの、日本稱扶桑、有二義事。拜星出現表、國家人事之吉凶事。就五天竺之國教多異說一事。帝王稱號異名事。天皇之詔異名事」とふ如き歴史又は國家社會に關するもの等四十一項を掲げて詳述してある。

可從攝受一耶事。就始見我身等文、明爾前無得道義。就於一佛乘等文、辨今昔二經同異。の如き宗義に關するもの、華嚴宗事。法相宗事。辨能開所開之義、破淨家之謬」の如き他宗對破に關するもの、日本稱扶桑、有二義事。拜星出現表、國家人事之吉凶事。就五天竺之國教多異說一事。帝王稱號異名事。天皇之詔異名事」とふ如き歴史又は國家社會に關するもの等四十一項を掲げて詳述してある。

聖八千頌般若波羅蜜多一百八名眞實圖義陀羅尼經

has-sen-i-han-nyu-ha-ra-mit-ta-tp-pyaku-hachi-myō-shin-jitsu-en-gi-da-ra-ni-kyō. (支) Sheng-pa-chieu-sung-pan-jo-po-to-mi-to-i-pai-pa-ming-chen-shi-h-yuan-i-to-lo-ni-ching. (梵) Aprajāpāramitānāmāsātaka(藏傳) (藏) Hphags-pa ces-rab-kyi pha-rol-tu phyin-pa'i nish n brgya-rtsa-drgyad-pa shes-bya-ba. 聖八千頌般若一百八名經 ②一巻 ③存、大正八・六八四 No. 230、縮成一二、二一六・一、北1432勿、南1437微、元1426微、明北3993清至斯、清994斯、歷1481軍、天1422微、明南1055思、Nj. 999 ④宋施護(一太平興國五 A. D. 980)等譯

聖八千頌般若波羅蜜多一百八名眞實圖義陀羅尼經

①八千頌般若經に於ける重要と思はるゝ法數名目を抽出し、百八として羅列したものであり、最後にその法數の受持讀誦の功德として陀羅尼を説く。

聖廟御縁起

①(日) Sho-ryo-goen-

③三卷 ④存 ⑤永徳三寫 ⑥(正大、一〇三三・三六)  
**聖不動經** ①(日)Shō-ji-dō-kyō. 佛說聖不動經、不動經 ②一卷 ③存、修驗聖典第一諸經要集之内、日本大藏經修驗道章疏第一法則類之内  
 ④僅に一百十二字より成る經典で、不動明王の形像及び所住處並に功德を讚歎したものの。佛説の二字を冠し唐失譯としてはあるが、恐らく和製で、本朝に於て不動信仰の旺盛と共に偽作されたものであらう。尤も修驗行者の三時勤行式に收められ、又は單行本として世に流布され行者は主として訓讀するのが習慣となつてゐる。(服部如實)

**聖不動明王念誦私記** ①(日)Shō-fu-dō-myō-ō-nen-jū-shi-ki. ②一卷 ③存 ④慧頂記 ⑤享保一五寫  
**聖福寺佛殿記** ①(日)Shō-fuku-ji-butsu-den-ki. ③存、群書類從第一五釋家部、新校群書類從第一九釋家部第二 ④河南陸仁 ⑤正平二三(A. D. 1368)二月七日  
 ⑥筑前博多の安國山聖福寺は後鳥羽天皇の建久六年十二月、榮西の開創する所で、爾來幾多の變遷を重ねて荒廢せるを、三十六代無隠禪師に至つて其の再興が企てられ、後村上天皇の正平十年より十二年の歲月を費して同二十二年に其の落成を見た。本記は即ち、此の再興の顛末を記せるもので、跋文にある如く、落成の翌年春二月七日に成るものである。著者陸仁は無隠禪師とは舊知の間で寺僧等の需めに應じて本記を撰したと云つてゐる。本記の終りの所に中國

に於ける禍亂の續出、佛道の頽廢に就いて述べ、「斯道既晦於中國。而大顯於東土」等と云つてゐるあたり、親しく彼地に在つて見聞した著者の言として當時に於ける中國佛教界の情狀の片鱗を窺ふに足るものであらう。(不破幹雄)  
**聖福眞觀** ①(日)Shō-fuku-shin-kwan. ②一卷 ③存 ④小島文鼎著 ⑤大正元刊 ⑥(駒大) ⑦博多聖福寺  
**聖佛母小字般若波羅蜜多經** ①(日)Shō-butsu-mo-shō-ji-han-nya-ha-ra-mi-ta-kyō. (支)Sheng-to-mu-lsiao-tzu-pan-jo-po-to-mi-to-ching. (梵)Alp-sag-pa-ces-rab-kyi-pha-rol-tu-phyin-pa-ye-ge-hun-nu-shes-bya-ba-theg-pa-chen-poi-nto. 聖佛母小字般若經、勝佛母小字般若波羅蜜多經 ②一卷 ③存、大正八・八五二 No. 258、縮月八、北1099將、南1115將、元1109將、明北911竭至則、清792忠、麗1072杜、天1098將、法1216十、Nj. 977 ④宋天息災(一咸平三A. D. 1000)譯 ⑤本經は王舍城鷲峯山に於ける佛が、衆生濟度のため小字般若を説かれたんことを要請せる觀自在菩薩に對して、その小字般若として陀羅尼眞言を説き、これこそ諸佛の母であり、従つて一切諸佛はこれに依つて無上正等菩提を得るのである。夫故一切衆生もこれを聞き受持讀誦書寫した無上正等菩提を得るとなすのである。(梶芳光運)  
**聖佛母般若波羅蜜多經** ①(日)Shō-butsu-mo-han-nya-ha-ra-mi-ta-kyō. (支)Sheng-to-mu-pan-jo-po-to-mi-to-ching. (藏)Bom-īdan-ības-ma-ces-rab-kyi-pha-rol-tu-phyin-pa-ye-ge-hun-nu-shes-bya-ba-theg-pa-chen-poi-nto. 聖佛母經 ②一卷 ③存、大正八・八五二 No. 257、縮月九、正二五・七、北1097微、南1305駕、元1295駕、明北929深履薄、清930履薄、麗1453刑、天1285駕、明南957清、Nj. 935 ④宋施護(一太平興國五A. D. 980)譯 ⑤本經は王舍城鷲峯山中佛を圍繞せる諸菩薩衆のうち、舍利弗が觀自在菩薩に般若法門とその修學法を問へるに對して、觀自在菩薩は五蘊自性空を觀ずべきことを説く。而つてそれが般若法門に對して、亦その修學たるべきことを明かにす。(梶芳光運)

kyō. (支)Sheng-to-mu-pan-jo-po-to-mi-to-ching. (藏)Bom-īdan-ības-ma-ces-rab-kyi-pha-rol-tu-phyin-pa-ye-ge-hun-nu-shes-bya-ba-theg-pa-chen-poi-nto. 聖佛母經 ②一卷 ③存、大正八・八五二 No. 257、縮月九、正二五・七、北1097微、南1305駕、元1295駕、明北929深履薄、清930履薄、麗1453刑、天1285駕、明南957清、Nj. 935 ④宋施護(一太平興國五A. D. 980)譯 ⑤本經は王舍城鷲峯山中佛を圍繞せる諸菩薩衆のうち、舍利弗が觀自在菩薩に般若法門とその修學法を問へるに對して、觀自在菩薩は五蘊自性空を觀ずべきことを説く。而つてそれが般若法門に對して、亦その修學たるべきことを明かにす。(梶芳光運)

**聖佛母般若波羅蜜多九頌精義論** ①(日)Shō-butsu-mo-han-nya-ha-ra-mi-ta-ku-ji-shō-gi-ron. (支)Sheng-to-mu-pan-jo-po-to-mi-to-chi-sung-ching-i-lun. (梵)Bhagavatt-prajāpāra-mitā-nava-śloka-pindartha-īkā. (藏傳)Bom-īdan-ības-ma-ces-rab-kyi-pha-rol-tu-phyin-pa-ye-ge-hun-nu-shes-bya-ba-theg-pa-chen-poi-nto. 聖佛母般若波羅蜜多九頌精義論 ②二卷 ③存、大正二・八九八 No. 1615、縮月二、正二六・一、北1337 ④南342經、元1332譯、明北1306右、清

1306右、麗1504九、天1322溪、明南1455壁、Nj. 1313 ⑤宋代法護(乾徳元一嘉祐三A. D. 963—1038)等譯 ⑥本論は般若の精要を九頌とし、それに説明を加へたものである。即ち、凡そ業に依つて生としての眼等の六處の相は現はれるものであるが、それ等は陽燄の如く影像の如く本性空のものであり、能取所取を離るれば明空無垢のものである。従つてその自性清淨は心一境性たる定に依るべきであり、かゝる定と相應する余剛の如き智に依つて眞實菩提は得らるゝとなすのであるが、總じて本論は唯識系と關係して考へらるゝ書である。(梶芳光運)  
**聖法印經** ①(日)Shō-bō-īn-kyō. (支)Sheng-fa-yin-ching. 阿遮曇摩文圖、聖印經、慧印經 ②一卷 ③存、大正二・五〇〇 No. 103、縮辰六、正一四・一、北748 ④思、南763思、元753思、明北648慶、清648慶、麗757若、天747思、指707若、法737容、至984攝、明南631緣、Nj. 652 ⑤三法護譯 ⑥西晋太始二一建興元(A. D. 265—313)

⑦この經典は雜阿含經第三卷の三十一經法印經の同本異譯經典であつて、他に施護譯の佛說法印經があり、巴利には同本を欠いてゐる。この聖法印經には經題の下に天竺名阿遮曇摩文圖と梵名を出してゐるが、聖法印經と譯されてゐるところから見ると、阿遮はīryaであり、阿遮曇摩文圖はīrya-dharma mūdraであらうと思はれる。内容は經題の如く法印を説くものであるが、普

1306右、麗1504九、天1322溪、明南1455壁、Nj. 1313 ⑤宋代法護(乾徳元一嘉祐三A. D. 963—1038)等譯 ⑥本論は般若の精要を九頌とし、それに説明を加へたものである。即ち、凡そ業に依つて生としての眼等の六處の相は現はれるものであるが、それ等は陽燄の如く影像の如く本性空のものであり、能取所取を離るれば明空無垢のものである。従つてその自性清淨は心一境性たる定に依るべきであり、かゝる定と相應する余剛の如き智に依つて眞實菩提は得らるゝとなすのであるが、總じて本論は唯識系と關係して考へらるゝ書である。(梶芳光運)  
**聖法印經** ①(日)Shō-bō-īn-kyō. (支)Sheng-fa-yin-ching. 阿遮曇摩文圖、聖印經、慧印經 ②一卷 ③存、大正二・五〇〇 No. 103、縮辰六、正一四・一、北748 ④思、南763思、元753思、明北648慶、清648慶、麗757若、天747思、指707若、法737容、至984攝、明南631緣、Nj. 652 ⑤三法護譯 ⑥西晋太始二一建興元(A. D. 265—313)

通の三法印とは異なつて、空、無相、無願(無作)の三解脱門を説いてゐる。その中に無常無我が内容として説かれてゐるのである。小空經大空經等と共に空經の一種であつて、般若經につながるものとして興味ある經典である。(赤沼智善)

聖法印經 ①(日)Shō-hō-in-kyō. 現代意譯聖法印經 ②一卷 ③存、現代意譯根本佛教聖典叢書第六 ④高島寛我譯

聖寶僧正贈大師號勅書 ①(日)Shō-hō-sō-jō-zō-dai-shi-gō-chōku-shū. ②一帖 ③存 ④寶永四寫 ⑤(寶龜院)

聖寶僧正傳 ①(日)Shō-hō-sō-jō-jen. ③存、續群書類從第八輯傳部之一

④紀淑人 ⑤承平七(八、D.93)九月十一日 ⑥内題に注進僧正法印大和尚理寶傳とあるのは、紀淑人が宣旨に依て本傳と注進せることを示すもので、醍醐寺の開山理源大師聖寶上人の蹟を年譜的に漢文で記述し始めに其家系皇族に出づること、十六歳出家眞雅僧正に隨ひて得度し、初めに三論を、次に法相を、次に華嚴を學びたること及び東大門東房の鬼神を伏したることを記し、三十八歳興福寺の維摩會堅義のこと、四十歳無量法受學のこと、四十九歳高野眞然僧正より兩部大法受學のこと、五十三傳法灌頂阿闍梨位を受け、五十八歳貞觀寺座主に就任、六十三歳獨任律師、六十六歳獨任少僧都、七十歳獨任大僧都、七十一歳獨任權僧正、七十五歳任僧正と記し、終に僧正遊化の間、佛、菩薩、護法の諸天の尊像の至るところに建造され、太上法皇、大臣高家

の歸郷の盛なりしことを記し、延喜七年には醍醐寺を教願寺とされ、同九年普明寺に於て病むや、陽成天皇行幸して病を問はれ、七月六日入滅、此日救あり、御誦經布施調布二百端。藏人使左近衛將監紀淑人、今宣旨に依て、略以て注進承平七年九月十一日とあるから、聖寶の入寂を去る二十九年である。

類從本にはこの次に或傳に云くとして、僧正の造像及び發病、入寂等のことを記し、其の次に醍醐寺上下兩所と題して缺文を掲げ、延命院聖寶が住處延命堂一字僧房、大僧都元方に付屬し、元方の弟子元果が觀音堂を造加し、元果の弟子仁海が曼荼羅等と大鐘を造つた、常住の僧百餘人なりと記し、醍醐寺山題下に元慶の初、貞觀の終、聖寶僧正の草創するところと記し、僧正遍昭が醍醐山作二十三首の序を引いてゐる。

本書が幾度かの書寫を経た事は奥書に依て知られる。作者紀淑人は中納言長谷雄の次子で、延喜延長の間藏人左近衛將監右兵衛佐等を経て、承平年中河内守となり從四位下に叙す、六年南海に賊起り商舶を鈔掠したので、淑人を以て伊豫守となし海賊を追捕せしめた、賊徒其寬恕を聞いて魁師等三十餘人衆二千五百人を率いて歸順した。天慶の初め藤原純友の將に反せんとするや、淑人累りにこれを教諭したが、純友聞かずに反し終に誅せられた。六年遷りて丹波守となり、天曆の初め河内守に任せられて尋で卒した。(中谷在禪)

聖寶藏神儀軌經

①(日)Shō-hō-zō-jin-gi-ki-kyō. (支)Sheng-pao-tang-shi-en-i-kuai-ching. (梵)Jambhadrakāya-yathābuddha-kalpa. ②二卷 ③存、大正三・三・四九ノ。1284. 縮成一三、卅一六。八、北1159家、南1175家、元1169家、明北1040止、清1040止、麗1161相、天1135家、法1277冠、至859號、明南834命、Nj. 1045 ④宋代法天譯

①本儀軌は寶藏神廣大儀軌護摩法則を説く。上卷に於ては擇地、廣大殊勝賢聖堂殿の作法、行者の結淨法、寶藏神諸眞言、請召賢聖、曼荼羅結淨、燃燈、洗浴賢聖、塗香、燒香、獻花、五色粉壇獻食、鈴、作蓋、幢幡等の諸儀則、作壇並に寶藏神八大眷屬名及び位置、佛身莊嚴、供養、發遣の法、楞伽經、天藏經を引證して寶藏神の本位を明す。下卷には曼荼羅内所用供獻の物、衣物、扇、拂等の儀則、螺藏眞言、護摩法及び水を用ひて護摩を修する法を説く。

本軌は聖寶藏神念誦法及び功德を説けるものなり。功德に曰く、本護摩法を修する者は大富貴を得、子孫興盛、不墮魔界、永離深苦、行住坐臥に受くる福德は天帝釋等に等しと。

②(參考) 法天譯寶藏神大明曼荼羅儀軌經 (坪井徳光)

聖妙吉祥眞實名經

①(日)Shō-myō-kichi-jō-shin-jitsu-myō-kyō. (支)Sheng-miao-ohi-hsiang-chen-shih-ming-ching. (梵)Śrī-yā-majñī-sī-nāma-saṃgīti.

(刊本) (藏)本經中の聖者文殊師利讚Hām-dpal-nag-gi dha-nphyug-ia hu-mo brā-gyad-kyisstol-pa. 聖者文殊師利一百八名讚 Hphags-pa rjiam-dpal-gyi mstshan brya-rtsa-drgyad-pa shes bya-bu. ②一卷 ③存、大正三〇・八二六、No. 1190. 縮成一三、卅一六。六、明北1027澄、清1027澄、明南1057思、Nj. 1032 ④元代釋智譯

①本經は首に大明太宗文皇帝の序あり、眞實名經の功德を歎す。經は初に金剛菩提心及び五智を讚歎し、次で眞實名の功德を五重に述べ。即ち第一、此の眞實名は身語意の三密を清淨にし、第二、三密を調伏し、一切の煩惱繫縛を解脱し、第三、有情の身語意の三業を滅して餘の罪業無く、一切の惡趣を退捨し、第四、毎日三時讀誦する者あらば天龍惡魔等は爲に浮伏して救護を爲し、精神增長し、色力具足し、威勢殊勝にして無病延壽ならしめ、第五、若し誓願して日々三時讀誦し書寫せば妙吉祥その像を變現してこの人も惡道中に墮在せしめず、佛國に生じ、恒に高貴勝族中に生ぜしむと。

次に已上五重の功德を總説して、是の如き功德を攝持せる眞實名を讀誦する者は速に無上菩提を成じ、多劫中に於て般涅槃せず、有情の爲に無上妙法を現じ、大法王となると説く。

別に文殊瓔珞呪、十二因緣呪、智慧譯、聖者文殊師利一百八名讚及び聖者文殊師利讚、文殊菩薩五字心呪あり。又最後に不空



譯、金剛超勝三界經說文殊五字眞言勝相の文に依り五字眞言の功德を明す。

本經の類本は宋金總持等譯、文殊所說最勝名義經、元沙羅巴譯、文殊菩薩最勝眞實名義經等あり。(坪井德光)

聖武帝並文德帝策命

①(日)Shōmu-tō-i-arabini-mon-to-ku-tō-salu-mai

③存、大日本佛教全書東大寺叢書第一

⑥聖武天皇の策命は、天平二十一年四月一日、東大寺に行幸あつて盧舍那佛前にて宣り給ひしものである。内容の意は、此の年初めて陸奥の國に出た黄金を朝廷に獻上した事に緣由し、天皇は之を盧舍那佛の賜物であるとして禮參され、鎮護國家、攘災招福の爲には諸法の中、佛が最も勝れてゐて、これに天神地祇及歷代帝王の御靈の冥加が垂れ給ふものであるとて最勝王經や盧舍那佛供養の趣旨を説かれてゐる。而して斯様な神佛の冥加は獨り天皇のみならず普く天下の諸氏の共に受くる所なれば之等を崇敬供養すべきである事を示され、太神宮を初め諸神に御戸代を、寺々には樂田地を寄せ、諸の祝部、僧綱、御陵守、はては陸奥國の國司、郡司、百姓等の、行賞より罪人の大赦に至る迄各々勅給あり、將來、益々先帝(特に天智元正二帝の紹を指示し給ふ)の遺紹に添ひ奉りて忠誠を致す可き旨を教示されてゐる。次に文德天皇の策命は、前後三回のものが載せられてゐる。先づ最初に、齊衡二年七月二日に發せられたもの即ち、同年五月二十三日に東大寺の毘盧舍那佛の頭が墜落したので之を修理すべく、聖武帝の御

陵(佐保山陵)に奉告祈念されたものである。次は同年九月一日、矢張り盧舍那佛頭の修理の事を八幡大菩薩に奉告祈願されたものであるが、此の策命の後半には筑紫大宰府の宮の修繕が成就した事をも述べられてゐる。最後のは、同三年五月二十五日に、再び聖武帝御陵に對して、前年報告の盧舍那佛頭の修理が遅延したが今回漸く其の修理を成し得た事を奏せられたものである。上述の中、聖武帝の策命は續日本紀卷第十七、文德帝の策命は日本文德天皇實錄卷八(何れも國史大系所收)に本文あれば前後と合せて参照され度し。(不破幹雄)

聖無動威怒王立印儀軌

①(日)Shōmu-dō-i-nu-gi-ya-i-a-gi-ki(支)Shōmu-gō-wu-tung-wei-nu-wang-i-i-ya-i-ki

金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品、聖無動尊大威怒王念誦、最勝立印無動尊大威怒王念誦儀軌法品、尊大威怒王念誦、聖無動威怒王立印儀軌、聖無動儀軌、立印儀軌、不動立印儀、立印儀、納涼房次第

②一卷 ③存、大正二一・一No.1199、縮開一〇、P.117、118、至831息、清1433鐘、麗1432管、法1196

④不空(神龍元一大曆九A.D.703-714)譯

⑤唐天寶五一大曆九(A.D.746-774)

⑥金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品(下)を見よ。

⑦久安六寫 ⑧(寶菩提院) ⑨(日)Shōmu-dō-i-nu-gi-ya-i-a-gi-ki ⑩一軸 ⑪存

⑫觀應二寫 ⑬(高六、奇一・六四) ⑭(日)Shōmu-dō-i-nu-dai-sō-ya-ku-fu ⑮一卷 ⑯存 ⑰(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

聖無動儀軌

①(日)Shōmu-dō-gi-ki(支)Shōmu-wu-tung-i-ki

明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品、聖無動尊大威怒王念誦、最勝立印無動尊大威怒王念誦儀軌法品、尊大威怒王念誦儀軌法品、聖無動威怒王立印儀軌、聖無動威怒王立印儀軌、立印儀軌、不動立印儀、立印儀、納涼房次第

②一卷 ③存、大正二一・一No.1199、縮開一〇、P.117、118、至831息、清1433鐘、麗1432管、法1196

④不空(神龍元一大曆九A.D.703-774)譯

⑤唐天寶五一大曆九(A.D.746-774)

⑥金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品(下)を見よ

⑦文治三寫 ⑧(寶菩提院) ⑨(日)Shōmu-dō-gi-ki(支)Shōmu-wu-tung-i-ki ⑩存 ⑪榮春隆光(慶安二一享保九A.D.1649-1721)

⑫寶永七刊 ⑬(正大、一一六二・一四四) (龍大、二四一七・一九五) (哲、お・七・左・二四) (京大、藏・一六シ・一六、日大末、九二・一九三)

聖無動次第

①(日)Shōmu-dō-shi-dai ②一帖 ③存 ④鎌倉時代寫 ⑤(高六寄・一・六五) ⑥(日)Shōmu-dō-an-ku-ni-gō-hō ⑦(日)Shōmu-dō-an-ku-ni-gō-hō

Shō mu-dō-sō-i-an-ku-ni-ke-koku-to-to(支)Shōmu-wu-tung-tsun-an-chen-cha-kuo-teng-fu 無動尊安鎮家國法等、不動明王安鎮家國法、不動安鎮軌

②一卷 ③存、大正二一・二七No.1203、縮餘四、P.續一・三・三 ④唐金剛智(咸亨二一開元二九A.D.671-741)譯

⑤首に不動明王の功德を明し、次で安鎮家國無衰患の法を説く、即ち、若し國に災難多き時は國王 持明大士を召請し、之れに種々の供養を作し、以て本法の成就を請ふと。次で不動尊及び八方天王並にその眷屬の形像、王宮中に於ける一日、十五日の供養法及び春秋の護摩供養法あり。又(方)隨安鎮法あり、先づ東方より起して擇地、作壇、本尊安置、護摩を修し八方結護をなす。次に護摩鑿及び所用物の製作法、供養次第、火相による四種善惡相の判斷、息災等の四種法、四輪王各々の安鎮結護を作す範圍の廣狹、八方天王の形像及びその降怒眞言、不動眞言を説く。

本軌は不動安鎮法を説けるものにして不動明王地鎮法の本軌なり。又此の法は出家人の修すべき法にあらず。故に金剛智三藏天竺の大師より受け、只白衣にのみ授くることを許し、王光に此の儀軌法を授與すと軌中に註す。宗觀請來錄に曰く「無人(名)金剛智三藏祕傳云云策子」と。

⑦(參考) 新書寫請來法門等目錄 (坪井德光)

聖無動尊一字出生八大童子祕要法品

①(日)Shōmu-dō-sen-tō-i-yō-hō ②(日)Shōmu-dō-sen-tō-i-yō-hō



ji-shis-shō-hachi-dai-dō-ji-hi-yō-hō-bon. (支)Sheng-gu-wu-tung-tsun i-ze-ch'u-sheng-pa-tung-tai-pi-yao-fa-pin. 無動尊一字出生八大童子秘密法品、聖無動尊八大童子秘要法、不動尊八大童子儀軌

①一卷 ②存、大正二・三 No. 1204、縮餘一、已續三・九・三 ③大興善寺翻經院述

④首以降三世、軍荼利、金剛夜叉、不動明王の本誓を明し、次で不動一字眞言の略の一字は不動明王と爲り、那莫三滿多嚩囉南の八字より歸敬使者なる八大童子即ち慧光菩薩、慧喜菩薩、阿耨達菩薩、指德菩薩、烏俱婆誡、清淨比丘、矜羯羅、制吒迦出生する所以を明し、而して若し行者殊勝悉地を成ぜんには行法中に彼等の名を稱し、結印誦呪すべしとて八大童子及び本尊の印明を説く。終に八大童子の像形及び供養法あり、供養法に於ては四方如何及び大日如來を禮拜し大誓願を發することを明す。

本軌は金剛界軌にして不動八童子法を説くものなり。

⑤元祿一五刊 ⑥(京大、藏・一六・一七)

**聖無動尊一字出生八大童子秘要法品** ①(日)Shō-mu-to-son-i-chi-ji-shus-shō-hachi-dai-dō-ji-hi-yō-hō-bon. 國譯聖無動尊一字出生八大童子秘要法品 ②存、國譯密教經軌部第四 ③塚本賢曉譯

**聖無動尊法秘要義** ①(日)Shō-mu-to-son-keisu-hi-yō-gi. 不動尊法秘要、不動秘要決 ②一卷 ③存、日本大藏經天台密教章疏第三

台密教章疏第三

④本書は先づ不動明王が大日の應化身として忿怒尊と現れ除障滅罪の明王なることを述べ、次に護身結界眞言の句義、根本眞言、鎮宅眞言、本契、施食眞言、澡浴眞言、畫像法、龍王法身眞言、使者畫像法、行法等の秘法を集記した。著者は安然とも圓行とも云はれてゐる。(田島德音)

**聖無動尊法秘要義** ①(日)Shō-mu-to-son-keisu-hi-yō-gi. ②圓行(延暦一八二仁壽二A. D. 799-832) ③(參考)本朝台祖撰述密部書目、諸宗章疏錄第三

**聖無動尊大威怒王秘密陀羅尼經** ①(日)Shō-mu-to-son-dai-i-kuō-ji-kin. ②(支)Sheng-wu-tung-tsun-tai-wei-nu-wang-pi-mi-to-ji-kin. ③存、修驗聖典第一諸經要集之内、日本大藏經修驗道章疏第一法則類之内

④金剛手菩薩説、般若遮加羅譯と傳ふ。金剛手菩薩が妙吉祥菩薩に對して聖無動尊の本誓、所居、相貌、攝化等の功德及び陀羅尼を説いたものである。中に於て不動火界呪を最勝根本大陀羅尼として出し、又護身、加護住處等の眞言をも説いてゐる。「金剛手言、一切衆生思想不同、是故如來或現三慈體、或現忿怒、教化衆生、各々不同云云」など味讀すべきものあり、不動尊の功德を説いて餘すところなしと云つてよい。然し修驗道行者が三時動行にはよく此經を讀誦するが、後人が佛説に擬したものであ

ることは疑はれないであらう。(服部如實)

**聖無動尊念誦儀軌** ①(日)Shō-mu-to-son-nen-in-gi-ki. (支)Sheng-wu-tung-tsun-nien-sung-i-ki. 金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品、聖無動威怒王立印儀軌、聖無動儀軌、納涼房次第、聖無動尊大威怒王念誦、最勝立印無動尊大威怒王念誦儀軌法品、尊大威怒王念誦儀軌法品、聖無動威怒王立印儀軌、立印儀軌、不動立印軌、立印軌

①一卷 ②存、大正二・一 No. 1199、縮刷一〇、正二七・一、明北1423鐘、清1425鐘、麗1429鐘、法1196八、至351息、正1432、弘法大師全集第一三 ③不空(神龍元一六曆九A. D. 705-774) ④唐天寶五一六曆九(A. D. 740-774) ⑤金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品の下を見よ。

**聖無能勝金剛火陀羅尼經** ①(日)Shō-mu-no-shō-kōn-gō-kwa-dai-ani-kyō. (支)Sheng-wu-neng-sheng-chin-kang-huo-to-jo-i-kin. 火陀羅尼經、金剛火陀羅尼經 ①一卷 ②存、大正二・一七六 No. 1236、縮成七、正一五・三、北1166家、南1181家、元1175家、明北828則、清838則、麗1165條、天1161家、法1282策、至763夙、明南94命、正833 ③法天譯 ④宋開寶六一(A. D. 973-)

⑤無能勝金剛火陀羅尼の威力を説いたもので、之れに依つて、天・龍・阿修羅・鬼類及び諸の衆生は苦惱怖を除かると云ひ、佛陀が、妙高山寶峯樓閣中に在られた時に、

天・龍・夜叉・阿修羅・乾闥婆・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽の八部衆、及び持明仙衆、部多(Bhuta)頻那夜迦(Vinyaka)、毘舍左(Pisaca)末怛里(Marī)の衆等が世尊に佛の大力を被つて諸の恐怖を除かんことを願ふた時に、世尊は灌頂法王の位を紹げる金剛手、及び其の眷屬の金剛難摩(Mandala)大將等の八大將並に金剛摩訶囉日囉難摩(Mahāvairāṇanda)、金剛護世明王、金剛魔、金剛頻那夜迦、金剛囉童子、金剛烏婆多羅(Upsatarā)、金剛大惡等に對して衆生を守護して歡喜せしむ可きことを約し、次に金剛手菩薩に勅して、八部衆及び諸の部多の類をして安慰を與へて、苦惱怖無からしめんことを命じ、次で四諦緣生三摩地門十波羅蜜、本金剛族大曼拏羅の儀則の法を説かしめ、次に無能勝金剛火陀羅尼を宣説して衆生受持せしめんことを説き、且つ若し此の陀羅尼を讀誦し憶念し受持する者は、禁咒、諸毒及び一切の恐怖に依つて惱苦せらるることなきを明してある。(神林隆淨)

**聖門御累代記** ①(日)Shō-mon-go-i-ri-dai-ki. 聖護院門跡歷代記、修驗傳記 ①一卷 ②存、日本大藏經修驗道章疏第三史傳類之内

③本山派修驗の系譜。初めに大日覺王如來以下龍樹に至る十五祖を列名し、次に役行者より正徳年間に於ける道承親王に至る五十三代の略傳を記した書である。

**聖譽鈔** ①(日)Shō-yō-shō. ②二卷 (服部如實)

三八九

⑥存、大日本佛教全書第一二聖德太子傳叢書之内 ⑦聖德太子傳

⑧本書は平氏撰太子傳、顯眞の日録鈔、俊嚴の口決鈔等の諸書を取抄し且つ私釋を施せるもので、天文十六年以前に成れる聖德太子傳の一である。

本書上巻に擧ぐる太子傳曆の叙述は大體國史の主旨を出でない様である。中に就いて太子の誕生、御名、二歳、十四歳、十七歳、二十二歳の各段下に就いては字解釋を施し、更に釋尊生滅の異説、太子薨異説、法隆寺金堂釋迦像銘文等に就いては諸説を參用して吟酌し、下巻には日本佛法初傳、貢獻佛像の事、六角堂建立の事、法隆寺の事、中宮寺の事、天壽國曼荼羅の事等を縷説し最後に天壽國とは無量壽國なり、即ち西方極樂世界九品三輩の臺なりと結んで居る。此の章文は日本初期の淨土教を採尋する有力なる一資料である。

要之本書は太子傳文獻としては可成新しいものに屬するも、その傳曆并に日本初期佛教を研讀する上に相當參酌せらるべきものである。

聖德母陀羅尼經

①(日) Sho-yo-mo-da-ra-ni-kyō. (支) Sheng-yao-mu-to-lo-mi-ching. (梵) Gramatikā-dharmā. (藏) 傳(寫本) (藏) Iphags-ma gzah rams kyī yam shes-bya-bahi gzanis. ②一卷

③存、大正二・四二一No. 1303、縮成七、己一五・三、北1185千、南1200千、元1194千、明北806則、法806則、麗1188封、天1177千、法1303處、至779興溫、明南886臨、正、大・一四五八)

811 ④法天譯 ⑤宋開寶六(一A.D.973) ⑥宿曜の供養法を説いたもので、其の内容は、初に一時、佛が阿拏迦囉帝(Akavavā?)大城に居られた時其の會座に、天龍等の八部衆、及び木星(Brihaspati)火星(Angāraka)、金星(Sukra)水星(Budha)土星(Kṛanānīcaru)太陰(Samā)太陽(Āditya)羅睺(Rāhu)計都(Ketu)及び二十七宿、並に金剛手菩薩等の十六菩薩あり。金剛手菩薩は世尊に向ひ、形貌醜陋の宿曜あつて、衆生の命根を斷ち、財寶を耗し、人の壽齡を減じ、一切衆生を損惱することあり、此の害を除き衆生を擁護する祕密法を宣説せられんことを願ふた。時に、世尊は、諸の惡宿曜及び天龍等の八部衆の各々に對して、閻伽及び音樂を以て供養せんことを諭し、且つ供養宿曜眞言を述べ、又闍き十二指の曼荼羅を造つて之れを供養すべきを説き、次に宿曜母陀羅尼を出し、若し此の眞言を誦すること七遍せば、一切宿曜は歡喜し、即ち富貴長壽なることを得ると明し、後に此の供養を起首すべき日を示してある。

又此の異譯に法成讀の熾煌出土本なる諸星母陀羅尼經(大正二・四二〇)がある。

聖隆寺目錄

①(日) Sho-ryū-ji-mo=ku-roku. ②一卷 ③(參考) 本朝台祖撰述密部書目

聖靈院太子講會

①(日) Shū-ryō-in-kō-e. ②一卷 ③存、翰林拾葉第二〇 ④本學坊方順 ⑤寫本(谷大外大・一四五八)

聖靈會法用次第 ①(日) Shō-ryō-e-hō-yō-shū-dan. ②二冊 ③存 ④大正一〇刊 ⑤(京大、日大末、二二二)

聖靈灌頂作法 ①(日) Shō-ryō-kyū=an-jo-sa-to. ②一卷 ③存 ④運海記 ⑤寫本(真如藏)

聖蓮如

①(日) Shō-ren-nyō. ②一卷 ③存 ④山田采圃著 ⑤明治三三刊 ⑥(谷大、宗洋・二二五)

聖六字增壽大明陀羅尼經

①(日) Shō-roku-ji-zō-jū-dai-myō-da-ra-ni-kyō. (支) Sheng-shū-tzū-tsing-shou-ta-ming-to-lo-mi-ching. 聖六字增壽經 ②一卷 ③存、大正二〇・四六No. 199、縮成八、己一五・五、北1193兵、南1214兵、元1208兵、明北871臨、清871臨、麗1204八、天1194兵、法1313處、至736海、明南872處、至876 ④宋施護(一太平興國五A.D. 983)譯

⑤六字大明陀羅尼の功德を説いたもので、其の所説の内容は佛が、阿難、Anandaに對し、此の六字大明陀羅尼は諸の災患を消除し、壽命を増益し、四衆(比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷)の衆苦を遠離する功德あるを説き、又此の大明は已に六大師(如來、帝釋、天主・多聞天王、持國天王、增長天王、廣目天王)の宣説した所のものなるを叙し、次に六字大明陀羅尼を出して、諸種の難及び衆病、毒害より免れしむる大威力あるを説き、最後に佛が本經を成就最上増益の法と名づけ、其の功德は恒に長壽無病にして衆惡の侵す所とならない旨を説いて居られる。又

異譯に聖六字大明陀羅尼經一卷(大正二〇・四四)がある。

聖六字大明王陀羅尼經

①(日) Shō-roku-ji-lin-myō-da-ra-ni-kyō. (支) Sheng-ji-lin-ming-wang-to-lo-mi-ching. (梵) Sad-aksara-vidyā (藏傳) (藏) Iphags-pa yi-ge drug-pahi rig-shags. 聖六字大明王經 ②一卷 ③存、大正二〇・四四No. 1047、縮成八、己一五・四、北1170家、南1185家、元1179家、明北880命、清880命、麗1179槐、天1165家、法1291策、明南845臨、正、大・一四四)譯

⑤六字大明王陀羅尼の功德を説いたもので、初めに一時佛舍衛、Pravasti國祇樹給孤獨 Jetavana Anāpāpāsāyama 園に在つて、阿難 Anandaに對し、六字大明王陀羅尼は過去の無量の諸佛の所説なるを説き、更に阿難及び娑婆世界の主、大梵天王、帝釋、四天王等が、世尊に此の陀羅尼を宣説せられんことを願ふた時に、世尊は六字大明王陀羅尼を説き、次に阿難に對し、此の大明王陀羅尼章句を聞き、受持し、憶念し、讀誦する者は、諸の怖畏を免れ、又諸病に罹ることなきを説き、更に一陀羅尼を出して、諸の惡害者を破折する功德あるを説き、最後に是の如き功德力ある陀羅尼を、後の世に流布せんことを諭してある。

又此の異譯に聖六字增壽大明陀羅尼經(大正二〇・四六)があつて、其の内容は、少異である。蓋し本經所説の六字大明陀羅尼は只世尊の宣説せられたものとして「恒爾也他

難底諷度摩底等哩計布哩彙編計波阿賀」とあるが、大乘莊嚴寶王經第四(大正二〇・六一西藏名Za-na-to-g-dkod-pahi-mu)所説の六字大明陀羅尼は「唵麼呢鉢訶訶吽namo-bud-dha-me-hum」であり、且西藏佛教に於て觀世音菩薩の呪として廣く誦誦せられてゐるが、本經所説も亦觀世音菩薩の功德を叙したものである。(神林隆淨)

### 昭通和尚全集

①(日) Sho-ten-o-sho-zen-shu. ②六卷 ③存 ④上田豊城編

⑤眞言宗に於ける明治時代の學匠上田昭通の著書を類聚せるもの。昭通和尚は眞言の事教二相に造詣深きのみならず、持律堅固にして律藏に精通し、天台の蘊奥を究め、兼ねて華嚴淨土等にも通じてゐた。従つてその著書は下記目次の如く各部に亘つてゐる。編者は和尚の高弟で、和尚二十五回忌に際し報恩のため本全集を刊行したのである。各卷共に口繪として肖像筆蹟等數葉を載せてゐる。目次左の如し。

〔第一輯〕眞言部第一。五部祕經傳授要略五卷。大日經疏傳授私記一卷。大日經教主管見附般若教主通解一卷。大疏祕記雜集一卷。釋摩訶衍論玄譯一卷。即身義講要一卷。菩提心論玄譯一卷。菩提心論三摩地分科一卷。菩提心論三摩地段頌文釋一卷。吽字義玄譯一卷。祕藏寶鑰玄談一卷。辨顯密二教論應譯一卷。悉曇字記玄談一卷。雜部眞言經事補註一卷。吽字義旋陀羅尼門釋一卷。眞言宗學科表註一卷。

〔第二輯〕眞言部第二。眞言教疑決一卷。阿

字觀次第口訣等一卷。安流三摩地法要略註

一卷。大蓮華三昧耶無障礙經八句祕釋一卷。普賢延命法祕記一卷。佛說一切如來金剛壽命陀羅尼經略釋一卷。佛說雨寶陀羅尼經略釋一卷。眞言行者二時食作法中印明訣一卷。附施俄鬼作法中印明訣一卷。八家印信略述一卷。夢想印信口訣一卷。安流臨終五紙印信一包略述一卷。安流聖教目錄三卷。幸心院洞泉相承諸印信口訣一卷。三寶院幸心方玄海相承印信口訣一卷。華嚴院流大略記一卷。密宗念佛勸發鈔一卷。淨土門祕要一卷。光明眞言初學要覽鈔一卷。東密末徒手鏡一卷。眞言宗意安心辨二卷。兜率淨土行因鈔一卷。靈魂不滅論一卷。病人用心一卷。送終略示一卷。同華嚴部に華嚴經探玄記開講要義一卷。華嚴五教章懸談一卷。安心還源觀玄談一卷。妄心還源觀精義一卷。華嚴宗淨土門辨一卷。華嚴遊心法界記講義一卷。大乘起信論義記玄談一卷。般若心經疏略註一卷。華嚴宗章目錄一卷。冠註金獅子章一卷

〔第三輯〕天台部第一。天台四教儀集註精義三卷。天台十不二門指要鈔精義一卷。天台摩訶止觀玄談一卷。天台摩訶止觀玄談箋註一卷。天台止觀輔行傳弘決序精義一卷。法華玄義釋籤玄談一卷。法華經顯密料揀一卷。法華義疏略釋一卷。觀經疏妙鈔玄談一卷。

〔第四輯〕天台部第二。天台綱要集五卷。西谷名目懸譯一卷。西谷名目正誤一卷。天台金剛錮論講錄一卷。天台教觀目錄一卷。妙經普門品略註一卷。

〔第五輯〕戒律部。律宗綱要一卷。大乘三乘戒精義一卷。三乘淨戒芳蕪一卷。通受懺悔手鏡一卷。梵網經古述記玄談一卷。梵網經古述記玄談開牒一卷。附。梵網經古述記末釋優降一卷。梵網經末釋目錄一卷。七佛略戒經集解一卷。教誡律儀懸譯一卷。四分律行事鈔資持記序并五例略解一卷。四分律宗書籍目宛一卷。僧非論一卷。懺悔三歸等功德勸文補註一卷。二時食作法略釋一卷。二時食作法略註一卷。佛門受食五觀精義一卷。五觀。粥尚。等得略辨一卷。施俄鬼作法略釋一卷。受日法總料簡一卷。六物圖玄談釋題并撰號。本文大旨一卷。鐵鉢辯補註一卷。袈裟禁緇願正論一卷。著衣顯正錄一卷。俗士著法衣是非辨一卷。戒律要義集一卷。每朝唱念法一卷。日本諸寺住僧清範一卷。僧家說淨要錄一卷。佛制夏安居旨趣略記一卷。

〔第六輯〕雜部。學科表他部經三卷。般若心經註一卷。密宗求開持法利益略述一卷。眞言在家念誦法則一卷。僧侶學則一卷。冠註阿彌陀經義記一卷。冠註阿彌陀經義記增補一卷。佛垂般涅槃略說教誡經開流鈔并序一卷。父母恩重經略釋一卷。佛說孟蘭盆經略釋一卷。孟蘭盆獻供法一卷。淨土教書籍目錄一卷。七十五法名目玄談一卷。成實宗綱要一卷。如法眞言律興起緣由一卷。蓮體和尚行狀記一卷。契沖阿闍梨傳記一卷。昭通和尚詩歌集一卷。

〔附錄〕昭通和尚略傳。同年譜。

〔附錄〕昭通和尚略傳。同年譜。

〔附錄〕昭通和尚略傳。同年譜。

〔附錄〕昭通和尚略傳。同年譜。

〔附錄〕昭通和尚略傳。同年譜。

〔附錄〕昭通和尚略傳。同年譜。

①(日) Sho-ten-o-sho. ②二卷

③元榮(延喜一一)長徳元 A. D. 911-903)述(參考) 諸宗章疏錄第三

④(日) Sho-ten-o-sho-gan-ryo-ki. 光明眞言經照閣鈔纂錄記。光明眞言纂錄記。光明眞言照閣鈔纂錄記。六卷 ⑤存 ⑥泰音(寶永六 A. D. 1709)述 ⑦寶永七、正徳五刊 ⑧折、け、三、中、三三(高、大、寄、一、三二)京專(龍、大、研史)京大、一、二、一、一、三二

⑨(日) Sho-ken-dai-bo-satsu-choku-shi-to-ken-ji-jusashi. ⑩存 ⑪京大、日大未、七、四、六

⑫照權實鏡 ⑬(日) Sho-ken-ji-kyo. ⑭一卷 ⑮存、日本大藏經天台宗顯教章疏第一、大日本佛教全集第二、天台小部集釋第一〇、傳教大師全集第二、最後(神護景雲元一弘仁一)A. D. 767-823)撰 ⑯弘仁八(A. D. 817)

⑰本書は奥書によれば「弘仁八年丁酉上旬日、陸奥(徳)が佛性抄を作つて法華經を權教であると判定した。これに依つて本書を作つた」とある。又弘仁十二年に傳教大師が著した「法花秀句」上末にも「權實及び不成、不定性、約位約種、密意隱密は義鏡章等、慧日羽足、遮等異見章にある。委悉に遮破することは守護國界章、照權實鏡、決權實論、通六九證等の如し、云云」と記してあるから、最澄撰と認めて然るべきである。所が東城傳燈目錄には「照權實鏡、智證門人良勇撰」と記すが、龍堂は撰

述篇目集に「非也。大師已於秀句指此書こと述ぶ。本書は最澄が徳一の佛性抄を破したものであること明確。本書の内容は先づ三乘別教は三權であり、一乘圓教は一實である。この權實二教の意義を明示せんが爲めに本書を造ると、撰述の由來を記し、次に十門を立て、法華一乘は眞實教であることを論じたもの。十門とは善養爲一不二鏡。佛說一乘爲勝鏡。一乘爲海三河鏡。三乘差別非性鏡。諸乘非究一竟鏡。依眞說一俗三鏡。於一分別說三鏡。三乘但名無實鏡。倒心三實一權鏡。法華一乘眞實鏡である。

【参考】東域傳燈目錄下、山家祖德撰述篇目集上 (田島德音)

**照山大千兩和尚法語集** ①(日)

Shō-zan-dai-sen-ryō-o-shō-to-go-shū. ①一卷 ②存 ③陽山編 ④寫本(谷大、餘大・三〇一八)

**照善寺異義事件書** ①(日)

Shō-jō-ji-igi-ken-sho. 越中照善寺異義事件書 ①一卷 ②存 ③寫本(谷大、宗大・二四八五)

**照膽鏡** ①(日)

Shō-tan-kyō. ①一卷 ②存 ③寫本(正大、一五七・六六)

**照水紀年錄** ①(日)

Shō-hyō-ki-nen-roku. ①一卷 ②存 ③無著道忠(承應二—延享元A. D. 1653—1744) ④(参考) 禪籍目錄

**照水堂詩集** ①(日)

Shō-hyō-dō-shi-shū. ①七卷 ②存 ③道忠無著(承應二—延享元A. D. 1653—1744) ④(参考) 禪

籍目錄

**照水堂年譜** ①(日) Shō-hyō-dō-nen-shū. ①一卷 ②存 ③(参考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

**照彌陀本願鏡** ①(日)

Shō-mi-ta-hon-gwan-kyō. ①一卷(卷二) ②存 ③大正五寫 ④(谷大、宗大・二八一六)

**照明三昧經** ①(日)

Shō-myō-san-mai-kyō. (支) Chao-ming-san-mei-ching. ①一卷 ②缺 ③西晉竺法護(太始二—建興元A. D. 266—313) 譯 ④第一譯

【参考】開元錄第一四、貞元錄第二四

**照明三昧經** ①(日)

Shō-myō-san-mai-kyō. (支) Chao-ming-san-mei-ching. ①一卷 ②缺 ③東晉代祇多蜜譯 ④第二譯 ⑤(参考) 武周錄第一二、開元錄第一四、貞元錄第二四

**照明三昧不思議事經** ①(日)

Shō-myō-san-mai-fu-shi-ji-kyō. (支) Chao-ming-san-mei-fu-shi-ji-kyō. ①一卷 ②疑偽經 ③(参考) 法經錄第二、仁壽錄第四

**照明鈔** ①(日)

Shō-myō-shō. ①一卷 ②(参考) 淨土眞宗教典志第一卷 ③疑偽經 ④(参考) 法經錄第二、仁壽錄第四、內典錄第一〇、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

**照明菩薩方便治病經** ①(日)

Shō-myō-ho-satsu-hō-ben-fu-byō-kyō. (支) Chao-ming-pi-a-sa-fang-pi-an-chi-ping-

ching. 照明菩薩方便醫治病經 ①一卷 ②疑偽經 ③(参考) 奈良朝現在一切經疏目錄1792

**照明菩薩方便醫治病經** ①(日)

Shō-myō-ho-satsu-hō-ben-fu-byō-kyō. (支) Chao-ming-pi-a-sa-fang-pi-an-chi-ping-ching. 照明菩薩方便治病經 ①一卷 ②疑偽經 ③(参考)

**法經錄第二、仁壽錄第四、內典錄第一〇、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八**

**照蒙記改正** ①(日)

Shō-mō-ki-kai-shō. ①存、難波摩壺之内 ②知空(寬永一一—享保三A. D. 1634—1718) 述 ③正徳四刊 ④(龍大、研真)

**照了分別義記** ①(日)

Shō-ryō-bun-gi-ki. ①一卷 ②圓仁(延暦一三—貞觀六A. D. 794—864) 述 ③(参考) 本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上

**詳諸宗鈔** ①(日)

Shō-shō-shū-shō. ①一卷 ②最澄(神護景雲元—弘仁一三A. D. 767—822) 撰 ③(参考) 本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上

**障子文** ①(日)

Shō-ji-mon. ①存、興教大師全集之内 ②覺覺上人が元永元年二十四歳の時に野山の長持院に於て、千日無言の行を修せられた時に、持佛堂の障子に書かれたものが、この文である。五言一句が五頌と四字一句が二頌と都合七頌から成るものである。頌全體に亘つては中道實相の思想を説いたものであるが、中に於て人の注意を惹くもの

は、大乘、深祕説萬法一心作、心常遊佛境、身何住、迷界と云ふ一頌は娑婆即寂光の妙旨を詠じたものであり、又夢裏有無、有無同無迷中是非非俱非とあり、是れ上人が不如意の人世を觀じ來り觀じ去つて、人世に對する最後の悟境を告白されたものとして、大に味ふ可きものがあると思ふ。(神林隆淨)

**稱讚淨土經** ①(日)

Shō-san-jō-do-kyō. (支) Ch'eng-tsan-ching-tu-ching. 稱讚淨土佛攝受經 ①一卷 ②存、大正一一・三四八No. 367、縮地一二、卅一〇・四、北195卷、南206卷、元200卷、明北195頁、清195頁、麗194卷、天199卷、指179卷、法190卷、至272頁、明南194頁、N. 199、二樂叢書第一册之内、淨土宗全書第一輯所依經論第一卷之内 ③唐玄奘(仁壽二—麟徳元A. D. 602—664) 譯 ④(参考) 淨土依經總論章疏目錄、淨土眞宗教典志第三 ⑤應永七寫(高大、寄・一・二三) 刊本(哲、う・二・中三〇) 徳川時代刊(費善提院)

**稱讚淨土經慧琳音義** ①(日)

Shō-san-jō-do-kyō-e-rin-on-gi. (支) Ch'eng-tsan-ching-tu-ching-hui-lin-yin-i. ①存、一切經音義第三二(大正五四No. 2128) 之内 ③(参考) 淨土眞宗教典志第三

**稱讚淨土經羯說** ①(日)

Shō-san-jō-do-kyō-ka-setsu. ①四卷 ②存、眞宗全書第七 ③月峯(寬文一一—享保一四A. D. 1671—1729) 述 ④享保一四(A. D. 1729)

⑤異譯阿彌陀經解説の最古本として珍重せ

らる。教典、藏教、宗體、所被、傳譯、名題、文義の七門に互つて解説す。末尾に一經の科段を附してある。

①(参考) 淨土眞宗教典第二 ①享保一四刊(正大、一一五六・一二)(龍大、一一一五・一)享保一五刊(谷大、宗大五七四)刊本(哲、ろ・三・左・一)(京大、日大未・一二二)(高大、奇・一・二三) (辻本鐵夫)

稱讚淨土經說義疏 ①(日) Shō-san-jō-do-kyō-ga-setsu-gi-yō. ②3卷 ①月峯崇信(寛文一一享保一四 A. D. 1671-1729)作 ②享保一五(A. D. 1730) ③(参考) 淨土眞宗教典第二

稱讚淨土經說通關記 ①(日) Shō-san-jō-do-kyō-ga-setsu-tō-kwan-ki. ②十五卷 ①月溪觀信(一享保元 A. D. 1716)作 ②(参考) 淨土眞宗教典第二

稱讚淨土經開蒙記 ①(日) Shō-san-jō-do-kyō-kai-mō-ki. 稱讚淨土佛攝受經開蒙記 ②二卷 ③存 ④正亮作 ⑤元祿二(A. D. 1689)三月 ⑥(参考) 淨土眞宗教典第三 ⑦元祿三刊 ⑧(正大、一一五・三八)

稱讚淨土經科 ①(日) Shō-san-jō-do-kyō-ka. (支) Chōng-tsan-ching-t'u-ching-ka. ②二卷 ③(参考) 淨土眞宗教典第三、新編諸宗教藏總錄卷第一

稱讚淨土經科本 ①(日) Shō-san-jō-do-kyō-kwa-hon. ②一冊 ③存 ④哲、ろ・二・左・一九

稱讚淨土經古述記 ①(日) Shō-san-jō-do-kyō-ko-shū-ki. (支) Chōng-tsan-ching-t'u-ching-ku-shū-ki. ①一卷 ②新羅太賢(一景徳王 一一 A. D. 753)述 ③(参考) 新編諸宗教藏總錄第一、淨土眞宗教典第三

稱讚淨土經講錄 ①(日) Shō-san-jō-do-kyō-jō-rōku. ②一卷 ③存 ④寫本(谷大、長保一〇)(龍大、一一一五・三)(哲、ろ・二・中・二八)

稱讚淨土經釋 ①(日) Shō-san-jō-do-kyō-shaku. ②一卷 ③(参考) 淨土眞宗教典第三

稱讚淨土經述贊 ①(日) Shō-san-jō-do-kyō-jū-san. (支) Chōng-tsan-ching-t'u-ching-shū-tsan. ②一卷 ③唐鑑基(貞觀六一永淳元 A. D. 632-682)述 ④(参考) 淨土眞宗教典第三

稱讚淨土經疏 ①(日) Shō-san-jō-do-kyō-sho. (支) Chōng-tsan-ching-t'u-ching-su. ②二卷 ③省躬述 ④(参考) 淨土眞宗教典第三、東域傳燈目錄卷上、新編諸宗教藏總錄卷第一

稱讚淨土經疏 ①(日) Shō-san-jō-do-kyō-sho. (支) Chōng-tsan-ching-t'u-ching-su. 稱讚淨土佛攝受經疏 ②三卷 ③唐代靖邁述 ④(参考) 淨土眞宗教典第三、奈良朝現在一切經目錄 1915-1916、東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第一

稱讚淨土經疏 ①(日) Shō-san-jō-do-kyō-sho. 稱讚淨土佛攝受經疏 ②三卷 ③存 ④梁道(一享保一六 A. D. 1731)述 ⑤明和六刊 ⑥(谷大、宗大、一七四三)(哲、ろ・二・左・一三)(京大、日大未、一一三)(龍大、二四一五・三〇四)(正大、一一五六・一三)

稱讚淨土佛攝受經 ①(日) Shō-san-jō-do-bus-shō-jū-kyō. (支) Chōng-tsan-ching-t'u-shō-shū-ching. (梵) Sukhāvātya-nanta-vyūha-sūtra or Sūhāvatyānā(Cd. by Max Müller and B. Nanjō.) (藏) Phags-pa bde-ba-can gyi bkod-pa shes-bya-da theg-pa chen-pohimdo 稱讚淨土經 ②一卷 ③存 ④大正一一・三四八 No. 367、縮地一一・二一〇・四、北195 養、南206 養、元200 養、明北195 貞、清195 貞、麗194 鞠、天199 養、指179 鞠、法190 鞠、至272 良、明南194 貞、Nj. 199 ⑤玄奘(仁壽二一麟徳元 A. D. 602-654)譯 ⑥唐永徽元(A. D. 650) ⑦開元錄第八(大正五五・五五五)に本經名を挙げ、その細註に「見内典錄、第三出、與羅什阿彌陀經等同本、永徽元年正月一日、於大慈恩寺翻經院譯、沙門大乘光筆受」とある如く、羅什譯阿彌陀經と凡んど同じ内容にして、唯舊譯の六方佛證讚に對して本經は、十方佛證讚なるを異りあるのみ。

稱讚淨土佛攝受經 ①(日) Shō-san-jō-do-bus-shō-jū-kyō. 科稱讚淨土佛攝受經 ②一卷 ③存 ④刊本(正大、一一五〇・三一)

稱讚淨土佛攝受經 ①(日) Shō-san-jō-do-bus-shō-jū-kyō. 科稱讚淨土佛攝受經 ②一卷 ③存 ④享保三刊 ⑤(龍大、二四一五・二〇三)

稱讚淨土佛攝受經 ①(日) Shō-san-jō-do-bus-shō-jū-kyō. 科稱讚淨土佛攝受經 ②一卷 ③存 ④享保三刊 ⑤(龍大、二四一五・二〇三)

稱讚淨土佛攝受經 ①(日) Shō-san-jō-do-bus-shō-jū-kyō. 科稱讚淨土佛攝受經 ②一卷 ③存 ④享保三刊 ⑤(龍大、二四一五・二〇三)

稱讚淨土佛攝受經 ①(日) Shō-san-jō-do-bus-shō-jū-kyō. 科稱讚淨土佛攝受經 ②一卷 ③存 ④享保三刊 ⑤(龍大、二四一五・二〇三)

稱讚淨土佛攝受經 ①(日) Shō-san-jō-do-bus-shō-jū-kyō. 科稱讚淨土佛攝受經 ②一卷 ③存 ④享保三刊 ⑤(龍大、二四一五・二〇三)

稱讚淨土佛攝受經 ①(日) Shō-san-jō-do-bus-shō-jū-kyō. 科稱讚淨土佛攝受經 ②一卷 ③存 ④享保三刊 ⑤(龍大、二四一五・二〇三)

稱讚淨土佛攝受經開蒙記 ①(日) Shō-san-jō-do-bus-shō-jū-kyō-kai-mō-ki. 稱讚淨土經開蒙記 ②二卷 ③存 ④正亮述 ⑤元祿二(A. D. 1689)三月 ⑥元祿三刊 ⑦(正大、一一五三・八)

稱讚淨土佛攝受經科解 ①(日) Shō-san-jō-do-bus-shō-jū-kyō-kwa-ge. ②一卷 ③存 ④元文元寫 ⑤(正大、一一五六・一一)

稱讚淨土佛攝受經講錄 ①(日) Shō-san-jō-do-bus-shō-jū-kyō-kyō-rōku. ②二卷 ③存 ④惠航(一文政一一 A. D. 1829)述 ⑤享保一二寫 ⑥(正大、一一五六・七)寫本(龍大、研眞)

稱讚淨土佛攝受經疏 ①(日) Shō-san-jō-do-bus-shō-jū-kyō-sho. 稱讚淨土經疏 ②三卷 ③存 ④海譽樂道(一享保一六 A. D. 1731)述 ⑤明和六刊 ⑥(京大、日大未、一一三)(藏、一一・二)(龍大、二四一五・三〇四)(正大、一一五六・一三)(谷大、宗大、一七四三)(哲、ろ・二・左・一三)

稱讚淨土佛攝受經疏 ①(日) Shō-san-jō-do-bus-shō-jū-kyō-sho. (支) Chōng-tsan-ching-t'u-shō-shū-ching-su. 稱讚淨土經疏 ②一卷 ③唐代靖邁述 ④(参考) 諸宗章疏錄第一、注進法相章疏錄、奈良朝現在一切經目錄 1913、1914

稱讚大乘功德經 ①(日) Shō-san-jō-do-bus-shō-jū-kyō. (支) Chōng-tsan-ching-t'u-shō-shū-ching-su. 稱讚淨土經疏 ②一卷 ③唐代靖邁述 ④(参考) 諸宗章疏錄第一、注進法相章疏錄、奈良朝現在一切經目錄 1913、1914

稱讚大乘功德經 ①(日) Shō-san-jō-do-bus-shō-jū-kyō. (支) Chōng-tsan-ching-t'u-shō-shū-ching-su. 稱讚淨土經疏 ②一卷 ③唐代靖邁述 ④(参考) 諸宗章疏錄第一、注進法相章疏錄、奈良朝現在一切經目錄 1913、1914

稱讚大乘功德經 ①(日) Shō-san-jō-do-bus-shō-jū-kyō. (支) Chōng-tsan-ching-t'u-shō-shū-ching-su. 稱讚淨土經疏 ②一卷 ③唐代靖邁述 ④(参考) 諸宗章疏錄第一、注進法相章疏錄、奈良朝現在一切經目錄 1913、1914

名所行發⑩(名庫書)考題所現⑪ 月年の刊寫⑫(書考書書釋註)書末⑬ 説解容内⑭ 代年作著⑮ 著者⑯ 缺存⑰ 數卷⑱(名書)名題⑲ 號略字數

259傷、明北372良、清372良、麗315毀、天  
 260傷、指333毀、法319毀、至333改、明南  
 2487、276 ④唐玄奘(仁壽二一麟徳元、A.  
 D. 602—664)譯

⑥本經は、卷末に佛自ら稱讚大乘功德經と  
 名け給うが如く、大乘の功德を稱讚するも  
 のなるが故にこの名があり、又本經に於て  
 大乘を誘ふものの罪障を説くこと、顯  
 説誘法業障經の名が存し、智傲譯の説妙法  
 決定業障經は本經の異譯である。本經は會  
 座の女人の相を示現する德嚴華菩薩を對告  
 衆として、二乗を樂しむものは無上菩提を  
 求むるもの惡知識であること、新學の菩薩  
 の大乘の多聞の菩薩に親近すべきこと、二  
 乘に親近すべからざる所以を説き、更に大  
 乘の名、その勝功德を説いたものである。

本經の異譯の妙法決定業障經は、本經を略  
 説したものであつて、本經の德嚴華は異譯  
 にあつては、功德莊嚴開敷花夫人となり、  
 經名も佛は大使摩騰、又は説妙法決定業  
 障と命け給うのである。(林五邦)

**稱讚如來功德神呪經**

①(日)Sho  
 san-nyo-rat-ki-duku-jin-jū-kyū. (支)  
 (Heng-sau-jū-hai-kung-té-shen-chou-  
 ching. (梵藏名)十二佛名神呪校量功德除障  
 滅罪經參照) ②一卷 ③存、大正二一・八六  
 三No. 1349、縮成五、己一・一、北303効、  
 南315効、元311効、明北332能、清332能、  
 麗303男、天311効、指386男、法297男、至  
 557因、明南607効、Nj. 336 ④唐義淨(貞  
 觀九一開元元、A. D. 633—713)譯  
 ⑤現在十方如來の功德、並に神呪を説き、

且つその功德が示されてある。現在十方如  
 來の名號を憶念受持して、一心に恭敬する  
 者は、所有の業障及び破戒の重罪は、悉く  
 皆除滅するを得と説き、次に東方無垢光如  
 來・東南方象辯莊嚴如來・南方無垢月幢旗  
 王如來・西南方光焰莊嚴・西方寶勝如來・  
 西北方俱摩羅光如來・北方無畏無垢稱如來・  
 東北方離怖畏憚懼有大名稱如來・上方師子  
 奮迅意如來・下方金華光如來の十方佛の名  
 號を擧げ、又次に東方十不可說百千億數微  
 塵の佛土を過ぎて、妙眞珠と名くる世界あ  
 つて、此の世界に一佛あり、その名を高勝  
 無染寶王正遍知如來と曰ふ。又無比菩薩に  
 記を授く。この菩薩は、滅度の後に成佛し  
 て、幢相旗王正遍知如來となつたことを説き、  
 若し善男子善女人あつて、此等の諸佛の名  
 號を受持し、専心に恭敬する者あらば、所  
 犯の重罪悉く消滅し、生死に處すと雖も、  
 流轉を免れ、命終の後、諸の佛國に生ずべ  
 きを説き、次に滅罪の陀羅尼を出し、次に  
 世尊重ねて此の呪を受持する者の功德を、  
 頌文で讚してある。又此の經の異譯に、十  
 二佛名神呪校量功德除障滅罪經(正藏二一・  
 八六一)がある。内容は略々同一で廣略の  
 相違が存するのみである。(神林隆淨)

**稱念上人行狀記**

①(日)Shōnen-  
 shōnin-gyō-jō-ki. ②二卷 ③存、淨土宗  
 全書第一七 ④妙阿玄周 ⑤寶曆二(一、A.  
 D. 1762)  
 ⑥本書は京都一心院第四十一世妙阿玄周  
 が、開山稱念上人の事蹟が淨土高僧傳や列  
 祖傳、緇白往生傳に載つてはゐるが、遺漏

多きを憾みとして、口碑、逸文を搜り假名  
 交文で上下二卷に纏めたのである。上卷  
 には上人誕生及入衆剃髮し給ふ事。武州淨  
 安寺に住し道俗化益の事、付貫輪數珠の  
 事。天智庵建立の事。念佛弘通を太神宮に  
 祈願し給ふ事。松阪樹敬寺住職、附俊乘坊  
 神告類例の事。上人拜書し給ふ六字名佛不  
 思議の事。木内氏の許へ贈り玉ふ御消息の  
 事。信樂西上人へ和歌を贈り玉ふ事。京都  
 に飛錫し給ふ事。黒瀬氏觀音の瑞告により  
 上人に値遇の事。專稱庵草創の事、付阿彌  
 陀魚及劉成熊類例の事。專稱庵同行衆法度  
 の事。上人剃髮舍利の事。大覺寺門跡問答  
 往復の事。東山に盧を結び勵聲念佛し給ふ  
 事。尊稱法親王光を尋來給ふ事、附元祖大  
 師放光類例。尊稱法親王御示寂の事。一心  
 院草創の事。念佛道場七箇條の事。正朝別  
 行十一箇條の事。癩人を憐れ施し給ふ事。  
 上人御消息の事。桂川極樂寺の事。二十三  
 項の記述がある。下卷には淀納所念佛寺の  
 事。田井村專念寺の事。嵯峨稱念寺建立の  
 事。川端正定院の事。上人竹像及念珠舍利  
 の事。九箇の條法を製し給ふ事。上人夢之  
 記の事。竹像に詠歌を書與し給ふ事。上人法  
 語の事。御臨終奇瑞の事。剃髮舍利の事。  
 將軍義輝公額字賜ふ事。當山境地を賜令旨  
 の事。改葬に尊散を拜せし事。神變續舍利  
 の事。木像後壁に映し給ふ事。木像彫刻瑞  
 夢の事。身變り名號の事。註鎌倉岩藏寺本  
 尊類例及名體不雜辨の十八項があり。終り  
 に捨世遺事並述懐と題して玄周が寶曆十年  
 十二月華頂御殿にて商民部卿より一心院道

場法合其他を一軸とせるもの皆て衆僧乖角  
 の爲め失はれんとせし際、御出緒をたより  
 て父宮内卿に預けられたものである、貴僧  
 は一心院興隆の志も見ゆる故教隨喜すとて  
 渡されたことを記し、門末捨世の法令軌則  
 の癡類を慨き、捨世流義の眞頭骨を述べ、  
 上人の著述の内要義抄は世に密在するが、  
 安心抄は多年搜索してゐるが得られない、  
 後の人これを得たまはゞ、當山の寶藏に藏  
 め、世に弘通あらんこと乞ひねがふ、と結ん  
 である。本書には華頂山前大僧正善阿順眞  
 の序、著者の自序、京都乘願寺謙光の後序  
 がある。

④天保四刊(龍大、研史)(京大、一・二一シ。  
 四二)明治三六刊(龍大、二九六五・一三二)  
 昭和三刊(高、寄、一・二一)(中谷在禪)

**稱名庵雜記** ①(日)Shōmyō-an-zaki-  
 ki. ②三卷 ③存 ④法道述、法龍錄

⑤明治四五刊 ⑥(谷大、宗大、二八二〇)

**稱名感應記** ①(日)Shōmyō-kan-  
 ki. ②二卷 ③存 ④文政二刊 ⑤(正  
 大、一五一六・二八〇)

**稱名正因異計歴史略** ①(日)Shō-  
 myō-shō-in-i-rekai-kei-shi-ryaku. ③

存、雜纂之内 ④遠藤玄雄(文化元一明治一  
 四A. D. 1804—1881)述 ⑤寫本(龍大、一  
 五〇一・一一)

**稱名正因義** ①(日)Shōmyō-shō-in-  
 gi. ②一卷 ③存 ④法住(一明治七A.  
 D. 1874)述 ⑤昭和二刊 ⑥(谷大)

**稱名信樂二願希決** ①(日)Shō-  
 myō-shin-gyō-ni-gwan-ki-ketsu. ②一卷

⑤存、眞宗全書第五、宗典研究之内  
丹山順藝(明和七—弘化四 A. D. 1770—1847)述

⑥本書は眞宗教義に於いて最も根本的な問題たる行信論を取扱つたもので、即ち、彌陀の四十八願中、宗祖親鸞聖人に依て眞實の願と判定せられた第十七諸佛稱名の願、第十八願至心信樂の願の深義を顯し、兩者の關係を解釋せるものである。然も、その行信論たるや、著者の該博なる學識と高潔なる徳風を經緯として、深く祖意を探究せるもので、此の類書の中、最も注目すべきものゝ一である。先づ、始めに兩願の本文を擧げて、教行信證寬文本、同延書本(聲如上人、蓮如上人)、三經往生文類等に依て各種の訓點を施し、次に本文を五門に分けて、一に願の成就、二に願の次第、三に願の不離、四に願の名義、五に願の文意を明してある。同師は香月院深勵師の上座であつて、先師の七回忌に當り、師訓を憶ひつゝ、報恩の爲に手記せし所である。

⑦刊本(谷大、宗洋・四七一、宗大二〇七四)寫本(龍大、一五〇二・四七) (稻葉秀賢)

稱名信樂二願希決附錄 ①(日) Sho-myō-shūin-gyō-ni-gwan-ki-keisu-furoku. ①一卷 ②存 ③寫本(谷大、宗大二〇七五)

稱名念佛奇特現證集 ①(日) Sho-myō-nen-butsumi-dokku-gen-shū-shū. (應安二—寶徳元 A. D. 1369—1449)撰 ④慶安四刊(京大、一・二六三・八三)正徳二刊

稱名念佛奇特集 ①(日) Sho-myō-nen-butsumi-dokku-shū. 稱名念佛奇特現證集 ②二卷 ③存 ④隆興應安二—寶徳元 A. D. 1369—1449)撰 ⑤慶安四刊(京大、一・二六三・八三)

稱名念佛集 ①(日) Sho-myō-nen-butsumi-shū. ①一卷 ②寛珍 ③(參考) 淨土依憑經論章疏目錄

稱名念佛追薦説 ①(日) Sho-myō-nen-butsumi-tsui-sen-setsu. ①一卷 ②存 ③寶洲(一元文元 A. D. 1736)述 ④元文四刊 ⑤(龍大、二六八四・一二三)(谷大、長保・七八)(正大、一五五四・一五七)

稱揚諸佛功德經 ①(日) Shō-yō-shō-butsumi-ku-dōk-kyō. (支) Ch'eng-yang-chu-fō-kuang-tē-ching. 集華經 ②三卷 ③缺 ④姚秦鳩摩羅什(建元二—義熙九 A. D. 317—413)一說弘始一一或義熙中寂譯 ⑤第一譯 ⑥(參考) 開元錄第一四、貞元錄第一四

稱揚諸佛功德經 ①(日) Shō-yō-shō-butsumi-ku-dōk-kyō. (支) Ch'eng-yang-chu-fō-kuang-tē-ching. (梵) Kusumasā-cyā-sūtra. (藏) Iphags-pa me-tog gi tshogs shes-bya-patheg-pa chen-poīh mdo. 集華經、現在佛名經、諸佛華經、稱揚諸佛經、集諸佛華經 ②三卷 ③存、大正一四・八七No. 434、縮黃四、正一・五、北 273 改、南 383 改、元 381 改、明北 398 號、清 998 號、廢 372 必、天 381 改、指 343 必、法 965 必、至 381 必、明南 379 國、正

(正大、一〇三六・二六)(帝國、一八九・四二)

元號吉迦夜譯

⑥本經は一に稱揚諸佛經、現在佛名經、諸佛華經、集華經、集諸佛華經ともいひ、本經に佛自ら「稱揚諸佛功德法品」若くは「集諸佛花」と命け給ふことより、この經名が存するのである。本經は三卷より成り、諸佛の世界及びその佛名をあげて、その功德を讃嘆せられたものであつて、上・中二卷及び下卷。初めは舍利弗を對告衆とし、下卷の以下は迦葉を對告衆として説き給ひ、上卷に於て東方天神世界の寶海如來を初め四十九佛の徳を讃嘆し、中卷には南方眞珠世界の日月燈明如來以下三十八佛の徳を嘆へ、下卷に於ては、西方極樂世界の阿彌陀佛を初め三佛、次に迦葉を對告衆として、北方阿竭流香世界の寶月光明如來を初め三佛、次に上方の寶月世界の金寶光明如來以下二十七佛の功德を讃嘆したものである。(林五邦)

稱揚諸佛功德經 ①(日) Shō-yō-shō-butsumi-ku-dōk-kyō. (支) Ch'eng-yang-chu-fō-kuang-tē-ching. 稱揚功德經 ②一卷 ③失譯 ④(參考) 出三藏記第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

稱揚百七十佛名經 ①(日) Shō-yō-hyaku-shichi-ju-butsumi-nyō-kyō. (支) Ch'eng-yang-par-chi-shi-fo-ming-ching. 百七十佛名經 ①一卷 ②缺 ③後漢代失譯 ④(參考) 出三藏記第四、三寶紀第四、第七、內典錄第一、第三、開元錄第一、第一四、貞元錄第二、第二四

稱揚諸佛功德經 ①(日) Shō-yō-shō-butsumi-ku-dōk-kyō. (支) Ch'eng-yang-chu-fō-kuang-tē-ching. 稱揚功德經 ②一卷 ③失譯 ④(參考) 出三藏記第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

稱揚百七十佛名經 ①(日) Shō-yō-hyaku-shichi-ju-butsumi-nyō-kyō. (支) Ch'eng-yang-par-chi-shi-fo-ming-ching. 百七十佛名經 ①一卷 ②缺 ③後漢代失譯 ④(參考) 出三藏記第四、三寶紀第四、第七、內典錄第一、第三、開元錄第一、第一四、貞元錄第二、第二四

精舍興立用意抄 ①(日) Shō-jakō-ryū-yō-i-shō. ①一卷 ②存 ③禪覺述 ④寫本(帝國、二三一・九〇)

精進波羅蜜行要 ①(日) Shō-jin-ha-ra-mitsu-gyō-yō. ①一冊 ②存 ③享保五寫 ④(寶龜院)

精微集 ①(日) Shō-mi-shū. (支) Chi-ng-wei-ching. ②四卷 ③宋仙潭彦倫(一建炎四 A. D. 1130) ④(參考) 諸宗章疏錄第二

彭所知論 ①(日) Shō-sho-chi-ron. (支) Chang-so-chi-h-in. ②二卷 ③存

探題故實記 ①一卷 ②存 ③承實記

嘉曆三寫

精義故實條々 ①(日) Shō-gi-ko-jū-jū-jō. ①一卷 ②存 ③等海記 ④康永二寫

精義題者得略判之事 ①(日) Shō-gi-dai-sha-toku-yaku-han-no-koto. ①一卷 ②存 ③定珍記 ④文錄四寫 ⑤(眞如藏)

精勤四念處經 ①(日) Shō-gō-nen-jo-kyō. (支) Ching-chin-ssu-nien-chi-ting. ①一卷 ②失譯 ③維阿含經第二十九卷の抄出。 ④(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

精齋翁病床慰問之記 ①(日) Shō-sai-ō-hyō-shō-in-nō-no-ki. ①存 ②東陽圓月(文政元—明治三五 A. D. 1818—1902)記 ③明治二九刊 ④(龍大、一二二四・六〇)

精舍興立用意抄 ①(日) Shō-jakō-ryū-yō-i-shō. (支) Ch'eng-yang-chu-fō-kuang-tē-ching. 稱揚功德經 ②一卷 ③失譯 ④(參考) 出三藏記第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

稱揚百七十佛名經 ①(日) Shō-yō-hyaku-shichi-ju-butsumi-nyō-kyō. (支) Ch'eng-yang-par-chi-shi-fo-ming-ching. 百七十佛名經 ①一卷 ②缺 ③後漢代失譯 ④(參考) 出三藏記第四、三寶紀第四、第七、內典錄第一、第三、開元錄第一、第一四、貞元錄第二、第二四

精義古實記 ①(日) Shō-gi-ko-jū-jō. (支) Chang-so-chi-h-in. ②二卷 ③存

精舍興立用意抄 ①(日) Shō-jakō-ryū-yō-i-shō. ①一卷 ②存 ③禪覺述 ④寫本(帝國、二三一・九〇)

精進波羅蜜行要 ①(日) Shō-jin-ha-ra-mitsu-gyō-yō. ①一冊 ②存 ③享保五寫 ④(寶龜院)

精微集 ①(日) Shō-mi-shū. (支) Chi-ng-wei-ching. ②四卷 ③宋仙潭彦倫(一建炎四 A. D. 1130) ④(參考) 諸宗章疏錄第二

彭所知論 ①(日) Shō-sho-chi-ron. (支) Chang-so-chi-h-in. ②二卷 ③存





大正三二・三二六No. 1645、縮藏四、卍三六・一、明北333通、清313通、明南456羅、Nj. 1320、①元代發合思巴造、沙羅巴(開慶元一延祐元 A. D. 1289—1314)譯  
 ①元の帝師發合思巴(所謂八思巴、一二八〇寂)が、上都に於て皇太子の爲に佛教の宇宙觀と人生觀とを説いて、その修道に資せんとしたものである。それをこの法席に侍したる釋教總統佛智大師沙羅巴が譯したものである。惟ふに元の盛時政令二途に出で大元の衰亡を早めたと云はれる所の帝師の應即ち宣政院事廉復が序をなし、後大德十年江西報恩寺講經釋克己が後序を附してゐる。この兩序を見れば、此の論が當時甚だ重視され、非聖者孰能明之と云ふに至つては、八思巴嘗信の程を知るべきであらう。

本論は上下二卷に分ち、器世界品第一、情世界品第二、道法品第三、果法品第四、無爲法品第五となす。

器世界品に於いては宇宙の體を地水火風の四大となし、その最極微を極微塵又は隣虛塵と名け、この極微塵の七の十二剩倍を以て漸く一指節大となすのである。故に單位として佛教の無限大軍を測つてゐるのである。かくて順次に四大州七大海より日月星辰三千大千世界の構成を方に在る世界として説くのである。情世界に於ては地獄、餓鬼、傍生、人、非天、天の六種について述べ、無間大城より非想非非想處に至るまでその叙景細密を極むるものがある。更に五法五蘊十二處十八界等について綿密なる

法數を述べ、道法品に於ては四諦八聖道を説き、果法品に「爲自解脫輪迴發心」として三十七品菩提分法を明し、最後に無爲法品に來りて、簡單に虛空、擇滅、非擇滅の三無爲を説いて終つてゐる。(稻葉文海)

**請雨記** ①(D) Sho-u-ki. ②一軸 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶菩提院)

**請雨經** ①(D) Sho-u-kyō. (支) Chi-ng-yü-ching. 大雲輪請雨經 ②二卷 ③存、大正一九四八No. 989、縮開六、卍一五・九、北1367悅、南1371時、元1360時、明北965清、清965清、麗320時、天1351時、法1084府、至247頁、明北965清、Nj. 970 ④唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)譯 ⑤大雲輪請雨經の下を見よ。

**請雨經** ①(D) Sho-u-kyō. (支) Chi-ng-yü-ching. 大雲輪請雨經 ②二卷 ③存、大正一九四九No. 991、縮成六、卍一〇・三、北168五、南167五、元164五、明北184毅、清184毅、麗167大、天167五、指156大、法164四、至245頁、明南177傷、Nj. 188 ④那連提耶舍(天監一六—開皇九 A. D. 517—589)譯 ⑤大雲輪請雨經の下を見よ。

**請雨經** ①(D) Sho-u-kyō. ②二卷 ③存、大日本佛教全書第四六覺禪抄之内 ④覺禪(—建曆二 A. D. 1212—)撰

**請雨經** ①(D) Sho-u-kyō. ①道鏡(治承二—建長四 A. D. 1178—1232) ②【參考】諸宗章疏錄第三

**請雨經祈雨龍王降雨壇法** ①(D) Sho-u-kyō-tai-u-yü-ō-kō-u-dan-bo. (支) Chi-ng-yü-ching-chi-i-yü-lung-

wang-chiang-yü-tan-fa. ②一帖 ③存 ④唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)譯 ⑤永德二寫 ⑥(寶菩提院)

**請雨經止風雨** ①(D) Sho-u-kyō-shi-fū-ū. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第四六覺禪抄之内 ④覺禪(—建曆二 A. D. 1212—)撰

**請雨經法** ①(D) Sho-u-kyō-hō. ②一帖 ③存 ④類聚嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304) ⑤貞享四寫 ⑥(寶龜院)

**請雨經法** ①(D) Sho-u-kyō-hō. 請雨經法實賢方 ②一帖 ③存 ④貞和二寫 ⑤(高大寄・一・六六)

**請雨經法及表白** ①(D) Sho-u-kyō-hō-ōyōbi-kyō-byaku. ②二帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

**請雨經法雜事** ①(D) Sho-u-kyō-hō-zō-ji. ②一帖 ③存 ④鎌倉時代寫 ⑤(寶菩提院)

**請雨經法事** ①(D) Sho-u-kyō-hō-no-kōto. ②一紙 ③存 ④南北朝時代寫 ⑤(寶菩提院)

**請雨經法目錄** ①(D) Sho-u-kyō-hō-moku-i-roku. ③存 ④寫本(寶龜院)

**請雨孔雀六字法等** ①(D) Sho-u-ku-kō-ji-roku-ji-hō-ō. ②一葉 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

**請雨供** ①(D) Sho-u-ku. ②一帖 ③存 ④寛文一〇寫 ⑤(京大・一・二六・小別)

**請雨決** ①(D) Sho-u-ke-tsu. 十諸決、十條記 ②一卷 ④安然(承和八—延喜年

間 A. D. 841—901—)撰 ⑤【參考】山家祖德撰述篇日集卷上、本朝台撰撰述密部書目、諸宗章疏錄第二、密乘撰述目錄

**請雨止雨神呪經** ①(D) Sho-u-shi-jū-ji-kyō. (支) Chi-ng-yü-chih-yü-shen-chou-ching. ②一卷 ③【參考】法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三

**請雨借屋作法** ①(D) Sho-u-shaku-oku-sai-hō. ②二紙 ③存 ④南北朝時代寫 ⑤(寶菩提院)

**請雨呪經** ①(D) Sho-u-ju-kyō. (支) Chi-ng-yü-chou-ching. ②一卷 ③缺 ④東晉竺曇無蘭(—太元六一〇 A. D. 381—395—)譯 ⑤【參考】開元錄第一四、貞元錄第二四

**請雨祕傳等略記** ①(D) Sho-u-hi-ten-bō-ryak-ki. ③存 ④寫本(寶龜院)

**請雨法** ①(D) Sho-u-hō. 請雨法三寶院流 ②一軸 ③存 ④仁海(天曆五—永承元 A. D. 981—1046)記、證道(寶治元—曆應二 A. D. 1247—1339)筆記 ⑤寫本(高大寄・一・六〇)

**請觀音** ①(D) Sho-kuann-on. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第三八阿婆縛抄之内 ④承澄(元久二—弘安五 A. D. 1205—1282)撰

**請觀音經** ①(D) Sho-kuann-on-kyō. (支) Chi-ng-kuann-yin-ching. 請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經、消伏毒害陀羅尼經 ②一卷 ③存、大正二〇・三四 No. 1043、縮成一〇、卍一〇・一〇、北354過、南357過、元362過、明北322能、清322能、

名所行發 ⑩ (名庫書) 著所現 ⑨ 月年の刊載 ⑧ (書考參書釋註) 書末 ⑦ 説解存内 ⑥ 代年作者 ⑤ 著者 ④ 缺存 ③ 數卷 ② (名書) 名題 ① 號略字數



應33知、天33過、指33知、法33男、至614慶、明南33莫、N. 336 ④東晋代竺難提譯 ⑤請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經の下を見よ。 ⑦【参考】傳教大師將來台州録、淨土依憑經論章疏目錄

請觀音經三昧儀註解 ①(日) Sho-kwan-on-gyō-sam-mai-gi-chū-ge. 觀音儀法註解 ②二卷 ③存 ④石梯道雲述 延寶九刊 ⑤龍大(二四一三・三九)(谷大、餘大・二五六)

請觀音經釋消伏三用 ①(日) Sho-kwan-on-gyō-shakuhō-juku-san-yō. (支) Ching-kuan-yin-ching-shih-hsiao-fu-san-yung. ②一卷 ③宋知禮(建隆元

一天聖六 A. D. 966—1028)述 ⑦【参考】新編諸宗教藏總錄第一

請觀音經疏 ①(日) Sho-kwan-on-gyō-sho. (支) Ching-kuan-yin-ching-su ②一卷或三卷 ③存、大正三九・九六八No. 1807 縮呂七、E. 三三・四、明北1555法、清510伊、明南1516煩、N. 1562 ④隋智

願說灌頂(一開皇一七A. D. 598)記 ⑤本書は先づ經題を、五重玄義を以つて略釋し、次に經文を分科して經文を一々解釋し、四教三觀に約し觀音の六字章句陀羅尼の體用を通釋別釋したもの。釋題では人名立題なりといひ、又能所の感應ともいふ。詩は能感の群機、觀世音は能應の聖主、消伏毒害は力用、陀羅尼は正體。故に諸觀世音が人、消伏毒害陀羅尼は法。此の故に本經題は人法立題である。經體は靈知寂照の法身。經宗は感應。經用は救危拔苦。教相は

大乘。この中、趙宋天台に至つて問題を起したものは消伏毒害の原理としていふ「毒害は理性の毒である」といふのに基いて性毒本具の理論を四明が述べたからである。修徳の善惡は斷滅し得るが性徳の善惡は本具であるといふ哲理は重大なる影響を佛教教義に及ぼした。その根源が本書であることに注意すべきである。本書を物語にしたのは善光寺緣起である。

【参考】淨土依憑經論章疏目錄、東域傳燈目錄上、傳教大師將來台州録、新編諸宗教藏總錄第一 ⑥刊本(哲、④・中・一)

請觀音經疏開義鈔 ①(日) Sho-kwan-on-gyō-sho-ken-gi-shō. (支) Ching-kuan-yin-ching-su-shan-i-chiao. ②四卷或三卷 ③存、大正三九・九七七No. 1801 縮呂七、E. 三三・四、明北1555法、

明南1517煩、N. 1563 ④智圓述 ⑤宋大中祥符二(A. D. 1009)

⑥智圓の序に「天台大師の請觀音經疏を古來の人師で講贊演述したことを聞かなす。それ故傳授も行はない。又疏の名すら識らない者、未だ疏を見ない者がある。遺憾のことである。今吾は病疾に悩みつゝあるが、後世に傳へたいばかりに本鈔を録した。本鈔は天台大師の疏の主旨を明らかにし、童蒙を開發しようがため記したものである。此故に「開義」と題名を附したのである」と記す。本書述作の由來がこれによつて明瞭に知れる。

⑦延寶五刊(立大、A. 二・一四二)貞享四刊(龍大、二四一三・四〇)、寫本(立大、A. 二・一四三)哲、⑤・右・三)刊本(谷大、餘大・二七八四) (田島德音)

請觀音經懺儀 ①(日) Sho-kwan-on-gyō-sen-gi. (支) Ching-kuan-yin-ching-kan-i. ②一卷 ③宋遺式(乾道元—明道元 A. D. 963—1032)述 ⑦【参考】新編諸宗教藏總錄第一、諸宗章經錄第二

請觀音三昧行法 ①(日) Sho-kwan-on-zan-mai-gyō-hō. (支) Ching-kuan-yin-san-mei-hsing-fa. ②一卷 ④隋灌頂(天嘉二—貞觀六 A. D. 561—632)記 ⑦【参考】傳教大師將來台州録

請觀音懺法私記 ①(日) Sho-kwan-on-on-sen-bō-shi-ki. ②一卷 ③存 ④宗淵記 ⑤弘化三刊 ⑥(十妙院)

請觀世音經 ①(日) Sho-kwan-ze-on-gyō. (支) Ching-kuan-shih-yin-ching. ②一卷 ③缺 ④姚秦鳩摩羅什(建元二—義熙九 A. D. 344—413)說弘始二或義熙中(寂) ⑥第一譯 ⑦【参考】貞元錄第二四

請觀世音經 ①(日) Sho-kwan-ze-on-gyō. (支) Ching-kuan-shih-yin-ching. ②一卷 ③缺 ④失譯 ⑦【参考】出三藏記第四

請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼三昧儀 ①(日) Sho-kwan-ze-on-do-satsu-sho-doku-doku-gai-da-ra-ni-sam-mai-gi. (支) Ching-kuan-yin-p'u-sa-i-hsiao-fu-tai-to-lo-ni-san-mei-i. ②一卷 ③存、大正四六・九六八No. 1919 縮成一四、E. 三〇・八、明北1536輪、清1575馳、明南1493寶、N. 1515 ④遺式集

⑤本書は請觀音經の所説と國清百録の請觀世音懺法とにより兼ねて摩訶止觀の四種三昧、請觀音經疏、法花三昧儀等を参照して録した懺儀である。本書は先づ緣起を叙して四回改訂したといひ、次に本懺儀の正意を明し、十科の事行を立つ、第一莊嚴道場、第二禮法、第三燒香散花、第四繫念數息、第五召請、第六具楊枝淨水、第七誦三呪、第八披陳懺悔、第九禮拜、第十誦經である。次は勸修に於て流布勸進回向を述べらる。

請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經 ①(日) Sho-kwan-ze-on-bi-ssō-tsu-shō-doku-doku-gai-da-ra-ni-p'u-kyō. (支) Ching-kuan-shih-yin-p'u-satsu-hsiao-fu-tai-to-lo-ni-chou-ching. 請觀世音消伏毒害陀羅尼經 請觀世音經、消伏毒害經、消伏毒害陀羅尼呪經 ②一卷 ③存、大正二〇・三四No. 1043 縮成一〇、E. 一〇・一〇、北335過、南337過、元362過、明北322能、清322能、麗334知、天362過、指335知、法347男、至614慶、明南345莫、N. 336 ④東晋代竺難提譯

⑤諸種の疫病を除滅せんとする時、誦する經である。其所説の内容は、佛一時毘舍離(Vaisali)國菴羅林園(Amaravani)に在つた時、月蓋長者、佛所に來て、此の國中の人民、大惡病に遇ふて惱まされてゐることを甚しく良醫者婆(Grā)なら其の醫術を盡すも、能く救ふ能はざるを陳へ、之が救済を世尊に請ふた時に、佛は長者に西

請



方無量壽佛、及び觀世音、勢至の二菩薩を請すべきを諭され、長者は佛命の如くせしに、忽にして彼の佛及び二菩薩は、神力を以て、俱に此の國に來至せられた。爾の時、毘舍離の國人は、揚杖及び淨水を觀世音に上るに、觀世音は此の衆生を憐愍救護して、三寶及び自己の名號を稱すべきを教へ、更に十方諸佛救護衆生神咒を説き、此の咒を誦持する者は、一切の疫病を免るを得ることを示された。そこで國人は説の如く行ぜしに我等は皆な本復すと經に説かれてある。更に又觀世音は佛の求めに依て、破惡業障消伏毒害陀羅を説き、次に此の陀羅尼及び觀世音菩薩の名號を稱する者の功德を敘述し、又大吉祥六字章句救苦神呪及び其の功德を示し、最後に灌頂吉祥陀羅尼を出し、舍利非(Kārintra)に對し、其の呪の因緣並に功德を説かれた。蓋し本經は古くから天台宗に於て重ぜられ、支那に於ては、觀世音菩薩を請じて、自らの罪を懺悔する所の觀音懺法に本經を用ひ、隋の智顛は之が疏一卷を撰し、又摩訶止觀第二上同輔行傳弘決第二三三、及び國清百錄第一等には、觀音懺法のことを説き、又宋遺式は請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼三昧儀を撰して、其の行法を説いてある。又本邦にては請觀音法と稱し、諸の疫病を除滅する秘法として傳へ、長安の四十帖決第七には、其の行法を詳説し、更に阿婆彌抄請觀音法之卷には、雙嚴房と朝範律師の二傳を載せてある。蓋し此の法は保元元年、夏天下疫流行の時に、初めて常寂庵契中が、

國の爲に修したのを先蹤として、以來台密穴大流に之を傳へてある。

⑦〔參考〕 出三藏記第四、法經錄第一、彥琮錄第一、三寶紀第七、開元錄第三、寫本(京大、藏・一六三・一五) (神林隆淨) **請賢聖儀文並諸雜讚** ①(日) Sho-ken-shō-gi-mon-narabishi-shō-zas-san. (支) Ching-ksien-sheng-t'wen & chu-tsa-tsan. ②一卷 ⑦〔參考〕 入唐新求聖教目錄

**請金剛呪經** ①(日) Sho-kan-gō-ju-kyō. (支) Ching-kin-kang-chou-ching. ②一卷 ⑦〔參考〕 法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第一 **請四十二賢聖儀** ①(日) Sho-shi-ta-ni-gen-jō-gi. (支) Ching-sai-shih-erh-hsien-shang-i. 聖四十二賢聖儀 ②一卷 ⑦〔參考〕 諸宗章疏錄第一

**請授法書簡** ①(日) Sho-ju-hō-shō-kan. ③存、興教大師全集之内 ①上人求法の志願の切なることは、傳法の大阿闍梨耶に呈する此の一書に依て充分窺ひ知ることが出来る。上人は十八歳の時に十八道の法を修し、十九歳にし兩部の法を修し、二十二歳の春から二十七歳の秋に至るまでに、許可灌頂職位に預ること再三、傳法灌頂を受けること八度とあるから、上人が三密妙行を修し、即身成佛の一路に如何に邁進せられたかを知ることが出来る。今の求法の歎願書は保安四年九月二十七日に草せられたものであるから、上人の二十

九歳の時で有つたことが想像されるが、何の法を志願して居られたのか、その大阿闍梨耶は誰れで有るかが今詳かでない。保安二年九月二十一日に二十七歳にして、仁和寺成就院に於て、寬助大僧正に隨て、兩部の灌頂を受け、同年十月に醍醐の理性房賢覺阿闍梨に謁して五部の灌頂を受けて居られるから、恐らく同阿闍梨耶に呈して、未受の大法傳受を懇請された書簡では無からうかと思はれる。

**請十大德書** ①(日) Sho-ju-tai-toku-shō. ③存、傳教大師全集第四 ⑤延曆二〇(A. D. 801) ①本書は最澄が延曆二十年十一月天台大師祥月忌に際し南都の勝猷、奉基、龍忍、賢玉、茂光、光證、觀敏、慈誥、安福、玄耀の十大德を請して法華十講法會を催した時の書翰である。この十講法會は延曆十七年十一月に初め、年々無闕に修したものである。(田島德普)

**請聖僧浴文** ①(日) Sho-shō-kyō=kan-mon. (支) Ching-sheng-seng-yü-wen. ②一卷 ③缺 ④宋僧伽跋摩(元嘉一〇一九A. D. 433—432) ⑦〔參考〕 開元錄第一五、貞元錄第二五 **請々經** ①(日) Sho-shō-kyō. (支) Ching-ching-ching. (日) S. 87 Pavitrāṇā ③存、中阿含經第二九(大正一・六一〇No. 26. 121)

**請定張文** ①(日) Sho-jiō-chō-mon. ②一巻 ③存 ④寫本(寶龜院) **請定文書類** ①(日) Sho-jiō-mon-shō-

③. ②一括 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶菩提院) **請訂非知朱紫錄** ①(日) Sho-toku-hō-chi-shū-shi-kyō. ②一卷 ③存 ④仰誓 ⑤領解明信辨を破したるもの ⑥寫本(龍大、一七九九・二四)

**請天龍偈** ①(日) Sho-ten-ryū-gō. (支) Ching-tien-tung-chieh. ②一卷 ⑦〔參考〕 書寫請來法門等目錄 **請入唐請益表** ①(日) Sho-n'yū-tō-shō-yaku hyō. ③存、傳教大師全集第四 ④最澄(神護景雲元一弘仁一三A. D. 767—823)撰 ⑤延曆二十一年八月、傳教大師最澄は高雄山で法花を講じ、九月上表して入唐求法を請ふたと別傳に記してある。此時の表文が本書である。本文文で見ると三論法相は論を所依として立宗してゐて經を所依としてゐない。天台宗は經を所依として立つ。論は末であり經は本である。上に背いて下に向ふようなものである。故に根本の經宗を傳へたいといひ、法花の深旨を悉知せんことを願つてゐる。(田島德普)

**請般若比丘經** ①(日) Sho-han-dō=ku-pan-chi-kyō. (支) Ching-pan-t'ie-pi-chin-ching. ②一卷 ③缺 ④宋求那跋陀羅(大元一九一泰始四A. D. 391—468)譯 ⑦〔參考〕 出三藏記第四、開元錄第一五、貞元錄第二五 **請寶頭盧經** ①(日) Sho-bin-zu-ryū-kyō. (支) Ching-pin-t'au-ryū-ching. ②一卷 ③缺 ④後漢安世高(一建和一一建寧

九歳の時で有つたことが想像されるが、何の法を志願して居られたのか、その大阿闍梨耶は誰れで有るかが今詳かでない。保安二年九月二十一日に二十七歳にして、仁和寺成就院に於て、寬助大僧正に隨て、兩部の灌頂を受け、同年十月に醍醐の理性房賢覺阿闍梨に謁して五部の灌頂を受けて居られるから、恐らく同阿闍梨耶に呈して、未受の大法傳受を懇請された書簡では無からうかと思はれる。

**請十大德書** ①(日) Sho-ju-tai-toku-shō. ③存、傳教大師全集第四 ⑤延曆二〇(A. D. 801) ①本書は最澄が延曆二十年十一月天台大師祥月忌に際し南都の勝猷、奉基、龍忍、賢玉、茂光、光證、觀敏、慈誥、安福、玄耀の十大德を請して法華十講法會を催した時の書翰である。この十講法會は延曆十七年十一月に初め、年々無闕に修したものである。(田島德普)

**請聖僧浴文** ①(日) Sho-shō-kyō=kan-mon. (支) Ching-sheng-seng-yü-wen. ②一卷 ③缺 ④宋僧伽跋摩(元嘉一〇一九A. D. 433—432) ⑦〔參考〕 開元錄第一五、貞元錄第二五 **請々經** ①(日) Sho-shō-kyō. (支) Ching-ching-ching. (日) S. 87 Pavitrāṇā ③存、中阿含經第二九(大正一・六一〇No. 26. 121)

**請定張文** ①(日) Sho-jiō-chō-mon. ②一巻 ③存 ④寫本(寶龜院) **請定文書類** ①(日) Sho-jiō-mon-shō-

③. ②一括 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶菩提院) **請訂非知朱紫錄** ①(日) Sho-toku-hō-chi-shū-shi-kyō. ②一卷 ③存 ④仰誓 ⑤領解明信辨を破したるもの ⑥寫本(龍大、一七九九・二四)

**請天龍偈** ①(日) Sho-ten-ryū-gō. (支) Ching-tien-tung-chieh. ②一卷 ⑦〔參考〕 書寫請來法門等目錄 **請入唐請益表** ①(日) Sho-n'yū-tō-shō-yaku hyō. ③存、傳教大師全集第四 ④最澄(神護景雲元一弘仁一三A. D. 767—823)撰 ⑤延曆二十一年八月、傳教大師最澄は高雄山で法花を講じ、九月上表して入唐求法を請ふたと別傳に記してある。此時の表文が本書である。本文文で見ると三論法相は論を所依として立宗してゐて經を所依としてゐない。天台宗は經を所依として立つ。論は末であり經は本である。上に背いて下に向ふようなものである。故に根本の經宗を傳へたいといひ、法花の深旨を悉知せんことを願つてゐる。(田島德普)

**請般若比丘經** ①(日) Sho-han-dō=ku-pan-chi-kyō. (支) Ching-pan-t'ie-pi-chin-ching. ②一卷 ③缺 ④宋求那跋陀羅(大元一九一泰始四A. D. 391—468)譯 ⑦〔參考〕 出三藏記第四、開元錄第一五、貞元錄第二五 **請寶頭盧經** ①(日) Sho-bin-zu-ryū-kyō. (支) Ching-pin-t'au-ryū-ching. ②一卷 ③缺 ④後漢安世高(一建和一一建寧

名所行發⑩(名庫書)者藏所現⑪ 月年の刊寫⑫(書考參書釋註)書末⑬ 説解容内⑭ 代年作著⑮ 者著⑯ 缺存⑰ 數卷⑱(名書)名題⑲ 號略字數

三A. D. 148—170—譯 ⑦(參考) 出三藏記第四、開元錄第一五、貞元錄第二五

請實頭盧法

①(日)Shō-hin-an-tsu-hō(支)Ching-pin-tou-tai-fa 請實頭盧法

經、請實頭盧經 ②一卷 ③存、大正三二・七八四No. 1689、縮藏八、E二六・七、北

1043畫、南1055畫、元1055畫、明北1341

畫、清3341畫、麗1049畫、天1043畫、法

1032畫、至1493櫃、明南1136畫、Nj. 1348

④劉床慧簡(大明元A. D. 457—)譯

⑤國王又は長者が一切會を設くる際に、末

法四部衆の福田たる實頭盧尊者を請待する

法を記したるもの。南天竺摩梨山に向つて

至心にその名を稱へ、願受我請、於此處食

の文を唱へる。更に屋舍を新築した際、又

は衆僧に澡浴を供養する際にもこの尊者を

請する文を擧ぐ。近世、一長者が尊者を請

し、毘藍の下に華を布き、その萎むと否

とで受請の實を驗しやうとした。そして三

度とも華が萎んだので誠意の足らぬを憤謝

してゐたが、偶、第三度の時、一上座の老

僧が、請招こよつて門に入らうとするも、

奴の迫害のために入ることが出来ないと

言ひ已つて見えなくなつた、これが尊者であ

つたことを知り、それから門を遮止せぬや

うにした。尊者が大會の食堂に受請する時

は、僧形を現じて上坐に在ることもあり、

また中坐下坐に在ることもあるといふ。

實頭盧尊者は、神通を亂現して佛の呵責を

受け、涅槃に入らずして、永く摩梨山に

住して衆生を教化すべき命を蒙つたことが

實頭盧突羅闍爲優陀延王說法經に見えてゐ

るが、本書はこれに關係あるもの、如く、

後に食堂にその形像を安置することは、本

書の初部の意から導かれたものでは無から

うか。本書は現藏には宋慧簡譯となつてゐ

るが、これは内典錄第四が始めで、開元錄

第五、貞元錄第八已下繼承したものであ

る。然るに法經錄第六は後漢安世高の譯と

し、彦棕錄二、靜泰錄第三、内典錄第一、

武周錄第十、開元錄第一、貞元錄第二は皆

それを受けてゐる。但し譯語から見て後漢

のものとは思はれぬから、現藏を正しとす

べきであらう。出三藏記集第二の安世高の

譯にも本書を列ねて居らぬ。なほ法經錄第

六はこれを西方諸聖賢所撰集に編入した。

⑦(參考) 大唐内典錄第一、第四、武周錄

第一〇、開元錄第一、第五、貞元錄第二、

第八 (大野法道)

請菩薩出家表

①(日)Shō-do-satsu-shuk-ke hyō ③存、日本大藏經天台宗

頭教章疏第一、傳教大師全集第四 ④最澄

(神護景雲元—弘仁一三A. D. 767—822)

⑤本書は一心戒文上の承先師命、建大乗

寺文の中にも引用されて居る文で、一心戒

文を讀むと此の表文を奏した前後の事情

が明了になる。弘仁九年五月十三日六條式

を奉つた所僧綱護命等が大乗寺は天竺、大

唐にもないし亦日本にもないに反對した。

この事を聞いて本表文を奉つたのである。

「山家學生式・顯戒論」の項参照。(田島德音)

請明王祕要

①(日)Shō-myō-hi-yō ②二帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶

龜院)

請文

①(日)Shō-mon(支)Ching-wei ②一卷 ③存 ⑦(參考) 朝鮮佛教

總書刊行豫定書目

請誦遺疑辨

①(日)Shō-yū-ken-i-ben ②一卷 ③存 ④正運(寬延二—天保

元A. D. 1749—1830)述 ⑤寫本(龍大、一七

五・五一)

請來錄傳授記

①(日)Shō-rui-to=ku-den-jū-ki ②一卷 ④快全(應永三

A. D. 1422) ⑤有快の口決を記す ⑦(參

考) 諸宗章疏錄第三

請立大乘戒表

①(日)Shō-rya-i-hi-yō ③存、傳教大師全集第四 ④

最澄(神護景雲元—弘仁一三A. D. 767—

822)撰 ⑤弘仁一〇(A. D. 819)

⑥傳教大師別傳の弘仁十年三月十五日の條

にある文が本表文である。この表文を捧げ

る事情は同九年の暮春に最澄は諸弟子に對

して天台宗の元由を述べ、山修山學を力説

し、小乗の戒儀を捨離して菩薩の三聚淨戒

を受持すべしと宣言したことから起る。此

の小戒棄捨の宣言は實に叡山戒壇の獨立で

あり、日本支那印度の三國に未だ聞かざる

佛教々國の本質的改革の叫びである。この

宣言を具體化せんとしたものが今の表文で

ある。(田島德音)

銷釋金剛經科儀

①(日)Shō-shū-kin-gō-kyō-kei ②一卷 ③存

④宗鏡述

⑤本書は「銷釋金剛經科儀會要註解」の「科

儀」である。已續編輯者は「科儀會要註解」

に本書の全文を収めてあるから掲載を略し

たといつてゐる。故に書目は記されてゐる

が已續に載つてゐない。(田島德音)

銷釋金剛經科儀會要註解

①(日)Shō-shū-kin-gō-kyō-kei-hui-yō ②一卷 ③存 ④宗鏡述、明覺連重集

⑤本書は宋の宗鏡が金剛經を梁の昭明太子

の分科した三十二分法によつて偈頌を作り

經文を精細に解釋し「科儀」と名づけた。そ

して七章に分つて經の旨趣を明らかに説明

した。七章とは一、提綱。二、要旨。三、

長行。四、結類。五、頌經文。六、警世。

七、結歸淨土である。「會要註解」とは無盡

大師傳燈が蘇州に旅行した時に處士許公敬

愚が科儀註頌を刊行しようとして發願してこ

の事を傳燈に語つた。傳燈はこの企てを聞

いて云ふ。京都の善果寺達法師がこの書に

集註を作つてゐる。又其の弟子普恩寺桂法

師は集註に末註を作り説註と名づけてゐ

る。此れ等を重集して流行すべきであらう

と云ふので、後に上京して覺連に重集する

ように依頼した。覺連が重集したものが本

書である。本書は目決によれば十冊であつ

たが現存本は第十巻を略したと第九巻の末

尾に記してある。本書は禪學の宗義に基

いて説明してある。

⑥寫本(京大、藏・五・〇・一) (田島德音)

衝天和尙遺錄

①(日)Shō-ten-ō-ryō ②一卷 ③存 ④衝天元統語

Shō-ten-ō-ryō ⑤存

⑥寫本(京大、藏・五・〇・一) (田島德音)

衝天和尙遺錄

①(日)Shō-ten-ō-ryō ②一卷 ③存 ④衝天元統語

Shō-ten-ō-ryō ⑤存

⑥寫本(京大、藏・五・〇・一) (田島德音)

衝天和尙遺錄

①(日)Shō-ten-ō-ryō ②一卷 ③存 ④衝天元統語

Shō-ten-ō-ryō ⑤存

⑥寫本(京大、藏・五・〇・一) (田島德音)

衝天和尙遺錄

①(日)Shō-ten-ō-ryō ②一卷 ③存 ④衝天元統語

Shō-ten-ō-ryō ⑤存

⑥寫本(京大、藏・五・〇・一) (田島德音)

衝天和尙遺錄

①(日)Shō-ten-ō-ryō ②一卷 ③存 ④衝天元統語

Shō-ten-ō-ryō ⑤存

⑥寫本(京大、藏・五・〇・一) (田島德音)

衝天和尙遺錄

①(日)Shō-ten-ō-ryō ②一卷 ③存 ④衝天元統語

Shō-ten-ō-ryō ⑤存

⑥寫本(京大、藏・五・〇・一) (田島德音)

衝天和尙遺錄

①(日)Shō-ten-ō-ryō ②一卷 ③存 ④衝天元統語

Shō-ten-ō-ryō ⑤存

⑥寫本(京大、藏・五・〇・一) (田島德音)

⑦(参考) 禪籍目録

樟葉道心因語録

①(日)Sho-yo-do-shin-in-go-roku. ②二卷 ③存 ④南溟述 ⑤刊本(高大、奇、一・二四)

蕭鳴草

①(日)Sho-hei-so(支)Hsiao-min-sa-ao. ②一卷 ③存 ④清臣亭撰 ⑤寫本(京大、藏・二四シ・六九)

蕉雨稿

①(日)Sho-u-ka. ②桃源瑞仙 ③(参考) 禪籍目録

蕉雨餘滴

①(日)Sho-u-yo-teki. ②存 ③智雄(一韓) ④東坡詩抄、四河入海を収む ⑦(参考) 日本禪林撰述書目、禪籍目録

蕉堅稿

①(日)Sho-ken-ko. ②二卷 ③存、五山文學全集第二 ④絶海中津(延元元一應永二一A.D.1336—1405)撰、鄂隱慧叢編

五山詩僧中、義堂周信と並び稱せられた絶海中津和尚の詩文集である。編者は南遊稿の著者である相國寺十九世天龍寺六十一世鄂隱慧叢和尚である。絶海は蕉堅道人と號し天龍寺開山夢窓疎石禪師に嗣ぎ義堂と法眷である。應安元年(明洪武元年)三十三歳の時、汝霖良佐等と共に入明し、杭州中竺の季潭宗泐(號全室)禪師に依り、全室に就て修學辨道し、歸朝後、赤松義則、細川頼之、足利義滿等の歸依を受け、三たび相國寺に住し、應永十二年(A.D.1405)四月五日壽七十、臘五十六にて示寂した。本書は、門人等聞和尚が絶海に侍して此の入明當時よりの詩文を編録して一帙と爲し、蕉堅稿と題して、明永樂元年十一月既望

(應永十年、絶海六十八歳)時の僧録司左善世たる恭清道行禪師の序、並に同年十二月天竺如蘭和尚の跋を得て行つたものである。道行は、絶海の詩を以て詩禪一味の立場に在るものとして、晋の湯休、唐の靈徹皎然道標齊己、宋の惠勤道潜等と雖も及ぶ能はずと推賞し、如蘭は、中國の老文學の士と雖も是に過ぎず且つ日東語言の氣習無く深く全室の所傳を得たりと絶賞して居るもの、必ずしも過賞ではなす。今其の内容を見るに、卷首に道行の序を收め、(一)五言律詩には、眞寂竹菴、老謬懷渭、蒲菴來復等の韻に和したるもの。(二)七言律には、錢塘懷古次韻、中竺の全室和尚への賦詩等を收め。(三)五言絶句には、雲間の口賦等十餘首。(四)七言絶句には、明の太祖帝の御製に和する詩など數十首。(五)疏には、寧一菴、應無方、元章周栢、汝霖良佐等の住山に際しての諸山疏十三篇。(六)序には、全牛、西胤、玄極、竹隱等に關するもの。(七)書には、物先、光祿相公、義堂、元章、久菴、椿庭、古劍等に早する書九篇。(八)説には、類雲の説など五。(九)銘には、豐州羅漢寺舍利銘。(一〇)祭文には、亮聲遠、壽天錫、智泉禪師等を祭る文三篇を收め、卷末に如蘭の跋を收めたものである。

⑦(参考) 日本禪林撰述書目、扶桑禪林書目

蕉窓漫筆

①(日)Sho-san-man-pian. ②三卷 ③存 ④沖默羨海記 ⑤明和四刊 ⑥(谷大、餘大・二四六)(正大、一〇九・一一)

樵隱和尚語録

①(日)Sho-in-o-sho-go-roku. (支) Chiao-yin-ho-shang-ya. ②二卷 ③存、正定編 ④寫本(京大、藏・一七シ・一六)

樵隱悟逸禪師語録

①(日)Sho-in-go-rin-zen-ji-go-roku. (支) Chiao-yin-wu-ich-an-shi-ya-in. 樵隱和尚語録 ②二卷 ③存、正定編 ④寫本(京大、藏・一七シ・一六)

燒八千枚次第

①(日)Sho-has-sem-mai. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

燒八千枚中流

①(日)Sho-has-sem-mai. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

燒八千枚作法

①(日)Sho-has-sem-mai-sa-ho. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

燒八千枚中流

①(日)Sho-has-sem-mai. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

燒八千枚作法

①(日)Sho-has-sem-mai-sa-ho. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

燒八千枚中流

①(日)Sho-has-sem-mai. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

燒八千枚作法

①(日)Sho-has-sem-mai-sa-ho. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

燒八千枚中流

①(日)Sho-has-sem-mai. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

①(支)Sho-hsiang-chou-yin-ching. ②一卷 ③疑偽經 ⑦(参考)出三藏記第五、内典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄卷二八

燒八千枚

①(日)Sho-has-sem-mai. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

燒八千枚中流

①(日)Sho-has-sem-mai. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

燒八千枚作法

①(日)Sho-has-sem-mai-sa-ho. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

燒八千枚中流

①(日)Sho-has-sem-mai. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

燒八千枚作法

①(日)Sho-has-sem-mai-sa-ho. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

燒八千枚中流

①(日)Sho-has-sem-mai. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

燒八千枚作法

①(日)Sho-has-sem-mai-sa-ho. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

燒八千枚中流

①(日)Sho-has-sem-mai. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

燒八千枚作法

①(日)Sho-has-sem-mai-sa-ho. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

燒八千枚中流

①(日)Sho-has-sem-mai. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

燒八千枚作法

①(日)Sho-has-sem-mai-sa-ho. ②一冊 ③存 ④實雅口、圓廣、知脫記 ⑤寛政二寫 ⑥(高大、奇・一・六五)

名所行發⑩(名東書)者藏所現⑪月年の刊載⑫(書考)書釋註⑬書未⑭説解存内⑮代年作著⑯著著⑰缺存⑱數卷⑲(名書)名題⑳號略字數



聲字義論義

①(日) Sho-jū-ron 一冊 ②存 ③文安四寫 ④(寶壽院)

聲字口筆

①(日) Sho-ji-kaku 聲字實相義口筆、聲字義口筆 ②五卷 ③存 ④(寶實記) ⑤元祿七刊 ⑥(京大、日大未、四〇四) ⑦(龍大、二六六一・二二)

聲字實義開秘鈔

①(日) Sho-ji-jisshō 聲字實相義開秘鈔、聲字實相義開秘鈔 ②二卷 ③存 ④(類聚) ⑤(嘉祿二) ⑥(嘉元二 A.D. 1226-1264) ⑦(弘安三刊) ⑧(正大、一四三一・三〇〇) ⑨(龍大、研佛) ⑩(谷大、餘大、一二三八) ⑪(京大、日大未、三九〇) ⑫(立大、A. 二〇・四七) ⑬(高大、一・四二) ⑭(哲、ま・八・右・二九)

聲字實相義

①(日) Sho-ji-jisshō 聲字義、聲字實義 ②一卷 ③存、大正七・四〇一 No. 2429、弘法大師全集第三教相部、十卷章之内 ④(空海) ⑤(寶龜五) ⑥(承和) ⑦(A. D. 774-833) 撰

⑧眞言密教の立脚地から聲字即實相の義を説いた書。眞言宗にては即身成佛義・吽字義と併せて三部の書と稱し、更に菩提心論龍猛作し、般若心經秘鍵各一卷並に祕藏寶輪三卷・辯顯密二教論二卷を加へて十卷章と云ひ、教相學上の重要聖典と崇めてゐる。眞言宗には經典祖章について必ず部帙を判定するが掟であるが、本書は部帙は胎藏部に攝してゐる。又弘法大師は奏請して、承和二年正月二十五日の三業度人の官符に聲明業の人の所學としてこれが勅許を得て

ゐる。製作年代は不明であるが、即身義の後、金剛頂經開題の前の作たることは明である。本書に五大の釋義を即身義にゆづり、金剛頂經開題に此名言等義甚廣無際如聲字義釋とあるが故に明である。

本書の梗概を述べれば、本書は大日經第二具緣品の等正覺眞言の一頌を所依として製作したもので、叙意・釋名體義・問答の三段より成つてゐる。第一の叙意は大意序で、如來の説法は必ず文字に藉る。文字の所在は六塵を體とし、六塵の本は法身佛の三密なり等と説いて、一部教起の由を説き、製作の因由を述べてゐる。第二の釋名體義は更に釋名と體義との二に分ち、釋名の段で題名一々の字の義を釋し、更に六離合釋を用ひて題號の意義を明にしてゐる。次に體義の段では、最初に大日經の文を引證し、等正覺眞言等の偈頌を釋し、次に聲字實相の體義を述べてゐる。第三の問答段は科名のみあつてその釋段が明でない。古來、虛科實科の異論がある。難方は本書を以て未完成本として虛科なりと云ひ、答方は大師自ら奏して三業度人の官符に載せたほどだから、未完本ではないと斷定し、釋名體義の段で釋義が盡きたから別釋せぬまでであると云ふ。

一部所詮の宗趣は、聲字即實相は三密中の語密なる故に語密の實相を明すを宗とし、これによつて三密平等の極處を開示するを趣とするのである。

〔注釋〕禪林寺開書二卷。抄出一卷(道範)。問答一卷。勸文一卷。開秘鈔二卷(類聚、

刊) 愚草三卷(同上)。勘註一卷(果實)。口筆五卷(果實口、賢實記、刊)。鈔三卷(宥快、刊)。祕藏要義一卷(同上)。研心鈔十卷(同上)。攝義鈔二卷(覺眼、刊)。體顯記二卷(普寧、刊)。開書四卷。指要一卷(淨嚴)。開書二卷(觀響)。私記三卷(曇寂)。遊意一卷(無相)。問題一卷(刊)。密藏要義二卷(卓義錄一卷(海運)。講筵三卷(亮海)。講翼二卷(元瑜。開書一卷(宜然)。紀要三卷(周海)。遊意一卷(道應)。續宗義決擇集卷第二(刊)。續々宗義決擇集卷第二(刊)。

〔參考〕諸宗章疏錄第三 ④享保一七刊(谷大、餘大、一四六六) 刊本(正大、一四三一・六五)(京專)(立大、A. 二〇・四五一四六) (長谷實秀)

聲字實相義

①(日) Sho-ji-jisshō 國譯聲字實相義 ③存、國譯密教論釋部第一

聲字實相義開秘鈔

①(日) Sho-ji-jisshō 聲字實相義開秘鈔、聲字實相義開秘鈔 ②二卷 ③存 ④(類聚) ⑤(嘉祿二) ⑥(嘉元二 A.D. 1226-1264) ⑦(弘安三) ⑧(A. D. 1280)

⑨弘安三年五月上旬、高野山傳法院草菴に於て、傳法會談義の序に記したものの。

⑩(龍大、研佛) ⑪(正大、一四三三・一七、七四) ⑫(谷大、餘大、一二三八) ⑬(京大、日大未、三九〇) ⑭(立大、A. 二〇・四七) ⑮(哲、ま・八・右・二九) ⑯(高大、一・四二)

聲字實相義勸註

①(日) Sho-ji-jisshō ②四卷 ③存 ④(果實) ⑤(德治元) ⑥(貞治元 A. D. 1306-1362) 述

元德二(A. D. 1330) ⑦聲字義の本文を一一消釋したもの。⑧寫本(觀智院)

聲字實相義紀要

①(日) Sho-ji-jisshō ②三卷 ③存 ④同海

聲字實相義開書

①(日) Sho-ji-jisshō ②四卷 ③存

聲字實相義開書

①(日) Sho-ji-jisshō ②一卷 ③存 ④宜然述

聲字實相義開書

①(日) Sho-ji-jisshō ②二卷 ③存 ④禪林寺

聲字實相義口筆

①(日) Sho-ji-jisshō ②五卷 ③存 ④(果實) ⑤(德治元) ⑥(貞治元 A. D. 1306-1362) ⑦(賢實) ⑧(正慶二) ⑨(應永五 A. D. 1333-1398) 記

⑩勸學會談義の序に於ける、讀師果實の口筆を抄記したもの。玄談に大意、三業分別、三部書、聲名句文建立、教體、聲論外道所計、題額の七項に分ちて述べて終て本文を詳述してゐる。

元祿七刊

①(京大、日大未、四〇四) ②(龍大、二六六一・二二) ③(觀智院)

聲字實相義愚草

①(日) Sho-ji-jisshō ②二卷 ③存 ④(類聚) ⑤(嘉祿二) ⑥(嘉元二 A. D. 1226-1264)

明應七寫

①(日) Sho-ji-jisshō ②十卷 ③存、十卷章鈔之内

聲字實相義研心鈔

①(日) Sho-ji-jisshō ②十卷 ③存、十卷章鈔之内

⑥聲字義鈔を略鈔といふに對して廣鈔と呼ぶ。玄談に於て所學の分齊、部帙攝屬、製作年代、一部の大綱、題號釋の五項に分ち終て本文を釋す。東密學徒の尊重する註釋書である。

⑦刊本(正大、一四三一・七二)(龍大、二六六一・三)(谷大、餘大・一九六)(京大、日大未・三九八)(京專)(高大、一・四二)(哲、け・一・右・八)

聲字實相義顯體記

①(日)Sho-jis-ji-jis-so-gi-ken-tai. 聲字義顯體記 二卷 ②存 ③普賢(貞享頃A.D.1684-1687)述 ④享保一八刊 ⑤(谷大、餘大・一四四九)

聲字實相義講筵

①(日)Sho-jis-ji-jis-so-gi-ken-ei. ②一卷 ③存 ④海述 ⑤延享二(A.D.1745) ⑥(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

聲字實相義講翼

①(日)Sho-jis-ji-jis-so-gi-ka-yoku. 聲字義講翼 ②二卷 ③存 ④元瑜(寶曆六—文政九 A.D.1756-1826)述 ⑤著者草本(智積院)

聲字實相義撮義鈔

①(日)Sho-jis-ji-jis-so-gi-satsu-gi-sho. 聲字義撮義鈔 十卷 ③存 ④空覺 ⑤刊本(谷大、餘大・一七二五)

聲字實相義私記

①(日)Sho-jis-ji-jis-so-gi-shi-ki. ②三卷 ③存 ④曼叔(延寶二—寛保二A.D.1674-1742)述 ⑤享保一區(A.D.1729)

⑥明核起。解題目。釋本文の三項に分ちて一論を通釋したものである。

寫本(京專)(智積院)

聲字實相義指示

①(日)Sho-jis-ji-jis-so-gi-shi-ji. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院)

聲字實相義輯錄

①(日)Sho-jis-ji-jis-so-gi-shu-roku. ②二卷 ③存 ④連體 ⑤寫本(正大、一四三一・七九)

聲字實相義鈔

①(日)Sho-jis-ji-jis-so-gi-sho. 聲字義鈔、聲字義快鈔、略鈔 ②三卷 ③存、十卷章疏之内 ④宥快(貞和元—應永二三A.D.1345-1416)述 ⑤聲字實相義研心鈔を廣鈔とすに對して略鈔と呼ぶ。玄談に於て所學の分齊、所依經論の通局と部帙、製作年代、一部の大綱、製作の意趣、略釋題目の六門に分ち終て本文を詳述す。東密學徒の尊重する註釋書である。

⑥刊本(正大、一三三一・七六)(高大、一・四二)(京大、日大未三九九)(龍大、二六六一・三)(谷大、餘大・一九六)(京專)(哲、け・一・右・七)

聲字實相義鈔聞書

①(日)Sho-jis-ji-jis-so-gi-sho-ken-gaki. ②一冊 ③存 ④道範(治承二—建長四A.D.1178-1252)述 ⑤應永一三寫 ⑥寶壽院

聲字實相義卓義錄

①(日)Sho-jis-ji-jis-so-gi-taku-gi-roku. ②一卷 ③存 ④海運撰

聲字實相義注

①(日)Sho-jis-ji-jis-so-gi-chu. ②二卷 ③存 ④道範(治承二—建長四A.D.1178-1252)記 ⑤寫本(京大、日大未三八六)

聲字實相義密藏要義

①(日)Sho-jis-ji-jis-so-gi-mitsu-zo-yo-gi. ②二卷 ③存 ④聲字實相義問題 ①(日)Sho-jis-ji-jis-so-gi-mon-dai. ②一卷 ③存 ④寫本(高大、一・四二)

聲字實相義遊意

①(日)Sho-jis-ji-jis-so-gi-yui. 聲字義遊意 ②一卷 ③存 ④無相 ⑤寫本(龍大、二六六一・二二)

聲字抄

①(日)Sho-jis-sho. ②十卷 ③存 ④宥快(貞和元—應永二三A.D.1345-1416)撰 ⑤(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

聲實抄

①(日)Sho-jis-sho-sho. ②二卷 ③存 ④上卷には四箇法用、對揚、五悔、九方便、理趣經及び音律の口傳を説き、下卷には諸讚及び後代魚山編入外の諸聲明並に聲明音律等の口傳を説く。

聲塵要次第

①(日)Sho-jin-yo-shi-dai. ②一卷 ③存 ④玄雲記 ⑤正和二(A.D.1313) ⑥(無動寺)

聲圖

①(日)Sho-zu. ②一紙 ③存 ④南北朝時代寫 ⑤(寶菩提院)

聲名聞書

①(日)Sho-myō-ki-ki-gan. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶菩提院)

聲明印信血脈等

①(日)Sho-myō-in-jin-kechi-anaku-ō. ②一葉 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶菩提院)

德川時代寫 ⑤(寶菩提院)

聲明聞書私記

①(日)Sho-myō-ki-ki-gaki-shi-ki. ②一卷 ③存 ④原本(仁和寺)

聲明教本眞宗勳行集

①(日)Sho-myō-kyō-hon-shin-shū-gon-gyō-shū. ②一卷 ③存 ④昭和七刊 ⑤金澤、供田書店

聲明口傳

①(日)Sho-myō-ku-den. ②一卷 ③存、大正八四・八五七No.2717 ④聖尊(嘉元三—應安三A.D.1303-1370)撰 ⑤梵唄聲明に關する口傳を記した書。最初に眞言宗の聲明と天台宗の聲明との相承のことを略示し、呂律の二聲は兩日大日の妙用、甲乙十二音は五季を貫通して萬物を生長す等と説きて音韻の密教的意義を述べ、次に十二音十二時之配當、五音博士形像、呂律五音替目・四種惡聲・音曲之心持之事・五音七聲博士圖・甲乙變音圖・五音五臟配當等の諸項を設けて説明してゐる。著者は醍醐山の座主で、遍智院宮とも稱せし親王である。従つて本書は主として醍醐相傳の説によつて記されてゐる。正平十二年高山山通照院に於て記す旨奥書に見え、著者五十五歳の作である。(小田慈舟)

聲明系譜

①(日)Sho-myō-kei-fu. ②一卷 ③存 ④成蓮編 ⑤寶曆三刊 ⑥(龍大、二〇七五一—四)(金剛三昧院)

聲明血脈

①(日)Sho-myō-kechi-hyaku. 聲明血脈仁和寺方 ②二帖 ③存 ④足利時代寫(寶菩提院)德川時代寫(金剛

三昧院(寶善提院)

聲明決疑抄

- ①(日)Shō-myō-ketsu-  
shū. 東寺聲明決疑抄 ②三卷 ③存
- ④問答體を以て諸の疑義を決擇したもの。
- ⑤寫本(京專)

聲明源流記

- ①(日)Shō-myō-gen-  
ryū-ki. ②一卷 ③存、大正八四・八六四  
No. 2720、大日本佛教全書第一一傳記叢  
書之内、續群書類從第一二宗教部二之内
- ④凝然(仁治元一元年A. D. 1240—1321)  
撰

①南都諸宗並に天台眞言に相傳せる聲明の  
相承について極めて簡單に記述した書。聲  
明の歴史を研究するには主要なる資料の一  
である。

享保三刊

- ①龍大(二〇七五・二一)(谷  
大、餘大・八七七)

聲明後集梵唄品彙

- ①(日)Shō-  
myō-go-shū-bon-bai-hon-i. ②二卷 ③  
存 ④龍大(二〇七五・二一)

聲明考

- ①(日)Shō-myō-kō. ②一冊  
③存 ④羽塚堅子著 ⑤昭和四刊 ⑥名古屋  
屋守綱寺聲明會

聲明私譜

- ①(日)Shō-myō-shi-fu.  
②一帖 ③存 ④寫本(高大、一・四九)

聲明指南鈔

- ①(日)Shō-myō-shi-  
nan-shō. ②一冊 ③存 ④寫本(哲、あ・  
二・左・七)

聲明集

- ①(日)Shō-myō-shū. ②一卷  
③存 ④石山流に用ふる聲明を集む。⑤寫  
本(石山寺)

聲明集

- ①(日)Shō-myō-shū. ②一帖

- ③存 ④寛文四寫(寶善提院)徳川時代寫  
(寶龜院)

聲明集

- ①(日)Shō-myō-shū. ②一卷  
③存 ④桂端訂正 ⑤安永七刊 ⑥(谷大、  
餘小・九九)(龍大(二〇七五・一五))

聲明集口傳

- ①(日)Shō-myō-shū-  
kuden. ②三帖 ③存 ④徳川時代寫

聲明集私案記

- ①(日)Shō-myō-shū  
shian-ki. ②二卷 ③存 ④寫本(京專)

聲明集法則

- ①(日)Shō-myō-shū-  
hō-soku. ②一冊 ③存 ④足利中期寫

聲明書目錄

- ①(日)Shō-myō-shū-  
noku-roku. ②一卷 ③存 ④喜淵記 ⑤  
文保三(A. D. 1319) ⑥寫本(如來藏)

聲明正律

- ①(日)Shō-myō-shō-ri-  
su. ②三卷 ③存 ④難著 ⑤天保五刊

聲明抄

- ①(日)Shō-myō-shō. ②一卷  
③存 ④聲明の相傳、曲譜等に關する二十  
四項に就て説述したもの ⑤寫本(仁和寺)

聲明大意略頌文解

- ①(日)Shō-  
myō-tai-ryaku-jū-mon-ge. 南山進流聲  
明大意略頌文解 ②一冊 ③存 ④葦原寂  
照(天保四—大正二A. D. 1833—1913)述

- ④明治二三刊(高大、寄・一・四九)明治四一  
刊(谷大、餘大・二四一七)(帝國、六一七五)  
(京專)

聲明大事

- ①(日)Shō-myō-dai-ji.  
②一通 ③存 ④朝意(永正一五—慶長四  
A. D. 1518—1599)作 ⑤天正三寫 ⑥高

大、寄・一・四九

聲明の音律

- ①(日)Shō-myō-on-  
on-itsu. ②一卷 ③存 ④大山公淳著  
昭和四刊 ⑤高野山大學密教研究會

聲明の歴史及音律

- ①(日)Shō-  
myō-no-riki-shi-oyobi-on-ritsu. ②一卷  
③存 ④大山公淳著 ⑤昭和五刊 ⑥東京  
雄山閣

聲明博士聞書

- ①(日)Shō-myō-ha-  
ki-shi-ki-gaki. ②三紙 ③存 ④徳川  
時代寫 ⑤(寶龜院)

聲明譜

- ①(日)Shō-myō-fu. ②一軸  
③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶善提院)

聲明本源集

- ①(日)Shō-myō-hon-  
gen-shū. ②一卷 ③存 ④慈信集

聲明本展觀目錄

- ①(日)Shō-myō-  
hon-ten-kwan-moku-roku. ②一卷 ③存  
④中川善教編 ⑤昭和三刊 ⑥高野山寶龜  
院

聲明本展覽會特別出陳目錄

- ①(日)Shō-myō-bon-ten-  
ran-kwai-toku-beisu-shū-chim-noku-roku. ②二冊  
③存 ④中川善教編 ⑤昭和三刊 ⑥高野  
山法儀研究會

聲明用心集

- ①(日)Shō-myō-yō-  
jin-shū. ②一卷 ③存 ④堆智述 ⑤天台聲  
明につき、用心を記して、序破急・三種五  
音・聲明成佛を説く。

聲明略

- ①(日)Shō-myō-ryaku. (支)  
Sheng-ming-liao. ②一卷 ③存 ④呂徵  
民國一二刊 ⑤(谷大、餘大・三八〇二)

聲明類聚附伽陀及附録

- ①(日)

Shō-myō-ritsu-tsu-ketari-ka-da-oyobi-hu-  
roku. 南山新派聲明類從附伽陀及附録

- ②二冊 ③存 ④宮野有智編 ⑤昭和五刊

高野山松本日進堂

- ①聲明例時懺法 ①(日)Shō-myō-rit-  
ji-san-bō. ②一卷 ③存 ④魚山蓮成院  
編 ⑤刊本(谷大、餘小・三七・三九)

聲明六卷帖

- ①(日)Shō-myō-rok-  
kwan-jō. ②二卷 ③存 ④魚山蓮成院編  
⑤刊本(谷大、餘小・三八)

聲明乘入道修行次位略要

- ①(日)Shō-mon-jō-nyū-de-shū-gyō-ji-  
ryaku-yō. ②一卷 ③存 ④寛文五刊 ⑤  
(谷大、餘大・二五七)(龍大、二六五・二  
一一)

燮雲禪師語録

- ①(日)Shō-un-zen  
-ji-go-roku. ②一卷 ③存 ④(參存)  
禪籍目錄

聶道真録

- ①(日)Shō-do-shin-roku.  
(支)Neh-tao-shen-lu. 西晉清信士聶道真  
衆經録 ②一卷 ③缺 ④西晉聶道真  
太康初—永嘉末(A. D. 280—312)

⑤具さには西晉清信士聶道真衆經録と稱  
す。この名稱は一見清信士聶道真の特定三  
藏翻譯目錄(特定三藏翻譯目錄の意味は竺  
法護録の項を見よ)のやうに見えるかも知  
れないけれども、實は聶道真が彼の譯經及  
び筆受經のみならず、竺法護譯經及び彼の  
父聶承遠等の譯經及び執筆經を同時に記載  
して居つたもの、やうである。歴代三寶紀  
卷第六の聶道真譯經條下に「衆經録目一卷」  
とあり、又同録卷第十五に「聶道真録一卷」

名所行發⑩(名庫書)者載所現⑪ 月年の刊寫⑫(書考叢書釋註)書本⑬ 説解存内⑭ 代年作者⑮ 著者⑯ 缺存⑰ 數卷⑱(名書)名題⑲ 號略字數



晋時」と云へるものが即ちこれであつて、道宣は大唐内典錄卷第十に「西晋清信士華道真衆經錄一卷、右依檢、晋惠帝永嘉中、稟受護公之筆匠也、後自翻經、因出錄云」と云ひ、開元錄、貞元錄は共にこれと全く同様の説明をなして居る。

再道真は聶承遠の息であつて、西晋武帝の泰始年より懷帝永嘉の末年に至る。凡そ三十餘年間、その父と共に竺法護の譯場に參じて常に譯經を輔佐し、法護の滅後は自らも翻經に従事した。而して、道安錄に於ける竺法護譯經がこの再道真錄を通したものであることは、道安錄及び僧祐錄の研究者の容易に氣付かなければならぬところである。乍併、本錄は既に早く失はれた。經錄である爲に、その内容は今日に於ては全く知りようがない。蓋し、聶道真の譯經の如きは、三寶紀は之を五四部六卷と云ひ、内典錄はこれと同じく、開元錄は二四部三六卷となし、其中六部六卷見在、一八部三〇卷を缺本と云ひ居るも、僧祐錄には全く聶道真の譯經を傳へず、僧祐錄に聶道真の譯經を傳へないのは、この基礎になつた道安錄が東晋以後の譯經を記載しなかつたことに依るものである。三寶紀以後の記事は、全くこの二人に關する限り、餘り信用出來ないものであるからである。

⑦(参考) 三寶紀第六、第一五、内典錄第一〇、開元錄第一〇、貞元錄第一八 (林屋友次郎)

證位言說事

①(日)Shō-ri-ton-jō-setsu no-koto. ②一冊 ③存 ④享德三寫 ⑤

(寶壽院)

證龜成龜

①(日)Shō-ki-jō-betsu. ②一卷 ③存 ④雲江宗深等說 ⑦(参考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

證義集

①(日)Shō-gi-shū. ⑦(参考) 本朝台祖撰述密部書目

證義章

①(日)Shō-gi-shō. ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶龜院)

證契大乘經

①(日)Shō-kai-dai-kyō. (支)Chang-chi-ta-cheng-ching. (梵)大乘同性經參照。入一切佛境智陪盧遮那藏經 ②二卷 ③存、大正一六・六五三ノ。674、縮黃六、卅一〇・一、北155蓋、南152蓋、元150蓋、明北159蓋、清152蓋、麗153方、天155蓋、指155方、法150方、至321峯、明南33常、N. 177 ④唐地婆訶羅譯 ⑤永隆元(A. D. 680)

⑥本經は一に一切佛境智陪盧遮那藏經ともいひ、いづれも佛自らの命づけ給ふところであつて、楞伽の羅刹王毘毘産のために大乘の法門を證契すべきことを説いたもので、闍那耶舍譯の大乘同性經の異譯である。本經は上下二卷より成り、上卷に於て羅刹王毘毘産、佛の神力の光明に照らされて、その眷屬と共に得忍し、此の世界に成佛して衆生を度せんとの菩提心を發し、不退轉に住して佛前に往詣して佛徳を偈讚し、供養し、佛、毘毘産の問ひに答へて、衆生の名義、根、業、衆生の受生、識の體及び量、その形色、衆生界の不増不減にして不可得なること、善知識、助善提の法、三解脱門、三修成、三療法、四善修、修行、佛の名義

に就いて説き、毘毘産有爲法の自性を了知して菩提心を發すや、日躡連に毘毘産の蓮華積徳佛の世界に生れて、菩薩の十地を得、後成佛することを説き、次でその子毘毘産の歸佛することを説き、下卷に彌勒の問ひに答へて、佛の大神通を示現し、佛土を莊嚴する所以を詳述し、中に聲聞・緣覺・菩薩・如來の各十地を説き、滿資用身・化身・自身・佛の三身を説いてゐる。

本經はその異譯の大乘同性經と對照する時は、その内容大同小異であつて、本經の毘毘産は異譯に毘毘沙那となり、その子の名同性經には毘毘沙歌となり、同性經には佛身を報身・應身・眞身の三身としてゐる。〔参考〕淨土依憑經論章疏目錄(林五邦)

證香火本因經

①(日)Shō-ko-hon-in-kyō. (支)Cheng-hsiang-ho-pen-yin-ching. ②一卷 ③存 ④熾煌本(大英博物館)

證成集

①(日)Shō-jō-shū. ②三卷 ③存 ④(参考) 禪籍目錄

證定疏拔萃

①(日)Shō-tei-shū-bas-sui. ②一卷 ③存 ④明秀撰 ⑤刊本(立大、A. 30. 117)

證眞讚

①(日)Shō-shin-san. ②一卷 ③存 ④南北朝時代寫 ⑤(高大、寄・一・七〇)

證談鈔

①(日)Shō-dan-shō. ②二帖 ③存 ④實融(寶治元一曆應二A. D. 1247-1339)述 ⑤文政五寫 ⑥(金剛三昧院)

證道歌

①(日)Shō-dō-ka. (支)Cheng-tao-ko. 永嘉證道歌、永嘉眞覺大師證道歌

①一卷 ③存、大正四八・三九五ノ。3014、縮騰四禪宗永嘉集之内、卅三・七、明北1578起、清1515後、明南1565起、禪學寶典之内、四部錄五味禪之内十部錄之内、N. 1565 ④唐代玄覺撰

⑤六祖大鑑慧能禪師に參詣し一夜にして大悟し一宿覺と尊稱された永嘉の玄覺禪師が、其の大悟の心境より觀た證道の要を千八百四十四字二百四十七句の古詩體一篇を以て歌唱されたもので、解毎に韻を替へ、聲律を調へ、極めて潤達に吟唱し、縱横自在に説破されたものである。其の撰述年代は明かでないが、六祖に參悟せし後の撰述であることは、本文中にも「自從認得曹溪路。了知生死不相關。」とあるのに依つて知る事が出来る。「宗統編年」卷十には、此の參謁年代を唐神宗帝神龍元年(A. D. 705)として居る。そして玄覺の示寂年月に就ては、種々異説があつて一定して居ない、(一)唐睿宗先天元年説は、釋氏通鑑卷八、神祖統記卷十などにある。(二)先天二年並に先天二年十月十七日説は、所謂、唐玄宗帝開元元年十月説と同様に認められるものであるが、此れには宋高僧傳卷八、五燈會元卷二、景德傳燈錄卷五、六學僧傳卷五等がある。(三)開元二年十月説には、宗統編年卷十一、編年通論卷十五、佛祖綱目卷三十等がある。今假に先天二年即ち唐玄宗帝開元元年十月十七日(A. D. 715)壽四十九歳示寂の説に據れば、宗統編年にある參謁年代は、玄覺四十一歳となり、本書の撰述は其の後の晩年圓熟期の述作と認める事が出来る。玄覺

は、浙江温州府嘉縣の人で、字は明道、號を眞覺、諡號を無相大師と云ふのであるが、略して永嘉大師とも世稱され、其の證道歌も、宋の大慧宗杲禪師の普說卷二並に宋の慧洪覺範禪師の冷齋夜話、彦琪の證道歌話の自序等にも印度に傳つたこと、並に震旦聖者大乘決疑經の經名を以て傳承されたところがあるが、眞偽は明かでない。本書一篇の綱目は、直截にも指摘せるが如く、「無明實性即佛性。幻化空身即法身。」にあることは否めないが、より端的に言へば、次句の「法身覺了無一物。本源自性天真佛。」と云ふ其の本源自性天真佛の消息を唱導したものである。故に此の天真佛を認得せし道人は妄をも除かず眞をも求めない、此の二法は空にして無相なることを了知するからであり、無相は天真佛の眞實相であるから、諸佛の法身我が性に入り、入我我入して「無明實性即佛性。幻化空身即法身。」となるのである。本書一篇の大綱は此の落處を各様に縱横自在に説破したものに外ならぬ。

韻文極めて流暢であり幽玄なる餘韻に充ち、朗々吟誦して不知の間に佛法の大意を了得するに至るものとして、參同契、寶鏡三昧、信心銘などと共に、古來より禪林に尊重されて居るものである。

註釋書には、四部錄關係書に收められたもの、外、彦琪、知訥、水盛等の支那諸刊本並に寛永十八年彦琪註のもの。同十九年、貞享三年など知訥註のもの、元祿七年水盛註のもの。元祿十四年河洲譜良松尾寺の石門興幹和尚の評註。元文二年の一線の直截、

明治二十三年突堂和尚の冠註等がある。(其の註釋目録參照)

⑦(參考) 禪籍志卷上 ⑧寫本(京大、藏一七シ・二)

證道歌 ①(日)Shō-dō-ka(支)Chang-shō-do. 龍頭證道歌 ②一卷 ③存、四部錄、十部錄之内 ④唐代永嘉玄覺作攝道註

⑤明治一一、大正三刊 ⑥(駒大) 證道歌 ①(日)Shō-dō-ka(支)Chang-shō-do. ②一卷 ③存 ④元代德弘編

⑦(參考) 禪籍目録 證道歌講義 ①(日)Shō-dō-ka-ron. ②一卷 ③存 ④山田孝道(文久三—昭和三 A. D. 1863—1928)述 ⑤大正一一刊 ⑥(駒大) ⑦東京光融館

證道歌講義 ①(日)Shō-dō-ka-ron. ②一卷 ③存 ④北野元峰述 ⑤大正一一刊 ⑥(駒大)

證道歌講義 ①(日)Shō-dō-ka-ron. ②一卷 ③存 ④新井石禪(元治元—昭和二 A. D. 1861—1927)述 ⑤昭和四刊 ⑥(龍大)

證道歌事實 ①(日)Shō-dō-ka-jishi. ②三卷 ③存 ④(參考) 禪籍目録

證道歌直截 ①(日)Shō-dō-ka-jiki. ②二卷 ③存、禪學大系祖錄部第一 ④一線(—元文元 A. D. 1736—)撰、古田梵仙註

本書は萬回一線和尚(別號鈍者)が、元文元年九月十二日の自序に於て、彦琪及び水盛の證道歌註は未だ玄奧を盡したるものに非ず、自分は支覺禪師の證道歌を歌唱せら

れし眞意を了得したのであると言ひ、本書の註釋を成したものである。不遜とも思はれるほど極めて自信に充ちた自序であるが、其の註釋は、確に前二者の註釋よりも優れ、繁簡よろしきを得、端的に其の奥旨を提示して居るもので、證道歌註釋書中の白眉と稱す可きであらう。直截とは、本文中に「直に根源を截るは佛の印する所、葉を摘み枝を尋ぬるは我能はず」とあるに依つたもので、端的に其の玄妙の淵旨を道破して、直に無明の根源を截斷すること自分の主眼とする所であるとの意であらう。一線和尚は山陰の洞宗僧で、元文二年春(A. D. 1737)江戸駒籠諏訪山吉祥寺梅檀林の會衆一萬餘員が一線和尚に碧巖録の提唱を請ひ、且つ本書一本二冊の上梓を請ひ、募縁鏤板したもので、其の緣由を吉祥寺の當時の藏主發道文光和尚が記し、攝州浪速の山日本得、西村友樂が黄金各二兩を助資して池端中町の大和屋多兵衛より梓行したものである。上下二卷より成り、下卷は「大丈夫兼慧劍」よりである。

④元文二刊(京大、日大末・四六二)明治一四刊(駒大)刊本(谷大、餘大・二四四二)(高大、寄・一・二四)哲、(二・右三二) (大久保堅瑞)

證道歌直截事略 ①(日)Shō-dō-ka-jiki-jissuro. ②一卷 ③存 ④延享五寫 ⑤(駒大) 證道歌頌 ①(日)Shō-dō-ka-kyō. (支)Chō-dō-ka-kyō. ②一卷 ③存、記續二・一九・五 ④宋代法泉繼頌

⑤筠州雲居の大愚曉舜禪師の法嗣である青原下十二世佛慧法泉禪師が、永嘉玄覺禪師の證道歌に和して、三百二十篇を以て繼頌し、其の淵旨を唱導されたものである。法泉は佛慧と號し、湖廣德安府隨州隨縣の人で姓を時氏と云ひ、龍居山智門院信記禪師に出家し、雲居の大愚曉舜禪師に副ぎ大明、千頃、靈巖、南明並に金陵蔣山法泉院に歷住し、晩年勅命により大相國智海禪寺に陞住した宗匠で、本書は千頃山住山中の述作である。宋神宗熙寧九年七月十日浙江省括蒼の祝況、本書の鏤板に際して、後序を撰し、同十年七月(A. D. 1077)同く括蒼の吳庸天用は「南明泉頌永嘉證道詩序」を撰して流通せしめたもので、當時法泉は南明に住山して居たのであらう。頌は證道歌の各句毎に七字三句を繼頌して、簡明に唱和して居る。

⑥寫本(京大、藏一七シ・二二) (大久保堅瑞) 證道歌註 ①(日)Shō-dō-ka-juhō. (支)Chō-dō-ka-juhō. 永嘉眞覺大師證道歌註 ②一卷 ③存、記續二・一六・三 ④宋彦琪(—元豐頃 A. D. 1078—1085)註 ⑤法空禪師圓照宗本和尚の法嗣である、大鑑下十三世、雲門七世舒州梵天寺彦琪和尚が、學人の請に依つて證道歌に註釋したもので、編者は參學の門人である江西德州府浮梁縣の慧光である。翰林院大學士天倪等は、宋神宗帝元豐(A. D. 1078—1085)の頃より、友人二三子と共に、東京大相國寺東林院に於て、彦琪の説話を聽き、宋哲宗帝紹

聖三年官を辭して後、友人吳純甫に遇ひ、本書を見て其の舊識を喜び、其の後序を認むる旨を記して居る程であるから、參學門人中には居士も多かつたであらう。従つて、其の註釋は詳しくはあるが、初心義解の徒に示す如き點多く、特に優れたものとは認められない。宋哲宗紹聖四年五月十八日(A. D. 1097)自序を撰し、卷末に永嘉石碑文並に音釋を附してある。後、本書は建安の虞八宜に依つて南宋寧宗嘉定十二年に刊行せられ、清光緒二十二年の刊本もある。

⑤光緒二二刊 ⑥(京大、藏・一・七・七・六) (大久保堅瑞)

證道歌註

①(日) Sho-do-ka-chu. (支) Ch'eng-tao-ko-chu. ②一卷 ③存、

己續二・一九・五 ④宋代知訥(一紹興一六 A. D. 1146)述、德最編

⑤長蘆信禪師の法嗣である。江南蘇州府靈巖山の妙空禪師知訥和尚が、永嘉玄覺禪師の證道歌の各句に加註して其の淵旨を唱導したものを、法嗣慧然德最和尚が編録したものである。其の鏤梓は、蘇州南嶽の知縣たる梅汝能居士が施財鏤板したもので、南宋高宗紹興十六年(A. D. 1146)知訥は序並に引を撰して、證道歌に對する自己の見解並に本書編纂上梓の緣由を序し、梅汝能また同年正月朔、後序を撰して、所見並に緣由を述べて居る。其の主旨は、佛法は文字語言を漁獵する事に依つて得られるものではないが、鈍根末學の者は、大根上智の者が一聞千悟、鞭影を待たずして行ふ様に

は出来ない、やはり文字の筌蹄を借りて其の玄旨を了得するのである。本書を註釋する主眼もまた此處に置かれ、婆心叮嚀に唱導したものであるが簡にして要を得て居る。

④寫本(京大、藏・一・七・七・二) 寬永一九刊 (駒大)

證道歌註

①(日) Sho-do-ka-chu. (支) Ch'eng-tao-ko-chu. 證道歌註頌 ②一

卷 ③存、己續二・一九・五 ④竺源水盛 (德祐元一至正七 A. D. 1273—1317) 註頌、德弘編

⑤無能教禪師の法嗣である南岳下二十一世法慧宏德禪師竺源水盛和尚が、再住せし鄱陽(江西饒州府)の妙果寺を退き、南巢に歸り、元至元三年春、六安の齊頭山水晶閣若

に真翁圓禪師の塔を禮して學人の接化に努められた時、可堂然菴主の請により、證道歌を著語註述し、且つ頌出して道人參學の指南とされたもので、編者は門人德弘和尚である。元至元三年四月八日自ら所見並に緣由を後序し、法弟である蔣山の中心題語を附したもので、江東道太平路の陳善會居士等、本書の鏤梓を志し、至元六年八月笑隱大新禪師に序文を請ひ、潭水豐安禪師宗濟伯玄和尚の書字を得て、至正元年上元(A. D. 1341)善會居士自ら刊行の識語を撰して上梓し、無相禪庵に留板したものである。清光緒三十四年の刊本もあり、我國に於ては、元祿七年八月京都柳枝軒茨城方道並に玉池堂梅村彌白の藏版にかゝる刊行本がある。今元祿七年本に依れば、卷首に笑

隱大新の序を收め、次に證道歌の本文を掲げて著語を加へて此れを頌出し、次に註述して居る。註頌共に懇切である。水盛は字は竺源、自ら無住翁と號した、證號を法慧宏德禪師と云ふ。姓は范氏、江西饒州府樂平縣の人で、羅山寺常公に出家し、蔣山の月庭忠和尚に參じ、無能教禪師に嗣いだも

のP、元至正七年(A. D. 1347)四月壽七十三の示寂ゆえ、本書の撰述は六十三歳の時の述作である。水盛は、元祿本も續藏本も、増集續傳燈錄卷五にも、永盛に作つてあるが、望月佛教大年表にも續稽古略卷一、五燈嚴燈卷二十二を引用して水盛に作り、また佛祖綱目卷四十一、續燈存稿卷六にも水盛に作つてあるので、今假に水盛として置くのである。

④光緒三四刊(谷大、餘大・一九八〇) 寫本 (京大、藏・一・七・七・二) (大久保堅瑞)

⑤一卷 ⑥存 ⑦妙空述 ⑧寬永一九刊

⑨(谷大、餘大・二六二八)

證道歌註 ①(日) Sho-do-ka-chu.

②一卷 ③存 ④佛海述 ⑤(參考) 禪籍目錄

證道歌註 ①(日) Sho-do-ka-chu.

②一卷 ③存 ④梅天無明(慶長一一一延寶四 A. D. 1607—1676) 述 ⑤(參考) 禪籍目錄

證道歌註 ①(日) Sho-do-ka-chu.

②一卷 ③存 ④攝道註 ⑤明治一一刊

⑥(正大、一七五・四〇)

證道歌註頌 ①(日) Sho-do-ka-chu.

註 (支) Ch'eng-tao-ko-chu-sung. 證道歌註 ②一卷 ③存、己續二・一九・五 ④竺源水盛(無住翁)德祐元一至正七 A. D. 1273—1317) 註頌、德光編 ⑤(參考) 禪籍志卷一、大、二六二・四六) ⑥寫本(龍大、二六二・四六) 證道歌並引 ①(日) Sho-do-ka-chu-sung. ②存、坦山和尚全集之内 ③原坦山(文政二—明治三五 A. D. 1819—1892) ④近世の高僧、原坦山和尚が、唐の永嘉玄覺禪師の證道歌の韻を踏んで宗乘を提唱されたものである。引に「永嘉禪師證道歌壹篇、名布西天一世徧知之、予頃者安臥有日、偶蹈其韻跡、遂以成篇、蓋宗說圓明須還古人、主機發轉、豈敢多讓也哉」とあり、其の氣慨思ふべきである。原文は漢詩で「四大を積聚して人と爲す、成壞隨緣本真に任かす、依然として曠生す臭皮袋、敢て保つ本性不壞の身、是心ならず是物ならず、元名づくべきに非ず強て佛と稱す」より筆を起し「等閑りに放下せば多くは差遇し、仔細に檢點せば亦却て失す……蝸牛雲を御して鳴一聲、無舌の語奈何が決せん」と結んだ七字二百六十五句より成り、弘化四年(A. D. 1847)二十九歳の作である。坦山和尚は、諱は良作、字は坦山、號覺仙、別號鶴巢と云ひ、明治十二年東京帝國大學に始めて印度哲學科を置くや、師聘せられて其の講座を擔任し、駒澤大學の前身たる曹洞宗大學林總監となり、曹洞宗管長代理

となり、明治二十五年(A. D. 1892)七月二十七日壽七十四にて示寂するに際し、老納即刻命終云々の死亡通知状を發送したる如き、奇行多く、其の詩も帳簿體なりとの逸話もあるが、本書に見るが如く作詩自在に、よく宗意を宣揚して居る。坦山和尚全集に於ては鶴巢餘韻の部に收められて居る。

證道方三重大事

①(日)Shō-dō-fata-san-jū-dai-ji. ①軸 ③存 ④實藏(寶治元一曆應二 A. D. 1247-1339)記

⑤徳川時代寫 ⑥(寶龜院)

證得往生義

①(日)Shō-toku-ō-ji. ①一卷 ③存 ④證空撰 ⑤寫本龍大、研眞(文政一三寫(谷大、宗大・二六二六))

證得無爲法身抄

①(日)Shō-toku-an-i-hs-shin-shō. ②二卷 ④慈觀建武元一應永二六 A. D. 1331-1419)口作

淨土眞宗聖教目錄

①(日)Shō-nyo-sanna-go-shō. ③存 ④加州石川郡(下附したる御書。⑤寫本(龍大、別置)

證如御書

①(日)Shō-nyo-sanna-dō-no-e-no-o-fumi. ③存 ④寫本(龍大、別置)

證如實如御書

①(日)Shō-nyo-jitsu-nyo-go-shō. ②各一通 ③存 ④寫本(龍大、別置)

證如宗主御葬禮並諸年忌記

①(日)Shō-nyo-shū-shū-go-sō-i-ei-nara-bini-shō-nen-ki-ki. ②一卷 ③存 ④天

文二三寫 ①(龍大、別置)

證如宗主御日記御表題考

①(日)Shō-nyo-shū-shū-go-nik-ki-go-hyō-dai-kō. ①一卷 ③存 ④正辰記 ⑤寫本(龍大、別置)

證如宗主廿五年忌記

①(日)Shō-nyo-shū-shū-ni-jū-go-nen-ki-ki. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、別置)

證如上人御一週忌以後御法會記

①(日)Shō-nyo-shō-nin-go-is-ki-i-go-go-hō-e-ki. ②一卷 ③存 ④大正元寫 ⑤(谷大、宗大、一九二八)

證如上人御一週忌より御法事次第

①(日)Shō-nyo-shō-nin-go-is-shū-ki-yo-i-go-hō-ji-shi-dai. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、別置)

證如上人御往生記

①(日)Shō-nyo-shō-nin-go-ō-ji-ki. ②一卷 ④(參考)淨土眞宗聖教目錄第二

證如上人御往生日記

①(日)Shō-nyo-shō-nin-go-ō-ji-ni-ki. ②一卷 ③存 ④長福寺手記 ⑤大正六寫 ⑥(谷大、宗大、一五九七)

證如上人消息

①(日)Shō-nyo-shō-nin-shō-soku. ②三通 ③存 ④寫本(龍大、別置)

證如上人僧正ニ被任時之聞書

①(日)Shō-nyo-shō-nin-sō-jō-ni-nin-ze-ra-re-shi-toki-no-kiki-gaki. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、別置)

證如消息

①(日)Shō-nyo-shō-soku. ③存、小部雜集之内 ④寫本(龍大、一〇

三・五〇)

證白坡書

①(日)Shō-byaku-hi-shō. (文)Cheng-pai-pō-shū. ②一卷 ③存 ④朝鮮金秋史 ⑤(參考)禪籍目錄

證佛名譚

①(日)Shō-butsu-myō-tan. (文)Cheng-fō-ming-tan. ②一卷 ③存、禪宗博覽卷下 ④明代江阜輯、胡文煥輯 ⑤寫本(京大、藏、一七七一)

證菩提山等緣起

①(日)Shō-hō-daisan-tō-en-qi. ②一卷 ③存、日本大藏經修驗道章疏第三記錄類之内 ④盛嚴

文龜三(A. D. 1503)

⑤相州府中の慶藏房盛嚴が文龜三年八月、大峯山上に於て書いたもので、大峯山を初め二三の緣起を記したものである。題名の證菩提山とは大峯の異名である。乃ち初めに最初の行出人役行者、比古壽元持經者、鎮西珍尊高持經者、伊藤芳元持經者、出羽興黑珍持經者、助香供奉、日大聖人、松本長圓について略述し、後に熊野權現御垂跡緣起、熊野山檢校賴嚴、金峯山本緣起、大峯金剛童子次第住所日記、大峯佛經安置大皇御使日記等を記してゐる。(服部如實)

證文類惠聞記

①(日)Shō-mon-i-wi-gu-mon-ki. ②二卷 ③存 ④環中(一享保元 A. D. 1716)述 ⑤寫本(龍大)

證譽大僧正口訣

①(日)Shō-yō-dai-sō-jō-ku-ketsu. ②一卷 ③存 ④(山)寫本(正大、一五五二・一八一)

證羊集

①(日)Shō-yō-shū. 圓明證智禪師證羊集 ②一卷 ③存 ④松嶺道秀(元徳二一應永二四 A. D. 1330-1417)

鐘花臆說

①(日)Shō-ke-oku-setsu. 眞宗論 ②一卷 ③存 ④水原宏遠(文化五一明治二三 A. D. 1808-1890)寫本(龍大、一五〇一・七)

鐘鬻貧經

①(日)Shō-kei-him-bō-kyō. (文)Chang-king-p'in-fa-king. ②一卷 ④失譯 ⑤出曜經の抄出。⑥(參考)出三藏記第四、法經錄第五、仁壽錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

鐘稿提壽談義

①(日)Shō-kō-dai-jū-dan-gi. ②一卷 ③存 ④貞享五寫(龍大、二六九二・一九)

攝一切佛頂輪王如來念誦法

①(日)Shō-issai-buc-chō-rin-ō-nyō-rainen-jū-hō. ①一册 ③存 ④仁海(天曆五一永承元 A. D. 951-1046)撰 ⑤寫本(京大、日大末・三三五)

攝眼毒女

①(日)Shō-gen-doku-nyō. 小野流攝眼毒女 ②一卷 ③存 ④仁海(天曆五一永承元 A. D. 951-1046)享保二〇寫 ⑤(谷大、餘大・九九六)

攝眞實經

①(日)Shō-shin-jitsu-kyō. (支)Shē-chen-shih-ching. 諸佛境界攝眞實經、眞實經 ②三卷 ③存、大正一八・二七〇No. 868 縮開二、記續一・二・四

唐般若譯

④諸佛境界攝眞實經の下の見よ。⑤延文三寫 ⑥(寶龜院)

攝眞實經成就三身要略

①(日)Shō-shin-jitsu-kyō-jō-jū-san-jin-yō-rya-ku. (支)Shē-chen-shih-ching-cheng-chū-san-shēn-yao-liao. ②一卷 ④(參考)

書寫請來法門等目錄

攝大儀軌 ①(日)Shō-dai-gi-ritsu (支)

St. Pauline: 攝大毘盧遮那成佛神變加持經入蓮華胎藏海會悲生曼荼羅廣大念誦儀軌 三卷 ②存、大正一八・六五No.830、縮餘六、已藏一・三、四 ③唐輪婆迦羅譯 ④開元五一二三(A. D. 717-735)

攝大毘盧遮那成佛神變加持經入蓮華胎藏海會悲生曼荼羅廣大念誦儀軌 ①(日)Shō-dai-gi-ritsu (支)

②存、大正一八・六五No.830、縮餘六、已藏一・三、四 ③唐輪婆迦羅譯 ④開元五一二三(A. D. 717-735)

攝大儀軌 ①(日)Shō-dai-gi-ritsu (支)

譯攝大儀軌 ②存、國譯密教經軌部第三 攝大義章卷第四 ①(日)Shō-dai-gi-shū-kwan-dai-shi. (支)Shō-ta-cheng-i-chang-kuan-ti-ssai. ②一卷 ③存、大正八五・〇三六No.2899

④本書は大屋徳城氏藏の古寫本にして撰者未詳。本書の内容は「斷結義」と「三性義」とを解釋してゐるが、眞諦義譯の攝大乘論釋の立場を採つて論證してゐるやうに思はれる。 斷結義七門分別是、(一)釋名。(二)體性。(三)治斷差別。(四)觀行同異。(五)退不退分別。(六)品數多少。(七)治斷位地と分ちて論じ、三性義七門分別是、(一)釋名。(二)出法體。(三)辨性差別。(四)攝法分齊。(五)觀行除障。(六)諸門分別義異。(七)開合多少と分ちる中で、第二の體性を説明してゐる所で終つてゐる。

本書の著者は、小乘として薩婆多宗を、權大乘として成實論を、實大乘として攝大乘論を骨子にして説明してゐるが、其の他

雜心論、大莊嚴論、佛性論、地持論、無相論、智度論、中邊論、宗性論、般若論、起信論、涅槃經、楞伽經等の諸經論をも引いてゐる。中に於て眞諦三藏の説及問答を文中に出して、斷結義第七門の治斷位地を説明してゐるのは釋者の思想及び時代を推定するに注目すべきであらう。

攝大乘古論疏 ①(日)Shō-dai-jō-ron (支)

②(大屋徳城氏藏) (成田昌信) ③七卷 ④辨相述 ⑤(參考) 東域傳燈目錄卷下

攝大乘章 ①(日)Shō-dai-jō-shō (支)

②三卷 ③神麈撰 ④東域傳燈目錄卷下に曰く「神麈撰更有廣本十一卷」云々。 攝大乘世親釋論知津 ①(日)Shō-dai-jō-se-jin-shaku-ron-chi-shin. ②一卷 ③存 ④普寂(寶永四一天明元 A. D. 1707-1731)述 ⑤(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

攝大乘論 ①(日)Shō-dai-jō-ron (支)Shō-ta-cheng-pan. (梵)Mahāyāna-saṃgraha (藏傳)Jhig-pa chen-po bsdus-pa. ②二卷 ③存、大正三一・九七No.1592、縮來九、已二一・六、北595號、南610與、元602號、明北1177隱、清1177隱、麗998號、天600與、指560號、法385

嚴、至1317寫、明南135物、天、1184 ④阿僧伽作、後魏佛陀扇多譯 ⑤正光六、元象二(A. D. 535-539) ⑥北天竺の三藏の佛陀扇多は、梁の武帝の時來東して後魏の普泰元年(西紀五三一)に初めて無著の攝大論を譯出した、これ即ち世親の十地論等を譯した菩提流支と同時代にして、無著世親の佛教の最初の傳譯であり、本論としても四譯の中の第一譯である。然て此の當時は教界一般に十地論の講究に馳せて、本論は殆んど顧みられなかつた、然るに其の後にも無く眞諦三藏に依つて第二譯が出づるに及び、本論の研究盛んに行はれ、攝論宗勃興するに至つた。本論の内容は眞諦譯攝大乘論及び論釋に讀る。(衛藤即應)

攝大乘論 ①(日)Shō-dai-jō-ron (支)Shō-ta-cheng-pan. (梵)Mahāyāna-saṃgraha (傳藏)Thig-pa chen-po bsdus-pa. 攝大乘論本 ②三卷 ③存、大正三一・一三三No.1593、縮來九、已二一・六、北594與、南608與、元601與、明北1177隱、清1177隱、麗995與、天598與、指557與、法582與、至316圖、明南1348移、天、1183

④無著菩薩造、陳眞諦(永元元一太建元 A. D. 499-560)譯 ⑤眞諦三藏は陳の天嘉四年(A. D. 563)から其の翌年に亘り、廣州制旨寺に於て、世親の釋論と共に本論を譯出した、これ本論四譯の中の第二譯である。此の論は無著の作にして其の内容は大乗阿毘達磨經の攝大乘品を解釋して、大乘佛說を論證し、小乘

に對比して大乘の殊勝なる要義を宣揚せんとしたものである、其の組織は論の劈頭に、大乘阿毘達磨に説く所の十種の殊勝の義を擧げ、十段に分つて之を解説してゐる。且らく唐譯と對照して之を示せば次の如し 眞諦譯 玄奘譯

- |            |              |
|------------|--------------|
| 一、應知依止勝相   | 一、所知依殊勝勝語    |
| 二、應知勝相     | 二、所知相殊勝勝語    |
| 三、應知入勝相    | 三、入所知相殊勝勝語   |
| 四、入因果勝相    | 四、彼入因果殊勝勝語   |
| 五、入因果修差別勝相 | 五、彼因果修差別殊勝勝語 |
| 六、依戒學勝相    | 六、增上戒殊勝勝語    |
| 七、依心學勝相    | 七、增上心殊勝勝語    |
| 八、依慧學勝相    | 八、增上慧殊勝勝語    |
| 九、學果寂滅勝相   | 九、彼果斷殊勝勝語    |
| 十、智差別勝相    | 十、彼果智殊勝勝語    |

此の十種の勝相の分類及び次第配列は決して任意のものではなく、教學組織の必須の要目であつて、増減は勿論、順序の變更をも許されない程に必然の關係に立つものである。されば本論にも「此次第説中、一切大乘皆得圓滿」といひ、無性は之を釋して、「其所有大乘綱要無別説」といひ、普寂は略疏に於て「實乃攝大乘之玄軌、趣善提之王路也、荷學大乘者、寧可外乎此二而異求焉哉」と推賞してゐる如く、本論は攝大乘の名に乖かず、實に組織整然たる大乘佛教綱要といふべきである。又大乗教學史上より見れば、中觀佛教に於ける龍樹の中論と對比すべき、瑜伽教系に於ける要論であるといへる。此の論の註釋には世親釋と無

名所行發⑩(名庫書)書藏所現⑨ 月年の刊寫⑧(書考參書釋註)書未⑦ 說解容内⑥ 代年作者⑤ 著者④ 缺存③ 數卷②(名書)名題① 號略字數

【シ】

性釋とありて、前者は笈多、真諦及び玄奘に依つて前後三回傳譯せられ、後者は玄奘に依つて傳譯せられた。本論の内容の詳解は眞諦譯論を参照せよ。(衛藤即應)

攝大乘論義決

①(日)Shō-dai-jō ron-gi-sho. 攝論義決 ②七卷 ③(參考)東城傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第一

攝大乘論義疏

①(日)Shō-dai-jō ron-gi-sho. (支)She-ta-eheng-jun-i-shu. 攝大乘論疏 ②七卷 ③毗跋羅備記 ④(參考)奈良朝現在一切經疏目錄2335

攝大乘論義章

①(日)Shō-dai-jō ron-gi-sho. (支)She-ta-eheng-jun-i-chāng. 攝論義章 ②三卷或十卷 ③道基述 ④(參考)新編諸宗教藏總錄第三

攝大乘論義章

①(日)Shō-dai-jō ron-gi-sho. (支)She-ta-eheng-jun-i-chāng. 攝論義章 ②十四卷 ③(參考)東城傳燈目錄卷下、奈良朝現在一切經疏目錄2337

攝大乘論義章

①(日)Shō-dai-jō ron-gi-sho. (支)She-ta-eheng-jun-i-chāng. 攝論義章 ②三卷 ③景法師 ④(參考)奈良朝現在一切經疏目錄2330

攝大乘論釋

①(日)Shō-dai-jō ron-shaku. (支)She-ta-eheng-jun-shih. (梵)Mahāvāna-saṃgraha-bhāṣya (藏傳)the-g-pa chen-po bsduṣ-paḥi ligrel-pa. 攝大乘論世親釋、世親攝論 ②十卷 ③存、大正三・三二一No.1597. 縮往七、卅三・三北599孝、南613孝、元605孝、明北1103枝、清1165枝、麗601敬、天602敬、指562敬、

法587敬、明南1350葉、N.1171(1) ④世親菩薩造、唐玄奘(仁壽二一麟德元A. D. 602—604)譯 ⑤本論は唐の玄奘三藏に依つて、貞觀二十一年より同二十三年(A. D. 649)に至る間に譯出せられたものにして、世親の攝論釋としては三譯の中の最後の傳譯である。玄奘三藏は特に護法法の唯識を奉じ、成唯識論を中心として唯識宗を鼓吹したので、攝論は之を傳譯したけれども、僅かに唯識論の權證として之を依用するに過ぎなかつた、其の門下の窺基、神泰等は本論の疏を著した如く傳へらるゝも、古くより湮滅して傳はらない。されば本論としての獨立の研究は眞諦譯に依つて爲されたのであるから、其の内容は眞諦譯論の條下に於て解説することにし、此には譯語及分科の相違を示す爲に、本譯の目次を左に掲げて置かう。

攝大乘論義章

總綱綱要分第一。所知依分第二。所知相分第三。入所知相分第四。彼入因果分第五。釋彼修差別分第六。增上戒學分第七。增上心學分第八。增上慧學分第九。果斷分第十。果智分第十一。(衛藤即應)

攝大乘論釋

①(日)Shō-dai-jō ron-shaku. (支)She-ta-eheng-jun-shih. (梵)Mahāvāna-saṃgrahapanibandhana (藏傳)Theg-pa chen-po bsduṣ-paḥi byad sbyar. 攝大乘論無性釋、無性攝論 ②十卷 ③存、大正三・三八〇No.1598. 縮往九。卅三・三〇・一〇。北600當、南614當、元605當、明北1165連、清1165連、麗602孝、天

攝大乘論釋

60當、指563孝、法589孝、至1322線、明南1350葉、N.1171(4) ④無性菩薩造、唐玄奘(仁壽二一麟德元A. D. 602—604)譯 ⑤此の書は無著の攝大乘論を無性論師の解釋したもので唐の貞觀二十一年から同二十三年に亘つて、攝大乘論本及び世親釋と共に玄奘三藏に依つて初めて傳譯せられた。著者無性の傳記は全然不明であるが、世親の後輩にして瑜伽教系の有力なる學者であつたことは、此の釋論を通じて明かである。此の釋を世親釋に比するに、世親釋は論本を釋するに繁簡要を得て枝葉に亘らず、一通り論旨を究明するに在るが、此の釋論は一應の釋文のみでなく、深く幽意を探つて玄底を盡くされば已まぬといふ態度であり、従つて隨所に異計を擧げて詳論し、能く一家の識見を以つて論の兩端を極め、時には文法上の解釋にまで及んでゐる。此の釋中に一度も世親釋に觸れた所がないから、世親釋とは全く獨立に解釋したものである。此に注意すべきは唯識論述記を始めて、唯識家で攝論を引用する場合には、世親釋よりは寧ろ此の無性釋を多く引證してゐることである。これ即ち世親の略論を捨て、無性の廣論に依るのであるといふけれども、恐らくは廣略の相違からのみではなく、無性釋の方が護法系の唯識の權證となる點が多い爲ではあるまいかと思ふ。従つて亦此の釋は世親釋以上に唯識家に依つて研究せられた。本釋論の註釋として、功迪の疏、智嚴の疏四卷、神虎の疏十四卷等の名が傳へられてゐるが、現存するものは一部

攝大乘論釋

もない。但神虎の疏に就ては、古く南都書庫に在つたと傳へらるゝも之を見た者はな

攝大乘論釋

いやうに普叙は略疏に述べてゐるし、法慧も亦之を引用してゐる點から察するに、古南都に傳へられて後に逸散したものであらう、尙此の釋論の論本は玄奘譯であるから勿論世親釋と同じである。論の内容は眞諦譯論を参照せよ。(衛藤即應)

攝大乘論釋

①(日)Shō-dai-jō ron-shaku. (支)She-ta-eheng-jun-shih. (梵)Mahāvāna-saṃgraha-byāṣya (藏傳)the-g-pa chen-po bsduṣ-paḥi ligrel-pa. 攝大乘論釋、眞諦攝論 ②十五卷 ③存、大正三・一五二No.1593. 縮往八、卅二〇・一〇一・一、北597敬、南609敬、與、元604與、明北1165支、清1165支、麗597日敬、天596敬、指562日敬、法583日敬、至1319寫、明南1350整至好、N.1171

攝大乘論釋

②世親菩薩釋、陳眞諦(永元元—太建元A. D. 499-569)譯

攝大乘論釋

③攝大乘論の論本としては巴に北魏の佛陀扇多に依つて初めて傳譯せられたから、眞諦の所傳は第二譯であるが、釋論としては眞諦に依つて初めて傳譯せられたのである。これ即ち無著の攝大乘論を世親に依つて解釋せられたものであつて、眞諦三藏は陳の天嘉四年(A. D. 563)から同五年にかけて、廣州制旨寺に於て、僧宗、法准、僧忍等の求法の士の爲に、特に本論を翻譯しながら講述し、高弟慧嚴の筆受したるものが即ち論本三卷及び此の釋論である。世親の釋論としては、前後三譯ある中の第一譯で

あつて、他の二譯に比するに、其の分量に於て倍加せられてゐるのみならず、其の内容を異にし、玄奘の新譯攝論が、唯識宗の權證として三乘のなるに反し、眞諦譯は如来藏緣起の一乘思想を以て之を解釋してゐるので、特に攝論宗として發出し、後に華嚴宗に合流し、玄奘譯は當初より唯識論の一資料として、之に包含せらるるに至つた。これが爲に新舊兩譯の論争は一層烈しく、舊譯家は權實の衰貶を爲し、新譯家は舊譯を錯誤として排斥し、著者世親の眞意果して孰れに在るやを判定し難きに至つた。此に於て學者或は同本異譯に非ずとして之を印度に於ける學派所傳の相違に歸せんとするが、恐らくは原本は同一なるも本譯には譯者眞諦の註釋が附加せられたものであらう。

本論の内容は、論本の條下に於て其の大意と組織とを示して置いたが、此の釋論には更に科段を細分して註釋を下してゐるから此に其の次第を逐ふて解説しやう。本論の條下に擧げて置いた十種の勝相を解説して小乘と對比して大乘の殊勝の要義を示すのが本論の目的であるから、本論は自ら十段に分かたるとのであるが、十義の解説に入るに先つて、本論著作の目的及び綱領を示す一段がある。玄奘譯では特に之を總標綱要分として、本論の總論の如く取扱つてゐるから全體として十一段となつてゐるが、眞諦譯では十段の中の第一依止勝相の中の第一乘名品を更に三章に分つて、第一、無等聖教章。第二、十義次第章。第三乘名章

となし、前二段が前に述べた如き總論に相當するものであつて、第三の乘名章から十義の各論に入つてゐる。陪譯も亦之と全く一致してゐる。十勝相の第一、依止勝相の一段には阿黎耶識の衆名を詳釋し、教證と理證とを擧げて其の存在を論證し、其の本質及び意義を究明し、本論の從つて又大乘佛敎の根本を確立してゐる。

此の一段は更に乘名品、相品、引證品、差別品の四品に分れ第一の乘名品第三乘名章に、小乘異部の立つる阿黎耶識の衆名を擧げて詳論して、正に之を阿黎耶識と名づくべきことを述べ、第二の相品に入つて之を相章、重習章、不一異章、更互爲因果章、因果別不別章、緣生章、四緣章の七章となし、先づ第一に阿黎耶識の自相、因相、果相を明かにし、次いで重習、因果、緣起等の要義を説いて、第三の引證品に入り、之を煩惱不淨章、業不淨章、生不淨章、世間淨章、出世間淨相、順道理章の六章に分つて、諸方面より阿黎耶識の存在を論證し、最後の差別品は更に之を言說章、我見章、有分章、引生章、果報章、緣相章、相貌章の七章に分つて、種々の觀點より阿黎耶識の差別相を説いてゐる。

第二の應知勝相の一段は之を相章、差別章、分別章、顯了意依章の四段に分ち、初に唯識三性の自相を説いて、染淨の諸法は凡て唯識所説なることを示し、次いで諸法の差別を論じて之を唯識に歸して、唯識無境の理を明かし、次いで分別章に入つては、三性各自の體義立名を釋し、三性相互

の關係及び品類を示し、然して此の一段に唯識觀の根據としての原理を明かにしてゐる。以上に依つて大乘佛敎の教學的基礎は確立したのであるから、最後の顯了意依章には、一轉して大乘經典を解釋し理解すべき一般の方規として、四意四依の説を開示して學徒を教誡してゐる。

次に第三の應知入勝相は之を正入相章、能入人章、入境界章、入位章、入方便道章、入資糧章、入資糧果章、二智用章、二智依止章、二智差別章の十章に分つて唯識無境の理に體達し、三性即三無性の理に悟入すべき實踐的の基礎知識一般を説いてゐる。

以上を以て理論と實踐の教學的方面を究つたから、次いで第四段の因果勝相に入つては、正しく實踐修行として、善薩の六波羅蜜の行を説いてゐる。これに因果位章、成立六數章、相章、次第章、立名章、修習章、差別章、攝章、對治章、功德章、互顯章の十一章あり、以て其の内容が知らるゝであらう。

次に第五段の入因果修差別勝相には、修行進展の過程として、善薩の十地の階位を説き、之を對治章、立名章、深相章、修相章、修時章の五章に分つてゐる。次の依戒學勝相、依心學勝相、依慧學差別勝相の三段には、十地に修すべき戒定慧の三學を各別に説いて、特に二乘の三學との相違する點を明かにし、第九段の學果寂滅勝相には三學六度の行に依つて十地圓滿したる二轉依の妙果として、無住處涅槃を説いて、二乘

の涅槃と異なる勝相を明かにし、最後の智差別勝相には解脫智見として法身を中心とする佛の三身觀を述べて本論の結論としてゐる。以上本論の組織を大觀するに、前の四段に大乘敎の理論と實踐の教學的原理を述べ、次の四段に實踐修行を説き後の二段に理想實現の果相を説いてゐるので、攝大乘の名の如く大乘の要義を攝したる大乘佛敎の綱要である。本論は陳隋初唐の間に攝論宗として盛に講究せられたので僧傳及章疏目錄には之が註釋書も數十部あつたやうに傳へられてゐるが、いづれも散佚して今日に傳はらない、幸に大正藏經中には熾煌本古寫本が五部編入せられてゐるが惜むらくはいづれも斷片である。只我が徳川時代の普寂の略疏のみ、本論唯一の完全なる註釋である、其の項を参照せよ。(荷藤即應)

**攝大乘論釋略疏** ①(日)G. H. Ueda, Jōn-shūkyō-kyō-shū. ②五卷 ③存、大正六八・二NONo. 2269 ④普寂(寶永四一天明元 A. D. 1707-1781)撰

①本書は徳川時代の學匠普寂の著はした眞諦譯攝大乘論釋の註釋である。新譯の攝論釋は攝論宗の根本經典として、傳譯後、約百年の間盛に講究せられたる爲に、其の註釋書も、唐僧傳及び諸種の章疏錄に其の名を傳へてゐるが、悉く湮滅して傳はらない。然るに普寂は參考すべき一部の註釋もない本論を深く研尋し、諸譯を比較參照し廣く、關係の經論章疏を涉獵して、博引傍證、而も一家の識見を以て、釋論の始終を一貫して之を解説し、能く其の要義を盡くした。

實にこれ攝論註釋の白眉にして、而かも諸譯攝論を通して現存する唯一の完全せる註釋書である。此の書は隨文解釋に入る前に次の九門を開いて懸證としてある。即ち、一、教興所因。二、藏教所攝。三、所詮宗趣。四、能詮教體。五、教所被機。六、依止差別。七、遺除情計。八、攝救時弊。九、傳譯不同である。此の中、第五までは普通の釋家の型に従ふものであるが、第六以下の四門に於ては特に本論解釋の精神を述べてある。即ち第六の依止差別に於ては、地論、唯識を主として、其の他の教説の阿梨耶識に對する見解を述べ、華嚴の五教の判に依つて其の教學上の價值を判定し、攝論を以て從つて始向終の論となし、第七の遺除情計に於ては、緣起系の佛教は有ら、有空の偏執に陥らざるやうに注意を與へ、第八の攝救時弊に於ては、教法流れて末法時代に入れば、大乘教にも業繁競ひ起ることを述べ、如く文取義之弊、學階之弊、以權蔽實之弊、以實廢權之弊の四種を擧げて之を詳論し、特に新譯家が舊譯攝論を以て錯謬誤譯なす偏執を排斥し、此の論には往々にして權より實に入るの密旨有りとして、本論の價值を卓上してゐる。第九の傳譯不同に於ては、本論は論本に三譯、釋論に三譯あるも、特に眞諦譯を選んで之を釋する理由を述べ、一には文義雅古間有超情風。二には處々含蓄從始向終之趣。といつてゐる。以上の諸門に依つて釋意の那邊に在るやは明かである。要

之、本書の始に「今此論本末所說、正明始門、兼含容從始入終之密意、與隋唐譯、頗有運庭」といふ一句は、此の註釋全篇を貫く根本精神であつて、普寂は之に依つて從來新譯家に抑壓貶斥せられたる舊譯攝論の眞正を發揮することを目的とし且つ努力したことは一讀明瞭に觀取せらるゝのである。

此の書は一時は一人の珍襲に歸してゐたのであるが、日本大藏經に始めて刊行せられ、次いで大正藏經に編入せらるゝに至つた。

**攝大乘論釋論** ①(日) Sho-dai-jō-ron-shaku-ron. (支) She-ta-cheng-tun-shih-lun. (梵) Mahāyāna-saṃgraha-bhāṣya (藏傳) (藏) Theg-pa chen-po bshas-pa'i bgral-pa. 攝大乘論釋、世親攝論

十卷 ④存、大正三一・二七一 No. 1596、縮往九、卅三・一一二、北598敬、南612敬、元805敬、明北1163交、清1163交、麗600與、天602敬、指61與、法586與、至1321畫、明南336堅、No. 1171(3) ⑤世親菩薩造、隋笈多共行短等譯

①本論は、隋の開皇十年に支那に來り主として揚帝の保護の下に譯業に従事した北天竺の沙門達磨笈多が、行矩等と共に譯出したもので、世親の攝論釋三傳の中第二傳である。而して此の釋論には論本を會本として譯出してゐるから、若し之を別出すれば論本としては第三譯である。本論の譯出せられた時代は、眞諦譯攝論釋の盛に流行した時代であるのに、何故に笈多は之を再譯

するに至つたかは不明であり、且つ當時の攝論學者に依つて如何に參考せられたかに就いても、何等の文献の徵すべきものはない。然て後に玄奘の新譯出づるに及びて、眞諦譯と對立して新舊の争が烈しくなるに至つては、此の譯は恰も其の中間に於て第三者の手に譯出せられたものであるから、新舊の争を決するには貴重なる資料である。且つ此譯は其の分量に於ても、内容に於ても大體玄奘譯と一致し、玄奘譯に比して譯文が達意的であるから、之を對照することに依つて文意の明瞭となる點も少くない。但此の譯の分科は大體に於て眞諦譯と一致してゐることは注意すべきである。即ち左の如し。

- 應知依止勝相勝語第一。
- 無等聖教章第一。十義次第二章第二。衆名章第三。相章第四。重習章第五。不一不異章第六。更互爲因果章第七。因果別別章第八。緣生章第九。四緣第十。煩惱染章第十一。業染章第十二。生染章第十三。世間淨章第十四。出世間淨章第十五。順道理章第十六。差別章第十七。
- 應知勝相勝語第二。
- 相章第一。差別章第二。分別章第三。四意四合章第四。
- 入應知勝相勝語第三。
- 入因果勝相勝語第四。
- 因果位章第一。成立六數章第二。相章第三。次第章第四。立名章第五。修習章第六。差別章第七。攝章第八。對治章第九。功德章第十。互顯章第十一。

○修差別勝相勝語第五。  
對治章第一。立名章第二。得相章第三。修相章第四。修時章第五。  
○增上戒學勝相勝語第六。  
○增上心學勝相勝語第七。  
○增上慧學勝相勝語第八。  
○寂滅勝相勝語第九。  
○智勝相勝語第十。

此の内容の解説は眞諦譯釋論を參照せよ。

**攝大乘論釋論** ①(日) Sho-dai-jō-ron-shaku-ron. (支) She-ta-cheng-tun-shih-lun. 攝大乘論釋 ②十五卷 ③存、大正三一・一五二 No. 1955、縮往八、卅三〇・一〇二・一一一 ④天親造、眞諦(永元元一木建元 A. D. 499-569) 譯 ⑦(參考) 淨土依憑論章疏目錄

**攝大乘論十種散動疏** ①(日) Sho-dai-jō-ron-jis-shu-san-dō-sho. 攝論十種散動疏 ②一卷 ⑦(參考) 東域傳燈目錄卷下

**攝大乘論疏** ①(日) Sho-dai-jō-ron-sho. (支) She-ta-cheng-tun-shu. ②十卷 ④唐神泰述 ⑦(參考) 東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第一、奈良朝現在一切經疏目錄333

**攝大乘論疏** ①(日) Sho-dai-jō-ron-sho. (支) She-ta-cheng-tun-shu. 攝大乘論無性釋論疏 ②十一卷或十四卷 ④唐神廓述 ①東域傳燈目錄卷下に曰く「神廓。釋無性論。廣略本異。私支非門人」云々 ⑦(參考) 新編諸宗教藏總錄第三、注進法相宗章



疏、諸宗章疏錄第一、奈良朝現在一切經疏目錄3383

攝大乘論疏

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho. (支)She-ta-ch'eng-lun-su. ②七卷

③玄述 ④(參考) 東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第一、奈良朝現在一切經疏目錄3351

攝大乘論疏

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho. (支)She-ta-ch'eng-lun-su. 攝大乘論義疏 ②七卷 ③毗跋羅述 ④(參考)東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第一、奈良朝現在一切經疏目錄2356

⑤東域傳燈目錄卷下に曰く「天親論疏不註作者。見行」云々。

攝大乘論疏

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho. (支)She-ta-ch'eng-lun-su. ②八卷

③唐代玄應述 ④(參考) 東域傳燈目錄卷下

攝大乘論疏

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho. (支)She-ta-ch'eng-lun-su. 攝論疏

②景法師 ③(參考) 東域傳燈目錄卷下

攝大乘論疏

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho. (支)She-ta-ch'eng-lun-su. ②十卷

③唐代玄應述 ④(參考) 東域傳燈目錄卷下

攝大乘論疏

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho. (支)She-ta-ch'eng-lun-su. 攝論疏、攝大乘論疏記、攝大乘論抄、攝大乘論世親釋論略記 ②四卷 ③新羅元曉(眞平王三九A.D.617)述 ④(參考) 東域傳燈目錄卷下

⑤(參考) 東域傳燈目錄卷下

攝大乘論疏

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho. (支)She-ta-ch'eng-lun-su. ②二十

③十五卷 ④(參考) 東域傳燈目錄卷下

攝大乘論疏記

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho-ki. (支)She-ta-ch'eng-lun-su-chi. 攝大乘論抄、攝大乘論世親釋論略記、攝大乘論疏、攝論疏 ②四卷 ③新羅元曉(眞平王三九A.D.617)述 ④(參考) 新編諸宗教藏總錄第三、奈良朝現在一切經疏目錄3348

攝大乘論疏卷第五、第七 ①(日)Sho-dai-jō-ron-sho-kwan-dai-go-dai-shichi. (支)She-ta-ch'eng-lun-su-ch'uan-ti-wu-ti-chi. ②二卷 ③存、大正八五・九八二No.2805

④本疏はスタイン氏の蒐集せる燉煌出土古寫本。卷五と卷七との二卷より成り、寫本に於ては兩者互に表裏をなしてゐる。而して卷七の後題に攝大乘論義記第七とあるも、内容の叙述、體裁より見れば此の兩者は同一の註釋書らしい。文中「論本云」と云へるは「攝大乘論」の本論で、「釋論曰」と云へるは其の釋論である。現存殘卷からすれば勿論眞諦譯の「攝論本釋」の文を引いて之を注疏したものである、本書卷第五の最初の部分は闕けてゐて、眞諦譯の釋論全十五卷十品に分たれてゐる第一品釋依止勝相品の中で、更に四品に分たれてゐる。第三釋引證品(六章あるが)の第五世間淨章から始まつて、第四釋差別品の終り相貌章までで終つてゐる。

卷第七の首部も亦缺けてゐる。こゝでは

攝大乘論抄

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho. (支)She-ta-ch'eng-lun-shao. ②十卷

③進法相宗章疏、諸宗章疏錄第一

攝大乘論抄

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho. (支)She-ta-ch'eng-lun-shao. 攝大乘論疏記、攝大乘論世親釋論略記、攝大乘論疏、攝論疏 ②四卷 ③新羅元曉(眞平王三九A.D.617)述 ④(參考) 新編諸宗教藏總錄卷第三、奈良朝現在一切經疏目錄3347

⑤燉煌出土本(大英博物館藏S274)

攝大乘論抄

(矢吹慶輝—成田昌信)

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho. (支)She-ta-ch'eng-lun-shao. ②十卷

③進法相宗章疏、諸宗章疏錄第一

④(參考) 東域傳燈目錄卷下、注

攝大乘論抄

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho. (支)She-ta-ch'eng-lun-shao. ②

十品中の第三釋應知入勝相(十五卷本の卷七卷八)の大部分を釋してゐる。即ち釋應知入勝相は十章に分たれてゐるが、その内の第二章能入人章の後半から第十章二智差別章の殆んど末尾に及んでゐる。本疏も亦攝論家の述作であることは殆ど疑を容れる餘地がない。尙鳴沙餘韻解説第二部「攝論古逸章疏と燉煌出土攝論古章疏」とに就いての五の三・四(四一六—四二九頁)を参照せよ。

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho. (支)She-ta-ch'eng-lun-shao. ②十卷

③進法相宗章疏、諸宗章疏錄第一

④(參考) 東域傳燈目錄卷下、注

⑤燉煌出土本(大英博物館藏S274)

(矢吹慶輝—成田昌信)

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho. (支)She-ta-ch'eng-lun-shao. ②十卷

③進法相宗章疏、諸宗章疏錄第一

④(參考) 東域傳燈目錄卷下、注

⑤燉煌出土本(大英博物館藏S274)

(矢吹慶輝—成田昌信)

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho. (支)She-ta-ch'eng-lun-shao. ②

③進法相宗章疏、諸宗章疏錄第一

④(參考) 東域傳燈目錄卷下、注

⑤燉煌出土本(大英博物館藏S274)

先づ初に四門分別してゐる。初門分別の最初の部分は缺如してゐるが、第二次は「明三藏攝分齊者」であつて、「所詮に對しては三なるが故に教は則ち三なりとなし」、「所爲に約しては二なるが故に教は則ち二なりと爲す」として、修多羅、毘那耶、阿毘達磨に關して説明してゐる。所爲の機に對して、鈍根の聲聞藏と、利根の菩薩藏とに分つべきを論じてゐる。第三次は、「明教下所詮宗旨者」であつて、「准下文意宗旨有二」とし、一に二諦に約し、二に佛性に約して説明してゐる。此の所は所謂本論の主眼とする所のもの、二諦といふは、若し世諦を論ずれば、即ち唯識を以て所詮の宗旨となし、若し眞諦と説かば二無我真如を以て所詮の宗旨となす。故に本文に、一切法は識を以て相と爲し、眞如を以て體と爲すが故なりとあり。又云はく、

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho. (支)She-ta-ch'eng-lun-shao. ②

③進法相宗章疏、諸宗章疏錄第一

④(參考) 東域傳燈目錄卷下、注

⑤燉煌出土本(大英博物館藏S274)

(矢吹慶輝—成田昌信)

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho. (支)She-ta-ch'eng-lun-shao. ②

③進法相宗章疏、諸宗章疏錄第一

④(參考) 東域傳燈目錄卷下、注

⑤燉煌出土本(大英博物館藏S274)

(矢吹慶輝—成田昌信)

①(日)Sho-dai-jō-ron-sho. (支)She-ta-ch'eng-lun-shao. ②

③進法相宗章疏、諸宗章疏錄第一

④(參考) 東域傳燈目錄卷下、注

⑤燉煌出土本(大英博物館藏S274)

④燉煌本 (成田昌信)

攝大乘論章

①(日)Shō-dai-jō-ron-shō. (支)Shē-ta-ch'eng-lun-chang. ②三卷或五卷 ③東域傳燈目錄卷下に「五卷南本三。上中下見行」云々 ④(參考)奈良朝現在一切經疏目錄2361

攝大乘論章

①(日)Shō-dai-jō-ron-shō. (支)Shē-ta-ch'eng-lun-chang. ②四卷或五卷 ③道基撰 ④(參考)東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第一

攝大乘論章

①(日)Shō-dai-jō-ron-shō. (支)Shē-ta-ch'eng-lun-chang. 攝論章、攝大乘章 ②五卷或三卷 ③唐代神廓述 ④(參考)注進法相宗章疏、奈良朝現在一切經疏目錄2361

攝大乘論章卷第一

①(日)Shō-dai-jō-ron-shō-ken-dai-ichi. (支)Shē-ta-ch'eng-lun-chang-chen-ti. ②一卷 ③存、大正八五・一〇一・No. 2807

④本書はスタイン氏の蒐集せる燉煌出土古寫本。首末破損失題殘卷。撰者未詳の古逸疏。中間に「攝大乘論三議義第二出」第一依止勝相業名章「の一篇あり、内容を檢するに、眞諦譯「世親釋論」より攝論の要目を抽出して解釋してゐる。大正藏經の編纂者は、本書を攝大乘論章卷第一と擬題してゐるが、矢吹慶輝はたゞ、攝大乘論抄と擬題した。勿論これは攝論章卷第一とも區別さるべきものであり、大正八五卷・九九九・No. 2806は同じく燉煌本で所在不明のものとしてあるが、藏經の編纂者は攝大乘論抄として首題を與へてゐる。勿論本書の全卷数は

不明だが、此の殘卷がその首卷であることは、その内容を檢すると直ちに分る。先づ、攝論釋の最初の第一、無等聖教章及び第二、十義次第章から、十種勝相義の項目を掲げ、次の衆名章の中で、「三議義」と「四悉義」を分別してゐるし、次の相品の相章から「薰習義」を出して解釋半ばにして此の殘卷の終りとなつてゐる。而して此の疏が單にこれだけでなかつたことは、「三性章」、「四議章」、「十一議義」、「轉依義」を記して「當廣分別」とあるから、それらが本章の後部に分別されてゐたものと思はれる。本書の中心内容は實に「攝大乘論三議義」の項の説明にあると見てよい。その阿梨耶、阿陀那、生起識の三識を、攝論家の立場から解釋してゐる點特に注目すべきであらう。本疏に引用されてゐる重なる經論では、經に「涅槃」、「勝鬘」、「楞伽」等、大乘論に「地論」、「無相論」、「起信論(馬鳴論)」、「小乘論に「成實論」、「雜心論」等であるが、何れも舊譯時代の譯本を用ゐてゐる點は、雖も本書の製作された時代を推定することが出来る。即ち眞諦以後玄奘以前の時代に、相當な學僧の手に成つたものであらうし、又教義の方面から見ても、攝論宗の立脚地を傳へてゐるものとして極めて貴重なる資料である。尙、鳴沙餘韻解説第二部「攝論古逸章疏と燉煌出土攝論古章疏」とに就つたの五の二、攝大乘論抄(四〇三—四一六頁)を參照せよ。

④燉煌出土本(大英博物館藏S. 2325) (矢吹慶輝—成田昌信)

攝大乘論世親釋論古述記

①(日)Shō-dai-jō-ron-se-jin-shaku-ron-ko-shak-ki. (支)Shē-ta-ch'eng-lun-shih-ch'ia-shih-lun-ku-chi-chi. ②一卷 ③新羅太賢(—景德王一一A. D. 753—)述 ④(參考)新編諸宗教藏總錄第三

攝大乘論世親釋論疏

①(日)Shō-dai-jō-ron-se-jin-shaku-ron-shō. (支)Shē-ta-ch'eng-lun-shih-ch'ia-shih-lun-shū. ②十六卷或八卷 ③法常述(或云道證) ④(參考)新編諸宗教藏總錄第三

攝大乘論世親釋論略記

①(日)Shō-dai-jō-ron-se-jin-shaku-ron-ryak-ki. (支)Shē-ta-ch'eng-lun-shih-ch'ia-shih-lun-shih-lun-ryo-chi. 攝大乘論抄、攝大乘論疏記、攝大乘論疏、攝論疏 ②四卷 ③新羅元曉(眞平王三九A. D. 617—)述 ④(參考)新編諸宗教藏總錄第三

攝大乘論附西藏譯攝大乘論

①(日)Shō-dai-jō-ron-tsuketari-chibetto-yaku-shō-dai-jō-ron. ②一冊 ③存 ④佐々木月樵(明治八一昭和元A. D. 1875—1966)著 ⑤昭和六刊 ⑥東京朋文社

攝大乘論本

①(日)Shō-dai-jō-ron-hayana-sangrahal藏傳(藏)Theg-pa chen po bsdu-pa. 攝大乘本論 ②三卷 ③存、大正三三・一三三・No. 1594、縮來九、二二二五、北596、南611、元603、明北1241、清1241、麗599、天601、指559、法58、至138、寫、明南1348、Nj. 1247

④無著菩薩造、唐玄奘(仁壽二—麟德元A. D. 602—664)譯

⑤本論は無著論師が彌勒菩薩の教説を繼承して、大乘阿毘達磨經中の攝大品を解釋した釋論であつて、前後四譯ある中の最後の傳譯である。譯者玄奘三藏は唐の貞觀二十一年から二十三年に至る間に、世親及び無性の釋論と共に此の論本を別譯したのである。然し釋論の方が論本との會本になつてゐるので論本だけ獨立に流行したものである。本論として獨立に講究せられたのは眞諦譯の攝大乘論釋であるから、内容の解説は其の項に譲る。(衛藤即應)

攝大乘論本

①(日)Shō-dai-jō-ron-pōn. 國譯攝大乘論本 ②存、國譯大藏經論部第一〇 ③佐伯定胤、保坂玉泉共譯

攝大乘論名教

①(日)Shō-dai-jō-ron-myō-kyō. ②一卷 ③(參考)新編諸宗教藏總錄第三

攝大乘論無性釋論古述記

①(日)Shō-dai-jō-ron-mu-shō-shaku-ron-shō. (支)Shē-ta-ch'eng-lun-wu-hsing-shih-lun-shū. ②一卷 ③新羅太賢(—景德王一一A. D. 753—)述 ④(參考)新編諸宗教藏總錄第三

攝大乘論無性釋論疏

①(日)Shō-dai-jō-ron-mu-shō-shaku-ron-shō. (支)Shē-ta-ch'eng-lun-wu-hsing-shih-lun-shū. ②四卷 ③智儼述 ④(參考)新編諸宗教藏總錄第三

攝大乘論無性釋論疏

①(日)Shō-dai-jō-ron-mu-shō-shaku-ron-shō. (支)

Shih-ta-cheng-jin-wu-hsing-shih-luan-  
su. 攝大乘論疏 ②十四卷或十一卷 ③唐  
代神昶述 ④〔參考〕 新編諸宗教藏錄第  
三

攝大乘論要抄 ①(日) Sho-dai-jo-  
ron-yō-shō. ②二卷 ③存 ④寫本(龍大、  
二四三四六)

攝大乘論略疏 ①(日) Sho-dai-jo-  
ron-raku-shō. 攝大乘論釋略疏 ②二卷  
③存、大正六八・二二〇 No. 2269. 日本大  
藏經第二五 ④普寂(寶永四—天明元 A. D.  
1707—1781)述 ⑤攝大乘論釋略疏の下を  
見よ。⑥寫本(龍大、二四三四・九)

攝大乘論略章 ①(日) Sho-dai-jo-  
ron-ryaku-shō. (支) She-ta-cheng-tan-  
-hiao-chang. ④四卷 ⑤法常述 ⑥〔參  
考〕 新編諸宗教藏錄第三

攝大毘盧遮那成佛神變加持經  
入蓮花胎藏海會悲生曼荼羅廣  
大念誦儀軌供養方便會 ①(日)  
Sho-dai-bi-ru-sha-na-yō-butsu-jin-pen-  
ka-ji-kyō-nyū-ren-ge-tai-zō-kai-e-hi-shō-  
-man-da-ri-kō-dai-nen-ju-gi-ki-ku-yō-  
-ho-bann-e. (支) She-ta-pi-tu-ohē-na-chi-  
-eng-to-shen-pien-chia-chih-chang-ju-ii-  
-en-hua-t'ai-ts'ang-hai-hui-pei-sheng-  
-man-t'u-to-kuang-ta-nien-sung-i-kuai-  
-kung-yang-fang-pien-hui. 攝大儀軌、攝大  
毘盧遮那念誦儀軌 ②三卷 ③存、大正一  
八・六五 No. 850. 縮餘六、二續一・三・四  
④輪姿迦羅譯 ⑤唐(貞觀一一—開元二三  
A. D. 637—735)

①本儀軌は大日經の實修實行の例を記述し  
たもので、大日經第七卷若しくは要略念誦  
經等と略同一の點もあるが胎藏曼荼羅諸尊  
を明細に列記してある所などは前二經と稍  
と異つて居る觀があるが、此の儀軌が胎藏  
法の次第の基本と成つて居ることだけは否  
定し得ない事實である。第一卷には歸敬の  
常、九方便、三昧耶、法界生、金剛智印、  
金剛甲、降伏魔、道場觀、虛空藏明妃、塗  
香、燒香、飲食、燈明、闍伽、振鈴などの  
印契と眞言とが記述されてある。第二卷に  
は無等三力明、佛母虛空眼、吉祥法螺、金  
剛大慧印、施無畏、與願、如來藏、大結  
界、無堪忍大護、如來甲、如來舌、如來  
語、如來辯說、如來持十力、如來念處、平  
等開悟、普賢如來珠、慈氏菩薩、一切若  
薩、一切諸佛心、毫相、觀音蓮華部、多羅  
尊、毘俱胝、得大勢至、耶輸多羅等が以下  
第三卷以互つて順次に列記してある。

攝大毘盧遮那念誦義軌 ①(日)  
Sho-dai-bi-ru-sha-na-nen-ju-gi-ki. (支)  
She-ta-pi-tu-ohē-na-nien-sung-i-kuai.  
攝大毗盧遮那成佛神變加持經入蓮華胎藏海  
會悲生曼荼羅廣大念誦儀軌供養方便會、攝  
大儀軌 ②三卷 ③存、大正一八・六五  
No. 850. 縮餘六、二續一・三・四 ④唐輪  
姿迦羅(貞觀一一—開元二三 A. D. 637  
—735)譯 ⑤刊本(立大、A 二〇・二二)  
攝調伏藏 ①(日) Sho-ji-buku-zō.  
(支) She-tiao-fu-ts'ang. ⑥六十卷或十卷  
⑦唐一行(弘道元—開元一五 A. D. 683—  
727) ⑧〔參考〕 諸宗章疏錄第三

攝八轉義論 ①(日) Sho-hat-ten-gi-  
ron. ②五卷 ③存 ④法住(享保八一—寬  
政一三 A. D. 1723—1803)述 ⑤明和六刊  
⑥龍大、二七二二・五) (谷大、餘大・一六〇  
三) (哲、な・一・中・二二) (京專) (京大、一・二  
四・二) (日大末、一九四) (高次、寄、一・五  
一) (正大、一〇六・四四、一七四、一八一)  
攝八轉義論引據 ①(日) Sho-hat-  
ten-gi-ron-ia-ko. ②一卷 ③存 ④智溫  
榮興記 ⑤寬政七刊 ⑥(正大、一〇六・一  
六) 攝八轉義論攷證 ①(日) Sho-hat-  
ten-gi-ron-ko-shō. ②一卷 ③存 ④寫  
本(龍大、研佛)

攝八轉義論述意 ①(日) Sho-hat-  
ten-gi-ron-jissui. ②五卷 ③存 ④林  
常快道(寶曆元—文化七 A. D. 1751—1810)  
述 ⑤嘉永六寫(正大、一〇六・一五五)寫本  
(龍大、二七二二・八) (谷大) (哲、な・二・右  
一)

攝無礙經 ①(日) Sho-mu-ge-kyō.  
(支) She-wu-ai-ching. 攝無礙大悲心大陀  
羅尼經計一法中出無量義南方滿願補陀羅落  
海會五部諸尊等弘誓力方位及威儀形色執持  
三摩耶標幟曼荼羅儀軌、補陀羅海會軌、補  
陀羅海會諸尊住略出威儀形色儀軌 ②一卷  
③存、大正二〇・一九九 No. 1067. 縮餘二、  
祕密儀軌集第六 ④唐不空譯

攝無礙大悲心大陀羅尼經計一  
法中出無量義南方滿願補陀羅  
海會五部諸尊等弘誓力方位及

威儀形式執持三摩耶標幟曼荼  
羅儀軌 ①(日) Sho-mu-ge-dai-hi-  
shin-dai-da-ra-ni-kyō-kei-ji-pō-cha-  
shutsu-mu-ryō-gi-nam-pō-man-gwan-fu-  
da-raku-kai-e-go-bu-shō-son-tō-gu-zai-  
riki-hō-i-oyobi-ri-gi-gyō-shiki-shū-jisam-  
-ma-ya-hyō-shiki-man-da-ra-gi-ki. (支)  
She-wu-ai-ta-pei-hsin-ta-to-lo-ni-ching-  
-chi-ita-chung-ch'u-wu-liang-i-nan-fang-  
-man-yan-pu-to-lo-hai-hui-wu-pu-chu-  
-tsun-teng-hung-shih-i-fang-wei-chi-wei-  
-i-hsing-shih-chih-chih-san-mo-ya-piao-  
-chih-man-t'u-to-ji-kuai. 補陀羅海會軌、  
補陀羅海會諸尊住略出威儀形色儀軌、無  
礙經 ②一卷 ③存、大正二〇・一九九 No.  
1067. 縮餘二、二續一・三・二、祕密儀軌集  
第六 ④唐不空譯

①本儀は先に第一に手印の原理に就て説  
き、左右二手が定慧、理智と區分され、十  
指に十波羅蜜、五大等の義が合められて居  
る意が述べられてある。第二に息災法等の  
五部算法が明されてある。

第一に五種法と五部と其の重なる本尊に  
關しては左の如し。

(一)息災法 佛部 五智佛  
(二)增益法 寶部 寶・光・懺・笑  
(三)降伏法 金剛部 五大忿怒  
(四)愛敬法 蓮華部 觀世音  
(五)鈎召法 羯磨部 鈎・索・鎖・鈴  
第二に五部の部主と部母とに付て

(一)佛部 (部主) 大日如來  
(部母)

- (二)寶部 寶生如來 寶波羅蜜
  - (三)金剛部 阿闍如來 金剛波羅密
  - (四)蓮華部 無量壽如來 法波羅蜜
  - (五)羯磨部 不空成就如來 羯磨波羅蜜
- 第三に三輪身に關しては左の如くに明されてある。

- (正法輪身) (教令輪身) (自往輪身)
  - (一)大日 不動明王 般若菩薩
  - (二)阿闍 降三世明王 金剛薩埵
  - (三)寶生 軍荼利 金剛藏王
  - (四)無量壽 六足尊 文殊師利
  - (五)不空成就 金剛藥叉
- 又云

- (四)無量壽 馬頭觀音 白衣觀音
  - (五)釋迦牟尼佛 無能勝 慈氏菩薩
- 次に第一院息災法、第二院增益延命法、第三院增益降伏法、第四院敬愛增益法、第五院鈎召被甲法に就き、各法の曼荼羅並に各尊の形像等に就ては偈頌で説明されてある。

- ①寫本(谷大、餘大・三七六九) (神林隆淨) **攝論義決** ①(日) Sho-ron-gi-ke-tsu. (支) She-lun-i-chieh. 攝大乘論義決
- ②七卷 ⑦[參考] 諸宗章疏錄第二
- 攝論義章** ①(日) Sho-ron-gi-sha. (支) She-lun-i-chang. 攝大乘論義章 ④十卷 ⑥[參考] 諸宗章疏錄第二
- 攝論十種散動疏** ①(日) Sho-ron-ji-shu-san-do-sho. (支) She-lun-shih-chang-san-tung-shu. 攝大乘論十種散動疏
- ①一卷 ⑦[參考] 東城傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第二、奈良朝現在一切經疏目錄

2363

**攝論疏** ①(日) Sho-ron-sho. (支) She-lun-shu. 攝大乘論疏 ④景法師述 ⑦[參考] 諸宗章疏錄第二

**攝論疏** ①(日) Sho-ron-sho. (支) She-lun-shu. 攝大乘論無性釋論疏 ②一卷 ④景法師述 ⑦[參考] 新編諸宗教藏總錄第二、奈良朝現在一切經疏目錄3351

**攝論疏** ①(日) Sho-ron-sho. (支) She-lun-shu. 攝大乘論疏 ②十五卷 ⑦[參考] 諸宗章疏錄第二

**攝論疏** ①(日) Sho-ron-shu. (支) She-lun-shu. 攝大乘論疏 ②四卷 ④新羅元曉(眞平王三九A. D. 617-)述 ⑦[參考] 諸宗章疏錄第二

**攝論章** ①(日) Sho-ron-sho. (支) She-lun-chang. 攝大乘論義章 ②三卷 ④景法師述 ⑦[參考] 諸宗章疏錄第二

**攝論章** ①(日) Sho-ron-sho. (支) She-lun-chang. 攝大乘論章、攝大乘章 ②五卷或三卷 ④唐代神廓述 ⑦[參考] 諸宗章疏錄第二

**攝論章** ①(日) Sho-ron-sho. (支) She-lun-chang. 攝大乘論義章 ②三卷或十卷 ⑦[參考] 諸宗章疏錄第二

**攝論章卷第一** ①(日) Sho-ron-sho-ken-dai-ichi. (支) She-lun-chang-chuan-i-ti. ②一卷 ③存、大正八五・一〇三三 No. 2808

①本書はスタイン氏の蒐集せる燉煌出土古寫本。首部缺如。後題及び後記あり。即ち攝論章卷第一

仁壽元年八月二十八日。瓜州崇教寺沙彌善藏。在京辯才寺寫攝論疏一流。通末代。比字校覓

とあり、章と疏との間に如何なる關係あるか、異同の判別にはかに決し難きも、本文中、第四總分別三寶の第十二門辨敬意(大正八五・一〇二七頁中)の下で、此之末後兩處。若欲分別、如疏中所說。といつていかにも疏が別にあつて行はれてゐたらしくも思はれる。

本書殘卷の内容は次の如くである。  
三寶義—四門分別。二障義—八門分別。不住道義—六番分別。三藏義—十番分別。簡衆義—四門分別の各項目に分ちて、諸種の論經律を引いて細釋を施してゐる。即ち三寶義の下では、法救造、劉宋の僧伽跋摩譯の雜阿毘曇心論や、訶梨跋摩造、羅什譯の成實論や、勒那摩提譯の究竟一乘寶性論及び攝大乘論、大智度論、婆沙論、十地論等を引いて解釋してゐるし、勝鬘、善生、華嚴等の經典も出てゐる。二障義の下では、攝論、成實論、俱舍論、楞伽經、起信論、勝鬘經維摩經等を引いて、解釋してゐる。

三藏義の下では、攝大乘論、雜心論、堅意造、北涼の道泰等の譯したる入大乘論、相續解脫經、遺教經、淨名經、婆沙、維摩經、毘婆沙、深密解脫經、大集經、普曜經、阿育王傳、五分律、分別功德經等に依りて解釋してゐる。簡衆の下では、先づ善見論(善見律毘婆沙、薩婆多毘婆沙、成實論、雜心論、攝論、地持、維摩經等を引いて五篇七聚を解釋してゐる。

要するに本書は眞諦譯の攝大乘論釋の最初の部分から、重要項目から選び出して解釋したものらしい。そして卷數等が幾何あつたかは知り難い。仁壽元年は隋朝にして、(A. D. 601)に當る。尙鳴沙餘韻解說第二部「攝論古逸章疏と燉煌出土攝論古章疏とに就いて」五の一攝論章卷第一(三九四—四〇三頁)を参照せよ。

①燉煌出土本(大英博物館藏 S. 2023) (矢吹慶輝—成田昌信)

**攝論等一乘證文** ①(日) Sho-ron-ichih-jō-shō-mon. ②二十四紙 ④最澄(神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—822) ⑦[參考] 山家祖德撰述篇目集卷上、本朝台祖撰述密部書目

仁壽元年八月二十八日。瓜州崇教寺沙彌善藏。在京辯才寺寫攝論疏一流。通末代。比字校覓

とあり、章と疏との間に如何なる關係あるか、異同の判別にはかに決し難きも、本文中、第四總分別三寶の第十二門辨敬意(大正八五・一〇二七頁中)の下で、此之末後兩處。若欲分別、如疏中所說。といつていかにも疏が別にあつて行はれてゐたらしくも思はれる。

本書殘卷の内容は次の如くである。  
三寶義—四門分別。二障義—八門分別。不住道義—六番分別。三藏義—十番分別。簡衆義—四門分別の各項目に分ちて、諸種の論經律を引いて細釋を施してゐる。即ち三寶義の下では、法救造、劉宋の僧伽跋摩譯の雜阿毘曇心論や、訶梨跋摩造、羅什譯の成實論や、勒那摩提譯の究竟一乘寶性論及び攝大乘論、大智度論、婆沙論、十地論等を引いて解釋してゐるし、勝鬘、善生、華嚴等の經典も出てゐる。二障義の下では、攝論、成實論、俱舍論、楞伽經、起信論、勝鬘經維摩經等を引いて、解釋してゐる。